# 魔法少女リリカルなのは ～The Fantasic Story～

なっぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ４９５２Ｍ

【作者名】
なっぺ

【あらすじ】
「腐った運命なんざオレが変えてやる！」

ひょんなことから転生した吉谷吼太は、リリカルなのはの世界に介入！好き勝手やらかした先にあるのは何なのか！？

現在Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編。

魔法少女リリカルなのは～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ

～…始まります

# プロローグ（前書き）

処女作です。いろいろ至らない点もあるかと思いますが、よろしくお願いします。

# プロローグ

突然だが、

幸も不幸もいつ、どんなときに訪れるかなんて誰にも分からないものである。

例えば、気づいたら１００人の中から一番を決めるバトルに巻き込まれ、しかし、その中で大切な仲間を手に入れたり。

例えば、赤貧な探偵業をしていたら、忌避していた魔術師になってしまい、だがその戦いの中で何物にも代えがたい恋人を手に入れたり

例えば、記憶を失い、世界を旅しろ強制された揚句にやり方を間違っていたと言われ、殺されかけたが、世界と世界を引き寄せあってしまうほどの強い絆をたくさん繋げたり。

そう、人生万事塞翁が馬。この言葉が相応しいだろう。

しかし、しかしだ。これらはあくまで生きていることが前提の話だ。

ならば死んでしまったらどうなるのか？

死んだ者に塞翁が馬は通用するのか？

答えは……

「……通用すんのかよ」

# プロローグ（後書き）

第一話もすぐに上げます

# 第一話　いきなりなんですか？（前書き）

早速第一話！

# 第一話　いきなりなんですか？

Ｓｉｄｅ　吼太

やぁみんな。はじめまして。オレは吉谷　吼太っていいます。どうぞよろしく。

とまぁ、挨拶もほどほどに三行ほどで今の状況を説明しようかと思う。

周り真っ白。
スライム土下座。
オレの身体がなんか薄い。

うん。察しのいい人ならもう八割がた分かったと思う。

え？分からない？

それじゃあ一から説明しよう。

時は２０１０年。気温が上がり、日差しも強くなってきたころ。

オレは作り置きされていた少々臭うカレーを食べたんだ。まぁ、臭う時点で危ない気もするが、食欲にあっさり負けたオレはこれまた少々臭うご飯にかけて、あっためずに胃に掻き込んだ。まぁ、腹減ってたから仕方ないね。

そしたらふと気が遠くなり、

気づいたら真っ白な空間にほうり出されていたんだ。

…いや、嘘じゃねぇよ？

そんで、なにが起こったか理解できずわたわたしていると、どこからともなく目の前にスライムベスが現れた。

…いや？ホントに嘘は混じってませんよ？全く。だから、だからそんなジト目でオレを見ないで！

いやね？最初は死んであの世にでも行ったのかと思ったんだけど、目の前に現れたのがじいさんでも女神さまでも、ましてや光の玉でも幼女でもなくてよりにもよってスライムベスだったから、これは夢だと確信したんだ。……つーかなんでスライムベス？

まぁ、そのまま突っ立っているのもなんだし、コミュニケーションをとってみようと思う。大事だよね。コミュニケーション。

「あのー、もしもしー？こっちの言葉わかるかー？」

スライムベス　は　微動だにしなかった！▼

……いや、予想はしてたけどさ。

「あ～、ダメか～…「あ、すいません。少しばかり考え事をしていたもので。」……へっ？」

だっ、誰だ！？ここにはオレとスライムベスしか……

辺りを見渡すが、ベス以外には何もない。

「まさか……」

「そのまさかです。」

目の前の位置に、正確には少し目線を下げたあたりに目を向ける。

そこには……

「やぁ、初めまして。神様です。」

神を自称するスライムベスがいた。

……いや、ねーよ…

## 第一話　いきなりなんですか？（後書き）

はい。どうも。作者です。

まだまだ未熟者ですが、少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

当分は続けるつもりです。

感想なんかもできればくれると嬉しいです。

では、このへんで。

# 第二話　オレはいったいどうなった！？（前書き）

早速第二話！まだ状況説明が続きます。

# 第二話　オレはいったいどうなった！？

Ｓｉｄｅ　スライムベス

ハァ……なんでこんなことに……

いや、まぁ、私の不手際が原因なんですけど。

まぁ、誠意は見せるべきですよね。

「まぁ、とりあえず落ち着いて聞いてください。あなたは死にました。」

……やはりというかなんというか…呆気にとられてますね。

「……は？」

「いや、あの、死にました。」

「……すまん。分かりやすく三行で説明してくれ。」

三行……ですか。難しいですがその前に…

「申し訳ありませんでしたァァァァァ！！！！」

「いやだからなんでぇぇぇぇぇぇ！！！？」

Ｓｉｄｅ　吼太

た、たった今起こったことを話すぜ！

スライムベスに死んだと告げられたかと思えば、何故か謝られた

な、何を言っているか（ｒｙ

……とにかくだ。

「なんで謝ってるんだ？それと、今更だがここはどこ？」

「まず答えやすいことから言わせてもらいます。端的にいうと、ここはあの世です。正確にいうならあの世とこの世の狭間、とでもいいましょうか。まぁ、そんなところです。そして、謝った理由ですが……」

「……なんだよ？」

「その……あの時、あなたは食中毒で病院に運ばれて数日うなされる予定だったのですが……」

「随分な予定だなオイ……予定？じゃあ実際は何？どうなったの？」

「私のちょっとしたミスで……あなたは食中毒で死んでしまいました……」

「……マジ？」

「……マジです。」

ＯＫ。落ち着けオレ。Ｃｏｏｌに、いやＫｏｏｌになれ。ん？逆か？まぁどっちでもいいや。とりあえず一言言わせてもらいたい。

「……ウ〝ゾダドン〝ドゴドオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

数時間経過して……

「グスン……」

「ほら、男の人が泣いたって見苦しいだけですから。」

このスライムベスめ！貴様のせいでオレがどれだけ苦しんだと！お前なんぞベスで充分だベス！

「とにかく、これは異例の事態なのです。最近やたら起こっている異例の事態なんです。」

最近やたら起こっている異例の事態ってなんだよ？みんな食中毒で死んでるってのか？

「いえ、知ってるかぎりでは食中毒で死んだのはあなただけです。」

「さすがにそうか……って、心を読まれた！？」

「これでも神なので。」

そういい胸（？）を張るベス。いや、もしかしたら腹かもしれないけどさ。

「異例の事態ってことは何？生き返れるの？」

「それは無理ですね。あなたの身体、すでに7割方腐っているので。ゾンビになりたいなら止めはしませんが。こちらもそれが楽なので。」

「誰が好き好んでゾンビになるか！……でもそうなるとどうすんだ？来世を好きに出来るとか？」

「だいたい当たりです。ＨＯＷ　ＴＯ本によると、転生先の世界、能力なんかを自由に選んでいいようです。あと総じてルックスは高めですね。」

「……待て、今おかしな言葉が無かったか？」

「？　ルックスの件ですか？」

「もっと前だ。」

「……ゾンビ云々？」

「その後。」

「あとは……だいたい当たりだとかＨＯＷ　ＴＯ本だとか…「それぇぇぇぇぇ！」……へ？」

「それだよそれ！なんでＨＯＷ　ＴＯ本があるんだよ！？ＨＯＷ　ＴＯ本って初めての○○を行うために～みたいな本だろ！？なんで転生関係でＨＯＷ　ＴＯ本があるんだよ！？」

「だから最近やたら起こっているって言ったじゃないですか。神も楽じゃないんです。ＨＯＷ　ＴＯ本に頼りたくなるときだってありますよ。あ、ちなみに今回使用したのは《必見！もしも不手際で殺っちゃったら～神様編～》です。」

「なんだその危ないタイトル！？つーかんなことは聞いてねぇよ！！」

誰か……誰かオレをこの殺人鬼なベスから助けてください！！

## 第二話　オレはいったいどうなった!?（後書き）

アレ？なぜか原作が始まらない……？

次までには状況説明を終わらせます。

# 第三話　転生先は地獄ばかり！？（前書き）

連続投稿だぜ！

# 第三話　転生先は地獄ばかり！？

Ｓｉｄｅ　吼太

そんなわけでオレはしばらく叫びまわり、ベスに軽く八つ当たりをして怒りを発散した後、今後について考えることにしたのだったまる」

「口に出てますよ。それとあれは軽くなんかではありません。リンチです。さらに言うなら私はベスではなく神です。」

「直江乙」

「Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！じゃないんですから。」

「そういやあれも死後の世界だよな。」

「どうでもいいです。……ではそろそろ転生先を選んでください。」

転生先ねぇ～……

「転生先ってどんなとこが選べるんだ？」

「そうですね～……私の管轄でないと無理なので……行ける先はこんな感じですかね。」

そういうと自称神（笑）のベスは一枚の紙を出した。

「（笑）ってなんですか（笑）って」

「こまけぇことは気にすんな。」

とりあえず目を通してみる。

えーと……

1：魔法少女リリカルなのはの世界

「テンプレだな」

「テンプレです。一ヶ月待って最近ようやく使用出来るようになったんですから感謝してください。」

んで次は…

2：地獄

3：炎熱地獄

4：阿鼻地獄

5：針山地獄

……（以下延々と様々な地獄が列挙）

「……オイ」

「なんでしょう？」

「お前……もしかして闇魔様とかだったりする？」

「あぁ、一部の人にはそう言われてますね。ほかにはハデスだとかプルートゥとか冥王だとかゼオライマーだとか」

「最後のは明らかに違うだろ。つーかマジか……」

こんな冴えない（？）スライムベスが闇魔様だったなんて……

「返せ！オレのえーき様を返せ！」

「東方を大して知りもしないのによく言えますね。」

「……すまん。」

いや、確かに知らないけどさ…

「それで、どこにするんです？」

いや、一つしかないだろ……コレ……

「……1で。」

「ファイナルアンサー？」

「…ファイナルアンサー！」

デデデーン……デロデロデロデロ……

「……ざぁんねぇん！！」

「あ～……って待てやァァァァァァァァァァァ！！！！
なんで残念されなきゃいけないんだよ！？転生先選ぶだけだろうが
！！」

思わずテーブル（何故かいつの間にかあった）を叩き、立ち上がる。
その拍子に転生先の書かれた紙が落ちる。

「ん？なんだこれ。」

よく見たらリリカルなのはと書かれているところのすぐ下に別の白
い紙が張ってあって、しかもそれが剥がれかけてる……まるで何か
を隠すように……

「ヤバッ……」

思わず呟いてしまったのか、慌てて俯せになる（手が無いから口を

塞ぐアクションが出来ないのか？）ベス。決定的証拠を入手したオレは素早く紙を剥がして中を確認する。

そこには……

1：魔法少女リリカルなのはの世界
別名：ハーレム地獄

「なんじゃこりゃあアアアアアアアアアアアアアア！！！！！？」

……よく喉枯れないな…オレ…あ、死んでるからか。

よくよく話を聞いてみると、「可能性がある」だけで作らずに過ごすことも可能らしい。
ただ、一歩間違えるとヤンデレ化も有り得るそうだ。

ハイライトの消えた目で放たれるトリプルブレイカー（非殺傷）…
……ショック死しちまうかもな……恐ェ……

# 第三話　転生先は地獄ばかり！？（後書き）

あるぇー？原作に突入出来ないよー？

# 第四話　今、旅立ちの時（前書き）

まだだ！まだ終わらんよ！連続投稿は！

# 第四話　今、旅立ちの時

と、まぁ、なんだかんだで魔法少女リリカルなのはの世界に転生することになった吉谷　吼太だ。

今回は状況を整理しながら進もうと思う。

「それじゃあ、希望のステータスを言ってください。叶えられる限りは叶えますので。」

今、オレの目の前で喋っているスライムベスは自称神（笑）。なんだか地獄とか冥界とかを司ってるらしい。今だに信じられんが。

オレはこいつの不手際のせいで食中毒で死に、転生の機会を与えられて、晴れてリリカルな世界に転生出来るようになったわけだが……

「んじゃ、ルックスはいい感じに。カッコイイけど近寄りがたいわけじゃないみたいな。」

「フムフム。」

「能力とかは片っ端からＭＡＸで。」

「ほうほう。」

「特殊能力もオレが知ってるのは片っ端から使用可能。」

「はいはい。」

「道具も知ってるやつは全て欲しい。」

「それだけですか？」

「それぐらい……あ、攻撃の威力はオレのステータス依存で。」

こうしないと技や攻撃にムラが出ちまうからな。

「えーと……はい、それぐらいなら出来ますよ。」

「マジで！？」

「ハイ。『冥界寄越せ』って言われるのに比べたら遥かにマシですし。」

「んじゃ、そんな感じで。」

「まず、転生したらあなたは０歳から始めてもらいます。時期的にはなのは嬢やフェイト嬢、はやて嬢らが生まれるのと同時期ですね。場所は海鳴です。」

「わかった。」

なのは達と交流を持つのには同年代のほうが都合いいしな。

「そして特殊能力に関してですが、基本的にあなたがよく知っているものほどより効果が高くなります。例を挙げるなら、あなたの場合、スタープラチナよりオーバースキル：加速のほうが効率的に速くなれます。」

つーことは無理に知らない技使うよりは知ってる技の方が使えるってことか。

「あぁ、わかった。」

「あと道具ですが……」

「それはジッパーに入れといて。あ、ただ今から挙げるのはオレが望んだタイミングで送ってきて。さすがに全部仕舞っとくとなんか危ない感じがするし。」

あとは……

Ｓｉｄｅ　ベス

それからいくつかの打ち合わせをして、とうとう吼太さんの旅立ちの時がやってきました。

「よし！んじゃ、行きますか！！」

「それでは、またアイテム受け渡し時にでも。」

「あぁ、じゃーな。」

そう言い、彼は歩きはじめました。しばしの別れですね。

そうしてしばらく経ち、彼の姿が見えなくなりました。

「頑張ってくださいね……？」

そう言った私の顔はきっととても母性に満ちて……「忘れてたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！ベスゥウウウウウウウウウウウウ！！！」おや？忘れ物でもしたんでしょうか？

彼はすさまじい勢いで戻ってくると、その勢いのまま拳を握りしめ、腕を大きく振りかぶって……え？

「とりあえずお前を殴っとく！！」

ボグッ

Ｓｉｄｅ　吼太

ふ～、危ない危ない。危うく殴るの忘れるとこだった。

ん？散々リンチしただろって？別れの一発だよ別れの一発。

「んじゃ今度こそ、じゃあな～♪」

なんかぴくぴくして起き上がらないけど……まぁ、死んではないだろ。自称神（笑）だし。

こうしてオレは、

「オギャアアアアアアアアアアアア」

また、生まれた。

## 第四話　今、旅立ちの時（後書き）

次からようやく海鳴です。……原作に入れるのはいつになるのやら……

長ーい目で見ていただけると嬉しいです。

# 第五話　チートを確認しよう！（前書き）

連続投稿は続くぜ！一話一話は短いし！

# 第五話　チートを確認しよう！

Ｓｉｄｅ　吼太

やぁ、みんな。吉谷　吼太だ。まぁ、いよいよ転生したわけだ。これから色々引っかき回すわけだが……ん？名前が生前と同じで大丈夫なのかって？ベスによると「転生した先で同姓同名になるのは決してありえないことじゃないので。」らしい。まぁ、漢字まで一緒なのはあいつのサービスなんだそうだ。

言い忘れてたがベスとオレは念話みたいので繋がっているみたいで、話し相手になってもらっている。だって暇なんだもん。赤ん坊って。

まぁ、そんなわけで５年が過ぎた。早い？お前ら赤ん坊の生活の様子なんて聞きたいのか？オレは話したくない。

さて、そろそろいいかな。

『おい、ベス』

『なんですか？また暇つぶしの雑談ですか？私は暇じゃないんですが。』

『違う。そろそろ道具を渡してくれ。』

肉体的にぎりぎり使えるだろうとふんだオレはチート能力を本格的に試すため、ベスに預けていた道具を受け取ることにした。ある程度慣れとかないとあとがヤバイしな。

『わかりました。では人気のないところへ移動してください。あなたの家の中では面倒なので。』

『わかった。』

まぁこれは仕方ない。無理にやって困るのはオレだしな。

「おかーさーん、ちょっとお外で遊んでくるー。」

「夕飯までには帰ってくるのよー？」

「はーい！」

んじゃ、行きますか。

とりあえず近くの山にした。ここなら人目にはつかないだろう。

「ベス～、いいぜ～。」

『それでは送ります……キェーッ！』

「キェーッってなんだよキェーッって。」

ベスの『キェーッ！』が終わった瞬間、目の前が光り輝き、ダンボールが顕れる。

「……なんか派手だな。」

『派手好きなんです。』

ダンボールの中を確認する。うん。しっかり入ってる。

「確かに受け取ったぜ。」

『一応起動出来るか一通り確認しといてください。』

オレがベスに頼んで、とりあえず渡してもらったのは以下の通り。

・デビライザー（刹那仕様。ただしカラーリングは赤中心）

・ヴィネコン（黒、赤仕様。カラーリングはそのまま）

・ディケイドライバー（カラーリングは赤）

・ライドブッカー（カラーリングは赤）

・ディメンションＡＲＭ　ジッパー

……趣味全開だな…とりあえず、デビライザーとヴィネコンをコードで繋げて……

「コールッ！」

適当に召喚してみる。魔法陣が発生し、顕れたのは……

「ゴァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！」

「なんとも活きの良いリオレウス……って待てぇい！！ベェェェス！」

『何か不都合でも？』

「なんでレウスなんだよ！？普通ここはイニシエのケイヤクに従い…とかだろ！」

『気分です。それとアクマ以外が召喚出来るかのテストも兼ねてます。それに、召喚主には従順なんで安心してください。絶対襲われたりはしません』

ガジガジガジ

「ほぅ……そうか。じゃあこの頭がガジガジ噛まれてるのはなん

だ？」

『きっと愛情表現ですよ（黒笑）。』

……まぁ、とりあえず中身はともかく、機能は正常みたいだ。

『ちなみにあなたの特殊能力により、キータッチしなくても脳内指示でヴィネコンは動くので安心してください。』

……どの能力のせいだろ…？どうでもいいが……

とりあえず、レウスには帰ってもらった。今いられると困るしね。

「次は……ディケイドライバーでも試すか。」

ライドブッカーから一枚のカードを、次元を超える世界の破壊者が描かれたカードを取り出し、ディケイドライバーに装填する。

「変身！」

……

「『…あれ？』」

## 第五話　チートを確認しよう！（後書き）

次もなるべく早く上げます。

それと、今までに出てきた道具を紹介

ディメンションＡＲＭ　ジッパー

【ＭＡＲ】より。端的に表すなら四次元ポケット。大量の道具が入っている。

ディケイドライバー

【仮面ライダーディケイド】より。いろんなライダーに変身出来る。本来は白色が中心だが、吼太の好みで赤色にしてある。

ライドブッカー

【仮面ライダーディケイド】より。ディケイドライバーで使用出来るカード（以降ライドカードと呼称）が収納してある。中はクラインの壺に繋がっているため、たくさん入る。今作では色が白色から

赤色に変化しているほか、ライドカード以外の様々なカードも収納してある。

デビライザー

【真・女神転生　デビルチルドレン】及び【真・女神転生　Dチルドレン】より。基本的なシステムや外見は漫画版に準拠。ただし、色は青紫色の部分が赤色になっている。今作ではデビル以外も召喚可能。また、カードスリットにカードを挿入することでカードに封じられている力を解放出来る。ライドカードを入れた場合はディエンドライバーと同じ役割を果たす。カードスリットの見た目はDチルドレンのデビライザーのカードスリットと同じような形。

ヴィネコン

【真・女神転生　デビルチルドレン】より。見た目とシステムは漫画版準拠。今作では、カードが存在しないモンスターなんかが多数記録されており、デビライザーと繋げることでそれらを召喚出来る。大きさはＰＤＡ程度。専用のベルトが付属しており、非使用時には腰の後ろにマウントしてある。

とりあえずはこんなところです。

## 第六話　欠陥発覚！？（前書き）

今回は少しばかり短いです。

# 第六話　欠陥発覚！？

Ｓｉｄｅ　ベス

どういうことなんでしょう？変身に必要なプロセスは踏んだはずですが……あとは身体的な条件ですが……少し調べてみましょう。

ッッ！？こ、これは……

Ｓｉｄｅ　吼太

おかしい。変身が出来ない。つーか音が鳴らない。壊れてんのか？

『吼太さん、吼太さん。』

「なんだよベス。オレは原因究明に忙しいんだが？」

『確認したいことがあるので、手伝ってください。』

「……心当たりがあるのか？」

『はい。まず、螺旋力を確認してください。』

これは簡単だ。ドリルが出せれば問題無い。

案の定、気合を込めたらばすぐにドリルは出た。

『結構です。次は神器をお願いします。』

「OK。……花鳥風月（セイクー）！！」

力を込めると背中に半透明の翼が顕れる。

『結構です。……では、ジッパーが使えるか試してください』

「あぁ。……ディメンションARM、ジッパー！」

……

『シャンタクは使えますか？』

「凍てつく荒野より翔び立つ翼を我に、シャンタク！！」

……

『ラウザルクを試してください』

「ラ、ラウザルク！」

……

『やはりですね……』

「おい、まさか……」

『分かりやすく言うと、魔力量がＦマイナスになってますね。基本となる魔力量が限りなく０に近いんです。』

「……ん？オレ全ての能力をＭＡＸにって言わなかったか？」

『言いましたねぇ。』

「ならなんで魔力量がＦマイナスなんだよ？普通オーバーＳＳＳだろ？この場合はＥＸとかか？」

『それは……その……』

「なんだよ？はっきり言えよ。」

『……申し訳ありませんでしたァァァァァァァァァァァァ』

「……一応聞く。どういうことだ？」

『こちらの手違いで貴方の魔力量の調整間違えてしまって……』

「……待てやぁぁぁぁぁぁぁぁ！またかよお前ぇ！！どんだけ人に迷惑かけりゃ気が済むんだよ！！？」

『すみません！さらにいうなら全部の魔力設定をＥＸにしたせいで魔法、魔術、魔導の全てが使用不可能になってしまっていて……』

「マジかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！……ん？ならなんでディケイドライバーが使えないんだ？」

『あぁ、それはディケイドライバーの起動認証にＥＸランクの魔力を感知する必要があるからです。悪用されないようにそうしました！』

……

『……テヘ♪』

「……いっぺん、死ね♪」

『すみませんすみません！だから次元を開いて確率変動弾を撃ち込まないで波花でビンタしないでイビルジョーを送り込まないでくださァァァァァァァァァァ！！！！！！！』

とりあえず、まともに使える能力が限られてしまいました。

あと数年で原作始まるのに……どーしよ？

## 第六話　欠陥発覚！？（後書き）

とりあえず、原作直前まで書きました。色々オリジナル設定が出てるので混乱しやすいかと思います。
なるべく説明の文は増やしていくつもりなので、どうかよろしくお願いします。

# 第七話　ぼちぼち介入しましょーかー（前書き）

連続投稿がまだ続いた…！

# 第七話　ぼちぼち介入しましょーかー

Ｓｉｄｅ　吼太

やぁ、みんな。ようやくチート能力をフルに使用出来るかと思ったら、逆に欠陥が発覚した吼太だよ。

あれから三日たった。持ち帰ったデビライザーとかは近所のおじさんからもらったおもちゃだと説明したらあっさり認められた。いや、たしかにおもちゃとかアクセサリーにしか見えないけどさ……

とにかく、使える能力だけでもとうまく使えるのを探したところ、主戦力としてつかえそうなのは、

・螺旋力

・天界力関連（ＡをＢに変える能力）

・職能力（～に…を加える能力）

・オーバースキル（ただし、実戦に使用出来そうなのは、加速と重力、剛力程度。強いていえばオーバーフリーズと時の停止、ステルス。変形は中途半端にしか出来ないため、諦めた。）

・ごく一部のスタンド（持続時間は一律１０秒。使用可能なのは、ザ・ワールド、スタープラチナ、キングクリムゾンの三つ。イメージが足らないのが理由らしい。）

・ガードスキル（全ハンドソニック、ディストーション、ディレイ、

ハーモニクス、ハウリング、オーバードライブまでは確認。）

あとは【答えを出す者】、【地球の本棚】といった、補助がいくつか。

……主戦力として考えてたライダー、ガッシュの術、デモベの術が使用出来ないせいか、すこし心許ないな。頑張ってリンカーコアを鍛えてみよう。……ザケルぐらいは使いたいなぁ……

最近の日課は海鳴周辺の散策だ。理由は未来の魔王、もしくはその関係者とのエンカウントを済ますため。これだけは小学校入学前に済まさないといけないからな。同じ小学校に入るためのきっかけづくりは早ければ早いほどいい。

……いや、下心なんてねぇよ？相手は小学生だしな。リリカルなのはのアニメを見てた時もヒロインよか魔法とかに目がいってたし。

そんで今、海鳴図書館の辺りをぶらぶらあるいていたら……

「うー、ぬけへん……っ！」

はやてが、いた。

見たところ、道路脇の溝にタイヤが挟まってしまったらしく、一人でなんとか抜こうと四苦八苦しているみたいだ。

ただ、ここは図書館の入口の死角かつ、人があまり通らないので、オレが無視したらいつ助けがくるかわかったもんじゃない。まぁ、見てるだけなのもアレなんで、

「えっと……大丈夫？」

「へ？……あ、あー、だいじょうぶや。ほら！からだもげんきやし！」

いや、今身体は関係無いだろ。

「手伝うよ。溝に入っちゃってるんでしょ？」

「う……」

「大丈夫だから！」

そう言って無理やり手伝う。このままじゃらちがあかなかっただろうしな。

ガゴッ

「取れたよ。」

「あ、ありがとう……」

「なんてことないよ。困ってるときはお互い様だからね。」

「ホンマにありがとう。きみのなまえ、教えてもらってもエエかな？」

「吼太。吉谷　吼太だよ。５歳。」

「わたしははやて。やがみはやてや。よろしゅうな。コータくんってよんでもええ？」

「うん。はやてちゃんは何歳？」

「５さいや。おないどしやね。（ニコッ）」

……正直、はやてが笑った瞬間、オレのライフにグッときた。さすが後の聖小五大美少女（今命名）……破壊力は抜群だぜ……

それからはやてとしばらく話しながら、家まで送ってあげた。

自宅に帰ると、最初は帰ってくる時間が遅いことを母に怒られたが、はやてのくだりになった途端に意地悪い笑顔をされた。

どうしたのか聞くと、「これなら孫は早めに見れそうね～♪」とのこと。

かーさん、気が早過ぎだって……

## 第七話　ぼちぼち介入しましょーかー（後書き）

まさかの5歳はやて登場。正直ノリだけです。

次回はまた時間が飛びます。多分。

# 第八話　セットアップ！…オレじゃないけど（前書き）

深夜更新だぜ！

……眠い

# 第八話　セットアップ！…オレじゃないけど

Ｓｉｄｅ　ベス

「暇ですね～……」

どうも、お久しぶりです。神です。決してベスなんかじゃありません。わたしをあんな粘体生物と同じにしないでください。

吼太さんが転生してから早９年たちました。２歳ごろまではお話も出来ていい暇つぶしになったのですが、最近の彼はいたって普通の暮らしぶりです。せっかくなのはさん達と同じクラスになったのだから友達になればいいのに。

せっかくですしちょっと提案してみますか。

『吼太さん、吼太さん。』

『なに？今算数の問題解く振りしながらサイコキネシスの訓練してんだけど。』

中々器用なことしてますね。曲芸家でも目指してるんでしょうか？サイコキネシスなんて使え……ますね。彼の場合、絶チルのが。

『分かったか？戦力の底上げをしてるんだから。』

『心の中を読まないでください。それはそうと、提案があるのですが。』

『なんだ?』

『なのはさんと仲良く『断る』……最後まで言わせてくださいよ……』

『言い切らんでもわかった。だが、今は時期尚早だ。誰かさんのせいで変装出来なくなったからな。タイミングはしっかり見計らわないと。誰かさんみたいに間違ったら大変だ。』

『そんなに言わないでください……ゴセイカードと追加のライドカードあげますから。』

そう言い、カードの束を彼の前に顕現させる。これでどうにかご機嫌取りを……

「吉谷!学校にカードゲームを持ってくるな!」

カードが見つかる
←
吼太さんが怒られる

←
吼太さんに睨まれる
←
＼（＾ｏ＾）／

Ｓｉｄｅ　吼太

ベスをいじめたら少しスカッとした。

つーかあいつすっかり忘れてるな……

きっかけは昨日の深夜。

『誰か……助けて……ください』

そう、物語の始まりを告げる念話が海鳴に響いたんだ。

ついに、始まる。

……何がって？

オレのスーパーチートタイムに決まってるだろ！

『台なしですね。』

ベスは黙れ。

『最近の吼太さんは酷いです……』

まぁ、そんなわけで、現在はあの動物病院の近くに隠れてるわけだ。
といっても今回は基本的に手は出さないけどな。

『言ってること矛盾してません？』

『オレがあのキモいベスモドキを倒してもリリカルなのはは始まらないだろ？まずはあれくらいは倒して貰わないとな。』

ちなみに変装のためにわざわざ造ったレウスヘルム（実は強度はＳ・ソルＺを遥かに超えてたりする。具体的にはトリプルブレイカー喰

らっても傷一つ付かない）は役に立ってるのかは正直微妙だ。

……あぁ、変装魔法が使いたい……

『あ、始まりますよ！変身！』

どれどれ、御手並み拝見。

Ｓｉｄｅ　なのは

これどういうことなの！？

不思議な声に誘われて急いできたら、見たこともない何かがいるし、フェレットさんは喋りだしちゃうし……

「えっと……何がなんだかよくわかんないけど、いったいなんなの？何が起きてるの？」

思わずフェレットさんに喋りかけちゃったけど……

「君には資質がある…お願い、僕に少しだけ力を貸して？」

フェレットさんはきちんと答えてくれた。

「資質？」

「僕は、ある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない……だから、迷惑なのは分かってはいるんですが、資質をもった人に協力してほしくて…」

そういうと、地面に降りて、改めてこっちを向くフェレットさん。こんな場面だけど、少しおかしい気もするの。

「お礼はします、必ずします！僕の持っている力を、あなたに使って欲しいんです。僕の力を……魔法の能力を…」

「…魔法？」

魔法って……あの杖でものを動かしたり、火を出したりするあの…

「グォォォ！！」

考えてるヒマなんてなかったの！今はあれをなんとかしないと！

「お礼は必ずしますから……！」

「お礼とかそんな場合じゃないでしょ！？どうすればいいの？」

「これを。」

そういうと、フェレットさんは首にかけてた宝石を渡してきたの。赤い、とっても綺麗な宝石。それに……

「暖かい……」

「それを手に、目を閉じて…心を澄ませて…僕の言ったとおりに繰り返して…！」

言われたとおりにする……心を澄ませて……

「いい！？いくよ！！」

「うん！！」

「【我…使命を受けし者なり…】」

「【我…使命を受けし者なり…】」

「【契約の元、その力を解き放て。】」

「【えと、契約の元その力を解き放て。】」

なに…？…呪文を唱えるたびに、身体に力が、暖かい力が入り込んでくる…？

「【風は天に…星は空に…】」

「【風は天に…星は空に…】」

違う……入り込んでくるんじゃない……目覚めてるんだ……

「【そして、不屈の心は…】」

「【そして、不屈の心は…】」

そして私とフェレットさんの声が……

「「【【この胸に！】】」」

重なった！

「「【【この手に魔法を…レイジングハート！セーット、アーップ！！！】】」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ！』

そして私は……光に包まれた。

## 第八話　セットアップ！…オレじゃないけど（後書き）

これから先はなるべく2～3日に一回は更新出来るように頑張ってみます。

あと、感想なんかもあれば送ってください。皆さんの応援が私の力になります。

## 第九話　オレは何故忘れていたんだろう……ｏｒｚ（前書き）

あらかじめ言いますが、本作品ではデバイスの音声を以下のように表します。

セットアップ
↓英語

シーリング等の単純な言葉、技の名前
↓カタカナで英語の読み。

会話
↓日本語

何卒、ご理解の方をお願いします。

一部、文章を修正しました。話の内容は一緒のままなので安心してください。

# 第九話　オレは何故忘れていたんだろう……ｏｒｚ

Ｓｉｄｅ　ベス

桜色の魔力光が眩しいですね～、この中では大きいお友達待望の変身が行われているわけなのですが、あいにく、現実はそううまくいくものでもないので、変身シーンが見れたりするわけではありません。さて、吼太さんはどんな反応をしているやら……

『吼太さーん？』

……

おや？

『吼太さーん？どうしたんですかー？』

見てみると吼太さんは何か大切なことを思い出したかのような顔で驚愕しています。……何なんでしょう？

「わっ、……忘れてたァァァァァァァァァァァァ！！！！？」

…ハイ？

## Ｓｉｄｅ　三人称

吼太はすっかり忘れていた。この世界で魔法を使うためのルールを。

そして、それをレイジングハートを見た瞬間に思い出した。

そう、デバイスである。

この世界ではデバイスの補佐を受けながら魔法を行使するのが半ば常識と化しており、特に攻撃系の魔法はデバイスの助けがほぼ必須となっている。

対して、吼太の持ち物はというと、デビライザー、ヴィネコン、ディケイドライバー……

今持ってるアイテムのいずれも、ロストロギア級のアイテム（特にディケイドライバー）ではあるが、デバイスと言うには不適切だ。

生前読んでた二次小説では転生のときに与えられたり、転生後自作したりするのが基本なのだが、魔力量の騒ぎもあり、すっかり失念していたこと。それが祟ってしまった。

「（どーしようか……結界魔導師ってわけでもないからデバイス無しじゃ通用するかわかんねぇし……能力を片っ端から希少技能じゃ無理あるし……）」

『吼太さん、吼太さん。』

ベスが吼太に話しかけるが、考えるのに集中しているせいか、気づいていないようだ。

しかし、ベスもよほど伝えたいことがあるのか、諦めずに話しかけている。

『吼太さん、吼太さん。』

「（いっそ手品でごまかすか……？あ～、わかんねー！！）……なんだよベス！？オレは忙しいんだが！？」

『後にしてください。緊急事態です。』

「緊急事態？」

「なのはさん達に見つかりました。」

「……マジ？」

Ｓｉｄｅ　なのは

魔法の力っていうのはすごく不思議で、私が考えたとおりの杖と服が出来て、私は変身したの。

それで、周りが見えるようになったら、あの怪物は変身のときに吹き飛ばされて弱ってたみたいで、すぐにジュエルシードは封印出来たの。

それで、夜も遅いし、急いで帰ろうとしたんだけど……

「わっ、……忘れてたァァァァァァァァァァァ！！！！？」

「ふぇぇぇぇ！？」

不意に大声があたりに響いて、思わず周りを見渡すと、塀の影から誰かがこっちを覗いていたの。

「見られた！？クッ…！」

フェレットさんが追ってったけど、その前に逃げちゃったみたいで、その人はとうとう見つからなかったの。

「ゴメン、僕のせいで迷惑ばかりかけて……」

「き、気にしなくていいよ～！私も、びっくりしたけど、大丈夫だ

ったし。」

「うん……本当にありがとう。あっ、自己紹介がまだだったね。僕はユーノ。ユーノ・スクライア。ユーノが名前で、スクライアは部族名。」

「えっと……ユーノ君？私は高町なのは。なのはが名前。」

「うん、よろしく。なのは。」

こうして平凡な小学三年生だった私の生活は終わりを告げた。

Ｓｉｄｅ　？？？

海鳴市からすこし離れた遠見市。

周辺でも一、二を争う高級マンションの屋上に彼女はいた。

「ここに……ジュエルシードが……」

長い金色の髪を二つに分け、【鎌】を構えた、寂しげな光を瞳にたたえた、少女。

物語は、始まったばかりである。

## 第九話　オレは何故忘れていたんだろう……ｏｒｚ（後書き）

もうすぐユニークが１０００人行きそうです。

げに恐ろしきはリリなのブランド…！

## 第十話　さぁ！戦いますか！！（前書き）

まさかの平日に二話投稿！……一話一話が短いから出来るだけですけど。

戦闘描写は非常に粗末なものになってしまいました。すいません。

# 第十話　さぁ！戦いますか！！

Ｓｉｄｅ　三人称

「うーむ……」

昨日のなのはの初戦闘の後から、吼太はずっとあることについて考えていた。

そう、デバイスのことである。

「（いくらなんでもデバイス無しじゃアレだよなぁ……）」

実のところ、造ること自体はそれほど難しくはない。アイデアさえ書ければ、【答えを出す者】《アンサートーカー》を使って必要な値や材料を算出出来る上、材料を集めて【設計図を完成品に変える能力】を使えばすぐに完成させられる。

「バリアジャケット張れないのがなぁ……」

これが最大の問題なのである。吼太の魔力量はＦマイナス以下。プロテクションを一瞬張ることすら出来ないほどの魔力量なのである。当然、魔力を消費し続けるバリアジャケットなど論外である。

「それもこれもベスのせいだ……！あいつが魔力量の調整間違わなきゃ今頃は……！」

ちなみに今の時間は午前５時。完全に徹夜である。しかし、完徹に９歳児の肉体が耐え切れるわけもなく……

「……おはよ」

学友達に大きな隈を見せる羽目になった。

なお、このあと授業中に寝てしまい、教師に頭を叩かれることになるが、それはまた別の話。

Ｓｉｄｅ　吼太

とりあえず算数と社会の二時間ぶっ続けで寝て、少し回復した。

さて、確か今日は神社でジュエルシードが発動するんだったな。

キィィ……ン

ほぉら、来た来た。

んじゃ、介入しますか！

んなわけで電光石火（ライカ）で移動する。これならスピード落とせばインラインスケートに見えるしね。

そして海鳴神社にたどり着いたわけだけど……階段の下に来た瞬間に桜色の光が輝いた。

「あー、遅刻しちまったかー。」

どうやら変身の光みたいだけど、これじゃ今から登っても封印は終わった後だな。

まぁ、今回はなのはと会うことが目的だし、やること終わってた方が都合がいいか。

んで、階段を登っているんだが……おかしい。なんでまだ衝撃音が鳴ってるんだ？そもそも、最初の光以外に魔力の光が出てないのも気になる。桜色だから見逃すわけないのに……

気になって脚が早まる。そうして登り切った先には……

例の狼が二匹と、その攻撃を必死に避けている少女とフェレットがいた。つまりはなのはとユーノだ。

「（本来は一匹だったよな？……オレの介入のせいでジュエルシードの落下位置が変化したのか？……なんにせよ、あのままじゃなのはが危ないな。）おーい！」

「ふぇ？君は……？」

『プロテクション』ガキィンッ！

「よそ見すんな！……って、させたのはオレか……すまん！今助ける！」

「ダメだ！一般人は来ちゃいけない！」

ユーノが何か言ってるが無視。

「行くぜ！百鬼夜行（ピック）！！」

植木の百鬼夜行で狼の一匹を吹っ飛ばす。

「お前はそっちをやってくれ！オレはこっちをやる！」

「ふぇ？今の何なの！？」

「だからよそ見すんな！！」

「なのは！危ない！」

おぉ！ユーノ君がなのはを守った！原作だとなのはを庇ったり、活躍するのはもっと先のはずだったからなんか新鮮だな。

「グォウ！」

「うぉっと！危ねッ！」

人のことは言ってられねぇか……！

Ｓｉｄｅ　三人称

「〔ガードスキル〕、ディレイ！」

ディレイは残像を残しつつ高速で移動するガードスキルである。加速力自体には目を見張るものは無いが、残像を利用することで相手の注意を逸らすことが可能な、使い勝手のいい能力だ。そして、ディレイで狼の周りをぐるぐる周り、混乱させる。狼は残像に気を取られて動けないようだ。

「（予想通りだ！）喰らえ！」

手に気合を込める。そして、手に集まった気合を回す《まわす》、廻す《まわす》、輪廻す《まわす》。
廻りはじめた気合は緑の光を放ち、鈍く光る螺旋槍……ドリルになる。

「うぉりゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

ドリルを高速回転させ、狼を一気に貫く。後に残ったのは、元になったのであろう子犬と、封印されていないジュエルシードだった。

どうやら、なのはの方も終わったらしく、ジュエルシードをレイジ

ングハートに回収させているなのはがいた。

「こっちは終わったぞー！封印を頼むー！」

「あ、はーい！」

こうして、オレの初戦闘は、大勝利に終わった。

## 第十話　さぁ！戦いますか！！（後書き）

さぁ、次は魔王とのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだ～（笑）

## 幕間　吼太の法則！！（前書き）

深夜投稿だぜ！

眠い……当たり前ですよね。

## 幕間　吼太の法則！！

なっぺ「皆さんこんにちは！こんばんわ！おはようございます！作者のなっぺでございます！」

吼太「主人公の吉谷吼太です。いつもご愛読頂き、ありがとうございます。こんなクソ駄文でよければこの先も読んでいただければと思います。」

なっぺ「吼太や、駄文なのは認めるが、クソはいかんよクソは。下品だから。」

吼太「事実だろ。……さて、今回、ＰＶが一万突破＆ユニーク１０００人突破記念回です。」

なっぺ「まぁ、最初だし、吼太のプロフィール晒すことにします。」

吼太「……なんか恥ずかしいな……／／／／／」

なっぺ「それではどうぞ！」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

名前：吉谷　吼太

身長：１２７ｃｍ　成長中

体重：２７ｋｇ　成長中

年齢：１８歳→９歳

見た目：【灼眼のシャナ】のシャナと、【生徒会の一存】の桜野くりむを足して２で割った感じ。ただし、髪は真っ赤（ガンダム００のネーナみたいな色）。瞳も紅い。

服のせいで男っぽく見えてるけど、服を脱いだり女物の服を着たりすると見た目が完全に女の子になる。

どや顔が似合う……か？

視力：測定不能（肉眼で月の表面の凹凸が理解出来る。下手な望遠鏡より精度が高い。）

走力：能力無しで１００ｍを６秒未満。成長中。

腕力：今なら能力無しで常用車を振り回せる。ただし、普段は抑えている。成長中。

跳力：一飛び４０ｍ　成長中。

魔力量：Ｆマイナス　成長中

天界力：うえきの法則の世界観に存在する全ての天界力の総量と同

じくらい。なのは的に表すならオーバーＳＳＳ。分かりやすく表すならＥＸ　成長中。

螺旋力：ＥＸ　成長中。

武者魂：ＥＸ　成長中

…ｅｔｃ（様々な能力値がＥＸ　成長中）

装備

・デビライザー

・ヴィネコン

・ディケイドライバー

・ライドブッカー

・ディメンションＡＲＭ　ジッパー

能力

知っているありとあらゆる武器、能力等を使える。ただし、原作に対する知識や感情が強ければ強いほど、つまりイメージがしやすいほど力や再現率が上がる。逆に、二次創作でしか見たことなかった

り、ざっと見てた程度、つまりはイメージがしにくいと、本来の力を出せない。

備考

・ヴィネコンには大量のモンスターのデータが入っていて、ここからデータをダウンロードして召喚出来る。デビルは何故かほぼ無い。

・さらに、ヴィネコンにはＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ等のデータも入っており、また、それらを行使出来る。

・螺旋力を使う攻撃は、具体的にはギガドリルや螺旋ミサイルなど。頑張れば装甲形成まで出来るが、グレンラガン自体はまだ出せない。

・今作では、魔力と妖力は同じものとして扱う。

……随時追加及び、変更予定。

吼太「我ながら凄いな。チートじゃん。」

なっぺ「お前がそう設定したんだろ。あと、成長中というのは、話数に従い、変化するであろうものを示しています。」

吼太「ってことはアレか？魔法は使えるようになるのか？」

なっぺ「そこはまぁ、お楽しみに。」

吼太「……女装ネタとか性転換ネタとかって……無いよな？」

なっぺ「無いと保障は出来ない。オレはやりたい。読者様からお便り頂けたら１００％やる。」

吼太「ｏｒｚ」

## 幕間　吼太の法則！！（後書き）

さぁて、今度こそは魔王とのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ！

# 第十一話　O☆HA☆NA☆SHI？やなこった（前書き）

今回はかなり短いです。

# 第十一話　O☆HA☆NA☆SHI？やなこった

Ｓｉｄｅ　なのは

とりあえず、ジュエルシードは封印出来たからよかったけど、まだやることは残ってるの！

「ねぇ、吉谷君……だよね？あなたも魔法使いなの？」

「いや、オレは魔導師じゃねぇよ。正確に言うなら魔導師になれなかった男、ってとこか……あと、オレのことは吼太って呼んでくれ。名字で呼ばれるのになれてねぇんだ。にしても……」

そう言うと、吉谷君……じゃなかった、コータ君は突然ぶつぶつ呟き出しちゃったの。「それもこれもベスが……」とか、「ベスのバーカ……」とか聞こえるけど、何なんだろ。

「えーっと…私、高町なのは。それで、こっちはユーノ君！」

「ブツブツ……っと、スマンスマン。ちょっと考え事してた。よろしく、なのは。ユーノ。」

「キュ、キュー！」

……

「…ユーノ……さっき思いっきり喋ってたよな？」

「ユーノ君……さすがに無理があるの…」

「……ゴメン。思わず…」

それから私達はお互いの情報を交換しあったの。神器とかガードスキルとか知らない言葉が出てきたけど、「今は時間が無いから説明はまた今度な」って言われて、はぐらかされちゃったの。

でも、今度は絶対、ぜーったいちゃんとお話するんだから！

Ｓｉｄｅ　吼太

危ねェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！危うくＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩフラグが立つかと思ったぁぁぁぁぁ！！！！作者の思い通りになんてさせるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

……いやさ？今なのはと話をしたら……

話をする

←
立ち話もなんだからと移動
←
翠屋へ
←
なのはとだべってるとこを恭也さんに見られる
←
シスコン兄貴によるＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ
←
冥界への片道切符を入手。ベスの元へ強制送還。

ってなるって……アンサートーカーで出たんだもん……つーかチートなのってオレじゃなくて恭也さんのほうなのか？

まぁ、そんなわけで魔王の招待は回避させてもらった。それに今回の戦闘で、デバイスのアイディアも浮かんだしね。

さーて、家に帰って早速造り始めますかー！！！

まずはアイデアスケッチだー！

Ｓｉｄｅ　？？？

「誰か……」

薄暗い空間、そこに響くのは悲しげな声。

「僕を……見つけて……」

彼女は待つ。彼女の求める人を。

「僕を……連れ出して……」

いつから待ち始めて、どれくらい待ったのか……

「誰か……」

時間は、最早意味を持たない。考えるだけ、数えるだけ、無駄なのだから……

彼女は待つ。永遠とも思える時を、ただ…ただ……

## 第十一話　O☆HA☆NA☆SHI？やなこった（後書き）

新キャラ登場！

ハイ、二人目（ベスを含めるなら三人目）のオリジナル主要キャラです。

彼女が何者なのかは次回にて！

# 第十二話　次元世界って便利！欲しいものが何でもあるし！（前書き）

前回の代わりってわけじゃありませんが、いつもより微妙に長いです。

# 第十二話　次元世界って便利！欲しいものが何でもあるし！

Ｓｉｄｅ　吼太

数日後……

オレは今、とある次元世界に来ている。デバイスの材料で、どうしても地球上にはない素材が必要だったから、その収集のためだ。

ちなみに次元移動にはギラティナを呼んで、やぶれた世界経由で移動した。ポケモンのちからってすげー。

んで、途中で出会った原生生物とかを軽くのしながら素材を探していたんだけど……

「遺跡……か？」

ヴィネコンによると、素材の位置を示す反応は遺跡の中から出ているらしい。

「……入ってみるか……」

ユーノを連れて来たら喜んだかな？

あれから数時間たったが、とくに罠もなく、安全に進めている。て

っきりイ○ディよろしく狭い通路で丸い岩でも落ちてくるかな？って思ってたけど……まぁ、あれはないか。

そんなこんなで、最深部にたどり着いた。見たところ、目的の物はここの床下に在るらしい。ここでようやくオレの持ってきた道具が活きる！重い思いをしながらオレが持ってきた道具、それは…

「ピッケルグレート！セーットアーップ！！」

……

デバイス、欲しいなぁ……

掘る、掘る、掘る。

遺跡の底をピッケルグレートで掘っていく。ちなみに、ドリルを使わないのは単なる気分だ。

そしてある程度掘ったときのこと

ガッ↑ピッケルの音

ピシッ

……

おや？

ガッ↑ピッケルの音

ピシピシッ↑なんか心配な音

「……まさかね」

ガッガッガッ↑やけくそ

ピシッピシッピシッ……ゴゴゴゴゴゴ

ズガガガァァァァァァァァァ！！！！！！

「やっぱりかぁァァァァァァァァァァァ！！！！！」

床☆下☆陥☆没

「死ぬ！このまま落ちたら確実に死ぬって！！このまま死んでたまるかぁぁぁぁぁ！！！花鳥風月（セイクー）！！」

背中から緑色の半透明な翼を生やす。セイクーは飛行用の神器。これさえあればとりあえずは安心だな。

そのままゆっくり降りる。どうやら、ここは遺跡の一部じゃなくて、遺跡の下にたまたまあった洞窟らしい。そして、底に着くと……

「……うわぁ……」

見渡す限り、翡翠色に輝く宝石、宝石、宝石。

この宝石が今回の目的。この宝石は魔力の吸収、貯蓄に優れていて、空気中の魔力素を吸って溜め込む性質がある。これを使ってバリアジャケットの分の魔力をカバーしようって訳。まぁ、さすがに空気中の魔力素のみだと限界はあるし、無駄遣いは出来ないな。見た目はライダースーツみたいになると思う。

とにかく、掘るか。

―少年採掘中―

Ｓｉｄｅ　三人称

「ざっと、こんくらいか」

持ってきた麻袋いっぱいに宝石を詰める吼太。かなりの量を採掘出来たらしく、その顔は綻んでいる。

「足りなくなったらまた取りに来りゃいいか。だったら座標固定用に何か残すか……ドリルだな。」

座標を再指定しやすいように螺旋力でドリルを創って適当な位置に突き刺す。これで次回からは螺旋界認識転移システムで一気に来れるようになる。

それで帰ろうとしたときに、洞窟に奥があるのを見つけた。しかも何やら光ってる。

気になったのか、そちらに向かう吼太。そこには……

「これって……魔法陣か！？」

そこにあったのは魔法陣。今も稼動しているらしく、淡く光っている。

「でも……見たことない魔法陣だな。ミッドでもなきゃベルカでもねぇし。」

魔法陣の形は今まで見たものに比べると、随分と特殊で、ミッドのような円の中心に四角形を重ねた紋様があるものでもなければ、ベルカのような三角形でもない。

その紋様は、長方形を二つ重ねたものの中心に星型があり、周りを三角形を並べたような（△▽△▽△▽△▽△のような）帯と、魔法言語が回っている、既存の魔法陣とは、似ても似つかないものだった。

「答えを出す者（アンサートーカー）発動……保管魔法？んなもん原作にあったっけ？」

この魔法陣は保管魔法という魔法のために創られたようだ。どうやら、本当にミッド式でもなく、ベルカ式でもない、歴史の闇にに埋もれてしまった魔法体系らしい。

どうやら起動に魔力を使うらしいので、採掘した宝石を置いて見ると、魔法陣が一際輝き出した。

「保管ってことは何か出てくるのか？転送魔法の発動も兼ねてるみたいだな……何か面白いモンが出てこねぇかなぁ…」

そして、魔法陣の中心に光が満ち、光が止むと共に魔法陣が消える。

そして魔法陣の中心があった場所に……

「……人ぉ！？」

気を失った少女が、いた。

## 第十二話　次元世界って便利！欲しいものが何でもあるし！（後書き）

ハイ、前回の？？？は今回出てきた少女のことです。

つーか、正体が明らかになるどころか、出てこさせるので精一杯だった……

# 第十三話　デバイス造るよ！（前書き）

ガンガン書いて、ガンガン投稿！

妄想、電波が止まらない！

# 第十三話　デバイス造るよ！

Ｓｉｄｅ　？？？

「ん……」

眩しい……？保管魔法が解けたのかな……？

でも誰が……？だって僕達の国はもう…

とりあえず、目を開ける。

目に入ったのは、汚れ一つない天井。

「……どこなんだろ？」

「お、目ぇ覚めた？」

声がする。右から？

右を向く。そこには……

笑顔を浮かべた、目の下が異様に黒くなっている男の人がいた。…

…え？なんで黒いの？まさか……

Ｓｉｄｅ　吼太

時を遡ること数時間前。

未知の魔法陣から現れた女の子を、「道端に行き倒れてたから連れて来た」ことにして、家に連れて帰ってきたオレは、とりあえず彼女をベッドに休ませることにした。あの保管魔法がどんなものかは知らないけど、少なからず疲労は溜まっているだろ。

ただ、すぐには目を覚ましそうになかったんで、デバイス作りを先にすることにした。

デバイス作りのアイデアのきっかけは、「ポケモンやデジモンの技を自分が使えたらいいんじゃね？」みたいな感じだ。

今のオレには決定力が欠けている。十ッ星神器の魔王は、六発しか使用できないはずだ。いざとなればＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒで情報操作して再装填すればいいけど、Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒの効果適用には時間がかかるし、めんどくさい。出来れば使いたくはないのが本音だ。

職能力やガードスキルは論外だし、オーバースキルやスタンドでは若干力不足だ。

そこで考えたのが、データ化されてヴィネコン内に保存されてる様

々なモンスターを一時的かつ部分的にダウンロード、装備し、使用するというもの。

これなら一撃一撃が強力な技をいくつも同時に使用出来るし、場合によってはそこから複数召喚に繋ぐことも可能となっている。

ただ、これにはデバイスが必要不可欠な上、並のインテリジェントデバイス以上の処理能力が無いと、意識を乗っ取られる危険性がある。それに、部分再現のためには、最低限バリアジャケットの展開が可能じゃないと、肉体に直接融合してしまう可能性もある。だから、例の宝石が必要だったってわけだ。

んで、今は設計図作りの真っ最中。答えを出す者（アンサートーカー）の連続使用をしなきゃいけないし、かなりの時間ぶっ続けでやってたせいか、さすがに疲れてきた。

休み休みやればいいんだろうけど、出来ればあの大木の事件には間に合わせたい気持ちがある。

翠屋ＦＣの試合はもう少し先だが、いつイレギュラーが起こるか分からないし、なのはとの協力も取り付けておきたい。

なので、現在は鉛筆を三本使ってまで描き続けている。【腕を六本腕に変える能力】とマルチタスクの併用がかなり使えると判明したのは嬉しい誤算だな。

そして明け方近く（結局徹夜）、後は細部の調整とマスター登録を残すのみとなったときに、

「……どこなんだろ？」

という声が背中越しに聞こえた。

「お、目ぇ覚めた？」

とりあえず、笑顔で声をかける。第一印象って大事だよね。

だけど、女の子は怪訝そうな顔のまま、黙り込んでいる。なんか変なこと言ったか？

「い……」

「い？」

「イヤァァァァァァァァァァ！！！！！！！お化けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

「お、お化っ！？」

お化けってなんだ！？まさかオレのこと！？

「おい！勘違いだ！オレはお化けなんかじゃ「お化けイヤァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！」だぁーもう！少し落ち着けって！！」

その後はもう大変だった。悲鳴を聞いて飛んできた母さんと父さんに事情を説明したり、近所の皆さんに謝ったり、通報を聞き、駆け付けた警察に状況説明したり……

正直、言わせてもらうと…

「いったいぜんたい、なんだってんだよぉーーーーーッッッ！！！！！」

## 第十三話　デバイス造るよ！（後書き）

なっぺ「しまった……！」

吼太「なんだよ突然？」

なっぺ「幕間で、吼太の性格について記述するの忘れてた！！」

吼太「そういや、無かったな。」

なっぺ「文章にするとこんな感じです。」

性格：細かいことや、めんどくさいことが嫌いで、一度これと決めたらまず曲げない。思慮深く考えることはあるが、基本的には猪突猛進。

吼太「なんだこれ！まるでオレがバカみてぇじゃねぇか！」

なっぺ「バカじゃん。臭うカレー平気で喰っちまうし。」

吼太「それは……（汗）」

なっぺ「それでは今回はこの辺で！」

な＆吼「「さよーならー！！」」

吼太「……バカ……orz」

## 第十四話　原作キャラとも交流を！（前書き）

眠い……

それと、謎の少女よりも、アリサとすずか先に出した方がいいかなって思い付いたので、謎の少女についてはまた次回。

吼太「お前の予告はもはやまったく意味を成してないな。」

……すいません。

では本編をどうぞ！

# 第十四話　原作キャラとも交流を！

Ｓｉｄｅ　ベス

皆さん、お久しぶりです。神です。ベスが半ば公式名称と化してはいますが、ベスじゃありません。

というより、する気になれば姿形は変えられますよ？しないだけで。なんせ神様なんで。見た目なんてちょちょいのちょいです。

にしても、吼太さんは大分面白いものに手を出してしまったみたいですね……まぁ、彼なら大丈夫でしょう。

なのはさんやはやてさんともエンカウントしている以上、フラグが立つ可能性はありますし、少したてばフェイトさんも参入してきます。

……修羅場でも期待させて頂きましょうか♪せっかく転生させたんですから、期待ぐらいはさせてもらってもいいですよね？

Ｓｉｄｅ　吼太

学校の登校時間が近づいていたんで、謎の少女のことはひとまず母さんと父さんに任せ、学校に向かうことにした。

家を出るときまでずっと泣きっぱなしだったところをみると、彼女はよほどお化けが苦手らしい。

何はともあれ、今日も学校へ（惰眠を貪りに）向かう。

『何かおかしくありません？』

ベスよ。それは野暮ってもんだぜ…

それといきなり割り込むな。びっくりするだろ。

ちなみにデバイスは登録を残して、ほぼ完成した。

……なんで登録してないかって？

朝の騒ぎのせいで、整備だけで精一杯だったんだよ！！

まぁ、帰って来てからやればいいや。どーせ学校はたいしたことしないし。

暇だから地球の本棚（ほしのほんだな）でも閲覧して過ごそう……

「あ、コータ君おはよー♪」

……それが実現出来ると考えていた時期がオレにもありましたｏｒｚ。

そうだよ、学校には魔王がいたんだった……

「なのはちゃんのお友達？」

「うん。最近、友達になった吉谷吼太君。同じクラスの人だよ？」

「へー……って、コイツ、教室で居眠りばっかしては頭を叩かれ、授業中に指されたら全部「わかりません」って答えるバカのくせに、テストだけは必ず毎回１００点取ってるバカじゃない。こんなのと友達なの？」

「一応、まともに話すのは初めてなのに随分な言いようだな。ま、オレは気にしねぇけど。全部事実だしな。」

「にゃはは……」

「ところで、吉谷君はなのはちゃんとどこで知り合ったの？」

「翠屋だ。シュークリームを買いに行ったらなのはを見かけて、話をするようになっていって、最近名前で呼び合うようになったって感じだな。」

とりあえず、適当に有り得そうな嘘を言っておく。へたに真実を話したら、何が起こるか想像もつかん。

「ふぇ！？」

『いいから合わせろ！』

案の定、なのはが状況に着いていけてないようなので、念話で指示を出しとく。

「そ、そうなんだよー『こんな感じで大丈夫かな……？』」

『さぁな。アリサの反応次第だ。』

この中で一番隠し事に鋭いのはアリサだとオレは考えている。アリサさえ騙せればすずかには悪いが、すずかも大丈夫だろう。。

「むー……怪しい～！」

おー、疑ってる疑ってる。すずかが止めるかな～なんて思ったけど、止めようとする気配は無いな。

…実はすずかもかなり知りたいのか？だったら当然の反応か。

まぁ、このままじゃなのはが可哀相だし、助け舟出してやることにする。

「本当だ。だからあんま詰め寄るな。なのは、困ってるだろ？」

「うー……分かった。」

「うん。それでいい。」

アリサの頭を撫でる。髪がサラサラで気持ちいいな……

「ちょっ……／／／／あんた一体何を……！！？／／／／」

「ん？ダメだったか？」

「だって、まだ友達でもないのに……／／／」

「ん？なのはの友達なんだからオレの友達でもあるだろ？友達の友達は友達だ。仮に友達じゃなくても、これから友達になっていけばいいんだよ。」

「……ふふっ」

「？　なんか可笑しいこと言ったか？バニングスさん？」

「アリサでいいわよ。友達なんでしょ？だったら名前で呼び合うのが当然じゃない？」

なんて、にまにましながら言ってくる。さっきの意趣返しのつもりか？

「だったら私のこともすずか、って呼んでほしいな。」

すずかものってくる。まぁ、こっちも名字で呼ぶのはむず痒かったし……

「あぁ。オレのことも吼太、って呼んでくれ。よろしくな！アリサ！すずか！」

「「うん！よろしく、コータ（君）！」」

「にゃぁ～、仲間はずれなの～……」

キーンコーン
カーンコーン
「やっべ！遅刻しちまう！じゃあ先行くぜ！」
「あ、ちょっ！待ちなさいコータ！」
「あっ、待って～！…なのはちゃん、早く行こ？」
「……うん！」
「置いてっちまうぞ～♪」
「待ちなさいってばー！」
……ま、騒がしくても、面白いならいいか。
余談だか、なのは達と昼食を一緒に食べようとしたときに、クラスの男子から一斉に殺気を与えられたんだが、やり返すわけにもいかないし、なのは達を巻き込むのは忍びないから、肩身の狭い思いをして昼食を食うことになった。
……さすが聖小三大美少女（現時点）。人気はかなり凄まじいな…
これがA's終了後には五人に増えるから……学校中の男子から殺気を浴びることになるかもな。……まっさかぁ！……有り得そ

うで恐い……

# 第十五話　彼女は誰？（前書き）

とうとう彼女の正体が明らかに！

# 第十五話　彼女は誰？

Ｓｉｄｅ　三人称

「（あ～、視線が痛かった～）」

そう吼太が考えながら帰宅すると、リビングのソファーで、例の少女が寝ていた。置き手紙があり、それによると「買い物に行ってくるから留守番よろしく♪」とのこと。

「よろしく♪って……こいつについてはノータッチか？」

彼は知らないが、彼女は吼太の両親の言葉をのらりくらりと躱し、とうとうごまかしきって、居候を認めさせた経歴があったりする。

「ん……誰…？……燈さん？」

燈（あかり）というのは吼太の母の名前である。ちなみに父親の名前は透（とおる）である。

「よっ、朝方ぶり。」

「朝……ってまさかまたお化「だぁー！ストップストップ！」ムグッ！？」

また叫びそうになった少女の口を慌てて塞ぐ吼太。また騒ぎになっては堪らないと思ったのであろう。その額には冷や汗が浮かんでいる。

「オレはお化けじゃない、人間だ！分かったな！？」

コクコクと頷く少女。それを確認して、吼太が手を離す。

「とりあえず、状況整理だ。オレは吉谷吼太。吼太って呼んでくれ。」

「コータ？」

「あぁ。お前は？」

「僕は……アレ？名前……無いや。僕、生まれてからすぐ捨てられちゃったから。」

「……スマン」

普通、記憶喪失ならば、名前については思い出せないというのが普通で、「無い」などという返事はまず有り得ない。たとえ記憶が無くとも、喪失感までは拭えないからだ。つまり、彼女の名前は本当に「存在しない」ということだ。

「ううん、気にしてないよ。あと、僕は記憶が無いから、自分の家とかも分からないからね。」

よほど言われていたことなのか、予めそう注意する少女。しかし…

「それは嘘だろ？」

「ッ…！？なんで……？」

「ま、いろいろと能力があるってのもあるが、それ以前に、そんな目線を不自然に逸らされた状態で言われても信じらんねぇよ。」

「……」

「それに、だ。」

そう言い、近くの埃を手に乗せる吼太。少女がしっかりと手を見ているのを確認してから、ゴミを木に変える能力を使う。

手のゴミが木に変わり、さらに成長している様子を見て、少女の表情が一変する。

「オレはあっち側の人間だ。多少不可思議な話をされても、信じてやれるし、秘密にしてほしけりゃ秘密にしといてやる。これから何をするにしろ、事情を知っている人間が一人はいたほうが都合がいいんじゃないか？」

「……分かったよ……話すよ、全部……。」

そう言い、少女は話しはじめた……

Ｓｉｄｅ　吼太

なるほど……

彼女の話によれば、まず、彼女は人間ではなくユニゾンデバイスらしい。証拠に小さくなれるか聞いてみたら、あっさり小さくなってくれた。妖精みたいで可愛かったです。ハイ。

んで、彼女の故郷は、ミッドとベルカが魔法の二大看板になるよりさらに昔の、魔法体系が乱立していた時代にあった国らしい。時代がミッドとベルカに収束していくに従い、廃れていき、今では遺物が残るのみだそうだ。

これから先は答えを出す者（アンサートーカー）によって判明したことだが、彼女は後世に技術を伝え、国を再興する使命のために、保管魔法で眠りについていたらしい。

だけど、保管魔法に欠陥があったらしくて、彼女は半休眠、半覚醒状態のまま長い時を過ごす羽目になった。だから、今ではかなり記憶が曖昧らしい。

それと、彼女の国が、【グズィス】と言うことが判明した。魔法体形はさしずめグズィ式といったところか。保管魔法が数百年単位で機能し続けてたところを見ると、魔法の持久発動に長けた魔法体形だったらしい。

「よし！分かった。これからよろしくな！……っと、名前を決めなきゃな……」

「僕は別に無くても困らないけど……「オレが困るの！」……ハ

イ」

オレが言い切ると、もうしわけなさそうにしょんぼりする。くそっ、まるでオレが悪いみたいじゃねぇか！！

「……うっし！決めた！お前は、世界を救う希望の光、暖かな雨、夢を与える者、リーム。お前は今日から、リームだ！」

「リーム……ありがとう。コータ。」

そう言い、自分の名前を確かめるように、何度も繰り返して呟くリーム。それはまるで、大切な名前を、絶対に忘れないように刻み付けてるようにも見えた。

「なぁに、いいってことよ。」

「それでね、コータ。お願いがあるの」

「……お願い？」

## 第十五話　彼女は誰？（後書き）

なっぺ「どうもー！作者のなっぺでーす！」

吼太「……なんだよここ？」

リーム「ここどこ？」

なっぺ「よくぞ聞いてくれたぁ！ここは座談会形式で感想に感謝するコーナーだぜ！」

リーム「……そこまで大声で言うこと？」

なっぺ「……」

吼太「とりあえず、雨季さん、ライさん。感想ありがとうございます！」

なっぺ「ほら、偉大な先輩方を見習って、お前も立派なハーレムを作るんだぞ。」

吼太「お前うざい！」

リーム「えー、とにかく、次回は僕とコータが……きゃっ／／／／／」

吼太「読者が勘違いするような反応をするな！！」

なっぺ「次回をお楽しみに！」

## 第十六話　家族と勘違いとスタンバイレディ（前書き）

一部の会話を危なく感じる人がいる可能性がありますが、気のせいです。

気のせいなんです。

# 第十六話　家族と勘違いとスタンバイレディ

Ｓｉｄｅ　リーム

僕は感じた。この人なら、僕を使いこなしてくれると。

僕は融合騎。真のロードと出会い、その手助けをすることが最大の望み。ロードの役に立つことが最高の至福。

だから、僕は言う。僕の決意を。

Ｓｉｄｅ　吼太

リームの雰囲気が変わった。

真剣な話なんだろう。だったらふざけた態度でいるのは良くない。そう思って、たたずまいを直す。

リームの顔は真っ赤で、まるで熟れたトマトのようだ。

「あの……その……／／／／」

「…ちゃんと聞いてやるから。落ち着いて言え。」

そう言って、リームの頭を撫でてやる。んー、アリサとはまた違う感じだな。でも、気持ちいい。

「う……／／／／／」

リームはただただ、されるがままに撫でられてる。

「落ち着いたか？」

「と、とりあえずは……／／／／」

「うっし。じゃあ頼む。」

「……うん……じゃあ、言うね？」

そう言って、一瞬だけ上目使いをしてから、言葉を放つ。

「あの……ぼ、「ただいまー！吼太帰ってるー？」僕を貴方の所有物にしてください！！／／／／／」

……

「あら～、お邪魔だったかしら？どうぞごゆっくり～……」

「違ぇよ！母さん絶対何かを勘違いしているって！！」

「別に大丈夫よ♪全て察したわ♪孫のことを楽しみにさせてもらえそうってことでしょ？」

「違う違う！！勘違いしてるって絶対！！」

「（言っちゃった～／／／ど～しよ～／／／／）」

全てを勘違いした母さんに、何故かくねくねしてるリーム。ねぇ…

……誰か、誰かこの二人を止めてください！！

「頑張ってね♪あの子のこと、支えてあげて？」

「はい！お母さん！」

「あら嬉しい♪」

「止めてくれぇぇぇぇ……オレに苦労を押し付けないでくれぇぇぇぇ……」

んで、なんだかんだでリームが家族になった。

なんでかって？母さんの暴走の結果です……

なんとか誤解は解けたけど、そしたら今度は「それじゃあ家族になりましょ♪」なんて言ってる暴走母がいて、オレが反論する前に「ハイッ！」って返事を返した最速融合騎がいて、「僕も娘が欲しかったんだ～」なんて言ってるバカ親父がいて……

もういいや、好きにして……

まぁ、そんな感じ。

若干投げやり気味になってるけど、仕方ないよね？母さんが悪い。

もう、仕方ないからデバイスの登録をしちゃおうと思う。あの三人には着いていけない。むしろ着いていきたくない……

Ｓｉｄｅ　リーム

すっかり話し込んじゃった……

よく考えればまだコータの返事はもらってないんだから、なにも進展はしてないんだよね？でも、燈さん……いや、お母さんはとっても面白いし、お父さんはとても優しい。コータはそんな二人の子供。本当に、この三人の家族になれてよかった。

それじゃ、改めて契約を……

ピカー

……え？部屋が光ってる？何で？

「こ、コータ！？」

Ｓｉｄｅ　吼太

待機状態のデバイスを手に持つ。待機状態の見た目はペンダントにした。先には四つの円がクローバーのようになっている飾りが付いていて、首に巻くチェーンには一定間隔毎に、魔溜石（あの宝石のこと）が付いている。

起動のための、オレの僅かな……ほんの僅かな魔力を注ぐと、しっかり反応を返してくれた。

「うっし！んじゃ、マスター登録、【吉谷吼太】！」

『……マスター、【吉谷吼太】、認識しました。当機の名称を登録してください。』

「デバイス名称は……【フォーティトゥード】だ！」

『識別名称…【フォーティトゥード】……認識しました。』

……数分後

『全設定を完了しました。マスター、お疲れ様です。』

「お疲れさん。んじゃ、早速で悪いが、セットアップの試験すんぞ。トゥード。」

『トゥードとは？』

「お前の愛称だ。今決めた。毎回毎回フォーティトゥードっていうのはめんどいからな。ほんじゃ、行くぜトゥード！」

『オーライ、マイマスター！Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！』

「フォーティトゥード！セーットアーップ！！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ！』

その瞬間、オレは光に包まれた。

## 第十六話　家族と勘違いとスタンバイレディ（後書き）

なっぺ「毎度お馴染み（にするつもり）の座談会だよ～」

リーム「わー♪」

吼太「ライさん、雨季さん。感想ありがとうございます！」

なっぺ「前回の座談会でのリームの反応がなかなか好評だったようで。」

吼太「好評……なのか？微妙に違う気も……？」

リーム「まぁいいじゃん♪喜んでもらえれば僕は文句ないよ？」

吼太「……まぁ、いいけどさ。」

なっぺ「話題も無いんでこの辺で。次回もお楽しみに！」

## 第十七話　ズルは意外とばれないもんです（前書き）

進めるために、若干無理矢理気味です。

# 第十七話　ズルは意外とばれないもんです

Ｓｉｄｅ　なのは

最近のジュエルシード集めは、とっても順調。コータ君が探すの手伝ってくれてるおかげで、もう五つも回収出来たの。

まだまだ残ってるけど、これならすぐ集まっちゃうかなぁ？なんて思ったり。

今日はアリサちゃん、すずかちゃん、コータ君と一緒にお父さんが監督をしているサッカーチームの応援に来ているの。

ただ、出掛ける前にお母さんが「チアの服でも着てみる？」ってコータ君に聞いていたのが気になったけど。

それで、試合はこっちの劣勢、ゴールキーパーの人がファインプレーをしたりして、健闘してたけど、僅かに及ばず、いよいよ勝負が決まるかなぁなんて思ったときに……

「こうなったら……！吼太君、頼む！」

ふぇ！？どういうこと！？

Ｓｉｄｅ　吼太

「……いや、なんでですか？」

そう士郎さんに聞く。つーかホントになんで？

「なんでも学校の体育でサッカーをやったとき、大活躍したそうじゃないか。まるで残像が出てるような動きで巧みに敵選手をかわしてゴールを決めたとか。」

あ～、そういや学校でディレイの訓練してたときにそんなこともあったっけなぁ……

「負けたくないんだ！頼む！」

「僕からも頼む。」

ゴールキーパーの人も話し掛けてきた。そういやコイツが今回の事件のきっかけだっけな。

「自分達の力が及ばないのはすごく悔しい。だが、それで今までの練習を意味の無いものにしてしまうのは、もっと嫌なんだ。お願いします！」

「「「お願いします！」」」

とうとう全員で来たよ。そこまで負けたくないのか……

「……分かった。ただし、オレは繋ぐだけだ。ゴールはお前らで決めろ。」

そう言い、体を伸ばし始める。……つーかまさかお前ら翠屋の料理食いたいだけじゃないのか？

「頑張んなさいよ～！」

「応援してるよ～！」

「頑張って～！」

三人娘の応援に俄然やる気の出てきた翠屋ＦＣの面々。現金だなオイ。

「んじゃ、いっちょやりますか。」

Ｓｉｄｅ　士郎

「これは……予想以上だな。」

ディフェンスに徹すると言っていたが、それだけでもかなり変わった。今までは攻めと守りが３：７ぐらいの比率で試合が展開されていたのに、今では逆だ。

当然、ゴールは連続で決まり、試合はこちらの逆転勝ちとなった。

これは、何かご褒美をあげないとな。

Ｓｉｄｅ　吼太

めんどくさいから、ディレイ使いまくってやったが、たいした問題もなく、普通に終わった。つーか案外ばれないな、ガードスキル。さすがにハンドソニックとかはダメだろうが。

そんなわけで今は翠屋で祝勝会の真っ最中。オレは今回の立役者ということで、いろいろ褒美の品を貰ったりした。ホールケーキ無料券って大丈夫なのか？仮にも商品だろうに。

そして、今はなのは達と話してるんだが……

「キュー！キュー！」

ユーノが遊ばれている。思えば意外と扱い酷いよな。フェレットユーノ。

「ふぅー、やっぱり可愛いわねーユーノは♪」

「その辺にしとけアリサ。ユーノが困ってるだろ。」

「ん、分かった。」

『吼太、ありがとう……』

『いいってことよ。』

「そういや気になってたんだけど、アンタそんなペンダント付けてたっけ？」

「あぁ、ちょっとしたときに貰ったんだよ。」

「綺麗だね。私も欲しいなぁ……」

……もしかしてすずかって隠れクレクレ？

なんか会うたびにあれ欲しいこれ欲しい言ってないか？

「今度、みんなの分も貰えないか聞いてくるよ。」

「本当！？ありがとうコータ君！」

満面の笑みでそう答えるすずか。そんなに欲しかったのか？

「ま、まぁ？コータがどうしてもっていうなら貰ってあげなくもないけど？」

「ならやらん。」

「ちょっとぉ！それどういうことよ！？」

「アリサちゃん抑えて抑えて！みんな見てるよ！？」

よく考えりゃ店先の席で怒鳴ってりゃ注目は集めるよなぁ。

「ちゃんとアリサの分も聞いてきてやるから。な？」

「うー…！……ならいいけど…」

なんか犬みたいに唸ってるし。

「あぁ、楽しみにしとけ。」

『吼太、もしかしてそれって……』

『もしかしなくてもデバイスだ。名前はフォーティトゥード。種類はインテリジェントだ。』

『よろしくお願いします。ユーノ様。』

『あ、どうも……』

ユーノとの会話は念話しか使えねぇこと多いから意外と不便だな。トゥードは楽だろうが。

「どうしたのよ？ユーノと顔見合わせて。」

「ユーノと会話してたんだよ。なのはもアリサもすずかも、可愛くて優しいから大好きだとか言ってたぜ？」

『こ、吼太！？』

「ふぇ、ふぇぇぇぇぇ！！？／／／／／」

「な、何言って……／／／／」

「可愛いなんてそんな……／／／／／」

「事実だろ？オレもそう思ってるし。」

これはユーノにも向けて言ってる。前に寝言で言ってたしな。

「「「あぅぅ……／／／／／」」」

何故か真っ赤になって俯く三人。風邪でもひいたか？

「……吼太」

「どーしました？恭也さ…ッッッ！？」

「話しが、あるんだが？（黒笑）」

その後、オレは高町流Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをされた……

## 第十七話　ズルは意外とばれないもんです（後書き）

なっぺ「お馴染み（になってきたか？）の座談会の時間だぜ！今回はゲストに聖小三大美少女こと、仲良し三人娘を呼びました！」

「「「よろしくお願いしまーす♪」」」

リーム「……今回出番の無かったリームです。……僕はどうなったの！？」

なっぺ「あとで判明するから。今回、吼太はＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ中のため休みです。」

なのは「お兄ちゃん……」

すずか「雨季さん、ライさん、ロードさん。感想ありがとうございます。」

アリサ「そういやＰＶ２００００突破したんだっけ？この駄文。」

なっぺ「ユニークは２０００突破してたはず。それもこれも皆様の応援のおかげです！」

リーム「出番～！」

なっぺ「だから後でちゃんと出すっつうの！ちなみに今回のプレゼント予告は意外と重要だったりします。」

なのは「次回は私が大活躍！」

なっぺ「魔砲が飛び交うんですね分かります」

なのは「……ちょっと、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか……」

なっぺ「へ？ちょっ！やめ……」

なのは「ディバイィィィーン、バスタァァァァーーー！！！！」

なっぺ「ヒギャアァァァァァァァァァァァ」

なのは＆アリサ＆すずか＆リーム

「「「「それでは次回もお楽しみに！」」」」

なっぺ「お楽しみ……に……（ガクッ）」

## 第十八話　さぁ、ショータイムと洒落込もうか！（前書き）

今回はいつもより多いです。

そして、戦闘描写は難しい…

# 第十八話　さぁ、ショータイムと洒落込もうか！

Ｓｉｄｅ　なのは

コータ君がお兄ちゃんに連れていかれちゃったあと、なんだか恥ずかしいような気持ちを残したまま、また私たちは話してたの。当たり障りのない話ばっかりしてたけど、みんなどこか上の空だった。だって、コータ君が可愛いって……

そんな感じで、翠屋ＦＣのみんなが解散する時間になって、ちょうどコータ君も帰ってきたから、解散することにしたの。コータ君すっごいボロボロだったけど、どんなお話したんだろ？

そんなときに、ゴールキーパーの子のバックに、見慣れた青い宝石が見えた気がしたの。

ただ、見えたのは一瞬だったし、あれを、ジュエルシードを持ってるわけないって思って、結局、何も言えなかった。

彼は、そのまま帰っていった。マネージャーの娘と一緒に。

Ｓｉｄｅ　吼太

死ぬかと思った……

なんだよあの恭也さんの強さ…ディレイ使って負けるとは思わなかった…

そんな感じで、あちこち痛む身体を動かして、必死にある場所に向かう。

そう、あの事件の中心地ともいえるあの二人に接触するためだ。心優しいなのはのことだ。恐らく事前の回収はしてないだろう。

だが、一歩遅かったらしく、ジュエルシードが発動してしまった！光が溢れ、巨大な木が生えてくる。

「チィィィ！四ツ星神器、唯我独尊（マッシュ）！！」

唯我独尊で迫ってくる根っこを砕くが、勢いが違いすぎたのか、唯我独尊はたちまち根っこに砕かれる。

「コォールッ！ガイオウモン！！」

デビライザーを構え、仲間を解き放つ。現れたのは、漆黒の竜武士、ガイオウモン。

「ガイオウモン、頼む！出来るかぎりでいい！この根っこを止めてくれ！」

ガイオウモンにこの地点の防衛を頼む。ガイオウモンはそれに答えるように手に持った不思議な形の剣、菊燐を振るう。その後には怪しげな光の軌跡が残った。

菊燐の軌跡に触れたものを斬り裂くガイオウモンの必殺技、【燐火

斬】だ。

まるで結界のように放たれた燐火斬は、迫り来る根っこをいともたやすく斬り裂いた。

「頼むぜ！」

花鳥風月を使い、さらに別地点に行って、ラージャン、ハッサムとジュカイン、セキリュウ、ブルーアイズ・ホワイトドラゴンを召喚。それぞれ、別の地点の防衛に当たってもらう。ただ、量が量だけに、長くは持たないだろう。

最悪の場合は、ゴセイグレートを呼び出して何とかするしかない。町の被害は洒落にならないレベルになるけど、背に腹は代えられない。

そう思ってたときに、少し離れた場所で、車椅子の少女が根っこから逃げてるのが見えた。

「ってかはやて!?何でこんなところに!?」

急いで向かう。だが、根っこの進む速度の方が少し早い！

「こうなったら…トゥード！セットアップだ！」

『オーライ！Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！Ｓｅｔ　ｕｐ！』

Ｓｉｄｅ　はやて

今、私は逃げてる。何からやと思う？大きな大きな木の根っこからや。笑えるやろ？

最近外に出てなくて、買い物ついでに外出して、帰ろ思ったときに根っこがこっちに来るのが見えた。

逃げな思ったけど、私は車椅子。荷物を捨てて軽くはしたけど、根っこはどんどん迫ってくる。

「（ダメや……全然逃げられへん……）」

そう思うて、思わず眼をつむる。その時や。

「いけぇ！トライデントリボルバー！！！」

ズガガガァァァァァァァァァァァ

とんでもなく大きな音が鳴った思うたら、

あの根っこが近づいてくる地響きが一気に消え去ったんや。

それで、恐る恐る眼を開くと、そこには……

「無事か!?はやて!」

左手に巨大な銃を付けて、機械の翼(はね)を広げた、黒衣の天使がいたんや。

Ｓｉｄｅ　吼太

時は少し戻る。

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ!Ｓｅｔ　ｕｐ!』

ペンダントから光が溢れ、オレの身体を黒いスーツが覆い、両手首と両足首には翡翠の宝石があしらわれた白銀の輪が付く。オレの姿はシンプルな……といえば聞こえはいいが、ぶっちゃけダサい格好に変わる。

……魔力さえあれば……！

魔溜石は至って順調にその機能を果たしているみたいで、見た目はアレだが、とりあえずはバリアジャケットの役割を果たしてくれている。

「続けていくぞ!ダウンロード!ライズグレイモン!!」

『了解。ライズグレイモン。左腕部及び胸部、背部アーマーを特殊召喚。具現化します。』

トゥードが宣言すると、オレの左腕に巨大なリボルバー式の銃、胴体に鎧と翼が付く。重量が増したのと、飛行能力が上がったのが相俟って、根っこがはやてに襲い掛かる前になんとか間に割り込む。

「いけぇ！トライデントリボルバー！！！」

銃を構え、銃の耐久性ギリギリである三点連射をする必殺技【トライデントリボルバー】を放つ。

解き放たれた破壊の意志を宿した三発の弾丸は、その威力を存分に奮い、迫り来る根っこをねこそぎ薙ぎ払って突き進む。

発射の反動が治まったころ、目の前にはただ、強大な力の爪痕のみが残っていた。

「無事か！？はやて！」

「……コータ君……なんか……？」

はやてが確認をしてくる。最後に会ったのは数年前だもんな。

「あぁ。久しぶり。はやて。」

「コータ君……私、私……」

あぁ、涙が溢れかかってるし。

「恐かったな…頑張ったな…。もう、大丈夫だ。」

そういって、はやてを抱きしめる。本当に恐かったんだろう。はやての身体は震えてた。

「コータ君……コー……タッ……あ、…ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

緊張が切れたのだろう。オレの肩口で、堤防が決壊したように泣き出すはやて。

不意に、空を桜色の閃光が走った。なのはがやったみたいだ。ジュエルシードもこれで封印されたな。つまりは……

「これにて、一件落着と。」

## 第十八話　さぁ、ショータイムと洒落込もうか！（後書き）

なっぺ「毎度お馴染み（に相応しくなってきた？）の座談会だよー！」

リーム「……」

吼太「どうした？リーム。」

リーム「僕がまた出てない……僕だってヒロインのはずなのにーっ！」

なっぺ「次回は出てくるんじゃん？多分。」

吼太「曖昧だなオイ。」

リーム「ライさん、雨季さん。感想ありがとうございます♪」

なっぺ「ライさんも雨季さんもすげえ……このやたら短いくせに更新速度はやたら速ぇ小説に、感想書き初めてから毎回書いてくれてる……」

吼太「ありがたいことだな。」

ベス「私も影から覗かせてもらってますよ？フフフ……」

吼太「黙れスライムベス。」

リーム「うー！次回は絶対、ぜーったい！出てやるんだから！」

なっぺ「あ、あと雨季さん。吼太を性転換させたいんですか?例のブツさえ送ってくれれば……」

吼太「（ゾクゾクッ）な、なんか嫌な予感が…」

なっぺ「それでは次回もお楽しみに！」

## 第十八話おまけ　高町なのはの戸惑い、吉谷リームの妄想（前書き）

今回は第十八話をなのは視点で描いたものと、リーム分の補給です。

## 第十八話おまけ　高町なのはの戸惑い、吉谷リームの妄想

時はジュエルシード発動時まで戻る。

Ｓｉｄｅ　なのは

ジュエルシードが発動したあと、私は高いビルの上に来たの。ここだったら、きっとジュエルシードもすぐ見つかるはずだし、その後も動きやすいと思ったから。

ビルの上から下を見ると、あっちこっちで炎が上がったり、木の根っこが斬り裂かれてたり、大きな白い竜が光線を吐いたりしていて……

「ってえぇ!?何なのあの竜!?あれもジュエルシードの効果なの!?」

「落ち着いてなのは!あれはジュエルシードとは関係無い!多分吼太が何かしたんだよ!」

「ふぇ?コータ君が?」

よく見てみると、あの大きな竜は木の根っこばかりを攻撃していて、ジュエルシードの被害がこれ以上広がらないようにしていたの。それはつまり、敵じゃないってことの証明なんだと思う。

「そっか…コータ君はもう動いてるんだ……」

「多分ね……こっちも始めよう！」

それから、私は広域エリアサーチをして、ジュエルシードを探したの。そして…

「見つけた……！」

「本当！？」

ユーノ君が確認してくる。ちゃんと確認したよ。ジュエルシードは、あの場所にある！

「すぐ封印するから！」

「ここからじゃ無理だよ！もっと近くに行かなきゃ！」

「出来るよ！大丈夫！」

『はい。マスターなら出来ます。』

そうレイジングハートも答えてくれた。あとはやるだけ……！

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル？！封い「ズガガガアアアアアアアアアアアア！！！！！」って今度は何！？」

そう思って下を見ると……

「ゆ、ユーノ君……これも…」

「うん……多分……吼太絡みだよね…」

……多分、一撃で木の根っこの1／5ぐらいが消し飛んでました……

っていうかコータ君強すぎだよ……もしかして封印が出来ないだけで、ジュエルシードも一人で集められるんじゃ…？

「なのは！封印！」

「あっ！そうだった！」

その後、ちゃんとジュエルシードを封印して、コータ君と合流しました。肩口が濡れてたけどなんでだろ？あと、あの濡れた肩を見てからなんかイライラする……。コータ君は不思議な人だなって思ったの。

Ｓｉｄｅ　吼太

あれから、はやてを家に送ってから、なのはと合流した。ただ、合流してからなのはが何故か不機嫌だった。……いや、ホントに何故？

それで、家に帰ると……

「コータぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

リームが抱き着いてきた。いや、飛び込んできた。

「おわっ！なんだなんだ！？」

「だって、だってコータが朝起きたらいなくて、お母さんに聞いたらなのはちゃん達と朝早くサッカーの応援に出掛けたって…サッカーってなんなの！？さっきの木はなんなの！？なのはって誰なのぉおぉお！？」

「だぁぁぁ！少し落ち着け！」

それから数時間はろくに話せない状況が続いた。

落ち着いたら落ち着いたらで、こんどは身もだえしだすし……

「抱き着いちゃった～抱き着いちゃった～／／／／」

「抱き着いたぐらいでなんだよ……」

「だって～、えへへ～／／／／」

そこまで言って、またくねくねし始める。……付き合ってられん…

結局、今日は部屋に帰ってからそのまま寝てしまった。

Ｓｉｄｅ　三人称

「えへへ～……コ～タ～……あっ、そんなとこ……でも、コータが見たいなら……／／／／／」

……３０分経過

「コータぁ……僕幸せだよぉ……だってぇ……うへへぇ～……あっ、また……うん、いいよ……コータがしたいなら……／／／／／」

……１時間経過

「えへへ……これがコータと僕の……幸せ……あっ、そんな、もう一人…？……そりゃあ、嫌じゃないけど……／／／／／」

……あのー、リームさーん？

「えへへ……嬉しいなぁ……ほら、コータも見てみなよ……可愛いよ…？……／／／／／」

……リームさーん？出番ですよー？

「……コータ…僕、幸せだったよ…今から僕も……向こうでも、一緒に……」

……ちょっ！終わらないで！自己完結しないで！！

「……はっ!?僕は何を!?アレ?コータは!?そういえば契約もなんだかんだで結局やってないし!!コータ!コータぁ!!」

その肝心の吼太は既に寝たあとであり、結局、今回も彼女は契約を果たせなかったとさ。

## 第十八話おまけ　高町なのはの戸惑い、吉谷リームの妄想（後書き）

なっぺ「座談会です。眠いー！」

吼太「随分投げやりだな。」

リーム「出れたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

吼太「よかったなリーム」

なっぺ「ライさん、雨季さん。感想ありがとうございました！また、雨季さんからついに例のブツが……」

吼太「……（ゾクゾクッ）」

なっぺ「それでは次回もお楽しみに！」

## 第十九話　O☆HA☆NA☆SHI？やなk……強制かよ…（前書き）

さて、サブタイトルがだんだん適当になってきました。

今回はいつもより5割増しぐらいに駄文になってます。

……文才欲しい

# 第十九話　O☆HA☆NA☆SHI？やなk……強制かよ…

Ｓｉｄｅ　吼太

なのはが一つ成長した。
この前の事件で、なぁなぁでやっていたジュエルシード集めに、本気で取り組みたいと考えるようになったんだそうだ。
オレとしても、今回のことはいろいろ教訓になった。
たとえ、チートな能力を持っていたところで、使う人間がダメなら、所詮は宝の持ち腐れだ。
いつイレギュラーが起こるのか分からない。出来ることはしていこうって思った。
ただ、今日はすずかの家に遊びに来ているので、体面的にはジュエルシード集めは休みにした。
そう、つまり今日は淋しげな目をした少女こと、フェイト・テスタロッサとの初遭遇の日だ。
だからオレも気を引き締める。彼女を救うことは無印での目標だしな。
「……タ……」

にしても、アリシアはどうしようか？プレシアさんは螺旋力で細胞活性化させればなんとかなるだろうけど、アリシアは死んでから長時間たってるから死者蘇生のカードとかじゃ復活させらんねぇし、Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ単体じゃ死者を蘇生させることは出来ねぇしなぁ…

「コ……君」

螺旋力ならいけなくもないけど、その場合はオレの螺旋力を定期的に補給しなきゃいけなくなるから却下。【砂時計に癒(テラピ)を加える能力】はある意味賭けだから正直使いたくはない。

…シャイニング・トラペゾヘドロンが使えればなぁ……

結局、毎回思うことは同じだったりする。

つまりは、「魔力があれば」。

……こんどベスに螺旋ミサイル大量に撃ち込んどこ。

「コータ君ッ！！！」

「おわっ！？……なんだなのはか」

右隣りに座っていたなのはが話し掛けてきた。つーか怒ってる？

「なんだなのはか、じゃないの！私達が話し掛けても全然返事してくれないし…」

「スマンスマン。」

そう言いながらなのはの頭を撫でる。子供の頭って撫でてると気持ちいいよね。

「あぅぅ……／／／／／」

……何故だろう？左隣りと対面と、胸ポケット辺りから殺気を感じるんだが……

『コータ……』

『リーム？どうした？』

リームは今回、小さくなってついて来ている。なのは達との顔合わせと、今回のことを手伝ってもらうためだ。今は胸ポケットに入っていたはずだけど……

『あとでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ、しよ？』

……何だ！？何が引き金（トリガー）になった！？

「皆さーん、お茶が入りましたよー……って、わっ、わっ！？」

ファリンさんがお茶を持ってきたようだけど、ちょうど足元に猫から逃げるユーノがいて、ふらふらになっている。

ナイスだユーノ！これで少なくとも三人から逃げ出す口実が出来た！

「わー！ファリンさんが危ないー！助けないとー！」

「「「（棒読みだぁー！？）」」」

「とぉっ！」

なのはの頭から手を離してファリンさんを助けにいく。手を離すときになのはが「あっ……」と声をあげたが、相手にしているヒマはない。

「はうあ～……」

見るとファリンさんは既に限界らしく、倒れかかっていた。

「ザ・ワールド！」

その瞬間、時は凍り付く。持続出来るのは１０秒が限界だが、裏技を使えば！

「【一秒を十秒に変える能力】ぁ！」

これでザ・ワールドの持続時間が、１００秒になる。あとは零れそうになっているお茶と菓子を整え、ファリンさんを受け止めるだけ。

「そして時は動き出す……」

バカ正直に１００秒待つ必要も無いので、準備が出来てすぐにザ・

ワールドを解く。

傍目からみたら、オレが突然席から消えたかと思ったら、ファリンさんを受け止めているように見えているだろう。

「大丈夫ですか？」

「え？……あぁっ！すいませんすいませんありがとうございます！私ったらお客様になんてことを……／／／／／」

「気にしないでください。あと、このお茶セットは頂きますね。」

「あ、はい……わかりました。それでは失礼します。」

……アレ？背後ノ殺気ガ増エテルヨ？

「「「コータ（君）……」」」

「ナ、ナンデショウカ？」

「「「O☆HA☆NA☆SHI、しよう？」」」

……いや、なんでだよ……

## 第十九話　O☆HA☆NA☆SHI？やなk……強制かよ…（後書き）

なっぺ「毎度お馴染み（だといいなぁ…）、座談会です！」

吼太「前々話のライズグレイモン形態について、わかりづらいシーンがあったことを深くお詫び申し上げます。」

なっぺ「前回のリームの妄想は結構好評だったみたいだな。」

吼太「……あれ？リームってアホの子だったっけ？」

リーム「だって～、コータのことを考えると、その～……えへへ～／／／／／／」

なっぺ「ライさん、雨季さん。感想ありがとうございます！」

ベス「さて、とうとう彼女が登場しますね。」

吼太「ここからオレの本格的な原作クラッシュが始まるぜ！」

リーム「ずっとついて行くよ！コータ！」

なっぺ「ではではこの辺で。次回もお楽しみに！」

## 第二十話　猫天国？いいえ猫地獄です。（前書き）

今回は若干ハジケ気味。

残念ながら今回はフ○イトは出ません。

……すいません

# 第二十話　猫天国？いいえ猫地獄です。

Ｓｉｄｅ　吼太

まぁ、なんだかんだあって、なんとか生きてたオレは、なのは達と一緒に外で猫と戯れながら談笑していた。

いや、していた《はずだった》。

「……なぁ、すずか。これはどういうことなんだ？」

「だ、大丈夫！？コータ君！」

Ｓｉｄｅ　なのは

あ、ありのまま見たことを話すの！！

【歩いていたコータ君が木の根っこに躓いて転んだとと思ったら、そこに猫の山が出来ていた】

な、何を言ってるかわからないと思うけど、私も何が起こったのか分からなかった…

頭がどうにかなりそう……

【猫に好かれやすい】とか、【どこからそんなにたくさんの猫が？】

とかそんな次元の話じゃないの！

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったの……

っていうか暑くないのかな…？

Ｓｉｄｅ　アリサ

あ、ありのままさっき起こったことを……何？もう言ったの？

ならいいわ。少し残念だけど。

それより私は、あの惨状を見て思ったことがあるの。

いや、あの異常なまでの好かれ具合が猫限定ならいいんだけどさ……

……もし、もし動物全般に好かれやすいのなら、あたしん家に来たとき、コータの奴死ぬんじゃないかしら？

だって、大型犬も結構いるし……

いや、いいのよ？猫限定ならそれはそれで。

ただ、コータが一人でいるときって、大概動物と戯れてるのよね……

……あたしが守ってあげなきゃ！

……ってあたし何を！？／／／／

Ｓｉｄｅ　吼太

いや、おかしいだろこの状況。

視覚はもはや意味を成してないし、感触は毛と芝生のものしかしない。

「す、すぐ助けるからね！」

すずかがオレの上の猫を退かしているらしい。だが分かってるか？他の猫が反対側からさらに乗って来てるのを。

「も～、みんな乗らないで～！」

あ、気づいてた。

……今、すずかが頑張って猫を退かしている姿を想像したら、予想以上の破壊力があった……可愛いなオイ…

キィィ……ン

！？

今のは……！

『なのは！吼太！』

『うん！』

『すぐにいく！ユーノが先行しろ。なのははそれを追っかけろ！』

『『分かった（の）！』』

そして、なのはが行った少し後、

「暑いわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

絶叫しながら猫の山から脱出した。

「なのは！無事か！？ジュエルシードは？」

「まだ見つかってない！」

すずかとアリサを説得して、急いでこっちに来たが、どうやら間に合ったようだ。オレが来てすぐに結界を張るユーノ。

そのとき、ある一角の木が揺れた。

ドシン……ッ　ドシン……ッ

「来る……！」

「ニャアぁ～♪」

「……ふぇ？」

「……え？」

「……（やっぱりか……）」

巨大な子猫がいた。……子猫？いや、声は比較的高めだし、手足の長さの比率とか……でも、子猫？

「あ、あああ、あれは……？」

「た、多分あの猫の【大きくなりたい】って願いが正しく叶ったんだと……」

「……そっちでいいのか？普通大人的な意味じゃないのか？」

「ニャア～……ニャ！」

あ、こっちに気づいた。

「な、なんか走ってくるよ！」

「なのは！ユーノ！避けろ！コイツの狙いは多分オｒ「ニャアァァァァァ！！！！」ギャアァァァァ！！！」

Ｓｉｄｅ　なのは

「ゆ、ユーノ君！どうしよう！あの子猫がコータ君にダイビングプレスを！」

「吼太！生きてる！？」

『何とか……早く封印してくれ……』

「わ、分かったの！リリカルマジカル……」

その時、視界の外から砲撃が飛んできて、子猫のお腹の辺りに当たったの。

「ってコーーータくーん！！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「……何かオレ悪いことしたか？」

## 第二十話　猫天国？いいえ猫地獄です。（後書き）

なっぺ「毎度お馴染み（でもういいよね。）の座談会！」

リーム「いえー！今回セリフ無かったリームでーす！」

吼太「リーム……どうした？」

なっぺ「ライさん。感想ありがとうございます！」

吼太「……いや、今回何？」

なっぺ「書きたかっただけさ。ではでは、次回もお楽しみに！」

## 幕間　説明って大事だよね

なっぺ「いぇーい！」

リーム「いぇーい♪」

吼太「お前らなんだよ…」

なっぺ「今回は幕間！後で説明するって言ってたり、説明してなかったやつを片っ端から説明していくぜ！」

ベス「本編も早く書くんですよ？」

なっぺ「ん、了解。まずはリームだ！」

リーム「いぇーいいぇーい！」

名前：リーム

名前の由来：夢→ドリーム→リーム

見た目：ＭＡＲの小雪／スノウ。ただし、髪の色は白銀

使用術式：グズィ式。現在ミッド式を練習中。

３サイズ：上から（これから先は紅く染まっていて見れない）

体重：（紅く染まって以下略）

年齢：（紅く以下略）

ロード：無し。ロード候補は吉谷吼太

魔力量：現在、複数段階の封印が付いており、現段階ではA。封印完全解除後の魔力量は未だ不明。
氷結系魔法を中心に使用する。

魔力光の色：白銀色

性格：吼太至上主義。他人には比較的無関心で、他の人は自分と吼太の仲を祝福してくれるか、それ以外かくらいでしかないように考えている節がある。が、燈と透は特別で、本当の親のように慕っている。

なっぺ「こんなもんですかね……（虫の息）」

リーム「きゃあ～、恥ずかし～！」

吼太「なっぺ、出血が酷いぞ、大丈夫か？」

なっぺ「書く途中で何度も魔法喰らったからな……次はフォーティトゥードです！」

トゥード『私ですね。』

名前：フォーティトゥード

名前の由来：【不屈】の英訳

人格：女性

性格：とにかく生真面目。相手を常に様づけする。例外はマスターである吼太ぐらい（マスターと呼ぶため）。知識欲がすごく、知らないことを聞くと、何らかの方法で知ろうとする。

使用可能術式：ミッド式、ベルカ式、グズィ式、その他もろもろ。

起動前：クローバーのような形のペンダント

基本形態：四肢に付く輪状の装飾具

なっぺ「まずはこんくらいかな。」

トゥード『システムの説明が終わっておりませんが？』

なっぺ「それは別枠。ハイ、スタート！」

フォーティトゥードの特殊システムである部分召喚は、吼太の身体と対象の身体の情報を一部組み替えた状態で入れ換えることで成立している。

かなりの暴論にはなるが、身体の一部を取っ替えていると考えてもらうとわかりやすいと思われる。

ただ、その際にはある程度まで力が抑えられており、元の大きさから離れれば離れるほど、その変化させた存在の部分が少なければ少ないほど、威力は下がる。

威力を上げる――再現する――には、より多くの部分を変化させたり、大きさを元のものに近くすればよい。

だが、これはかなり危険であり、長時間の使用は拒否反応を示してしまう上、身体を多くを変化させることはそれだけ身体に異物の侵入を許すことになる。１００％の変化はすなわち、吉谷吼太という存在の消滅にほかならない。

そのため、このシステムには複数のリミッターが掛かっており、リミッターを解除しない場合は多くても４０％までしか変化が出来ない。

なっぺ「こんな感じ。ちなみに、初変化のライズグレイモンは２５％ぐらいを想像してる。銃も小さくしてるから、本来は核弾頭三発分の威力をもつトライデントリボルバーが、あの程度まで下がっていたわけです。」

ベス「それでも、無印のスターライトブレイカー並の威力があるんですけどね。」

なっぺ「次は猫の好かれ具合について！」

ベス「これは私から説明しましょう。まず、今の吼太さんの身体にはあらゆる才能、才が入っています。

ここで一つ、例え話をしましょう。例えば、西日本で最も才能あるとされた短距離走選手と、東日本で最も才能あるとされた短距離走選手。彼等が実は鏡に写したように同じ訓練、食生活、生活リズムをしてきたとして、果たして全く同じ最高速を誇るでしょうか？」

吼太「分かるかんなもん。」

ベス「まぁ、そうでしょうね。答えは【まず有り得ない】です。秒単位ならばまだ考えられますが、数百、数千、数万分の一まで一緒なのはまず有り得ません。このように、同じ【走りの才】を持っていたとしても、優劣は決まる。つまりは、【走りの才】に差があったということです。テレビなんかで、「君には才能はある。だが、彼ほどのものではなかった」みたいなセリフを聞いたことはありませんか？つまりはそういうことです。」

吼太「それとこれに何の関連性があるんだよ？」

ベス「吼太さんは転生の際、あらゆる能力をＭＡＸにしたでしょう？魔力量という例外はありますが。つまり、【動物に好かれる才】がＭＡＸ、ようは最強になってるってことです。」

吼太「それで猫の山になったわけか……」

ベス「他の才能もＭＡＸなんで、なんでも好きな未来に進めますよ？」

吼太「出来れば原作ブレイクしたあとは、静かに暮らしたい……」

ベス「いつになることやら。」

なっぺ「これぐらいかな？」

吼太「現状ではな。」

なっぺ「じゃ、後書きへ！」

## 幕間　説明って大事だよね（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

吼太「雨季さん、ライさん。感想ありがとうございます！」

なっぺ「雨季さんとこからドラグスレイブとシールドスライサー三連が……ってギャアアアアア！！！」

吼太「なっぺがやられたか……【理想を現実に変える能力】！威風堂々《フード》！！

……ふぅ、今のはまだ威風堂々で防げたけど、これ以上は危ないな……」

ベス「最初のプレゼントは性転換薬、二回目は攻撃。吼太さんは素晴らしい運をお持ちのようで。」

吼太「素敵な皮肉をありがとう。」

なっぺ「ではこの辺で！次回もお楽しみに！」

吼太「生きてた！？」

## 第二十一話　躾の時間だ……（前書き）

今回も長くなってしまいました。

……今度から２０００文字目安に書こうかな…

# 第二十一話　躾の時間だ……

Ｓｉｄｅ　はやて

みんな！お久しぶりやね！みんなのアイドル、八神はやてや！

え？違う？も～、そないなこと言わんといて～

とりあえず、少し前に起こったことを話すとな？

【黒い死神みたいな少女がオレンジ色の犬を引き連れて空を飛んで行った。】

……なんか最近、変な事件によく巻き込まれかけてるなあ…

いつか私も事件の中心になったりするんかな？

……ありえへんな。さぁて、ご飯ご飯！今夜は奮発してしゃぶしゃぶでも食べよかな。

Ｓｉｄｅ　なのは

「コータ君！？大丈夫！？一体誰がこんな酷いことを……」

「なのは！来るよ！」

「！！」

視界の隅から黒い人影が襲い掛かってくる！多分、あれだ！

『フライヤーフィン』

レイジングハートが飛行魔法を発動してくれて、そのまま空中に逃げる。そのまま反撃の準備を整えるけど、黒い人がいたはずの場所には既に誰もいない！？

「そっちじゃない！後ろだ！」

『プロテクション』

危なかったけど、レイジングハートが間一髪防いでくれた。攻撃してきた人は不意に発生したプロテクションで、姿勢を少し崩したのか、今度はしっかりその姿が見れた。そこには……

「女の……子？」

透き通るように綺麗な金色の髪を風にたなびかせた少女がそこにいた。その赤い目には、淋しげな光が宿っているようにも見える。

「あなたは……？」

「……」

『サイスフォーム、Ｓｅｔ　ｕｐ』

彼女は答えない。デバイスを鎌みたいに変形させて、襲い掛かってくる。

「なんで？なんでそんなことするの！？」

「…言っても多分、意味が無い」

そう言って、さらにデバイスを振る速度を上げる。このままじゃ…

…そんなときだった。

「いい加減に……退けぇぇぇぇ！！！！！」

あの子猫がこっちに飛んできたの。……って飛んできた！？

「なのは！避けて！」

『フラッシュムーブ』

間一髪避けられた。あの女の子も避けられたみたい。でもこの子って確か気絶してたよね？…あれ？何か忘れて……

「暑いんじゃ！重いんじゃ！苦しいんじゃァァァァ！！！！」

あ！

「コータ君大丈夫！？」

「……窒息するかと思った」

Ｓｉｄｅ　???

あの白い魔導師以外にも魔導師が?……いや、リンカーコアの反応が殆ど無い。それじゃあ、彼はただの人間なのかな?

「…アルフ、あの人、お願いできる?」

「任せて。あんなやつさっさと倒してやるよ!」

うん。やっぱりアルフはいい子だ。

私も、早くジュエルシードを回収しないと……

Ｓｉｄｅ　吼太

アルフがこっちに向かってくる。多分、オレを嘗めてるな、ありゃ。

……躾の悪い犬にはしっかり教えてやらないとな。

「オイそこの犬。」

「アタシは狼だ!」

「んなこたぁどっちでもいい。……教えてやるよ。オレが、誰かってことをなぁ!!」

そう言って、オーバースキル：加速を発動させる。

周りの風景が急に遅くなったように感じる。が、これは自身の感覚すら加速しているためだ。実質的に速くなっているのは他でも無いオレ自身。その能力を使い、一気にアルフに肉薄する。

アルフが何か言っているが、軽く無視してアルフの腹を殴りつけた。なんの強化もしていない、生身の拳でだ。だが、四足歩行の動物にとって、腹はかなりの急所。かたやオレは、生身の筋力もチート能力の一つとして得ていたヒュペリオン体質のため、異常なほどに高い。ぶっちゃけ、イャンクックぐらいなら生身だけで突進を抑えられるぐらいは高い。

そのオレの、正真正銘全力の一撃だ。アルフはすぐに戦闘不能になった。

「カッ……は……」

「リーム、治療してやってくれ。」

「……僕がやるの？」

「オレ、回復系は得意じゃないし。」

自分ならともかく、他人のは方法が殆ど無いんだよなぁ。

とくに、即効性に限れば、全く無いといっても過言じゃない。

「…コータが言うなら。」

そうして、リームが回復させたその時、

ズガガガァ！！！！

雷撃が降り注ぎ、なのはに命中する。クソッ！時間をかけすぎたか！？

「コール！カビゴン！」

カビゴンを呼び出して、落ちてくるなのはを受け止めさせる。どうやら気を失っているだけらしい。

さらに、光が降り注ぐが、これは恐らくジュエルシードを封印したってことだろ。

「アルフ……帰るよ。」

「わ、わかったよ……」

アルフがフェイトの元に戻って行く。だが、一旦途中で止まり、

「……アンタとの決着はまた今度だ！」

……どうやら、アルフの中では決着が付いていないらしい。

いや、決着ついたろ。どうみても。

そして彼女達は帰っていった。

Ｓｉｄｅ　なのは

「ん……」

なんか、暖かい……

スッゴク安心出来る……

「お、目ぇ覚めたか」

近くから声がした。目を空けてみると、そこには、コータ君の横顔があった。

どうやら、私はコータ君におんぶされてるみたい。

「そっか……私、負けちゃったんだ……」

正直、歯がたたなかった。魔法少女としてうまくやれてた自信はあったけど、自惚れてた部分も、あったかもしれない……

「コータ君……」

「なんだ？」

「私……強くなりたい……」

「……」

「今よりも、もっと、もっと……！」

「……そうだな。」

「……あの子、淋しそうな顔してた。きっと、何かあるんだよ。」

「犬も何か思い詰めてる感じだったな。」

「私……あの子とお話したい…」

「……出来るさ。だから、今は少し休め。」

「……分かったの……」

また、目を閉じる。全身に、コータ君の暖かさを感じながら……

## 第二十一話　躾の時間だ……（後書き）

なっぺ「あっとがき～♪」

リーム「いぇーい！」

なっぺ「あっとがき～♪」

フェイト「い、いぇーい？」

なっぺ「みん～なだーいすきあっとがきタイム！！」

リーム「いぇーい！」

吼太「……なんだよこれ」

なっぺ「即興で作ったあっとがきタイムの歌」

吼太「……アホ」

なっぺ「今回のゲストは、魔法少女リリカルなのはのもう一人の主人公、フェイト・テスタロッサちゃんです！」

フェイト「ど、どうも。フェイト・テスタロッサです。」

吼太「さて、今回の戦闘で、フェイトの戦いかたが微妙に原作と違ってたな。」

なっぺ「オレがあんまし記憶に残ってなかったのもあるけど、やっぱフェイトは近接かなぁ、って思って。」

フェイト「えっと…ライさん、雨季さん。感想ありがとうございます。」

吼太「この二人はもはや常連だな。」

なっぺ「ありがたいことだよ、ほんと。
ちなみに、今回出て来たヒュペリオン体質とは、【金剛番長】という漫画に出て来た体質で、見た目細くても、通常の何倍もの筋力をほこるようなものです。まぁ突然変異の一種みたいなもんですよ。」

ベス「これにより吼太さんは圧倒的な筋力を保持しつつ、女性のような線の細さを維持しているのです。」

吼太「……維持したくねぇ」

フェイト「（綺麗な身体だなぁ…）」

なっぺ「ではでは、次回もお楽しみに！」

## 第二十二話　１０歳までならどちらにでも入れます（前書き）

温泉は公共の場所です。立ち振る舞いには注意しましょう。

# 第二十二話　１０歳までならどちらにでも入れます

Ｓｉｄｅ　吼太

あれから数日経ち、今オレ達は温泉街に来ている。士郎さんが用意した家族旅行なのだが、なのは達のたっての願いもあり、オレ、リーム、アリサ、すずか、忍さん、ノエルさん、ファリンさんが付いて行くことになったんだ。

ちなみにリームのことはフェイトと戦った後日、なのは達に紹介した。なのはとユーノにはユニゾンデバイスということまで話したが、それ以外には普通に養子ということまでしか言っていない。

……紹介したときに、リームとなのは、アリサ、すずかが無言で笑いあっていたのが何故か怖かった……

なぜあの四人は笑顔を恐怖の象徴に出来るんだ？

とにかく、今日は日頃の疲れを取るぞー！

んで、荷物を旅館に置き、いざ温泉！って運びになったんだけど……

「……オレに、女湯に、入れと？」

「うん！」

何を笑顔で言ってんですか？この魔砲少女は？

「いいよ、別に。ユーノがいるじゃん。それで我慢しろ。」

「「「「えぇーーー！？」」」」

『吼太！？僕を犠牲にしないで！！？』

なのは、アリサ、すずか、リーム、ユーノが驚愕の声をあげる。まぁユーノのは種類が違うが。

つーか三人娘＋α。何その「有り得ない！」って言わんばかりの顔は。お前ら仲悪いんじゃなかったのか？四人ともまったく同じ行動とってんぞ。

「んなこと言われても、入らねぇよ？」

「でもでも！」

「こらなのは。あんまり吼太を困らすんじゃない。」

ナイス恭也さん！流石グリリバ声なだけはあるぜ！

「入るんなら家族温泉の方に入るときにしろ。」

前言撤回！あんた鬼や！

家族温泉というのは、一定時間だけ家族単位に貸し出されてる小さな温泉のことで、当然中は混浴である。今回は複数の枠を取ってるらしく、合計するとかなりの時間使用出来るらしい。

ちなみに、今は士郎さんと桃子さんが利用している。

つーか恭也さん。あんたは忍さんといちゃいちゃ事をいたしたいだけだろ。

にしても、恭也さんの基準がわからん……なんで容姿を褒めるのがダメで、温泉に一緒に入るのはＯＫなんだ……？

「……うん！わかったの！行こっ！ユーノ君！！」

「キュ、キュー！」

『吼太！助けてぇぇぇ！！！』

さよ～なら～……

とりあえず、服を脱いで男湯に入る。は～、生き返る～……

ふと恭也さんを見ると、なんか変態チックな笑みを浮かべている。注目集めてんぞ？グリリバ。

……まさか、忍さんとの事を考えてて判断能力が著しくダウンしてるのか！？それであんな、シスコンにあるまじき奇行を！？

「きょ、恭也さん……？」

「忍～……グフフ」

ダメだこの変態。早くなんとかしないと……

しばらく暖まってから、女性陣と合流して旅館の中を散歩していると、卓球台を見つけた。

アリサが何故かやたらやる気になっていて、士郎さん達もまだ家族温泉に入っているので、時間潰しついでにやることに。

軽めのトーナメントも開催し、それなりに楽しむことは出来た。

ちなみに結果は、順にオレ、ノエルさん、忍さん、恭也さん、すずか、美由希さん、アリサ、リーム、ファリンさん、なのはとなった。

どうでもいいことだが、忍さんは恭也さん相手に泣き落としで勝ちをもぎ取っていたりする。……それは卑怯じゃないっすか？忍さん。

それから、士郎さん達が来て、入れ代わりに恭也さんと忍さんが家族温泉に行くと、士郎さんと桃子さんのペア、ノエルさんとファリンさんのペア、小学生組＋リームの三チームに別れて行動することになった。

オレ達は旅館の中を引き続き散策していたんだけど、不意に目の前から歩いてきたスタイル抜群の外人っぽい女性が、

「ハーイ？おチビちゃん達。」

とか言いながら絡んできた。まぁ、言わずと知れたアルフ人間態だ。

「あんたかな？家の子をアレしてくれちゃったのは？」

アルフはなのはをターゲットに選んだらしく、なんだかよく分からない絡みを始める。

「あんまり賢そうにも強そうにも見えないし、ただのがきんちょに見えるんだけどな。」

なのははわけの分からない絡み方をされてオロオロしている。原作ではアリサが助け船を出していたけど、今はオレの方が適任だろうな。

「うちの連れに何か？」

オレが前に出て話し出すと、アルフが驚愕の表情を浮かべた。オレに気づいていなかったようだ。

それもそのはず、散策中は何故か、四人がオレを囲うようにして行動してたからだ。

オレとしてみれば迷惑この上なかったんだけど、どうしても譲れなかったらしく、結局このままで歩き続けていた。

さっきまではオレを中心に、オレの前にこの中で一番背の高いリーム。右になのはで、左にアリサ。後ろにすずかという配置で動いていたため、必然的にオレとすずかはリームの影に隠れる。そのため、見つけられなかったのだろう。

「ご、ゴメンね？知ってる子に似てたから。」

若干どもりながら話すアルフ。つーかアルフがだんだん小物になっ

てきてないか？

「可愛いフェレットだね！」

そう言って、なのはに顔を近づける。その時、なのはとユーノの顔が変化したのをオレは見逃さなかった。おおかた原作通りの念話をしてるんだろう。

「君もゴメンね！」

アルフがこっちにもくる。謝罪の言葉をかけてきたけど、多分、目的はそっちじゃない。

『深夜、森の中で待ってる。そこで決着をつけるよ。』

『あぁ、分かった。』

それは、念話を使った決闘の申し込みだった。しゃーない、今度は完膚無きまでに叩き潰すか。

余談だが、アルフが去ったあと、アリサやリームが「何よアレ！」とか、「いーだ！」とか言っていた。……お前らホントは仲いいだろ。

## 第二十二話　１０歳までならどちらにでも入れます（後書き）

なっぺ「座談会だーッ！」

リーム「だ～！」

吼太「アルフの人間態が初登場だな。」

なっぺ「そだね。そして、卓球でも奇跡の実力を発揮する吼太」

吼太「出来るもんは出来るんだよ。」

なっぺ「雨季さん、ライさん。感想ありがとうございます！」

吼太「はやての一人しゃぶしゃぶは酷じゃないか？」

なっぺ「残念ながら一人しゃぶしゃぶでした。まぁ、もう少したったら一人じゃなくなるから大丈夫だろ。」

吼太「ヴォルケンリッターだな。」

なっぺ「……果たして、ホントにそーかな？」

吼太「は？」

なっぺ「それでは次回もお楽しみに！」

吼太「おい！どーいうことだ！？」

なっぺ「さぁな～」

# 第二十三話　今、一つになる！（前書き）

はい、アルフと戦うつもりが、何故か別の話になってました。

# 第二十三話　今、一つになる！

Ｓｉｄｅ　なのは

温泉に来てから、早数時間。もう外も暗くなって、私達はすでに布団の中に入っているの。コータ君も一緒に寝てくれればうれしかったんだけど、「夜風に当たってくる」って言って、どこかに行っちゃったの。

それで、今はユーノ君とお話をしてたんだけど……

キィィ……ン

『なのは！ジュエルシードだ！近くにあるみたい！』

『うん！分かった！』

ジュエルシードの反応を見つけて、私はこっそり部屋を抜け出したの。

それで、ジュエルシードのある場所に来たら、そこには、

「……」

あの、淋しげな目をした女の子がいたの。

Ｓｉｄｅ　吼太

オレは森を歩いていた。アルフと改めて決着をつけるためだ。そんなとき、恭也さんが散歩しているのを見つけた。

「恭也さん。」

「吼太か。なのはは渡さんぞ。」

「またそれですか。」

オレは苦笑しながら答える。実はこれ、二人の間のお馴染みの挨拶だったりする。

「恭也さんは何か？」

「特に何も。夜風に当たりに来たというのが正しいかな。吼太は？」

「オレもそんなもんですよ。」

「そうか……」

それきり黙る恭也さん。辺りを静寂が包み込む。

「なぁ、吼太……お前は何者なんだ？」

「何者って……オレは吉谷吼太以外の何者でも「そういうことじゃない。」」……」

「……なのはが、夕方辺りにほぼ毎日出掛けてるのと何か関係があるのか？」

「……気づいてましたか…」

全く、高町家の人間には驚かされてばっかりだ。

「どうなんだ？」

「関係、無いといったら嘘になります。」

「……オレや美由希じゃ手伝えないのか？」

「……残念ながら、今は足手まといです。」

恭也さんは強い。それも半端なく。何せディレイを発動したオレを倒すほどだ。並の陸戦魔導師相手なら確実に勝てるだろう。

美由希さんにしろ、恭也さんがマンツーマンで教えてるんだ。その強さは折り紙付きだ。

だけど、それじゃ足りない。

なのはがこの先戦っていくのはいずれも次元世界レベルの敵ばかりだ。なのは個人の手伝いをするには正直辛いだろう。

さらにいえば、恭也さんや美由希さんは飛べない。

空戦が主体のなのはにとっては、むしろ重荷にしかならないだろう。

「……そうか」

「ただ……」

言葉を繋ぐ。今言いたいのはむしろ、違うことだ。

「……なのはが、打ち明ける気になったなら、その時は、どんな荒唐無稽な話だろうと、信じてあげてください。」

「……ハハハッ、分かったよ。」

「……何かおかしかったですか？」

「いや、君がなのはをよほど信頼しているってことが分かっただけさ。じゃあ俺は行くよ。これから先、なのはのことをよろしく頼んだ。」

「ハイ。絶対に守り抜きます。」

「あぁ。よろしくな。」

そして、恭也さんは去っていった。

「……ねぇコータ？」

「ん？なんだ？リーム。」

「コータはさ……なのはのこと好きなの？」

「あぁ。好きだよ。」

「……ッッ！」

「なのはだけじゃない。アリサやすずか、恭也さんや美由希さん、士郎さんや桃子さん、忍さんもノエルさんもファリンさんも、はやてやトゥードだって……みんな、みんな大好きだ。…もちろん、リームもな？」

「コータ……」

「だから、守るんだ。みんな、オレが大好きな、掛け替えのない大切なものだから。」

「……」

「だからさ、オレは力が欲しいんだ。今のままでも十分強いけど、まだ足りない。オレはもっと強くなりたい……だから、リーム…」

「何……？」

「オレと、契約してくれ。」

「……！」

これはずっと考えていたことだ。ユニゾンが出来ればオレの力は格段に上昇する。ダウンロードだって、今よりもっと強くして具現化出来る。それにリームの魔法だって使えるようになる。今より出来ることは格段に増えるはずだ。

「……ダメか？」

「……ヒック……ヒック……」

……え？泣いてる？

「ちょっ！リーム！？そんなに嫌だったのか！？だったら別に無理しなくても……」

「……違うの……嬉しくって……涙が……止まらなくって……」

「ってことは……？」

「だって、夢を与える者、リーム。この名前はコータがくれたんだよ？拒む理由なんか…無いよ…」

「……ありがとう。」

そして、オレ達は……

Ｓｉｄｅ　三人称

森の中の少し開けた場所。そこで彼女は待っていた。

彼女の目的は……たった一つ。

「待たせたな。」

「随分と遅かったじゃないか。待ちくたびれたよ。」

彼女は拳を構える。目の前の、敵に向けて。

「生憎こちとら急ぐ理由があるんでね、さっさと決めさせてもらうよ！」

「御主人様のため……ってか…？……目を、覚まさせてやるよ。オレが……いや、オレ達、が。」

「……行こう！コータ！」

「あぁ！オレ達の力、見せてやろうぜ！」

彼等は今、一つになる。

「「ユニゾン・イン！」」

その時、辺りに吹雪が吹きはじめた。吹雪が彼等の身体を覆い隠すように吹く。そう、まるで…進化の時を待つ、繭のように…

「そんな……まさか、あれは……」

髪は白銀に染まり、目は燃えるような赤から、より高い温度を示すかのような、静かな青へと変わる。

彼等は……

『これが僕たちの！』

「新しい力だ！！！」

転生者、吉谷吼太と、彼をロードとする融合騎、リーム。

そう、最強の存在が、新たな能力を手にした瞬間である。

## 第二十三話　今、一つになる！（後書き）

なっぺ「後書き座談会！今回は出番が無かったアリサちゃんとすずかちゃんに来てもらってます！ちなみに、吼太とリームは休みです！」

アリサ「つーかアタシ達をもっと出しなさいよ！」

なっぺ「無理いうな！普通の女の子なのに、そんなにぽんぽん出せるか！」

すずか「えっと……雨季さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございます。」

なっぺ「やった！やった！Ａｒｉｓｈｉａさんまで感想くれた！」

ベス「文章の指摘もしてくれてますね。」

なっぺ「ホント、ありがたい限りだよ。」

アリサ「あんたにはもったいないぐらいね。」

すずか「皆さん、これからも応援よろしくお願いします。」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　お薬パニック！（前書き）

今回は番外編！

雨季さんから貰ってたあれがついに発動します！コータの運命やいかに！？

あと、今回は過去最長の長さです。それから、少しえっちぃです。

「バッチコーイ！」

「んなもん気にしねぇぜ！」

な人だけお進みください。

# 番外編　お薬パニック！

きっかけは、あの宅急便。

まさか、あれのせいで、あんなことになるなんて……

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太の母親の燈は基本、好きなことを好きなようにやる人である。

家事も、掃除をしたいときは驚くぐらい綺麗に掃除されてたり、料理をしたいときは料理店を出せそうなぐらいおいしそうな料理が食卓に並んだりするのだが、したくないときは掃除は本当に全くしないし、食事もレトルトやコンビニのもので済ませてしまう。

要は気分屋なのである。

しかし、そんな彼女でも常に真剣に取り組むものがあった。

イタズラである。

ある日、そんな彼女の元に、一つの宅急便が送られてきた。

「誰にかしら……吼太にね。差出人は……雨季？聞いたこと無いけど、吼太のお友達ねきっと♪」

普通なら、この時点で邪魔にならないところに置いておいて、あと

は受取人に任せるだろうが、燈は違った。

「これ……中身は何かしら？……食べ物だったら冷蔵庫に入れないといけないわね。それなら中身を確認しなくちゃ。そうよ。中身を確認するためなんだから、開けてもなんの問題もないわよね。だって腐っちゃったら嫌だもんね。……それじゃあオープン♪」

誰に言い訳をしているのか、そんなことをぶつぶついいながら箱を開ける。彼女にとっては箱に書いてある注意書きは【変わった模様】程度のものでしかないのだ。

そうして、箱を開けると、中には一本のペットボトルが入っていた。

「……あら、意外と普通ね。吼太もとうとう〔自主規制〕とか、〔自主規制〕とか使う歳になったのね～なんて思ってたのに。」

何を言っているんだこの人は。

「リームちゃんも来たんだし、二人で〔自主規制〕するための道具とかでもよかったのに。……あら？このペットボトル、見ないメーカーね。試供品か何かかしら？」

そうして、ペットボトルのラベルを見る。

……

その瞬間、燈は覚醒した。

「来たわよ……面白いのが！」

Ｓｉｄｅ　吼太

やれやれ。ようやく授業が終わったか……

んじゃ、帰るとしますか。

「コータ君！今日これからコータ君の家に遊びに行ってもいい？」

「ん、別にいいぞ。」

「やったあ！アリサちゃん、すずかちゃん。遊びに行ってもいいって！」

「本当！？」

「やるじゃないなのは！」

「にゃはは～♪」

……ん？

「ちょっと待て。アリサとすずかも来るのか？」

「何言ってるの？当たり前じゃない。」

「何かおかしいとこあった？」

大アリだよ。

「まぁ、いいけどさ。」

「「「やったぁ～♪」」」

あ～、クラスのみんな（男子限定）の視線が痛いな～……ハァ

そんなこんなでバスに乗り、家の近くのバス停に降りる。その時だった。

「コータぁ～！！！」

痴女、もといリームが抱き着いてきた。

「会いたかったよ～、会いたかったよ～、会いたかったよ～！」

オレの頬にほお擦りするリーム。注目を集めてるんで止めて欲しいんだけど……

「リームさん……コータ君迷惑してるよ？早く離してあげなよ（黒笑）」

「あ、ゴメンゴメン。大丈夫だよ？私、一応義姉だからね。コータにも人付き合いがあるのは知ってるよ？たとえ嫌いな人でも笑顔で接しなきゃいけないこともあるもんね♪（黒笑）」

ピシッ…！

やーめーてー！そんな笑顔で睨みあわないでー！

「と、とりあえず家に行こう！」

何とか四人をオレの部屋まで持ってきたけど、睨みあいはまだ続いている。

トイレに行く振りをして、部屋からとりあえず出る。今はあの部屋にいたくない。

……何とかならないかなぁ……

「困っているみたいね吼太！」

「母さん！？一体どこから！？」

「そんな細かいことはどうでもいいの。それよりこれをみんなで飲みなさい。そうすれば万事解決よ！」

そう言って、五つのコップの乗ったおぼんを渡してくる。コップの中には何らかの液体が注がれていた。まぁ、十中八九ジュースだろう。そう判断して、答えを出す者（アンサートーカー）は使わなかった。

「分かった。渡してくるよ。……でも今のあいつらが飲むかな？」

「そこは簡単よ。「せっかくオレが持ってきたのに……」って言え

ばみんな飲むわ♪それじゃ、頑張ってね～♪」

「そんなに簡単にいくかな？……っていねぇし。」

まぁ、やってみよう。

「みんな～、ジュース持ってきたぞ～」

「「「「……後で飲む」」」」

やっぱか。ならせっかくだし……

「せっかくオレが持ってきたのに…」

言ってみたら、四人は瞬時におぼんからコップを取り、一気飲みしていた。効果覿面だなオイ。つーか、んながっつかなくても……

さて、オレも喉渇いたし、せっかくだから飲むか。

そう思って残ったやつを飲んでみる。うん、マズくはない。

そう思った時だった。

「ん……あれ？」

何か……眠い……

なのは達も寝てる……ダメだ、意識が……

Ｓｉｄｅ　なのは

「……あれ？寝ちゃったんだ…」

たしかコータ君からジュースを貰って、一気に飲んだらすごく眠くなって……

あれ？目の前に知らない女の子が倒れてる。どこかで見た気もしないんだけど……

「君、大丈夫？どこから来たの？」

よく見れば周りには知らない男の子が三人倒れてる。この子達もどこかで見たような……

『マスター、目が覚めましたか……マス、ター……？』

『どうしたの？レイジングハート？』

『マスター……ですよね？』

『そりゃあもちろん。レイジングハートこそどうしたの？何か変だ

よ？』

『マスター、鏡を見てみてください。恐らく、私の言いたいことが分かるはずです。』

『うん、分かった……』

バックから手鏡を取り出して見てみる。別に変わったところなんて……

「……ふぇ？」

鏡には、見たことない男の子がいて、その男の子が俺と同じ動きをしていて…

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！？」

俺の、若干低くなった悲鳴が響いた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「どーしたー？なのはー……？」

なのはの悲鳴のせいで眠りから覚める。せっかく巨大チキンハンバーグを食べようとしてたのに……

「……って誰貴方？」

知らない男がいた。……なんで？

「俺だよ俺！高町なのはだよ！」

「……なのはは俺なんて言わないわ……アレ？」

私……今女言葉を使って……

「なのは？どーしたの……って誰だよあんた。」

金髪を短くした少年が起き上がる。この分だとアリサかな？

「なのは、アリサ。……はどこにいったのですか？」

この分だと、黒髪の少年はすずかね。

「コータ～……何が……って誰？」

白銀のブロンドを伸ばした少年はリームかしら。

……とりあえず、

「一体、何が起こったのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？」

今度は私が絶叫した。

とりあえず、今の状況を整理してみましょう。

・私達は同じジュースを飲み、そして不意に眠くなった。

・起きたら私達は性別が逆転していた。

・なのは達が発情している↑これ重要

……って待って待って！最後がおかしい！！

「ねぇコータ……俺……我慢出来ない…ハァハァ……」

「なんか……コータがおいしそう……ハァハァ……」

「全部、僕達に任せてください…ハァハァ……」

「大丈夫だよ……きっと気持ちいいから……ハァハァ……」

「待ってみんな！何かおかしいわよ！正気に戻って！」

私は説得を試みるけど、みんな聞いてくれない……

「ほら、捕まえ…たっ……！」

なのはに捕まった！？いつの間に後ろに！？

さらに両脇にアリサとすずかがやってきて、首や鎖骨を舐めはじめ

て……

「や、やめ…て……っ……／／／／／」

「気持ちいいんだよね？分かるよ……」

そう言って、耳を軽く噛んでくるなのは。

「コータの脚……スッゴク綺麗……」

リームが太もも辺りを舐めながら、だんだん上に顔を動かしていく…

「だっ……だめっ！それ以上は…／／／／／」

「何が、ダメなんだ？」

アリサが私の胸に手を置きながら尋ねてくる。すずかはすずかで、私の左手の指を一本一本丁寧に舐めていた。

「ダメ……ダメなの……／／／／／」

「ねぇ……いいだろ……？」

なんか、なんか熱くて硬いものがお尻にぃぃぃぃぃ！

「ダッ……ダッ……」

もう……ダメッ！

「ダメェェェェェェェェェェ！！！！！」

私の中の螺旋力が、爆発した。

Ｓｉｄｅ　燈

私はいたって満足してた。イタズラは大成功ね♪

一時はどうなるかな？って思ったけど、最後は吼太が全部吹っ飛ばして強制終了した。

え？吼太が最後に使ったのが何か気にならないのって？

だって吼太が緑の光出すのはもう何回も（盗み）見てるし。それに……

……たとえ、どんな能力を持っていようと、吼太は大切な大切な、私達の息子だからね♪

さて、と。夕飯は頑張っちゃおうかしら！

楽しみにしててね？吼太♪

## 番外編　お薬パニック！（後書き）

なっぺ「後書き座談会！はーじまーるよー！！」

リーム「わ～い♪」

吼太「今回は危なかったわね……ってまだ！？」

なっぺ「番外編の間はずっとだ！つまり、ここでもお前は女のままなのさ！」

吼太「ひ、酷い……」

なっぺ「さて、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん、雨季さん、ライさん。感想ありがとうございます！」

吼太「特に、まーたさんは前回、ニアミスで感謝が出来ませんでした。ごめんなさい。」

リーム「にしても、あのコータは可愛かったなぁ～……また見たいなぁ～……」

ベス「なんか、楔さんと一緒にしたら面白いことになりそうですよね。」

吼太「止めてぇぇぇぇ！！！！！私を変な世界に導かないでぇぇぇぇぇ！！！！！」

なっぺ「ハッハッハッ！」

ベス「素材がいいだけに、いじったらどうなるか知りたいですよね。」

吼太「止めて……助けて……（泣）」

リーム「普段のコータとはホント真逆だよね。」

ベス「普段は荒々しい部分がありますが、今はそれが無くなって、まさにか弱い乙女になってますよね。」

吼太「もう……いや……（泣）」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第二十四話　失われたはずの力（前書き）

はい、吼太ＶＳアルフの回ですね。

正直、自分でもなんでこんな展開になったのか今だに分かりません。

まぁ、面白く出来そうなんでよしとしましょう♪

では、どうぞ！

# 第二十四話　失われたはずの力

Ｓｉｄｅ　アルフ

アタシはこの時を待っていた。

因縁の宿敵と決着をつけるために。

そのためにフェイトと一緒に強くなった。そのおかげで、今のアタシは昔とは比べ物にならないぐらい強くなった。

だけど、それはアタシだけじゃなかった。

好敵手（ライバル）のコータ。彼もまた、新たな力を手にしていた。

……面白い。それでこそアタシのライバル。昔のアンタを超えても意味が無い。新しく力を手に入れたアンタを超えることにこそ価値がある！

「さぁ！戦ろうじゃないか！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「フォーティトゥード、セットアップ！ダウンロード！ウカムルバ

ス！」

『了解。ウカムルバスの両腕部及び背部を特殊召喚。具現化します。』

ウカムルバスの両腕と背中が具現化して、オレの身体になる。今までではこれで終了だったが、今は違う。

『凍てつきの波動よ！』

リームの力がさらに重なる。それによって、オレの両腕を吹雪が覆う。

やっぱり雪山深奥の主、崩竜ウカムルバスとリームの氷の魔法は相性がいいみたいだな。

「いくぜ！うぉぉぉぉ！！！！」

右腕を地面にたたき付ける。すると、手が地面に触れた辺りから、地割れと吹雪が同時に発生し、アルフに襲い掛かった。

たちまち辺りは雪塵と土砂に包まれる。

『やりすぎたかな？』

リームが少し心配そうに言う。まぁ、前回が前回だし、そのことを知っているリームにとっては当然のことだろう。

しかし、オレ達の心配は予想外の形で裏切られた。

『マスター！後ろです！』

「喰らいなっ！」

「ぐぅっ！？」

アルフの魔力を篭めた拳が背中に当たる。

背部は特殊召喚の対象だからたいしたダメージにはなっていないけど……

それよりも驚いたのは、

「（なんだあの速度！？まるでクロックアップだ！）」

この世界にも移動速度を強化する魔法は存在する。フラッシュムーブがそれだ。

しかし、フラッシュムーブでの加速は純粋な加速でしかないため、使い魔が使用した場合、生身でその反動を受けることになる。そのため、使い魔がフラッシュムーブを使用することは滅多に無い。

だがアルフは、それ以上の速度を何の反動も無しに実現している。これはまず有り得ない。

「お前、何を……まさか、時間を！？」

「気づいたかい？この能力はアルハザードの研究をするうちに見つけた秘術の一つさ。アタシの周りの時間の流れを歪ませて、アタシ自身を超高速化する！」

アルフが超高速で打ってきた拳が、オレの左腕に何発も当たる。凍る前に手を離すことで、リームの【凍てつきの波動】を無効化しているようだ。

「バカヤロウ！んなことして、時間の歪みに取り込まれたらどうする！二度と戻っては来れねぇんだぞ！」

仮面ライダーカブトとて、ライダースーツがあるからこそクロックアップが使用出来るのだ。それと同じようなことをほぼ生身でやるなんて、自殺行為でしかない！

「あの白い魔導師と使い魔だけが相手なら使う気は無かったさ！でも、アンタって脅威が出来た！アンタには並の特訓じゃ勝てなかっただろう！だからこの能力を使うことにしたのさ！フェイトと一緒にね！！」

「フェイトと一緒に……まさか！」

『吼太！大変だ！なのはが！』

まるで打ち合わせたかのようなタイミングでユーノから念話が飛んで来る。予想通りか！

『コータ！なのはが危ないって！』

リームの声にも焦りがみえる。

「分かってる！トゥード！！」

『オーライ。両腕部を送還。ウカムルバス尾部を特殊召喚。具現化します。』

「アルフ！決着はまた今度だ！」

そう言うと、オレは具現化したウカムルバスの尻尾を振るい、雪塵に身を隠す。

それにアルフが気を取られている隙に、オレは脱出した。

Ｓｉｄｅ　アルフ

「逃げられたかい……」

雪塵が止んだ頃には、既にコータの姿は無かった。あの雪塵に紛れて逃げたのだろう。どうやら逃げ足も一流らしい。

「アルフ」

「フェイト！どうだった……って、聞くまでもないみたいだね。」

フェイトの身体には傷一つ無かった。恐らく一撃足りとも喰らってないのだろう。

「アルフもお疲れ様。どうだった？」
「逃げられはしたけど、手応えはあったよ。暴走もしてない。次にあったときには、決着をつけてやる！」
拳を反対の手の平に打ち付けて、フェイトに宣言する。
そう、アタシに負けは許されない。
この能力を鍛えて鍛えて鍛えまくって、コータに勝ってみせる！
「そっか」
言葉は少ないけど、フェイトは喜んでくれてる。多分、アタシが無事に帰ってきたから。
こんないい子が主人であるアタシは、きっと幸せな使い魔なんだろう。だからこそ、フェイトの望みを叶えてあげたい。そう思うのだ。
「帰ろう？今日の夕ごはんはちょっと豪勢にしようよ。」
「本当かい！？楽しみだねぇ～♪」
コータ……次に会う時はアタシも強くなる。だから、アンタも強くなりな。
そうして手に入れた力ごと、ぶっ潰してやるからさ。この拳に誓って……

## 第二十四話　失われたはずの力（後書き）

なっぺ「みんな～、後書き座談会の時間だよ～♪」

リーム「イェーイイェーイ！！」

ベス「今回は急展開でしたね。」

吼太「びっくりしたよ。まさかユニゾンした後の状態でほぼ互角だとは思わなかった。」

リーム「それじゃ、感想感謝いきまーす！雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん、月光閃火さん、かみかみさん、ライさん。感想ありがとうございまーす♪」

ベス「過去最高の人数ですね。」

なっぺ「月光閃火さんからは魔草の種を頂きました！早速吼太とリームが育ててます。まずは一回目！」

コータと僕の子育て日記

作：リーム

今日、コータが貰った種を庭に埋めてみた。コータによると、適度に水をあげればいいみたいなので、コータが「せっかくだし、やってみたらどうだ？」って言ってくれたのもあったし、最初は僕が水をあげてみた。種も喜んでるみたい。早く育たないかな～♪楽しみ♪

吼太「待てぃ！！何だよ子育て日記って！明らかにタイトルがおかしいじゃねぇか！」

リーム「だって……僕達はもう……【ガ・ッ・タ・イ】するような仲だし……／／／／／」

吼太「ユニゾンパートナーってだけだろうが！！勘違いされるから止めてくれ！！」

ベス「おや、もうお二人はそんなとこまで？」

吼太「ベスてめぇは黙りやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！！」

## 第二十五話　吼太の能力は摩訶不思議ですｂｙユーノ（前書き）

今回はたいした話ではありません。

# 第二十五話　吼太の能力は摩訶不思議ですｂｙユーノ

Ｓｉｄｅ　吼太

ユーノの念話の指示に従い、なのはのところにくる。

なのはは全身ボロボロの状態で、ユーノの回復結界の中に入っていた。気を失っているらしく、身動き一つしない。

……この時、原作で怪我してたっけ…？

「とりあえず…コール、クルペッコ！」

特殊な器官を使い、様々な音を発声出来るモンスター、クルペッコを召喚する。

「クルペッコ。回復を頼む。」

クルペッコに頼むと、クルペッコは独特のステップを踏みながら、奇妙な声で鳴きはじめた。

「こ、こんなので回復出来るの？」

心配になったらしく、ユーノが聞いてくるがとりあえず無視する。

やがて、ひとしきりクルペッコが鳴き終わると、なのはの身体を緑色の光が覆い、なのはの身体が癒された。

「ほら、回復したぞ。」

「……これ、魔導生物？」

「いや、普通のモンスター」

「……」

……まぁ、ユーノの気持ちも分かるけどさ。

そんなこんなで、役目を終えたクルペッコを送還していたら、なのはが目を覚ました。

「ん……」

「なのは！大丈夫！？」

「ユーノ君……うん、大丈夫。」

ユーノの話によると、なのはの底力のおかげでフェイトとはなかなかの戦いが出来ていたが、フェイトが突然フラッシュムーブの速度を超えた、超高速での攻撃を仕掛けてきて、なのははそれになす術も無くやられたそうだ。

恐らく、アルフと同じ能力だろう。

となると、対魔導師戦をろくにこなしていないなのはが勝てるわけがない。

「そっか……また、負けちゃったんだ…」

「なのは……」

…落ち込まれても困るし……せっかくだ、あれをしてみようか。

「なのは……特！訓！だぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

「ふぇ！？」

「聞こえなかったか？特訓だ！」

「いや、そういうことじゃなくてぇ！」

なのはが何か反論してくる。だけど…

「異論は認めん！」

「そんなぁ！」

「ちなみにユーノもだ。」

「僕も！？」

そう言いながら、ハーモニクスを使い、オレ自身を三人に増やす。

「リーム。このジッパーの中から、【修練の門】ってＡＲＭを出してくれ。トゥード、イメージ画像を頼む。」

『オーライ』

トゥードが、チェーンの先に輪をくわえた怪物の頭がついたシルバーアクセサリーを映し出す。

「えっと……あったよー！」

「そいつを使ってくれ。そいつを使うのに必要なのは……気合だ！！」

「アイアイサー♪」

リームは実に景気のいい返事を返してくれた。さすがはオレのユニゾンパートナーだな。

「吼太！？それ説明になってないよね！？」

ユーノもとい淫獣（間違ってはいない）がちゃちゃをいれてくる。だが、魔力の制御にシックスセンスを主に使うＡＲＭの使い方にしてみれば、当たらずとも遠からずなのだ。

ユーノにしてみれば適当過ぎるんだろうけど、そこは文化の違いだし、仕方ない。

現に、修練の門は無事に起動し、地面に出入口たる門が現れていた。

「……君の使ってる能力は本当に訳の分からないものばかりだよ…」

Ｂ「何でもかんでも物事が分かるんじゃ人生つまらねぇぜ？それじゃ、行ってくる。」

Ａ「頑張れよ。」

不意にオレＢがなのはを抱える。

「ふぇ！？こ、こ、こ、コータ君！？」

「行ってきまーす」

そして、オレBはなのはを抱えたまま、修練の門に突っ込んだ。

「ふぇ！？ふぇ！？…キ、キャアアアアアアアアアア……」

バタン↑扉が閉まった音

「リーム。もう一個頼む。」

「了解！」オレ達の目の前に、なのはが入ったのと同じ意匠の扉が出現する。

C「行ってくるぜ。」

A「時間になったら知らせるからな。」

オレCが、逃げようとしていたユーノをわしづかみにして、修練の門に飛び込む。ユーノは全力で抵抗していたが、所詮はフェレットもどき。あまりにパワーが違いすぎた。為す術も無く、ユーノは地獄の特訓に突入することになった。

「キュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥ……」

バタン↑扉の閉まる音

さて、と。

「とりあえずは、夜明けまでかな。」

# 第二十五話　吼太の能力は摩訶不思議ですｂｙユーノ（後書き）

なっぺ「後書き！座談会だぁぁぁ！！」

リーム「だぁぁぁぁ！！」

吼太「うっさいなオイ。いい加減にしてくれ。」

なっぺ「Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、雨季さん、まーたさん。感想ありがとうございます！ライさんからは悠久の原水を頂きました！早速、使ったようです。」

吼太「最近誤字が多いな。疲れてんのか？」

なっぺ「しっかり休みは取ってるつもりなんだけどなぁ……」

リーム「それじゃ、日記に移りたいと思いまーす！」

コータと僕の子育て日記その２

作：吼太

今回はオレが担当だ。早速、貰った悠久の原水をあげてみる。その少しあとに、ぴょっこりと芽が出た。早いな。さすが魔草。そういや、名前も考えなきゃな。やることには事欠かないな。

吼太「なんか、恥ずかしいな。」

なっぺ「さて、この悠久の原水の効果で、芽が出ました。何故か硬質化していますが。」

リーム「名前、考えなきゃなぁ～♪楽しみ♪」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみ。」

# 第二十六話　危険はいついかなるときに襲い掛かってくるか分からないもんです

これから、魔王（＋α）改造計画が始まります。

# 第二十六話　危険はいついかなるときに襲い掛かってくるか分からないもんです

Ｓｉｄｅ　なのは

吼太君に抱えられてやって来たのは、異世界でした。

「ってここどこ！？」

「修練の門の中だ。ここでなのはには特訓をしてもらう。」

辺りには木が生えてたり、岩が転がってたりするけど、それ以外のものは何も無いみたい。

文化を感じさせるのは奥の遺跡みたいなとこぐらいかな？

「ここ…で？」

「あぁ。特訓内容は簡単だ。……ガードスキル、ハンドソニックＶｅｒ４」

吼太が呪文みたいな言葉を呟くと、吼太君の右手に、金属で出来た蓮の花みたいなものが出てきたの。何に使うんだろう？

「お前の目的は、オレに一撃を加えることだ。もちろん、オレは防御はさせてもらう。ただし、オレが使うのはこいつだけだ。」

そういって、手の蓮の花を振るった。あれだけ？だったら簡単なの！

「ディバインシューター、シュー…」

私がディバインシューターを撃とうとしたときだった。

周りの岩だと思っていたものが突然動き出して、私を攻撃して来たの。

『プロテクション』

咄嗟にレイジングハートが攻撃から守ってくれたけど、岩の敵はまだまだたくさんいて、とても攻撃になんて移れない！

「そういや、ここらには実戦用に野放しにされてる敵、【ストーンゴーレム】がうようよいるから気をつけろ～」

「そういうことは先に言ってほしいの！」

でも、見れば空は敵がいないみたいだし、ストーンゴーレムは空は飛べなさそう。だったら…！

『フライヤーフィン』

飛行魔法で空へと逃げて、攻撃の隙を伺おうとしたんだけど……

「空なんぞ飛ぶんじゃねぇ！おしおきユキちゃん始動！」

『アイアイサー♪』

空からリームさんの声が聞こえたと思ったら、私の身体は何かに押し潰されて、地面にたたき付けられていたの。

「な、何なの～……？」

「おしおきユキちゃんだ。これから先、空を飛ぼうとすると、ガーディアンＡＲＭ【スノーマン】が落ちてくる。防げば防いだだけ増えるから、空は飛べないと考えたほうがいいぞ。」

「そんなぁ～！」

「ほれほれ！まだまだ来るぞ！」

不意に上のものの感触が無くなったので、周りを見てみると、ストーンゴーレムが襲ってきていて……

「キャアァァァァァァ！！？」

ストーンゴーレムの拳を間一髪で避ける。

「死ぬ！死んじゃうよコータ君！！！」

『全くもって同感ですマスター』

「ほらほら！目的を忘れんなよ！まだまだ時間は沢山あるからな～！」

「攻撃なんてしてる暇ないのー！」

それから、何日か逃げ続けてたんだけど、当然攻撃は当てられず仕舞い。時間が来たらしいから、ようやく出してもらえたんだけど、不思議なことに、外ではあの海鳴温泉に泊まった次の日の早朝だったの。そういえば温泉街の近くの森で、あの子と戦ってたんだよね。私たち。すっかり忘れてた…

〔オレも忘れてた……ｂｙ作者〕

……何か電波が来たけど、軽く無視するの。

とりあえず、同じく疲れ果ててたユーノ君と一緒に旅館に戻って、死んだように眠ることにしたの。ユーノ君はどんな特訓をしてたんだろ…？

そして、起きた時に、アリサちゃんとすずかちゃんとリームさんに言われて思い出したことがもう一つ。

「なのは！コータ！家族温泉行くわよ！」

「今日の枠は私達の番だよ！」

「当然入るよね！？」

そ、そうだった～！

Ｓｉｄｅ　吼太

朝、起きたらアリサとすずかとリームがど偉いことを言ってくれた。

だが、こちらには切り札（ジョーカー）があるのさ！

「オレも行きたいのはやまやまだけど、なんかなのはが疲れてる「もちろん行くの！」……ってなのは！？」

マズイ！これは計算外だった！これじゃあむしろ墓穴を掘っちまってる！？

「行きたいの！？ホントだよね！？」

なのはがなんか興奮して言ってくる。

「ま、待て！これは誤解だ！」

「アンタも好きね～♪こんな美少女四人を侍らして温泉行きたいなんて♪」

アリサがにやにやしながら言ってくる。

「そんなんじゃねぇよ！」

「コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉コータ君と温泉……あわよくば中で……／／／／／」

何をする気ですかすずかさん？

「すずか！落ち着け！」

「そっか～、そうだよね～♪コータもホントは一緒に入りたかったんだよね～♪」

リームが舌なめずりしながら話し掛けてくる。

「待てみんな！ここはそもそも全年齢対象だ！！」

「「「「そんなもの、愛の前には塵に同じなの（よ）（だよ）」」」」

何する気だお前ら！

「さっ♪行こうっ！」

リームに抱えられるオレ。この時ほど、９歳の身体を憎んだことはないだろう。

「たっ、助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……」

その後、オレは貞操を守るのに必死だったことだけは言っておこう。

それと……

「僕の苦しみを味わうといいさ……！」

なんて言っているフェレットもどきがいたとかいなかったとか。

……ゴメン、ユーノ。

## 第二十六話　危険はいついかなるときに襲い掛かってくるか分からないもんです

なっぺ「後書き座談会！」

ベス「吼太さんとリームさんはリア充よろしく家族温泉に入っているので休みです。」

なっぺ「さくさく行こう！まずは感想感謝コーナー！雨季さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございます！さらに、ライさんからは植物活性剤を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「もしかして急いでます？」

なっぺ「あともうちょっとで、アレが使えるようになるんだよ！」

ベス「……まあ、ともかく、子育て日記に移りましょう」

コータと僕の子育て日記

作：リーム

今日は、貰った植物活性剤をあげてみてる。
まだまだ小さいけど、しっかり成長しているのが分かるから、とっても嬉しいし楽しい。
明日はどんな君になってるのかな？楽しみ♪

なっぺ「植物活性剤の文字抜けば普通の子育て日記に見えるなコレ」

ベス「それだけ大事にしているということでしょう」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第二十七話　修業！特訓！訓練！（前書き）

修業編その2。

そこまで長くする気はありません。

## 第二十七話　修業！特訓！訓練！

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、様々な事件があった温泉から帰ってきて、オレ達は日常に戻っていた。

ジュエルシードも最近はなりを潜めているし、当然フェイトやアルフにも会ってはいない。

おかげで特訓に集中出来るな。ありがたい。

そう考えながら、修練の門の中でオレは……

ユーノに向かってライダーやデジモンやポケモンとかを召喚しまくっていた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「ほれほれ。しっかり防御しないと死ぬぞー」

「君がやってるんだろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

Ｓｉｄｅ　ユーノ

時は、初めて修練の門に入ったときに戻る。

修練の門の中で、僕が課せられた訓練の内容は、【攻撃をすべて捌くこと】。

最初は吼太一人の攻撃だと思ってた。僕はこれでも防御やバインドといった、【攻撃を捌くこと】に関しては中々の実力があると思ってる。

正直、簡単だと思ってた。

だけど、敵は吼太だけじゃなかった。

まず、岩の怪物（ストーンゴーレムというらしい）が襲ってきた。これだけならまだいい。たいしたことはない。だけど、そのあと様々なモンスター（デジモンだとかポケモンだとかいうらしい）や仮面をつけた戦士（仮面ライダーというらしい）を召喚してきて、一斉に襲い掛からせてくるから、もう必死になるしかなかった。

バインドで数体を足止め出来ても、敵が多すぎてとても捌ききれない！

「吼太は僕が嫌いなのか！？」

「これは訓練だ！私情なんて入っちゃいない！」

嘘だ！嘘に決まってる！

それから、僕の地獄が始まった。

というのも、なのはは学校のためちょくちょく出させて貰ってるけど、僕は一回、温泉から帰るときに出してもらってからずっと外に出してもらっていない。ここは時間の進むスピードが外の約１／６０らしくて、訓練する期間の【外で一週間たつまで】ってのは正直耳を疑った。日にちを数えるのを止めたのは記憶に新しい。

そして、今日も僕は攻撃を避けて、防御魔法で防御して、バインドで足止めをする。

たまにある休憩は食事と睡眠にあてている。そうしないと生き残れないからだ。

愚痴なんか言ってられない。身体の傷は数え切れないぐらい増えたけど、動くのに支障は無い。

なのは……君もこんな地獄みたいな訓練をしているのかい？

Ｓｉｄｅ　なのは

さらに（外で）数日後……

「レイジングハート、刃を出して！」

『オーライ、マイマスター。ディバインセイバー、Ｓｅｔ　ｕｐ』

シューティングモードのレイジングハートの先に、魔力で出来た刃が付く。さながら、見た目は槍のよう。

「たぁぁぁぁ！！」

レイジングハートを振るって、周りから襲い掛かってきていたストーンゴーレム三体を一気に斬り捨てる。

そして、安全を確保してから、コータ君にレイジングハートを向けて、

「バスター…シュゥゥゥーーーーット！！！！」

『ディバインセイバー、バスターシュート』

魔力刃をそのまま砲撃に変換して放つ。

何回も練習して、今や威力は以前のディバインバスターより強くなってる。

でも……

「甘い！」

やっぱり叩き落とされた……

「うぅぅ……強すぎるよコータ君…」

「いい攻撃だったけと、こいつを貫くには威力が足らなかったな。」

そう言って、腕についたハンドソニックＶｅｒ４を振るうコータ君。

なんでもあれは、魔力を拡散してしまう性質があるらしくて、並の砲撃じゃちょっとも通らないの。

でも、今一番威力を出せる、私の奥の手。あれなら多分いけると思うんだけど、ストーンゴーレムが邪魔でチャージに必要な時間が作り出せないし……

「っと時間か……なのは。とりあえずここまで、学校の時間だ。」

「わ、わかったの……」

Ｓｉｄｅ　アリサ

最近、なのはの様子がおかしい。

アタシやすずかが話し掛けても、どこか上の空だし、なんかくたびれてるし、たまにぶつぶつ喋りながらノートに何かを描いてるし……

「ちょっとなのは！聞いてるの！？」

今も、アタシの話をどこか上の空で聞いていた。

「あ、ゴメンゴメンアリサちゃん……ねぇ、アリサちゃん？」

「……何よ？」

「周りに邪魔されずに蓮の花を壊して、コータ君を撃ち抜くにはどうしたらいいかな？」

……本当に大丈夫かしら？何かすごく心配になってきたんだけど……

何？コータの命を狙ってるの？

「それなら、まずは周りの人達を黙らせてから……」

すずかは何故かノリノリだし……

まぁ、いいわ。なんだかんだで私達のことは頼ってくれてるみたいだし、大目に見てあげる。

その代わり、全部終わったらコータと一緒に全部聞かせてもらうんだから！

## 第二十七話　修業！特訓！訓練！（後書き）

なっぺ「後書き座談会だぜ！」

リーム「イェーイ！」

吼太「……もう何も言わねぇよ」

なっぺ「感想感謝のコーナー！Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、ライさん、雨季さん、まーたさん。感想ありがとうございます！」

リーム「月光閃火さんからは【魔草の肥料】を、雨季さんからは【シャマルが使っていた肥料】を頂きました！早速あげましたよ！」

コータと僕の子育て日記

作：吼太

今日は、二種類の肥料をあげてみる。どちらもかなり強力らしくて、正直恐いが、貰い物を無下にしたら罰があたる。

肥料を混ぜ終わった頃、魔草の周りの土が虹色に発光していた。大丈夫かコレ…？

あと、コイツの名前が決まらない。どうしたもんか……

なっぺ「はい。ということで、魔草の名前を募集します。女の子の名前です。案がある人は感想とかに書いてください。期限は次次回更新までです。」

吼太「名前決められなくてすいません。」

なっぺ「ではではこの辺で！」

# 第二十八話　フェイト・テスタロッサの宿探し、八神はやての運命（前書き）

今回は主人公が出てきません。

# 第二十八話　フェイト・テスタロッサの宿探し、八神はやての運命

Ｓｉｄｅ　フェイト

今、私達はジュエルシードを探している。この町の周辺にあることまでは分かってるんだけど、中々見つからない。

最近はあの白い魔導師や、黒衣の魔導師とも会わないし、概ね平和だった。

そんなある日。

「本当にごめんなさいね」

……マンションから追い出されました。

何でも、マンションを壊して別の建物が建てるそうです。

……どうしよう？

「フェイトー、どうするんだい？こっちに拠点がないとこの先困るよ？」

アルフが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫。何とかするから」

そう言ってアルフを安心させるけど、正直行く先なんて無い。とりあえずは図書館に行ってみることにしよう。

そういうことで、海鳴図書館に来たんだ。アルフは外を歩き回って宿とジュエルシードを探してくれてる。ジュエルシードは、全てのジュエルシードが集まればここにいる理由は無くなるから、一応探してもらってる。

私も探そうとしたんだけど、アルフが「今日はアタシに任せときな」って言ってきかないから、仕方なく任せた。

それで、他にすることも無いし、本を探しに来たんだけど…

「よいしょ……後、少しっ…！」

車椅子に乗った、女の子が本を取ろうと手を伸ばしてたんだ。

このまま見てるだけなのは嫌だったから、女の子の代わりに本を取ってあげて、声をかける。

「これかな？」

「あっ…ありがとうございます。」

女の子がお礼を言ってくれる。独特のイントネーションだ。

「いいよ。それより、他に欲しい本は無い？」

「それじゃあお言葉に甘えて……」

それから、私達は互いの情報を交換したりした。

「じゃあはやては童話が好きなんだ？」

「うん！私こういうの大好き！魔法ってなんか素敵やん？」

……私がその魔法使いだって知ったらどんな反応するのかな？

「それにな……私、魔法って実際見たことあるんや。」

「ッ！？……そ、それってどこで！？」

思わずはやての肩を掴んでしまう。

「きゃっ！？…もう、フェイトちゃん。反応しすぎやで？」

「あ、ゴメン……」

「ええよ別に。気にしてへんし。それよりな、その魔法の話なんやけど……」

そうして話を聞いていく内に、私はある一人の人物がその話に当て嵌まることに気づいた。

吉谷、吼太。

アルフのライバル。

そして、私達の敵。

「……ってわけや。ってどないした？そんな眉間にしわ寄せて」

「あ、ゴメン。考え事してて…」

「ふ～ん、ならえぇけど。さて、私の話はしたで！次はフェイトちゃんの番や！」

「え？私も？」

「当然やろ。私は包み隠さず言ったで。やから、フェイトちゃんにもちゃんと言って欲しいなぁ。……空を狼と一緒に飛んでたとことか。」

「！？」

見られてた！？飛んでる時はずっと認識阻害を使ってたのに！

「……わかった。でも、これから言うことは他の人には絶対言わないで。」

「うん、わかった。」

Ｓｉｄｅ　はやて

今、フェイトちゃんの長い、長ーい話が終わったとこや。

「へー、お母さんを助けるためになー」

「うん」

「そんで、今は宿無しと。」

「うん……」

あらら、落ち込んでもうた。

「どうしよう……もう、何も分からないよ～…」

フェイトちゃんがこっちを涙目で見てくる。かわええなぁこの娘。

「なら、家に来ればええ。」

「え？」

「私の家なら使ってない部屋は沢山あるし、私には何も問題は無いで。な？どうや？」

「でもでも……っ！」

「ええな？ハイ、決定ー！今日はお祝いでしゃぶしゃぶや！」

「えぇっ！？えぇっ！？」

こんぐらいせぇへんとこの娘は来てくれへんやろ。それに……

「フェイトちゃん……私はな？運命とか信じんようにしてるんよ。だって、そうしたら、この脚のことも運命のせいになってまう。そしたら多分立ち直れない。どこにも憤りをぶつけられへんから。」

「はやて……」

「でも、今回ばかりは運命を感じた。家には部屋はあるのに人はいなくて、フェイトちゃんは家がない。これはきっと、神様が采配してくれたに違いないって。」

――その通りですよ。

……何やろ今の声？まぁええわ。

「な？えぇやろフェイトちゃん。私も淋しいんよ。」

「……分かった。アルフに相談しなきゃだけど……「その必要は無いよフェイト。」…アルフ！」

わぁ！スタイル抜群やな！まぁ、アレはあとで揉むとして……

「ってことは？」

「アタシは問題無し！ついでに、プレシアからも念話が来て、何も問題無いってさ！」

つまりはオールＯＫやな？だったら…

「じゃあ買い物に行くで！手伝ってな？」

「うん！」「あいよ！」

こうして、私の家に、二人の同居人が出来たんや。

# 第二十八話　フェイト・テスタロッサの宿探し、八神はやての運命（後書き）

なっぺ「後書き座談会！今日はフェイトとはやてに来てもらいましたー！」

「「よろしくお願いします！」」

なっぺ「二人とも、予期せず出会ったわけだけど、感想は？」

フェイト「えっと……嬉しい、かな…やっぱり。はやては優しいし……」

はやて「フェイトちゃんはかわいいし、アルフさんもいい人で、一時的にしかいられへんのが実におしいなぁ」

なっぺ「はい！ありがとうございまーす！」

吼太「……お前、いつインタビュアーになった？」

なっぺ「じゃあ二人仲良く、感想感謝のコーナーいこうか！」

吼太「無視かよ……」

フ&は「「まーたさん、雨季さん、ライさん、ＫＯＵさん、八人目な武器屋さん、月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございます！」」

吼太「また今回も沢山来たな」

なっぺ「ホント、ありがたいことだよ。あと、八人目な武器屋さんから、吼太宛に【女神転生シリーズのアリス（眠らせた後、目覚めてから最初に見た人を好きになる惚れ薬を盛った状態でダンボール詰め）、燈宛に【記憶消去の副作用付き女体化薬】、リーム宛に【（吼太の貞操的な意味で）危険な魔導具の設計図１０種類】を頂きました。お土産は各人に直接送りました！どうなるかは番外編で！」

ベス「面白そうなものばかりですね」

なっぺ「ホントに。あと、魔草の名前は現在、

雨季さんより【魅花】

ライさんより【ライラ】

月光閃火さんより【ベルフラウ・コリーナ】

を頂きました！引き続き、名前は募集しますが、以上の三つから選んで答えてもらっても結構です！ひらがな、カタカナ、漢字問いません！また、複数投稿されても結構です！」

ベス「収拾つくんですか？」

なっぺ「大丈夫！……多分」

リーム「自信は無いんだ…」

吼太「じゃあ魔草の様子を見るか」

コータと僕の子育て日記

作：リーム

すごいことになった。前にあげた肥料が原因なのか、今や５０m以上の大きさで、桜やバラや百合やその他にも種類、大小様々な花が咲いている。近所の人に迷惑をかけるわけにはいかないので、位相をずらしてみてるけど、いつまでもつか分からない。
最後には人間型になるらしいけど、ちょっと予想がつかなくなっちゃった。
でも、やっぱり楽しみかな。

吼太「いや、なんだあれ。植物か？」

なっぺ「だって……ねぇ？」

リーム「でも可愛いよ？」

はやて「つ、つわもののやねリームちゃんは……」

フェイト「え？私も可愛いと思うよ？」

「「「つわものがここにも！？」」」

なっぺ「で、ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　しごきと胃痛持ちと記憶喪失（前書き）

今回は雨季様とのコラボです！

さらに、八人目な武器屋様から頂いたアイテムも出てきて……

どうなるか、お楽しみ下さい！

# 番外編　しごきと胃痛持ちと記憶喪失

Ｓｉｄｅ　要

『要、要』

何か声が聞こえる。念話みたいだが……それと、どこかで聞いたような…

『忘れたのかい？君を転生させた神様だよ。まぁ、最近全く出番なかったけどね』

「アンタか。まぁ、それはともかく、何か用があるんだろ？」

『まぁね。端的に言うと、ユーノを鍛えてあげてほしいんだ』

「ユーノを？あいつ無限書庫の司書長だろ？なんで今鍛える必要が？」

『あぁ、平行世界のユーノだから。』……またか？」

『ついでに言えば新しい世界だね。最近出来たばっかり』

まぁ、最近ストレスで胃痛が激しいし、たまにはそういうのもありかもな。

『あと、向こうは無印だから変に暴れないでね』

「分かった」

『じゃあ送るよ』

Ｓｉｄｅ　吼太

「うーむ……」

オレは最近悩んでいた。というのも、ユーノがこっちの思惑と外れて、ライダーやモンスターの動きの方を覚えて回避するようになってしまったみたいなのだ。

「今は強化のカードで何とかしてるけど……何か新しいのが欲しいな」

「吼太、何か言った？」

「いや、なんでも」

まさかユーノが戦いながら話せるようになるとは。いよいよヤバイ。

何か強大な力をぶつけて、ユーノ自身の実力を再確認させる必要がありそうだな。

そう、例えばＯＲＴみたいな『吼太さん、吼太さん』……

『何だよベス？新聞の勧誘ならお断りだぞ？』

『それは残念。……そういうことではなくてですね…』

『じゃあ何さ？』

『要さんがそっちに行きます。歓迎の準備を。』

「は！？」

いきなりなんだよ！？アイツが来るって……つーか今修練の門の中
『来ましたよ』速っ！？

キィィィ……ン

「来たぞ……ってここはどこだ？」

「よっ！要。よく来たな」

「吼太の世界か。つーことはここは修練の門の中か？」

「あぁ。後で外出すから今は……そうだ！要、ＯＲＴって今使えるか？」

「使えなくはないが……何故？」

「ＯＲＴ全開でユーノをしごいてくれ。」

「……ユーノを殺す気か？」

「ここのユーノはゴジラとオメガモンXとレックウザが同時に襲い掛かってきても避けるだけならやれるやつだから大丈夫だ。さらに言えばＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを使って、死なない空間にしてある。だから好きなようにやってくれ」

「それじゃあ、せっかくだし…身体能力１００％、魔力１００％解放。アルティメット・ワン発動」

要が本気を出す。にしてもアルティメット・ワンまで発動するか…

「ＯＲＴ、解放」

Ｓｉｄｅ　ユーノ

僕はかなり長い間避け続けている。防御するより避けた方が早いからだ。

もう、正直避けるっていうより条件反射といってもいいかもしれない。

多分、もう特訓にはなっていないだろう。このままなら終了も近いかな?そんな風に考えていた時だった。

周りのやつらが一斉に消えた。

「ユーノ！今回は特別編だ！」

吼太が何かを言っている。なんだろ？

「相手は最強の生物だ！上手く逃げ切れよ！」

その瞬間、周りの景色が一変した。

辺り一面を水晶のようなものが覆い、それに驚いていると、何かの声が聞こえた。

……何だろう。嫌な予感しかしない。

その時、目の前にソレは現れた。

青白い脚を持った、蜘蛛のような存在。直感的に悟る

「（アレは……ヤバイ！）」

「Ｇｙｕａａａａａａａ！！！！！！」

「おぉぅ、さすがＯＲＴ……迫力はケタ違いだな……」

「そんな呑気な！」

吼太はこれ見て何か思わないのか！？

「よし！要から1時間無傷で逃げ切ったら5時間の休憩をやるぜ！」

「本当！？」

「逃げ切れたらな。じゃあ、頼む」

『分かった』「Gyuaaaaaaaa！！！！！！」

………やっぱ無理ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

Side　要

「…驚いたな」

まさか1時間本当に逃げ切るとは…

「ちょっとプライド傷ついた？」

吼太が聞いてくる。

「いや、純粋に驚いてる」

ユーノ……逃げだけならチートになったな。

「んじゃ、外に転送するぜ。あと、母さんがお茶を用意してるらし

いから、ついでに飲んでってくれや」

「あぁ、分かった」

「よしっ！ギガドリル！」

吼太の腕にドリルが付く。

……何をする気だ？

「どぉりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

気合の入った叫び声をあげると、ドリルを空間に突き立てる。

すると空間がひび割れていき、やがて人一人入れる程度の穴が出来た。

……いや、なんでそんな方法で？

「よし。あとは向こうにいるオレに任せる。ゆっくりしていけよ」

「あぁ」

そうして、俺は空間の穴に入った。

Ｓｉｄｅ　吼太

お、来た来た。

「……ホントにいたよ。実際、目の当たりにすると信じられない気持ちがあるな」

「まぁ、そりゃあなぁ」

同じ人が三人もいたら、知っていてもやっぱりびっくりするよな。

「んじゃ、こっちだ」

「ただいま～、母さーん！母さーん？」

……

「出掛けてるみたいだな」

「吼太、手紙があるぞ？」

えーっと、何々……

――お母さんは諸用で出掛けてきます。おやつと飲み物は冷蔵庫に入ってるよ　母――

「テキトーにくつろいでいてくれ。今飲み物と菓子を出すから」

「あぁ。わかった」

……これかな？ラベルが剥がされてるな……まぁ、いいか。

「どーぞ」

翠屋のシュークリームがあったので、それと一緒にジュースを出す。

さて、何を話そーか……

Ｓｉｄｅ　要

『要』

『楔か。どうした？』

『せっかくだから私も出して。挨拶ぐらいはしたいし。』

『分かった』

俺はロザリオをかけて、身体を二つにする。

「お待たせ……って増えてるし」

「はぁい♪」

そりゃあ驚くよな。

「んじゃ、コップもう一つだな」

「それじゃ、今回出会えたことに」

「「「乾杯」」」

吼太が音頭をとって、乾杯する。平和だな。

そして、一斉にジュースを飲もうとしたとき、俺は直感的に何かを感じとって、飲むのを止めた。

その直後。

ボゥン

１０年バズーカを使ったような煙が吼太の身体から吹き上がる。

そして、その煙が止むと……

吼太によく似た女の子が倒れていた。

……マジか？

一応、楔を確認するが、こちらはなんとも無いらしい。

「んっ……」

「吼太、大丈夫か？」

吼太が目を覚ます。そして……

「あなた……誰ですか？」

……ハイ？

Ｓｉｄｅ　楔

どうやら、飲んだのは女体化薬だったようね。だから私は変化がなかったみたい。

「えっと……？？？」

「吼太？とりあえず落ち着け」

「あっ……ハイ……あれ？コータって誰ですか？」

小首を傾げて聞いてくる。いちいち反応が可愛いわね。

「吼太はお前だろ？」

「でも私、女の子ですよ？」

ん～、これは下手なことすると逆効果ね……

「じゃあ、あなたの名前は分かる？」

とりあえず、名前を聞いてみる。

「えっと……わかりません……」

シュンとなる吼太。……名前に違和感があるかな……

「……じゃあ、貴女に名前をあげる。……詩音、でどうかしら？」

「詩音…ですか……分かりました！」

『おい、楔』

『何？』

『いいのか？勝手に名前を付けて』

『いいんじゃない？』

――いいですとも！ｂｙなっぺ――

……何か聞こえたかしら？

「お姉ちゃん」

「何？詩音？」

「お姉ちゃん達のお名前は何なの？」

「私は楔。こっちの男の人は要よ」

「楔お姉ちゃんと要お兄ちゃん？」

「うん」「あぁ」

「楔お姉ちゃん！要お兄ちゃん！もっと色んなことを詩音に教えて？」

……これは食べちゃってもいいってことかしら？

数時間後……

Ｓｉｄｅ　リーム

「……出来たっ！」

僕は今まで、二階の自分の部屋に篭って魔導具を制作していた。

どんなものかっていうと～エヘヘ～／／／／

とにかく、せっかく完成したんだし、吼太を呼ばなきゃ！使わないと損だもんね。

「コータ～！ちょっと来て～？」

……

アレ？

「コータ～、出掛けてるの～？」

「コータさんはいませんよ～」

……この声ってどこかで聞いたような……あぁ、コータが女の子になったときの……アレ？

とりあえず、一階に降りてみると、そこには赤髪の少女、青っぽい白髪の男の人、男の人と同じ髪の色をした、スタイル抜群の女性がいた。

……後者は要と楔かな？

ってことはもしかして……

「ねぇ要……この娘がコータ？」

「……残念ながら…ちなみに名前は詩音だそうだ」

やっぱり。にしても……可愛いなぁ。しかも、こう、ムラムラくる可愛さ。めちゃくちゃにしたい、僕の手で汚しちゃいたいみたい

な？

「ねぇ、詩音？僕のことどう思う？」

「？う～ん……なんか、一緒にいると安心する。…あ、あと綺麗で可愛いよ♪」

決めた。襲おう。

「詩音……ちょっとお話したいから僕の部屋に行こうか……ハァハァ」

「？　いいよ♪」

「私も混ぜて欲しいなー♪」

「…そういうわけにはいかないみたいだぞ？楔」

見れば、要と楔の足元に魔法陣が出来ている。お別れの時間みたいだね。

「う～……じゃあ残念だけど……」

「俺達は帰ることにするよ。吼太によろしく言っておいてくれ」

「分かったよ～♪」

そして、二人は帰っていった。

そして僕は詩音とめくるめく快楽の世界に……

『そうはさせません、プロテクション』

微弱だけど、プロテクションが張られて、僕の身体を吹っ飛ばす。

「痛た……邪魔するの？トゥード？」

『マスターに、いざというときは守ってくれとおおせつかっておりますので』

「むー！イケずー！」

『何とでも言ってください』

「え……？ペンダントが……喋って……有り得ない…有り得ないよ……キュウ」

突然、詩音が倒れた。……え？

「詩音！？しおーん！！」

結局、薬の効果が切れるまで詩音は目を覚ますことはなかった。

コータは、詩音の時のことを覚えていないみたい。

……僕はいつになったらコータとあんなことやこんなことがやれるのかなぁ？

詩音……可愛かったなぁ……

## 番外編　しごきと胃痛持ちと記憶喪失（後書き）

なっぺ「後書き座談会だー！今回吼太……もとい、詩音は気絶中なのでいません！」

リーム「コータとヤれなかったー！」

なっぺ「ここは全年齢対象だ！」

リーム「ケチー！」

なっぺ「ケチじゃない！…ハイ、雨季さん。こんな感じになりました。すいません、要や楔の魅力を上手く引き出せなくて…」

リーム「いけずー！」

なっぺ「黙れ！えー、それでは感想感謝のコーナーに移りたいと思います。まーたさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、雨季さん、月光閃火さん、かみかみさん、ＧＲＡＭさん、ＫＯＵさん。感想ありがとうございます！」

リーム「ＧＲＡＭさんからはガイバーユニットを頂きましたーありがとーございまーす」

なっぺ「投げやりになるな。それじゃ、子育て日記行きましょ～！」

コータと僕の子育て日記

作：吼太

でけぇ。それしかない。今や大きさは６８ｍになっている。以前みたいな急激な成長ではないが、かなり巨大なのに変わりはない。位相をずらしてごまかすのも限界がある。なんとかしなきゃな…

枯らすわけにはいかない。リームが悲しむからな。全く、面倒がかかる。

リーム「コータ……／／／／」

なっぺ「惚気乙。そして、魔草の名前ですが、雨季さんの【魅花】に一票が入っております！現在投稿して頂いた名前は以下の通りです！」

雨季さんより【魅花】

ライさんより【ライラ】

月光閃火さんより【フラウリーナ】

Ａｒｉｓｈｉａさんより【カスミ】【リージア】【タリス】【カリア】【トリス】【プリム】

なっぺ「Ａｒｉｓｈｉａさんすいません！全部は書ききれなかったので、一部気に入ったものをあげさせてもらいました。今回で名前の募集は締め切ります。あとは投票をお願いします！とりあえず、前回投票してくれた人や、名前を投稿してくれた人にも投票してほしいです！投票は一人三票までに増やします！よろしくお願いします！」

リーム「コータ……あんっ…そこは…／／／」

なっぺ「（無視）ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# お知らせ

なっぺ「どーもどーも！いつもこの【魔法少女リリカルなのは　Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ】をご愛読頂き、まことにありがとーございます！作者のなっぺです」

吼太「同じく主人公の吉谷吼太だ」

リーム「コータのユニゾンデバイスで、お嫁ｓ「嘘をつくな嘘を」……リームです」

トゥード「マスター、吉谷吼太様のデバイス、フォーティトゥードです。種類はインテリジェントになります」

ベス「そして私が全ての元凶の神です。間違ってもスライムベスなどではありません」

吼太「で、お知らせってなんだ？」

なっぺ「まずは一つ。皆様に募集していた魔草の名前なんですが、とうとう名前が決定しました！主に私の独断と偏見と妄想で！」

吼太「随分心配になる言い方だな……」

リーム「どれになったのー？」

なっぺ「それは、番外編でやるからお楽しみに！ってこと。とゆーことで、名前に関する募集を締め切ります。たくさんの投票、ありがとうございました！」

ベス「で、次は何なのですか？」

なっぺ「はい、さてこの小説、始めてから一週間ちょい経ちますが……なんと！１０万アクセスいきそうなんですよ！」

リーム「ワォ！本当！？」

なっぺ「オレ自身信じらんねぇよ……オレの駄文が！？ってのもあるけど、何より二週間経たずに１０万アクセスってのが…」

吼太「お前は更新を一日二回以上続けてたからな。いつ更新されてるか気になってアクセスしてくれてた人もいたんじゃないのか？」

なっぺ「すいません！ありがとうございます！」

トゥード『……待ってください？１０万アクセスいきそうなんですよね？ならばお祝いには早いのでは？』

なっぺ「いや、だから１０万アクセス時にどんな企画をやろうか募集をば…」

吼太「また人任せかお前は」

なっぺ「……ゴメンなさい」

ベス「というわけで募集するらしいですよ？〇〇を出して！や、△△と□□の組み合わせが見たい！等のようなものですかね。」

トゥード『当然、出演依頼や、特別な企画なども大募集します。どしどしご応募ください』

なっぺ「皆様、よろしくお願いします！」

## お知らせ（後書き）

今回は後書き座談会はお休みです。

次回以降をお楽しみに！

## １０万アクセス突破記念　ベスの観察日誌（前書き）

今回はＡｒｉｓｈｉａさんから頂いた企画です。

# １０万アクセス突破記念　ベスの観察日誌

皆さん、お久しぶりです。

神です。

決してスライムベス等ではありません。

さて、今日は私の視点から、吼太さんの一日でも観察をしてみようと思います。

……つまらないとか言わないでください。私だってプラモやらゲームやらで忙しいところを無理矢理やらされてるんですから。

……あぁ、今日のニ〇ニコ生放送は見れそうにありませんね……

とりあえず、吼太さんの様子を見てみましょう

吼太さんの朝は早朝５時から始まります。それから、朝の間は自分が修練の門に入って、ユーノさんの訓練の確認と同時に自身の訓練もします。

最近はハーモニクスで二人に増えたあと、模擬戦をするのがお気に入りみたいですね。

…ただ、毎回最後にギガドリルブレイクをお互いに撃ち合って、その余波で修練の門の中をさら地に変えてしまうのはどうかと思いますよ？

そして、朝食を普通に食べて学校へ行くわけですが、実は修練の門の中以外はここまでずっとリームさんがべったりです。

ただ、さすがに学校へは行けないので、リームさんは学校へ向かうバスのバス停までで帰ってしまわざるをえません。

まぁ、そこからはなのはさん達三人娘がべったりですから吼太さんにとっては何も変わりないのかもしれませんが。

……このリア充めが！

学校での吼太さんは…正直、特筆すべき点はありません。
寝てるからです。ほぼずっと。最近はなのはさんも仲間になってますね。
修練の門での訓練がよほどキツイのでしょう。
そのたびにアリサさんに叱られ、すずかさんが「まぁまぁ」と言い……
毎日毎日、よく飽きませんね。

放課後になったらなったで、吼太さんはあっちこっちにお呼ばれします。まぁ、先生に叱られてるだけなんですけどね。

その間になのはさん達は自身が受け取った告白の処理をしています。
……いや、処理で合ってますよ？
なのはさんなんて、会っていきなり「告白だったらゴメンね？私、好きな人いるんだ」って…

それに気づかない吼太さんも吼太さんですけど……

本日はなのはさんが１０人、アリサさんが１６人、すずかさんが１３人の人をフりました。

多い時は一人あたり３０人はくるので、今日は少なめですかね。

さて、いよいよ家に帰ると、なのはさんの特訓が始まります。

最近では、なのはさんもライダー相手に格闘戦で互角に近い実力を得ています。たまに、複数の完全体デジモンの攻撃を捌きつつ、吼太さんに精密砲撃を行うなどという、常識離れしたこともやったりします。

なにより、シックスセンス、直感力が格段に上がってます。ディバインバスターもタイムラグ無しで放てるようになってますし、もう並の魔導師では傷一つつけられませんね。

ユーノさんにいたってはミワセ…ではなくアルセウスのさばきのつぶてをチェーンバインドで弾きつつ捕縛し、同時にラヴィエンテをストラグルバインドとフープバインドで完全捕縛出来ています。…もしかしたら闇の書の闇も一人で捕縛出来るかもしれませんね。バインドの複数同時使用って……あなた、実はデバイス使ってるんじゃないですか？

これも一重に吼太さんのイジ……もとい、特訓のおかげですね。

なお、ジュエルシード探索はナルガクルガと大量のアイルーによるローラー作戦で行っているみたいです。報酬はマタタビだとか。

なのはさんが帰ってからは、再び自身の訓練です。主に螺旋力と天界力の制御が主体みたいですね。

最後に修練の門の中をさら地にするのは変わりませんが。

そして、外での時間が午前４時３０分になると、ようやく吼太さんは睡眠に移ります。といっても修練の門の中でなんで実質の睡眠時間は３０時間なんですけど。

……とまぁ、こんな感じです。

ここまでお付き合い頂き、ありがとうございました。

## １０万アクセス突破記念　ベスの観察日誌（後書き）

なっぺ「後書き座談会だーだーだー……（エコー）」

……

吼太「なんだ今回の話」

なっぺ「すいませんでした」

ベス「私に恥をかかせるつもりですか？」

なっぺ「すいませんでした」

リーム「文才無いって悲しいよね？」

なっぺ「すいませんでした」

トゥード『読者様のご期待に答えられないぐらいならば、安請け合いしないで頂けますか？』

なっぺ「すいませんでした」

なのは「私達の扱いが微妙なの」

なっぺ「すいませんでした」

アリサ「何よあの扱い」

なっぺ「すいませんでした」

すずか「潰されたい？」

なっぺ「すいませんでした」

フェイト「私にいたっては出てすらいないよね？」

なっぺ「すいませんでした」

はやて「私もや。」

なっぺ「すいませんでした」

なっぺ「えー、企画の話を貰えてとても嬉しいのですが、正直グダグダ感が拭えません。これから先もこんな感じになるかと思います。が、出来るかぎりの努力はしますので、見捨てないでください。お願いします。」

吼太「今回、子育て日記はお休みです。もうすぐ人間化（ヒューマライズ）が始まるのが原因です」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

吼太「……楽しみに出来るようなもんを書けよ？」

なっぺ「努力はする」

## １０万アクセス突破記念　月＋狼→痴女＋ベス（前書き）

１０万アクセス突破記念その２！今回は月光閃火さんとのコラボです！

そしてキャラ崩壊が激しいです！ご注意を！

# １０万アクセス突破記念　月＋狼→痴女＋ベス

Ｓｉｄｅ　リーム

こんにちはかな？

みんなのアイドル、リームだよ～！

――誰がアイドルだバーカ！みんなのアイドルは詩音だよｗｗｗｂｙなっぺ――

……なんか電波が聞こえたけど無視無視♪

でも、ちょっとムカついたから……

「ブリザードインパルス！！！」

――ギャアアアアアアアアアアアアｂｙなっぺ――

ふぅ、すっきり♪

テキトーに技を作ったけど、意外と出せるもんだね♪

それで、話を戻すと……

僕は今、見知らぬ荒地にいます。

「ここどこなのー？コータぁ～……」

……

どこかの次元世界かな？でも跳んだ覚えなんて無いし。

「説明しましょう！」

スライムベス　が　あらわれた！　▽

「ちなみに私はベスではなく神です」

喋った！？そして心を読まれた！？っていうか……

「ベスじゃん。どうしたの？こんなところに」

僕は前に吼太の記憶を見せてもらったことがあるから、このスライムベスが神様だってこともあらかじめ知ってたんだよ。

……え？後書き？感想板？ナンノコトカナ？

「いえ、こちらに来たがっていた方が居たので、せっかくだから案内してあげていたんです」

「そーなのかー」

「ルー○アですかあなたは。というより興味なさげですね。あなたに一番影響があるのに」

「どういうこと？」

「端的に言えばあなたに会いに来た、ということです。あと、彼等

の用事が済まなければあなたは元の世界へは帰れませんよ？」

「んー、分かった。修練の門も、魔溜石の回路で自律稼動させてるし、会ってみるよ。でもまさか他の世界から僕のファンが来るなんて思わなかったな～♪」

「（完全に勘違いですがね。）……ではこちらです」

「はいよー」

少女移動中……

着いたところはコロシアムみたいな場所だった。僕はその中心に立っている。

「ここでお待ちください」

「分かった」

どんな子かな～♪

Ｓｉｄｅ　？？？

さて、ようやくアイツ等がいる世界にたどり着いたのだが……

「ここは……どこだ？」

「どこでもいいんじゃない？目的は変わらないんだしさ♪」

「それもそうか」

「いやぁ、待たせてすいません」

自称神のスライムベスが現れた。

なんでも吼太を転生させた張本人らしい。

「ちなみに私はベスではなく神です」

……出会うたびに言っているなこいつ。そこまで否定したいなら見た目を変えればいいだろうに。

「この姿が一番パワーロスが少ないんです」

「……心を読まないでくれ」

「これは失礼。ではこちらです。貴方達のために特別なフィールドを用意しました」

青年達移動中……

「では、心行くまで」

さて……殺るか…

Ｓｉｄｅ　リーム

向こうの扉から誰かが来る。

「ってあれってもしかして……」

「「根性叩き直しに来たぜリーム！」」

「月光閃火さんと月臣輝刃さんだー！！……サインとか？サインとかだよね？サイン書けばいいんだよね！？」

そうあってほしい願いを言う。

それに対して二人は……

「「……」」↑笑顔でサムズアップ

……よかった～、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩフラグじゃなくって……

「「……（黒笑）」」

↑サムズアップした親指を下に向ける

……

「いっ、イヤァァァァァァァァァァァ！！！！！……」

数時間後……

「ほらほら！こんなもんじゃ足りないぜ！」

「止めて！許してよぉ！」

「お前が詩音にしたことを思い出せ！」

「僕何もしてないよー！！」

さらに数時間後

「ここか！？ここなのか！？」

「止めてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「ダメだな！お前の性根が正常になるまでは！」

「イヤァァァァァァァァァァァ……」

さらに数時間後

Ｓｉｄｅ　ベス

「うぅっ……コータぁ……僕…汚されちゃった…汚されちゃったよぅ……（ビクッビクッ）」

「何をしたんですかあなた達は…？」

「「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだ♪」」

「……さいですか」

リリカルなのはでのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩっていうのは……まぁ、アレですね。

リームさん、ご愁傷様です。

「じゃあ俺達は帰るよ」

「吼太によろしく言っておいてくれ。会えなくて残念だともな」

「分かりました。それでは、元の世界にお送りします」

……にしても危なかったですよ。案内する世界を間違っていて、仕方なくリームさんだけをこっちに持ってきてお茶を濁したのがバレていたらどうなっていたことか」

「……興味深い話だね」

「詳しく話を聞かせて貰おうか…？」

……あるぇー？（・３・）口にだしてましたかねー？私。

「「さぁ、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか…？」」

……

さようなら、皆さん……

こうして、一人のユニゾンデバイスと、一体のスライムベスの命が儚くも消えた…

「待って！僕らまだ死んでない！」

「そして私はベスではなく神だと何回言えば（ｒｙ」

「ん？まだ元気があるみたいだな？」

「じゃあ、まだ大丈夫か♪」

「「いっ…いっ……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

## １０万アクセス突破記念　月＋狼→痴女＋ベス（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

トゥード『パチパチパチ』

なっぺ「今回はリームとベスが…」

リームとベスがビクビクしてる↑目線

なっぺ「……と、まぁこんな感じなので、休みです。月光閃火さん、すいません。こんな形になってしまいました」

吼太「ホントに何をやられたんだ？」

なっぺ「さぁ？さて、感想感謝コーナー！ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、雨季さん。感想ありがとうございました！ＫＯＵさんの二重投稿は片方削除しときますね」

吼太「んじゃあ、子育て日記」

コータと僕の子育て日記（はぁと）

作：トゥード

今回の日記は都合により私が書いています。どうやって？それは大

気中の魔力を…って、日記にこんなことを書いても意味ありませんね。

さて、何故私が書いているのかといいますと、魔草の大きさがとうとう７５ｍを超えてしまったのです。

位相を変化させてなんとか出来る範囲を超えてしまったため、現在マスターとリーム様が適当な次元世界に一時避難させているのです。

ですが、いよいよ人間化も近づいて来ました。どのような方になるのか私もデバイスながらに楽しみになってきました。

早く人間化出来ると良いのですが…

ではこのあたりで。

吼太「ってことをしてたんだ。月光閃火さん達が来る前に」

なっぺ「いよいよだねぇ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## １０万アクセス突破記念　誕生する命、襲い掛かる災難（前書き）

今回はＡｒｉｓｈｉａさんの『魔法少女リリカル……なんとか！』とのコラボです。

さらには、魔草がとうとう……？

あと、今回過去最長となりました。多分。

では、本編へどうぞ！

# １０万アクセス突破記念　誕生する命、襲い掛かる災難

Ｓｉｄｅ　優

「さて、と」

いろいろとあって（主に作者とかレイとか作者とかレイとかのせいで）、僕は今、吼太達の世界に来ている。

いや、来ているハズなんだけど……

「お父さん！なんで逃げるのさ！？ちょっと（自主規制）しようってだけなのに！」

「……パパー……♪」

「お父様！この私と禁断の親子愛を育もうではありませんか！」

「子供達にも大人気だねコータ♪じゃあ僕も便乗しちゃおうかな？」

『確かそのことを親子丼というのですよね？』

「ダメー！コータ君は私のなのー！」

「お前ら落ち着いてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

……何が起こってるの…？

Ｓｉｄｅ　吼太

時は数時間前に戻る。

今、オレ達はとある次元世界に来ている。

ここで、７５ｍ以上の大きさになった魔草を育てている。

ちなみに現在は約８０ｍ。そろそろ成長が止まって、人間化が始まる頃のはずだ。

まぁ、そんな訳で学校は3連休だってのもあり、最近はここにキャンプを張って待っているってわけ。

ちなみにメンバーは、オレこと吉谷吼太、リーム、（修練の門の中だけど）高町なのは、ユーノ。あえていうならレイジングハートとフォーティトゥード。そして何故かベス。まぁ、ベスには帰ってもらったけど。だって邪魔だし。

そして、いよいよ人間化が始まるってときに……

『マスター、魔草内部の熱源反応が急激に増加。危険です！』

「マジか！くっ……リーム！」

「オッケー！」

「「ユニゾン・イン！」」

リームとユニゾンして、《何か》を警戒する。しかし、一向に何かが起こる気配は無い。

『……トゥード、間違いじゃないよね？』

『間違いありません』

「でも何も来ないぞ……？」

その時だった。

突然、魔草から巨大な蔓が襲い掛かって来て、オレを締め上げながら、上に持ち上げて始めた！

余りの圧力に、皮膚が裂けはじめ、血が飛び散る。

『僕達を取り込む気！？』

「させるかよ！」

全身に螺旋力を張り巡らせて、その螺旋力を具現化する。その技は…

「フル……ドリライズッ！！！」

全身から大小様々なドリルが生やして、オレを締め上げてきた蔓を突き破る。

「花鳥風月（セイクー）！！」

花鳥風月を発動して空中でバランスを取る。気づけば、頂点が見える位置まで来ていた。

『……倒さなきゃ、ダメかな……？』

「……分からねぇ」

オレだって攻撃したくはない。一応、ここまで育てたのはオレ達だ。当然、愛着だってある。でも……

「……でも、狂暴化していて元に戻らないなら、オレ達の手で……終わらせよう」

『マスター……』

『……分かった』

天界力を限界まで練り上げる。これだけの大きさだ。恐らく、並の攻撃じゃ足りない。今までは使用を控えていたけど、今回ばかりは仕方ないだろう。

「行くぞ……十ッ星神器、魔『待ってください！人間化が始まります！』本当か！？」

トゥードの声を聞き、攻撃を中断する。

『間違いありません！熱源が急速に収束しています！』

とりあえず、地上に降りる。

『人間化……開始』

その瞬間、辺りは光に包まれた。

「ぶ、無事か？」

「何とか～……」

ユニゾンが解けてしまっていたらしい。リームが横で仰向けのまま返事をしてくる

『修練の門の反応を確認しました。なのは様達も無事です』

「そうか……魔草は？」

『……強力な妨害があり、確認出来ておりません。肉眼での確認をお願いいたします』

「分かった。……硬貨を風に変える能力！」

１０円玉を竜巻に変えて、魔草のあった辺りで舞い上がっていた砂塵を吹き飛ばす。

そこには、身長１７２ｃｍほどの、鮮やかな緑色の髪をたたえた少女が三人倒れていて……

「って三人！？なんで！？」

『恐らくは先程のマスターの血液が原因です』

「オレの血？なんで？」

『あの血液には特殊な物質や細胞が大量に含まれております。それにより、人間化の際にバグが発生し、一人に収束するはずが、三人に増えてしまったのかと思われます』

……まぁ、強力な螺旋遺伝子とか天界力使うために流れてた天界人の細胞とか、あげればキリがないけどさ。

「「「んっ……？」」」

おっ、気づいたか。

「よう。おはようさん」

「「「……」」」

三人ともこっちをじっと見つめてる。……そこまでまじまじと見んなよ……恥ずかしい……

「「「……だ」」」

「ん？何か言ったか？」

「「「お父さんだー！（……パパー！）（お父様ですわー！）」」」

三人が一斉にこっちに飛び込んできた……

「って待て待て！身体の大きさ考え「「「大好きー！（ですわー！）」」」てギャァァァァァァァァァ」

「元気だねー三人とも♪」

『これが結果オーライというものなんですね』

そこのデバイス二人。だべってないで助けてくれ。

さらに……

「特訓終了なのー！」

「やったー！」

来たよ。このタイミングで魔王が。さらに淫獣。お前はとうとう特訓中もフェレットモードを解かなかったな。もうそっちが本当の姿でいいんじゃないか？

そして魔草ｰｓ。いい加減オレの身体から降りてくれ。こっちは小学生の身体なんだ。成人女性三人を支えるには大きさが違いすぎるんだ。

「お父さんってちっこくて可愛いなぁ～♪」

活発そうな魔草娘（仮）。男に対して可愛いは微妙だぞ。あと耳を舐めないで。

「パパ……いい匂いです……」

大人しそうな魔草娘（仮）。腋に鼻を押し付けて匂いを嗅がないで。くすぐったいから。

「お父様！私（わたくし）はこの時この瞬間を一日千秋の思いで待っておりましたわ！！」

お嬢様的な魔草娘（仮）。会いたかっただけだよね？オレの手を貴女の股間に持って行こうとしてるのは関係無いんだよね？

「コータ君……これ、どういうことなの？」

「なのは……お前は分かってくれるよな？」

「……コータ君の……は私のモノなの…」

……自主規制的な言葉は言ってないよね？

『ユーノ！ユーノ！助けてくれ！』

最後の手段、最終良識ユーノに念話で助けを求める。しかし……

『この念話はただ今使われておりません。もう一度おかけになっても無駄なので諦めてください。貞操的な意味で』

裏切りやがったよこの淫獣。どうしてくれようか……

とりあえず……

「自分の位置と相手の位置を逆の位置に変える能力ァ！！」

ユーノと位置を入れ換えて脱出する。

『吼太！？何を……』

『この念話は（ｒｙ』

ユーノを見捨てて、全力で逃げ出す。

「あぁんっ、待ってくださいお父様！」

「お父さん！身体が熱いから一緒に冷まそう！？主に気持ちいいコトしてさ！」

「パパ……待って……」

「コータ君！Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよう！？肉体関係的な意味で！！」

「なんでオレの周りは痴女ばっかりなんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

そして、場面は冒頭に戻る。

Ｓｉｄｅ　優

「……そんなことがあったんだ」

苦労したんだね……吼太

「あぁ……さらに言えば海鳴に戻ればもう二人追加される…」

吼太……君はよくそんな環境で貞操を守り続けてられるね……？まぁ、僕もだけどさ……

ちなみに、痴女ｰｓは吼太がガードスキル、ハウリングで鎮圧した。

……ガードスキルのガードが貞操をガードしているとしか思えなかったのは仕方ないよね？

「で、だ。優。」

ん？まだ何かあるのかな？

「オレは非常に不機嫌だ。それは分かるな？」

「まぁ、そりゃあ……」

あれだけのことがあればねぇ……

「優はオレに訓練されに来た。合ってるな？」

「う、うん……」

……アレ？嫌ナ予感シカシナイヨ？

「一つだけ言っておく。……死ぬほど辛いぞ？」

……死なないよね？俺……

Ｓｉｄｅ　吼太

優にあるものを見せる。

「ご存知、ディメンションＡＲＭ、修練の門だ。」

優は若干青ざめた顔で見ている。

「トゥード……リームと強制ユニゾンだ」

『……オーライ』

リームとユニゾンして、リームの魔力を直接使えるようにする。

「さて、この修練の門の中は外のの約１／６０の速度で時が流れる。これに、１秒を１０秒に変える能力を使うとどうなると思う？」

ちなみに、この１秒を１０秒に変える能力は自身にしか使えない能力のはずなんだけど、Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒで設定をいじくったせいで、非生物相手ならば他にかけることも可能になった。便利だな。Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ。

「……１／６００の速度で時が流れるようになる？」

「正解だ。ではいってらっしゃい」

優の足元に修練の門が現れて優を飲み込む。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

え?中で何をするのかって?ユーノにやったやつの改良版だ。

……全ライダー、全モンスター、全怪獣に加え、全ゴセイマシン&ヘッダー、さらにはハーモニクスで大量に増えたオレ…

それらから《体術のみ》で逃げ切る。

そんな内容さ。簡単だろ?

数分後(優にとっては数十時間後)……

「さて、みんな。言いたいことを聞こうか?」

『コータ?なんで僕ユニゾンしてるの?』

リームが質問してくる。

「修練の門を使うためだ」

「「「(俺)(私)と肉体的関係を!」」」

魔草娘-Sが馬鹿なことを言ってくる

「却下だ」

「コータ君、この人達は誰？」

なのはが普通の質問をしてくる。

「家で育ててた魔草が人になった奴らだ」

「ふぇ！？」

「はい、次！」

「俺……生きてるよね…？」

優が息も絶え絶えに聞いてくる。そんなにきつかったか？

「心臓動いてるし、生きてるんじゃね？」

「……なんで僕を身代わりにしたのさ？」

ユーノが聞いてくる。

「手頃だったから。と、いうことで、ひとまず終了だ」

「お父様、よろしいですか？」

お嬢様的な魔草娘が話し掛けてきた。

「まずお父様をやめてほしいが……なんだ？」

「私達に名前を与えては頂けませんか？」

「名前……か」

「お父様につけて頂きたいのです」

とりあえず呼び名を変えるつもりは無いらしい。

「んじゃあ……」

名前はいくつか候補があって絞れなかったから、最終的に見たときのイメージで決めるつもりだったんだけど……まぁ、ちょうどいいか。

「まずお前」

お嬢様的な魔草娘を指す。

「お前は……プリムだ」

「プリム……ありがたく頂戴いたしますわ。お父様」

そう言うとプリムは艶やかに微笑んだ。

「お父さん！次は俺だぜ！」

活発な魔草娘が聞いてくる。

「じゃあお前は……ミカだ」

「ミカ……サンキュ♪お父さん♪」

ニッコリと太陽のように笑うミカ。

「……パパ？」

大人しそうな魔草娘が心配そうに聞いてくる。

「ちゃんとお前の名前もあるよ。お前は……ライラだ」

「ライラ……嬉しい／／／／」

少し恥ずかしそうに、微かに笑うライラ。

「そんで、お前達の苗字だけど……」

「？　お父さんと同じヨシヤじゃダメなの？」

ミカが心配そうに聞いてくる。

「それでもいいけど……まぁ、せっかく考えたんだし、一応二重性でもいいから受け取ってくれないか？……フラウリーナって苗字を……」

「……じゃあ……私は…ライラ・Ｆ・ヨシヤって…こと…？」

「そういうことになるな」

「じゃあ俺はミカ・Ｆ・ヨシヤか！なんかカッコイイな！ありがとお父さん！」

「それでは私はプリム・Ｆ・ヨシヤですわね。高貴たる私に相応しい性！流石はお父様ですわぁ！」

「むー、なんかずるいの！」

なのは。何故お前がむくれる？

「吼太……また気苦労が増えそうだね…」

優……お前ほどでもないさ……

「僕……帰っていいかな？」

ユーノ…気持ちはわかるが、オレを置いて行かないでくれ。

「これで一気に三児の父だね♪コータ♪」

リーム、お前は少し黙れ。

んで、オレ達の日常に、新たな仲間が三人増えたわけだ。

……これから先、オレはどうなるんだろう……

おまけ

優がふと思い出したように呟く。

「そういえば誰が長女なの？」

「おまっ！優〜！馬鹿ヤロォ！！んなこと言ったら………」

「「「俺！！（……私）（私に決まってますわ！！）」」」

「喧嘩になるに決まってるだろ！！」

「じゃ、じゃあ俺はこれで……」

「待　て　や　！……優、ちょっと…O☆HA☆NA☆SHI、しようか？時間10倍の修練の門で……」

「うっ………うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

## １０万アクセス突破記念　誕生する命、襲い掛かる災難（後書き）

なっぺ「ゥ後書きィ～、座談会ダァーッ！！！！！」

ベス「今回、酷い扱いしかされなかった神です。決してベスでは（ｒｙ」

なっぺ「今回は新キャラのフラウリーナ三姉妹に来てもらってます！」

ミカ「どうもー！」

ライラ「……どうも」↑頭を下げる

プリム「……」↑姿勢を変化させない

なっぺ「プリム、ちゃんと挨拶しろ」

プリム「私がお父様以外のものに頭を下げることなど、有り得ませんわ！」

なっぺ「……」

ベス「典型的なお嬢様ですね。しかも世間知らずタイプ」

なっぺ「気を取り直して……ライさん、雨季さん、月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！あと、Ａｒｉｓｈｉａさん。こんな感じにしか出来ませんでした。すいません。」

吼太「今回はかなり長かったな」

なっぺ「希望的なもんがあったからって、思わず二つを繋げちまったからな。仕方ない」

リーム「大分賑やかになったよねー♪」

なっぺ「分かってるか……今、時間軸は無印６話辺りなんだぜ……？」

プリム「進むの遅いと言っても限度があるでしょう？」

なっぺ「で、でもネタがまだたくさん…」

ライラ「いい加減……やろう……？」

なっぺ「…じゃあ、八人目の武器屋さんから貰ったやつかなり放置しちゃったからそれだけはやる……」

ベス「（あれですか……）では、それ以外は？」

なっぺ「いつか来るはずの２５万アクセス突破記念にやるよ……」

リーム「いつ来るかな？」

ミカ「いつかは来るんじゃない？」

吼太「意外と来年まで来なかったりな」

なっぺ「止めてくれ！……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## １０万アクセス突破記念　六本木から来た少女（前書き）

今回は八人目な武器屋さんから頂いた三つ目の贈り物が騒動を起こします！

# １０万アクセス突破記念　六本木から来た少女

Ｓｉｄｅ　吼太

ある日のことだ。

オレ宛てに荷物が届いた。人が一人ぐらい入れるような、ダンボールだ。

ちなみに今はなのは、アリサ、すずかが遊びに来ている。

そんで、面白いものならみんなに見せるつもりなんだけど、何が入っているかは分からなかったから、先に確認することにしたんだ。

答えを出す者（アンサートーカー）？あれは直視出来ないと発動しても予測にしかならないから、使ってない。

予測はあくまで予測だからな。

んで、廊下で開けたんだけど……

「ダーリン！大好きー♪」

……いきなり中に入っていた女性に抱き着かれました。

……ウ〝エ！？

「ダリナンダア〝ンタイッタイ！？」

思わずオンドゥル語で質問してしまう。

……いや、前世の頃に言ってたんだよ。たまに。

「簡単に言えばー、ヒ・ト・メ・ボ・レ……かなー♪」

「いや、かなー♪じゃねぇよ！」

つーか質問に答えてねぇし。まぁオンドゥル語で質問したオレも悪いけどさ。

「あのさ、君は誰だ…？」

「私は……「お父さん、何が来たのー？」……誰？あの娘？」

あまりに遅いオレを心配に思ったのか、ミカが様子を見に来た。つーか誰だか知らないがオレの……娘？に殺気を当てないでくれよ。

「いや、説明は面倒っつーかそもそもアンタは「お父さん……そいつ、誰？」……ミカ、お前も少し落ち着け」

ミカまで殺気を出しはじめやがった…

お前ら、戦闘狂（バトルジャンキー）か？戦闘狂（バトルジャンキー）なのか？

今までのあらすじー

ダンボール来た
←
ダリナンダア　ンタイッタイ
←
殺気
←
オレの部屋に移動
←
修羅場展開↑イマココ

……いや、なんだよこれ？

「初めまして。コータの正妻のリームです」

「コータ君の本妻の高町なのはです」

「コータの人生のパートナー、アリサ・バニングスよ」

「コータ君と夫婦の契りを交わした月村すずかです」

「お父様の禁断の愛を一身に受けている、プリム・F・ヨシヤです

わ」

「お父さんと禁断の親子愛を交わし合ってる、ミカ・F・ヨシヤだよ」

「……ライラ・F・ヨシヤ……パパとは……親子以上…いや…恋人以上の絆を……結んでる……」

「……とりあえず落ち着こうか」

誰かコイツらを止めてくれ！え？無理？

「ダーリンの妻？もーそーは痛い子の証だよー？さっ、ダーリン？こんなやつら放っておいて二人の世界に行こー？」

ブルータス（じゃないけど）、お前もか。

「コータ君……まさかこんなぽっと出の女の子についていったりしないよね？」

なのは、影でレイジングハートを構えながら言うセリフじゃないよな？それ。

「……とりあえず、アンタの素性が知りたいんだが？」

一応、答えを出す者（アンサートーカー）である程度は確認出来てるけど、念のために聞いてみる。

「ダーリンが言うなら……私はアリス。六本木に二人のオジサンと住んでたんだけどー……気づいたら真っ暗なとこにいて、とっても

恐くて……でも、ダーリンがそこから助け出してくれたのー♪」

「コータ………それどういうこと？」

アリサよ……その灼眼の少女が持ってるものに似た日本刀で何をする気だ？

「あのねー…有象無象のみんな？そろそろ邪魔になってきたからぁ……ダーリンと私のために……死んでくれる？」

「アリスちゃん…少し……O☆HA☆NA☆SHI…しようか…？」

……一つ分かることがある。

このままにしとくと確実にオレの部屋、つーかオレの家が消し飛ぶ。

とゆーわけで、オレのとる行動は一つだ。

「ガードスキル、ハウリングッ！！！」

「「「「「「キャアアアアアアアアアアアアアアア！！！」」」」」」

それからなんだかんだあって、アリスはオレの仲魔になった。

なんだかんだって何かって？

……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ　ｉｎ修練の門さ……

今ではすっかりみんなと仲良くなって、リームやミカなんかとは特に仲がよくて、一緒にショッピングに行ったりしてる。

あと、戦う力がなかったらしく、そのことを言ってる彼女があまりに悔しそうだったから、魔法（女神転生系とグズィ式）を教えてみている。覚えは悪くないし、戦力として考えられるようになる日は遠くないだろう。

……ただ、たまにプリムやなのはと砲撃対決するのはやめてほしいなぁ……

砲撃がぶつかり合うたびに修練の門が軋みをあげてるんだよ……

こんな感じで、メンバーが次々に増えている吉谷ファミリー。

…まだ仲間、増えるんだろうなー……

関係無い話になるが、とある世界の六本木で、アリスのことを探し回っている魔王と堕天使がいたとかいないとか。

## １０万アクセス突破記念　六本木から来た少女（後書き）

なっぺ「後書き座談会～」

吼太「言うことは？」

なっぺ「すいません。私、アリスのキャラ全く分かりませんでした。出来る限りは調べましたが、イメージと違う可能性が高いです」

吼太「白の書には出てるらしいぞ？」

なっぺ「マンガとアニメしか見てないんだよ」

吼太「えー、じゃあ感想感謝のコーナー。雨季さん、ライさん、月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「次回からはようやく本編に戻ります」

吼太「ジュエルシードの暴走か？」

なっぺ「だね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第二十九話　人の喧嘩に手ぇ出すな！（前書き）

久しぶりの本編です！

後、ユニークが一万人突破しました！やったね！

# 第二十九話　人の喧嘩に手ぇ出すな！

Ｓｉｄｅ　ユーノ

今日、なのはがアリサちゃんと喧嘩をしたらしい。

理由はなのはが魔法のことをしっかり伝えてなかったから。

アリサちゃんはそのことが気に食わなかったのか、なのはと話さなくなってしまったらしい。

このままではジュエルシード探しに何か支障が出るかもしれない。

それに、あの黒い魔導師のこともある。

でも、吼太にそのことを説明したら、

「ほっとけ。外野が出る幕じゃねぇよ」

と言って関わろうともしない。どうして……？

とにかく、最近はあの地獄の修練で停滞気味だったし、今日中に一個はジュエルシードを見つけておきたい。

なのはが帰ってきたら、すぐにでも出よう。

Ｓｉｄｅ　フェイト

「じゃあ、行ってくるね。はやて」

「夕飯までには帰ってきてやー」

はやての家から出て、街の空を飛ぶ。認識阻害をかけてるから、まじまじと見られない限りは大丈夫なはずだ。

今日はジュエルシードの反応を感知できた。

街の中辺りにあるらしいけど、それ以上は分からない。

「フェイト、頑張ろうね！」

反応のあった場所に向かう途中、隣を一緒に飛んでたアルフが話し掛けてくる。どんなときでも私のことを気にかけてくれる、本当にいい使い魔だと思う。

「うん……はやても待ってるし」

「今日は……確か、カレイの煮付けだったっけ？」

「うん」

「ま、はやての料理はどれもうまいからいいんだけどさ！」

はやての料理は本当においしい。インスタントの料理もまずくはないけど、はやての料理には敵わない。

私もアルフも、はやての料理は大好物だ。

「そうだね。早く見つけて帰ろう？」

「あいよ！御主人様！」

今日も…あの白い魔導師達に会わなければ…いいんだけど。

Ｓｉｄｅ　なのは

今日はちょっと遠出をしてジュエルシードを探索中。コータ君は私とは違う場所を探してくれてるの。

「なのはー！あったかー？」

「ううん。……もう、今日はタイムアップかな？」

私が言うと、コータ君は腕時計を取り出して、

「あぁ、もうこんな時間か。……あいつら、夕飯が遅れるとうるさいからな…」

って言った。

コータ君が言ってる《あいつら》っていうのは、フラウリーナ三姉妹って娘達で、最近コータ君の家に住み着いた、薄汚い泥棒猫達…

…じゃなくて、人達で、コータ君のことを父親と慕っているの。

……見た目はまるで立場が逆なんだけどなぁ。あっちはみんな見た目大人みたいだし。

彼女達も力はあるらしいけど、まだまだ経験不足だから、たまに修練の門で特訓してるみたいなの。

プリムさんとは戦ったことあるけど、私が戦った限りじゃ、砲撃が強いだけにしか見えなかった。近接戦闘も苦手みたいだし……なんか、昔の私みたい。コータ君の話ではまだ奥の手があるらしいけど……

とりあえず、今日はここまでにしとこう。

「じゃあ、僕はもう少し残って探してみるよ」

「うん、気をつけてね」

そう言って、ユーノ君と別れたその時、突然街の中に魔力が満ち溢れて来たの。

「強制発動!?こんな街中で!?」

「めんどーなことになりそうだなオイ!?」

私達は一瞬で気を引き締める。

「結界魔法！間に合えぇ！！」

ユーノ君の結界魔法が発動して、街の人達の安全は確保出来た。あとはジュエルシードを封印するだけ！

「「封印！」」

でも、封印をしようとしてたのは当然、私だけじゃなくって……

そこにいたのはあの、淋しげな目をした女の子。

ジュエルシードは二つの力で同時に封印をされたせいか、どちらの方にも行かず、宙に浮いている。

そして、私達の戦いが始まった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「出てこいよアルフ！決着、付けようじゃねぇか！」

オレがそう呼び掛けると、目の前にアルフが現れる。

「いいよ……アンタとの戦いもこれまでにしよう！」

「そうこなくっちゃな……さぁ、「チェーンバインド！」……はぁ！？」

アルフと戦おうとした瞬間、ユーノがアルフにバインドを仕掛けた。

……オイ？ＫＹはクロノの専売特許じゃなかったか？

「吼太！今のうちにジュエルシードを「くぅぉぉらユーノォ！テメェ何してやがる！」えっ、えぇっ！？」

「一対一（サシ）の喧嘩に手出しするんじゃねぇ！コイツはオレの喧嘩だ！」

「何言ってるのさ！なのはがあの魔導師と戦っている以上、ジュエルシードを格納出来るのはフォーティトゥードだけなんだよ！？」

「んなもん放っておけ！今は喧嘩のほうが大事だ！」

「あ、あのさぁ……アンタ達…？」

アルフが何か聞いてきてるけど、そんなんは関係ねぇ！！

「だぁかぁら！ジュエルシードをなんとかするのが先でしょ！？」

「ふざけるなっ！この喧嘩に決着をつけんのが…」

その瞬間、膨大な魔力が溢れかえったかと思うと、オレの周りに電撃がほとばしった。

「くっ……まさか、ジュエルシードが暴走したのか！？」

「そんな……フェイトぉ！！」

ユーノとアルフがなのはとフェイトの元に駆け寄る中、オレは一人、今の現象について考えていた。

「（今のはアルフか？……いや、アルフがまさかそんなやつだとは思えん。……だったらフェイト？……いや、あいつはなのはと戦っていたはず……だったら、こっちに攻撃はこない……プレシアさんの雷は紫色だ……リームはそもそもいないし、仮にいたとしてもあいつは氷結系だ……電撃なんて使えるわけない……ん？待てよ……？オレはさっき、なんて言ってた？……確か……）」

――「【ふざけるな】っ！この喧嘩に決着をつけんのが…」――

……まさか！！！

「……――――――！」

推測を確かめるべく、ある言葉を放つ。その瞬間、オレは雷に包まれた。

## 第二十九話　人の喧嘩に手ぇ出すな！（後書き）

なっぺ「後書きぃ……座談会だくぉらぁ！！」

リーム「出番無かったよくぉらぁ！！」

吼太「……リーム、お前は少し黙れ」

リーム「なんで僕が！？普通作者でしょ！？」

なっぺ「さぁ、感想感謝のコーナー行ってみましょ。ライさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、かみかみさん。感想ありがとうございました！」

吼太「久しぶりの本編だな」

なっぺ「遅れてすいません」

吼太「にしても……今回のって……」

なっぺ「それ以上はネタバレだ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十話　呪文を唱えよ（前書き）

今回は前回に比べて短いです。

# 第三十話　呪文を唱えよ

Ｓｉｄｅ　？？？

ジュエルシードが暴走しているその時、離れた場所でその様子を見ている人間が二人。

「……いいのか？あれで」

「あぁ。あのフェイトとかいう魔導師には早々に退散してもらわないと困るからな」

「……そうだな。全ては……」

「「我等が悲願のため……！」」

Ｓｉｄｅ　フェイト

私とあの白い魔導師が戦っていた時、突然どこからか魔力弾が飛んできて、ジュエルシードに命中した。

その瞬間、ジュエルシードに秘められた魔力が暴走を起こした！

誰がやったのか知らないけど、このままじゃこの街が危ないし、いずれははやてにも被害が！

でも、バルディッシュはさっきの衝撃で破損してしまったみたいだから、封印には使えない。

「バルディッシュ…戻って」

『イエス、サー』

バルディッシュが三角形の待機形態に戻って、私の手の甲に付く。

それを確認した私はジュエルシードを封印しようと駆け寄ろうとして…

「待ちな。そいつはオレの仕事だ！」

黒衣の……いや、金色に輝く魔導師に止められた。

「あなたは……？」

「……通りすがりの、魔導師だ！」

Ｓｉｄｅ　吼太

正直、オレにも状況がわからねぇ。ただ、理由はともあれ、使えているみたいだ。

……オレが一人だけで、魔術を！

気づいたのはさっきだ。

ふざけるな……この言葉の中にある物で、雷が出るのは一つしか思い浮かばない。

そう……

つまりは、魔物の子ガッシュ・ベル第一の術、【ザケル】。

金色のガッシュ！！に出てくる、雷の初期呪文だ。

本来ならば、魔力が無いに等しいオレは使えないはず。

だが、今は何故か使える。

……だったら、今はこの力をあれをどうにかするのに使わせてもらう！

「……【ラウザルク】ッ！！」

呪文を唱えると、オレに雷が降ってくる。しかし、この雷の目的は攻撃じゃない。

雷に篭められたパワーを纏うことにより、力、速さ、防御力、全ての身体能力を一時的だが大幅に引き上げる術だ。

これを使って、瞬時に移動し、フェイトを押し止める。

フェイトが不思議そうに聞いてきたから、それにカッコつけて答える。言ってみたかったんだよね。通りすがりって。

その後、オレは暴走しているジュエルシードに無理矢理近づく。

「ぐっ……さすがにキツいな……」

「コータ君！戻って！」

「無理だよ吼太！下がって！」

なのはとユーノがオレを下がらせようと説得してくるけど、正直、答えてるような余裕は無い。

ジュエルシードのすぐ側まで来ると、術を瞬時に切り替える。

使用するのは……

「【アム・ドゥ・スプリフォ】！！」

呪文を唱えた瞬間、オレの両手の周りに、オレの身体を握り潰せるように巨大な手のシルエットのようなものが現れる。

「なんだい！？あの魔法は！？」

「見たこと無い魔法……あれは一体……？」

アルフとユーノが驚きの声を上げる。

「行くぞ……！」

両手を動かすと、シルエットも同時に動く。

そうして、シルエットでジュエルシードを包みこむように動かし始めると、それに合わせて異変が起こり始める。

「暴走した魔力が……」

「消えて…いってるの……？」

フェイトとなのはは気づいたみたいだな。

そう、スプリフォと名の付く術の効果は【術式及び、魔力の消滅】。物体自体を消滅させる効果こそ無いが、魔力の暴走が相手なら、簡単に無効化出来る。

そうして、シルエットの両手でジュエルシードを完全に包み込むと、辺りに撒き散らされた魔力は完全に消え去った。

「トゥード、封印だ」

『シーリング』

そして、ジュエルシードが再封印されると、役目を終えたシルエットも消え去った。

「こっ、コータ君大丈夫!?」

なのはが心配そうに駆け寄ってくる。

「あぁ……」

「くっ……逃げるよフェイト！」

アルフはジュエルシードとフェイトを素早く回収すると、転移魔法を使って逃げてしまった。

「ジュエルシードが！」

「放っておけユーノ……また、次に取り返せばいいさ……」

オレは、もう一度自分の手を見る。

「（一体、何が起こったんだ?…オレに、何が……）」

その問に答えてくれる者は、誰ひとりいなかった……

## 第三十話　呪文を唱えよ（後書き）

なっぺ「ＨＡＨＡＨＡ～！後書き座談会デース！」

リーム「今回も出番が無かったデース！」

なっぺ「Ｏｈ！リームサン？次回にはきっと出番がアリマスヨ～！」

リーム「それは本当デスカ～？」

なっぺ「ニホンジン嘘ツキマセ～ン！」

吼太「誰かこいつらを止めてくれ……」

なっぺ「さてと、感想感謝のコーナー」

吼太「あたかも今まで普通に話してたかのように振る舞うなお前！」

なっぺ「なんのことでしょ。……Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、雨季さん、月光閃火さん。感想ありがとうございました！」

吼太「まさかオレが魔術を使うときがこんなに早くこようとはな……」

なっぺ「……さて、どーでしょー？」↑嫌らしくニヤニヤしている

吼太「……何をする気だ？」

なっぺ「何かをする気は無いよ。ではではこの辺で！次回もお楽し

みに！」

## 第三十一話　行き先はしっかり確認しようぜ？（前書き）

はい、何気に月光閃火さんとコラボです。次も出てきます。

# 第三十一話　行き先はしっかり確認しようぜ？

Ｓｉｄｅ　フェイト

あれから夜が明けて、朝になった。

結局、ジュエルシードは横から奪い取る形になっちゃったけど、私にも譲れない理由がある。

だから、あの二人と一匹には悪いけど、諦めてもらうしかない。

「……イ……ゃ…」

……でも、やっぱり出来れば戦いたくはない。私はジュエルシードが欲しいだけ。戦いたいわけじゃない。

「フ…ト…ゃん」

でもでも、戦わないとジュエルシードが取られちゃうし、そしたら……

「フェイトちゃん！……って、なんで泣いとるん？」

「はやて～……私、私～……」

「お～、よしよし……」

はやてが抱きしめてくれる。

……あったかい…

「落ち着いた？」

「うん……ごめんね？」

「気にせんでええよ？私もこうしてもらったし」

以前、はやてと一緒のベッドで寝てたときに、はやてが怖い夢を見たらしくて、泣き出してしまったことがあった。その時に私が抱きしめてあげたんだ。

はやてはそのことを言ってるんだろう。

……なんだか恥ずかしくて、顔が熱くなる。家族って、こんな感じなんだ……

記憶にはあっても、絶対に思い出せなかった、家族の温もり。

……ジュエルシードを集めたら、きっと…

「はやてー、ケーキ出来たみたいだよー？」

「わかったー！今行くでー！」

アルフがはやてを呼びに来た。そう、今日はやてはケーキを作ってくれてる。理由はお母さんへのお土産だ。

最初はそこら辺のケーキ屋さんで済まそうと考えてたんだけど、そのことをはやてに言ったら…

「そんなら私が作る！」

って言ってくれたんだ。

こういうのは気持ちだから、手作りのほうが良いといえば良い。

私も手伝って完成したケーキは、少しいびつだったけど、我ながらうまく出来たと思う。

「じゃあ、行ってくるね？はやて」

「気ぃつけてなぁ～」

はやては家でお留守番だ。最初は一緒に来る？って聞いてみたけど、「親子水入らずを邪魔するつもりなんて無い。私はしゃぶしゃぶの準備でもして待ってるで！」って言ってくれた。

……お帰りなさいを言ってくれる人がいる。それがただただ、嬉しかった……

「開け、誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主の元へ！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「強いな……輝刃…！」

「そっちこそな……吼太！」

今、オレは暇つぶしに、遊びに来ていた輝刃と模擬戦をしている。にしても、さすがは人狼（ワーウルフ）。瞬時の判断力と驚異的な身体能力には目を見張るものがあるな……こりゃあ、勝つためには全力出さなきゃダメか……？

余談だが、オレはまた魔術が使えなくなっていた。あの時使えてた理由は、次元震を起こしてしまうほど強大な魔力をＥＸクラスの魔力と誤認したらしく、オレの中のリミッターが外れて、魔術が使えるようになっていたらしい。

ただ、魔力は魔溜石がバリアジャケットに回している魔力の余剰分を利用しているに過ぎないから、強すぎる術は使用出来ない欠点がある。……残念だけどな。

…え？輝刃がいるなら月光閃火さんもいるんじゃないかって？もちろん。今は修練の門の中で、リームに骨抜きマッサージ中です。

声だけを流すと……

月：『かなり、凝り固まってるね…♪』

リ：『やめっ……んっ……』

月：『我慢しなくていいよ。すぐに心地良くなるから…』

リ：『あっ……そんなとこまで……いやぁ……』

月『嫌って言っても、身体は正直だよ？』

リ：『ダメェ……ほぐれちゃう…』

……いや、声だけだからだよ？普通にマッサージしてるからね？

……オイ、【マッサージ】の後に（性的な意味で）とか入れたやつ。もれなく確率変動弾の大量プレゼントだ。有り難く受け取れ。

『マスター、この近辺で次元転移反応を感知しました』

「誰だ？」

『魔力反応を照合……フェイト様とアルフ様です』

「（つーことは時の庭園に向かったのか…？）……よし！せっかくだし、オレ達も追ってみよう！」

「…何故だ？」

輝刃が不思議そうに聞いてくるけど、理由なんて一つしかない。

「……面白そうだからだ！」

しかし、この意見に異議を言うものがいた。

『お言葉ですがマスター。フェイト様とアルフ様の向かった次元座標が情報量の不足により、解析出来ません。転移するのは不可能です』

「魔術では、な。螺旋力を使った、螺旋界認識転移システムなら可能だ」

そう言うとオレは気合を溜めはじめる。オレの気合に呼応するかのように、オレの右手はドリルに変わる。思い浮かべるのは、フェイトの顔…！

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

気合の叫びと共に、空間にドリルを突き刺すと、まるで銀河のような転移ゲートが現れる。

「よしっ！行くぞ！」

オレはドリルを構えたまま、真っすぐゲートに突っ込んでいった。

Ｓｉｄｅ　三人称

そこには、少女とその親。その二人しか存在しなかった。

親―プレシア―は少女を痛め付ける。

彼女の目的を果たすためには、少女の出した結果はあまりに酷かった。そう考えていたからだ。

少女―フェイト―はそれをただただ受け止める。

少女は母親の笑顔。ただそれだけのために戦っていた。それはこれからも変わらない。

だからこそ受け止めるのだ。いつか、愛を受け取るために。

しかし、そこで思わぬ出来事が起こる。

まるでフェイトを護るように、プレシアの鞭の攻撃を防ぐように、鈍く銀色に輝く、螺旋状の溝が付いた槍―ドリル―が現れたからだ。

そのままドリルはまるで宙空を掘り進むかのように進むと、ドリルの後ろに人影があることに気づく。

それは、プレシアにとっては、計画の邪魔になる存在。

それは、フェイトにとっては、二度も自分を守ってくれた存在。

そう、それは……

「……アレ？もしかして、お取り込み中だった？」

我等が主人公、吉谷吼太である。

……若干締まらない登場の仕方ではあるが。

## 第三十一話　行き先はしっかり確認しようぜ？（後書き）

なっぺ「後書き座談会だ」

リーム「今回は普通なんだね」

なっぺ「ネタが尽きた」

吼太「ま、あれだけやってりゃあなぁ……」

なっぺ「早速、感想感謝のコーナー！」

リーム「Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、ライさん、月光閃火さん。感想ありがとうございましたー！」

なっぺ「久々だなぁ……高速更新……」

吼太「体調管理が出来ないお前が悪い」

なっぺ「さーせん」

リーム「私出れたよー！」

吼太「音声だけな」

リーム「ＬＩＶＥ音声だから出演と同意義だよー！」

吼太「……元気だな」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十二話　禁句は言っちゃらめぇ！（前書き）

今回はギャグです。

……まさかシリアスなプレシアさんの前でギャグを展開することになろうとは……

# 第三十二話　禁句は言っちゃらめぇ！

Ｓｉｄｅ　プレシア

コイツが……吉谷吼太…

私の目的を邪魔する存在の内の一つ…

それが、どうして時の庭園（ここ）に！？

「ん？アンタは……誰だ？フェイトの知り合いか？」

吉谷吼太が私のことを見ながら聞いてくる。

「そうだとしたら……どうするのかしら？」

「そりゃあ…「コータぁー！！！」どぶぉ！！？」

吉谷吼太が私の質問に答えようとした瞬間、吉谷吼太は彼の後ろから来た衝撃に吹っ飛ばされた。

「ありゃ？ここどこ？」

白銀の短髪をたたえた少女……確か、吉谷吼太の融合騎だったかしら？

「繋がったみたいだな」

「何何？うわっ！広いな～」

「でも、辛気臭いところですわね」

「……お化けとか……いそう……」

「こっ、恐いこと言わないでよライラ～！」

「きゃ～、お化け恐いよ～！ダーリン私を守って～♪」

……ぞろぞろとまぁお揃いで…

「え…？吼太……？」

「お、フェイトか。……お前、そんな趣味が……」

フェイトは今、バインドを利用して空中に吊られている。

なるほど、傍目から見ればそう見えなくもない。

「えっ！？ち、違うよ！／／／／／」

フェイトが赤くなって答える。

「じゃあ……アンタの趣味か！？」

……この男は何がなんでも趣味にしたいのかしら？

Ｓｉｄｅ　吼太

オレは内心ほくそ笑んでいた。

あの、辛気臭い雰囲気を壊せたからだ。辛気臭い雰囲気って嫌いなんだよオレ。何か肩身が狭く感じるし。

さっきまでのはある意味では演技だ。……ただ、本当に聞きたかったのか？と聞かれたらＹＥＳと答えるぐらいには興味はあるが。

……にしても、みんなついて来るとは思わなかったなぁ～……輝刃はともかく、アリスまでくるのは予想外だったな。まぁ、結果オーライだけど。

「吼太、ここってどこ？」

月光閃火さんが聞いてくる。

「時の庭園だな。テスタロッサ家の我が家みたいな感じか？」

「わかっているなら話は早いわ……出ていってもらえるかしら？さもなくば…」

プレシアさんが杖を片手に言ってくる。……脅迫じゃね？これ。

その時、思わぬ人物が動いた。

「さもなくば何？オバサン」

アリスである。

「っておま！何言ってんだよ！？」

「え？オバサンはオバサンでしょ？私、何かおかしいこと言った？ダーリン」

「オ……オバ……」

『マスター、プレシア様より大量の魔力を感知しました。危険です』

あーあー……プレシアさん絶対キレてるよこれ……

「フェイトォー！……えっ！？吼太！？」

普通このタイミングで来ますか！？アルフさん！！

……そういやアルフも【性悪女】とは言ってたけど、【オバサン】は言ってなかったかもなぁ……

「……消えなさい」

プレシアさんが雷を放つ。

「ヤバイ！みんな！オレの後ろに！威風堂々《フード》！！」

理想的な威風堂々でプレシアさんの雷を完全に防ぎきる。

あと一瞬遅れていれば、大ダメージは必死だっただろう。

「消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい消えなさい……」

ウワーオ、雷が止まないよー？

威風堂々が輝入ってきたよー？

「………ってオイ！理想的な威風堂々だぞ！？なんで輝が！？」

「オバサンだなんて……言うなァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

プレシアさんの渾身の雷がとうとう威風堂々を砕いた。

………理想的な威風堂々を砕くって…どんだけショックだったんだよ……

しかし、そこで力尽きたのか、プレシアさんは不意に倒れた。

「お、オイ！大丈夫か！？」

思わず駆け寄る。見てみると、脈はあった。死んではいないみたいだ。……無茶しやがって…

即座に使える回復術は……っと。

「………【砂時計に癒(テラピ)を加える能力】！」

能力を使うと、プレシアさんの肩辺りに砂時計が現れる。

【砂時計に癒(テラピ)を加える能力】は、対象者の痛みや苦しみを術者が小分けにして請け負うことで、傷や病気を治す効果がある。

砂時計は一種の指標であり、砂時計の砂が落ちきった時、その人は完全な健康体になる。

なお、今回は関係ないが、この能力は治す際に着ている服にも効果があり、汚れや傷等をも完全に無くしてしまうため、クリーニングに使える。

……これでプレシアさんの病気まで治っちゃったらどうしよう…まぁ、問題は無いけど……

とにかく、これでプレシアさんの命の安全は確保した。

オレはフェイトとアルフの方に向く。事の顛末を説明してもらうためだ。

「どうして……フェイトがやられてたんだ？」

「どうしたもこうしたもないさ…！ジュエルシードがまだ6個しか集めてないからってプレシアが制裁を……」

「いいんだよアルフ。お母さんの期待に答えられなかった私が悪いんだから……」

……

「でも！フェイトが頑張ってるじゃないか！それなのにあの女は！」

「それだけ期待してくれてるんだよ。きっと……だから、私はそれに答えたいんだ…」

……何だよ……この会話…

聞いて……いらんねぇよ……！

「あなたたち、馬鹿ではなくって？」

## 第三十二話　禁句は言っちゃらめぇ！（後書き）

吼太「後書き座談会の時間だ」

リーム「イェーイ！」

なっぺ「仕事取られた……えー、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん。感想ありがとうございました！」

リーム「時間は説教だよー！」

なっぺ「プレシアさんじゅうきゅうさい」

吼太「んなこと言ってると……」

なっぺ「アギャァァァァァァァァァァァ」

吼太「……ほらな」

リーム「ではではこの辺でー！次回も見てねー！！」

# 第三十三話　親の望み、子の願い（前書き）

深夜投稿！相変わらず眠いぜ！

# 第三十三話　親の望み、子の願い

Ｓｉｄｅ　吼太

「あなたたち、馬鹿ではなくって？」

そう言ったのはプリムだった。

「まぁ、同感だね～。こんな辛気臭いとこに住んでるこの人の気も疑うけどさ、その人をただただ庇ってるだけのアンタも大分馬鹿らしいよ？」

「……必要以上の慰めは……かえって傷になる……」

プリムの言葉に、ミカとライラが続く。どうやら、考えてたことはみんな一緒だったみたいだ。

「ねぇ……フェイトちゃん……だよね？この人は…フェイトちゃんのお母さん？」

リームが尋ねる。フェイトは話す気力も残っていないのか、頷くだけだ。

「……だったらさ、もっとわがまま言おうよ。迷惑かけようよ。親子ってさ……そんな風にただ従うだけの関係じゃないでしょ？」

「……わがまま？…私が……」

「そう、わがまま。僕もさ…吼太のお母さんに言われたことあるん

だ……もっと迷惑かけなさい！って……」

「でも！……でも、迷惑をかけたら、お母さんが困っちゃうし……」

気力が回復してきたのか、リームの言葉にフェイトが反論する。確かに、本来迷惑はかけていいもんではない。でも、それは一般的に、の話だ。

「それでいいんだよ。プレシアさんだって、子育ての辛さを味わいたいんだよ。……そうだろ！？」

プレシアさんに話しかける。意識が回復したのは【砂時計】からの痛みの量でわかっていた。

「……私を治したのは…貴方…？」

「まぁな。調子はどうだ？病気もある程度は回復しただろ？」

「何故それを！？……貴方は本当になんでも知っているのね……」

プレシアが呆れたように言う。

「何でも、か……まぁ、ある意味ではそうかもな……」

「その調子なら、アルハザードの位置も知ってそうね……」

「当然。……ただ、行けるわけじゃないけどな」

「何故…？」

プレシアさんが不思議そうに聞いてくる。

「まず、魔力が足らない。この場のみんなの分とジュエルシードを合わせても、ぎりぎり足りない。しかも、今回アリス達は連れていけないから、実質的には全然足らないんだ」

「ダーリン！私大丈夫だよ！？足手まといにはならないから！！」

アリスが抗議してくる。が、これにはれっきとした理由がある。引くわけにはいかない。

「緊急事態には螺旋界認識転移システムで帰還することになる。その時の目印は多ければ多いほどいいからな。だから、留守を頼む」

実はあともう一つあるんだけど、それは後でいいか。

「……わかった……」

「んで、二つ目。足がない」

「……？　脚ならみんなにあるじゃないか？」

「そうだよお父さん。寝ぼけてるの？」

アルフとミカが言ってくる。

「そっちの脚じゃねぇよ。…移動手段が無いんだ。単なる転移じゃ正直辛い。次元航行艦が一機欲しいところだな」

「そんな……アンタの能力で何とかならないのかい！？」

アルフが言ってくる。まぁ、無いってわけじゃない。

【写真を模型に変える能力】

【オブジェ（模型）を実物に変える能力】

この二つを使えば、いくらでも出せる。……元となる写真さえあれば、の話だが。

「現役の次元航行艦の写真でもあれば行けなくもないけど、今は無理だな。結局のところ、今はジュエルシードを集めるしか無いさ」

「……吼太は、私を手伝ってはくれないの？」

フェイトが聞いてくる。

「見つけるまで、封印するまでなら。ただ、その先は……」

「……わかった…」

フェイトが悲しそうに俯く。……いたたまれねぇ…

とりあえず、フェイトの頭を撫でてみる。……やっぱ、気持ちいいな…女の子の頭は。女の子ってみんな頭撫でた時の感触が気持ちいいもんなのか…？

「へっ……！？／／／／／／」

「嫌だったか？」

「う、ううん！…あの…もう少しだけ…／／／／」

「フェイトちゃんばっかりずるい～　コータ～、僕にも～！」

リーム達も飛びついてくる……って、

「待てお前ら！急にオレに飛びつくな（ドドドドド）ぁァァァァァァァァ！！！？？」

リーム達がぶつかってきた衝撃で、フェイトの頭から手が離れる。

「あっ……」って声が聞こえたのは気のせいだろう。

「降りろお前ら！そろそろ帰るぞ！！」

そうして何とかリーム達を退かしたオレは、またドリルを空間に突き立て、帰るための次元のゲートを作り出したのだった。

Ｓｉｄｅ　プレシア

ようやく帰ったわね……全く、やかましい連中ね……

「あの……私ももう行きます……」

「えぇフェイト。頑張っていらっしゃい？」

今日はもう仕置きをする気にはなれなかった。

……叩くのはやぶさかではないけれど、それでフェイトが壊れてしまっては元もこもない。

「では……」

「……待ちなさいフェイト。聞きたいことがあるの」

フェイトを呼び止める。

「…？　何ですか？」

フェイトがこちらを向く。どこから見ても、あの子にうり二つ。

……それも当然ね。だってフェイトは…

「お母さん…？」

「……いえ。このケーキ、貴方が作ったのよね？」

「あ、はい……友達に手伝ってもらって……」

「八神…はやてさんね……お礼を言っておいて」

「わ、わかりました。ではいってきます…！」

そう言うと、フェイトはアルフと一緒に転移していった。

今、この場にいるのは私だけ……

ケーキを一口、食べてみる。

「……あの子ったら、塩と砂糖をなんで間違えられるのかしら……？」

しかし、味はどう考えてもおかしいのに、不思議とこう思うことが出来た。

「……おいしい」

フェイトへの憎しみは、何故か消えていた。

## 第三十三話　親の望み、子の願い（後書き）

なっぺ「後書き座談会！今回はオレの体力的な都合で、さくさく行くぜ！」

吼太「ライさん、雨季さん、月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました」

リーム「次回はー？」

なっぺ「みんな大好き（？）ＫをＹな人が来ると思うぜ！多分！」

吼太「相変わらず無責任だな。では、この辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十四話　武者の鎧！それは……白い牛？（前書き）

はい、とうとうマイナー漫画のネタを出してしまいました！

今回出てきたやつの見た目を知りたい人は、Ｇｏｏｇｌｅ画像検索で、名前を入力して検索してみてください！

# 第三十四話　武者の鎧！それは……白い牛？

Ｓｉｄｅ　なのは

私は最近ではもう当たり前になった、ジュエルシードがとり憑いた怪物と戦いを繰り広げている。

コータ君は今日は遅れるらしくて、まだいないんだけど、私達も修練の門でした特訓のおかげで、並の相手には負けなくなっている。

今だに勝ててないのはただ一人。

あの、淋しげな目をした女の子だけ…

あの子とは、まだ名前の交換も出来てない。

名前……なんて言うんだろう……？

「なのは！」

「ふぇ！？」

怪物の攻撃を、ユーノ君がバインドを使って弾き返す。

…いけない、戦いで変なことを考えてると、私の方がやられちゃう！

「レイジングハート！」

『シューティングモード。Ｓｅｔ　ｕｐ』

Ｓｉｄｅ　フェイト

「見つけた…」

ジュエルシードは今回は木にとり憑いたみたいだ。

見れば、あの白い魔導師が既に戦っている。

「バルディッシュ」

『イエス、サー』

魔力弾を怪物に向けて放つ。攻撃はバリアに防がれてしまったけど、今の攻撃の目的は、怪物がこっちの存在に気づくこと。ただ、今の攻撃で白い魔導師にも気づかれたみたいだけど、問題は無い。

「ったく、生意気にバリアまで張るのかい？」

アルフが呆れたように言う。確かに少し面倒かもしれない。

「ねぇ！そこの子！」

白い魔導師が話し掛けてくる。

「今からユーノ君がバインドでこの怪物の動きを止めるから、その後手伝って！？」

この白い魔導師の攻撃力は確かに高い。あのバリアも貫けるかもしれない。それに、二カ所に同時に砲撃を受けたら、魔力を集中しきれずに、バリアの強度も下がるはずだ。

私は、その提案を受け入れた。

「それじゃあ行くよ！チェーンストラグルバインド！！」

まず、フェレットの子がバインドを掛ける。あれは……チェーンバインドとストラグルバインドの複合型かな？

「なのは！今だ！」

「うん！お願い、撃ち抜いて！ディバイィン！」

『バスター』

「貫け、轟雷！」

『サンダースマッシャー』

二人で一緒に砲撃を放つ。

しかし……

「きゃあ！」「うわっ！」

貫けなかった!?あれだけの攻撃で!?

その時……

「オレの出番、かな?」

黒衣の魔導師が、来た。

Ｓｉｄｅ　吼太

木の怪物の張るバリアが原作より強くなってるな……

せっかくだし、あれ使ってみるか。

「リーム!ジッパーだ!」

『あいよー!』

リームは既にユニゾンしている。

リームがジッパーを発動すると、オレは中にいるやつを《呼び出した》。

それは……

「ブオォ～」

……

「「「「へっ！？」」」」

「コータ君……それ、何？」

なのはが呆気にとられつつ、聞いてくる。それもそうだろう。

出てきたのは、白くて饅頭みたいな姿をした、牛のような生物だったからだ。とても、戦闘に役に立ちそうには思えないだろう。

「こいつは牛の鎧。名前はブオーだ」

とりあえず、軽い説明をする。

「ブオー……？」

「鎧……？」

「なんか、すっごい柔らかそうなんだけどさ……」

上からユーノ、フェイト、アルフの順に、感想を言ってくる。

「まぁ見てなって！行くぜブオー！」

「ブオッ！」

そう言って、オレはブオーに飛び乗る。

すると、徐々にブオーの身体にオレの身体が沈み込み始めた。

「コータ君!?なんか沈んでるよ!?」

「心配すんな。…っと、忘れるとこだった……シュシュム～♪」

「シュシュムって何なのぉぉぉ!?」

なのはの絶叫が響き渡る。怪物はユーノのバインドが今だに破れないらしく、一向に攻撃は来なかった。

そして、オレの身体が完全にブオーと一体化すると、ブオーの身体に異変が起こる。

まず、腕が生え、脚の形状が変化し、ブオーの顔が凛々しく変化する。

そして、鎧を纏った顔が出現し、一人の武者が顕現する。

頭には立派な飾りを付け、背中には小さな翼、肩には身の丈ほどもある巨大なブースターを付けた、武者。

その名も…

「武者大覚醒!!武王頑駄無（ぶおうがんだむ）!!!」

「「武王……頑駄無……？」」

なのはとフェイトが名前を反芻するように呟く。

「あれが……吼太なのかい……？」

アルフが信じられないように言う。

「吼太……君の能力は本当に摩訶不思議だよ…」

ユーノが呆れたように言う。

……まぁ、漫画でみたときはオレも呆れたけどさぁ……

「行くぜ！封印解放！！」

身の丈近くもある鞘に入った剣を取り出して、地面に突き刺す。

そして、剣の鍔辺りに付いている封印の札ごと力ずくで鞘から剣を抜く。封印の札は、剣を引き抜く力に耐え切れず、真ん中から破れさった。

「宝剣！絶光超（ぜっこうちょう）！！！」

絶光超を抜いた瞬間、地面に刺さっていた鞘からマグマが飛び出し、木の怪物に殺到する！

怪物はマグマをバリアで防いでいるが、それで精一杯のようだ。

その隙を逃さず、絶光超を下段に構えたまま、肩のブースターを全開にして一気に怪物に突っ込む！

「素敵に無敵に超ヤル気！天衣無縫の武者奥義ぃ！」

絶光超に、オレの身体から出る思いの力、武者魂が纏い付く。武者魂の影響か、絶光超の辿っていく軌跡に光が追随していく。

「武王！昇！光！斬！！！」

技の名前を叫びながら、大きく絶光超を下から斬り上げる。強力な武者魂を纏った絶光超は、木の怪物を、バリアごと真っ二つにした。

さらに衝撃はそれだけで収まらず、辺りの森をねこそぎ薙ぎ払い切ったところでようやくその威力を失った。

爆心地とも言えるジュエルシードの周りは、マグマのせいで隕石が落ちたようになっていた。分かりやすく言えばクレーターだな。２０ｍぐらいの大きさの。

「「「「……」」」」

なのは達は呆気にとられて、全く動こうとしない。大丈夫かこいつら…？

「あ～、お前ら～？大丈夫か～？」

結局、なのは達が再び動き出すのに、数分間かかってしまった。

## 第三十四話　武者の鎧！それは……白い牛？（後書き）

なっぺ「後書き座談会ヒャッホウ！」

吼太「とうとう武者〇伝を出したか……わかる人なんていないんじゃないか？」

なっぺ「……まぁ、デビチルよか遥かにマイナーだけどさ……」

吼太「……まぁ、カッコイイとは思うけどさ…」

なっぺ「肩にブースターはマジカッコイイって思ってます！では感想感謝のコーナー！吼太！」

吼太「あいよ。……Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、雨季さん、ライさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「月光閃火さんから、【複合式究極超絶次元航行戦艦　アマテラス】を頂きました！都合上、しばらくは保管させて頂きます！！」

吼太「個人単位で次元航行艦を運用するには免許が必要なんだよな。この世界では」

なっぺ「月光閃火さんすいません。そういうことなので」

吼太「次回は……恐らくヤツが来るな…」

なっぺ「一真の大嫌いなアイツだな。ではではこの辺で！次回もお

楽しみに！」

# 第三十五話　法より喧嘩（前書き）

今回はみんな大好き（？）なあの黒い子が登場！

# 第三十五話　法より喧嘩

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太はブオーと分離すると、なのはとフェイトに封印を頼んだ。体力を消費しすぎたらしく、封印に回す体力が残っていないようだ。

「（武者魂の力はこれから先、使い所を考えないとな……）」

『『シーリング』』

吼太が武者魂の使い方について考えていると、レイジングハートとバルディッシュがジュエルシードを封印したようだ。

これでひとまずは安心だろう。

「ありがとう……助かった」

フェイトが吼太達に礼を言ってくる。

「いいってことよ」

「でも…ジュエルシードは、譲れない…！」

「あの！あなたの、名前は…？」

なのはがフェイトに名前を聞く。ここまで、名前を聞く機会が無かったためだろう。タイミング的には微妙だが、他にいつ聞く機会がくるか分からない以上、判断としては間違っていないだろう。

「……フェイト…フェイト・テスタロッサ。この子はバルディッシュ」

フェイトの声に反応するバルディッシュ。

「私は高町なのは…この子はレイジングハート」

バルディッシュと同じように、レイジングハートもなのはの声に反応する。

「フェイトちゃん！私はフェイトちゃんとお話がしたいだけなの！……お願い…」

なのはが聞く。しかし、フェイトの答えは……

「話をしてもきっと……何も変わらないから……」

「ッッ！！？」

その声をきっかけに、互いにデバイスを構え、一気に突進する二人。

そして、互いのデバイスがぶつかり合った瞬間……

「ストップだ！ここでの戦闘は「喧嘩の邪魔をするんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」危険すぎゅぉぉぉぉ！！！？」

……突然二人に割って入った少年が吼太に蹴り飛ばされ、吼太もろとも海に沈んだ。

Ｓｉｄｅ　なのは

……

はっ！？あまりの事態に頭が止まっちゃってたの！

フェイトちゃんはまだ混乱してるみたい。

えっと……私はジュエルシードの封印をして、それからフェイトちゃんとお話しようとしたんだけど……断られちゃって……それで、戦うしかないかな？って思って、レイジングハートを持って戦おうとしたんだけど……

間に誰かが突然出てきて、何かを言ったかと思ったら、コータ君が突っ込んできて……

それで二人して海に……

「そうだ！コータ君！？コータくぅぅぅぅぅぅん！！！？」

……

「吼太……もしかして死んじゃったのかい……？」

魔法少女リリカルなのは　～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～

完？

ボゴボゴボゴ……

「あ、浮き上がってきたよ」

ユーノ君の言ったとおり、海から誰かが浮き上がってきた。

ザバァァァァ！！！

「「『殺す気（カテメェェェェェェェェェェ）（イィィィィィィィィィィィィ）（か君はァァァァァァァァ）！！！！！？』」」

……ふぇぇぇぇぇぇぇ！？

「転移したそばからいきなり蹴ってくる奴がいるか！僕に恨みでもあるのか！？」

「なんで海の中でオレの足を掴んでんだよ！？危うく溺れかけたぞ！！」

『コータと心中するならともかく、知らない人と心中する趣味なんて僕には無いよ！？』

コータ君とリームさんともう一人が言い争ってるんだけど……

「……フェイト、行こうか？」

「……そうだね」

あ、フェイトちゃん達帰っちゃう。

「あっ！そこの二人待ｔ「テメェの相手はこのオレじゃぁぁぁぁ！！！！！」邪魔をするな！公務執行妨害で逮捕されたいのか！？」

「公務だか豆腐だかなんだか知らねぇが、人の喧嘩を邪魔しといてんな権利があると思ってんのか！？」

「僕は時空管理局執務官だ！逮捕の権限くらいある！！」

「大層なご身分じゃねぇか！？上等だ！！時空管理局がなんぼのもんじゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！」

コータ君と男の子は口論を続けている。

……どうしようかな…？

『クロノ！いい加減にしなさい！』

あ、何か出てきた。

「か……艦長……！」

『全く……これで執務官だなんて……我が子ながら恥ずかしいわ……』

「も、申し訳ありません……」

あの人の子供なんだ……

『そこの君。ちょっと来て貰えるかしら？話を聞きたいの。あと、そこの二人も』

急に私達にも話が来て、少し驚いたけど、コータ君も行くみたいだし、私も行くことにしたの。

……ところで、どこへ？

私達は、次元航行艦【アースラ】まできたの。ここに私達に会いたいって人がいるみたい。

「バリアジャケットとデバイスは解除しなよ。そのままでは窮屈だろう？」

「敵陣のど真ん中で武装を解除する馬鹿がいるか。バーカ」

男の子……クロノ君の提案をコータ君が一蹴する。……バーカは酷いと思うなぁ…

「……君はいちいちしゃくに触る言い方をしてくれるな……時空管理局は司法組織だ。危険は無いに決まっているだろう」

「保障なんてどこにもねーだろ馬鹿。それに時空管理局なんて初耳なんだよターコ」

「魔導師で時空管理局を知らないなんて、君こそ馬鹿だろう。バーカ」

「ふ、二人とも落ち着いて……」

知らない男の子が二人を諌めてる。

……アレ？ユーノ君がいない……どこいっちゃったんだろ……？

「なのはからも言ってもらえない？僕だけじゃ止められそうにないんだ」

「えっと……あなたは？」

「えっ？やだなぁ……忘れたの？僕だよ僕。ユーノ。この身体は久しぶりだよね」

……

「ふ、ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？」

「「どうした！？何かあったのか！？」」

コータ君とクロノ君が息ピッタリに聞いてくる。……仲悪いんじゃなかったの？

「「ハモんなお前！」」

あ、やっぱり仲悪い。

って、そういうことじゃなくて！

「ユーノ君って、ユーノ君って、その、あの、だ、だって……ふぇぇぇぇぇぇーーーー！？」

「落ち着けなのは！」

「何か問題があるのか！？」

コータ君とクロノ君が立てつづけに聞いてくる。

「いや、だって……」

混乱しちゃって、何がなんだかもう……

「な、なのは?僕達が最初に出会った時って、僕はこの姿じゃ……?」

ユーノ君もびっくりしたみたいで、そんなことを聞いてきた。

「違う違う!最初からフェレットだったよ!!!」

私の話を聞いて、ユーノ君が考え込む。過去の記憶を思い出してるみたい。

なんか、ポクポクポクポクって聞こえてくるような気がする…

そして、数秒後…

チーン!

「あ!そうだった!ゴメンゴメン、この姿、見せてなかった」

「だよねだよね!?びっくりした~」

そんなこんなで、結局リンディさんが待ってるところに行くまでに、大分時間がかかることになっちゃったの。

「……遅いわねぇ…」

## 第三十五話　法より喧嘩（後書き）

なっぺ「後書き座談会じゃ！」

吼太「老人かテメェは」

なっぺ「なんだよー、もう少しオブラートに包んで言ってくれよー」

吼太「老人でありやがりますか貴様は」

なっぺ「包み方おかしいよ！？」

吼太「さ、感想感謝のコーナー行くぞ」

なっぺ「……酷い……」

吼太「うるせぇよ。オレは今、猛烈に不機嫌なんだ」

なっぺ「クロノが原因か……」

吼太「わかってんならそれ以上言うな。ほれ、さっさとやれ」

なっぺ「わかったよぅ……えー、ライさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ｂｉｓｙさん、月光閃火さん。感想ありがとうございました！」

吼太「月光閃火さんから、転移拠点（テレポート・ポータル）を頂きました！ありがとうございます！……で、これでアルハザード行けるらしいけど？」

なっぺ「物語の大筋が変わっちゃうから、本編ではそうそう使えないけど、ちょっとした時に使っていく予定」

吼太「武者〇伝の知ってる読者がいるとはな」

なっぺ「びっくりだよ。そりゃあ、オレ一人しか知らないとは思ってなかったけどさ……」

吼太「インターネットは広いな」

なっぺ「これからもマニアックなネタを折り込んでいきたいね」

吼太「……読者が離れるぞ？」

なっぺ「だってＦａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ……夢物語だもん！」

吼太「……まぁ、いいけどさ」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十六話　決意（前書き）

さぁ、無印ラストが見えて参りました。

# 第三十六話　決意

Ｓｉｄｅ　吼太

クロノと口喧嘩しながら歩いて行くと、ある部屋にたどり着いた。

その部屋の中は何故か和風で、なのは達をさらに混乱させたようだ。

……リンディさんは話を聞きたいんじゃなかったのか？混乱する要素ばかり増やしてどうする？

「艦長、来てもらいました」

クロノが声をかけると、お茶を飲んでいた女性が反応する。

「お疲れ様。まぁ三人ともどうぞどうぞ。楽にして？」

そう言って、椅子ならぬ座布団を勧めてくるリンディさん。

それに対して、なのはとユーノは正座で座り、オレは胡座をかいて座る。

そうして、まずはオレ達の状況を説明した。ジュエルシードのこととかだな。

「それで、僕が回収しようと…」

ユーノが話を終える。

「立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある」

リンディさんがユーノを褒めるが、それに付け加えるようにクロノが口を挟む。

「いいじゃねぇか。テメェの後始末をテメェでやろうってだけだ。別におかしなとこなんてねぇだろ」

「そんなわけにいくか馬鹿。つい数日前だって、ジュエルシードによって発生した次元震が確認されている。これ以上素人の手に任せてはおけないんだ」

オレが反論するが、クロノに一蹴される。

……一回、ぶっ飛ばそうかな？こいつ…

「そうね、クロノの言う通りだわ。……これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。あなたたちは自分の世界に帰還してください」

その命令とも取れる宣告に対して、なのはは戸惑いを、ユーノは申し訳なさを、オレは怒りを表す。

「これは次元干渉に関わる事件だ。一般市民が介入していいレベルじゃない。……これ以上は君達を巻き込むわけにはいかない」

クロノが念を押してくる。

……そろそろ限界だな。

「…まぁ急に言われても「待って下さい！」……何かしら？高町なのはさん？」

リンディさんの言葉を遮って、なのはが口を開く。

「確かに私は……最初は成り行きみたいな感じでジュエルシード探しをしてました……でも、今は違うんです！自分のために、ユーノ君のために！みんなのために…それに……」

そこで言葉を区切り、こちらを見てくる。……何かあるのか？

「……と、とにかく、私は途中で投げ出したくありません！お願いします、私にも手伝わせてください！」

と、なのはが頼み込む。

「リンディ提督…僕からもお願いします。もともとは僕の不手際で起こったこの事件……巻き込んでしまって、なのは達には申し訳ないんですけど、僕一人じゃあここまでジュエルシードを集めることも出来ませんでした。…なのはと、レイジングハートと、吼太と、フォーティトゥード、リームさんに、僕……このメンバーだったからこそ、ここまでやってこれたんです！お願いします！まだみんなと別れたくないんです！」

ユーノも必死に頼み込む。

それに対してクロノは苦い表情を浮かべ、リンディさんはおもしろそうに、こっち……主になのはとオレを見ていた。

……何かオレの顔に付いてんのか？

「……あなたたちの決意はわかったわ。あなたは？」

リンディさんがオレにも聞いてくる。

「オレはそこまで大層な理由なんてありませんよ。……ただ、友達を助けたいだけです。そのためならオレは……」

そう言って、オレはギガドリルを具現化し、壁に突き刺す。

その瞬間、辺りにアラームが響きはじめる。

『艦長！何者かにハッキングを受けています！ダミーもファイヤーウォールも効きません！』

エイミィさんが回線を開き、リンディさんに通信してくる。

「なんですって！？」

オレがドリルを抜く。その瞬間、ハッキングが収まり、アラームも止まる。

「……吼太さん…あなたは……？」

「オレは……友達のためなら、この艦を潰すことも厭わないつもりです」

それから話を続けた結果、オレ達はアースラの中に留まって、ジュエルシードの探索を続けることになった。

それで、戦力の再確認のため、オレ達の実力を確認することになったのだが…

「驚いたわね……」

「はい。現時点でなのはちゃんは空戦Ｓ＋、ユーノ君は補助魔法に限ればＳＳ、リームちゃんは空戦ＡＡで、吼太君は魔力量こそ最低のＦ－ですけど、総合的な実力はＳＳオーバー……高ランク戦力が一気に四人ですよ？」

「……化け物だな…」

リンディさんの声に、エイミィさんが補足するように言葉を放ち、クロノが率直な感想を述べる。

……オレはともかく、なのはと特にユーノがめっちゃくちゃ強くなってんな……化け物も頷ける…

リームもリミッターかけてA＋だし……実質的にはオーバーSランクが四人と考えていいかもしれない。

「こんにちは～……あれ？ここは？」

「途中でフラウリーナ三姉妹を拾ってきたぞ」

月光閃火さんと輝刃がフラウリーナ三姉妹連れてやって来た。

「よぅ。ここは次元航行艦アースラの中だ。所用でちょっと、な」

「そうなんだ……あ、これ転移拠点。忘れないうちにあげとくから。アマテラスは聞いた位置に置いて来たよ」

「ん、どーも」

月光閃火さんから転移拠点を受け取る。他に受け取る予定だった、次元航行艦アマテラスは、あのリームがいた次元世界に隠して来てもらった。あそこ知的生命体はいないはずだからな。

不意にプリムが近づいてきた。話したいことがあるみたいだ。

「お父様、私達もう修練の門だけでは物足りなくなってしまいました。稽古をつけて頂けませんこと？」

「いいぜ。ちょうどアースラには訓練施設があるしな。いいよな？リンディさん？」

「えぇ、構わないわ……その人達は？」

リンディさんが聞いてくる。

「オレの友達と……子供みたいなもんですかね…？」

「パパ……私…頑張った……」

「おぅ、よく頑張ったな」

オレが頭を撫でると、ライラは気持ちよさそうに目を細める。

「あー、ライラばっかりずるいー！俺にもやってくれよお父さん！！」

「おぅ。ミカも頑張ってるんだな。偉いぞ～」

ミカの頭を空いていた片手で撫でる。

「えへへー」

「……♪」

二人とも気持ちよさそうだ。

そして、クロノはオレが見た目成人女性の頭を撫でる様子をア然として見ていた。

「君は……何なんだ……？」

「とおりすがりの魔導師だ。覚えて……おかなくていい」

## 第三十六話　決意（後書き）

なっぺ「あっとがっき座談会～♪」

吼太「今日は雨季さんのところより、アリシャコンビがきてます」

アリシャ「「よろしくお願いしま～す」」

なっぺ「……本編で空気な二人は、最終的に出番を他の小説に求めた、と」

ア「仕方ないじゃない。もう半分後書きの住人なんだから」

シャ「全ては出番のためです」

吼太「（……結局後書きのままなんだけどいいのか…？）……んじゃ、せっかくだし感想感謝のコーナー頼む」

アリシャ「「雨季さん、ライさん、月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「……何故だろう、何かが空しい」

ア「それ、どーいうことよ」

シャ「どうせ私達は空気ですよ」

吼太「つーかよく考えればシャ○ルさんは一応ここではフライング出演じゃ……って、あれ？名前が言えない…」

なっぺ「都合上、音声を編集しています、と」

吼太「二人がかわいそうじゃねぇか」

なっぺ「アリシャだから大丈夫じゃね？」

アリシャ「「何その嫌な保障！？」」

吼太「……それもそうか」

アリシャ「「納得しないで！？」」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十七話　友達に…なりたいんだ（前書き）

今回はオリジナル設定がいくつかでてきます。

# 第三十七話　友達に…なりたいんだ

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、アースラに来て数日が経った。

ジュエルシードもかなり集まり、答えを出す者（アンサートーカー）によれば後は海にある六個のみになった。

……クロノとは出撃のたびに喧嘩ばかりしていたけどな！

そして今日、フェイトが行動に出た。

「何があったんだ！？」

突如として鳴ったアラートに、クロノが反応する。

「海上にて、強力な魔力反応！」

サーチャーから送られてくる映像を見ると、フェイトが巨大な竜巻に何とかして近づこうとしているのがわかった。

「何とも呆れた無茶をする娘だわ…」

「無謀ですね……間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を超えている！」

リンディさんの言葉にクロノが追随する。

「フェイトちゃん！…あの！私急いで現場に「その必要は無いよ。放っておけば、あの子は自滅する。……仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」……でも！」

なのはの嘆願をクロノが一蹴した。……

「オイまっくろくろすけ」

「だれがジ○リキャラクターだ！？」

オレの言葉に即座にツッコミを入れるクロノ。……ジブ○なんてよく知ってたな。

「オレは待ってるだけなんてつまんねぇことをする気はねぇ。止めても行くぜ？」

「君を止める気はない。むしろ醜態を曝してこい」

「「クロノ（君）！？」」

クロノの意外な反応に、リンディさんとエイミィさんが驚きの表情を見せる。

「よし……リーム……は、ダメか……プリム、ライラ。行くぞ！」

「お父さん、俺は！？」

ミカが、一人呼ばれなかったことに反応する。

「ミカは……リームとアリスの介抱をしてやってくれ。あの二人

戦闘不能だしな」

ちなみにリームとアリスの二人は先程まで、月光閃火さんと輝刃のお仕置きを受けていたため、完全に気絶している。

さらに言えば、ミカは魔力量がオレのＦ一よりも下、つまりは０なので、今回の作戦には不向きなのだ。

「ミカ……二人を……守って…ね？」

「この私が珍しく人に頼るんですから、しっかり答えてもらいたいものですわ」

ライラとプリムがミカに激励を送る。うん、いい姉妹だ。

「よし、出撃「待ってコータ君！」……どうしたなのは？」

「私も、行くの！」

「僕も！」

なのはとユーノがまた言ってきた。

「馬鹿か君達は！？さっきの話を「でもコータ君達は行かせるんでしょ？」……クッ！」

自らの行動が裏目に出たなクロノ。なのはの反論に対抗出来てない。

「んじゃ、何も問題無いということで、出撃！！！」

オレ達が転移した後も、フェイトは一心不乱に竜巻を何とかしようとしていた。

「フェイトちゃん！」

なのはが呼び掛けると、フェイトはひとまず攻撃を中止して、こちらに来た。とりあえず敵意が無いことは理解してもらえたようだ。

……ん？

「フェイト、アルフはどうした？」

「……住んでるところの近くに魔導師の反応があったから、同居人の人を守ってもらってる」

この時に他の魔導師なんていなかったような……？イレギュラーか？

「まぁ、それならいいや……みんな！これでこっちはちょうど六人！一人一つ……で、どうだ！？」

「「「「「異議無し！」」」」」

「じゃあ行くぞ！」

そう言うと、オレは花鳥風月を全開にして一番奥の竜巻まで行く。

「竜巻相手にはこいつだ！コォールッ！」

デビライザーにカードを読み込ませる。すると、特徴的な音声が響き渡る。

『ＫＡＩＺＩＮ　ＲＩＤＥ　【ＷＥＡＴＨＥＲ　ＤＯＰＡＮＴ】！』

喚び出したのは、ウェザードーパント。【天気の記憶】を持つ怪人だ。

……カイジンライドが普通に入っていたのに気づいた時は驚いたなぁ…

「ついでだ。こいつも持って行け！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　【ＸＴＲＥＭＥ】！』

さらに、デビライザーを発射台にして、とあるエネルギーをウェザードーパントに注ぎ込む。

それは、地球の記憶そのものと直結し、ドーパントに無限大の力を与えるエネルギー。その名もエクストリーム。

そして、エクストリームの力を注ぎ込まれたウェザードーパントの身体から緑色の光が溢れ、その姿が変化する。

今、ウェザードーパントは、ウェザーエクストリームへと進化した。

「さぁ、全力全開、手加減無しだ！！！」

オレの掛け声に反応し、ウェザーエクストリームがジュエルシードが起こしたそれに負けないぐらい巨大かつ強力な竜巻を作り出し、ジュエルシードの竜巻にぶつける。二つの竜巻は互いに力を打ち消し合い、消滅した。

「ふぅ～……お疲れさん」

ウェザーエクストリームを送還した時には他のみんなも竜巻をなんとかしたみたいだ。

そして、なのはとフェイトとオレの三人で、一人二つずつ封印する。

そして、ジュエルシードの封印が終わった時、なのはが口を開いた。

「あのっ……フェイトちゃん…いいかな？」

フェイトは無言で頷く。

「フェイトちゃん……私、フェイトちゃんとお話がしたくてここまでやってきたの……ジュエルシードの暴走で出てきた怪物との戦いも、封印も。でも、今は少し違う。お話もしたいんだけど、それ以上に……

フェイトちゃんと、友達に…なりたいんだ」

「……ぁ……」

フェイトがうろたえてる。……そんなにあわあわすることか？

オレ？乱入しようとしてるクロノと死闘を展開中。ここは意地でも通さねぇぞ！ってな。

その時だった。

『フェイト……貴女の使命を思い出しなさい……』

「この声……プレシアさんか！？」

「プレシア！？どういうことだ馬鹿吼太！」

「まっくろくろすけは黙ってろ！」

フェイトは、震えながら、バルディッシュを握りしめている。動揺してるのは誰の目から見ても明らかだった。

「……くっ！」

『ハスタームーブ』

バルディッシュから音声が響いたかと思ったら、フェイトの姿と６個のジュエルシードが消えていた。

これは……あの、アルフがいつか使ってた力か……デバイスを介してる分、アルフより安定してた。だが……

「（まだ、不安定だ……いつ時空の歪みに巻き込まれてもおかしくない……）」

全く、こいつらは人にどれだけ心配をかければ気が済むんだ？

そして、その日の夜、フェイトからなのはへ。アルフからオレへ、決闘のメールが来た。

# 第三十七話　友達に…なりたいんだ（後書き）

なっぺ「後書き座談会だコンチキショー！」

吼太「うっせ！」

なっぺ「（、・ω・、）」

吼太「しょんぼりしてもうるさいもんはうるさいんだよ」

なっぺ「さて、今回はいくつかオリジナル設定が出てきました、っと」

吼太「まず、カイジンライドだが、これは普通にライドブッカーの中に入ってた。次にウェザーエクストリーム。アタックライド、エクストリームで進化した、ウェザードーパントの究極の姿。要は井坂先生歓喜」

なっぺ「あと、アタックライド、エクストリームはガイアプログレッサーで進化するであろうドーパントをエクストリーム態にする効果があります。なので、クレイドールエクストリームはもちろん、ナスカエクストリームやテラーエクストリーム。果てはスイーツエクストリームやライアーエクストリームなんかも作れます」

吼太「それからハスタームーブ。これは周りの時空間から自分を切り離し、独自の時間に移動することで超加速をする魔法だ。ただし、フェイトのもアルフのも、現時点では不完全。いつ時空間の移動に失敗するかわかったもんじゃない」

なっぺ「ハスタームーブの語源は、クトゥルフ神話の風の神、ハスターから持ってきました」

吼太「んじゃ、感想感謝のコーナーいくか」

なっぺ「おう。ライさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、かみかみさん。感想ありがとうございました！」

吼太「次回は決闘か」

なっぺ「さて、吼太とアルフの闘いにとうとう決着が！？」

吼太「なんで疑問形？」

なっぺ「さぁな。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十八話　決着、そして……（前書き）

とうとう、とうとう吼太とアルフの戦いに決着がつきます。

# 第三十八話　決着、そして……

Ｓｉｄｅ　なのは

とうとう、この日が来た。

私とフェイトちゃんの闘いに、決着をつけるときが。

…出来れば、戦いたくない。

でも、私もフェイトちゃんも、譲れないものがあるから。

だから、私は言う。

「賭けよう！お互いが持つ全てのジュエルシードを！」

二人の、最後の闘いが始まった。

Ｓｉｄｅ　吼太

なのはとフェイトが戦っているすぐ近くの海上。

「……来たか」

あの日はあいつがオレを待ってた。

そして、今日はオレがあいつを待っている。

……面白い因果だ。

「……待たせたみたいだね」

「大したことないさ」

一部始終だけ見れば、恋人同士の会話に見えなくもない。

ただ、することはまるで違う。

流れるのは攻撃のぶつかる音が奏でる交響曲（シンフォニー）。

舞うのは闘いの輪舞曲（ロンド）。

それは美しく、力強く、そして儚い。

「さぁ……闘ろうか」

アルフが構える。

「コータ…勝とうね？」

隣のリームが話し掛けてくる。

…返す答えは、一つ。

「…当然だ！オレを誰だと思っていやがる！！」

「それでこそ吼太だ！だからこそ倒す価値があるのさ！」

そう言い放ち、アルフの姿が消える。

いや、消えたんじゃない。

超高速で動いているから、見えてないだけだ。

「「ユニゾン・イン」」

リームとユニゾンをする。ユニゾンにより、オレの身体及び、感覚能力が強化される。

それは、答えを出す者（アンサートーカー）とて例外ではない。

より早く、より正確な答えが出て来るようになる。

それにより、オレにはアルフの狙いが手に取るようにわかるようになった。さらに…

「ダウンロード……ナルガクルガ」

『了解。バリアジャケット、Ｓｅｔ　ｕｐ　ナルガクルガ、眼部及び耳部、鼻部を特殊召喚。具現化します』

オレの顔が変化する。感覚器に優れたモンスター、ナルガクルガのものだ。

「なんだい！？そんな動物の耳付けて、ふざけてるのかい！？」

「……ちげぇよ」

「……まぁいいさ。どっちにしろ、アンタにアタシは止められない！！」

アルフが凶悪なまでに威力の高まった拳を突き出す。

それに当たれば、いくらオレでもただじゃ済まないだろう。

……当たれば、だが。

「避けた！？」

アルフの拳はオレを捕らえず、アルフは海に突っ込みかけて、ギリギリで止まる。

「……成る程。その眼、耳、鼻……五感の全てを使ってアタシの動きを捕らえたってことかい」

「これでテメェのスピードとも互角だ！」

「上等！」

そうして、また超高速の戦いが始まる。

オレが拳を突き出せばアルフは蹴りで答え、アルフの乱撃に、オレは当て身で答える。

互いが互いの攻撃を知っているからこそ出来る、最高の戦い。

……ワクワクするな！

『凍てつきの刃！』

「そんな氷程度！」

リームがオレの手刀に氷を纏わせ、氷の剣を作り出すが、アルフの拳がそれを砕く。

「くらいな！チェーンバインド！！」

「ハンドソニック！ｖｅｒ５！！」

アルフのチェーンバインドを、オレの両腕に顕れた悪魔のような禍々しさを持つ双刃の武器で弾く。

気づけばいつの間にか、暗かった辺りには光が差し始めていた。

『マスター、特殊召喚の維持限界が近づいてきています。急いでください！』

『体力もヤバイよコータ！』

「お互い……限界が近いみたいだね……」

「これで、最後にしようじゃねぇか……ガードスキル、オーバードライブ！」

筋力を格段に引き上げるガードスキルを使い、最後の一撃に備える。

そして、互いに拳を構える。

静寂……

そして、二人の間に木の葉が舞い落ちる。

その瞬間、二つの影が動き出す。

「「ハァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！！！」」

二つの影が、ぶつかった。

「……負けたよ。アンタの勝ちさね…」

勝ったのはオレだった。

とはいえ、ギリギリだったのは間違い無い。

この身体は体力がまだ無いからなぁ……

もっと鍛え上げないと。

「いや、アルフも強かったよ。……っと、あっちも決着がついたみたいだな」

巨大な桜色の魔力砲撃が見える。恐らくなのはの魔王砲撃……もとい、スターライトブレイカーだろう。

……ハスタームーブ対策に、クロックアップを使うライダーや、高速移動が得意なモンスターと多く戦わせてたのが幸を成したかな？

「こっち側の完全敗北かい……悔しいねぇ」

「……悔しいなら悔しそうな顔をしたらどうだ？」

「そんな清々しい顔で言われてもねぇ♪」

いつの間にユニゾンを解いたのか、隣に立っていたリームも言う。

「……ふふふ」

「……ははっ」

「……くくく…」

「「「あっはははははは！！」」」

理由なんて無い。ただ、ただ可笑しかった。

笑いが響き渡る。

しかし、事態はそこで終わらなかった。

紫色の雷がなのはとフェイトの周りに落ち、二人が怯んだ隙に、全てのジュエルシードが奪われてしまった。

……どーやら、プレシアさんはまだアルハザードに行く気らしいな。

「アルフ……ちょっとだけ、手ぇ貸せや」

「何を……する気だい？」

「決まってるだろ……曲がって歪んで捻れた運命を、叩き直しに行くのさ！！！」

## 第三十八話　決着、そして……（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

吼太「うぃ～、疲れた～」

なっぺ「さぁて、今回は大激戦お疲れ様、吼太」

吼太「まぁな」

なっぺ「んじゃあ、感想感謝のコーナー！雨季さん、月光閃火さん、ライさん。感想ありがとうございました！」

吼太「さて、次回は決戦だ！」

なっぺ「運命、ぶち壊せよ？」

吼太「あぁ！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第三十八話おまけ　星と雷の戦い（前書き）

感想でなのは空気ｗｗｗって言われまくったので、思わず書いてしまった。

後悔はしていない。

## 第三十八話おまけ　星と雷の戦い

Ｓｉｄｅ　フェイト

戦いが始まる。

互いの全てのジュエルシードを賭けて、二人の信念がぶつかり合う。

私は負けるわけにはいかない。

ここまで手伝ってくれたアルフのため、他でもない私自身のため。

そして何より……お母さんのため。

『ハスタームーブ』

戦いが始まってすぐに、私はハスタームーブを使った。

なのは、って娘には悪いけど、正直時間をかけてなんていられない。

お母さんの身体はもう限界だ。まだ動ける内に、お母さんの望みを叶えてあげたい。

そのためなら、卑怯者にだってなってやる。

「ハァァァァァァァッ！！」

サイスフォームにしたバルディッシュを振るい、なのはを斬る。非殺傷設定だから死にはしないけど、強烈な魔力ダメージで気絶するのは間違いない。

でも……

『ディバインセイバー』

「（止められた!?）クッ……」

私の攻撃は、なのはのデバイス――レイジングハートだったかな――から発生した魔力刃に防がれてしまった。

このままでは危ないと思って、素早く距離をとる。

……強い。

これまで何度か戦ってきたけど、そう思ったのは今回が初めてだ。

最初は、ただの魔法を覚えただけの女の子に見えた。

次に会った時は、底しれぬ何かを感じて、思わずまだまだ練習中だったハスタームーブを使ってしまった。

三回目は、ジュエルシードの暴走のせいでうやむやにはなったけど、決してあの娘は私に引けをとらなかった。

そして今回……

どれだけ、強い思いを持ってここにいるのかはわからない。でも、思いなら私も負けてない。

だから……倒すんだ！！

Ｓｉｄｅ　なのは

危なかった……あと少し防御が遅れてたらやられてた。

やっぱりフェイトちゃんは強い。

……でも、もう私も負けてない。一方的にやられるだけじゃ、ない。

「ディバインシューター！」

『ディバインシューター』

「シュウウウウーーーーッツット！！！！！」

四発の魔力弾を放つ。もちろん、誘導弾。

でも、これの真の目的は攻撃じゃない。

「くっ……」

でも、フェイトちゃんならこれぐらい簡単に避けちゃうと思った。

だから、あのディバインシューターは囮。

「たぁぁぁぁぁ！！！」

「接近戦！？」

ディバインセイバーを真っすぐ構えて、フェイトちゃんに一直線に突進する。

そのスピードは、フェイトちゃんでも驚くほど速い。

ディバインシューターを避けて、空中でのバランスを僅かに崩していたフェイトちゃんは、間一髪のところで私の突進を避ける。

でも、体勢は大きく崩れた。

それが、私の狙い。

「……誘導弾！？ぁっ…！」

最初に放ったディバインシューターを消さずに置いといて、死角から攻める。

フェイトちゃんもギリギリで避けるけど、一発だけ当たった！

フェイトちゃんの体勢が崩れる。

「セイバァァァー、シュゥゥゥゥーーーーート！！！！！」

『セイバーシュート』

ディバインセイバーの魔力刃を砲撃に変えて放つ。

大きな魔力爆発が起こった。

……やり過ぎちゃったかな？

「……強いね。君は」

その声が後ろから聞こえた。急いで後ろを振り向くけど、その瞬間に私の両手に黄色に輝く光の輪がついて、私の動きを止めた。さらに両足にもついて、私は全く身動きが出来なくなった。

「でも、これでおしまい」

フェイトちゃんはそう言うと、ものすごく魔力を練りはじめた。

直感が告げる。次の攻撃はきっと、フェイトちゃんの特別な技だって。

必死に逃げようとするけど、フェイトちゃんのバインドがそれを許してくれない。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。」

フェイトちゃんの周りに大量の光球が顕れる。

もう、逃げてる時間なんて、無い。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト…」

そして、フェイトちゃんの最大の魔法が…

「撃ち砕け……ファイア！」

今、放たれた。

Ｓｉｄｅ　フェイト

フォトンランサー・ファランクスシフト……あまりに強力で、アルフには使用を制限させられ、リニスには「発動、命中さえすれば、防げる相手はまずいないでしょう」とすら言わせた、今の私の、最大の魔法。

これで、決着はついたはずだ。

そう思った、その時。

「痛た……凄い攻撃……でも、撃ち終わるとバインドも解けちゃうみたいだね…」

まるで無傷にしか見えない、なのはがそこにはいた。

そんな……あの攻撃をどうやって…？

「じゃあ、次はこっちの番！ディバイィィィン、バスタァァァァァァーーーーー！！！！！」

強力な砲撃が私に襲い掛かる！

なんとか、ラウンドシールドを発動して直撃は避けたけど、砲撃はまだ収まらない。

この威力、持続力、発射速度……どれを取っても私を完全に超えている。

ハスタームーブはもう使えない。ファランクスシフトで殆どの魔力を使ってしまった上、バルディッシュも限界に近い。

なんとか、私一人で防ぎきらないと…！

そして、永遠にも思える数秒間が経過して……

ようやく、砲撃が終わった。

これだけの砲撃だ。さすがに魔力は残っていないだろう。

そう思ったとき…

「…バインド！？」

私の四肢はバインドで封じられていた。

ここから導き出される答えは一つ。

しかし、私にはもう、僅かな魔力も残ってはいなかった。

「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！！」

なのはがとてつもなく巨大な魔力を……いや、あれは大気中の魔力も集めている！？

足りない魔力を、大気中の魔力で補っているんだ！

つまりは、収束砲撃！

『スターライトブレイカー』

「スターライトォォォ、ブレイカァァァァァーーーーーー！！！！！」

そして、理不尽なまでの魔力の奔流が私を包み込み、私は意識を手

放した。

Ｓｉｄｅ　なのは

気絶したフェイトちゃんを急いで回収して、私は空中を飛んでいた。

正直、結構辛いんだけど、だからといってフェイトちゃんを捨てたりなんて出来ない。

『なのは、大丈夫!?』

ユーノ君から念話が入る。

『ユーノ君?うん。終わったよ』

『怪我はない?フェイトって娘は?』

ユーノ君も心配してくれていたみたい。

『うん。大丈夫。フェイトちゃんも無事だよ』

『そっか……』

その時、私達の周りに紫色の雷が落ちた。

直接当たりはしなかったけど、そのショックで思わず目をつむって

しまう。

その隙に、あらかじめ外に出しておいたジュエルシードが全て奪われてしまった。

『なのは！無事か！？フェイトは！？』

『大丈夫！フェイトちゃんも！』

心配したのかな、コータ君が念話をしてきてくれた。ちょっとだけ嬉しいかも。

『よし、ならアースラに戻ってくれ。時の庭園に殴り込みに行くぞ』

『時の……庭園？』

って何だろ？

『なぁに、最終決戦をしに行くだけさ』

コータ君……そんな軽い考えでいいの？

## 第三十八話おまけ　星と雷の戦い（後書き）

なっぺ「後書き！」

なのは「座談会なのー！コータ君コータ君！私、今回沢山出たよ！褒めて褒めて！」

吼太「ん……これでいいのか？」

なのは「……にゃ～♪」↑頭ナデナデされてる

なっぺ「……このリア充どもめが！」

吼太「うっさい」

なっぺ「……感想感謝のコーナーです。Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、雨季さん、月光閃火さん。感想ありがとうございました！」

吼太「さて、次回こそ決戦だよな？」

なっぺ「多分、絶対」

吼太「どっちだよ」

なっぺ「まぁ、その時の気分次第。十中八九決戦だけど」

吼太「無印編もクライマックスだな」

なっぺ「さぁ、頑張るぞ！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第三十九話　ＦＡＴＥ（前書き）

今回は少し長いです。

# 第三十九話　ＦＡＴＥ

Ｓｉｄｅ　プレシア

ジュエルシードが全て集まった。

しかし、これで管理局に気づかれてしまっただろう。

私だって馬鹿じゃない。

あんなことをすれば管理局が気づくのは分かっていた。

……でも、これでいい。

全ては、あの娘のため。

私の可愛い……娘のため……

Ｓｉｄｅ　吼太

なのはとフェイトの決闘が終わり、オレ達はアースラに戻っていた。

エイミィさんを始めとするアースラスタッフのみんながジュエルシードが次元移動するときに反応を追っていたおかげで、時の庭園の

座標を割り出せたらしい。

それで、今アースラに乗って向かっているんだけど……

「だいたいてめーら分かってんのか？時間の移動っつーのはなぁ…」

「うぅ……」

「吼太……そろそろ止めてくれないかい？フェイトも限界みたいだしさ…」

「ダメだ！お前らがハスタームーブの危険性を熟知するまではな！」

目的地に着くまでの間、フェイトとアルフを叱ってました。

だって、マジで危ないんだもん。ハスタームーブ。

そして、いよいよ時の庭園に直接転移が可能になった。

どうやら、管理局魔導師が既に先行して入っていったらしく、オレ達がブリッジに来たときにはプレシアさんと、プレシアさんを囲む管理局魔導師がモニターに映っていた。

なのははフェイトを連れ出そうとするが、フェイトは画面を見つめ

たまま、動かない。

『プレシア・テスタロッサ！時空管理法違反及び、管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します！』

『武装を解除して、こちらへ！』

管理局の魔導師がプレシアさんに投降を呼び掛ける。が、それに対してプレシアさんは身動き一つせず魔導師達を睨んでいた。

そのとき、魔導師の一人が《アレ》を見つけてしまった。

『こ、これは…！？』

「あれって……！？」

なのはも驚く。……いや口に出したのがなのはなだけで、オレとプレシアさんを除き、この様子を見た人はみんな驚いただろう。

そこにあったのは、フェイトとうり二つな少女が入ったポッド。

特に、フェイトは驚いただろう。なにせ、自分がいるようにも見えただろうからな。

『アリシアに触らないで！！』

プレシアさんの雷が、管理局魔導師をまとめて薙ぎ払った。

ダメージはかなり大きく、誰ひとりとして起き上がらない。

「回収急いで！」

リンディさんの命令を受け、素早く回収されていく管理局魔導師。

……ダメダメじゃねえか。

『……もう、ダメね。管理局にここまで侵入されてるようじゃ…私も堕ちたものね。でも……もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間も……この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも……』

……ん…？

『聞いていて？あなたのことよ、フェイト。…せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない…私の…お人形…』

……おかしい……

『最初の事故の時にね…私は実の娘…、アリシア・テスタロッサを亡くしているの。

私が最後に行っていた研究は…使い魔とは異なる、使い魔を超える…人造生命の生成。そして、死者蘇生の秘術。【フェイト】、この名前は…当時、私の研究に付けられた開発コードよ。』

なんで……そんなに悲しそうなんだよ…

『だけどダメね……ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は、所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ。アリシアは…も

っと優しく笑ってくれたわ。アリシア…は時々ワガママも…言ったけど…私の言う事を…とてもよく聞いてくれたわ……』

なんで……涙を流しながら言ってんだよ……

『アリシアは…いつも私に優しかった。フェイト……やっぱりあなたは、アリシアのニセモノよ……せっかくあげたアリシアの記憶も…あなたじゃダメだった…』

なんで……そんなに後悔の表情を浮かべてるんだよ……

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だからあなたはもう要らないわ……どこへなりと…消えなさい……』

なんで……そんなに目が穏やかなんだよ……

『イイ事を教えてあげるわ…フェイト…あなたを作りだしてからずっとね……？私はあなたが……あなたが……』

……なんで……なんで……

『……ダメね。本当に…』

なんで……覚悟をした目をしてるんだよ……！

「様子がおかしい……？」

リンディさんが言う。

『管理局の皆さん。私はプレシア・テスタロッサ。ジュエルシードを奪ったのは私です。私の娘…フェイト・テスタロッサ、そしてその使い魔アルフ。そこにいる二人は私が命令に従っただけの、いわば犠牲者です。どうか罪に問わないであげてください。私は……』

そう言って、魔法陣を展開するプレシアさん。

その魔力にあてられて、ジュエルシードがエネルギーを放ち始める。

『……罪を、清算します』

「艦長！ジュエルシードから発生した魔力がどんどん膨れ上がっています！さらに、時の庭園の周りに強力な結界が発生！」

エイミィさんが報告する。

オレの答えを出す者（アンサートーカー）が答えを出す。

「……プレシアさんはジュエルシードの暴走を使ってアリシアと一緒に、時の庭園ごと消え去るつもりだ！」

「「「「「本当（か）！！？」」」」」

オレの言った【答え】に対して、みんなが反応する。

「マジだ！こうしちゃいらんねぇ！今すぐ出るぞ！！」

そう言って、オレはアースラの転移門（ゲート）に入る。

「お父様！私も！」

「今回は俺も行くよ！」

「……私も」

プリム、ミカ、ライラも来る。

「コータ君！私とユーノ君も！」

なのはとユーノも来た。

「君達！管理局の指示無しで動いたら…！」

クロノが何か言ってきたが、軽く無視。

でも……

「……お前は、来ないのか？」

フェイトは、ゲートの側まで来たものの、後一歩を踏み出せずにいた。

「フェイト……」

アルフが心配そうに言う。

「私は……私……」

フェイトは何かを言いたそうにしているが、うまく言葉が纏まらないのか、吃り続ける。

「……迷いがあるなら、来るな」

「！？」

きつい言葉だけど、仕方ない。

オレが言わなければ、多分フェイトはろくな覚悟もせずに戦いに来てしまうだろう。

原作とかなり違う展開になってしまった以上、これから先に何があるか分からない。どんな危険が待っているか予想が出来ないのだ。

覚悟の無い奴を、これから先に行かせるわけには行かない。

そう考えての判断だ。

「……コータ……私は…」

「……覚悟が決まったら来い」

そう言って、フェイトの頭を撫でるオレ。やっぱり気持ちいい。女の子の頭は撫でられるために感触が強化されてるんだろうか？

「あぅ……／／／／／」

フェイトが真っ赤になってる。…風邪か？

「コータ……」

「コータ君……」

「お父様……」

「お父さん……」

「……」

「ダーリン……」

リーム、なのは、プリム、ミカ、ライラ、アリスの順に話し掛けてくる。

……オカシイナー、タダ呼バレタダケナノニ寒気ガスルヨー？

「「「「「「O☆HA☆NA「何をしてるんだ君達は！」……チッ」」」」」」

ナイスだクロノ！馬鹿とKYは使いようだな！

そして、オレ達は決戦の場に向かった。

決心のつかない、フェイトを残して…

## 第三十九話　ＦＡＴＥ（後書き）

今回は体調が優れないため、後書き座談会は休みます。

まーたさん、ライさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、かみかみさん、マイペースさん。感想ありがとうございました。

次回は……まぁ、決戦その２です。

## 第四十話　したいこと（前書き）

今回は前半が少しギャグ、後半はシリアスな感じで行きます。

# 第四十話　したいこと

Ｓｉｄｅ　吼太

時の庭園の入口に来た。

ジュエルシードが２１個全て発動しているせいか、辺りには尋常じゃない魔力が満ちている。

これだけあれば、オレの魔法もかなりの種類が使用可能だろう。

そして、オレ達を出迎えてくれたのは大量の傀儡兵。

「邪魔だテメェらぁ！！！」

そう言うと、オレはジッパーの中から二つのシルバーアクセサリー……ＡＲＭを取り出す。一つはリング、一つは円盤が幾つも連なったもの。

その二つのＡＲＭに対して、魔溜石を通して魔力を注ぎ込む。

「エレクトリックフェザー＆フリスビー！！！」

突如として辺りに大量の羽と円盤が出現し、そこから雷撃が迸しる。

雷撃が辺りの傀儡兵を一気に薙ぎ払ったが、それでもまだまだ大量に残っている。

「まだ残ってるか！だったら…「待ってお父さん！」……なんだミ

カ？」

「ここは俺達に任せてよ！」

「お父様の手を煩わせるまでもありません！私達三人だけで十分ですわ！」

「……時間…無いから」

ミカ、プリム、ライラが言う。

確かに時間は無い。下手したらばオレ達もプレシアさんの壮大な自殺に巻き込まれてしまうだろう。

「分かった！でも無理はするなよ？ヤバくなったらアースラに戻れ！いいな！？」

「「「はい！」」」

そうしてオレ達は、ミカ、プリム、ライラの三姉妹にここを任せ、先に進む。

途中の道にも傀儡兵はいたが、それらをあしらいつつ突き進んで行く。

しかし…

「完全に塞がれてるな……」

クロノが言う。道は一本道だったのだが、今になって道は分かれ、しかも大量の傀儡兵によって、道はアリの通る隙間も無いほど封じられていた。

「オレとまっくろくろすけで道を開く。なのはとユーノとアルフはオレと一緒に上の道に来てくれ！！」

「どうやるんだ？協力してやるような魔法なんて僕達には無いだろう？っていうかまっくろくろすけって言うな！！」

クロノが怪訝そうに聞いてくる。

それに対してオレは……

「こうするのさ」

クロノのバリアジャケットの襟首を掴んだ。

「な、何を……」

クロノが慌てるがもう遅い。

「行くぜ！ひっさぁぁぁぁつ！！」

クロノを振りかぶり……

「や、止めろ！」

「まっくろくろすけビィィィィィーーーーームッ！！！！！！」

全力で投げた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー…………」

高速で飛ばされたクロノは、それ自体が弾丸のような威力を持ち、並み居る大群を吹き飛ばしながら突き進んで行った。

やがて、下の道の奥まで飛んでいったクロノは、オレ達の視界から完全に消え去った。

「うっし！ストライク！」

「アイツ……無事なのかい？」

「さぁ？」

アルフの質問に対して無責任な答えを返したオレに、みんなはため息をつく。

……やりたかったんだよ。まっくろくろすけビーム。

そして、オレ達は道を進んで行った。

目指すは、プレシアさんの居る場所！

Ｓｉｄｅ　フェイト

私は……何をすればいいんだろう。

お母さんを止める？

それとも一緒に死ぬ？

何もしない？

分からない。

私は今までお母さんのために戦ってきた。なのはを攻撃したり、管理局の人だって何人か倒した。

でも、それは意味が無かった。

お母さんは死ぬ気なんだ……私では、アリシアにはなれなかった……アリシアのように、お母さんをこの世に引き留めることは出来なかった……だから、お母さんは死んじゃうんだ……

「こんにちは」

誰か入って来た……？

「……誰…？」

「初めまして。私はアリス。ダーリンのお嫁さん」

「ダーリン？」

「ダーリンはコータだよ？」

「！」

吉谷……吼太……

私の頭を……初めて撫でてくれた人……

私を……助けてくれた人……

彼を想うと、胸が温かくなる。それは、お母さんに対する思いとどこか似てるけど違くて、アルフに対する思いとどこか似てるけど違くて……

まだ、この想いはよく分からないけど……

多分、私が好きな人。

そんな人の、お嫁さん……？

「まぁ、自称なんだけどね？」

……自称なんだ。

「それより……あなたはどうして行かなかったの？」

「……私には、資格が無いから……私には、お母さんと話す資格は無いから……私は……アリシアじゃないから……」

私が言うと、アリスはその可愛らしい顔を少し歪ませる。

「よくわかんないんだけどぉ……フェイトはフェイトでしょ？なんでアリシアって人が出てくるの？」

「だって……私はアリシアのクローンだから……」

「クローンって何？」

「え？……あの……その……」

思わず言い淀む。ここまで質問攻めになるなんて思ってなかった……

「ねぇ、あなたはどうしたいの？」

「どう……したい？」

「うん。何がしたくて、どうなってほしいのか」

どうなってほしいのか。

そんなのは決まっている。

「お母さんに……生きててほしい……死んでほしくない……」

アリスは、ただ無言で聞いている。

「そっか……私はまだ、始まってもいなかったんだ……」

今まではお母さんの言うことを聞いていただけだった。

でも、これからは……

「自分で……私自身で、私の進む道を行くんだ……！ついて来てくれる？バルディッシュ」

『もちろんです』

「ありがとう……そうだよね…バルディッシュも、ずっと私の側にいてくれたんだもんね…お前も、このまま終わるのなんて嫌だよね？」

『イエスサー』

バルディッシュはただ、答えてくれる。

気づけば、私は涙を流していた。

「……ねぇ……あなたはどうしたいの？」

アリスが、また質問してくる。

答えは、決まった。

「私は……お母さんを救う……！」

『バリアジャケット、Ｓｅｔ　ｕｐ』

私の姿が変わる。黒を基調とした、マントを付けた姿に。

「……いいなぁ～、私はダーリンに止められてるから行けないのに～」

「ゴメンね？君は……待ってて」

「……わかった。ちゃんと戻ってきてね？」

「うん。行こう？バルディッシュ」

『イエスサー』

私は転移した。決戦の場所に……

Ｓｉｄｅ　吼太

「チクショウ…数が多すぎる！」

周りには数え切れないほど大量の傀儡兵。

ユーノもなのはも奮闘してくれてはいるけど、いかんせん数が多すぎる。

このままじゃ間に合わない。そう思った時だった。

「サンダー……レイジッ！」

不意に声が聞こえたかと思うと、巨大な雷が落ちて辺りの傀儡兵が吹っ飛ばされた。

「あれは……」

上を見る。そこには……

「フェイトちゃん！！」

「フェイトォ！」

今まで敵対してきていた……前は淋しげな光を、今は決意の光を目に秘めた少女、フェイト・テスタロッサがいた。

## 第四十話　したいこと（後書き）

なっぺ「後書き座談会じゃい！」

リーム「なんか出番ないんじゃい！」

吼太「まぁ、それなりにはあるからいいじゃん」

なっぺ「感想感謝のコーナー！ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん、雨季さん、月光閃火さん、緋水さん。感想ありがとうございました！」

吼太「雨季さんから、ちびイャンクックを頂きました！ありがとうございます！」

なっぺ「ペットだって」

吼太「ひとまずは家に転送しといた。母さんと父さんなら何とかしてくれるでしょ」

なっぺ「すげぇなオイ……」

吼太「よし！次は協力攻撃だな！」

なっぺ「そして、プレシアさんの説得も書けたらなぁと思ってる。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第四十一話　無理は通すもんだ！（前書き）

今回、バトルが大半です。

なので、必然的に駄文になってます。

……文才を誰か下さい！！（泣）

# 第四十一話　無理は通すもんだ！

Ｓｉｄｅ　吼太

「来たな……フェイト！」

フェイトに声をかける。フェイトはそれに対して微笑みで返してきた。

「フェイトちゃん！フェイトちゃん！」

なのはは感極まって泣いている。

つーか号泣か？コレ。

その時、目の前の壁が崩れて巨体が姿を表す。

それは、全長１０ｍはあろうかという巨大な傀儡兵だった。

「デッケェなオイ……」

「……アレは、バリアが硬い」

フェイトが冷静に情報を教えてくれる。

「それに、あの背中のも……！」

なのはも、直感的にあの背中に背負われた武器の威力を悟ったみたいだ。

「でも……三人なら……」

「「「行けるっ！！！」」」

オレの声に答えるようになのはとフェイトが言う。

その間に傀儡兵はチャージを完了したみたいで、魔導砲から極太のビームが照射される。

「させるかよぉ！マ・セシルド！！！」

オレが呪文を唱えると、目の前に大人の身の丈以上もある円形の盾が顕れ、ビームを防ぐ。

その間に、ユーノとアルフがバインドをかける。

「今だ！なのは！吼太！」

「決めちゃいな！フェイト！吼太！」

ユーノとアルフがエールを送ってくる。

それに答えるように、なのはとフェイトはそれぞれのデバイスを構える。そしてオレは……

「トゥード……ダウンロード、シャイングレイモン！」

『了解、シャイングレイモン翼部及び胸部を「いや、腕部と尾部もだ」…マスター、危険です』

『そうだよコータ！危な過ぎるよ！』

ユニゾンしているリームも注意を投げ掛けてくる。

だが……

「本気で決意した奴らの手伝いすんなら、こっちもそれだけの覚悟が必要なんだよ！！！」

『『……』』

それきり黙りこむリームとトゥード

「吼太！早くしてくれよ！」

見れば、アルフのバインドが解けかかっていた。

力が偏りって掛かり始めているせいか、ユーノのバインドも嫌な音を発て始めている。

「……頼む」

『…了解、シャイングレイモン翼部、胸部、腕部、尾部を特殊召喚、具現化します』

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太の身体の半分近くが異形の姿に変化する。それは、光の名を与えられた輝く竜の装甲。

「グァッ！（……シャイングレイモンの意識が……オレに入り込んでくる……！！）」

過度の融合は精神が侵食されてしまう。今、吼太はその危険に曝されていた。

〔無理だコータ！俺に……俺にお前を消させないでくれ！！〕

融合しているシャイングレイモンが停止を呼び掛ける。

しかし……

「無理は通すもんだ！端から諦めてたらぁ……何も掴めねぇんだよおおおおおおおおお！！！」

吼太はそれを気合で制した。

「コータ君！？」

「コータ……大丈夫？」

なのはとフェイトが心配そうに聞いてくる。

『融合、安定！大丈夫だよコータ！！』

リームが涙声ながらも報告をする

「……それより、準備はいいな!?皆!!」

「「「「『うん（あぁ）!!!!』」」」」

吼太の声になのは達が答える。さらに、デバイス達も返事を自身の明滅で返した。

「アルフ、行くよ!」

「しっかり着いて来なよ!ユーノ!」

『僕も頑張るよー!』

「「『チェーンバインド!!!』」」

ユーノ、アルフ、リームのチェーンバインドが大型の傀儡兵をさらにがんじがらめに固める。

そして、吼太達は砲撃の態勢をとり…

今、必殺の一撃を放つ!

「ディバイィィィィン、バスタァァァァァァーーーーー!!!!!!」

なのはの砲撃が唸る。

「サンダァー…スマッシャァァァーーーー!!!!!!」

フェイトの砲撃が猛る。

「グロリアァァス…バーストォォォォォォォォォ！！！！！」

吼太の砲撃が輝く。

三人の攻撃は互いを包み合いながら一つになり、何物をも飲み込む巨大な、煌めきの渦となる！

渦は、傀儡兵を全て飲み込み消し去っていき、後には五人の魔導師だけが残った。

「よし、なのはとユーノは動力炉の封印に行ってくれ！場所はレイジングハートに送っておいた！フェイトとアルフはオレと一緒にプレシアさんのとこに来てくれ！」

シャイングレイモンとの融合を解きながら、吼太が指示を飛ばす。

「コータ君……ちゃんと帰ってきてね……？」

なのはが心配そうに吼太に話し掛ける。

「あぁ。必ずだ！約束する！」

「コータ、行こう！」

ユニゾンを解いたリームが吼太を急かす。確かに時間は無い。急が

なければ間に合わないだろう。

「……分かった。行くぞ！」

吼太達は分かれ、それぞれの場所に向かい始める。各々の目的を果たすために…

Ｓｉｄｅ　プレシア

おかしい……何故ジュエルシードが暴走しない……？

これだけの魔力があって何故……？

「不思議そうな顔をしていますわね……プレシア・テスタロッサ」

不意に声が聞こえた。声の出所を探していると、扉が開き、外から三人の女性が入って来た。

「貴女達は……！」

「お久しぶり……ですわね」

「また来たよ！」

「……死ぬのは……ダメ…」

入って来たのは、いつか吉谷吼太について来て、この時の庭園にやって来た三人だった。

「そういえば自己紹介がまだでしたわね。私はプリム・F・ヨシヤですわ」

「俺はミカ・F・ヨシヤだよ」

「……ライラ・F・ヨシヤ……」

「……吉谷吼太の、家族ってことね？」

「そういうこと♪」

私の質問に、ミカって人が答える。

「貴女達…何故ジュエルシードの暴走が起こらないか知っているみたいね……教えてもらえるかしら……？」

「それには私がお答え致しますわ」

プリムって人が私の話に答える。

「理由は簡単……貴女には今、【自分から死ぬ権利】が無いからですわ……

私の希少技能（レアスキル）……【権利剥奪】によって……！！！」

## 第四十一話　無理は通すもんだ！（後書き）

なっぺ「後書き座談会だってばよー！」

吼太「ＮＡＲＵＴＯよく知らないくせに使うなよ」

なっぺ「いや、何となく思い付いたから……っと、今回は魔王＆死神コンビに来てもらってまーす！」

なのは「魔王じゃないもん！！」

フェイト「死神……？」

リーム「よーし、感想感謝コーナー行ってみよー！なのはちゃん、フェイトちゃん！お願いねー♪」

なのは＆フェイト

「「えっと……Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、月光閃火さん、緋水さん、まーたさん、雨季さん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「ちびクックは……現在、吼太の両親に懐きまくって、吉谷家のマスコットになってます」

吼太「家の親は……なんかユーノやアルフが目の前で変身しても平然としてそうだ…」

なのは「にゃはは……」

フェイト「凄い両親だね……」

リーム「でもとっても優しいよ♪」

なっぺ「次回は……説得だな。多分」

吼太「あとはプリムの希少技能の細かい説明だな」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第四十二話　通りすがりのチート魔導師だ！（前書き）

はい、スーパー説教タイムです。

後、２５万アクセス突破してました。ありがとうございます。

これからも応援よろしくお願いします。

# 第四十二話　通りすがりのチート魔導師だ！

Ｓｉｄｅ　プリム

「権利……剥奪……？」

驚いてますわね。私もこの能力を知った時はそれなりに驚きましたが。

「そうですわ。世界そのものに干渉して、対象の生物のあらゆる権利の内、たった一つだけですがどんな権利でも奪い取れる能力。それが【権利剥奪】」

「まー、かなりチートだよねー。この能力」

ミカが個人的な感想を言ってくる。

……私もそれは思いましたわ…

使い方によってはなのはさんを一方的に倒すことも可能なのですから。

もしくは、この能力を上手く使えば世界支配も可能かもしれません。

まぁ、そんなお父様が怒りそうなことなんて致しませんけどね。

……いや、もしそういうことをすればお父様から色々なオシオキが……！？

あぁっ、いけませんわお父様……そんなところを……

お父様お父様お父様……

「……プリム」

……はっ！

思わずお父様のことで陶酔してしまいましたわ！

ライラが諫めてくれなければ危なかったですわ……

見れば、プレシアさんもこちらを怪訝そうな顔で見てますし……

これでは何のために急いで傀儡兵を蹴散らして来たのかわかりませんわ！

「と、とにかく！もう貴女は自分から死ぬことは許されません！大人しくお父様の下僕になりなさい！！」

「……それ、なんか違くない？」

「……目的と……違う」

外野は黙ってなさい。

「くっ……こんなはずじゃ……！」

ドゴォッ！

……誰か来ましたわね。

確か……お父様は【まっくろくろすけ】と呼んでいたような……本名が思い出せませんわ。

まぁ、思い出せないぐらいなんですから、たいしたことはないのでしょう。

「そうだ……世界はいつだって【こんなはずじゃない】ことばかりだよ。昔からいつだって、誰だってそうなんだ。不幸から逃げるか戦うかは個人の自由だが……他人を巻き込む権利は誰にも無い！！！」

『プレシア・テスタロッサ、駆動炉はやがてなのはさんが封印するでしょう。……貴女もここまでです』

さらに、念話であの次元航行艦の艦長の声が聞こえますわね。

「……そうかも知れないわね…でも…！」

そう言い、プレシアさんが自分の杖で床を叩きますと、時の庭園自体が大きく揺れ出し始めました。

「私は……けじめを付けなきゃいけないのよ！！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「フェイト！吼太！プレシアが！」

アルフが指差した先を見ると、プレシアさんが魔法陣を展開していて、何かをしようとしていた。

直ぐさま、答えを出す者（アンサートーカー）で答えを導き出す。

「ヤバイぞ……プレシアさんは時の庭園を崩壊させる気だ！それに乗じて自分の命を……！！」

「「！！」」

プリムの【権利剥奪】のせいか…自殺が出来なくなったから時の庭園の崩壊に【偶然】巻き込まれて死ぬ気なんだ…！

「プレシアさん！」

オレが話し掛けると、プレシアさんはこちらを一瞥して…

「……何の用かしら？」

と答えた。話は聞いてくれるみたいだ。

「……確かにアンタがやったことはいけないことだよ。それは間違いない。でも、アンタには今、もっとやっちゃいけないことがあるだろ！！」

「……何があるというの？」

それに対して、オレはフェイトを抱き寄せる。フェイトは「えっ！？」と声をあげた。横目で見たら、顔が真っ赤だ…どうしたんだ？コイツ。

まぁ、いいや。

「それは……娘を、フェイト・テスタロッサを泣かせることだ！この娘に親の愛情を一番注げるのはアンタだ！そのアンタがいなくなったら、フェイトには埋めることの出来ない虚無感が出来る！！そんなことを親は……母親はやっちゃいけない！母親は愛を与えるもんだ！！奪うもんじゃない！！それは古来から変わらない、真実だ！！！」

「偉そうに……あなたは、なんだというの！？」

プレシアさんが聞いてくる。それの答えはたった一つ！！！

「通りすがりのチート魔導師だ！覚えておけ！！」

そして、オレは腰に赤いバックルを付ける。そこからはベルトが伸

び、オレの腰に密着するように締まった。

オレは、バックルがしっかり付いたことを確認すると、ライドブッカーから一枚のカードを取り出す。

それは、オレに新たな能力を与えてくれるもの。

次元を渡る旅人が描かれたカード。

それを目の前に構え、あの一言を叫ぶ。

「…変身ッ！！」

カードをバックル……【ディケイドライバー】に装填し、ハンドルを押し込む。

ハンドルが押し込まれた時、ディケイドライバーが【名前】を放つ。

仮面の戦士の名を……

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

その瞬間、オレの周りに九つのシルエットが顕れ、オレに重なる。

重なったとき、オレの身体は全く違った姿に変貌していた。

さらに、オレの目の前で回転していた板、【ライドプレート】が変身したオレの頭に刺さり、身体の要所要所がマゼンダに染まる。

そしてオレは、世界の破壊者……

仮面ライダーディケイドに変身した。

## 第四十二話　通りすがりのチート魔導師だ！（後書き）

なっぺ「後書き座談会だヒャッフゥ！」

吼太「テンション高いな」

なっぺ「深夜だからさ！」

吼太「寝ろよ」

なっぺ「（無視）感想感謝のコーナー行ってみよう！ライさん、雨季さん、夢刹さん、緋水さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

吼太「次回は……？」

なっぺ「プレシアさんの救済かな？多分」

吼太「アリシアは？」

なっぺ「多分次次回以降。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第四十三話　神速でちゃぶ台をひっくり返す（前書き）

サブタイはネタです。

そして、ここから無印には無い展開に！？

# 第四十三話　神速でちゃぶ台をひっくり返す

Ｓｉｄｅ　吼太

「吼太……アンタ…どうしたってんだい？」

アルフが聞いてくる。そういやこの姿は初めてだもんな。

「仮面ライダー…ディケイド……それが今のオレの名前だ」

「仮面……ライダー……」

「ディケイド……？」

アルフとフェイトが名前を繰り返す。

「バリアジャケット……とは違うみたいね……」

プレシアさんが冷静に判断を下す。

「あぁ。この姿になった以上、アンタの思い通りにはさせねぇよ」

「やれるものなら……やってみなさい！！」

プレシアさんが何体かの傀儡兵を出す。

「行くぜ！」

ライドブッカーから一枚のカードを取り出し、ディケイドライバー

に装填する。

ディケイドライバーがカードのパワーを読み出し、その名称を放つ。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＳＬＡＳＨ】！』

ライドブッカーを剣に変形させて、傀儡兵を斬る。

傀儡兵は、ライドブッカーに秘められたエネルギーにより分身し、その幾重もの斬撃を叩き込まれ、破壊された。

「次はコイツだ！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＢＬＡＳＴ】！』

またカードを装填し、ライドブッカーを銃に変形させて、トリガーを引く。

すると、ライドブッカーの銃口が分身し、弾丸がマシンガンのように発射された。

大量の弾丸を浴びた傀儡兵は、ボロボロになり破壊された。

「くっ！ならば！」

プレシアさんが電撃を放ってくる。

「危ねっ！？」

それを横跳びに避ける。

「だったら雷より速く動いてやる！」

一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＫＡＢＵＴＯ】！』

オレの身体を不可思議な光が覆い、姿がまた変身する。

それは、天の道を行き、総てを司る仮面ライダー。

その名は仮面ライダーカブト。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＣＬＯＣＫ　ＵＰ】！』

「見ておけフェイト、アルフ…これが、神の速度だ…！」

その瞬間、オレは光の速さになった。

Ｓｉｄｅ　フェイト

「フェイト……あれって……」

アルフも気づいたみたい。

そう、あれは多分、ハスタームーブと同じ能力……

いや、それ以上だ。

ハスタームーブみたいに危険に感じない。

きっと、ハスタームーブの完成形みたいなものなんだろう。

そんなことを考えてるうちに、コータはもう傀儡兵を全て倒していた。

「さぁ、観念しな」

「……わかったわ」

お母さんがとうとう観念した。後はお母さんと私とアルフが管理局で裁かれるだけ。

懲役に何十、何百年かかるかわからないけど、それでもみんな一緒なら構わない。

唯一心残りなのは、コータに想いを伝えられないことかな？

その時だった。

不意に大きな揺れが来て、お母さんのいる辺りの床に皹が入って、

それでお母さんがそこから下に……

え…？

「いっ……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「いっ……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

フェイトの声が聞こえる。

泣き叫んでいる。

何かが壊れる。

……何だよこの結末は…！

オレは、オレはこんな結末のためにやって来たんじゃねぇ！！

これがもし運命だってんなら……

「んな腐った運命なんざ……オレが変えてやる！！！！」

ライドブッカーから一枚のカードを取り出し、語る。

「おばあちゃんが言っていた……ちゃぶ台をひっくり返していいのは、よほど飯がまずかった時だってな。……ちょっと数分前まで、ひっくり返しに行ってくる…！」

『ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＫＡ、ＫＡ、ＫＡ、ＫＡＢＵＴＯ】！』

オレがカードをディケイドライバーに装填すると、オレの身体に変化が起こる。鎧は重厚感が増しつつも機能的なデザインに、そして、頭の角が変化すると、背中のアーマーが開き、中から光の粒子…【タキオン粒子】が溢れ出す。

仮面ライダーカブト　ハイパーフォームだ。
さらに、カードを取り出して装填する。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ】！』

カードの効力が発揮され、オレの身体をタキオン粒子が包み込む。

そして、オレは時を超えた。

Ｓｉｄｅ　三人称

数刻前……

プレシアの足元が崩れた瞬間、おかしな事象が発生した。

時が僅かに揺らぎ、中から一人の人間が顕れたのだ。

いや、その姿は人間というにはあまりに無骨すぎた。

言うなれば、戦士。

その戦士は足元が崩れ、今まさに虚数空間に落ちようとしているプレシアに神速の勢いで近づき、その身体を抱えると、素早く安全な

地帯まで飛翔した。

そして、戦士がその姿を元に戻す。

「いっ……いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

フェイトの叫び声が響く。

端から見ればプレシアは虚数空間に落ちたように見えただろう。クロノを始めとする他のメンバーも一様に苦々しい顔をしている。

そこに、戦士だった少年の声が響く。

「あー、シリアスな雰囲気のとこ悪いけど、プレシアさんなら無事だぞ？」

Side　クロノ

正直耳を疑った。

しかし、僕の目に異常は無いらしい。他のみんなの反応がそれを証明してくれている。

何をやったのか知らないが、とにかくプレシア・テスタロッサは無事らしい。

『吼太君……あなたは今何を？』

母さんが念話を入れてきた。

「その前に……亜神器【天地創造】《テンソウ》」

吼太が手を床にかざすと、そこから揺れが起こり始めた。

「オイ馬鹿吼太！お前何を『大変だよクロノ君！』……なんだエイミィ？」

今、忙しいのに。

『時の庭園の形が……変わっちゃった……』

……は？

「あちゃー、やり過ぎたか」

……アイツは本当に人間か？

Ｓｉｄｅ　吼太

天地創造（テンソウ）は、本来の神器とは違う神器だ。

その効果は、【地形の強制改変】。時の庭園の崩壊を抑えるために、

ある程度やったつもりだったんだけど、やり過ぎたらしくて、見た目も変わっちゃったらしい。

クロノとフェイトとプレシアさんが呆気に取られてる。

ちなみにフラウリーナ三姉妹には以前に見せたことあるからいたって普通だった。

アルフ？「まぁ吼太だからねぇ～」みたいな反応してますが何か？

ま、これで安全確保だな。

「よし、んじゃ行くぞ」

「あぁ。プレシア・テスタロッサ、フェイト・テスタロッサ、使い魔のアルフをミッドチルダに護送して、この事件は終わりだな」

……何つった？このまっくろくろすけ。

「プレシア・テスタロッサ、フェイト・テスタロッサ、使い魔のアルフをミッドチルダに護送して、この事件は終わりだな、と言ったんだが？」

地の文に反応すんなまっくろくろすけ。

「アリシアも一緒だろ？だいたい、行き先自体違うじゃねぇか。何寝ぼけたこと言ってんだ？」

「？　君こそ何を言ってるんだ？馬鹿吼太」

「……んなことも分かんねぇのか？まっくろくろすけは」

「はぁ？君は何を「今から行くとこなんて決まってんだろ！」

……ミッドチルダや地球じゃないのか？」

んなわけねぇだろタコ。

「今から行くべき場所。それは……

……忘れられた都、【アルハザード】だ！！！」

## 第四十三話　神速でちゃぶ台をひっくり返す（後書き）

なっぺ「後書き座談会どっしゃー！」

吼太「なんだよどっしゃーって」

なっぺ「まぁいいから。今日は一身上の都合で時間が無いからさくさく行くぜ！感想感謝のコーナー！吼太、ヨロ！」

吼太「あー、ハイハイ。まーたさん、緋水さん、ライさん、雨季さん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「次回からはオリジナル展開です！」

吼太「展開っつうほど大したもんじゃないけどな」

なっぺ「そーいうこと言うなよ。ではではこの辺で！」

## 第四十四話　部屋（前書き）

今回はなんか内容が薄っぺらいです。

……すいません。

# 第四十四話　部屋

Ｓｉｄｅ　プレシア

……今、彼はなんて言った？

アルハザードに……行く？

「君は馬鹿か？場所も分からないのにどう行くというんだ？」

執務官が私の疑問を代弁してくれた。

アルハザードの場所は過去、誰ひとりとして特定出来た人はいなかった。出来ていたらば次元座標を割り出して、すぐにでも転移していた。

可能性のある場所ならば見当はついていたが、確定というわけではなかった。

試しに送ったことのある傀儡兵は、ただの一体も戻っては来なかった。

正直、もうダメか。と考えてたこともある。

しかし、彼はそこに行けると言った？

「分かるんだなー、これが」

そう言うと、吉谷吼太はズボンのポケットから布のようなものを取

り出す。

……なんで自分より大きな物体をポケットに入れておけたのかしら？

「……君のポケットはどうなっているんだ？」

「あぁ、コレ？どこぞのチートさんのポケットを真似して、【どんなものでも収納出来る理想的なポケット】にしただけ」

……本当に規格外ね。

「コイツを使えばアルハザードには行けるんだけど……大きさが足らないな」

ドゴォッ！

「コータ君！フェイトちゃん！無事！？」

白い魔導師――確か高町なのはさんだったかしら？――が桜色の魔導砲撃を使って壁を貫いてきた。

……この子には扉から来るという考えは起こらなかったのかしら？

「なのは、壁を壊すな。せっかく天地創造で止めた、時の庭園の崩壊が復活しちまうだろ？」

「ゴ、ゴメンナサイ……」

反省をするなのはさん。

「分かればよろしい。さて、これで全員か……あ、まっくろくろすけは来なくていいぞ？」

「君達を放っておけるか！あと僕はクロノだ！」

今いるのは、吉谷吼太、フェイト、アルフ、執務官の子、なのはさんと、なのはさんのお友達……スクライアの子かしら？あと、緑髪の女の子三人。

そして、アリシアと私。

『コータ～、そろそろユニゾン解除してもいいんじゃない？』

「それもそうだな……」

「『ユニゾン・アウト』」

吉谷吼太……貴方、ユニゾンデバイスも持ってたのね。

にしてもかなりの大所帯ね。どうする気かしら？

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、どーしよ……

いやさ？大きさ自体足らないんだよね。コレ（転移拠点）。

最初はギリギリ足りるかな～、なんて考えてたけどまるで足んないや。ハハハ。

……仕方ない、あんまし使いたくなかったけど……

「プレシアさん、ジュエルシード貸してくれるか？２１個全部」

「いいけど……何に使うの？」

「ちょっとな」

２１個のジュエルシードを受け取り、トゥードに入れる。

封印がかけられてるとはいえ、２１個もあれば魔力はそれなりに溢れ出てるらしく、これなら低級ＡＲＭぐらいなら使えそうだ。

「ディメンションＡＲＭ、ジッパー！」

ジッパーを発動し、中からあるものを取り出す。

「ビ〇クライト～」

「「「「「……は？」」」」」

「てい！」

ペカー、っと光を当てると、転移拠点が巨大化し、全員が乗れる大きさになった。

……

「……んな目で見るなみんな…恥ずかしいんだから…」

と、とりあえずこれで行けるな！

「よし、転送！」

……

ん？

「ここが……」

「アル……ハザード……」

「何て言うかさ……」

「「「「部屋……だよね……？」」」」

うん。部屋だね。しかも紙の束やら、大量の本やらで足の踏み場も無いくらいの。現にまっくろくろすけは本踏んでるし。

「コータ、どういうこと？本当にここがアルハザードなの？もしかして……失敗？」

フェイトが涙目で聞いてくる。

……いや、オレの予想が正しければ…

「吼太！見ておくれよ！」

アルフが部屋の扉を開けた状態で話し掛けてきた。

「どうしたアルフ……ってうぉっ！？」

扉の向こうには虚数空間が広がっていた。どうやら、この部屋自体が虚数空間を漂っているらしい。

……見つからないはずだよ。次元航行艦よりも遥かにちっちゃいんだから…

「お父様……願わくば早くここから出たいですわ……」

「ここ……怖い」

この部屋に篭められた狂気に気づいたか。さすがフラウリーナ三姉妹（一ミカ）だな。

「「「？」」」

ミカ、リーム、なのは。お前らは全く何も感じないのか？

鈍感なのか何なのかは知らないけど……まぁ、それはそれで幸せか…

「吼太吼太！凄いよここ！！興味深い資料がたくさんある！！」

……目をキラキラさせてる未来の考古学者は無視だな。

「吉谷吼太……アリシアは……？」

プレシアさんが心配そうに話し掛けてくる。

「あー、待ってくれ。今、あるものを探してるから……っと、あったあった」

本の山に埋もれた机の上に置いてあった、一冊の本を取り出す。埃をとると、そこには【Ａｌ－ａｚｉｆ】と書かれている。

「それは……！」

「ロストロギア、【ネクロノミコン】か！？何故こんなところに！？」

プレシアさんはともかく、まっくろくろすけまで知っていたのは意外だな。

つーかロストロギアかよ。これ。まぁ、確かに力はかなり凄いけどさ。

そして、ネクロノミコン……いや、ネクロノミコン原本【アル・アジフ】を小脇に抱えて、オレは宣言する。

「間違いない。ここはアルハザードの地だ。ただし、お前らの世界とは違う、平行世界のもんだけどな。そしてこの部屋は……」

一拍を置いて、言い放つ。

「狂気の詩人、アブドゥル・アルハザード。その人の自室だ！」

## 第四十四話　部屋（後書き）

なっぺ「後書き座談会どんがらがっしゃーん！！」

吼太「お前はアホか？」

なっぺ「アホじゃない！仮にアホだとしても、アホという名の馬鹿さ！」

吼太「どっちにしろダメじゃん」

なっぺ「……感想感謝のコーナー」

吼太「どうした？」

なっぺ「感想感謝のコーナー！！！（泣）」

吼太「うぉっ！？…ったく……ライさん、雨季さん、月光閃火さん、緋水さん、八人目な武器屋さん、かみかみさん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「次回にはアリシア生き返らせたいなぁ～……」

吼太「お前の場合だと、次次回までかかりそうだな」

なっぺ「うん……んじゃ、最近出番の無い三人にラストコールをば…」

アリサ「早く本編出しなさいよ！」

すずか「私達、いらない子なのかな…？」

アリス「ダーリン！私いい子で待ってるよー！」

なっぺ「ほら早く！」

三人「「「せーのっ…今回はこの辺で！次回をお楽しみにー！」」」

## 第四十五話　キラーブックとキラースマイル（前書き）

ハッハー！

総合評価が下がったことに耐え切れずにまだケータイ戻って来てないのに代替機で投稿しちまったぜ！

あと、３０万アクセスを達成していました。

びっくりです。

皆様、本当にありがとうございます。

これからも末永く読んで頂けると嬉しいです。

# 第四十五話　キラーブックとキラースマイル

Ｓｉｄｅ　吼太

「アブドゥル・アルハザード…？誰だそれは…？」

まっくろくろすけが聞いてくる。

「ん～……細けぇことは知らん」

「待て！無責任過ぎるだろそれは！」

だって分かんないもんは分かんないんだもん。

「とにかく、ここはアブドゥル・アルハザードの自室で間違いないんだけど……アリシアを生き返らせることについて、一つ問題がある」

「何があるの？コータ君」

なのはが軽く首を傾げながら聞いてくる。

「魔力だ。ジュエルシードを使えりゃ楽なんだけど、ここで発動したらどうなるか……いくらなんでも分かるよな？」

オレの言葉に対して、皆が頷く。

こんな狭い場所でジュエルシードの魔力を解放したら、アルハザードの部屋は簡単に壊れて、全員虚数空間に真っ逆さまだろう。

それじゃ意味が無いのだが、オレがこれからやることにはかなりの魔力がいるのだ。なんとかして調達する必要がある。

アル・アジフを持ったまま移動して、どこか適当な場所でやることも最初は考えたが、まっくろくろすけの言葉がきっかけで取りやめた。

ロストロギアを二つも持ったまま別の次元世界に跳んだりしたら、たちまち指名手配の犯罪者だ。そんな面倒なことは避けたい。

「私たちの魔力は使えないの？」

フェイトが聞いてくる。まぁ、流れからすれば当然か。

「使えない、ってわけじゃない。総量もまぁ足りるだろう。ただ、あまりにも危険すぎる。下手すればアル・アジフに魂ごと持ってかれる」

「そ、そんなに危ないもんなのかい？その……アル……アル」

「アル・アジフな」

「そうそれ！たかが本一冊じゃないか」

「たかが本、ならな。コイツには外道の知識が余す事なく詰まってる。並の生物がこれを読んだら、あっという間に外道の知識に取り込まれて異形の怪物に成り果てるだろうな。それはアルフ、使い魔のお前だって例外じゃねぇぞ？」

アルフの言葉を直してから、魔導書【アル・アジフ】の危険性について語る。

そう、魔導書は種類にもよるが、かなり、いや、危険過ぎる代物なのだ。普通、記憶なんてしたらただじゃ済まない。

世界のどこかにはネクロノミコン他、一万数千冊の魔導書を暗記した少女がいるとか聞いたが、んなことしたら本当なら異形通り越して、消え去ってもおかしくはない。

それほど魔導書というのは危険な代物なのだ。

そして、それはこの【アル・アジフ】とて例外じゃない。

この中にはあらゆる敵を殲滅できる魔術や、例え星すら直す魔術もあるが、いずれを使うにしろ、内容を理解しなければ発動はしない。

つまり、魔導書の起動にはよほどの精神力――それも、ハンパないぐらいの――が必要なのだ。

……魔力があればオレがやったのによぅ……ベスの奴め…！

「あの～、吼太？皆の魔力を合わせて、それをトゥードに送って、それでその魔力を吼太が使うっていうのはどうかな…？吼太ならネクロノミコンを使いこなせるんでしょ？」

「それも考えたけど、無理だ。ただでさえトゥードは２１個のジュエルシードの膨大な魔力を制御しているのに、これ以上魔力を注ぎ込んだら壊れちまう。かといって、ジュエルシードを分散したらそもそもの魔力が足らなくなる」

ジュエルシードどうしの共鳴により発生する魔力はかなり膨大で、理論上はアルカンシェル数十発分の魔力を楽々制御出来るはずのトゥードのリソースを殆ど使って、ようやく制御が出来ている状態だ。

この余剰魔力を生かせりゃあなぁ……

「……ん？エネルギーの……蓄積……？魔力はエネルギーに変換出来て……アレはエネルギーを……とすると……」

……いけるっ！

「みんな！行けるかもしれないぞ！」

「「「本当！？」」」

「あぁ！そして、今回鍵を握るのは……ミカと……ドリルだ！」

Ｓｉｄｅ　フェイト

ミカ……ってあの人だよね？緑色の髪をした女の人……

その人と……ドリル？

どういうことなんだろ？

「オレとミカの使える能力の一つに【螺旋力】がある。詳しい説明は省くけど、この螺旋力によって創り出されたドリル……【ギガドリル】にはエネルギーを吸収蓄積する特性がある。今回はこれを使う」

そういうとコータは手にドリルを出す。ミカさんもそれを見て慌ててドリルを出していた。

「やることは至ってシンプルだ。今から皆の魔力をありったけミカとオレのギガドリルに注入してくれ。それで、魔力を一点に集めたあと、アル・アジフに魔力を叩き込んで術式を起動。それでアリシアを生き返らせる。簡単だろ？」

簡単って……口で言う分にはそうだけど、それってかなり危険だよね？

魔力の集中に失敗したら、大爆発が起こってこの部屋は吹っ飛んじゃうし、そうでなくても、魔力の注ぎ込みに失敗したらやっぱり大爆発……

僅かな失敗も許されないのに、なんであんなに明るいんだろう……？

「吉谷吼太……あなたは何故そんなに明るくいられるの…？そのやり方の危険性はあなたが1番分かっているでしょ？」

お母さんが私の疑問を代わりに聞いてくれた。こんな場で不謹慎かもしれないけど、似通った思考が出来てたところに、親子の絆を感じた。

「んぁ？んなもん、楽しくやらなきゃやってられないだろ？ただで

さえ、死人を生き返らせるなんて神に対して反逆紛いのことしてるんだ。厳しい顔してたら余計に空気が張り詰めちまうだろ？だから、これでいいんだよ♪」

そう言って、にっこり……いや、にっかりと笑うコータ。

その笑顔を見て、思わず顔が赤くなる。

ふと周りを見たら、他にも何人か赤くなってた。

その中には、何故かお母さんもいた。

「やだ……こんな子供に……でもなんか雰囲気は大人っぽいし…」

とか言っている。

……この一件が片付いたら、少しお母さんとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしないといけないかな…？

「コータ……早く始めよう…？」

「お、おう……（フェイトのやつ、なんで怒ってるんだ？）」

「……何か言った？」

「イエ！ナニモ！！ソレジャアハジメマス！！」

……いよいよだ。

待っててね……？アリシア……！

それとお母さんも……フフフ…

# 第四十五話　キラーブックとキラースマイル（後書き）

なっぺ「久々の後書き座談会！」

吼太「まだ本調子じゃないけどな」

なっぺ「しばらくは更新が安定しないと思います」

吼太「そんじゃ、感想感謝のコーナー」

なっぺ「緋水さん、月光閃火さん、雨季さん、ライさん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

吼太「次回は？」

なっぺ「既に書き終えてあるけど、少し間は置く。内容は……まぁ、予想通りだと思うよ？」

リーム「この先どうなるのー？」

なっぺ「無印が終了したら番外編？みたいのを挟んでいく。A's編が始まるのはしばらく先になるかな」

吼太「３０万アクセス突破記念もやらなきゃな」

なっぺ「まさに嬉しい悲鳴だね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第四十六話　夢だったこと、夢じゃないこと（前書き）

やめられない止まらない！

妄想が止まらないいいいいい！！！

# 第四十六話　夢だったこと、夢じゃないこと

Ｓｉｄｅ　三人称

そこは異質な空間だった。

あるものは顔を赤くし、禁断の果実に手を出すか考え、その甘美さを想い、悶える。↑プレシア

あるものは自身の肉親に初めて抱く感情に戸惑いつつも二人の人間に殺気を飛ばす。↑フェイト

あるものは新たなライバルの出現を察知し、平静を装いつつ、そのライバルを探す。↑なのは、リーム、プリム、ミカ、ライラ

あるものは多方向から襲いくる殺気に、ただただ怯える。↑吼太

あるものは状況に着いていけず、困惑に囚われる。↑アルフ、ユーノ、クロノ

……そこは異質な空間である。修羅場的な意味で。

これから死者の復活などという禁忌に手を出すように見えないのも、仕方ないだろう。

彼女達の辞書には、自重という言葉は無いらしい。

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、気を取り直して。

「行くぞ！ミカ！」

「うん！」

「「ギガドリルッ！！」」

オレとミカの腕にドリルが顕現する。

そして、その二つのドリルに、他の皆がデバイスや手を構える。

『『『パワーチャージ』』』

皆からありったけの魔力が送られて来た。

それを余す事なくギガドリルに溜めていく。

同時にトゥードからジュエルシードの余剰魔力を放出させ始める。

これだけあれば……行ける！

「ミカ！」

「うんっ！どぉりゃあああああああああ！！！！！」

ミカとタイミングを合わせて魔力をアル・アジフに叩き込む。

その瞬間、アル・アジフから何枚かのページが弾け飛び、ページが複雑に絡み合ったかと思うと、そこに一つの懐中時計が顕れる。

「強制接続(アクセス)！吉谷吼太の名において命ず！ド・マリニーの時計よ！アリシア・テスタロッサの時間を巻き戻せ！！」

オレが命令すると、ド・マリニーの時計の時針が物凄い勢いで巻き戻り始める。

その行為が完了するまでの時間は、永遠にも感じられた。

そして……

「んっ……ここ、どこ…？」

アリシアの目が、醒めた。

Ｓｉｄｅ　プレシア

信じられなかった……

でも、アリシアは今ここにいる。

生きて……いるのね……

「あれ？お母さん？この人達は…？それに……私？」

もう、我慢は出来なかった。

アリシアを抱きしめる。

二度と離したりはしない。

絶対に……！

「お母さん？苦しいよ……」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「一件落着、ってとこか」

彼の声が聞こえる。今回の奇跡を起こしてくれた、私達の恩人……

「ありがとう……吉谷吼太…私はあなたに出会えてよかった……」

「あ～、もう！泣くなよ……せっかくいいことがあったんだしさ、笑顔でいようぜ？せっかくの綺麗な顔が台なしだぞ？」

そう笑顔で言われて、年甲斐もなく顔が赤くなる。

彼は……まるで太陽だ。

何者にも分け隔て無く恵みと光を与える、祝福の太陽…

その笑顔にはきっと、人を幸せな気持ちにさせる何かがあるのね。

……いくつか殺気を感じるんだけど、なぜかしら……？

今は殺気を当てられるようなことはしてないのに……？

「えっと……貴方は誰？」

アリシアが吼太に聞く。

「オレは吉谷吼太。君のお母さんの……友達かな？」

「お母さんの友達なんだ！だったら私とも友達になって？私はアリシア、っていうの！」

「それはもちろんだけど……その前に、話をしてもらいたい人がいるんだ。……フェイト」

フェイトがアリシアの前に出る。

フェイトはアリシアがいなければ、多分生まれなかった。

アリシアはフェイトがいなければ、きっと生き返ることはなかった。

こうしてみると奇妙な因果ね……

どちらが欠けてもいけない。

まるで、一対の翼。

「私は……フェイト。フェイト・テスタロッサ。アリシアは……私の、お姉さんになるのかな？」

「そうなの？ってことはフェイトは私の妹？」

「うん……多分」

「……」

アリシアが突然黙り込む。

「あの……嫌だった？なら別に無理になんて……「違うよ……」……え？」

フェイトが慌てていると、アリシアがその言葉を遮って話し始める。

涙を、流しながら……

「嬉しいんだよ……私…妹が欲しかったから……ずっと……一人で淋しくて……そんな夢を見てたみたいだから……」

アリシアにとって、死後の世界は夢という扱いになったらしい。

私も、その方がいいと思った。

自分が死んだ記憶なんて、あってもいいことなんてない。

「フェイト……プレシア……アリシア……よかった、よかったよ～！」

アルフが泣きながら私達を抱きしめる。

他の人も皆、涙を流している。

あぁ……本当に幸せ……

怖いぐらい……幸せ……

夢なら醒めないで欲しい……

けど、これは夢じゃない……

夢じゃなくて、現実なのね……

ありがとう…吼太君……

## 第四十六話　夢だったこと、夢じゃないこと（後書き）

なっぺ「後書き座談会すっとこどっこーい！」

吼太「江戸っ子かテメェは」

なっぺ「早速感想感謝のコーナー！緋水さん、ライさん。感想ありがとうございました！」

吼太「次回はエピローグか？」

なっぺ「いや？もうちょっとだけ続くんじゃ」

吼太「は？」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第四十七話　詰み、面会、虚数空間にて（前書き）

はい、無印最終話まであと少しです。

# 第四十七話　詰み、面会、虚数空間にて

Ｓｉｄｅ　吼太

「あー、オホン。君達、もうそろそろアースラに戻らないといけないんだが……」

「まっくろくろすけ……お前、もちっと空気を読めるようになろうぜ？」

全く……

ちなみに、アル・アジフはここに置いていくことにした。

持っていても危険なだけだし、そもそもオレは、魔力さえあれば魔導書無しでアル・アジフに記載されている魔術は使えるはずだ。

それに……コイツには、何故か核となる何かが無かった。

何故かはわからないけど、特殊な状態にあるらしい。

そんな得体の知れないもんを持ってくわけにはいかない、ってのも理由の一つだ。

「コータ君、早く～」

皆はもう転移拠点に乗っているらしい。

「今行くよ」

そう答えて、アル・アジフを机の上に置いた。

その時だった。

オレの足元が崩れ、オレの身体は虚数空間に投げ出された。

見れば、他の部分も崩れ始めている。

このままじゃ、みんな助からない！？

せめて……なのは達だけでも！

「転移拠点強制起動（テレポート・ポータル）！行き先、時の庭園！転送！！」

そう言い切った瞬間、アルハザードの自室が完全に壊れた。

が、中からは人は誰ひとり出てこなかった。

どうやら、転移には成功したようだ。

「……さて、どーしよ…」

正直、打つ手が無い。

魔術は術式が強制消去されちまうから却下。

花鳥風月（セイクー）は大気がないとそもそも飛行できない。だから虚数空間では使えない。

螺旋力は腹が減って使えない。

ダウンロードはバリアジャケットが解除されてる今、使うのは危険過ぎる。

他の使えそうなやつも様々な理由があって使えない。主にジッパーの中にあるのが理由。

……あれ？詰んだ？

そう思ったとき、トゥードの中からジュエルシードが飛び出し、アル・アジフに接触する。

その瞬間まばゆい光が溢れ出した。

その光の正体は……膨大な魔力。

あまりの魔力量に、トゥードに装備されている魔溜石が次々に弾け飛んでいく。

「何が……」

起こったんだ？

その言葉を言い切る前に、オレは意識を失った。

Ｓｉｄｅ　リーム

……え？

何が起こったの？

私は、転移拠点に乗って、コータを待っていて、コータが落ちて…

……

……勘違いだよね？今、目の前にいないだけで、後ろに立ってるんだよね？

「フェイト！落ち着きなさい！！」

「離してお母さん！コータが！コータが！！」

……嘘……だよね……？

「ユーノ君どうして！？どうしてこれ動かないの！？」

「僕にも分からないよ！行き先に【アルハザード】を選択してもエラーしか出ないんだよ！！」

「なのは、少し落ち着くんだ。慌ててもどうにもならないだろう」

「クロノ君は心配じゃないの！？コータ君のこと！！」

「……残念だが、もう、生きてはいないだろう」

そんなわけないよ。ほら、僕はコータと契約で繋がってるんだもん。

だからコータが死んでないことくらい…

フッ…

……え？契約が解除された？

そんな……だって……

「……離して…ミカ……」

「ライラ一人で何をする気だよ！今行ったって無駄死にだよ！！」

「落ち着きなさい！気をたしかに！！」

契約が強制的に解除されるなんて……契約者が死んだときだけなのに……

「……リームさん？」

……い……

「い……いやだよ……一人は嫌……」

「リームさん…？リームさん！？リームさん！」

置いていかないで……なんでもするから……

「嫌……嫌……」

「なのは！どうしたんだい！？」

「アルフさん！リームさんが！！」

もう……一人は……嫌……

Ｓｉｄｅ　吼太

「ん……ここは……？」

見ると、辺りにはただただ白が広がっていた。

……なんか見覚えあるような……？

「お久しぶりですね。吼太さん」

「ベス……「ベスではなく神です」……ベスで間違いないな」

「ベスではないと言っていますのに…」

「お前がいるってことは……オレは死んだのか？」

そう聞くと、ベスは少し黙り込み…

「厳密に言えば死んではいません。あなたは今、虚数空間にて気絶

中です。まぁ、食べるもの食べなかったらいずれ死にますけどね」

「じゃあなんでオレがここにいるんだ？」

「説教と謝罪と面会のためです」

「……説教は大方わかる。アリシアを生き返らせたことだろ？」

「察しがいいようで。……死んだ人間を生き返らせたりして……冥界から魂を呼び出すのがあと少し遅かったら別の誰かの魂が入っていたのかもしれないのですよ？そんなことこの先やらないで下さい」

「善処はするよ。んで、謝罪は？」

「……いやぁ～、実はアルハザードの部屋が崩れたのって、私が原因なんですよ。うっかり手が滑ってアルハザードの部屋の寿命を0にしてしまって……」

……ん？

「ってことはなんだ？オレはまたお前のせいで死ぬのか？」

「……まだ死んでませんから許してください」

その言葉に対して、オレはサムズアップで答える。

ベスの表情が緩む。よっぽど怖かったようだ。

「答えは……」

サムズアップした親指を……

「……NOだ♪」

下に降ろした。

「ふぅ……こんなもんか」

「ロードローラーで轢くなんて……酷い……」

「テメェが原因だろうが。……んで、面会ってのは？」

「彼らです」

そこに顕れたのは……

「よぅ、ありがとな。コイツの最後の可能性を見つけてくれて」

「うみゅう……このような場所に隠されておるとは……妾でも気付かんはずだ…」

一人の黒髪の男性と、一人の中学生ぐらいの女性。

「アンタたちは……」

「ん？知らぬのか？やれやれ仕方ないな……「いや、まってくれ」……なんだ？」

「【あしながおじさん】……そう読んでくれ。本名は……悪ぃな」

「いや、だいたいわかったよ。んで、アンタ達がなんでここに？」

「汝に会うために決まっておろう。何、ちょっとした【贈り物】をするためにな」

「……贈り物？」

「あぁ。それと、その……ジュエルシードだったか？それもお前の使いやすいようにしといてやるよ。あしながおじさんからの贈り物だ♪」

「では、戻しますよ」

ベスが言うと、オレの身体が光に包まれる。

「あ、オイ！まだ礼を言ってな…」

Ｓｉｄｅ　？？？

「……よかったのですか？あんなものを渡して……？」

「いいさ。それに、あれは【本来存在しちゃいけない二本目】だ。俺達が持ってたら世界が壊れちまう。だから、渡したのさ」

「随分とあ奴のことを信頼しておるのだな？九朗」

「当然だろアル。……あいつもまた、魔を断つ剣を継ぐ者なんだからな」

吼太……お前なら、そいつを使いこなせるって……信じてるぜ？

Ｓｉｄｅ　三人称

目が醒める。

その瞬間に吼太は違和感に気付く。

「（手の中に……何かが、ある？）」

それを知覚した瞬間、情報が頭に焼き込まれる。

それは……不滅なる神柱。

それは……不死なる神樹。

それは……不敗なる神剣。

それは、神々の禁忌。

並び立つことのない二つが、一つになったもの。

…【シャイニング・トラペゾヘドロン】

「なんでコレが……？」

そしてその瞬間、とてつもなく膨大な魔力が吼太を襲い始めた。

「ぐっ……マジかよ……！！」

シャイニング・トラペゾヘドロンは、世界そのものを生み出す力すらある、旧神の最終兵器だ。

それが生み出す魔力は、吼太の身体を見る間に蝕んでいく。

「（しかも……トゥードの中からも魔力が！？しかもこの魔力は……）」

『……シャイニング・トラペゾヘドロン、術式を認識。ＪＳ機関フルドライブ。防護用武装を自動展開します。コード【アームドアップ】…認識……イグニション』

その音声が響いた時、オレの脳から強制的に命令が引き出された。

脳から出された命令は、オレの身体の様々な細胞を目覚めさせ、装備していた道具に影響を与える。

「ぐっ……ぁ……ガァァァァァァァァァァアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

そして、次の瞬間、強大なエネルギーが辺りを襲い、そのエネルギーの奔流が止んだ頃には、虚数空間内に人影は一つとして無かった。

## 第四十七話　詰み、面会、虚数空間にて（後書き）

なっぺ「後書き座談会～」

ベス「今回は吼太さんは休みです」

クロノ「まぁあんな展開だしな」

なっぺ「今回はクロノ君に来てもらいました」

クロノ「よろしく」

なっぺ「さて、感想感謝のコーナー！クロノ君ヨロ！」

クロノ「ライさん、緋水さん、雨季さん。感想ありがとうございました」

ベス「ライさんから若返りの薬、雨季さんからはロリッ娘薬をいただきました」

なっぺ「そして次回は無印最終話！」

ベス「吼太さんは生きて帰って来れるのか！？」

クロノ「では、この辺で。次回もよろしく頼む」

## 第四十八話　なまえをよんで（前書き）

今回で無印編は終了です。

これからは幕間や３０万アクセス突破記念などになります。

多分。

# 第四十八話　なまえをよんで

Ｓｉｄｅ　なのは

どうしようどうしよう！

リームさんは茫然としてるし、フェイトちゃんとライラさんは暴走寸前だし…

コータ君……私、どうしたらいいの…？

そう思った時だった。

ドォグォォォ！！！！

目の前に幾重にも重なった、見慣れない魔法陣が展開されて、中から膨大な……とてつもなく膨大な魔力が溢れ出して来たの！

「これは一体……？」

「危険だなのは！下がれ！！」

クロノ君が注意を呼びかけてくる。

そんな中で、リームさんと、フラウリーナ三姉妹の人達だけは、全然違う反応をしていた。

「ようやくですわね」

「ライラを引き留めておいて正解だったな～」

「……帰って……来た……！」

「……お帰り……コータぁ……」

そして、空間が爆砕されて、一人の人間が姿を顕す。

その人は、頭に鱗を重ねて造ったような、銀色のヘルメットを付けていて、胴体には荒々しい顔とサングラスを付けているようにも見える鎧を付けていて、肩にはきらびやかな剣にも見える翼を付けた鎧を付けていて、腕にはシンプルな手甲みたいなものを付けてて、腰には四角いバックルを付けたベルトを巻いてて、脚には二つの巨大な、城壁にも見える金色の鎧を付けていて、背中には金色に輝くマントを纏っていて、手には、金色に煌めく巨大な大剣を持っていた。

でも、そんな、全身がまるで分からない恰好をしているのに、私には……いや、私たちには分かってしまった。

この人は、コータ君なんだって。

そして、次の瞬間、その様々な鎧は一斉に消え去って、コータ君はその場に倒れたの。

金色の剣はコータ君の手を離れた瞬間に分解されて、コータ君の中に入っていった。

「……ってコータ君！大丈夫！？」

コータ君の側にみんなで集まる。幸い、コータ君は寝てるだけみたい。

唯一、クロノ君だけは「虚数空間から戻って来た……？そんなこと、僕は聞いてない……！？」って言いながら茫然と立っていたの。

とりあえず……

「これで……ホントに終わりだよね……？」

Ｓｉｄｅ　吼太

ん……ここは……

「知らない……天井だ……」

『お目覚めになりましたか。マスター』

どうやら、オレはどこかの部屋で寝ていたらしい。

「トゥードか……。それで、ここは？」

トゥードは枕元に置いてあった。

『アースラの中です。現在、地球に向けて運航中です。数時間程で到着と予想されます』

「そっか……そうだ、シャイニング・トラペゾヘドロンは！？あれを放っておいたら大変なことに！」

『その心配はいりません。シャイニング・トラペゾヘドロンはマスターの手を離れた瞬間にマスターに分解吸収されています。マスターに異常が無い以上、シャイニング・トラペゾヘドロンが暴走する可能性もありません』

「ならよかった……

……ん…？」

シャイニング・トラペゾヘドロンが……オレに……何だって？

『分解吸収されました』

……

「なんじゃそりゃァァァァァァァ！！！？」

Ｓｉｄｅ　アリス

「ダーリン！目が醒めた……の……」

ダーリンの寝ている部屋から大絶叫が聞こえたから、様子を見にきたんだけど……

その…治療や検査のために服を脱いでたみたいで……

いろいろと……下のモノとかが……

／／／／／／

「うわぁァァァァァァァァァァァァァ」

Ｓｉｄｅ　三人称

さて、フェイトを始めとする、テスタロッサ家の処罰なのだが……

……

全て無罪、というよりは初めから何も起こしていない、という扱いになった。

リンディいわく、「報告したいのはやまやまなんだけどね？【何故か】映像記録や証拠品が全て消えてしまっている上、攻撃されたと考えられる局員も全員が一様に「訓練でやりすぎただけですよ」としか言わないのよ。……証拠も証言も無いのに、犯罪者扱いなんて出来ないわ♪」とのこと。

しかし、いろいろな手続きがあるためにミッドチルダへは一度行かなければいけないらしく、フェイト達は一旦海鳴を離れることになった。手続きが終わったら、今後は海鳴に住む予定なんだそうだ。

ちなみに、プレシアの病気なのだが、吼太が以前使用した【砂時計に癒を加える能力】でかなり治っていたのと、アリシアが生き返ったという精神的なことが重なり、知らぬ間に完治していた。今では、アルフと打ち合いが出来る程に体力も回復している。

なお、テスタロッサ家は基本的にアクティブらしく、家族でスポーツをするのが最近のブームなんだとか。

なのはは生粋の運動オンチのため、見ていることが殆どだったが、たまにフェイトに誘われて参加していた。

また、フェイトとアルフははやての家に、別れの挨拶をしに行き、ついでに着いていった吼太と予期せぬ再会が起こる等、小さな幸せが少しずつ起こっていった。

Ｓｉｄｅ　吼太

そして、別れの時。

「……だってのに、なのはは遅刻か？」

「なのはちゃんはお寝坊さんなんだね」

アリシアに突っ込まれる。

……アイツ、今日ぐらいは普通に来いよ…

ちなみにリーム達はお留守番だ。

理由は……昨夜にオレの寝室に忍び込んで来て……

返り討ちにした。今日はお仕置きでいない、というわけだ。

「ごめんなさ～い！」

お、来た来た。

「遅ぇ～ぞ～！！」

「ごめんなさい……ところで、まだ大丈夫？」

「別に急ぎの用事があるわけではないからな。大丈夫だ」

なのはの質問に、まっくろくろすけ…「クロノだ」……モノローグにツッコミを入れんなまっくろくろすけ「クロノだ」……クロノが答えた。

「アンタ達にも大分迷惑かけたねぇ……ゴメンよ？」

アルフが顔の前で片手で手刀を作って、謝罪のポーズを取る。

「いいってことよ。いつ頃に帰って来れそうなんだ？」

「多分、半年ぐらいは先かしら？」

オレの質問にプレシアさんが答える。ちなみに、プレシアさんの恰好は落ち着いた雰囲気の服になっていた。

アレ、もしかしてバリアジャケットなのか？

「本当に世話になったわね……なのはさん、ユーノ君、そして…吼太君」

そう言って、オレ達に微笑むプレシアさん。美人って何をやっても様になるな。

「コータぁ～♪」

突然、オレに何かが飛び込んで来た。

何か、というのは、オレの視界は今現在、金に染まっていて、何が起こっているか判断出来ないからだ。

何かはオレの胸のところで身体の一部をしきりに擦りつけている。

「お前……誰だ？」

「私？アリシアだよ？フェイトのお姉さんのアリシア！忘れちゃったの？コータ？」

アリシアか……つーことはこの視界いっぱいに広がっているのはアリシアの髪の毛で、擦りつけているのはアリシアの顔、か。

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトを見つけたらしい。

ここは二人っきりにしてやるか。

オレは、アリシアを連れて少し離れる。

みんなもそう思ったのか、適当に話を付けて離れていた。

「今日来てもらったのは、返事をするため」

フェイトが切り出す。

「返事？」

「君がいつか言ってくれた言葉、友達になりたいって」

「あ、うん！うん！」

その言葉で思い出したのか、何度も頷くなのは。

「私に出来るなら、私でいいならって……。だけど私、どうしていいかわからない。だから教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか。」

フェイトには今まで友達はいなかったもんな…アルフは使い魔だし。

それに対してなのはは、目をつむって、言葉を紡ぎだす。

「簡単だよ。友達になる方法、すごく簡単。」

そう言われて、少し困惑した表情になるフェイト。

「なまえをよんで？初めはそれだけでいいの。君とかあなたとか、そういうのじゃなくって……ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの。私は、高町なのはだよ」

フェイトは少し躊躇いつつも、口に出す。

「なのは……」

「うん！そう！なのはだよ！」

「なのは」

「うん！うん！」

感極まったのか、フェイトの両手をとるなのは。

当然、満面の笑顔だ。

「ありがとう……なのは……」

「うん！！」

よかった……どうやらハッピーエンドみたいだな。

「でも……」

……ん？

「なのは相手でも、コータは渡さないから」

「それはこっちの台詞だよ？フェイトちゃん」

「「ウフフフ……」」

……アレ？ハッピーエンドじゃないのか？コレは？

「なのはは、だって、本当にいい子だねぇ……フェイトが、あんな

に笑ってるよ」

アルフさん。これがそんな平和なもんに見えるなら今すぐに眼科に行ってください。

「もー！コータはアリシアのなのー！」

「あらあら……吼太君は私のモノよ？……そんなことも分からないのかしら……？」

お二方。自重してください。

誰か！誰か助けてくれる人……

リンディさん！……むしろ楽しんでやがる。

まっくろくろすけ！……いい笑顔で「死ね！」とアイコンタクトを送ってきやがった。

ユーノ！……目を逸らしてやがる。

オレに味方はいないのか！？

結局、フェイト達が旅立つのに、数時間もかかってしまうこととなった。

あ、リボンは交換してたよ？一応。

## 第四十八話　なまえをよんで（後書き）

なっぺ「後書き座談会だじぇ！」

吼太「ようやく戻ってこれた……」

なっぺ「いろいろあったけど、今回で無印編は終了です！」

吼太「なんだかんだで一ヶ月近くやってるよな」

なっぺ「ここまで続くとは思わなかった……」

吼太「どこまでやるつもりだ？」

なっぺ「もう、当初に考えてた四部構成にする」

吼太「ま、頑張れ」

なっぺ「今回出て来た吼太の姿は、最終形態の位置付けなので、次に出てくるのは多分、Ｓｔｓ以降になると思います」

吼太「……あれは疲れる……当分やりたくない……小学生の体力じゃ限界がありすぎる……」

なっぺ「さて、感想感謝のコーナー！久々に吼太ヨロシク！」

吼太「おう。…緋水さん、天照大神さん、雨季さん、ライさん、蓬莱山輝夜さん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「次回は復活のあの話！」

吼太「復活ってもたいしたことないし、そもそも【あの】なんて大層なモンでもないだろ」

なっぺ「（、・ω・、）」

吼太「では、この辺で。次回もお楽しみに！」

## 第四十九話　チート能力を確認しよう！２ｎｄ！（前書き）

はい、吼太の能力が更新されたので、復活の【チート能力を確認しよう！】です。

この次の話に、吼太の能力の追加説明が入ります。

# 第四十九話　チート能力を確認しよう！２ｎｄ！

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、オレ達は今、時の庭園にいる。

理由はいくつかあるが、一つはまず、後片付けだ。

アースラにはまだアルカンシェルを積んでなかったため、時の庭園を破壊できるだけの威力を持つやつがオレしかいなかったわけだ。

んで、ついでにいろいろと身体の確認をしようとしたんだけど……

「まじかよ……オイ…」

答えを出す者（アンサートーカー）、トゥードの簡易チェック、ヴィネコンの解析結果、ｅｔｃ……

いずれも、ただ一つの結果を示していた。

吉谷吼太の魔力量：∞

……いや、何度も確認したよ？

でも、何度やっても同じ結果なんだよ！

「急成長だね。コータ」

「びっくりだよチクショウ…」

なぜか、というと、シャイニング・トラペゾヘドロンがオレのリンカーコアを鞘というか、入れ物にしたらしく、結果としてオレのリンカーコアからは大量の魔力が放出出来るようになっているらしい。

シャイニング・トラペゾヘドロン自体、世界そのものを構築出来るほど膨大な、まさに無限大の魔力を秘めている以上、そこから魔力を貰っているオレの魔力量もまた、無限大になったというわけだ。

……あのマスター・オブ・ネクロロリコンめ……どえらいことしてくれたな…

『よかったじゃないですか』

さらに言うと、トゥードにも魔力が備わった。しかもＥＸランクの。

どうやら、壊れた魔溜石とジュエルシードが融合したらしく、周囲の魔力素を吸収しつつも、膨大な魔力を生み出す機構が出来たらしい。トゥードはこれに仮名称として【ＪＳ機関（ジュエルシード）】と名を付けたそうだ。まぁ、変更する必要がないから半ば正式名称と化しているけど。

ついでに、人の意志に影響されやすいジュエルシードを取り込んだせいか、感情表現が若干豊かになった。これはうれしい誤算だな。

「いや、そりゃそうだけどさ……でも∞だぞ？普通ＥＸだろ」

『ＥＸでも十分でしょうけど、備えあれば憂い無し、です』

「それに、コータだってまんざらじゃないでしょ？」

「まぁな……んじゃ、とりあえずいくつか試してみるか」

『イエス、マスター』

幸い、コレ（時の庭園）は壊す予定だしな。

……内部機構の一部持って行っちまおうかな？ちょっとばかしちょろまかしても大丈夫だろ。

よし。壊すのは外層のみにしよう。

あの、謎の強化イベントによって、オレにはいくつかの能力が追加されていた。

んで、一個ずつチェックしていくことにする。

その1：リンカーコアの強化よる、魔法の使用可能化

「これは楽だな」

「でかい魔法一つで十分だもんね」

「「ユニゾン・イン」」

「それじゃあ……【バオウ・ザケルガ】ァァァァァァァ！！！」

ガッシュの最大の術、【バオウ・ザケルガ】を放つ。その姿は、TVでよく出た姿ではなく、漫画版にしか出ていない真の姿。

しかも……

「ガッシュとゼオンの合体技バージョンかよ……」

その大きさはファウードと同等……つまりは数百m以上。

そのバオウが、外壁を次々と喰らっていく。

『コータ……これ（バオウ）だけで終わっちゃうね……』

「……止めるか」

その2：ヴィネコンの追加プログラム

何故追加されていたプログラムがあり、どうやらモンスターの部分召喚と同じ原理で使用出来るらしい。

せっかくなので試してみる。

「ランダムダウンロード！」

『了解。両腕部に具現化。武装召喚（リアライズ）実行』

武装召喚（リアライズ）っていうのは、トゥードの機能を使って発動する融合のアレのことだ。今回、せっかくだから名前をつけた。

そして、オレの両腕が光に包まれ……

「お、おおおぉ～！」

それは、鉄（くろがね）の城と謳われる巨神の腕。

鋼の戦士の腕。

「マジンガー……Z……」

そう、マジンガーZのロケットパンチが腕についていた。

『コータ……これ、少しダサく「ダサいとか言うな！」ひゃう！？』

「これにはなぁ……この腕にはなぁ……漢の夢とロマンが詰まってんだよ！！」

『あ……そうなんだ……』

リームが若干引いているが無視。

「それじゃあ行くぜ！ロケットォォォ、パァァァァァァァァンチッッッ！！！」

オレの両腕が飛び出し、時の庭園の外壁を次々に砕く。

「ッシャァァァァァァ！！！！！！！」

あまりの再現度に思わず叫ぶオレ。

『でもそれ完全に質量兵器だよね？』

『さすがにごまかせませんよね』

……

その３：新しい希少技能（レアスキル）

『新しい希少技能があるみたいですね』

「みたいだな」

答えを出す者によると、新しい希少技能は、【相乗掛合】《クロスオーバー》。

内容は、能力どうしを掛け合わせることが出来る。

これだけを聞くとたいしたことなく感じるが、使い方次第ではすごいことになる。

例えば、妖精の法律【フェアリーロウ】と確率変動弾を掛け合わせれば、敵と認識した対象を、防御する確率を無効化しつつ、超広範囲に及び攻撃するというかなりチートな技を使えるようになる。

まぁ、効果の大きいものはリームとユニゾンしないと処理しきれないから使えないんだけどな。

これを使えば、空中でライダーや空を飛べないモンスターを喚んだときでも飛行させながら戦闘させることすら可能になる。

リリカル世界は空中戦が主体だからな。これでラオシャンロンだろうがなんだろうが喚び放題だ。

せっかくだし、テキトーに……

「ギガドリルピック！！」

百鬼夜行とギガドリルを相乗掛合（クロスオーバー）して使ってみる。

突貫力に優れた二つを掛け合わせたソレは、分厚い岩盤をバターのように貫いた。

『これは使えそうだね』

「花鳥風月とシャンタクと飛行少年（フライング・ブイ）を掛け合わせれば飛行能力も格段に上がるな」

一つ一つが音速前後の速度出せるからな、多分。他の飛行系能力も相乗掛合（クロスオーバー）したら、光速で移動出来るかもな。使う機会ないだろうけど。

そして、とりあえずは確認終了したわけだけど……

『時の庭園…まだ大分残ってるね』

「……これの処理を個人に任せるって酷くね？」

『コータが強すぎるのが悪いんだよ。きっと』

内部機構をいくつか拝借したあと、ストナーサンシャインとカイザ

ーノヴァで時の庭園を粉々にして、シン・クリア・セウノウスで完全消滅させました。

結論、魔法っていいね！

# 第四十九話　チート能力を確認しよう！２ｎｄ！（後書き）

なっぺ「後書き座談会ワッショイワッショイ！」

吼太「お祭りかよ」

なっぺ「とうとう魔法が使えるようになったね」

吼太「ようやくな」

なっぺ「さらに魔力量がまさかの∞」

吼太「シャイニング・トラペゾヘドロンすげぇなぁ…」

なっぺ「んじゃ、感想感謝のコーナー。今回出番の無かったなのは、ヨロシク！」

なのは「出番無かったの……ライさん、雨季さん、緋水さん、夢刹さん、天照大神さん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「次回は大きく変化した吼太のステータス、その説明の回となります！」

吼太「Ａ'ｓはまだなのか？」

なっぺ「まだまだ先かな。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 幕間　続・吼太の法則！！

なっぺ「はいはい！なっぺです！いつもこの小説を見ていただき、ありがとうございます！」

吼太「おかげさまでこの小説も３０万アクセスを突破。これも一重に皆様のおかげです」

なっぺ「さて、今回は超強化された吼太の能力を改めて確認しよう、という回です」

吼太「それじゃ、どーぞ」

吉谷吼太　能力

魔力量：Ｆマイナス→∞（無限大）

螺旋力：ＥＸ→プラスが付く程度の強化

ヴィネコン追加プログラム

古今東西、あらゆるロボットのデータが追加された。

モンスターの身体を自身の身体に特殊召喚するシステム、武装召喚（リアライズ）の代用データとして利用が出来る。

意志が無い機体に関しては、９０％の武装召喚（リアライズ）も可能。

ただし、ロボットそのものを召喚するにはかなりの精神力が必要なため、使用することはまずない。

新希少技能（レアスキル）

【相乗掛合】《クロスオーバー》

異能の力などの、【生物の肉体をそのまま使用しない能力】を掛け合わせて使用が出来るスキル。

使い方によっては効果が１にも１０にも１００にもなるスキル。

掛け合わせる数に限界は無いが、必ず自分が発動する能力が一つ以上混ざってなくてはいけない。

指向性…つまりはベクトルを変える力は無いため、攻撃に対して【相乗掛合】《クロスオーバー》をして、攻撃を回避しつつ反撃という使い方は出来ない。

これを使用すると、様々な能力のいいとこどりが出来る。

ぶっちゃけ、希少技能をこれ以外に一つ以上持ってないと意味がないスキル。

吼太「後者二つはいいとしても……ホントになんなんだよ……∞って…」

なっぺ「ちなみに連載当初から予定していたことです。この小説、あくまでも【最強主人公モノ】であり、【魔法が使えない最強主人公モノ】ではないので」

吼太「じゃあなんであんなことにしたんだよ？」

なっぺ「最初っから強かったら成長の過程書けないじゃん。ついでに言えば、肉体が能力に着いていけてない部分があるから、時間経てばさらに強くなるぞ？」

吼太「……チートだな」

なっぺ「チートだよ。それもかなりの。まぁ、まだまだ発展途上だけどな」

吼太「それがチートなんだよ！」

なっぺ「後書き座談会に続く！」

吼太「締めんな！」

## 幕間　続・吼太の法則！！（後書き）

なっぺ「後書き座談会うりゃあ！」

吼太「馬鹿作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

なっぺ「何のことかなＨＡＨＡＨＡ！」

ベス「えー、作者と吼太さんがバトルを始めてしまったので、これからは私が。ライさん、緋水さん、夢刹さん、雨季さん。感想ありがとうございました。」

リーム「ではではこの辺でー！」

吼太「ルナハンドソニック！」

なっぺ「ハンドソニックが自由自在に伸びるだと！？だが当たらんよ！」

吼太「もういっそ死ね馬鹿作者ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

## 第五十話　めでたい話と海の話（前書き）

今回は作者が盛大に暴走した結果です。

なので、かなり無茶苦茶な内容になってます。ご注意ください。

# 第五十話　めでたい話と海の話

Ｓｉｄｅ　吼太

きっかけは母さん（久々登場の燈）の一言だった。

「明日、海に行くわよ！！！」

「「「「「さんせーい♪」」」」」

オイ、吉谷家五姉妹（仮）。少しは考えてモノを言えや。

呆れる隙もねぇよ。

「母さん？その日僕仕事が……「有休取ってきなさい」今すぐに！」

父さん（透）……もう少し粘ろうぜ…？

「あのさ母さん？なんで突然海に…？」

他に聞く人がいなさそうなので、とりあえず聞いてみる。

「そりゃあアレよ！めでたいからよ！！」

「めでたいって何が！？」

「めでたいのはめでたいの！さぁ、今日はもう寝るわよ！」

なんなんだよ一体……

んで、

「海に来たわけだ」

「お父様！あれが海なのですね！」

「俺初めてだよ！デッケェなぁ～！」

「……風が……気持ちいい」

「僕も初めてだよ～！あ、あれなにかな？」

「ダーリン！私かき氷食べたい！」

上から順にプリム、ミカ、ライラ、リーム、アリス。

今日は吉谷家全員。フルメンバーだ。

「あれ？コータ君？」

……未来の魔王の声が聞こえたけど無視。

「こんなとこで何してんのよ？」

……くぎゅ～なボイスのツンデレ少女の声が聞こえたけど無視。

「奇遇だね～コータ君♪」

……吸血鬼な少女の声が……

…分かったよ！

認めりゃいいんだろチクショウ！

「……なんでお前らがここにいるんだよ？」

「……べつに？た、たまたまだよ♪」

「そ、そうよ？決してわざとじゃないわよ？」

「燈さんに誘われて来たなんてことはないよ……「「なのは！」」ふぇっ！！」

親切にありがとうなのは。

つまりは……

「またアンタか母さん！！！」

「めでたいからいいのよ～！」

そう言いながら海を高速で泳ぐ母さん。

「待てやコラ！！」

かならず捕まえちゃる！！

「なぁ……アレ、５０ｍ何秒だ？」

「あの親子……日本新いけるんじゃないか？」

準備運動（？）が終わって。

「（思わず服のまま泳いじまった……乾かさないと……）」

父さんが場所を確保していたらしくて、既にパラソルまで立てていた。

……周りに翠屋の人やら月村家の人がいるのは読めてたさ……

「コータ！」

「コータ～♪」

「久しぶりね吼太君♪」

「元気にしてたかい？」

……

「アレ？オカシイナ？オレノ目ガオカシイノカナ？テスタロッサ家ノ皆ガ居ルヨウニ見エルヨ？」

「コータ！調子が悪いなら私のひざ枕で休むといいよ！」

「コータぁ～♪アリシア早く遊びた～い」

「あらあら、吼太君。それなら私の胸でおやすみなさい？」

……

「……アルフよ。何があった？」

「えっと……なんか管理局の連中が『今日はめでたい日だ！』って言ってアタシ達を一時的に解放してくれたんだよ」

……めでたいってなんなんだよ……

とりあえず、現在いるのは……

オレ、リーム、プリム、ミカ、ライラ、アリス、燈母さん、透父さんの吉谷家。

なのは、恭也さん、美由希さん、士郎さん、桃子さんの高町家。

すずか、忍さん、ノエルさん、ファリンさんの月村家。

アリサと鮫島さんのバニングス家。

フェイト、アリシア、アルフ、プレシアさん、リニスさんのテスタロッサ家。

……おや？一人見慣れない……いや、ある意味見慣れてる人がいるような……

「そういえば紹介がまだだったわね。私の使い魔のリニスよ」

「リニスです。よろしくお願いします」

あ、ご丁寧にどうも……

って待てぃ！

「リニスさんって消えたんじゃ！？」

「縁起でもないこと言わないでください！」

「そうよ吼太。リニスは時の庭園にずっといたわよ？」

リニスの反論にプレシアさんが付け加える。

「いや、だってあの時いなかったじゃねぇか！」

「たまたまよ。それに、私が使い魔も無しにあのバカみたいに巨大な、時の庭園の清潔さを維持できると本気で思ってたの？」

確かに掃除行き届いてたから不思議には思ってたけどさ……つーか自分で造ったんだろ。あれ。

「まぁ、細かいことは抜きにして……みんな！水着に着替えてこよう！」

「「「「「オー！」」」」」

リームの掛け声に皆が反応する。

……元気だなぁ…女性陣は…

「忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿忍の水着姿……」

「母さんこの日のために水着新調したらしいからなぁ……楽しみだ」

「吉谷さんの奥さんもですか？実は家の桃子も……」

訂正。男性陣（一鮫島さん&オレ）もある意味元気だった。

つーか恭也さん。今日も変態度全開ですね。

そして数時間後……

「「「「……まだか？あいつら……？」」」」

長過ぎないか？普通に死ねるぞ？暑さで。

「お待たせー！」

「待ったー？」

「待たせすぎだアホ！」

母さんとリームの言葉に全力で突っ込むオレ。

いくらなんでも時間かけすぎだろ。

「ふっふーん、どう？」

自信満々に水着を見せびらかしているのはアリサ。

水色の水着だ。どんな形かって？名前ワカンネ。……ビキニってやつに近いかな？アレよりは少しだけ露出少ないけど。

「ちょっと……派手かな…？」

「かわいい～？」

次に来たのはフェイトとアリシア。フェイトは黒色、アリシアは白色の色違いの水着だ。上はなんか胸元の空いたやつで、下にはスカートみたいに布がついている。

「ご、ゴメンね？恥ずかしくて……／／／」

すずかは身体一面を覆うような水着だ。色は紫。ワンピースタイプっつうのか？よくわからん。

「にゃはは♪かわいい？」

なのはは薄い桃色のビキニ……か？よくわからん。

「コータ～、どう？」

リームはまさかのスク水。このオレが唯一わかる水着だ。

……浮輪をつけてるせいで余計に幼く見える。

……他のみんなもそれぞれ似合った水着を着てきていた。

「「「「「はしょられた！？」」」」」

――描写めんどくさいんじゃ！ｂｙなっぺ――

とりあえず、オレは荷物番になった。

恭也さんは忍さんとどっかにいっちゃった（恐らく１８禁的な意味で）し、士郎さんと桃子さんはなのは達の面倒を見ている。
うちの母さんと父さんはやっぱりどっかにいっちゃって（競泳的な意味で）、鮫島さんはジュースやヤキソバ等を買いに行っている。

しかしまぁ……

ナンパの数が多いこと多いこと。

美由希さんやリニスさん、アルフ、ノエルさんにはもちろんのこと、大人しそうなライラ、大人っぽいプレシアさんにもかなり来てるし、見た目きつそうなプリムや、男っぽいミカもかなり口説かれてる。
リームやファリンさん、果てはなのは達やアリスみたいな明らかな子供にまで口説いてるやつもいた。

酷い時には士郎さんいるのにガン無視で桃子さん口説いてる人とかすらいた。

まぁ、そんな人は士郎さんに物理的に埋められてたけど。

オレはそんな様子を体育座りで見ていた。

……淋しくなんかないやい。

荷物の警護……カクレオンとオオナズチに任せて泳いでこようか

な。

そうして、オレは一人で泳ぎ始めようとしたんだが……

「誰かーっ！あの子を助けてーっ！」

誰かなんて聞く暇はなかった。

すぐに現場に泳いでいく。

見れば、小さな女の子が溺れていた。

「今、助けてやるからな…！」

女の子の身体を掴む。

そして、そのまま岸に戻った。

「あぁ……サトコ…」

「ママァ……恐かったよ……」

「大丈夫……大丈夫だから……」

「大丈夫ですか？」

オレが声をかけると、親子はこっちに気付いて

「ありがとうございました！このご恩は決して忘れません！」

「んなたいしたことじゃないですよ」

「いえいえ！あなたは娘の恩人です！本当にありがとうございました！」

「お兄ちゃんありがとう！」

小さな女の子が笑顔で言ってくる。

「……その笑顔だけで、十分さ」

そう言って、頭を撫でてあげる。すると女の子の顔が真っ赤になった。

「あぅ……／／／／／／」

……大丈夫かな？

「サトコ……そういうことね♪」

母親はなぜか微笑ましくこっちを見ている。……なぜ？

「「「「「コータ（君）……？」」」」」

【危険回避アビリティＬＶ５】発動！

「ではではこの辺でぇぇぇ！……」

オレは全力でその場を逃げ出した。

Ｓｉｄｅ　サトコ

かっこよかったな……あのお兄ちゃん。

「さぁサトコ、そろそろ帰ろうか？」

「わかった！」

「今度はみんなで来ようね」

「うん！！」

後に彼女は災害救助の第一線で働く、一流のライフキーパーとなるのだが、それはまた、別のお話。

「許してくれ！つーかなぜオレは追われなきゃいけないんだぁぁぁ！！！」

「「「「「自分の胸に聞いて（いてなの）（いてよ）（きなさい）！！！！」」」」」

「分かるかぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

# 第五十話　めでたい話と海の話（後書き）

なっぺ「後書き座談会ヌリャア！」

吼太「そういや今回何がめでたかったんだ？」

なっぺ「フッフッフッ……実は、この小説が第５０話までいったのさ！」

……

吼太「え？それだけ？」

なっぺ「……嬉しかったんだい…」

吼太「あんだけ早く更新してりゃ５０話もいくだろ」

なっぺ「うん……じゃあ、感想感謝のコーナー。夢刹さん、ライさん、緋水さん。感想ありがとうございました！」

吼太「次回は？」

なっぺ「次回からは３０万アクセス突破記念！コラボ企画なんかもやりたいので、希望者は感想なりメッセージなりで連絡してください！」

吼太「……来るのか？」

なっぺ「来る！……と信じたい」

吼太「まぁ、こんな小説と馬鹿作者じゃあなぁ」

なっぺ「すいません。……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ３０万アクセス突破記念　リームの幸せな一日？（前書き）

今回は、１０万アクセス突破記念のときに出来なかった企画の内の一つです。

## ３０万アクセス突破記念　リームの幸せな一日？

Ｓｉｄｅ　リーム

今日の僕は一味違う♪

いつもよりもちょっとだけ大胆な格好。

少しオシャレなバッグに、ちょっとだけ高い靴。

そう、今日は……

「コータとデートなのだー♪」

「悪ぃ、待ったか？」

王子様のご到着♪

コータはいつもの格好だ。

少し残念かな？でもいつもの格好のほうがコータらしい。

「ううん、今来たとこ」

こーゆー台詞って定番だよね？

「んじゃ、行くか。ほら」

そう言ってコータは自分の手を差し出してくる。

「ココココータ……それはまさか…／／／／」

「ニワトリかお前は…ほら、恋人同士って手を繋ぐモンだろ？」

「う、うん／／／／」

手を、繋ぐ。

暖かい。

コータの手はまだ少し柔らかいような、でも男の子の手だった。

まずは映画。

当然、内容はラブロマンス。

コータはあんまり好きじゃないのか、たまに欠伸をしてる。

けど、僕に合わせるために我慢して見ていてくれる。

他の人がどう思うかは分からないけど、こういうのは僕にとっては評価高いな。相手のことをちゃんと考えてくれてるってことだし。

「中々おもしろかったな」

「うん♪」

他愛もない話をしながら、街を歩く。手はもちろん繋いだまま。

「次は服を見に行こうよ！」

「あぁ」

それから、僕たちはいろんなお店に入って、服を試着したり、互いの服を選び合ったりして過ごした。

買うのはほんの少し。冷やかしが大半だけど、買いに来たわけでもないからこれでよし。

服の代金は、僕が払うって言ったのに結果的にはコータがおごってくれた。

だって、「こういうのでお金を払うのは男の役目なんだよ」って言うから……

少し悪い気もするし……

なにかお返しを……

そうだ！

「コータ！これやろう！」

僕が指差したのは所謂プリクラだ。

「ん?プリクラ「ほら早く!」わぁったから引っ張るなって!」

中に入って、写真を撮る。

これはどうやら、撮った後にいろいろ画像をいじれるタイプみたい。

せっかくだからコータにくるくるヒゲを描いてあげたら、「仕返しだ!」って僕の眉を太くされた。

結局、いろいろ試したけど最後はシンプルに真ん中にハートを描くだけに終わった。

まぁ、これはこれでいいか♪

「はいコータ♪これでお揃いだよ?」

「あ、あぁ……／／／／」

赤くなっちゃって……かわいい♪

それからは、近くの喫茶店に入って軽く話をしたりしてた。

そして、夜。

来たのは、恋人達のためのホテル。

何をするかは……／／／／／

「リーム……準備はいいな……？」

コータがいつにもましてカッコヨク見える……／／／／／／

そんな真剣な目で見られたら僕……／／／／／

「う、うん……／／／／／／」

そうして、二人の距離がだんだん縮まっていって……

「えへへ～♪」

「リーム！オイリーム！」

「あん、ダメだよコータ……そんなとこ……」

「戻ってこいバカ！道のど真ん中で止まるな！！つーか注目を集めまくってんだよ！！！」

……はっ！

「アレ？ホテルは？コータとの淫らな日々は！？」

「何言ってんだバカ。お前が映画見に行きたいからって着いていっ

てやってるのに……寝ぼけてんのか？」

……夢？

というより……妄想？

でも手に確かにコータの手の感触が……

自分の手を見てみる。

そこには……

「ん？どうした？」

やっぱりコータの手があった。

「……ううん、何でもない♪それより早く行こうっ！」

そう言って駆け出す僕。

「あっ、オイ、待てって！」

「待てないよ～♪」

願わくば、こんな幸せな日常が続いて欲しい。

願わくば、僕の願い通りになってほしい。

でも、今は……

この手の暖かさを、感じていたい。

## ３０万アクセス突破記念　リームの幸せな一日？（後書き）

なっぺ「後書き座談会だ！ドバイに行こう！」

吼太「意味がわかんねぇよ」

なっぺ「さて、コラボの話ですけど、思ったより遥かに多い数を頂き、正直驚いてます」

吼太「現在緋水さん、月光閃火さん、ライさん、雨季さんからお話を頂いております。基本的にこの四人との企画はやるつもりですが、これ以上増えた場合は、別の形でのコラボとなる可能性があります」

なっぺ「とはいえ、コラボ自体は大歓迎です！したい方、しても構わないという方は感想かメッセに連絡をお願いします！また、吼太達を自分の小説に出したいという方は、感想かメッセでその旨を話して頂ければそれでＯＫです！」

吼太「よし、リーム。今回はお前が感想感謝コーナー担当な」

リーム「わかったよー♪緋水さん、月光閃火さん、ライさん、夢刹さん、雨季さん、バルディッシュさん。感想ありがとうございましたー！」

吼太「次回からは、なのは、アリサ、すずかの順に個別短編らしいぞ」

なっぺ「ケータイが修理から戻ってきたけど、修理のときのストックが減ってきてて焦ってる」

吼太「はよ書け」

なっぺ「頑張る。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# ３０万アクセス突破記念　吼太となのはの楽しい時間（前書き）

ヒロイン短編　なのは編です。

視点はなのはからのみです。

## ３０万アクセス突破記念　吼太となのはの楽しい時間

Ｓｉｄｅ　なのは

ユーノ君が帰ってから数日、私はいつもの日常に戻っていたの。

喫茶翠屋で出すケーキのアイディアを考えたり、アリサちゃんやすずかちゃんと遊んだり、コータ君にアピールしてみたり。

とても、とっても平和です。

そんな日のこと。

「遊園地？」

「そ。どうだ？」

「行く行く！絶対行く！」

コータ君が遊園地に誘ってくれたの！

あ、でも二人っきりじゃなくてみんなでだけど。

そして当日。

「……リームは風邪、フラウリーナ三姉妹はバイト、アリスはリ

ームと同じで風邪、アリサとすずかは家の用事、と……」

「ってことは……」

「二人だけ、だな」

ふぇぇぇ！？

た、確かに二人っきりで遊園地デートしたいなーなんて思ってはいたけど…

まさか本当になるなんて…

これは神様の采配に違いないの！

「それじゃあ、行きましょうか？お嬢様」

そう言ってコータ君が手を差し延べてくる。

なんか今日のコータ君……カッコイイ…

そして……

フリーフォール

「おぉー」

「ふぇえええええ！！」

ジェットコースター

「わぁー」

「ふえええええええええええええええ！！！」

バイキング

「うぁー」

「ふえええええええええええええええええええええええええ！！！！」

お化け屋敷

「うぉっ！」

「……（気絶）」

「なのは……お前、なんで絶叫系ダメなのに乗ろうとすんだよ？」

「ふぇ？ん～……叫ぶのが気持ちいいから♪」

「つーかジェットコースターは魔法使ってるときに嫌というほど同じ感覚味わってるだろ。なんで苦手なんだよ？」

「自分で飛ぶのと勝手に飛ぶのは違うのぉー！」

次は何に乗ろうかな？

あ！

「コータ君！次はあれに乗ろう！」

「あれ？あれって……オイオイ…」

コータ君が固まる。どうしたのかな？

メリーゴーランドに乗りたいって言っただけなのに。

「早く早くぅ！」

「ま、待ってくれなのは！あれはいくらなんでも恥ずかしい……」

『フープバインド』

「さっすがレイジングハート♪」

逃げ出そうとしたコータ君をレイジングハートがバインドしてくれた。しかもカモフラージュ付き！だから周りの人にはばれないの。

「レイジングハートォ！テメェェェ！！！」

『マスターの笑顔を守るためならば、私は悪魔にもなりますよ』

「楽しかったー♪」

「恥ずかしかった…」

「コータ君！次はあれに乗ろう！」

次に私が指差したのはコーヒーカップ。

そのとき、コータ君の目がキランッて光ったの。

……嫌な予感がする………

「回せ廻せ輪廻せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

し、死ぬかと思ったの……

「さっきの仕返しじゃ」

「コータ君が酷いの～」

「先にやったのはなのはだろ」

それから、私たちはいろんなアトラクションを楽しんだの！

でも、楽しい時間っていうのはあっという間に過ぎるもので……

「辺りが暗くなってきたな…」

「そうだね……あ、最後にあれに乗ろう！」

「観覧車か……いいぜ」

そして、私たちは観覧車に乗った。

観覧車が昇っていく間、私たちは互いに無言だった。

コータ君はただ、外の景色を楽しんでるみたいだけど……

……だって、こんな狭い個室に二人っきりだよ？コータ君は何か考えたりしないのかな？

ふと前を見たら、隣のゴンドラに乗ったカップルさんが私たちを微笑ましく見ていた。

……／／／／／

やっぱり……そんな感じに見えてるのかな……？

「……綺麗だな」

「ふぇぇっ？」

「この街だよ。……この街にオレ達は住んでいるんだよな…」

「！……そうだね」

「この街にはいろんな人がいて、いろんな出会いがあってさ、どんなときも同じ一面は見せてくれない」

「うん。翠屋でも、いろんな人に会えた。もちろん、魔法に触れてからも」

「これからも、いろんな人に出会って、こんな平和な日常が続いていけばいいのにな…」

そう言ったコータ君の顔はどこか、心配をしているようにも、諦めているようにも、決意をしたようにも見えた。

「続いていくよ！絶対！」

思わず反射的に答える私。

「……そうだな」

そう言って、私の頭を撫でてくるコータ君。少しだけ恥ずかしいけど、とっても気持ちいいし、胸が温かくなる。

……やっぱり、私はコータ君が好きなんだ。それも、とてつもないぐらい。

「ん？どうした？なのは。顔が真っ赤だぞ？」

「だ、大丈夫！大丈夫なの／／／／」

「そうか？ならいいけど」

私の頭から手を離すコータ君。

少し残念。

「もう終わりだな」

「え？」

見れば、もう観覧車は下まで来ていた。

二人で、観覧車から降りる。

「さて、家まで送っていくよ」

「ふぇ！？い、いいよ！大丈夫だよ！／／／／／」

「遠慮すんなって。ほら」

そう言って、私の手を掴むコータ君。やっぱり、温かい……

そして、私たちはゆっくり、歩いて帰っていった。

手を繋いだまま……

「ねぇコータ……今日何してたの？」

「私も知りたいなー…ダーリン」

「何ってなのはと遊園地だけど？にしてもリームもアリスも風邪治ってよかったな♪」

「「よかったよ……O☆HA☆NA☆SHIが出来るからね……」」

「……あれ？今日は平和に終わる気がしてたのに、今は命の危険すら……」

「アイシクルフォース！」

「マハジオダイン！」

「「ギャアァァァァ！！！」」

## ３０万アクセス突破記念　吼太となのはの楽しい時間（後書き）

なっぺ「後書き座談会だドルドル！」

吼太「どこぞの炎神だテメェは」

なっぺ「甘い話って難しい」

吼太「ならやるなよ…」

なっぺ「いや、前出来なかったし、やりたいなとも思ってたし」

吼太「オレの身が持たねぇんだよ！」

なっぺ「それがお前だ。諦めろ」

吼太「ｏｒｚ」

なっぺ「感想感謝コーナーは今回の主役のなのは！」

なのは「はーい♪えと、Ａｒｉｓｈｉａさん、バルディッシュさん、夢刹さん、ライさん、雨季さん、緋水さん、ＫＯＵさんから感想を頂きました！ありがとうございます♪」

吼太「ご機嫌だななのは……」

なのは「うん！」

なっぺ「そして吼太。お前に対してバルディッシュさんから称号を

頂いたぞ」

【無限の旗製二号（アンリミテッド・フラグワークス）】

【ハーレム野郎】

【天然ジゴロ】

吼太「一つとして嬉しい称号がねぇ！？」

なっぺ「よかったな」

吼太「全然よくねぇよ！！」

なのは「次回はアリサちゃんの話らしいの」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ３０万アクセス突破記念　吼太とアリサの勝負な一日（前書き）

はい、今回はアリサメインの話です。

視点はアリサからのみです。

## ３０万アクセス突破記念　吼太とアリサの勝負な一日

Ｓｉｄｅ　アリサ

「私の家に来たい？」

ある日、突然コータがそんなことを聞いてきた。

「アリサん家ってオレ、行ってないだろ？行ってみたいなーって思ってさ」

「別にいいけど……なのは達は？」

「呼んでないけど……呼ぶか？」

「いいいや？やっぱなのは達もいろいろあるだろうし、無理には呼ばないほうがいいと思うのよ！うん！決してコータと二人っきりになりたいとか、そんなんじゃないんだからね！？」

思わず言う。なのは達には悪いけど、私もコータと二人っきりになりたい。

……口からはまるで逆の言葉が出ちゃったけど。

「そっか。分かった。んじゃ、次の日曜日な」

「分かったわ」

そして日曜日。私は部屋の中をせわしなく歩いていた。

「う～……」

「落ち着いて下さいお嬢様。はしたないですよ？」

「だってコータが来るのよ!？落ち着いてなんていらんないわよ！」

「ですが、吼太様もそのような女性に好意を寄せるかは怪しいものですよ？」

「……そうね」

鮫島に言われて、落ち着くためにソファーに座る。

……

「遅ーーーい！！！」

「お嬢様、座ってから一分も経っておりません。さらに言えば、待ち合わせの時間まではあと三分あります」

「うぅ……」

そして三分後……

「お嬢様、吼太様が……」

「とうとう来たのね！？」

「庭に放している犬達に襲われております」

「……あ！」

「アリサァァァァ！！！助けてくれぇぇぇぇ！！！！」

「し、死ぬかと思った……」

「よく逃げ切れたわね……」

「伊達に毎日野良犬や野良猫に追い掛けられていないからな」

……吼太ってホントに動物に好かれやすいのね。動物園とか連れていったらどうなるのかしら？

「とりあえず、お茶くれないか…？喉渇いちゃって……」

「いいわよ。鮫島！」

私が呼んだ瞬間、鮫島が横に現れる。

「お呼びですか？」

「コータにお茶を」

「畏まりました」

「……」

「どうしたの？コータ」

「今……鮫島さんどこから現れた？瞬間移動してきたのか？」

「一流の執事ならあれくらい普通だけど？」

私がそう言うと、コータは心底驚いたような顔をしていた。

……何かおかしいこと言ったかしら？

お茶を飲んだ後、私たちはゲームをした。

やったのはスト〇ー〇フ〇イター？。名作ね。

「喰らえ昇〇拳！」

「甘い！」

「な！あのタイミングで避けた！？」

「今度はこっちの番よ！」

「させるかぁぁぁぁぁ！！！」

数時間後……

「５０戦中、互いに２５勝２５敗……」

「ここで止めとくか？」

「そうね」

せっかくコータといるのに、ゲームだけじゃあれだもんね。

「それじゃあ次はテニスをするわよ！」

「仰せのままに、ってな」

不意打ちの笑顔。

うぅ……

「それ、卑怯よ……」

「ん、何か言ったか？」

「何でもない！ほら行くわよ！！」

「お、おう…？」

もう……バカバカバカバカバカバカ！！！

そして……

「２０戦中、１０勝１０敗……」

「またドローだな」

「……狙ってないわよね？」

「もちろんだ。オレのダチの言葉を借りると、全力じゃないけど本気だった」

つまりまだ強くなれるってことね……

「汗、かいたな…」

「そうね……せっかくだからプールにでも行く？」

「プールか？オレ水着無いけど…」

「すでに準備は完了しております」

「早っ！？」

早い？普通じゃない。

そして、近くの民間のプールに来た。

私の水着は、以前海に行ったときのとは違うもの。

オレンジ色のセパレートで、腰にはパレオが付いている。

「うし！泳ぐか！」

コータは普通のトランクスタイプの水着だ。

……肌綺麗ね。スッゴク。

「隙あり！」

「きゃあ！？」

突然私の身体が浮いて、プールに落ちた。多分、コータが投げ込んだのだろう。

幸い、周りには人がいなかったので、私が飛び込んだことで被害を受けた人はいなかった。

「コータぁ！！」

「わりーわりー」

笑いながら入ってくる。

「もー！バカバカバカぁ！！」

両腕で叩く。当然、本気では叩いていない。でも叩かなきゃ気が済まなかったのよ！

「だから悪かったってば！」

「コータのバカぁー！」

「……あの小学生二人、どう思う？」

「……リア充だな」

「リア充爆発しろ」

「このバカップルめが」

「ふぅー……すっきりした♪」

「そうね」

「お嬢様、そろそろお帰りの時間です」

鮫島が言ってくる。

そういえばもう日が暮れそうね。

「吼太様、お送りします」

「あ、大丈夫です。近いんで……んじゃ、アリサ、またな！」

そう言って、コータは私の頭を軽く撫でてから走っていった。

……／／／／／／

不意打ち……ホント…ずるいわよ……／／／／／

「お嬢様？」

「！　な、なんでもないわ！早く帰るわよ！」

「分かりました。……お嬢様」

「……何？」

「……その想いが実ることを祈っております」

「なっ……！？う、うるさい！」

「申し訳ありません」

もぉー！

それもこれもコータのせいよ！

責任、取ってもらうんだからね！！！

「……コータ君、なんで服からアリサちゃんの匂いがするの？」

「お、なのはか。どーした？家になんて来て」

「質問してるのは私だよ！！」

「（ビクッ）い、いや…だから今日はアリサの家に遊びに……ってなんでお前レイジングハートをってうわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

## 30万アクセス突破記念　吼太とアリサの勝負な一日（後書き）

なっぺ「後書き座談会でい！」

吼太「ゴヨウだゴヨウだってか？」

なっぺ「さて、新しい称号を月光閃火さんから頂いたぞ」

【やりすぎ万達者（オーバードーズ・オール・マスター）】
【外法の集大成（アル・アジフ）に愛されし者】
【外法の体現者（アルハザード）の後継者】

吼太「まともだ……」

なっぺ「そりゃあ、前よりはなぁ。じゃ、アリサ。感想感謝コーナーヨロ」

アリサ「ハイハイ。バルディッシュさん、ライさん、緋水さん、夢刹さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん。感想ありがとうございます！」

なっぺ「ライさんからはとろとろむらむらを、夢刹さんからは呪い【陰湿なる悪霊】を頂いたぞ。呪いの効果は1日中小さな嫌がらせの用な不幸が襲うってもん。例は、朝昼夜に何かの角で足の小指をぶつけるとか、必ず学校に居る間、ヒロインがヤンデレ化するとかだそうだ」

吼太「オイ！なんだそりゃ！？」

アリサ「コータ！一緒にお風呂に入りなさい！今度は（18禁的なこと）で勝負よ！」

吼太「断る！オレは逃げさせてもらう！」

ダッ↑駆け出す音

ガッ↑出入口の角に足の指をぶつけた音

吼太「ッ～！！！」

なっぺ「お～、痛そう」

なのは「コータ君……アリサちゃんとナニしようとしてたのかな？」

吼太「……弁解の余地は？」

なのは「ないよ」

なっぺ「もういっそのこと、全員で入っちゃったら？」

……

ラバーズ全員「「「それだぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」

吼太「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

なっぺ「なっはっはっはっ。次回はすずか中心です！」

すずか「頑張る！」

吼太「捕まってたまるかぁぁぁぁぁぁ！！」

ミカ「諦めて俺たちに奪われなよ！貞操を！！」

吼太「誰が諦めるか！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ３０万アクセス突破記念　吼太とすずかの秘密の夜（前書き）

ヒロイン短編のラストを飾るのはすずか！

今回は少し吼太Ｓｉｄｅがあります。

あと、後々に利用する（予定）の伏線も…

まぁ、そのまま利用したりはしませんけど。

ともかく、お楽しみください！

# ３０万アクセス突破記念　吼太とすずかの秘密の夜

私には秘密がある。

家族や、それに親しい人しか知らない秘密。

コータ君は……それを知ったらどう思うのかな……？

やっぱり……軽蔑するのかな……？

それは……嫌だな……

Ｓｉｄｅ　吼太

「夜の散歩もいいもんだな」

『はい』

今、オレはトゥードを持って散歩に出ている。

時間的には小学生が起きているような時間ではないけれど、精神年齢が２０歳越えしてるオレには関係無い。

……まぁ、眠いのは眠いんだけどさ。

「……！！……！！！」

ん？何か……言い争ってるのか？

「嫌！止めて下さい！」

「いいから来い！」

……違うな。コイツは……ムカつくことが起こってる。

「トゥード……場所は？」

『周辺のマップデータを展開、位置特定開始……発見しました』

さて、行くか。

Ｓｉｄｅ　すずか

「止めて！」

「くそっ！早く来いよ！！」

夜にお使いに行こうとしたら、知らない男の人が私を路地裏に引き込もうとしてきた。

お酒臭いから、酔ってるのかもしれない。

……あんまり能力は使いたくないのに……！

「止めてくれないと……！」

「止めてくれないとなんだってんだ？アァン！？むしろ抵抗されたほうがヤリ甲斐もあるってな！ギャハハハハ！！」

下品な笑い声。

……仕方ないよね。この人が悪い。

その時だった。

「待てよオッサン。オレの友達に何しようとしてんだ？」

え？この声って……

「アァ！誰だガキ！邪魔すんな！」

「邪魔するさ。何故ならオレは……」

ヒュッ、ゴスッ

「……通りすがりの正義の味方だからな。覚えておけ」

そう男の子が言い終わったころには、私を襲おうとしていた男性は気を失って倒れていて、私は男の子にお姫様だっこをされていた。

どうやら、一瞬で近づいて一撃し、倒したみたい。
こんなことが出来る人なんて、私は一人しか知らない。
「コータ……君……？」
「おう。どうしたすずか？こんな遅い時間に」
「私はちょっとお使いに……コータ君は？」
「オレは散歩だな。にしても……こんな遅い時間に一人で出歩かないほうがいいぞ？ただでさえすずかはかわいいんだからさ」
「えぇ！？／／／／／」
いきなり、何を……！？
恥ずかしいよ……
「とにかく、どっか行くってんならオレも着いていくよ。その方が安全だ」
「あ……大丈夫。大丈夫だから……」
今着いて来られると……
「ん？遠慮なんてしなくていいぞ？」
「ダメ……今は……」

欲求が……出てきちゃった……

ダメ……コータ君に迷惑は……！

「……お前、すごい顔色悪いぞ！？ホントに大丈夫か！？」

コータ君が私の両肩を掴んでくる。

「熱は……無いな……」

不意にコータ君がおでことおでこをくっつけてきた。

近い……／／／／／

ダメ……我慢、出来ない……！

ドサッ！

「え……？す、すずか？」

気付けば私はコータ君を押し倒していた。

「コータ君……最初に謝っておくね……？」

「すずか……？」

「ゴメンね……」

そして私は……

コータ君の首筋に、噛み付いた。

コータ君の首筋から、紅い液体が零れ落ちる。

それは、私にとっては命の水。

それを、コータ君の血液を、私は残す事なく飲む。

「……ッ」

コータ君が少し呻く。

申し訳ない気持ちでいっぱいだけど、もう自分では止められない。

コータ君が倒した人は、いつのまにか消えていた。

気付いて逃げていったのかな？

まぁ、そんなことはどうでもいい。

今はただ、この甘美な液体を味わいたい。

舌を使って、血を舐めとる。

首筋に開いた、牙の痕に捩込むように舌を動かす。

そのたびに、コータ君が少し呻く。

私の身体に満ちる支配感。

そして……

「ごめんなさい……」

「ったく……びっくりしたじゃねぇか…」

結局、コータ君の血を二時間も吸ってしまった。

吸い過ぎちゃったかも……

「あの……大丈夫？」

「んぁ？あぁ、別に大丈夫だ。生まれつき、血液は多いほうだし」

そう言って、コータ君は笑顔を向けてくる。

にしても……美味しかったなぁ…コータ君の……

「んで、説明してくれるよな？」

「え？」

「今のことだよ。さしずめ吸血鬼ってとこか？」

「！！」

気付かれ……ちゃうよね。あんなことしちゃったんだし。

「うん……話すよ。全部…」

「夜の一族、か」

「うん……」

話してしまった。もう後には退けない。

「あのね？コータ君。夜の一族には……ある掟があるの」

「掟？」

「うん。事情を知ってしまった人は、全てを忘れるか、もしくは親しい人……つまりは友達とか恋人とか恋人とか恋人とか恋人とか恋人とか配偶者とかみたいな存在として傍にいるか…」

「とりあえず恋人の選択肢が五つある件についてツッコムのは無し

か？」

「ダメだよ。早く選んで？」

恋人だよ！恋人！恋人に決まってるよね！？

「……友達で」

……

「……そーなんだー…」

「……え？不満か？」

「いや？別に？」

「……目が恐いぞ？」

「気のせいだよ」

「……ならいいけど……」

ふふふ……コータ君……覚悟しておいてね？

「あら～、随分とおもしろい状況になってるじゃない？」

突然、女の人の声が響く。

まさか、聞かれた!?

「……キバーラ、またオレの服に忍び込んでただろ」

コータ君がそう言うと、コータ君の服の中から白い何かが飛び出して来た。

「初めまして、すずか。私はキバーラよ♪」

「えっと……コウモリさん?」

「ま、大まかにはそうね」

「キバーラ……今度は何をする気だ?」

「ん~……すずかと契約がしたくなっちゃったのよ~、今の件を聞いて♪」

「…まぁ、オレは構わないけど……すずか、お前はどうだ?」

「え?私?……どうしよう…」

考えていると、キバーラが耳元に飛んできて、

「コータをオトす、手伝いをしてあげる♪私は結構コータの近くにいたから、趣味とかいろいろ知ってるわよ~?もちろん、【アッチ】のこととかもね♪」

って言ってきた。

「是非とも！」

反射的に答える私。

「それじゃけって～い！」

「決断早かったな…んじゃ、オレはもう帰るぞ～……眠ぃ……」

そう言って、コータ君は帰っていった。

待っていてね？コータ君。

必ずコータ君を、私の虜にしてあげるから♪

「ところであなたは結局何なの？」

「まぁ、おいおい説明してあげるわ♪早く帰りましょう♪」

## ３０万アクセス突破記念　吼太とすずかの秘密の夜（後書き）

なっぺ「後書き座談会ポゥッ！」

吼太「マイケルかお前は」

なっぺ「にしてもどうしよう……」

吼太「どうした？」

なっぺ「コラボをやる前に、３０万アクセス突破記念のつもりだったのが、４０万アクセス突破記念になりそう……」

吼太「……別にいいじゃん」

なっぺ「まぁ、そりゃそうだけどさ」

吼太「んで、今回でヒロイン短編は終わりか？」

なっぺ「とりあえずはね。これ以上続けたらＡ'ｓ突入が大幅に遅れそうだし。じゃあ、すずか！感想感謝コーナーよろしく！」

すずか「はーい♪月光閃火さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、徳山さん、バルディッシュさん、天照大神さん、雨季さん。感想ありがとうございました～！」

なっぺ「バルディッシュさんから、ガオガイガー、ガオファイガー、ジェネシックガオガイガー、ゴルディマークを、雨季さんから核攻撃を頂きました！」

吼太「核攻撃はゴジラに成って吸収させてもらったけどな。あと、ガオガイガー等は前に貰った次元航行艦アマテラスの中に搭載させてもらうぞ」

すずか「なっぺさん。次回はどうなるんですか？」

なっぺ「みんな大好きなあの娘が復活だ！」

吼太「……誰？」

なっぺ「察しのいい読者さんなら気づくだろ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## ４０万アクセス突破記念　魔法少女リリカル？？？（前書き）

はい、タイトルから分かるでしょうが、４０万アクセス突破しちゃいました。

そして今回はみんなが待ってたあの娘が再登場です！

……久々でキャラ合ってるか心配ですけど。

# ４０万アクセス突破記念　魔法少女リリカル？？？

Ｓｉｄｅ　吼太

「暑ぃ～な～……」

今、オレは家の中にいる。

まぁ、やることないだけだけど。

学校が夏休みに入ったので、やることが無さ過ぎるのだ。

宿題？コンピュータペンシルと自動解答羽根ペンで自動作成中だから大丈夫。卑怯な気もするけど、かといってやる気はないしなぁ……

……自由研究ぐらいは自分でするか。

にしても何にしようか……？

そんなことを考えながら過ごしていた。

「あ、麦茶きれた。……しゃあねぇ、買ってくるか」

「パパ……どこ行くの……？」

「コンビニだ。麦茶買ってくる」

「わかった……いってらっしゃい」

「いってきます」

ライラに見送られながら、外に出る。

そうして歩いていると、不思議な看板を見つけた。

【新製品！他社では決して飲めないジュース！期間限定！】

「……怪しい」

「あっ、吼…じゃなかった、そこの男の子。どう？一本」

販売員の人に声をかけられる。……声高いな…女の人なのか？なんか声が桃子さんに似てるな。

「いえ、要りません」

こういう輩はきっぱり断らないとな。

「そう言わないで……ほら、安くするから！」

「要りません」

そう言って、一気に突っ切る。

販売員はさすがに諦めたのか、もう売ってこようとはしなかった。

「さすがに無理だったか……あとはあの人に任せるしかないわね…

…」

「ただいまー」

麦茶を買って帰ってくる。帰り道にあの販売員は既にいなかった。
場所を変えたのか？

そして玄関に入ると、玄関の靴の数が多いことに気づいた。

誰か来てるのか……？

「母さーん、誰か来てるのー？」

「誰も来てないわよー」

んじゃあ新しい靴でも買ったのかな？全部女物だし。

それで、リビングに戻ると……

「あ、コータ！」

「今、御祖母様からジュースを頂いておりましたの。お父様もいかが？」

「おいしーよ？」

父さんとオレを除く吉谷家全員で【あの】怪しげなジュースを飲んでいた。

「……買ってきたのは母さんか」

「もちろん！こーゆーのに目がないのよー♪」

母さん。自慢して言うようなことじゃありません。

まぁ、みんな飲んでるなら大丈夫なんだろうな。

「じゃあオレも」

そう言って、手近な未開封のジュースの缶を取って、飲む。

うん。飲み心地は爽やかだな。

……ん？何か……眠く……

Ｓｉｄｅ　リーム

「……寝たね」

「……寝たわね」

きっとこの時の僕たちは心底面白そうだっただろう。

「桃子さん、もう出て来て大丈夫ですよ～！」

お母さんがそう言うと、別の部屋から桃子さん、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが出て来た。

そして……

ボゥン！

「ん……ここは……？」

「久しぶりー！詩音ちゃん！」

「あ、うん。久しぶり……？あの……詩音はどうなったの？」

「あー、細かいことは気にしないで。とにかく、今は遊ぼう！」

「まずは……これを着てみてくれないかしら？」

桃子さんが目を輝かせながら一着の服を取り出す。それは……

「……巫女さんの服？」

「正解♪さぁ、脱いで脱いで♪」

「え！？こ、ここで……？恥ずかしいよぅ……／／／／／」

もじもじと嫌がる詩音ちゃん。

そーゆー反応って、けっこう危ないよ？

ほら、なのはちゃん達の目がおかしくなり始めてるし。

「仕方ないわね……みんな、剥いちゃって！」

「「「おー！」」」

「ひぇっ！？キャアァァァ！」

「完成！」

「酷いよ……詩音をめちゃくちゃにするなんて……」

そんなことを涙目で言う詩音ちゃん。

だから、そんなことをするとみんなが…

「お持ち帰りぃー！」

「ひぇぇぇ～……」

なのはちゃんが詩音ちゃんを抱えて逃げ出した！？

「あっ！待ちなさいなのは！」

「なのはちゃん！横暴だよ！」

アリサちゃんとすずかちゃんがなのはちゃんを引き止める。

「詩音ちゃんがかぁいいのが悪いの！私は悪くない！」

「詩音はみんなのものよ！なのは一人のものじゃない」

詩音ちゃんはなのはちゃんとアリサちゃんが言い争ってるのをあわあわと見ている。いちいち反応がかぁいいなぁ。

「ダーリン……じゃなかった。詩音。ここは危ないから私の部屋に行こう？」

「えっ？あなたは？」

「私はアリス。さぁ、早く！他の人に気づかれる前に……」

「前に……なんですの？」

「プ、プリム！？何を……バインド！？」

「お父様は……いえ、この場合はお母様ね。とにかく、あなたみたいな危ない人には渡せませんわ！」

「危ないのはどっち！？あなただって詩音を独り占めしようとしてるじゃない！」

「わ、私はただお母様を愛でようと…」

「それが危ないの！」

「みんなわがままだなぁ……じゃあ私が…」

「行かせないよ？詩音お母さんは俺のモンだからね！」

「詩音ママは……私が貰う……」

すずかをミカとライラが止める。

仕方ないなぁ……なら僕が詩音ちゃんを……

「あら、リームちゃん。何をしようとしているのかしら？」

「抜け駆けをするような子に育てた覚えは無いわよ？」

詩音ちゃんと僕の間に桃子さんとお母さんが立ち塞がる。

「お母さん桃子さんどいて！詩音ちゃんと（めくるめく快楽の世界に）イケない！」

「そうはいかないわよ？詩音ちゃんはこれからコスプレの世界に目覚めて、喫茶翠屋の看板娘になるんだから♪」

「そして私は詩音のお得意さん♪あぁ、メイド服やバニー……いろいろあって困っちゃうわね♪」

ダメだ！こんな世界コスプレ計画を真顔で実行出来そうな二人に詩音ちゃんを渡したりしたら、僕の詩音ちゃんが汚されちゃう！！

……やるしかないね

Ｓｉｄｅ　詩音

「え……あの……みんな……仲良く……ひぇぇぇ～」

どうしよう……みんな喧嘩しちゃってるよ～……

『マスター、マスター』

「ひぇっ!?だ、誰?」

『あなたに憑いている精霊とでも考えて下さい。名前はフォーティトゥードといいます。』

「フォーティトゥード?長い名前だね」

『短くしても結構です』

「じゃあ……フォーティね!」

『はい』

「それで……精霊さんがどうしたの?この喧嘩を止めてくれるの?」

『いえ、私が止めることは出来ません。……あなたがやるんですよ』

「ひぇっ！詩音が？」

『そうです。あなた自身気づいていないでしょうけど、あなたには力があるのです。魔法の力が……』

「魔法……？」

『はい。まずは私と契約をしてください。（実際は出来ていますが、この方がよいでしょう）』

「契約って……？」

『私の後に続いて呪文を言うのです。ではいきますよ』

「ひぇぇ！そんないきなり！？」

『我、使命を受けし者なり』

「あ、えと……我、使命を受けし者なり」

『契約の元、その力を解き放て』

「契約の元、その力を解き放て」

『銀河を駆け、世界を統べ』

「銀河を駆け、世界を統べ」

『そして、勝利の希望をこの胸に！』

「そして、勝利の希望をこの胸に！」

『セットアップを！』

「フォーティトゥード、セット、アァァーップ！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！Ｓｅｔ　ｕｐ！』

その瞬間、詩音の身体を淡い光が包む。

『さぁ、想像して創造するのです！あなたの外装を！』

「じゃあ……こんなの？」

そして、淡い光が消えたとき、詩音の姿は巫女さんの服を機能的にしたものに変わった。杖はクローバーみたいのが先端についた、大きなもの。

「……ホントに変身しちゃった」

『この呪文をお使いください。【ドルミナー】』

「それじゃあ……ドルミナー！」

詩音が呪文を唱えると、杖の先から光の粉が出て来て、みんなを包んだ。

その瞬間、みんながバッタリと倒れた。

「ひぇぇぇ～！みんな倒れちゃったよ！？」

『安心してください。寝ているだけです』

「そうなの？」

『はい』

「……よかったー」

『優しいのですね。マスターは』

「フォーティもだよ……あれ？眠くなってきちゃった……詩音にも当たっちゃってたのかな……？」

『疲れが出たのでしょう。今はお休みください』

「うん……お休み～……」

いろいろあったけど……楽しかったなぁ……

Ｓｉｄｅ　吼太

ん……寝ちまってたのか？

『マスター。よくお眠りでしたね』

「トゥードか……なんなんだこの光景は……？」

目の前にはみんなが突っ伏していた。どうやら寝ているらしい。

つーか何故なのは達が？

『そうですね……一人の魔法少女の仕業……と言えばよろしいのでしょうか…？』

「魔法少女!？魔導師の襲撃を受けたのか!？」

『いえ、違います』

「へ？」

『まぁ、知らないほうが幸せです』

「なんなんだ……？」

とにかく、今回のいろいろな片付けはオレがやる羽目になった。

## ４０万アクセス突破記念　魔法少女リリカル？？？（後書き）

なっぺ「後書き座談会どぅぇす！」

吼太「なぁ、少し前の記憶が無いんだが何か知らないか？」

なっぺ「知らないねぇ。んじゃ、感想感謝コーナー！ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、天照大神さん、緋水さん、バルディッシュさん。感想ありがとうございました！」

ベス「吼太さんにヒスイさんから新しい称号が贈られてきましたよ」

【通りすがりの正義の味方】

【究極鈍感】

【夜の一族の盟友】

吼太「真ん中のってなんだ？」

なっぺ「さぁね。さらに、ライさんからはフォーティトゥード用擬人化プログラム、シルフからはヒスイの世界の座標、バルディッシュさんからは次世代ルナメモリを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「擬人化プログラム……欲しいか？トゥード」

トゥード『備えあれば憂い無しなので是非』

ベス「ルナメモリはどうするんですか？」

なっぺ「とりあえずはジッパーの中に保管だな。座標はトゥードに登録しとくぞ」

吼太「んでもって、次回は緋水さんの小説、【魔法少女リリカルなのはとある決闘者の原作ブレイク】とのコラボ企画です！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ４０万アクセス突破記念　決闘者《デュエリスト》との邂逅（前書き）

今回は緋水さんの、【魔法少女リリカルなのは～とある決闘者の原作ブレイク～】とのコラボです！

さて、ストックが後一つしかない……

最近、書く時間がなかなか確保出来ない……

# ４０万アクセス突破記念　決闘者《デュエリスト》との邂逅

Ｓｉｄｅ　吼太

「カードバトル？」

「うん！やろうよ！」

今、オレは学校にいる。

時間的には昼休みってやつだ。

昼飯を喰って、やることないから教室で寝ようとしたんだけど、そうしたら教室にいた男子生徒に誘われたのだ。

「いや、遠慮しとく」

「え～、やろうよ～！吼太だって授業中にカード出すぐらい好きじゃん？」

……あー、そういや前にベスが追加のカード送ってきた時にそんな風に解釈されたんだっけな。

すっかり忘れてた。

「オレは……えーとだな……」

適当にごまかすつもりだったが、言い訳が思い浮かばない。

「あ、コータ君！勉強教えてー！」

ナイスだなのは！オレは今ほどお前に感謝したことはないぜ！

「わかった！……んじゃ、悪いな！」

「んー……わかった」

心は痛むけど、やれないのだから仕方ない。

さて、勉強やるかな。

Ｓｉｄｅ　？？？

ん？なんか灰色のオーロラみたいな壁に包まれたと思ったんだけど……

……海鳴だよな？

見た目はそうっぽいけど……とりあえず、歩いてみるか。

Ｓｉｄｅ　吼太

今、オレは翠屋にいる。まぁ、昼の勉強の続きだ。アリサとすずかも一緒に勉強している。

ついでにリームとフラウリーナ三姉妹、アリスもいる。こいつらはシュークリーム食べに来ただけだけど。

「あ、なのは！よかった～何が起こったのかと思ったけど、大丈夫だったみたいだ～」

ふと、入ってきた客がなのはに対してそんなことを言い始めた。

「……え？あなた、誰なの？」

「……なのは…だよね…？」

「いや、そうなんだけど……ていうか、何で私の名前を知ってるの？」

「……アリサ、すずか…なのははどうしたんだ？」

客がアリサとすずかに話を振る。

「アリサちゃん、知り合い？」

「いや？すずかの知り合いじゃないの？」

「私じゃないよ。私、てっきりアリサちゃんの知り合いだと思ったんだけど…」

……なんか驚愕してるな。あの客。

「あ、あのー、座ります？」

「……ハイ」

店員さんに案内されて、窓脇の席に座る客。

……黄昏れてるな。

キィィィン！

ッ！魔力反応！？

『コータ君！』

なのはが念話を入れてくる。

『オレが先に行くから、少ししたらお前も来い！』

『わかったの！』

「悪いみんな！ちょっと急用思い出したから行ってくるから！」

「あ、ちょっとコータ！」

「それじゃ！」

「……見つかりませんね。マスターはどこに行ったのでしょう？」

あいつか。銀髪のスレンダーな女性。あいつから魔力反応が出てるな。

……ユーノがいたら結界頼んでたのになぁ…なにか起こったら周りの人の記憶を消すからいいけど。

「おいアンタ」

「……私ですか？」

「アンタは魔導師か？管理局のやつか？」

「どちらでもありません。それより、マスターを知りませんか？逸れてしまったのです」

「マスターが誰だかは知らねぇが……アンタを放っておいてやれるほど信頼出来てるわけじゃねぇからな。おとなしく……「吉谷吼太、死んでもらう！」…誰だ！」

飛んできた魔力弾をガードスキル、ディストーションで弾く。

「……テメェはムカつくのさ！俺のプレシアを奪いやがって！」

少し離れたところに人相の悪い男が立っていた。デバイスを構えて、こちらを睨んできている。……プレシアさんのファンか？

「言い掛かりじゃねぇか…トゥード！久々にやるぞ！」

『オーライ！マイマスター！』

「ダウンロード、ゴウカザル！武装召喚（リアライズ）！」

『了解。ゴウカザル右手、両脚部を実体化。武装召喚（リアライズ）』

オレの右手と両足がゴウカザルのものになる。

「行くぜ！【マッハパンチ】！」

マッハパンチを繰り出すが、男にたやすく避けられる。

「ハッ！」

男がバインドを使い、オレを縛る。単純な魔法だが、それだけに効果は高い。

「ぐっ……（かえんぐるまをやるにはダウンロードが足らねぇか……）」

「……死ね」

「暗黒騎士ガイアで攻撃！」

「何！？」

何かが槍を突き出し、男を攻撃した。男は間一髪でそれを避ける。

あれって……遊戯王の暗黒騎士ガイアか？

「無事か？そこの……って君、翠屋にいた人？」

「アンタは……あぁ、あの黄昏れてたやつか」

「なんか酷いイメージが！？」

「……ずいぶんと余裕だな…？」

男がデバイスを構え、攻撃態勢をとる。

「まぁな」

「だって……」

「「お前、雑魚だろ」」

オレの声と客の声が重なる。

抱いていたイメージは一緒だったみたいだな。

「なっ…！馬鹿にしやがって！」

「ガイア！」

客が暗黒騎士ガイアを戦わせる。

「んじゃあこっちは……こいつだ！コール！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＪＥＴ　ＳＬＩＧＥＲ】』

デビライザーにカードを装填し、召喚する。

召喚したのは、仮面ライダーファイズに出てくるバイク、ジェットスライガー。

「さらに……復活のビ〇クライト～！」

「はぁ！？ビック〇イト！？」

客が驚いてるな……

「てい！」

ジェットスライガーにビッ〇ライトの光を当てる。するとジェットスライガーが少し大きくなった。

「あとは……おいアンタ！黄昏れの人！」

「黄昏れの人で決定！？」

「いいから！……あれ、生物じゃないよな！？」

暗黒騎士ガイアを指差しながら聞く。

「は？」

「純粋な生物じゃあないんだよな！？」

「た、多分……」

「ならいけるな…よし！」

ジェットスライガーからミサイルを発射して、男を攻撃し、時間を稼ぐ。

「今だ！暗黒騎士ガイア！ジェットスライガー！【相乗掛合】《クロスオーバー》！！！」

オレの希少技能である【相乗掛合】《クロスオーバー》を発動し、ガイアとジェットスライガーを掛け合わせる。

光が溢れ、新たな存在が誕生する。

その名も……

「操輪騎士ガイア！」

ジェットスライガーに乗っている暗黒騎士ガイア。そう、暗黒騎士ガイアとジェットスライガーを融合したのだ。

「な!?ガイアがバイクに乗ってる!?」

「アンタ!アイツに命令しろ!」

「え?あ、あぁ。……操輪騎士ガイアで攻撃!」

操輪騎士ガイアが槍を構えた状態でアクセルを全開にする。するとジェットスライガーのタイヤが変形し、滑空しながら高速で突進する。

今、操輪騎士ガイアは、疾風の勢いで突進する一つの槍となった。

「な!は、速い……グァァァ!!!」

男は操輪騎士ガイアにぶっ飛ばされた。

「ありがとな。助けてくれてさ」

「いいよ。びっくりはしたけどね」

黄昏れの人が苦笑しながら答える。

「そういやアンタってまさか……転生者か？」

「ってことは君も？」

「あぁ。オレは吉谷吼太。アンタは？」

「朝倉貴哉。よろしく」

「よろしく……ってああ！あの魔導師追い掛けるの忘れてたぁ！！」

『ご心配には及びません』

その声が響いた瞬間、貴哉の腕に付いていたデュエルディスクが光り輝き、人になった。

って……あのときの銀髪さん！？

「マスターは見つかりましたので。あと、私はアテナです」

「なんだ……アンタ、ユニゾンデバイスだったのか…」

その後、話を聞いていた結果、平行世界から迷い込んで来ていたことが判明し、オレの螺旋界認識転移システムを使って道を開いてやった。

そして、別れの時。

「っと、そうだ。こいつを持って行け」

そう言って貴哉に一枚のカードを渡す。

「これは？」

「オレを呼び出せるカードだ。必要になったら使ってくれ」

「ありがとう。それじゃ…」

「お元気で……」

そして貴哉達は帰っていった。

Ｓｉｄｅ　貴哉

「……また、会えますかね？」

アテナがそんなことを聞いてくる

「……会えるさ」

吼太からもらったカードを見ながら答える。

そう、また、いつか……

「コータ君！遅れてごめんなさい！」

「遅すぎだなのは！もう終わっちまったっつーの！」

「ふぇぇぇぇ！！？」

## ４０万アクセス突破記念　決闘者《デュエリスト》との邂逅（後書き）

なっぺ「後書き座談会ぱるぱるぱるぱるぱる」

吼太「嫉妬すんな」

なっぺ「そして詩音に称号が！バルディッシュさんありがとうございます！」

【魔法少女リリカルしおん】

【天然エクストリーム】

吼太「なぁ詩音って「さて、感想感謝コーナー！」……」

なっぺ「雨季さん、緋水さん、元樹さん、バルディッシュさん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんから、ロストドライバー、スカルマグナム、スカルメモリ、エターナルメモリを頂きました！ありがとうございます！」

なっぺ「早速変身だ吼太！」

吼太「んじゃ、スカルは感想でやったから……」

『ＥＴＥＲＮＡＬ！』

吼太「変身！」

『ＥＴＥＲＮＡＬ！』

吼太「仮面ライダー…エターナル！」

なっぺ「あー、ＡｔｏＺ見に行きてぇ～」

吼太「次回は月光閃火さんとのコラボだ」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ４０万アクセス突破記念　獣の王って言えば獣の王なんだけど、獣の意味が違う

今回は月光閃火さんとのコラボです！

さらに、別な人も……？

## ４０万アクセス突破記念　獣の王って言えば獣の王なんだけど、獣の意味が違う

Ｓｉｄｅ　吼太

今日は月光閃火さんと輝刃が来るらしい。

なんでも他に連れがいるらしいが……

あ、ちなみにリームとアリスは既に逃げ出してる。

もはやあの二人にとってはトラウマ扱いらしいな。嫌いじゃないらしいけど……

キィィ……ン

あ、来た。

「にゃふ～、こんにちはー！」

「また来たぞ」

「おう。いらっしゃい。そういや連れは？」

「いま来るはずだ」

ヒュゥゥゥ……

……ん？何かが落ちてくるような音が……

「ってホントに何か落ちてきてるし！」

しかもデケェ！５０ｍ前後はあるぞ！？

ドガァァァァァ！！！！

「な、何が落ちてきたんだ？」

オレが呆気にとられていると、その何かは光に包まれて消え去り、後に残ったのは……

「大事は無いか？エセルドレータ」

「イエス、マスター」

……

「マスターテリオン！？」

「で、なんだかんだで闇の抜けたマスターテリオンを見つけて、面白そうだから連れてきたと」

「うん」

……大丈夫なのか？

「エセルちゃん？ちょっと着てほしい服があるんだけど♪」

母さんは普通に対応してるし…

「……エセルとは私のこと？」

「えぇ。ダメかしら？」

「いえ……ただ、そのような名前で呼ばれたことが無いので……」

「……良い名だな。余も以後はそう呼ぼう」

マスターテリオンが反応する。

「ま、マスター！？」

「ん？気に入らぬか？エセルよ」

「い、いえ……そんな……その……／／／／」

「ラブコメやるだけなら帰ってくれねぇかなぁ！？」

正直、見てるとイラつくし。

「ん……？ほう……貴公、できるな」

「どうも」

「どうだ？このマスターテリオンに魔導を学ぶつもりは無いか？」

「遠慮しときます」

普通にマスターテリオンの魔術使えるから別にいいや。つーかコイツに弟子入りしたら年中ノロケを聞かされる羽目になりそうだ……

「そうか……ならば、せめてエセルの着替えが終わるまで余の戯れに付き合ってくれ」

「それなら構わねぇよ。要は模擬戦だろ？」

「そうだ。…ならば場所を変えるぞ。ここは余が戯れるにはあまりに狭い」

「それじゃ……転送！」

そうして、オレ達は月光閃火さんに飛ばされた。

「さて、じゃあこっちも始めましょうか！可愛くなりましょ？」

「ハ、ハイ！」

着いたのは、殺風景な荒れ地だった。

「ここなら、どんなに暴れても大丈夫だよ」

月光閃火さんが言う。確かに迷惑がかかる相手はいなさそうだ。

「んじゃ……やるか…！」

「待て。貴公のみでは余の相手には不足だ……月臣輝刃。貴公も相手せよ」

「いいのか？」

「構わぬ」

そう言うと、魔力を溜め始めるマスターテリオン。

「お前が相手なら、手加減はいらないな…！」

輝刃も狼男に変身する。やる気は十分みたいだな。

「じゃあ行くぜ！変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

「魔術が相手なら、こっちは超能力だ！」

そう言って、一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＡＧＩＴＯ】！』

変身したのは、超能力に目覚めた、龍の意匠を持つ戦士、仮面ライダーアギト。

「「ハァッ！」」

輝刃と共にマスターテリオンに格闘戦を挑むが、全ての攻撃をたやすく避けられる。

「……その程度か？」

「まだまだァ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＡＧＩＴＯ　ＦＲＡＭＥ】！』

オレの全身が赤色に変化し、右腕がより大幅に変化したあと、右手に剣が顕れる。超越感覚の赤の戦士、仮面ライダーアギト　フレイムフォームだ。

「ハァァァッ！！」

感覚を研ぎ澄まし、手に持った剣、フレイムセイバーを振る。

マスターテリオンはそれを避けようとしたが、鋭く放たれた剣は、マスターテリオンの左腕を僅かに斬り裂いた。

「ほぅ……余に傷をつけたか」

「フッ……コイツ（吼太）をあんまり嘗めないほうがいいぞ？」

輝刃。嬉しいけどそれ少し恥ずかしい。

「ならばこちらからも行こうか……天狼星（シリウス）の弓よ！」

マスターテリオンはその手に光り輝く弓を顕現させ、矢を天に向けて放つ。その矢は無数に分裂し、矢の豪雨となり、オレ達に降り注いだ。

「ヤバイ！！」

「フム……あれを耐え切ったか」

やばかった…輝刃を守れたのは不幸中の幸いだな。

ただ、今の攻撃でアギトからディケイドに戻っちまった…

「もう終わりか？」

「へっ……ぬかせ！」

そう言って立ち上がる。

「吼太が立ち上がって、俺が立ち上がらないわけにはいかないな」

輝刃も立ち上がる。

「しゃーない。こうなったら……輝刃！」

「なんだ？」

オレの呼びかけに輝刃が答える。

「ちょっとくすぐったいぞ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＫＩ、ＫＩ、ＫＩ、ＫＩＢＡ】！』

カードを装填し、輝刃の背中側に立って、輝刃の背中を開くように手を動かす。

すると輝刃が変形を始め、輝刃は【キバウルフネイル】になった。

『……まさかこんなことが出来るとはな……』

「オレもカードを見た時は驚いたよ」

輝刃の言葉に、苦笑しながら答える。

「……ハッハハハハ！面白い！面白いぞ吉谷吼太！！ここまで愉快な気分になれたのは久方ぶりだ！！」

「だったら……もっと面白くしてやるよ！！！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＫＩ、ＫＩ、ＫＩ、ＫＩＢＡ】！』

「『ハァァァッ！！！』」

キバウルフネイルを振り下ろし、必殺技の【ディケイドワイルド】を発動する。

強大なエネルギーを与えられたキバウルフネイルは、紫電を撒き散らしながら、その威力を余すことなくマスターテリオンにぶつける。

そして、キバウルフネイルに蓄えられたエネルギーが全て放出されきったとき、マスターテリオンを大爆発が包んだ。

『……やり過ぎではないのか？』

「……いや、むしろ足りなかったみてぇだぞ」

オレが言ったとき、ディケイドワイルドによって発生した爆煙が開けて、中から無傷のマスターテリオンが現れた。

「……しかも無傷かよ」

「いや、なかなかの威力だったぞ。余は満足だ」

そう言うと、マスターテリオンが武装を解く。

「ならいいや……」

オレもキバウルフネイルを離して、変身を解く。輝刃も元に戻ったようだ。

「さて、そろそろ頃合いか……」

輝刃が言う。そう言えばだいぶ長い時間闘ってた気がする。

「さて、エセルはどのような姿になっているのか……もしやあんな姿…いや、むしろあのような姿でも……」

……アレ？どことなく恭也さん的な感じが……

「エセル……グヘヘヘヘ」

マスターテリオンさん！？イメージが！キャラが壊れてますよ！？

その後、月光閃火さんにまた転送してもらって帰ってきた。

マスターテリオン？とりあえず気絶させて連れてきた。

そして、着替えが終わったのか、満面の笑みで母さんが出てきた。

「フフフ、お待たせみんな♪」

「遅すぎだよ母さん」

「ごめんなさいね？エセルちゃんが可愛くって～♪」

「まぁいいや。……ほら、マスターテリオン、起きろ」

「…ん」

起きたな。これで全員そろった。

「それじゃあ、可愛いエセルちゃんのご登～場～！」

そして、出てきたのは……

綺麗な黒髪を結わえて、うなじを色っぽく出している、浴衣を着たエセルドレーダだった。

「……エセル、余の閨に入れ」

「行動早過ぎるわエロテリオン！！！」

全力でライダーキックをかます。

「な、何をする！？」

「人ん家で何しようとしとんじゃアホテリオン！！ちったぁ迷惑ってもんを考えやがれ！」

「あら、私は構わな「母さんは黙ってて！」……月光閃火さん～、吼太に反抗期が～」

母さんが月光閃火さんにしな垂れかかりながら、相談する。

「何言ってんだアンタは！？」

「エセル。今のうちだ。早く余と交わろうぞ」

「イエス、マスター／／／／／／」

「少しは自重しろ色ボケコンビ！！！！だぁぁぁぁもう！グリリバボイスには変態しかいないのかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！」

こうしてオレの一日は騒がしく過ぎていった。

## ４０万アクセス突破記念　獣の王って言えば獣の王なんだけど、獣の意味が違う

なっぺ「後書き座談会だらっしゃぁー！」

吼太「何語だよ」

なっぺ「さて、今回でオレの書く小説であることが判明したな」

吼太「？」

なっぺ「オレの書く小説で、グリリバボイスのキャラは、異常な強さと変態さを持つ！」

吼太「緑川さんに謝ってこい」

なっぺ「んじゃ、感想感謝コーナー行ってみよう！今回逃げてたリームとアリス！よろしく！」

リ&ア「「ライさん、緋水さん、バルディッシュさん、天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございましたー♪」」

なっぺ「バルディッシュさんから、ベスに称号【自称神（笑）】を、シルフからは聖剣アスカロンを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「心外ですね。そして私はベスではなく神だと何回（ｒｙ」

なっぺ「直井乙。次回はライさんとのコラボです！」

吼太「楽しみだな」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# ４０万アクセス突破記念　Ｂｌａｃｋ　ｈｏｌｙ　ｋｎｉｇｈｔ（前書き）

今回はライさんの小説、【魔法少女リリカルなのは～黒い聖騎士～】とのコラボです！

過去最長にして過去最高の難産だった…

あれもこれもとやったらば長さが今までの倍近くに……

文才欲しいっす！

あと、今回はオリジナル要素がかなり強くなってます！（いつものことですが）

そういうのが耐えられない人は、見るのを止めたほうがいいかもしれません。禁止はしませんが。

# 40万アクセス突破記念　Ｂｌａｃｋ　ｈｏｌｙ　ｋｎｉｇｈｔ

Ｓｉｄｅ　吼太

今、オレは十次元と十一次元の狭間にいる。

……いきなり言われてもわかんねぇよな？

きっかけはふと思い付いたことだ。

「召喚獣達っていつもヴィネコンの中にいたんじゃ窮屈じゃないのかな？」

と、いうことで思いたったら、まず行動！

んで、前々から別荘の建築場所兼、訓練場所兼、次元航行艦アマテラスの正式な隠し場所としてヒマをみて創っていたアンチ・スパイラルが使っていた隔絶宇宙に、召喚獣達の楽園みたいなものを創ることにしたのだ。

ヴィネコンの格納領域と直結するから、今後、召喚獣達は通常時は楽園で暮らし、必要に応じてデビライザーから召喚される形になる。

ちなみに召喚獣達の楽園の名前は、【ユートピア】にした。見た目的にはガオレンジャーに出てくる天空島のイメージだ。大きさは比べものにならないぐらいデカイけどな。下手しなくても惑星サイズだし。

そして、ついさっきユートピアが完成した。既に隔絶宇宙内には入

れてある。

ここなら通常の次元航行手段じゃ絶対に見つからないし、仮に見つけても決して来れない。

座標も無茶苦茶になっているらしく、専用のシステムでも無い限りはチートですら来れないかもしれない。

……まぁ、一部のチートは来れても全くおかしくはないが。

「さて、そろそろユートピアに召喚獣達を放すかな」

デビライザーとヴィネコンに命令を入れる。

そして、召喚のキーワードを言い放つ。

「コォールッ！全員召喚（オールスター）！！！」

そして、あちこちに魔法陣が出来、中から様々なやつらが現れた。

「……多いなオイ！？」

一万なんて軽く超してるぞコレ！

今まで目の当たりにしてなかったからか、かなり驚いた……

「コータ～、オレ達みんな喚んでどうしたんだ～？」

近くにいたアグモン（バンド付きの個体。以下、アグモンB）が聞いてくる。

「いや、みんなもヴィネコンの中にずっといたんじゃ窮屈だろ？だから別な場所を用意したんだよ」

「そうなのか～、サンキューコータ！」

アグモンBの声に続き、みんながお礼を言ってくる。

「いいってことよ。それより、縄張り決めはなるべく平和的にな。いざ喚ぶときになって怪我して戦えませんじゃ困るからな」

「「「「「「「「「オウ！」」」」」」」」」

さて、別荘も造り始めるかな。

Ｓｉｄｅ　？？？

……アレカ

アレヲ使エバ、アノ力ガヤッテクル……

ソシテ、私ハ世界ヲ……

手ニ入レルノダ！

Ｓｉｄｅ　吼太

「完成っ！」

別荘は一時間ほどで完成した。

クロックアップとスタープラチナとオーバースキル：加速を【相乗掛合】《クロスオーバー》すれば時間はいくらでも稼げるからな。

『マスター、緊急事態です』

「どうした？トゥード」

『グランドロコモンが脱走したとの連絡が入りました。しかも、どうやらこの隔絶宇宙に隙間があったらしく、そこから地球に移動してしまったとのことです』

「マジかよ！？ヤバイな……」

グランドロコモンって言えば究極体だ。どれだけの被害が出るかなんて考えたくもない。

「急いで出るぞ！」

Ｓｉｄｅ　一真

「……何だったんだ？今のは？」

突如発生した銀色のオーロラみたいな壁に飲み込まれたかと思ったら、海鳴の別な場所に来ていた。

『……解析完了。どうやら世界を移動したらしいな。時代が俺達の世界より前だ。正確にはＰＴ事件と闇の書事件の間だな』

「……となると今まで行ってない世界になるな」

一体誰の世界だ？

『高速で移動する生命体を二つ、確認したぞ。どうする？』

「魔導師か？」

『小さい生命体から膨大な魔力を感知した。恐らく魔導師だ』

だったら話ぐらいは聞けそうだな。

「よし、行くぞ。ゼロ、セットアップ」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ!』

Ｓｉｄｅ　吼太

現在、グランドロコモンを追って太平洋を高速で横断中だ。

グランドロコモンが転移してきたのが太平洋のど真ん中だったのは幸いだったけど、コイツは自分で線路を出しながら走れる。

しかも、前にオレが飛べない召喚獣全員に飛行魔術を発動出来る遺伝子をジーンドーパントの能力で組み込んだせいか、空中に線路を作りながら走るという時の列車ばりの行動をしている。

その上スピードが半端なく速い。このままじゃ、数十分経たずに日本に着く。

しかも、答えを出す者（アンサートーカー）によれば、到達地点は海鳴。

何としても阻止しなきゃな……

「オイ！止まれグランドロコモン！オレだ！吼太だ！！」

グランドロコモンの顔の横に並走しながら話しかけるが、グランドロコモンは答えない。

……コイツ、こんなに無愛想だったか？いや、前からそれなりに無愛想だったけど、返事をしないほどじゃ……

「とにかく、止めさせてもらうぜ！トゥード！ダウンロード、ザブングル！武装召喚（リアライズ）！」

『了解、ザブングル、両腕部及び両腕部を実体化。武装召喚（リアライズ）』

オレの四肢がザブングルの両腕と両足になる。

スピードを上げてグランドロコモンの前に出ると、グランドロコモンに組み付いた。

「うぉぉぉ！！！ザブングルは男の子ぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

全力で踏み止まる。

……止まらないな…

『マスター、ガソリンが足りません』

「そっちかよ！パワー足りないんじゃないのかよ！」

ガソリン使うなんて、オレ聞いてない！

それじゃあ……

「ダウンロード、ガイキング・ザ・グレート！！武装召喚（リアライズ）！！」

『了解、ザブングルを送還後、同部位に再召喚。武装召喚（リアライズ）』

今度はガイキング・ザ・グレートのものだ。パワーは十分なはず！

「止まれぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

――――邪魔ヲスルナ！ヤレ！グランドロココモン！

「……デストロイド、クラッシュ…」

グランドロココモンのスパイク車輪が高速で回り、オレを弾き飛ばした。衝撃で武装召喚（リアライズ）が解除される。

「ぐっ……ならもう一度…！」

「無駄だな。それじゃ止められない」

不意に誰かの声が聞こえた。

「……ロイヤルセーバー！！」

横から強力な突きが放たれ、グランドロココモンに直撃する。

グランドロココモンが怯み、スピードが遅くなったが、またすぐに走り出した。

「おいアンタ！一体何を……」

「ん？必要なら倒すまでだろ……」

「「……って（一真）（吼太）じゃねぇか！なんでお前が！？」」

……状況確認…

「なるほど、わかった。つまりはあいつを殺さずに止める必要があるんだな？」

「あぁ。仲間を殺したくは無いからな」

『海鳴への到着予定時刻、十分を切ったぞ』

急がなきゃな。

「よし、まずはオレが止めるから、一真はグランドロコモンの中に入って原因を調査してきてくれ」

「わかった」

一真が飛んでいく。

さて、こっちもやるか。

グランドロコモンの遥か先まで行き、準備を始める。

「コォールッ！メタモルモン！！」

メタモルモンを呼び出す。コイツは対象のデジモンを姿形をコピーすることで、そいつと同じ……いや、メタモルモン自身の力も重なり、対象以上の力を出せるデジモンだ。

「メタモルモン！グランドロコモンを止めてくれ！！」

「わかった。レーザートランスレーション！」

オレが頼むと、メタモルモンはその姿を目の前から迫りくるデジモン、グランドロコモンのものに変化させる。

そして、メタモルモンが変身したグランドロコモン（以下Mグランドロコモン）とグランドロコモンがぶつかり合った。

互いの力が拮抗し合っているように見えるが、実際はMグランドロコモンが上手く調整してくれているのだ。

「あとは一真か……早くしてくれよ……？」

Ｓｉｄｅ　一真

「……止まったみたいだな」

さて、急ぐか。

『間もなく先頭車両だ』

ならここにいるな。

そして、ドアを開けた先にいたのは…

「ぐっ……またコイツか！！」

パラサイモンがいた。どうやら、コイツが原因らしい。

「めんどくさい……一気に蹴散らすぞ！」

そして、あらかじめ出しておいたグラムでパラサイモンを突く。

「ロイヤルセーバー！」

しかし、パラサイモンはそれを避わし、外に逃げ出した。

「逃げられたか……ゼロ！」

『近くにまだいるぞ』

「よし、追い掛けるぞ！」

外に出る。周りを見ると、グランドロコモンはもう一体のグランドロコモンと真正面からぶつかり合っており、スパイク車輪が火花を散らしていた。

すると、今まで俺が乗っていたグランドロコモンのスパイク車輪が止まった。

どうやら、パラサイモンの支配が解けたらしい。

「（じゃあパラサイモンは一体どこに……？）」

もう一体のグランドロコモンが変化する。

あれは……メタモルモンか。

「（……ん？）」

メタモルモンをよく見る。その背中からは僅かに緑色の触手のようなものが…

「（まずい！）吼太！防御だ！」

「マ・セシルド！」

「トランシーレイヴ！」

吼太の出した盾とメタモルモンの電磁波にも見える光線がぶつかる。

……間一髪だな。

「ギギ……計画通リダ……！レーザートランスレーション…！」

パラサイモンが寄生したメタモルモン（以下Pメタモルモン）が変化し始める。

「今度は何に……！？」

そうしてPメタモルモンが変身したのは…

「アルファモンか！」

「いや、違う……」

俺の予想を吼太が否定する。

「あれは……一真、お前だ」

Ｓｉｄｅ　吼太

よりによって一真かよ……

メタモルモンの変身能力の特性を考えれば、一真が勝つのはまず不可能に近い。

オレは全力飛行をしてきたせいで体力を消耗している。

さて……どうするか……

「とりあえずは、何か喚びだすか」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＢＬＡＤＥ】！ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＢＬＡＤＥ　ＪＡＣＫ】！』

仮面ライダーブレイド　ジャックフォームを喚び出し、攻撃させるが、どこからともなく出したカムイにあっさり斬り捨てられる。

「ライダーを一撃かよ…お前チートだな」

「お前もだろ…来るぞ！」

「デジタライズ・オブ・ソウル…！」

大量の魔力弾を発射してくる。

さすがに威力が高いな。

「一真、デジタライズ・オブ・ソウルは？」

「一発一発の威力は向こうの方が高い。多分撃っても無駄だな」

「だよなぁ……」

魔力弾を避けたり、防いだりしながら作戦を練る。

……面倒だな…

「だぁぁぁぁ、しゃらくさい！一気に決めてやる！シン・ゴライオウ・ディバウレン！！！」

空間すら斬り裂く力を持つ覇気の虎を放つ。

対してＰＭ一真は…

「タイムデストロイヤー…！」

シン・ゴライオウを時空間の果てに飛ばして対処した。

しかし、そこに隙が出来る。

「ハァァァッ！！！」

一真がカムイで斬りかかる。ＰＭ一真は攻撃を放った後の一瞬の硬直があり、反応しきれていない。

だが、そこで緑色の触手が伸び、一真の行く手を阻む。

そのせいでＰＭ一真の体勢が整ってしまった。

「こうなったら……一か八かだ！」

オレはＰＭ一真にザ・ワールドを利用して一気に近づき、直前でザ・ワールドを解除してＰＭ一真を殴り飛ばした。

その瞬間、オレの拳に淡い光が宿る。

「行くぞ！一真！バースト進化だ！！」

「お前正気か！？アルファモンにバーストモードは無いぞ！！」

一真が反論してくるが気にしない。

拳の淡い光……デジソウルをデビライザーを発射台にして、一真に放つ。

「チャージ！デジソウル……バーストォ！！！」

本来は融合しない二つ。するわけがないのだ。本来ならば。

しかし、オレにはこの能力がある！

「ゼロデヴァイス！デジソウル！【相乗掛合】《クロスオーバー》！！！」

一真の能力の制御はゼロデヴァイスが行っているはずだ。

当然、バリアジャケットも制御そのものはゼロデヴァイスが行っている。

つまり、ゼロデヴァイスにデジソウルを送り込めれば、バリアジャケットのみだがバースト進化は可能！！

そして、デジソウルを受けた一真の姿が変化する。

黒かった鎧には僅かに他の、様々な色があしらわれ、一番の変化は背中に付いた銀河にも見える一対の翼。

銀河級のエネルギーをその身に纏った、一時的ながらも限界を超えた姿。

アルファモン・バーストモード。

「……ホントにやりやがった…」

「ナニ！？……ダガ甘イ！貴様ガ強クナレバ強クナルホド、我モ強クナルノダ！」

ＰＭ一真がその姿を変えはじめる。

が、そうはいかない。

『ＰＲＩＳＭ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！！』

「プリズムブレイク！」

咄嗟に取り出したプリズムビッカーで斬りつける。既にパラサイモン及びメタモルモンの検索は完了していた。

メタモルモンの能力、そしてパラサイモンの能力そのものを斬り裂く。

能力を断ち切られ、分離するパラサイモン。その瞬間、一真の一撃が放たれる。

カムイに内蔵されている銀鍵守護機関　改が唸りをあげる。

極限まで圧縮された魔力は、それ自体が強力な太刀となる。

「天（あまの）……」

そして、天下のあらゆるものを斬る一撃がパラサイモンを……

「羽々斬（ははぎり）っ！！！！！」

斬り捨てた。

Ｓｉｄｅ　一真

まさか俺がバースト進化するとはな…思いもしなかった。

グランドロコモンとメタモルモンは無事回収出来た。これで一件落着だな。

それで、パラレルモンの能力を使って帰ろうとしたら、吼太に呼び止められた。

「一応これを渡しておくぞ。まぁ、一真のことだから必要ないかもしれないけどな」

と言って、一枚のカードを渡された。

「オレを喚び出せるカードだ。ユートピアの座標とゲートキーも記録されている。まぁ、必要なことがあったら使ってくれ」

「あぁ、一応貰っておく。じゃあな」

「あぁ、またな」

……今度は昼寝でもしに来るかな。

Ｓｉｄｅ　吼太

「ねぇ……コータ君……お話があるんだけど……」

「ん？どうしたなのは？」

よく見たらみんな揃ってるな。みんな顔が俯いてるけど。

「これ……何よ？」

「何持ってんだアリサ……ってなんだこれ？」

……エロ本ってやつかこれ？

「へぇ～、コータ君しらを切る気なんだ～……」

「だから何の話だ？すずか？……オイ、その手に持ってる手錠はなんだ？」

「気にしないでコータ。僕たちはＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたいだけだから」

「……要件は？」

「「「「「あんなものを使うぐらいなら（私）（僕）（俺）の身体を使ってよ！？」」」」」

……いや、それオレのじゃないし。

「「「「「もう我慢出来ないよ（出来ない）（出来ませんわ）！コータ（君）、頂きまーす！！！！！」」」」」

「うおおおぁぁぁぁぁ！！！？」

その後、貞操を守り切ったことは伝えておこう。

# 40万アクセス突破記念　Black　holy　knight（後書き）

なっぺ「後書き座談会ほりゃん！」

吼太「何だよほりゃんって」

なっぺ「いや～、長かった長かった。」

吼太「つーかお前、今回無茶苦茶しまくったろ」

なっぺ「さーせん。ちなみにアルファモン・バーストモードはこんな感じの説明になりますかね」

アルファモン・バーストモード

アルファモンがバースト進化で一時的に限界能力を発動し、銀河級の高エネルギーオーラを纏った特殊な姿である。
本来は存在しない姿であるために、その力は完全に未知数。

なっぺ「必殺技とかは考えてませんが、テキトーに考えると、【究極戦刃　銀河王竜剣】とか、【ファイナルギャラクシーソウル】とかですかね」

吼太「デジモンファンから非難ごうごうだろうな」

なっぺ「…そりゃあね。ライさんすいませんでした！！こんな無茶苦茶な内容しか出来ませんでした！！！」

吼太「じゃ、感想感謝コーナーだ」

なっぺ「ライさん、緋水さん、月光閃火さん、バルディッシュさん、天照大神さん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんから、ダブルドライバー、疾風メモリ、切札メモリを頂きました。……ってなんじゃこりゃ！」

『疾風！』

『切札！』

『疾風！切札！』

なっぺ「木の板メモリはホントに何事かと思った」

吼太「次回は雨季さんとのコラボだな」

なっぺ「うん。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## ４０万アクセス突破記念　胃痛持ちＶＳハーレム地獄人（前書き）

今回は雨季さんの【チートじゃ済まない】とのコラボになります。

……ストック尽きたお！

# ４０万アクセス突破記念　胃痛持ちＶＳハーレム地獄人

Ｓｉｄｅ　要

一言言わせてもらおう。

「要お兄ちゃん……詩音とイイコト…して……？」

何故こうなった？

Ｓｉｄｅ　吼太

何故か最近よく起こっている、【オーロラ事件】（今命名）がまた起こった。

今回の被害者は要と楔だ。たまたま別れていたところで巻き込まれたらしい。

まぁ、オレの世界に跳んでくるだけだし、見つければすぐに戻せるからあまり実害は無いんだけど。

そんなときに、要が、

「せっかくだから模擬戦をしないか？」

って言ってきた。

こんな機会、今度はいつあるかわかったもんじゃないし、せっかくだから戦ってみた。

場所はユートピア。ここなら迷惑はかかりづらいからな。

そして、その一部始終がこれだ。

Ｓｉｄｅ　三人称

「シールドスライサー二連！」

「なんの！マーズ・ジケルドン！！」

開始早々要が放った、二方向から迫るシールドスライサーを、吼太がマーズ・ジケルドンで弾く。

マーズ・ジケルドンはそのままゆっくり要の元へと向かうが、スピードがスピードだけにたやすく要には避けられた。

「今度はこっちからだ！ガードスキル、ディレイ！オーバースキル：加速！【相乗掛合】《クロスオーバー》！！」

吼太がディレイとオーバースキルを組み合わせて、超高速で要に向かう。

そして、高速戦闘用のハンドソニックｖｅｒ２で要に連続攻撃を仕掛けた。

しかし、要とて凡人ではない。

その力はまさに【チートじゃ済まない】。

音速を超えたその連続攻撃を上手くいなしていく。

「隙ありだ！」

一瞬の隙を突き、要が抜骨を仕掛ける。

吼太の肩、腕間接が外され、その攻撃が止む。

「喰らえ！」

その隙に要が距離をとり、魔導式ハンドガン（改）をバースト連射する。

「小型の弾丸なんざ効くかよ！ガードスキル、ディストーション！！」

吼太は要の攻撃に対して、身の回りの空間を歪曲させることで、飛び道具をある程度無効化するガードスキル、ディストーションを発動し、防ぐ。

「ド・マリニーの時計」

吼太がド・マリニーの時計を使い、外された骨を直した。

時間を巻き戻すド・マリニーの時計を使えば、あらゆる怪我は一瞬

にて回復されるのだ。

「……仕切り直しだな」

「……あぁ」

お互い、人の身にありながら人が持たざる力を持つ者同士。

その戦いは苛烈を極めた。

「クトゥグァ！イタクァ！」

吼太が魔導の拳銃を放てば…

「ベールシールド！」

要が布のようにも見えるシールドで全ての弾丸を防ぎ。

「ニードルガン！」

要が極限まで鋭くした魔力弾を放てば…

「ダウンロード、エヴァンゲリオン！武装召喚（リアライズ）！A．T．フィールド＋理想を現実に変える能力！！」

吼太が理想的な心の壁を作り出し、要の魔力弾を弾く。

そして、数時間が経ち…

「そろそろ、決着をつけるぞ」

「あぁ……」

理由は吼太の体力だ。

途中で何度か回復はしていたが、それでも取れない疲労と言うものがある。

ましてや吼太の身体は9歳男児のもの。22歳の要との体力の差は歴然だ。

――といっても、吼太の体力は既に成人男性のそれを超してはいるのだが。――

だからこそ、二人はこの一撃を最後にする。

お互いに渾身の力を篭め、それが今……

「シン・ドラグナー・ナグル!!」

「ORT部分解放!!」

ぶつかった。

Ｓｉｄｅ　楔

……あの二人、遊んでたわね。

互いに最大の切り札（ジョーカー）は切らなかった。というよりは本気じゃなかった。

ただ無邪気に遊んでただけ。殺気なんて微塵も感じなかったし。

「強いな、吼太」

「……どうも。勝てなかったのは悔しいけどな」

「え？今のコータが負けたの？」

横で一緒にデバイスから送られて来ていた映像を見ていたリームが聞いてきた。

ちなみに私達は吉谷家にお邪魔している。そこで今までの模擬戦の様子を見ていたのだ。

「んー、多分、吼太には要の最強の力であるＯＲＴを倒す手段が無い。もしくは、あっても成功確率が低い。対して要はＯＲＴになれば吼太の攻撃の殆どを無効化出来る。だからじゃないかしら？」

「クァァ～」

隣に擦り寄ってきたちびクックを撫でながら説明する。

「……むー、なんか僕悔しい！」

「お前が悔しがってどうするんだよ」

吼太がこっちに来たらしく、リームに苦笑しながら言う。要も一緒ね。

「あ、そーだ！ハイ、コータ♪要もどーぞ！」

リームがドリンクを差し出す。

「おぅ、サンキュー」

「あぁ、ありがとう」

吼太と要がドリンクを受け取る。そして、吼太が飲もうとした瞬間、何故かピタリと止まった。

「……リーム、これ…なんか変なモン混ざってないよな？」

その言葉に、固まったかのような反応を返すリーム。

……その反応はあるって言ってるようなものよ？

「リーム、毒味しろ」

吼太がリームに無理矢理ドリンクを飲ませる。

「いやっ！止めてよ吼太！」

「いいから早く飲めよ！」

そしてリームにドリンクを飲ませたけど、リームに変化は起こらなかった。

「……なら安心か」

吼太、貴方酷いわね。

そして吼太がドリンクを飲んだ瞬間、煙が巻き起こって吼太を包み隠した。

「ふぅ、危なかった♪コータが騙されやすくて助かったよー♪」

……リーム、貴女もなかなかね…

そして煙の中から現れたのは……

「けふっ！けふっ！……ここはどこ～？」

私が最近目をつけていた、詩音だった。

「リーム」

「何？楔？」

「……GJ！」

「どういたしましてー♪」

「あれ？楔お姉ちゃん？」

さて、どうやってヤろうかしら…？

Ｓｉｄｅ　要

リームが吼太にドリンクを飲ませたら、詩音になった。

……もしかして俺のもか？

「あ、要に渡したのは普通のスポーツドリンクだから安心して」

「心を読むなリーム…」

まぁ、これで安心か。

スポーツドリンクを飲みながら今後のことを考える。

このまま詩音を放っておけば、楔とリームに口八丁手八丁で丸め込まれてノクターン行きは確実だろう。

それは阻止しなければならない。なんとしても。この小説は全年齢対象だしな。

「……要お兄ちゃん……」

詩音が俺の脚に抱き着いてきた。

「ん？どうした詩音？」

「詩音ね…？……なんか…身体が熱いの…」

……

「楔、リーム。何をした？」

「私は【まだ】、何もしてないわよ？」

……楔は白か。

「ぼぼぼ僕は何もしてないよ！？決してさっきのドリンクに媚薬を入れてなんて……あ」

リームは全身に抜骨をしといた。

後は一人か……

「コータ君遊びに来たよー♪」

「感謝しなさいよー！」

「お土産に翠屋のシュークリーム持って来たよ～♪」

なのは、アリサ、すずかが乱入してきた。

子供の三人も久しぶりだな。懐かしい。

「って詩音ちゃん！？」

なのはが俺の身体にしがみついている詩音に気づいた。

「ダメよ詩音！そのロリコン変態から今すぐ離れなさい！」

「そうだよ詩音ちゃん！男の人はみんな狼なんだよ！？」

アリサ、初対面の人に向かってそれは無いと思うぞ？

そしてすずか。いろんな意味で、お前には言われたくない。

「で、でも……「早く！」ひぇぇ！？」

アリサが詩音を無理矢理引きはがす。

その瞬間、詩音が今度はアリサに抱き着いた。

「えっ……えぇ！？／／／／／」

「じゃあ……あなたが詩音を冷ましてくれるの…？」

詩音がアリサの耳元で囁く。

アリサの顔は既に真っ赤だ。

「あ……あのっ！そのっ…！／／／／／」

「ねぇ……詩音とイイコト、しよ？」

詩音がそうアリサに囁き、耳たぶを軽く噛む。その瞬間…

「「「きゅ～……」」」

三人娘はダウンした。なのはとすずかは言葉だけでダメだったみたいだな。

「……じゃあ、楔お姉ちゃん。詩音を……めちゃめちゃにして？」

詩音が楔の方を向き、涙目でそう言った。

「よろこんで！」

楔が詩音を抱え、どこかへ連れて行こうとする。

が、楔が突然倒れた。

理由は俺がニードルガンを当てたからだ。普段なら簡単に避けられただろうが、詩音のことでいっぱいいっぱいだったみたいだな。注意力が散漫していたぞ。

その後、楔を抜骨で無力化したあと、帰ってきたフラウリーナ三姉妹とアリスも抜骨で無力化した。

これで一安心か……

床にねっころがる。

その時、詩音が俺の腹の上に乗りかかってきた。

「要お兄ちゃん……詩音とイイコト…して……？」

……そうだったな。詩音に媚薬が盛られてたんだよな…

現実逃避してたよ……

「……身体が暑いの……」

詩音が服を脱ぎはじめる。

正直、これ以上はヤバイ。

ただでさえヴィータという前歴があるのに、詩音にまでヤったらロリコン確定だ。

……いや、ヴィータだけじゃないぞ？もちろんなのはとかフェイトとかすずかとかスバルとか……

……って俺は何を言っているんだ？

「要お兄ちゃんも……ね？」

詩音が抱き着いてきた。首に手を回して、顔を俺の肩に乗せる。

いよいよヤバイ……

「……スゥ……スゥ……」

「……ん？」

横を見ると、詩音は柔らかな寝息をたてながら眠っていた。

よく考えれば吼太のときに体力をあらかた使い果たしていたはずだ。

むしろ、よくここまで持ったほうということか。

……動けないな。

動かしたら詩音を起こしてしまいそうだ。

結局、帰ることが出来たのは、詩音が吼太に戻ったころ、つまりは一時間後になってしまった。

……詩音も俺の胃痛の原因になりそうだな……ハァ……

## ４０万アクセス突破記念　胃痛持ちＶＳハーレム地獄人（後書き）

なっぺ「後書き座談会ＹＡＴＴＡ！」

吼太「はっぱ隊にでもなる気かテメェは」

なっぺ「今回は雨季さんとのコラボです！」

吼太「要が強かったな」

なっぺ「じゃ、感想感謝コーナー！Ａｒｉｓｈｉａさん、バルディッシュさん、月光閃火さん、雨季さん、緋水さん、天照大神さん、ライさん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんからは大空魔竜、大地魔竜、天空魔竜、ガイキング、ライキング、バルキングを、雨季さんからは松坂牛を頂きました！ありがとうございます！」

クック「くぁぁ～♪」

牛「モォォォ！？」

なっぺ「捕食してるな。ガイキング等はアマテラス内に保管しとこうか」

吼太「ガオガイガーとガイキングだけで管理局潰せるな」

なっぺ「そりゃあなぁ。次回はＡｒｉｓｈｉａさんの【魔法少女リリカル……なんとか！】とのコラボ作になります！」

吼太「優が来るんだな。内容は模擬戦か？」

なっぺ「さてね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 40万アクセス突破記念　Girl　meets　Boy（前書き）

今回はＡｒｉｓｈｉａさんの小説、【魔法少女リリカル……なんとか！】とのコラボになります。

さらに、後書きで【魔法少女リリカル……ラジオ！】のコラボもしています。

そして、まず最初に謝っておきます。

Ａｒｉｓｈｉａさん、すいませんでした！

# 40万アクセス突破記念　Girl　meets　Boy

Side　優

……いったいなんだったんだろう？

突然灰色のような銀色のようなオーロラに包まれたと思ったら、海鳴に戻って来ていた。

転送魔法かな？そのわりには魔力反応はなかったけど……

「ひぇっ！」

不意に身体の下辺りからかわいらしい声がした。

どうやら子供がぶつかったみたいだ。

「大丈夫？」

手を差し延べる。

「うぅ～……道でぼーっとしてちゃ、めーだよ！」

「ははははっ、ゴメンゴメン」

女の子が立ち上がる。怪我はしていないみたいだね。よかった。

「待てぇー！！！」

どこかから声が聞こえた。

「ひぇぇ！追ってきたよ～！」

「誰かに追われているの？」

「うん。ねぇ、詩音を連れて逃げて！」

「え、えぇ！？」

「ここなら大丈夫かな……？」

やって来たのは近くにあったデパート。

ここなら人混みに紛れ込めるから、追っ手が来ることもないだろう。

「はぁっ……はぁっ……ありがとうお姉ちゃん……お名前教えて？詩音は詩音だよ」

……あれ？

「名前は優だけど……お姉ちゃん？」

「？　どうしたの優お姉ちゃん？」

「……俺、男なんだけど……」

「え、えぇ！？こんなにかわいいのに！？」

……どーせかわいい顔だよ…

「どこ行った！？」

「あっちのほうに行くぞ！」

もう来たのか！？

「優お兄ちゃんこっち！」

詩音ちゃんが近くにあった試着室に入って手招きしている。

確かに隠れられそうな場所はそこしかないかな。

試着室の中に入る。詩音ちゃんと二人で入っているせいか、少し狭い。

「ひぇぇ……」

詩音ちゃんが俺の足元にしがみついてきている。

「大丈夫だよ。俺が守ってあげるから」

「……本当？」

「うん。本当」

詩音ちゃんの頭を撫でながら答える。

詩音ちゃんはぽーっとしながらこっちを見てきた。

「あの……顔に何か付いてるかな？」

「……ひ、ひぇぇっ！？な、なんでもないでしゅっ！？」

「いひゃい……かんじゃった……」

……痛そうだなぁ

「あっちの方で声がしたぞ！？」

「こっちだ！」

「見つかったか！？」

逃げなきゃ！

「行くよ！」

「うん！」

詩音ちゃんがはぐれないように、その小さな手をにぎりしめて、駆け出す。

近くにあった廃工場に来て、詩音ちゃんを隠す。

「いい？ここから出ちゃダメだからね？」

「う、うん……優お兄ちゃん！」

追っ手の気を引くためにまた走り出そうとしたところを呼び止められた。

「また……戻ってきてくれるよね？」

詩音ちゃんが不安げな表情で聞いてくる。

「……もちろん！だから、少しだけ待っててね？」

「……わかった！詩音待ってるね！」

「うん、詩音ちゃんはいい子だね」

詩音ちゃんの頭を撫でてあげる。

詩音ちゃんは目を細めて気持ちよさそうに撫でられてる。

「それと……」

「？」

俺が言葉を繋げると、詩音ちゃんが小首を傾げる。

「助けて欲しいときは呼んで？すぐに飛んで行くから！」

「……うんっ！」

詩音ちゃんに笑みが戻った。

「それじゃあ、行ってくるよ」

「いってらっしゃい！」

さて、どうするかな……

Ｓｉｄｅ　詩音

優お兄ちゃん……

他の人には無い感じたことのない想い。

かわいい顔はしてるけど、とっても頼りになる。

優お兄ちゃんのことを考えると、胸のなかがあったかくなるの。

優お兄ちゃんが笑ってくれると、詩音も嬉しくて、優お兄ちゃんが悲しそうだと詩音も悲しくて……

優お兄ちゃんと、ずっとずっと一緒にいたい。そんな想いが溢れてくる。

もしかして、詩音は……優お兄ちゃんのことが……

「見つけたぞ！」

「さぁ、見つけましたよ。帰りましょう？」

……いや……

ここを離れたら……優お兄ちゃんに会えなくなる……

「……どうした？」

「わからん。動いてくれないんだ」

「…仕方ないな。抱えてでも連れていくぞ」

会えないなんて……そんなの……ヤダよ……

「ほら、来て下さい」

「……いやぁ……来ないで……」

「……どうしたんですか？」

助けて……助けて……

「助けて……優お兄ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！」

『サンダーレイジ』

雷が、あの人達を薙ぎ払う。

もしかして……

「呼んだ？詩音ちゃん」

Ｓｉｄｅ　優

クロスミラージュを使って幻術で惑わせてはいたんだけど、どうやら気づかれたらしく、こっちを追ってくる人数が減っていた。

……どうして気づかれたんだろう？声帯模写で話し声まで再現してたのに……

とにかく、人数は減ってしまったけど、幻術で何人かは引き付けておけているので、このまま時間を稼ごうとしたら……

「助けて……優お兄ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！」

俺を呼ぶ声が聞こえた。

すぐさまバルディッシュを出して、ソニックフォームで戻る。

現場に来ると、誰かが詩音ちゃんを連れ去ろうとしていた。

誰なのかは知らないけど、詩音ちゃんが危ない！

『サンダーレイジ』

サンダーレイジで相手の人達を倒す。非殺傷だし、威力も抑えているから気絶程度で済んでいるはずだ。

「呼んだ？詩音ちゃん」

「優……お兄…ちゃん……」

「もう大丈夫だからね」

「う……ひぇ……ふぇえええええええええええええ！！！」

泣きだした詩音ちゃんを抱きしめてあげる。

詩音ちゃんは俺の胸で泣き続けた。

「……落ち着いた？」

「う、うん……／／／／／／」

顔が真っ赤だ……まだ怖いのかな？

もう一回抱きしめてあげる。

「ひぇぇ～……／／／／／」

ぷしゅー

「……って詩音ちゃん！？」

気絶しちゃってる！？

顔は……すごく幸せそうだけど。

何かいいことがあったのかな？

その後、意識の戻った詩音ちゃんを帰すと、誰か知らない人がやって来た。

「ようやく見つけました……大丈夫ですか？優様」

「えっと……誰？」

「あぁ、この姿では初めてでしたね。私は吉谷吼太をマスターとするインテリジェントデバイス、フォーティトゥードです」

「……え？」

「とある方から擬人化プログラムを頂きまして。それで、誰か異世界の人の方が迷い込んだのを確認致しましたので、捜索していたのですが、どうもなかなか見つからなくて……遅くなって申し訳ありません。今すぐお帰し致します」

「あ、うん。ありがとう」

俺の足元に魔法陣が展開される。

また……詩音ちゃんに会いに来ようかな。

Ｓｉｄｅ　トゥード

さて、帰りましたか。

「姐さん……お嬢の警護、完了しやした」

おや、この声は…

「獄門会の方ですね」

「へぃ……」

この黒服の男の人達は、【獄門会】という方々らしいです。

少し前に初めてこの身体を使ったときに、ひょんなことからお話をしまして……

今では【姐さん】と慕われております。

「にしても……ずいぶんなていたらくでしたね？皆様」

「「「ひぃ、ひぃぃぃぃ！！！！」」」

「私はマスターを【見つからないように影から見守っていてください】とお願いしたはずなのですが……？」

「すいやせん！すいやせん！」

「命だけは助けてくだせぇ！！」

「全く……少し教育が必要なようですね……」

「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」」」

Ｓｉｄｅ　三人称

その日から、【不屈の女帝】なる人物が裏社会に暗躍するようになり、後に地球の８割の実権を握るようになったとかならないとか……

# 40万アクセス突破記念　Girl　meets　Boy（後書き）

トゥード「優様は大変なものを盗んでいきました……」

詩音「？？？」

トゥード「……マスターの心です！」

詩音「……うん！」

ふぁやて「後書き座談会、始めましゅ！」

なにょは「優君！優君はどこなの！？」

トゥード「優様ならもうお帰りになられましたよ？」

詩音「えぇ！？もう！？」

ヘイト「この座談会、嫌いです……ｈａｔｅだけに」

トゥード「ヘイト様。まことに申し訳ありませんが、感想感謝のコーナーと挨拶が済まないと帰れない規則ですので」

ヘイト「……わかりました」

ふぁやて「では、感想感謝コーナーでしゅ！」

五人「「「「「天照大神さん、月光閃火さん、ライさん、雨季さん、バルディッシュさん、緋水さん、香崎　真琴さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」」」」」

詩音「バルディッシュさんからはサウダーデ・オブ・サンデイ、ディアブロ・オブ・マンデイ、メッツァ・オブ・チューズデイ、ダリア・オブ・ウエンズデイ、ダン・オブ・サーズデイ、シン・オブ・フライデイ、セン・オブ・サタデイ、エルドラソウル、ブラウニー、ヴォルケイン、バースデイを、香崎　真琴さんからは八意永琳のお薬レシピ～家庭で出来る１０００の薬編～　御神百合姫・著を頂きました。ありがとうございまーす♪」

トゥード「機体はアマテラスに保管、レシピは燈様にお渡ししておきました」

燈「これでしばらくは退屈しなさそうね♪」

なにょは「ヘイトちゃん、ヘイトちゃん。次回はなんなの？」

ヘイト「私に聞かないでください」

ふぁやて「えと、詩音ちゃんは知ってましゅか？」

詩音「えーとね？ストックが切れたからわかんないって！番外編かもしれないし、Ａ'ｓに入るかもしれないみたいだよ？」

ヘイト「曖昧すぎますね」

なにょは「にゃはは…」

ふぁやて「で、ではではこの辺にしましゅ！」

トゥード「次回もよろしくお願いします」

詩音「またね～♪」

なっぺ「どーせオレ達はいらない子だもん……これ以上の酷い扱いがどこにあるというのさ……？」

吼太「今……誰かオレ達を笑ったかァ…？」

ベス「地獄兄弟乙です」

# 第五十一話　闇の覚醒《めざめ》（前書き）

はい、Ａ'ｓ編が始まります！

# 第五十一話　闇の覚醒《めざめ》

Ｓｉｄｅ　はやて

みんな！めっちゃ久しぶりやね！

どこぞのラジオではかみかみになっちゃってる八神はやてや！

え？あれは違う人？

……まぁ、それはそうなんやけどね。

とりあえず、フェイトちゃん達が帰っちゃってからの私は、今までの日常に戻ってた。

朝起きて、ご飯食べて、図書館で本を読んで、夜になったらお風呂に入って、寝て……

全て、一人でやってた。

フェイトちゃんは「必ず帰ってくるから！」としか言ってくれへんかったけど、私はとりあえず信じて待ってる。

……一人は、やっぱり寂しいなぁ。

「ん……もうこんな時間……」

時計を見たら、もう明日になりそうな時間やった。本を片付けて寝ようとした。

その時。

『……起動』

光が、溢れた。

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、今の季節はまさに冬。

オレとリーム、なのは、アリスの四人で軽く魔法の練習中だ。

オレとリームは阻害魔法の練習、なのはは誘導弾をどれだけ正確に扱えるかで、アリスは魔力の集束を練習している。

『９９６…９９７…９９８…９９９…１０００』

「これで…お終いっ！」

なのはがディバインシューターで、空中に打ち上げていた空き缶を弾き飛ばし、ごみ箱に入れようとする。

だが、空き缶はごみ箱の淵に弾き返され、あえなくごみ箱の外側に落ちた。

「あ～…」

「ドンマイだなのは。以前に比べりゃかなりよくなってるぞ？」

「本当！？」

なのはが詰め寄ってきた。……何か悪いこと言ったか？

「…どうした？」

オレが聞くと、なのははもじもじしながら、

「あの……上手く出来たなら…その……なでなでしてほしいな……なんて……／／／／」

「…レイジングハート。点数は？」

『７６点といったところでしょうか？』

「んじゃ、８０点を超えたら撫でてやるから」

「本当!?私、頑張るよ!レイジングハート、もう一回やろう!」

『マスター。練習も結構ですが、学校の時間も近づいて来ています』

「ふぇぇ!?もうそんな時間!?」

「それじゃ、今日はここまでにするか」

「「「はーい♪」」」

最近はいたって平和だ。

しかも、あと少ししたらテスタロッサ家のみんな……フェイト、アリシア、アルフ、プレシアさん、リニスさんのみんなが来る。

なのは達も楽しみにしている。

……だけど、オレは知っている。

これが、新たな事件の幕開けなんだと。

……さて、今度はどうしてやろうかな？

Ｓｉｄｅ　なのは

「楽しみだね～」

ずかちゃんが言ったのはフェイトちゃん達のこと。アリサちゃんとすずかちゃんにはビデオレターでお互いを紹介してるけど、実際にアリサちゃんとすずかちゃんがフェイトちゃん達に会うのは今度が初めてなんだ。

しかも、フェイトちゃん達は海鳴市に住むらしくて、この私立聖祥大附属小学校にフェイトちゃんとアリシアちゃんが転校してくるらしいの。

楽しみだな～♪

「フェイトとアリシアが来たらどうする？」

「ん～、やっぱりまずはデパートとか…かな？」

「おいしいものとかも食べたいよね～」

そうして私たちが話していたら、コータ君が近づいてきた。

「アリサ、すずか。お前達に届けものだ」

「「その気持ちに答えることは出来ません、って言っておいて。コータ（君）」」

「ラブレターじゃねぇよ」

コータ君が苦笑しながら渡す。それは小さな箱の大きさだったの。

「……開けていいのかな？」

「いや、家に帰ってから開けとけ」

コータ君がそう言うと、アリサちゃんとすずかちゃんは少し残念そうな顔をしながらバッグに箱を仕舞ったの。

「さて、話もいいが……三人とも。次の授業のことは考えなくていいのか？」

……あれ？

確か、次は理科で……

そういえば昨日、先生が実験をやるから理科室集合って……

時間を見てみる。

……

「「「ちっ、遅刻だぁぁぁぁ～～～～！？」」」

「あんまし急ぐと～……」

「「「きゃっ！？」」」

「こけるぞ～…って遅かったか……」

は、恥ずかしい……／／／／／

三人一緒に転んじゃった……

見れば、アリサちゃんやすずかちゃんも真っ赤になってる。

「やれやれ……しゃーねーな。ほら、手ぇ貸せよ。お嬢様方♪」

ふ、不意打ちの笑顔……／／／／／

さっきとは別の意味で赤くなる。

「ひ、卑怯だよコータ君……／／／／」

すずかちゃんが少し身もだえしてる。

「う～！バカバカバカぁ～！」

「…なんでオレが殴られてんだ？」

アリサちゃんはコータ君をぽかぽか叩いてる。

「……ってこんなことしてる場合じゃない！」

急がなきゃ！

Ｓｉｄｅ　吼太

「……そろそろか」

ヒィィィ……ン

『マスター。ベルカ式魔法の発動を確認しました。術式解析……恐らく、ミッドチルダ式封時結界と同様のものと思われます。場所はなのは様のお宅付近数ｋｍ』

「よし、行くか……花鳥風月（セイクー）！」

緑色に輝く翼を広げ、オレは夜に翔び立った。

新たな腐った運命が、今動き出す。

闇に染められた夜天。

闇に蝕まれた主。

そして、闇に縛られた騎士達。

闇を夜天に還すため、少年は再び舞う。

世界すら滅ぼせる力を、その身に纏いて…

魔法少女リリカルなのは

～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～

Ａ'ｓ編

始まります……

## 第五十一話　闇の覚醒《めざめ》（後書き）

なっぺ「後書き座談会なんだどちくしょーい！」

吼太「さて、とうとう始まったな」

なっぺ「無印編が終わって、ようやくA'ｓ編！熱血展開が多いと有名なA'ｓ編ですよ！く～！電波が溢れてくるじぇ～！」

吼太「電波が溢れちゃダメだろ」

なっぺ「さて！感想感謝コーナーいってみようか！今回は久々に登場のはやて！」

はやて「はいな～！香崎　真琴さん、この世全ての悪さん、バルディッシュさん、天照大神さん、緋水さん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、まーたさん。感想ありがとうございます～！」

ベス「百合姫さんからトゥードに単独行動ＥＸ、黄金律ＥＸの効果が有る指輪を、贈り主【唯我独尊】さんから燈さんと吼太ラバーズ全員に無味無臭の筋弛緩薬と媚薬を、バルディッシュさんからキングゲイナー、エンペランザ、ゴレーム、アンダーゴレーム×3、ドミネーター、ラッシュロッド、ブラックメールを、楔さんからは要さんと楔さんが使っているロザリオを、Ａｒｉｓｈｉａさんからはやはり媚薬と筋弛緩剤を頂きました。ありがとうございます」

はやて「めっちゃたくさんあるなぁ…」

なっぺ「オーバーマン達はアマテラスに保管、薬はラバーズに届け

るとして…ロザリオは……」

吼太「？」

なっぺ「……今は渡すの止めとくか」

吼太「何なんだよいったい？」

なっぺ「気にすんな。そして、次回は新たなキャラ、そして帰ってきたキャラが登場！オレは扱いきれるのか！？」

はやて「自信ないんかいっ！？」

すぱーん

なっぺ「イテッ！……そして吼太のフラグはどこまで増えるのか！？」

吼太「増えることは確定かよ！？」

ボグッ

バタッ

なっぺ「ぐはぁ……」

ベス「気絶してますね」

吼太「はやて、締めてくれ」

はやて「ほんならこの辺で！次回も楽しみにしとってや～♪」

## 第五十二話　舞い戻りし雷光（前書き）

よし！A'ｓ編の行く先が見えないぞ！（マテ

# 第五十ニ話　舞い戻りし雷光

Ｓｉｄｅ　なのは

誰かが私の家に近づいて来ていた。

私は結界に閉じ込められてしまっていて、近づいて来ている人なら
なにか知ってると思って、お話をしに行くことにしたの。

……今、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩの方だと思った人。

ＳＬＢなの☆

それで、外にいたのは…

紅いバリアジャケットを身に纏った、小さな女の子だったの。

「……お前、今アタシを見て、【小さな女の子】とか思っただろ…」

「ふぇ!?なんで分かったの!?……あ」

……オーラが立ち上ってるような…

怒ってる……よね……？

「アイゼン!!」

『シュワルベフリーゲン』

女の子は小さな鉄球を四つ出して、手に持ったハンマー――デバイスなのかな？――で打ち出してきたの。

「レイジングハート！」

『ディバインセイバー』

ディバインセイバーで鉄球を全て斬り落とす。

でも、それはあの子にとっては格好の隙になってたみたい。

「テートリヒ・シュラァァーークッッッ！！！」

高速で女の子が近づいて来て、ハンマーで打ち付けてくる。

なんとかディバインセイバーで受け止めたけど、ディバインセイバーが砕かれちゃった。

「どうして！？どうしてこんなことするの！？」

「アイゼン！」

『シュワルベフリーゲン！』

女の子はまた鉄球を打ち出してきた。

「言ってくれなきゃ……」

『ディバイン』

「わかんないってばぁ！」

『バスター』

ディバインバスターが鉄球を飲み込んで、女の子に迫る。

女の子は間一髪でそれを避けたけど、帽子に僅かに当たってたみたいで、帽子が地面に向かって落ちていったの。

「……テメェ…」

「えっ？」

「……ぶっ殺す！」

『ロードカートリッジ！』

ガシュッ！

何かが、女の子のハンマーに起こった。

「グラーフアイゼン！ラケーテンフォルム！」

『エクスプロージョン！』

そう言うと、女の子のハンマーが変形したの。片側には鋭いスパイク、もう片側にはブースターみたいな噴出口。

そして、噴出口から魔力がすごい勢いで噴き出して、女の子ごと高

速で回転しながらこっちに向かってきた！

「ラケェェェーテンッッッ……」

『プロテクション』

「ハンマァァァァーーーーッッッ！！！！！！！」

レイジングハートが咄嗟にプロテクションを張ってくれたけど、女の子のハンマーはプロテクションをやすやすと貫いて、私に襲い掛かってきた。

最後の抵抗に、レイジングハートを盾にするけど、女の子のハンマーはレイジングハートにダメージを与えながら、私を吹っ飛ばした。

Ｓｉｄｅ　三人称

高町なのはは、砲撃魔法が主体の魔導師である。

ディバインセイバーという近接戦闘手段もあり、それを使用するための訓練もしてきてはいたが、それはあくまでも砲撃を放つための補助である。

そのため、近接戦闘を主体とするような敵を苦手としていた。

そして、なのはの前に現れた彼女は、間違いなく近接戦闘のスペシャリストだった。

ましてや、今まで行っていた戦闘は全てクロスレンジか、よくてミドルレンジ。

つまり、なのはに勝ち目はほとんど無かったのだ。

「くぅっ……」

殴り飛ばされたなのはは、ビルの中に突っ込んでいた。

レイジングハートは既に大破寸前、なのは自身のバリアジャケットも一部が吹き飛んでいた。

「終わりだ」

紅い魔導師が近づき、ハンマーをなのはに構える。

なのはも防御をするためレイジングハートを構えようとするが、腕に力が入っていないらしく、完全には構えきれない。

そして、ハンマーがなのはに向かって振り下ろされた。

ガキィン！

「！？」

しかし、ハンマーがなのはを傷つけることは無かった。ハンマーが途中で抑えられたからである。

そして、なのははハンマーを抑えているデバイスを、その持ち主をよく知っていた。

「……仲間か？」

紅い魔導師が尋ねる。

それに答えるのは、黒きマントを纏った魔導師。

「……友達だ！」

フェイト・テスタロッサ。

高町なのはのライバルだった少女は今、彼女の友達であるなのはを救うために現れた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……テメェら…」

オレは今、かなりの時間足止めを喰らっていた。

目の前の二人の仮面の魔導師。

その内の一人が放った１２個のフープバインドと７つのクリスタルケージにより、オレは身動きが出来なくなっていた。

……いや、正確には動けなかった。

理由はもう一人の腕の中にいる者にある。

「コータ……ゴメンね……」

リームは今、敵の手に囚われていた。

オレと一緒に現場に向かっていたときに、突如オレに襲い掛かってきたバインドに目が行ってしまい、敵の接近に気づかなかったみたいだ。

このバインドを破ること自体は造作もない。

だが、一瞬でも隙を見せれば、リームがどうなるかわからない。

虚しく時間だけが過ぎていく。

そんな時だった。

「ハァァァァッ！！」

誰かがその拳を使い、乱入してきた。

狙われたのはリームを捕まえていた方。

男は、乱入してきた者の拳を間一髪で避けたが、代わりにリームを手放してしまう。

その人物は……

「アルフか！？」

「助けに来たよ吼太！リーム！」

かつての好敵手（ライバル）、フェイトの使い魔であるアルフだった。

「……仲間か」

「あぁそうさ！吼太もリームもアタシの仲間さ！」

仮面の男の言葉に鋭く答えるアルフ。

「助かった！」

「いいさ。それより、アイツらは一体……？」

アルフが仮面の男達の方に顔を向け、その一挙一動を警戒しながら聞いてくる。

「分からん。突然襲われた」

実際は知っていたけど、混乱を招かないようにそう答える。

「……このままでは不利か」

仮面の男の一人がそう呟く。

「そうだな……それに、時間は稼げた。潮時だろう」

そう、もう一人の仮面の男が返す。

そして、仮面の男達は転移魔法を使い、この場から逃げ出した。

「何だったんだい……？」

「……面倒なことになりそうだ…」

オレの呟きは、風に乗っていき、誰の耳に入ることは無かった。

# 第五十ニ話　舞い戻りし雷光（後書き）

なっぺ「後書き座談会なんだな、これが」

吼太「アホセルかテメェは」

なっぺ「今回は微妙な仕上がり」

吼太「もっと頑張れよ」

なっぺ「いや、ここでのなのはＶＳヴィータってよく覚えてなくて…」

吼太「ダメじゃねぇか」

なっぺ「すいません……よし、感想感謝コーナーいってみよう！」

吼太「香崎　真琴さん、月光閃火さん、バルディッシュさん、天照大神さん、緋水さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは火車切広光、鉋切長光、子烏丸天国、立花道雪雷切、童子切安綱、鬼切、蜘蛛切を、天照大神さんからは吼太に、なのは、フェイト、はやて（Ａ's時）の等身大抱き枕を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「刀は全部ジッパーに突っ込んどくとして……抱き枕はどうしようか…」

なっぺ「どれを使うんだ？」

吼太「……飾っとくのは無しか？」

なっぺ「無しだ。ついでに言うと仕舞っとくのも無しだ」

吼太「……決められねぇ。…だってどれかを選ぶってことはどれかを切り捨てるってことだろ？オレにはそんなの出来ねぇよ…」

なっぺ「……さすがの解答。つまりは全員嫁にとると」

吼太「そうは言ってねぇよ！」

なっぺ「さて、次回はまだバトルだと思います！吼太とヴォルケンリッターの初邂逅にしたいので！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第五十三話　墜ちし星光、雷光（前書き）

まだバトルが終わらない！

さすがＡ＇ｓ編！

……文才無いだけですよねわかってます

# 第五十三話　墜ちし星光、雷光

Ｓｉｄｅ　フェイト

よかった……なんとか間に合ったみたいだ。

アースラで魔力の反応を感知して、急いで来たら、正体のわからない結界が張ってあった。

それで、ユーノに頼んで先に転送してもらった。

なんとか、最後の一撃だけは防げたみたい。

紅い魔導師に向き直る。

「民間人への魔法攻撃……軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだテメー！管理局の魔導師か！？」

紅い魔導師が聞いてくる。

役職と名前を名乗る。

……口は悪いみたいだ。

「管理局、嘱託魔導師……フェイト・テスタロッサ」

「抵抗しなければ、君には弁護の機会がある。おとなしく投降してほしい」

「へっ……誰がするか！！！」

そう言うと、紅い魔導師は外に飛び出した。

「ユーノ！なのはをお願い！」

「わかった！」

なのはをユーノに任せて紅い魔導師を追う。

「バルディッシュ！」

『アークセイバー』

サイスフォームに変形させたバルディッシュから、アークセイバーを放つ。

紅い魔導師も反撃に鉄球を放ってくる。

「障壁！」

『パンツァーヒンダネス！』

紅い魔導師のバリアにアークセイバーが防がれた。

私も鉄球を避けるけど、鉄球は私を正確に追ってきた。

……誘導弾みたいだね。

「ドリル……インパクトォォォォ！！！」

不意に声が響いた。

見ると、誰かが紅い魔導師に攻撃を仕掛けていた。

誘導弾の制御が僅かに乱れる。

その隙を突き、誘導鉄球を振り切る。

「大丈夫！？フェイト！」

「ミカ！」

助けに来てくれたのはミカだった。

どうやら、ドリルでバリアを壊したみたいだ。

「こん……のぉ！！」

紅い魔導師も負けてない。ハンマーを振り下ろしてミカを攻撃する。

ハンマーとドリルがぶつかり合い、火花が散る。

「真っ向からの攻撃でぇ……俺に敵うかぁぁぁぁぁ！！！！」

ミカは気合を篭めて、ドリルで紅い魔導師の攻撃をハンマーごと弾き返した。

体勢を崩す紅い魔導師。

『ライトニングバインド』

そこにバルディッシュがバインドをかける。逃げられないよう、両手両足に。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ！」

バルディッシュを紅い魔導師の方向に向けながら言い放つ。

「ぐっ……ぐうううううッッッ！！！」

紅い魔導師が呻く。

……中々言いそうにないかな。

「フェイト！何かが来たよ！」

ミカが突然言い出した。

その瞬間、

「ハァァァァッ！！！」

「ぐぅっ！？」

私は何者かに弾き飛ばされた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「結界か……」

オレとアルフの前にあるのは結界。

「待ってな吼太！今アタシが転送魔法を……「いや、いらねぇよ」……なんだって？」

「この程度の結界なら、これで斬れる！」

そう言って、ジッパーの中からある刀を取り出す。

「……その刀でかい？」

アルフが怪訝そうに聞いてくる。

それもそのはず。その刀は、今にも折れそうなほどボロボロだったからだ。

しかし、これは仮の姿。真の形態は別にある！

「行くぞ……鉄砕牙！」

オレの呼びかけに答えるように脈動する鉄砕牙。

その鍔は犬の毛に包まれ、刀身がまるで斬馬刀のように巨大化する。

「なっ！？」

変化は終わらない。鉄砕牙はもう一度脈動すると、その刀身を紅く染めた。

……【結界破りの紅い鉄砕牙】

結界破りの力が強いこの形態なら…っ！

「うぉおおおおおおおおお！！！！」

鉄砕牙を振り下ろす。

すると結界はたちまち崩れ去った。

「……マジかい…」

アルフがあっけにとられている。……アルフにチート同士の戦いを見せたらどうなるやら。

「行くぞ」

「あ、あぁ」

鉄砕牙をジッパーに仕舞い、オレ達は動き出した。

現場に着いた先で待っていたのは……

「ハァッ！！」

「こんのぉ！」

「てぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！」

「ぐっ……さすがに三人は辛いかな…？」

ヴォルケンリッターの三人の攻撃を捌いているミカ。

「んんっ……」

「私も……行かなきゃ……」

「二人ともじっとしてて！」

ユーノに回復してもらってるなのはとフェイト。

そして……大破したレイジングハートとバルディッシュ。

「マジかよ……」

「フェイト！フェイト！」

アルフがフェイトに駆け寄る。

「お父様！」「パパ！」

「プリムにライラか。状況は？」

「芳しくないですわ。既になのはさんとフェイトさんは戦闘不能。ユーノさんは回復に掛かりっきりですし、戦闘出来るのは私とミカ、アルフさんにお父様ぐらいですわね」

「よし。ライラはユーノの手伝いに行ってくれ。プリムは封時結界を頼む。アルフはなのはとフェイトに危害が及ばないようにしてくれ！リーム……は精神的にやばかったから家に帰したんだっけな……とにかく、みんな、頼む！」

素早く指示を出す。みんなは軽く頷くと、各々が役割をこなすために動きはじめる。

そして、オレは……

「ガードスキル、ハンドソニック！」

ミカの手伝いだ！

「おおおおおおおおおおお！！！」

わざと叫び声をあげて近づく。ヴォルケンリッターの三人の集中が、僅かに途切れる。

それが狙い目！

「魔人剣！」

衝撃波をハンドソニックから放って、攻撃する。防がれはしたが、これでミカを助けられた。

「お父さん！」

「油断すんな！来るぞ！」

「……参る！」

剣の魔導師が襲い掛かってきた。

Ｓｉｄｅ　なのは

手伝わなきゃ……

ボロボロのレイジングハートを構える。

今の私を支えているのはただ一つ。

【コータ君を助けたい！】

『スターライトブレイカー、チャージスタート』

スターライトブレイカーなら、この距離からでも仕留められる。

レイジングハートには負担をかけちゃうけど……

見れば、フェイトちゃんもバルディッシュを構えて、フォトンランサー・ファランクスシフトの準備に入ってる。

「なのは！フェイト！安静にしてなきゃ！」

「……危ない」

危ないのは分かってる。

でも……

その時、私の胸から手が生えた。

……え？

# 第五十三話　墜ちし星光、雷光（後書き）

なっぺ「後書き座談会……ハッ！」

吼太「いや、何？ハッって」

なっぺ「気にすんな」

吼太「……まぁいいや」

なっぺ「書くことも無いので早々に感想感謝コーナーいきます！ライイさん、月光閃火さん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、緋水さん、天照大神さん、雨季さん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんから、鋼鉄ジーグ（旧）、鋼鉄ジーグ（新）、ビルドシューター（旧）、ビルドシューター（新）、ビルドエンジェルを頂きました。ありがとうございます！」

なっぺ「次回は……某地獄の料理人が登場かな」

吼太「だな。では、この辺で。次回もお楽しみに！」

# 第五十四話　ＬＯＳＥ（前書き）

はい、今回大急ぎで仕上げました！

# 第五十四話　ＬＯＳＥ

Ｓｉｄｅ　吼太

「どけっての！」

「どくわけにはいかん！」

相手の剣とハンドソニックがぶつかり合い、火花を散らす。

「アイゼン！」

『エクスプロージョン！』

後ろから紅い魔導師がハンマーで攻撃してくる。

「チィッ！ガードスキル、エンジェルズウイング！」

背中から大きな白い翼を生やして紅い魔導師を吹き飛ばす。

「このっ！変な魔法使いやがって！」

「魔法じゃねぇよ！！」

このままじゃ……じり貧か。

「悪いけど一気にぶっ飛ばさせてもらうぜ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

ディケイドライバーにカードを装填して、ディケイドに変身した。

さらにカードを装填する。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ『ＩＬＬＵＳＩＯＮ』！』

アタックライド、イリュージョンは自分と同じ力を持つ分身を６体まで出せるカードだ。

ちなみに今回は2体出した。オレを合わせてちょうど敵と同じ数だな。

「分身だと！？」

「ハッ！どうせハッタリだ！」

「「「どうかな？」」」

三人で一緒に言葉を返す。

「な！…三人一緒に話すな！気色悪い！」

「じゃあ」「こういうのが」「いいのか？」

「もっとよくない！」

……弄りがいがあるな。

……って、こんなことしてる場合じゃねぇ！

「一気に決める！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ】！』

オレの前にカードを形どった道が出来る。

その道は、対象を倒すためのエネルギーをオレに与えてくれる道。

「「「ハァァァァァッッ！！！」」」

道を飛び蹴りの姿勢で突き抜けていった。

カードを一枚突き抜けるたびに、エネルギーがオレの突き出した脚に篭められていく。

「何！？」

膨大なエネルギー量に、ようやく気づいたみたいだが、もう遅い！

「「「ダァァァァッッッ！！！」」」

蹴りが三人に炸裂する。

威力をセーブしているから、死にはしていないはずだ。

「さて、やることは後一つ！」

Ｓｉｄｅ　なのは

なんなの……

私の胸から……腕？

「あ、片方外しちゃった」

「うぁぁぁぁぁぁ！！」

フェイトちゃんが叫んでいる。

見ると、フェイトちゃんの胸からも似たような腕が生えていた。

私との違いは、フェイトちゃんの胸から生えている腕には金色に輝く光の玉があるけれど、私の方にはそれがない。

「もう、一、度っ！」

腕が一旦戻るけれど、すぐにまた生えてきた。その手には、桃色の光の玉。

「うっ……ぁぁぁぁぁ！！！」

苦しい！苦しい！苦しい！

助けて……助けて！コータ君！！

「スターライト……ブレイカー！！！」

苦しさに耐え切れずに、スターライトブレイカーを放つ。

しかし、標的を持たないスターライトブレイカーは空中に一筋の閃光をもたらしただけだった。

『蒐集（ザムルング）』

私の胸から生えた腕の中にある光の玉が、その輝きが、小さくなっていく。

身体から、力が抜け落ちていく。

そして私達は……気を失った。

Ｓｉｄｅ　吼太

……悪いなのは、フェイト。

だけど、お前達のおかげで見つかったぜ！！！

「トゥード！ダウンロード、オオナズチ！武装召喚（リアライズ）！」

『了解。オオナズチ、翼部及び尾部を具現化。武装召喚（リアライズ）』

オオナズチの身体を手に入れる。ここからやることは一つ！

「喰らえ！」

疲労ブレスを目の前の騎士に当てる。

疲労ブレスは相手を傷つける力はあまりないが、代わりに相手の戦う力を大きく削ぐことが出来る。具体的には……

ぐぅ～……

「えっ……！？／／／／／」

腹が減る。

『ストラグルバインド』

トゥードがストラグルバインドをかけてくれた。

これで確保だな。

「そんなっ！？」

「接近したのに気づかなかったか？」

オオナズチに変身したもう一つの理由。それはこの高度なステルス性。

今のダウンロード率じゃ全身を隠せはしないけど、デバイスのセンサーを騙すぐらいはたやすい。

「んじゃ、これは借りるぜ」

そう言ってオレは目の前の騎士、湖の騎士シャマルさんからあるものを奪い取る。

それは、今回の事件の元凶。

……【闇の書】

「今、闇を夜天に還す！」

「闇を夜天に……？あなた一体何を…？」

「行くぞ！」

武装召喚を解除してから、再度魔力を練り上げ始める。

アレを使えば、例えこの魔導書の中に夜天の魔導書のデータが無くても元に戻すことなんてたやすい。

ド・マリニーじゃ逆の順に転生するかもしれないからな。アレを使うのが最も安全かつ、最善だ。

「光射す世界に、汝ら暗黒、住まう場所無し！渇かず飢えず、無に還れ！」

レムリア・インパクトの起動呪文を唱えて、空間に手を伸ばす。

闇が集う。
闇が集う。
闇が集う。

歪んだ、狂った、悶える、異形の闇が集う。

光が集う。
光が集う。
光が集う。

荒ぶる、吼える、嘲笑う、異形の光が集う。

闇の極限に位置する。
光の極限に位置する。

闇と光が重なり、一つの混沌が生まれる。

オレはその中に手を伸ばす。

望む物を手にするために。

そして、伸ばした手が望む物を……

輝く偏四角多面形を……

シャイニング・トラペゾヘドロンを……

スカッ

……

シャイニング・トラペゾヘドロンを……

スカッスカッスカッ

……掴めなかった。

「……ってえぇ!?なんで無いの!?」

シャマルさんはただ呆然とこの様子を見ている。

「……あ、そうか。オレの身体に融合してるんだっけ……アレ?そしたらどうやって出すんだ?」

リベル・レギスみたいに胸から出すのか?いや、でもオレ鬼械神じゃないから胸裂いたら死にそうだしなぁ……

「……どうしようか……」

「紫電……」「ラケーテン……」

ん?何か声が……

「一閃!」「ハンマァァァァーー!!!」

「ガァァァァ!?」

不意に背中に走る衝撃。

「今の内に逃げるぞシャマル!」

「えぇ、ありがとうシグナム、ヴィータちゃん！」

「三人ともこっちだ！」

攻撃されて吹っ飛ばされた隙をつかれて、敵の逃走を許してしまった。

つまりは……

「こっち側の敗北、か……」

## 第五十四話　ＬＯＳＥ（後書き）

なっぺ「後書き座談会ディス！」

吼太「ディスって何語だよ」

なっぺ「いや～、シャマルが出たね～」

吼太「名前だけならシグナムとヴィータも出たな」

なっぺ「うん。バッチリ」

吼太「こら待て。ザフィーラの名前が出てねぇぞ」

なっぺ「しゃーないだろ。出す機会が無かったんだよ」

吼太「……んじゃ、感想感謝コーナー」

なっぺ「ＯＫ！香崎　真琴さん、バルディッシュさん、天照大神さん、緋水さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、ライさん、ＫＯＵさん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんからは五雷指、飛来骨（強化版）、爆砕牙を、雨季さんからはマリオの赤甲羅を頂きました。ありがとうございます！」

なっぺ「赤甲羅はどうしようか……」

吼太「あとで何かに使おう」

なっぺ「次回は……日常かな？」

吼太「戦闘じゃないのは確かだな」

なっぺ「特訓も出来ないしね」

吼太「だな。ゆっくりするか」

なっぺ「（コイツがゆっくりなんて出来んのか？）ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第五十五話　整理整頓って大事だよね（前書き）

眠い……誤字やらがあったらば報告してくれると嬉しいです。

# 第五十五話　整理整頓って大事だよね

Ｓｉｄｅ　吼太

今、オレ達は時空管理局の本部に来ている。

理由はなのはとフェイトの検査だ。

オレはその付き添い。

「にしても、大丈夫かな……なのはとフェイト……」

「君が心配したら治るものも治らなくなるだろうな」

「黙れやまっくろくろすけ。砲撃に巻き込まれて気絶してたくせに」

クロノ・ハラオウンことまっくろくろすけがあの現場に来れなかったのにはいくつか理由がある。

一番は遅刻（といっても、執務官であるまっくろくろすけは出動にもいろいろ手続きがあるらしく、それでフェイトやユーノ、アルフ達から遅れて出撃になったらしい）だが、実はもう一つ理由がある。

なのはが錯乱したときに放ったスターライトブレイカー。

それがちょうど転移してきたまっくろくろすけに当たったらしく、それで一発ＫＯ。

結局、アースラスタッフが回収してくれるまでずっとコンクリに埋

まっていた（ギャグ漫画とかでよくある、高所から落ちて人型の穴が空くアレになってた）らしい。

「君がもっとしっかりしていれば僕はこんな傷は負わなかったんだ」

「大丈夫だ」

オレが言うと、まっくろくろすけがたちまち怪訝そうな顔をする。

「……どういう意味だ？」

「なのはの攻撃が誤爆しなくても、オレが砲撃ぶちかましてたから♪」

最高の笑顔とサムズアップをまっくろくろすけに。

プレゼントふぉーゆー。

「笑顔で物騒なことを言うな！」

どうやら気に入らなかったらしい。

「コータ～♪」「吼太君♪」

誰か二人がオレに抱き着いてきた。

一人は分かる。アリシアだな。声からして。

問題はもう一人。

アリシアに顔立ちはよく似ているが、こちらは黒髪だ。

……誰？

「えーっと……アリシアだろ？」

「そうだよ♪まさか忘れちゃってた？」

「いや、違うけど……じゃあ、君は？」

「あら、まだわからない？」

……やけに大人っぽい喋り方だな。

「ん？アリシア。プレシアさんは？」

「え？すぐ側にいるでしょ？」

……

アリシアの視線→黒髪の少女

「……プレシアさん。何やってんのか知りませんけど見た目をごまかさないでください」

「いいじゃない。せっかく、とある親切な方から年齢詐称薬を頂いたんだから♪」

そう言って、プレシアさんはスカートの中から小瓶を取り出す。

……どこに入れてんだよ。

「この錠剤を半分に割って、Ｏの刻印の側を飲むと年齢が５歳分増えた外見年齢に、Ｙの刻印の側を飲むと５歳分減った外見年齢になるのよ」

そんなのがあるのかよ。

「まぁ、一定時間で戻ってしまうのだけれどね」

そう言った瞬間、プレシアさんの身体から煙が噴き出してきて、煙が晴れた時にはいつものプレシアさんがいた。

「まぁ、こんな具合よ。よかったら飲んでみたら？」

「え？いや、オレは別に…『バインド』……まっくろくろすけぇぇぇぇぇぇ！！！」

「ハハハ！せいぜい苦しむがいいさ！」

そう言ってまっくろくろすけは行ってしまった。

……駆け足で。

さてはアイツ、オレを生贄に捧げて逃げたな！

「とりあえずは二粒ね」

Ｏと刻まれた錠剤を二粒飲まされる。

……バーローの逆だなぁ……

ボゥン！

Ｓｉｄｅ　なのは

「よかったねフェイトちゃん！大事なくて」

「なのはこそ」

今、私達二人は時空管理局の廊下を歩いているの。

フェイトちゃんのお母さん、プレシアさんと待ち合わせをしてるんだって。

それで、待ち合わせ場所のロビーに着いたんだけど……

「全く……なんてことをしてくれたんだよ……」

「すごいわ……想像以上ね……よし。とりあえずは自室のベッドに…」

「コータ……カッコイイ……」

プレシアさんとアリシアちゃんがいるのは分かったんだけど……あのカッコイイ男の人は……？

「フェイト！無事でよかったよ！」

「あ、アルフ……」

アルフさんが合流してきた。

「ん？どうしたんだいフェイト……誰だアンタは！」

アルフさんがあの男の人に気づいた。

……アルフさん。警戒してるのはいいと思うけど、ちょっと露骨過ぎなの。

「……やっぱ、わかんねぇよなぁ…」

「「……え？」」

私とフェイトちゃんとアルフさんの言葉が見事に重なった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……ってわけだ」

なのは達三人に事情を説明する。

「それじゃあホントにコータ君なの？」

三人を代表してなのはが聞いてきた。

「あぁ。もちろんだ」

ディケイドライバーとギガドリルを出して身分証明をする。

「……ホントにコータ君なんだ……」

「そろそろね」

プレシアさんが言うと、煙が舞い上がり、みんなの目線が今まで通りになる。

「やっぱこっちの方が落ち着くな」

「そうだね」

左腕に抱き着いてるフェイトが言ってくる。

……

「待て。フェイト、お前いつオレに抱き着いた？たったさっきまで抱き着いてなかったじゃねぇか？」

「だからたった今だよ」

フェイト……お前はクロックアップを本気で習得したのか？

「っと……プレシアさんとアリシアには渡すもんがあるんだった……」

そう言って、ジッパーの中を漁る。

……見つからねぇな。

「悪い、ちょっと中に入って探してくる」

「気をつけてね」

なのはの心配そうな言葉にサムズアップで答えて、ジッパーの中に単身潜り込んだ。

「んで、どこだ……？」

中は意外と広かった。まぁ当然か。いろいろ入ってんもんな……

「これは爆砕牙……これはマスターボール……これはデジヴァイスバースト……これはオールスパーク……」

ここらじゃないのか？

「これは透明マント……これはデスノート……これはどこ○もド○……これは獣の槍……これはとめるくん……」

見つからないな……

「これはリフボード……これはエクスビッカー……これはミーティア……これはディメンションタイド……これはグレートフォックス……」

……つーか物が多いな……

「そうだ！キーのメモリのマキシマムドライブ使えばいいじゃん！早速さがそう！！」

……二時間経過（ド・マリニーの時計を使っているので、外側では一分程度しか経っていない）

「キーのメモリも見つからねぇ……」

……って

「答えを出す者使えばいいんじゃん……」

馬鹿だオレ……

「ただいま……」

「あら、早かったわね」

「まぁな……」

プレシアさんの言葉に弱々しく答える。

……捜し物なんて大嫌いだ…

「プレシアさんには、とある親切な方から若返りの薬を。アリシアにはオレから…これだ」

そう言って、宝石の埋まったペンダントを二つ渡す。

「これは？」

「一つはホーリーＡＲＭ、【癒しの天使】。魔力を篭めれば、傷を癒すことが出来る。もう一つはネイチャーＡＲＭ【フィオーレ】。魔力を篭めれば炎・水・氷・風・地の力が使える。個々の力は大したことねぇが、上手く使えばそれなりにはいけるぜ」

「でも、私リンカーコア無いよ？」

アリシアの言うこともももっともである。この世界では魔力を出すにはリンカーコアが必要というのが常識だ。

だが、それはこの世界での話だ。

「コイツを、ＡＲＭを使うのにリンカーコアは必要ねぇよ」

「「「「「えっ！？」」」」」

今度はこの場にいる全員が驚いた。

まぁ、今までの常識を覆されたようなもんだし、当然っちゃあ当然か。

「見た感じ、アリシアは右脳タイプだ。そして、ＡＲＭを使うのに必要なもの。第六感、またはシックスセンスは右脳タイプの人間ほど強くなる。…大丈夫、アリシアなら使いこなせるさ」

アリシアの手に癒しの天使とフィオーレを握らせる。

「あっ……その……ありがとう……／／／／／／」

「どういたしまして♪」

アリシアの頭を撫でてあげる。フェイトと似た撫で心地だな…微妙に違うけど。

そして、アリシアはそれきり喋らなくなった。

……どったんだ？

「う～…アリシアちゃんばっかりずるい！」

「アリシア。今度は私にも……？」

「……若返ったら覚悟してなさい」

「ア、アハハ……」

アルフ……笑ってないで助けてくれ。

アリシアが黙りこくった時ぐらいから周りの管理局員の視線が痛くて痛くて仕方ねぇんだよ！

しかも「よくも俺の嫁のプレシアさんを……！」とか、「フェイトちゃんは僕の嫁なのに……」とか、「小生はロリコン故、アリシアちゃん至高主義でござるよ」とか言ってた人達が杖を構えててマジで命の危機が……

誰か……誰か、助けてください！

## 第五十五話　整理整頓って大事だよね（後書き）

なっぺ「後書き座談会だ！そしてコッペパンを要求する！」

吼太「ねぇよ」

なっぺ「（´・ω・`）にょろーん」

吼太「にしてもジッパーの中、そろそろ整理しなきゃなぁ……」

なっぺ「戦闘時とか、よく必要なもんを出せるな」

吼太「そういうときは運がいいんだよ」

なっぺ「じゃ、感想感謝コーナーいっちゃおう。ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、バルディッシュさん、香崎　真琴さん、雨季さん、緋水さん、天照大神さん。感想ありがとうございました！」

吼太「ヒスイからは称号、【準備不足】を頂きました。……うるせぇ」

なっぺ「Ａｒｉｓｈｉａさんからは能力を少しだけ全封じする薬と筋弛緩剤を、百合姫からは宝石剣ゼルレッチ、篭っている魔力量のそれぞれ違う宝石、まだ魔力の篭められていない宝石を、要からはアタリ棒とスイカバーを、天照大神さんからは媚薬、性転換薬、年齢詐称薬を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「ゼルレッチと宝石、アタリ棒、スイカバーはジッパー内に保存だな」

なっぺ「薬はなのは達に渡してきたからね」

吼太「激しく待て。早過ぎだろ」

なっぺ「あ、年齢詐称薬は適当に考えたので、イメージと違うかもしれません。その時はごめんなさい」

吼太「質問に答えろ！」

なっぺ「オレに質問するな！」

ベス「次回も日常編だそうですよ。ではではこの辺で。次回もお楽しみに」

## 第五十六話　ベルカと覗きと放置プレイ（前書き）

最近、一日一話しか更新出来ない……

# 第五十六話　ベルカと覗きと放置プレイ

Ｓｉｄｅ　フェイト

あの後、私達はＡＲＭについての軽い説明を受けてから、バルディッシュとレイジングハートの様子を見に行った。

二つとも、決して軽い破損じゃない。直るのには時間がかかるみたいだ。

「ゴメンね……バルディッシュ…。私の力不足で……」

「破損状況は？」

クロノが画面を読んでいたユーノに聞く。

「……正直、あんまり良くない。今は自己修復をかけてるけど、基礎構造の修復が済んだら、一度再起動して部品交換とかしないと……」

やっぱり……

ちゃんと直ってくれるといいけど……

「そういえばさぁ、あの連中の魔法って、何か変じゃなかった？」

不意にアルフがそんなことを言ってきた。

「……あれはベルカの魔法だな」

「知ってるのかい？吼太」

「リームが使ってるグズィスの魔法と同じだよ。昔にあった魔法だけど、今は使い手がほとんどいないってやつ。一時期はミッドチルダと勢力を二分するほどだったらしい。ミッド式とは真逆で、近接戦闘が主体。強ぇ奴は騎士って呼ばれる。……っと、こんなところだな」

確かに……あの人、ベルカの騎士って言ってた。

「んで、最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムって武装だ。儀式で圧縮した魔力を篭めた弾丸を装填して、瞬間的ながらも爆発的な破壊力を得られる」

「危険で物騒な代物だな……」

クロノがコータの説明に対して感想を言う。

「まぁ、って言っても使いこなせりゃ強いのは間違いねぇ。実際オレ達も負けたわけだしな」

「……そう言えばコータ君、あの時何していたの？」

「私も知りたいな。何をしてたの？」

なのはと私がコータに聞く。

「ん、あぁ……まぁ、ちょっとした野暮用さ。気にすんな」

……どういうことなんだろ？

言えないようなことなのかな？

ハッ！まさか敵の人と密会して禁断の愛を交わしあっていたとか！？

あの剣の人！？あの人胸大きかったし…それともあの紅い子！？ま、

まさかあの男の人！！？

「だ、ダメだよコータ！それは不潔すぎるよ！！」

「何だ突然！？落ち着けフェイト！」

『サー、私達のことを忘れていませんか？』

『これが放置プレイと呼ばれるものでしょうか？』

「どこでそんな言葉覚えてきたの…？」

そんなことをユーノとデバイス達は話していたとかいなかったとか。

Ｓｉｄｅ　吼太

フェイトのやつ……見ない間にアホになってきてないか？

ともかくその後、オレ達はグレアムのおっさんに呼ばれて、軽く話をしてきた。

……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩの方じゃねぇよ？

しっかしあれだな。

猫姉妹のやつ、敵対心駄々漏れじゃねぇか。

闇の書を弄ろうとしたのがバレたのか？ま、バレて困るようなことじゃねぇけどさ。

んで、テキトーに話流してたら終わった。

……いや、めんどいんだって。実際。

あんまし下手なことグレアムのおっさんに言ったら何されるかわかんねぇしな。

それで、話終わったから外に出ようとしたら、グレアムのおっさんに呼び止められた。

「吉谷……吼太君だったかな？ちょっといいかい？」

「はぁ……まぁ、構いませんけど」

「ありがとう。……他の人達には席を外して頂きたいのだけれど……？」

オレが残ると言ったら、なのは、フェイト、アリシア、プレシア、アルフが戻ってきていた。

……つーかユーノはドアの境目辺りで困惑してるし、真面目に出て行ったのはまっくろくろすけだけかい。

「いえ、お構いなく。私達は置物ですので」

プレシアさん。会わない内にアンタに何が起こった？アンタそんな支離滅裂なことを言う人じゃ無かっただろ。

「ほらプレシア。行きますよ」

どこからともなく現れたリニスさんがプレシアさんを宥める。

「嫌よ！吼太の聞くことならば私が聞いても文句はないはずよ！離してリニス！！」

「ハイハイ。わがままはたいがいにしてくださいねー」

リニスさんがプレシアさんを引きずって部屋から出ていった。

「なのは……さすがに出たほうが…」

「えぇ～!?ユーノ君までそんなこと言うの!?」

「いや、グレアム提督も言ってるし……フェイトとアリシアもさ」

「「嫌」」

「……チェーンバインド!」

あ、ユーノがなのは達を縛った。

「ほら行くよ!」

「ふぇぇ～!コータ君助けて～」

「助けて～」

「て～」

なのは、フェイト、アリシアの順に助けを求めてきた。まぁ、無理だけど。

アルフはその様子を苦笑いしながらユーノに着いていった。どうやらフェイトに付き添ってただけみたいだ。

「……もういいかな?」

「えぇ……多分」

また入ってきたりしないよな…？

Ｓｉｄｅ　なのは

「酷いのユーノ君！」

「そうだよ！酷いよユーノ！」

「い、いや……そう言われても……」

「さて、と。皆さん、ついて来てください」

不意にリニスさんがそんなことを言った。

やることも無かったし、とりあえず着いていったら……

「ここです」

「リニス、ここには何があるのかしら？」

「まぁまぁプレシア。みんなも入ってください」

それで部屋に入ったら、中には……

『君には聞きたいことがいくつかある。いいかね？』

『えぇ。まぁ、答えられる限りでですが……』

映写機に映ったコータ君とグレアムさんがいた。

「「「「リニス（さん）……ＧＪ！」」」」

「見るなと言われたら見たくなるのが人情ですよねー♪」

「リニスさん！？あなたもあっち側の人だったんですね！？」

ユーノ君が何か言ってるけど軽く無視なの。

じゃあ、あらいざらい聞かせてもらうの！

## 第五十六話　ベルカと覗きと放置プレイ（後書き）

なっぺ「後書き座談会ウェイ」

吼太「ウェイってなんだよ」

なっぺ「さて、リニスの本性のパパラッチ属性が！」

吼太「リニスってあんなやつだったのかよ……」

なっぺ「ちなみに私、サウンドステージはようやく一番最初のやつ（プールの話）を聞いたばかりです！なのでリニスの情報はアニメのみからです！つまり色々間違っていても気にしないでください！」

吼太「いや、サウンドステージ聞けよ」

なっぺ「頑張ってる。さて、感想感謝コーナー！香崎　真琴さん、バルディッシュさん、緋水さん、ライさん、天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんからは箪笥を三つ、緋水さんからは一番最初に見た人を好きになる薬を、雨季さんからはダウジングマシンを頂きました。ありがとうございます」

なっぺ「箪笥はジッパーの整理に使おう」

吼太「入らないもんもたくさんあるけどな」

なっぺ「つーかなんでディメンションタイドやグレートフォックス

が入ってんだよ。あれ人工衛星と宇宙戦艦だろ」

吼太「オレに聞くな」

なっぺ「薬はなのは達に届けておきました」

なのは「コータ君！このジュース飲んで「あー、手が滑ったー」にゃぁぁぁぁ！！！！」

なっぺ「零すなよもったいない」

吼太「薬物なんぞ飲めるか！」

なっぺ「ダウジングマシンはトゥードに組み込んでおこう。無くしたら大変だ」

トゥード『複製したキーのメモリも組み込みましたので、捜し物ならお任せ下さい』

なっぺ「さて、次回は吼太とグレアムさんのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩもといお話！」

吼太「何を言われんだ…？」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第五十七話　フッフッフッ……（前書き）

正直、今回の話は要らないかもしれない……

# 第五十七話　フッフッフッ……

Ｓｉｄｅ　吼太

「君には聞きたいことがいくつかある。いいかね？」

「えぇ。まぁ、答えられる限りでですが……」

答えられない範囲、ってのはもちろん未来のことな。特にスカリエッティを始めとするＳｔｓの話は絶対に出来ない。

「まず……君は何者なのかね？」

「何者って…ただの民間協力者ですよ」

オレがそう言うと、グレアムのおっさんはモニターを開く。

そこには、時の庭園を喰い荒らす雷の龍……バオウが映っていた。

「この力……いくらなんでもただの民間協力者が持つ力としては過ぎてはいやしないかな？」

見られてたのかよ……オレ、探知は苦手だからなぁ……

「……魔法であることは確かです」

「嘘をつくな！生物の形をとる魔法なんて聞いたことも無い！」

猫姉妹の片割れ、リーゼロッテが語気を荒げて言ってくる。

「ホントに魔法なんですってば！ただ、ミッド式や、古代にあった魔法とも違う術式なだけです！」

「……まぁ、それはいい。次はこれだ」

次に画面に映ったのは、仮面ライダーディケイドと、ディケイドから変身したカブト。

……まっくろくろすけ辺りから流出したのか？後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩする必要がありそうだな……

「これはどういうことだ？変身魔法というには限度があるぞ」

「それは……」

さすがに隠せないか…

「それは仮面ライダーという能力です。このデバイス……ディケイドライバーを使うことで変身出来る異世界の戦士です」

「異世界の……」

「世界……？」

アリアとロッテが言う。

「細かい説明は省きますよ？ややこしい説明になりそうなので」

「ではこれは……」

それからオレは、色々と自分の力を説明する羽目になった……

ちなみに、殆どがまっくろくろすけが居たか、もしくは見ていたと思われる力のみ聞かれたので、まっくろくろすけが確実にバラしたことが判明した。

……どうしてやろうか……

「……で、もういいですか？」

「あぁ、済まなかったね」

気がつけば既に6時になっていた。さすがの母さん達でも、これ以上は心配し始めるだろう。

「あぁ、それと最後にもう一つだけ。いいかな？」

「はぁ……」

「『闇を夜天に還す』とは……どういう意味かな？」

グレアムのおっさんが優しく、それでかつ威厳を篭めて聞いてくる。

「それは……貴方が一番良く分かっているんじゃないんですか？グレアム提督」

「ムゥ……済まなかったね。もういいよ」

「では」

そうしてオレは部屋を出た。

「そんな……そんなこと、出来るはずが……」

「アリア～、この先どうしよう？」

「とりあえずは現状維持よ。信憑性が無いものね」

「うむ……頼む」

「「はい、お父様」」

Ｓｉｄｅ　シグナム

「……今日の戦闘か？」

主はやてが入浴を始めたころ、ザフィーラが不意にそんなことを言ってきた。

「聡いな。その通りだ」

服を捲って、ザフィーラに腹を見せる。そこには大きな青あざが出来ていた。

「ザフィーラ、お前こそ大丈夫か？」

「私のことは気にするな。私は盾の守護獣だからな」

「ふっ、そうだったな……」

しかし、私が考えていたことはもう一つある。

青あざに隠れてこそいるが、ここにはもう一つ、魔力斬撃の傷痕がある。

これを付けたのはあの黒衣の魔導師……

武器の差がなければ、あの妙な魔導師と戦う前にやられていたかもしれん。

……中々の強敵だな。次に相見えるのが楽しみだ…

その時にはあいつらも更に強くなっているだろう…

ならば、その力ごと打ち砕こう。

それが、烈火の将たる私の役目。

にしても……本当に楽しみだ……

「フッフッフッ……」

「……シグナムよ、その笑い方は悪役のものだぞ…」

Ｓｉｄｅ　???

「ここまでは……」

「順調そのものだぁねぇ」

「しかし、このままでは……」

「なんとかされちゃうだろぅねぇ……あの、吉谷吼太ってぇ奴にぃ」

「ならば、我等がやるべきことは…」

「たった一つ」

「「全ては、闇天の復活のために」」

本来は存在しない二つの存在が今、動き出す……

## 第五十七話　フッフッフッ……（後書き）

なっぺ「後書き座談会どぅぃっす！」

吼太「誰か出てきたな」

なっぺ「吼太の敵役になるやつだ。……といってもまだ録に設定決まって無いんだけどね！」

吼太「ダメじゃねぇか……」

なっぺ「まぁまぁ。何はともあれ、感想感謝コーナー、行ってみましょ！香崎　真琴さん、バルディッシュさん、天照大神さん、緋水さん、ライさん、雨季さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、かみかみさん。感想ありがとうございました！」

ベス「百合姫さんからはリニスさんに隠遁用ダンボールを、バルディッシュさんからはマイケル１２号を、天照大神さんからはリニスさんとリーゼ姉妹に特製マタタビを５０箱、遥さんからは傾国の剣を頂きました。ありがとうございます」

吼太「マイケル１２号と傾国の剣はジッパーの中に保管で、マタタビはリーゼ姉妹に渡しておこう」

リニス「ダンボールも確かに受け取りましたよ♪」

なっぺ「次回は引っ越しの話に……なるかなぁ？」

吼太「自信なさ気だな」

なっぺ「いや、宣言通りの話を書けることが少ないからさ……まぁ、引っ越しの話になるかもしれません」

吼太「早く書けよ?」

なっぺ「頑張る。ではではこの辺で!次回もお楽しみに!」

## 第五十八話　お引っ越し！（前書き）

プレシアさんの他人の呼び方が想像出来ねぇ……

違和感を感じても、スルーしてくれると嬉しいです。

# 第五十八話　お引っ越し！

Ｓｉｄｅ　吼太

あれからオレは、家に一度連絡を入れて、最後の確認のための集会に参加していた。

なのは、オレ、フェイトを中心に、みんなが周りを囲うような配置で、リンディさんの話を聞く。

プレシアさんはリンディさんの横で一緒に立っている。

「さて…今回、私達アースラスタッフは、ロストロギア【闇の書】の捜索、及び魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました。ただ、肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生地の近隣……このプレシア・テスタロッサさんが新しいご自宅を快く貸し出してくれたので、そこに臨時作戦本部を置くことになります」

そこまで一気に言うと、リンディさんはスタッフの配置を次々と決めていった。

「それで、プレシアさんのお宅なんですけど……」

「行ってからのお楽しみ、ということにしていてください♪」

そう言って、プレシアさんとリンディさんが共に微笑む。

その微笑みを見て、何人かの局員が顔を赤くしてしまったのは仕方のないことだろう。

それほどまでに、この二人の微笑みは魅力的だった。

……多分だけどな。オレ、そういうのよくわかんねぇし。

「フェイトちゃん。フェイトちゃんの新しいお家って海鳴市にあるんだよね？どこにあるの？」

なのはがフェイトに質問をする。

「ううん。私は知らない。お母さんは楽しみにしてなさいってだけしか言ってくれなかったし…」

「私も聞いてないよー」

フェイトとアリシアは聞いていないらしい。

「そうなんだ……アルフさんは？」

なのはが、アルフに話を振る。

「アタシは知ってるよ。プレシアだけに地球での手続きを任せるのは不安だったからね」

それを聞いて、フェイトがなぜか、「あー……」みたいな納得したような顔になった。

……あれ？フェイトとアルフって確か無印のころはかなり豪華なマンションに住んでたよな？なんで不安になるんだ？

「ま、楽しみにしてな♪」

アルフもやはり、詳しくは教えてくれなかった。

「「「？」」」

数日後……

オレとなのはは、転送の予定地にいた。

ここにみんなが来るらしいんだけど……

「吼太、なのは。お待たせ」

「やっほー♪」

「フェイトちゃん！アリシアちゃん！」

「来たな。ようこそ海鳴へ」

とりあえずは、とフェイトとアリシアの頭を撫でる。

それに対して二人は…

「へっ！？あぅぅ……／／／／／／」

フェイト：真っ赤になって俯く

「えへへ～／／／／」

アリシア：顔を赤らめながらも満面の笑顔

「う～～～！！！」

なのは：唸ってる

……なのははどうしたんだよ？

「ミカさん達は？」

「アイツらは……特訓中だ。ったくアイツらは……」

ミカとリームは、前回の戦闘を反省してか修練の門に入っていた。

プリムは二人に負けじと修練を始めて、ライラは修練の門の制御担当。

……何か無人でも修練の門が使用出来るシステムでも考えるか…

…巻き込まれたライラが可哀相だ。

「ア、アハハ……」

「みんな、こんにちは♪」

予定の無かったアリスは、今回こっちに来ている。

……これだけの大所帯、入るのか？テスタロッサ家の新居は……

「あら？その顔は「こんな大人数で大丈夫なのかな？」って顔ですね？」

心を読まないで下さい。リニスさん。

「ふふっ、ご心配には及びません。さて、それじゃ行きましょう♪」

そして着いたのは……

やはりというか、あのＡ's に出てきたマンションだった。

「うわ～！すっごい近所だ～！」

「ホント？」

なのはの言葉に、フェイトが聞く。

「うん！あそこが私ん家！」

なのはが指を指す。そこには翠屋の屋根が見えた。

「ホントだ。すっごく近い！」

「私にも見せて～！」

アリシアは身長が足りないため、ベランダの柵が邪魔になって見れないみたいだ。

「んん～……ふぇ？」

不意にアリシアの体が浮かび上がる。それをやっているのは…

「アリシア様、見えますでしょうか？」

「うん！ありがとうトゥード！」

「お役に立てて何よりです」

いつの間にか人間化したトゥードだった。

ちょうど、アリシアを肩車している状態だ。

……トゥードって結構高いのに、それにアリシアが肩車しても天井に頭がぶつからないのか……ホントすげぇなぁ…

「あっちには私達の家があるよ～」

アリスが指指した方を見ると、オレ達の家が見えた。
距離的には翠屋とあまり変わらないな。
そう、実はこのマンションと翠屋、そしてオレ達の家は正三角形が描けるぐらい距離が同じ位置関係にあったりする。
つまりは、ご近所さんってことだ。
「ってことはコータの家にも遊びに行けるの？」
「だな」
「「やったぁ～♪」」
テスタロッサ姉妹が抱き合って嬉しさを表現する。
そこまで喜ぶようなことか？
ま、喜んでくれてるのは嬉しいけどさ。
そして、オレ達が部屋に戻るとそこには仔犬とフェレットが。
「アルフちっちゃい！どうしたのー？」
「ユーノ君もフェレットモード久しぶり～♪」
まぁ、アルフとユーノだ。動物形態も久しぶりだな。

アリシアとなのはがアルフとユーノを愛ではじめる。

「かわいいだろ～？」

「うん！すっごくかわいいよ！アルフ！フェイトもそう思うでしょ？」

「うん。そうだね」

「えへへ～、フェレットユーノ君だ～」

「ア、アハハ……」

各々、新しい状況を楽しんでいた。ユーノだけは微妙な表情だったが。

「なのは、フェイト、アリシア、アリス、ついでにアホバカマヌケ。友達が来てるよ」

「オイコラまっくろくろすけ。アホバカマヌケって誰だアホバカマヌケって」

「君のほかに誰がいるっていうんだ？」

「んだとぉ！？」

オレとまっくろくろすけが睨み合っていると……

「アンタもそんなことする相手がいるのね～」

「こんにちは～♪」

誰かの声がした。どうやら、客人はもう中に入ってきていたらしい。
来たのは当然、アリサとすずかだ。
「初めまして。…っていうのも何か変かな？」
「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」
「でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」
「私もー！」
アリサとすずかの言葉に、フェイトとアリシアは本当にうれしそうに答える。
今まで同年代の友達ってオレとなのはしかいなかったらしいし、当然の反応だろう。
「フェイト、アリシア。お友達？」
アリサ達と話していたら、プレシアさんが来た。ちなみに服は原作でリンディさんが着ていたのと似た服を着ている。
「「こんにちはー♪」」
「すずかちゃんに……アリサちゃんね。いらっしゃい」
「へ？なんでアタシ達の名前を？」

「ビデオメールを見せてもらったのよ。何かお茶でも出せれば良かったんだけど……」

確かに今は難しいだろう。なにせ引っ越してきたばかりだ。

「あ、それなら私の家に行きましょうよ！」

悩むプレシアさんになのはが助け船を出す。

「……えぇ、せっかくだし、ご挨拶もしなきゃいけないものね。案内、お願い出来るかしら？なのはちゃん？」

「はい！」

こうして、オレ達は翠屋へと向かうことになった。

## 第五十八話　お引っ越し！（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始めますぜ！」

吼太「おう」

なっぺ「今回のゲストは最近出番の無いフラウリーナ三姉妹だ」

ミカ「やっほ♪」

ライラ「……どうも」

プリム「納得出来ませんわ！何故私がこのような扱いになっているんですの！？」

なっぺ「るせぇ！お前ら強すぎて戦闘には出しづらいし、日常は人数が毎回多すぎて扱うのがいっぱいいっぱいなんだよ！」

プリム「それを何とかするのが貴方の仕事じゃなくて！？」

なっぺ「無茶苦茶言うなアホ！」

吼太「お前ら落ち着け……そういや、能力を完全に公開出来てるのってプリムだけだな」

なっぺ「ミカはまだ能力隠してるし、ライラに至っては性質上、単体じゃ出したくてもなかなか出せないんだよ。一応、両方ともアイデアは固まってるんだけどな」

ミカ「まぁ、戦闘シーンに出られなきゃねぇ～…」

ライラ「……少し…残念」

なっぺ「出られるように頑張るよ。ちなみに、布陣だけ教えると…」

ミカ：フロントアタッカー

プリム：センターガード

ライラ：フルバック

なっぺ「ってな具合になる」

吼太「早く能力出しきれよ？」

なっぺ「善処する。そいじゃ感想感謝コーナー！三姉妹、よろしく！」

プリム「バルディッシュさん、緋水さん、天照大神さん、ライさん、香崎　真琴さん、雨季さん。感謝してあげてもよろしくてよ？」

なっぺ「だから普通に感謝しろよ」

ミカ「バルディッシュさんからはマジンガーZ、グレートマジンガー、マジンカイザー、グレンダイザー、コンバトラーV、ゲッターロボ、アクエリオン、ジャイアントロボを貰ったよ。サンキュー♪」

ライラ「……全部…アマテラスに…入れとく……ね？」

吼太「あぁ、頼めるか？」↑ライラの頭を撫でる

ライラ「……うん……／／／／／／」

なっぺ「次回は……なんだっけ？何あったか覚えてねぇや。Ａ'ｓ見てこないと……まぁ、戦闘では無いと思います。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第五十九話　転校生、ドテッ（前書き）

日常は何故かコンパクトに収まる不思議。

戦闘だとそれなりに長く書けるのになぁ……

……やはり文才か……

# 第五十九話　転校生、ドテッ

Ｓｉｄｅ　フェイト

翠屋。

この近辺で有名な喫茶店で、なのはの実家。

その外の席に私達はいた。

ちなみにコータはなのはのお兄さんに呼ばれて行ったから、ここにはいない。

……店の奥からたまに「貴様！なのはとその友人だけでは飽き足らず、フェイトちゃんまで！！」とか、「何の話ですか何の！？」とか、「惚けるな！！神速！」「やっべ！ガードスキル、ディレイ！」って言う声や、地響きが聞こえて来るんだけど……

「うふふ……お兄ちゃん……後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなの♪」

なのは……笑顔が怖いよ……

「ユーノ君久しぶり～」

「キュ！」

すずかはユーノと遊んでいる。

やっぱりユーノとも知り合いだったんだ。

「ん～……これ、宝石？」

「わん！」

アリサはアルフと一緒だ。

……宝石はやっぱり目立つのかな？でも外せるわけじゃないんだよね…

「フェイト、こっちに来なさい」

お母さんが私を呼んでる…なんだろ？

「ゴメン、私、行ってくるね」

「うん。何があったか後で教えてねー♪」

なのはは優しく送り出してくれた。

「来たわね。フェイト」

「うん」

「あれ？フェイトも？」

見たら、私の姉であるアリシアも来ていた。アリシアはアリスと一緒に遊びに行ったはずだったんだけど……お母さんに呼ばれたのかな？

「ところでお母さん、用件は何なの？」

アリシアがお母さんに聞く。

「まぁ、待っていなさい」

「……？」

何なんだろ？

「プレシア、貰って来ましたよ」

「ご苦労様、リニス」

「あ、リニス！」

さっき、別れたときは何しにいったのかわかんなかったけど、どうやらあのリニスが手に持っている箱を受け取りに行っていたみたいだ。

「はい、フェイト。これは貴女に、です♪そしてこっちはアリシアに♪」

「これって……？」

「開けてみなさい」

お母さんが促してくる。

開けてみると中には……

「おぉ……」

なのはのお父さんが感嘆の声をあげた。

それほどのものが入っていた。

そう、それは……

Ｓｉｄｅ　なのは

「あ、フェイトちゃん！なんだったの？」

「ふふ……秘密♪」

「えぇ～！？教えなさいよ～！」

アリサちゃんが抗議の声をあげるけど、フェイトちゃんは軽く笑ってるだけで答えはしなかった。

……何なんだったんだろ？

数日後……

今日は学校！

私はコータ君、アリサちゃん、すずかちゃんと一緒に学校へ行くバスに乗っているの。

「ふぁぁ……」

「コータ君、今日もねぼすけさんだね♪」

「まーなー……ぁ～、眠ぃ…」

コータ君と一緒に過ごすようになってわかったことは、とにかくコータ君は朝が弱いってこと。

朝の間、コータ君はずっと寝てるか、うとうとしつつ起きてるかの

どっちかなの。

「もう……ほら、早く起きなさい！学校着くわよ！」

アリサちゃんがコータ君のお母さんみたいなの。

すずかちゃんもコータ君の肩を軽く揺すって、起こそうとしてるんだけど、なかなかコータ君は起きてくれない。

「ん……」

その時、コータ君の頭がストンとアリサちゃんの膝の上に落ちたの。

……何、してるのかな？

「な、なななななな！！！何してんのよ！！？／／／／／」

「眠ぃ……」

「ち、ちょっと！離れなさいよっ……あ、でもべつに嫌とかそういうのじゃなくて……あー！とにかく離れなさい！」

「んー……後5時間……」

「長すぎるわよぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

……

気づいたら、オレは頬に真っ赤な紅葉を張り付けていた。

……なんで？

アリサは目線合わせてくれないし、なのはとすずかは終始笑顔（黒いオーラのおまけつき）だし……

オレ、何かしたか……？

「皆さん、おはようございます！」

あ、先生が来た。

「「「おはようございます！」」」

みんなが一斉に返事を返す。

「さて、早速ですが今日は転校生が来ています！」

転校生……？

周りのクラスメートが、「どんな子かな？」「男の子かな？それとも女の子？」みたいな感じで話し合っている。

「みんな仲良くしてくださいね？……では、二人とも入ってください」

そう、先生が言う。

そして扉が開き、中に転校生が入って…

「ひゃう！？」

ドテッ

……

「フェイト、大丈夫？」

「あぅぅ……／／／／／／」

……えっと……

入ってきた……瞬間に転んだ転校生は、長い髪を二つに分けて、その髪を結ぶのに薄いピンク色のリボンを付けた、赤い瞳の少女……

そして、入口で立ち往生してるのは、転んだ転校生にうり二つながらも、若干ながら幼くて、髪はストレートとツインテールが混ざっ

たような髪型をした少女。

「えっと……二人とも、こっちに来て自己紹介をしてください」

先生が若干困った声で言う。

「は、はい！」

そして、その二人の少女は教壇に立ち、自らの名前を言う。

「アリシア・テスタロッサです！好きな人はコータとフェイト！あと、お母さんにリニスにアルフに……たくさん！」

「あの…フェイト・テスタロッサです…よく間違えられるんですけど、アリシアは私の姉です。それでその……よろしくお願いします」

「「「よろしくー♪」」」

「はい。ありがとうございます。では席は……吉谷君の席の近くが空いてるわね……そこに座って」

「はーい♪」

「はい」

オレの近くにフェイトとアリシアが来る。フェイトとアリシアに軽く手を振ると、アリシアは満面の笑みで、フェイトは赤くなりながら手を小さく振って返してきた。

聖小三大美少女が、聖小五大美少女になった瞬間だった。

## 第五十九話　転校生、ドテッ（後書き）

なっぺ「後書き座談会ね～」

吼太「どうした？」

なっぺ「眠い……今３時半近くなんだよ…」

吼太「んな時間に書いてるお前が悪い」

なっぺ「んじゃ、早々に感想感謝コーナーを……バルディッシュさん、緋水さん、天照大神さん、ライさん、雨季さん、香崎　真琴さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん。感想ありがとうございました！」

吼太「バルディッシュさんからはセーラー服とポッキーを頂きました。ありがとうございます」

なっぺ「よし、吼太。着替えろ」

吼太「いや……っていつの間に！？」

＊「シャッターチャンス！」

吼太「撮るなぁ！／／／／／」

なっぺ「マイケル１２号を持たせて、ポッキーを軽く口にくわえさせて、と」

＊「神楽コス！いいね～、来てるよ来てるよー！！」

吼太「来てない！／／／／／／」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　フォーティトゥードのとある一日（前書き）

正直、自分でも何がしたかったのかよくわかんねぇ…

今回は、トゥード（人間態）が主人公です。

にしても最近、ストーリー評価やら文章評価が上がらない…

総合評価は上がってんのになぁ……システムどうなってんだろ？

後、６０万アクセス及び４万ユニーク達成しました。ありがとうございます。

# 番外編　フォーティトゥードのとある一日

Ｓｉｄｅ　三人称

閑静な昼下がり。

とある一件の住宅で、一人の美しい女性がくつろいでいた。

彼女の名前はフォーティトゥード。通称トゥード。

今日は彼女のいる家、吉谷家の留守番を頼まれているのだ。

家主の吉谷透、その妻の燈は連休を利用して草津温泉巡りに行き、その息子で、彼女の主である吉谷吼太は、ユートピアと呼ばれている別荘空間の見回り。

養子の吉谷リームと同居人アリスは買い物へ。

そして、吉谷吼太の娘のフラウリーナ三姉妹は三人仲良く修業へと出かけていた。

よって、トゥードは現在、一人でアフタヌーンティーを楽しんでいた。

「ふぅ……やはり青汁はおいしいですね」

……アフタヌーン青汁を楽しんでいた。

「それにしても……暇ですね」

彼女は暇を持て余していた。

彼女は元々はデバイスである。当然、人間らしいことなど禄に考えることなど無かった。

それ故に、彼女は趣味や暇潰しといった、【空いた時間をどうするか】という知識が圧倒的に欠けていたのである。

「……スキャン完了。やはり汚れはありませんね」

掃除、洗濯、洗い物といった、家事は一通り終わっていた。

あまりにやることが無さすぎて、ついつい家の外壁まで綺麗にしてしまったのだが、それでも潰せた時間は一時間が関の山であった。

……ちなみに、吉谷家は三階建ての大きな家であり、一般的なハウスキーパーでも中の掃除には三時間は掛かる。

しかし、トゥードは家の内装を僅か３０分足らずで新築以上の状態にするという、某あくまで執事な人も真っ青な家事スキルを発揮してしまった。彼女の能力の高さが伺える。

「何かやることがあればよいのですが…」

それでも、何か少しでもやれることがないかと調べ始めるトゥード。

しかし、家は磨き上げられ続けて、もはや宝石のように光り輝いている部分すらあった。

そんな家に綺麗にしなければならない場所などあるはずが無い。

「……では、外にでも行きましょうか」

留守番を頼まれはしたが、四六時中家を見張っていろとまでは言われていない。

トゥードは服装を整え、町へと繰り出すことにした。

「中々面白いものですね。アイススケートというものは」

スポーツセンターから出て来ての感想がそれだった。

彼女にはジュエルシード機関……ＪＳ機関というものが内蔵されている。

それ故に人の感情について、人一倍よく感じることが出来るのだ。

今回はそれを利用して、【楽しそうな気配】が集まっている部分を探していた。

そして目に入ったのが、近くにオープンしたスポーツセンター。

いろいろなスポーツを一定時間楽しめるというものなのだが……

トゥードは一人であるが故に、多人数スポーツをしているところに混ざっていくことに躊躇いを感じていた。

そこで、彼女は冬の季節限定であるアイススケートをすることにしたのだ。

靴を受け取り、履き代えてから氷のステージの上に立ち、滑り始める。

最初こそおっかなびっくりだったものの、数分後にはスイスイ滑れるようになっていた。

トゥードはとても美しい女性である。

そして、氷上の女性は普段より数割増しで美しく見えるものである。

当然、トゥードは注目を集めることとなる。

ある人は「俺、ちょっと求婚してくる」と言い、ある人は「ちょっとトイレで【見せられないよ！】してくる」といい、ある人は「ふつくしい…」と言ったとかなんとか。

ちなみに求婚した男性は総計７２人。いずれも「恋愛事にはまだ興味がありません」とあっさり断られている。

次に向かったのはボウリング場。

ここでも彼女は、全スコアをストライクで埋めるという快挙を成し遂げた。

トゥードいわく、「子供でもやろうと思えば出来ることです」とのこと。

ここでは、彼女が投球フォームを取るたびに大きく揺れる、胸の動きを凝視する者がたくさんいたとかいなかったとか。

ここでトゥードの服装について触れておくと、彼女の服装は黒いコートと白いTシャツ、黒のホットパンツとレギンスを組み合わせたものである。

それを、今はコートを脱いでいるため、白いTシャツを押し上げている巨大な二つのモノがよく見えてしまっている状態なのだ。

加えて、彼女はブラジャーというものをつけてはいない。トゥードはブラジャーを好きではないらしい。

そのため、コートを着ているとわからないものの、コートを脱いだ今の状態は男性にとってまさに目の毒の状態であった。

前屈みになっている人は、十人を超えている。それほどの魅力があるのだ。

「ねぇ彼女？もしかして誘ってたりする？」

「ギャハハハ！お前それ直球過ぎるだろ！」

「ハァ……（またですか…）」

当然、こういう輩もよく現れた。

見た目気取ってはいるが、人の感情を知ることが出来る彼女からすれば、嘘やごまかしなどは簡単に見破れる。

今回もこの男性二人の目的が【トゥードの肉体】だということは容易に理解出来た。

全身を舐めつくすような視線、隠そうともしない荒い息。

トゥードがたちまち不機嫌になるのも、致し方ないことだろう。

「結構です。お引き取り願います」

「そうつれないこと言わないでさぁ～」

しつこい。

それがトゥードの感想であった。

「ほら、そんなこと言ってるけど実際はかなり期待してたんでしょ？」

「そんなことはありません」

トゥードは迷惑をかけないためにボウリング場を出る。

男二人は着いてきたが、ある意味これは予定通り。

そして町に出たあたりで、認識阻害魔法を使って逃げる。

その気になれば、この二人程度を倒すことは簡単なのだが、トゥードは決して争いを好んでいるわけではない。

追われた場合はいつもこうしていた。

そして、次の目的地へと向かう。

来たのは、ゲームセンター。

遊ぶための施設の代表とも言える。

海鳴のゲームセンターはそれなりに大きいため、様々なゲームが揃っていた。

以下は、トゥードがやった記録の一部。

太〇の達人：むずかしいを二回ともフルコンボ（おには存在自体を知らなかったため未プレイ）

ＵＦＯキャッチャー：百円につき、商品を必ず二個取るという、ゲーセン泣かしを実行。

レースゲーム：ほぼ独走状態。周回数が５０周などといった、耐久

系ならばかなりの差がついたであろう。

対戦格闘ゲーム：この辺りでひそかに伝説になっていた【瞬殺の乙丸】と呼ばれるプレイヤーをあっさり撃破。

メダルゲーム：メダルが減らず、増えて行くばかり。

機〇戦士〇ンダ〇　戦〇の絆：初プレイにして、１３機撃破という記録を打ち立てる。

リ〇ム〇国：フルコンプ。

そして、現在はガンシューティングに挑んでいる。

いわゆる、ゾンビシューティングというものだ。

トゥードはわざわざ二百円を払い、二丁拳銃のスタイルで挑んでいる。

最初、このゲームの熟練者からはやれやれといった雰囲気が漂っていた。

こういったゲームでは、手数よりも正確さが求められるため、銃を二丁持つのはかえって弱くなることが共通の認識だったからだ。

しかし、それはあくまでも一般レベルの話。

トゥード自身の才能と、吼太のデバイスとして様々な強敵と戦って

きた経験。

これらはトゥードに圧倒的な実力を与えていた。

当然、画面の向こうに存在する腐敗した怪物達はなす術なく倒されていくばかり。

次第に、周りにギャラリーが出来始める。

美しい女性が二丁拳銃で戦うその姿は、とてもかっこよく、人の目を引き付けるなにかがあった。

彼女は二つの銃を巧みに操り、無傷のままステージを次々にクリアする。

そしてラストステージにいる、一際巨大な敵をも、まるで赤子の手を捻るように……

「……散華しなさい」

ドキュドキュゥン！

『ウガァァァァ！！？！？』

――ＧＡＭＥ　ＣＬＥＡＲ！ＣＯＮＧＲＡＴＵＬＡＴＩＯＮＳ！――

「「「ワァァァァ！！！」」」

ここに、ゲーセン荒らしが誕生した瞬間であった。

「さて、そろそろ帰りましょうか」

ゲームセンターでの戦利品である、お菓子やぬいぐるみが入った袋を持って、家路につくトゥード。

「やめてください！」

不意にそんな声が聞こえてきた。

「んなこと言ってないでさぁ～、きっと気持ちいいからさぁ～」

「いや！来ないで！」

「いいから来いよ！こっちはさっきいい女を逃しちまってイライラしてんだよ！」

「……この声は…」

トゥードは足早に現場と思われる路地に向かう。

そこには、さっきトゥードを追い掛けて来ていた男性二人と、見知らぬ中学生程度の女性がいた。

男性らが女性を追いかけ回し、ここまで追い詰めたらしい。
女性の整った顔は、恐怖に歪んでいた。
「ふぅ……貴方達、何をしているのですか！」
そう、声を張り上げて言う。
男性二人が振り返り、トゥードのことを見る。
「……へぇ。君の友達だったんだ～」
どうやら勘違いをしているようだが、否定する必要はないため、トゥードは喋らない。
「それじゃ、君が代わりになってよ。そしたら、この娘を解放してあげる」
「人質を取らなければか弱い女性一人犯せないんですか？二人もいるのに？そんな情けない男性の言うことを聞くつもりはありません。ご容赦を」
トゥードが挑発を交えて答える。
男性らの顔がたちまち赤くなり、
「テメェ！犯しつくしてやる！」
殴り掛かってくる。

おそらく、彼等の心算ではここでトゥードを倒し、中学生の女性の二人を犯すつもりだったのだろう。

ただ、相手があまりにも悪すぎた。

「……ぬるいですね」

襲いくる二つの拳を避け、男性らの腹部に一発ずつ。

それだけ、たったそれだけで男性らは動けなくなっていた。

「が……!?」

「大丈夫ですか?」

「え?あ、はい……」

トゥードの呼びかけに、女性が答える。

「そうですか。よかった…」

トゥードが女性に微笑む。

その微笑みは、見た人間を全員惚れさせてしまうような、魔性の魅力があった。

「……／／／／／／」

たちまち、ぽぉーっとなってしまう女性。

「警察を呼びました。数分もすれば来るでしょう。では」

「あ、あの！」

女性が突然、声をあげる。

「あの…私は深神舞華（みかみまいか）と言います！……それで…貴女のお名前は…？」

「……フォーティトゥード…トゥードと御呼び下さい」

そう言うと、トゥードはまた微笑み、そしてその場を去っていった。

「トゥード……お姉様……はぁぅ…／／／／／」

「おぅ、お帰りトゥード」

「ただ今帰りました。マスター」

「ん。どうだった？」

「いつも通りです。やはり町にはいろいろなものがありますね」

「そっか…それじゃ、晩飯の手伝い頼むぜ」

「了解」

『いつも貴方のそばに！深神製薬がお送りしています』

「この深神製薬って最近すごいらしいねリーム」

「最近じゃガンの特効薬開発したらしいよ？アリスも風邪薬とかでお世話になったよね」

「そこの二人。だべってないで働け」

「「ハーイ♪」」

【フォーティトゥードお姉様を愛する会】

メンバー続々と加入中……

## 番外編　フォーティトゥードのとある一日（後書き）

なっぺ「後書き座談会どえっす」

吼太「偉そうだな。にしても今回のはなんだ？」

なっぺ「思い付いたからやった。後悔はしていない」

吼太「まぁ、オレは構わねぇけどさ」

なっぺ「今回のゲストははやて！」

はやて「どうもー、A's になったのに出番がまるで無いはやてですー」

なっぺ「出したいのに…！出したいのに…！上手く出せない……！」

はやて「まぁ、頑張っていくで！」

吼太「つーか一番の原因はお前がキャラ増やしすぎてることだと思うけどな」

なっぺ「うるちゃいうるちゃいうるちゃい！」

はやて「ところでトゥードさんってどんな見た目なんや？」

なっぺ「ｋｅｉさんの感想の返事に書いたけど、もう一度詳しく書くと…」

・髪は蒼い。腰に届くほど長い髪をストレートにしている。

・瞳は翡翠色。これは魔溜石の色から。

・目はツリ目気味。

・女性としては長身で、スタイル抜群。

・見た目は成人女性。イメージ的にはシグナムとかリインフォースとかそっち系の人。

・人間態では薄着。例え冬でも肌着とコートぐらいしか着ない。夏はタンクトップにホットパンツのみもよくあるとか。

・家事、スポーツ、ゲーム万能。

なっぺ「…っとこれぐらいかな？」

はやて「これぐらいって？」

なっぺ「多少追加するかもしんないってこと」

はやて「そうなんかー。ま、私は胸を揉めれば何も問題無いんやけどな」

吼太「お前も自重しろよ…」

なっぺ「はやて！感想感謝コーナー任せた！」

はやて「はいよー！香崎　真琴さん、緋水さん、バルディッシュ

さん、天照大神さん、まーたさん、ライさん、雨季さん。感想ありがとうございましたー！」

なっぺ「鈴からは某あかいあくまの衣装を、バルディッシュさんからは殺生丸の衣装と天生牙を、ライさんからはラガンのニーナの衣装を、雨季さんからは楔の【ピー】な写真を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「なんでコスプレ衣装ばっかり届いてんだよ！？」

はやて「似合うからや！」

吼太「ｏｒｚ」

吼太新スキル：あらゆる衣装を完璧に着こなす程度の能力

なっぺ「ちなみに写真は吼太の部屋に送っといたから」

燈「あら、ついに吼太も好きな娘を隠し撮りするような歳になったのね～♪」

吼太「いろいろとツッコミたいことはあるけどとりあえずなのは達には見せるなよ…「コータ君……これ、何なの？」遅かったよドチクショウ！！」

なっぺ「はっはっはっ。まさにカオス！」

吼太「黙れ諸悪の根源！」

なっぺ「何のことやら。ではではこの辺で！」

はやて「次回も楽しみにしといてやー！」

## 第六十話　せーんーそっ！（前書き）

……何故だ！

何故話が進まない！？

あと、総合評価ポイントが７００行きました。ありがとうございます。

# 第六十話　せーんーそっ！

Ｓｉｄｅ　吼太

「フェイトちゃん、アリシアちゃん。初めての学校はどう？」

すずかがフェイトとアリシアに聞く。

「えと、同じ歳の子がたくさんいて、なんかもうぐるぐるで……」

「でも、やっぱりいろんな人がいると楽しいよ♪」

「にゃはははは」

「きっと、すぐに慣れるわよ♪」

アリサがフェイトを励ます。

「うん…！」

「さて、今日も屋上か？」

オレが言うと、みんなが同意を示した、

昼メシをどこで食べるか、移動しながら考えていたのだが、結局いつもどうりになりそうだ。

ちなみにオレは最初「一人で食べる！」と逃げ出したのだけど、フェイトとアリシアの二人に見事に捕まり、こうして連行されている。

……あぁ、（男子からの）視線が痛い…

Ｓｉｄｅ　はやて

今、私は病院にいる。

生まれたころはなんともなかったけど、今では殆ど動かなくなった私の足。

それの治療をしてる。

まぁ、残念ながらあんましええ結果は出て無いんやけどね。

それで、石田先生がシグナムと話があるからって、今は一人で待っとる。

「うえーん！うえーん！」

ん？何やろ？

「ぼく、どうしたん？」

「ぇ？……お姉ちゃん誰？」

「私は八神はやてや。ぼくは？」

私が来たら男の子は少しだけ泣き止んで、私の顔を見ながら自分の名前を言ってくれた。

「……ワタル」

「ワタル君かー…で、なんで泣いとったんや？」

「……お母さんが……いないの……」

つーことは迷子かな？

「それじゃ、私と一緒に捜そうか？」

「……いいの？」

「ええよー。お姉ちゃんに任しとき！」

「……うん」

そしてあっちこっちを捜したけど、ワタル君のお母さんは中々見つからなかった。

「えぇ……お母さぁん……」

「もしかしたらワタル君のお母さんもワタル君のことを捜してんの

かもなぁ……じゃあ、とりあえずこっちに来てや」

ワタル君を呼ぶ。

来たのは病院の中庭。

そこのベンチにワタル君を座らせる。

「ワタル君、ゲームをしよか」

「……ゲーム？」

「そや。それじゃあ、ルールを説明するな？」

Ｓｉｄｅ　シグナム

「……主はやては一体どこへ？」

石田先生から話を聞いた後に、主はやてと帰ろうとしたら、主はやてがいなくなっていた。

「……レヴァンティン」

『Ｊａ！』

レヴァンティンに主はやてを捜させる。

「……見つかったか」

病院の中庭。

そこで主はやては……

「「せーんーそっ！せーんーそっ！せーんーそっ！」」

……見知らぬ少年と手をたたき合っていた。

……あれは……なんだ？

「……やるなぁ、ワタル君！」

「お姉ちゃんこそ……」

「……あの、主はやて…「「うるさいっ！」」……す、すいません……」

……私は一体どうすればよいのか……

そして一時間ほど経ち……

「あー、楽しかったー♪」

「ふふっ、楽しんでくれてよかったわー」

「あの……主はやて？よろしいでしょうか？」

「ん？あぁ、シグナムか。どないした？」

「いえ、もう家に帰るお時間かと…」

「へ？……うわっ！もうこないな時間やったんかぁ～。つい夢中になってもうたなぁ…」

「ワタル！ワタルー！？」

「あ、お母さん！」

少年が少年の母親に抱き着いた。

……どうやら少年は迷子だったようだな。

それで、主はやてが一緒に捜してあげていた、といったところか。

……やはり、優しい。

主はやては、暖かいのだな……

「ほなな～、ワタル君！」
「お姉ちゃんまたね～！」

Ｓｉｄｅ　吼太

今、オレとフェイトはなのはの家にいる。
そこでこれからのことを話すことにしたのだ。
「ねぇ……なのはとコータはあの人達のこと、どう思う？」
「あの人達って……闇の書の？」
なのはの問いに、フェイトが頷いて肯定する。
「うん。闇の書の、守護騎士達のこと」
「えっと、私はいきなり襲い掛かられて、すぐに倒されちゃったから、よくわからなかったんだけど……コータ君はあの人達と何か話してたよね？」

「まぁな。……オレの個人的な感想なんだけど、アイツ等には悪意っつーか、そういったもんが無かった。…なにか、事情があるんだろうな」

まぁ、オレは知ってるんだけどさ。

「そっか……闇の書の完成を目指してる理由とか、教えてもらえたらいいんだけど……話が出来そうな雰囲気じゃなかったもんね」

あれからいろいろなことが明らかになっていて、あの四人……闇の書の守護騎士達はなんらかの理由で闇の書の完成を目指していること、闇の書は魔導師のリンカーコアを喰って、その資質や術式をコピーすることがわかっていた。

「なにか、切羽詰まるような事態が向こうで起こってるんじゃないか？例えば……は…じゃなかった…。夜天……でもなかった。…闇の書の主に何か危ないことが迫っていて、それをなんとかするには蒐集をしなければならないとかさ」

少しだけヒントを出しておく。

少しずつ、少しずつ軌道を修正していかないと、世界の修正力が働いちまうからな。

……フェイトとアルフの時みたいに。

「……でも、やっぱり私は……お話をして、あの人達自身から聞きたい。なんでこんなことするのかって……」

「……そのために、私達は強くなりたい」

「……二人とも。今は、我慢だ。二人ともリンカーコアがまだ完全じゃない。今は治療に専念するんだ。いいな？」

二人が頷く。

「二人とも回復して、レイジングハートとバルディッシュが戻ってきたら、そしたら……」

そこで一拍置き、高らかに宣言する。

「オレが、強くしてやる！誰にも負けないぐらい、自分の信念を貫き通せるぐらいにな！！」

「「うん！」」

復活の時は、近い……！

## 第六十話　せーんーそっ！（後書き）

なっぺ「後書きぃ…座談会ぃ…ファイヤー！！！」

吼太「何の掛け声だよ」

なっぺ「何回書いても何回書いても進ま～ない～よ～…」

吼太「倍書け」

なっぺ「死ぬっつうの！はやてはあれだな。崩壊させやすい」

吼太「崩壊させんな！」

なっぺ「いや、でもねぇ……あと、原作と全く変わらない部分は省いていくことにしました。なんで、原作を全く見てない人には少々分かりづらいシーンが多々あるかと思いますが、ご了承ください。つきましては、【魔法少女リリカルなのはA's】をご覧になりますと、この小説をよりいっそう楽しめるかと思います。これを機に、ぜひお買い求めください」

吼太「宣伝乙」

なっぺ「そして２０１１年7月よりアナログ放送は終了し「もういいよ」……それじゃ、感想感謝コーナー」

吼太「緋水さん、バルディッシュさん、月光閃火さん、雨季さん、まーたさん、ライさん、天照大神さん、香崎　真琴さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「バルディッシュさんからは清麿の制服を、香崎　真琴さんからは某薔薇乙女の第1ドールから第7ドールのコスを頂きました！ありがとうございます！ほら、これ全部お前にだってよ」

吼太「制服はともかく、薔薇乙女の服は嬉しくねぇ！」

なっぺ「吉谷家の衣装部屋に保管だな。燈が喜ぶだろ」

吼太「嫌だぁぁぁぁぁ！！！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十一話　光、再び（前書き）

さて、ようやくA's での第四話が終わるぞー。

先はまだまだ長いぞー。

# 第六十一話　光、再び

Ｓｉｄｅ　なのは

「「ありがとうございました」」

今、私とフェイトちゃんは管理局に検診をしにきていたの。

それがちょうど今終わったとこ。

「なのはー！フェイトー！」

ユーノ君が大きな声で私たちを呼ぶ。

コータ君にリームさん、アリシアちゃんにアルフさんも一緒だ。

「どうだった？」

アリシアちゃんが聞いてきた。

答えは……

「無事、完治！」

「みんな、心配かけてごめんね」

フェイトちゃんが謝る。それは私もだけどね。

「こっちも無事、完治ー！」

そうリームさんが言って、リームさんとアリシアちゃんが二つの宝石を取り出す。

それは、私たちの相棒。

【魔導師の杖】レイジングハートと、【閃光の戦斧】バルディッシュ。

「よかった～」

「お帰りなさい、バルディッシュ」

私たちの声に反応する二機。

「それじゃ、帰るか」

「じゃあ僕、エイミィさんに連絡入れてくるね」

そう言って、ユーノ君は念話を始める。

「さて、帰ったらビシバシしごいてやるからな」

「にゃはは……お手柔らかに…」

コータ君の言ったことに、思わず苦笑いになってしまう私。

「そういえばコータは前にもなのはとユーノの特訓をやってたんだよね？何をやってたの？」

アリシアちゃんが疑問を口にする。

その瞬間、私の脳裏に浮かび上がる幾多の地獄……

「うわぁぁぁぁ！！……ハッ！す、すいません。昔のトラウマが……」

ユーノ君もそうだよね…

あれはトラウマになるよね……

「……え？そんなになのかい？」

アルフさんが信じられないみたいな物言いをする。

残念ながら事実なの……

私達はその後、他愛もない話をしてたんだけど、突然ユーノ君の様子が変わった。

「はい……えっ！？それは本当ですか！？」

「……何かあったみてぇだな」

コータ君が言う。確かにユーノ君のあの言い方は尋常じゃないの。

「はい……はい……では、いますぐに」

「ユーノ君、何があったの！？」

私が聞くと、ユーノ君は真剣な顔になって、状況を教えてくれた。

「闇の書の守護騎士達を、捕捉したって！それでみんなは緊急出動。なのはとフェイトはぶっつけ本番になっちゃうけど……お願い！」

Ｓｉｄｅ　まっくろくろすけ

僕はまっくろくろすけじゃない！クロノだ！

……って僕は何にツッコんだんだ？

とにかく、今は目の前のことに集中しないと…！

魔力を練って、周りにいくつもの剣型魔力弾を精製する。

幸い、今はまだ標的には気づかれていないみたいだ。

……守護騎士達を囲んでいた管理局魔導師達が離れる。

狙うのは、今だ！

「上だ！」

大きな男の使い魔が気づいたみたいだがもう遅い！

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

剣型魔力弾が一回転して、単なる魔力の塊から、環状魔法陣から発射される弾丸になる。

「ってぇっ！！！！」

一斉発射！！

直前で、先に気づいていた使い魔が防御に入って、魔力弾はその殆どがバリアに弾かれる。

でも……

「少しは……通った……！」

僕の予感通り、数本のスティンガーブレイドがバリアを抜けて、使い魔の腕に刺さっていた。

非殺傷設定だから血は出ないけど、ダメージはあったはずだ。

しかし、使い魔はあろうことか、僕のスティンガーブレイドを筋肉に力を入れるだけで破壊してしまった。

……うほっ

いやいゃあやいゆあやＪ@ＭＧＭＭ@Ｍ@Ｍ@Ｇｍｈｍｈｐｍｐｍｐｂｔｊｗｉ@ｐｗｇｒ

ふぅ……僕としたことが動揺してしまったようだ。

エイミィに見せられた本を見てからというもの、たまにあんな思考が頭を過ぎるから困るな。

『……クロノ君、今なにか私のこと考えてたでしょ？』

「エエエイミィ！？」

『やっらしー♪』

「ち、違うんだ！これは不可抗力で…」

『まぁ、その件はあとでゆっくり話すとして……』

「頼む！信じてくれ！」

『武装局員、配置完了！それと、今そっちに助っ人を転送したよ！』

「僕は無罪……え？」

Ｓｉｄｅ　吼太

……

まっくろくろすけ……お前にそんな趣味があったのか……

状況が分からなかったから、精神感応能力（テレパス）でまっくろくろすけの頭ン中覗いたんだけど……

うん、戦いに戻ろう。

「断鎖術式、一号ティマイオス！二号クリティアス！解放！！」

両脚に魔力を篭める。

その瞬間から、脚付近の空間で時間の巡行と逆行が繰り返されはじめる。

二つの相反する時間のベクトルは互いにぶつかり合い、強力なエネルギーを発生させた。

そして、そのエネルギーを脚に纏ったまま、回し蹴りをぶちかます。

その名も…

「アトランティス・ストライク！」

「なっ！？ア、アイゼン！」

『パンツァーヒンダネス！！』

ヴィータが防御するが、そのシールドを砕き、ヴィータを吹っ飛ばす。

「さて……お膳立ては出来たぜ！なのは！フェイト！」

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

レイジングハートとバルディッシュが反応する。

「「セェーット…アーップ！！！」」

その瞬間、二人は光に包まれた。

Ｓｉｄｅ　なのは

レイジングハートとバルディッシュは光り輝き、私たちはバリアジャケットに包まれる。

……そのはずだったんだけど。

『設定を認証しました』

『新規システムのチェックを開始』

私たちの身体を、魔法陣が包む。

「えっ…？これって……」

「今までと……違う…？」

『二人とも、落ち着いて聞いてね？』

私たちが戸惑っていると、エイミィさんから通信が入ってきた。

『レイジングハートとバルディッシュは新しいシステムを積んでるの』

「新しい…システム…？」

『その子達が望んだの。自分の意志で…自分の思いで！』

レイジングハートとバルディッシュは、絶えず新たなシステムを起動している。

……私たちのために……

『呼んであげて……その子達の、新しい名前を！』

『状態、問題無し。Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』

情報が頭に流れ込んでくる……

レイジングハートの……新しい名前が！

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

『『ドライヴ　イグニション』』

私たちを包む光が、さらに強くなった。

Ｓｉｄｅ　三人称

光が中から散り、辺りを桜吹雪のように舞う。

それは、二人の魔導師の復活を華々しく飾っていた。

「アイツらのデバイス……まさか！？」

ヴィータが驚いたように言う。

それは、彼女にとっては慣れ親しんだもの。

カートリッジシステム。

それが、二機のデバイスに組み込まれていた。

『アサルトフォーム、カートリッジセット』

『アクセルモード、Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ！』

レイジングハート・エクセリオンと高町なのは。

バルディッシュ・アサルトとフェイト・テスタロッサ。

星光と雷光は、今ここに蘇った。

## 第六十一話　光、再び（後書き）

なっぺ「後書き座談会じゃけぇのぉ」

吼太「……どっかの方言だっけ？」

なっぺ「確かね。今回は天照大神さんの小説、【魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～】より、主人公の津川優星君に来てもらっています！」

優星「どうも。作者に命令されてきました。僕について詳しく知りたい人は、是非【魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～】を見てください」

なっぺ「さて、と。宣伝も終わったとこで、何か言いたいことは？」

吼＆優「「なんで（オレ）（僕）達は女難に逢う（んだよ）（の）！？」」

なっぺ「んなもん決まってんだろ」

吼＆優「「？」」

なっぺ「おもしろいからｗｗｗ」

吼太「よし、死ね」

優星「別にあの世でも小説は書けますよね？」

なっぺ「……あれ？いつの間にか死亡フラ」

グシャ

吼太「にしてもあれだな。優星。お前はよくやってるよ」

優星「吼太君こそ。毎日毎日お疲れ様」

吼太「……なんでだろ。こういうので初めて仲間が出来た気がする……」

優星「結構他の人とも会ってるのに？」

吼太「要はリア充一直線だし、一真は……何か、同情したりする暇が無い。輝刃は普通だし、貴哉は鈍感だし……」

優星「（吼太も人のことは言えないと思うけどなぁ…）」

吼太「優星、強く生きろよ。細かい差異はあるけどさ、仲良くやっていこうぜ！」

優星「そうだね」

なっぺ「さて、一区切りついたとこで感想感謝コーナー行こうか」

吼太「まだ生きてやがったか！」

なっぺ「甘いな！私は死なんよ！とりあえず優星、ヨロ」

優星「えっ？僕？えーっと…まーたさん、香崎　真琴さん、緋水

さん、バルディッシュさん、ライさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、天照大神、雨季さん。感想ありがとうございました！」

吼太「自分の作者は呼び捨てなんだな」

優星「作者を敬称で呼べる？」

吼太「……無理だな」

なっぺ「ひでぇ。香崎　真琴さんからはなのはとフェイトのＢＪ（無印ｖｅｒ．）とストレージ型のレイジングハートとバルディッシュを、緋水さんからは性転換薬を、バルディッシュさんからはターンＸ、ターンＡガンダムを、ライさんからはＴＯＤ２のリアラの服を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは胃薬（性転換薬付き）を、遥からはハリー〇ッターの制服を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「なんでコスプレ衣装ばっかり贈られて来るんだ……？」

優星「吼太……ドンマイ……」

なっぺ「今度今まで与えられた称号とかまとめてみようかな……」

吼太「とりあえず……ターンシリーズはアマテラスに、薬はジッパーに、服は衣装部屋に保管だな」

なっぺ「あ、ちなみに今のヴォルケンリッターとの戦い終わったら番外編入れるから。内容は吼太のコスプレの話」

吼太「なっ！？」

優星「じゃあ僕はこれで」

吼太「行かないでくれ優星！オレを見捨てないでくれ！」

優星「うん。それ無理。もう時間だし。じゃあね～」

シュイン

吼太「……」

なっぺ「もはやお前に逃げ道は無い。コスプレかコスプレか、好きな方を選べ！」

吼太「逃げ道無ぇ！？」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十二話　スーパーお子ちゃま大戦！（前書き）

お子ちゃまは二人です。

あと、私の小説でだいたい一話に一つ以上ネタが入るのは、某リリカルなのは四コマギャグ漫画サイトの影響です。

# 第六十二話　スーパーお子ちゃま大戦！

Ｓｉｄｅ　吼太

「私達は貴方達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指している理由を！」

フェイトとなのはがヴィータとザフィーラに問い掛ける。

「あのさぁ…ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

「なんだ？」

一応、ヴィータに言うように促しておく。

「和平の使者なら槍は持たない」

なのはとフェイトは意味がわからないらしく、首を傾げている。

「話し合いをしようってのに武器を持ってくるやつがいるかバカって意味だよ！バーカ！！！」

「なぁっ！？バ、バカって人に言っちゃダメだよ！それに、バカって言ったほうがバカなんだよ！？」

「うっさい！バーカ！バーカ！バーカ！！」

「今度は三連発！？」

……何さこのお子ちゃまの喧嘩は…

「あの……なのは？」

フェイトはやっぱりオロオロしてる。

「……そこの黒衣の二人」

ザフィーラが不意にオレ達に話し掛けてきた。

「あれは小咄のオチだ。気にしないでくれ」

「……いや、なんで当の本人達に言わねぇんだよ？」

「……」

まぁ……聞きそうにないけどさ。

その時、轟音と共に一つの閃光が落ちてきた。

「貴女は……？」

ん？フェイトは知らなかったのか？

「私は……烈火の将、シグナム」

「シグナム……いつかの再戦をお願いします」

フェイトがバルディッシュを構える。

これでシグナムの相手はフェイトに決定だな。

「コータ君ユーノ君クロノ君！手、出さないでね！私、あの子と一対一だから！！」

「上等だ！グラーフアイゼンの頑固なシミにしてやる！！」

……向こうのお子ちゃま二人はもう放っておこう。

「アタシは野郎にチョイと話があるんでね……やらせてもらうよ？」

アルフがオレに聞いてくる。

んじゃ、オレは今回出番無しか？

『バカコータ。サボっているぐらいなら闇の書の主を捜すの手伝え』

『わぁーったよ！まっくろくろすけ！！』

ま、居場所はわかってんだけどな。

「見つけたぜ」

オレが見つけたのは緑色の騎士甲冑を纏った騎士、シャマルだ。

「くっ……あ、あなたは…！」

ん、覚えられてたのか？

「あの時のイタい子！」

……

「ハイパーボリアァ…」

「コータ！？それ危ないって！」

ついて来たリームがオレに抱き着いて止める。

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

「えーっと……」

その時、シャマルの動きが不意に止まり、その表情が歪んだ。

「捜索指定ロストロギアの所持、及び使用の疑いで、あなたを逮捕」

「テァァァァァァァッッッッ！！！」しまぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

「まっくろくろすけ！？」

シャマルの後ろからデバイスを突き付けて、投降を呼び掛けていたまっくろくろすけが、突然吹っ飛んだ。

見れば、そこには蹴り飛ばしたであろう誰かが立っていた。

そう、一度煮え湯を飲まされた、仮面の男である。

「貴方は…？」

「使え」

シャマルの問い掛けには答えずに、仮面の男が命令する。

「闇の書の力を使って結界を破壊し、仲間を救い出せ」

「させると思ってんのか！？ガードスキル・ディレイ！オーバードライブ！！」

肉体強化のガードスキルを掛けて、仮面の男を殴り飛ばす。

「グウッ！？」

不意を突かれ、吹っ飛ばされる仮面の男。

さらにオレはカードをディケイドライバーに装填し、変身しないまま効果を発動する。

これが、オレのディケイドライバーが普通では無い由縁。

ディケイドライバーは本来、ディケイドに変身しないといかなる効

果だろうと発揮出来ないが、この赤いディケイドライバーはベルトを巻いていれば全てのカードを使用可能になるのだ。

そして、今回使用したのは……

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＣＯＮＦＩＮＥＢＥＮＴ】！』

枚数制限はあるが、カードであればいかなるカードであろうと無効化するカード。【コンファインベント】のカード。

そして、カードの効力によりオレの周りから迫り来ていた光の輪が消え去った。

「何！？」

遠くから声が僅かに聞こえた。このバインドでオレを拘束しようとしてたみたいだけど、それぐらい簡単に読めるんだよ！

「そこっ！！凍てつきの弾丸よ！彼の者に氷の呪縛を！！」

リームが氷の弾丸を作り出し、もう一人の仮面の男を撃ち抜く。

「ぐぁぁぁ！？」

仮面の男に当たった弾丸はその効果を遺憾無く発揮し、仮面の男を凍り付かせることで拘束した。

「リーム、ナイスアシスト！」

「ありがとコータ♪」

『みんな、結界破壊の砲撃を撃つ！うまく避わして、撤退を！』

その時、シャマルから指定念話が発せられた。それを精神感応能力で読み取る。

「闇の書よ…守護者シャマルが命じます。眼下の敵を打ち砕く力を…今ここに」

上空に暗雲が集まりだし、雷が響き渡る。

ここから導き出される答えは、一つだ。

「ヤバッ！？」

この攻撃は……ヤバイ！

ミリアラル・ポルクじゃ消せねぇし、アム・ドゥ・スプリフォじゃ範囲が足りねぇ！

だったら…

「ギガドリルッ！！」

着弾地点に行き、ギガドリルを傘のように拡げる。

「撃って！破壊の雷！！！」

『ゲシュリーベン』

黒雲から轟音と共に紫色の雷が落ちてきた。

それをギガドリルで防ぐ。

ギガドリルはエネルギーを吸収する力がある。それを利用すれば…いける！

「っだぁぁぁぁぁーーーーーッッッ！！！」

ギガドリルに吸収されたエネルギーを球体状にして上空に投げ返す。

投げ飛ばされたエネルギーは上空にあった魔力スフィアとぶつかり合い、大爆発を起こして、爆音と共に消え去った。

「そんなっ！？」

シャマルがその光景を見て、思わずと言った感じで口走る。

しかし、雷から守られたはずの結界が突然破られた。

……桜色の砲撃と共に。

「……オイオイ」

『あっ！ゴメンねコータ君！アクセルシューターを使ったら突然アクセルシューターが合体して砲撃になってそれで…』

「あー、とりあえず後でいい。それで、アイツらは？」

『ふぇ？……あーっ！そうだお名前教えてー！！』

どうやら、なのはの新しい魔法が予想外の働きをしたのと、原作より遥かに強くなっていたのが重なって、制御を離れたアクセルシューターの複合体が結界を破壊したらしい。

……威力高くなりすぎだろ。

見れば、既にシャマルも逃げ出した後だった。

仮面の男達も既にいない。

「また、逃げられたか」

ま、それなりに成果はあったから。よしとするか。

こうして、今日の戦いは終わった。

# 第六十二話　スーパーお子ちゃま大戦！（後書き）

なっぺ「後書き座談会！だぜ！」

吼太「なんか今回はあっさり決着ついたな」

なっぺ「うっかりが無けりゃ吼太は強いからな。さて、新しい称号をバルディッシュさんから頂いたぞ」

【コスプレイヤー】

嫌よ嫌よも好きのうち。本当はコスプレ好きでしょ？

吼太「好きじゃねーよ！！」

なっぺ「感想感謝コーナー、いきまーす！せっかくだから久々にリームに頼むぜ！」

リーム「はいよー♪ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、緋水さん、天照大神さん、ライさん、まーたさん、香崎　真琴さん、雨季さん。感想ありがとうございましたー♪」

なっぺ「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは遥の女装&女体化写真集を、バルディッシュさんからは旋風寺舞人の衣装、特車二課の女性用制服、ザフトの赤服（ルナマリアタイプ）を、香崎　真琴さんからはヴォルケンリッターのＢＪ衣装を、雨季さんからは召喚獣【阿〇さん】を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「ライさんのとこからきた攻撃はミミルオ・ミファノンで捩曲

げさせてもらったんであしからず。つーかなんでコスプレ衣装がこんなに届くんだよ！？」

なっぺ「上、上」

吼太「……とりあえず衣装は衣装部屋に、写真集もそこ。阿〇さんは……ヴィネコンの中に入れとこう。ユートピアに置いとくのは危険だ」

なっぺ「次回は……待ちに待ったあの企画！」

吼太「……ま、まさか…」

なっぺ「番外編、コスプレ祭さ！」

吼太「よし、逃げ「逃がさないよ？」は、離せリーム！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　コスチュームプレイヤー吼太（前書き）

ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんごめんなさい。今回扱いがかなり酷いです。

月光閃火さんごめんなさい。出すには出しましたが、ほとんど出せてません。

皆さんごめんなさい。こんなものしか出来ませんでした。

……自分にもっと文才があれば…！

# 番外編　コスチュームプレイヤー吼太

Ｓｉｄｅ　吼太

オレは昨日の戦いを自分なりに評価ながら、なのは達の訓練メニューを考えていた。

やっぱなのはは莫大に高まった魔力の制御かな？

フェイトはどうしようか……近接をやるのは当然として、それだけじゃ足りない気もするんだよなぁ……

「……だぁぁぁーもう！考えが纏まらねぇ！」

「そういうときはシャワーを浴びてきたら？」

不意に後ろから声がする。

この声は……リームか。

「どうしたリーム？突然そんなこと言い出して」

「気にしない気にしない♪さ、早く入って入ってて♪」

「お、おう……」

なんなんだ？

「……計画通り」

Ｓｉｄｅ　三人称

とりあえず、シャワーを浴びるために脱衣所へと入り、服を脱ぐ。

その身体は少年らしくみずみずしさを放ち…「男の裸の実況して楽しいか？」……ですよねー。

何はともあれ、浴室へと入ってた吼太。

そして、誰もいなくなったはずの浴室に何かの影が飛び回る。

――ヒュイン、クルルルルル♪

エクストリームメモリだ。

よく見れば、ファングメモリに、スタッグフォンにビートルフォン、バッドショット、スパイダーショック、フロッグポッド、デンデンセンサーまでいる。

ちなみに、全機に【コスプレ工作部隊】などという鉢巻きが巻いてあったりする。

バッドショットとデンデンセンサー、フロッグポッドは風呂の中にいる吼太を監視する役割で、エクストリームメモリ、ファングメモリ、スパイダーショック、スタッグフォン、ビートルフォンが実働部隊のようだ。

まず、ファングメモリが吼太の服を一カ所に集め、スパイダーショックが服を紐で縛り上げる。それをスタッグフォンとビートルフォンが持ち上げて、スパイダーショックごと窓から出ていく。

そして、エクストリームメモリがその格納領域の中に仕舞っていた服を代わりに出した。

これで作戦は終了。結果は大成功で、今この場にいるガジェット達は皆それぞれの形で喜びを表す。

そしてガジェット達はエクストリームメモリに収納され、すぐさま逃げ去った。

数十分後……

「ふぃー……いいお湯だった」

吼太が浴室から出てくる。そして、おもむろに着替えを取り、着替える。

下着を履き、上を着て、下を着る。

そして完全に着替え終わった後で、全力を篭めて叫んだ。

「なんっっっじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

なっぺ「さぁ！始まりました【吉谷吼太コスプレ祭】！司会は私、なっぺが勤めさせていただきます！」

ちなみに観客は某よく量の引き合いに出されるドームが一杯になるぐらいいたりする。

なっぺ「まずは審査員の紹介といきましょう！まず、月光閃火さん！」

月光「うにっす～♪」

なっぺ「次に、月臣輝刃さん！」

輝刃「よろしく頼む」

なっぺ「そして、ロリコンのｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん！」

Ｋｅｉ「え？なんで俺だけロリコンって付いてるの？」

なっぺ「気にしないで下さい。そして今回、衣装の用意に多大な協力を頂いたお二方、高町桃子さんと吉谷燈さんもお呼びしています

！」

桃&燈「「どうも～♪」」

ダダダダダダダ…

なっぺ「おおっ～とここで祭の主役が登場だぁー！」

そして、扉が勢いよく開かれる。

吼太「母さん！オレの服どこ……ってなんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？」

なっぺ「最初はＴＯＤ２のリアラの服だぁーっ！ヒラヒラが幼さと可愛らしさを演出しているーっ！！」

吼太「みっ、見るな！／／／／／／」

なっぺ「ここで涙目と顔赤らめを入れてきた！これを無意識にやっているところを見るあたり、まさに逸材と言えるでしょう！解説のクロノさん、どう思いますか？」

クロノ「まさかあの吼太がここまで変わるとはな（笑）服によって見た目の性別が変わって見えるな（笑）可愛いぞ吼太ちゃん（笑）」

吼太「（笑）（笑）うぜぇ！」

なっぺ「ちなみにこの服を贈ってきた人いわく、『まだマシなほうだろ』とのこと！」

吼太「どのあたりがマシなんだよドチクショウ！」

なっぺ「さて、審査員の評価に参りましょう！評価は一人あたり１０点で評価して頂きます！では、今の衣装の評価は……」

月光：８点

輝刃：７点

Ｋｅｉ：１０点

なっぺ「おおっとここでロリコンのＫｅｉさんからいきなり最高評価だーっ！」

Ｋｅｉ「ショタに目覚めそう…いや、見た目は完全にロリだから大丈夫？それともやっぱショタ……」

なっぺ「いっそショタにも目覚めましょう！さて、まだまだ服はたくさんあります！全て着ないとこの祭は終わりません！吼太には諦めてもらいましょう！」

吼太「ぅっ……わ、わかったよ……やればいいんだろ……？／／／／」

なっぺ「では、あちらに着替えのためのボックスを用意致しましたので、そちらにて次の衣装に着替えて頂きます！」

――着替え中（某チート夫婦のせいで盗撮されまくってるのは気に

しない）――

吼太「ったく……なんでオレがこんな…ん？これが次の衣装か……？」

――着替え終了――

なっぺ「さて次に登場するのは、型月ファンなら有名か！？私は全くわかりません！あかいあくまこと遠坂凛のコスプレだぁーっ！」

吼太「スカートじゃなけりゃまだマシなのに……／／／／」

なっぺ「ちなみに下着は「言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」な状況です！！！つまりは言いたくないようなものを履いているということです！要するに、お察しください。ということです！さぁ、解説のクロノさん、どう見ますか？」

クロノ「真っ赤な髪と色が重なってしまっているな。これは減点せざるを得ないだろう」

吼太「お前はなんで解説なんてやってんだまっくろくろすけぇ！」

クロノ「面白そうだからだ（笑）」

吼太「喰らえや！ジョーカービックスリッパー！」

クロノ「きょ、巨大なスリッパがこっちに！？……ん？あれはなんだー？」

吼太「え？あれって？……うぐぁぁぁぁ！！？」

なっぺ「……えー、先程の状況をわかりやすく伝えると…」

吼太がジョーカービックスリッパーを発動
←
クロノが吼太の気を逸らす
←
吼太がよそを向いたことにより、ビックスリッパの制御が不安定に
←
ビックスリッパがひっくり返り、吼太に激突

なっぺ「……といった具合です」

全員「「「まぁ、吼太だから仕方ない」」」

吼太「うぁぁ～……」

なっぺ「それでは、点数をお願い致します！」

月光：７点

輝刃：７点

Ｋｅｉ：６点

なっぺ「やはり、若干辛口となってしまいました！これは残念！」

クロノ「次に期待したいな」

なっぺ「それでは次に行きましょう！」

――着替え中（某チート夫婦が（ｒｙ――

吼太「次は……え？二着！？……ハーモニクス使えってか…？つーかこの服って…」

――着替え終了――

なっぺ「さて、次は二つ同時にイきます！この作品ではお馴染み、なのはとフェイトのＢＪ（無印ｖｅｒ）です！」

吼太（なのは服版。以下な）「……やっぱこれ聖小の制服に似てるな」

なのは「にゃはは、そうかな？」

吼太（フェイト服版。以下フェ）「……スカートが短いし……なんかあちこちスースーする……／／／／／」

フェイト「あの、その……ゴメンね？」

吼太「「つーかお前らいたのかよ！？」」

なっぺ「当然いました！それと、ストレージタイプのレイジングハートとバルディッシュがオプションでついていますね！」

クロノ「再現率の高さはそのまま得点に繋がるな」

なっぺ「では、評価をお願いします！」

月光：９点

輝刃：８点

Ｋｅｉ：

なっぺ「……おや？」

Ｋｅｉ「もう我慢できない！幼女ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

吼太「「オレは男だぁぁぁぁ！！？」」

――少々お待ちください――

なっぺ「……えー、管理局に通報され、逃走を始めたＫｅｉさんの代わりに、クロノさんに得点をつけていただきます。それでは、改めて評価をお願い致します！」

月光：９点

輝刃：８点

クロノ：８点

なっぺ「やはり高評価だぁーっ！この評価になった理由はなんでしょうか？解説のクロノさん。お願いします」

クロノ「肌があまり見えないいつもはかろうじて保っている男らしさが、可憐なスカートや露出の多い格好に変わることで、女らしさに変換された、といったところだろうか？まぁ、かみ砕いて言うならば【女の服を着たら女らしさが、男の服を着たら僅かに男らしさが出てくるのが吼太】といったところか」

吼太（な）「……クロノ、変態っぽいぞ？」

吼太（フェ）「あういうのに近寄りたくはねぇなぁ」

クロノ「うるさい！」

なっぺ「それでは次に行きましょう！」

――着替え中（某（ｒｙ――

吼太「やれやれ……いつまで続くんだよこれ……ん？今度のは同時七着か？」

いそいそ

吼太「……髪の長さが足らない…まぁいいか……」

――着替え終了――

なっぺ「さぁ！次に出てくるのは、作者の友達がマジでハマっていた作品、某薔薇乙女の第一～第七ドールまでの衣装だぁぁぁーっ！これはかわいらしさを多分に表しているーっ！！！」

吼太（５）「かわいらしくなくていい！！！」

吼太（７）「つーかなんでフリフリ系ばっかり来るんだよ！？」

なっぺ「んー……おもしろいから？」

吼太（２）「沈めたい！お前を今すぐ東京湾に沈めたいぃぃぃ！！」

Ｋｅｉ「幼女ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

吼太（４）「Ｋｅｉさん戻ってきた！？」

管理局員「待てぇぇぇぇ！」

Ｋｅｉ「幼女を前にして待つなど愚の骨頂！据え膳食わぬはなんとやら！」

吼太（３）「喰うなぁぁぁ！」

Ｋｅｉ「いただきまぁーす！！！」

なっぺ「ここでＫｅｉさんがお決まりのルパンダイブを繰り出してきたぁーっ！」

吼太（６）「うわぁぁぁぁ！！？」

吼太（１）「止めろぉぉぉぉ！！！」

なっぺ「それを水銀〇衣装の吼太が回し蹴りで迎え撃ったぁぁぁーっ！」

Ｋｅｉ「ぎゃふっ！？」

管理局員「捕まえたぞ！さぁ来い！」

Ｋｅｉ「ぐっ……また来るぞ！」

吼太（全）「「「二度と来るなっっっ！！！」」」

なっぺ「評価のほうを見ていきましょう！」

月光：８点

輝刃：９点

クロノ：７点

クロノ「やはり髪の色に差が欲しかったな」

吼太（全）「「「知るかんなこと！！！」」」

なっぺ「さぁ次に参りましょう！！」

……

Ｓｉｄｅ　吼太

……

「ん……はっ！？」

気がつくとオレは部屋で寝ていた。どうやら、知らぬ間にベッドに入っていたらしい。

「んー……なんかとんでもないような夢を見たような……」

まぁ、いいか。夢なんだし。

さて、今日も一日、頑張っていくか！

「……撮れた？」

「バッチリですわ。さすがはバッドショットですわね。お父様のあんなところからこんなところまでしっかり撮れていますわ」

「お父さんが少し可哀相な気もするけどね」

「ダーリンならわかってくれるよ♪」

「じゃあ、写真集の完成っと。コータのあんなのからこんなの、ましてやそんなとこまで完全網羅！まさに男の娘だよねこれ」

「「「「言えて（る）（ますわね）」」」」

「っていうか、スクール水着を男の子が違和感全く無しに着れるのがおかしいの」

「……あとで私にも頂戴？」

「わかってるよフェ……じゃなかった、Ｆ・Ｔちゃん」

Ｎ・Ｔさん、Ｆ・Ｔさんを始めとする少女達の中で、この写真集は高値で売買されたとかなんとか。

## 番外編　コスチュームプレイヤー吼太（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

桃子「可愛かったわね～、吼太君♪」

プレシア「本当ね。もう完全に女の子」

燈「私としても鼻が高いわね～」

なっぺ「なお、吼太の女装した姿は【すれ違った人の中で１０人中、５人は振り返り、４人は惚れて、１人が襲い掛かる】といったぐらいに凶悪です（笑）いつもは男っぽい服装でなんとか隠してる状態です」

プレシア「隠さなくてもいいのに～」

なっぺ「おそらくここまで（コスプレしろ的な意味で）愛されたキャラもそうそういないでしょうね（笑）」

桃子「あの子、家で働いてくれないかしら？まだまだ着せたい服あるのに…」

燈「一応、それとなく誘導はしとくわね」

なっぺ「ちなみに、描写はしていませんが、皆さんから頂いた服は一通り着ています！長くなってしまうので割愛させてもらいましたが。それでは感想感謝コーナーいきましょう！詩音、カムヒアッ！」

詩音「ひぇ？」

なっぺ「感想感謝コーナー頼むよ」

詩音「あ、うん。わかった。えーっと、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、緋水さん、天照大神さん、まーたさん、ライさん、月光閃火さん。感想ありがとうございます♪」

なっぺ「香崎　真琴さんからは某腋巫女の改造巫女服と狐耳、狐尻尾を、緋水さんからは猫耳、猫尻尾にセーラー服にスクール水着を、バルディッシュさんからは犬夜叉の服を頂きました。ありがとうございます！」

桃子「次回はどうなるのかしら？」

詩音「えっと……多分特訓になるって！」

プレシア「フェイトにも頑張ってもらわないとね」

燈「吼太もしっかりやらないと、またコスプレさせちゃうぞ♪」

――やめてくれ！――

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十三話　再び始まる地獄の特訓？（前書き）

最近スランプ気味です……

ひょっとしたら、毎日更新が途切れてしまう可能性があります。

御了承ください。

# 第六十三話　再び始まる地獄の特訓？

Ｓｉｄｅ　なのは

今、私達はフェイトちゃんのお家でエイミィさんからカートリッジシステムの詳しい説明を受けているの。

コータ君は「明日からの準備があるから」って、先に帰っちゃったけど……

「……破損の危険があるから、フルドライブはなるべく使わないようにに…ちゃんと聞いてた？なのはちゃん」

「ふぇ！？あ、はい。アクセルとバスター、それとフルドライブのエクセリオンですよね？」

エイミィさんの問い掛けに答える。ちゃんと答えられてる…よね？

「ふぅ……愛する吼太君のことを考えるのもいいけど、注意事項はちゃんと聞いて欲しいかな～」

「す、すいません…」

「わかればよろしい。それで、レイジングハートのエクセリオンモードなんだけど、フレーム強化をするまではエクセリオンモードは起動しないで。絶対にね？」

エイミィさんが注意をしてくる。

「あ、はい…」

そして、次の日…

「よーし、みんな集まったな？」

コータ君に呼ばれて、みんなが集まったの。

集まったのは、私、フェイトちゃん、ユーノ君、クロノ君、アルフさん、リームさん、プリムさん、ミカさん、ライラさん、アリスちゃん。

「まず、チーム分けがあるからなー。ちゃんと聞くようにー」

それで、チーム分けがされたんだけど…

Aチーム：なのは、リーム、プリム、ミカ、アリス

Bチーム：フェイト、アルフ、ライラ、クロノ

それ以外：ユーノ

「ちょっと待ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？」

ユーノ君、うるさいの。

「どうしたユーノ？」

「それ以外って何さ！？まさかまた僕一人でアレをやるの！？」

「あー、そういう意味じゃねぇよ…これは、ユーノ。今の段階で、お前は特別強くなる必要性がないからだ。だから、お前には管理局の無限書庫で闇の書について調べてもらいたい。そのためにとある能力を渡すつもりで今日は呼んだんだ」

「なんだ……よかった……」

ユーノ君がその場にへにゃへにゃって崩れ落ちた。

「そ、そんなにキツイのか…？」

クロノ君がユーノ君に不安を隠しきれずに聞いてるけど、ユーノ君は気が抜けてしまっているのか、答えなかったの。

「とりあえず、二チームともだいたいわかったな？」

「いや、だいたいも何もまだチーム分けしか「まっくろくろすけ。テメーの意見は聞いてねぇ」……君は僕をどこまでバカにすれば気が済むんだ？」

「まっくろくろすけ以外に反論は無ぇな？んじゃ、行くぞ。ディメンションＡＲＭ、【修練の門】…」

私達の下に前も見た巨大な門が現れて…

「……ハイパークロックアップ、【相乗掛合】《クロスオーバー》」

……あれ？今何かが…

そう思った時には、もう私の身体は門の中に入り込んでいた。

Ｓｉｄｅ　吼太

修練の門とハイパークロックアップの相乗掛合。

まぁ、要は特訓の時間がさらに増えるわけだ。

既にハーモニクスで増やしたオレが中に入っているから、後は中に入っているオレに任せとけば問題ない。

……修練の門を発動してるオレは暇だけどな。

ジッパーの中に何かないかな……？

――修練の門、Ｂチームの場合――

「よし、今回からお前達にはこいつを相手にしてもらう」

オレの隣には、地球とミッドチルダの両方の観点から見ても特異な服を着たロボットがいた。

「コータ、そのロボットは何？」

フェイトが聞いてくる。

「こいつはメカヒスイ・ハーツ。…とりあえずは強いやつだ。今はそれだけ分かればいいさ」

「要はコイツを倒せってことだね？」

「物分かりが早くて助かるよアルフ。まぁ、そゆことだ。それじゃ、模擬戦スタート」

「だぁぁぁぁ！」

アルフがいきなり突っ込んで、メカヒスイ・ハーツに殴りかかる。

しかし、その拳は間一髪で避けられて、逆に殴り返された。

「だったら！」

『スティンガースナイプ』

まっくろくろすけが射撃魔法を使って来たが、それすらも簡単に避けて…

『ストリームアロー』

仕返しとばかりに十本の風の矢を放った。

「……ラウンドシールド」

十本の風の矢はライラのラウンドシールドによって消されたものの、全員の警戒は解かれていない。

分かったのだろう。このメカヒスイ・ハーツが実力者であると。

「さて、どう攻略するのかな…？」

――修練の門、Ａチームの場合――

「コータ君……これって……？」

なのはが呆気に取られつつも聞いてくる。

「ん？調理器具だけど？」

オレ達の前にあるのは、コンロにまな板、流しに各種道具ｅｔｃ…

「いや、そうじゃなくってぇ！」

「じゃー、説明するぞー「うぅ……コータ君がいぢわるなの」いじわるじゃない。これが特訓だ」

「ふぇ？」

「どういうことですの？」

プリムも聞いてきた。

「お前達には今から、料理を作ってもらう。それもとびきりのをな。簡単な料理はＮＧだ。ある程度手の込んだ料理を作れ。そうだな…ジャンルは中華で」

「中華かぁ～……僕に作れるかな？」

リームが心配そうに話し掛けてくる。

「レシピはちゃんと用意したから安心しろ」

そう言いながら、レシピを配っていく。

「お父さん……これ、秒刻みでやることが書いてあるんだけど…」

「時間通りにやれよ？それじゃスタート！」

「「「「「無茶苦茶だー！？」」」」」

## 第六十三話　再び始まる地獄の特訓？（後書き）

なっぺ「後書き座談会だ！座談会だ！座談会だー！」

吼太「筋グゴン？」

なっぺ「さて、前書きではｏｒｚ気味だったのですが、後書きではいつも通りハイテンションです！もちろん、皆さんの感想が嬉しいからですよー！」

吼太「これからもよろしくお願いします」

なっぺ「ではでは、感想感謝コーナー行きますか！バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、ライさん、雨季さん、緋水さん、天照大神さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、香崎　真琴さん。感想ありがとうございました！」

ベス「バルディッシュさんからはメカヒスイを、緋水さんからは狐耳と巫女服を、天照大神さんからはスターダスト・ドラゴン、バスターモード、スターダスト・ドラゴン／バスター、フォーミラー・シンクロン、シューティングスター・ドラゴンのカードと、モンスター、魔法、罠が実体化するデュエルディスクを頂きました。ありがとうございます。メカヒスイは早速使いましたね」

吼太「まぁな。デュエルディスクはデビライザーに組み込んどくか。カードはライドブッカーに仕舞って、狐耳と巫女服は…」

なっぺ「今、着なさい」

吼太「な！？」

なっぺ「完成！この速さ……さすがオレ！」

吼太「うぅ……こんなん喜ぶやつなんているのか……？／／／／／」

なっぺ「多分たくさんいる。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十四話　マダオの塊（前書き）

あれ？特訓関連のタイトルにしようとしたらまるで違うタイトルになったよ？

なっぺ「あのさ吼太」

吼太「何？」

なっぺ「お前の外見、前はリトって言ったけど、よくよく考えてみたらシャナとくりむを足して2で割ったようなののほうが近かったかもしんない」

吼太「……両方女子じゃねぇか！」

なっぺ「後で修正します」

吼太「話を聞け！」

# 第六十四話　マダオの塊

Ｓｉｄｅ　吼太

特訓を始めてから、修練の門内部で１００日が経った。

とりあえず近況を伝えよう。

・Ａチームの場合

「リームさん、そっちの鍋、お願いします！」

「はいよー、なのはちゃん！」

基本的には経験のあるなのはと、天性の才能なのか、要領よくやっていけてるリームの二人を中心に、プリムとミカがお手伝い……といった具合に協力して料理を進めている。

この四人はいい。順調に料理を作ってくれてるし、オレの狙い通りに成長してくれている。

問題はアリスだ。

特訓を開始して、最初の料理が完成したときのことだ…

――回想――

「で、出来たよ……」

リームが息も絶え絶えに料理を差し出してきた。

他のみんなもそれぞれの料理を出してくる。

「まぁ、最初はこんなもんか」

いろいろと直すとこはあるけど、まぁそれはおいおいやっていこう。

時間だけはたっぷりあるし。

「あれ？食べないの？」

ミカが不思議そうに聞いてくる。

「あぁ、食べるよ」

そう言って、リームの差し出してきた料理、麻婆豆腐を食べる。

「……うん。旨いな」

「お粗末様です♪」

リームはなんで料理が上手いんだ？教えたことなんて無いのに…

「次は……プリムの……青椒肉絲か？」

「あの……料理は初めてでしたので…」

とはいえ、見た目はそこまで悪くない。

全く青椒肉絲に見えない欠点はあるけど。

どんな見た目かと言うと……まぁ、何故かタコ焼きだ。まんまタコ焼き。ピーマンと肉だけでなんでこんな外観に出来るんだ？

「味と食感は……青椒肉絲だな」

「本当ですの！？」

「あぁ、”味と食感”は青椒肉絲だ」

見た目だけを崩せるってのは一種の才能なのか？

「次は……ミカのエビチリか」

「上手く出来てるか心配だけど……」

見た目は旨そうだけど……

「味は……普通だな」

食材は一応最高級のを揃えてきたのに…

まぁ、真の料理人なら「いかなる食材だろうと旨く出来る」みたいなことを言うのかもしれないけど、あいにくオレはコイツらを真の料理人にしたいわけじゃない。あくまでも特訓の一環だ。

「もうちょいがんばれ」

「うぅ…はーい…」

「んで、最後はアリスの……！？」

その瞬間、世界は【ソレ】に塗り替えられた。

……ってのはさすがに言い過ぎかもしれないが、それほどのインパクトがあった。

アリスの今回の課題は確か坦々麺のはずだ。

……いや、確かに坦々麺のはずだ。

しかし、オレの目の前にあるのは、タールのような悍ましさをもった液体と、その中でスライムの如く蠢いている紫と緑の二色の塊。

心なしか、紫と緑の合体物からは「サイクロン！ジョォーカァー！」とか「問題無い」とか聞こえてくる気がする。マダオボイスで。

「ア、アリス……これは……？」

「タンタンメンっていうやつだよ？」

あぁ、無垢な笑顔が逆に眩しい……

いや、有り得ねぇ……なんだこの物体Xは……？

これがあれば国を一つ滅ぼせるな。間違いない。

「さぁ、食べて？ダーリン♪」

……Ｗｈａｔ!?

「早く早く♪」

……みんな、助けてくれ!

その思いを胸になのは達のいた場所を見ると……

「アハハ……お花畑だぁ～」

「コータ……僕もう疲れたよ……」

「お父様……このプリム・Ｆ・ヨシヤ、一遍の悔いもございませんわ……」

「綺麗な川だなぁ～……あ、向こうには金の塔が見える……」

全員が臭いでノックダウンしていた。

「なのは!そこは行っちゃいけないお花畑だ!リーム!オレをパトラッシュにしないでくれ!プリム!逝っちゃダメだ!ミカ!その川を渡るなよ!?絶対だぞ!!」

「さぁ……ダーリン?」

あ……

――回想終了――

あれ以来、アリスだけは別メニューだ。

オレ達の間には、【アリスには料理をさせてはいけない】という暗黙のルールが出来た。

……まぁ、概ね順調だ。

・Bチームの場合

『エアスラスト』

メカヒスイ・ハーツの攻撃を、全員が散開しながら避ける。

そこに、自動で動くように、ＡＩを搭載した六華が魔導剣で攻撃してきた。

「……させない」

ライラは冷静に、六華の攻撃をラウンドシールドを斜めに構えることで捌く。

要のようにシールドを折り曲げるなんていう行為は出来ないが、た

だ受け流すだけなら一枚のシールドでも可能だ。

さらに、ただ受け止めるのではなく、受け流したことで六華のバランスが崩れる。

そこに、間髪いれずにまっくろくろすけのブレイズキャノンが飛ぶ。

ブレイズキャノンは六華の足元の地面を砕き、六華を転ばせた。

下にいたメカヒスイ・ハーツはギリギリのところで避けたが、六華が転倒したときの衝撃で左腕に異常が生じたらしく、動きが一瞬鈍った。

その隙を突き、アルフがメカヒスイ・ハーツの腹に、魔力で強化した拳をぶつけ、同時に電撃を流すことで制御回路に致命的なダメージを与えた。

さすがに、内部に電撃を与えられてはひとたまりもなかったらしい。

また、六華はフェイトのサンダーブレイドで貫かれた後、ハーケンセイバーで何故か首をもぎ取られていた。

……何か恨みでもあったのか？

「勝った……よね？」

フェイトが心配そうに聞いてくる。とても今、生首（生きてないけど）を斬り落としたとは思えない、か弱い声でだ。

「あぁ。まぁ、勝ちでいいだろ」

今回の勝因は二つ。六華のＡＩがあまりにお粗末だったのと、偶然の事故だ。

ＡＩは、六華がいきなり贈られて来たのもあって急造したものだったから、動くのに必要な最低限の情報しか入れていなかった。

あと、六華が倒れた際にメカヒスイ・ハーツが左腕を負傷するという嬉しい誤算があったからこその勝利だ。

とはいえ、運も実力の内とも言うし、勝てないまでもチーム戦で互角ぐらいなら十分な成長だろう。

次はどうしようかな……？

## 第六十四話　マダオの塊（後書き）

なっぺ「後書き座談会ですよトニャーさん！」

吼太「誰だよ」

なっぺ「マダオの塊……正直、何が出来たのか想像もしたくありません……」

吼太「思い出したくない……」

アリス「？」

なっぺ「じゃあ、今回はアリスが感想感謝コーナーやって」

アリス「うん。ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ライさん、雨季さん、月光閃火さん、七つ夜&夜つ七さん、バルディッシュさん、緋水さん、香崎　真琴さん、天照大神さん。感想ありがとうございました♪」

吼太「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはマスターボールを、雨季さんからは（若干勝手にですが）自立型魔導戦術機・六華を、月光閃火さんからは特製スタミナドリンクを、刹那からは自家製プリン、夜つ七さんからは猫さん柄のパジャマを、バルディッシュさんからはエヴァンゲリオン零号機改、初号機、弐号機、仮設５号機を、緋水さんからはウェディングドレス、ブーケ、性転換薬を頂きました！ありがとうございます！」

なっぺ「随分来たね～…スタミナドリンクとプリンはみんなに差し

入れで、六華は早速使用してるし、マスターボールと性転換薬はジッパー内に保存、ＥＶＡはアマテラスに保管。服は……今着ろ」

吼太「な！？」

なっぺ「まずはパジャマ！ボタンを多少外して肩を少し露出したことで、【禁断の果実】的な魅力を引き出したぜ！白いシーツの上で女の子座りすれば魅力はさらにＵＰ！猫さん柄により幼さも加わり、その力は留まることを知らないぜ！」

吼太「は、恥ず……／／／／／／」

なっぺ「これで押し倒したら、まさに【顔を赤らめ、雰囲気に呑まれながらも抵抗にならない抵抗を試みる美少女】みたいなシチュエーションになるな。まさに襲われる５秒前」

吼太「へ、変なこと言うなバカァ！／／／／／／」

なっぺ「続いてウェディングドレス！……まぁ、今はまだ体験してるお子ちゃまでしかないけど」

？？？「じゃあ俺と結婚…」

吼太「百鬼夜行！」

なっぺ「はい、？？？と同じこと考えた人には百鬼夜行が行くのでどうぞよろしく。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十五話　Fとの約束／検索するユーノ（前書き）

主人公が出ません。

いや～……難しい展開になっちゃってます……

これから大変だ～……

# 第六十五話　Fとの約束／検索するユーノ

Ｓｉｄｅ　ユーノ

吼太はなんて能力を貸してくれたんだ…

この能力があれば、僕はあらゆるものを手に入れたも同然だ。

全く……つくづく吼太の能力は摩訶不思議だよ……

彼なら一人で次元世界を支配出来るんじゃないかな？まぁ、しないだろうけど。

「ユーノ！手伝いに来たよ」

「リーゼアリアさん！リーゼロッテさん！」

リーゼアリアさんとリーゼロッテさんが僕のとこに来る。

言い忘れていたけど、僕は今管理局の無限書庫にいる。

理由は当然、闇の書についての詳しい情報を集めるためだ。

簡単な情報はアースラとかの端末からでも入手出来るけど、無限書庫にはそれ以外の情報……もっと闇の書の中枢に入り組んだような情報もあるはずだ。

「で、あたし達は何をしたらいいかな？」

「何もしなくていいですよ」

「……へっ？」

「あらかじめ用意した検索魔法があるからね」

「でも、それだけじゃあこの広大な無限書庫の「それに」……それに？」

リーゼアリアさんの言葉を遮る。

必要ないんだよ。正直、申し訳無いんだけどね。

「……まぁ、見てれば分かるよ」

そう言って、僕の周りに検索魔法を展開する。

そして、両腕を広げて、あの言葉を言う。

「さぁ、検索を始めよう」

僕がその【キーワード】を発した瞬間、世界は本で埋め尽くされた。

あまりに様々かつ巨大な情報量が、本、そして本棚として表される。

あらゆる事象、存在はたとえいかなる能力を持っていようと、この世界では一冊の本でしかない。（吼太は例外みたいだけど）

この世界を吼太はこう呼んでいた。

…【地球（ほし）の本棚】と…

「情報を更新。別の星の記憶を取得する。世界名称、【ミッドチルダ】」

僕が言葉を紡ぐと、地球の本棚の本が一度全て虚空へと飛んでいき、すぐに戻ってきた。

さらに、僕が知る限りの闇の書に関連する世界名を次々に述べる。

そのたびに本棚は虚空に消え去り、すぐに戻ってくる。

無限書庫の本もその一冊一冊の本が持ち上がり、地球の本棚の一部と化した。

といっても、これはイメージらしい。

実際に本棚が動いているわけじゃないそうだ。

……実際に出来たら一発で無限書庫の整理が完了しそうだ。

「よし。検索項目は【闇の書の詳細】。キーワードは【守護騎士】【バグ】【転生機能】」

いくつか、それらしい言葉を言って見たけど、なかなか絞り込めない。

何かもっと決定的なキーワードが必要みたいだ……

「リーゼアリアさん、リーゼロッテさん。何か闇の書関連で気にな

る言葉はありませんでしたか？」

「キーワード？」

リーゼアリアさんの不思議そうな声が聞こえてくる。

「あっ、あれなんかどう？吼太って子が前に言ってた言葉」

「なんですか？」

「確か……【夜天】だったかな？」

リーゼロッテさんが自信なさ気にいってくる。

「追加キーワードは…【夜天】」

僕が言った瞬間、本が見る間に減っていき、僕の目の前に一冊の本……知りたい情報が集約された本が置かれる。

その表紙には【Ｈｅａｖｅｎ　ａｔ　ｎｉｇｈｔ　Ｇｒｉｍｏｉｒｅ】と書かれている。

僕はその本を取り、読みはじめる。

その読んだ知識は、いとも簡単に僕の頭に入っていった。

「……うん。検索を完了。闇の書……いや、夜天の魔導書の全てを閲覧した」

「ど、どういうこと？」

リーゼ姉妹は状況が掴めてないみたいで、かろうじて冷静さを保っていたリーゼアリアさんが疑問をぶつけてきた。

「全てが分かったってこと。この事件を終わらすのに、必要な全てがね」

Ｓｉｄｅ　はやて

……はぁ

「どーしたんだー？はやて」

小さな子供が私に話し掛けてくる。

この娘はヴィータ。今の私の家族で、末っ子さんみたいな子や。

「具合が悪いのですか？」

このポニーテールでスタイル抜群な女の人はシグナム。家族の中では……お父さんみたいな人かな？よく新聞読んどるし。

「はやてちゃん。大丈夫？」

優しげな雰囲気を持ったこの人はシャマル。家庭的に見えるけど料理の腕が可哀相だったりする。

「平気や。心配してくれてありがとうな」

「…ならいいんだけどよ」

ヴィータがホッとした顔でソファーに座る。

それで、忘れちゃいけないのがザフィーラ。今は狼の姿でヴィータの足元におるな。

こう見えて守護獣とかいう、なんかすごいやつらしいで。

まぁ、それはシグナム達にも言えることなんやけどね。

この四人はヴォルケンリッター。私を守ってくれる、守護騎士達…

…みたいなんやけど、イマイチ実感は無い。

闇の書だか、なんだかは知らないけど、この子達はみんな私の家族で大切な人や。

……そうや！

「シャマル。私が前にもらった手紙を持ってきてくれるか？」

「はいはーい♪」

シャマルがパタパタと奥の部屋に入っていった。その姿はお母さんみたいや。

……本当、料理さえ出来れば完璧なんやけどなぁ……

「これですか？」

シャマルが戻ってきて、一枚の手紙を渡してきた。

「そや。ありがとうな」

少し前に、たったの一ヶ月も一緒やなかったけど、私にはこの子達以外にも家族がいた。

……フェイトちゃんと、アルフ。

二人はもう、この海鳴で暮らしているみたいや。

それで、今度の休みの日に図書館で待ち合わせしてフェイトちゃんのお家に遊びに行くことになってる。

「……とゆーわけで！ついて来たい人は手上げー！」

「はーい！」

「は～い♪」

「では私も」

「……」

うんうん。ザフィーラもついて来るんやな。

今度の休みの日が楽しみや～

## 第六十五話　Fとの約束／検索するユーノ（後書き）

なっぺ「後書き座談会くぁ！」

クック「くぁ！」

なっぺ「なかなか出せなかったちびクックに来てもらってます！」

クック「くぁ～」

なっぺ「……」

クック「くぁ？」

なっぺ「会話が続かねぇ！」

ベス「それはそうでしょう」

クック「くぁ～……」

なっぺ「ゴメンな～…じゃあ、感想感謝コーナー！せっかくだからトゥード！人間ｖｅｒで！」

トゥード「人間態になる必要はあるのですか？」

なっぺ「いいからいいから」

クック「くぁ～♪」

トゥード「……わかりました。ライ様、天照大神様、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔ様、雨季様、バルディッシュ様、七つ夜＆夜つ七様、緋水様、香崎　真琴様、Ａｒｉｓｈｉａ様。感想をくださり、ありがとうございます」

なっぺ「ライさんから白銀〇ソ〇イ〇より〇ル・〇〇ルキ〇ーの戦闘時の衣装を、ヒスイからはメカヒスイ・ハーツｖｅｒ．ＩＩを、シルフからコレットの服を、刹那からはクラゲ以上の知能があれば誰でも作れる簡単レシピ本を、魔理亜からは魔理亜特製クッキーを、緋水さんからはＹシャツを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「今回、吼太さんは休みですので、当然コスプレも休み「と言うとでも思ったか！？」……だそうです」

なっぺ「出てこい吼太！」

吼太「うぉあ！？」

なっぺ「ソ〇・ヴァ〇リ〇の服は既にセット済みだぜ！」

吼太「……なんかメカメカしいな。まぁ、まだマシ……」

なっぺ「次は裸Ｙシャツ！緋水さんが言ってたシチュエーションにしてみました！」

吼太「な！？こ、これは！？／／／／／」

なっぺ「ベッドの上で女座りで胸元が少しはだけた状態です」

吼太「うぅ……何すんだよ…」

なっぺ「コレットの服はまた別の機会に」

クック「くぁ～」

なっぺ「次回は……原作ブレイクだろうなぁ」

ベス「でしょうね」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十六話　限界しゃぶしゃぶバトル！（前書き）

一応先に言っておくと、このままなし崩しにA-s編終了なんてことにはなりませんので安心してください。

# 第六十六話　限界しゃぶしゃぶバトル！

Ｓｉｄｅ　吼太（外）

「……そろそろ時間か」

だいたい二時間は経った。

なので、もうそろそろ出て来るはずだ。

そう思った瞬間、修練の門からみんなが飛び出してきた。

「ガードスキル、アブゾーブ」

ガードスキルを発動して複数のオレを一体化させる。

「さて、小手調べに……ファルス！」

オレ自身の周りに小さな星がたの物体を出して、そこからみんなに向けてビームを放つ。

それをみんなは必要最低限の行動で避けた。

全く無駄の無い動き、死角からの攻撃を避ける危機察知能力。

「どう？」

リームが代表して聞いてくる。

オレは声の代わりに大きく頷くことで答えた。

まぁ、つまりは……

「「「やったぁぁぁぁ～～！！！」」」

そういうことだ。

「さて、今日はフェイトん家に泊まっていっていいんだよな？」

「うん。エイミィが、一応バルディッシュやレイジングハートの状態をみたいからって」

オレの問い掛けに、フェイトは頷きつつ答える。

カートリッジシステムの状態でも見たいんだろう。

とりあえず、オレ達はフェイトの家で一晩を過ごした。

そして朝。

陽光を浴びて、目が覚める。

「おはよ～…」

「あ、コータおはよ～♪」

アリシアは朝から元気だなぁ……

「コータ寝ぼすけさん？」

「ん～…」

朝は……苦手だ……

みんなもう起きているらしく、それぞれが朝飯を作っているプレシアさんとリンディさんの手伝いをしていた。

「…うぁ～」

「おはようコータく……！？／／／／／」

なのはがオレの姿を見た瞬間に、真っ赤になって止まった。

「んぁ…？」

「あ、あああ、あの…そのっ…／／／／／」

どうしたんだ？

「おはよう吼太君！……っておや？」

エイミィさんも話し掛けてきた。

「吼太君。パジャマの前、開いてるよ」

「ん？……あぁ、ホントだ…」

のろのろと閉める。

するとなのははようやく動き出した。

…真っ赤になったのは戻らなかったが。

なんか、「あんなに無防備なら襲っていいんだよね?きっとそうだよね?……綺麗な肌だったなぁ…／／／／／／」とか聞こえた気がする。気のせいだろうけど。

「あ、そう言えばお母さん、リンディ提督。今日、私の友達が来るのは知ってるよね?」

フェイトが朝の席で言う。二人は頷き、もちろんといった感じで答える。

「どんな子だか楽しみだなぁ～♪」

「きっとなのはとも友達になれるさ」

なのはの言葉を受けて、アルフが言う。

それだけ言うんだし、きっといい子なのだろう。

ピンポーン♪

「あら、来たみたいね」

リンディさんが言う。ちなみにまっくろくろすけは納豆を食べるのにやたら苦労していた。

「いらっしゃい。どうぞ入って」

プレシアさんが玄関に行って、客人を招き入れる。

「あ、ありがとうございます」

ん？この独特のイントネーションと優しげな声は…

「こんにちは～フェイトちゃん！アルフ！……って…コータ君！？」

「はやて！？」

……おや？何故か前後から殺気が…？

「コータ（君）、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ「主。どうかしたのですか？」チッ！……あれ？」

「はやて？」

……おやおや、これは…

「（あなた達）（お前ら）は…！」

……想定外だぜダンナ…

めんどうなことになりそうだ…

Ｓｉｄｅ　はやて

……何なんやろこの空気は。

「あの……そんなに睨まないで…？」

「睨んでねーです。元々そういう目付きなんです」

ヴィータ。初対面の人にその態度はよくないで？

「「……」」

シグナムもそこの金髪の女の子と睨み合っちゃダメやって。

「じゃ……じゃ僕は用事があるから…「逃げんなリーム」うぅ……」

どないしようか……

と、とりあえず…

「……みんなで、しゃぶしゃぶでも食べよか……？」

数十分後……

Ｓｉｄｅ　吼太

「あ、それ私が食べようと思ってたお肉！酷いよヴィータちゃん！」

「早いもの勝ちなんだだよにゃのは！」

「にゃのはじゃないのー！」

なのはとヴィータはなんだかんだで仲よくなってるし…

「（ここまで来て、なお早い…！目で追えない箸が出てきたか…やるなテスタロッサ）」

「（ミドルレンジでもクロスレンジでも押されっぱなしだ…さすがはシグナム…！）」

「な、なんやこの戦いは！？箸が……箸が分身しているやと！？」

フェイトとシグナムはなんか箸で威嚇しあってるし…

※箸をぶつけ合うような真似はしておりません。

「「「あらあらまぁまぁ♪」」」

プレシアさん、リンディさん、シャマルの三人は傍観に徹しつつもしっかり自分の分は確保してるし……

いや、なにさここのカオス空間？

さらに数十分後…

「「「「「ごちそうさまでしたー！」」」」」

「くっ……この僕がたった三枚しか食べられなかっただと！？」

まっくろくろすけ…お前ってやつは……

「さて、みんなはここから戦う気になんてなれるか？」

はやてが聞くと、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムはハッとした表情になった。

……敵対してたこと忘れてたのかよ…

「と、とにかく！まだあたしはお前らのことを認めたわけじゃねぇからな！」

「あ～はいはい」

そう言って、オレはヴィータの頭を撫でる。

「なっ！や、止め…」

撫でる。

「このっ……」

撫でる。撫でる。

「は、離せ…っ！」

撫でる。撫でる。撫でる。

「……／／／／／／」

よし、大人しくなった。

アリサが怒ったとき、こうやってたくさん撫でたら何故か怒りが治まるんだよなぁ…

アリサとヴィータって行動パターンが似てる気がしたから、もしかしたらって思ったけど、どうやら予想通りだったらしい。

にしてもなんで撫でると怒らなくなるんだ？

「こ、このバカ！いきなり何しやがる！……えーと…「コータ君だ。吉谷吼太君」…コ、コータ！」

そういや、名前言ってなかったな。忘れてた。

「何って……んなカリカリしてたらせっかくの可愛い顔が台無しだぞ？」

「か、可愛い！？／／／／／／」

うわっ、すっげえ真っ赤。どうしたんだ?ヴィータのやつ。

…ガスッガスッ

「……あのー、はやてさん?」

「なんや?」

ガスッガスッガスッガスッ

「車椅子の端っこが足に当たって痛いんですが?」

「気にせんといてや。……それとヴィータ。あとでO☆HA☆NA☆SHI…しよか?」

「は、はやて!?」

「ほな皆さん。この辺で失礼しますー」

そう言って、八神家のみんなは帰って行った。

……なんか嵐のようだったな…。

# 第六十六話　限界しゃぶしゃぶバトル！（後書き）

なっぺ「後書き座談会じゃしぇん！」

吼太「もはや何語だよ」

なっぺ「ネタが尽きたんだよ！」

吼太「普通に始めろよ」

なっぺ「さて、Ａ－ｓ編も今回から大きく様変わりをすると思うよ」

吼太「大分歴史が変わっちまったからな」

なっぺ「と、言っても複数ブレイカーは出すけどな」

吼太「Ａ－ｓ編の見所だしな」

なっぺ「それとユーノに称号が与えられたぞ」

【淫獣フィリップ】

ユーノ「全く嬉しくないよ！？この称号！」

なっぺ「さて、感想感謝コーナー！Ａｒｉｓｈｉａさん、ｋｅｉ－－ｋｕｍａ．Ｔさん、天照大神さん、バルディッシュさん、ライさん、緋水さん、月光閃火さん、香崎　真琴さん。感想ありがとうございました！」

吼太「Ａｒｉｓｈｉａさんからは某ひぇぇな人にウェディングドレスを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんのとこの遥からはパースエイダーのカノンを、バルディッシュさんからは外道麻婆と奏麻婆を、緋水さんからはスク水（白）を、香崎　真琴さんのとこからはチャイナ服とスク水を頂きました。ありがとうございます」

なっぺ「もっと喜べよ」

吼太「喜べるか！」

なっぺ「ウェディングドレスは来たる日に備えて保管で、カノンはジッパーの中だな。さて、ダブル麻婆だが……よし！ユーノと吼太「お前がやれ」……はい」

ユーノ「え！？これ片方死にかかるでしょ！」

なっぺ「こうなったら一蓮托生！一緒に食うぞユーノ！せーのっ！」

……

ユーノ「あ、おいしい」

なっぺ「……」

吼太「今回はコスプレしなくて済みそうだな……」

なっぺ「フハハハ！あの程度でやられるオレでは無い！」

吼太「なっ！？」

なっぺ「チャイナ服ぅ！」

吼太「これ……スリットが……／／／／／」↑スリット辺りを抑えてる

なっぺ「黒スク水！」

吼太「こ、これは……／／／／／」↑胸の辺りには「こーた」と書かれたスク水

なっぺ「白スク水！」

吼太「なんで片方だけにしないんだよ…っ！／／／／／」↑あっちこっちを引っ張って少しでも肌を隠そうとしている

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十七話　立てられる誓い、始まる絶望（前書き）

A'ｓ第二部（になるのかな？）

始まります。

あと、今回後書きがやたら長いです。

# 第六十七話　立てられる誓い、始まる絶望

Ｓｉｄｅ　ベス

……いやぁ～、本編ではお久しぶりですね。皆さん。

冥府の王、死を司る者、神です。

……ベスじゃないんですってば。

まぁ、それについては後ほど話すとしましょう。

私は神なわけですが、神にはそれぞれ役割があります。

そういうものなんです。

他の神の役割なんてあまり知りませんがね。

とにかく、私の場合は役割が【死を管理する】ことなんですが…

本来、生と死の割合は同一なんです。

魂の重さで換算し、より重い魂を持つものが死んだ場合は、それ相応の量の魂が生まれます。

それが単一の魂か、複数のものかは知りませんがね。

通常、魂が重い存在というのはその世界の運命を大きく変える存在です。

例えば、ガリレオ・ガリレイ。

例えば、アルベルト・アインシュタイン。

例えば、グラハム・ベル。

そして、今この世界において、一番魂が重いのは、高町なのは。

しかし、魂の重さを持つものは、魂の生と死を塗り替えることは出来ません。

彼女は、本来の歴史の中で強大な力を持つ存在を何人も失っているのですから。

もっとも、この世界には吼太さんという異分子（イレギュラー）がいるんですけどね。

さぁ、見させて貰いますよ。

これから起こることに、貴方がどう立ち向かうのかを。

吉谷、吼太さん。

Ｓｉｄｅ　吼太

あの、限界しゃぶしゃぶバトルの日から、ヴォルケンリッターは蒐集を止めた。

どうやら、なんだかんだで隠してたのがはやてにバレたみたいで、こっぴどく叱られたらしい。

わざわざリンディさんの前で宣言したんだから、間違いないだろう。

ゆえに、この現象はおかしい、ということになる。

「なんで……なんでページが増えてるんだよ！」

ヴィータが叫ぶように言う。

ヴィータは優しい娘だ。はやてとの約束を二回も破るような真似はしないだろう。

最初に気づいたのはシャマルだ。

ふわふわ浮いて散歩していた闇の書（直したわけじゃないから、こう言うことにする）を捕まえて、癖になっていたページ確認をしたときに、２ページ分増えた気がしたような気がしたらしい。

その時は勘違い程度で済ませていたらしいが、ついさっき……そう、ヴォルケンリッターがリンディさんの前で約束をした、まさにその時に闇の書が光り輝き、ページが６ページも増えていた。

一番驚いたのは他ならないヴォルケンリッターのみんなだ。

無言、無表情が基本のザフィーラですら「そんな馬鹿なッ！！？」と叫んだほどだ。

何が起こっているかなんて誰にも分からなかった。

ユーノが以前調べた情報にも、こんな現象は無かった。

わかったことがあるとすれば、答えを出す者と複写眼の【相乗掛合（アンサーオルカア・スティグマ）】《クロスオーバー》をしてようやく、【闇の書に正体不明のラインが繋がっており、そこからリンカーコアが送り込まれている】ということぐらいだ。

「何にしろ、このままでは主はやてが危ない。ラインの先を探す必要がありそうだな」

とは、シグナムの意見。

それに、全員が頷く。

「やろう。僕たちで、この事件を終わらせるんだ」

まっくろくろすけが言う。

闇の書事件は、まだ終わってはいなかった。

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太達が方針を決めていた同時刻。

とある管理世界での話だ。

そこで、有り得ない事態が発生していた。

「ハラオウン執務官！一体何を！？」

『ブレイズキャノン』

「喰らえ！」

少年……クロノは砲撃を放った。

その管理世界に常駐している、局員に向けて。

「アアアアアアアアアアアッツツ！！！！！？？？」

殺傷設定で放たれた砲撃は、局員の身体をえぐり取り、辺りを血で染める。

そして、その死体に対してデバイスを翳すと、肉も骨も血も…その全てが光の玉……リンカーコアへと変換された。

そのリンカーコアは空中をふわふわと漂っていたが、ある言葉が呟かれた瞬間に動きを見せた。

「……蒐集」

クロノが放った言葉を受け、彼の後ろに立っていた男の持つ本が光を放つ。

『ザムルング』

リンカーコアは小さくなりながら本に近づき、やがて完全に吸収される。

「……一ページにも満たないぃなぁ…どうしたものかぁねぇ？クロノ・ハラオウン君？」

「……」

クロノは答えない。

まるで、自分が生きていることを忘れてしまったみたいに。

「まぁ、答えるわけないよぉねぇ？人形君はぁ。じゃ、戻って」

男の声を受け、クロノは闇に呑まれる。

そして、闇が晴れた時には、クロノの姿は完全に消えていた。

「……やっぱり、あいつらから奪ったほうがいいみたいだぁねぇ

……」

男が下卑た笑いを浮かべる。

彼が持つ本は、全てを飲み込むような漆黒に染まっていた。

## 第六十七話　立てられる誓い、始まる絶望（後書き）

なっぺ「後書き座談会！始めるＺＯＹ！」

吼太「プ〇プ〇ンドの自称王様かテメェは」

なっぺ「さて、なにやら不穏な気配」

吼太「めんどそうだな……」

なっぺ「ま、頑張るべ。さて、感想感謝コーナーいこうか」

吼太「そうだな。ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ライさん、天照大神さん、緋水さん、雨季さん、月光閃火さん、七つ夜＆夜つ七さん、八人目な武器屋さん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、紅舞姫さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「恐らく過去最高数の感想だぜ！」

吼太「皆さん、本当にありがとうございます」

なっぺ「贈り物もたくさんだぜ！ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは白のワンピースと麦わら帽子、黒の髪染を、ライさんからはエ〇ーナ〇ファン〇タジーのファ〇テの衣装を、天照大神さんからはフェイトのソニックフォームのバリアジャケットを、緋水さんのとこからは浴衣を、七つ夜＆夜つ七さんのとこからはラストの血（強力な媚薬。オレ宛て）、『百問百答・良いお嫁さんになるには？』（ラバーズ宛て）、吼太の性感帯プロファイル【完全版】（ラバーズが１０００円で買った）を、八人目な武器屋さんからはジャッジ・

ガブラスの装備一式と管理局も真っ青の量子コンピューター、ムーンセル・オートマトン（別名「七天の聖杯（セブンスヘブン・アートグラフ）」）、キャス狐の服を、香崎　真琴さんのとこからは某わふ～な娘の制服を、バルディッシュさんのとこからはパースエイダー（銃器のこと）の『森の人（オートマチック）』と『フルート（ライフル）』、ゴルドランを、Ａｒｉｓｈｉａさんからは性転換薬と媚薬を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「大量ですね」

なっぺ「とりあえず……ゴルドランはアマテラス内に保管、ムーンセル・オートマトンはアマテラスに搭載して、パースエイダーとジャック・ガブラスの装備、薬各種（ラストの血は除く）はジッパーに保管だな。服は……多いから今回は三着だけ。他は第二回コスプレ祭のときだな」

吼太「……おい、第二回ってなんだ？」

なっぺ「好評だったからまたやることにケテーイ！ちなみに形式は変わると思います！」

吼太「ふざけんな！」

なっぺ「うるさいやつはＫｅｉさんの服を着せちゃる」

吼太「うぉぁ！？」↑白のワンピースと麦わら帽子を装備し、黒の髪染によって綺麗な黒髪に変わる

なっぺ「作者なっぺが命じる！『読者に向かってお兄ちゃんと言え』！」

吼太「……お、お兄ちゃん……／／／／／／／」

ベス「（笑）」

吼太「ベスコロス！」

なっぺ「続いてはライさんから頂いたエ○ーナ○ファン○タジーのファ○テの衣装！」

吼太「こ、これ下が……下がすっげぇスースーするんだけど……／／／／／」

なっぺ「仕様だ。ついでに言えば下が見えてもいいように下着も「わーわーわー！！！／／／／／／」……まぁいいや」

吼太「下以外はまだ許せるんだけどなぁ……長袖だし」

なっぺ「緑色なのは？」

吼太「微妙」

なっぺ「この服が分かる人は感想欄で手を挙げましょう！ライさんが喜びます！次はわふぅだ！」

吼太「ま、また下が……／／／／／／」

なっぺ「ほら、帽子は斜めに被らないと」

吼太「知るか！」

なっぺ「あと、わふぅ～ってやって」↑作者権限発動！

吼太「……わふー！こーたはみんな大好きなのですー！／／／／」
↑やけくそ

なっぺ「……ｗｗｗ」

吼太「お前がやらせたんだろ！？」

なっぺ「あと吼太」

吼太「？」

なっぺ「何人か、紳士淑女の皆さんが迫ってきてるぞ」

吼太「……優に任せた！オレは逃げる！」

優「いきなり！？」

ベス「突然のプチコラボですね」

なっぺ「優ドンマイ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第六十八話　闇天、来る！（前書き）

遅れてスイマセン。

なのに今回短いです。

そして当たり前のように駄文です。

さらに、途切れ方まで酷いです。

……本当にスイマセン。

# 第六十八話　闇天、来る！

Ｓｉｄｅ　吼太

今、オレはハイパークロックアップを発動して、とある次元世界を隅から隅まで探索している。

闇の書からの逆探知をエイミィがしているが、闇の書自体が覚醒していないため情報を引き出すのが難しいんだそうだ。

なので、オレ達は手分けをしていろいろな次元世界を探索しているのだ。

そこまでの強行策に出た理由は、とある自然豊かな次元世界の全生命体が消滅した事件。

植物すらねこそぎ消え去ったその世界で、闇の書によく似た反応が最後に確認されたんだそうだ。

そのため、この事件によく似た事象が発生しやすそうな世界…つまりは生命に満ちた世界を中心に探索しているわけだ。

そして、どうやらオレは当たりを引いたらしい。

生命の育みの消えた、死の大地。

そこに立っている、誰かの人影。

……いや、あれは……

「フェイト！お前もここに来ていたのか？」

目の前にいるフェイトに話しかける。

バリアジャケットを展開していることから、フェイトはまだ警戒を解いていないことがわかる。

「あれ？でもフェイトはこちらの担当じゃないよな？手伝いに来てくれてたのか？」

……答えが返って来ない？

オレが訝しんだそのとき、フェイトは動き出した。

金色に輝く刃がオレの喉元を狙う。

「くっ……！？」

間一髪のとこで避けるが、代わりに頬が浅く裂かれて、血が流れる。

……殺傷設定か。

「フェイト！オレだ！吼太だ！

『ハーケンセイバー』

「答えはそれってか…！？威風堂々！」

巨大な腕を模った盾がオレの前に現れ、ハーケンセイバーを弾く。

「しゃーねぇ！荒っぽいけど大人しくしてもらうぜ！」

フェイトに言い放ったあと、ディケイドライバーを腰に巻く。

そして、カードを装填し、ハンドルを押し込んでカードの効果を発動する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

ディケイドに変身し、さらにもう一枚カードを装填する。

「新しい力を試してやる……変身ッ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＯＯＯ】！』

『タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

歌のような電子音声が流れ、ディケイドの鎧が上下三色の仮面ライダー、オーズのものに変わる。

「行くぜ！」

両手に装備された爪状の武器、トラクローを展開し、フェイトを攻撃する。

さすがに猛攻に耐え切れないと感じたのか、後ろに跳んで距離をとるフェイト。

戦いは膠着状態に入る。

先に動きを見せたのは、オレだ。

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＴＡＫＡＫＩＲＩＢＡ】！』

胴体の円形の鎧、【オーラングサークル】の真ん中に書かれたトラの絵が、カマキリのものに変わる。

仮面ライダーオーズの亜種フォーム、【タカキリバ】だ。

さらに両足にエネルギーを行き渡らせ、フェイトとの距離を一跳びで縮めると、手にした剣、【カマキリソード】でフェイトの身体をすれ違いざまに斬りつけた。

もちろんみねうちだから、ダメージはあっても死にはしない。

だが、フェイトの身体の斬りつけられた場所から黒い霧が溢れ出して、やがてフェイトは跡形も無く消えてしまった。

「……偽物か」

たどり着いた結論はそれだ。

と、いうより他に考えられない。

「さて、と……出てこいよ！」

オレが呼び掛けると風景の一部が歪み、中から一人の人間が現れた。

……いや

「人間じゃねぇな……テメェは」

「ふむ。察しの良いことだ。私の正体に気づいたとはな……いいだろう。闇天の守護騎士にして、歪み《ひずみ》の騎士、ザンクがお相手いたそう」

そう言い、物干し竿と同じぐらいの長さを持つ、細身の剣を背中に背負った鞘から抜き放つ。

剣には常に魔力が通っており、まるで吹きすさぶ風すらも斬り裂いているようだ。

「……ジッパー」

ジッパーの中から刀を取り出す。

長さは、ザンクの剣に比べればあまりに短い。

しかし、その切れ味は決して劣ってはいないだろう。

銘を、【子烏丸】。

抜き身で構えたその刀から発せられる気配は、やはり周りの空気を斬り裂くようにすら感じる。

そして、辺りを支配する静寂。

そして、刹那…

二つの影は互いに武器を打ち合わせた。

## 第六十八話　闇天、来る！（後書き）

なっぺ「後書き座談会タ！ト！バ！」

吼太「日本語喋れ」

なっぺ「最近、感想欄が後書きのコスプレで埋まってきていることに焦りを感じているなっぺです」

吼太「本編が面白くないんだろ？」

なっぺ「……文才があればなぁ…」

シルフ「可愛いですわ～♪」

なっぺ「今、バルディッシュさんのとこのシルフが吼太を愛でてます」

シルフ「ぎゅ～っ♪」

吼太「い、息が……」

なっぺ「胸で窒息しかかる……だと？なんてけしから……羨ましい！」

数時間後……

シルフ「満足しましたわ。では、この辺りで失礼致します」

なっぺ「さよ～なら～」

吼太「あ～、苦しかった。さて、今回オーズ出しちゃったわけだが」

なっぺ「オーズ放送記念。後悔はしていない」

吼太「子烏丸は？」

なっぺ「アンダーグラウンドだよ？最近、近くの店で全巻セットが１０００円ぐらいで売ってたから買ったんだ。次回辺りでは他の能力も出す」

吼太「んじゃ、感想感謝コーナー行くか」

なっぺ「ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、七つ夜&夜つ七さん、天照大神さん、バルディッシュさん、緋水さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、月光閃火さん、雨季さん、香崎　真琴さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

ベス「Ａｒｉｓｈｉａさんからはナース服を、七つ夜&夜つ七さんのところの皆さんからは吼太さんに【女装無効の札】を三枚と両儀式の衣装とマジカルアンバーもとい琥珀の衣装を、バルディッシュさんからはファイバード、グランバード、吼太には霧雨魔理沙の服を、緋水さんからはビキニ（黒）とパットを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんのところの皆さんからはニワトコの杖を、香崎　真琴さんのところの皆さんからはＭＨのキリン装備を頂きました。ありがとうございます」

吼太「ファイバード、グランバードはアマテラスに、ニワトコの杖はジッパーに！そしてオレは天照大神さん達が用意してくれた転移魔法陣で逃げる！」

ベス「逃げましたよ」

なっぺ「取り寄せバッグ～」

吼太「うわぁ～！？」

なっぺ「さらに性転換発動！」

詩音「ひぇ～……？」

なっぺ「詩音。この前攻撃受けたり、倒れた人達にこの服を着て介抱してやりなさい。みんな喜ぶから」↑ナース服を渡す

詩音「あ、うん。わかった！頑張ります！はい！」

たたたたた……

ベス「他は残念ながら後回しですね」

なっぺ「消化しきれるかな…？衣装がありすぎて、厳選することになりそうだ…もし、そうなったらごめんなさい」

ベス「さて、次回はどうなるんですか？」

なっぺ「またバトルだね。多分。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

ちなみに、詩音に介抱される権利があるのは、以下の人達です。

・Ａｒｉｓｈｉａさんのとこの優

・夜つ七さん

・緋水さんのとこのダチ

・ステューピファイかけられまくったｋｅｉさん

・香崎　真琴さんのとこの皆さん

## 第六十九話　闇天の守護騎士（前書き）

最近、ネット上でのマナーが非常に悪く感じます。

ネチケットはしっかり弁えましょう。

それから総合評価が８００ｐｔ超え、

ユニークが５００００人超えして、

アクセス数が８０００００超え寸前です。

皆さん、ありがとうございます！

# 第六十九話　闇天の守護騎士

Ｓｉｄｅ　吼太

閃く二つの剣閃。

互いの命を狩りとるために動く刀と剣が、互いの肩口をわずかばかり斬り裂く。

「破ァッ！」

「このっ！」

刀と剣がぶつかり合い、甲高い音が響く。

「オレをどうするつもりだ！？」

鍔ぜり合いに持ち込みながら、ザンクに問い掛ける。

「答える義理など……ありはしないっ！」

「だろうなぁ！」

互いが互いを吹っ飛ばし、距離を取る。

「この惨状はお前が原因か！？」

「そうだと言ったらどうする！？」

「ぶっ飛ばすに決まってんだろ！」

「やれるものならやってみろ！」

そして、また斬り合いが始まる。

オレが袈裟斬りに斬り付ければ、ザンクは紙一重でそれを避ける。

ザンクが横に一閃してくれば、オレはザンクの懐に飛び込み、タックルで距離をとる。

「おのれ……ならばこれだ！」

突然、ザンクの剣の刃が分裂し、オレに向かって飛んできた。

「グッ！？」

それを子烏丸で弾き防ぐが、そこに隙が出来てしまう。

「そこだ！死ね！」

ザンクの剣がオレの胴体を真っ二つに斬り……

「あいにくだが、それは偽物だ」

裂かなかった。

ザンクの剣に斬られたオレの分身は、軽い音をたてて砕け散る。

「なんだと！？いつの間に！？」

「ニトクリスの鏡。瞬時に鏡に映したような分身を作り出す魔術だ」

説明しながら、能力を溜める。

オレの周りに風が吹きはじめ、辺りに砂埃を撒き散らす。

「行くぜ……浅葱流剣術【烈風】！」

強力な風が鎌鼬となり、ザンクに襲い掛かる。

「むざむざ当たるものか！」

ザンクは上に飛び、逃げようとするが…

「読めてるぜ！」

ニトクリスの鏡に気を取られている隙に、ハーモニクスで増やしといたオレが、ザンクの上から拳を構え、振り下ろす。

「ジオ・インパクト！！！」

強力な【重力】と共に打ち出された拳が、ザンクに当たる。

そうして、刹那の間自由を失ったザンクに烈風が命中した。

「がぁっ！」

地面に転がり落ちるザンク。

「ガードスキル、アブソーブ…そして、これだ」

ジッパーの中から、さらにもう一つの武器を取り出す。

「アセンブル！ゴセイバスター！」

星を護る天使の武器。

それらが一つになった、巨大なボウガン。

それが、ゴセイバスターだ。

「閃くスカイックパワー！猛るランディックパワー！冴えるシーイックパワー！」

五枚のカードをゴセイバスターにセットし、ゴセイパワーを限界まで溜める。

そして、ギリギリまで圧縮されたゴセイパワーを弾丸にして…

「パニッシュ！」

撃ち出した！

巨大な爆発が辺りを灼き、轟音がオレの聴覚を麻痺させる。

「……逃げられたか」

手応えは無い。どうやら寸前で逃げられたらしい。

まぁ、今回ので大分わかったけどな。

とりあえず、拠点としているテスタロッサ家に帰ってきた。

事件を追い始めてから、はやては安全なテスタロッサ家に泊まり込んでいる。

ヴォルケンリッターが全員出払わなければ、とても間に合わない上、敵の詳細も未だ不明だ。

リンディさん、プレシアさんというSランク以上の魔導師が二人もいるテスタロッサ家は、今この地球で最も安全と言えるだろう。

「吼太、お帰りなさい」

テスタロッサ家に入ると、プレシアさんが笑顔で出迎えてくれた。

「ただいま」

プレシアさんに笑顔を返し、リビングに向かう。

なんか後ろから「はぁぅ～」とかいう声が聞こえた気もするが、きっと気のせいだろ。

「吼太！どうだった？」

「アルフか。ビンゴだった。みんなと話がしたいんだけど……」

「あ～…まだ、シグナムとなのは、それからミカが帰って来てないんだ「「ただいまー！」」……なのはとミカは帰ってきたみたいだね」

アルフが苦笑いを浮かべる。

あとはシグナムか……

数時間後……

「……遅すぎですわ！」

待ち兼ねたようにプリムが言う。

確かに、何の連絡も無しにここまで遅いのは、あのシグナムにしてはおかしいか？

「まぁまぁ、プリム落ち着いて。……コッペパン食う？」

「要りません！」

ミカの言葉にもつっけんどんに答えるプリム。

「どうしたんだろ？」

「こないなこと初めてや……今までは必ず連絡くれてたから…」

フェイトとはやても心配そうだ。

……待てよ？

あの闇天の守護騎士……誰が一人と決めた？

もしかして、夜天の守護騎士が複数いるように、闇天の守護騎士も複数いるんじゃないか？

そして、あのザンクとか言うやつ。強さはかなりのものだった……

……オレ以外のメンバーでは勝てるか怪しいほどに。

そして、シグナムは単独行動で、比較的遠くの世界に行っていた。

……まさか！

「シャマル！今すぐにシグナムと念話を繋げ！」

「え？「いいから早くしろ！」は、はい！」

クソッ……仮にそうだとしたら冗談じゃ済まねぇぞ……

その時だった。

「こんばんは皆さぁん。お探しの人はこの方かぁなぁ？」

そんな声が外からした。

「誰！？」

なのはが瞬時にバリアジャケットを展開し、レイジングハートを構える。

しかし、レイジングハートを構えた時点で止まってしまった。

「ククク……ご機嫌いかがぁ？」

窓の外には、月をバックに空に君臨する男。

そして、その手には…

「シグナムッ！？」

はやてが叫ぶ。

奴の手は、ボロボロの騎士甲冑を身に纏った、満身創痍のシグナム

の髪が握られていた。

「おやおやぁ……どうやら、ご機嫌ナナメみたいだぁねぇ……ククク」

男が笑う。

シグナムは気を失っているのか、ピクリとも動かない。

「テメェ……シグナムを離せっ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを男にぶつけようと、急速で接近するが、男がシグナムを盾にしたことで急停止する。

「ダメだよぉ？……この娘がどうなっても…いいのかぁい？」

「……貴様…！」

まっくろくろすけもＳ２Ｕを構えながら反応する。

「広域結界！」

その時、ユーノの結界が発動し、男を閉じ込めた。

その瞬間、

「ディバインバスター！」

「ガーネットブラスター！」

「ブレイズキャノン！」

なのは、プリム、まっくろくろすけの砲撃が奴をピンポイントで貫く。

「やりぃ！」

アルフがガッツポーズをする。

だが……

「危ない危ない。……随分と乱暴なんだぁねぇ…」

奴は無傷でそこにいた。

「効いてない！？」

「なら私が！」

フェイトがハーケンフォルムのバルディッシュを振り下ろす。

例えダメージが無かろうと、衝撃が加われば多少なりとも掴む力は落ちる。

そこで救い出そうとフェイトは考えたのだろう。

だが、フェイトの攻撃はすり抜け、奴に何のダメージも与えられなかった。

「立体映像！？」

まっくろくろすけが驚いたように言う。

だとしたら本体はどこに…？

答えを出す者を使って探すが、情報が少な過ぎるのか、答えが絞りきれない。

「コングラッチュレーション！よくわかったぁねぇ。ご褒美に、今からこの虚偽の騎士、ホルクスがとっておきのショーを見せてあげるぅよぉ」

そう言うと、シグナムをバインドで空中に縛り上げるホルクス。

「何をする気だ！」

「……奪え。闇天の書」

『ザムルング』

ホルクスがその言葉を呟いた瞬間、何をする気かがわかった。

だが、今オレ達の目の前にいるのは立体映像。

本物まで、あまりに遠すぎた……

「ぐっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「シグナム！？シグナム！！止めて！なんで……なんでこないなことを！？止めて！！」

シグナムが悲鳴をあげ、はやてが泣き叫びながらホルクスに停止を呼び掛けるが……

「ククク……もう止まらないよぉ？君の家族、ヴォルケンリッターの将、シグナムが消えちゃうよぉ！？」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「ククク……ハハハハハハハハハハ！！！！！」

はやての絶叫が、ホルクスの嘲笑が辺りに響く。

そして……

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……主…はや……て……」

シグナムが、完全に消え去った……

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「チクショウ……チクショォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

「そぉれじゃぁあ、また会う日まで♪アディオス」

そして、虚偽の騎士、ホルクスはいなくなった。

この場に、巨大な絶望を残して…

# 第六十九話　闇天の守護騎士（後書き）

なっぺ「後書き座談会ですたい！」

吼太「……」

シルフ「可愛いですわ～」

なっぺ「またシルフが来ています」

ベス「吼太さんは麻帆良学園女子中等部の制服を着て、シルフさんに愛でられています」

なっぺ「新しい敵、闇天の守護騎士が本格参戦」

ベス「完全オリジナル展開ですね」

なっぺ「まぁ、意外とそうでもないかもよ？」

ベス「そういえば、前に正体不明の二人組がいましたよね？（第三十話参照）あれは闇天の守護騎士だったのですか？」

なっぺ「いんや？猫姉妹だよアレ。実はそのころはこんな展開になるなんて思っていなかったから、裏で暗躍させてたんだけど、使えなくなっちゃったんだよね」

ベス「無計画ですね」

なっぺ「サーセン。じゃ、感想感謝コーナー行こうか！Ａｒｉｓｈ

ｉａさん、七つ夜&夜つ七さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、緋水さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、ライさん。感想ありがとうございました！」

ベス「七つ夜&夜つ七さんのところの刹那さんからは吼太さんに【作者権限一ターン封印術式】を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはイチジクと巨峰のタルトを、バルディッシュさんのところのイネスさんからは麻帆良学園女子中等部の制服を頂きました。ありがとうございます」

なっぺ「タルトうまいね」

吼太「確かにうまい。ところで……助けてくれ」

なっぺ「作者権限一ターン封印されてるし、シルフを離すことは出来ないなぁ」

シルフ「ほっぺがもちもちですわ～」

吼太「……ベス！」

ベス「では私は仕事がありますので」

吼太「逃げんなお前！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

シルフ「本当、可愛いですわ～♪」

吼太「……む、胸が……苦しい……」

## 第七十話　凍りの解放（前書き）

吼太？今回は出ません。

今回は最近出せなかったリーム中心。

さらには、バトル。

そして、闇天の守護騎士の組み合わせになってます。

……前よりはマシかな…？

# 第七十話　凍りの解放

Ｓｉｄｅ　三人称

シグナムが倒された夜から、事態は一変した。

ヴォルケンリッターは魔力で造られたプログラムであり、蒐集されることは即ち消滅を意味する。

そのため、ヴォルケンリッターの三人は外出自体を禁じられていた。

三人とも歯痒さが顔に滲み出ていたが、他の人とは違い、例え集団で行動していても潰される可能性が高い。

今、闇の書は残りのヴォルケンリッターが全員蒐集されると完成してしまうほどにページが埋まってしまっている。

むざむざやられて、闇の書を完成させてしまうよりは、安全な場所に篭り完成を遅らせた方がいいとの判断が下された。

現在は、既に蒐集されてしまっているなのはやフェイト、リンカーコア自体が無いミカとトゥード、そしてやられる可能性がほぼ０の吼太が捜査の中心になっている。

トゥードは、人間態になることで頭数に加えられたのだが、なにぶんやはり手数が足らなすぎていた。

そのため、リームも吼太から離れ、単独で行動していた。

Ｓｉｄｅ　リーム

むぅ……

これはさすがに……

「ヤバイ……かな？」

僕の目の前には、シグナムとミカがいる。

二人とも戦闘体勢をとっているから、偽物に間違いない。

だけど、僕は基本的に近距離戦闘は得意じゃない。

特に、炎熱の魔力変換資質を持つシグナムとは相性最悪と言っても過言じゃない。

さらに言えば、今いる世界は、火山活動が活発で、人間ならばバリアジャケットを展開しなければとても生きていけない世界。

トドメに、通信障害まである。

……助けは、期待出来ないかな。

じゃあ、一人でやるしかないよね。

「行くよ……凍てつきの嵐よ！」

氷結の効果を持つ嵐を発生させる。

嵐は偽物達を凍らせて動きを止めるが、それも一瞬。

『シュランゲフォルム！エクスプロージョン！』

連結刃へと変化したレヴァンティンが、氷結の嵐を吹き飛ばした。

まぁ、これは予想してたから、あまり驚きはしない。

そして、吹き飛ばされた氷結の嵐に紛れて、ミカが突進してきた。

手には魔力で出来た巨大なスパイクが付いている。

どうやら、螺旋力までは真似出来なかったみたいだね。

「凍てつきの結晶よ！彼の者を貫く螺旋槍をこの手に！」

僕の手に、氷で出来たドリルが顕れる。

吼太のを見て、真似して創ったやつだけど、吼太のドリルを真似しただけあって、攻撃力はしっかりある。

スパイクとドリルがぶつかり合い、辺りに火花と氷の結晶が舞い散る。

ただ、地力に差があるみたいでどうしても押され気味になってしまう。

そこに、シグナムのシュランゲフォルムになったレヴァンティンの刃が飛んできた。

ギリギリで避ける。

だけど、僅かばかりほほを斬られてしまった。

……勝てないなぁ……今のままじゃ。

……しょうがないか。

「システムにアクセス。リンカーコアの第一ロックを解除。……ドライブ、イグニション！！！」

僕は、自身に課せられていた枷を、外した。

その瞬間、辺りに極低温のブリザードが吹き始める。

枷は、一回外すともう二度と付けられないから、外すタイミングはしっかり見計らわなきゃいけない。

そして、今がその時なんだ！

吹きすさぶブリザードは、偽物のシグナムとミカの動きをたやすく止め、レヴァンティン　シュランゲフォルムの刃は急激な温度変化により砕け散る。

辺りの火山活動も、僕の放つ極低温の空気により、急激に収まって行く。

「ごめんね……僕、もう手加減出来ないから…」

そう言い放って、僕の周りに纏っていたブリザードを、偽物二人にぶつける。

その瞬間、偽物は氷に閉じ込められ、砕け散った。

「……やっちゃったなぁ…」

周りを見てみる。

辺り一体は凍り付き、まるで凍土だ。

まぁ、少しずつ溶けてきてるみたいだから、多分大丈夫だろう。

もう、収穫はなさそうだし、帰ろう。

Ｓｉｄｅ　三人称

人知れぬどこかの世界。

そこに、二つの影があった。

ザンクとホルクス、闇天の守護騎士だ。

彼等の足元には、一人の女性の姿がある。

「あ、あなたたちは……」

「湖の騎士シャマル。そのリンカーコア、もらいうけるぞ…」

ザンクがそう言い、闇天の魔導書を開く。

「……蒐集」

『ザムルング』

「あ……」

悲鳴をあげる隙なく、シャマルは闇天の書に蒐集された。

「……」

「君は、まぁた、悲しんでるのかぁなぁ？」

ホルクスがザンクに、しな垂れかかりながら問う。

ホルクスにしろザンクにしろ、二人はいわゆるイケメンの男性だ。

周りに薔薇の花が咲きそうな危ない雰囲気の中、二人はまるで対照的な反応をしていた。

顔を赤くし、恍惚に酔うホルクスと、あからさまに嫌な顔をするザンクだ。

「私にしな垂れかかるな。気持ち悪い」

「つれないねぇ…ツンデレってやつかなぁ？」

「違うに決まっているだろう！」

全力で否定するザンク。余程嫌なようだ。

「で、どうなんだぁい？」

「当然に決まっている。このような闇討ち、好くわけがない」

ホルクスの問いに、つっけんどんに返すザンク。

「そうかぁい？僕は、好きだけどなぁ～」

「騎士道に反ずる。……といっても、私にその資格は無い、か……」

顔に自嘲の笑みを浮かべるザンク。

「そんな君だからこそ、僕は好きになったんだぁ…♪」

「ふざけるな気持ち悪い……闇の書が完成するまで、あと何ページだ？」

ザンクが聞くと、ホルクスは闇天の書を開き、調べはじめる。

「……やっぱ、青き狼、紅の鉄騎、あとはこいつらと同等ぐらいの一人で済むね」

「……ならば早く済ますぞ。私は、これ以上目覚めていたくはないのだ」

「ふぅ～ん…わかったぁよぉ…♪」

そう言い、闇天の書を持ったまま、転移するホルクス。

「……主よ。せめて、あなたの悲しみは可能な限り短く済ませます。それまでの無礼を、どうかお許しください……」

ザンクの誓いは、誰にも聞かれず壁に吸い込まれていった。

# 第七十話　凍りの解放（後書き）

なっぺ「後書き座談会！ウヌ！」

吼太「ガッシュの真似すんな」

なっぺ「リームのリミッターが一つ外れました」

吼太「なんか描写みるとすごいな」

なっぺ「と、言っても直接の戦闘では本物のミカには敵わない程度だけどね」

吼太「一つってことは、まだ上がるのか？」

なっぺ「あと、二つか三つぐらいはある」

ゆーちゃん「……最後がすごそうだね」

なっぺ「あ、今回はＡｒｉｓｈｉａさんのとこのゆーちゃんが来てます。詳しくは【魔法少女リリカル……なんとか！】にて！」

ゆーちゃん「あ、宣伝ありがとう」

なっぺ「いえいえ。じゃ、感想感謝コーナー！吼太とゆーちゃんで！」

吼＆ゆー「「バルディッシュさん、ライさん、香崎　真琴さん、天照大神さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、まーた

さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、七つ夜&夜つ七さん、雨季さん、朱神優希さん、月光閃火さん。感想ありがとうございました！」」

ゆーちゃん「……自分の作者が呼び慣れない」

吼太「そりゃそうだろうな」

なっぺ「バルディッシュさんからは死んだ世界戦線の女子制服、ＮＰＣ用女子制服を、香崎　真琴さんからは某格ゲーの春麗のチャイナ服と、さくらの制服を、天照大神さんからは約束された勝利の剣を、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんとこの遥からは吼太の精巧な身代わり人形を、まーたさんとこのメアからは物凄く短いスカートを、七つ夜&夜つ七さんとこのみんなからは無銘の刀を、朱神優希さんとこのみんなからは朝比奈さんのお茶とクッキー、メイド服、ウェイトレスの服、カエルの着ぐるみを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「クッキーうまいな」

ゆーちゃん「お茶もおいしいね」

なっぺ「ちなみに、七つ夜&夜つ七さんのとこから頂いた無銘の刀は、吼太の筋力、骨格、手の形、魔力、ｅｔｃ…に合わせて創られており、吼太の意思で猛毒性の刀に変わるという、かなり凄い武器です。……これとエクスカリバーはジッパーに入れとこう」

吼太「それじゃあ…「コスプレやるよ」やっぱりかよチクショウ！」

なっぺ「まず、吼太はＮＰＣの、ゆーちゃんはＳＳＳの制服だ！」

吼太「……慣れてしまいかかっている自分が憎い…！」

ゆーちゃん「は、恥ずかしい…／／／／／」

なっぺ「キャラがぶれないな。次は、吼太が春麗の、ゆーちゃんがさくらの制服だぜ！」

吼太「……身体のラインが……／／／／／」

ゆーちゃん「これ、お腹が出ちゃうんだけど…／／／／／／」

なっぺ「次！吼太がメイド服でゆーちゃんがウェイトレス制服！ちゃんと相応しい言葉も言うんだぞ？」

吼太「お、お帰りなさいませ……ご主人様……（メイド服なんて……恥ずかしい…）／／／／／」

ゆーちゃん「ご注文は何にしましょうか…（スカートが短い…）／／／／／」

なっぺ「よし。最後はゆーちゃんにはサービスでカエルの着ぐるみな。吼太は物凄く短いスカート、そして、上はふわふわした服でまとめてみました」

ゆーちゃん「これならまぁ…」

吼太「ーーーッッッ！？（み、見えちゃう…！）／／／／／／」

＊「……見え……見え……！」

なっぺ「どこぞの時空から飛び込んできた寛黙なる性識者は放っておいて…カエルはカエルで愛らしいな」

ゆーちゃん「そう？」

＊「ふぉぉぉ～！」

吼太「見るなぁぁぁーーーッ！！！」

なっぺ「ではではこの辺で！」

ゆーちゃん「次回もお楽しみにね～♪」

## 第七十一話　どーするか…（前書き）

今回は状況説明な感じなので、つまらないです。

# 第七十一話　どーするか…

Ｓｉｄｅ　吼太

「シャマルがいない！？」

帰ってきて、早々に言われたことがそれだった。

プレシアさんとリンディさんが、はやてとヴィータに注意を向けてた、一瞬の内に消えていたのだという。

「ごめんなさい……本当にごめんなさい…」

プレシアさんが本当に申し訳なさそうに謝ってくる。

「謝るのはいい！それより、完成まであと何ページだ！？」

オレが聞くが、すぐには誰も動かなかった。

いつもはシャマルがページの確認をしていたため、全員が「自分が見る」という行為を思いつけなかったのだ。

それにいち早く気づいたリンディさんが、闇の書を開き、ページを確認する。

「……６０ページ、といったところね。恐らく、ヴィータさんとザフィーラさんが倒されても完成まではいかないわ。……同じレベルの人のリンカーコアをさらにもう一つ蒐集していなければね」

「……つまり、ＡＡＡランク以上の魔導師三人分……」

「えぇ。魔導師で考えると、少ないとはいえ全くいない訳じゃないわ」

なのはの呟きに、リンディさんが補足する。

「……多分、やつらは闇の書に通じる何かを持っているはずだ。それさえ奪えば…」

「闇の書の完成は、阻止できる……だよね？クロノ」

「あぁ」

まっくろくろすけの推測に同調するユーノ。

「……なぁ、シグナムやシャマルは、もう戻ってこれへんの？」

不意にはやてが聞いてくる。

何せ、家族を失ってしまったも同然だ。そのショックは、計り知れない。

僅かな希望に縋りたくなる気持ちもわかる。

オレだって、そのためにさっきから闇の書を複写眼（アルファ・スティグマ）で解析し続けているんだ。

だが、わかるのは他愛もない機能や情報ばかり。

破損したデータを復元解析したら、料理のレシピだったり、長いこと起動されてなかった動画データを再生したら、自尊心の強そうなやつの自己ＰＲビデオだったり、正直、ここまで役に立たないデータばかりだとは思わなかった。

やはり、本格的に起動しない限りはろくな干渉が行えないらしい。

……いっそＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒで片っ端から書き換えちまうか…？

「わからない……としか言えないわね…」

リンディさんは、そう答えるしかなかったようだ。

はやてが目に見えて落ち込むが、はやてに構ってあげられる時間はあまりない。

「にしても……どうする？ここにいる魔導師は低くてもＡＡＡランク、さらにあいつらの主が住んでる世界の近くにいる。オレら格好のカモじゃねぇか。危険じゃないのか？」

「ん？何故彼等の主がここの近くだと断定できるんだ？」

オレが言うと、まっくろくろすけが不思議そうに聞いてきた。

「偽物はあちこち、様々な場所に出ているが、守護騎士達だけはここ近辺の世界以外には現れてない。恐らく主に何かあったときにすぐに戻れるようにそんな行動をしてるんだろう。それに、最大の障害であるオレ達の拠点が主の近辺にあるんだ。とても遠出なんか出来ねぇだろ」

「へぇ……バカなわりにはやるじゃないか」

「褒め言葉として受け取ってやる」

まっくろくろすけの皮肉を軽く流す。

だが、オレは迷っていた。

どこへ向かえばいいのか、何をすればいいのか、何を守ればいいのか……

オレがはやてやヴィータ、ザフィーラを守れば、ほぼ確実に守り切れるのは間違いない。

だが、その間に他のやつらから蒐集されたらそれで闇の書は完成してしまう。

逆に、オレが探しに出れば何かは見つけられるだろうが、その間にヴィータやザフィーラが蒐集されかねない。

……どうすれば…

「とにかくこの地球を中心に、闇天の魔導書の主を捜しましょう。吼太も心配な気持ちはわかるけど、捜しに行ってちょうだい」

「……わかった」

Ｓｉｄｅ　？？？

もうすぐ……

もうすぐ始まってしまうのだな……

主はやてを守る守護騎士も、残りは二人。

恐らく、止めることは出来ない……

ならば、せめて……

夢を……

Ｓｉｄｅ　クロノ

「ここもハズレか……」

僕は今、アマゾンとかいう地域に来ている。

ここで、闇天の守護騎士にも似た魔力反応が確認されたため、確認に来たのだが、既に逃げたあとだったらしい。

ただ、今回はいつもとは僅かに違う。

いつもならば、辺りからは【命】の気配を感じることが出来ないような景色が広がっているはずなのに、今回は開けた場所すら見当たらない。

闇天の守護騎士ではないのか？

「エイミィ。反応は間違いないのか？」

『おっかしいなー、確かにここらにいたはずなんだけど……あれ？』

「どうした？」

『この反応……なのはちゃん？いや……微妙に違う……』

どう言うことだ！

僕がそう言おうとした瞬間、何かの気配を感じ、その場から離れる。

そのすぐ後に、桜色の砲撃がさっきまで僕のいた場所を撃ち抜いた。

「くっ！敵か！？」

砲撃を撃ってきたと予測できる場所を見ると、そこには……

「なのは……？いや、違うな……貴様は何者だ！」

「初めまして。私は……マテリアルS、星光の殲滅者です」

## 第七十一話　どーするか…（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

優「始めるよ」

詩音「優お兄ちゃんだー♪」↑優に抱き着く

吼太「（優の知り合いか？それにしちゃ、どっかで見たような顔だな…）」

なっぺ「さて、マテリアルが登場しました」

吼太「だな」

なっぺ「あらかじめ言ってくと……私はなのポ未経験者です！」

吼太「おい！？ならなんで出したんだよ！？」

なっぺ「いつやるかわからない第四期のために、戦力が欲しかったから」

吼太「うわ～、すっげーいい加減」

なっぺ「なので台詞回しとか違和感ありまくりだと思いますが、あらかじめご了承下さい！」

吼太「つーことは偽物ってなのポの？」

なっぺ「いや、まぁ、それも無くはないけど違う……かな？」

吼太「はっきりしろ」

なっぺ「ネタバレになるかもだから言わない。それじゃあ優と詩音の二人で感想感謝コーナー頼むぜ！」

優「わかった」

詩音「うん！」

優＆詩「「ライさん、七つ夜＆夜つ七さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、月光閃火さん、朱神優希さん、天照大神さん、緋水さん、バルディッシュさん、まーたさん、雨季さん、香崎　真琴さん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんとこから、ホモクスに魔理亜の料理（口の中に直接転送）を、ザンクに刹那の全技術を詰め込んだ刀を、Ａｒｉｓｈｉａさんからは二人になる薬と性転換薬を、朱神優希さんからはバニー服を、バルディッシュさんからはティオの服を、雨季さんとこの神からはスク水、ランドセル、ネコミミを、香崎真琴さんとこからは副作用０、後遺症無しの性転換薬……液体、粉、錠剤の３タイプをそれぞれ１００回分程頂きました！ありがとうございます」

吼太「性転換薬多過ぎだろ！」

なっぺ「さて、まずは吼太。バニーな」

吼太「な「答えは聞いてない！」うわぁぁぁぁぁ！？／／／／／／／／

／」

詩音「わぁー、可愛いね～♪」

吼太「言わないでくれ！」

なっぺ「さて、ティオの服はアリサの方がいいな……保管しとこうか。じゃあ詩音。スク水、ランドセル、ネコミミのスラネコンボを……」

優「イミテーションバスター！」

なっぺ「危なっ！」

優「ダメだよ？そんなことしちゃ？」

なっぺ「（恐ァァァァ！！だ、だが……）賭けはオレの勝ちだ！」

詩音「えへへ～似合う？」↑ウェディングドレス

吼太「なんでまた…ｏｒｚ」↑ウェディングドレス

優「いつの間に！？」

なっぺ「隙ありっ！」

優「え？」↑白タキシード

なっぺ「カメラで撮って、画像を保存。タイトルは【すけこまし＆ロリショタコンの暁優君、ついに結婚！】っと……」

優「なんかすごい誤解されそうなタイトルが！？」

吼太「ふざけんなテメェ！ジオ・インパクト！」

なっぺ「当たらなければどうということはない！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

ちなみに今回撮影された画像は優ラバーズのみんなに自動配布されますので悪しからず（笑）

## 第七十二話　根本的な考え方はやっぱ同じみたいだ（前書き）

初めは説明、真ん中ギャグで、最後シリアス。

……どうも最近ギャグ成分が少なかったのが原因らしいです。

# 第七十二話　根本的な考え方はやっぱ同じみたいだ

Ｓｉｄｅ　クロノ

「星光の…殲滅者…？」

「はい。闇の書の防衛プログラムの【理】を司る、闇天から天を取り戻す存在。それが私です。あと、他にも【力】を司るマテリアルＬとそれらを統べるマテリアルＤがいます」

ずいぶんと丁寧だな……

「それで、闇天から天を取り戻すとはどういう意味だ？」

「貴方には関係ありません。そこをどいてください。邪魔です」

「何が何だかよくわからないが、許可無く管理世界で砲撃魔法を行使した君を放っておくわけにはいかない。僕は執務官だからな」

そう僕が言うと、星光の殲滅者はその顔を少し歪ませる。

「……わかりました。ですが、後にしてください」

「後とはどう言う意味だ」

「後で説明します。……パイロシューター！」

星光の殲滅者は、桜色の魔力弾を三発、僕に向かって放ってきた。

急いでプロテクションを張るが、もしもなのはと同じ威力があるなら、確実に破られるな…

だが、僕の思いとは裏腹に、魔力弾は僕の後ろへと飛んでいった。

「……気づかれちゃったかぁ」

「!?誰だ!」

振り返ると、そこにはシグナムを倒した魔導師、ホルクスがいた。

「よく気づいたねぇ……頭撫で撫でしてあげよぉかぁ…?」

「必要ありません。あなたは今ここで潰します。ブラストファイヤー!」

星光の殲滅者が桜色の砲撃を放つ。

砲撃はホルクスを射線上に捉えるが、不意に発生した黒い霧によって吸収される。

「危ないねぇ……同じ闇から生まれたものどうし、仲良くしようよぉ?」

「貴方みたいな変態と仲間になるなど、死んでもお断りです」

「じゃあ……君にはこんな相手を用意してあげよぉう」

そうホルクスが言うと、黒い霧が集中し人の形を作る。

それは、僕が一番よく知っている姿。

「……僕だと!?」

「クッ……!」

そして、現れた僕の偽物は、僕に襲い掛かってきた。

どうやら、この隙にホルクスは逃げたらしく、姿が見えなくなっていた。

「「クッ!偽物なんかにやられるか!」」

……

「「ハモるんじゃない!」」

Ｓｉｄｅ　星光の殲滅者

……

「見分けがつきませんね……」

攻撃のしようがありません。

私の標的は闇天から生まれし者全て。

片方は私の標的なのですが、もう片方は私の標的ではありません。

……とりあえず、

「パイロシューター！」

適当に片方に向けて誘導弾を放つ。

それが片方に命中する。

「痛っ！僕を狙うんじゃない！」

……もう一方をパイロシューターで狙う。

バシッ

「痛っ！僕を狙うんじゃない！」

……

「もういいです……非殺傷でも偽物は消せますし……」

魔力を溜める。

そして……

「集え、明星…全てを焼き消す焔となれ」

「「……ん？」」

「ルシフェリオォォォン…ブレイカァァァァーーーーー！！！！！」

……やはり、偽物は消えたみたいですね。

やはり全力全開でいって正解でした。

「君は僕に恨みでもあるのか！？」

「ありません」

あるわけがないじゃないですか。

初対面ですし。

「ま、まぁいい……とりあえず話を――」

ザクッ…

「グッ……ガハッ……！？」

あの黒い魔導師の腹部から、突然大量に血が…！？

まさか……！

「悪いねぇ……やっぱり君を頂くことにしたんだぁ…♪」

「ガ……ひ、卑怯者…！」

「ルシファーセイバー！」

ルシフェリオンに魔力刃を発生させ、虚偽の騎士を攻撃する。

だが、不意に現れた烈火の将に防がれてしまう。

「どきなさい！烈火の将！」

「あぁそれ、僕の偽物だかぁらぁ…会話なんて出来ないと思うよぉ？」

「くっ……セイバーファイヤー！」

魔力刃を砲撃に変換し、烈火の将の偽物を消し飛ばす。

しかし、虚偽の騎士はもう逃げたあとのようで、攻撃された魔導師は……

「ガフッ……ァ……」

既に、虫の息だった……

「星光の……殲滅者、とか言ったか…」

「喋らないで下さい！傷に響きます！」

「いや、いい……それより、吼太という奴の元へ向かえ……君の、助けになるだろう……」

黒い魔導師の身体が、粒子化していく…

「わかりました……だから……だから…」

「それで……伝えておいてくれ……僕は……君を……友達だと……」

フッ

「あっ！星光の殲滅者が帰ってきたよ！」

「どうであったか？……どうした？涙などを流して……お主らしくもない…」

「……行きますよ。私は、償わなければならなくなりました……」

「えっ？」

あの方の、意志を継ぐために……！

## 第七十二話　根本的な考え方はやっぱ同じみたいだ（後書き）

なっぺ「後書き座談会！なのじゃー！」

なのじゃー！

なのじゃー…！

なのじゃー……！

なのじゃー……

吼太「エコーかけんな」

なっぺ「ちなみに、クロノは星光にフラグ建てちゃいませんよ？星光は責任感じてるだけです」

吼太「どうでもいい」

なっぺ「だって変態クロノ君を操れるのはＢＬ大好きエイミィ姉さんだけだもん」

吼太「なんでこの小説には変人、変態しかいないんだ？不思議だ…」

なっぺ「それを言うなら、感想書いてくれてる人すら変態にするお前のほうが不思議だろ」

吼太「……良識を持ちましょう…」

なっぺ「んじゃ感想感謝コーナー行くぜ！吼太、ＧＯ！」

吼太「ライさん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、七つ夜＆夜つ七さん、天照大神さん、バルディッシュさん、緋水さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん、雨季さん、香崎　真琴さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「ライさんからはスイーツランドを、七つ夜＆夜つ七さんとこのラストからはカレーな代行者の服を、バルディッシュさんとこのイネスからはイネスの服を、緋水さんからは媚薬に睡眠薬に精力剤を、朱神優希さんからは長門が着てた魔法使いの服と北高の女子用の制服を、雨季さんからはスキマ妖怪の服を、香崎　真琴さんからはドリーミングスーツ（セットで付いているリモコンを持ってるヤツの妄想（イメージ）通りの服に変わるハンパ無いスーツ）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「テレポート！」

なっぺ「逃がすか！」

ベス「追いかけっこはたいがいにして下さいね～」

なっぺ「遅い！たぁーっ！」

吼太「うわっ！？これ……シスターか？」

なっぺ「台詞台詞」

吼太「カレーは飲み物です……？」

なっぺ「飲め」

吼太「……」

ごくっ

吼太「ごぶっ！？」

バタッ

ベス「倒れましたね」

なっぺ「まぁ、カレーを飲み物みたいに飲んだらこうなる……か？」

アリス「私が作ったよー！」

なっぺ「……納得。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第七十三話　正義の味方ＶＳ歪みの騎士（前書き）

バトル比較的たくさん。

んで、ギャグはありません。

……Ａ’　Ｓ編もまだまだ続きそうです。

# 第七十三話　正義の味方ＶＳ歪みの騎士

Ｓｉｄｅ　リーム

「嘘でしょ！？もう一回調べて！」

「今やってる！」

クロノ君が死んだって……

いくらなんでも有り得ない…！

だって、コータが認めてた男の子だよ？

「まぁ、アイツはアイツで強いやつだよ」って言ってたんだよ？

有り得ない……！

『こちらフェイト・テスタロッサ！』

「フェイトちゃん？どうしたの！？」

『今、闇天の守護騎士と戦闘中。応援をお願い！』

「わかった！リームちゃん！私も吼太君に連絡をしてみる！」

「うん！」

だけど今は、戦うしかないんだ！

Ｓｉｄｅ　フェイト

強い……

シグナムも強かったけど、この人はそれ以上だ。

一瞬でも油断したら、持ってかれる…！

だけど、私の身体は長時間の戦闘で既にボロボロだった。

バリアジャケットのあちこちから血が流れ、少しでも気を抜いたら倒れてしまいそうだ。

「中々やるな。テスタロッサ……と言ったか？」

「はい…！」

「スマナイ、見くびっていたことをここに謝罪しよう。お前に敬意を表し、我が最強の剣、最強の技でお前を倒す……！」

「……！」

「だからお前も全力で抗ってみせろ！私はそれを超え、お前を倒す！」

そう言い、相手の騎士……ザンクは一本の剣を虚空から取り出し、構える。

その構えには、一分の隙も無い。

対して私の最強の一撃……

ハスタームーブとソニックフォームの状態から繰り出す、神速の連撃【ラピッドプラズマザンバー】。

だけど、フルドライブはまだ危険だし、第一ハスタームーブとソニックフォームの組み合わせに問題点がある。

……制御が出来ない問題点が…

だけど、この人は全力全開で私に挑んでくる。

力の差なんて関係無しに。

だったら……やるしかない…かな？

ボロボロの身体に鞭打って、ゆっくり立ち上がる。

「ちょっと待ったぁぁぁ！」

その時、紅い閃光が私の後ろから飛び出し、ザンクに襲い掛かった。

「オレの友達を……やらせるかよ！」

コータだ。

「貴様……私の決闘を邪魔するか！」

「決闘だぁ！？バカ言うんじゃねぇ！もう決着はついてるだろうが！」

確かに、傍目から見たら勝敗は明らかだろう。

かたや無傷で、かたやボロボロ。

喧嘩として考えるなら、もう決着はついている。

「死合いに決着がつくのは、どちらかが死んだときのみだ！」

「そういうの……気に入らねぇんだよぉ！」

互いの剣がぶつかり、辺りに衝撃波を撒き散らす。

「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

剣閃が閃き、お互いの命を狩りとろうと動く。

『フェイト、今の内に逃げろ！』

『えっ！？』

不意に、コータから念話が入る。

『このままじゃ、もう一人の守護騎士が来たときにお前を守りきれないかもしれない！だから……引いてくれ！』

『……わかった』

「バルディッシュ」

『イエスサー』

転送魔法陣を展開し、この場から逃げ出す準備をする。

「逃げる気か！」

「お前が勝ったって何度言えばわかるんだっての！」

「死合いの決着は殺害のみだ！」

「だからぁ……そういうの気に入らねぇってんだよ！」

コータ……ちゃんと帰ってきてね…

Ｓｉｄｅ　吼太

「おのれ……」

「ハッ！喧嘩だったら相手になるぜ！」

「私の剣を愚弄するとは……もう前回のようにはいかんぞ！」

「それはこっちの台詞だ！」

ジッパーの中から、二本の刀を取り出す。

一本は、小烏丸。

もう一本は、天上天下天地無双刀。

天上天下天地無双刀を右手、小烏丸を左手で持ち、構える。

「行くぜ」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＣＬＯＣＫ　ＵＰ】』

その瞬間、オレの全てが加速する。

「烈風……双牙！」

烈風・双牙。浅葱流剣術【烈風】を二本の刀を使い、二連続で繰り出す応用技だ。

クロックアップした状態から放っているから、オレから見ると巨大な風の塊が在るだけにしか見えないんだけどな。

さらに、ザンクを中心に、四方八方から烈風・双牙を何発も撃ち込む。

これで、ザンクの逃げ場は完全に無くなった。

「終わりだ！」

ズガガガガガガガァァァァ！！！！！！

もの凄い量の暴風がザンクに襲い掛かり、土煙を巻き起こす。

「やったか！？……って時は必ず…」

「それで終わりか？」

「だよなぁ……」

ザンクは無傷で立っていた。

どうやら、刀の一振りで全ての烈風・双牙を斬り裂いたらしい

さて、次はどうするか……

「そちらから来ないなら、こちらから行くぞ！」

一言断り、ザンクは剣を構えて一直線に突っ込んできた。

その勢いは、まさに神速の領域。

「奥義……【刹牙束】《せつげつか》！」

ザンクが叫んだその瞬間、オレの全身から血が噴き出した。

「な!?（攻撃が…見えなかった!?）」

「見えなくて戸惑っているのか?」

考えを見透かされたらしく、思っていたことを言い当てられた。

「無理も無い。光すら超えた速度で繰り出される斬撃。視覚に留まるわけが無い」

「……だったらこれだ!」

刀を仕舞い、ディケイドライバーを装備する。

「変身ッ!」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】!』

仮面ライダーディケイドに変身する。が、今回の目的は別のライダーだ。

「速い動きに対抗するなら……これだ!」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＫＵＧＡ　ＰＥＧＡＳＵＳ】!』

カードを装填し、仮面ライダークウガ　ペガサスフォームに変身する。

さらに……

「ついでだ!超変身ッ!」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＫＵＧＡ　ＲＩＳＩＮＧ】！』

ペガサスフォームから、その能力を更に高めたフォーム、ライジングペガサスに超変身する。

人間の数万倍の五感を持つこの形態なら、例えハイパークロックアップしている物体であろうと捕捉出来る。

そして、ライジングペガサスボウガンを油断無く構える。

「来いよ。刀を撃ち抜いてやる」

「出来るか……試してみろ！」

ザンクが、再び刹牙束を放ってくる。

が……

「……そこだっ！」

一瞬を突き、ザンクの刀を撃ち抜いた。

衝撃に耐え切れず、根本から砕け散るザンクの刀。

「な……私の怒鬼（どき）を砕いただと…！？」

「その技、確かにすげぇ威力だけど……防がれた時のことを考えられてねぇぜ。お前の思い通りに刀が動いてる間は大丈夫だけど、いざ別の力が加わると、異常な負荷がかかって、刀が耐え切れないん

だ」

「ふっ……やるではないか」

……笑った？

「刀が折れてしまった以上、今回は私の負けだ。だが、いつかリベンジさせてもらうぞ」

「へっ……返り討ちにしてやるよ！」

どうやら、オレ達の間には奇妙な絆が生まれたらしい。

Ｓｉｄｅ　ホルクス

ねぇ……君は何故そんなイイ顔をその蛆虫に見せているのかぁい……？

君の全ては僕のものだというのに……

そんな顔をさせるやつはすぐに殺……

……いや、もっといい方法がある…

八神はやて……

あいつに……あの蛆虫を殺させる……

そうすれば、僕達はまた、あの闇の中に二人っきりだぁ……

ふふふ……ハハハハ……アハハハハハハハハハ！！！！！！

## 第七十三話　正義の味方ＶＳ歪みの騎士（後書き）

なっぺ「後書き座談会そりゃそりゃあ！」

吼太「もう何も言わない」

なっぺ「バトルは書いてて楽しいね。時間かかるけど」

吼太「だったらもっと密度濃くしろ」

なっぺ「無理言わないで！？」

吼太「全く……駄文なんだからせめてバトルをしっかり描写しろよ」

なっぺ「……すいません。じゃ、感想感謝コーナー」

吼太「七つ夜＆夜つ七さん、ライさん、天照大神さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん、緋水さん、香崎　真琴さん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんのとこからはお握り、フェニックスの尾、エクスカリバー・ガラティーンを、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからは赤いマフラーを、バルディッシュさんからは熾天覆う七つの円環を、香崎　真琴さんとこからは私立桜高校の制服を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「意外と武器関連が来ましたね」

リーム「【意外と】ってのがいつもの異常さを物語ってるよね」

なっぺ「さぁ、長門が着てた魔法使いの服を着るんだ吼太！とやーっ！」

吼太「優ガード！」

優「えぇっ！？」

なのは（優のとこの）「お持ち帰りなのー！」

ヴィヴィオ（優のとこの）「パパ可愛いー！」

優「うわぁぁぁぁ……」

なっぺ「チィッ……ならばこの私立桜高校の制服を……」

吼太「エクスカリバー・ガラティーン！」

なっぺ「効かぬ！」

吼太「……レムリア・インパクト相乗掛合！」

なっぺ「効か」ジュッ

ベス「昇華しましたね」

リーム「ではではこの辺でー！次回もお楽しみにねー！」

## 第七十四話　闇、窮まる（前書き）

さて、ラストが近づいて参りました。

……長かった…

まぁ、まだまだありますけど。

# 第七十四話　闇、窮まる

Ｓｉｄｅ　はやて

なんや、最近いろいろあって……

何が何だかようわからん感じなんやけど…

とりあえず、凄く大変なことになってるのはわかる。

だけど、私は何の役にもたててない。

……何やってんやろな？私…

結局、私はいつだって守られてるばっかや。

……私、完全にお荷物やな…

「はやて、大丈夫？」

ヴィータが話し掛けてくる。

「ん？あぁ。大丈夫やよ～。心配かけてごめんなヴィータ」

「アタシはいいよ。それよりはやてが心配だ」

「今はみんな頑張ってるし、私だけがのんびりしてたらいかんなぁって思ってただけやから。気に……し……」

あれ……急に…目眩が……

「はやて！？はやて！？」

「どうしたヴィータ！」

「コータ！はやてが！はやてがぁ！！」

コー…タ……君

Ｓｉｄｅ　吼太

はやてが倒れた。

現在も意識不明のままだ。

とりあえずは、はやての通院してた病院に預けている。

だが、これはつまり闇の書の完成が近いということだ。

ページ数の問題ではない。時期そのもの……つまりははやての身体の限界が近くなり、闇の書が完成を急かしているのだ。

……クソッ！

奴らが偽物を無駄にばらまいてるせいで、中々捕捉が出来ないってのに…！

「コータ……はやては大丈夫だよな？死んじゃったりしないよな！？」

「大丈夫だ。大丈夫だから…少し落ち着け」

戦えば確実にオレが勝つ。

相手側もそれがわかっているのか、最近はただ逃げ回っているだけだ。

『吼太君！聞こえる！？』

不意にエイミィさんから連絡が入る。

「どうしたんですか？」

『敵の守護騎士が二人とも海鳴に現れたの！急いで向かって！』

「分かりました！……じゃ、行ってくるな。ヴィータ」

「コータ……」

オレは、夜空に翔び立つ。

不安を抱えたままの、ヴィータを残したまま……

「見つけたぜ！ザンク！ホルクス！とっととお縄につきやがれ！」

「おやおや、見つかってしまったぁねぇ」

「御託はいい。殺るぞ」

ザンクが剣を振る。オレの皮膚が僅かに切れる。

「前より速い！？」

「……血鬼（けっき）。お前の血を気に入ったらしい。血を吸わせろと私の手の中で震えているぞ」

「ハッ……オレの血は高くつくぜ！」

その時、二人のシグナムがオレに斬り掛かってきた。

「同じ偽物！？くっ！ハンドソニック！」

ハンドソニックで二本のレヴァンティンを受け止める。

「同じ偽物を同時に出せないなんて、誰が決めたんだぁい？」

「上等……だぁっ！」

その場で高速回転し、シグナムの偽物を細切れにする。

「行くぜ……ダウンロード！スラッシュエンジェモン！武装召喚（リアライズ）！」

待ってろよ……はやて……！

Ｓｉｄｅ　なのは

「ディバインセイバー！」

シャマルさんの偽物をディバインセイバーで斬り裂く。

あまり慣れられるものじゃないけど、仕方ないよね。

「なのは！後ろ！」

不意にフェイトちゃんの声が聞こえた。

後ろを振り向くとそこには……

「青い……フェイトちゃん？」

「ん？お前は虚偽のやつが創ったやつじゃないのか。紛らわしいなぁ」

私に言わないで欲しいの。

「んじゃあっちは偽物だね！光翼斬！」

青いフェイトちゃんは、ハーケンセイバーみたいのでいつの間にか現れていた私の偽物を斬り裂いた。

……やっぱり自分がやられるのを見るのは慣れないの。

「雷刃の襲撃者！闇統べる王が広域殲滅をする！急いで離れろ！」

「分かった！……ほら君も早く！」

「ふぇぇ！？」

その場から急速に離れる私達。

「絶望にあがけ……塵芥。エクスカリバー！！！」

刹那、巨大な光が天空から降り注ぎ、辺りの偽物をねこそぎ薙ぎ払ったの。

「ふん……塵芥ごときが我に刃向かうからこうなるのだ！」

あれは……紫色のはやてちゃん？

ってことは……

「闇統べる王。私の警告が間に合わなかったならば、味方も巻き込んでしまっていましたよ」

「そんなもの、巻き込まれるのが悪い」

やっぱりと言うべきか、赤黒い私もいた。

「あの……あなた達は？」

恐る恐る聞いてみる。

「私達は闇の書の闇……その防衛システムの【理】と【力】、そしてそれらを統べる【王】のマテリアルです」

……

えーっと……つまり何？

「あの……要するに…？」

「そーだぞ星光の殲滅者！僕にも分かるように言えー！」

私の近くにいた青いフェイトちゃんも言う。

「あなたは黙ってください」

赤黒い私はにべもない。

それから、赤黒い私……星光の殲滅者…星光ちゃん？の話を理解するまで、数十分もかかったの。

……だって難しいんだもん。

「……というわけです。分かりましたか？」

「な、なんとかぁー……」

「あーっ！分からないぞ星光の襲撃者！」

「えと……私もイマイチ…」

フェイトちゃんも分からなかったんだ。

「……私、投げ出してもいいですか？」

赤黒い私は何故か泣きそうになっていたの。なんでだろ？

「……！？これは……星光の殲滅者！雷刃の襲撃者！遊んでいる場合では無くなったぞ！闇の書の主が危ない！」

私達の間に、戦慄が走った。

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太ＶＳザンク＆ホルクスの戦いは、吼太が優勢に進めていた。

武装召喚や、ディケイドの能力、召喚獣に加え、相乗掛合により無

限大の攻撃方法を持つ吼太からすれば、たった二人だけで……例え無数の偽物を含めたとしても、勝てるわけがないのだ。

現在は、本来の形で召喚したスラッシュエンジェモンがザンクの相手を、エアームドやムクホーク、ピジョット等のとりポケモンが偽物を次々と倒していた。

そして吼太は……

「ステューピファイ　麻痺せよ！」

「当たらないぃよぉ～」

ホルクスを少しずつ追い詰めていた。

「チッ……ちょこまかと」

「あ～、恐い恐い～」

「なら逃げられないような攻撃だ！ヴァルセレ・オズ……」

「いいのかなぁ～？僕なんかに構っててぇ～」

「……虚言なら聞き飽きたぞ」

「闇の書の主……その警護についてる魔導師の内、強いやつは僅かに数人。さぁて、そこに偽物を大量に送り込んだら、どうなるでしょぉ～か？」

……まさか！

「ホルクス！それは本当か！？」

問い詰めたのは、意外な人物だった。

スラッシュエンジェモンを弾き飛ばし、体勢を立て直していたザンクだ。

「おや、不服かぁい？にしても、君の怒った顔も素敵「戯れ事は後にしろ！」……本当だよ。今頃はきっと……」

その時、はやて達がいる辺りから、巨大な光が立ち上った。

「ハハハハ……闇の書の……覚醒だ！」

ホルクスは、高笑いをしながら叫んだ。

オレ達全てを、嘲りながら……

## 第七十四話　闇、窮まる（後書き）

なっぺ「後書き座談会！オッペケペムッキー！」

吼太「何を追い掛けろと？つーか日本語で話せっての」

なっぺ「とうとう覚醒」

吼太「ヤバイなぁ…」

なっぺ「頑張れよ。さて巷で大不人気のホモクス。奴はある意味最悪の結末を迎えます。つーか迎えさせます。フルボッコにもします。安心してください」

吼太「じゃ、感想感謝コーナー行くぞ。えんヴぃいさん、七つ夜＆夜つ七さん、朱神優希さん、天照大神さん、緋水さん、バルディッシュさん、ライさん、香崎　真琴さん、まーたさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんのとこからは狐が作ったお稲荷さんを、バルディッシュさんからは直井コスプレセットを、香崎　真琴さんのとこからは虚断、虚撃を、まーたさんのとこのメアからはひもが物凄くゆるくなっているブルマを、Ａｒｉｓｈｉａさんからは性転換薬と幼児化薬を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「じ「何を勘違いしているんだ……」…は？」

なっぺ「まだお前のコスプレが終了してないぜ！

吼太「……じゃあ直井コスプレセットを」

なっぺ「体操服は用意してある。ブルマを履きなさい」

吼太「だが断る」

なっぺ「そいつぁ無理な話だ。最近ギャグがうまく混ぜられなくて鬱憤が溜まっているんだ。お前で晴らさせてもらうぜ！」

吼太「な！」↑装備

なっぺ「どこまでも追い掛けるタコはサービスです。あ、能力は全禁止だから」

吼太「待てやお前！」

なっぺ「これでお前は逃げながらブルマがずれ落ちると言う恥辱か、触手（ｒｙのいずれかを選ばなければならなくなったのだ！さぁ！嫌なら走れ！」

吼太「クッ……ぁ……落ちる……！／／／／／」

なっぺ「ほらほら、だんだん落ちてきたぞ～」

吼太「あぁぅあ…ずり落ちちゃう……／／／／／／／」

なっぺ「脚を止めたらタコが……！」

吼太「うぁぁぁぁ！！」

なっぺ「走ったらブルマが！」

吼太「チクショォォォ！／／／／／」

なっぺ「フム、下着も変えといて正解だったな」

吼太「いつの間に！？」

なっぺ「いざ見えても安心なように？それよりタコタコ」

吼太「ぁぁぁぁぁ／／／／／」

なっぺ「あ、捕まった。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第七十五話　海鳴大学病院で起こった、悲劇（前書き）

はい。覚醒するまでの経過を書きました。

# 第七十五話　海鳴大学病院で起こった、悲劇

Ｓｉｄｅ　三人称

時は少しばかり戻る。

場所は海鳴大学病院。

はやてが入院している病院だ。

そこにはヴィータとザフィーラ、二人のヴォルケンリッターと、プレシア、アリシア、リンディ、アリス、ライラが警護に当たっていた。

「リンディ、大丈夫？」

プレシアが声をかける。

気丈に振る舞ってはいるが、息子であるクロノを失っているのだ。

その苦しみは、プレシアにはよくわかった。

「えぇ、大丈夫……泣くのは、この事件が終わってからって、決めてるから…」

そう言い、プレシアに笑顔を見せるリンディ。

だが、その笑顔が無理をして作ったものであることは、誰の目から見ても明らかだった。

『艦長！敵です！敵がわんさか…！！』

突然、エイミィから連絡が入った。

「距離と方角は！？」

『そちらに送信します！』

「いえ……その必要は無いわ…ほら」

そう言い、プレシアが指を指す。

そこには、空を埋め尽くさん勢いの敵の大群。

「……全力で行けそうね…！」

「そうね…！」

二人はそれぞれ、戦闘態勢をとる。

リンディは背中に妖精のような羽を生やし、プレシアはジュエルシード事件のときに着ていた服――バリアジャケット――を装備した。

「ブレイズ――」

「サンダー――」

そして、今二人の力が……

「キャノンッ！！！」

「レイジッ！！！」

解き放たれた。

「わぁ……」

「凄いね～二人とも」

アリシアとアリスは、はやての病室から二人のSランク級魔導師の戦いを見ていた。

その力はまさに圧倒的。

砲撃が、雷撃が、次々と偽物を薙ぎ払っていく。

だが、いかんせん数が多すぎるらしく、偽物の大群はだんだん病院に近づいてきていた。

リンディとプレシアも善戦しているが、やはり全てを抑えることは難しかったらしい。

そして、偽物の大群が病院の敷地に入る、まさにその時。

「……やらせない！」

病院の屋上に立っていたライラがラウンドシールドを展開した。

その大きさは、まるで城壁。

５０ｍはゆうに超える、巨大なシールド。

さらに、大きさ以上に優れているのは、その堅固さ。

偽物がシールドを壊すために放った全ての攻撃を受けてなお、そのシールドには皹一つ入ってはいなかった。

その攻撃の中には、無数のスターライトブレイカー＋すら入っていたのに、である。

これが、ライラの戦い方。

シールド、あるいはバインド能力に特化した力。

要のように、シールドを加工するというような芸当は出来ないが、今回のような【局地防衛】にかけては無敵の力を誇るのだ。

「……潰せ…地獄万力」

ライラがそう呟き、シールドをもう一つ発生させる。

そして次の瞬間、二つのシールドは互いに引き寄せ合うかのように動き、大量の偽物を潰し消した。

「……掃え」

二つのシールドはそのまま融合し、さらに強度を上げる。
シールドが扇のように振るわれると、発生した竜巻に巻き込まれ、さらに大量の偽物が消え去った。

「うわー……すっげー……」

「ムゥ……」

ヴィータは素直に関心していたが、ザフィーラは複雑そうな顔をしていた。
同じ防御を主体とするもの同士、考えるものがあったらしい。

「さて……一回見回ってくるよ」

アリスが部屋の外に出る。

「気をつけろ。何が起こるかわからん」

ザフィーラが注意を促す。

「わかったよ」

そしてアリスは出ていった。
……そして、数分たった頃。

ヒィ……リリン…

ベルカ式魔法陣が部屋の中に突然展開された。

「何!?」

ザフィーラとアリシアが前に出て、ヴィータははやての近くに行く。

展開された魔法陣の色は、紫と緑。

そこから顕れたのは、ザフィーラとヴィータが誰よりも知っている騎士。

「シグナム!シャマル!」

二人の騎士が目を開ける。

その目は、どこまでも濁り、澱んでいた。

「紫電…一閃」

シグナムの一撃が、ザフィーラが緊急展開したバリアに当たる。

「ヴィータ!主を連れて逃げろ!」

「えっ!?」

「このままでは共倒れだ!早く!」

――そうは、いかないよぉ――

不意に、誰かの声が響き渡る。

その瞬間、はやての病室は隔離される。

「ネイチャーＡＲＭ、フィオーレ！氷の力、ネーヴェ！」

アリシアが、氷の力でシャマルの脚を凍らせ、動きを止める。

だが、アリシアは本質的な部分で戦闘には向いていなかった。

氷の拘束も、数秒で破られる。

「……ダメ…なの……かな？コータ…」

『シュランゲフォルム！』

「シュランゲバイゼン」

Ｓｉｄｅ　はやて

ん……私は……？

目が覚めたとき、最初に見えたのは見知った天井。

病院…かな……

「あぁぁぁぁぁッッッ！！！」

…ッ！！？

この声、ヴィータの！？

急いで起き上がる。

そこにあったのは……

壁にめり込むようになって、気絶してるアリシアちゃん。

下半身が氷に包まれ、右手がどこかに消えてるシャマル。

剣を突き出した姿勢のシグナム。

そして、シャマルの腕を胸から生やしたザフィーラに、胸を剣で貫かれたヴィータ。

そして、そのことを認識した瞬間。

私の心は、砕け散った。

## 第七十五話　海鳴大学病院で起こった、悲劇（後書き）

なっぺ「後書き座談会わん！」

吼太「犬かお前」

なっぺ「さて、この小説、１００部なったらしいよ」

吼太「たくさんあるな」

なっぺ「毎日更新してればね。ただ、更新時間を固定出来ないのが申し訳ないけど」

吼太「これからも応援よろしくお願いします」

なっぺ「感想感謝コーナー！」

吼太「ライさん、天照大神さん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、朱神優希さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、香崎　真琴さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんとこからは呪札を、朱神優希さんからはとあるゾンビさんが着てる魔装少女の衣装と根暗マンサーさんの服と吸血忍者さんが作った何か（食べ物）を、バルディッシュさんからは古手梨花（なのは用）シェリル・ノーム（フェイト用）の衣装を、Ａｒｉｓｈｉａさんからはアルコール一式を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「アルコール一式って何に使うんだ？」

なっぺ「こう使うんだ……カモン優！」

優「うわっ！？」

なっぺ「さぁ！これを全て飲むんだ！」

優「ちょっ！それじゃ悪酔いが…」

……

優「吼太……お前、可愛いな」

吼太「……は？」

なっぺ「さぁ吼太も飲むんだ！」

吼太「なっ……」

……

吼太「なんか……暑い……」↑服をはだける

優「お前の全て、俺に見せてくれ…」

なっぺ「……さすがにヤバイかなぁ～」

吼太「まだ……暑い」↑脱ぎ始める

優「綺麗だよ……吼太……」

なっぺ「ゴルディオォォォォォン……ハァァァァァリセンッッッ！！！！！」

ベス「説明しよう。ゴルディオンハリセンとは、作者のみが持てる最後の切り札。暴走したキャラを鎮圧するための、まさに人類の希望なのであるー」↑棒読み

なっぺ「静かに！なぁぁぁぁぁぁぁれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第七十六話　それぞれの思い、そして開戦（前書き）

今回は、戦いの序章になります。

# 第七十六話　それぞれの思い、そして開戦

Ｓｉｄｅ　吼太

「コータ君！」

ザンク達を召喚獣達に任せ、病院に向かっていると、後ろから声がした。

なのは達が来ているらしい。

「なのはか？」

「うん！フェイトちゃん達も一緒！」

後ろを向く。

「……ん？」

なのは二人にフェイト二人、それにはやて？

「……偽物仲間にしたのか？」

「なっ！？ぼ、僕を偽物扱いするなぁ～！」

青いフェイトが反応した。

……なんかバカっぽいな。

「詳しい話は後でしますが、とりあえず私達は味方です」

赤黒いなのはが言ってきた。

「まぁ、それはなのは達が一緒だったからわかるけどな」

「……近いぞ！」

紫色のはやてが言う。

とうとう光の根本に来た。

そこには、両手を広げたはやてが中空に浮かんでいた。

しかし、それも一瞬。

はやての姿は光を放ちながら変わり、銀色の長い髪と黒い服を身に纏った、美しい女性の姿になった。

「「コータ（君）、見とれちゃダメだよ？」」

「……なんの話だ？」

Ｓｉｄｅ　なのは

はやてちゃんが……はやてちゃんがすっごい綺麗な人になったの！

フェイトちゃんも焦りを感じているみたい。

このままじゃ、コータ君が盗られちゃう！

「吉谷吼太ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

不意に、コータ君に何かの影が襲い掛かった。

どうやら、コータ君の相手はあの人みたい。

『なのはちゃん！はやてはどうなったの！？』

『アリスちゃん、外見て！』

アリスちゃんから念話が入る。

『外って……え？アレ？』

……さすがに変わるとこ見なきゃあの人がはやてちゃんだって分からないよね。

さて、と。

「また……全てが終わってしまった……いったい幾「ていっ」痛っ！？」

レイジングハートではやてちゃんを殴る。

「……あぁ、お前達「たぁ」痛っ！？」

フェイトちゃんがバルディッシュで殴る。

「……何故殴る？」

「「コータ君をたぶらかしそうだから」」

こうして、私達の戦いは始まった。

「「「……真面目に（やってください）（やってよ）（やれ）！」」」

マテリアルは黙ってろーなの♪

Ｓｉｄｅ　プリム

お父様から連絡を頂き、ミカと一緒に病院へと入る。

その時、世界が異質に包まれた。

どうやら、闇の書が自分で結界を張ったようですわね。

にしてもライラ達はどこへ……？

「プリム！ミカ！」

アリスが走ってきた。

「アリス！貴女は何故はやてさんを見ていなかったのですか！」

「う……ご、ごめんなさい…偽物の気配がしてたから見に行ったら……」

「あぁ～、もう！そういうのは後で！今はやるべきことをやろうよ！」

アリスの言い訳を、ミカが遮る。

こういうのは、ミカならではの行動ですわね。

「ところでアリス。アリシアさんとライラはどこですの？」

「それが……病室は崩れてて…」

その時、病院の外で轟音が響いた。

急いで外に出てみると、そこには気を失ったアリシアさんとプレシアさん、負傷しているリンディさんを敵から庇うライラがいた。

「くっ……エメラルドシューター！」

翠色に輝く弾丸を撃ち、敵を攻撃する。

障壁に防がれてしまったけれど、その間にミカが敵を追撃し、敵をライラ達から離す。

「……プリム？」

「ライラ！何があったんですの！？」

「……ダメ、ミカ、一人だけにしたら…」

ドガァァァ！

「ミカ！？」

音のした方を見ると、そこにはミカの偽物数人を両手のドリルで捌いているミカがいた。

「くっ……アリス、リンディさん達を！ガーネットブラスター！」

アリスに指示を出し、砲撃でミカの偽物を薙ぎ払う。

元々が一つの存在だった私達からすれば、互いの偽物を見分けることは簡単なこと。

「……偽物に頼ってないで、出て来たらどうですの？」

私が呼ぶと、空間が歪んで、虚偽の騎士ホルクスが顕れる。

「ふぅん……中々察しがいいみたいだぁねぇ」

「その余裕の態度、いつまで続けられるか……見物ですわね」

「……貴方は、決して赦さない…！」

「後悔しなよ……！俺達を敵に回したこと！！」

私に続き、ライラとミカもタンカを切る。

「ふふふ……さぁ！虚偽の世界に招待しよう！！」

私は、決して赦さない！

平和を壊した貴方達を！！！

## 第七十六話　それぞれの思い、そして開戦（後書き）

なっぺ「後書き座談会ヤッハー！」

吼太「マリオかお前」

なっぺ「さて、三箇所に戦いの舞台が別れたわけだ」

吼太「オレはザンクと、なのはとフェイトとマテリアル達はリインフォース、フラウリーナ三姉妹はホモクスだな」

なっぺ「なので、次からはこの順で書いていきます」

吼太ＶＳザンク

←

フラウリーナ三姉妹ＶＳホモクス

←

なのは達ＶＳリインフォース（短い可能性大）

←

それ以降～

吼太「それ以降ってのは？」

なっぺ「仮面ライダー好きに分かる説明だとＭＯＶＩＥ大戦みたいな感じ」

吼太「むしろ分かりづらいだろ」

なっぺ「まぁ、場面が一つになるってこと」

吼太「始めからそう言え」

なっぺ「サーセン。さぁ、感想感謝コーナー行くぞっ！」

吼太「ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、七つ夜&夜つ七さん、香崎真琴さん、バルディッシュさん、天照大神さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、朱神優希さん、雨季さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「Ａｒｉｓｈｉａさんからはディシディアの暗闇の雲の服を、バルディッシュさんからはランカ・リー（なのは用）セイバーの私服（アリシア用）を、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんとこのはるかから詩音に即効！好きな人へのアプローチの仕方を、朱神優希さんからは名刀『愛』を、雨季さんとこの要からは吼太の裸写真をなのは達に頂きました！ありがとうございます！」

ラバーズ「「はふぅ……」」↑鼻から愛の激流

吼太「今の内に名刀『愛』はジッパーに仕舞っておこう……この本は？」

なっぺ「オレが後で渡しとく。さて、ディシディアの暗闇の雲の服を…「断る」……何故？」

吼太「洒落にならねぇよ！」

なっぺ「大丈夫！似合うから！」

吼太「いやいやいや……あ、ちょ！やめ…」

しばらくお待ち下さい……

吼太「……／／／／／／／／／／」↑着せられた

優星「……」

吼太「ゆ、優星!?何故ここに…!?」

優星「はにゃあ～?」

吼太「酔ってるー!?」

優星「綺麗な肌ー……ふふふー」↑指で肌をなぞる

吼太「あ!や、やめ……はぅ!／／／／／／／／」

なっぺ「ゴルディオン……ハァァァァァァリセンッッッ!!!!!」

スパパァン!

吼太&優星「「キュウ……」」

エイミィ「……もうちょいポーズ弄って……」

なっぺ「……なんか危ない感じになったな」

エイミィ「すかさず激写ぁぁぁ！！これで一冊……いや、十冊は描ける（ＢＬ本を）！！！！」

なっぺ「この人すげぇ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第七十七話　闇天の真実（前書き）

はい。吼太ＶＳザンク、その１です。

長くてあと二つかな？それぐらいで次の戦いに移ります。

# 第七十七話　闇天の真実

Ｓｉｄｅ　吼太

オレはザンクによって、はやて達のいた場所から離されていた。

「離せザンク！このままじゃはやてが！」

「だからこそだ！主はやてを救うためにはお前を倒さねばならん！！」

「どういう……ことだよっ！」

クシャルダオラを武装召喚し、龍風圧でザンクを吹き飛ばす。

「小癪な……！」

「質問に答えろ！」

オレが言うと、ザンクは構えを解いた。

「……いいだろう。教えてやる。真実を……」

Ｓｉｄｅ　三人称

「闇天の魔導書とは、闇の書の防衛プログラムが、自身の目的を果

たすために作り出したもう一つのデバイスだ。その構成には、闇の書に植え付けられた虚偽のデータ、そしてそれにより発生していた歪みを使っている。いうなれば癌細胞が一個の生命体として動き出したといったところだ……」

「だから……歪みの騎士と虚偽の騎士ってことか」

吼太が言うと、ザンクは我が意射たりと頷く。

本来の夜天の魔導書には存在しない部分。それが寄り集まり闇天の書となった。

これは則ち、闇天の書の主もまた、八神はやてということになる。

そして、闇天の書は過去の主によって改竄されたデータ……【防衛プログラム】を基本に、本来は存在しなかったデータ…【虚偽のデータ】と、改竄により発生していた異変…【歪みのデータ】が重なり誕生した。

シグナム達ヴォルケンリッターが表の守護騎士ならば、ザンク達は裏の守護騎士。

その歩んできた一生は、決して穏やかなものではなかった。

過去、目立つ働きこそしてはいなかったが、歴史の中ではたびたび暗躍をしていた。

そして、その起動条件は【強大な力の感知】。

奇しくも、吼太の存在がザンク達を目覚めさせてしまったことにな

る。

「だが……私は主はやてを敬愛している。闇の書の中からでもあの方の優しさはしっかり感じられた…」

「ザンク……」

「……故に、私はお前を倒す！覚醒してしまった今！せめて、あの方が夢の中で幸せに暮らせるように！」

そう言い切ると、ザンクは剣を構えた。

「チィッ！結局それかよ！武装召喚解除！」

吼太は武装召喚を解除し、ハンドソニックを両手に装備する。

そして、始まる剣の打ち合い。

吼太がハンドソニックを打ち下ろす刹那に、ザンクは三回の斬撃をぶつけ、ハンドソニックを弾き飛ばす。

「ぐっ……オーバースキル！」

そして、隙が出来た吼太をザンクが攻撃するが、吼太はオーバースキル：加速を使い、超加速をすることで回避する。

「喰らえ！オーバーフリーズブレード！」

さらに、吼太はハンドソニックにオーバースキル：加速の応用…分子運動に逆方向の加速を与えることで絶対零度を孕む吹雪……オー

バーフリーズを纏わせる。

そこから吼太は自分の身体ごと回転し、絶対零度の独楽となった。

「ぐっ……」

血鬼で受け止めるザンク。だが血鬼が凍り付いたことを確認するやいなや、独楽と化した吼太を弾き飛ばし、剣に付いた冷気を払う。

「まだまだぁ！ダウンロード！ゼーガペイン・アルティール！武装召喚！」

『了解、ゼーガペイン・アルティール両腕部、背部に具現化。武装召喚』

吼太の身体の一部がゼーガペイン・アルティールのものになる。

さらに両腕にホロニックランチャーを装備し、弾丸を連続してザンクに向けて放つ。

だがザンクは弾丸ものともせず、剣で弾きながら吼太に接近していく。

「チッ……変身ッ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＫＩＶＡ　ＧＡＲＵＬＵ】！』

吼太はディケイドライバーを素早く巻き、仮面ライダーキバ　ガルルフォームに変身して、ガルルセイバーでザンクの剣を受け止める。

「貴様に……貴様に何がわかる！のうのうと生きてきた貴様に、主はやての苦しみが…わかるのかぁぁぁ！！」

ザンクが力を篭めると、剣がガルルセイバーを砕き、キバの鎧すらも砕いて吼太にダメージを与えた。

「ガァァァ！？」

「主はやては苦しんでいた！誰にも言わず、他人には平気な顔をしながらも苦しんでいたのだ！それが分からぬお前に…私を倒す道理など無い！！！」

「ぐぁぁぁっ！？」

ザンクの連続した斬撃を受け、あまりのダメージに吼太の変身が解けてしまう。

「貴様に……主の夢を邪魔することは赦されん」

「……だからどうした…！」

「……何？」

吼太は、満身創痍ながらもまだ戦意を失ってはいなかった。

血が流れる肩を抑えながら、ザンクに対して言葉をぶつける。

「確かに……オレははやての苦しみを知ることは出来ねぇ……でも、だからこそ！この手ではやてを支えられる！だからこそ！共に先に行けるんだ！テメェはそれすらしようとせずに、テメェの勝手な事情を押し付けただけだ！」

「……確かに、これは私のわがままだ。だが、もう戻れんのだ！この血に汚れた手で主はやてを救うには、こうするしかないのだ！」

「テメェの過去なんざどうでもいいだろ！テメェ自身はどうなんだ！テメェが本当にしたいことはこんなことなのか！？」

「うるさい！」

ザンクは剣を悩みを払うように振る。

「お前に……お前に何がわかる！！運命に縛られた我等の、一体何がわかる！！？」

「何も……分からねぇよぉっ！！」

ジッパーの中から巨大な剣……Gブレイドを取り出し、ザンクに攻撃する吼太。

ザンクは、大振りながらも隙の無い攻撃をなんとかいなしていく。

「オレはなぁ……そういう【運命】だとかいうのが大っ嫌いなんだよ！だから……そんな腐った運命なんか……オレが変えてやる！」

過負荷に耐え切れず、Gブレイドが砕けるが、吼太はすぐにジッパーの中から別の剣……テスカ・デル・ソルを取り出し、ザンクを斬る。

ザンクも負けじとテスカ・デル・ソルを弾き返すが、質量差故かザンク自身も吹き飛ばされる。

「おのれ……吉谷吼太ぁぁぁ！！！」

ザンクの怨嗟の篭った叫びが、辺りの空気を震わす。

だが、吼太は怯まない。

確固たる意志を持った吼太に、【退く】の二文字は存在しないのだから。

そして、テスカ・デル・ソルを片手で持ち、剣先でザンクを示し、言葉を言い放った。

「歪みの騎士ザンク……さぁ、お前の罪を数えろ！！！」

「今更…数え切れるか！！！」

ザンクも怯まず、吼太に言い返す。

ザンクとて、今までずっと不退転の覚悟でやってきたのだ。

互いに道は譲らない。

ならば、答えは一つ。

「「オォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」」

二つの意志は、またぶつかり合った。

## 第七十七話　闇天の真実（後書き）

なっぺ「後書き座談会ブォォォォ！」

吼太「ブブゼラやめい」

なっぺ「もれなく難聴の効果あり！」

吼太「大迷惑だ」

なっぺ「さて、ようやく出せたこのやり取り」

吼太「仮面ライダーWの映画で言っていたやり取りだな」

なっぺ「いつかやりたいとは思ってたけど、ザンクが都合のいいキャラでほんと助かった」

吼太「そのわりに他の部分が酷いけどな」

なっぺ「ｏｒｚ」

吼太「じゃ感想感謝コーナー。天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、ライさん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、朱神優希さん、雨季さん、まーたさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからはクドの服を、バルディッシュさんからは沢田綱吉（吼太用）、クローム髑髏（吼太用）、春香（チュニャン／フェイト用）、サクラ（なのは用）の衣装を、七つ夜＆夜つ七さん

のとこからはバスタオルと胸パットを、朱神優希さんからは寛黙なる性識者のデジカメを、雨季さんからは悪魔の婚姻届を頂きました！ありがとうございます！」

なのは「コータ君！今すぐこの婚姻届にサインして！早く！」

フェイト「他の女の子ばっかり撮って……コータはイケないコだね……フフフ…」

吼太「……お前ら……落ち着け！」

リーム「コータぁ～この衣装着たら赦してあげるよ～」

吼太「……バスタオル？」

リーム「これを裸に巻いて♪」

吼太「……貞操の危険を感じるので却下」

なっぺ「無効！」

吼太「な！？」

リーム「さぁ……早く……」↑目がヤヴァイ

なのは「大丈夫……何もしないから…」↑目がヤヴァイ

フェイト「ちょぉ～っと触ったり××××したり〇〇〇〇したり――――したりするだけだから……ハァハァ……」↑目がヤヴァイ

吼太「作者！今すぐゴルディオンハリセン貸せ！」

なっぺ「だが断る！」

吼太「だったらハウリング…「させません（わ）！」何ぃ！？」

プレシア「あんっ……もう……吼太ったら……／／／／／」↑吼太の右手を抱えるように持ってる

プリム「あぁ……お父様……そんなとこまで……／／／／／」↑吼太の左手を抱えるように持ってる

吼太「ま、待て！話し合おう！」

ラバーズ「「「……頂きまぁす♪」」」

吼太「くっ……瞬間移動（テレポーテーション）！」

ラバーズ「「「逃げられた！？」」」

なっぺ「筋金入りのヘタレだな。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第七十八話　オレを誰だと思っていやがる！（前書き）

吼太ＶＳザンク、今回で終わりました。

……あまり長くならなかった。

文字数を多く書ける人ってどんな頭してるんだろ？

# 第七十八話　オレを誰だと思っていやがる！

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太がテスカ・デル・ソルで何回も斬りつける。

だが、その全ての斬撃はザンクの剣【血鬼】に防がれる。

「こんな……ものかァァァァァ！！！」

ザンクが反撃に出る。

一秒に複数回の斬撃を受け、テスカ・デル・ソルもまた砕け散った。

しかし、その破片とテスカ・デル・ソルが破壊された時に発生した爆発に紛れて、吼太は素早くザンクの後ろに移動する。

「ビドム・グラビレイ！」

そこから吼太は、空中の任意の場所に強力な重力を発生させる術、ビドム・グラビレイを使い、ザンクを地面にたたき落とす。

さらに…

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ】！』

１０枚のレリーフがザンクと吼太の間に現れる。

本来はここを通り飛び蹴り、もしくはライドブッカーによる斬撃、砲撃のいずれかをぶつけるのだが、吼太の使い方はそれらだけとは限らない。

ディケイドのファイナルアタックライドは、いわば【通過する物体にエネルギーを付加する効果】だ。

つまりは、他の物体を通して効果をあげることも可能なはずと吼太は考えたのだ。

「ザグルゼム！」

吼太は手から強力な電撃エネルギーを秘めた球体、ザグルゼムを撃つ。

ザグルゼムは本来、そこまで速い動きはしないため避けられやすい。

だが、ディケイドのファイナルアタックライドと併用することでその弱点を解決、さらなる強化すらしてのけたのだ。

ザグルゼムはレリーフを突き抜けながらエネルギーを溜め、ザンクにぶつかった。

しかし、ザンクの身体にダメージは無く、変わったところといえば僅かに身体が光っている程度。

だが、ザンクは油断していなかった。

吼太と何度も戦ってきたザンクは、この術がその程度で終わるものではないことを直感的に悟っていたのだ。

「貴様……何をした！？」

「さぁ……な！」

吼太はそう言い、ディケイドライバーを再び腰に巻き、地上にいるザンクに向かって急降下する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【Ｗ】！ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｄ、Ｄ、Ｄ、Ｗ】！』

「ジョーカーエクストリームッ！！！」

左右二色の戦士、仮面ライダーＷに変身し、急降下の勢いと共に必殺技、ジョーカーエクストリームを発動する。

風を受け加速した吼太は、その途中で左右半分に別れ、右足と左足で連続でキックを決めた。

「ぐぉオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！……まだ……まだぁァァァァァ！！！！」

だがしかし、ザンクは周囲にクレーターが出来るほどの攻撃を受けてなお、戦う意志を見せていた。

「ハァッ！」

ザンクが剣で吼太を弾き飛ばす。

吼太は弾かれたために崩れた体勢を空中で整えながら、変身を解除

した。

同時にトゥードに命令を与え、別の変身をする。

「ダウンロード！ピカチュウ！武装召喚（リアライズ）！」

『了解、ピカチュウ、耳部、尾部、頬部を具現化、武装召喚』

オレの耳は長く鋭く、雷のようにも見える尻尾が生えて、頬は赤く染まる。

そして、ザンクに向かい、全力で走り出しながら電撃を放つ。

【ボルテッカー】

全身に雷を纏った状態で突進する、ピカチュウ系ポケモンの必殺技の一つとも言える技だ。

さらに、ここでザンクにあらかじめ命中していたザグルゼムが効果を発揮する。

その効果は【誘導】。

電気を引き付け、さらにその威力を爆発的に増大させるのがザグルゼムの力。

その力は今、電撃を全身に纏った吼太を引き寄せていた。

「おもしろい！ならば受けて立とう！」

ザンクは自分に向かってくる吼太に言い放ち、構えを取る。

それは、ザンクにとって必殺の構え。

心の底から認めた相手でなければ、決して見せない窮極の剣。

「【血龍……一閃】ッッッ！！！！！！」

「ボルテッカァァァァァァーーーーー！！！！！！！！」

そして、二つの攻撃がぶつかった。

互いに譲らないそのぶつかり合いは、辺りに強大な力の衝撃を撒き散らす。

「「オオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」」

斬撃が雷を斬り裂き、雷が斬撃を破壊する。

そして強大な力はそのぶつかり合いの末……

……相殺し合った。

辺りに巨大な魔力煙が発生し、二人に強大な力を使った反動が襲い掛かる。

「（相打ちか…！！？）」

ザンクはそう考え、体勢を立て直し始める。

だが、吼太はその一歩先を行っていた。

煙を引き裂きながらザンクに接近し、手に持った銃……デビライザーの銃口をザンクの腹に叩き付ける。

「何だと！！！！？

「コォォォォーーーーーーーーッルッッッッッ！！！！！！！！」

引き金を、引く。

デビライザーから巨大な二本の角を持つ竜、ディアブロスが顕れ、召喚された勢いのままにザンクの身体にぶつかる。

恐ろしいまでの強大な質量、威力をぶつけられ、ザンクの意識は暗転した。

ディアブロスが勝利の雄叫びをあげるなかで、一人の男が立っていた。

その男は全身ボロボロながら、溢れ出るその闘志は微塵も衰えていなかった。

その男に、倒れた男…ザンクが問い掛ける。

「何故だ……何故、必殺の意志を持った私が……負けたのだ……！？」

立つ男……吉谷吼太は、ディアブロスを撫で、苦労を労いながら答えた。

「【絶対に相手を殺す覚悟】程度しかしないで戦ってるやつが、【絶対に誰も死なせない覚悟】して戦ってるやつに勝てるわけないだろ」

吼太が言うと、ザンクは僅かに笑いながら、言う。

「身勝手かつ、無茶苦茶な理論だな。まるで夢物語だ。……そんなことが出来ると本気で思っているのか？」

その問いには、ザンク自身がかつて諦めた夢に対する気持ちが含まれていた。

そんな実現の難しいことを道標にして、道に迷ったりしないのか、と。

絶望したりしないのか、と。

吼太はその言葉を聞き、一瞬だけ驚いた仕種をするが、すぐに口角を上げ、自信に満ちた表情で答えた。

「それでこそのチートだろ！オレを誰だと思っていやがる！！！！

# 第七十八話　オレを誰だと思っていやがる！（後書き）

なっぺ「後書き座談会キィィィッッック！」

吼太「キックすんな」

なっぺ「はい、吼太ＶＳザンクはこれにてお終いです！次からはフラウリーナ三姉妹ＶＳホモクスのはず」

吼太「疲れたー……お休みー……」↑寝た

なっぺ「あと、今回のは吼太の力の一部でしかありません！真の全力全開にはまだまだ到達していません！」

ベス「なんで出さないんですか？」

なっぺ「出す相手がいないんだよ……おかげで強力な力の殆どは使用しづらい状況」

ベス「例えばどのような力が？」

なっぺ「まず、理想を現実に変える能力を使って【絶対命中】、螺旋力の確率変動が全ての攻撃に付加されるから、あらゆる攻撃を相手に当てられるようになる。それから、斬撃に限れば【斬】の能力付加で絶対破壊追加。他にもいろいろあるぞ」

ベス「とにかくたくさんあるんですね」

なっぺ「オレが型月知らないから型月系は使えないけどな。まぁ、

組み合わせは無限大だな」

ベス「組み合わせチートですね」

なっぺ「逆に組み合わせを使わないとそこまで強くならないけどな。現時点で単体の力だけじゃ月破壊より少し上ぐらいの力しか出せないし」

ベス「それでも十分な気もしますがね」

なっぺ「かもね。じゃあ感想感謝コーナー頼むよベス」

ベス「はい。まーたさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、七つ夜＆夜つ七さん、朱神優希さん、天照大神さん、緋水さん、バルディッシュさん、雨季さん、香崎　真琴さん、感想ありがとうございました」

なっぺ「朱神優希さんからなのは達に服が透けて見えるメガネを、七つ夜＆夜つ七さん達からは変態には見えない服を、緋水さんからリトバスの沙耶の浴衣を、バルディッシュさんからは切札勝舞（吼太用）の衣装、インビジブル・スーツ、タイフーン・バズーカ、エメラルド・クロー、パワード・スタリオン、アクテリオン・フォース、クエイク・スタッフ、デモニック・プロテクター、イモータル・ブレード、シャイニング・ディフェンス、グロリアス・ヘブンズアーム、ファイアー・ブレード、クリムゾン・ライフル、ファイナル・ドラグアーマーを、香崎　真琴さんからは毒舌シスター、あーぱー吸血鬼、路地裏同盟の衣装を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「クロスギアは全部ジッパーに保管ですね」

吼太「ｚｚｚｚ……」↑変態には見えない服を着用

ラバーズ「「「……」」」↑鼻血のナイアガラ

ベス「よく失血症になりませんね」

なっぺ「吼太から発散される何かが失血症を防いでたりして」

吼太「……むにゃむにゃ」↑沙耶の浴衣を着用

ラバーズ「……何故かイケない感じが……」↑鼻血（ｒｙ

ベス「あちこちはだけてますね」

なっぺ「寝てる人に浴衣を着せるのがむずかったんだよ」

吼太「……すぴ～……すぴ～……」↑毒舌シスターの服を着用

ラバーズ「」↑気絶

なっぺ「……起きないな」

ベス「起きませんね」

なっぺ「さて、と……浴衣姿を激写ぁ！」

ベス「あなたも歪みないですね」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第七十九話　咲き誇る花、愚かな虚偽（前書き）

なんとか書き上げた……

次回更新は一応未定です。

遅くて三日後かな？

早ければいつも通り明日には。

# 第七十九話　咲き誇る花、愚かな虚偽

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太とザンクが戦っている頃、別の場所ではフラウリーナ三姉妹とホモク……もとい、ホルクスが戦っていた。

「ヘリオドールシューター！」

プリムが、輝く弾丸を二発放つ。

それを、偽物のザフィーラが拳で撃ち落とそうとするが…

「弾けなさい！」

プリムの命令を受け、魔力弾が細かくバラける。

まるで散弾のようになった魔力弾は、偽物のザフィーラの全身に襲い掛かり、偽物を打ち消した。

「ハァァァッ！」

その隙を突き、ミカがドリルでホルクスを攻撃する。

ホルクスか紙一重で避けるが、ドリルの回転により発生した衝撃波に僅かに巻き込まれ、頬に傷が出来る。

「やってくれたぁねぇ…！」

「それはこっちの台詞だっての！よくもはやてやシグナム達を！」

ミカがドリルを薙ぐように振るう。

それに対してホルクスは、屈んで攻撃を回避した。

「君は……君達はどうしても僕達の邪魔をするのかぁい！？」

ホルクスがアルフの偽物を出現させ、ミカを攻撃させる。

ミカはドリルの一突きでアルフの偽物を破壊するが、ホルクスはその隙にミカ達から距離を取っていた。

「……当たり前…！」

ライラのチェーンバインドがホルクスを縛り、動きを封じた。

そこにすかさず、プリムの砲撃が襲い掛かる。

「ガーネットブラスター！」

キラキラと宝石のように煌めく砲撃は、その美しいまでの破壊力を余すことなくホルクスに伝えた。

「し、障壁…」

ホルクスが障壁……パンツァーガイストを咄嗟に張るが、プリムの砲撃はパンツァーガイストをいともたやすく飲み込んだ。

プリムには本来一つだった身体の、【魔法放出】の部分が色濃く現

れている。

いうなれば【センターガードにとことん特化した肉体】をしているのだ。

故に、フィジカル面やバインド、シールドなどといった魔法補助は苦手だが、それを補って余りある術式の高速演算力、そして魔力量を持つのだ。

「くっ……ならば遠距離から…」

ホルクスが距離をとり、なのはの偽物を多数創り出す。

砲撃能力に特化した魔導師であるなのはを複数用意することで、砲撃戦に持ち込もうとしているらしい。

だが、ホルクスは知らなかった。

海鳴病院が、何故【無傷】で済んだのかを。

「さぁ、一斉射撃だぁ！奴らを粉微塵にしてやるよぉ！」

「「「「「スターライトブレイカー！」」」」」

複数のなのはから、バリア貫通の効果を持つ集束砲撃、【スターライトブレイカー＋】が放たれる。

その威力は、都市一つを崩壊させる威力すらあっただろう。

だが、それでも【彼女】の障壁を破るには余りにもお粗末だった。

「……効かない」

ライラの編み出した新魔法。ラウンドシールドを１０枚同時に作り出し、花びらのように展開。回転させながら受けることで【攻撃を弾き返す】ことに優れた盾。

その名も【タカネニガナ】。

そして、スターライトブレイカー＋はタカネニガナに残さず弾き返され、砲撃を放った偽物を全て撃ち落とした。

「な、なんだと！？」

ホルクスが驚愕する。

砲撃を防ぐどころか、あまつさえ弾き返して相手に正確にぶつけることなど、本来不可能の領域である。

だが、魔法補助に完全特化したライラからすれば、それは出来て当たり前の行動。

彼女の役目は簡単だ。

【護り、癒し、拘束する】

その誓いを、ライラは決して破ることはない。

その誓いを果たすために、彼女は日夜研究と訓練を続けているのだから。

「よそ見してる暇、あるのかな？」

不意にホルクスの後ろから声がする。

何事かとホルクスが振り向く前に、それはホルクスを殴り飛ばしていた。

さらに、それは殴り飛ばされたホルクスの行く先に先回りし、飛んできたホルクスをさらに蹴り飛ばす。

そして、またホルクスの飛んだ先に回り込んだそれは、腕に緑色の光…螺旋力を纏わせて、飛んできたホルクスを全力を持って地面に殴り落とす。

「スピニングゥゥゥ……パァァンチ！！！！！」

ホルクスが張った障壁などまるで意に介さず、その拳は全ての威力をホルクスに叩き込んだ。

「ガァァァァァァァァ！！！？」

ホルクスは地面にたたき付けられた。

地面に巨大なクレーターを作るほどの衝撃を受け、ホルクスはダメージに呻く。

「へへっ！俺達の怒り、少しは分かったか！」

空中からホルクスを殴り飛ばした張本人、ミカが言う。

フィジカル面の資質が圧倒的に高いミカは、超人ばりの動きを天性の才能で行うことが出来る。

さらに、料理の特訓の成果として【先を見据えた行動】が出来るようになり、今のような連続攻撃が可能になっていた。

【力】と【技術】。

二つが程よく融合したミカの体術は、我流ながらも一流と言えるだろう。

「おのれ……よくも僕に傷を……！」

「傷？笑わせますわね」

「……そんなの……傷って言わないよ…！」

「そうさ！本当に傷を負ったのははやてや、ヴォルケンリッターのみんなだ！」

プリム達が言うと、ホルクスは一瞬だけ呆気にとられ、そのすぐ後で嘲笑し始めた。

「ハハハ！何を言い出すかと思えばぁ！ヴォルケンリッターや僕達は守護プログラムの一端！その僕達は傷ついて当然の存在さぁ！君達は道具にわずかな傷がついてめちゃくちゃに騒いでるに過ぎなぁい！」

ホルクスが貶る。

「そして八神はやては闇の書の主！ならば傷つくのは必然にして当然！当たり前のことをして何が悪いのさぁ！？」

ホルクスが罵る。

「つまり！運命なんだよ運命！！君達には変えられない！運命を変えることは出来なぁいんだよぉ！！！」

ホルクスが、今までの全てを否定する。

シグナムが、ヴィータが、シャマルが、ザフィーラがやってきたことをけなす。

それは、彼女達の怒りを燃え上がらせるには、十分すぎた。

「……もう、黙りなさい」

「！？」

プリムが希少技能【権利剥奪】を発動し、ホルクスを強制的に黙らせる。

「さっきから何だよ……言わせておけば……っ！」

「貴方は……心の底から……ダメなんだね……」

ミカとライラは、怒りの余り握った拳を震わせている。

「ここは……お父様のあの言葉を借りましょう」

「そうだね。こんな奴にはお似合いだよ」

「……うん」

そして、三人は左手を緩く広げ、人差し指でホルクスを指しながら言い放った。

「「「虚偽の騎士ホルクス……さぁ、（貴方）（お前）の罪を（数えなさい！）（数えろ！）（数えて！）」」」

「僕に罪なんて……あるものかぁ！！！」

# 第七十九話　咲き誇る花、愚かな虚偽（後書き）

なっぺ「！」

トゥルンッ！

トゥード「後書き座談会を始めさせて頂きます」

ユーノ「作者、吼太、ベスの三人（？）はライさんのところから送られてきたオグドモンに追い掛けられてます」

アルフ「（自業自得なんだけどねぇ）」

リーム「今回からはフラウリーナ三姉妹とホモクスの戦いだね」

ユーノ「次回からはさらにフルボッコにするらしいよ？」

アルフ「まぁ、あの作者のことだからたかがしれてるとは思うけどねぇ」

リーム「じゃ、感想感謝コーナー行こうよトゥード」

トゥード「了解致しました。ライ様、七つ夜&夜つ七様、ｋｅｉ－－ｋｕｍａ．Ｔ様、雨季様、Ａｒｉｓｈｉａ様、天照大神様、緋水様、香崎　真琴様、朱神優希様、バルディッシュ様、まーた様、狛魔様、感想して頂き、ありがとうございます」

リーム「七つ夜&夜つ七さんとこからはコータ凌辱ゲーム（主人公は女性）を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんとこからは吸血鬼の牙を、朱神優希さんとこからはだんご大家族のぬいぐるみを詩音ちゃんに、バルディッシュさんからはザフトの緑服（女性用）、レオパルド・グローリーソード、パワード・マスク、クイック・ディフェンス、マキシマム・ディフェンス、コマンド・デバイス、チェーン・ヘリックス、インフェルノ・シザース、リバース・アーマーを頂いたよ！どうもありがとー！」

ユーノ「吼太凌辱ゲームって…」

アルフ「なんでも触手や逆レ○プ、性転換、ｅｔｃ……ありの軽めのエロゲらしいよ？」

リーム「まさに僕のためのＧＡＭＥ！」

ユーノ「トゥードは止めたりしないの？」

トゥード「ゲームを止めさせろとは言われていないので」

リーム「さっすがトゥード！しっかり分かってるね♪じゃあなのはちゃん達呼んでこよ～」

アルフ「にしても最近の後書きでの吼太……扱いが性別逆転してないかい？」

ユーノ「だよね」

ラバーズ「「「それは吼太だからだよ！」」」

トゥード「だ、そうです」

ユー＆アル「……」

トゥード「では、この辺りで失礼致します。次回もどうぞ、お楽しみに」

ベス「ぶぎゃ」↑潰された

なっぺ「助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

吼太「ドチクショウ！悪意が無きゃいいんだろ！？」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＮ－Ｏ】！』

電王「へっへっへっ……俺、参じょ」

ブヂッ

吼太「潰されたぁぁぁ！？」

なっぺ「うぎゃぁぁぁぁぁ！！！」

## 第八十話　花の舞い踊る園（前書き）

……フルボッコっぽく、出来んかった……（泣

期待していた皆さんすいません。

# 第八十話　花の舞い踊る園

Ｓｉｄｅ　三人称

ホルクスの周りに黒い霧が集まり、ザフィーラの形になる。

一体ではない。

複数、それも１０人以上だ。

それらの偽物のザフィーラに、ホルクスはバリアを張らせる。

幾重にも張られたバリアは、鉄壁を誇り、あらゆる攻撃を弾くほどだ。

「ハハハ！君達にはこのバリアを突破することが出来るかなぁ！？」

「……突破するよ。お父さんから受け継いだこのドリルは、天を貫くドリルなんだからさ！」

そう言うと、手にドリルを顕現させるミカ。

さらに、ドリルに螺旋力を篭める。

するとドリルの溝が開き、溝からさらに小さなドリルが顕現した。

さながら、棘つきドリルといった風貌だ。

「行っけぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ミカが気合を篭めて叫ぶと、溝から突き出ていた複数のドリルが飛び出し、ミサイルさながらにホルクスに向かって行く。

「そんな攻撃が通用するとでもぉ!?」

ミサイルは全てバリアに当たり、一発たりとも貫通することはなかった。

……しかし。

次の瞬間ホルクスと偽物のザフィーラに爆発が命中し、偽物は全て消滅、ホルクスは爆発によってダメージを受ける。

「馬鹿な!?確かに全て防いだはずなのにぃ……!!」

驚愕するホルクス。

自分の思ったとおりに事が運ばず、苛立ちも隠せてはいない。

「チッチッチッ……ダメだよ?ドリルを真っ向から受けちゃ。ドリルは貫くもの。壁があっても掘り進むんだから!」

そう言い、ドリルのついていない手の人差し指を軽く左右に振る。

ミカが先程使用したのは【確率変動弾】。

【相手が防御する確率】自体を無効化することで、例えどんな防御手段を使われてもダメージを与えられるという攻撃だ。

「くっ……」

「よそ見する暇がありまして？ガーネットブラスター！」

素早くホルクスの後ろに回り込んでいたプリムは、近距離から砲撃をホルクスに撃ち込む。

悲鳴をあげる暇もなく吹き飛ばされたホルクスは、突然何かにぶつかる。

ライラの作ったラウンドシールドだ。

さらに、ラウンドシールドからストラグルバインドが展開され、ホルクスを大の字で拘束した。

「行っくぞぉぉぉ！必殺！ギガァ…ドリルゥ……」

「受けなさい！ダイアモンド……」

「「ブレイカァァァァァーーーーー！！！！！！」」

ミカのドリルが高速回転しながら螺旋力を練り上げ、限界に達したところで螺旋力に再変換。砲撃状にして放つミカの必殺技の一つ、【ギガドリルブレイカー】。

そして、プリムの最大出力の砲撃。まるで金剛石のような輝きを持ち、あらゆる物体を破壊出来る程の威力を持つ。その名も【ダイアモンドブレイカー】。

二つの超威力を誇る砲撃をノーガードで受け、ホルクスの身体に着

いていた宝石のような部分が砕け散る。

その瞬間、周りから近づいていた偽物の群れが一瞬で消え去った。

「……偽物は……それで…操ってたんだね…」

「つまり、今のアンタは無力も同然！」

「勝敗は明らかですわね」

「嘗めるな……小娘共がぁ！」

ホルクスは叫びながら、身体のバインドを砕く。

「こんな傷……！」

そうホルクスが言った瞬間、砕けた宝石がホルクスに吸収された。

「これでまだ戦えるぅ……！」

そう言い、シグナムのレヴァンティンとヴィータのグラーフアイゼン、シャマルのクラールヴィントを装備するホルクス。

「どうだぁ！この力にはさしものお前らも……！」

再び自信に満ちた表情に戻るホルクス。

「どうって……」

「言われてもねぇ？」

ライラとミカが互いの顔を見合わせ、ライラは小首をかしげ、ミカは苦笑する。

「はっきり言いますと……キモいですわ！」

プリムはホルクスに指を突き付け、はっきりと言い放った。

「なっ……もういい、皆殺しぃだぁ！！！」

ホルクスは激情し、グラーフアイゼンをラケーテンフォルムに変化させ、手近にいたミカを攻撃する。

「……デバイスが、泣いてるよ！」

ミカは冷静にドリルでグラーフアイゼンを迎え撃つ。

拮抗したのは一瞬。

すぐにミカのドリルが偽のグラーフアイゼンを砕いた。

「くっ……ならば！」

『シュランゲバイゼン！』

ホルクスがシュランゲバイゼンでプリムを狙う。

「こんな、力の焦点がずれた攻撃、この程度で十分ですわ。……エメラルドシューター！」

プリムは翠色に輝く誘導弾を放ち、シュランゲフォルムの刃を全て破壊し、レヴァンティンを灰燼に帰した。

「くっ……ならばリンカーコアを…」

「……遅い」

ホルクスはクラールヴィントでリンカーコアを破壊しようと考えたが、その時には既にライラの二つのシールドがホルクスを押し潰していた。

「ゴッ……バ、バリアブレイク……」

全力を篭めたバリアブレイクでライラのバリアに僅かに皹を入れ、そこから脱出する。

だが、そこまでだった。

「（……両腕が、動かない！？）」

「……ライラ、もしかしてアレ、やったの？」

「……」コクっ

ミカの問いにライラは頷いて答えた。

ライラの希少技能【侵食支配】。

ライラ自身やライラのバリア、バインドに触れている箇所から、有機物無機物魔法関係無しに徐々に対象を支配するという、ある意味

最も恐ろしい希少技能。

それの効果で、ホルクスは自身の両腕をライラに支配されていた。

「くっ……ならばひとまず……！」

ホルクスはそう言うと強烈な光を発生させ、その場から逃げ出した。

「な！待ちなさい！」

「くそっ……見失った……！」

プリムとミカが悔しがる中、ライラは一人冷静だった。

「……サーチャー…付けた…から…」

「おぉ……ライラさすが」

「ではさっさと追いますわよ！」

そうしてフラウリーナ三姉妹は飛び立った。

決着を付けるために。

# 第八十話　花の舞い踊る園（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始めるでぇー！」

ブヂッ

ユーノ「まだ帰ってなかったんだオグドモン……」

アルフ「さて、次回でフラウリーナ三姉妹ＶＳホモクスは終わりかな？」

ユーノ「えーっと……」

予定表を見るユーノ。

ユーノ「今回で終わりだってさ」

……

リーム「……え？あれで？」

ユーノ「あれで。ラストバトルに持ち越しだってさ。なんでも、都合上ホモクスをラストバトルに持って来るのが一番いいんだって。前々から決めてたみたいだよ」

アルフ「……釈然としないねぇ」

ユーノ「作者に言ってよ。じゃあ感想感謝コーナー行こうか」

リーム「Ａｒｉｓｈｉａさん、ライさん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、まーたさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、香崎　真琴さん、雨季さん、水橋さん。感想ありがとうございましたー♪」

アルフ「Ａｒｉｓｈｉａさんからは受け取った人が一番好きな人がその人形に動かされた通りの事をするという人形を、バルディッシュさんからは文月学園高等部女子制服（当然吼太用）、ロード・オブ・レジェンドソード、クイーン・オブ・プロテクション、ネオウェーブ・カタストロフィー、グランドクロス・カタストロフィー、プロミネンス・カタストロフィー、エクスプロード・カタストロフィー、ツナミ・カタストロフィーを、七つ夜＆夜つ七さんとこからはＢＬドラマＣＤを、香崎真琴さんとこからは性転換スイッチを作者に頂いたよ。ありがとうね」

なっぺ「さっそく使わせてもらうぜ！カモン詩音！」

詩音「ひぇぇぇぇぇぇ！！！蛸のお化けだぁ～！！！」

なっぺ「レムリア・インパクトを使え！早く！」

詩音「ど、どうやって～？」

なっぺ「気合だ！」

詩音「分からないよぉ～！ひぇぇ～ん」

オグドモン「……」

なっぺ「あ、帰ってく」

ユーノ「罪悪感が芽生えたとか？」

ベス「あのオグドモンにそんなものがあるんですかね？」

アルフ「泣いてる詩音を見て初めて罪悪感が芽生えたとか？」

なっぺ「まぁそうにしろ、そうでないにしろ、助かった……」

ベス「ですね……」

トゥード「マスター、オグドモンはもう帰りましたよ」

詩音「ひぇ？」

トゥード「だから、もう安心です」↑詩音を抱きしめる

詩音「うん……なんか……悪いことしちゃったかな……スゥ……スゥ……」

リーム「トゥードがお姉さんみたいだね」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十一話　闇の書の恐怖……？（前書き）

な、なんとか毎日更新を途切れさせないで済んだ…

やったねオレ！

……何故か虚しいｏｒｚ

そして宣言通りなのは達ＶＳリインフォースは今回で終わり（？）です。

# 第八十一話　闇の書の恐怖……？

Ｓｉｄｅ　星光の殲滅者

……これは……悪夢ですか？

「デアボリック・エミッ「アクセルシューター！」ショっ！？」

闇の書の管制人格が広域殲滅魔法を使用しようとしたら、桜色に輝く無数の魔力弾が管制人格を襲い…

「ならば…「ハァァァッ！」ガァッ！？」

管制人格が反撃をしようと身構えた瞬間、黄金の魔力刃が管制人格を何回も斬る。

この一方的な蹂躙をしているのは他でも無い……

「一緒に行くよ！フェイトちゃん！」

「わかった！なのは！」

私達が姿を真似た……

「ディバイィィィン・バスタァァァーーーー！！！！！」

「プラズマァァァ・スマッシャァァァーーー！！！！！」

オリジナルの二人である。

「雷刃の襲撃者……あなた、同じこと出来ますか…？」

「………言わなくても分かるでしょ…」

Side　なのは

「ディバインセイバー！」

ディバインセイバーではやてちゃん（？）の背中の羽根を刈り取る。

その隙にフェイトちゃんがカートリッジをロードしながらハーケンフォームにしたバルディッシュではやてちゃん（？）のことを何回も斬る。

斬る、斬る、斬る、斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る！

斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬！！！

「ま、待て！話せば分かる！」

「話す？今もO☆HA☆NA☆SHIしてるでしょ？」

「ほらほら、言いたいことがあるなら言わないと」

口をバインドしたわけじゃないんだから、ちゃんと喋れるのに…

「……ぐっ…」

その時、周りから火柱が上がった。

「……早いな、もう崩壊が始まったか…私もじきに意識を無くす。そうなればすぐに暴走が始まってしまう…意識のある内に、主の望みを…叶えたい」

『ブルーティガー・ドルヒ』

赤い刃が私達の周りに現れて、狙ってきた。

「はやてちゃん！」

「……私は、闇の書の管制人格だ」

そんなことはどうでもいいの！

赤い刃を避けようとすると……

「くっ……！？」

何やら地面から触手が出て来て、私達を縛り付けた。

これじゃあ、回避が間に合わない！？

フェイトちゃんも同じように縛られている。

状況に気づいたマテリアルのみんなが急いでこっちに向かってきてるけど、距離が遠すぎてとても間に合わない。

……油断、しちゃったのかな？

そして刃が放たれ……

ザンザンザン！

「なっけないわね～なのは！フェイト！」

「大丈夫？怪我とか無い？」

衝撃は、来なかった。

代わりに聞こえたのは、私がよく知る人の声。

「……誰だ？」

闇の書さんが聞く。

「アリサ・バニングスよ！」

「月村すずかです」

「アリサ（ちゃん）！？すずか（ちゃん）！？」

Ｓｉｄｅ　三人称

きっかけは、だいたいジュエルシード事件が終わった頃。

アリサとすずかが吼太を呼び出したことだ。

「コータ…アンタ、何か隠してるでしょ。それもなのはと一緒の隠し事」

「……何のことやら？」

吼太はとぼける。

だが元々の性格故か、その表情には何かを知っているということがありありと表れていた。

「コータ君……」

すずかは、はっきりとは言わない。

が、その表情には真実を知りたがっていることがしっかりと表れていた。

「言っとくけど、ここまで来てまだ隠すつもりなら……」

そう言いながら、アリサは手をワキワキと蠢かせる。さながら、セクハラ親父のようだ。

「……って待て待て！落ち着けアリサ！」

「諦めてね？コータ君。貞操を奪うのはとりあえずまだだから」

「オレの将来に一抹の不安を残すようなこと言わないで！ってちょっ！止め……」

……

「どう？これでもまだ言う気にならない？

勝ち誇ったように言うアリサ。

足元にはビクンビクンと震える吼太が倒れていた。

「アリサちゃんのくすぐりはすごいもんね～」

「……ヒィ……ヒィ……も、もう許してくれ……」

「隠し事を話してくれたらね」

「……後悔しないと誓えるか？」

吼太の声が真剣なものに変わる。

吼太は、アリサとすずかを心配して言っていた。

だからこそ、問う。

世界規模の異変に、巻き込まれるということを知って、それでもこちらに来たいのかと。

アリサとすずかは、互いの顔を見合わせ、そして力強く頷いた。

「……ということよ」

「ってことはアリサちゃんもすずかちゃんも…？」

「で、でも二人には魔力が……」

なのはとフェイトは疑問を口にする。

魔力が無い二人に、この戦いは厳しすぎる。

だが、その疑問には意外な人物が答えた。

「二人とも忘れた?魔力の無かったコータが、何故バリアジャケットを展開出来てたのかを」

「「リーム（さん）！」」

「アタシ達は、リームさんを通じてコータからデバイスを得た」

「魔力の無い私達でも使えるデバイスを…！」

そう言うと、アリサとすずかは自身の服の袖をめくり、中のブレスレットを露にする。

アリサは右腕に山吹色の宝石が埋め込まれたブレスレットを。

すずかは左腕に群青色の宝石が埋め込まれたブレスレットを。

「エッケザックス！」

「ガランホルン！」

「「セーット、アーップ！！！」」

『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ！』』

二人が光に包まれ、バリアジャケットを纏う。

アリサは機能的な山吹色の、鎧にも見える服。

すずかは群青色のドレスのような服。

共通点は、どちらも要所要所に翡翠色の宝石が付いていることである。

それは、魔溜石。
フォーティトゥードに付いている、空気中の魔力素を吸収する特殊な石である。

その機能を利用することで、今、彼女達のバリアジャケットは、彼女達のリンカーコアの代わりともいえる役割をも果たしていた。

そして、アリサは細身の剣となったエッケザックスを、すずかはフルートのようになったガランホルンを構える。

ここに、新たな魔導師が誕生した瞬間である。

Ｓｉｄｅ　？？？

ここは……？

確か……僕は……

「――――。おいで――――」

誰だ……？

「ほら、おいで――――」

「あなた、――――がかわいいからって子供扱いは止めてあげましょう？男の子なんだから」

「そうだったな～。中々会えなかったからどうも、なぁ」

あれは……母さん？

ということは……この人は……

「父……さん……？」

「ん？なんだいクロノ？」

## 第八十一話　闇の書の恐怖……？（後書き）

なっぺ「後書き座談会、はっはっはっ始めます！」

吼太「ギリギリだったな今日は」

なっぺ「中々書き上がらなかった」

吼太「読者様に迷惑かけんな馬鹿」

なっぺ「ごめんなさい。しかも後書きにも本編が入るという謎の事態」

吼太「単なる操作ミスだろ」

なっぺ「ホントにすいません。なんか頭がやばかったらしいです。じゃあ感想感謝コーナー行くぜ！今回は久々のアリサ＆すずか！」

アリサ＆すずか「「ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、ライイさん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、香崎　真琴さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからは刀に見せかけた槍に見せかけた印鑑を、緋水さんからは超竜バジュラズテラに精霊王アルフファディオスに悪魔神ドルバロムにクリスタルツヴァイランサーを呼び出すカードを、バルディッシュさんからはキャス狐の服（吼太用）、流闘シャーク・バンカー、助太刀メモリー・アクセラー、熱刀デュアル・スティンガー、邪扇エアロ・フウゲツ、天装ニチリ

ーン・ニョライを、七つ夜&夜つ七さんたちからは侵食剣を、香崎真琴さんとこからはトゥード×詩音本を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「デュエマ関連のものがたくさん来たな」

なっぺ「ただ、サムライ（？）辺りはわからないんだよなぁ……さて、キャス狐の服を着ようか吼太」

吼太「やだよ！」

なっぺ「しかしそんなこと認めるわけが無い」

吼太「うぉぁっ！？」↑キャス狐化。当然耳と尻尾も付いている

なっぺ「似合ってんなオイｗｗｗ」

吼太「これ……胸のところがずり落ちちまうよ……／／／／／／／／」

なっぺ「むしろいいんじゃね？そして性転換発動！」

詩音「ひぇ？」

優「おや、詩音ちゃん。どうしたんだい？」↑日本酒で酔ってます

詩音「あ、優お兄ちゃん！」↑優に抱き着く

優「クスッ…詩音ちゃんは可愛いね」

詩音「……ひぇ？え？今、か、かかか可愛いって……？／／／／／」

優「もちろんだよ。詩音ちゃん」

詩音「……ひぇ～…／／／／／／／」

優「……クスッ」

なっぺ「……ゴルディオンハリセン使っていい？」

ベス「ノクターン的事態が発生したなら」

なっぺ「チッ……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十二話　重なり始める戦い（前書き）

頭痛い……

なんで、あちこちにわかりにくい表現があると思います……

# 第八十二話　重なり始める戦い

Ｓｉｄｅ　フラウリーナ's

「……いい加減、諦めたらどうだぁい！？」

ホルクスが逃げながら、後ろから迫るフラウリーナ三姉妹に言う。

「諦めませんわ！」

「俺達を信じてくれている人達が、いる限り！」

「……私達の友達を貶めた貴方を…私達は絶対に赦さない…！」

「何なんだ君達はぁ……！？」

「覚えておきなよ！俺達は！」

「私達（わたくし）は！」

「…私達（わたし）は…！」

「「「通りすがりの、チート魔導師の娘（だ！）（ですわ！）（…！）」」」

Ｓｉｄｅ　なのは's

「……諦めろ。崩壊は、止まらない」

闇の書の管制人格が、なのは達に諭す。

「そんなこと…分からないよ！」

「そうよ！崩壊はきっと止めてみせる！」

すずかとアリサが言い返す。

「お前達はまだ知らないんだ。闇の書が暴走すると……どうなるかを」

「…うぬの言うことも分からなくはない」

「確かに、この人達は闇の書の恐怖を知りません」

「でも、知っても変わらないと思うよ。少なくとも、僕たちはそうさ」

マテリアルの三人が闇の書の管制人格に説く。

「……だが……」

「この……分からず屋！助けて欲しいならそう言わないと……みんな助けられないんだよ！？」

フェイトが叫ぶ。

「……貴女は、確かに絶望を見てきたのかもしれない。けど、僕たちは絶望なんかに負けない」

リームが教える。

「私たちは……貴女を助けてみせるから！」

なのはが約束する。

「……何だというんだ。お前達は…？」

「「「「「「通りすがりの、魔導師（だよ）（だ）（よ）！！覚えておいて！！！」」」」」」

Ｓｉｄｅ　吼太

「こっちか！」

ザンクを安全な場所に置いたあと、魔力反応を追って移動する。

背中に展開した飛行用魔術、シャンタクを使い、超高速で移動する。

予想してたより遥かに遠くに行ってしまっていたようだ。

「魔力反応が一箇所に集まり始めてるな……場所は…海か」

先周りをするために、シャンタクの出力をさらに上げる。

……悲劇なんか起こさせてたまるかよ！

Ｓｉｄｅ　なのは

「パイロシューター！」

星光の殲滅者が誘導弾を放って、闇の書の管制人格を海まで吹っ飛ばす。

『なのは！フェイト！リーム！聞こえる！？』

「ユーノ君？」

ユーノ君が、突然念話を入れてきたの。

『大変なことがわかった！クロノの魔力反応をキャッチしたんだ！』

「それ、本当！？」

「ってことは……」

リームさんとフェイトちゃんも反応する。

『あぁ、クロノは生きてる！それだけじゃない！他にも何人かの魔力反応もキャッチした！多分、今まで犠牲になった人達だ！全て、闇の書の中にある！』

「ねぇユーノ君、私たちは何をすればいいの！？」

「教えてください！」

私の言葉に、星光の殲滅者が追随する。

『いい？一回しか言わないよ！？』

固唾を飲む私たち……

『どんな方法でもいい！目の前の子を、魔力ダメージでブッ飛ばして！全力全開、手加減なしで！！』

「「「！」」」

これは……！

「さっすがユーノ君！」

「実に分かりやすいです…！」

それなら得意分野だよ！

『マスター、エクセリオンモードを起動してください』

「レイジングハート！？そんなことしたらレイジングハート、あなたが…」

『この状況であの方を魔力ダメージで倒すには、バスターモードでは不足かと思われます。あの方や、マスターのご友人を救うにはエクセリオンモードの使用が必要不可欠です』

「レイジングハート……」

『マスター、マスターは私を信じてくださいますか？』

「……うん！レイジングハート、エクセリオンモード！……ドライブ！！！」

『イグニション』

私が言うと、レイジングハートはカートリッジをロードして、形を変えはじめる。

杖の先端は鋭くなり、形も杖というよりは槍に近い形。

これがレイジングハートのフルドライブ……エクセリオンモード…

「行くよ！」

カートリッジをロードして、レイジングハートの尖端に魔力刃、ストライクフレームを発生。さらに余剰魔力は翼のように展開される。

エクセリオンバスターA．C．S．。

ディバインセイバーの魔力運用と、コータ君のギガドリルブレイクからヒントを得た魔法。

ストライクフレームを相手の防御の内側に突っ込んで、中でディバインバスターの強化版の砲撃、エクセリオンバスターを放つという荒業。

「てぇぇぇぃ！！！」

全力で闇の書の管制人格に突撃する。

咄嗟にバリアを張ったみたいだけど、そんなものじゃこの刃は防げない！

ガキッ！

「まさか！？」

「ブレイク……」

魔力の翼がさらに大きく広がる！

「シュゥゥゥーーーーッッット！！！」

ゼロ距離で放たれたエクセリオンバスターは、闇の書の管制人格さんを吹っ飛ばす。

だけど、まだ足らない！

「フレアーエッジ！」

アリサちゃんが、手に持った剣で追撃する。

炎が剣の周りで渦巻いているそれは、多大な威力を孕んでいることを容易に想像させた。

「ゼェェェイ！！！！！」

アリサちゃんの剣が、闇の書の管制人格さんをさらに灼く。

「ブラスト…ファイヤー！」

すかさずそこに砲撃する星光の殲滅者。

砲撃が闇の書の管制人格さんから強制的に自由を奪う。

「行くよすずかちゃん！」

「うん！リームさん！」

リームさんとすずかちゃんが互いに声を掛け合い、構える。

「凍てつきの……」

「ミスティック……」

「大嵐！！！」

「バインド！！」

リームさんの氷の嵐が、すずかちゃんの神秘的な光が、闇の書の管制人格さんを閉じ込める。

「行くぞ！アロン…」

「天破……」

「ジェット……」

そこに、闇統べる王、雷刃の襲撃者、フェイトちゃんがさらなる追撃をする！

「ダイト！」

「雷神鎚！！！」

「ザンバー！」

砲撃が、雷撃が、斬撃が闇の書の管制人格さんにダメージを与えていく。

そして、攻撃により発生した魔力煙が晴れると、そこにはボロボロになった闇の書の管制人格さんが……

「ちょっと……やり過ぎたかな…？」

『いいんじゃないでしょうか？』

「そうかな…？」

『もちろんですとも』

「……デバイスはマスターに似る、ということでしょうか…？」

星光の殲滅者が何か言ったけど、気にしちゃいけないよね。

これで……なんとかなったかな……？

その時だった。

「闇の書の管制人格……その身体を寄越せぇぇぇ！！！」

何かが、闇の書の管制人格さんにとり憑いた。

「な……まさか、闇の書と融合を！？」

「なかなかしぶといですわね！」

「……往生際悪い」

あれは……フラウリーナ三姉妹のみんな…？

確か……歪みの騎士って人はコータ君と戦っていたから……

あれは……

「ハハヒハハハハ！！！！！」

……虚偽の騎士、ホルクス！

## 第八十二話　重なり始める戦い（後書き）

すいません……今回は後書き座談会は休みにさせてもらいます……

貰い物などは次回の座談会で出します。

感想をくれた皆さん、ありがとうございました！

こんな簡素なものになってしまい、申し訳無いです。

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## 第八十三話　吼太、怒る（前書き）

眠いながらも何とか更新…！

体調はとりあえず持ち直しました。

# 第八十三話　吼太、怒る

Ｓｉｄｅ　クロノ

ここはどこだ？

そもそも僕はあの時……

ならば、ここは天国……というところなのか？

参ったな……オカルトの類いは信じていなかったのに……

「ほら、行くわよクロノ」

……待て。

ならば何故母さんがいる？

まさか母さんも？

……いや、それは絶対に有り得ない。

母さんは強い人だ。

いくら肉親の僕が死んだところで自殺なんて行動に走るとは到底思えない。

では……ここは……？

「……どうしたんだいクロノ？そんな怖い顔して？」

「クロノはお父さんっ子ですからね。あなたに似たんじゃないですか？」

「言うじゃないか」

父さんが苦笑する。

「さて、と。着いたぞ～っと」

そこは、風が気持ちいい丘の上だった。

端に立つと、海が一望出来る、まさに名所。

「では、お昼にしましょう♪」

母さんがバスケットから昼ご飯のサンドイッチを出す。

……そうか……

これは……

僕が、味わいたかった幸せなのか……

Ｓｉｄｅ　はやて

……眠い……

なんやめっちゃ眠い……

でも……起きなきゃアカン気がする……

「主はお休み下さい。そのまま深い眠りに……こちらは、私がなんとか致しますので……」

……あなた……は……

Ｓｉｄｅ　三人称

ホルクスの狂ったような笑い声が響く。

今や、ホルクスは闇の書のシステムのほとんどを掌握していた。

管制人格の意識を奥底に押し込み、自身が顕現している肉体を支配したホルクスは、管制人格の力の全てを手に入れたに等しい。

「ハハハハハ！これだけの……これだけの力があればぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ホルクスが叫んだ瞬間、周りに四つの魔法陣が出来る。
そこからあらわれたのは、ヴォルケンリッターの四人。
だが、その姿は漆黒に染まった重厚な鎧に包まれていた。
ホルクスが守護騎士のデータから、新たな守護騎士を創り出したのだ。
無名の四人の騎士は、それぞれの武器を構える。
それを受け、構えるなのは達。
だが……その二つの集団がぶつかることは無かった。
「光射す世界に、汝等暗黒、住まう場所無し！渇かず飢えず、無に還れ！レムリアァァァ…インパクト、改！！！」
守護騎士達は突如として現れた結界に取り込まれ……
「昇華！」
時空間すら、次元すら、神すら灼きつくす異界の無限熱量によって消滅したからである。
そしてそれを行ったのは……
「おいおい……面倒にもほどがあるぞ……？」

「「「（コータ君）（コータ）（お父様）（お父さん）（……パパ）！！！！」」」

Ｓｉｄｅ　吼太

「お前は……ザンクが潰したはずじゃ！？」

「ま、返り討ちってこった。死んじゃいないけどな」

「おのれ……よくも！」

闇の書の管制人格の肉体を奪い取ったホルクスがオレに襲い掛かってくるが……

「甘い！」

一瞬で武装召喚を発動し、ウォーグレイモンのドラモンキラーでホルクスを斬り裂く。

ホルクスの身体が上下に別れる。

が、すぐに下半身が粒子化し、粒子が残った上半身に吸収され、元の無傷な状態に再生する。

「痛……痛いいいい！！！！！」

「テメェ…人の身体を……おもちゃにするんじゃねぇぇぇぇ！！！」

武装召喚を解除し、ジッパーの中から槍……【グリフィンランス】を取り出す。

「そ、そんなもので……」

ホルクスが咄嗟にバリアを張るが、グリフィンランスの穂先はまるでバリアなど無いかのように斬り裂いた。

そして、グリフィンランスでホルクスを細切れになるまで斬る。

斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬！！！！！！！

グリフィンランスの切れ味は並大抵のものではない。

加えて、今オレはグリフィンランスに【斬】の属性の能力を付加していた。

斬の能力により、切れ味が限界を超えた域に到達したグリフィンランスに、斬れないものは正真正銘存在しない。

たとえそれが、いかなる強度を誇ろうとだ。

だがしかし、細切れにされたホルクスはその状態からも再生してきた。

「……しぶといな……」

ホルクスを消し去ること自体は簡単だ。

塵一つ残さず消し去る方法なんて、オレにはごまんとある。

だが、今それをやると闇の書ごと消滅してしまい、はやて達が助けられない。

……答えを出す者（アンサートーカー）！

「……この方法が妥当か」

## 第八十三話　吼太、怒る（後書き）

なっぺ「後書き座談会でしょ。うるぁ！」

ベス「もはやネタすら狙ってませんね」

なっぺ「……ネタ思い付かなかった」

ベス「ところで、なんで私が？吼太さんはどうしたんですか？」

なっぺ「あぁ、それは……」

優「詩音は可愛いな……食べてしまいたいぐらいだ……」↑チューハイで酔ってる

詩音「ひぇぇ……あ、あの、その……ふっふつつか者でしゅっが！？……あぅぅ……／／／／／／」

優「……そういうとこも可愛いよ」

詩音「……／／／／／／／／／／」

なっぺ「……ってことになってるから」

ベス「なるほど」

管制人格「……どこだここは？」

なっぺ「やぁ闇の書の管制人格君。まずこの麦茶はサービスだからまずは飲んで落ち着いてほしい」

管制人格「……はぁ」

なっぺ「ここは後書き座談会。感想くれた人に感謝したり、ゲストキャラを歓迎したり、コスプレ会開いたり……まぁ平たくいうなら何でもありの空間だ」

管制人格「……最後のコスプレは違う気がするのだが……？」

なっぺ「いや？むしろメイン？」

管制人格「……そうか」

なっぺ「じゃ、感想感謝コーナー！今回は管制人格さん（仮名）にやってもらいましょ」

管制人格「Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、ライさん、香崎　真琴さん、ｋｅｉ－－－

ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、まーたさん、天照大神さん、、雨季さん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはホーリー・スパーク、バースト・ショット、幻竜砲、スパイラル・ゲート、火炎流星弾、サウザンド・スピア、ドリル・ボウガン、グシャット・フィスト、地獄万力、地獄スクラッパー、バジュラズ・ソウル、インパクト・アブソーバー、ソーラー・レイ、コズミック・ウイング、レーザー・ウイング、レイン・アロー、レインボー・アローを、七つ夜&夜つ七さんとこからは赤い外套（アーチャーのもの）、優を解析して作った、『優の好きな料理ベスト１０』と、対ホモクス消滅兵器『皆お前が大嫌い』を、香崎　真琴さんとこからは優×詩音マンガを、緋水さんからはデッドライジング２を、ｋｅｉ－－ｋｕｍａ．Ｔさんとこからは詩音にウォッカ、媚薬、浴衣（優の前では自動ではだける機能付き）と、私に頑張れの心を、朱神優希さんからは武装神姫の神姫全部と、ラバーズに１０分刻みに吼太の未来が書かれる吼太日記を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「随分たくさんありますね」

なっぺ「二回分だし」

ベス「カードはライドブッカーに入れておきましょう」

なっぺ「頑張るぜ！大半はジッパーの中だな！マンガや日記は既にラバーズに配布済み！浴衣も既に着せた！」

詩音「ひぇぇ……／／／／／／／」↑早速はだけた

優「綺麗な肌だね……それに、少しめくればさくらんぼまでである」

詩音「ひぇぇ……あ、あの……少し…恥ずかしいよぉ……／／／／／／／」

優「大丈夫…ちゃんと詩音ちゃんの全てを見てあげるから……」

なっぺ「……うわーお…」

？？？「吉谷ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

突然辺りに殺気が撒き散らされる。

なっぺ「……え？メア！？」

※メア：まーたさんが執筆されている小説、魔法少女リリカルなのはＩｎｔｒｏｄｕｃｔｏｒｙ　ｃｈａｐｔｅｒ　ｏｆ　ｓｔｏｒｙに登場する女性。

メア「吉谷！お前……優とそんな……そんな……！！／／／／／」

優「…あぁ、メアも来たんだ。どう？一緒に……」

メア「なっ！？そ、それはその……あの……／／／／／／」

優「クスッ……メアもやっぱり可愛いなぁ」

メア「あ……あの……／／／／／／／」

優「詩音ちゃん、メアが一緒でもいいかな…？」

詩音「ふぇ…詩音は……構いましぇん……／／／／／／」

優「ふふふ……さっきのアレがよっぽど気に入ったみたいだね」

メア「一体何を……？」

優「……知りたい？なら……メアにもしてあげるよ」↑メアを抱き寄せる優

メア「ゆっ、優！？／／／／／／」

優「目を……綴じて……」

なっぺ「ゴォォォルディオンッ、ハァァァァリセンッッッ！！！！」

「「「ぎゃふっ！？」」」

なっぺ「よし、ノクターン的事態は回避したぞ」

ベス「この時だけならなっぺさんが最強なんですかね？」

なっぺ「さぁ？ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十四話　清めの音、甦る夜天（前書き）

今回、やりたいほうだいやったら微妙に長くなりました。

つーかぎりぎり！

# 第八十四話　清めの音、甦る夜天

Ｓｉｄｅ　吼太

「……この方法が妥当か」

オレはデビライザーにカードを装填し、一体の戦士を召喚する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＨＩＢＩＫＩ】！』

仮面ライダー響鬼（ヒビキ）を召喚する。

さらに、【白い羽】のカードを使い、響鬼に飛行能力を持たせる。

響鬼は音撃棒　烈火を構え、ホルクスに突進して攻撃を与える。

「ハァッ！」

「ぐぅぅ…邪魔なんだよぉ！」

ホルクスが反撃するが響鬼も負けていない。

「さて、と……」

とりあえずホルクスを響鬼に任せ、術式を編みはじめる。

術式はすぐに完成し、手の中に術式を圧縮した一つのメモリーが現れた。

そのメモリーを術式のコピーと並行しながら増やしていき、場にあるデバイス分、用意する。

「ぐぁっ！」

「やばいな……」

響鬼が押され始めてる……響鬼に消えられちゃ困るから……

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＰＳＹＧＡ】！【ＧＡＲＥＮ】！【ＡＧＩＴＯ】！【ＩＸＡ】！ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＧＡＲＥＮ　ＪＡＣＫ】！ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ａ、Ａ、Ａ、ＡＧＩＴＯ】！』

飛行可能なライダー、仮面ライダーサイガ、仮面ライダーギャレン　ジャックフォーム、さらに仮面ライダーアギトをファイナルフォームライドした【アギトトルネイダー】に仮面ライダーイクサを乗せる。

これだけいれば持つか……？

「Ｉｔ' ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ！」

「ザヨゴォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

「その命、神に返しなさい！」

……ギャレンは無視していいよね？

三人の仮面ライダーはそれぞれの銃を構え、ホルクスに射撃を行う。

並の相手ならそれだけで蜂の巣になってしまうような攻撃を受けてなお、ホルクスは生きている。

が、さすがに動けないらしく、その場に釘づけにされていた。

「みんな！デバイスにこのメモリーを組み込め！これからやることのために必要なんだ！」

そう言って、メモリーを投げ渡す。

「えっ！？」

「使い方とかは？」

「気合だ！」

「「「無茶苦茶だ！！」」」

言ってる暇ないんだよ！

答えを出す者が教えてくれてる、タイムリミット。

ホルクスが介入したことによって、このまま時間が経てばはやて達ごと消さなきゃならなくなっちまう！

一応、メモリー内に使い方は入ってるから、後はデバイスが手伝ってくれるだろ！

「ライダー達が持たないか…プリム、ミカ、ライラはホルクスの足

止めを頼む！」

オレがそう言った瞬間、ホルクスの放った一撃が三人のライダーをアギトトルネイダーごと破壊した。

「行きますわよ！二人とも！」

「おっけー！」

「……うん…！」

「後の準備は……コイツか」

空中で待機していた響鬼に近づき……

「ちょっとくすぐったいぞ」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｈ、Ｈ、Ｈ、ＨＩＢＩＫＩ】！』

響鬼を【ヒビキアカネタカ】にファイナルフォームライドする。

ヒビキアカネタカは甲高い声で嘶き、その巨体をもってホルクスに体当たりする。

「おのれ……ブラッディダガー！」

ホルクスがブラッディダガーをオレの周りに発生させる。

だがこの程度…なんてことは無い。

「アム・ラ・ゾルク！」

呪文を唱えた後、手をゆっくりと動かす。

自身の間合いに気をはり、その全てに感覚を注ぐ。

【制空圏】。

武術の第二段階【緊湊】に至る事で自然と見えてくる自身の間合い。

これを修得するのに、一年近くはかかった（身体が子供というのもあったが）。

その分、その有用性は非常に高い！

四方八方から飛んで来るブラッディダガー。

だが、オレの間合いに入った瞬間、ホルクスにその刃先を向け、飛んでいった。

……否。そう飛ばしたのだ。

間合いに入ってきたブラッディダガーを、コンマ数ミリの精度で正確に弾き返す。

制空圏とアム・ラ・ゾルクの合わせ技だからこそ出来る技だ。

飛んでいったブラッディダガーは、寸分違わずホルクスの弱所に命中する。

今が、チャンスだ！

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｈ、Ｈ、Ｈ、ＨＩＢＩＫＩ】！』

カードをディケイドライバーに読み込ませると、ヒビキアカネタカが更に変形し、ヒビキオンゲキコとなりホルクスに張り付く。

「な、なんだこれは！？」

「その答えは……テメェの身体に教えてやるよ！！！」

オレはヒビキオンゲキコが張り付いたホルクスに近づき、音撃棒烈火を構え……

「破ァッ！」

清めの音を響かせ始めた。

Ｓｉｄｅ　フェイト

すごい……

コータの演奏を見ている感想は、ただそれだけだった。

なんというか……心に響く、とでも言うのか…

とにかく、すごい演奏。

見れば、周りのみんなも一様にその演奏に聞き惚れていた。

だけど、なにかもどかしい。

自分も、何かをしたくなってくる。

それがこの演奏の効果なのか、それとも純粋な欲求なのか……

そんな時、異変が起こる。

『清めの音を確認。魔力波演奏形態を起動してください』

バルディッシュからそんな提案が来る。

「魔力波……演奏形態？」

『はい』

その瞬間、情報がバルディッシュから送られてきた。

「……こんなことがホントに出来るの？」

『はい、サー』

……だったら、やるしかないよね。

「行くよ……バルディッシュ」

『イエスサー。Ｂｅａｔ　Ｆｏｒｍ　ｇｅｔ　ｓｅｔ』

バルディッシュがそう発言すると、バルディッシュ　アサルトフォームの斧の刃に当たる部分が二つに増え僅かに大きくなり、コアから杖の先に金色に輝く弦が張られる。

さながら、見た目はエレキギターと言ったところかな？

『Ｂｅａｔ　Ｍｏｄｅ　Ｓｅｔ　ｕｐ』

ふと、そんな音声が聞こえてきた。

隣を見ると、そこには管楽器のような形をしたレイジングハートを持ったなのはがいた。

お互い、やるべきことはもうわかっていた。

顔を見合わせ、頷く。

『ソニックフォーム、Ｇｅｔ　Ｓｅｔ』

ソニックフォームに変わって、バリアジャケットに使っていた魔力をバルディッシュに回す。

そして、左手の甲についている宝石を外し、それで弦を弾き始めた。

Ｓｉｄｅ　吼太

音に満ちる。

答えを出す者（アンサートーカー）が出した答え。

ホルクス及び防衛プログラムのみを切り離すために必要な行動。

その第一段階がこの音撃合奏。

どうやら、何をやったのか知らないが妖怪の類い……響鬼の世界で言うところの【魔化魍】を取り込んでいたらしく、音撃がある程度有効なのだ。

そして、オレは音撃となのはやフェイト達が奏でる魔力波を相乗掛合することで、強大な魔力をホルクスにダメージを与えつつ闇の書の管制人格に与えることを可能にしたのだ。

……まぁ、要は内部からしかホルクスを切り離せないから、せめてその手伝いをしようってだけなんだけどね。

さぁ、後はお前が頑張る番だぜ！

はやて！そして……

Ｓｉｄｅ　クロノ

母さんが用をたしに行き、父さんと二人だけになる。

「まぁ……なんだ。男二人いても話すことなんか無いな」

「ですね」

互いに苦笑し合う。

これが夢なのは既にわかっていた。

夢でなければ、こんな都合のいい状況になるわけがない。

だからこそ……

「もう、十分だ……」

「……」

「夢はいいものです。人の心を癒してくれる」

「……そうだな」

「だけど、そのまま……何もしないでいちゃいけない。夢を見たら、起きなきゃいけない。夢じゃ……癒すことは出来ても救うことは出来ないんだ」

「……何故そう言う？」

「……夢を見てるだけじゃ、腐った運命は変えられない。『こんなはずじゃなかった』なんて言葉を、使うような未来にしないためには、行動しなきゃいけないんだ」

「……夢の中なら、お前の望んだ未来を見れるのにか？」

「……夢は、夢ですから」

「……そうか」

父さんはそう言うと、丘の向こうに輝いている太陽を指差す。

そこからは、暖かい気配がしてきた。

「……行ってこい。我が息子よ」

「……行ってきます！」

僕はＳ２Ｕを構える。

……そして、振り返らずに太陽へと飛び込んだ。

Ｓｉｄｅ　はやて

眠い……

……けど、もうそろそろ起きなな。

「……何故、目覚めようとするのですか？」

「夢は、いつか覚めるもんや」

「しかし……」

「それに、もうたくさんの人達に迷惑をかけとる。それなのに、私一人が眠ってるってのは、いけないと思うんよ」

「主……」

「あなたも……そうやで？一人で何かしようとするのはええ。でも、周りの人のことも考えなアカン。あなたは、周りの人に頼ってええんや」

「し、しかし……私は闇の書……忌むべき存在なのです……」

「そんなことあらへん！あなたは私を主に選んでくれた！それだけであなたはもう私の……いや、私たちの家族なんや！」

私がそう言うと、私たち二つの周りに四つの光球が現れる。

「お前達は……」

「ほらな？シグナムもシャマルも、ヴィータもザフィーラも。みんな家族なんやで？家族を忌む人なんて……ここにはおらへん」

「……うぅ……あぅ……」

目の前の管制人格さんが嗚咽を漏らす。

「よく、頑張ったなぁ……」

「主……私は……私は……」

「……そうやな。新しい名前をあなたにあげる。もう『闇の書』とか、『呪いの魔導書』なんて言わせへん。私が呼ばせへん！私は管理者や。私にはそれが出来る」

「無理です！今の私の力では虚偽の騎士の暴走を止められません。管理局の魔導師達が戦っていますが、それも…」

「……大丈夫やよ。ほら……」

私が言った瞬間、周りに暖かい鼓動が満ちる。

「これは……？」

「これが……コータ君の力なんよ」

「コー……タ？」

管制人格さんが不思議そうな顔をする。

「そうや。いつだって、どんなときだって自分を曲げない。それがコータ君なんや……」

「……」

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る……」

管制人格さんの頬を私の両手で包む。

「強く支える者……幸運の追い風……祝福のエール……リインフォース」

私たちの足元に展開されていた白銀の魔法陣が、光を放った。

そして、私たちは光に包まれた。

## 第八十四話　清めの音、甦る夜天（後書き）

なっぺ「後書き座談会じゃすぇ！」

吼太「日本語喋れっての」

なっぺ「さてさて、とうとうクライマックスですよハイハイハイ」

吼太「だな。ホルクスフルボッコ」

なっぺ「オレのテンションもハイハイハイ！」

吼太「さっさとやるぞ。まずは感想感謝コーナー。香崎　真琴さん、バルディッシュさん、月光閃火さん、七つ夜&夜つ七さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、水橋さん、天照大神さん、緋水さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん、まーたさん、雨季さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「香崎　真琴さんとこからは優×詩音×メア本を、バルディッシュさんからはゴースト・タッチ、デス・スモーク、クローン・バイス、生命剥奪を、七つ夜&夜つ七さんとこからは吼太に作者権限と作者パワーをパワーダウンさせる装置、私にハリセンの威力を１０倍にするソフトを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは詩音の肖像画を、天照大神さんからはスーパー・スパーク、アポカリプス・デイ、執拗なる鎧亜の牢獄、陰謀と計略の手、英知と追撃の剣、バイオレンス・ヘブン、ラスト・バイオレンス、超銀河弾　ＨＥＬＬを、緋水さんからはブラックホール、ブルーアイズホワイトドラゴン、エグゾディアセットを頂きました！ありがとうございます！」

閃火「にゃっす～、きたよー」

輝刃「失礼するぞ」

吼太「よう」

なっぺ「あ、来たね。いらっしゃい」

閃火「さて、シャマルさんはどこかな～？料理の手ほどきをしてあげるよ～」

なっぺ「……あの～」

閃火「ん？」

なっぺ「……今は……リンカーコアだけの存在だから……いないっす」

閃火「……え？そうなの？」

なっぺ「すいません！本当にすいません！」

輝刃「仕方ないな……ならば、リームやアリスを撫でてから帰るとしよう」

吼太「悪いな。わざわざ来てもらったのに……」

輝刃「気にするな」

なっぺ「本当にすいません……ではではこの辺で！次回もお楽し

みに！」

## 第八十五話　最終攻撃準備（前書き）

今回はまだフルボッコにはなりませんでした。

次回は十中八九フルボッコですが。

# 第八十五話　最終攻撃準備

Ｓｉｄｅ　グレアム

今、私の目の前にあるモニターには、闇の書の管制人格らしき人物を打楽器のように叩いている少年……吉谷吼太が映っている。

「これは……内部にて、二つの反応！？」

「片方は……夜天の主で…もう一方は……父様！！」

ロッテが私に涙を流しながら振り向く。

「……クライド君……君の息子は、立派な魔導師に育ったよ……」

涙が溢れる。

私が言えた義理ではないだろう。

それぐらいはわかっている。

……だから、私がするのは手助けだけだ。

「リーゼ、頼まれて欲しいことがあるんだ」

Ｓｉｄｅ　吼太

「くぅ……っ！」

みんなの顔が苦痛に歪んでいる。

魔力波演奏形態っていうのは、いわばディバイドエナジーを使用し続けるようなもんだ。

魔力はもちろん、体力の消費も激しい。

だが、誰も弱音は吐かない。

助けるまで、絶対に諦めない。

だからこそ……

「「「破ァッ！」」」

奇跡が、起こるんだ！

「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！！？」

全力を篭めて最後の一撃をぶち込むと、ホルクスの身体は闇に包まれ海に墜ちていった。

そして……

「あ、あそこ！」

リームが指差す。そこには、黒い魔導師……クロノがいた。

「ふぅ……戻ってこれたみたいだな」

「よぅ、相変わらずの仏頂面だなクロノ！」

オレが言うとクロノはこっちに気づき、

「お前こそ、随分な阿呆面だな吼太！」

皮肉を言い合う。それもまた心地良い。

「あっち……あれって……」

なのはの示した先を見ると……

Ｓｉｄｅ　はやて

「管理者権限発動」

『虚偽の騎士のシステムにハッキングをしました。数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます』

リインフォースが状況を伝えてくれる。

「うん。それだけあったら十分や」

そして、意識を拡げて守護騎士達を……私の家族を見つける。

「リンカーコア送還、守護騎士システム、破損修復。……おいで、私の騎士達」

シグナムが告げる。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

シャマルが謡う。

「主ある限り、我等が魂…尽きること無し」

ザフィーラが誓う。

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり」

ヴィータが紡ぐ。

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に！」

それは、夜天の祝詞。

宵闇を統べる王を讃える、歌にして謡。

「リインフォース、私の杖と甲冑を…」

「はい」

そして、私は魔導騎士になった。

Ｓｉｄｅ　三人称

白銀に輝く光球の中から、はやてが姿を現す。

「はやて……」

ヴィータが申し訳無さそうな顔ではやての名前を呼ぶ。

「ええよ。みんな分かってる。リィンフォースが教えてくれた。そやけど細かいことは後や。今は…おかえり、みんな」

「はやて……はやてぇぇぇぇぇぇぇ！！！うわァァァァァァ！！」

ヴィータが感極まってはやてに抱き着く。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな？うちの子達がいろいろ迷惑かけてもうて…」

「ううん」

「平気」

なのはとフェイトは、そんなこと気にしないといった感じだ。

「主はやて」

ふと、男性の声をはやての耳が捉える。

「お前は！」

シグナムがレヴァンティンに手を掛ける。

そこにいたのは、歪みの騎士ザンク。

いわば、はやてに望まぬ覚醒をさせた原因の一端だ。

「主はやて……私は……」

「ええよ……ザンクのこともちゃんと聞いてる。よう、頑張ったなぁ」

はやてがそう言うと、ザンクは一瞬驚いたような顔になった後、すぐに顔を下げた。

「勿体無き……お言葉……！」

「アハハ……硬いなぁ～」

はやてが苦笑する。

「水を差すようで悪いんだが……」

「そう思うなら口出すなまっくろくろすけ」

クロノの発言に、吼太が突っ込む。

「……時間が無い。簡単に説明するぞ。今、あの騎士らしきなにか……」

クロノが一瞥した先には、黒い染みらしきものがあった。

「あれをなんとかする方法だ」

「なんとかするって……アンタデバイスが……」

先程合流したアルフが言う。

クロノの手には、あちこちから煙をあげているＳ２Ｕがあった。

「……大分、無理をさせてしまったからな」

クロノが言った瞬間、Ｓ２Ｕは小さく爆ぜ、破片となって海に墜ちていった。

「……お疲れ。Ｓ２Ｕ」

破片が、僅かに光ったように感じた一同。

それは、Ｓ２Ｕの感謝の意思だったのかもしれない。

「……さて、方法なんだが……「待て」誰だ!?」

クロノが話そうとした瞬間、どこからか声がする。

「……お前達は!」

クロノが見た先にいたのは、いつかの仮面の男達。

仮面の男達は、吼太達が全員自分を認識したところで、その仮面を外した。

「「「「えっ!?」」」」

なのは達、何人かが驚きの声をあげた。

その仮面の下にあったのは、今までの声からは想像もつかない顔だった。

「アリア……ロッテ……」

「クロノ……よく頑張ったね」

「プレゼントってわけじゃないけど、父様がクロノにって」

そう言って、アリアがカードをクロノに投げ渡す。

「氷結の杖、デュランダル。今のクロノなら使いこなせる」

「闇の書の闇を……頼むよ」

「いや、アリアとロッテも手伝ってくれ」

「「！？」」

クロノの発言に驚くリーゼ達。

「……ダメか？」

「いいのか…？」

「あたし達が手伝っても……？」

クロノは頷く。

「これで役者は揃ったな」

吼太の声に、みんなが顔を見合わせる。

「全員かなりの実力者だ！これだけいれば何でも出来るさ！」

「そうだね！」

吼太の言葉に、リームが追随する。

「さて、会議始めっぞ！とっとと決めて、とっとと倒して、その後は……」

そこで一旦言葉を区切る吼太。

「「「……後は？」」」

「……パーティーだ！」

吼太は高らかに宣言した。

その場にいた人達は、一瞬呆気にとられるが、すぐに笑みを顔に浮かべ…

「（うん）（おう）（おぉ）っ！！！」

元気に返事を返した。

## 第八十五話　最終攻撃準備（後書き）

なっぺ「後書き座談会！パワーを送りましょう！」

吼太「送るな」

なっぺ「送りまーした♪」

吼太「軽いな」

なっぺ「さてさて次回はフルボッコ」

吼太「楽しみだ」

なっぺ「執筆が大変そうだ……」

吼太「頑張れよ」

なっぺ「頑張る。そいじゃ感想感謝コーナー行くで！」

吼太「ライさん、香崎　真琴さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、七つ夜＆夜つ七さん、バルディッシュさん、まーたさん、天照らす大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんとこからはクドリャフカを、バルディッシュさんからは憎悪と怒りの獄門、雷撃と火炎の城塞、炎槍と水剣の裁、天使と悪魔の墳墓、焦土と開拓の天変、守護と偶然の象徴、崩壊と灼熱の牙、神秘と創造の石碑、破壊と誕生の神殿、英知と追

撃の宝剣、魂と記憶の盾、調和と繁栄の罠、偶発と弾幕の要塞、生命と霊力の変換を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「今回もコスプレ衣装は無かったか……よかった……」

なっぺ「十中八九オレの知識不足が原因なんだろうなぁ……すいません」

クド「ここはどこですか？」

なっぺ「やぁクド。まずは（ｒｙ」

――説明中――

なっぺ「わかった？」

クド「わかったです！」

吼太「物分かりがいいな。いい子だ」

クド「！？／／／／／／／」

吼太「？」

なっぺ「……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十六話　聖夜を照らす、赤き祈り（前書き）

長かったぜ！

途中で指が疲れたんだぜ！！

# 第八十六話　聖夜を照らす、赤き祈り

Ｓｉｄｅ　吼太

答えを出す者と複写眼（アンサーアルカヤ・スティグマ）による解析によると、ホルクスは夜天の書及び闇天の書のプログラムから独立、切り離された防衛プログラムと合体したらしい。

まぁ、それなら後腐れなく葬り去れるな。

「さて、とりあえず僕が思い付いた奴を倒す手段は二つ。一つは強力な氷結魔法で停止させること。もう一つは軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシェルで消滅させる。……他に何か案はないか？　夜天の書の主と守護騎士の君達に聞きたい」

クロノがはやてとリインフォース、ヴォルケンリッターのみんなに聞く。

そこでシャマルが怖ず怖ずと喋り始める。

「あの……最初のは難しいと思います…主のいなくなった防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「それに、虚偽のやつが合体している以上、あまり時間の経たない内に解呪されてしまうだろう」

ザンクが意見の補足をする。

「アルカンシェルも絶対ダメ！そんなの使ったらはやての家までぶ

っ飛んじゃうじゃんか！」

ヴィータが腕で×を作りながら言う。

「そ、そんなに凄いの？」

なのはは威力が理解出来てないらしく、思わずといった様相で聞く。

「アルカンシェルって言うのは発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲のことなんだ……まぁ、ここに撃ったら海鳴の町は…」

「あの、それ私も反対！」

「私も！」

「僕も！」

なのは、フェイト、リームが反対する。

「沖合に出しても空間歪曲の被害は出るし……じゃあどうすれば……？」

みんながまた悩み始める。

実を言えば、オレはあの程度のものを潰すことぐらい、簡単に出来る。

レムリア・インパクトで一発、ゴルディオンクラッシャーで一発、アークギガドリルブレイクで一発、シン・クリア・セウノウスで一

発、十ッ星神器、魔王で一発……

手段なんて無数にある。

ただ、ここではやて達自身が倒さなければ彼女達は心の闇を克服しきれないだろう。

だから、ここはみんなの力で倒さなきゃいけない。

「……あーもう！みんなで一緒に攻撃して、ドバーッとやっつけりゃいいじゃないか！」

ふと、空中で胡座をかくという器用な真似をしながら話を聞いていたアルフが言い出した。

「それで倒せれば苦労はしないさ……」

クロノが呆れたように言う。

だが、アルフのその言葉を聞いて、全く違う反応を返したのがこの三人。

「みんなで……ドバーッと」

「地球でやったら……危ないから…」

「やったら……地球じゃないとこ……」

「「「……そうだ！」」」

なのは、フェイト、そしてはやてだ。

「エイミィさん！アルカンシェルを宇宙で撃つことは出来ますか！？」

なのはが大声で聞く。

『撃てますよぉ～！宇宙だろうが……どこだろうが！』

エイミィは、聞いてるこっちが気持ち良くなるぐらいの声で太鼓判を押してくれた。

「じゃ、決定ですわね」

「実に個人の能力頼みで、ギャンブル性の高い方法だが……この場では適切か…」

『みんな！覚醒が始まったよ！こっちの用意はしとくから、頑張ってね！』

そう言って激励してくるエイミィ。

「さて、いいな？まずはバリアを貫く！」

クロノが言う。

そして、災悪の根源が目覚めた。

「ハハハハハハハハハ！！！！！殺戮のショータイムだ！」

『嘘！？魔力と物理の複合バリアが４０も！？これじゃあバリアを破る前に暴走が……！』

「なら、オレが行く……ちょうど、螺旋力が一段階上まで制御出来たとこだ」

エイミィの絶望的な報告を受けた上で、前に出る吼太。

その右手には、まばゆいばかりの緑の光が溢れていた。

「覚悟しろよ糞野郎！」

そう叫び、シャンタクを全開にしながら暴走体に突っ込む吼太。

「無限の闇を光に変える！」

吼太の右手の光が五本の指先に集まり、ドリルになる。

「天上天下、一騎当神の力ぁ……」

そのまま、手をバリアに押し付ける。

「見せて！」

一瞬の拮抗。だが、バリアはすぐに破れ、あっという間に吼太の右

手は暴走体の肉体に食い込んだ。

「やぁるぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

手を握り潰すと、そこから大量のエネルギーが溢れ、暴走体の身体に満ちる。そして、暴走体は内部から大爆発を起こした。

「ギャアァァァァァァァァァァァァァァァ！？！？！？！？」

『ぜ、全バリアの破壊を確認……さらに、暴走体へのダメージまでって……』

「さすがお父様ですわぁ……♪」

プリムはうっとりしたように言う。

「オノレ……おのれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

海中から幾多もの触手が溢れ、吼太に襲い掛かる。

「それなら！」

「僕たちの！」

「出番だね！」

「……頑張る…！」

次に出てきたのはリーゼアリア、ユーノ、アルフの三人。

「フープ……」

「ストラグル……」

「チェーン……」

「「「バインド！！！！！」」」

アリアのフープバインドが触手の全てを固定し、ユーノのストラグルバインドと、アルフのチェーンバインドが触手を全て薙ぎ払った。

その隙に暴走体から離れる吼太。

「ならばぁ！」

そう言い、巨大な砲台を自身の上に作り出す暴走体。

その威力は、並大抵のものではないことは容易に想像がつくだろう。

だが……

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃など撃たせるものか！！」

前に出たのはヴォルケンリッターの一人、青き狼ザフィーラ。

「縛れ！！鋼の軛！！！」

ザフィーラが自身の前で腕を交差させると、海から白い、尖った柱が突き出てきて、砲台を貫いた。

鋼の軛に出口を封じられたエネルギーは、内部で暴走し、暴発を起こす。

「小癪な……！」

「そのような醜い姿……とても耐えられはしない。主の前で無礼であるぞ！虚偽の……いや、闇の書の闇よ！！」

次に前に出たの歪みの騎士ザンク。

ザンクは剣を構え、自身の全力を持って斬撃を放つ。

「夜天の主に逆らった罰！歪みの騎士ザンクが今味あわせてやろう！！秘技、罰龍…轟閃！！！」

それは、咎人に与える…神の罰。

ザンクが上段から剣を振り下ろすと、上空から巨大な剣を模した魔力が落下し、暴走体に突き刺さった。

「がぁぁぁぁぁ！？」

痛みに苦しみながらも、バリアを二層張ることに成功する暴走体。

その隙に傷を回復しようとするが……

「鉄鎚の騎士ヴィータと！鉄の伯爵グラーフアイゼン！！」

『ギガントフォルム！』

破壊に特化した巨大な形態、ギガントフォルムにグラーフアイゼンを変形させたヴィータが、カートリッジの魔力を使いハンマーの先をさらに巨大化させる。

「轟天爆砕！！ギガント！シュラァァァァーーーークッッッ！！！！！！！」

まさに、巨人の一撃（ギガントシュラーク）を受けたバリアは、あっさり割れてしまう。

だが、二層目は魔力バリアらしく、突破するには至らない。

「次、頼むぞ高町なのは！！」

「まっかせてヴィータちゃん！」

次に出たのは白い魔導師、高町なのは。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン！行きます！」

『バレルショット』

不可視のバインドが、暴走体の動きを制限する。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！ブレイク、シュゥゥゥゥーーーーーーート！！！！！！」

膨大な魔力が砲撃として放たれる。

あまりの膨大さに、途中で魔力が四方向に別れてしまうが、なのは

はそれを強引に一つにまとめあげ、バリアにぶつけた。
たちまち砕け散るバリア。
「行かせてもらうよ！」
次に出たのはミカ。
ミカは全力で螺旋力を溜め、ドリルにする。
それは、天を衝く一撃。
「ギガァァァ……ドリルゥゥゥ……ブレイクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！！！！！」
巨大なドリルを構え、突進するミカ。
高速で回転するドリルに抵抗する術など、今の暴走体には存在しなかった。
たちまち、風穴を空けられる暴走体。
「ミカ・フラウリーナ・ヨシヤ！貫くことにかけたら天下一品だよ！」
「ぐ、くそぉぉぉぉぉぉ！！！！」
偽物を大量に生み出す暴走体。
「そんな中身の無いやつなんか！」

リーゼロッテが、偽物が行動を始める前に急所を潰し、殲滅した。

「次は僕の番！雷刃の襲撃者とバルフィニカスだ！喰らえぇ！」

雷刃の襲撃者が、自身のデバイスのバルフィニカスを構える。

「天破、雷神剣！！！」

魔力を篭めると、金色に輝く剣が空中に幾つも発生した。

「てぇいっ！」

雷刃の襲撃者がバルフィニカスを振り下ろすと剣もそれに従い、落ちていき、暴走体に突き刺さる。

「粉！砕！」

雷刃の襲撃者がキーワードを唱えた瞬間、剣から猛烈な雷が発生し、暴走体を破壊する。

「やったぁ！すごいぞ強いぞカッコイイ～！！！」

バルフィニカスをくるくる回転させながら喜ぶ雷刃の襲撃者。

「嘗めるなァァァァ！！！！！！」

自身の身体から、ブーメランのような魔力弾を放つ暴走体。

だが、それらは彼女によって防がれた。

『ハスタームーブ』

「ハァァァ！」

バルディッシュ　ザンバーフォームを神速で振るう少女、フェイトだ。

「フェイト・テスタロッサと、バルディッシュ・ザンバー！撃ち抜け、雷神！」

ソニックフォームのまま、バルディッシュを振り下ろすフェイト。

『ジェットザンバー』

「ジェット…ザンバァァァーーーー！！！！！」

その魔力刃が一気に伸び、暴走体を断ち切る。

「ぐぅ……」

おもわず怯む暴走体。

よくみれば、その切り口にはコアらしきものが露出していた。

「シグナム！」

「任せろテスタロッサ！……剣の騎士、シグナムが魂。炎の魔剣レヴァンティン。刃、連結刃に続くもう一つの姿……」

シグナムがレヴァンティンを鞘と合体させると、その形状が変化した。

『ボーゲンフォルム！』

カートリッジを二発ロードし弦を引くと、魔力で出来た矢が出来る。

そして、烈哮の気合と共に……

「駆けよ隼ァ！！！」

『シュツルムファルケン！』

撃ち出した！

矢は、狙いを違うことなくコアにぶつかり、ダメージを与えた。

「ごぉぇぉ！！？」

『いいよみんな！コアにダメージが入った！』

だが、すぐに暴走体はその形状を変化させ、コアを覆い隠してしまう。

「だったら引きずりだしてあげますわ！」

プリムが魔力を篭めると、赤色に輝く宝石と青色に輝く宝石が現れる。

「ルビーショット！」

赤色に輝く宝石が暴走体に張り付く。

「サファイアチャージ！」

青色に輝く宝石が、五つに増殖しながら暴走体の上空に滞空する。

「どうしたぁ！？全然痛くないぞぉ！！？」

「すぐに分かりますわ……プリム・フラウリーナ・ヨシヤの真骨頂、とくと味わいなさい！ガーネットブラスター！！！」

プリムが砲撃を放つと、その砲撃と示し合わせたように空中に滞空していた青色の宝石からもガーネットブラスターが放たれる。

そして、六つのガーネットブラスターは暴走体に張り付いていた赤色の宝石に吸い込まれるように砲撃が当たった。

外装が砕け散り、コアがある程度露出する。

が、すぐに生体部品が再生を始めた。

「私が行きます。星光の殲滅者と、デバイスのルシフェリオン！」

星光の殲滅者が前に出た。

ルシフェリオンを暴走体に向けて構えた。

「……放て、ブラストファイヤー・フルバースト！！！」

星光の殲滅者が、強大な砲撃を放つ。

砲撃は、コアを包みかけていた生体部品を塵一つ残さず吹き飛ばした。

「次は！」

「アタシ達の番ね！」

アリサとすずかが前に出る。

「アリサ・バニングスと、エッケザックス！喰らいなさい！バーニングバインド！」

アリサのエッケザックスから放たれた炎が、コアの周りを囲み、再生を阻止する。

そこにガランホルンを向けるすずか。

「行きなさい！すずか！」

「うん！！…月村すずかと、ガランホルン！……奏でて、ワンダーノイズ！！」

ガランホルンから放たれた音が、暴走体にぶつかると、その部分から崩壊を始める。

いわゆる、ソリタリーウェーブというものだ。

「Ｇｙａａａａａａａａ！！？」

もはや、知性すら感じない叫び声をあげる暴走体。

コアに多大な被害を受けているが、それでもなお生き続けていた。

コアを再生させるために、コアを奥へと移動させる

「行くで！リインフォース！あとえーっと……」

「闇統べる王だ！覚えておけ子烏！！」

『主、この魔法をお使いください』

「ありがとうなリインフォース！行くで！」

そう言いはやては杖を、闇統べる王はエルシニアクロイツを構える。

「「『彼方より来れ。ヤドリギの枝。銀月の槍となりて。撃ち貫け！』」」

三つの声は綺麗に重なり、そして術が完成する。

「「『石化の槍、ミストルティン！』」」

暴走体の周りに展開された魔法陣から突き出た槍が、暴走体を貫く。

するとそこから、生体部品が石化していった。

が、まだ内部は死んでいないらしく、内部から脱皮するように再生する。

「行くよクロノ君！僕が力貸してあげるんだから感謝しなよ！」

「わかったよ」

クロノとリームという意外なコンビが前に出る。

「夢を与えるもの、リーム！」

「管理局執務官……いや、クライド・ハラオウンの息子、クロノ・ハラオウンと氷結の杖、デュランダル！」

「「ユニゾン・イン！」」

リームがクロノにユニゾンすると、クロノの髪が白銀に染まり、服は灰色を基調としたものになる。

「『悠久なる凍土。凍てつく棺の内にて。永遠の眠りを与えよ』」

クロノとリームが呪文を唱える。

『氷結加速！いつでもどーぞ！』

「あぁ、凍てつけ！」

「『エターナルコフィン！！！』」

辺りの海ごと凍り付く暴走体。

だが、極低温に晒されてなお、その再生は止まらない。

「みんな、行こう！」

なのはが言うと、フェイト、はやて、アリサ、すずか、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者、闇統べる王、プリムが頷く。

「と、その前に♪そんな状態で魔法を使ったら、みんな倒れちゃうわよ？」

そこにシャマルが割り込む。

確かに、なのは達は満身創痍といった様相で、砲撃を放つだけの体力が残っているかは微妙なところであった。

「クラールヴィント、癒しの風を運んで…」

『ｊａ！』

「ソノ隙ヲ逃すト思ってるノカぁぁぁぁ！？」

暴走体から幾多の砲撃が放たれる。

が、

「……やらせない。私がいる限り……！」

ライラが張ったタカネニガナが、砲撃を全て暴走体に弾き返していく。

やがて、暴走体が作った即席の砲台は、全て自身の放った砲撃によ

って破壊された。

「ライラ・フラウリーナ・ヨシヤ……防御は凄いよ……多分……」

そして、なのは達は完全に回復したのだった。

「湖の騎士シャマルと、風の癒し手クラールヴィント。回復と補助が担当です♪」

「アァァ……」

完全に抵抗が無くなった暴走体。

……いや、抵抗出来なくなったとするのが正しいだろう。

そして、なのは達がデバイスを、手を構える。

「集え明星、全てを灼き尽くす焔となれ！ルシフェリオン……」

「雷刃滅殺！極光……」

「絶望に足掻け塵芥！エクスカリバー……」

「輝け太陽！プロミネンス……」

「煌めけ三日月！クレッセント……」

「我が望みは殲滅！ダイアモンド……」

「雷光一閃！プラズマザンバー……」

「響け終焉の笛！ラグナロク……」

「全力全開！スターライト……」

そして、九本の大火力砲撃が……

「「「「「「「「「ブレイカァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

放たれた！！！

超威力を誇る砲撃を受け、生体部品を全て破壊される暴走体。

『コア、完全に露出！』

『こちらも準備完了よ！』

エイミィとリンディから通信が送られて来る。

「旅人の鏡！捕まえ……たぁ！」

シャマルの旅人の鏡が、暴走体のコアを捕捉する。

そこに、三つの魔法陣が現れる。

ユーノ、アルフ、ライラの魔法陣だ。

そして四人は呼吸を合わせ……

「転っ……送！！！」

コアを転送した。

生体部品が再生され始めるが、完全に復活する前に衛星軌道上に転送される暴走体。

「来ました艦長！」

「アルカンシェル、発射！」

アースラに環状魔法陣が現れ、そしてアルカンシェルが放たれた。

カッ……

「対象に着弾を確認！」

「これで、一安心かしらね……」

リンディと一緒にアースラに乗り込んでいたプレシアが言う。

だが……

「……違う…」

「まだ……いる……！」

アリシアとアリスは身体を震わせながら呟く。

「なっ……コアの反応を確認！対象、消滅していません！」

『ハハハハハハハハハハ……ボクは……僕ハ死ナナいのさァァァアアアアアアアアアア！！！！！！』

「そんな……」

「……艦長、地球から魔力反応！これは……吼太君です！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

何か嫌な予感はしていた。

そして、その予感は当たってしまった。

暴走体は、魔力を吸収する体質に自身の生体部品を変化させたのだ。

さらに、アルカンシェルの魔力を吸収することで、自身の傷を一気に癒した上、完全な姿へと変貌していた。

それは、巨大な蛇そのもの。

アルカンシェルが撃たれた瞬間にそのことを答えを出す者で知ったオレは、シン・シュドルクを使って大気圏外まで飛び出していた。

そして衛星起動上、オレは暴走体と相対していた。

『クソ！忌ま忌ましいヤツメ！貴様は……キサまは誰何ダァァァァァァァァァァァ！！！！！』

「通りすがりのチート魔導師だ！覚えておきやがれ！！！」

『ゴギャァァァァ！』

暴走体から、不可視の魔力弾が放たれる。

宇宙空間である上、魔術的にも光学的にも迷彩を施された魔力弾は、オレの身体を貫くはずだった。

しかし、オレには効かない。

意識を、神経を全世界に張り巡らせ、猛烈な勢いで世界の法則を演算し始める。

瞬時に導き出された式に理論を書き加え、自らの世界を構築していく。

その世界においては、不可視は不可視たりえない。

見えた魔力弾を、ドリルで貫いた。

『！？！？！？』

「わかんねぇか！？わかんねぇだろうなぁ！テメェには一生わかんねぇよっ！！！」

オレが言うと、暴走体はオレに無数の魔力弾を飛ばしてくる。

もう、不可視にする余裕すら無いらしい。

だが魔力弾は、ガードスキル、ディストーションによって弾かれる。

「トゥード！最終ロック解除！アームドアップだ！！！」

『了解。ＪＳ機関フルドライブ。Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ａｒｍｄ　ｕｐ！！！』

その瞬間、オレの中の様々な力が目覚め、全身から深紅の光が溢れる。

螺旋力が、武者魂が、魔力が目覚めていく。

さらに、ジッパーの中からはいくつかのパーツが飛び出し、また、武装召喚も実行される。

そして、オレの身体に合体していく。

頭にはレウスヘルム、胴体はグレンラガン。肩には武王頑駄無のブースター、腕はインペリアルドラモン・ファイターモードの鎧、腰にはディケイドライバー、背中にはガッシュのマント、脚はデモンベインのシールド。

最後に、マント以外の全ての部位が深紅に染まる。

オレの強化武装形態、【クロスオーバーフォーム】だ。

この形態ならば、あれを使う反動を全て無効化出来る。

そして、オレは複写眼（アルファ・スティグマ）を発動する。

使うのは、シャマルの魔術、【旅人の鏡】。

それを使い、オレ自身のリンカーコアに突き刺さっているものを抜き取る。

その瞬間、世界は決戦場と化した。

……いや、一方的な殺戮を決戦とは言わない。

それは、処刑場だった。

世界が塗り変わったのではない、変わらざるを得なかったのだ。

この、輝く神具を世界という器に収めるために。

シャイニング・トラペゾヘドロン。

旧神の最終兵器にして、数多の邪神を収めた箱。

今、それは使用者である吼太に合わせ、大剣のような形になっていた。

その剣先を、暴走体に突き刺す。

すると、暴走体の後ろに光とも闇とも似つかぬ空間の穴が空いた。

光が、闇が暴走体を引きずり込もうとしていく。

「テメェには死すら生温い。小さな世界で邪神どもと永遠に後悔してやがれ！！！」

『嫌だァ！イやダァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……』

そして、暴走体は完全にこの宇宙から消え去った。

役目を終え、オレのリンカーコアへと帰るシャイニング・トラペゾヘドロン。

こうして、長い長い戦いは終わりを告げた。

# 第八十六話　聖夜を照らす、赤き祈り（後書き）

なっぺ「後書き座談会どえらいこっちゃ！！！」

吼太「何が？」

なっぺ「１００万アクセス突破したんだよ！」

吼太「そりゃめでたいな」

なっぺ「皆さん本当にありがとうございます！」

吼太「こんな駄文も来るとこきたな」

なっぺ「まだまだ行くさ！そしてホモクスも撃破！」

吼太「すっきりしたぜ」

なっぺ「さて、クロスオーバーフォームの説明でも次に入れるか」

吼太「え？次回それだけ？」

なっぺ「他にも入れるけどね。さてさて感想感謝コーナー行こうか」

吼太「応。水橋さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、ライさん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、香崎　真琴さん、雨季さん、朱神優希さん、月光閃火さん。感想ありがとうございました！」

シャマル「ＡｒｉｓｈｉａさんからはＦＦ？のユウナ、リュック、ルールーの服を、バルディッシュさんからはライトニング・チャージャー、バリアント・スパーク、深緑の魔法陣、フェアリー・ライフ、ナチュラル・トラップ、ブラッサム・トラップ、クリムゾン・チャージャー、ツイン・ターボ、あと吼太君にＣＣさくら三期ＯＰでのさくらの衣装を、緋水さんからはボルシャックロスＮＥＸ、エンペラーキリコ、ガジラビュート、スペルデルフィンを、朱神優希さんからはエトナとフロンの衣装、プリニーの着ぐるみを頂きました！ありがとうございます♪」

吼太「あれ？シャマル？何故に？」

なっぺ「あぁそれは……」

月光閃火「そうそう。そこで砂糖を大匙一杯」

シャマル「へ？あ、こうですか？」

月光閃火「うん。上手上手」

なっぺ「月光閃火さんに料理を教わってるから」

吼太「望みは？」

なっぺ「薄いんじゃない？だってセンスの問題だし。さぁ、久々のコスプレタイム！」

吼太「要らない！」

なっぺ「みんなが望んでたコスプレターイム！」

吼太「なんで望むんだみんな！？」

なっぺ「まずはユウナの衣装！」

吼太「肩から腋が露出しちまうんだけど…／／／／／」

なっぺ「リュックの衣装！」

吼太「うぁぁぁ…み…見るなぁ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「ルールー！」

吼太「さっきに比べれば……やっぱダメぇ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「ＣＣさくら！」

吼太「こんな可愛らし過ぎるの着れるか！／／／／／」

なっぺ「遅い！」

吼太「見ないで……見ないでくれぇ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「エトナ！」

吼太「作者ぶっ殺す！／／／／／／」

なっぺ「フハハハ！フロン！」

吼太「かに味噌っ……？」

なっぺ「恥ずかしくないの？」

吼太「いや、かに味噌のほうが気になって」

なっぺ「激写につぐ激写ぁ～！」

吼太「な！？や、やめろ！／／／／」

なっぺ「そしてプリニー」

吼太「プリニーっす」

シャマル「……あんまりカワイクないわね。ペンギンにしては」

吼太「知らねぇよ」

クラウディウス「うわっ！？どこだここ！？」

吼太「よう。とりあえずは落ち着け」

クラウディウス「ペンギンらしき生物が喋った！？にしては敵意がないケド……」

なっぺ「うん。カオスだね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十七話　消えねぇのか？（前書き）

体☆調☆不☆良☆再☆び！

しかし更新はする。

# 第八十七話　消えねぇのか？

Ｓｉｄｅ　なのは

「綺麗……」

コータ君が飛んでいったあと、空中の光を見た感想がそれだった。

暗闇に光る、深紅の星。

クリスマスイブに起こった、小さな奇跡だったのかもしれない。

この場にいた全員が、その星に見とれていた。

そして……

『闇の書の反応、完全に消失！お疲れ様みんな！』

「……」

『…みんな？』

「「「やっ……たぁぁぁ～～～～～！！！」」」

私、フェイトちゃん、リームさんが一斉に声をあげる。

これで、終わりなんだ！

「はやて！？はやて！！」

ふとヴィータちゃんが声をあげる。
見ると、そこには気を失ったはやてちゃんを支えるシグナムさんが…

Ｓｉｄｅ　三人称

はやてが寝ている病室。
部屋の中心にベッドが置かれたその部屋には、リインフォースと守護騎士達が悲痛な趣で話し合っていた。

「防御プログラムは破壊したが歪められた基礎構造はそのままだ。私は……夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを精製し、また暴走を始めるだろう……」

リインフォースが告げる。

「修復は出来ないの？」

「無理だ、管制プログラムである私のプログラムから夜天の書本来

の姿は消されてしまっている」

シャマルの言葉も、リインフォースによっ否定される。

「元の姿が分からねば、戻しようがないということか」

ザンクが言う。

「そういうことだ」

「……ま、仕方ねーよな。はやてと別れることになるのは辛いけど……」

「主の命には代えられぬ」

ヴィータとザフィーラは、決意を秘めながらも努めて明るい口調で言う。

「では、お前らも構わぬな？」

シグナムが聞くと、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、ザンクが頷く。

しかし、そこでリインフォースが待ったをかけた。

なのは達はアースラの談話室で話をしていた。

吼太を始めとする吉谷ファミリー（吼太、リーム、プリム、ミカ、ライラ、アリス、トゥード）は暴走体を倒した後から姿が見えなかったが、念話が通じていたことから、行方不明というわけではなかった。

「クロノ、それ本当なの？夜天の魔導書を破壊しなきゃいけないって……」

「どうして！？防衛プログラムはあの時…」

「夜天の書の管制プログラム……リインフォースからの進言だ」

「防御プログラムは破壊出来たけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度ははやてちゃんを侵食される可能性が高い……夜天の書が存在する限りどうしても危険は消えないんだ」

「だからリインフォースは防御プログラムが消えている今のうちに自らを破壊するように申し出た」

クロノとユーノが交互に話す。

「じゃ、じゃあリインフォースさんはもちろん、ヴィータちゃんやシグナムさん達も……」

なのはの問いに、クロノは答えない。

だが、その悔しさに満ちた顔が全てを物語っていた。

「そんな……」

「いや、消えるのはリインフォースだけだ」

その場に現れたのはザンク。

「ザンクさん!?それって……」

「管制人格は、リインフォースはヴォルケンリッタープログラムと闇天の書を自身から切り離していたのだ。防衛プログラムと共にな」

「じゃあ……マテリアルのみんなは…？」

アリシアが言うと、代わりに星光の殲滅者が答える。

「私達は元々、防衛プログラムが自身の一部を切り離して作られた存在。夜天の魔導書がどのような結果になろうと私達に影響はありません」

「ってことは……」

なのはが言うと、ザンクが頷いた。

「あぁ。シグナム達ヴォルケンリッター、マテリアル達、そして私は消えない。あと、リインフォースがお前達二人に頼みがあるそうだ」

「「頼み…？」」

Ｓｉｄｅ　リインフォース

雪の降る朝、私は高町なのは、フェイト・テスタロッサ、ヴォルケンリッター、マテリアル達、罰の執行人（ザンク）と共にとある開けた場所にいた。

「では……」

私が言うと、足元にベルカ式魔法陣を元にした魔法陣が展開される。

『準備はよろしいですか？』

「あぁ、頼む」

「ねぇ……リインフォース、本当に何も手はないの？　はやてだってあなたに残って欲しいに決まってる……だから」

フェイトが問い掛けるが、私はそれを否定する。

「無理だ、夜天の魔導書の本来の姿はもはや私の中に存在しない。改変されたこの身では再び防衛プログラムを作りだし、主はやてを侵食する……そうなる前に私は旅立つんだ。お前達二人の魔導師の力によって」

次に、二つのデバイスに意識を向ける。

「短い間だったが…お前達にも世話になった」

『気にせずに』

『よい旅を』

バルディッシュに、レイジングハートと言ったか……

よいデバイスなのだな……

そして、目をつむり、視界を閉じる。

「リインフォース！」

そこに、あの優しげな声が響いた。

「主、はやて……！？」

主はやてが、着の身着のままといった状態で、車椅子の車輪を自分で回しながら来ていた。

そして、あと一歩といった距離で何かに躓いたのか、転んでしまう主はやて。

脚が自然に出て行きそうになるが、すんでのところで踏み止まる。

「なんで…なんでリィンフォースがいなくならないといけないんや

!?そんなことせえへんでも私がちゃんと抑える!だから!そんなことせえへんでええ!」

主はやてが私に叫んでくる。

だが、私は折れるわけにはいかない。

「……主はやて、これで良いのです。あなたは救われ、守護騎士達も残り続けます……ですから、大丈夫です」

「良いわけあらへん!マスターは私や!勝手な真似は許さへん!」

もう限界だった。主はやてに近づき、その小さな身体を抱きしめる。

「一度だけ……一度だけ不義理をお許しください……主はやて……」

「リイン…フォース……」

二人で泣く。

そして、ひとしきり泣いた後、立ち上がり、最後の手順に移る。

「大丈夫です。私はもう、世界で一番幸福な……魔導書ですから」

そして、主はやての方を向き、最後の願いごとをする。

「主はやて…一つ、お願いが。私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈ってあげてくれますか?祝福

の風、リインフォース…私の魂はきっとその子に宿ります」

「そんな……リインフォース……！」

「はい。我が主」

そして、私の身体を光が包む。

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達…ありがとう。そして、さようなら…」

……

「……消えねぇのか？リインフォース」

「少し待てヴィータ。リインフォースとて何かあるのだろう」

「でも……なんか閉まらないわねぇ…」

「もー、さっさと消えろー！」

ヴィータ、シグナム、シャマル、雷刃の襲撃者が言う。

顔には冷や汗が伝っているのがわかる。

「間一髪、間に合ったみたいだな」

そこにあの少年の声が聞こえた。

Ｓｉｄｅ　吼太

間一髪だよホントに……

Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを使って夜天の書にアクセスして、システムのクリーニングが完了したのが今さっき。

トゥードのサポートがなきゃ間に合わなかったぜ……

「どういうことだ？」

「だから、たった今修復プログラムがインストールし終わったって言ったんだよ。だからシステムにキャンセルをかけられたんだ」

「でたらめを言うな！そんなこと……そんな奇跡が起こるわけ……仮にそうだとしても、そんな都合のいい奇跡が……」

「都合がいいから、奇跡って言うんだよ」

「……どうやって、修復プログラムを？今、元となる夜天の書の基本構造は私の中に無いはず……」

リインフォースが聞いてくる。

「それは簡単な話だろ。今に無いんだったら昔に戻ればいい」

そう言い、オレが天を指差すと、そこから線路が伸びてきて、その線路を伝って電車が走ってきた。

「で、電車が空中を走ってるのー！」

「なんやアレ！？」

地球出身の二人の驚きは特にすごいみたいだな。

「こいつはデンライナー。時を越える列車だ。オレはさっきまでコイツを使って過去に行っていた」

「過去……？」

「まさか……！？」

リインフォースは気づいたみたいだな。

「そう。夜天の魔導書が誕生した時間だ」

## 第八十七話　消えねぇのか？（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始めまっせ～」

吼太「はいはい」

なっぺ「さてさて、過去の話が出てきました」

吼太「そーだな」

なっぺ「しかし長くはなりません！今はエピローグ！長くする必要性は無い！なんで、過去編とかはありません」

吼太「ザンク消えないのか」

なっぺ「ヴォルケンリッターと似た扱いだね。ただ、八神家の一員にはなりません。詳しくは次回以降で説明します！じゃ感想感謝コーナー行くぜぃ」

吼太「バルディッシュさん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、ライさん、水橋さん、天照大神さん、七つ夜&夜つ七さん、緋水さん、香崎　真琴さん、八人目な武器屋さん、朱神優希さん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは無限掌、フル・コマンド、獣達の挽歌、クリムゾン・コミューン、スパイラル・チャージャーを、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからは巨大ショートケーキを、水橋さんとこからはロイヤルローズ、デスパライズ、氷牙、雷神剣インドラ、ネイティブホルン、マジンノオカリナ、ヴォルガニックギグ、

ルナーリコーダー、双聖剣ギルドナイト、フローズンデス、ラストタバルジン、防具Zシリーズ全部、回復薬グレート、栄養剤グレート十個、連続肉焼きセット、飛竜の卵と草食竜の卵を一つずつ、モンハンワールドに行ける転移装置、七つ夜&夜つ七さんとこからは十二単を、香崎　真琴さんとこからは吼太写真集、『Ｄｏｎ'ｔ　ｓａｙ　ｌａｚｙ』『Ｌｉｓｔｅｎ!』『Ｎｏ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ』でＨＴＴのメンバーが着ていた衣裳を、八人目な武器屋さんからはエイボンの書、妖虻の秘密、屍食教典儀、金枝篇、水神クタアト（全て精霊覚醒一歩手前）、デモンベイン・トゥーソード、【英霊招かれし宝飾宮殿（ヴァルハラ）】を、朱神優希さんからはテイルズオブヴェスペリアのジュデイスとリタの服を、ＡｒｉｓｈｉａさんからはＴＯＤ２のリアラ、ナナリー、ハロルドの服を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「たくさんきたな。要らないやつもかなりあるが」

なっぺ「全部必要だろ。カードと武器各種はジッパーに保管。各魔導書は吼太の部屋に置いておこう」

ベス「デモンベイン・トゥーソードはアマテラスの格納庫に保管ですね」

なっぺ「転移装置は以前頂いた転移拠点と合体、ケーキは食った、英霊招かれし宝飾宮殿は不明だからとりあえずジッパーに保管だな」

吼太「よし、終わり」

なっぺ「終わらせねぇよ!?詩音になれー！そして優カモン！」

優「うわっ!?」

詩音「優お兄ちゃぁ～ん」↑抱き着き

なっぺ「今回は詩音コスプレにしてみました。まずは十二単！」

詩音「重いぃ～」

優「意外と似合うかも…？」

なっぺ「キリンZシリーズ！」

詩音「可愛い～？」

優「うん。可愛らしいよ詩音ちゃん」

詩音「えへへ～／／／／／」

なっぺ「Ｄｏｎ'ｔ　ｓａｙ　ｌａｚｙの澪！」

詩音「カッコイイかな？」

優「こういうのも似合うんだね」

なっぺ「Ｌｉｓｔｅｎ！のムギ！」

詩音「へへ～／／／／」

優「へぇ～。これも可愛いね」

なっぺ「Ｎｏ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕのあずにゃん！」

詩音「にゃあ～！」↑抱き着く

優「ん」↑頭を撫でる

なっぺ「リアラ！」

詩音「どうどう～？」

優「うん。可愛いと思うよ」

なっぺ「ジュディス！」

詩音「これは～？／／／」

優「う、うん。いいと思うよ？（なんか露出が酷くなってきてないかな…？）」

なっぺ「リタ！」

詩音「にゃにゃーん♪」

優「（よかった……気のせいか…）」

なっぺ「ハロルド！」

詩音「ん～／／／／／／」

優「むぐっ！？／／／／／／」

ベス「キス、しましたね。深いほう」

なっぺ「ナナリー！」

詩音「詩音ね？身体が熱いの……／／／／／／／」

優「え？あれ？なにか嫌な予感が……」

なっぺ「優。いいニュースと悪いニュースがある。どっちから聞きたい？」

優「い、いいニュースから……」

なっぺ「ゴルディオンハリセンは現在C整備（全部バラして整備）中だ。止めるものは何もないぞ。よかったな」

優「よくない！……そういや、悪いニュースは？」

なっぺ「ん、あぁ、優ラバーズがこの様子を見てるってこと」

な&優「「……」」

なっぺ「グッドラック！」

詩音「いただきます…／／／／／／／／／」

アッー

ベス「ではではこの辺で。次回もお楽しみに」

## いろいろ説明

◎闇天の魔導書

夜天の魔導書の一部が、主より離れた場所で活動出来るように分離したもの。

闇天の書と夜天の書はリンクしており、片方で蒐集すれば、両方のページが埋まる。

見た目は、漆黒に染まった夜天の書。ただ、大きさは結構小さい。

管制人格は存在するが、未完成のため完成しても起動はしない。

◎エッケザックス

アリサのデバイス。

待機中はブレスレット、セットアップすると剣になる。

術式はグズィ式、ベルカ寄り。

使える魔術は意外に少なく、刃の強化、バインド、砲撃が一つのみ。

これは、アリサが急造の魔導師であるため。

◎ガランホルン

すずかのデバイス。

待機中はブレスレット、セットアップすると笛になる。

術式はグズィ式　ミッド寄り。

使える魔術は、広域攻撃が一つ、バインド、砲撃が一つのみである。

これは、すずかが急造の魔導師であるため。

◎魔力波演奏形態

メモリーを読み込むことによって、一回だけ使用可能になった特殊形態。

周りに魔力を撒き散らすだけ。

今回は、吼太がこれによって発生した魔力と清めの音を相乗掛合したことで、ホルクス、防衛プログラムとリインフォースを分離する手助けになった。

演奏していた曲に関しては、ニコ〇コ動画でタグ検索【ディケイドウェイブ】にて出てくる動画の、ガンバライドではないほうを見るといいです。

◎Ｓ２Ｕが壊れたわけ

これは、夢の世界から抜け出る際に、Ｓ２Ｕの処理能力を超えた魔術を使用したため。

この際使用したのは、スプライトザンバーみたいな魔術である。

◎螺旋力が一段階云々

螺旋力を段階的に、通常、合体、アーク、超銀河、天元突破、超天元突破に分けた際に、今までは肉体年齢の都合上、アークまでしか制御出来なかった螺旋力を、超銀河まで制御出来るようになったということ。

今回の超銀河だと単純な出力強化の他、過去や未来に向けての攻撃が可能になったり、惑星サイズ、惑星並の質量を持つ攻撃を螺旋エネルギーバリアで無効化できたりする。

ぶっちゃけ、超銀河グレンラガン（月サイズのロボット）が大きさだけ小さくなっているのと変わらない。

また、ギガドリルブレイクは両肩に顕現したギガドリルを一つにして放つ【超銀河ギガドリルブレイク】に強化された。

威力（余波含む）は地球がドーナツになるぐらい。簡単に言えば地球サイズの惑星なら破壊可能。

余談だが、ミカはまだ合体クラスまでの覚醒しかしていない。

◎天破・雷神剣

つまりはサンダーブレイド。

キーワードが【神罰】なんて厨ｎもといカッコイイのになってる理由はお察しください。

◎ハスタームーブが中々出なかった理由。というより言い訳

一応、当初はハスタームーブを練習する回みたいなのを入れる予定だったんですけど、結局入れられず終い…

危険だからなのはのエクセリオンモード同様、エイミィに禁止されてました。

クライマックスバトルで使用したのはなのはと同じ理由。

◎九人同時砲撃

ナインズブレイカー。原作でのトリプルブレイカーに相当。

これだけ受ければそりゃ生体部品全て吹っ飛んだりもする。

◎クロスオーバーフォーム

キーワード『【Ａｒｍｄ　ｕｐ】《アームドアップ》』によって完成する強化武装形態。

吼太がリームやなのは達から聞いた、【虚数空間から戻ってきた時の自身の姿】を模して完成させた。

見た目は重装甲だが、ブースターや相乗掛合した状態で全身に展開されている飛行魔法等がある上、間接部分は非常に柔軟であるため、通常時と全く変わらない、むしろ軽快な動きが可能。

頭にはレウスヘルム、胴体はグレンラガンのグレンの部分。肩には

武王頑駄無の肩部ブースター、腕はインペリアルドラモン・ファイターモードの腕の鎧、腰にはディケイドライバー、背中にはガッシュのマント、脚はデモンベインのシールドが装備されている。

また、全ての鎧は深紅の色で統一されているため、下のバリアジャケットの色である黒とあわせて、深紅と黒の二色を基調としている。

マントは自在に動かせる上、ゴミを気に変える能力　ＬＶ２【回帰】を常時展開しているため、魔力変換資質を使用した魔法や魔力を質量に変換したような攻撃は全てマントに触れた瞬間、魔力素へと還元される。

通常時の鎧の強度は、部位に関係なく核爆弾の直撃を受けて完全に無傷な程。

だが、この鎧の真の目的はシャイニング・トラペゾヘドロン使用時の反動の軽減である。

結果的には反動の軽減どころか、反動を無効化出来るという予想外な事態が発生したが、これは嬉しい誤算であろう。

また、フルドライブに入ることで鎧の各所より魔力と螺旋力を放出し続けるようになる。

また、フルドライブ時の防御力は惑星サイズの質量がぶつかってきても無傷などころか、放出される魔力と螺旋力によってぶつかってきた物体のほうが砕ける程である。

簡単に言うならば、【惑星サイズの拳に殴られても、傷一つつかない】といった具合。

フルドライブ時にはその特性上、全ての攻撃が倍以上の威力に強化されるが、使用後は吼太に猛烈な空腹に襲われる欠点がある。

## 第八十八話　闇の晴れた空（前書き）

一応、今回でA'ｓ編は終わりになります。

長かった～

# 第八十八話　闇の晴れた空

Ｓｉｄｅ　リインフォース

吼太の話してくれたことを要約すると…

・過去に行く
←
・夜天の書のマイスターに会う（意外にも主はやてに似た人物だったらしい）
←
・こっそり夜天の書の基礎データをコピー
←
・【えんじぇるぷれーやー】というデバイスらしきものを使用し、夜天の書の基礎データを元に修正プログラムを作成
←
・現代に帰還。夜天の書に修正プログラムをインストール

といった具合らしい。

「……そんなとんでもないことをしてきたのか……」

「そんなにとんでもないか？」

吼太は可愛らしく首を傾げてくる。

……なかなか可愛いな…

「……コータって……まさか神様？」

不意に雷刃の襲撃者がそんなことを言った。

「いんや？ただの人間だよ」

……ただの人間は時間を跳躍したり出来ないと思うのだが……

「ただ……」

ん？ただ……？

「ただ、他の人よりチャンスに恵まれてただけさ」

……何か、あるのだろうな。

吉谷吼太という人間には……

……よし。

「吉谷吼太。私はお前の友となり、剣となり、盾となることを誓おう」

「……は？」

Ｓｉｄｅ　吼太

……リインフォースはどうしたんだ？いきなりオレの前でかしづいて、わけの分からないことを言い出して…。

「リインフォース？どういうことだ？」

シグナムが聞く。

「私には主はやてがいるから、吼太を主にすることは出来ない。だから、せめて形だけでも礼をしたいのだ」

……えーっと…つまり何？

「つまりは、救われて何もお返しをしないのは嫌だから、はやてと同じマスターみたいな権限をコータにあげたいってこと？」

「そういうことだ」

……え？

「そーゆうことなら！」

ヴィータが言うと、ヴォルケンリッターのみんな、果てはザンクまでリインフォースと同じ態勢をとる。

「我等ヴォルケンリッター」

「主はやての友人、吉谷吼太に感謝の意を示し」

「ここに、友の誓いを立てる」

「どうぞ、なんなりと」

「我、歪みの騎士ザンク。我もまた、そなたに友の誓いを立てよう」

「ちょ！？いきなりそんなこと言われても困るって！」

「まぁ、お友達ってことなんやし、そんなに硬くならんでも……」

はやてが助け舟をだしてくれるが……

「いえ主。こうせねば私達の気が済まないのです。お許しを……」

リインフォースはにべもない。

つーか主には従わなきゃダメなんじゃ……？

「じゃ、じゃあ少し付き合ってくれるか？リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ザンク。あと……はやて」

「ふぇ？私も？」

「あぁ」

せっかくだし、な。

Ｓｉｄｅ　はやて

「え？これに乗るん？」

「おう」

コータ君が指し示したのは、あの空を走る電車、【デンライナー】。

「コータ君。私達はダメなの？」

なのはちゃんが聞く。

「ん？もちろん大丈夫さ。ほら早く乗らないと置いてっちまうぜ？」

「あ、待って！」

全員が乗り込んだことを確認してから、デンライナーが走り始める。

やがて、窓の外の景色は一面の砂漠となった。

「うわ～！」

「ギガすげぇ！」

なのはちゃんとヴィータは初めての時間旅行に興奮しているようやね。

「吼太、どこに向かっているんだ？」

リインフォースがコータ君に聞いていた。

「ま、見てな」

そして、景色がまた一変する。

「ここは……？」

「さっき話してた、夜天の魔導書が誕生した時間だよ。残念ながらデンライナーの外に出ることは禁止させてもらうけどな」

「あ、あれ！」

その時、フェイトちゃんが声を張り上げる。

そこにいたのは……

「……私…？」

Ｓｉｄｅ　吼太

デンライナーに、透明化の天装術をかけながら微速走行させる。

天装術なのは、魔力を感知されるとやっかいだからだ。

そして、ある家の前を通る。

そこにいたのは、白銀の長髪を持った、はやてに似た顔立ちの人。

そう、夜天の魔導書の製作者だ。

彼女は今、庭の花に水をあげていた。

すると、庭に置いてあった本……夜天の書をとる。

「あなたは……一体どんな主に辿り着けるのかしらね……いい主に巡り逢えればいいんだけど」

そう、本の表紙を優しく撫でる。

「……そうね、名前を決めなければね…」

そう言い、空を見上げる。

「綺麗な夜空……そうね。【夜天】……【夜天】にしましょう。夜天の魔導書……」

そして、製作者の女性は魔導書を子供にたかいたかいするように持ち上げる。

「あなたに、幸多からんことを…！」

「……どうだった？」

って、聞くのは野暮か……。

リインフォース達は、泣いていた。

何か、思うところがあったのだろう。

「……いい人だったね。フェイトちゃん」

「そうだね、なのは」

この二人も、泣きはせずとも感動したらしい。

この後、夜天の書は紆余曲折あり、闇の書と呼ばれるようになってしまう。

だが、最後に……最後の主に八神はやてという人間に会えたのは、やはり幸福なことだったのだろう。

「ありがとう……吼太……本当に……本当に……」

リインフォースはただただ泣き続けた…

Ｓｉｄｅ　三人称

「……どういうこった？」

「言ったとおりだ。私は、罪を償う旅に出る」

現代に帰ってきて、ザンクはそう言った。

迷惑をかけた世界に、お詫びをしてきたいのだそうだ。

「ザンク……」

「主……今生の別れではありませぬ。いずれ、あなたのもとに帰ってきましょう」

そう言った後、ザンクははやてに闇天の書を渡す。

闇天の書は、夜天の書のバグが直った際に、色が変わっていた。

全てを飲み込む漆黒から、全てを包み込む蒼へ……

「主、この闇天の書はそれまで主に預かっていて頂きたいのです。その闇天の書を主が持ち続けている限り、いつか貴女の下に帰って来ましょう」

「……わかった。ただ、この子をもう闇天の書なんて呼ぶのは止めよか？」

「……と、言いますと？」

「どんな闇でも、明けない闇は無い。闇が明けた先には、綺麗な蒼空がある。……そうやな、蒼天の書……なんてどうや？」

「……ありがたき、幸せ……！」

ザンクは顔を俯かせる。

震えていることから、感激しているのだろう。

「……主、この蒼天の書には未完成の管制人格が存在しています。よければ、主の手で完成させてあげてください」

そう言い、ザンクは立ち上がる。

そこには、一台のバイクが置いてあった。

【マシントルネイダー】。

仮面ライダーアギトが乗っていたバイクだ。

変形のことも話しているから、きっとうまく乗りこなしてくれるだろう。

「では……」

そして、ザンクはマシントルネイダーに跨がった。

「ザンクゥゥゥーーー！」

吼太が大声でザンクの名を呼ぶ。

「また、喧嘩しようなぁー！」

ザンクは、その声を聞き、返事を返す代わりに、拳を高く突き上げた。

また、出会う誓いを友に立て、男は旅立った。

## 第八十八話　闇の晴れた空（後書き）

なっぺ「後書き座談会でっしゃい！」

吼太「A'ｓが終わり？これで？」

なっぺ「次に水橋さんとのコラボをやって、それから日常編が始まります！」

吼太「バトルは少なめか？」

なっぺ「一応、コラボとか以外にもいれるつもりはあるけど、あまりすごいものは無いかなぁ～」

吼太「ま、休ませてもらうかな」

なっぺ「ちなみにどれくらいやるかは未定です（笑）」

吼太「（笑）じゃねぇよ」

なっぺ「まぁ、何はともあれ感想感謝コーナーだ！」

吼太「天照大神さん、月光閃火さん、ライさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、水橋さん、バルディッシュさん、緋水さん、香崎　真琴さん、朱神優希さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはスクランブル・ブースター、ホーリー・メール、エレメンタル・シールド、悪魔の契約、ＣＣさく

ら二期オープニングでのさくらの衣装を、緋水さんからは吼太君ストラップに詩音ちゃんストラップを、香崎　真琴さんとこからは流星之符、彗星之符を、朱神優希さんからはちょっと恥ずかしい参考書、大人の階段を上るための参考書、少しいやらしい参考書を、Ａｒｉｓｈｉａさんからは赤飯、ＦＦⅠＶのリディアの服を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「詩音ちゃんストラップはグレアムさん経由でリーゼロッテさんに、吼太君ストラップはプレシアさんにプレゼントされました」

なっぺ「カードはライドブッカー、二つの符はジッパーの中に保管だな。参考書各種は吼太の部屋に置いておこう」

吼太「赤飯うめぇ」

なっぺ「そしてコスプレターイム！まずはＣＣさくら！」

吼太「なぁぁぁぁぁ！？／／／／／／」

ベス「フリフリですね。似合ってますよ」

吼太「嬉しくねぇ！／／／／／／」

なっぺ「リディアの服！」

吼太「はぅおぁ！！？／／／／／／」

なっぺ「白い綺麗な肌だな。ホントに男かお前？」

吼太「男だっ！／／／／／／／／」

なっぺ「まぁ、それは読者のみなさんの判断に任せるとして……」

吼太「任せるな！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　おいでませモンハンワールド！（前書き）

今回は水橋さんの【魔法少女リリカルなのは　二つの属性を持つ男】とのコラボになります！

ちなみに、魔法少女リリカルなのは　二つの属性を持つ男の方で、この話の後編を書いて頂けることになってますので、よければ皆さん足を運んでください！

# 番外編　おいでませモンハンワールド！

Ｓｉｄｅ　吼太

「暇だ～……」

やることないなぁ～

「コータ！それなら僕とめくるめく快楽の世界に「追い出すぞ？」

……ゴメンナサイ」

リームもやること無くて飽き飽きしているらしい。

……そうだ。

「これ使うか」

取り出したるは久々登場の転移拠点。最近世界を追加したから、そこにでも行ってみようかな。

「リーム～。軽い旅行行くぞー」

「あいあ～い」

行き先は……モンハンワールド！

Ｓｉｄｅ　ライト

今、俺と流々はモンハンワールドに来てる。

まぁ、修業だな。

それでガノトトスの討伐依頼を受けて、砂漠に来ていたんだが……

……

「どういうことだ……」

俺達の目の前にあるのはガノトトス。

ただし、その目に生気は宿っていない。

死んでいるようだ。

「いったい誰が…？」

流々が辺りを見渡しながら呟く。

すると、ガノトトスの死体の陰に何かがいるのが見えた。

もしかしてコイツを狩ったやつか……？

今回持ってきていた武器、炎剣リオレウスに手を掛け、いつでも構えられるようにしながら近づく。

そして……

ザギンッ！

俺が炎剣リオレウスを相手の首に向けるのと、相手の剣が俺の喉元に掛けられるのは全くの同時だった。

……気づかれていたか？

「テメェ……誰だ？いきなり物騒なもん突き付けやがって」

俺が動いたのに反応して剣を……！？

……いや、まさかな。

にしても随分高い声だな。まるで子供みたいな……

「……って子供！？」

Ｓｉｄｅ　吼太

なんだコイツ？

いきなり剣を突き付けてくるわ、その後で突然驚くわで。

「……君、名前は？」

「吉谷吼太だ。アンタは？」

「ライト・Ｔ・テスタロッサだ」

テスタロッサ？奇妙な縁だなオイ。フェイトやアリシアと同じ苗字の人かよ。

「で、アンタの目的は？」

目の前の人物……ライトに目的を聞く。

「このガノトトスの狩猟……だったんだが、この通りだ」

おぉう、現地のハンターさんですかい。

セットアップしとかないでよかったぁ～。魔法がバレたら偉いことに……「コータ大変！ここ魔法が使えないよ！？」

「リームの馬鹿ァァァァ！！？」

Ｓｉｄｅ　流々

ヴァルキリーファイアをいつでも撃てるようにしながら、ライト様

の姿を追う。

そこで、ライト様と誰かが同時に剣を首元に突き付けた。

その後、二言三言話してからライト様が剣を降ろしたところを見る限り、敵ではないみたいね。

「コータ大変！ここ魔法が使えないよ！？」

不意にそんな声がエリアの端から聞こえた。

見ると、白銀の髪をボブカットにした少女が、慌てた様子でライト様の元に走っていた。

……恐らく、コータって男がライト様に剣を突き付けてたのね。

「流々、ちょっと来てくれ」

ヴァルキリーファイアを肩に背負い、ライト様の元に向かう。

そこには……

肩口と胸元から素肌が見えるのが特徴的な服に身を包んだ、帽子を被った赤髪の少女がいた。

……つーかあたしより可愛い…

Ｓｉｄｅ　吼太

こっちに来た女の人が、オレの姿を見た瞬間、固まった。

……やっぱ変だよなぁ…？

なんでこんな服を着ているかというと、話は少し遡る。

――――――――――――――――――――

数十分前……

「よし。ついた！」

ここは砂漠か？エリアは……7か。

「……さて、何かいるかな？ドスゲネポスでもいればいいけど……」

「コータ。あれって何？」

リームが指差したほうを見る。

川から顔を出した生物……ガノトトスと目が合う。

……

「は、はろー…？」

「ゴァァァァァ！！！！！」

「ですよねー…」

そしてオレはガノトトスの放った水ブレスに巻き込まれた。

――――――――――――――――

それで、その後ガノトトスを倒したのはいいんだけど、服が濡れてしまっていた。

着ていたら流石に風邪をひいてしまうと思ったのはいいんだけど、換えの服が何故か女物しか無かったんだ。

これは確か……あーしぇとかいう人の服だったかな？

そんで、とりあえずは着てみてたんだけど……

「やっぱ……変だよな……？」

「いや、似合ってると思うぞ」

……

今、コイツ何つった？

「よし、オレァクサムヲムッコロス！修練の門！」

修練の門を発動して、この場にいる四人を門の中にいれる。

魔法が使えないんじゃないのかって？

そんなルールは既にぶち壊した！

――何やってんだお前！？ｂｙなっぺ

Ｓｉｄｅ　ライト

突然、俺達は異世界に落とされた。

「なんだここは！？」

「修練所だコノヤロォォォォ！！！！！」

……何故怒ってるんだ？あの女の子は？

何か気に障ることがあったのか？

「コォールッ！！バジュラズテラ！オベリスクの巨神兵！アルセウス！」

彼女が銃のようなものの引き金を弾くと、現れた魔法陣から三体のモンスターが現れた。

どうやら、この空間では魔法が使えるらしい。

にしてもあの三体……かなりだな……

「《我がカードに集いし龍よ、我の声と共にその姿を現せ》雷龍エレキレス、地龍グランガン」

エレキレスとグランガンにとりあえず相手をさせる。

「訓練開始じゃあぁぁぁ！」

そう叫ぶと、少女は全身から服を破りながらドリルを生やした。

……人間じゃないのか？

つーか訓練じゃないだろうコレ？

「喰らえ喰らえ喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ドリルがミサイルのように飛んできた。

………え？

「ぐ………」

炎剣リオレウスの刀身を盾にするが、連続で爆発が起こったせいか、腕が痺れてしまう。

「どりゃあああああ！！！」

ふと、上空から声がする。

見れば、穴だらけの服を着た少女が、俺にその華奢な腕で殴り掛かろうとしてきていた。

「危ない！」

だが、少女はその拳を振るうことなく爆発により吹っ飛び、壁に激突した。

「ライト様、無事ですか！？」

「あぁ、まぁね」

腕の痺れは既に抜けた。これからが本番だ。

「……そうか、テメェも訓練したいんだな……上等だチクショー！」

少女はまるでダメージを受けていないような様子だ。

いつの間に着替えたのか、今度は首のマフラーのような布と、太股から下の肌を大きく晒した格好になっている。

「回避訓練！てぬぐいを鉄に変える能力ァ！ブーメランカッター×５０！」

彼女が高速で手を振るうと、鉄製のブーメランが俺と流々の元にたくさん飛んできた。

「あたしに任せてください！」

流々が、ヴァルキリーファイアから弾丸を撃ち出す。

その弾は、飛んでいく途中で破裂し、細かいかけらになる。
散弾と呼ばれる弾丸だ。
流々は、装填した全ての散弾を使い、ブーメランの大多数を撃ち落とした。
残りのブーメランは普通に避ける。
「ガッデーム！防ぎやがったかァァァ！！だったらァ！」
そう言い、彼女は魔力を集中しはじめた。そして。
「全ガンランス一斉攻撃ィィィ！！！」
……ガンランスが空から雨霰と降ってきた。
よく見れば、フルバーストの態勢だったり、龍撃砲の発射準備に入っていたりする。
……あー、これ防御間に合わないな。
そう考えた瞬間俺は大爆発に巻き込まれ、俺の意識は闇に沈んだ。

Ｓｉｄｅ　リーム

全く……治療をする僕の身になってよね。

コータの服は、さっきの大爆発で服がボロボロになったので、みんめいさんとかいう人の服（説明書に書いてあった）を着せてあげた。

……途中、何度か襲いかけちゃったけどね♪

とりあえず、コータが気絶させちゃった二人なら近くの街を知ってるだろう。そこで休ませてもらおうかな。

「んんっ……あっ……」

……

はっ、コータの艶かしい声を聞いて思わずトリップを！？

……コータぁ、かぁいいよう……

Ｓｉｄｅ　三人称

その後、吼太が血まみれになっていたことと、鼻から血を流しながら俯せに倒れていたユニゾンデバイスがいたのは、また別のお話。

続く！

## 番外編　おいでませモンハンワールド！（後書き）

なっぺ「すいませんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

吼太「どうした突然」

なっぺ「今回、ライト達の魔法をこちらで使用する機会を作れませんでした！真に申し訳ありません！」

吼太「駄作者が」

なっぺ「本当にすいません！」

吼太「ならせめてマシな文書けよ」

なっぺ「そいつぁ無理な話だぜ旦那。さて感想感謝コーナー！ライトと流々の二人にお願いしますぞ！」

ライト＆流々「「天照大神さん、バルディッシュさん、水橋、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、緋水さん、ライさん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、香崎　真琴さん、まーたさん、月光閃火さん、朱神優希さん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「天照大神さんからは媚薬と一日吼太を独占出来る券をなのはとフェイトに、バルディッシュさんからはデビル・メディスン、シャドーウェーブ・サイクロン、ゾンビ・サイクロン、ｓｔ．ヒルデ魔法学院の制服を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはナンバ

ーズのあのピチピチの青い服を赤に変えたの（番号はついてない）を、緋水さんからは詩音ちゃんの写真の入ったロケットに吼太君の写真の入ったロケットを、七つ夜&夜つ七さんからは花天月地「楯」を、香崎　真琴さんからは秋の新作コスメを、月光閃火さんからははやて宛に豊胸薬を、朱神優希さんからはラハール様の服を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「まさかまたコスプレ……」

なっぺ「いや、今回は本編中でコスプレしたし、ラハール様の服だけで勘弁してやろう」

吼太「な！？……ま、まぁ男物だからいっか……」

ラバーズ「！！？」↑盛大に鼻血が吹き出る

流々「……なんであたしより可愛いのよ！？水矢（ウォーターアロー）！！」

吼太「どわぁ！！」

ライト「流々、落ち着け！」

なっぺ「水橋さん、ボーン装備については鼻血だらけの明命の服を取り替えてってことでお願いします！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　吼太とフェイトのプチデート（前書き）

こーゆー甘いのって苦手……

今回は、天照大神さんからいただいたものを使ってます！

# 番外編　吼太とフェイトのプチデート

Ｓｉｄｅ　吼太

ある日のこと。

「あ、あのコータ！ここ行こう！」

フェイトがそんなことを言ってきた。

フェイトが手に持っていたのは、水族館の広告。

なんでも、限定のイベントがあるらしい。

ちなみに、トドがショーをするとかなんとか。

「ちなみに拒否権は無いから♪」

そう言い、フェイトは一つの紙切れを見せてくる。

そこには【吼太を一日独占出来る券】と書いてあった。

……紙云々より、これを自信満々に見せてくるのが微笑ましい限りだ。

「ん、いいぜ」

「本当！？ありがとう！」

フェイトは顔を紅潮させながら聞いてくる。
そんなに行けるのが嬉しいのか？
「おう」
「吉谷……O☆HA☆NA☆SHIしよう？」
……フェイトて人気あるんだよなー……
「えへへ……／／／／／／／」
フェイトは止めてくれなさそうだ…
そして、オレはクラスメートの数人にO☆HA☆NA☆SHIされた……

数日後……

さて、この噴水の前で待ち合わせなんだけどな……
お、来た。

「待った？」

「いいや？」

フェイトは黒を基調とした、シックな服を着てきていた。

「じゃあ、行くか」

「うん♪」

そう言うと、フェイトがオレの腕に抱き着いてきた！

「ふぇ、フェイト！？／／／／」

「……ダメ？」

……

先生、涙目と上目使いのコンボは反則だと思います。

結局、道行く人には生暖かい目で見送られながら、水族館へと向かうことになった。

Ｓｉｄｅ　フェイト

水族館についた。

チケットを買って中に入ると、まずお魚が私達を出迎えてくれた。

「……癒されるな」

「そ、そうだね……」

ま、周りの人にはどう見られてのかな？

兄妹？それとも……か、か、か、……

カップル……とか……？

それだったら……嬉しいな……／／／／／／

「おや、フェイトじゃないか。ついでに馬鹿も」

あ、クロノだ。

エイミィさんもいる。

「馬鹿言うなまっくろくろすけ。お前はなんだ？」

「いやー、クロノ君が『アザラシ見たい！』って聞かなくてー」

「僕のせいにするな！エイミィだろ！」

「ハハハ、それじゃー仲良くねお二人さん！」

「あ、待て逃げるな！」

そうして、クロノ達は駆けていった。

「あの二人、いつか結婚しそうだな」

「そうだね」

この話が本当のことになるのは、また別のお話。

そして、トドのショーに来た。

そこではトドが拍手をしたり、歌に合わせて踊ったりしていて、見ている観客達を和ませた。

「はーい！では、トドのトンちゃんのショーを見てくださり、ありがとうございましたー！」

指導員さんのお辞儀に合わせてトドのトンちゃんもお辞儀をし、ショーは終わった。

「すごかったね」

「そうだな」

だけど、私達は忘れていた。

吼太の、恐ろしいまでの才能を。

「あ、こらトンちゃん！何を！？」

突然、トドのトンちゃんが猛烈な勢いでこちらに突進してきた。

狙いはまさか……

「うぎゃぁぁぁぁ！？」

「コータ！？」

Ｓｉｄｅ　吼太

……死ぬかと思った。

左腕一本で済んだのが幸いだ…

分かるか？数百ｋｇの巨体が襲い掛かってくるんだぜ？

オーバードライブ発動したけど、タッチの差で間に合わなかった。

その後、トドはオレの頬をなめ回していたことから、じゃれついてただけらしい。

…こっちは死ぬ思いだったけどな！

こっそりジオルクで治したから異常はないけど、飼育員さんには優待券を貰っちまったよ。

「ご、ゴメンねコータ！私のせいで…」

フェイトが涙目になりながら謝ってきた。

「いいっていいって。事故だ事故」

実際、慣れてるしな。

召喚獣達を放し飼いにしてるユートピアじゃ、ジエン・モーランが飛び掛かってくる（じゃれついてくる）んだ。

トドぐらい大したことない。

「で、でも……」

泣き止まないな……それなら。

「？　コータどうしわぷっ！？」

フェイトの顔に、あるものを押し付ける。

それは、先程買ったトドのぬいぐるみだ。

「これって……？」

「やるよ。プレゼントだ」

実際、ここまで来て何も思い出になるものが無いのもな。

ちなみに、家族用にはクッキーを買ってある。

「え？いいの？

「あぁ、遠慮すんな！」

その言葉を聞いたフェイトは、少し顔を赤らめながら、ぬいぐるみを抱きしめた。

「あ……ありがとう……」

「お、おう……」

その時のフェイトの顔を、オレは忘れられないだろう。

夕陽に照らされた、彼女の顔を……

## 番外編　吼太とフェイトのプチデート（後書き）

なっぺ「リア充爆発しろ！」

吼太「うるさい」

なっぺ「いいもん！彼女なんていらないやい！」

吼太「すっげー未練ありそうな言い方」

なっぺ「いや、ここはこう言うべきかなと。実際恋にまだ興味無いし」

吼太「Z解禁される寸前なのに、それでいいのか？」

なっぺ「いいんだよ。さて、感想感謝コーナー！」

吼太「ライさん、バルディッシュさん、水橋さん、香崎　真琴さん、海人さん、七つ夜＆夜つ七さん、緋水さん、天照大神さん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは恋符「マスタースパーク」、魔符「スターダストレヴァリエ」、光符「アースライトレイ」を、海人さんからはＦａｔｅのアーチャーの服、小次郎の着物、それと俺が六課に居た時のバリアジャケットの服を、七つ夜＆夜つ七さんからはＮＵＧＡ－ＣＥＬ！の下忍の服を、緋水さんからは吼太君の人形に詩音ちゃんの人形（両方マスコットサイズ）を、朱神優希さんからはうみねこの煉獄の７姉妹の服を頂きました！ありがとうござ

います！」

吼太「スペルカードってオレ使えんのかな？」

なっぺ「使えるんじゃない？本家以上の威力で。さてコスプレターイム！まずはうみねこの煉獄の７姉妹の服！」

吼太「下が恥ずいっ！／／／／／／／」

なっぺ「ＮＵＧＡ－ＣＥＬ！の下忍の服＋攻撃！」

ベス「イコール全裸」

吼太「単なるセクハラじゃねぇか！／／／／／／」

なっぺ「だってしてくれと言わんばかりだったし」

吼太「知るか！」

なっぺ「さて、コラボが溜まってきたな。今のところ、オレがコラボを受けたと記憶しているのは……」

Ａｒｉｓｈｉａさん

雨季さん

海人さん

なっぺ「……です。この三人以外で、『コラボさせろやボケ。社会的に抹殺されたくなければな』っという、心が太平洋並に大きい人

は、感想やメッセージに連絡ください！誠心誠意、頑張りますので！展開の要望があれば、そちらもお願いします！」

ベス「もちろん、『〇〇と××の絡みを見たい』みたいな意見もお待ちしております」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 番外編　詩音、優、トゥード、ピクニック（前書き）

今回はＡｒｉｓｈｉａさんの【魔法少女リリカル……なんとか！】とのコラボになります！

いやはや、気づいたらトゥードが活躍してしまった……

# 番外編　詩音、優、トゥード、ピクニック

Ｓｉｄｅ　詩音

「優お兄ちゃん！こっちこっち！」

「もう少しゆっくり歩いてくれないかな…？」

今、詩音は優お兄ちゃんとピクニックに来ています。

なんで優お兄ちゃんがいるのかって？

フォーティに頼んだら連れて来てくれたの！

フォーティってすごいなぁ…

――――――――――――――――――――

「優様、失礼致します」

「トゥード？どうしてここに？」

「ハアッ！」

「ガバッ！？」

Ｓｉｄｅ　三人称

「痛たた……まだ痛いや」

「申し訳ありません優様。マスターの命令は絶対ですので」

詩音の三歩後ろを歩いていたトゥードが優に謝る。

「まぁ、過ぎたことだし、いいよ」

そして、開けた場所に出る。

詩音はと言うと、肩に小鳥を乗せて遊んでいた。

微笑ましい光景に、優もトゥードも顔が綻ぶ。

だが、不意に向けられた殺気を受け、その方向に顔を向ける優とトゥード。

「……トゥード」

「分かっています。あの輩の始末は私にお任せを。優様は、マスターをお願いします」

その指示に、優は不思議に思う。

普通なら、詩音のデバイスであるトゥードが詩音の直衛に回るのが正しいと考えたからだ。

「……あの者は、どうやら私が招いてしまったようです。自身の始末は、私自身で済ませます」

そう言うトゥードの顔には、静かな怒りが浮かんでいた。

余程、ピクニックを邪魔されたのが腹立たしかったのだろう。

その顔を見た優は……

「…任せていいかな？」

「お任せを」

「あれ？フォーティは？」

「トゥードはちょっと忘れ物を取りに行ったんだ。その間遊んでようか？」

「うん！」

「不屈の女帝自ら出てくるとはな……」

「……マスターの幸せを阻むものは、例え神を超えたものでも排除します」

こうして、トゥードの戦いが始まった。

Ｓｉｄｅ　詩音

「優お兄ちゃん♪アイス食べよ♪」

優お兄ちゃんはなんでこんなに暖かいんだろ？

不思議だなぁ。

「優お兄ちゃん、詩音に食べさせて？」

「え、えぇ！？」

「早く♪アーン」

優お兄ちゃんは少しの間迷ってたみたいだけど、スプーンでアイスを掬って、詩音に食べさせてくれた。

「おいしい？」

「おいしいぃ～♪」

普通のアイスなのにこんなに美味しいのはやっぱり愛の力だよね！

Ｓｉｄｅ　トゥード

伏兵含めて５７人、ですか……

時間がかかってしまいましたね。

私としたことが、制圧に１分かけてしまうとは……

そう考えながら、下にあったモノを踏み潰す。

「股間を抑えて悶え苦しむしか出来ないのですか？あなたたちは。見苦しいですね」

ハイヒールの靴を履いてきて正解でした。

「ぐ……ぁ……お……」

男達は、皆さん白目を剥いていますね。

……本当、見苦しい。

「まだ、だ……」

「おや、貴方……女性なのですか」

「私は、コイツらのようにはいかんぞ」

……全く、見苦しい上にしぶといとは…

マスター、もう少しだけお時間を頂きます。

Ｓｉｄｅ　優

今、詩音ちゃんは遊び疲れて寝ちゃっている。

「……平和だなぁ」

予期せず舞い込んだ休暇になっちゃったな。

これが終わったら、また頑張らないとな。

「ん……」

詩音ちゃんに、俺のジャケットをかけてあげる。

ガガガガガ……ガスッッッ！！！！！

「え？」

音のした方を見るとそこには……

軍用ヘリコプターと素手で渡り合うトゥードの姿が……

「……トゥードって人間？あ、デバイスか……いや、でも……え？」

バリアジャケット無しで渡り合っちゃってるよ……

ズドガァッッッ！！！

あ、ヘリ壊れた。

「……ある意味、一番恐ろしいのはトゥードなのかもな」

「ん……」

……ちょっとトイレ行きたくなったな。

俺は詩音ちゃんをその場に置いて、用を足しに行った。

Ｓｉｄｅ　三人称

草原の真ん中ですやすやと眠る詩音。

その詩音を見つめるなにか。

それは、辺りの野生生物だった。

先程までは優が居たため出ていけなかったのだが、今、優は近くにいない。

そこで、野生生物達は己の本能が認める【慕える人】に近寄る。

そして、顔の近くにいたキツネが詩音の頬を舐めた。

「ひゃぁぅ！？」

突然頬を舐められ、飛び起きる詩音。

「ひぇ……あ、動物さんいっぱいだ！」

詩音が動物達を認識すると、動物達は詩音に身体をこすりつけたり、舐めたりする。

「ふふふ、くすぐったいよ～」

詩音も満更ではないのか、近くの動物を撫でたりしている。

だが、それに気をよくしたのか、動物達は詩音の身体のあちらこちらを舐めはじめた。

「ひぇっ！？そ、そこはダメ…！あ、やんっ！／／／／／／／／」

数分後、優は詩音のいる場所に戻ってきた。

だが、そこでは詩音が動物達に襲われていた。

「な！？詩音ちゃん大丈夫！？」

「ひぇぇぇ！！／／／／／／／／」

どうやら、まだ無事らしい。

「このままじゃ危ないな……こらっ！離れろ！」

優が言うと動物達は四方に散らばって行った。

残されたのは、服装が乱れた詩音のみ。

「大丈夫！？」

「ひぇぇぇ……しゅごかったの…／／／／／／／／」

「（顔が赤い……まさか何か病気に！？）熱は……？」

優が自身の額と詩音の額を当てる。

「熱は無いかな……とりあえず病い…」

病院に行こう。

そう言おうとした優の口は塞がれた。

……詩音の唇によって。

その後、不審者を潰して帰ってきたトゥードが見たものは、何故か肌艶が良くなった詩音と、これまた何故かカラカラになった優だったとか。

# 番外編　詩音、優、トゥード、ピクニック（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始めたりしちゃうのです！」

吼太「しちゃうな」

なっぺ「今回、自分的には納得出来ない」

吼太「なら何故だした」

なっぺ「他にネタ無かったし？」

吼太「よし、死ね」

なっぺ「しどすぎる！？」

吼太「七つ夜＆夜つ七さん、ライさん、バルディッシュさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、水橋さん、緋水さん、海人さん、香崎　真琴さん、まーたさん、天照大神さん、雨季さん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「うぅ……七つ夜＆夜つ七さんからはアルトネリコのミシャのコスチューム、ＫＡＳＨＡを、バルディッシュさんからは突符「天狗のマクロバースト」、風符「風神一扇」、疾風「風神少女」、速写「ファストショット」、吼太に射命丸文の服を、Ａｒｉｓｈｉａさんからはかなり露出度の高めなイヌ、ネコなりきりセットを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはスカウターを、緋水さんからは詩音ちゃんの抱き枕、吼太君の抱き枕を、雨季さんからはＴレックス（♀）を、朱神優希さんからはうみねこのサクタロウ（人間バ

ージョン）の服を頂きました。ありがとうございます！」

ベス「コスプレですか？」

なっぺ「いんや、今日は作者の都合で休み。すいません。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第八十九話　え？集まりすぎじゃね？（前書き）

はい、日常編です。

今回は若干状況説明的な回になってます。

# 第八十九話　え？集まりすぎじゃね？

Ｓｉｄｅ　はやて

朝、目が覚める。

キッチンで朝ごはんの準備をする。

その間にみんなが起きてきて、シグナムは新聞を読んで、シャマルは私のお手伝い。

ザフィーラはアルフ直伝こいぬフォームでお散歩で、ヴィータはその付き添い。

ヴィータとザフィーラが帰ってきたらみんなで朝ごはんを食べて。

そんで……

鞄を持って、靴を履く。

そう、今日から私も学校や！

Ｓｉｄｅ　吼太

今日からはやてが学校に来るらしい。

クラスも一緒みたいだ。

……なんでこんなに集まってるんだ？

「はい皆さん、八神はやてさんが今日からこのクラスに復帰します！」

「みんな、改めてよろしゅうな」

はやてが微笑むと、男子の何人かが顔を赤らめる。

……これで聖小六大美少女か…

「あと、このクラスに三人のお友達が来ます。皆さん仲良くしてくださいね？では入ってくださーい！」

ガラッ

入ってきたのは、三人の少女。

「星光……ではない……高町なずなです。よろしくお願いします」

「僕は雷刃……じゃなかった。フィニア・テスタロッサです！よろしくね！」

「我は闇……ではなかった。八神羽旺（はお）だ！我が名を知れたことを感謝するが良い塵芥共！」

「はい、ありがとうございます。この三人はなずなさんはなのはさんの、フィニアさんはフェイトさんの、はおさんははやてさんの双子だそうです。最近まで外国に住んでいたそうですが、家庭の都合で日本に来たそうです。皆さん仲良くしてあげてくださいね？」

……

「先生」

「何かしら吉谷君？」

「校長もしくは理事長と話がしたいのですが」

普通、血縁関係のある児童は同じクラスになるのを避けられる傾向にある。

理由としては、兄弟姉妹で固まるのを避け、より多くの児童と交遊を広げるためである。

つまり、ここまで双子がこのクラスに来るのは明らかにおかしい。

「あら、なら家で聞けばいいじゃない。理事長はあなたのお父さんでしょう？」

……は？

「もしかして知らなかった？なら確認してきたら？一時間目ははやてさんの復帰祝いとなずなさん、フィニアさん、はおさんの質問タイムにするつもりだったから」

……

――理事長室――

「失礼します！」

「お、吼太じゃないか。どうしたんだい？」

いたよマジで……

「理事長なんて初耳だぞ！？」

「いやあ、中々言う機会がなくてさ……」

頭をかいて困ったような顔をする父さん。

その顔は年齢から考えればあまりに若々しいもので、高校生でも通じそうだ。

恐らく、それが父さんが痴漢に会う（間違いではない。電車やバスなどで痴女によく襲われるそうだ）原因なんだろう。

「……で、なんで双子扱いのあの三人がオレやなのは、フェイトやはやてと一緒のクラスなんだよ！？」

「それは……校長に脅されて……」

「弱いな理事長！！……校長？」

「校長は私よコータ」

……

「いや、何やってんのさプレシアさん？」

「校長よ。教員試験受けたら、何故かぽんぽんと進んで、今じゃ校長……この国大丈夫なの？」

「……心配になってきました……」

※この頃トゥードの権力が既に国会にまで進出していたことを知り、吼太が愕然とするのは数年先の話である。

Ｓｉｄｅ　なのは

「一緒のクラスになれてよかったね！なずなちゃん！」

「はい。お姉さん」

星光の殲滅者を始めとするマテリアルのみんなは、闇の書事件が終わったあと、三家庭に分散されて引き取られたの。

星光の殲滅者が高町家、雷刃の襲撃者がテスタロッサ家、闇統べる王が八神家。

それで、せっかくだから名前を新しくつくることになったの。

それで、星光の殲滅者がなずなちゃん。

雷刃の襲撃者がフィニアちゃん。

闇統べる王が羽旺（はお）ちゃん。

三人は、各家庭の末っ子さんとして家族の一員になったの。

私は妹が出来たわけだから嬉しいな。

「……ただいま」

「あ、お帰りコータ君！」

「フェイト…アリシア……プレシアさんってここの校長だったんだな……」

「あれ？知らなかった？」

「言ったと思ってたんだけど……」

私も聞いてたんだけど……てっきり知っているとばかり……

「まぁいいや。とりあえずよろしくな」

「はい」「おう！」「うむ」

Ｓｉｄｅ　三人称

そして、授業が始まった。

二時間目、算数

「これは……こうですね」

「やるじゃないなずな！ならこれは？」

「……こうです」

「バ、バニングスさん、なずなさん……それは大学生が解くような問題なのですけど……」

三時間目、社会

「さて、７９４年に完成した都は？」

「「平安京（や！）（だ！）」」

「やるではないか姉君！」

「はおには負けへんで～？」

「あの……変な対抗意識は止めて……？」

四時間目、体育

「たぁっ！」

「はぁっ！」

「せんせー、フェイトちゃんとフィニアちゃんがボールを高速で投げあっていて捕れません」

「……先生も疲れてきました……」

昼休み

「学校というのは中々楽しいところですね」

「うん！」

「まぁ悪くは無いな」

「「「あ、あはは……」」」

なのは、すずか、アリシアが苦笑いする。

そこに……

「あ、あのなずなちゃん！お話が……」

とある男子生徒がなずなに話し掛けた。

「はい、なんでしょうか？」

「いや……ここじゃ恥ずかしいから……」

そう言い、物陰に行く二人。

やがて、一分ほど経ってからなずなのみが戻ってきた。

「どうしたの？」

なのはが聞く。

「告白、というものをされました。断りましたが」

「そうなんだー」

なのははにこやかに言う。

ちなみにこの場には聖小九大美少女と言うべき少女達が揃っているため、周りの男子はみな目線が彼女達のいずれかに向けられているのだが、それに彼女達が気づくことはない。

「あ、そういえばさっき僕もされたよ。断ったけど」

「我に告白するという、中々肝の据わったやつもおったぞ。断ったがな」

「お前ら……」

この場で唯一の男子である吼太が、呆れたように言う。

「（なんか…オレに向けられる殺気が増えてんだけど……気のせい……だよな？）」

残念ながら気のせいではない。

さて、この後吼太は目がヤバイなのはやフェイト、はやてに割り箸を折られたあげく、口移しをされそうになり、逃げ出したところを嫉妬にかられた男子にさらに追い掛けられることになるのだが、それはまた別のお話。

# 第八十九話　え？集まりすぎじゃね？（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始め「殺す」すいませんすいませんすいませんすいません」

ベス「殺しちゃダメですよ」

吼太「チッ」

なっぺ「さて、今回は久々の学園」

吼太「マジで久しぶりだな」

なっぺ「書く機会無かったし」

ベス「では感想感謝コーナーへ行きましょう」

吼太「バルディッシュさん、海人さん、七つ夜&夜つ七さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、香崎真琴さん、天照らす大神さん、水橋さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん、雨季さん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは幻世「ザ・ワールド」、幻符「殺人ドール」、時符「プライベートスクウェア」、吼太に某ＰＡＤ長の服、胸パッドを、香崎　真琴さんからはトゥードに絶対刃零れしないアーミーナイフ、電圧を自由に変えられる指輪型スタンガン、認識阻害の効果がある伊達眼鏡、朱神優希さんからはうみねこのベアトリーチェとベルンカステルとラムダデルタと戦人の服を頂きました。ありがとうございます！」

トゥード「私に来るとは思いませんでした」

なっぺ「さぁ、ＰＡＤ長になれー！」

吼太「メ、メイド服！？／／／／／／／／／」

なっぺ「ベアトリーチェ！」

吼太「あぅ……／／／／／／／／／／／／」

なっぺ「時間の都合で今回はここまで！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　フラウリーナ三姉妹の特訓！（前書き）

特訓とタイトルにありますが、特訓風景はあまりありません。

今回は雨季さんの【チートじゃ済まない】とのコラボになります。

# 番外編　フラウリーナ三姉妹の特訓！

Ｓｉｄｅ　三人称

「ハァッ！」

「甘い！」

吼太がミカのギガドリルをハンドソニックでいなす。

「これならっ！」

ミカがハンドソニックを蹴飛ばし、隙を作る。

そこにプリムの誘導弾が飛んできた。

「その程度、避けられないとでも？」

誘導弾を見切り、回避しようとする吼太。

「……てい…」

だが、ライラのラウンドシールドが吼太の行く先を阻んだ。

そして、誘導弾が命中した。

……が。

「ま、一応合格か」

アームドアップを発動したことで、誘導弾を防いだ吼太がそこにいた。

「あー、おしい！」

「でもまぁまぁの結果でしたわね」

「…でも…まだ足りなかった…」

「一撃当てられただけでも十分な進歩さ」

そう、吼太とフラウリーナ三姉妹は模擬戦をしていたのだ。

今回の目標は、【吼太に一撃を加える】といったもの。

その目的は、一応果たしたといってもいいだろう。

「ふむ……これならアイツにも少しはいい勝負出来るかな？少なくとも全く歯がたたないってのは無いだろ」

「お父様？」

「……よし。行くぜお前ら」

そう言うと、吼太は螺旋界認識転移システムを使い、超転移した。

「え！？お父さん！？」

……フラウリーナ三姉妹を連れて。

Ｓｉｄｅ　要

さて、何をするかな……

平和なのはいいけど、あまり暇になるとたまに戦いが恋しくなる。

……俺はバトルジャンキーじゃないはずなんだけどな。

そう考えていると、目の前に渦状銀河のようなものが現れ、中から吼太が飛び出した。

……いや、まだいるな。

後から出てきたのは、緑色の髪をした三人の女性。

フラウリーナ三姉妹か。

「吼太、何の用だ？」

「悪いな、突然来ちまって。今、暇か？」

「暇かどうか、と聞かれたら間違いなく暇だな」

実際、急ぎの用事は無いしな。

書類は少し溜まっているが、たいしたことはない。

「ならコイツらに訓練してやってくれ」

そう言って吼太が指差したのは、フラウリーナ三姉妹。

ふむ……

「あぁ、構わない」

さて、どうしてやるかな…。

その後俺は訓練所を借りて、ミカとプリムには格闘技を、ライラにはシールドの使い方を教えてみている。

ライラだけ別メニューなのは、ライラ自身の肉体があまり格闘技に向いていないのと、ライラがシールドをよく使う魔導師だからだ。

「１５４、１５５、１５６、１５７、１５８」

「さすがに……無理……ですわ…」

まずは腕立て伏せからやらせてはいるが、プリムが限界みたいだな。

「ライラ、とりあえずさっき言ったことを重点的にやってみてくれ」

「……うん…」

「よし、ミカ、プリム。次は基礎的な身体運びをやるぞ」

「おう！」

「……はい」

数時間後……

「よし。締めに模擬戦するぞ」

「「はい！」」「……」

プリムから返事が返って来ないな……

「あ、お父さんが半裸になってる」

ふと、ミカがそんなことを言った。

「どこですの!?お父様の艶姿は!?」

復活したよオイ。

すごいな。

つーかよく見たらライラも探してるし。

「さて、模擬戦やるぞ」

Ｓｉｄｅ　三人称

「身体能力７０％解放」

とりあえずはこれでいいだろ。

「ハァァッ！」

ミカが正面から拳を振りかぶりながら突進してくる。

「恰好の的だぞ。ニードルガン」

ニードルガンをミカに放つ。

が、それは小さなシールドに弾かれる。

ライラが小さなシールドを潜ませていたらしい。

しかも、真っ向から受けるのでは無く、斜めにして受け流す形にして回避したのだ。

ニードルガンは貫通力は高いが、先端が鋭くなっており、先端以外の部分に攻撃力は無い。そこを突かれた。

「ハァッ！」

ミカの拳が俺の腹に決まる。

だが……

「まだまだだな」

「……どうかなっ！？」

その瞬間、嫌な気配を察してミカから離れる。

次の瞬間、ミカの腕から緑の光が溢れ出した。

「ぜぇぇい！」

フック気味に拳をぶつけてくるミカ。

それをシールドで防ぐ。

が、ミカは止まらない。

やがて、シールドからミシミシと嫌な音がし始める。

「くっ……ベールシールド！」

砕け始めていたシールドをベールシールドに変える。

威力を逃がされる形になったミカは、体勢を崩す。

さらに、ベールシールドがミカの身体に巻き付き、ミカを拘束した。

「さて、次は……！」

魔導式ハンドガンでプリムを狙う。

ライラを狙ってもよかったが、まぁそれは気分だ。

プリムが間一髪のところで避ける。

「よく避けたな」

「ギリギリですわ……」

息が上がってるなプリム。

……あ、訓練で既に疲労困憊だったからか。

「クリスタルケージ！」

プリムのクリスタルケージがオレを捉える。

ふぅ……この程度で俺を止められると思っているのか？

「シールドスライサー（改）」

シールドスライサー（改）でクリスタルケージを斬り裂く。

切断力に特化したシールドスライサー（改）で斬れないものはそうそう無い。

「……今ですわ！」

そのとき、地面が鳴動し始める。

その時ふと思う。

さっきベールシールドで縛ったミカは、どこへ行った？

「ギガァ、ドリルゥ、ブレイクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

地面からミカが巨大なドリルを構えて飛び出してきた。
間一髪避けたが、僅かに引っ掛かったのか吹き飛ぶ。
「……とどめ」
そして、俺はライラのシールドに潰された。

Ｓｉｄｅ　ライラ

……まだ、だよね。
地面の穴から、要が出て来た。
感じる魔力は、さっきより大きい。
「プリム……あれ、貫けそう？」
「サファイアスフィアを利用した複数ガーネットブラスターか、ダイアモンドブレイカーなら可能だと思いますけど……難しいですわね」

「……じゃ、俺が出るよ！プリムはアレの無効化！ライラはブーストお願い！」

「……わかった。…萌芽よ！疾風の如き速さと、業火の如き剛力を彼の者に…！」

ミカに速度上昇の魔法と、攻撃力上昇の魔法をかける。

ミカが要さんに肉薄し、拳を、蹴りを打ち出す。

だけど、やっぱり場数の、経験の違いが大きい。

……チャンスは、一瞬。

「……権利剥奪！アルティメットワン使用権利！」

まず、プリムが要のアルティメットワンの使用権利を奪い取る。

これで、要はアルティメットワンを再発動出来なくなった。

次は、私！

「ストラグルバインド×５０！」

大量のストラグルバインドが要に襲い掛かる。

ストラグルバインドは変身魔法等を無効化する魔法だ。

だけど、私がしたいことは違う。

「な、アルティメットワンが！？」

そう、アルティメットワンを侵食支配で制御を奪い取ることが目的。

そして、要が無防備になる。

そこに、ミカが最大の攻撃をぶつけた。

「ギガドリルブレイカァァァァーーー！！！！！！」

螺旋力の奔流に巻き込まれた要。

……勝った、かな？

「Ｇｙｕａａａａａａａａａａａ！！！！！」

その瞬間、最強の攻性生物が目覚めた。

Ｓｉｄｅ　吼太

要の世界の六課見学を終えて、訓練所に戻ってきたら、ボロボロになったフラウリーナ三姉妹と、肩で息をした要がいた。

「どうだった？」

「ＯＲＴを発動する羽目になった」

おぉ、めっちゃ強くなってる。

「お前の血が入ってるからか？成長率が半端ないぞ」

まぁ、成果は上々か。

「それじゃあ帰るよ」

「あぁ」

そしてオレはフラウリーナ三姉妹を抱えて帰って行った。

## 番外編　フラウリーナ三姉妹の特訓！（後書き）

なっぺ「後書き座談会が始まる！そう、今！」

吼太「フラウリーナ三姉妹が強くなったな」

なっぺ「マジで強くなったよ。一人一人が本来のジェイル・スカリエッティ事件を単独で解決可能、ゆりかごも一人だけで破壊可能なレベルになってる」

吼太「まぁ、少しは強くなったか」

なっぺ「まだミカの希少技能と、フラウリーナ三姉妹の最後の奥の手があるんだけどね。最後の奥の手は第四部に出すつもりなんだけどさ」

吼太「ミカの希少技能は？」

なっぺ「出すタイミング……つうか、希少技能自体が曖昧にしか決まってない……」

ミカ「ええ！？マジで！？」

なっぺ「うん、ゴメン。あと雨季さん。ストラグルバインドはアルティメットワンで無効化出来ない（バインドは攻撃ではない？）と判断しましたが、違いましたらご連絡下さい。直します」

ベス「では感想感謝コーナー行きましょう」

吼太「ライさん、バルディッシュさん、七つ夜&夜つ七さん、海人さん、水橋さん、朱神優希さん、緋水さん、雨季さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ＡＩＲＳさん、まーたさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました」

ベス「たくさん来ましたね」

ライラ「過去……最高……かな……？」

なっぺ「バルディッシュさんからは天罰「スターオブダビデ」、冥符「紅色の冥界」、呪詛「ブラド・ツェペシュの呪い」、レミリア・スカーレットの服（吼太用）を、七つ夜&夜つ七さんからはシルフィーの服を、朱神優希さんからはひぐらしの羽入の服を、緋水さんからは吼太君の布団（笑みバージョン）に詩音ちゃんの布団（涙目上目遣い）を、香崎　真琴さんからはおぜう様、うどんげ（永夜抄Ｖｅｒ．）、あやや（風神録Ｖｅｒ．）、さとりんの衣装を、天照大神さんからは仮契約の術式を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードに猫耳と尻尾を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「スペカはライドブッカーのほうがよいでしょう」

なっぺ「仮契約の術式は各デバイスに配信したぜぃ！」

トゥード「これは……？」↑猫耳と尻尾を装備

なっぺ「よし、にゃあと言うんだ！」

トゥード「……にゃあ？」

吼太「なんじゃこりゃあ！？／／／／／／／／／／」

なっぺ「おぜうさまもといレミリアの服。二着貫ったから汚れても安心だね！」

吼太「もう二度と着ないから！」

なっぺ「（無視）次は射命丸！」

吼太「くっ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「シルフィーの服！」

吼太「ほぼ布一枚じゃねぇか！／／／／／／／／」

なっぺ「羽入の服！」

吼太「巫女服じゃねぇかぁぁぁ！／／／／／／／／」

なっぺ「合言葉は？」

吼太「あぅあぅ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「よし！」

吼太「よし！じゃねぇよ！！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第九十話　5人……いや、5冊か？（前書き）

今回は、八人目な武器屋さんから頂いたものが……

さらに、吼太に……

# 第九十話　5人……いや、5冊か？

Ｓｉｄｅ　吼太

今日も元気に学校の授業で惰眠を貪ってきた。

言葉がおかしい？気にすんな。

自分の部屋に入ると、大量の武装神姫と、ガジェット、折神達が出迎えてくれた。

……毎回思うけど、なんでこんなに小さな同居人がたくさんいるんだ？

特に神姫達。居すぎだろ。気づいたら居たし。

そんなことに疑問を持ちつつ、机の上に鞄を置く。

その時、ふと机の上にあった五冊の本が目に入る。

……つーか一冊。蛆たかってんぞコレ。汚ぇ。

とりあえず、トゥードの格納領域に仕舞って、ユートピアに行く。

あそこなら他人に迷惑かからないからな。

――ユートピア――

ユートピアに着いたー！

「ん？コータじゃねぇか。どうしたんだ？」

「ちょっとな。お前は？」

オレの目の前にいるのは、コンドルのような顔を持つ巨大な車。

炎神スピードルだ。

「俺は走ってただけさ」

「そっか、頑張れよ」

「あぁ、じゃあな！ドルドル！」

そしてスピードルは走り去って行った。

遠くを見ると、爆竜ティラノサウルスが幼年期デジモン達を乗せてあげてたりしている。

うん。概ね平和だな。

さて、と。

「この五冊……誰からだ？」

誰かに贈られたのは分かるが、誰から贈られてきたんだ？

「ダーリン！」

不意に後ろから声がした。

「アリスか？」

「正解♪ダーリンはどうしてここに？」

「この五冊について考えてた。アリスは？」

「私は散歩。外を歩いてるとたまに補導されちゃうんだよね」

アリスの見た目はよくて中学生。むしろ補導されるのが普通だ。

海鳴の警察には真面目な人が多いらしい。

「なんか、『君、こんな時間に何をしているんだ！話を僕の家で聞かせてもらうからな！身体の隅から隅までじっくりねっとりと……ぐふふふ』みたいな感じで」

訂正。不真面目にも程があるだろ。つーか犯罪じゃねぇか。

「まぁ、そんな人にはジオ当てて逃げてるけどね」

「妥当な判断だぞアリス」

アリスの頭を撫でてあげる。

「えへへ……／／／／／／／／／／」

嬉しそうだな。

「じゃあ、今度はジオンガ使うね！そしたらもっと撫でてくれる？／／／／／／／／／／」

「それはやり過ぎだ！警官が死んじまう！」

―閑話休題―

「で、この五冊、どう思う？」

「多分、私と同じじゃないかな？記憶あやふやだからわかんないけど」

アリスを贈ってきた人と同じ、ってことか。

「まぁ、とりあえず契約してみるかな」

契約のための魔法陣を張る。

その瞬間、五冊の本……いや、魔導書は無数のページとなって舞い上がった。

オレは指を僅かに切り、血を滴らせ、魔導書に与える。

その瞬間まばゆい光が溢れ出した。

「うおっ、眩しっ！？」

「きゃあ！？」

そして光が止んだときに、そこに魔導書は無かった。

……いや、【本の形をした魔導書は無かった】だな。

「「「「「初めまして、（親父殿）（だでぃ）（父君）（とーさま）（我が父）」」」」」

「……は？」

Ｓｉｄｅ　三人称

「……えーっと、つまりオレを父親って呼ぶ理由は？」

「「「「「（親父殿）（だでぃ）（父君）（とーさま）（我が父）だから（です）（ぁー）」」」」」

「……埒があかねぇ」

かれこれ三時間ほど彼らは話し合っていた。

そこから分かったことといえば、漆黒の腰まで届く髪を持つ少女は魔導書【水神クタアト】の、金髪を特徴的に結んだ少女は魔導書【金枝篇】の、灰色の髪と屍と書かれた服を着た少女は魔導書【屍食教典儀】の、黒髪と赤い服を着た、危なげな表情をしてた少女は魔導書【妖蛆の秘密】の、色素が薄いのか、紫色にも見える黒髪をした、下半身をベルトのようなものでしか隠していない少女は魔導書【エイボンの書】の化身ということ。

そして、全員が吼太を何故か父と考えていることである。

「ねぇコータ……その娘たち……何か怖い……」

吼太に抱き着きながら話を聞いていたアリスが言う。

「それは当然だ。我等は魔導書。常人が読もうものなら即座に発狂しようとおかしくはない。もっとも……」

代表して話していたエイボンの書の化身が言う。

「我等に潜む狂気はこの姿では漏れることはないのだが……感受性が強いのか？」

「え？さぁ…？」

アリスは首を傾げる。

「で、だ。我が父よ。我等に名前をくれないか？エイボンの書では名前には到底出来ないのでな」

「え？……あぁ。わかった」

そして、吼太は考えはじめた。

数十分後……

「……よし！決まったぞ！」

「あの、コータ？みんな『決まったら呼んでくれ』みたいなこと言ってどこかに行っちゃったよ？」

「……マジで？」

「マジで」

その時、吼太とアリスに巨大な影が落ちる。

吼太とアリスが上を見ると、そこには、時を越える船が航行していた。

「な！？誰が動かしてんだ！？」

『親父殿ー！この船はいい船だなー！』

「この声は……水神クタアトの娘か。花鳥風月（セイクー）！」

花鳥風月を使い、運転室まで行く。

そして、水神クタアトの少女を捕まえる。

「……欲情したのか親父殿？」

「違ぇ！勝手にコレ動かすなバカ！」

「……ま、まぁ……親父殿が望むなら私は……／／／／／／／／／／」

「……」

ガスッ

「痛い！」

「ほら、次行くからとっとと降りろ。【ミナ】」

「……ミナ、とは？」

「お前の名前だ。嫌だったか？」

吼太が聞くと、少女は一瞬考え込むが…

「…いや、構わない。これからもよろしく頼むぞ。親父殿」

「……親父殿は止めてくれ…」

その時、空に一匹の鳥……スバメがいるのが見えた。

「スバー」

「何かあったのか？」

「スバー！」

「よし、今行く。ミナ、コレ片しとけ！」

「わかった」

そして吼太は花鳥風月を発動し、また飛んだ。

今度来たのは砂漠のエリア。

そこのどこかから、悲鳴にも聞こえる声が聞こえてきた。

急いで音の出所に向かう吼太。

「……って、は？」

そこには、やたらオロオロしているレッパモンと、首と胴体がさよならした妖蛆の秘密の娘がいた。

「コータどうしよう！僕、こんなつもりじゃ……ちょっとお昼寝してて、そしたらこの娘が尻尾にちょっかい出したみたいで、その……」

レッパモンの尻尾には独自の意志がある。本来はそれで後ろからの敵にも対処が出来るのだが、今回はそれが裏目に出たらしい。

「……あ、とーさま」

不意にそんな声がした。

後ろを見てみると、生首を抱えた、首の無い少女がいた。

「………ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

あまりの自体に、レッパモンが気絶した。

このレッパモン、お化けやその類いが苦手らしい。

「……あ、ちょっと待ってね」

そう言うと、妖蛆の秘密の少女は、首を胴体に乗せる。

やがて、首は完全に再生した。

「で、話は？」

「話は？じゃねぇよ！何してたんだ！」

「ちょっと自殺を」

「勝手に死ぬなバカ！」

「生き返るからいいでしょ？」

「よくねぇよ！」

そう叫ぶと、吼太は妖蛆の秘密の少女に近づき、その頭を小突いた。

「痛い」

「ほら、レッパモンが起きたらちゃんと謝って……なぜ服を脱ぐ？」

「？　頭を小突いたら愛を交わすサインだって誰かが「誰も言ってねぇ！」……ケチ」

「ケチじゃねぇ！いいから、レッパモンにはちゃんと謝っとけよ！？【カンナ】！」

「……ん、わかった。とーさま」

カンナが答える。

そして吼太は花鳥風月を発動し、飛び立った。

『ダーリン！ちょっと』

飛行中にアリスから念話が入る。

「なんだアリス？」

『一人見つけたよ！家まで戻って来て！』

「分かった！」

螺旋界認識転移システムを使い、アリスの下へ超転移する。

「どこだ！？」

「あっち！」

アリスが指差した先には……

「あー、うー」

両親が使っている、キングサイズのベッドでごろごろしている、金枝篇の少女がいた。

「おい、コラ。勝手に使うなバカ」

「……う？」

「いいから降りろ！」

「………だでぃも一緒に寝たいの？」

「いや、今眠くないし」

「じゃあ………シたいの？」

「違う。だから服を脱ぐな。それとアリス。オレは別にする気は無いし右腕の間接が死ぬほど痛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！？」

「……ダーリン、ダメだよ？浮気しちゃ？」

吼太の腕を離すアリス。

「とにかく、服を着ろ【キサラ】。あ、これお前の名前な？……じゃあ、次は……」

～♪～～～♪

吼太の携帯電話から着信音が流れる。

「はい、もしもし。……すずか？一体どうし……マジか！？」

携帯電話を切ると、吼太は花鳥風月を広げて飛び立った。

「あ、ちょっとダーリン！？」

「……だでぃ、行っちゃった」

「すずか、その娘はどこに!?」

「そこだよ!」

すずかが示した先を見るとそこには……

「だから!アンタは何者か聞いてんのよ!」

「小童の質問など聞く道理は無い。あと５００年生きたら考えてやらんでもないがな」

「あぁー!もう!ムカつくわねこのガキ!」

すずかの家の庭で優雅に紅茶を飲む屍食教典儀の少女と、その少女に怒鳴っているアリサがいた。

「……おい」

「?……あぁ、父君か。どうした?」

「父君とか言うなバカ!オレはお前の父親になった覚えはねぇ!ついでにすずかとアリサ!変な目でオレを見るな!」

「アンタ……そんな趣味があったのね……」

「コータ君、今ならクレッセントブレイカー五発で許してあげるからね？」

言いながら、すずかはガランホルンを構える。

「待てすずか！それはやりすぎだろ！？」

「ふむ……嫉妬とは見苦しいものだな」

「「なっ！？」」

「ならば見せてやろう。我と父君との交わりを。そうすれば諦めも…「このバカ！」つぐっ！？」

吼太が屍食教典儀の少女を小突く。

「ほら、帰るぞ【ナツハ】」

「ナツハ？それって誰の名前？」

アリサが聞く。

「コイツの名前だよ。じゃあ、まだ用事あるから、またな！」

吼太は花鳥風月を広げ、ナツハを小脇に抱えたまま飛び去った。

「あ、ちょっ……せっかくだからゆっくりしていって欲しかっ

たな…」

すずかの呟きは、風に乗り飛び去って、誰の耳にも入ることは無かった。

「……次が最後だな」

「父君よ、エイボンの書の化身ならば、図書館に向かうと聞いたぞ」

『コータ君！図書館に痴女が！』

ナツハが言うのと、はやてから念話が入るのはほぼ同時だった。

「チィッ！時間が惜しい！転移するぜ！」

「心得た！」

そして吼太とナツハは超転移した。

「はやて！その娘は！？」

「そこや！」

はやてが指差した先には、図鑑を読んでいるエイボンの書の少女がいた。

「とりあえず認識阻害の魔法は使っといてるけど……」

「あぁ、我が父。今、媚薬の調合を考えていたところだ」

「待てぃ！何危ないことさらっと言ってんの！？」

「で、どうやって作るん？」

「あぁ、まずは……」

「自重しろ！はやてもノるなよ！？」

「え？だってコータ君犯すのに必要やん？」

「うむ。その通りだな」

「ダメだこの二人……早く何とかしないと…」

吼太が頭を抱える。

「ところで我が父よ、我の名前はどうなったのだ？」

「あぁ……【セン】、でどうだ？」

「ふむ……センか。了解した」

「センちゃんか～、いい名前やね。私ははやて、八神はやてや。よろしくな？」

「あぁ、よろしく頼む。我が友はやて」

「我はナツハだ。覚えておけ。はやてとやら」

「さぁ、帰るぞお前ら」

こうして、吉谷家のメンバーに5人の少女（5冊？）が加わり計13人に。

吼太の子供が8人になった。

さらに、この際に子供の順列を決めることになり、

上から順にプリム、ミカ、ライラ、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、キサラとなった。

最後に吼太が一言。

「オレの家族って人外率やたら高くねぇか？」

そう言う吼太自身が、一番人間離れしていることは気づいていないようだ。

# 第九十話　5人……いや、5冊か？（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始まり始まり～」

アリス「やっと出れたぁ～！」

なっぺ「最近は出せて無かったからね」

吼太「コラ待て。なんで子供が増えてんだよ」

なっぺ「いや、未婚&子沢山小学生だろお前？」

吼太「誰がそうしたと思ってんだ！？」

なっぺ「じゃあ魔導書娘達。改めて自己紹介」

セン「センだ。エイボンの書の化身だな。名前の由来は１２月の英語、ディセンバーからだそうだ。我が父の子供としては四女だな」

ミナ「ミナだ。水神クタアトの化身だ。名前は６月の別名、水無月からだそうだ。親父殿の子供として数えると五女だ」

カンナ「カンナ。妖蛆の秘密の化身。趣味はリストカットと自殺。名前は１０月の別名、神無月から。六女ね」

ナツハ「我はナツハ。屍食教典儀の化身だ。名前は４月の夏初月からだ。不本意だが七女ということになる」

キサラ「キサラだよー。金枝篇の化身。将来の夢は寝たきりニート。

名前は2月の別名如月から。末っ子の八女だよー」

プリム「よく出来ましたわね」

ミカ「ばっちり！」

ライラ「……頑張ったね」

なっぺ「じゃあ吼太チルドレン。感想感謝コーナー頼むよ」

チルドレン「緋水さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、雨季さん、バルディッシュさん、海人さん、七つ夜&夜つ七さん、天照らす大神さん、香崎真琴さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「緋水さんからは詩音のフィギュア（等身大）に吼太のフィギュア（等身大）を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードに犬耳、尻尾、あと優と詩音のピクニック写真を、バルディッシュさんからは魂魄妖夢の服と楼観剣・白楼剣、フランドール・スカーレットの服、禁忌「クランベリートラップ」、禁忌「レーヴァテイン」、禁忌「フォーオブアカインド」、禁忌「カゴメカゴメ」、禁忌「恋の迷路」を、七つ夜&夜つ七さんからはエプロンドレス、鍋、お玉を、Ａｒｉｓｈｉａさんからは詩音にリボンを、水橋さんからはセーラー服、巫女服、ピッチピチの服を頂きました！ありがとうございます！」

セン「何故服がたくさんあるのだ？」

なっぺ「こういうこと」

トゥード「わん。私はマスターの忠実な犬です」↑犬耳、尻尾装備

セン「成る程。こすぷれというものだな」

なっぺ「そゆこと」

ベス「ちなみにトゥードさんの台詞はエイミィさんが考えました」

なっぺ「そしてコスプレの第一人者！こんな可愛い娘が女の子のわけがない！みんな大好き吉谷吼太君！」

吼太「うわぁぁぁぁ！？／／／／／／／」↑巫女服

キサラ「だでぃ、可愛いね」

なっぺ「セーラー服！」

吼太「くぅ……／／／／／／／／」

ミナ「こんな親父殿もアリだな」

なっぺ「ピッチピチの服！」

吼太「見えちゃう……／／／／／／／／」

ナツハ「な、なななななな！？／／／／／／／」

プリム「やはりお父様は素敵ですわぁ……♪」

なっぺ「よし、次はフランドール。さらに詩音化！」

詩音「ひぇ？」

魔導書娘達「「「「「変わった！？」」」」」

なっぺ「詩音～、あそこに性転換して裸にリボンを巻いて（大事な所だけ、隠している）放置されてる優がー」

詩音「ひぇぇぇぇ！！？／／／／／／／／」

なっぺ「Ａｒｉｓｈｉａさんからのプレゼントだって」

詩音「じゃ、じゃあ……い、頂きますっ！／／／／／／／／」

優「え！？詩音ちゃん！？」

なっぺ「南無。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 番外編　旅人との出会い、そして闘い（前書き）

今回は海人さんの小説、【魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　Ｓｗｅｅｔ　Ｓｏｎｇｓ　Ｆｏｒｅｖｅｒ】とのコラボになります。

# 番外編　旅人との出会い、そして闘い

Ｓｉｄｅ　吼太

ある日のこと。

今日はこれから、ミナと一緒に釣りに行く予定……だったんだが……

「……この反応は？」

魔導師……弱いの二人。

あと、強い奴が二人……！

「親父殿？」

「悪い、ミナ。ちょっとばかし用が出来た！釣りはまた今度な！リーム！」

「呼んだ？」

オレが呼んだ瞬間に、転移魔法で跳んできたリーム。

「魔導師がいる。話を聞いてくるから付き合ってくれ」

「あいよ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ！』

「「ユニゾン・イン！」」

いつもセットアップと同時にユニゾンしてるせいか、ユニゾン・インって言うの久しぶりな気がするな。

まぁいいか。

「行くぞ」

『はいはい～！』

「『凍てつく荒野より翔び立つ翼を我に！シャンタク！』」

シャンタクを拡げ、海鳴の空に飛び出した。

……あ、認識阻害魔法は使用してるからな？

Ｓｉｄｅ　？？？

ここは……？

海鳴か？

だがいつ来たのか、記憶が曖昧だな……

「主、ここは本当に海鳴なんでしょうか？」

「……俺達がいた海鳴、とは限らないが……」

「見つけたぞ！」

不意に、誰かの叫び声が響く。

「紅い髪、アイツか！！」

「覚悟しろ！」

俺を知っている！？

くっ、まさか龍のやつらか！？

八景と龍鱗を構える。

この人数なら、これだけでもなんとかなるか……。

「ヨシヤコウタ！よくも俺達のアイドルをォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！」

「……はぁ！？」

誰だそいつ！

「主。あの連中は皆一般人みたいだぞ」

「ならコレはマズいな」

八景と龍鱗を消す。

だが、どうするか……

違う、と言ったところで聞いてはくれないだろうしな……。

「ガードスキル、ハウリング！」

不意に、耳を塞ぎたくなるような不快音が鳴り響いた。

それは、俺を襲おうとしていた集団の後ろから鳴り響いていた。

不快音を間近で聞いた集団は、一斉に気絶してしまった。

……誰だ？

そこにいたのは……白銀の髪を持った少年だった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「メモリーウォッシュカード、天装！」

『イクスパンド、シーイックパワー』

記憶を消すゴセイカードを使い、誰だか知らない集団の記憶を消す。

「大丈夫か？」

襲われていた人達に安否を聞く。

『コータ、強い魔導師ってこの人達だよ！……ってあれ？』

「……え？なんでリインフォースが？」

「確かに私はリインフォースだが……」

リインフォースは今、はやての家に……ま、まさか！

デートか！？デートなのか！？

そうか……ついにリインフォースにも春が……

「リインフォース……幸せにな」

「コータじゃないか、どうしたんだ？」

後ろから話し掛けられる。

「ん？」

後ろには、リインフォースがいた。

「なんだリインフォースか。ちょっと待っててくれ。今リインフォースがデートしてるときに偶然会っちゃったからどう祝いの言葉を……言葉を……」

……

「『リ、リインフォースが二人いいいいいいいいいいいい！！！？』」

――説明を受けてます――

それからオレ、リーム、リインフォースは戦闘体勢を解除して、話を聞いていた。

この紅い髪の人……不破飛翔はオレが未来で会うはずの人物、エリオ・モンディアルのｉｆであり、リインフォースもその関係（見分けがつかないので、この世界のリインフォースに指輪と腕輪をしてもらった）の人物らしい。

「こうして見ると兄弟に見えなくもないな」

こちらのリインフォースが、飛翔とオレを見て言う。
確かに髪の色は近いし、見えなくもないかもな。
「そういや魔導師反応ってどうなったんだ？」
「もしかして……コイツらか？」
飛翔が画像を表示する。
そこにはボロボロになった魔導師が男女各一人。
いずれも、バインドで拘束されている。
「間違いないよ」
『魔力波が一致いたします』
リームとトゥードが言った。
「じゃあ解決か……何かつまらねぇなぁ……」
犯罪者に鬱憤晴らそうと思ってたのに。
……ん？
よく考えたら、要のとこの１０年後エリオはかなり強いよな。
なら、この飛翔もかなり強いんじゃないか？

「飛翔、模擬戦しないか？」

Ｓｉｄｅ　三人称

場所はユートピア。

ここで吼太と飛翔の戦いが始まろうとしていた。

「アインス、ユニゾンだ」

飛翔がリインフォース・アインスとユニゾンし、髪の色が白銀に変わる。さらに黒衣のバリアジャケット、背中に一対二枚の黒翼が現われる。

そして、バルディッシュに似たようなデバイス、【バルディッシュ・エテジアン】と、レヴァンティンに似たようなデバイス、【レヴァンティン・サラマンデル】を構える。

「リーム、ユニゾ「いや、コータ。今回は私と頼む」……リインフォース？」

「……ダメ、か？」

リインフォースの表情が若干曇る。

「う……わかったよ……」

飛翔はこの時、「あぁ……コイツ、尻に敷かれるんだろうなぁ」と思ったとか。

「「ユニゾン・イン」」

吼太とリインフォースのユニゾンした姿は、リームとユニゾンしたときと大差は無かった。

違いは、眼の色は赤色で、背中に漆黒の翼が生えていることだ。

さらに、吼太はブラッディダガーと相乗掛合したことで赤く染まったハンドソニックを構える。

一瞬の静寂。

そして、二人は剣撃を繰り広げた。

飛翔が御神流の剣技、則ち技術で押すのに対し、吼太は人間の域を超えた感覚と身体能力でぶつかる。

本来、力は技術に制されることが多いが、吼太はオーバースキル：加速で神経を通る電気信号を加速させ、技術に対抗していた。

さらに言えば……

「吼太、お前……何か武術をかじっていたのか？」

「あ、分かるかやっぱ？」

吼太は転生する前、合気道をやっていたのだ（と、いっても達人には程遠いが）。

そのため、攻撃を受け流す、或いは受け流されるということに耐性がついていた。

そのため、飛翔に対抗することが出来ていたのだ。

「ラチがあかねぇな……紅蓮焦！」

吼太が手から地面を這う火炎を生み出し、飛翔を狙う。

飛翔は軽く避けるが、その影響で距離が離れる。

「喰らえ！ブーメランカッター×６！」

吼太が手ぬぐいを鉄製のブーメランカッターに変え、飛翔に投げる。

「炎を纏い舞え、剣刃！」

対して飛翔は、レヴァンティン・サラマンデルをダンシングフォルムに変化させ、無数の飛ぶ刃で迎撃する。

吼太も【磁力】の能力を使い、ブーメランカッターを操るが、いかんせん数が違いすぎた。

「破ぜろ！」

飛翔のキーワードで一部の刃が爆ぜ、ブーメランカッターを全て破壊する。

残った刃は、直ぐさま吼太を仕留めるために動き出した。

「チィッ！クエアボルツ・グラビレイ！！！」

吼太が呪文を唱えると、飛び交うレヴァンティン・サラマンデルの分散した刃を全て囲うように三枚の巨大な黒い壁が現れる。

そこから発せられる重力は、ダンシングフォルムの刃の動きを制限する。

「リインフォース！」

『あぁ、フォトンランサー・ジェノサイドシフト！』

吼太の周りに無数の雷球が現れる。

それらはリインフォースの誘導により、全てがダンシングフォルムの刃と相殺された。

「隙ありだ！」

だが、その一瞬の隙を突かれ、バルディッシュ・エテジアンから放たれた風の刃が吼太に襲い掛かる。

すんでのところで気づき、回避したのだが、間に合わなかったのか脇腹を裂かれる吼太。

吼太にせよ、飛翔にせよ、相手の正確な力量が分からないため、様子見を含めた戦闘になっている。

単純な攻撃力ならば吼太が優勢、技術的な実力は飛翔が優勢。

互いに、確実な決め手に欠けていた。

「……行くぜ！」

そう言った途端、飛翔は動くことが出来なくなった。

ダークネスＡＲＭ、スィーリングスカル。

その効果は、【全身を走る激痛と引き換えに、対象の一切の動きを封じる】

これは、激痛により集中力が途切れてしまうため、吼太は能力の一部が使用不可能になってしまう。

だが、そのメリットは余りに大きい。

飛翔も抜け出そうとしてはいるが、スィーリングスカルを解除するには効果を発動している指輪を砕く必要がある。

だが、飛翔が身動きせずに使える遠距離攻撃は、せいぜい魔力弾程度。

単なる魔力弾では、ガードスキル、ディストーションを貫くことは出来ない。

つまり……

「俺の負けか」

首にハンドソニックを添えられた飛翔が呟いた。

「強いな吼太。俺も強くならなきゃいけないか……」

「ま、リインフォースの助けがあったからだけどな」

「照れるな……／／／／／／」

「主、済まない」

アインスが飛翔に謝る。

「お前だけのせいではないさ」

「じゃあ、道を創るぞ」

吼太がギガドリルで、時空転移バイパスを創る。

「じゃ、これはお土産。ユートピアに行ける身分証明書みたいなもんだ。使えばオレを呼ぶこともできる」

そう言い、吼太は飛翔に一枚のカードを渡す。

「あぁ、必要になったら使わせてもらう。じゃあ、またな」

「あぁ！またな！」

こうして、旅人は自身のいるべき世界へと変えって行った。

「俺達……完璧に忘れられてるな…」↑犯罪者男

「管理局ー！早く私達を逮捕しなさいよー！……へくちっ」↑犯罪者女

## 番外編　旅人との出会い、そして闘い（後書き）

なっぺ「後書き座談会「始まる」……酷いやカンナ」

カンナ「酷いのはあなた。私の出番が無い」

なっぺ「無茶苦茶言うな！コラボ話ぐらい我慢しろ！」

カンナ「やだ」

ナツハ「そうだ！もっと我等を出さんか！」

なっぺ「ゴルディオンハリセン！」

バシッ

ナツハ「痛い……」

なっぺ「ハリセンだからな」

カンナ「……死ねないんだけど」

なっぺ「ハリセンだからな」

ベス「感想感謝コーナー行きましょう。リインフォースさん」

リインフォース「あぁ。ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔ様、水橋様、まーた様、ライ様、緋水様、海人様、香崎　真琴様、Ａｒｉｓｈｉａ様、ＡＩＲＳ様、七つ夜＆夜つ七様、雨季様、バルディッシュ様、

天照大神様、朱神優希様。感想感謝する」

なっぺ「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは狐耳、尻尾を、ライさんからは婚姻届（妻の欄がやたら多い）を、緋水さんからは吼太君のボイス入りレコーダー（中身は「俺と結婚しよう。必ず幸せにする。」）に詩音ちゃんのボイス入りレコーダー（中身は「優しくしてね……？」）を、海人さんからはスクライアの民族衣装、学生服を、バルディッシュさんからはもこたんの服、時効「月のいはかさの呪い」、不死「火の鳥－鳳翼天翔－」、滅罪「正直者の死」、虚人「ウー」、不滅「フェニックスの尾」、蓬莱「凱風快晴－フジヤマヴォルケイノ－」を、ＡＩＲＳさんからは魔導書娘達にそれぞれケーキを、七つ夜＆夜つ七さんからはきつねうどんを、朱神優希さんからは初音ミク、鏡音リン・レン、巡音ルカの服を頂きました！ありがとうございます！」

リインフォース「こ、婚姻届……／／／／／／／」

セン「ケーキは美味しく頂いたぞ。我が代表して例を言おう」

なっぺ「そしてコスプレターイム！」

トゥード「そこの方、どうかお恵みを……代わりに、この私をあげますから……」

なっぺ「ゴルディオンハリセン！」

スパァン

エイミィ＆美由希「「痛っ！？」」

吼太「また女物かドチクショー！／／／／／／／」↑レンの服

なっぺ「それは男の娘用。んでこれが女の子用」

吼太「わ！？／／／／／／／／／／」↑リンの服

なっぺ「きつねうどん喰われた仕返しだ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第九十一話　卒業と妨害とフラグメイカーコータ（前書き）

今回は短めです。

# 第九十一話　卒業と妨害とフラグメイカーコータ

Ｓｉｄｅ　なのは

桜が咲き、新しい命が芽生えるこの季節。

そう。

私達は……

私立聖祥大付属小学校を……

卒業、します。

『卒業生、入場！』

在校生が、親兄弟が、いろいろな人が見守る中、私達は入場し、指定の席に座る。

『これより、私立聖祥大付属小学校、卒業式を始めます！』

Ｓｉｄｅ　三人称

『卒業生代表、八神はやて！』

「はいっ！」

名前を呼ばれたはやてが立ち上がり、台の上に行く。

一礼をしてから、彼女は話しはじめた。

「この学校に……私はあまりいることは出来ませんでした。ですが、みんなは私にこの大事な役目をくれました。いた期間は短くても、学べたことはあまりに多くて、この学校には、友達のみんなには、感謝しかありません」

そこで一旦区切り、周りを軽く見渡すはやて。

「この学校て得たこと、学べたことはこの先の人生で、必ず役に立つと思っています。そして……私達は今日、卒業します。教師の皆さん、今日まで……本当に、ありがとうございました！」

そして、式は滞り無く進み……

『これで聖祥大付属小学校の、卒業式を終わります！卒業生、退場！』

Ｓｉｄｅ　吼太

「さて、と……」

オレの手には、一枚の手紙。

中にあったのは、一枚の便箋。

そこにはただ一言。

【卒業式の後、屋上に来て下さい】

朝来たときに、机の中にあった手紙には、ただそれだけ書かれていた。

そして、今、オレは屋上へ行くドアの前にいる。

「……何かな？怨まれるようなことをした覚えは無いんだけど……」

日ごろの（生死を賭けた）鬼ごっこは、どれもオレの行動よりは、なのは達の行動が引き金になっているから、この認識は間違ってい

ないはずだ。

「……ま、行けば分かるか」

そう言い、扉を開ける。

そこには、見慣れた女の子がいた。

「あ……来て、くれたんやね」

「はやて？どうした？」

オレが聞くと、はやては少し俯く。

「……あのな？私……コータ君に伝えたいことがあるんや……／／／／／／／」

「ん？何？」

リボン曲がってたとか？

いや、それは無いか。リボンはしっかり確認したし。

……まさか社会の窓が全開だったとかか！？まずい！そっちは予想外だ！

確かに記憶があやふやだし……

顔が赤くなっているはやてを見て、なおさらそう思う。

クソッ！確認したいけど、目を逸らすわけにも行かない！

さらに、はやての顔は今下のほうを向いている。

確認だけにしろ、女の子の前で社会の窓に関連した行動したら、変態確実だ！

だけど、閉めなかったら閉めなかったで変態になるし……どうしよう。

「……あ、あの！」

「え！？あ、はい！」

思わず大声で返してしまう。

とうとうか……。

「コータ君……私は……コータ君のことが……」

ドキュウン！

……え？

「はやてちゃん、何してるのかな？」

「抜け駆けしたらダメだよはやて」

「命は大切にしないといけないよね？」

はやてが何かを言おうとした瞬間に、なのはが砲撃を撃ったらしい。

……とうとうデバイス無しでディバインバスターを放てるようになったのか……

「なっ……え、ええやん！私だって……私だって！リインフォース！」

「呼びましたか？主はやて」

どこからかリインフォースが現れる。

「ユニゾンや！なのはちゃん達を黙らせて、今日こそコータ君に言いたいことを言うんや！」

「……主はやて、残念ながらあなたには従えません。私も……」

「な！？裏切るんかリインフォース！？」

「（恋は）戦争ですから」

「だったらみんな纏めて相手したる！私の広域魔法を嘗めたらアカンで！」

はやてがシュベルトクロイツを構える。

「私の砲撃で、敵も（コータ君の）ハートも撃ち抜くの！」

なのはがレイジングハートを構える。

「私が最速で掻っ攫う！（コータの）想いも身体も！」

フェイトがバルディッシュを構える。

「愛の力は無限大なんだから！」

アリシアがフィオーレを構える。

「負けません。絶対に、この手に掴んでみせる！（コータとの甘い日々を）」

「「「セェーット、アーップ！！！」」」

……なんだこの闘い。

「何事ですか？」

「ふん、塵芥が何をしているかと思えば」

「え？なんで戦ってるの？」

フィニア。そうだよな。それが普通の反応だよな。

「ディバインバスター！」

「ハァァァッ！」

なのはのディバインバスターを、フェイトが斬り裂く。

そして別れた砲撃は……

なずな達の方へ!?

「ぐっ……させるか!トゥード!」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ!&Ａｒｍｄ　ｕｐ!』

逸れた砲撃を、自らの身体を盾にすることで防ぐ。

「っと、大丈夫か?」

「「「……」」」

ぽけー、っとしてんな。

「ま、お前らが無事でよかった」

思わず顔が綻ぶ。

「「「……／／／／／／／／／／」」」

……気のせいだろうか?

オレの後ろでドンパチやっていた音が消えているような……

さらに言えば、殺気がこっちに向いてるような……

その後、オレはなのは達にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをされた……

# 第九十一話　卒業と妨害とフラグメイカーコータ（後書き）

なっぺ「後書き座談会、スターティングバイ……コンプリート！」

吼太「５５５にでもなる気かお前は」

なっぺ「敢えてのカイザで」

吼太「どうでもいいよ」

なっぺ「さて、コータラバーズがさらに増えたわけだが」

吼太「……いや、なんで？」

なっぺ「ちなみに、現在までの予定だと、ラバーズ合計人数がえらいことにｗｗｗ」

吼太「だからなんで！？」

なっぺ「さぁ感想感謝コーナー行こうかー」

吼太「……バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、水橋さん、緋水さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、雨季さん、月光閃火さん、海人さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは某スキマ妖怪の服、結界「夢と現の呪」、結界「動と静の均衡」、結界「光と闇の網目」、境符「二次元と三次元の境界」を、七つ夜＆夜つ七さんからは帝釈廻天を、

水橋さんからは斬鬼とデルタのＦＦＲとＦＡＲのカードを、緋水さんからは吼太の恥ずかしい声の入ったボイスレコーダー（喘ぎ声もあるよ）、詩音の恥ずかしい声の入ったボイスレコーダー（喘ぎ声もあるよ）を、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードにスク水を頂きました！ありがとうございます！」

トゥード「泳ぎを教えて頂けないでしょうか…？私は、泳げないので…」

なっぺ「さぁ、この服を」

吼太「帝釈廻天！」

グシャ

吼太「では、この辺で。次回もお楽しみに」

# 番外編　天を撃ち抜く者、理と力と統べる王（前書き）

今回はバルディッシュさんの【魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～天を撃ち抜く烈風～】とのコラボになります。

# 番外編　天を撃ち抜く者、理と力と統べる王

Ｓｉｄｅ　吼太

「コータさん。クッキーを焼いたので試食をお願いします」

「コータぁー、サッカーしよー！」

「我の足の裏を舐めろ。コータ」

「なずな、ありがとう。フィニア、すぐ行く。はお、慎んで辞退させてもらう」

今日はマテリアル三人娘と一緒にピクニックだ。

なずなは最近、桃子さんからお菓子作りを習っているらしい。

そのたびに試食をお願いされてるから、よくわかる。今回のクッキーも美味しいしな。

フィニアはスポーツ少女になっていた。

クラスの男連中に混ざってやっているのをたびたび見てる。……アホの子なのは直っていないが。

はおは……ニートへの道まっしぐららしい。

まぁ、ただ単に働いて無いだけらしい。…はやてが元なんだし、家事スキルは高いと思うんだけどなぁ…

総評すれば、上手く溶け込めている。

「にしても……なんでお前ら成長してんだ？」

最近の疑問はこれだ。

マテリアルのみんなは、何故か普通の人間と同じように肉体が成長しているらしい。

いつまでたっても、なのは達と身長に差が出ないことを不思議に思って調べてみたら、しっかりと成長していたことが判明した。

「何故かはわかりません」

「だが、成長しているのは事実だ」

なずなとはおが言う。

答えを出す者は使っていない。

何でもかんでもこれで答えを出してもつまらないしな。

「こっちも成長してるよ？」

そう言い、フィニアはオレの手を取って……

フィニア自身の胸に、押し付けた。

ジャキッ

「……何を、しているんですか？」

「ん？コータに胸を触ってもらってるんだ」

……なずな。ルシフェリオン構えながら言わないでくれ。怖いから。

つーか最近、お前も魔王になってきてないか……？

「離れよ無礼者。それは我の所有物だ」

羽旺。それは横暴だ。

そんなことを考えていたときだった。

ドササッ

「ぐっ……ここは？」

一人の男性と女性が、降ってきたのだ。

……オレの上に。

「「「コータ（さん）！？」」」

あぁ……意識が遠く……

Ｓｉｄｅ　ヒスイ

「シルフ、ここがどこかわかるか？」

「いえ……風も感じたことが無い感じです」

「そうか……」

下は芝生らしく、落下した割には無傷で済んだ。

にしても、あの声はなんだったんだ？

『三人の女の子に、稽古をつけてあげてください』とは…？

「ぐ……は……」

……？

「シルフ、何かうめき声みたいな声が聞こえないか？」

「はい。下……でしょうか？」

下、といってもあるのは芝生ぐらい……

「コータさん！大丈夫ですか！？」

「コータ！死んじゃやだよ！」

「起きろコータ！うぬはこんなところで終わる器ではないはずだ！」

シルフの横にいた三人の少女が、シルフの下辺りに向けて声をかけている。

……ん？

あれは……手？

「ひゃん！？い、今……私の下で何か……」

「シルフ、飛べ！下に誰かいる！」

シルフが俺の指示を受けて飛び上がる。

そこには……

「し……死ぬ……」

今にも息絶えそうな、紅い髪を持つ少年……吉谷吼太がいた。

話を聞いた限りでは、シルフの脚が何故か気道にキマっていたらしい。

現在は完全に気絶中。シルフが責任を持って看病している。ほお擦りしたり、胸に抱き抱えたりしながらだが。

さて、と。

目の前にいる三人の少女……なのはに似ているのがなずな、フェイトに似ているのがフィニア、はやてに似ているのが羽旺、というらしい。

ちょうど三人。しかも女の子。

……多分、そうなんだろ。

「お前達三人に、稽古をつけてやるよ」

Ｓｉｄｅ　三人称

互いにセットアップし、得物を油断無く構える。

少し離れたところでは、シルフが今だ気を失っている吼太を抱きながらその様子を見ていた。

「行くぞー！電刃衝！」

フィニアが、プラズマランサーに似た魔力弾を撃ち出す。

「唸れ風念！」

『ウィンドカッター』

ヒスイは鎌鼬を使い、冷静に、かつ正確にフィニアの魔力弾を撃ち落とす。

「ハァッ！」

『ルシファーセイバー』

魔力弾と鎌鼬がぶつかり、発生した魔力煙に紛れて、なずなが攻撃してくる。

なのはを元にした人物が、果敢に近接戦闘を挑むとは思っていなかったのか、驚くヒスイ。

だが、彼を仕留めるには至らない。

薄皮一枚斬られたヒスイは、ルシフェリオンを振り下ろし、隙が出来ているなずなにゲイルアークを構える。

「一人、だ。苦手な近接戦闘を挑んだのが仇となったな」

「くっ……！」

悔しさで顔が歪むなずな。

だが、不意にその顔に笑みが浮かぶ。

「私を倒したのはいいですが……油断は禁物ですよ？」

『ハスタームーブ』

その音声が聞こえた瞬間、ヒスイは何回も斬られた。

時間を歪ませることにより反動を少なくしつつ超高速機動を可能にする魔法、ハスタームーブ。

以前はデバイスの問題や、魔法自体が完成されてなかったのもあり、使用を禁止されていたが、吼太の尽力により、通常使用が可能になっていた。

そして、今はフィニアがその超高速の世界に入っていた。

「速いな……だが、慌てるほどじゃない」

フィニアは確かに速かった。

百発千中を自称するヒスイですら、視界に収められない程だ。

だが、速いだけで威力が無い。

単純な超加速ではないため、通常の超加速では発生する、慣性による攻撃力強化が無いのが、ハスタームーブの唯一の弱点であった。

ヒスイは目を閉じ、感覚を全開にする。

フィニア自身を捉えることは出来ずとも、彼女の通ったあとを感知することは出来る。

通り道さえわかれば……

狙いは、つけられる！

「そこだ！針雀！」

「え！？なんでぇぇぇ！！？」

フィニアに針雀が命中する。

元々バリアジャケットは厚くない。軽いダメージでも、フィニアには命取りであった。

「きゅう……」

目を回し、倒れるフィニア。

「……うぬらの働き、無駄にはせぬぞ！デアボリックエミッション！」

しかし、遠距離から魔力を溜めていた羽旺が、ヒスイに向けて広域殲滅魔法を放つ。

ヒスイが避けることの出来ないタイミングで放たれたそれは、ヒスイを魔力ダメージでノックアウトするはずだった。

「荒鷹！悲しみ秘めて渦巻け！海念！」

ヒスイが、この攻撃を放つまでは。

『アクアゲイザー』

デアボリックエミッションは広域殲滅、つまりは【面】の攻撃力には優れるが、【点】の攻撃力では、ある程度効果が無くなる。

ヒスイはそこを突いたのだ。

荒鷹でデアボリックエミッションに僅かな裂け目を作り、そこに砲撃を捩込む。

結果、デアボリックエミッションはヒスイのいる場所を避けて展開された。

「な！？」

「そして、これでチェックメイトだ。天鶴！」

ヒスイが空中に向けて矢を放つ。

矢は空中で変換され、魔法を放った直後の僅かな硬直に襲われてい

る羽旺に、風の砲撃となって襲い掛かった。

Ｓｉｄｅ　吼太

……む……

苦しい……

何か……柔らかいものがオレの呼吸を……

……

シルフの胸で呼吸を封じられ、また気絶したオレが目を覚ますのは、あと数時間先の話。

# 番外編　天を撃ち抜く者、理と力と統べる王（後書き）

なっぺ「後書き座談会を始めます。おやつは３００円までですよー」

フィニア「え！？５００円じゃないの！？」

フェイト「わ、私てっきり５００円かと……」

吼太「お前ら落ち着け」

なっぺ「ヒスイが何故かやたら強くなった」

吼太「悪いことじゃないだろ」

なっぺ「ダメだったらすいません。書き直します」

吼太「朱神優希さん、ライさん、天照大神さん、バルディッシュさん、水橋さん、香崎　真琴さん、ＡＩＲＳさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、月光閃火さん、海人さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、まーたさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「朱神優希さんからはひぐらしのエンジェルモートの制服、化物語の八九寺真宵、千石撫子、忍野忍の服を、バルディッシュさんからは？の服、氷符「アイシクルフォール」、雹符「ヘイルストーム」、凍符「パーフェクトフリーズ」、雪符「ダイアモンドブリザード」、凍符「マイナスＫ」を、水橋さんからはイカ娘、Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓの天使とゆりっぺ、ユイのコスを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードに綾波レイのプラグスーツを、月

光閃火さんからはテイルズオブグレイセスのシェリアのダウンロードでのプロダクトコードによる入手型ＢｏＡコスチュームを、緋水さんからは詩音と吼太がヒロインの１８禁ゲーム（選択肢次第では両方とることができる。ついでに百合ゲー）を、七つ夜＆夜つ七さんからは刹那が今まで作った料理のレシピ（用語の説明から注意点までビッシリ書いてある。しかも分かりやすい。ある女性の料理の腕（シャマル以上）を治したビックリアイテム）を頂きました！ありがとうございます！」

トゥード「貴方は死にません。……私が、守りますから」

ベス「むしろ敵を廃除しそうですね」

なっぺ「今回はやたらコスプレ衣装来たけど、三つだけ厳選します！すいません！」

吼太「……意外とマシか……顔隠せるし……／／／／／／／」↑撫子の衣装

なっぺ「次はエンジェルモート！」

吼太「なぁっ！？／／／／／／／／／／」

なっぺ「最後にユイ！」

吼太「にゃ！！？／／／／／／／／／／／／／／」

ベス「にゃ（笑）」

吼太「ベス殺すぅぅぅ！！！！／／／／／／／」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第九十二話　不屈、墜ちる。されどその魂は主の下に（前書き）

今回、トゥードに事件が……！

# 第九十二話　不屈、墜ちる。されどその魂は主の下に

Ｓｉｄｅ　吼太

最近、なのは達は嘱託魔導師しとして活躍している。

ちなみにフェイトだけは執務官だ。

オレが答えを出す者で理想的な勉強方法を教えたため、一発合格出来ている。

オレ？

オレは……まだ踏ん切りがつかなくて民間協力者のままだ。

だけど、いずれは入ったほうがいろいろ上手く動けるはずだ。

でも、なんかなぁ……

そんな風に悩んでいたからか？

あるいは、疲れが溜まっていたのかもしれない。

「マスター！危ないっ！」

「え…？」

何かに、突き飛ばされる。

その、オレを突き飛ばした何かは、別の透明な何かに貫かれる。

「マスター……無事……ですか…？」

「トゥー……ド…？」

「よかっ……た……」

トゥードが雪の上に倒れる。

トゥードは元のアクセサリーの形態に戻ってしまう。

トゥードのことを手で拾いあげる。

「トゥード……トゥード……！」

トゥードは答えない。

その瞬間、オレの中の何かが切れた。

「ダウンロード……シャイングレイモン……武装召喚」

いつもなら答えてくれる声は、今は無い。

そして、オレの身体が装甲に包まれる。

赤と白、そして黄。

だが、その装甲の色が変化していく。

赤から、黒へ。

そして、最後にオレの背中と腕に紫色の炎が燃える。

シャイングレイモン　ルインモード。

オレが怒っているのは、誰でもない……

オレ自身だ。

Ｓｉｄｅ　リーム

一瞬の出来事だった。

トゥードがアンノウンに刺されて、コータから優しい雰囲気が消えた。

コータは、手に纏った紫色の炎を、アンノウンにたたき付ける。

恐ろしい威力を持ったその拳は、アンノウンをたやすく破壊する。

だけど、コータはそれじゃ飽きたらずに、壊れたアンノウンに向け

て拳を放つ。

アンノウンは、やがてスクラップになり、残骸になる。

そして吼太が飛び上がると、両手の炎が一段と強くなる。

……マズイ！

「ライラ！全力で防御！」

「…うん！」

ライラが巨大なラウンドシールドを展開する。

さらに僕が氷の障壁を補助的に張り、衝撃に備える。

次の瞬間、巨大な爆発が起こった。

ラウンドシールドが軋むが、さすがはライラと言うべきか、燁すら入らない。

やがて、爆発が収まる。

そこには、両腕両足が消えたコータが【浮いて】いた。

そう。コータは破壊してしまった。

一つの世界を。

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太とトゥードは、速やかに搬送された。

吼太は病院に、トゥードはデバイスの修理工場に。

吼太のほうは命に別状は無く、両手両足は吼太自身でなんとか出来るだろうということで落ち着いた。

問題はトゥードだ。

トゥードのコアともいえる部分に多大なダメージがあり、手を出しあぐねている状態だ。

どのデバイスマイスターも、「もうこれは直らない」と匙を投げていた。

ユーノも、何か使えるロストロギアが無いかスクライアに通信を入れたが、結果は絶望的だった。

唯一、直せる可能性があるとしたら、それはトゥードを作った吼太自身。

彼を愛す少女達は、彼の復活をより望むようになっていった。

そして、数日後……

「ん……」

吉谷吼太は目覚めた。

Ｓｉｄｅ　吼太

ここは……？

そうだ……オレは……

シャイングレイモン　ルインモードを使って……？

ダメだ、記憶が……

頭を抑えようとして、手が無いことに気づいた。

脚の感覚も無い。

両手両足に生身で武装召喚をしたためか、使用した部位が消えて無くなってしまったらしい。

「……ん……」

不意に、誰かの声が聞こえた。

首を回し、下の方を見ると白銀の髪が見えた。

リームかな？こんな綺麗な白銀の髪をした人は他に知らない。

少女が目を覚ます。

「……コータ？」

「おう」

「……生きてる……よね？」

「脚は無いけどな」

そう軽口を叩くと、リームが涙ぐむ。

「コータ……コータぁぁぁーーー！！！」

胸を貸すぐらいはしてあげよう。

心配をかけたんだから……

数分後、リームは泣き止んだ。

「グスッ……そうだ！こんなことしてる場合じゃないよ！トゥードが！」

そうだ……トゥードはあの時……！

「ぐっ……ド・マリニーの時計…！」

ド・マリニーの時計で、欠けた身体を復活させる。

そして、わずかにふらつきながらも、トゥードが安置されている場所に行く。

そこには……ほぼ壊れたトゥードがあった。

答えを出す者が、ド・マリニーの時計を使用しても修復が不可能であることを伝えてくる。

魔力を一切通さない、絶縁体の役割を果たしている部分が消滅していた。

これだと、例えド・マリニーの時計を使っても、直した後、起動をした瞬間にトゥードは完全に破壊される。

だけど、他に手が無かった。

ギガドリルを使うには、トゥードはあまりに小さすぎるし、他にメカの……ましてやデバイスの修復を出来る方法は、オレには無かっ

た。

せめて、トゥードの意識だけでも……

そう思った瞬間、トゥードは完全に砕け散った。

「！？」

周りにいた人達の息を呑む音が、やたら響いた。

「そんな……トゥード……トゥードォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

『はい、マスター』

……

「え？まさか幽霊か……？今、トゥードの声が……」

『マスター、ヴィネコンを見てください』

ヴィネコンを開く。

そこには、一人の女性の姿があった。

トゥードだ。

「な、なんで…？」

周りにいた技師の一人が言う。

『ボディが破壊される寸前に、ヴィネコンの中に、全データと共に逃げ込んだのです』

「し、心配させないでよ……コータもトゥードも……」

リームがへなへなと崩れ落ちる。

「悪い悪い」『申し訳ありません』

さて、どうするかな……

このままトゥードをヴィネコンの中に置いとくわけにはいかないし、セットアップやアームドアップが出来なくなるのは痛い。

……せっかくだし、さらに強化してみるか。

幸い、ＪＳ機関は無事らしい。

これなら、新しいボディはすぐに作れるだろう。

「コータ君！大丈夫！？ご飯なら私が口移しを…」

「コータ！身体が辛いなら全身くまなくマッサージしてあげるよ！？」

「コータ君！私が精が付くものぎょうさん作ってあげるから！」

「コータ君！血は足りてる！？」

そこに、五人の少女が入ってきた。

上からなのは、フェイト、はやて、すずかだ。

そして、最後に入ってきた少女、アリサは……

「こんの……バカコータぁぁぁ！！！！！」

「ウボァアァァァ！！？」

オレに、ライダーキックをかましてきた。

「バカ！バカバカバカ！死んじゃったかと思ったじゃない！このバカ！」

「ご……ごめん……」

腹痛い……

「もう！このバーカ！」

アリサがぷいっと横を向く。

オレは、そんなアリサの頭に手を置いて、頭を撫でる。

「あっ……／／／／／／／」

「本当、ごめんな……」

「「「「「コータ（君）！私（僕）も撫でて！」」」」」

そんなこんなで、その場は大騒ぎ。

フラウリーナ三姉妹や、魔導書娘達、プレシアさん達やヴォルケンリッターのみんなまで来て、上へ下への大騒ぎになった。

そして、数ヶ月後。

一機のデバイスが完成した。

より様々な世界から、厳選された素材を使い完成されたそのデバイスは、まさに最高のデバイスと言えた。

それは……もう一度蘇った【不屈の魂】。

【フォーティトゥード・スピリット】。

彼女は、より力強く、よりしなやかに、より硬い意志と共に帰還した。

彼女が敬愛する、マスターの元へ。

「マスター……ただいま、帰りました」

「あぁ……これからもよろしくな。フォーティトゥード・スピリット！」

「イエス、マスター！」

# 第九十二話　不屈、墜ちる。されどその魂は主の下に（後書き）

ナツハ「後書き座談会を始めるぞ」

はお「感謝するが良い！」

なっぺ「オレの仕事を盗らないでっ！？」

カンナ「あなたは必要無い」

フィニア「帰れー♪」

なっぺ「うぅ……」

キサラ「さよ～なら～」

なずな「さっさと消えてください」

なっぺ「う、うわぁぁぁぁん！！！」

なっぺがフェードアウトしました。

セン「さて、邪魔者が消えたところで、軽い説明を入れるか」

ミナ「今回、親父殿の四肢が消滅した理由は、武装召喚により、シャイングレイモンの四肢と親父殿の四肢が融合してしまい、さらに強制的に武装召喚を解除したためだ」

アリス「トゥードがいればこんなことにはならないんだけどね」

プリム「では感想感謝コーナーへ行きましょう」

ミカ「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、海人さん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、バルディッシュさん、水橋さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、朱神優希さん、まーたさん。感想ありがとうな！」

リーム「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードにｆａｔｅのセイバーのコスプレ衣装（カリバーン付）を、緋水さんからは詩音の「裸」の抱き枕、吼太の「裸」の抱き枕を、七つ夜＆夜つ七さんからはオリハルコンと強化エンジンを、バルディッシュさんからは八雲藍の服と、式神「前鬼後鬼の守護」、式神「仙孤思念」、式神「十二神将の宴」、式輝「狐狸妖怪レーザー」、式輝「四面楚歌チャーミング」、式輝「プリンセス天狐－Ｉｌｌｕｓｉｏｎ－」を、水橋さんからはメイド服とネコミミを、香崎　真琴さんからは非想天則の博麗霊夢の服全８カラーを、天照大神さんからはなのはとフェイトの声が入った目覚まし朱神優希さんからはケロロ軍曹の着ぐるみとブラックロックシューターの衣装を貰ったよ！みんなありがとうね！」

ライラ「…オリハルコンは…トゥードに使ったよ…」

トゥード「台本は無いのですか？」↑セイバーのコスプレ済み

エイミィ「見つからないぃぃぃ！カリバーン絡みのいい台詞が見つからないぃぃぃ！」↑作者の心からの叫び

なのは「まずはれいむさんって人のコスプレなのー！」

吼太「腋……腋が……／／／／／／」

フェイト「次はブラックロックシューターだよ！」

吼太「誰だよブラックロックシューターが男とか言った奴は！？無茶苦茶恥ずかしいぞ！？／／／／／／」

はやて「そんで八雲藍さんの服や！」

吼太「はぅあぅあ！？／／／／／／」

アリシア「とどめにメイド服とネコミミ！」

吼太「ワァァァ！？／／／／／／」

なっぺ「かわいいな吼太（笑）」

吼太「……」

ジャキ

吼太「言い残したいことはありやがりますか？ご主人様」

なっぺ「……許して？」

吼太「やだ♪」

なっぺ「……」

カッ……

ベス「ではではこの辺で。次回もお楽しみに」

## 幕間　不屈の魂（前書き）

フォーティトゥード・スピリットの簡単な説明です。

質問は受け付けます。

## 幕間　不屈の魂

フォーティトゥード・スピリット

様々な良質素材を用いたことで強化された、フォーティトゥードの後継機。

内部データこそ以前と変わっていないが、その処理能力は以前の数百倍以上にまで上昇している。

管理局の全システム掌握など、０．００１秒かからないほど。

また、デバイス自体の強度も、一般的なラウンドシールドと同等なほどに強化されている。

見た目は以前と変わらず、待機時はクローバーのようなネックレス、セットアップ時は腕輪と脚輪になっている。

人間形態時も、【ｒｅｃｏｖｅｒ：ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ】を組み込んでいるため破損部分は無限再生される。つまり実質的に不死身となった。

また、次元航行艦アマテラスの管制システムも勤める。

筋力は以前にも増して強化されており、大型ダンプを片手で持ち上げることが可能。素の状態相手ならば、吼太にも勝る。

移動速度は音速こそ超えないが、【柳葉揺らし】という、相手の死

角に入りつづける技術を使うことで、他人から見られることはあまり無い。直線を全力で走った場合は、時速１２０ｋｍ程。

銃から放たれた弾丸を目視できる反応速度。限りなく光速に近い反応。

トゥード自身、簡単な魔法は使えるが、彼女が魔法を使うことはあまり無い。

彼女が魔法を使うとき、それは彼女が全力で相手を屠る時だけである。

格闘術としては、基礎を固めているだけである。これは、様々な流派から様々な武術を自身の糧とするために必要だからである。

人間相手なら、生身で近代兵器を所持した一個師団相手に大立ち回りが可能。

だが、彼女の本来の闘い方は、腕を用いた格闘術ではなく……（文章はここで途切れている）

【改ページ

マスターである吼太、詩音を敬愛しており、彼を、彼女を守るためなら世界すら敵に回す。

吼太に対しては従者としての、詩音に対しては守護者としての面が強く出るらしい。

恋愛に関しては、興味は薄い模様。

本人いわく、「マスターがまだな以上、私が先になるわけにはいきません」なので、興味が全く無い、というわけでは無いらしい。

彼女を堕としたい場合、吼太と誰かを付き合わせなければ彼女が堕ちることは無いだろう。

ちなみに、スタイルは僅かに良くなっている。

その豊満な胸は、道行く人々の情欲と憧れに晒されているとか何とか。

## 幕間　不屈の魂（後書き）

すいません……今の今まで疲れて寝てました……

今日はこれだけになります。

感想をくれた皆さん、ありがとうございました。

贈り物は次回に紹介します。

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

# 番外編　仕返しじゃぁぁ！（前書き）

今回はｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔの小説、【魔法少女リリカルなのは～純白の翼の軌跡～】とのコラボになります。

魔法少女リリカルなのは～純白の翼の軌跡～　番外編５　コータに相談しよう、そうしようの後日談となります。

## 番外編　仕返しじゃぁぁ！

Ｓｉｄｅ　吼太

さて……機は熟した。

今こそ反逆の時だ……

覚悟しろよ……

「五十嵐遥ぁ！」

ビクッ

「む、今何やら悪寒が……」

「コータ、何か用事？」

リームが、出掛ける用意をしている吼太を見て聞く。

「あぁ、少しだけな」

「いってらっしゃぁ～い」

「行ってきます」

そして、螺旋界認識転移システムを発動する。

相手を認識すれば、次元も時空も関係無しに、隔絶宇宙にだって飛んで行けるこの転移方法なら、やつのいる世界に行くことは簡単だ。

そして、やつのことを認識した瞬間、オレの目の前に渦状銀河を象ったゲートが現れる。

その中へと、オレは入った。

Ｓｉｄｅ　遥

その日の授業を終えて、職員室でまとめていたときだ。

突如空間に、銀河が現れた。

……いや、銀河がここまで小さい訳が無いな。

ならば…

「……っと」

やはり奴か。

吉谷吼太。

「来たぜ。手前の約束を果たしにな」

約束……？

はて、約束などしたか？

とりあえず……

「落ち着け吼太。先生方が見ている」

「チッ……だったら外で待ってるよ」

吼太はまた銀河のようなものを作り出し、そこに入る。

「っと、危ねぇ」

『イクスパンド　ランディックパワー』

光の粒子が先生方に降り懸かる。

どうやら、記憶を無くす効果があるらしい。

さて……

「仕事を終わらせねばな」

「待たせたな」

「なら早く終わらせろよ」

30分で終わらせたのだが、彼にとっては不服だったらしい。

にしても、何の用だろうか？

「よくも……よくもコスプレ衣装なんて置いていきやがったなぁぁぁ！？こっちは大変だったんだぞ！？」

ふむ、贈り物は気に入らなかったようだ。

「だからオレはお前にウサ晴らしさせてもらう！幸い、お前ならそうそう死なないだろうからなぁ！」

……はた迷惑な話だ。

ま、私が原因なのだがな。

Ｓｉｄｅ　三人称

吉谷吼太は【相手を消滅させる】という面に特化している節がある。

つまるところ、模擬戦では全力を【出さない】のではなく【出せない】のだ。

基礎の部分に【破壊】ではなく【消滅】が来るため、非殺傷設定など役には立たない。

そのため、いつもはかなり抑え気味、敵に会ってもそれが無機物などで無い限りは、全力を出さないようにしている。

だが、今回吼太は、自らその枷を外そうとしていた。

何せ、遥には【一度喰らった攻撃は、効かない能力】がある。

つまり、裏を返せば【一度耐性を付けさせれば、いくら攻撃しても死なない】ということだ。

恐らく能力を作成した遥も、こんな解釈をされるとは夢にも思わなかっただろう。

「んじゃ手始めに……ラディス！」

手から消滅波を放つ吼太。

それは回避した遥の翼のほんの数ｍｍほどを消滅させる。

「……物騒な魔術だな」

「物騒な術だが？」

「ならば次はこちらから行くぞ」

遥が傾国の剣を構える。

国を滅ぼす程の魔剣。

その剣は次元すらも斬り裂く。

だが、吼太は別なことを思い出していた。

要の世界で行われた、トーナメントで戦ったとある戦士の使用した剣。

あれは、次元を操る剣だったのだが、吼太は何故か思い出していた。

今の遥の話し方が、似はせずとも遠からずといった具合だからだろうか？

「行くぞ」

遥が吼太に見えない斬撃を放つ。が、吼太は不可視を見ることが出来る。

見えない斬撃は、そのアドバンテージを無くし、ただの飛ぶ斬撃でしかなくなる。

「ハァァァッ！」

バルザイの偃月刀を創り、斬撃を斬り捨てる。

「ふむ、やはりこの程度ではお前には効かないか」

「当たり前だっての」

「ならば……剃」

遥の姿が消える。

……いや、超高速で移動してるだけだ。

世界に意識を張り巡らす。

すると、遥が見えた。

世界の守護者である故か、世界からの認識方法を使えば見れるらしい。

「そこだっ！」

バルザイの偃月刀をブーメランのように投げる。

高速回転するバルザイの偃月刀は、遥の身体を僅かに引き裂いた。

「ぐ……！」

そのまま旋回し、また遥を襲おうとするバルザイの偃月刀を、遥は呼び出した干将・莫耶を使い、たたき落とす。

「今度はこちらから行くぞ」

遥が陽剣・干将を投げ付ける。

吼太はそれを避けるが、それだけで終わるわけは無い。

やがて、距離の開いた二つは惹かれ合うのだ。

陽剣・干将は、陰剣・莫耶と引かれ合い、吼太の背後から再び襲い掛かる。

「……何!?……と、言うとでも?」

そう言うと、吼太は手にチョークを持ち、その先で干将に触れた。

それだけ。たったそれだけで、干将は吹っ飛ぶ。

【チョーク】に【弾(ハジキ)】を加える能力。

触れた対象を、物理法則やいかな能力も無視して吹っ飛ばす。
それにより干将は吹っ飛ばされ、不規則な軌道を描いて遥の手に戻った。

「チョークをそんな風に使うとはな……教職についている私に対する一種の当てつけか？」

「さぁな！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ】！』

吼太がディケイドライバーにカードを装填し、超高速の世界に入る。

「ぐっ！？」

刹那、遥にいくつもの斬撃が襲い掛かった。

「まだまだっ！」

吼太は手に持った二振りの剣、【キリキザミ】をさらに振るう。

間一髪、それを干将・莫耶で防ぐ遥。

「……捉えたぜ！」

「ん？」

遥が疑問に思った瞬間だった。

吼太の腕が増え、さながら阿修羅のようになる。

【腕】を【六本腕】に変える能力。

吼太は残った手に双龍神【黒天白夜】と氷炎剣ヴィルマフレアを構える。

そして遥を突き飛ばすと、剣と剣を擦り合わせながら天に突き出す。

その瞬間、吼太の身体を赤い光が覆った。

【鬼人化】。双剣を持つもののみが使える奥義。

吼太は遥の懐に飛び込み、剣を振るう。

気が紅い剣閃となり、その舞を華々しいものへと昇華させた。

斬撃が、炎が、雷が、氷が、滅龍の力が、遥の身体を襲う。

そして、吼太は最後に六本の剣を唐竹割りのごとく振り下ろした。

さながら、その舞は荒々しくも美しい。

まさに、乱舞。

「ぐ……逃げる暇が無かったか……」

「ふう……これぐらいでいいか。じゃあな！」

そう言い、吼太は転移した。

遥に、反撃の暇すら与えず。

これにより遥がどんなことを考えたか……

それは遥しか知らないことである。

## 番外編　仕返しじゃぁぁ！（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始まりやがりますぜ！親分！」

ベス「吼太さんは？」

なっぺ「あぁ、吼太なら眠らせて能力奪った状態で「ご自由にお持ち帰りください」って貼紙つけて放置した」

ベス「酷いですね」

なっぺ「何とでも言え。感想感謝コーナー！今回は気分でベス」

ベス「私ですか。ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、海人さん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、皇　翠輝さん、水橋さん、緋水さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、ＡＩＲＳさん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはこあの服と大妖精の服を、七つ夜＆夜つ七さんからは【ｒｅｃｏｖｅｒ：ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ】を、水橋さんからはスク水（女）を、緋水さんからは詩音の写真がプリントされた毛布、吼太の写真がプリントされた毛布を、香崎　真琴さんからは霧雨魔理沙の服全８種カラーとオリハルコン、ヒヒイロカネ、インフィニティ・カラット（無尽蔵にエネルギーを蓄えられる宝石）を、Ａｒｉｓｈｉａさんからは詩音とトゥードに３Ｐの素晴らしさが書かれている本を頂きました！ありがとうございます！」

トゥード「パーツの組み込みは終了しました」

なっぺ「服は既にダンボールの中さ！さらに昔要から貰ったロザリオを使ったから詩音はここにいる！」

詩音「ひぇぇぇ……／／／／／／／／／／」

トゥード「シたいのですか？マスター」

詩音「……うん／／／／／／／／／／」

トゥード「私はマスターに従うのみです。さぁ、行きましょう」

なっぺ「……詩音とトゥードが優の元に……他の人達はどう動くのか……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

コスプレ大会についてのお知らせを掲示するので、そちらもお願いします。

# 第九十三話　オレが詩音で詩音がお前？（前書き）

とうとうあの二人が邂逅します！

# 第九十三話　オレが詩音で詩音がお前？

Ｓｉｄｅ　三人称

今、吼太はユートピアから遠く離れた空間、螺旋力を持つものの認識が実体化する超螺旋宇宙にいた。

何故そんな辺鄙なところにいるかと言うと……

「……グレンブーメラン！超銀河ァア！大！切！だぁん！！！！！」

自身の全力を測るためである。

相手にするために創り出した、１２機のアシュタンガ級戦艦が超銀河グレンブーメランによって真っ二つに別れる。

次の瞬間、全てのアシュタンガ級戦艦は大爆発を起こした。

惑星大の戦艦の爆発だ。地球の近くで行ったらどうなるかなど、火を見るより明らかである。

「ふぅ…やっぱりアシュタンガぐらいじゃ相手にならねぇか……次！」

吼太が術式を展開し、クトゥルーを喚び出す。

邪神を制御するのには強力かつ緻密な魔法陣を作る必要があるのだが、今回は喚び出すのみなので、ある程度簡略化した術式でも大丈

夫なのである。

「ニューボルツ・シン・グラビレイ！！！」

クトゥルーの周りにに超強力な重力場を発声させると、クトゥルーは声を上げる暇無く消滅する。

「次！」

以後は、クトゥルー級の邪神を召喚しては消すの繰り返しだった。

そうしながら自身の力を測る。

喚び出される邪神達にしてみれば、迷惑もいいところである。

「しゃらくせぇ！纏めてかかってきやがれ！」

そう言うと、吼太は魔法陣から巨大な門のような……いや、門そのものである旧支配者、ヨグ＝ソトースを喚び出す。

あらゆる異界に通じるその門からは、大小種別様々な邪神が、あたかも百鬼夜行のように現れる。

一体一体が地球を、いや宇宙を破滅させることすら可能な邪神の群れ。

そこに吼太は飛び込んで行った。

数時間後……

「天地激震！七星流弾爆（セブンズインパクト）！！！」

大神武兜（オオカブト）の鎧を装着した武者、神武兜頑駄無（カブトガンダム）が必殺技を放つ体制に入った。

そして、星々の力を刃が七ツに枝別れした大剣、【七星顎刀】に取り込み、ヨグ＝ソトースに向けて放つ。

七つの、星にも似たエネルギー弾がヨグ＝ソトースに命中する。

あまりに強大なダメージを負ったヨグ＝ソトースは自ら門を閉じ、宇宙の果てまで逃げ帰った。

残ったのは、退路を断たれた幾体かの邪神達と、吼太のみ。

「さて、次は何を使うかな……」

大神武兜の鎧との融合を解除した吼太が呟く。

邪神達は、せめて苦しまず逝けることを願うしか無かった。

「次はバルギルト・ザケルガで精神を砕いてみようか……多元宇宙迷宮に閉じ込めた後、身体を少しずつ消していくのも悪くないかもなぁ……」

『ヒィィィィ！！！』

Ｓｉｄｅ　吼太

ふう……すっきりした。

邪神達は気兼ね無く戦えるから気楽だ。

まぁ、手応えはあまり無いけど。

弱いわけじゃないけど、ごり押しで勝てちまうからなぁ。

だれかチートでも来ないかな～。

可能なら、オレと実力が同じぐらいのチート。

「とーさま。これ何？」

ふと、カンナが緑色に光る宝石が埋め込まれた何かを差し出してきた。

それは……

「……要達から貰ったロザリオか」

このロザリオ、確か要は楔と別れて行動するために使ってたな。

「あ、コータ！」

リームか。話してるのに興味を持って見に来たらしい。

「いや、ちょっと昔に貰ったものを見つけたんだよ」

「へぇ～……」

リームが物珍しそうにロザリオを見る。

「……ていっ！」

「ん？」

リームが不意打ち気味にオレにロザリオをかける。

「わー、似合う似合う！」

「そうか？」

「ひぇ～、照れるよ～／／／／／」

……

ん？

人数が……おかしくないか？

1、オレ

2、リーム

3、カンナ

4、謎の少女

……

「お前は……誰だ？」

「ひぇ？」

Ｓｉｄｅ　詩音

「お前は……誰だ？」

「ひぇ？」

えーっと……とりあえず、名乗ったほうがいいんだよね？

「詩音は詩音だよ」

「……はぁ」

あれ？何かため息ついてる。

「……リーム、知り合いか？」

「え？リームちゃんの知り合いなの？」

詩音と男の子の二人に質問されたリームちゃんは……

「えーっと……僕も何から話していいやら……アハハ…」

苦笑いしていた。

Ｓｉｄｅ　三人称

説明が終わり……

「つまり、お前はオレで……」

「詩音は貴方？でも貴方は詩音で…」

「オレはお前？」

……混乱しそうな確認の仕方である。

「うん。概ねそんな感じ」

「「そーなのかー」」

どこぞのバカルテットの一角のような台詞を、寸分違わず同時に話す吼太と詩音。

「……待てよ？オレと同じってことはつまり……」

吼太が何かを考えはじめる。

「……」

そして、ライドブッカーをガンモードにして、詩音に向けて放つ。

「ひぇ！？」

詩音が無意識に発動させたガードスキル　ディストーションがライドブッカーの弾丸を逸らす。

「やっぱりか……よし！詩音！お前、オレと戦ってくれねぇか？」

「ひぇ……ひぇぇぇ！！？」

そして、場所はユートピアに移る。

「軽い模擬戦だから、あまり気張らなくて大丈夫だからな」

「無理だよぉ～！」

「ガードスキル、ハンドソニック！」

吼太がハンドソニックを発生させ、詩音に斬り掛かる。

「ひぇぇぇ！が、ガードスキル、ハンドソニックぅ！」

詩音もハンドソニックで応戦する。

が、気力の違いなのか、詩音が押され気味になる。

「ひぇぇぇ！た、助けてぇ～！」

『ＫＡＩＪＩＮ　ＲＩＤＥ　【ＵＲＡＴＡＲＯＳ】！』

詩音が叫んだ瞬間、カードが一人でに動き、デビライザーに勝手に装填される。

「はぁぁっ！」

出てきた怪人が、その得物で吼太を弾き飛ばす。

「ふぅ……女の子にそーゆーことするのは、見過ごせないかな？」

「貴方は？」

詩音が青い怪人に聞く。

「僕はウラタロス。さて、と……お前、僕に釣られてみる？」

右手を顔の横に置き、左手で右肘を支えるという特徴的なポーズをとりながら言う。

「……あれ？オレ、主人公だよな？なんで悪役ポジション？」

吼太の問いに答える人は、誰もいなかった。

「行くよ！」

その隙を突き、ウラタロスが得物のウラタロッドを吼太の頭に振り下ろす。

「がっ！？」

あまりに油断してたのか、吼太はその一発で気絶した。

詩音ＶＳ吼太

詩音の勝ち。

## 第九十三話　オレが詩音で詩音がお前？（後書き）

なっぺ「後書き座談会、ついにアニメ化！？」

吼太「なんで後書きがアニメ化する必要があるんだよ」

詩音「ひぇぇぇ……アニメ化しちゃうの…？」

吼太「しないから」

なっぺ「さて、とうとう二人が対面したね」

詩音「不思議な気分……」

吼太「まぁ、そりゃあなぁ」

なっぺ「傍目からだと双子みたいだな」

吼太「自分だしな」

なっぺ「じゃあ、感想感謝コーナー行くぜ！二人とも、頼むぜ！」

吼＆詩「「天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、緋水さん、雨季さん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、月光閃火さん、朱神優希さん、ＧＲＡＭさん。感想ありがとうございました！」」

なっぺ「緋水さんからは詩音の写真集に吼太の写真集を、バルディッシュさんからはルーミアの服を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん

からは超高画質カメラを、朱神優希さんからは始音カイト、弱音ハク、亞北ネルの服とそれに合わせたカツラを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「写真集なんて需要あるのか？」

なっぺ「その筋の人にはね。さて、コスプレターイム！」

吼太「男物だ♪」↑始音カイトの服＋青髪カツラ

詩音「えへへ～♪食べちゃうぞ～♪♪」↑ルーミアの服

なっぺ「うわっ、この二人ノリノリだよ。次はこれだ！」

詩音「ううぅ……ちょっとだけ恥ずかしいよぅ……／／／／／／」↑弱音ハクの服＋灰色髪ロングストレートカツラ

吼太「な、な、な！？なんだよこのカッコ！またかよ！？／／／／／／」↑亞北ネルの服＋金髪サイドテールカツラ

なっぺ「うん。こうでなきゃ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　翠屋のお菓子って美味しいよね（前書き）

主人公（笑）

今回はまーたさんの小説、【魔法少女リリカルなのは～Ｉｎｔｒｏｄｕｃｔｏｒｙ　ｃｈａｐｔｅｒ　ｏｆ　ｓｔｏｒｙ～】とのコラボになります！

## 番外編　翠屋のお菓子って美味しいよね

Ｓｉｄｅ　リーム

今日はフラウリーナ三姉妹との計４人で女の子だけのショッピング。

なんでこの４人かというと、魔導書のみんなは基本的に出無精だし、アリスは補導の可能性が非常に高いから出てこれない。

ちなみに僕のアウトフレームはそれなりの外見なので、警察は迂闊に手を出せない。

中学生っぽいけど、童顔なだけにも見えるってこと。

それで、いろいろ見て回ってたんだけど……

「なぁ姉ちゃん、いいだろ～？」

男の人が女の人に声をかけていた。

「酔っ払いだ」

「真っ昼間から何をやってんだろうね」

「はた迷惑ですわね」

「……あの人助けよう」

そう言うと、ライラが突進するかのような勢いでその二人組に近づ

いていく。

「あ、ライラ！？」

Ｓｉｄｅ　？？

全く……私は翠屋に行こうとしていると言うのに。

めんどくさい。蹴散らすか。

「……ダメ。人に迷惑かけちゃ」

「あぁ！？誰だお前！コイツのダチか！？」

見ると、先程まで私に絡んでいた男は、声をかけてきた女性に窘められていた。

「……友達じゃないけど…ほっとけないもの」

「ふん……なら、お前が相手してくれんのか？」

男が下卑た目で女性を見る。

見た目は明らかに細身で、風が吹くだけで折れてしまいそうな手足

が特徴的だ。

肩口辺りまで伸びた髪は、目を半分隠すようになっている。

髪の色は、透き通るような新緑の色をしていた。

……通り掛かりの人、というわけではなさそうだな。素人にしては隙が無さ過ぎる。

「……それもダメ。私には、好きな人がいるから」

「チッ…んなこた聞いてねぇんだよ！」

男が手を上げる。

平手打ちでもしようというのだろう。だが、女性は怯む様子すら見せない。

だが、このままでは確実に女性は叩かれてしまうだろう。仮に武術をかじっていたとしても、男性と女性の力の差は簡単には埋まらない。

男の手を止めようとした時だった。

私の横を素早く誰かが走り抜け、男の手を掴んだ。

「妹に手を出したら……俺が黙っちゃいないよ？」

「ぐっ……！」

男が手を無理矢理振りほどこうともがく。

が、その手は外れない。

だが、私は別のことに気を取られていた。

先程の人物は、自分のことを俺と言った。だから男だと思ったのだが……

その考えを、その人物の胸を押し上げる二つの塊が否定した。

そう、今男の腕を片手で抑えているのは、女性だったのだ。

先の女性より僅かに濃い色をした髪は、後ろで纏めてある。所謂ポニーテールといったものだったか？

顔は確かにか弱そうな女性と似ているが、こちらはむしろ活力に満ちた顔をしている。

そして、やはり隙が無い。

「こ……のっ！」

男が余っていた手を使って、腰に隠していたナイフを取り出そうとする。

だが、その手がナイフを掴むことは無い。

「捜し物は……これですの？」

三人目の女性がナイフを片手に男を見ていた。

明らかに相手を蔑む目をした表情は、その道の人には好かれそうだ。

彼女の腰まで届く長い髪は、やはりというべきか緑色。こちらは夏の青葉と同じような色だった。

「さて、と。おじさん。まだやる？」

「……それとも警察？」

「あるいは…私達が絶対に忘れられないようなキョウイクをしてあげましょうか？」

三人の女性は、素晴らしい笑顔で言う。

周りに集まっていた男性と一部の女性が顔を赤くする中、笑顔という名の殺気を浴びた男は……

「あ……あぅ……ハぁ……」

だらし無くも失禁していた。

……酔いはすっかり醒めているようだな。

「大丈夫ですか？」

白銀の髪の少女が私に聞いてくる。

「あ、あぁ……」

直接ではないとはいえ、尋常ではない殺気を感じた私は、少し緊張をしていたらしい。

出した声は僅かに震えていた。

だが、すぐに持ち直す。

何故なら、3時まであと数分といった時間だったからだ。

「そこの三人！礼がしたいが時間が無い！後で翠屋というところに来てくれ！」

そう言い、翠屋に向けて駆け出す。

「え、えぇ！？」

少女が驚いた声をあげたが構っているヒマはない。

何故なら今日は、試作品の新しいスイーツを時間限定で試験販売するからだ。

遅れるわけには、いかない！

Ｓｉｄｅ　三人称

その後警察に軽い事情聴取を受けたリーム達は、女性からだいぶ遅れて翠屋についた。

「本当……なのか？」

「え、えぇ……」

「そんな……」

「えっと……大丈夫ですか？」

リームが女性に声をかける。

「……あぁ、とりあえずシュークリームを食べさせてくれ」

そう言うと、女性はもくもくとシュークリームを食べはじめた。

「……僕たちも何か頼もっか」

「……そうですわね」

そうして４人の前にケーキが置かれる。

プリムはザッハトルテ、ミカはフルーツマフィン、ライラはレアチーズケーキ、そしてリームはミルフィーユである。

そして、女性のが一息ついたときに、ミカが話を切り出す。

「そういえば、あなたの名前は？」

「メアリスティングだ。メアと呼んでくれ」

「メアちゃんか～」

「……」

メアはミカのちゃん付けに反応を示すが、すぐにシュークリームを食べる行為に戻る。

それからは他愛もない世間話をしていたが、その過程でメアが次元漂流者であることが判明した。

並行世界を隔てた先で出会ったのが魔法関係者、それもなのはやフェイトの知り合いと分かり、奇妙な縁を感じた5人であった。

そして……

「メアさんって……氷結系得意？」

「む？あぁ。氷結の魔力変換資質がある」

「やっぱり！どことなくそんな感じしてるな～って思ったんだ！…ユニゾン、出来るかな？」

「ユニゾン？」

メアが聞く。

「あぁ、僕、融合騎なんだ。とりあえずは氷結の融合騎って考えて」

「ふむ……しかし、相手がいないな」

相手…つまりは模擬戦で確かめたいらしい。

「それなら俺が相手になるよ」

ミカが立候補する。ミカもメアも近接戦闘が主体のため、相手にはちょうどいいだろう。

「では私は審判……といったところですわね」

「……私は……治療係…だね」

「じゃ、ユートピアに行こうか」

そして、場所はユートピアに移る。

「じゃあ行くよ～！」

「あぁ」

「「ユニゾン・イン」」

メアにリームがユニゾンすると、メアの黒かった髪に白銀のメッシュが入り、目は赤から橙色に近くなる。

「ノエス、セットアップ」

さらに、白に薄い銀色のアクセントが入った鎧と剣を装備するメア。

「さぁ、来い！」

ミカが構える。

「……フッ！」

メアは一瞬でミカに近づくと、剣を大上段から振り下ろす。

「おわっ！？」

不意を突かれる形となったミカは、ドリルを使い剣を受け流そうとしてしまうが……

『ミカ、残念でした。凍てつきの呪縛を彼の者に』

剣がドリルに触れた瞬間、ミカは巨大な氷山に閉じ込められた。

「うぅ……まだ寒い……」

「いや～、あそこまでやる気は無かったんだけどね～」

「私もだ。すまないな」

ミカはなんとか救出された（といっても魔法を解いただけだが）。

ミカを始めとするフラウリーナ三姉妹の元は植物である。当然、寒いのはあまり得意ではない。

「とりあえず、超時空転移装置（ぶっとびシステム）があったからこれで送るね」

「……随分な名前だな」

ぶっとびシステムの名前を聞いて、思わず呟くメア。

「こんなでも性能は確かだから。さ、起動したよー」

超時空転移装置が起動し、ゲートが開く。

「ではな」

「バイバイ！」

「また会いましょう」

「今度は俺が勝つからな！」

「……またね」

そして、メアリスティングは自身の世界に帰った。

## 番外編　翠屋のお菓子って美味しいよね（後書き）

なっぺ「後書き座談会なんですけぇ」

ベス「似非方言ですね」

なっぺ「さて、今回二つの作品の主人公が出ないという異例の自体」

ベス「少なくとも吼太さんは主人公（笑）ですしね」

なっぺ「これは前回詩音に酷いことしたオシオキです。皆さん、ざまぁって思ったら良い点に【コータざまぁｗｗｗ】と入れましょう」

ベス「では感想感謝コーナーですかね」

リーム「海人さん、七つ夜＆夜つ七さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、緋水さん、バルディッシュさん、朱神優希さん、ＡＩＲＳさん、月光閃火さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、まーたさん。感想ありがとうございましたー♪」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんからはタバスコ（畑いっぱい）を入れたカレーを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードに執事服を、水橋さんからは仮想空間システムを、緋水さんからは詩音と吼太の同人誌に吼太の写真集（風呂に入った時や眠ってる時の写真）を、バルディッシュさんからは椛の服を、朱神優希さんからはディスガイアのラズベリルとロザリーとプレネールさんとサファイアと雪丸の服を、香崎　真琴さんからは十六夜咲夜の服全８カラーを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「カレーはちゃんと食べてましたよ」

トゥード「動きやすいですね」↑執事服

トゥードラバーズ「「「お姉様素敵ー！」」」

なっぺ「じゃあコスプレターイム！まずは椛！」

吼太「いきなりかよぉ……／／／／／／」↑イヌミミ付き

なっぺ「次はラズベリル！」

吼太「う……／／／／／／」

なっぺ「ロザリー！」

吼太「背中が……／／／／／／／／／／」

なっぺ「プレネールさん！」

吼太「下……見えちゃう……／／／／／／／／／／／／」

なっぺ「サファイア！」

吼太「なんで鎧を全身に付けないんだよ……かわいらしいデザインなんて嫌いだ……／／／／／／」

なっぺ「雪丸！」

吼太「だからなんで肌を露出するデザインばっかなんだ……？しかも太ももとかばっか／／／／／／」

なっぺ「咲夜！」

吼太「メイド服かよ……／／／／／／／／／／」

ベス「今回随分としおらしかったですね」

なっぺ「擽りまくったらこうなった」

吼太「ひゃぁ……あぃ……は……／／／／／／／／／／」

ベス「くすぐられると吼太さんはこうなるんですか」

吼太「ハァ……ハァ……くしゅぐりゃないでぇ……／／／／／／／／／／」

なっぺ「呂律がおかしくなるのは何故？」

ベス「私に聞かないでください」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 第九十四話　祝福の風の妹（前書き）

あるぇ～？

この調子じゃ吼太の子供が……

……ま、いっか♪

# 第九十四話　祝福の風の妹

Ｓｉｄｅ　吼太

ある日、みんなでおやつを食べていた時だ。

はやて達八神ファミリーが一家勢揃いでやってきた。

「どうした？全員揃ってなんて珍しいな」

「あぁ。これのことで話があってな」

そう言い、リインフォースは一冊の本を取り出す。

蒼い表紙が特徴的なその本は、ただの本では無い。

高性能魔法記録ストレージデバイス【夜天の魔導書】の姉妹機とも言える存在、ストレージデバイス【蒼天の魔導書】だ。

「この子もそろそろ起こそかなって思って。そんでリインフォースと同じリームちゃんには術とかの参考、コータ君には立会人になってもらおうかなぁ～って」

おぉ、とうとう起きるのか。にしても……

「それ、オレ必要無くないか？」

「……それは……その」

「あらあら♪コータ君に会いたいから来たって言わないの？」

「シャマルぅ！それは秘密の約束や～！」

はやてがシャマルをポカポカと叩く。

「あ、アタシは別に会いたくなかったんだけど、はやてがどうしてもって言うから…」

「よく言うなヴィータ。最初に言い出したのはお前だろう」

「な！？リインフォースだってノリノリだったじゃんかよ！／／／／／／」

「な！で、出鱈目を言うな！／／／／／／」

「お前ら、少し落ち着け」

シグナムが呆れたように言う。

「ま、まぁ……とりあえず中へ」

んで……

「こんなもんかなぁ？」

「いいんじゃない？」

「さすがは主はやてです」

とりあえずは完成した。

後ははやてのリンカーコアをコピーして、起動するだけだ。

「じゃ、始めるで」

そう言うと、はやてがリンカーコアを蒼天の書にコピーする。

コォ……

「……ッハぁ！」

体力を消費したはやてがオレに倒れかかる。

「はやて！大丈夫か！？」

「平気や……ありがとな……コータ君／／／／」

……？はやてはなんで顔が赤いんだ？

その時、蒼天の魔導書が光を放ちながら空中に浮かぶ。

「……始まりましたわね」

近くで様子を見守っていたプリムが言う。

「蒼天の書の管制人格が……」

「……目覚める……」

ミカとライラも言う。

そして一段と光が強くなり……

「とーーーーーさまーーーーー！！！！！」

「ぶごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！？」

腹にとてつもない衝撃を受けたオレは、もんどり回って倒れた。

「な……なんで父親…？」

「……そういえばなんででしょう？」

む…無意識か……？

オレは無意識下で父親認定されやすいのか…？

「なぁ、私は？」

はやてが蒼天の書の管制人格に尋ねる。

「マイスターですから……かーさま？」

「そうやね～。偉いで～」

はやてに頭を撫でられて、管制人格は嬉しそうだ。

「つまりは私とコータ君は名実ともにコータ君の妻ってことやね♪」

「「「「「何ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！？」」」」」

はやての声に思わず声を張り上げるオレ達。

「待て待て待て！なんで！？いやホントなんで！？」

「酷いよはやて！僕の善意をそんなことに使うなんて！」

リームもはやてに言う。

「ふっふっふっ……人間、頭を使わなあかんで～？」

はやて……お前ってやつは……

「オシオキだ……はやて……」

「えっ……オシオキ…！？／／／／／／／／」

……なんで喜んでるんだ？はやてのやつ……

「えっ………そんなこと……心の準備が………／／／／／／／／／」

「ズルイ！僕がオシオキされたい！」

いやリーム。お前はむしろ褒められる側だろ。

「な、ならば私が主の代わりに……／／／／／／」

リインフォース。忠義はいいもんだけど何故顔を赤らめる？

「ア、アタシは……その……／／／／／／／」

ヴィータ、否定したいなら否定していいんだぞ？

「お父様！卑しいこのプリムめに是非オシオキを！／／／／／／」

プリム……お前今回何もしてないだろ。

「俺……俺……オシオキ……／／／／／／／／」

ミカ、だから無理はしなくていいってば。

「……♪／／／／／／／」

ライラ……その期待に満ちた表情はなんだ？

「なんで皆さん嬉しそうにしてるですか？」

「それは……ごにょごにょ……」

「……とーさま！是非私にもお願いするです！／／／／／／」

「何を教えたシャマル！？」

「あらあらうふふ……♪」

「シャマルのバカぁぁぁぁ！？」

……で、だ。

とりあえずあの場を収めた後、リインフォース・ツヴァイのことをいろいろと調べてみた。

するとわかったのは……

「完っ全な後方支援タイプだな」

「はいですっ！」

ビシッ！って効果音が付きそうな感じで手を挙げるリインフォース・ツヴァイ。

「一応リインフォースが使える魔法は全て使用可能みたいやな」

「で、僕のデータを参考にしたからかどうかは分からないけど、氷結系が比較的得意、と」

「フリジットダガーとかは私のオリジナルですよ」

そう言い、リインフォース・ツヴァイはブラッディダガーの氷版の魔法、フリジットダガーを作り出す。

「ユニゾン適性は…はやてちゃんは当然として、私達ヴォルケンリッター全員と、コータ君。そして……」

「私とリームまでユニゾン出来るとはな」

リインフォースが言う。

そう、リインフォース・ツヴァイは同じユニゾンデバイスであるリインフォース、そしてリームともユニゾンが出来るらしい。

「特にリインフォースとリインフォース・ツヴァイの融合適性はほぼ１００％よ」

シャマルが検査結果を言う。

ちなみにリインフォース・ツヴァイは小さくなってオレの肩の上にいる。

リインフォースやリームと違い、まだアウトフレームの長時間維持に慣れていないらしい。

「……ま、細かいことは後々に考えるとしてや」

はやてがこの場を仕切り出す。

「まずはリインの誕生日を祝うで！」

「リインとは？」

リインフォースが聞く。

「リインフォース・ツヴァイってなんか長いやん？やから、愛称でリインや！」

「はいです！リインはリインです！よろしくですよ！」

こうして、八神家に小さな家族が増えた。

# 第九十四話　祝福の風の妹（後書き）

なっぺ「後書き座談会だっぺよぉ！」

ベス「吼太さんにさらに娘が」

なっぺ「何故こんな展開になっているのか、もはやオレですらわからない」

吼太「ダメじゃねぇか」

ベス「そういえば吼太さんはいつ男の子を辞めたんですか？」

吼太「……は？」

なっぺ「いや、前回の後書き」

吼太「い、いやあれは……！！／／／／／／／」

なっぺ「さー、感想感謝コーナー行こうかー。リイン、頼むぜ」

リイン「はいです！緋水さん、香崎　真琴さん、ライさん、バルディッシュさん、水橋さん、月光閃火さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、天照大神さん、雨季さん、海人さん、朱神優希さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん。感想ありがとうございましたです！」

なっぺ「緋水さんからは詩音と吼太を夢の中で好きに出来る機械を、香崎　真琴さんからは魂魄妖夢の服全８カラー、楼観剣、白楼剣を、バルディッシュさんからは幽々子の服を、水橋さんからはヴェ

ザードコア、ドラゴンカードの砂龍サンドラ、覚醒カード、ソウルカードを、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはトゥードに和服を、朱神優希さんからは化物語の神原駿河と忍野メメの服を、Ａｒｉｓｈｉａさんからはパチュリーとアリスとフランと霊夢のコスを頂きました！ありがとうございます！」

トゥード「この服は実に落ち着きますね」

男性Ａ「……た、谷間……」↑力尽きた

男性Ｂ「うなじ……が……」↑力尽きた

なっぺ「さて、と……優が来たぜ！魔理沙のコスプレで！」

優「わわっ！？」

吼太「……優、お前にそんな趣味が」

優「違うって！」

なっぺ「んで、詩音を呼んで……」

詩音「優お兄ちゃんだぁ！」

なっぺ「んで……」

詩音「ひぇ？……ふんふん……分かった！ガードスキル、ハーモニクス！」

詩音が６人に増えた！

なっぺ「面倒だから一気に着せました」

優「それってただの手抜き…「やっちゃえ詩音！」うわぁぁぁぁ！？」

トゥード「……この服は随分開放的ですね」　↑忍野メメの服

なっぺ「いや、それ男物だから！胸隠して！見えちゃう見えちゃう！」

トゥード「別に私は構いませんが？」

なっぺ「この小説的に困るの！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　チート夫婦の襲撃（前書き）

連日更新＼（＾ｏ＾）／

今回は香崎　真琴さんの【転生夫婦の並行世界旅行】とのコラボになります。

# 番外編　チート夫婦の襲撃

Ｓｉｄｅ　ベス

吼太さん……最近、力を思い通りに出せるようになってきて、はしゃいでいますね。

それは構いませんが、少し周りを見なさすぎですよ？

……頭を冷やす必要がありそうですね…

……あの方達にでも頼んでみましょうか。

Ｓｉｄｅ　吼太

「ふぅ……」

『もうよいか？魔導師形態（マギウススタイル）を解くぞ』

「あぁ、ありがとうなセン」

さっきまでオレは、魔導書娘達とマギウススタイルになれるかを試していた。

セン達が『我等も我が父と共に戦わせてくれ』って言ったのが始まりだ。

「次は我だぞ。父君よ」

「……その次は私ー」

ナツハとキサラが自身をアピールしてくる。

「あぁ、じゃあ……」

その時だった。

直感がこの場所は危ないと告げた。

だが、目の前の5人……魔導書娘達は気づいていない。

「マ・セシルド！」

盾を展開する。が……

「親父殿！盾が……！」

マ・セシルドはギシギシと嫌な音を立て始める。

やがて……

「ぐァッ！？」

許容量以上の攻撃を受けたマ・セシルドは、真っ二つに断ち切られた。

だが、防御としては成功したらしく、魔導書娘達に傷は無い。

「チィッ……誰だ！」

「要の世界ぶりね。吼太」

「来てやったぞ～」

お前らは……

「百合姫と鈴か。どうした？」

肩の力を抜く。

以前、要の世界で会ったからわかるが、コイツらは敵じゃない。むしろ味方だ。

「どうしたんだ？こんなところまで……」

「あぁ、実は……」

Ｓｉｄｅ　三人称

←回想←

「すみませ～ん。チート夫婦のお二人はいますか～？」

「「スライムベスだ！スライムベスがいる！」」

「スライムベスではなく神ですけど」

「うはｗｗｗマジでベスだｗｗｗ」

「で、何のよう？」

「いえ、ちょっと吼太さんに稽古を、と」

「「おｋ」」

→回想終了→

「と、いうわけ」

百合姫が説明を終える。

「……ベスは何がしたいんだ？稽古って」

「ちなみに私達が勝ったらトゥードとデートするから！万が一私達が負けたら詩音とデートする！」

「じゃあ俺は勝ったら俺の独断でお前の娘達に服を作って、万が一負けたら娘達の要望を聞いて服を作ってやるよ」

「待て待て待て！それオレに得が無いだろ！つーかアンタらが得し過ぎだろ！」

「「あなたのためだから」」

「どこがだ！あと微妙に懐かしいネタはいいから！」

まるで漫才である。

「ま、長話もなんだし、やりますか」

「そうね」

二人が拳を構える。

「……やるしかないか」

吼太も拳を構える。

「我が父よ。我等は……？」

「下がってろ。正直、余裕が無い」

吼太は感じとっていた。

直接相見えたことは無いが、その強さは簡単に感じ取れた。

センも分かっていたのか、おとなしく引き下がる。

「さぁて、始めますか」

そう言った瞬間、吼太の視界から百合姫が消えた。

いや、正確には消えたのではない。一瞬で吼太の死角に回っただけだ。

「昇天脚！」

百合姫が高らかに技名を言い放ちながら、後ろ回し蹴りで吼太を空中にたたきあげる。

「穿天掌！封天掌！」

捻りを加えた掌底を吼太の腹部に放ち、さらに両肺にも両手を使って掌底を放つ。

「ガハッ！？」

吼太の口から血が飛び出す。

防御する隙もない連撃に内臓の方が耐えられなかったのだ。

「チッ……！ベギルバオ！」

吼太が自身の身体を中心に爆発を起こす。

が、その程度で怯む百合姫ではない。

「ラスト！堕天脚！」

百合姫が空中で一回転し、踵落としを決めた。

……ように見えたが。

「へぇ……」

踵落としを受けた吼太は、まるでガラスが割れるように砕ける。

ニトクリスの鏡を用いた囮だ。

ベギルバオは百合姫を離すためではなく、ニトクリスの鏡を使用したことを隠すために使ったのだ。

「今度はこっちからだ！百鬼夜行！」

吼太が手から百鬼夜行を百合姫に向けて放つ。

が、百鬼夜行は横からの砲撃で破壊されてしまう。

「俺がいるのを忘れんなよ？」

鈴が砲撃を放ち、百鬼夜行を破壊したようだ。

百鬼夜行は点の攻撃力は高いが、横からの攻撃には脆い性質がある。

狙ったかは定かではないが、結果的に弱点を突かれる形になった。

「チィッ！だったら……！」

「……ピコピコハンマー？」

吼太がジッパーから取り出したのは、おもちゃのピコピコハンマーだった。

「ハァァァッ！」

吼太がピコピコハンマーを鈴にぶつけようとする。

ここまできて、無意味なものを取り出すわけがない。

鈴はそう判断する。

「よっと」

ハンマーを上手く避け、吼太の腹部に拳を叩き込む。

「があっ！！」

吼太が苦しそうに呻く。

手から離れたハンマーは、偶然地面で跳ね返り、鈴の左足に当たる。

その瞬間、鈴の足の一部分が消え去った。

「な！？」

ふくらはぎの一部がいきなり消えたことで、膝をつく鈴。

「偶然……だけど、いけたか」

吼太が使用したのは、【ハンマーに抜(スコン)を加える能力】、【ウェポンＡＲＭ　マジックハンマー】、【チョークに弾(ハジキ)を加える能力】を相乗掛合したものだ。

ハンマーに抜(スコン)を加える能力は、ハンマーがぶつかった部位をだるまおとしのように抜く能力。

だが、抜いた部位はすぐ近くに落ちる上、抜いた部位をもう一度ハンマーで叩くと、抜(スコン)の能力がリセットされてしまう欠点がある。

そこで、当たれば問答無用で対象ひ弾き飛ばすことが出来るチョークに弾(ハジキ)を加える能力を使い、抜いた部位を遠くに弾き飛ばし、さらにマジックハンマーの効果で抜いた部位を小さくすることで、リセットの危険を極限まで抑えたのだ。

百合姫は、能力に干渉して無効化を試している。

いろいろと防壁はあるが、３秒持てば御の字だろう。

だから、ここで吼太は全力を懸けることにした。

肉体のダメージから考えて、大威力の砲撃は使えない。

だから、この術式を選んだ。

複写眼(アルファ・スティグマ)が、情報を引き出し、魔法陣を展開する。

鈴は既に足を治し、反撃の構えを取っていた。

「喰らえ！スターライトォ、ブレイカー！！！」

「断罪ノ光塵（ジャッジメントレイ）！」

二つの砲撃がぶつかった。

拮抗したのは一瞬。

スターライトブレイカーは断罪ノ光塵に飲み込まれ、消えた。

断罪ノ光塵はファイナルマスタースパークの１００倍の威力がある。

術自体の性能差が明暗を分けた。

「残念だったな。吼太」

鈴が告げる。

それは、死刑宣告だった。

憐れな罪人は、断罪の光に灼かれ、塵に還るだけ。

…だったはずだが…

「……ん？」

「鈴、どうしたの？」

鈴は不思議な感覚に包まれた。

断罪ノ光塵を放っているのではなく、引き出されているような感覚。

「……まさか！？」

感覚を研ぎ澄ませ、断罪ノ光塵の先がどうなっているかを見る。

そこには、右手にドリルを構えた吼太が、断罪ノ光塵を受け止めていた。

ドリルには緑色の炎が纏われている。

天元突破ギガドリル。

この土壇場で吼太は、天も次元も突破する領域に、螺旋力を覚醒させたのだ。

だが、吼太も無事ではない。

螺旋力は肉体への影響が非常に強い。

先程までのダメージが酷い吼太は、身体中から血を噴き出しながら防いでいた。

だが止める気は無いのか、ドリルは強固な意思に応え、高速で回転し、断罪ノ光塵を巻き取り、吸収していく。

……が、限界が来た。

体力が底を尽き、天元突破ギガドリルを維持できなくなった吼太は、断罪ノ光塵に飲み込まれた。

Ｓｉｄｅ　鈴

……少しだけ危なかったな。

今回は本気じゃなかったが、次に会うときは本気で戦えるようになるかもしれないな。

「さて、と」

「やりますか？」

「やりますかｗｗｗ」

勝者の特権！存分に使うかｗｗｗ

やがて、吼太が目を覚ましたときに残されていたのは、ベッドの上で着衣を乱し、恍惚とした表情を浮かべたトゥードと、オシャレな服を嬉々としながら着ている娘達だった。

## 番外編　チート夫婦の襲撃（後書き）

真に申し訳ありませんが、作者の都合でしばらくの間後書き座談会は休ませていただきます。

また、感想返信も出来ないことが増えると思います。

更新も、今までのように連日更新は出来るか怪しいです。

感想をくれた皆さん、ありがとうございました。

ではではこの辺で。次回もお楽しみに。

## 第九十五話　なのは達が吼太に勝負を挑んだようです（前書き）

タイトルから内容の８割は分かるかと。

まぁ、吼太がただで終わるわけがありませんが。

# 第九十五話　なのは達が吼太に勝負を挑んだようです

Ｓｉｄｅ　吼太

「模擬戦？」

「あぁ、頼む」

どうやら、以前のＶＳチート（時期からして夫婦か？）を見て、シグナムのバトルマニアの血が騒いだらしい。

「いいぜ。場所もこっちで用意するよ」

「本当か！？感謝する吉谷！」

あはは…めっちゃ目が輝いてる。

それでいつも通りユートピアに来たんだけど……

そこには、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、リインフォース・アインス、リインフォース・ツヴァイ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、なずな、フィニア、はお、ユーノ、アルフ、そして何故かリーゼアリアとリーゼロッテ。ついでにまっくろくろすけ。

「ついでとはなんだついでとは！」

「モノローグにツッコミを入れるな。……で、リーゼ達はなんで？」

「私はお父様に頼まれてあなたの勧誘に来たんだけど……」

そう言い、アリアがロッテを見る。

「だって、こんな面白そうなこと、見逃せないよ～！」

「……まぁ、いわゆる付き添いってことよ」

「はぁ……」

ロッテもバトルマニアだったのかよ……

まぁ、いいか。

「あ、それと……」

なのはが何か条件を付け足す。

「コータ君は私達になんらかを決められるたびに、私達全員の願いを決められた数だけそれぞれ叶えないといけないから、そのつもりでね？」

……

「なんじゃそりゃあぁ！？」

「じゃあスタート」

そして、たまたま通り掛かったカンナが無情にも試合開始を宣言した。

「カンナァァァァ！？」

「あ、ちなみに」

……？

「私達もだからね。願い事叶えてもらえるのは」

「……嘘だそんなことおおおおおおおおおおおおおお！！！」

Ｓｉｄｅ　三人称

「ハァァァッ！」

シグナムがレヴァンティンを構え、吼太に突進する。

「ガードスキル、ハンドソニック！」

吼太はハンドソニックでレヴァンティンを受け止める。

が、そこに……

「アクセルシューター！」

なのはの放った４０近くある魔力弾が吼太の背中に襲い掛かる。

「チィッ！ガードスキル、ディストーション！」

ディストーションで全ての魔力弾は弾き返されるが、弾かれた魔力弾はさらに誘導され、一つに固まって巨大な魔力球になる。

さらになのはは魔力をさらに注ぎ込み、魔力球を圧縮して小さな魔力球にする。

「ビックバンッ……ブレイカァァァーーー！！！！！！」

「んな！？くそったれ！チャージル・セシルドン！」

女神のような像が頂上に付き、両脇から指にも見える巨大な突起が突き出た、巨大な盾を出す。

チャージル・セシルドンの防御力はかなり高い。単体での防御力で敵うものはそうそうないだろう。

チャージル・セシルドンの表面で魔力球が爆発する。

多少煙が入ったが、防御には成功する。

「危ねぇ……」

「まだまだです。ブラストファイヤー・フルバースト！！！」

なずなが更に攻撃をしてくる。が、ビックバンブレイカーに比べれば可愛いものだ。

チャージル・セシルドンはびくともしない。

「「ハァッ！」」

チャージル・セシルドンを影にして、フェイトとフィニアが吼太に襲い掛かる。

「甘いっ！」

吼太は全身からドリルを出す技、フルドリライズを使い、フェイトとフィニアが接近するのを許さない。

「鋼の軛！」

ザフィーラの鋼の軛がドリルの隙間を縫うように突き出し、吼太の動きを封じた。

「アイゼン！」

『エクスプロージョン！』

そこに、ラケーテンハンマーで突っ込むヴィータ。

「チイッ！【自分の位置と相手の位置】を【逆の位置】に変える能

力ァ！」

だが、吼太はヴィータの位置と自身の位置を交換することで防ぐ。

「アロンダイト！」

はおが吼太に向けて砲撃を放つ。

単純な攻撃を避けられないわけが無く、吼太は簡単に回避する。

が……

「「ブラッディダガー！」」

「フリジットダガー！」

無数のナイフ型魔力弾が回避した吼太に襲い掛かる。

アロンダイトは囮で、こちらが本命だったらしい。

「ディストーションじゃ防ぎきれないか……ミミルオ・ミファノン！」

吼太は手から特殊な波動を放つ。

その波動に当たったダガーは、全てその軌道を逸らして地面に突き刺さった。

「バーニングバインド！」

「ミスティックバインド！」

そこに、アリサとすずかのバインドが発動し、吼太を中空に固定する。

「まず二回です～」

「バインドもカウントすんのかよ！？」

「クレッセントブレイカー！」

驚く吼太に、すずかの最大砲撃が襲い掛かる。

「こなくそっ！」

吼太はバインドをちからづくで砕く。

「エクセレス・ザケルガァ！！！」

巨大な×字の雷のレーザーで迎撃する吼太。

拮抗し、互いの砲撃は相殺される。

「そこだ！」

「喰らいなさい！」

休む隙を与えないかのように、シグナムのレヴァンティン　シュランゲフォルムの連結刃と、アリサのエッケザックスの鞭のようにしなる炎の刃が吼太に襲い掛かる。

「うぉぉぉ！？」

悲鳴にも近い声をあげながら、回避する吼太。

「ちょっと！ちゃんと当たりなさいよコータ！」

「無理言うな！……イア・イタクァ！」

回転式魔導拳銃　イタクァを出し、異界の神を讃える言葉と共に引き金を引く。

すると、大量の鋭角的に曲がり追尾する弾丸が放たれ、なのは達に襲い掛かる。

「任せろ！」

だが、ザフィーラの強固な盾は砕いたものの、威力が減退しており、イタクァの弾丸は全て防がれてしまう。

「んなろぉ！だったらこれだ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　【ＯＯＯ】！　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　【ＯＯＯ　ＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡ】！』

『ガータガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

特徴的な音声と共に、吼太が仮面ライダーＯＯＯ　ガタキリバコンボに変身する。

「行くぞ！」

吼太が走り出すと、仮面ライダーＯＯＯは無数に増殖する。

「「「「「「えぇっ！？」」」」」」

なのは達が驚きながらも迎撃姿勢をとる。

「「「「「「「「うぉぉぉ！」」」」」」」」

叫び声をあげながら、カマキリソードで、その拳で、その脚でなのは達に攻撃を仕掛ける仮面ライダーＯＯＯ。

「ならこれだよ！チェーンバインド！」

アルフのチェーンバインドが走り、仮面ライダーＯＯＯ達を一カ所に集める。

「これでトドメだ吼太！」

そこに、クロノがデュランダルを構える。

「お前だけにはやられてたまるか！」

そう言うと、変身を解除した吼太はデビライザーに一枚のカードを装填する。

「我がカードに集いし龍よ、我の声と共にその姿を現せ！来い！砂龍サンドラ！！」

デビライザーから砂のヴェザードのドラゴン、サンドラを呼び出す。
本当はデビライザーを介する必要は無いのだが、吼太は気分的な問題で使ったのだろう。
「グァァァウ！！」
サンドラは一声嘶くと、クロノに向かって突進する。
「な！？」
クロノは突進を避けきれずに、弾き飛ばされた。
「ならアタシが相手だ！」
「グァウ！！」
サンドラの前にリーゼロッテが立ち、死闘が始まる。
「あぁ、もう！めんどくさい！一気に決めてやる！」
そう言うと、吼太は上空に飛び上がる。
そして、辺りを一望出来る位置まで上昇すると、両手を下に向ける。
「アイアン・グラビレイ＋【重力】！」
強大な重力に、【重力】の能力を加えて、なのは達を押し潰した。
「ふぅ……これで終わりかな」

勝者たる吼太は、その場に腰を下ろした。

その時。

「アクセルシューター……」

「パイロシューター……」

「フォトンランサー・ファランクスシフト……」

「電衝弾・打連突……」

「ブラッディダガー……」

「エルシニアダガー……」

「フォトンランサー・ジェノサイドシフト……」

「フリジットダガー……」

「フレアシューター……」

「ルナーランサー……」

「シュワルベフリーゲン……」

「「「「「「「「「「シュゥゥゥゥーーーーート！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

「……え？」

「えっと……ヒット回数……聞きたい？」

「……まぁ、一応」

アースラからこの模擬戦を記録していたエイミィが、吼太に絶滅を告げようとしている。

「しめて……９９９９９９９９９回以上……というより、カウンター簡単なのしか用意してなかったからカンストしちゃったんだよね……」

「……オイオイ、マジか……？」

イマジンよろしく、無理矢理な方法で願いを叶えようとしていた吼太にとってその宣告は、最悪のものであったに違いない。

吼太の顔は青くなっている。

「とりあえずは当面の間、願いを叶え続けてね～」

「じゃあ……まずは……」

エイミィの声を受けて、なのはが願いを言おうとする。

「ま、待て！不可能なのは無理だぞ！？」

「大丈夫♪とりあえずは……」

「……と、とりあえずは？」

「……メイド服着て私達に奉仕して？」

……

吼太はこの後、無数の写真を撮られることになるのだが、その様子は吼太の尊厳言わないでおくことにしよう。

とりあえず、吼太が当面無期限でなのは達の下僕になることが確定した。

ちなみに、アイアン・グラビレイが当たって平気だった理由は、シャマル１０８の秘技の一つ、【シャマルイリュージョン】を使ったのが理由だとか。

## 第九十五話　なのは達が吼太に勝負を挑んだようです（後書き）

はい、吼太が下僕に成り下がった話でした。

感想をくれた皆さん、ありがとうございました！

短いですが……ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

# 番外編　深紅ＶＳ黒蒼（前書き）

今回は天照大神さんの小説、【魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～】とのコラボになります。

# 番外編　深紅ＶＳ黒蒼

Ｓｉｄｅ　吼太

場所はオレの家。

「たぁ！えぃです！」

「負けないよ！そりゃあ！」

この二人……リインとミカが何やってるかって？

まぁ、いわゆる格ゲーってやつだよ。

残念ながらＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳじゃないけどな。

「勝ったですー！」

「あぁ！負けちゃった～」

「おい、次はアタシとコータだかんな！」

「ヴィータ、分かったから服を引っ張るな」

オレがソファーからコントローラーの前に移動すると、リインが小さくなり、オレの頭の上に陣取る。

「……重いんだけど…」

「ダメですか？」

リインがオレの頭の上から覗き込んでくる。

心なしか、涙目になっているようだ。

「……いいよ」

「やった～です～！」

あの一件以来、頼み事をさらに断れなくなってきてるな……変なこと頼まれないといいけど…

「よし！ぜってー負けねぇかんな！」

そう言いながら、ヴィータは胡座をかいたオレの脚の上に座る。

毎回毎回座られてるため、もはや慣れた。

リインにしろヴィータにしろ、どことなく恍惚としてるのは気のせいだろうか？

「はぅぁわ～……♪」

「へへ……♪」

……ま、幸せそうだからいっか。

そして、コントローラーのスタートボタンを押そうとしたとき……

『こちらクロノだ。ヴィータ、リインフォース・ツヴァイ。君達に仕事だ』

「……」

…怒ってる……よな。多分……

『内容は次元漂流者の保護だ。詳しい情報はデバイスに送っておく。迅速に頼むぞ』

一方的に言いたいことだけを言い、クロノは通信を切った。

「……リイン、ユニゾンだ。さっさと終わらす」

「はいです」

ハイライトの消えた目で話すヴィータとリイン。

……着いていかないと次元漂流者が危ないなこりゃ……

Ｓｉｄｅ　優星

「てて……」

ここはどこなんだろ？

気づいたら周りの景色が一変していたから、もしかしたら異世界かもしれないな。

「フリジットダガー！」

「うわっ！？」

突然、氷で出来たナイフが無数に飛んできた。

「そこの次元漂流者。おとなしくアタシについて来い。さもなきゃ氷漬けにして連行する」

『大人しくお縄につくです！』

……あれ？ヴィータだよね？

でも髪の色とか目の色とか騎士甲冑の色とか全然違うし……

『マスター、あれはリインフォース・ツヴァイとユニゾンしたヴィータさんです』

「え？リインフォース・ツヴァイって確かリインフォースが消えた後に生まれたんじゃなかったっけ？」

『な！？ねーさまはまだ死んでないですよ！』

「……待て。お前、なんでリインフォースの名前を知ってる？」

ヴィータが僕に聞いてくる。

「うーん……なんというか……」

「ヴィータ、次元漂流者は？」

その時、重厚な紅い鎧を身に纏った、一人の人間が転移してきた。

「……怪しいな。コイツ、リインフォースの名前を知ってた」

「リインフォースの名前を？ふむ……」

そう言うと、鎧の人は僕を見つめてくる。

頭部の鎧の隙間から見える目は、一瞬渦を巻いたような瞳になるが、すぐに元に戻る。

「……だいたい分かった。なら安心だな」

そう言うと、鎧が光の粒子に変わり、中の人間が顕になる。

「……女の子？」

「違う。……ヴィータ、この次元漂流者はオレが何とかするから、先に帰っててくれ」

「リインは嫌です！」

ヴィータが光り輝き、光が一人の小さな人型に変化する。
あれがリインフォース・ツヴァイなのかな？
「まぁ、頼むよ。後でアイスクリーム買ってくるからさ」
「……わかった」
「やったー！アイスですー！」
ヴィータは少し拗ねながら、リインフォース・ツヴァイは跳ねるように飛びながら喜びを表す。
「じゃ、後でな～」
「あぁ」
「アイス楽しみにしてるですよ～」
そして、ヴィータ達は転移魔法で帰っていった。
「さて……何の用だ？津川優星とやら？」
「！？」
なんで僕の名前を！？

Ｓｉｄｅ　吼太

死神の眼ってあんまし便利じゃないな。

名前わかってもＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥに書くわけにはいかないから、せいぜい寿命が知れるだけだし。

まぁ、今回はそのおかげでこの人の名前が知れたんだけどな。

とりあえず、地球の本棚から情報を少し引き出そうとする。

「……」

が、やはりと言うべきか、この【津川優星】に関する情報は皆無だった。

……ま、別にいいか。

「ゴギャァァァァァ！！！」

「うわっ！？」

突如として現れる原生生物の群れ。

「エクス、セッ「ガードスキル、ハンドソニックｖｅｒ４！ディレ

イ！」…と？」

ハンドソニックｖｅｒ４を使って原生生物達の頭を殴り、昏倒させていく。

「一丁あがり」

オレが言い終えた時には、原生生物達は一匹残らず倒れていた。

「……すいません、僕と模擬戦してくれませんか？」

突然、優星がオレに聞いてきた。

「いいけど……その前に一つ」

「？」

「敬語は止めてくれ。むずかゆくなる」

「…うん。わかったよ。えっと……」

「吉谷吼太だ。じゃ、構えろ」

Ｓｉｄｅ　三人称

二人は互いのデバイスを起動し、構える。

「得物は剣か……だったら」

吼太はハンドソニックを、優星は自身のデバイスであるエクスカリバーを展開し、構えた。

そして、近くに生えていた葉に貯まっていた水が地面に落ちた瞬間、二人は激突した。

「「ハァァァッ！！！」」

剣と剣がぶつかり合い、火花が華々しく咲く。

少しの間鍔ぜり合いをしていたが、すぐに離れる。

「シューティングシューター！」

優星が3発の誘導弾を吼太に向けて放つが、吼太はそれをディストーションで弾く。

「お返しだ！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＢＬＡＳＴ】！』

ライドブッカー　ガンモードの銃身がブレたように増え、大量の弾丸を放つ。

ディケイドブラストと呼ばれている攻撃だ。

だが、優星は軌道を読んでいたのか、巧みに避けながら吼太に近づく。

「だったらこれだ！」

吼太はジッパーからエンデ・デアヴェルトを取り出し、優星の攻撃をその巨大な盾で防ぐ。

「硬っ！？」

「喰らえ！」

エンデ・デアヴェルトから砲撃を放たれる。

バリアジャケットがある以上、あまりダメージはないが、優星は盛大に吹っ飛ばされた。

「コイツでトドメだ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ】！』

優星と、吼太が変身した仮面ライダーディケイドの間に１０枚のカードが現れる。

そこにディケイドは飛び蹴りの体勢で突撃する。

「くっ！？」

優星がそれに対抗しようとエクスカリバーを構える。

が、そこで躊躇う。

優星の必殺技である【ブラックエンドギャラクシー】。

その威力から考えれば吼太を殺してしまう可能性は非常に高い。そう判断した。

だからこそ、多少威力は低くても別な砲撃を使った。

「エターナルバスター！」

優星が放った砲撃はディケイドのディメンションキックとぶつかる。

そして、互いの攻撃は相殺された。

ディケイドが１０枚のカードを通過する前にエターナルバスターが命中したためディメンションキックの威力が十分に発揮されなかったのだ。

「…っとと」

キックを防がれた吼太は、多少体勢を崩しながらも着地する。

「ま、こんなもんか」

「そうかな」

これ以上やると殺しあいになってしまう。

そう判断してのことだった。

「じゃ、返すぞ～」

「うん。またね。吼太」

そして、優星は吼太が開いた時空転移バイパスから帰っていった。

「ただいまー」

「「アイス！」」

「……ほれ」

言われるまでアイスのことを忘れていたのか、時を加速して一瞬で作り出していた吼太の姿があったとかなかったとか。

# 番外編　深紅ＶＳ黒蒼（後書き）

学園祭まではもうしばらくかかります。

## 第九十六話　吼太と八神家と吉谷家の子供達の夏祭り（前書き）

待たせて申し訳ありません。

まだ当分は不定期更新になります。

今回は夏祭りのお話。

# 第九十六話　吼太と八神家と吉谷家の子供達の夏祭り

Ｓｉｄｅ　吼太

「ふぅ……」

今、オレはシグナムとユートピアに造った訓練スペースで模擬戦をしていたところだ。

シグナムはお願いに模擬戦ぐらいしか頼んでこないからありがたい。

「コータ、いいか？」

「聞きたいことがあるですよ」

ふと、リインフォース姉妹がこちらに来て話し始めた。

「どうした？」

「実は今日、この辺りで夏祭りがあるらしいんだ。だが私は祭というものには行ったことがなかったし……」

「私は生まれて間もないですから、祭は分からないんです。はやてちゃんも実際に行けるのは今回からですし」

今までのことがあったからなぁ……一応石田先生に止められてたんだろ。

「あぁ、構わないぞ」

「「本当(ですす)か!?」」

「それじゃ、準備が出来たら言ってくれ」

「吉谷はどうするんだ?」

「テキトーに暇つぶししてるよ。男は身支度に時間かからないからな」

1時間後……

「お待たせ~」

「では行くです……ってあれ?」

着替えてきたリイン達が驚く。

……そりゃそうだよなぁ。

辺りは無数の切り傷だらけ。さらに、その切り傷一つ一つから次元震が発生してるからなぁ……

「えっと……新しく考えた技を試したらこうなった……まぁ、そん

なとこだ」

相乗掛合（クロスオーバー）……どこまで行けるのか先が見えねぇぞ…

とりあえずド・マリニーの時計を試してみるが、何故か変化が無い。

……まぁ、いいか。後でなんとかしよう。

そして祭に来たわけだけど……

ハイ、めっちゃ注目されてます。

まぁ、美人美少女がいるから注目されるのは必然か。

リインはアウトフレームフルサイズの練習も兼ねている。

ついでに、トゥードも人間化してたり、詩音もいたり、つーか吉谷家の子供が全員集合してたりする。

「キラキラしてるですー！」

リインは年相応の反応だな。

「そーだねー♪」

詩音も楽しめそうだ。

「美味いー！」

「これはなかなか」

ミカとナツハはもう喰い始めてるな……

早過ぎるだろ。

「ほな行こか～！」

「「「「「おー！」」」」」

センの場合

「……」

じぃー

「じょうちゃん、わたあめ食べたいのかい？」

わたあめを売っている出店の人がセンに聞く。

「いや、この機械の方が気になるのだ。気にしないでくれ」

じぃー

「（や、やりづらい……）」

ミナの場合

ポチャン

「うぅ……」

「ハッハッハッ、残念だったね～」

「も、もう一回だ！もう一回やるぞ！」

そう言い、ミナはポイを受け取る。

全ては、金魚掬いの人が遊び心で入れた鯉（全長３０ｃｍ）を掬うために。

ちなみにミナは金を渡さずに遊んでいるのだが、ミナが客寄せになっており、最終的には儲かっていたりする。

キサラの場合

「……」

のろ～

「……あふ……」

のろ～

「おい……あの娘、かたぬき何個成功させた？」

「５個中５個……あのゆったりとした動きに何か秘密が……？」

「……（眠い…）」

ナツハの場合

「そこの！そのいい香りのする食べ物をくれ！」

「はい、りんご飴ね。１００円だよ」

「うむ！」

ナツハの腕には、買ったたくさんの食べ物と、お金の入った巾着がぶら下がっている。

「うんしょ……とれた！」

四苦八苦しながら、巾着から１００円玉を取り出す。

「はいありがとう」

受け取ったりんご飴を、年相応の表情を浮かべながら食べる。

「甘いな～♪我は幸せだ～♪よし！次はあれを食べよう！」

カンナの場合

「しゃてき？」

「そう、この銃であの棚に並んでるものを撃つんだ。撃った弾で棚のものが倒れたらそれは君のものさ」

「……」

射的に使う銃を観察するカンナ。

「ははは、銃ばっか見ても仕方な」

パァン！

―射的の弾が子供の目に入ったらしいぞ！―

―銃口を覗いてた時に引き金を引いちゃったらしい―

―運悪く弾丸が眼球を貫通してしまったらしいぞ―

「……死ねなかった」

ミカの場合

「さぁ始まりました！ヤキソバ大食い選手ｉｎ権海鳴夏祭り！今回はどうなるか！？」

―そりゃあ中村の単独トップだろ―

―去年の記録、一時間に６３皿はすごいよな―

「はい、そこまで！集計を見てみましょう！……おおっと！？これは予想外の結果になったぜ！なんと、中村選手は６８皿！自己ベスト更新だぁぁぁ！」

―ザワザワ……―

「だがしかし！それを遥かに上回る記録をたたきだしたのが、吉谷選手！なんとこの細身に２４７皿という驚異的な量を収めてしまったぁぁぁ！？」

―嘘だろ！？一皿だって軽く三人前はあるぞ！？―

―なにかズルに違いない！―

「あまりの記録に私達も目を疑いましたが、たまたまビデオ撮影をしていた方がいたので、証拠はあります！よって吉谷選手が賞金１０万円を獲得になります！」

「やったぁ～！」

―いいぞ～！大食いクイーン！―

―結婚してくれー！―

―私を罵って～！！―

―何故負けた中村ァァァ！―

「賞金は何に使いますか？」

「食べるのに使います！」

ミカは終始笑顔だったとか。

ライラの場合

「３０００円」

「……１０００円」

「……２５００円だ」

「……１０００円」

「…２０００円！！」

「……１０００円」

「…１５００円だ！これ以上はまけられない！」

「……はっぴーばーすでー」

「フリマのシャツをそんなに値切るなよ嬢ちゃん……」

プリムの場合

「なかなかですわね」

「お嬢さんお目が高いね……それは３５０００円だよ」

「……買いますわ」

「へい、毎度あり」

「ふふふ……これをお父様に……」

にやけるプリムの手には、ひらひらした手触りのドレスがあった。

ちなみにプリムは単なる洋服屋にいる。祭と関係ないじゃんとか言ってはいけない。

アリス（久々）の場合

「久々とか言わないで！」

「どうしたんだい？」

「あ、何でもありませーん！」

そう言い、手に持ったものを構え、放り投げる。

その投げたものは、見事棒にひっかかる。

「やた！」

「お、すごいね嬢ちゃん！これでこの駄菓子セットは嬢ちゃんのもんだ！」

「わーい！」

早速袋の中からお菓子を取り出し、食べはじめるアリス。

満面笑顔なのは言うまでもない。

「まだ残ってるけど、やる？」

「もちろん！」

そして、アリスはまた輪投げを始めた。

口にいっぱいのお菓子を詰め込んで……

リームの場合

「ふむふむ……ここもいいねー」

あちらこちらを周りながら、リームが言う。

彼女は、祭の締めくくりとなる花火がよく見える場所を探していたのだ。

誰かに命令されたわけではなく、リームはリーム自身の意志でそれをやっていた。

「それで花火をバックに草むらで……でへへへ～♪」

……多少、残念な妄想をしながらだが。

「あ、あっちもいいかも！ちょっと見てこよ～！」

八神家＆吼太の場合

Ｓｉｄｅ　吼太

「はやて！わたあめ食べよう！」

「アハハ♪ヴィータはすっかりわたあめがお気に入りやな～」

「祭とは良いものだなシャマル」

「えぇ、そうね」

「……楽しいな」

「ザフィーラ、本当に楽しんでるですか？」

各々楽しんでるな。

ちなみにザフィーラは人型でいる。耳は帽子で隠している。

尻尾？服の隙間に隠してあるらしいよ。

そしてオレは……

「コータ、祭とは良いな。心が踊る」

「ふがふが」

「そうか、お前もそう思うか。やはり私と同じことを考えてくれていたのだな。心が通じ合うとはこういうことか／／／／／」

窒素寸前です。何でかって？

……リインフォースの一番目立つ部位にだよ。苦しい。めっちゃ苦しい。

もう死にそう。何？ＳｔＳ行けずに終わるのオレ？

「リインフォース！そのままじゃコータ君が死んでまう！早く離しぃや！」

「ハッ!?だ、大丈夫かコータ!?」

「ギリギリな……にしても楽しんでくれてるようで何よりだ」

「お前のおかげだ。感謝するぞ吉谷」

「ありがとなコータ！」

「ありがとうコータ君」

「感謝する」

「ありがとーです！」

「あぁ、ありがとう」

「本当に……本当にありがとな……コータ君」

はやてが思わずといった様相で泣き出す。

「はいはい、感謝は花火が終わった後にしてくれや」

「みんなー！こっちこっちー！」

リームがオレ達を呼ぶ。

フラウリーナ三姉妹や魔導書娘達も一緒だ。

そして、オレ達が合流したその瞬間に、花火が打ち上がる。

「うわぁ……」

「綺麗……」

誰が言ったかは分からない。ただ、みんな同じ気持ちだったから。

「コータ君……私は、コータ君のことが……」

「ん？」

「……ううん、何でもない。でも……いつか……」

はやては、幸せそうな表情を浮かべる。

想い人が隣にいる幸せを噛み締めながら……

## 第九十六話　吼太と八神家と吉谷家の子供達の夏祭り（後書き）

はい、ということで夏祭りのお話でした。

皆さんが楽しみにしている（と、勝手に考えている）１００万アクセス突破記念の学園祭なんですが……

まだまだかかります。

理由としては、この企画を決めたときに、「依頼されたコラボを全て消化してから取り掛かろう」と考えていたからです。

まぁ、あの時はあんなにコラボ依頼がたくさんくるなんて思ってなかったわけですが。

あと、勘のいい人ならわかっていると思いますが、日常編はコラボとオリジナルの二つを交互に繰り返しています。

そして残るコラボは、私の貧相な脳の記憶が正しければ、【七つ夜＆夜つ七】さん、【朱神優希】さんの二人。

あと三回～四回、お付き合いください。

あ、コラボ依頼はもちろん受け付けますが、もうさすがに学園祭を延ばすわけにはいかないので、学園祭後になります。

さ～て、そろそろＳｔＳのフラグも入れ始めなきゃなぁ……

感想、贈り物ありがとうございました！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

……っていうか既に１３０万アクセス突破してるのに１００万アクセス突破記念でいいのかな……？

まぁ、いいか……

# 番外編　模擬戦もたまには別の人とやるのが効果的とかなんとか（前書き）

……いやホント、なんかすいません。

いたたまれない気持ちでいっぱいです……

長々と待たせてこの出来って…

今回は七つ夜&夜つ七さんの【俺の異世界物語】とのコラボになります。

# 番外編　模擬戦もたまには別の人とやるのが効果的とかなんとか

Ｓｉｄｅ　吼太

「ハァアッ！」

シグナムが吠えながら剣を振るう。

その相手をしているのは、岩竜バサルモス。

こと剣の相手には相性がかなり悪い甲殻を持つ飛竜（ワイバーン）だ。

レヴァンティンがバサルモスの甲殻に当たるたびに、火花が散る。

剣の達人であるシグナムであっても、その甲殻の硬さには手を焼いているらしい。

その表情には、焦りが見える。

「ゴォアアア！」

不意に、バサルモスが眠りの効果を持つ霧を噴出する。

バリアジャケットには危険な大気から身を守る効果もあるため、霧を吸い込むには至らないが、噴出の勢いをまともに喰らい、シグナムは若干吹っ飛ぶ。

「そこまで！」

オレが静止を呼び掛けると、シグナムとバサルモスは互いの動きを止めた。

「ふぅ……やはり硬い相手は難しいな」

そう、今までシグナムは自身の弱点を克服するための特訓をしていたのだ。

「グルルル…」

「なかなか強かったってよ」

バサルモスは自身の言いたいことを言うと、すぐに擬態状態に戻ってしまった。

このユートピアには外敵がいないため、擬態をする必要は無いのだが、習性からかバサルモスはほぼ常に擬態をしている。

たまに幼いモンスターを驚かせたりするのが楽しいらしい。

「しかしここはすごいな。これほど多種多様な生物がいるとは」

シグナムが辺りを見渡しながら言う。

全長が数ｋｍのようなやつから、マイクロサイズのやつ、マグマの中に住んでるやつや、凍土に住んでるやつもいるからな。

環境を創るのが大変だったよ。

「まぁ、ここにはいない生物とかもいるけどな」

そんなときだった。

「わぁぁぁ！助けてくれぇぇ！」

そんな声が上空から聞こえてきたから……

軽く避けた。

「どばぁ！？」

おぉ、原形留めてる。

「いや助けてくれよ！？死ぬかもしれなかったんだぞ！？」

「上空から物凄い勢いで落ちてくる人間を受け止めたらこっちが死ぬから」

「吉谷、こいつは？」

そういやシグナムは会うの初めてか。

「俺は如月刹那っていうんだ。よろしく」

「要の世界以来だな」

そして、再会の握手でもしようかと手を伸ばした瞬間……

ズドゴォッ！

オレは何かに潰された。

Ｓｉｄｅ　マリア

ふむ、上空から落下した割には衝撃が少なかったな。

「吼太大丈夫！？」

「む？どうした少年？そんなに私の下着が見たいのか？」

「いや違うから！足元足元！」

「ふむ、脚が見たいのか。少年はそっちに興味があったのだな」

「そういう意味じゃなぁぁぁい！」

……数十分の問答の後。

「死ぬかと思った……」

「脚の下に人がいるなら最初からそう言えばいいだろう」

「いや、足元って言ったら足元見ようよ！？」

「ところで何の用？」

赤髪の少年が少年に聞く。

「いや、模擬戦をしようかなって」

「私はこのパンの試食を頼もうと思ってな」

そう言い、私は持ってきたパンを取り出す。

「……ちょっと貸して？」

「？　構わないが」

赤髪の少年に持ってきたパンを渡す。

「……よっ」

赤髪の少年がパンを空高くに投げ……

「レムリアァァァ！インパクトォォォォォ！！！」

パンを跡形も無く消し飛ばした。

「な、何をする少年！？」

「あんなもん喰えるかァァァ！」

Ｓｉｄｅ　吼太

当面の危機が去った後、なんだかんだで刹那とシグナムが模擬戦することになった。

「では行くぞ」

「あぁ」

シグナムはレヴァンティンを、刹那は憤怒（ラース）の太刀を構える。

そして、二人はぶつかり合った。

シグナムが怒涛の攻めを見せるのに対し、刹那はそれを冷静に捌いていく。

「ならばこれだ！」

『シュランゲフォルム！』

埒があかないと判断したシグナムが、距離をとってシュランゲフォルムのレヴァンティンで攻撃する。

シュランゲフォルムの連結刃が、刹那の周りを囲う。

「だったら……これだ！」

そう言い、刹那は一つのナイフを出す。

「強欲（グリード）のナイフ、いかなるものも切り裂け」

想いをカタチにして、ナイフで連結刃を切り裂く。

自身の刃が破壊されたことにより、自動的にシュベルトフォルムにレヴァンティンが変形する。

「やるな。ならばこれで行かせて貰おう」

シグナムはそう言うと、鞘にレヴァンティンを収める。

「……居合斬りか？」

「いや……」

『エクスプロージョン！』

そして、鞘に入ったレヴァンティンのカートリッジを二発ロードする。

その瞬間、鞘が高熱に当てられ、鈍く輝く。

「さぁ、第二ラウンドと行こう」

鞘から剣を抜くと、そこには真っ赤に輝く、高熱の刃を手に入れたレヴァンティンがあった。

Ｓｉｄｅ　シグナム

私の新技、本来紫電一閃に使うカートリッジを倍使い、さらに鞘を使って熱を刃に圧縮。時間制限があるが、高熱による追加効果に加え、刃に篭った魔力が威力を底上げしてくれる強化状態、【ヘーエヒッズフォルム】。

シュランゲフォルムやボーゲンフォルムへの変形をするには一度冷却をしなければいけない分、多様な戦い方をする相手には不利だが、見たところ刹那は近接特化。

ならば、これの力を十分に活かせるというものだな。

「ハァァッ！」

一気に接近し、刹那を突く。

狙いは一点のみ。

「なっ、強欲のナイフを!?」

柄の部分を狙って突いたレヴァンティンは、寸分違わず目標を貫き、強欲のナイフを吹っ飛ばす。

「憤怒の太刀！」

刹那も先程の剣を取り出し、レヴァンティンを受け止めるが、今まで以上の威力に驚いたらしい。

だが、何故かすぐにその顔が引き締まる。

「……なるほど。だったら……暴食（グラトニー）の鎌」

太刀が消え、代わりに出てきたのは巨大な鎌。

小回りが効くとは思えないが……

「魔力を喰え、暴食（グラトニー）」

その瞬間、ヘーエヒッズフォルムが解除された。

……魔力を喰え、か。

「まさかヘーエヒッズフォルムに篭められた魔力を消すとはな。さすがは吉谷の友と言ったところか」

「まぁね。……で、俺としては吼太とも戦ってみたいんだけど…」

「オレ？」

吼太が意外そうに言う。

「まぁいいけど……」

Ｓｉｄｅ　吼太

オレを名指しか。嬉しいやら嬉しくないやら。

「じゃあ行くぞ」

刹那が鎌から太刀に得物を変え、構える。

「じゃあコイツを使ってみるか」

ジッパーから取り出した剣を見て、刹那が僅かに反応する。

「ネームレス……行くぜっ！」

刹那から前に貰った刀、ネームレスを構えて突っ込む。

刹那が対応するが、ネームレスはオレに合わせて造られた刀。並大抵の反応では防ぎきれない。

「なら……！」

刹那が布を取り出す。

あれは……まさか！？

「我に触れぬ《ノリ・メ・タンゲレ》」

その瞬間、オレは回避行動をとったが、一歩遅かったのか赤い布がオレの右手に巻き付く。

その瞬間、オレは全身の動きを制限された。

「チッ……」

「さぁ、どうする？」

動き自体が封じられているため、ライダーと召喚は却下。詩音は喚びたくないし、トゥードは一部が包まれている以上、人間態には出来ない……。

……ん？もしかしたら……

「トゥード！ダウンロード、ミュウツー！武装召喚（リアライズ）！」

『了解、ミュウツー、右腕部に特殊召喚、武装召喚』

ミュウツーの腕を呼び出す。その瞬間、右手だけが動くようになった。

そのまま右手を動かし、布を取り払う。

「……え？なんで？」

「簡単な話だよ。マグダラの聖骸布は【男性を拘束する】んだろ？なら男女の差がないモンスターだったら動けるんじゃないかなって

思ってさ。まぁ、右手以外は動けなかったけど」

オレの説明を聞いて、どこか納得したような顔になる刹那。

「さて、と……サイコキネシス」

サイコキネシスで刹那を吹っ飛ばす。

距離はとれたな。

「コールッ！、ジエン・モーラン！」

ジエン・モーランを刹那の上に召喚する。

つまり……

「え！？ちょ……」

刹那が何かを言い切る前に、ジエン・モーランは落下した。

Ｓｉｄｅ　三人称

「あんな戦い方をするとは思いませんでした……」

ラストが呟く。

「ふむ、さすがに驚いたぞ」

言葉とは裏腹に、飄々とした態度を変えないマリア。

「ん……」

そんなときに刹那が目を覚ました。

「あ、あれ？俺……」

「主はあれに潰されて先程まで気絶していたのですよ」

ラストが指差した先には、ついさっき自分を潰した、二つの巨大な牙が印象的なモンスター、そしてそれとじゃれあう（？）吼太の姿があった。

「……襲われてない？アレ…」

「一応あれでもじゃれてるらしいぞ」

刹那の疑問にシグナムが答える。

「オオオオオ！！！！！」

「ははは、よしよし」↑ジエンの突進を抑えつつ、ジエンの頭を撫でる吼太

小さな人間が巨大なモンスターを手なずけてるその異様な光景を、四人は呆然と（一人は半分飄々とした具合だったが）見ていた。

## 番外編　模擬戦もたまには別の人とやるのが効果的とかなんとか（後書き）

はい、すいません。

七つ夜&夜つ七さんごめんなさい。こんなのしか出来ませんでした…。

ちなみに吼太ＶＳ刹那が短いのは単に作者の文才が無いだけです。

感想、贈り物ありがとうございます！励みになります！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## 第九十七話　意味の無い転生者（前書き）

はい、更新しました～。

……タイトル、意外とわかりづらいかもですが、まぁそれは後書きにて。

# 第九十七話　意味の無い転生者

Ｓｉｄｅ　？？？

「よっしゃ来たぁぁぁぁぁ！」

この瞬間を待ってたぜ！

ようやく……ようやく俺のハーレム生活が幕を開けるわけだなハッハッハァッ！

さて……まずはアリサとすずかに逢わなきゃなぁ～。

オレの能力を使えばハーレムなんてラクショーラクショー！

「ちょっと！あんたたち何よ！？」

「止めて！離して！」

おっ！この萌えボイスはまごうことなきアリサ＆すずかボイス！

早速助けるぜ～っ！

「待て待てぃ！この俺様が悪人を成敗して「「セットアップ！」」

……へ？」

「な、なんだぁこいつら！？いきなりコスプレしやがった！？」

「単なるコスプレかどうか……身を持って味わいなさい？フレアシ

ユーター！」

「ひ、火の玉が！？ぐぁぁぁ！」

アリサがバリアジャケットみたいなのを身に纏って……シューターで不良を倒した？

「バインドを掛けて……あ、記憶も消しとかないと」

すずかが笛みたいなデバイスを振るうと、光の粒が不良達に降り懸かった。

どうやら、あれが記憶消去みたいだ。

「ふぅ……にしても魔法って便利よね」

「そうだね。こうして悪い人達を撃退出来るし。……じゃあ行こっか？」

「うん！コータ達が待ってるからね」

……ナンテコッタイ！まさかの事態じゃないか！

ハーレムが……俺のハーレムが……

くそ……まさか既に敵がいたとはな…！

ならば倒すだけだ！

待ってろ！えーっと……トータ？

Ｓｉｄｅ　吼太

「お待たせー！」

「遅れてごめんねー」

「大丈夫だぞ。時間的には余裕あるからな」

「そやねー。じゃ、行くで！」

今回はなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、リーム、オレのメンバーで映画を見に行く。

内容は恋愛映画らしい。……ま、たまにはいいか。

「でもまだ時間余ってるよね」

フェイトが時計を確認しながら言う。

「じゃあそこのカフェでお茶しようよ！」

珍しくすずかが声を張り上げたので、見てみたら……

【アニマル喫茶　わんにゃんぶー】

「「「「「わー♪」」」」」

「……え？」

わんにゃんぶー……？なんだその素敵ネーミングセンス？

つーか【わん】と【にゃん】はまだわかるけど、【ぶー】？

豚でもいるのか？ならかなりコアだな。まぁカワイイだろうけど。

「入ろうよコータ君！」

なのはがキラキラした目を向けてくる。

……しゃーないか。

んで入店したわけだが……

「フゴフゴ」

「「「「「「か～わいい～♪」」」」」」

……豚じゃなくて猪でした。うり坊だけどな。

オレ？例によって毛球状態だよ。

……今、夏真っ盛りなのにだぞ？暑くてしょうがねぇ。

「……とりあえずコーヒー「ガチャン！」……そこの三毛猫、オレにコーヒーすら与えないつもりか？」

「にゃ？」

……もういいよ。

わずかな隙間から辺りを見回す。

なのははうり坊抱き上げてご満悦。

フェイトは猫を胸に抱えてる。

はやては店頭で売ってたおやつを寄ってきたやつらに与えてる。

アリサは犬を大量に手なずけてて、すずかは猫とごろごろしてる。

リームは子犬とボールで遊んでいるみたいだ。

まぁ、楽しんでるなら何よりか。

と、楽しんでいたオレ達だったが、時間が来たため映画館に移動することになった。

……ハズなんだけど。

「おいそこの女！話がある！」

……誰だこのちんちくりんは？

「えっと……私？」

オレの隣にいたはやてが反応する。

「お前の隣のやつだ！」

「じゃあアタシね。何の用事？」

「そっちじゃなぁぁぁい！」

……まさか…

「……オレか？」

「そうだ！女のくせにオレなんて言ってるお前だ」

……

「あ、コータ君落ち込まないで！？」

「そうだよコータ！若々しいってことだよ多分！」

「慰めになってないぞリーム……ｏｒｚ」

オレらの反応に一瞬呆けたようになったちんちくりんだが、すぐに顔を引き締め…。

「……と、とにかくだ！俺と勝負しろ！お前の横にいる女達を賭けて！」

「断る。映画の方が優先だからな」

「容赦無いねコータ…」

フェイトが若干呆れながら言う。

「チケット代も時間も無駄にしたくないからな。特にフェイトはいつ休めるか分からないんだからさ」

「……うん。ゴメンね？じゃあ」

フェイトがちんちくりんに言って、そして離れようとした。

だが、不意にフェイトは気を失い、倒れる。

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトに近寄るが、その瞬間になのはも倒れる。

「え！？どういうこと！？」

リームが慌てているが、恐らくは……

「お前のせいだろ？」

「もちろん！一方通行に超電磁砲、幻想殺しのミックスだ！これを使って俺はハーレム王になる！」

……

「あ～、はいはい」

「おいなんだその『寝言は寝て言え』的な反応！！コイン無いからレールガン撃てないだけで、その気になればお前なんてイチコロなんだからな！」

「厨二病はちゃんとＴＰＯを弁えて使おうなー」

「むきー！」

あ、じだんだ踏みはじめた。

「だったら喰らえよ！」

そう言うと、ちんちくりんは手に砂鉄を集めた剣を創る。

……確かチェーンソーみたいになってるんだっけか？

まぁいいか。

「オリャァァァ！」

剣で攻撃してきたちんちくりんを、手刀で受け止め腕を掴み、捻る。

「な！？」

「経験は０か。ならオレにゃ勝てないな」

「このっ！」

ちんちくりんが砂鉄をばらまき、一方通行の能力でこちらに飛ばしてきた。

……面倒だな。

「ド・マリニーの時計！」

時を止めて、砂鉄をハイパーボリア・ゼロドライブで消滅させた後、転移する。

行き先は、修練の門の中だ。

中についたあと、ちんちくりんの時だけ解除する。

「な、ここは！？」

「さて、さっさと終わらすか。……ほれ」

ゲーセンのメダルを１００枚程ちんちくりんに渡す。

あいつの全力を潰せば戦意無くすだろ。多分。

「使え。真っ向から打ち破ってやる」

「言ったな！？後で吠え面かくなよ！？」

そう言い、レールガンを放ってきた。

……遅いな。

「ダウンロード、メタルグレイモン、武装召喚（リアライズ）」

『Ｓｅｔ　ｕｐ&武装召喚』

タイミングを見切って、左腕に武装召喚したトライデントアームで弾く。

「な！？」

「まぁ、多少は効いたぞ。……それがお前の全力か？」

「くっ……見てろ！」

一方通行を併用することで、残りのコインを一斉に放ってきた。

…さすがにトライデントアームだけじゃ捌ききれないな。

武装召喚を解除して、ジッパーから、ＡＲＭのバッボを出す。

……どうでもいいが人格は無いためか、顔も存在していなかった。

ケンダマ出来ねぇ。

「バッボ、Ｓｙｓｔｅｍギンタ！バージョン５、クッションゼリー！」

クッションゼリーは物理的、魔力的に関わらず衝撃を完全に無効化しちまう。

まぁ、発動中は動けないんだけどな。

クッションゼリーに当たったレールガンは、全てその衝撃を殺され、オレにダメージを与えることは無かった。

「な、な……なんなんだよお前……」

「通りすがりのチート魔導師だ！覚えておきやがれ！クトゥグァ！」

自動式魔導拳銃、クトゥグァを喚び出し…

「イア！クトゥグァ！！！」

巨大なレーザーを発射して、ちんちくりんを吹っ飛ばした。

「うわぁぁぁぁぁ！？」

「やるなら徹底的に！トゥード！！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

クロスオーバーフォームになり……

「トゥード、フルドライブ！」

『了解。ＪＳ機関ＭＡＸパワー、フルドライブスタート』

クロスオーバーフォームの全身の鎧が展開し、内部から魔力や螺旋力なんかが溢れ出てくる。

「ひぃ……ひぃぃぃぃぃ！！」

ちんちくりんは苦し紛れに電撃を放つが、クロスオーバーフォームの鎧から溢れる様々なエネルギーが電撃を消し去ってしまう。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「さて、と。終わりにするか」

ユートピアのある、十次元と十一次元の狭間にある隔絶宇宙から、銀河を二つ取り出し、手で鷲掴みにする。

それを合体させ、練り合わせながらとてつもなく膨大なエネルギーにする。

オレの持つ最高の砲撃。

【インフィニティ・ビックバン・ストーム】。

そのエネルギー量は、宇宙創世の業火【ビックバン】にも匹敵する。

ついでに言えば、オレは自身の様々な能力と組み合わせることで原作以上の威力を出せる。

それに抗う術など、このちんちくりんには無い。

「ぅオリャアァァァァァァ！！！！！」

そして、ビックバン以上のエネルギーが篭められた砲撃は、ちんちくりんの身体を塵一つ残さず消し去った。

「……っていう夢を見せてみたんだ」

『かわいそう…』

言うなリーム。オレだって少し思ってたんだから。

はい。ちんちくりんにはシン・ポルクで、オレと戦うとどうなるかをわかりやすく知ってもらいました。

「まぁ、このままじゃかわいそ過ぎるし……コール、パラレルモン」

パラレルモンを喚んで、並行世界に飛ばしてやった。

まぁ、その先の世界で達者に暮らせ。

「よし、映画行くか。ド・マリニー解除」

ちなみにリームはド・マリニーを発動すると理解した瞬間に、オレに強制ユニゾンして時間停止を免れたらしい。

ちなみに、映画を見終わった後に、何故かまたちんちくりん（さっきとは別人）がいたから、同じ手法で無力化したあと、宝石剣ゼルレッチで並行世界にさようならした。

残酷じゃない。チャンスを与えたんだから全く問題無い。

……ま、ランダムだから行った先に転生者がいても知らないけどな。

せいぜい頑張れ。後輩共。

## 第九十七話　意味の無い転生者（後書き）

はい、ということで！

（出てきた）意味の無い転生者の話でした。

ちなみに、シン・ポルクで吼太がやってたことは現実でも出来ます。
インフィニティ・ビックバン・ストーム（以後ＩＢＳ）なんて地球とかで使ったら、余波で

地球＼（＾ｏ＾）／

になりますけど。

ＩＢＳ以上の砲撃は今の所吼太はもっていません。

ついでにぶっちゃけると、実は小学生時代にもＩＢＳは使えたという。

……いや、設定的にはそうなるんですよ。

アンチスパイラルの能力は小学生時代から使用可能
←
アンチスパイラルの使用した技は全て小学生時代から使用可能
←
ＩＢＳは小学生時代から使用可能

上でも言った通り、地球＼（＾ｏ＾）／にさせないために使わなか

ったけで。

あと、今回修練の門の中でＩＢＳ使ってましたが、実際やったら修練の門ぶっ壊れます。あれでビックバンを許容出来るとは到底思えない。

……あ、ただ吼太は大バカ&うっかりさんなので、火力あるくせに弱いキャラづけになるんだろうなぁとか考えたり。

実際、他のチートと戦っても搦手で負けるビジョンしか浮かばないし。バカだし。

何より女性の尻に敷かれっぱなしだし。バカだし。

そして……最初に言っておく！↑デネブ風に

なんかキリ良さそうだから、学祭は１００話記念にもなります！

お楽しみに！

感想&贈り物ありがとうございました！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

……あれー？なんで吼太ＩＢＳの体勢に…

吼太「バカバカ言うなバカァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？

# 番外編　普通から離れた男、普通を求める男（前書き）

今回は朱神優希さんの【スティールメモリー～～盗まれた記憶～～】とのコラボになります。

# 番外編　普通から離れた男、普通を求める男

Ｓｉｄｅ　吼太

「……またか」

最近、次元を跳躍してくるやつが多いな。

まぁいいか。とりあえずは保護だな。

……んで、次元漂流者がいる辺りまで来たんだが、そこに気になる人が。

「痛た……全く、今回はなんだ？」

キョンだ！キョンがいる！

何故！？杉田ボイスだからまさか本物！？

「「「「コータ（君）！」」」」

なのは、フェイト、アリシア、プレシアさんが来る。

たまたま手が空いているのがこの四人だったらしい。

「……なのはさんとフェイトさん？」

……え？なんでキョンがなのはとフェイトのこと知ってんだ？

……オレの家にて状況確認中

「……つまり、お前はなんだかんだで事件に巻き込まれていると」

「そういうことになるな」

向こうはいきなりＳｔＳらしい。まぁ、つまりは訓練とかしてるわけで……平たく言えば…

「魔王の調きょ「コータ君？」……」

なのは……怖いよ……。

「まぁせっかくだ。ゆっくりしていけ」

Ｓｉｄｅ　キョン

「ゆっくり、か」

確かに最近、なんだかんだでバタバタしていたからな。休むのもいいかもしれない。

「あ、こんちわー」

部屋を通った、綺麗な緑の髪をポニーテールに纏めた少女が通り過ぎていった。

ポニーテール……。

『実は俺、ポニーテール萌えなんだ』

……あの頃はなんだかんだで楽しかったな。

だからこそ、ハルヒのやつを助けてやらなきゃいけない。

……そうだ。

ゆっくりなんてしているわけにはいかない。

俺は、もっと強くならなければならないんだ。

長門、朝比奈さん、古泉、そしてハルヒと一緒に騒いでいた、当たり前の日常を取り戻すために。

「吼太」

「ん？」

「オレを、強くしてくれ」

「やだ」

……は？

「いや、あの……そこでやだって言うか普通？いい感じのモノローグとか入ってたのに」

「最近、疲れることが多かったんだよ。だから、教導メニューだけは考えてやるから」

そう言うと、吼太はウィンドウを開いて、文字を入力しはじめた。

「……まぁ、それならいいか」

「お茶が入りましたよ～」

金髪の人形みたいな女の子が、ケーキと紅茶を運んでき……

……

「……ケーキ？紅茶？」

「？　イチゴショートケーキと紅茶だよ？」

おかしい……確か俺の記憶が正しければ、イチゴショートケーキは赤いイチゴが白い生クリームを塗られた、黄色っぽいスポンジに乗っているものを言うはずだ。

だが俺の目の前にあるものは、おどろおどろしい液体を質量保存の法則を無視して溢れ出てくる、虹色のイチゴらしきものが上に乗った、エメラルドグリーンの粘液が塗られた何かの左腕だ。

これがケーキだというなら、世間一般的な河童はみな、ケーキを腕として生やしていることになる。

ついでに、紅茶は金銀に輝く液体になっていた。

「あの……材料は？」

ここまでくると、むしろ材料が気になってくる。

「買ってきたスポンジケーキに、買ってきた即席生クリーム、あとこのイチゴだよ？紅茶は午後ティー」

そう言い、少女はみずみずしいイチゴを取り出す。自家栽培らしいそれは、イチゴの最高峰とも言える美味しさだった。

……有り得ない。この材料から何をどうすればこうなる？

あれか？この少女は触るだけで料理をポイズンクッキングに変えられるのか？

「……」

「……食べないの？」

少女がうるうるした目で聞いてきた。

……やるしかないか。

俺はケーキを一口大にしようとフォークを突き立て、そして…

……フォークはかけらすら残さず溶けた。

「……やっぱ無理ぃぃぃぃ！なにこの物体Ｘ！？喰ったら確実に俺が死ぬ！」

「ん？……アリス。それは後でオレが食べてやるから、キッチンに戻してこい」

「ぶ～……わかった～」

アリスと呼ばれた少女は、物体Ｘを下げていった。

「コータ、ただいま～！」

「ただいま帰りました。マスター」

そんなときにちょうど、誰かが帰ってきたらしい。

「おうお帰り。リーム、トゥード。どうだった？」

「バッチリ！タイムセールのもやしも確保出来たよ！」

「これでバーベキューに必要な食材は全て揃いました」

「じゃあトゥード、後で頼むな。リームはお客さんにお茶を頼む」

「おっけー！あ、ごゆっくり～」

白銀の髪を長門みたいな長さに揃えた少女が俺に会釈してくる。

「あ、どうも」

「はい、お茶です」

速っ！？

幸い、中には普通の緑茶が入っていた。

「そういや、キョンはバーベキュー食べてくか？まだしばらく時間かかるんだ」

「ならご馳走になろうかな」

お茶を飲みながら答える。……美味いな、この緑茶……

そして、バーベキューになったわけだけど……

何人いるんだ？この家族？

親らしい年代の人が、ぎりぎりでトゥードと呼ばれた人しかいないんだが。それでも２０代前半みたいだし。

他には、恋人なのかやたら仲睦まじい二人の少年とお姉さん。少年はやたら可愛く、お姉さんは美人だった。しかも胸が大きい。

あと、三人の緑色の髪の女性三人。見た目は似ている感じもするから三つ子なのかもしれない。三人ともかなり美人だ。

それに、中学生は計８人程。吼太、リーム、アリスに、後は名前を知らない人が５人。いずれも美少女ばかりだ。……吼太も違和感無く溶け込めてるのはどうかと思うんだが。

ついでに、ミニサイズのイャンクックもいた。ペットらしい。

「紹介するな。まず、オレのデバイスであるフォーティトゥード。通称トゥードだ」

「よろしくお願いします、キョン様」

バーベキューの串を手際よく焼いていた女性が、頭を下げる。

「んで、オレの両親」

「吉谷透だ。よろしくね」

「吉谷燈よ。家の子がお世話になってます」

……母親はともかく、父親若すぎだろ。少年だぞ見た目。

「んで、まぁ……なんていうか……」

「お父様の娘で、長女のプリムですわ」

「次女のミカだよ」

「……三女のライラ」

「四女のセンだ」

「五女のミナだ」

「六女、カンナ」

「七女のナツハだ！」

「末っ子キサラぁ～」

……は？

「え？子供？え？」

上三人、明らかに見た目が大人っぽいんだけど。

下五人も吼太と同年齢ぐらいだし。

「……事情を話すと長くなるから後でな。んで、ユニゾンデバイスのリーム」

「よろしく！」

白銀の髪の少女が言う。

「んで、アリス」

「やほー！」

金髪の少女が自己主張をする。

「そして、ちびクック」

「くぁー！」

かわいいなコイツ。

「ペット的なやつなら他にもたくさんいるんだが、まぁそれは機会があったらな。とにかく食べようぜ」

「あぁ、わかった」

「「頂きます！」」

やっぱり、頂きますは言わないとな。

「ほい」

吼太に渡された串を受け取り、口に運ぶ。

……美味い。

火の通り加減が良いのだろうか？俺はここまで美味く焼ける自身は無い。

「「お代わり！」」

吼太とミカが早速お代わりを要求していた。

にしても美味いな……。

「まだまだありますので、遠慮なさらずにどうぞ」

トゥードが勧めてくる。

その串を口に運びながら、周りを見る。

大人二人はワインを優雅に呑んでいた。絵になる、ってのはこういうものか。

吼太とミカは大食い大会でもしているのかってぐらい大量に食べている。周りにはギャラリーよろしく、吼太の娘達がやんややんやと騒いでいる。

リームは、ライラと一緒にトゥードの手伝いのようだ。やたら手際がいい。

「くぁ～。はむはむ」

ちびクックはちびクックで、焼いた肉を啄んでいる。幸せそうだな。

そして、飯が終わり……

「「「ご馳走様でした！」」」

「さて、教導メニューが出来てるぞ。目を通しといてくれ」

渡されたウィンドウを見てみる。

……

「これ……日々の訓練よりキツイんだが」

「気にすんな」

次の瞬間、俺の意識は暗転した。

その後、俺は今までの訓練を遥かに超えた密度の訓練を行うことになった。

……もうやりたくない。

死ななかったのがおかしいぐらいだ…。

帰る間際に、考えていたのはそんなことだった。

## 番外編　普通から離れた男、普通を求める男（後書き）

はい、ということでキョンの精神がフルボッコな話でした。

さて、とりあえずコラボは一段落になります。

ここから数話を挟んだ後、記念回をやります。

予定では、記念回は複数部に渡って行うつもりなので、それなりに長くなるとは思いますが、よろしくお願いします。

感想&贈り物ありがとうございました！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

# 第九十八話　試験だぜ！（前書き）

吼太達が試験を受けます。

# 第九十八話　試験だぜ！

Ｓｉｄｅ　リンディ

「嘱託魔導師試験を受けたい？」

「「「「「「「はい（うむ）」」」」」」」

吼太さん、リームさん、アリサさん、すずかさん、なずなさん、フィニアさん、羽旺さんが開口一番に言ったのがそれだった。

「どうしたの突然？」

私達としてもそれは嬉しいけど……

なにせ、彼等はみんな高ランク魔導師。管理局に入ってくれれば、次元世界の平和がより確かなものになるだろう。

「理由ですか？まぁ……何と言うか……今後のためですかね？」

将来のことを言っているのかしら？まぁ、いいことね吼太さん。

「そこにコータがいるからです」

「「「「「以下同文です」」」」」

……あなたたちのその姿勢は尊敬に値するわ…

「わかりました。では、早速始めましょう」

Ｓｉｄｅ　吼太

なるべく管理局に入りやすくしとかないとな。

ちなみにオレは、管理局を中から完全に変えるなんて大層な真似をする気はあまり無い。ただ、ＳｔＳの根底にある、【ジェイル・スカリエッティ事件】になるべく関わるなら、管理局に入ったほうが都合がいいことに気づいただけだ。

「にしてもこっちで待ってろとか言われたけど……」

誰が試験官になるんだ？よくあるのはまっくろくろすけが試験官とかだけど…

「待たせたな」

考え事をしていたら、試験官が来たらしい。そこには……

「今回の嘱託魔導師試験監督官となる、ゼスト・グランガイツだ。よろしく頼む」

……ｍｊｄ？

いや、ゼストさんてオイ！？

「は、はい。よろしくお願いします」

予想外にもほどがあるわァァァァ！

まさかの展開って、あるもんなんだね…。

「まずは筆記試験からのはずなのだが……お前は特別に免除されているそうだ」

まぁ、答えを出す者あるから筆記試験は意味ないもんなぁ。

「なので、次の試験が繰り上がることになる。二次試験は詠唱試験になるが……どうする？必要ならば数時間の猶予を取れるが…」

「いえ、大丈夫です。やりましょう」

にしても詠唱試験ねぇ……アレで大丈夫かな？

呼吸を落ち着け、魔力を練り始める。

魔術……中でも、【外道の魔術】と呼ばれる類の魔術は、感情を理性で制御し、高ぶる魂を魔力と融合させ、精練、精製するもの。

荒れ狂う闘争本能を意思の力で従わせられなければ、その魂はたちまち闇に食われてしまうだろう。

それは、前のトゥードが墜ちた事件のときに嫌というほど分かった。

心を静める。胸にするのは熱い心。そして冷静な精神。

「フングルイ・ムグルウナフ・クトゥグァ・フォマルハウト・ンガァ・グァ・ナフルタグン…」

讃える、讃える、讃える。

異界の神を、旧支配者と呼ばれる存在を。

「イア！クトゥグァ！！！」

オレの足元に魔法陣が展開し、中から凶暴を秘めた獣が顕現する。

核にも匹敵する熱量を持つ旧支配者、クトゥグァだ。

「っと……これでいいですか？」

「あ、あぁ……」

驚いてるな、ゼストさん。

まぁ、旧支配者なんて普通はバケモノそのもの。

今でこそクトゥグァはこれしか力を発揮出来ていないが、フォーマルハウト星から解放された真の姿はこんなもんじゃ済まない。

恐らくはそんな感じのことを直感的に悟っているんだろう。

「よし、クトゥグァ。もういいぞ」

このまま出しといても意味が無いため、クトゥグァを送還する。

「ゼストさん、次の試験お願いします」

「……ハッ、あぁ。わかった。次はランク測定を含めた模擬戦だ。ただ勝てばいいというわけではないから、注意してくれ」

「はい」

流石と言うべきか、すぐに平静を取り戻して自身の役割を果たすゼストさん。

「……じゃあ、よろしくお願いします」

「あぁ」

そして、互いに構える。

「ガングニール、セットアップ！」

「変身ッ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ!』

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

ゼストさんはアニメでのあの格好になり、オレはクロスオーバーフォームになる。

「ガードスキル、ハンドソニック！」

ハンドソニックを両手に展開し、ゼストさんに斬り掛かる。

「フン！」

ゼストさんはハンドソニックを槍で受け止める。

「見たところ近接主体か？」

「いいえ。……オールラウンダーですよ！」

ハンドソニックで槍を弾くことで、時間を稼ぎ距離をとる吼太。

さらに両手に螺旋力を漲らせ、二丁の銃【トルネードシールドガン】を創り出し、乱射する。

「効かん！」

ゼストさんは弾丸を全て当たる前に斬り捨ててしまう。

が、その瞬間にゼストさんは回避行動を取った。

ゼストさんがさっきまでいた位置を、水が駆けていった。

「……水の刃か」

「あぁ。穿水刃って技さ」

変幻自在の刀から逃れる術は無い。例え刀自体を斬られたとしても、

穿水刃は高圧縮された水の塊でしかなく、すぐに直る。

「ならばこちらはこう行かせてもらう」

ゼストさんは、刃に炎を燈らせた。

斬るだけでダメなら蒸発させる、か。

「なら蒸発しきれない量の水だ！スオウ・ギアクル！！！」

水の龍を呼び出し、それを穿水刃に融合させる。

「ハァァァッ！」

ゼストさんの槍と穿水刃がぶつかり合う。

その瞬間、辺りに膨大な水蒸気が溢れた。

「ぐ、視界が……」

ゼストさんは水蒸気のせいで視界が無くなったらしい。

その隙を逃すほど、オレは甘くない。

超電導ライフルを取り出し、狙撃する。

ゴム弾により頭部を撃ち抜かれたゼストさんは、その場に倒れた。

そして、後日。

今日は結果発表の日だ。

以前のメンバーに加え、なのは、フェイト、はやてが付き添いとして来ている。

「はい皆さん。これから合否発表をするわけですが！」

リンディさんが言ってる裏で、フィニアがフェイトに「ごうひはっぴょうってなんだ？」とか聞いてたのはスルーしておこう。

「……ですが？」

なのはがそこに食いつく。

「そこに関しては、とりあえず置いといて。皆さん合格です！」

途端に、わっと歓声があがる。

「はいはい皆さん。まだ話は終わってませんよ」

リンディさんが手を叩きながら言う。

「次に言いたいことにはなのはさんやフェイトさん、はやてさんも関わってくるので、しっかり聞いてね？」

「私たちも？」

フェイトが首を傾げた。

「まず、これを見てちょうだい」

と言い、リンディさんはいくつかのデータを映し出す。

「これは……」

「私達のデータですか？」

なずなとはやてがいち早く反応する。

「そうなんだけど……注目してほしいのはここ」

そう言い、ある場所をクローズアップする。

「……魔力量？それに総合ランク？」

「そう」

アリサが言ったことに反応し、リンディが答えを返す。

「ここにはまぁ、魔力量や魔導師としての総合的なランクがアルファベットで示されるはずなんだけど……」

見ると、リーム、アリサ、すずか以外の魔力量の欄はアルファベットの代わりに【？】が、総合ランクに至ってはフェイトを含めた全員に【？】が付いていた。

「これってどういうことなんですか？」

すずかがリンディに聞く。

「ＳＳＳ＋オーバー……分かりやすく言えば、既存の機器では測定不可能な程ということよ」

……は？

「あれ？確かなのはちゃんは以前Ｓ＋じゃなかったっけ？」

「魔力量は身体の成長に合わせて伸びるものなのよ」

リームの質問にリンディさんが答える。

「……どうするんですか？」

「まぁ、このままにするわけにもいかないから、管理局は新たにクラスを増設することにしたわ。その名も【ＥＸ】」

「ＥＸ……ふむ」

羽旺はその響きが気に入ったのか、ご満悦の様子だ。

「まぁ、ＳＳＳ＋ランクより上を入れるための暫定的なものなんだけどね」

リンディさんが片目をつむりながら言った。

「……で、そのＥＸランクを加味すると、どうなるんですか？」

「えっと……こうなるわ」

リンディさんが画面を更新する。

高町なのは
　魔力量：ＥＸ－
　総合ランク　：ＥＸ

高町なずな
　魔力量：ＥＸ－
　総合ランク　：ＥＸ

フェイト・テスタロッサ
　魔力量：ＥＸ－
　総合ランク　：ＥＸ

フィニア・テスタロッサ
　魔力量：ＥＸ－
　総合ランク　：ＥＸ

八神はやて
　魔力量：ＥＸ
　総合ランク　：ＥＸ

八神羽旺

魔力量：ＥＸ
総合ランク　：ＥＸ

アリサ・バニングス
魔力量：０
総合ランク：ＥＸ－

月村すずか
魔力量：０
総合ランク：ＥＸ－

リーム
魔力量：不明（リミッターが存在。現在はＳＳＳ）
総合ランク：ＥＸ＋

吉谷吼太
魔力量：∞
総合ランク：測定不能（ＥＸ＋オーバー）

……

とりあえず、チートの強さは機械じゃ測れないようだ。

つーかリーム強いな。

この後、ヴォルケンリッターのみんなやフラウリーナ三姉妹も管理局入りすることになったりした。

まぁ、それは追い追い話すとしよう。

とにかく、こうしてオレは管理局に入ることになった。

## 第九十八話　試験だぜ！（後書き）

はい、というわけで吼太達が管理局に参加した話でした。

吼太達のステータスについては、ＳｔＳ開始直前に一つの話として出します。

次回は……何なんだろ。

とりあえず学祭近いです！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## 第九十九話　三色の華の激突！（前書き）

ありゃ？早く書けちゃったよ……。

今回で、ようやくミカの希少技能が出ます！

# 第九十九話　三色の華の激突！

Ｓｉｄｅ　吼太

「そーいえばさー」

きっかけは、アリスの一言だった。

「フラウリーナ三姉妹って、誰が一番強いの？」

……

「当然私ですわ！」「俺だよ！」「……多分私」

……

途端にバチバチと火花が散り出す。

「……アリス……」

「？」

コイツ……無自覚のトラブルメイカーか……？

そんなわけで……。

フラウリーナ三姉妹が決闘することになった。

Ｓｉｄｅ　三人称

「では用意は良いな？」

審判役のセンが、三人に合意を求める。

場所はユートピア。恒例の模擬戦場所だ。

そこで、フラウリーナ三姉妹は等間隔の位置に立っていた。

ちなみに吼太達はサーチャーで観戦している。

「では……試合、開始！」

センが開始の合図と共に転移する。

最初に動いたのはミカだった。

「トロイデルバースト！」

ミカが拳を地面にたたき付けると、そこから螺旋力が地面を破壊する。

それにより、プリムとライラの体勢が僅かに崩れる。

その瞬間に、ミカは【近づかずに】二人を同時に殴り飛ばした。

当然、腕が伸びたわけではない。

「痛た……やはり面倒ですわね……貴女の能力」

「へっへ……ありがと」

ミカの能力は二つある。

一つは【範囲操作】。

条件や限界等を無視した状態で、あらゆる【範囲】を自在に変更出来る。

先程は、【拳の当たる範囲】を極大に広げたことで、プリムとライラに攻撃を当てたのだ。

ちなみに、あくまで【拳の当たる範囲】なので、拳が巨大化したりはしていない。

「……厄介」

ミカはそれなりの力を篭めて拳を放ったため、本来なら頑丈なフラウリーナ三姉妹だろうと昏倒するような威力だったが、ライラもプリムも咄嗟にシールドを割り込ませたために昏倒せずにすんでいる。

「……ライトニングバインド」

隙を突き、ライラがライトニングバインドをミカとプリムに掛けた。

「甘い！」

だが、ミカは脚が縛られる前に【距離】という範囲を変えて近づいた後、ライラを蹴り飛ばす。

時間に囚われない移動を悟る術など、まずありはしない。ダメージを最低限に抑えるためにバックステップで回避するライラ。

だが避けきれずに、ミカの足先が掠った。

途端に、ミカとプリムに掛けられていたライトニングバインド、そして【侵食支配】が解除される。

「……ほんと厄介」

ミカのもう一つの能力、【障害付加】。

直接攻撃を当てられた場合に限り、相手の思考や意思といったものに僅かな時間だけ【ノイズ】を流せるというものだ。

あまりたいしたことが無いように感じるかもしれないが、これが厄介なのである。

思考や意思にノイズが入ると言うことは、考えることも感じることも、感覚の全てが機能しなくなるということである。

ライラの場合、【侵食支配を機能させる】という意思にノイズが走ったため、侵食支配が停止してしまったのだ。

「ガーネットブラスター！」

そんなとき、突如として魔力砲撃がミカとライラに襲い掛かった。

放ったのは、ミカと同じようにライトニングバインドから解放されたプリムだ。

「おわっ!?危な!?」

間一髪回避するミカ。

「油断はいけませんわよミカ！エメラルドシューター！」

「くっ！」

エメラルドシューターを回避していくミカ。

距離を縮めて攻撃をしようにも、一カ所に集まってしまったらライラのシールドに板挟みにされてしまう。

プリムはプリムで、ミカに攻撃を当てることは出来ず、ライラのシールドを突き破るような砲撃は無いため、ライラにも手出しは出来ない。

ライラにしても、距離が離れている二人に不意打ちではない状態でバインドを当てるのは至難の技。加えて、シールドによる攻撃はおおざっぱになりやすいため、素早く動ける二人に当たるかは微妙なところ。

希少技能を使うにしても、【権利剥奪】をミカに使えばミカを無力化出来るがライラが野放し。ライラに使えば逆に侵食されてしまう。

【侵食支配】の場合、ミカには使用しても無効化される可能性が高い。プリムに使えば、プリムは無力化出来るかもしれないが、ミカにやられる可能性が高い。

【障害付加】で侵食支配は無効化出来るが、権利剥奪には抗えないため、ライラは無力化出来てもプリム相手には不利にしかならない。

互いが互いに動けない、まさに三竦みの状態になっているのだ。

後は、純粋な戦闘技術とセンスが勝敗を決める。

その事を察した三人は、再び戦い始めた。

砲撃が、ドリルが、シールドが地面を刈り、穿ち、刻む。

その戦いの結果……

「「「俺達の住家を壊すなぁぁぁぁ！！！」」」

……近くに住んでいた召喚獣達に怒られた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「で、怒られてからはやる気になれなかったと」

「アハハ……」

「はぁ……」

「……うん」

苦笑いをするミカ、ため息をつくプリム、素直に答えたライラ。

実力は拮抗しているが、その反応は三者三様だな。

「まぁ、ユートピアは直しておく」

結局、誰が強いかは決まらなかった。

まぁ、それでこそのフラウリーナ三姉妹か。

## 第九十九話　三色の華の激突！（後書き）

はい、というわけでフラウリーナ三姉妹の衝突のお話でした。

普段は仲いいですよ？今回が特別なだけです。

作中でも話しましたが、フラウリーナ三姉妹の関係は三竦みとなっています。

プリムはミカに強く、

ミカはライラに強く、

ライラはプリムに強い、

といった具合になります。

なので、厳密に誰が強いとかはありません。横並びです。

ちなみに、三人にはさらなる【奥の手】がありますが、それは四部までお待ちください。

フラウリーナ三姉妹の設定説明はＳｔＳ開始前に、吼太とかの設定と一緒に出します！

感想＆贈り物ありがとうございました！

次回は……

来ますよ?アレが来ちゃいますよ?

ではではこの辺で!次回もお楽しみに!

# １５０万アクセス突破&第１００話記念大コラボ祭その一！　コスプレ喫茶は大盛況

お待たせ致しました！

１００万アクセス突破記念小説始まります！

ご覧のとおり、複数回に渡ってお送りしていきたいと思います！

実はユニーク９００００人とか、総合評価１０００越えとか、お気に入り登録数４５０件突破とかいろいろ兼ねてます。

ではどうぞお楽しみください！

# １５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その一！　コスプレ喫茶は大盛況

Ｓｉｄｅ　三人称

「さて、皆！準備はいいな！？」

クラス代表がクラスの皆に聞く。

「「「おぉーッッ！！！」」」

それに、全力で応えるクラスのみんな。

そう、今日は……

聖祥大学及び付属学校の複合学園祭、【聖祥祭】開催日だ。



「……で、だ」

クラスの中で唯一声をあげなかった吼太が言う。

「どうしたの？」

「具合が悪いの？」

なのはとアリシアが吼太に聞いてきた。

「……違う」

「だったら何なんだー？」

フィニアが口に出して言っているが、思いは皆同じらしい。

どうやら、本当に分からないようだ。

「じゃあ聞くけどな……このクラスはコスプレ喫茶だよなぁ？」

「そうやね」

「なら……なんでオレの服がこれなんだよ！？」

吼太が着ている服は、某借金執事が着ていたような、コスプレ用メイド服＋ネコミミ＋尻尾といった服だった。

「……似合うからかな？」

フェイトが代表して言う。

「……ちくしょう」

「みんなー！今回の設備は非常に充実しているわけだ」

クラス代表が吼太を無視して話しはじめる。

ちなみに、今回吼太のクラスは幾つかのクラスと合同で、大学の学

食を借りて喫茶店を開くことになっている。

「なので、何人か本職の人達や、他にも何人も応援に来てもらってる！ここで紹介するぞー！」

ワッと歓声があがった。

唯一の例外は今だｏｒｚの状態の吼太のみだ。

「まず、喫茶翠屋の高町一家！」

士郎、桃子、恭也、美由希が軽く頭を下げる。

「次に、衣装協力をしてくれた吉谷燈さん！」

「よろしくー♪」

この人はいつでもハイテンションである。

「えーっと……謎の女性トゥードさん！」

「よろしくお願いいたします」

トゥードが頭を下げる。

「それから……多国籍料理店【クス○シエ】の店長、白石知世子さん！」

「よろしくねー♪」

どこぞのパンツに明日を見出だした仮面ライダーの当面の就職先の人が手を挙げる。
様々な国の民族衣装を提供してもらったらしい。報酬は吶太を一週間働かせるだとか。

「カレー屋【Ｍａｈａ○番】のマハ・ジャラマさん！」

無言で頭を下げるインド人。

「喫茶ミルク○ィッパーの野上愛理さん！」

「いつも良ちゃんがお世話になっています～」

のんびりした話し方が特徴的な女性が頭を下げる。

「ファントム○イヴ社及び、その関係から、セバスチャン・ミカエリスさん、アグニさん！」

「「よろしくお願いします」」

美形の男と、インド人風の男性が頭を下げる。

「えーっと……麦わら○賊団のコック、サンジさん！」

「トゥードちゅわ～ん！」

「お願いしますね。サンジさん」

眉毛がくるっとカールを描いた男性が、トゥードに猛アピールをする。

「三〇院グループから、マリアさん！」

「お願いしますね」

綺麗なメイド服の女性が、頭を下げる。

「あと、個人的に協力を申し出てくれた人が何人か。いずれも、お料理上手な人達です！右から順に、暁優さん、朝倉貴哉さん、津川優星さん、如月刹那さん、ラストさん、魔理亜さん、アリストテレスさん、バイロクスさん、不破鈴音さん、神谷光さん、縁授蒼真さん、キョンさん、朝比奈みくるさん、古泉一樹さん、、花咲睡蓮さん、神藤雫さん、ラクトさん、メアリスティングさん、月臣輝刃さんです！」

「ハァァァァ！？」

吼太がガバッと起き上がり、信じられないものを見ているかのように眺める。

「何人かはまだ会ったこと無いけど…いや、なんで？」

「コータ、お前の知り合いなのか？」

「あぁ、まぁ……」

羽旺の言葉に、曖昧ながらも答える吼太。

「……とりあえず、何人かと話がしたいんだけど……」

「あ、そうだ。吼太にこれ渡しといてって言われたんだった」

優が一枚の手紙を取り出す。

吼太はそれを受け取り、読み出した。

――　そこまで人数が集まったのも私の責任だ。だが私は謝らない！ｂｙなっぺ　Ｐ．Ｓ、他にも異世界メンバーいるからね～

――

……

「あんの……クソ作者がァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！」

どうでもいいが、知世子～マリアまでは、トゥードのツテだったりする。

関係は、知世子、マハ・ジャラマはバイト先、愛理、マリアは友達、セバスチャン、アグニは執事的な盟友、サンジは一方的な求愛である。

「「「いらっしゃいませ～」」」

「あ、はい……／／／／／／」

入口で、なのは、アリサ、すずかが客を出迎える。

その時、入ってきた男性は「ここは天国か…？」とか思ったとか。

「注文を聞こう」

席に案内された客にメアがオーダーを取る。

「あ、じゃあこの……カリーパンを…」

「了解した」

メアが厨房にオーダーを送る。

厨房に送られたオーダーを確認したメンバーが、その瞬間に動き出した。

アグニとマハ・ジャラマが最高のカリーを作り、他のメンバーがそのカリーを使い、カリーパンにする。

そして、そのカリーパンを何故か魔女っ娘ルックの光が持って行く。

「えと……カリーパンです」

カリーパンの乗った皿をテーブルに置く。
その瞬間、客が光の手を掴み……
「結婚してください！」
「えぇぇぇぇぇ！！！？」

「こんにちは～♪」
「来てやったぜ～」
「あんたらは帰れチート夫婦」
吼太が即座に言う。
「「……コータ、ツンデレＧＪ！」」
「ツンデレじゃねぇ！……まぁしゃあない。そこの席だ。メニューはこれな」
なんだかんだ言いながらも、結局案内する吼太。
「で、どれにすんだ？」
「そうね～……じゃあサンドイッチ」

「あとコーヒー頼むぞ。二つな」

「畏まりましたっと」

そして……

「お、お待たせしましたぁ～」

みくるが夫婦の席に品物持ってきた。

だが、馴れない環境だったためか躓いてしまい……

「ふぇぇ！」

二つのコーヒーと、綺麗な形のサンドイッチが宙を舞った。

「迷惑をかけてしまい、申し訳ありません」

が、そのコーヒーとサンドイッチは瞬時に回収され、元々の形と同じように盛り付けされた状態で夫婦の前に置かれた。

その神業を成し遂げたのは、いわずもがなトゥードだった。

「さっすがトゥード！私の嫁ね！」

「はい。嫁ではありませんが」

「すごいメンバーだよなぁ」

貴哉が呟く。

「そうだな…」

たまたま近くにいた蒼真も同意する。

「異世界にはこんなにたくさんのすごい人がいるんだね」

同じように近くにいた優星も同意の姿勢だ。

……

「おいお前らー。ちゃんと働けー」

キョンが三人に声をかける。

「「「働けるか！そもそもこんな格好させられるなんて聞いてなかったよ！！！」」」

どんな格好か？貴哉はセーラー服、蒼真は体操服＋ブルマ、優星はシスターです。

「こんにちは～」

某プラントの歌姫に似た女性が来店してくる。

見た目は美しい女性でしかないが、その正体は【風】を司る精霊。

名をシルフという。

見目麗しい女性が来たことにより、店内が僅かにざわつくが、それも一瞬。

すぐに彼女は席に座り、そして……

近くを通り過ぎようとしていたアリシアを呼んだ。

「はい、なんでしょうか？」

「可愛いので撫でていいですか？」

「へ？」

それは【確認】ではなく、【宣言】だった。

「わわっ！？」

即座にアリシアを抱き抱えるシルフ。

ちなみにアリシアは巫女服だ。

「可愛いですわ～♪」

「は～な～し～て～く～だ～さ～い～」

「嫌ですわ～♪」

「お待たせしました」

なずなが席に料理を運び、一旦カウンターに戻る。

「お疲れ様」

「はい、お茶」

「あ、花咲さん、神藤さん」

なずなが応答したのは、双子のようによく似た二人の少女。

「やだなー、睡蓮でいいよ」

「じゃあ私も雫って呼んで」

「分かりました。睡蓮さん、雫さん」

「オーダー入ったぞー」

フィニアが睡蓮と雫にオーダーの紙を渡しに来た。

見れば、他にも何枚かオーダーが入っていた。

「いっけない！じゃ、私達戻るね！」

「なずなちゃんもよろしくね！」

「はい」

「ラクト、これは２１番テーブルに、こっちは１４番テーブルに頼むぞ」

「分かりました」

ラクトがバイロクスから料理の乗った盆を受け取る。

「すごいですねは…客足が途絶えません」

鈴音が感心したように言う。恐らくここまで規模が大きいのは初めてなのだろう。

「はい。僕の学校でも学園祭はありましたが、さすがにここまでは

ありませんでしたよ。やはり中学校から大学までが合同でやっているからなんでしょうね」

古泉もいつものスマイルこそ崩さないが、やはり楽しいらしく、雰囲気にそれが顕れていた。

「その分僕たちは大変だけどね」

料理を置いて戻ってきたラクトが話に加わる。

まだ昼時で無いにも関わらず、席は八割方埋まっており、フロア係は皆せわしなく動いている。

「では僕たちも戻りましょう」

「そうだね」

「はい、頑張ります！」

古泉の問い掛けに、ラクトは同意し、鈴音は元気よく答えた。

「中々やるな」

「恐縮です」

輝刃がアリストテレスを褒める。

輝刃はひとまず手が空いたので、一度カウンターに戻って来ていたのだが、その時に丁度見事な手際で料理を仕上げて行くアリストテレスの姿を見たのだ。

「料理はやるのか？」

「いえ、（普段はデバイスなので）あまり」

「しかしそれならこの手際の秘密は？」

「強いて言えば……手伝い（を見ている）ですかね？よく分かりません」

「ほう、（一流シェフの）手伝いか。なら納得だな」

「そうですか」

「すいません！フロアお願いします！」

フェイトがカウンターのほうに声をかけた。

「……少しフロアが忙しくなってきたみたいなので、行ってきます」

「あぁ、俺は厨房に回るぞ。頑張れよ」

「はい」

「これで注文は全部ですか？必要なことがあれば呼んでください」

羽旺が客の注文をとり終える。

普段偉ぶった態度を取っているが、こういう場ではきちんと接客が出来ているのはやはり元がはやてなのだからだろうか。

「お疲れ様です。羽旺さん」

「うむ。うぬもだラストよ」

ちなみに羽旺はどこから仕入れてきたのか、騎士のような格好であり、ラストは和服姿だ。

「刹那君、これとか着てみたりせえへん？」

「しないって！」

刹那ははやてに女の服を薦められているらしく、仕事をしながら器用にはやての魔の手から逃れている。

対するはやても、仕事をしながら刹那を着替えさせようとしている。

「少年、逃げるなよ」

「あんたは黙れ！」

魔理亜は刹那に冷たくあしらわれたというのに、何故か恍惚とした顔になる。

「ちょっと試すだけやから！そんで写真撮って売り捌いて一儲けするだけやから！」

「なら私は百枚…いや、千枚買おう」

「あんたら自重しろぉぉぉ！！！」

「……止めましょうか」

「……家の姉君が申し訳ない…」

狸、金の亡者になる。「誰が狸や！」

そして時は経ち……（キンクリともいう）

「本日の営業終了！みんなお疲れ！」

クラス代表が言うと、あちこちから歓声があがった。

「終わった～……」

優は終始揉みくちゃにされていたらしく、着せられた天使ルックな服があちこちはだけていた。

「お疲れ様優お兄ちゃん♪」

「え？あれ？詩音ちゃん！？なんで……」

「さ、向こう行こう？」

そう言いながら詩音が奥へと消えていった。

「……いつの間に詩音が？」

何故かそう呟いたのは外ならぬ吼太だったりする。

以下台本タイム

なのは「とりあえずお疲れ様みんな」

蒼真「なんで俺が女物のコスプレを……」

優星「うん……僕もだよ……」

バイロクス「似合うからであろう」

シルフ「皆さん可愛いのだからいいではありませんか♪」

すずか「ですよねー♪」

キョン「しかし大盛況だったな」

睡蓮「私達も大変だったよ」

はやて「差し入れ作ってきたで～」

羽旺「感謝しろ塵芥共！」

輝刃「塵芥は感心しないな……教育か？」

貴哉「そこ、喧嘩しない」

雫「にしても異世界のメンバーってたくさんいるんだね」

フィニア「しかも強そうだ！」

アリストテレス「私はそれほどでもありませんよ？」

百合姫「最強は私の鈴！」

鈴「この中ならそうかもな」

アリシア「そんなに強いんだ……」

ラクト「あれ？そういえばメアはどうしたんだろ？」

古泉「そういえばトゥードさんもいませんね」

ラスト「さっき外に出ていったような……」

鈴音「見に行ってみましょう」

アリサ「あっちみたいね」

メア「そこをどけトゥード！私は優と詩音君に話があるんだ！」

トゥード「マスター詩音の命により、ここを通すわけにはいきません」

メア「なら力付くだ！」

みくる「ふぇぇぇぇ～……」

魔理亜「これが修羅場か」

光「……やたら激しい修羅場だね」

なずな「レベルの高さが伺えます」

詩音「やったー！」

吼太「何してたんだ？」

詩音「んっとね、優お兄ちゃんに手作りアイス食べてもらってたんだ～♪」

優「すっごく美味しかったよ詩音ちゃん。詩音ちゃんは料理が上手なんだね」

詩音「えへへ～♪」

優「他のみんなには何かあるの？」

詩音「もちろん！いろいろ作ったんだよ～」

吼太「……ん？外が騒がしいな」

優「みんな行っちゃってるね」

詩音「詩音達も行こう！」

優「うん、いいよ」

詩音「じゃあれっつご～♪」

こうして聖祥祭一日目は無事に終了した。

ちなみにメアＶＳトゥードは詩音と優の介入によって引き分けとなったのは言うまでもない。

なっぺ「後書き座談会、限定復活～！」

リーム「いえ～！」

ミカ「限定復活？」

なっぺ「まだ更新安定しないから一応限定復活ってこと。ただ、こんな時ぐらいは復活しなきゃね～。みんな楽しみにしてたかな～？」

吼太「黙れ、キモい」

なっぺ「そんなお前には着物を着せちゃる」

吼太「なぁっ！？／／／／／／」

なっぺ「当然はだける仕様なんだＺＥ！」

吼太「は、恥ずかしい…見ないで…／／／／／／」

プリム「！？！？！？」↑鼻から愛のナイアガラ

アリス「♪♪♪」↑鼻から愛のナイアガラ

リーム「！！！！！」↑鼻から愛のナイアガラ

ベス「自重しましょうよ」

なっぺ「無理でしょ。だって……」

カンナ「綺麗」

キサラ「だねー。犯したくなるよねー」

なっぺ「反応が薄いあの二人でアレだぞ？」

ベス「聞いた私が馬鹿でした」

トゥード「Ａｒｉｓｈｉａ様、雨季様、七つ夜＆夜つ七様、天照大神様、月光閃火様、高町ゆうき様、朱神優希様、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔ様、緋水様、ＶＡＺＵ様、バルディッシュ様、香崎真琴様、感想ありがとうございました」

セン「月光閃火殿からはＫＯＦマキシマムインパクトシリーズのキャラ全員のコスチューム全種、緋水殿からは父上の写真が入ったペンダントに詩音の写真が入ったペンダント（両者共に服が乱れて涙目＋上目遣い）を、ＶＡＺＵ殿からは翔殿が作ったチョコレートケーキと、ＶＡＺＵ殿が作ったポイズンケーキを頂いたぞ。感謝する」

ミナ「お、おおお親父殿！？つ、次はこれを……」

なっぺ「こんな豪勢なドレスがあったんだなー」

吼太「いろいろおかしいだろ！／／／／／／／」↑着せられた

リーム「性欲を持て余す！」

吼太「持て余すな！」

ナツハ「何故だ……ドレス姿の父君を見ていると、何故か服をビリビリに破り、犯して犯して犯して犯しぬいて屈服させたくなってくる……」

ライラ「……それが正常……」

吼太「どこがだ！」

アリス「とりあえずえっちしよ～♪」

吼太「するかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## １５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その二！　いろいろ回ろう！

さすがにこれ以上長引かせると、他ならぬ自分がヤヴァイので、一旦投稿。

……次回までには終わらせたいなぁ。

あ、その三はまた次回かかります。

ついでに、今回は話の途中なんで後書きは無しです。

Ｓｉｄｅ　吼太

波瀾万丈……とまではいかないが、賑やかだった学園祭。

今日はその二日目だ。

「こーちゃん、早く早くぅ！」

詩音がオレを急かす。

「……つーかなんだよこーちゃんって」

「コータだからこーちゃんだよ♪」

……まぁいいか。自分だし。

「さて、今日は一日自由だな」

昨日は一日中喫茶店に付きっきりだったのだが、今日はイベントで食堂を使うらしく、喫茶店は休みになった。

ちなみに売り上げが半端なかったため、赤字どころか大黒字だったりする。

せっかくだし、楽しむかな。

「お父様と一緒に学園祭……最高ですわぁ……」

「美味いもんたくさんあるといいなぁ～！」

「……楽しみ……」

「面白いの、何があるかな？」

「お前達、しっかり自重するんだぞ」

「わかっている、姉様」

「努力はする。リスカぐらいに留めておく」

「我の高貴なオーラを自重することなど出来ぬ！」

「だるい～」

上から順に、プリム、ミカ、ライラ、アリス、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、キサラだ。

……

「カンナ、そんなことしたら強制送還だぞ」

「ん」

しゅたっ、と手を挙げて反応を返すカンナ。

……心配だなぁ。

「よし、行くか」

とりあえずは、何人かがオレ達のグループから離れ、今はオレ、リーム、プリム、アリス、カンナ、ナツハが一緒だ。

「ん？吼太か？」

この声は……

「要か？」

未来から来たチート、一条要。

この前オレが戦って、敗北してしまった程の実力者だ。

……こう言うとオレが強く感じるが、オレは別にそこまで強くないからな？

「で、どうしたんだ？」

「暇だからな。アリストテレスも来てたみたいだし、せっかくだから来てみた」

なんだ、ストレスによる胃痛を恐れて逃げてきたんじゃないのか。

つまらねぇなぁ。

「……すごく失礼なこと考えなかったか？」

「気のせいだろ」

「お父様！次はあちらに行きましょう！」

「あぁ。んじゃあな」

「あぁ」

要と別れた後、見回っていたら食堂の前で興味深いイベントの参加を集ってた。

【ガチンコ料理対決！～明日の厨房王は君だ！～】

……名前には突っ込まないでおこう。

「リーム、出てみたらどうだ？」

「僕はいいよ～。こういうイベントには興味ないし」

おしいな……。出たらかなりの確率で優勝出来ただろうに……。

「私は「アリスは出るな」……えー！？」

アリスの料理は一般に出したらその妖気（決して語弊はない）だけで大量に被害が出るって。

「……もしかして、自分以外の人に私の料理を食べてほしくないとか……？」

「……まぁ、そうなるかな」

否定はしない。耐性のあるオレならまだギリギリ耐えられるし。耐性なけりゃ死ぬだろうが。

「そっか……エヘヘ……／／／／／」

アリスは何故か嬉しげだ。

「エントリーを締め切りまーす！」

「あ、終わった」

どうやら、さっきエントリーした人で最後だったらしい。

「せっかくだし、観戦してみるか」

「「「「「賛成！」」」」」

……賛成してくれたのはいいけど、すぐオレに抱き着くのは止めてほしい……。

首に決まって苦し……。

Ｓｉｄｅ　三人称

「さぁ、予選バトルロイヤル、気になるお題は……」

司会者がくじを引く。

どうやら、くじで作る料理を決めるらしい。

「……出ました！オムレツです！」

その声を聞き、ある者は安堵の表情を浮かべ、ある者は顔を引き締める。

作り方は実に簡単だが、それ故味に差が出にくい。

料理人の資質を試される料理とも言えるだろう。

「ではクッキングスタート！」

……

「では予選を突破した５人を発表致します！まず……暁優選手！」

「……残っちゃった」

当の本人は意外そうな顔をしている。

「次に……八神はやて選手！」

「ふふん」

こちらは得意げだ。

「次に、不破飛翔選手！」

「オムレツは基本だしな」

こちらは至極当たり前そうな顔をしている。

「次に……御神百合姫選手！」

「やっほー！鈴ー！！」

やたらテンションが高いが、これはいつものことであろう。

「最後に……西門や「ぐふっ……」……へ？」

五人目に呼ばれそうになったらしい人が何故かその場に倒れる。

「……えー、西門大和選手は棄権のようなので、繰り上がりで嵐山圭い「ぐぎゃ」……」

次に呼ばれそうになった人もまた、倒れてしまう。

「……繰り上がりになりまして、吉谷詩音選手です」

「……ひぇ？詩音が？」

「おめでとうございます、マスター」

横に控えていたトゥードが詩音に祝辞を述べる。

この時、何人かは「あぁ……」みたいな感じで、この事件の真相を理解していた。

まぁ、つまりはトゥードの仕業である。

「……さて！一波乱ありましたが、本戦のほうを始めたいと思います！」

なんだかんだでたくましい司会者。

やはり、海鳴には猛者が集いやすいらしい。

「お題は……【ロールキャベツ】です！」

……

「はい、これにて料理が出揃いました！」

「五人とも、実に美味しそうですね。では早速……」

最近、料理研究に嵌まっているらしい、プレシアさんを始めとした審査員の三人が五人のロールキャベツを一口ずつ食べていく。

合間合間に水を飲んだりして、じっくり味わい、そして……。

「……決まりました。勝者は……」

Ｓｉｄｅ　吼太

結論から言おう。

優勝は飛翔だった。

百合姫もいいところまでは行ってたみたいだが、飛翔の料理を超えるものではなかったらしい。プレシアさん達

はやては意外にも最下位。ｏｒｚで落ち込んでた。（実は吼太に目がいってしまい、作業をいくつか失敗していたりする）

詩音が四位で、優が三位。

ここらはまぁ、普通に美味いやつらだな。

……トゥードが参加したらホントにどうなってたんだろ？

「飛翔君、おめでとう！」

「ありがとう、すずか」

飛翔の世界のすずかが、飛翔に甘えている。

……これが砂糖を吐きそうになる気持ちか。よくわかった。

そして、またオレ達は歩き始めていた。

さっきとの違いは、アリシアとフェイト、フィニアの三人が合流したってとこかな。

……まぁ、抱き着かれてるのはもう諦めた。

「ん、吼太か」

「おぉ、キョン」

キョンは一人で見て回っていたらしく、いろいろと小物を持っていた。

「……両手に花だな。まさに」

「うるせぇ」

歩きづらいんだぞコレ。

たまにコイツら、手を尻とかに伸ばしてきて痴漢されるし。

……なんでそんなに冷静なのかって？慣れちゃったからだよ……。

「なぁ、それなんだ？」

フィニアがキョンの持っていた、ブローチを指差す。

「これは……見舞いだ。ウチのワガママ団長様への、な」

そう言うキョンの顔はどこか暗い感じがした。

……団長ってハルヒだよな？なんで見舞いなんか……？

まぁ、あれだ。

「もがっ！？」

オレは持っていたフランクフルトをキョンの口に突っ込む。

身長差が辛かったが、案外なんとかなったな。

「キョン、今は祭だ。忘れろとまでは言わねぇけど、せめて楽しめ」

そうオレに言われたキョンは……

「……お前やっぱり女っぽいな」

「それは関係ねぇだろォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！」

グダグダなまま続く！

## １５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その三！　異世界住人は必ず

はい、お待たせしましたー。

後書きにアンケートがあるので、参加をお願いします。

Ｓｉｄｅ　三人称

料理大会が終わってから、吼太は屋上を目指していた。

どうやら、そこに何かあるらしく、せっかくなので行くことにしたのだ。

ただ、プリム達は別の方に用事ができたとかで別行動になり、現在はオレ一人だ。

……意外と寂しいもんだな。

オレも、あの騒がしいのに慣れてたってことか。

それでまぁ、行ってみたわけなんだが……。

【あなたも私もビッチャビチャ！Ｔｈｅ☆水芸！】

……いや、まぁ綺麗だけどさ。

なんで学祭で水芸？

しかもタイトルなんだよ。ならレインコートかなんか渡せっての。

「すごいなー」

「ホントですね」

ふと、聞いたことのある声がした。

声がした方を向いてみる。

「刹那にラストか。どうしたんだ？こんなところに」

「まぁ、何となく……かな？」

「私も同じような感じですね」

まぁ、狙ってここに来る人は少ないだろう。

「お、吼太に刹那、ラストじゃん」

「やっほー♪」

……。

この声は……確実にトラブルを巻き起こす奴らの声だ！

「面倒事はお断りします！」

「つれないな、おい」

そこに居たのは、御神百合姫と神北鈴のチート夫婦。オレより実力

が上なくせに、自重をしないから関わるとろくなことが起こらない、というわけだ。

「それは実に心外ね」

百合姫、お前は自身の行動を一度見直せよ。

「つーか心を読むな！」

「まぁまぁ。俺もユリも、【今日は】学祭に来ただけだし……」

「……今日以外に来たら？」

「「当然遊ぶ！」」

「やっぱりかドチクショウ！？」

その時だった。

水芸をしていた人の足元が崩れ、大量の水が観客であるオレ達に降り懸かったのだ。

「うぉっ！？」

「きゃっ！？」

「「「ッ……！？」」」

チート夫婦？当然無事。

オレ？ビチャビチャだよ。

ラスト？ビチャビチャだよ。

「ふぇ～～～ぬれちゃったよ～」

……ん？

「刹那が可愛くなった！」

「やべえ、鼻から愛がｗｗｗ」

「主、とりあえず服を……」

上から百合姫、鈴、ラスト。

うん。分かりやすく言おう。

【刹那が水を被ったら、かわいらしくなった】

……意味不明？知るか！オレだって意味不明なんだから！

「鈴兄～♪百合姉～♪」

あ、せつな（ちっちゃくなった刹那）が鈴にトコトコと向かっていった。

「ふみゅっ！」

が、途中で転ぶ。

次の瞬間、夫婦は野獣のごとき速度で移動し、刹那をさらっていった。

「主！？」

「ふぇぇ～」

「「せつなちゃんおっ持ち帰りぃぃぃ～～～♪♪♪♪♪♪♪」」

夫婦は大変なものを盗んでいきました……ラストの主です！

ってか？

「変なモノローグ入れてないで主助けるの手伝ってくださいよ！」

ラストが切羽詰まった様子で言ってくるが、正直死ぬわけでもないしなぁ……。そもそも勝てないし。

まぁ、このままじゃあれだし、増援ぐらいは呼んどくか。

「ラスト、増援を呼んどくからそいつに頼んで手伝ってもらえ」

ケータイを取り出し、電話をかける。

そして少し経ったあと、そいつは来た。

「や、吼太君」

御門慧。時の管理者だかなんだか偉そうなやつ。まぁぶっちゃけた

だの親バカだが。

「……すっごく失礼な紹介をされた気がする」

「気のせいだ。とにかく、バッドショット１００台分は働けよ」

バッドショット……平たく言えば、使用者の撮りたい写真を最高画質で何枚も撮ってきてくれる自律飛行型カメラロボだ。

「あぁ。これでなのはちゃんのアルバムがより充実する……お兄さんにまっかせなさい！」

次の瞬間、慧が消える。

時を操って何かしたんだろうが、めんどいから細かいことは気にしなくていいや。

「ラスト、しばらく待ってろ。手遅れでなきゃせつなは帰ってくる」

「はぁ…。あの……」

ラストが怪訝そうな顔のまま聞いてくる。

「あの人は誰なんですか？」

「……チートだ」

気まずい空気が漂う。

いや、オレだってよく分からないし。

ラストと別れてから、しばらく歩いていると、ヴィータと逢った。

どうやら、ヴォルケンリッターはみんな別行動をしてるらしい。

それで、せっかくなのでヴィータと一緒に買い食いをしていると……。

「ラクト、次はあれを食べよう！」

「メア……もうお金が……」

前から黒髪赤眼の美人と、黒髪黒眼の少年が歩いてきた。

あれは昨日会ったやつらだな。確か…

「あ、吼太君」

「む、吉谷か」

「メアに〇〇〇だったな。よう」

「名前が！名前が何かおかしいよ！？」

「「そうか？」」

オレの声とメアの声が重なる。

「酷い……」

「悪ぃ悪ぃ。お詫びにこれやるよ」

渡したのはこの学祭限定で使える食券１０００枚。

オレには必要無いし、ラクトならこいつを上手く活かしてくれるだろう。

「……いいの！？」

「あぁ、細けぇこたぁ気にすんな！」

「ありがとう、ホントにありがとう！これで今月の食費が持ちそうだよ！」

ここに、オレとラクトの友情が結ばれた。

「男って馬鹿だよな」

「だな」

ヴィータとメアは酷評だったが。

メア達と別れ、ヴィータと再び歩き出す。

「コータ！次あれ食べたい！」

ヴィータが指指したのはわたあめ。

ご存知、ヴィータがお祭りで最も好きなものだ。

「あっちにアイスもあるな」

「マジか！？」

しかし、そのアイスはオレ達の直前に買った人ので売り切れになってしまったらしい。

「な……」

ヴィータが目に見えて落ち込む。

「ほら、後でオレが作ってやるから。な？」

ヴィータの頭を撫でる。

「う……し、仕方ねぇ……／／／／／／」

ヴィータの顔が真っ赤になる。

……風邪か？

「あれ？吼太？」

……このやたらめったらフラグを建てそうな声は……！

「フラグ建てそうな声って何！？」

「出たなフラグ神、暁優！」

「吼太だって人のこと言えないよね！？」

そう、みんな大好き。

最近ではリアルに嫁宣言されてしまった優君だ。

「優お兄ちゃ～ん♪♪♪」

「マスター吼太、お変わりないようで何よりです」

詩音とトゥードも一緒だ。

詩音が優に抱き着いてるのを、ヴィータが羨ましそうな目で見た後、

オレの方を向いてオレの服を軽く掴んできた。

……何の意味があるんだ？

「……お前達二人はフラグに関して言えば、五十歩百歩だろう」

「ドングリの背くらべというものですね」

さらに、この場にヒスイとシルフが来たらしく、オレ達にツッコミを入れてきた。

「「断じて違うから！」」

当然否定したがな！オレは優程じゃねぇもん！！！

「優さんに詩音さん、吼太さんにヴィータさん……みんな可愛いですわぁ♪」

シルフはオレ達を見てうっとりしながら言う。

「そ、そうか……？／／／／」

「エヘヘ～／／／／」

ヴィータと詩音は嬉しいらしい。

……けどあれだ。

優とアイコンタクトしてみる。

……だよな。そうだよな。

「「可愛いって言われても全然嬉しくないから！！！」」

「息ピッタリだな、吼太に優」

ヒスイが言ってくる。

まぁ、考えてることが同じだったし。

「そういやヒスイとシルフはどうなんだ？楽しめてるか？」

「あぁ。やはり活気がすごいな」

「可愛いものもたくさんありますし」

「ならよかった」

ヒスイは異文化の世界出身だからな。万が一楽しめてなかったらどうしようかと思ったよ。

「じゃあ、俺達は次に行かせてもらうぞ」

「では、また」

そう言い、ヒスイとシルフは人混みに消えていった。

「じゃあ俺達も行こうか。じゃあね、吼太」

「うん！またね～♪」

優達もまた、人混みへと消えていった。

「睡蓮、これ見て！」

「うわぁ～、すごいね～！」

この二人は…リリカルじゃない世界の二人だな。

「よう、睡蓮に雫」

「あ、吼太君」

「こんにちわ～」

二人に挨拶すると、二人が返事を返してくれる。

「なぁ、お前ら双子なのか？」

ヴィータが睡蓮と雫に聞く。

「違うよ」

「まぁ偶然かな？」

「ふ～ん……そっか」

……この二人、何か裏がありそうだな。

……ま、オレが気にすることじゃあないな。いずれこいつらが勝手に解決するだろ。

「そういやお前らは何を見てたんだ？」

「これだよ」

そう言って、睡蓮が何かをオレ達に見せてくる。

それは、旋盤で作られたボールペンだった。

どうやら、大学の工学部の人達の作品らしい。

よく見れば、周りに様々な作品が展示されていた。

……でもなんで高校のほうの校舎を使ってんだ？

それでふと窓から、メイド喫茶を経営している工学部の教室が見えた。

……つまりは、追い出されたわけか。可哀相に。

オレが窓の外を見ている間、ヴィータは睡蓮と雫の二人と話していたようだ。

「なぁ、ヴィータ。オレは先行くけどどうする？」

「もう少し見てるよー」

「そっか、じゃまた」

「あぁ、またなー」

……そんなに気に入ったのか。

「お、シグナムー！……か？」

「よ、吉谷！？／／／／／／／」

見知ったポニーテールを見たと思ったら、それはシグナムだった。

……何故かバニーガール姿だったが。

「ち、違うんだ！これはその……あの……とにかく、私が望んで……じゃなくて望んでなくて……／／／／／／／」

「でも似合うよ。やっぱシグナムは綺麗だもんなぁ。しかも可愛いし」

「吉谷ぁ！！？／／／／／／／／／／」

シグナム、今声がすっごい裏返ったぞ？

「うぅ……／／／／／／／／／／」

あ、黙り込んだ。

……でだ。

「光がビキニ水着なのにも多分関係あるんだよな？」

部屋の隅でうずくまってた光にも声をかける。

「……あれ？もしかして吼太？」

「……もしかしてって何だよ？」

「いや、たまたまシグナムさんと会ったから一緒に回っていたんだけど、気づいたらコスプレするらしい場所に来てたらしくて、その場にいた数人の女の子達にあっという間に……うぅ……」

……この聖祥の女子は人外ばかりなのか？いくら女の子になってるとはいえ、光司と、ベルカの騎士であるシグナムを一方的に着替えさせるって……。

「……まぁ、服は何枚かあるから、置いてくぞ」

「ありがとう……」

「綺麗……可愛い……なら私が……フフフ……／／／／／／／／」

……シグナムが危ない笑みを浮かべはじめたのは無視しとこう。

「よっ、吼太！」

オレに声をかけてきたのは、縁授蒼真。陰陽術師だったかな？あと幻想郷出身。最近はなりを潜めているが、すずかに対して会って早々にプロポーズした馬鹿だ。

「……大分失礼な紹介をされたような」

「気のせいだ」

まぁ、こいつは楽しんでるだろ。性質的にはチート夫婦達を筆頭とした、【アチラ側】の人間だし。

唯一の救いは、理不尽レベルのチートじゃないことだな。

「にしてもさすが聖祥！美人がたくさんいるな！」

「そうかそうか」

「しかしハーレムメンバーは増えなかった……」

異世界の人間をオトしたいなら、優ぐらいのフラグ建築力がなきゃな。

「でも二人だけ一時的に回れる人は確保したんだ！」

……勘違いしないでくれ。こいつは某春原みたいな残念なやつじゃないんだ。

ただ、異世界メンバーが濃くて、作者の文才が低い故にそう感じるだけなんだ。

「あれ？ダーリン？」

「ってアリス？なんでお前がここに？」

「私もいるぞ」

今来たのは、アリスと魔理亜の（料理的な意味で）最兇コンビ。

……まさか、な。

「蒼真、回る条件とかあったりしたか？」

「あぁ。この二人の手作り料理を腹一杯食べることだ」

……。

「アンダータ！オレのみを校舎の外へ！じゃあな蒼真、アリス、魔理亜！」

オレは忘れない……忘れるものか……散っていった仲間を……。

「え！？何そのハンバーグ！？もはや色とか形が……ギャアァァァァァァ！！！！！」

……合掌。

「……これは？何の光景だ？」

二人の手が高速で動き、カードを置いていく。

『すごいすごいすごいぃぃぃ！！！まさかこの私、ここまで白熱した勝負を見れるとは思いませんでしたァァァァ！！！！！』

「やるな優星！」

「そっちもね！貴哉！」

優星と貴哉は、何故かトランプのスピードの大会に参加しており、そして決勝という大舞台で戦っていた。

「……楽しんでるな、うん」

聞くまでも無い。

「勝ったァァァァ！！！！！」

「くっ……あそこで９が先に出せてれば…！」

どうやら、貴哉が勝ったらしい。

『勝者にはＱＵＯカード５０００円分をプレゼントいたしまーす！』

意外と高ぇな。

「やったぜ！」

そして時が経ち、残すはラストイベントのみ！

なっぺ「というところで次回に回しまーす」

「「「「「何ィィィィィィィィィィィィ！！！！！？」」」」」

なっぺ「後書き座談会ィィィィィィィィィィィィ！！！！！！！」

リーム「なんであそこで区切ったの？」

なっぺ「ケータイの能力限界が近づいてたから」

リーム「そうなんだー」

なっぺ「じゃあ感想感謝コーナー頼むぜ！」

リーム「バルディッシュさん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、七つ夜＆夜つ七さん、海人さん、緋水さん、香崎　真琴さん、高町ゆうきさん、天照大神さん、水橋さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、朱神優希さん、まーたさん、ＫＯＵさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございましたー♪」

なっぺ「緋水さんからは吼太とペアルックのペンダントに詩音とペアルックのペンダントを、ＶＡＺＵさんから吼太に男性用の着物＋ちょんまげカツラ、詩音に十二単＋きれいな扇子、フラウリーナ三姉妹に翔特製レアチーズケーキ（吼太の愛のメッセージつき）、ベスに死にたくなるほどおいしいショートケーキ（マジで、死にます）を頂きました。ありがとうございます！」

ベス「吼太さんに普通に男性物が届くなんて珍しいですね」

なっぺ「……で、だ。読者の皆様に緊急の質問をしたいのですが

！」

ベス「ほう？」

なっぺ「吼太のＳｔＳ時代の姿……ふと思ったことが……」

０：吼太って成長したらかっこよくなるのかな？

←

１：あれ？吼太の売りは可愛さだよな？

←

２：そしたらまさかのエターナルショタか？

←

３：でもそうするとカッコイイ路線でギンガをオトす計画が……

←

４：ならかっこよくするか？

←

１に戻る

なっぺ「……というような無限ループに陥ってしまって……」

ベス「実にどうでもいいですね」

なっぺ「まぁ、そう言うなや。ちなみに詩音の将来は決まってます」

リーム「どんなの？」

なっぺ「秘密だ。そして聞きたいのはつまり……吼太をかっこよくするかエターナルショタにするか！メッセージにて募集します！結果はＳｔＳ本編にて明らかに！」

ベス「感想に書いた場合は？」

なっぺ「無効票！投票のほう、よろしくお願いします！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

**１５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その四！これにて終了！駄菓**

お待たせして申し訳ありません！

はいはい！ラストイベント始まりますよー！

そして、雨季さん。申し訳ありませんでした。

# １５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その四！これにて終了！駄菓子屋

Ｓｉｄｅ　座談会

ラストイベントが始まる数分前。

参加者はステージ脇のテントに集められていた。

ここで、主な参加者を確認してみよう。

・暁　優

・朝倉　貴哉

・如月　刹那（せつな状態）

・一条　要

・ヒスイ　ハーツ

・御神　百合姫

・神北　鈴

・アリサ　バニングス（飛翔の世界）

・アリシア　テスタロッサ（飛翔の世界）

・五十嵐　遥

・五十嵐　霊弥（ミヤ）

・神谷　光

・キョン（本名不明）

・月光閃火（本名不明）

吼太「つーかせつなと百合姫と鈴がいないんだけど」

ヒスイ「いや、来たみたいだぞ？」

ヒスイが指を指す。

そこには、せつなを小脇に抱えながら飛び回ってる御門　慧、慧を追っている百合姫と鈴のチート夫婦がいた。

「「せつな返せぇぇぇ！」」

「誰が返すか！」

「速ぁ～い♪♪♪」

……

なんだかんだでせつな、百合姫、鈴も落ち着き……。

「「「そこ説明省いちゃだめでしょ！？」」」

優、アリシア、光が突っ込んできたが、なに、問題はない。

スタッフ「はい、じゃあ組分けするよ～」

組分けの結果、

要、ヒスイ、鈴、キョン、月光閃火の組

百合姫、アリサ、アリシア、光、ミヤの組

吼太、優、貴哉、せつな、遥の組

の分け方が為された。

優「そういえば、結局このイベントってなんのイベントなの？」

スタッフ「あれ？聞いていなかったんですか？そこにある通りですよ」

【聖祥☆美男子美人コンテスト！～男の娘の女装もあるよ！～】

……

「「「「嫌な予感しかしない……」」」」

吼太、貴哉、優、遥が呟く。

要「チーム分けの基準は？」

スタッフ「男、女、男の娘ですよ」

その瞬間、四人の男（の娘）が沈んだのは言うまでもない。

光「……あれ！？僕女性扱い！？」

美由希「はい、始まりました！【聖祥☆美男子美人コンテスト！～男の娘の女装もあるよ！～】！！！司会は私、高町美由希と！」

エイミィ「友情出演のエイミィでお送りしまーす！」

美由希「今回は三部構成！」

エイミィ「女性部門、男性部門、男の娘部門の順にやっていきまーす！」

美由希「早速参りましょう！女性部門、エントリーナンバー１！御神百合姫さんです！」

ステージの影から、一人の女性が踊り出る。

その衣装は、美しさと可憐さという一見相反する性質を兼ね備えた、見事なものであった。

平たく言えば、女性的なラインを前面に出しつつも、かわいらしい服を着ていたのだ。↑作者の限界

さらに、それを着ている女性も、見事にその服を着こなしていた。

そして、服と女性の醸し出す雰囲気は、会場を包み込んだ。

何人かは、絵画のような美しさにため息をついていたほどだ。

百合姫「いぇーい♪鈴ー！」

控え側
鈴「誰よりも綺麗だぞユリー！」

美由希「はい、見事なノロケありがとうございました～！」

エイミィ「軽くリア充爆発しろってとこですな～」

美由希「次に行きましょう！エントリーナンバー2！アリシア・テスタロッサさんです！」

このとき、会場の一部がざわつき始めた。

この学園にいるアリシアは、以前に参加しないと明言していたため、様々な憶測が飛び交い始めたのだ。

同姓同名なのか、はたまた自分達の知るアリシアが実は参加していたのか。

だが、それも彼女が登場するまで。

彼女が出た途端に、会場はまたその雰囲気に飲まれてしまった。

百合姫が【動】ならば、アリシアは【静】。

そうと言えるような、存在感を放っていた。

アリシア（飛）「……あ、飛翔…！」

アリシアが飛翔を見つけたらしく、アイコンタクトを送ると、飛翔は小さく手を振り、答えた。

エイミィ「またリア充ですかぃ！」

美由希「……これ、未だに彼氏のかの字も無い私に対するイジメ…？」

エイミィ「美由希～……」

司会は司会で何故かダメージを受けていた。

美由希「……大丈夫。私強い子。さて、次に行きましょう！」

エイミィ「エントリーナンバー3！アリサ・バニングスさん！」

今度は先程よりもざわつきが大きかった。

というのも、アリサはこの聖祥で1、2を争う天才少女として名が知れ渡っていたためである。

しかし、彼女が出てきた途端にざわつきが止んだのに変わりはなかった。

百合姫とはまた違った【動】の美しさ。

その勝ち気そうな顔は、彼女自身の自信を表しているかのようだ。

やはり会場は、溜息が支配した。

アリサ「飛翔♪」

アリサが飛翔に向かって軽く手を振る。

飛翔ももちろん、手を振りかえす。

その瞬間、いくらかの殺気が飛翔に襲い掛かったのは言うまでもない。

飛翔も殺気を放って飲み込み返したので、大事には至らなかったが。

美由希「……」

エイミィ「……美由希……」

美由希「……ってやる……」

エイミィ「へ？」

美由希「恭ちゃんを襲ってやるぅぅぅ！！！」

エイミィ「ちょ！待ってって！美由希ぃぃぃ！！？」

バイロクス「司会変更のお知らせだ。次からは私、バイロクス・バロウズと」

鈴音「不破鈴音がお送りします。……なんで私たちなんでしょうか？」

バイロクス「冷静な二人を選んだ結果だそうだ。ではエントリーナンバー４。神谷光さん」

現れたのは、顔を微かに赤らめた少女。

清楚な印象を与える服は、彼女の髪をよく映えさせた。

当然、会場からは溜息が洩れたが、すぐに誰かが思う。

……また、誰か恋人がいるんじゃないかと。

だが、彼女は一向に誰かを捜そうとしない。

それもそのはず。光は本来、光司という名前の男性（それでもしょっちゅう女性に間違われいるが）。

恋人がいるとすれば女性である。

さらに言えば光にとってここは異世界。

恋人がいるはずがないのだ。

……と、言っても、どちらにせよ光司に恋人はいないのだが。

バイロクス「凄い歓声だったな」

鈴音「元が男だなんて信じられませんね」

バイロクス「男の状態でも間違われるらしいがな。では次に行こう」

鈴音「エントリーナンバー5、ミヤさんです」

そこにいたのは……狐の耳をつけたコスプレの（実はコスプレではないのだが）少女だった。

高校生辺りの外見の少女は、その美しさと可憐さを存分に振り撒く。

たちまち、歓声があがった。

「……♪」

ミヤも嬉しいのか、嬉しげな表情を浮かべた。

バイロクス「女性部門ラストに相応しい盛り上がりだったな」

鈴音「結果は最後に発表します」

バイロクス「続いて、男性部門に移るぞ」

鈴音「エントリーナンバー1、ヒスイ・ハーツさんです」

ヒスイ「……ふむ」

ゲイルアーク『マスター。手でも振ってみたらどうです？』

ヒスイが手を振ると、何人かの女性が、溜息をついた。

なんだかんだで、ヒスイも顔立ちは整っているのだから、仕方ないだろう。

……シスコンでなければ完璧なのに…。

ヒスイ「槍鴎！」

ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！？

鈴音「……ヒスイさんはどこに向かって攻撃したんですか？」

バイロクス「気にしてはいけない」

鈴音「ヒスイさんの分、短くありませんか？」

バイロクス「作者の実力不足だ」

鈴音「……とにかく、エントリーナンバー2、月光閃火さんです」

月光「Ｙｅａｒ！楽しんでるかぃ！？」

現れた月光閃火は、三日月状の角飾りが特徴的な兜を被り、スマートな鎧の上に青を基調とした服を着てきた。

某ＢＡＳＡＲＡの、伊達氏の服装だ。

ワァァァーッ！

たちまち、腐女子……もとい、淑女達から黄色い歓声があがる。
その歓声を受け、様々なポーズをとる月光閃火。
まさにノリノリである。

バイロクス「男子より女子の歓声が目立ったな」
鈴音「しかし……歓声の大半はカップリングを望む声だったんですけど」
バイロクス「吼太の世界だからな。変態が多いのだろう」
鈴音「酷い世界ですよね」

バイロクス「全くだ。先程、私も被害に遭いかかったからな」
鈴音「私もですよ。さて、さくさく行きましょう。エントリーナンバー3、本名不明の普通の人。キョンさんです」

キョン「ちょっと待て。それじゃ俺の名前が普通じゃないみたいじゃないか。俺の名前は「杉田ァァァァ！！！！！」……それは中

の人……いや、中の人等いない！……何を言っているんだ俺は……」

あちこちにツッコミを加えた青年は、見た目はそれなりのごく普通の青年。

だが、様々な【不思議】に触れているからか、その雰囲気には一般の人には感じられない何かがあった。

雰囲気で魅せるタイプ、とでも言おうか。

やはり、人気は高かった。

……もっとも、その美声に惹かれた人も少なくないようだが。

バイロクス「……作者はそんなに声が好きなのか？」

鈴音「作者いわく、『結構、微妙に大好き』だそうです」

バイロクス「……つまりは何なんだ？」

鈴音「さぁ？では次に行きましょう。エントリーナンバー4、神北鈴さんです」

現れた男性は、明らかに異色の雰囲気を放っていた。
その身体から発せられる強者の雰囲気は、他者を圧倒する。
会場はたちまち静まった。

鈴「……ふっ」

百合姫「きゃーっ！鈴サイコーっ！愛してるーっ！」

鈴「俺もだユリー！！」

その瞬間、会場の大半の人物が盛大にこけたのは言うまでもない。
ちなみに、残りの人は「あぁ、あの百合姫という人が言ってたのはこの人か」みたいな、納得をした表情をしていたとか。

鈴音「あの夫婦は自由ですね」

バイロクス「それが魅力なんだろう」

鈴音「あれでも、この会場ではトップクラスの実力があるんですよね」

バイロクス「もはや、言う言葉も無いな」

鈴音「次はエントリーナンバー5、一条要さんです」

現れた男を示すのに相応しい言葉は、【美しい】。

女性的な意味合いではなく、整った顔立ちや動き、様々な要素がより高い次元にて交錯したその姿は、自然風景のような雄大な美しさが満ちていた。

要「こういうのはやったことがないんだがな」

要がふと呟く。

その仕種ですら、辺りに感嘆をもたらした。

バイロクス「この作品の作者から一言。『マジすいませんでしたァアアアアアアアアアア！！！！！』」

鈴音「要さんも可哀相に」

バイロクス「これも結果はラストに集計するそうだ」

ｋｅｉ「お待たせしました！ここからは俺、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔと！」

ＶＡＺＵ「ＶＡＺＵがお送りしまーす！」

ｋｅｉ「作者コンビの俺達が担当するのは…」

ＶＡＺＵ「みんなが楽しみにしていた男の娘部門！」

ｋｅｉ「早速行くぜ！エントリーナンバー１！デュエリストの朝倉貴哉！！」

……

貴哉（おい、ホントにこれで出なきゃダメなのか！？）

アテナ（大丈夫です！今のマスターはとてもかわいらしいですし！）

貴哉（そういう問題じゃ…）

スタッフ「はいはい。早く出ましょうね～」

貴哉「あ、やめっ！？」

誰かは言った。

そこに、白衣の天使が舞い降りた、と。

貴哉「うぅ……／／／／／／」

いわゆるナース服に身を包んだ貴哉は、辺りに一種の感情を沸き立たせた。

そう……。

「……これが……萌え……」

ｋｅｉ＆ＶＡＺＵ「「男の娘ｋｔｋｒ！！！」」

※ツッコミなんていませんよ

ＶＡＺＵ「来てよかった……」

ｋｅｉ「生まれてきてよかった……」

ＶＡＺＵ「さぁ、さらなる男の娘を！」

ｋｅｉ「エントリーナンバー２！五十嵐遥……もとい、はるかちゃん！」

遥「誰がはるかちゃんだバカ作者ァァァァァ！！？」

一人の少年……いや、その人を少年と言うには、些か語弊があるように感じる。

そう感じさせるほどの可愛さを持っていた。

真っ白な汚れの無いワンピースに身を包み、白く大きな翼を広げたその姿は、もはや幻想の領域に到達していた。

本来ならば、その巨大な翼について誰か尋ねようとする人がいてもおかしくはないのだが、そんな違和感すら感じさせない美しさだったのだ。

ｋｅｉ＆ＶＡＺＵ「「はるかちゃん、俺達を天国に連れてって～！

！！」」

ｋｅｉ「あれ、俺のキャラなんだぜ！？」

ＶＡＺＵ「可愛いなぁ～……ほっぺたすりすりしたいなぁ～」

ｋｅｉ「次なる男の娘はぁ……！？」

ＶＡＺＵ「エントリーナンバー３！如月刹那…もとい、せつなちゃん！」

せつな「えへへ～♪♪♪」

現れたのは、先程までの二人とはまるで異なる、黒い服を身に纏った少年。

いわゆる、ゴスロリ服というものだ。

先程までの二人を天使とするなら、こちらは悪魔……

いや、可憐さを加味すれば、小悪魔といったところか。

たちまち辺りには、変態という名の紳士淑女が溢れ返ったが、警備

に呼ばれたメアとラクト、蒼真、輝刃がなんとか抑えていた。

ｋｅｉ＆ＶＡＺＵ「「せつなちゃん、俺達を地獄に堕としてぇ～！！！」」

ｋｅｉ「あぁ……もう死んでもいい……」

ＶＡＺＵ「ほっぺたすりすりしたいほっぺたすりすりしたいほっぺたすりすりしたいほっぺたすりすりしたい……」

※ツッコミはいませんってば

ｋｅｉ「さぁ次は！？」

ＶＡＺＵ「エントリーナンバー４！吉谷吼太もとい、コータちゃんです！」

吼太「誰がコータちゃんだゴラァァァァァ！！！？？」

吼太が叫びながら出てくる。

その格好は、まさに小悪魔。

先程とは違い、こちらはボンテージ服に加え、小さな悪魔の羽が背中に付いていた。

遥とは違い、羽はアクセサリーだが、それについて言及する人はいなかった。

いや、言及する余裕が無かったというのが正しいか。

メア「ラクト！手伝ってくれ！」

ラクト「無理言わないで！？こっちもいっぱいいっぱいなんだから！！」

蒼真「なんでこの人達、こんなにパワーあるんだよ！？」

輝刃「これが紳士淑女のパワーなのか……！？」

溢れるパワーが辺りを支配していた。

だが、まだ彼ら、あるいは彼女らは知らなかった。

本当の天国（じごく）はまだだということに……！

ｋｅｉ＆ＶＡＺＵ「「コータちゃんマジ小悪魔ぁぁぁぁぁ！！！！！」」

ｋｅｉ「詩音ちゃんバージョンも見たかった！」

ＶＡＺＵ「ここに来て、初めて【男の娘】であることに後悔したぁ！！」

ｋｅｉ「……で、来るわけだ」

ＶＡＺＵ「誰かな？」

ｋｅｉ「……世界中の誰もが認めた男の娘！フラグ神を超えたフラグ神！！！」

ＶＡＺＵ「エントリーナンバー５！このイベントの大トリ！」

ｋｅｉ＆ＶＡＺＵ「「暁優ちゃんだぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」

優「ちょっと何！？やたら期待されてる上になんか変な紹介されてる！！？」

そこに現れたのは、白と黒が左右に配分され、背中には天使の翼と悪魔の羽のアクセサリーが付いいた、見た目からは天使とも悪魔ともとれる特異な格好をした、まさに少女。

その瞬間、会場のボルテージはリミットブレイクした。

「「「優ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！」」」

優「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

群衆が、萌えの津波となり辺りに暴力を振るう。

もはや、静止など不能。

ｋｅｉ「可愛いは正義ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

！」

ＶＡＺＵ「すりすりしたいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

司会ですらこのザマである。

要「おいおい！洒落にならないぞこれ！」

優星「百合姫さんや鈴さんは！？あの二人だったら……」

百合姫&鈴「「イヤッホォォォォォォォォォォォォｗｗｗｗｗｗｗ」」

ヒスイ「あいつらを少しでも信頼した俺達がバカだった！！！」

飛翔「どうする！！魔術でぶっ飛ばすか！？」

キョン「落ち着け飛翔さん！魔法を簡単に使っちゃダメだろ！！」

睡蓮「どどど、どうしよう雫！」

雫「私に聞かないでよぉ！」

リーム「まさにカオス！」

ラクト「そんなこと言ってる場合じゃないよね！？」

吼太「……人って、怖いな」

優「……そうだね」

遥「ミヤ、先に帰っちゃおうか」

ミヤ「？」

貴哉「自分一人で逃げる気か遥」

せつな「キャハハハハ～♪♪♪おまつりおまつり～♪♪♪♪」

魔理亜「では少年。私と一緒にベッドの上でお祭りを……」

ラスト「行かせませんよ？」

メア「ゆ、優……ここは危ないから、私の世界に避難を……／／／／／／」

詩音「フォーティ！」

トゥード「メア様。申し訳ありませんが、それを実行させるわけにはいきません」

まーちゃん「優さんのいるところ、私ありです！」

光「いつの間にか人が増えてる！？」

すずか（飛翔）「………ライダーの能力使えば止められるかな？」

アリサ（飛翔）「………無理な気がしてならないんだけど」

アリシア（飛翔）「やっぱり？」

アリストテレス「これ、収拾つくんですかね？」

古泉「さぁ？」

みくる「ふぇぇぇ〜！！！」

長門「…騒がしい」

バイロクス「さて、どうするか」

鈴音「一歩間違えば死にそうですよね」

御門「我慢しなくていいんだな！？いいんだよな！？」

瞬「なら行くぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ライト「待て瞬！常識を取り戻せ！」

吼太「なんでこうなったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

それはここが吼太の世界だからさ！

おまけ

女性部門　一位：神谷　光

男性部門　一位：一条　要

男の娘部門：　不明（集計機が破壊されたため）

## １５０万アクセス突破＆第１００話記念大コラボ祭その四！これにて終了！駄菓

なっぺ「フハハハハ！後書き座談会、全速前進ＤＡ！」

吼太「社長やめろ」

なっぺ「まず最初に。雨季さん、要。忘れてて本当にごめんなさい」

吼太「バカにも程があるだろ」

なっぺ「お詫びといってはなんですが、後述する特典を雨季さんにも渡します」

ベス「あなた、作者の風上にもおけませんね」

なっぺ「本当に申し訳ありませんでした」

リーム「にしても面白かった～♪」

吼太「酷い目に遭ったの間違いだ！」

なっぺ「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、水橋さん、蓬莱山輝夜さん、緋水さん、黒子の玄さん、ライさん、天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、高町ゆうきさん、七つ夜＆夜つ七さん、ＶＡＺＵさん、バルディッシュさん、海人さん、雨季さん、香崎　真琴さん、朱神優希さん、ＫＯＵさん、まーたさん。感想ありがとうございました！そして、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは年齢詐称薬を、緋水さんから吼太の私服姿の写真（水に濡れて服が透けてる）に詩

音の私服姿の写真（やっぱり透けてる）を、今回の登場した全ての人に、黒子の玄さんからは吼太のプロマイド、女装セットを、ＶＡＺＵさんからは無名【神も切り殺す剣】を、海人さんからはリームに婚姻届（デタラメ記入済み）を、ＫＯＵさんから真・射殺す百頭偽造を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「過去最高の人数ですね」

なっぺ「確か１８人だよ。さらに！今回で感想総数が１０００を超えました！」

吼太「おぉ！」

なっぺ「記念すべき１０００個目の感想は……ＫＯＵさん（一回目）です！」

吼太「おめでとうございます！」

なっぺ「賞品としてＫＯＵさんには、好きなお話を希望出来る権利をあげますよー！使うかはＫＯＵさん次第ですよー」

ベス「雨季さんにもお詫びとしてこれを渡します」

吼太「さて、次回は？」

なっぺ「水橋さんに希望されてたコラボをやった後、ＳｔＳ編に入ります！」

吼太「いよいよだな」

なっぺ「本編まではまだまだだけどね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 番外編　とあるヴェザードの訓練試合《プラクティスバトル》（前書き）

なんでこんなに速く出来た！？

自分でビックリです。

# 番外編　とあるヴェザードの訓練試合《プラクティスバトル》

Ｓｉｄｅ　吼太

「暇だ……」

あの、やたら騒がしかった学園祭から数日。

特別事件なども起こらず、平和に暮らしていた。

「トゥード、模擬戦するか？」

『マスター。私との模擬戦は本日、既に１０回に上ります。これ以上の効果は薄いかと』

だよなぁ……。

……誰か呼ぶか。

せっかくだから異世界のやつがいいな。

……あいつにするか。

Ｓｉｄｅ　ライト

「お兄ちゃん、あーん」

フェイトが俺にスプーンを向けてくる。

その上には、俺の作った料理。

……何かが間違ってる気がするな。

「「「ご馳走さまでした」」」

昼飯を食べ終わり、ゆっくりとしていた。

そんな時に、二人の訪問者が現れた。

一人は炎小路火斐。ヴェザードの一人で俺の仲間。

一回、ちょっとしたことで敵対していた時期もあったが、今はまた仲間として、同じ場所に立っている。

「ライトさん、模擬戦お願いします！」

「あぁ」

火斐に頼まれて、模擬戦の出来る場所までグランガンに乗っていこうとすると……。

「ライトちょっと借りるぞー」

そんな声がした瞬間、俺と火斐はグランガンごと時空の歪みに吸い込まれた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……変な奴がくっついてきた」

「だれが変な奴だ！？」

全く……ライトだけでよかったのに。

「まぁいいや。お前達を喚んだのは他でもない、オレの暇つぶしのためだ」

「「俺らすっげえ迷惑なんだけど！？」」

息ピッタリだな。

「まぁ、そっちも模擬戦やるみたいだったし、ちょうどよくね？と思ったから連れてきた」

「はぁ……規格外な……」

ライト。規格外ってのはあの夫婦みたいな奴らに言うべきだぞ。

「さて、時は金なりなんて言葉もあるしな。始めるぞ。……変身ッ

！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

一気にクロスオーバーフォームになる。多少やり過ぎな感じもするけど、まぁいいだろ。

「ハッ、そんな張りぼての鎧を身に付けても意味ないっての！《我、炎龍の主なり！龍の力よ！我の鎧とのなれ》！」

火斐の身体にレウス装備みたいな鎧がつく。

……張りぼてかどうか、その身に味あわせてやるよ。

「行くぜ！灼熱砲（ガンズブレイジング）！」

火斐が、手に持った剣の先から炎の魔力砲撃を放つ。

だが……。

「ぬるい」

腕の一振り。ただそれだけで砲撃が薙ぎ払われた。

「なっ！？」

火斐が驚いてるが、なんてことはない。

あいつの砲撃の威力が、この鎧を傷つける程ではなかっただけだ。

「音速の槍（シルフェリオン）！」

ライトが槍を持ったまま、高速で突っ込んでくる。

だが、まだ視認出来るレベルだ。

「ダウンロード、ベリオロス。武装召喚」

『了解、左腕に具現化。武装召喚』

左腕に、棘がついた翼を持つ腕を出し、ライトの槍を受け止める。

『武装召喚解除。続いて右腕に具現化、武装召喚』

トゥードの音声が響いた瞬間、ライトは派手に吹っ飛んだ。

Ｓｉｄｅ　ライト

なんだ！？何が起こった……？

「ライトさん！大丈夫ですか！？」

火斐が俺の元に駆け寄ってくる。

「なんとかな……」

咄嗟にバックステップの態勢に入っていたおかげで、ダメージは最小限ですんでいたが……。

「ガアアアアアァァァァ！！！」

この声は……！

声のした方、吼太の方を見ると、その右腕には凶悪な顎と黄色と青色が特徴的な鱗を付けたモンスター……ティガレックスの頭があった。

『マスター、実戦使用は初めてですが、不具合はありませんか？』

「大丈夫だ。問題ない」

「グルルルル」

トゥードの問い掛けに吼太とティガレックスが答える。

どうやら、意思は個別に存在しているらしい。

恐らくは、咆哮で吹っ飛ばされたんだろう。

音速の槍を発動しているときは、体重が軽くなるからな。それで派手に吹っ飛んだんだろう。

「んじゃ、もう一つのも試してみるか……トゥード！ダウンロード、

クシャルダオラ！武装召喚！」

『了解、左腕に具現化、武装召喚』

さらに、吼太の左手がクシャルダオラの頭になる。

そこから、風のブレスを放ってきた。

「ぐっ……地の盾（アースシールド）！」

地面を変形させ、風のブレスを防ぐ。

「土には砂ってなぁ！砂塵鋸斬（サンドソー）！」

吼太は辺りの砂を集め、刀にして地の盾に攻撃してきた。

最初は防いでいたが、砂塵鋸斬はのこぎりみたいな性質があるのか、徐々に削られて行く。

「砂のヴェザードってあいつだったのかよ！？くそっ、爆発斬（エクリスプロージョン）！」

火斐が爆発斬で砂塵鋸斬を吹っ飛ばす。

……って！？

「バカ！それは逆効果だ！！」

「え？」

俺達の周りに砂が舞い散る。

「ツイストルネードカード、天装！」

『エクスプロージョン、スカイックパワー』

吼太が変な形をした銃にカードを装填すると、俺達の周りに竜巻が発生する。

そして、竜巻は砂を巻き込み、砂の竜巻となった。

「砂塵竜巻（デザートストーム）、ってな」

吼太が技名を呟く。

対して、中の俺達は飛び交う砂の粒に、身体を少しずつ削られていた。

「なんだこの技！えげつねぇ！」

さらに、少しずつ……ほんの少しずつだが、竜巻が狭まってきている。

このままでは、ミンチになる！

「くそっ！

そして、竜巻が完全に閉じた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「さて、どうするか」

実は、途中で砂は全て廃除していたりする。

ただ、竜巻を狭めたりはしたけどな。

んであいつらは……。

「ここだぁっ！！」

不意に後ろから声がする。

そこには、土に塗れたライトと変な奴。

地面を潜って回避したってか？

「雷龍雷針（らいりゅうらいしん）！」

「炎龍獄匠（えんりゅうごくしょう）！」

雷と炎を纏った、計１０個の斬撃が飛んできた。

……だが、それでも温い。

両腕の武装召喚を解除し、マントの一振りで斬撃を跳ね返す。

「「な！？」」

驚いている二人に、右手を構える。

そこから放たれるのは、巨大な雷（イカズチ）。

「バオウ・ザケルガァァァ！！！」

雷の龍が、ライトと火斐を飲み込んだ。

「あーっ、すっきりした」

「負けた、な」

「テメェ……次は俺達が勝つからな！」

変な奴が吠えている。

負け犬の遠吠えってのはこういうことか。

「ま、それじゃあ帰すぞ」

拳を腰だめに構える。

「「……は？」」

二人はキョトンとしてるが、その方がありがたい。

「時空裂断！バーストスピニングゥ…パァァァァンチ！！！！！」

「「ギャァァァァァァァァァァァ！！！？」」

ライトと火斐を螺旋力を篭めた拳で思いっきり打ち上げた。

二人は錐揉み回転しながら吹っ飛び、やがて次元の壁を破壊しながら自身の世界に帰っていった。

「ライトの野郎……よくもあの時オレにボーンシリーズを……」

どうやら、前のことを今だに根に持っていたらしい。

巻き込まれた火斐からすれば本当にはた迷惑な話だが、まぁ変な奴だから仕方ない。

こうして、二人のヴェザードは帰っていった。

この後ボロボロになったライトは、この疲れから風邪をひいてしまい、さらに流々とフェイト、アリシアがその看病を巡って一波乱巻き起こすのだが、それはまた別のお話……。

# 番外編　とあるヴェザードの訓練試合《プラクティスバトル》（後書き）

なっぺ「後書き座談会、は～じま～るよ～！」

吼太「わぁい♪……って何させてんだお前！？」

なっぺ「気にしたら人生の敗北者」

吼太「にしても今回は早かったな」

なっぺ「大量コラボの難しさを改めて実感した。じゃ、感想感謝コーナー行こうか」

吼太「ライさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、高町ゆうきさん、ＡＩＲＳさん、水橋さん、七つ夜＆夜つ七さん、天照大神さん、バルディッシュさん、朱神優希さん、香崎　真琴さん、雨季さん、ＶＡＺＵさん、緋水さん、ＫＯＵさん、海人さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ＶＡＺＵさんからはカリスマが上がるお守りを、緋水さんからは男の娘部門に参加した皆の写真（優君のは詩音ちゃんに）に、御門の撮った男の娘部門の連中の着替え写真（優君のは詩音ちゃんに）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「それと、ＫＯＵさんからのリクエストで、一つのイベントが確定したぞ」

【バグ&チートだヨ！全員集合バトルトーナメント！】

吼太「……安請け合いしやがったなお前」

なっぺ「いや、だってリクエストだし。賞品だし」

ベス「開催日は未定です。ので、感想等にて『参加したい』等と言われても困るのでご注意ください」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

なっぺ「トーナメントで吼太が負けたら、吼太と詩音が脱ぐ！」

吼&詩「「ええっ！？」」

# 番外編　乙女の想い、届け聖夜に（前書き）

クリスマス特別編です。ほんのりいい話風味？

自分ではあまり納得出来てなかったり？　まぁ、駄作者な自分じゃこれが限界みたいなんで、どうか赦していただきたいです。

# 番外編　乙女の想い、届け聖夜に

Ｓｉｄｅ　なのは

「はぁ～、今日も終わったね～」

「だな～。もうへとへとだよ～」

フィニアちゃんが机に突っ伏す。魔導師として活動している期間が長いからなのか、計算が中心になる教科は楽に出来るんだけど、国語みたいな考える教科や歴史みたいな単なる暗記教科は苦手なんだよね～。

「アンタたち、まだホームルームがあるんだからシャンとしなさい！」

そこに、アリサちゃんとすずかちゃんがやって来た。アリサちゃんが私たちにいつものお小言を言ってくる。

「え～？　でも～……」

「ダルいのはダルいんだ～」

グデーっと身体を突っ伏しながら答える私たち。

それを見かねたすずかちゃんが、ある提案をしてきた。

「終わったら、帰りに駅前に新しく開いた喫茶店に行ってみようよ。クリスマスフェアやってるみたいだし、季節限定スイーツもあるよ」

それを聞いたフィニアちゃんの目の色が変わる。当然、私もだ。

学校は勉強するところ。つまり、頭を使う。頭を使えばぶどう糖がエネルギーとして消費される。つまり、私たちの身体は今猛烈に糖分を欲しがっている。

一瞬だけ、「食べたら太っちゃうかな？」とかいう考えが過ぎるけど、スイーツの魅力の前では実に些細な問題だ。

「「全力でホームルームに参加します！」」

「うん、よろしい！」

満足げなアリサちゃん。クラス代表として役目を果たせそうだと感じて、一安心しているみたいだ。

「フェイトちゃんたちも誘おうね～」

すずかちゃんが言う。そう、今現在のところ、私たち仲良し魔法少女グループは、各クラスに分散している。

1組にはアリシアちゃん、なずなちゃん、羽旺ちゃん。2組が私たち4人で、4組にフェイトちゃん、はやてちゃん。そして3組にコータ君。

小学生の頃は校長と理事長が（勝手に）圧力をかけてクラスを同じにしてたみたいだけど、中学校ではさすがにそうはいかなかったみたい。コータ君が一人だけで違うクラスっていうのは、さすがに陰謀を感じるんだけどね。だって私たちの学年、4クラスしか無いし

……。

……いや待って。確か3組の担任は女性……何人もの生徒から告白されるほど人気があり、フった人数も数知れない。既に心に決めた人がいるとかで。何より、噂ではあの人ショタコンだとか……

……コータ君（の貞操）が危ない！？

「ちょっと先生にO☆HA☆NA☆SHIしてくる！」

「……待ちなさいなのは」

駆け出そうとした私を、アリサちゃんが捕まえる。

「離してアリサちゃん！　アイツ〇せない！」

「落ち着きなさいなのは！　いろいろと！」

コータ君！　コータくぅぅぅん！

「吉谷？　そこでいつも通り寝てるけど」

……あぁ、そうだった。コータ君、いつも寝てるんだっけ。襲

われるような場所に行ったりしないから大丈夫か。

先生だってさすがに、体育倉庫に押し込んで無理矢理～、なんてことはしないだろうし、ね。

「なのは、早いね。もう終わってたんだ」

「私たちは二番目やな～」

コータ君のことを3組の子に聞いてると、馴染みの声が聞こえてきた。フェイトちゃんとはやてちゃんだ。

「あー、三番目かぁ～」

「王たる我に恥をかかせるとは……あの教師、いずれ地獄にたたき落としてくれるわ！」

「止めてください羽旺。迷惑です」

アリシアちゃんたちも来たみたいだ。これで後はコータ君だけ。

ホームルームも終わってるみたいなので、3組の教室に入ってコータ君の机まで行く。

――おぃ、また聖中９天美少女が来たぞ――

――いつも通り吉谷のお迎えか？　羨ましいぜ全く――

――え？　１０大美少女じゃないのか？――

――そりゃ吉谷をカウントしての話だろ。それを吉谷の前で言うなよ？　血を見ることになる――

……私たちが入るといっつもひそひそ話が始まるんだけど、いったい何を話してるのかな？

まぁいいや。コータ君を起こそう。

「コータ君、ホームルーム終わってるよ」

コータ君の肩を揺すりつつ、優しく起こしてあげる。すると、かわいらしい目が開いて、ボヤーっとしながら辺りを見回す。

「……あぁ、なのはたちか。おはよ」

「おはよう、って……」

「もう放課後よ！　またアンタ寝てたの!?　そんなんだと成績下がるわよ!?」

アリサちゃんがすごい剣幕でまくし立てるのを聞いて、ようやく目が覚めたみたい。綺麗な赤い瞳がしっかりと私たちを認識する。

「ん～……よく寝たよく寝た。じゃあ帰るか！」

「帰るか、って……もういいわよ」

とうとう呆れ果ててしまいアリサちゃん。毎日やってて、よく飽きないなぁとか思ってしまう。

「そういえば駅前の新しい喫茶店に行くんだけど、コータ君はどう？」

「ん、いいな。行く行く」

下駄箱に向かう途中、すずかちゃんが提案した寄り道プランに、即刻賛成するコータ君。まぁコータ君の場合は単純にお腹が空いてるんだと思うけど。

……そういえばコータ君、食べては寝てを繰り返してるように見えるけど、よく太らないなぁ。その代わり身長も伸びてなくて、今だに小学生に見えるけど。

「よし、それじゃあ全員で喫茶店に出発や！」

「「「おー！」」」

はやてちゃんは最近、みんなのまとめ役になることが多くなってる。八神家の家主でヴォルケンリッターの主というような、人をまとめる立場にいるからかな。数年後には部隊長になってたりして。

「お姉さん、早く行きましょう」

なずなちゃんが私を呼ぶ。

「うん、ゴメン。すぐ行くよ」

Ｓｉｄｅ　三人称

きっかけは、喫茶店で楽しく談笑していたとき。

話題は、そろそろ訪れるクリスマスの話になっていた。

「……ってことはなのは特製ケーキが店頭に並ぶわけか」

「にゃはは……少し恥ずかしいけど」

なのはが顔を赤くする。パティシエ志望でこそないものの、幼いころから親の手伝いをしているなのはの料理には定評がある。その味を知る者からすれば、楽しみになるのも仕方のないことと言えるだろう。

「あ、それでクリスマスの時の制服がね、すっごいかわいいんだよ！」

なのはが自身の携帯に写真を映してから、周りにいるメンバーに見せる。

次々と「かわいい～」やら、「いいなあ～」と言った感想が洩れる。

だが、そこで全く予想出来ない反応を返した人物がいた。

「すげぇぇぇ！！！　サンタさんだぁぁぁ！！！」

吼太である。

明らかにおかしい反応に、困惑する一同。

「あの……コータ君……サンタさんって……」

困惑からいち早く立ち直ったすずかが、吼太を問いただす。

「ん？　サンタさんはサンタさんだろ？　クリスマスに一晩で世界中を回って、子供達に夢と希望とプレゼントを配る人。しかも、トナカイの引くソリに乗って、空を駆け巡る。すごいよなぁ～、サンタさん」

吼太の答えに再び言葉を失う一同。

考えてみて欲しい。吼太たちはもう既に中学生。サンタクロースの正体について知っていてもおかしくない時期である。むしろ、知っていないほうが珍しい。

さらに、なのはたちは知らないことであるが、吼太は転生者であるために実際の生きた時間は既に３０年を超えている。３０歳にもなってサンタクロースがどういう存在か知らない人はまずいないだろう。

これには、そもそも吼太が生前からどこか天然気味だったのが関係している。どういう訳だか性格がまるで変わらない吼太を面白がり、周りの人たちがサンタクロースの正体を教えてこなかったのだ。

吼太自身、それ以上の情報が欲しいと思わず、結果として”サンタ

クロースはトナカイの引くソリに乗って、クリスマスに世界中の子供達へプレゼントを届ける”というのを今だに信じているようになったのだ。

さて、これに困ったのはなのはたち。流石に吼太もなのは＝サンタとは思わなかったみたいだが、サンタクロースの正体をここでバラすのはいろいろと気が引ける。

かといって、バラさないと大人になったときにいろいろと困るのも確かだ。だが、吼太のあまりに純粋無垢な心を汚すのもまた、あまりに気が引ける。

結果、なのはたちは……

「「「……す、すごいよね～」」」

「うん！」

問題を先延ばしにすることにした。

クリスマスイブ、深夜。間もなくクリスマスとなる時間に、珍しくなのはは起きていた。

『マスター？　夜更かしはいけませんよ？』
「ありがとう、レイジングハート。でもね、今日は夜更かししてでも行かなきゃいけない場所があるんだよ……！」
なのはがパジャマから、今日翠屋で使っていたサンタガール衣装に着替えながら、レイジングハートの話に応じる。
「そう！　あともう少しでクリスマス！　そして今宵の私はサンタさん！　だからコータ君に私をプレゼントしにいくの！」
『……はぁ』
「最初は優しく～……だんだん激しく～……うぇへへへ……」
この時レイジングハートは初めて、「マスターにする人間違えたか」と思ったという。
「じゃあ行くよ、レイジングハート！」
『……オーライ』
ヨダレだらだらなのはと、呆れた雰囲気を出しているレイジングハートが、聖夜に翔び立つ。
だが彼女たちは知らない。
この聖夜、このクリスマス。同じことを考えている人がいないわけがなかったことを。

空を飛ぶなのは。距離はそれほど遠くないので、数分あれば着くことだろう。

ちなみに、サンタ服のままで空を飛ぶとあまりに寒すぎるため、バリアジャケットの術式を服に組み込んであったりする。これで肌を大胆に露出していようと、身体の安全が守られるというわけだ。

「そういえば、あの時もクリスマスだったっけ……」

なのはが思い出したのは、闇の書の闇と戦ったあの日。決して忘れられない、最初で最後の聖夜決戦――。

と、そこでなのはが疑問に思う。

「ねぇレイジングハート。私たちも宇宙に行けたりしないかな？」

あの夜、吼太が自力で宇宙に飛び出したのを思い出したなのは。自力で宇宙に行けたなら、「地球は青かった……」だろうが「宇宙キターッ」だろうが言いたい放題だ。

だが、現実はそう甘くはなかったようだ。

『いえ、現状のマスターでは不可能です。まず、地球の重力を振り切るだけの出力を飛行魔法単体では出せませんし、バリアジャケットに酸素生成能力や酸素保存能力が無いため、仮に行っても窒息してしまいます』

「そっか～……」

やはりあれは吼太だから出来たのだと分かり、落胆するなのは。

『落胆するのは早計ですマスター。逆に考えれば、出力問題と生命維持システムの問題を解決すれば可能ということです』

「そんなこと言っても……アームドアップが出来ればいいんだけどなぁ～……」

『頑張りましょう』

雑談を交わしている内に、吼太の家に着いたようだ。深夜だけあり、家の中は静まっている。

「……自家発電とかしないのかな？　コータ君……」

『子供はこの時間、寝ているほうがよいのですよ』

と、その瞬間に感じた猛烈な殺気。

振り向き様にプロテクションを展開すると、そこに黄金に輝く砲撃が衝突する。

「この魔力……まさか！」

なのはが顔をあげる。そこには、オレンジがかった、肩の露出している大胆な衣装に加え、頭にはサンタの帽子の代わりにトナカイの角をイメージしたアクセサリーが付いたカチューシャ、首には鈴を

付け、まさにトナカイ少女となったフェイトが、バルディッシュをなのはに向けていた。

「フェイトちゃん！」

「抜けがけはダメだよなのは！　コータの初めては、私が奪うんだから！」

「それはこっちの台詞だよ！　レイジングハート」

『……』

「バルディッシュ！」

『……』

「「返事は！？」」

『……オーライ』『……イエス、サー』

嗚呼、憐れデバイス。この二人が主になったのが運の尽きだったのだ。

一方、反対方向からは八神家一行が吼太の元に忍び込もうとしていた。

「えぇか、忍び込むまでは一致団結！　初めてはコータ君に選んでもらって、恨みっこなし！」

「「了解！」」

はやての確認に、リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマルが答える。

一人でいっても勝ち取れる確率は低い。ならばと集団で一気に突破する策に出たのだ。

尤も――

「……主はやて、私は帰って寝た――」

「――――ザフィーラ、夜天の主の言うことが聞けへん言うのか？」

「……すみません」

「わかればよろしい」

――ザフィーラからすれば迷惑この上ないわけだが。

だが彼女達の進軍は強制的に停止することとなる。何故なら――――

「やっぱり来ましたわね」

「ヤマが当たったわけだね」

「……パパのところには行かせない」

「ダーリンの初めては、貴女たちには渡さないんだから！」

フラウリーナ三姉妹とアリス、カンナが彼女達の前に立ちはだかったからだ。

彼女達もまた、八神家に負けず劣らずの実力と連携の持ち主。一朝一夕で勝てる相手ではない。

「カンナ！」

「ユニゾン、イン～」

カンナがアリスにユニゾンをする。死というキーワードで繋がった二人の親和性は非常に高い。そのため、今のアリスは単体でフラウリーナ三姉妹と同等以上の力を獲得していた。

「負けへんよ！　リインフォース！」

「はい、我が主」

アリスに対抗して、リインフォースがはやてにユニゾンする。

八神家ＶＳ吉谷家（一吼太）の戦いの火蓋が、切って落とされたのだった。

「さぁ～て……これ、どうしよう？」

リームが目の前の光景を見ながら、誰に言うわけでもなく呟く。

リームもまた、フラウリーナ三姉妹のように誰かの襲来に対するカウンターとして待機していたのだ。……のだが。

「羽ばたけ、ホーネット！」

「当たらないよ！　電刃衝！」

「ハン！　無駄よ！　エッケザックスにそんな生温い攻撃が――きゃあ！？」

「うふふふ……油断大敵だよアリサちゃん」

「王……覚悟を。ルベライト」

「フン、無駄だ！」

既にアリシア、マテリアル、アリサにすずかが互いに闘っており、リームが牽制するまでもない状態になっていたのだ。

リームとしてはありがたいのだが、かといって目を離せば侵入されてしまう可能性もある。

「どうする？」

隣にいるミナがリームに聞く。彼女もまたリームと同じチームとしてやってきたために、困惑している一人である。

「……とりあえずは現状維持、かな」

下手に手を出して、一致団結されたらたまったものではない。リームは、とりあえず見物に回ることにした。

こうして極めて近い場所で戦うこととなった彼女達。彼女達の目的はただ一つ。吼太の貞操、それだけである。

これだけ派手にドンパチやらかしても、全く問題にならない辺りは、流石海鳴と言うべきか。はたまた、聖夜がかけた魔法なのか。

彼女達は戦う。自身の卑しい欲望を満たすために。溢れんばかりの思いを伝えるために。

そして、その欲望は思わぬ事件を生んでしまうことになる。

「流石はフェイトちゃんだね……」

「……なのはこそ……」

肩で息をしながら、互いを褒めあう二人。だが、親友だからといって譲るわけにはいかないものがある。

「ディバイィン…バスター！！！」

「プラズマスマッシャー！！！」

なのはからは桜色の、フェイトからは黄金の砲撃が互いに向けて放たれる。

「――え？」

だが、何故だかその砲撃の間に何者かが割り込んできてしまったのだ。当然の如く攻撃を喰らい、地面に落ちていく何か。

「「……あ」」

まさか割り込みが入り、さらに撃墜してしまうとは夢にも思わず、しばし呆然としてしまう二人。やがて、自分達がしたことを改めて認識したなのはたちは……

「……ふぇぇぇぇ！？　なんで！？　なんでぇ！？」

「えと……お医者さん！　シャマルさん！　救急車ぁ！」

慌てに慌ててしまっていた。

「「「……」」」

一時争いを中断し、集まってきた一同。墜落地点を手分けして探し、

ようやくそれらしき人物を見つけたのだったが――

「トナ美！　トナ美ぃぃぃぃ！！！」

「おじいさん……結構キツいから叫ばないで……ぎぼぢわるい……」

何だか無駄にテンションが高い、赤い服のおじいさんが叫んでいたり、フェイト以上に露出度が高い、いわゆる”ぬわいすばでー”な女性が気持ち悪そうにしていたりと、非常に筆舌しづらい状況が展開されていた。

「あの……一体どうしたんですか？」

リームが恐る恐る赤い服のおじいさんに話しかける。

「ん？　あぁ……実はワシのトナカ……げふんげふん！　相方であるトナ美が何故だか撃ち落とされてしまってのぉ。”お届けもの”が出来なくなってしまいそうで困っておったのじゃ」

おじいさんの言葉に、バツの悪そうな表情をするなのはとフェイト。

「撃ち落とされた……。もしかしてあなたたちは魔導師なのですか？」

リインフォースが、自分の気になったことをおじいさんに聞く。

なのはとフェイトの攻撃は強力だ。それをリインフォースはよく知っている。マトモに当たれば間違いなく落とされてしまうことも。

だというのに、目の前の女性は墜落の際に酔っただけ。老人に至っ

ては傷一つない。

周りに壊れたソリと、正体不明の袋が散乱している中に佇む老人とコスプレ女性。些か……というより確実に、むしろ大変怪しい人物ではあるが、魔導師ならば飛行していた理由も砲撃を喰らっても平気だった理由もつく。コスプレ女性も、使い魔ということならば納得だ。もしかしたら単なるコスプレ魔導師なのかもしれないが、この際その間違いは些細なことだ。

だが、老人はリインフォースの言葉に首を傾げる。

「まど……何の話じゃ？　わしゃ、”はいから”なもんは好かんでの」

「……はぁ」

とりあえずこの老人が魔導師でないとわかり、がっかりするリインフォース。

「ご主人様～。やっぱり車とか飛行機とかのほうがいいんですよ～。今時ソリは時代遅れですぅ～」

「黙らんかヒヨッコが！　お前にソリの良さがわかってたまるか！」

「ソリは疲れるんです～」

女性が何やら老人と口論をし始める。完全においてきぼりにされ、困惑を深める一同。

「……っと、こんなことをしている場合じゃないわい。立て！　立

つんじゃトナ美！」

「無理です～……もうフラフラで～」

「ったく……根性無しが！」

そう言うと、老人が袋をかき集めて、背中に背負って歩きだす。

「む、無理ですよご主人様！　流石に歩きじゃ……」

「無理でも……やるしかないじゃろ……」

女性の引き止める声にも耳を貸さない老人。

諦めたのか、悔しそうに顔を俯かせる女性。

だがそこに、なのはが波紋を齎した。

「あの……もしよければ私たちが手伝いましょうか？」

なのはの提案する声に、振り向きこそしないものの立ち止まる老人。

「私たちにも多分、できることがあると思います」

「これでも私たち、人一倍の力は持ってるつもりや」

フェイトとはやてもなのはに続く。他の面々も、同じ意見のようだ。

それを聞いた老人が、無言で袋を投げてくる。

「……持ってみい」

老人がただ一言、なのはに投げ掛ける。老人の行為に疑問を感じつつも、袋を手にとるなのは。その瞬間、なのはの表情が変わる。

「――――重い！？」

老人が何十個も軽々と抱えている袋。その一個の重さがここまで凄まじいものだと思わず、驚愕を露にするなのは。

「それがワシの仕事の重さじゃ。ワシはこれからコイツを全世界に届けにゃならん。今晩中にな」

「今晩中に！？」

「それは無理だよじーさん！」

シャマルが口に手を当て、驚きを示す。ヴィータも、そこまで無茶苦茶をしなければいけないとは思っていなかったのか、老人に静止を投げ掛ける。

だが、老人は諦めない。なのはたちのほうに投げた袋を取りに戻ってくる老人。

「無理だとか無茶苦茶だとかは、既に聞いておる。相方から散々のう」

「だったら――」

「でものう。人には時に、不可能とわかっていようと足掻かなけり

ゃいけない時があるんでの」

老人が袋を掴む。だが、なのはは袋を離さない。

「……離してくれんか」

「……やっぱり、私も手伝います」

「この袋一つ持てないその細腕で、何が出来るんじゃ？」

老人がなのはを睨み付ける。

殺気もない。闘気もない。だが老人の目には、〝誇り〟があった。

だが、なのははそれに怯んだりはしない。なのはたちには、決して諦めない〝不屈の心〟があるのだから。

「私一人じゃ確かに持てないけど――」

「二人なら――」

「三人なら――」

なのはの持つ袋に、フェイトが、はやてが手をかける。

やがて、袋は三人の少女によって少しずつ地面から離れていく。

とてつもない重さ。持てば持つほど重くなっている気すらしてくる。

だが、誰も手を離したりはしない。

やがて袋は、完全に地面から離れる。そう、なのはたちが持ち上げてみせたのだ。

それを見た老人の顔に、笑みが写る。

「――――見上げた覚悟じゃのう。よし、いいじゃろう」

老人が言った瞬間、袋が驚くほど軽くなる。あまりの重量の変化に、思わずぐらつくなのはたち三人。

「さっきの重さはその袋が持つ重さではない。その袋の中に入っとるものの重さじゃ。それを肝に命じておけ」

「「「はい！」」」

なのはたちが元気よく、老人の言葉に答えた。

老人たちがなのはたちに課したのは、単純かつ困難なことだった。

”上空で袋を開け、指定のエリアを飛行し続ける”というもの。

原理は不明ながら、軽くなったことで楽だと思っていた面々もいたが、すぐにその考えが甘いことに気づかされた。

まず、その規模。範囲が街や市ではなく、複数の国家間に跨がるほど広いのだ。速く移動出来るフェイトとフィニアに至っては赤道を半周するエリアを担当させられ、苦笑いを浮かべていた。

当然、制空権を侵害するためにそういったものからも逃げなければならない。封時結界は現実に影響を与えないため使えないし、自力でステルスを使えるものもシャマル以外いない。一応シャマルが予めステルスを全員にかけることにはなっているが、シャマルとて地球全体に魔法を届けることは不可能なため、途中からは細心の注意を払いつづけなければならない。

また、今晩中にやらなければいけないというのに、飛行し続けなければいけないために転移魔法が使えない。

必然的に長距離に渡る高速飛行が苦手なシグナム、ヴィータは短めのルートを担当することになった。ちなみにザフィーラとシャマルは女性の介護と護衛を担当することになっている。

「じゃあ、頼んだぞ。嬢ちゃんたち」

「「「はいっ！」」」

それでも、投げ出すものは誰ひとりいなかった。

「ええか！　みんな、慎重にな！」

はやてが一同に注意を呼び掛ける。

やがて翔び立つ魔法少女たち。飛行魔法に全魔力を注ぎ込んでいるために、全員が通常より遥かに速い速度を発揮している。

『みんな！　そろそろステルスが切れるわ！　気をつけてね！』

シャマルの通信を聞き、気を引き締める一同。袋から小さな光の粒を振り撒きながら、魔法少女は懸命に飛びつづける。

だが、現実は非常だった。

魔法少女たちは各国家の軍用レーダーに引っ掛かってしまったのだ。次々に出撃する戦闘機。

「レイジングハート！」

『スピードアップ』

だが、彼女達には止まっているヒマも、戦闘機とドッグファイトを繰り広げるヒマも無い。そもそも、異国語を理解していないのだから会話のしようがないのだから。

戦闘機に追われつつも、懸命に飛行し続ける魔法少女たち。やがて戦闘機から機関銃が、ミサイルが放たれ始める。

時に回避し、時に防御する。例え戦闘機が相手だろうと、今の魔法少女たちを止めることは敵わないのだ。

この夜の出来事が後々、世界中の軍で『ジャパンガールはマッハを超える速度で飛翔し、光る楯を出して機関銃やミサイルを防御する。極東にはまだまだ神秘に満ち溢れている』と語り継がれたりするのだが、それはまた別のお話。

「ぐ……」

『サー、残り時間２４分です』

「こんなところで、終われない！　バルディッシュ！」

『ハスタームーブ、ソニックムーブ』

フェイトがハスタームーブとソニックムーブを同時に発動し、さらなる加速状態に突入する。地球の裏側では同じようにフィニアも加速していた。

「ハスターとソニックの重ねがけは……さすがにキッツイね……」

『止めますか？』

「冗談！　僕の速さを地球に見せてやる！　行くよバルフィニカス！」

『イエス、サー』

さらに加速するフィニア。その速度は風を超え、音を超え、光すら超える。

そして、ようやく全員が集合ポイントに到着する。残り時間１０秒足らず。まさにギリギリである。

「ハァッ……ハァッ……」

「もう……やりたくねー……」

激しく息をつくアリサ。ヴィータも、息を荒くしつつも拒否を示す。

戦うわけでもなく、純粋に飛びつづけるだけ。それでも極限までやればここまでキツくなるのかと、なのは達は実感していた。

だが同時に、苦労しただけあって達成感もひとしおだ。全員が疲労困憊した様子を見せているが、どこか笑顔が浮かんでいるのはそれが理由だろう。

と、その時、なのはたちの足元に緑色の魔法陣が展開され、転送される。シャマルが予め展開していた転移魔法陣が発動したのだ。転移魔法陣により、一同は元の場所に転移する。

「お帰りみんな。お疲れ様」

シャマルがみんなを労いつつ、回復魔法でみんなを癒していく。

暖かな、優しい光に一息つく一同。そこに老人とコスプレしたあの女性が近づいてくる。

「助かったよ。ありがとう」

「ありがとうございます～！」

老人が各々の頭を撫で、女性は近くのヴィータや羽旺に抱き着いて感謝を表現する。

「あの……ところであの光って何だったんですか？」

すずかが老人に聞く。時間が無いことと老人の人柄から、危ないも

のではないと思ってはいるが、だからといって正体が気にならないわけではない。それに、重くなったり軽くなったりする光など、前代未聞の存在だ。下手をすればロストロギアのような危険物として、回収しなければいけなくなるかもしれない。彼女達は、あくまでも管理局員なのだから。

老人はすずかの方を向かず、残っていた最後の袋をその場で開ける。

袋から解き放たれた光は、空へと浮かび上がり、海鳴市中に広がっていく。

「この袋にはな……小さな小さな”グーゼン”が詰まっとるんじゃよ」

「偶然……ですか？」

女性に抱き着かれつつも、なずなが老人に聞き返す。

「そうじゃ。小さな……本当に小さなグーゼン。未来の種と言ってもいいかもしれん。その種はいろんな人の元に行き、いろんな人の思いで成長して、小さな小さな出来事を起こすんじゃ。欲しかったおもちゃを買ってもらったり、好きな人に想いが通じたり、病気が治ったり――――」

そこまで聞いて、なのは達がふと悟る。赤い服を着た、この老人の正体を。

豊かな白い髭、赤い服に大きな袋を背負い、トナカイと一緒にユメとキボウを振り撒く、この老人の正体を。

「あ、あの！　もしかして貴方は――」

リームが老人の正体を言おうとすると、老人はその節くれだらけの指でリームの言葉を止める。

「ワシらは所詮、人の想いから生まれた小さな存在。だからワシのことなど、夢幻でいいのじゃよ」

そう言い、老人は予め修復しておいたソリに乗る。

女性はソリから延びたベルトを自身の身体に巻き付ける。すると、女性は光に包まれ、その姿を大きな、赤い鼻をしたトナカイへと変化させる。

トナカイに引かれ、走り出すソリ。

空へと舞い上がり、どこかへと消え去る老人は、最後にこう告げていった。

「嬢ちゃんたち、メリークリスマス！」

翌日、閉店後の翠屋においてクリスマスパーティーが開かれた。

売れ残りのケーキはもちろんのこと、パーティー用のケーキも用意され、高町家、吉谷家を始めとする仲のよい家族一同がその場に集っていた。

大人たちにもほどよく酔いが回り、一層騒がしくなるパーティー会場。

ふと、リームが騒ぐ大人たちを苦笑いで見ていた吼太に近づく。

「ん？　どうした？」

とても純粋で、優しくて、強くて、かわいくて、カッコイイ、自分が大好きになってしまった男の子。

その男の子を見つめながら、リームが言う。

「サンタさんって……凄いね」

突然の言葉にしばし呆然とした吼太だったが、すぐに笑顔になり、リームに応えた。

「うん！」

その日、世界中はちょっとだけ幸せに満ちていた。

## 番外編　乙女の想い、届け聖夜に（後書き）

さて、そんなこんなでクリスマスのお話でした。老人の正体は……まぁ、わかりますよね。トナカイ擬人化は気にしないで下さい。私の趣味です。↑

なんか書いてて、前に少しだけ見てたクラナドアフターストーリーに似ちゃったな～とか考えてました。でもサンタさんって、実際いたとしたらバラ撒いてるのってそういうものだと思うんですよ。物体を枕元に置いたら不法侵入ですし。

当初はただギャグにする予定だったんですが、あの老人を出したくてこんな形に。いい話なんて書けないやい！↑

次回は恐らくお正月特別編ですね。来年もファンスト共々、よろしくお願いいたします。

それでは、よいお年を。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編　プロローグ

Ｓｉｄｅ　吼太

「……やっぱりか……」

目の前に展開されてる術、バオウ・ザケルガを見て、思わず呟く。

きっかけは、以前に未来の要のとこに行ったときだ。

バオウが斬り裂かれることは何度もあった。

チートクラス相手なら有り得ない話ではないし、例えば一真に斬られたときも、一真が使用していたのはカムイのフルドライブ。

斬られたところでおかしくはない。

問題は、いくら要が未来において遥かに強くなっていたとはいえ、【バオウが手刀で倒された】ことだ。

本来の威力ですら、個人の術であるにも関わらず魔界の脅威として認識されているほどの力を持つバオウ。

ましてや、オレの魔力量は無限大。本来の威力とは比べものにはならないはずだ。

そう、【はず】なのだ。

当たり前だが、オレがこの術を実際に体感したのはこの世界が初め

て。

だからこそ、構成に使用された魔力量や、構成そのものがかなり雑な、【張りぼてのバオウ】になっていたことに気づかなかった。

オレの力は全て、転生の際に与えられた力。

則ち、オレ自身の力ではない。

だからこそ、違和感に気づかなかった。

よくよく調べてみれば、バオウ以外のものもかなり拙いものだということに気づいた。

例外的なのは、螺旋力にライダー、それと構成があまり関係無い武装召喚（アライズ）ぐらいだ。（リ）

まぁ、なんだかんだ言ったがつまりは……

オレはまだまだ、強くなれる。

Ｓｉｄｅ　リーム

怖かった。

自分の力が目覚めてしまうのが。

記憶領域に無いから詳しいことは分からない。

けど、直感が告げている。

この身体には、今とは比べものにならない程の力が眠ってる。

封印を全て解いたとき、僕は果たして、どうなるのか……。

でも、きっとこれから先、いつかは封印を全て解放するときが来る。

その時に、僕は……。

……いや、今そんなことを考えていても仕方ない。

今はただ、着いていこう。

僕が愛する人に……。

Ｓｉｄｅ　ベス

転生。

それは、神の過ち。

本来、一度しか与えられない生を、神の都合で押し付ける行為。

そして、これから先に彼が会うのは、形は違えど【転生者】。

見させてもらいますよ。

あなたの行動を、

吉谷、吼太さん。

それは、平凡な一般人だった一人の男の物語。

彼は神の過ちにより、人ならざる力を身につけた。

そして、彼が行ったのは、以前の世界では創作の物語とされていた世界。

その世界で彼は、自身の持てる全てを駆使し、運命を変えてきた。

時に笑い、時に悲しみ。

そして、物語は加速を始める。

魔法少女リリカルなのは

～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～

Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編

始まります。

# 第百一話　そういや短編集って初めてだ　ｂｙなっぺ

＜身体測定！＞

「嘘だそんなことォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

時間は数時間前に遡る。

今日は身体測定の日。

吼太達も例に漏れず、記入用紙を片手に更衣室に向かっていた。

そして、吼太が男子用更衣室に入ろうとすると……。

「え？吉谷はこっちじゃなくてあっちでしょ？」

男子生徒の一人が、女子用更衣室を指差す。

「……いや、オレ男だし」

「コータ君、どうしたの？」

「何かあったの？」

「早く着替えようよ」

「そやでー。時間は有限なんやし」

「ほら、早く来なさいよ」

「みんな待ってるよ」

吼太が反論したときに、なのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずかが声をかけてくる。

後ろには、なずな、フィニア、羽旺もいる。

「いやいや！だからオレは男だってば！」

「大丈夫よ、ほら」

吼太が再度反論すると、教師が何かを指差しながら話し掛けてくる。

そこには……

【吉谷吼太用更衣室】

「……何さこの秀吉的待遇」

ちなみに吼太用更衣室の中には、３６０。完全カバーがなされた状態でプレシアさんらに盗撮されているのだが、そんなことを知るよ

しもない吼太は普通に着替えてたりする。

そして、体操着に着替えた吼太達は、測定場所である体育館へと向かう。

「なのはちゃん、最近身長伸びてるよね」

「あー、分かる分かる！気づいたら結構大きくなってるんだもん！」

「にゃはは、そうかな？」

「フェイトちゃんとアリシアちゃん、フィニアちゃんは胸が大きくなってるなぁ」

「そう？」

「確かに最近肩が凝るかもー」

「動くのにも少し邪魔になってるしなぁ」

「……我の苦労も知らずに……！」

「羽旺、気持ちは分かります」

上から順に、すずか、アリサ、なのは、はやて、フェイト、アリシ

ア、フィニア、羽旺、なずなが話している。

姦しいとはまさにこういうことだろう。

そして、その中の（一応）黒一点。

最近、男子からも告白をされるようになってしまい、本格的に困りだしている我等が主人公、吉谷吼太。

「お前らなぁ……。そういう話は男がいないところでしろよ」

「コータさんなので大丈夫ですよ」

「コータは絶対に変な目で見てこないって分かってるからね」

「まぁ、私としてはコータ君になら襲われても構わへんけどな♪」

「……もういいよ」

なずな、アリシア、はやての三人の返答に、呆れ返る吼太。

そんなこんなで、体育館にて計測を始める。

空いている場所に個人個人で向かい、測定をする形をとっているため、測定の順番は個人個人でパターンが別れる。

そんな中、吼太は……。

Ｓｉｄｅ　吼太

体重は３０．４ｋｇ。かなり軽目だが、前回よりは少し増えているから問題無いな。

……うん。重しに２．５ｋｇのダンベルを二個入れてたから、実質的には２５．４ｋｇなんだけど、気にしちゃいけない。

問題は身長。

……

ここで冒頭の台詞に繋がるわけだ。

身長：１３３．２ｃｍ

「嘘だそんなことォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

※吼太は現在、中学二年生です。

※さらに言えば、中学二年生の平均身長は、男子が１５９．２ｃｍらしいです。

……何？２０ｃｍぐらいたいしたことない、大丈夫だって？

……小学三年生から身長が変わってなけりゃこうも言いたくなるわぁァァァァァァァァァァ！！！！！

【吼太の成長期、訪れる事なく終了のお知らせ】

こうしてオレは、気づいたら【エターナルショタ】なんていうふざけた異名で呼ばれるようになった。

＜その手があったか＞

ある日、吼太がアルフの散歩に付き合っていると……。

ギャーギャー

「吼太、あれってお前の娘達じゃないかい？」

ちなみにアルフはこいぬフォームである。

「……みたいだな」

そこにいたのは、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、キサラの５人。

魔導書娘のみんなだった。

「おい、お前ら！」

「父君か、ちょうどよかった。父君に決めてもらおう。みんなもいいな！？」

ナツハが問い掛けると、四人が頷く。

「……何の話だ？」

「我らも我が父を手伝いたくてな。次に我が父とユニゾンするのを誰にするかを決めていたのだ」

センが答える。

「誰って……」

吼太としては、五人とも性質がバラバラなので、この場で決めるのは避けたいというのが本音だった。

センの場合は魔力や武器、果ては命まで、あらゆる【予備】を精製でき、

ミナの場合はあらゆる流体物を自由自在に操作でき、

カンナの場合は自身の肉体を【死んだ】ことにすることで不死身化でき、

ナツハの場合は異形の形だろうとなんだろうと自由に身体を改造でき、

キサラの場合は共感強化という力により、自身の望む相手を強化できる。

使い分けるというと言い方が悪いが、どれか一人をあらかじめ決めたくはないというのが吼太の考えだった。

「我は汎用性が高いぞ」

「それなら我もだ」

「私なら自殺が何回もできる」

「我の力に欠点は無いぞ」

「自分で戦わなくていいんだよー」

「カンナのは明らかにおかしいだろ」

吼太がツッコミを入れながらも考える。

決めるのは難しいが、決めなければ後々に困ることになるのは間違いない。

「……あーもう！そんなに迷うんだったら全員一緒にやっちまえばいいじゃないか！」

アルフが辛抱たまらんといった様子で言う。

「アルフ……事態はそんな簡単じゃ…」

「「「その手があったか！！」」」

吼太が諌めようとした瞬間に、セン、ミナ、ナツハが大声を張り上げる。

「「じゃー、決定で」」

さらに、ダメ押しとばかりにカンナとキサラが言う。

こうして、魔導書娘達とのユニゾンの状態が決まった。

「……あれ？オレの意思は？」

吼太の意思など関係ない。

＜ちびクックの一日＞

ちびクックのあさはおそい。

午前１０時頃にようやく起きたちびクックは、最初に庭にいる双子のねこに挨拶をする。

なんでもこのねこたちは、この家を監視しているらしい。

でも、それは建前で、実はこーたのていそーを狙っているらしい。

ちなみに、好意とは別の感情で、なんだか見てると襲い掛かりたくなるからなんだそうだ。

ちびクックからしてみれば、こーたはやさしくて、自分の大好きな

人（親愛的な意味で）なので、毎日やめてほしいと頼むのだが、ねこたちは「気持ちいいことだから大丈夫」と言ってやめようとしない。

そうこうしてる内に、こーたのかーさんという人がちびクックのごはんを用意してくれる。

今日はサイコロステーキ（最高級松坂牛）だ。

（ちなみに食費は吼太が金を創って売ったりして稼いでいる）

ごはんを食べたあと、ちびクックは庭で飛ぶ練習をする。

あまり力を篭めすぎると飛び過ぎてしまい、逆に力を篭めないと尻尾が地面についてしまうほど低い位置しか飛べない。

この微妙な調整が難しいのだ。

夕方まで練習して、今日は少しだけ高めの位置を飛ぶことに成功したみたいだ。

こころなしか上機嫌。

だからこーたの部屋から「アリア!?ロッテ!?なんで裸でオレの部屋にいうぶっ!?

って声がしても気にしない。

まぁ、そういう場合はたいがい超高音（ガードスキル）が鳴り響（ハウリング）いてちびクックが被

害をくうのだが。

夕方からはこーたがちびクックと遊んでくれる。

こーたが投げたボールを、ちびクックがとってくる遊びだ。

ちなみにユートピアでやっている。

※投げたボールはたいがい１００m以上は飛ぶ。

そして、夜になったら夕ごはん。

今日はカジキマグロ（吼太がわざわざ釣ってきた）を丸ごと食べる。

そして、８時になればもうちびクックはおねむの時間。

寝床に向かい、耳をたたんで就寝する。

明日もきっと、楽しくなるように祈りながら……。

## 第百一話　そういや短編集って初めてだ　ｂｙなっぺ（後書き）

なっぺ「後書き座談会を始めようじゃないかぁ！」

吼太「黙れ」

なっぺ「はい、今回にて分かったと思いますが、吼太はエターナルショタになりましたー！拍手！」

吼太「ちくしょう……」

なっぺ「ちなみに投票結果はこちら！」

エターナルショタ：６票

カッコイイ：５票

場合によって変化する：２票

むしろ女性的かっこよさを求めよう：１票

なっぺ「意外にも結構僅差だった」

吼太「ちなみにかっこよくした場合はどうなってた？」

なっぺ「身長は１７５ｃｍ前後、全体的にスリムで、肩幅もそれなり」

吼太「……ｏｒｚ」

なっぺ「アンケートがアンケートなんだから仕方ない」

吼太「……いいよ、雰囲気のカッコイイやつを目指すから」

なっぺ「そしてフラグを建てまくるんですねわかります。感想感謝コーナー！」

吼太「バルディッシュさん、香崎真琴さん、天照らす大神さん、緋水さん、水橋さん、七つ夜＆夜つ七さん、高町ゆうきさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ＶＡＺＵさん、冥府の死神さん、鬼神装甲さん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「緋水さんから吼太の抱き枕（頬を赤らめて手を広げてる。）に詩音の抱き枕（頬を赤らめｒｙ）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「あとみんな。トーナメントは本当に大分先だからな？」

なっぺ「かなり先です。はい」

吼太「次回は？」

なっぺ「空港火災か、吼太強化イベントか」

ベス「未定なんですか」

なっぺ「それがオレＳＡ☆ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第百二話　時計とハジメテと計画通り！（前書き）

とうとうです！

とうとうですよ！

ＨＡＨＡＨＡ！

# 第百二話　時計とハジメテと計画通り！

Ｓｉｄｅ　三人称

とある街にある、古びた古本屋。

不思議と人が寄ってこないこの店には、一人だけ、女性がいた。

胸元を大きくはだけたスーツ。

妖艶な雰囲気を漂わせる、整った顔立ち。

彼女は【ナイア】と名乗っていた。

といっても、この店を訪れる何人かからは、名前を名乗らずとも【ナイア】と呼ばれるのだが。

そう、彼女はナイアルラトホテップと呼ばれる、外なる神の一人。

千の異形、無貌の神、這い寄る混沌とも呼ばれるソレは、この世界にて堕落した生活を送っていた。

理由はただ一つ。

することが無いのだ。

ここは【本来の歴史】とは無縁の世界。

故に、彼女の目的を満たす要素自体が存在しない。

かといって、別の世界には別の自分がおり、わざわざ出向く必要は無い。

並行世界の中には、自身を滅ぼした世界もあるため、今や全ての世界に自分がいるわけではないのだが、そんな危ない世界に渡るつもりなど毛頭ない。

そんなぐらいならば、まだ退屈のほうがマシだと思ったのだ。この神は。

だがしかし、彼女の欲求を満たすような愉快痛快な存在は今まで顕れなかった。

殆どあらゆる物事を体感している彼の神には、退屈に感じないことなど無かった。

そう、とある一人の人間が現れるまでは…。

Ｓｉｄｅ　ニャル

……誰かが来たね。

こんな古本屋に来るなんて、今時酔狂なことだ。

「やぁ、どんな本をお探しかな？」

とりあえずは、客相手の決められた台詞を話す。

適当に相手して、適当に帰ってもらおう。

ここに閉じ込めて、外道の知識に触れさせて発狂させるのもまぁオツだけど、正直飽きた感が否めない。

「時計を貰いにきた」

……はて？

「お客さん、ここは見てのとおり古本屋。時計が欲しいなら時計を売ってる店に行かないと」

「いいや、合ってるさ。アンタの時計を貰いにきたんだからな。……ナイアルラトホテップ」

「……誰と勘違いしてるんだい？って質問は野暮だろうね」

よく見れば、その人の後ろには5人の少女……いや、精霊。

エイボンの書、水神クアタト、妖蛆の秘密、屍食教典儀、金枝篇の精霊か。

そして彼女達を従える人間の中には……シャイニング・トラペゾヘドロン。

ふぅん……まぁまぁ凄いんじゃないかな。

「で、どんな時計がお望みかな？」

「一番いいのを頼む。だがそんな高級なもので大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い」

実際使わないしね。

最も新しい旧神には多分勝てないだろうし、あっても無駄なだけだ。

にしても、この会話が通じるってことは【あっち】の人間か。

巷で噂の転生者ってやつかな？

「はい、これね」

僕が取り出したのは、少し古びた型の、金色に輝く懐中時計。

それを目の前の人間に渡すと、その懐中時計は魔術構成を解除されて、人間の魂に記録されていった。

「ありがとう」

「お礼はいいよ。君に借りがあるわけじゃないから、若干不平等な気がするけどね」

そう言うと、目の前の奴は困った顔になる。

「君は女の子だから、あーゆー路線もありかな。……愉しんでみる？」

軽く誘ってみる。

精神干渉を含めたから、実質的には強制だけどね。

実際、精霊達は術に見事にかかっている。

だが……。

「……オレ、男だよ……」

「……本当に？」

「……うん」

吉谷吼太。

神である僕ですら性別を間違う男と出会った瞬間だった。

……実に面白いね。

「君、気に入ったよ。僕が時計に憑いて制御をしてあげる。ただし、僕を追い出さないでくれよ？」

「はぁ！？お前、一体何を……」

彼が言い終わる前に、僕は彼の時計に溶け込んだ。

Ｓｉｄｅ　吼太

……何？この展開……。

まぁ、時計貰えたし、いっか。

――せいぜい楽しませてくれよ？後、君に素敵なプレゼントを用意しといたよ。夜をお楽しみにね――

ナイアさんからの念話。

それを最後に、ナイアさんは時計と完全に一体化したらしい。

時計を取り出してみると、ド・マリニーの時計とは明らかに格が違う神気が溢れていた。

「……名前はどうしようかな」

単に時計だと、ド・マリニーと被るので、固有の名前が欲しいところだった。

……

「ナイアルラアトホテップの時計だし、【ナイアの時計】でいっか」

至極安直だけど、言いやすいし、これでいいや。

……で、だ。

「こいつらどーしよ……」

魔導書娘達は今だに夢うつつの中。

仕方ないので、転送魔法で家に送っておく。

場所は変わってユートピア。

何故かというと、ナイアの時計の試験のために、とある奴に協力してもらうためだ。

それは、ディアルガ。

時を統べるポケモンだ。

「じゃあ、頼むぜ」

「グギュ」

ディアルガは小さく唸くと、咆哮をして時を停止させる。

対してオレはド・マリニーを使って時を止め返す。

ここまではいい。問題は次だ。

「……ナイアの時計」

ナイアの時計を発動する。

その瞬間、ディアルガが停止した。

時を操るディアルガですら抗えない力。

それもそのはず、ナイアの時計は時という概念のさらに上位の概念である超時間。それのさらに上位の超・超時間に至るまでを支配出来る。

まぁ、平たく言えば、ザ・ワールドしてるやつに、ザ・ワールド出来るということだ。

これで、時を操るような転生者相手でも楽に戦えるな。

というのも、この前また転生者が現れて、制限無しのザ・ワールド連発されて面倒だったからだ。

ちなみにその転生者はダウンロードしたディアルガのときのほうこ

うでぶっ飛ばした。ポケモンマジパネェ。

……そういや、ナイアさんのプレゼントって何なんだろ？

家に帰ると、何故か電気が暗かった。

「トゥード、今深夜だっけか？」

『いえ、現在時刻は７時３０分です』

ならなんでだ？

不思議に思いながらリビングのドアを開けると……。

パパパパパパァン！

「「「お誕生日おめでとう！コータ（君）！！！」」」

そこにいたのは、リーム達吉谷家一同に加え、なのはやフェイト、はやてを筆頭とした魔法関係のみんな。

……ってあれ？誕生日だっけか？

日にちを携帯で確認すると、スケジュールに【誕生日】とあった。

……まだ前の誕生日が忘れられないせいかな。

「随分遅かったね」

リームが話し掛けてくる。

「ま、ちょっとした野暮用だ。それより！」

皆を一望出来る位置に行き、大声で話す。

「みんな！オレなんかの誕生日を祝ってくれてありがとう！！……っていう台詞も、もう十数回も繰り返したんだな。感慨深いよ。とにかく、今夜はみんなで楽しもう！」

「「「ワァーッ！」」」

そしてパーティーが始まった。

宴もたけなわとなり、プレゼントを渡したいということで、オレはリームの部屋に待機させられてる。

なんでも、オレの部屋に集めてあるらしい。

……普通には渡せないものなのか？テレビとか……。

んな高級なもん要らないのになぁ……。

なんて考えていると……。

『コータ、準備出来たよ……♪』

リームが念話で通信を入れてきた。

さて、行くか。

部屋のドアをノックして、中に入る。

そこには……

芸術品のように美しい裸身を、惜し気もなく晒した、何人もの美女や美少女。

リーム、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、アリシア、なずな、フィニア、羽旺、プリム、ミカ、ライラ、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、キサラ、アリス、リインフォース、リインフォース・ツヴァイ、シグナム、ヴィータ、プレシアさん、リーゼアリア、リーゼロッテ。

計２６人の女性がオレのやたら大きくなったベッドの上にいた。

「……え？」

ナニコノジョウキョウ？ワケガワカラナイノデスガ……

「コータ君、今回のプレゼントは私たちや……／／／／／／」

「私たちのハジメテ、受け取ってほしいな……？／／／／／」

「ダメ…かな……？」

はやて、フェイト、なのはが問い掛けてくるが、舌が上手く回らない。

「ちなみに私たちは……」

「欲求不満の発散ね♪♪」

ロッテとアリアが言ってくる。

とりあえず一つ分かったことがある。

オレは、確実に喰われる側だ。

そう認識した瞬間、オレは野獣と化したなのは達に襲い掛かられた。

目が醒める。

日は、既に昇っていた。

そして、身体が目覚めてくると、腰辺りからむずかゆいような感覚がしてくる。

そちらを見ると、幾つもの血の跡がついたオレのモノを舐めているリームがいた。

「……あ、起きた？じゃあまたコータの濃ゆいみるく、たっくさん出してね♪」

そう言いながら、リームがオレの腰に跨がり、身体を沈めてくる。

「無理……枯れる……」

そんなオレの懇願も虚しく、オレはとことんまで搾られることとなった。

――ハハハハハ！計画通り！――

ナイアさん……あんたのプレゼントってこれかよ……。

## 第百二話　時計とハジメテと計画通り！（後書き）

なっぺ「後書き座談会ヒャッヒャッヒャッ！」

吼太「……」

なっぺ「吼太は搾られすぎて現在意識不明です」

ベス「まさかの２７Ｐ」

なっぺ「書いてて思った。もうコイツ死ぬんじゃないかなって。死ななないけど。ではまず、今回の解説をば」

ナイアさんが時計と一体化した後。

魔導書娘達が吼太の自宅に送られる

←

そこでナイアの第一のトラップが発動。

←

魔導書娘達に仕込んだ魔術により、ラバーズがアレな気分に

←

吼太帰宅

←

アッー！

なっぺ「……っといった具合です」

ベス「そういえばシャマルさんはどうしたんですか？」

シャマルが料理を作る

←

シャマル自身が味見

←

自爆

なっぺ「こんな感じ」

ベス「アホですね」

なっぺ「気にしない。じゃあ感想感謝コーナー！今回はベス！」

ベス「天照大神さん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、高町ゆうきさん、水橋さん、冥府の死神さん、香崎　真琴さん、雨季さん、緋水さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん、ＶＡＺＵさん、海人さん、ＡＩＲＳさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「水橋さんからはメイド服とボーンシリーズと女装設定を、香崎　真琴さんからはネギま式年齢詐称薬（青・赤両方、吼太には”１個ずつ”で、吼太以外の全員にはそれぞれには１００個ずつ）を、緋水さんからは吼太のボイス入り人形（入ってるボイスは「黙って俺を好きになれ」「別にお前の為じゃ……。」「お前のせいで胸の高鳴りが止まらない。この責任、とってくれるよな？」）に詩音のボイス入り人形（入ってるボイスは「貴方の事が好きです」「お兄ちゃん（女子ならお姉ちゃん）大好き！」「優しくしてね……？」）を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「次回は？」

なっぺ「ある程度予定が出来たから、先に雨季さんからのリクエストをやることにしたよ」

ベス「内容はどうなるんですか？」

なっぺ「多分バトル。ただ、場合によっては変わるかも。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　チーム戦でもしてみようか（前書き）

待たせた割にこんな出来ですいません。

今回は雨季さんとことのコラボですよ。

……遅れた理由？察してください。

決してモンハン３ｒｄやってたり、なのポやってたりしたから遅れたわけじゃ（ｒｙ

# 番外編　チーム戦でもしてみようか

Ｓｉｄｅ　吼太

「……」

意識が朦朧としている。

と、いうのもあれだ。

昨日もまた襲われたからだ。

毎日毎日飽きないなぁとか、もうそんな領域。

ただ、このままじゃヤバイ。死ぬって。

来週には次元航行艦所有免許試験もあるってのに。

「はいコータ♪あーん」

ちなみに現在は昼メシの時間。

休みだから家にみんなを呼んで、和気あいあいと食べてる。

ついでに言うと、箸で料理を運んできたのはアリスだ。

……何？羨ましいって？

でもな。これは見ている人が砂糖を吐くような甘い状況じゃないんだよ。

「自分で喰うから！だからこの拘束を外せ！」

そう。バインドやら何やらで椅子に縛り付けられてるからだ。

体力を消費しすぎているため、無理矢理脱出することも敵わない。

転移？出来なくは無いけど……

……あんま本気で抵抗すると、みんな泣き出しちまうから、上手く抵抗出来ないんだよ。

十中八九嘘泣きなやつもいるけどな。はやてとか、はやてとか、はやてとか。あとたまになのはとなずなとか。

「コータ君、今何か失礼なこと考えたやろ？」

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩかな？ベッドの上でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたいのかな？かな？」

「まったく……コータさんは野獣のような性欲を持っているんですね」

どっちがだ。

ピンポーン

「はーい」

フェイトが玄関に向かう。

そして……

「よう。来たぞ、って……」

「詩音はどこ？って……」

「「吼太…お前、そんな趣味があったのか（のね）」」

「誤解だ！」

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太の状況説明が終わり……

「とうとう喰われたのか」
要の第一声はそれだった。
「とうとうって、まるでわかってたような…って、未来から来たなら分かってて当然か」
吼太が呆れたように言う。
「正確な時期を知ったのは今回だがな。だが随分と若いときにヤッてたんだな。最近の若いやつらは……」
「見た目二十歳が何言ってんだか」
「中身は老人だ」
どこがだ、と思った吼太だったが、ここでふと気づく。
「そういや、久遠まで連れて来て、何の用事だ?」
そう、普段ならあまり異世界に連れて来たりしない久遠が来ていたのだ。
現在は狐形態で詩音と戯れている。
「久遠が来たいって言ってたからな。で、用事だが……」
吼太がゴクリと息を飲む。
別段緊張する必要はないはずなのだが、要から発せられる薄い緊張感がそうさせていた。

「暇だから遊びにきた」

「……一つ聞きたい。移動手段は？」

「すずか謹製のアイテムでだ」

この瞬間、吼太は要を無理矢理追い返しても無駄だと悟った。

最近、吼太の地位がやたら下落している気がするが……

何、気にするな。

「で、何をするんだ？」

「決めてない」

どうやら無計画で来たらしい。

「なら模擬戦かな？」

「妥当ではあるな」

そして、くじ引きで対戦相手を決めたところ……

第一回戦

詩音　ＶＳ　久遠

第二回戦

楔ＶＳ吼太

第三回戦

要ＶＳトゥード

となった。

「詩音がよかったなぁ。そしたらイロイロ出来たかもしれないのに」

楔が文句を言っていたが、そこに突っ込む人はいなかった。

最初は詩音ＶＳ久遠。

マスコット（？）対決である。

「行くよ」

久遠が雷撃を飛ばしてくる。

対して詩音は……

「ひぇぇぇぇ～！」

悲鳴をあげながら逃げる（当たらなかったが、避けたわけではない）。

「……つーかなんで詩音が参加してるの？」

思わず吼太が呟く。

そもそも、性格からして戦闘など出来ない詩音が何故この場にいるのか。

答えたのは……

「それは、マスター詩音の意志ですよ。マスター吼太」

トゥードだった。

「詩音の？どういうことだ？」

要がトゥードに聞く。

「詳しいきっかけについては知りませんが、マスター詩音はただ護られてるだけなのが嫌だったそうです。それで、マスター詩音は自身の杖も新たに作り上げたのです」

「んー……」

久遠は最初の攻撃以降、攻撃を止めていた。

彼女に戦えない人を嬲る嗜好は無い。

だが、その均衡を崩したのは、他ならぬ詩音だった。

「……負けない……。もう、逃げないって決めたから……！」

そう言い、詩音が小さな翼型の宝石を取り出す。

「ツインフリューゲル、セーットアーップ！」

『Ａｗａｋｅｎｉｎｇ』

詩音が叫ぶと、宝石が黒と白の二色の翼があしらわれた杖になった。

『シュバルツフォーム』

杖から音声が鳴ると、杖の翼が両方黒に染まり、翼が鋭角的に変形する。

「たぁぁっ！」

詩音が間合いを詰めて、久遠に杖で攻撃する。

『甘い！』

だが、それは久遠のデバイスである妲己によって防がれる。

「まだだよ！」

詩音が言うと、ツインフリューゲルを中心に魔法陣が展開される。

『ホーリートリガー』

ツインフリューゲルから音声が鳴り、魔法陣が光り輝く。

「くっ！」

久遠が回避する。

その脇を、鋭い魔力砲撃が通り抜けていった。

「やるね。なら、フォトンランサー！」

久遠が雷を纏った魔力弾を数発放ち、反撃をする。

「お願い！」

『ヴァイスモード』

今度はツインフリューゲルの翼が白くなり、翼が盾のように形を変える。

魔力弾はツインフリューゲルに防がれ、詩音に届くことはなかった。

「へぇ……。攻撃と防御、二つのモードがあるんだ」

「うん……」

久遠が言った言葉に、力無く答える詩音。

戦いに馴れていないため、あっという間に体力が尽きてしまったらしい。

「これは、久遠の勝ちでいいかな」

「だな」

吼太と要が結論を下し、第一の試合が終わった。

続いて第二試合。

吼太ＶＳ楔。

「勝てる気がしないんだが……」

「さて、やりましょうか」

楔が構えるのに合わせ、吼太が嫌そうに構えた。

そして、一瞬の静寂。

先に動いたのは、吼太だった。

「先手必勝！ボルツ・グラビレイ！烈風！」

手から重力球が【一瞬だけ】放たれる。

そして次の瞬間、楔は吹っ飛んでいた。

ボルツ・グラビレイは回りのもの全てを吸引する重力球だ。

それを一瞬だけ発動する。

すると人間の肉体は反射的にその重力に対して力んで対応してしまう。

そこに今度は圧縮された風を撃ち込むことで、規模こそ桁違いながらも、空気投げをしてみせたのだ。

ここまでした理由はただ一つ。

吼太の頭の中にあったただ一言。

（近寄ったら終わる！）

ちなみに最近の吼太の模擬戦の結果。

ＶＳフェイト　敗北　敗因：フェイトに抱き着かれたことにより、あの夜を思い出してしまったため。

ＶＳシグナム　敗北　敗因：シグナムと剣を打ちあっているときに（ｒｙ

ＶＳ一般男性局員　勝利

ＶＳ一般女性局員　引き分け　理由：もはや女性を見るだけで力が発揮出来ないレベル。

もう、「お前本当にチートか？」と言いたくなるレベルである。

その真相は、なのは達の調教により【女性】という存在そのものに対して逆らえないようにされていたことにある。

ましてや、今回の相手は楔。

吼太としては、「さっさと終わらせないとこっちが負ける！」と考えていたのだ。

だが……

「ふぅん……それだけ？」

やはり空気投げぐらいで負けを認める楔ではなく、再び構える。

その瞬間から、吼太の動きが鈍り始めた。

思考を分断しつつ構えるが、その構えに先程までの抜き身の刀のような闘気は、もはやない。

「じゃあ……今度はこっちから行くわよ！」

楔が一息に距離を詰め、蹴りを繰り出す。

もちろん、楔にとっては本気の一撃だが、わざわざ攻撃前に宣告したのだ。

防がれるのは当然、そこからどうしようかと考えていた。

だが……。

「がぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「……って、え？」

蹴りはノーガードの吼太にぶちあたり、吼太はあっさり吹っ飛ばされた。

起き上がる様子すら無いことから、あの一撃で完全に戦意を失ったらしい。

「……吼太、お前に何があったんだ？」

「情けないですね。マスター吼太」

吼太ＶＳ楔　楔の勝利。

そして最終戦。要ＶＳトゥード。

「よろしくお願いいたします」

「身体能力、魔力１００％解放、アルティメット・ワン発動。アリストテレス、セットアップ」

『Ｓｅｔ　ｕｐ』

トゥードと要が構え、次の瞬間に猛然と駆け出す。

「「ハァァァァァァッッッ！！！！！！！」」

互いの拳と拳がぶつかり合い、衝撃波が辺りにばらまかれる。

……もとい、吼太のみに襲い掛かる、

「なんでだぁぁぁ！？」

ちなみに、理由としては楔は衝撃波が当たらない位置に陣取っているため、詩音と久遠の場合はトゥードと要が衝撃波が行かないようにしていたからである。

とはいっても、向かってくる衝撃波を全てハンドソニック一本で斬り落としているため、吼太も心配はいらないだろう。

「ハッ！」

「当たりませんよ」

要の二撃目をギリギリのところで回避しつつ、すれ違い様に拳を撃ち込むトゥード。

だがその拳も、アルティメット・ワンを貫くには至らない。

「……厄介な防壁ですね」

「防壁とは微妙に違うけどな」

互いに話しながらも超高速で拳撃を出し合う。

「……このままでは埒があきません。早々に決めさせていただきます。……フルドライブ」

トゥードが言うと、膨大な魔力がトゥードから溢れだし始める

「ならこっちも、ってな。限界突破、１５０％解放」

要も自身の力をさらに引き出す。

とはいえこれは試合。真の本気には程遠い。

そして、今まさに動き出そうとしたとき……

「邪魔だ！どけェ」

いわゆる暴走族と呼ばれる類いの集団が飛び込んできて、詩音と久遠を僅かに引っ掛けた。

「痛っ」

「ひぇ！？」

いくらケガは無いとはいえ、バイクに引っ掛けられれば吹っ飛ぶのは自然の道理。

「ヒャッハー！どいたどいたァ」

「ガキとオッサンとババアはすっこんでろォ」

彼等は無知だ。

自分が、どんな存在に喧嘩を売ったのか分からないのだから。

故に、愚かな彼等が辿る道はただ一つしかない。

ドガァァァ

先頭を走っていたバイクが何かに引っ掛かり、後続のものも巻き込んで盛大に転倒する。

「ギャアアアアアアアアアアアア」

「一体何だって……これは」

見れば、バイクの車輪に鉄パイプが挟まっている。これが引っ掛かったらしい。

だが、普通ならこんな状態になるはずがない。

当たり前だが、走行中の車輪は高速で回転しており、その隙間に鉄パイプが入るなど、普通は有り得ない。

もっとも、人の手を使ってもまず入るものではないのだが、激昂した彼等にはあまり関係無かったようだ。

「痛てて……舐めた真似してんじゃ…ねぇ……」

キレた一人がタンカを切ろうとしたのだが、その声は次第に尻すぼみになっていく。

気づいたのだ。自分達に当てられてる殺気がどれほど凄まじいものなのかを。

「オイ……人傷つけといて言う言葉がソレか？」

「教育が必要だな」

「久遠と詩音を傷つけてただで帰れると思ってるの？」

「最低なあなた達には、最低な結末を用意して差し上げましょう」

ここに、四人の修羅が降臨した。

「なんか、うやむやになっちまったな」

「まぁどっちにしろこっちの勝ちだったけどな」

チートじゃ済まないチーム（仮称）ＶＳファンストチーム（仮称）

チートじゃ済まないチームの2勝1未決着により、チートじゃ済まないチームの勝利。

おまけ

「じゃあ勝者の特権ってことで詩音を…」

「させませんよ？」

勝負の後、詩音に襲い掛かろうとしている楔と、それを阻止するトゥードがいたとか。

## 番外編　チーム戦でもしてみようか（後書き）

なっぺ「後書き座談会だぜぜぜ！」

吼太「とうとうバグったか」

なっぺ「オレ、バグキャラ化！」

吼太「そっちの意味じゃねぇ」

なっぺ「さて、活動報告で『吼太のマテリアル見たいー？』って聞いたら色んな人が見たいと言ってくれたよ」

吼太「そんなに見たいのか」

なっぺ「タイミング的に次回に入れないとしばらく入れられなくなるから、次回に入れる予定。まぁ予定変わる可能性も高いけど。ついでに、また遅れます」

吼太「待たせすぎだ」

なっぺ「でもぉ！でもあとリインフォース編をクリアだけでマテリアル三人揃うんだよ!?そしたら雷刃たん使ってアーケードで無双するんだい！」

吼太「話し方キモいから。つーか雷刃は強キャラじゃないらしいぞ？」

なっぺ「愛があるから大丈夫だ、問題ない。感想感謝コーナー行き

まっせ！」

吼太「だから話し方がキメェ。高町ゆうきさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、海人さん、七つ夜&夜つ七さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、緋水さん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、天照大神さん、朱神優希さん、雨季さん、ＲａｉＮさん、月光閃火さん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは赤飯（ドラム缶一個分&媚薬&ａｍｐ;精力剤入り）を、緋水さんからは避妊薬と媚薬を、香崎　真琴さんからはジェイル印の精力剤を、朱神優希さんからは精の付く食べ物を頂きました。ありがとうございます！」

吼太「贈り物待てコラ！」

なっぺ「え？展開的に当然じゃね？」

吼太「お前のせいだろうが！」

なっぺ「知らないなぁ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百三話　Ｓのビギンズナイト／始まりは炎の中で（前書き）

前回から数ヶ月程跳んでることになってます。

Ｉｆはしばらくお待ち下さい。

# 第百三話　Sのビギンズナイト／始まりは炎の中で

Ｓｉｄｅ　三人称

「おとーさん……おねーちゃん……ヒック……ぐす……」

少女は泣いていた。

自身の家族が心配だから。

周りを囲う炎が熱いから。

そして……一人が寂しいから。

本来なら様々な人で溢れかえっているはずのその場所は、今は業火燃え盛る地獄と化していた。

少女は歩いた。

少しでもこの場所から離れるために。

だがその足どりは重く、決して速いものではない。

そこに、何度か起こった爆発によって脆くなっていた女神の像が崩れてきた。

少女の力では、もはや避けることも叶わない。
全てを諦めた少女は、せめて死の恐怖を和らげるためにと目をつむった。

だが、神は少女が死ぬのを赦さなかったらしい。

「光射す世界に、汝等暗黒、住まう場所無し！渇かず飢えず、無に還れ！」

呪文が響く。

その、荒々しいながらも優しげな音色を聞いた少女は、ふと目を開ける。

そこには……

「レムリアァァァ…インパクトォォォ！！！」

赫き《あかき》鎧をその身に纏った、圧倒的存在感を放つ存在。

それが神の手のようにも見えるそれを女神像に当てると、女神像はその破片にいたるまで、発生した結界に閉じ込められる。

「昇華ァ！」

もう一度声が響くと、結界が収縮を始め、やがては消滅する。

「ふぅ……よし！」

「よし！じゃないよコータ君！レムリア・インパクトは許可が出るまで使っちゃダメだって言われてるでしょ！？」

今度は女性の声がする。

声のしたほうからは、白い綺麗な服を着た魔導師がこちらに向かってきていた。

「緊急事態だったんだ。しゃあねぇだろ」

「もう……後でどうなっても知らないよ！？」

「あいあい。んじゃ、この娘を頼む」

鎧の人が少女を抱き上げ、白い魔導師に渡す。

少女はそこで、鎧の人が驚くほど華奢なことに気づいた。

女性なのかな、とか思ったほどだ。

「うん。……もう安心だよ。安全なところまで、一直線だから！」

『ロードカートリッジ』

白い魔導師の持つ杖から薬莢が排出される。

「ディバイィィーン、バスタァァァーーー！！！」

桜色の砲撃が幾重もの壁を貫き、外までの道を作る。

「お前も大して変わんねーじゃねぇか…」

「……コータ君、後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなの」

「いっ！？す、スマン！オレが悪かった！許してくれ！」

「だーめ♪どんなオシオキしようかな～♪」

その、まるで夫婦漫才のようなやり取りを聞いている内に、少女はやがて自然に笑顔を取り戻していた。

スバル・ナカジマ。

これが少女だった彼女と、チート魔導師との初めての出会いだった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「トゥード、他に要救助者反応は？」

『マップに位置を表示します』

オレの前にマップが展開される。

そこには、行くべき先である二カ所が光点で示されていた。

「ちょっち遠いな……」

『やはり大半の能力の使用に制限がかかっているのは痛いですね』

オレ達は現在、管理局員として第一線で活躍している。

そのため、尋常じゃない量のリミッターをかけられていた。

もっとも、オレにはリミッターなんてあって無いようなものだけどな。

唯一殆ど制限がかかってないのは、ガードスキル（ハーモニクスを除く）ぐらいだ。

『ディレイの使用を推奨します』

「だな。ガードスキル、ディレイ」

ディレイを発動し、高速で移動しはじめる。

やがて、何人かの人が集まっている場所に近づいたとき、同じように高速で動いている金色の閃光が見えた。

「あれって……おーいフェイトー！」

吼太が呼ぶと、金色の閃光がこちらに近づいてきた。

そこにいたのは、やはりフェイト。

オレの恋人の一人で、婚約者で、大切な仲間だ。

「吼太！よかった。そっちは大丈夫だった？」

「女の子一人を救出。今、なのはが安全な場所まで運んでる」

「そっか。じゃあ後はこの先にいる人達で終わりかな」

『この空港内に他に生体反応は無いため、間違いないかと』

フェイトの予想をトゥードが肯定する。

『サー、そこの壁の向こう側です』

「んじゃ、てっとり早くドリルで…「螺旋力関連の力を使用するには許可が必要でしょ？」……へーへー」

不便ったらないよチクショウ……。

ギガドリルまで封じるなんて……。

「怨むぞまっくろくろすけ！」

まぁ、それはともかく…。

「じゃ、頼むぞフェイト」

「うん。行くよ、バルディッシュ」

『イエス、サー。サンダースマッシャー』

フェイトがサンダースマッシャーで壁をぶち破る。

「管理局の者です！助けに来ました！」

フェイトが先に入り、中の人達に声をかける。

「管理局！？」

「よかった、助かった…」

そこには、青いフィールドバリアで守られた要救助者達。

……やっぱあいつもいるのか。当然だけど。

「このバリアは……？」

「それは……」

要救助者の一人が言い切る前に走り出す。

答えを出す者（アンサートーカー）をフルに使い、最短距離を突っ走る。

やがて、吹き抜けの階段につく。

「トゥード、反応は？」

『７ｍ上です』

トゥードが告げた瞬間、７ｍ上辺りの階段が崩れる。

そこから人影が落下してきた。

「ヤバイ！」

背中のマントを伸ばし、その人影を掴み、引き寄せる。

「ふぇ…？」

マントの中から現れたのは、一人の少女。

そう、さっき助けたスバルの姉、ギンガ・ナカジマだ。

「大丈夫か？」

「えっ？……あ、はい」

「そっか。よかった。トゥード、他には？」

『目標の反応、0。全員救出出来たようです』

「んじゃ、さっさと出るぞ。……ギガドリルの許可は？」

『先程、最低ランクでの使用が許可されました。脱出に使用する分には十分かと』

「オッケー！ぶち抜くぜ！」

『どうぞ』

右手にドリルを顕現させ、上に向ける。

そして、マントを使って勢いよく飛び出した。

ドリルが壁を突き破り、やがて静かな夜空に出る。

「ふぅ……」

ぼちぼち完了かな？

空港を見ると、少しずつ凍って行く様子が見てとれた。

これはリームじゃないな。じゃ、やっぱ……

「コータ君！」

そんな風に考えていると、不意にオレの名前が呼ばれた。

この声は……

「はやてか。鎮火は？」

「無事終了や」

「そっか。はやて、お疲れ様」

「コータ君もお疲れ様や。ホテルの部屋とってあるから、今日ははよう休もう？」

「おう。じゃあこの娘を届けてくる」

「いってらっしゃーい」

はやてと分かれて、また空をゆっくり飛ぶ。

「あの方って……八神はやてさんですか？」

「ん、よく知ってるな」

「知ってるも何も、次元世界でも十数人しかいないＥＸランクの魔導騎士ですもの。一般常識ですよ」

「そりゃそうか」

そして、救護隊にギンガを引き渡す。

「お疲れ様です、提督！」

「おつかれー」

……なんで提督かって？

次元航行艦所持してて、さらに艦長務めてて、色んな事件（何故か一般人から考えたらかなり危ないやつばっかり）を解決してたらこうなった。

……

「提督……？……あ、あのっ！お名前を……」

救護隊の担架に乗せられたギンガが名前を聞いてきたので、いつものに名前を付け加えて、こう答えておいた。

「通りすがりのチート魔導師、吉谷吼太だ。覚えておけ」

その後、ギンガがその名前に驚き、大きな驚愕の声をあげるのだが、それはまた別のお話。

## 第百三話　Ｓのビギンズナイト／始まりは炎の中で（後書き）

なっぺ「後書き座談会でゲソ！」

吼太「海に還れ」

なっぺ「字が違う！？」

吼太「じゃあ換えれ」

なっぺ「チェンジ！？」

ベス「というか恋人になったんですね。フェイトさん」

なっぺ「つーかあの場で襲った全員とだけどね。毎日搾られて耐性が付きつつある吼太」

吼太「まぁ最近は何とかなってるからな」

なっぺ「あと、女性関係のトラウマに関しては多少改善されました。詳しくはＳｔｒｉｋｅｒＳの設定に書きますよ～」

吼太「楽しみに……とは言えないけど、まぁ気が向いたら見てくれ」

ベス「Ｉｆ話はどうなっているんですか？」

なっぺ「出だしに苦労してる。初戦の相手は決まってるんだけどなぁ……」

吼太「結構楽しみにしてる人いたぞ？」

なっぺ「ちゃんとあげるのでお楽しみに！感想感謝コーナー行くぜよぜよ！」

吼太「天照大神さん、七つ夜＆夜つ七さん、バルディッシュさん、雨季さん、高町ゆうきさん、水橋さん、朱神優希さん、緋水さん、香崎　真琴さん、ＶＡＺＵさん、ＲａｉＮさん、海人さん、ライさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはバルディッシュ用ライオットブレード？プログラム＆ライオットザンバー？プログラム、レイジングハート用ストライクカノンプログラム＆フォートレスプログラム、グラーフアイゼン用ウォーハンマープログラムを、水橋さんからはバニーガールの衣装を、緋水さんからは吼太に一時間だけ女性に対する恐怖を打ち消す薬と吼太達が裸で寝てた時の写真を、ＶＡＺＵさんからは漢の誇りを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「Ｆｏｒｃｅの武装あるならオレ必要無いよね？」

なっぺ「ついでに言えばＳｔｒｉｋｅｒＳ編にはオリキャラ出ないよ」

吼太「……オレは誰と戦うんだ？」

なっぺ「それは後々のお楽しみ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百四話　Eのビギンズナイト／二人の赤髪少年（前書き）

二つ目のビギンズナイトは、あの雷騎士ですよー。

ちなみにビギンズナイトとは、仮面ライダーWに出てきた言葉で、【今の生き方が始まった夜】という意味です。

# 第百四話　Eのビギンズナイト／二人の赤髪少年

Ｓｉｄｅ　吼太

「クソッ、攻撃が通らない！？」

「怯むな！相手だって人間なんだ！こっちの攻撃が効いていないわけがない！」

今オレは大量の魔力弾を受けまくってる。

……何故かって？

そりゃ管理局員だし、犯罪組織の鎮圧ってやつ。

まぁ断ってもよかったんだが、通報した人の名前が気になって、とりあえず来てみたんだ。

あと犯罪者諸君。クロスオーバーフォームの鎧を貫きたいなら最低限スターライトブレイカー以上の攻撃手段を手に入れてからにしなさい。無駄だから。

ま。スターライトブレイカーでも傷一つつかないけどな。この世界のなのはのスターライトブレイカーだって貫けなかったし。

……さてと。終わらせるか。

「バリアジャケットは……ちゃんと着てるのか。なら大丈夫だな」

ライドブッカーから二枚のカードを取り出し、腰のディケイドライバーに装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＡＸＥＬ】！　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＡＸＥＬ　ＴＲＩＡＬ】！』

仮面ライダーアクセルを経由し、仮面ライダーアクセルトライアルへと変身する。

さらにジッパーの中から一本の剣を取り出す。

【メダジャリバー】。

人の欲望の結晶、セルメダルを使うことで威力を上昇させられる剣だ。

そして、メダジャリバーのスロットにセルメダルを最大数の三枚、装填する。

『Ｔｒｉｐｌｅ！Ｓｃａｎｎｉｎｇ　Ｃｈａｒｇｅ！』

セルメダルに秘められたエネルギーが解放され、強大なエネルギーを手にした剣を片手で持つ。

さらに、ディケイドライバーにカードを装填した後バックルを外し、上に放り投げる。

その瞬間、オレは超高速の世界に突入した。

その状態で、メダジャリバーを何回も振る。

その回数は数十、数百、数万……。

質よりも数。例え一撃が軽くても連撃による総合威力で相手を凌駕する。それが仮面ライダーアクセルトライアルの戦い方。

そこに、一撃の威力に優れるメダジャリバーを使う。

それによる答えなど余りにも明白。

やがて、重力に従い落ちてきたディケイドライバーのバックルを、メダジャリバーを持っていない方の手で受け止める。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ａ、Ａ、Ａ、ＡＸＥＬ】！』

「９．３秒。それがお前達の絶望までのタイムだ」

オレが言い切った瞬間、犯罪者達の存在している空間が微塵に斬られ、歪む。

だが、歪みが発生していたのは一瞬。その歪みは瞬時に修復される。

歪みが発生したエネルギーと修復されたエネルギー。二つの膨大なエネルギーを受けた犯罪者達は全員がバリアジャケットを完膚無きまでに破壊され、意識を刈り取られた。

「いやはや、助かりましたよ。あの犯罪者共にはほとほと困っておりまして」

「礼はいいですよ。犯罪者を逮捕するのも管理局の仕事ですから」

あれからオレは、犯罪者達を現地の局員に任せて、協力者だったとある人に報告に来ている。

「しかし、まさかあなたが来てくれるとは思いませんでしたよ。吉谷吼太様」

「様はやめてくださいカーターさん。慣れてないんで」

「しかし……」

そう言いつつも言葉を取り下げてくれた。

「お父さん、外に遊びに行ってきます！」

ふと、そんな声が目の前の人物の足元から聞こえてきた。

「あぁ、行っといで」

「うん！」

まだ声変わりなどまだまだ先の感じがするその声を発していたのは、赤い髪と眼が特徴的な少年。

「お母さん、行ってきまーす！」

「はいはい。遅くならない内に帰ってくるのよ、エリオ」

「はーい！」

エリオ・モンディアル。

本来の歴史ならば、機動六課に入る少年だ。

だけど、オレはエリオを入れるべきでは無いと思っていた。

スバルはまぁ憧れからだから仕方ないし、他二人も戻れない、或いは辞めたくない明確な理由があった。

だが、エリオだけは違う。管理局の介入と、この二人の親の拒絶さえ無ければ、少し魔法が使えるだけの平凡な少年として、平和を謳歌出来るはずなのだ。

だからこそ、オレはこの近辺の局員の素性を一人一人調べ、あんな悲劇が起こらないような人員のみを近辺に配置した。

提督になったからには、これぐらいしてやらねぇとな。

……まぁ、残り二人もなるべく入らないような道を選ばせるつもりではあるんだけどさ。

「……ところで吉谷提督は酒などは嗜まれるのですかな？」

「いえ、殆ど呑みませんね。私の故郷では２０からが成人。そして成人しなければアルコールは嗜好品として使ってはいけない法がありましたので」

「それは残念だ」

そうは言いながらも、陽気に話し掛けてくるモンディアルさん。

……わからねぇな。なんでこんな人がエリオを救えなかったんだ？

「では、時間が押しているのでこれで」

「そうですか？もう少しゆっくりしていっては……」

「提督も楽ではない、ということですよ。では」

夜。オレはオオナズチを武装召喚（リアライズ）して隠密状態になり、気配を伺っていた。

地球の本棚によれば、あの事件が起こるのは今日。さらに言えば、今日さえ凌げばもうあの事件は起こらない。

とはいえ、各所への根回しは済んでいるから、念のため監視している程度だが。

……仕事はどうしたか？ハーモニクスで増えて対処してますが何か？

そしてさらに時間が経ち………。

「………来ない、みたいだな」

『そのようですね』

これでエリオは平和な道を進める。

いくら管理局が人員不足だからって、何の罪もない人の人生を奪ってまで局に入れる必要なんか無いのだから……。

だが、そのとき……

「グォォォォォアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

何か、獣の鳴き声が響いた。

Ｓｉｄｅ　エリオ

最初は狼か何かだと思った。

だけど、それは違うとすぐに分かった。

青白く光り輝く躯、強い膂力を誇るのが容易に想像がつく脚。

それは、まさに【王】だった。

「グルルルル」

奴が、僕の家を見る。

そして、窓ガラス越しに奴と僕の目が合った。

「……グォ…！」

目をつけられた。

そうわかった瞬間、僕は外に飛び出していた。

このままではお父さんとお母さんに被害が出てしまう！

「こっちだ！」

僕が森の中に行くと、奴の足音が聞こえる。

どうやら、上手くこっちに引きつけられてるらしい。

だが、次の瞬間、僕の身体が吹っ飛ぶ。

近くを舞う光の玉……。

奴はそこそこの距離があった僕との間を一瞬で詰めてきたのだ。

そして、奴はその大木のような腕で僕を押さえつけてきた。

奴とまた目が合う。

その目の中にあるのは、生まれた頃から生死の境をさ迷うような戦いを繰り広げ、勝ち続けてきた者だけが手に入れられる何か。それに満ちていた。

「グォ……ガァァァァ！」

奴が口を広げる。

僕みたいな小さな存在ぐらい、簡単に噛み砕いてしまえるように見える大きな口が僕を……

「百鬼夜行（ピック）！」

「グォゥ！？」

Ｓｉｄｅ　吼太

なんでジンオウガがここにいるんだ！？野生の生物扱いってか？

とりあえず何にしろ、こいつを殺させてたまるかよ！

「変身ッ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

クロスオーバーフォームになり、肩のブースターを吹かしながらジンオウガにタックルして、エリオから引き離す。

「グォォォォォォォォォォォォォォォ！！？」

「一気に決めるぜ！」

脚部のシールドを起動し、飛び蹴りの体勢に入る。

まぁ、正式な技名は違うんだけど、ここは怒りを篭めて違う技名を言ってみる。

その名も……

「よくも平和に暮らしていた少年を襲いやがったなキィィィィィィィィィィィィィィィック！！！！！！！！！」

アトランティス・ストライク……もとい、よくも平和に暮らしてい

た少年を襲いやがったなキックを喰らったジンオウガは、錐揉み回転しながら派手に吹っ飛んでいった。

「グォゥ……グォゥ……」

あの後気絶から立ち直ったジンオウガは、脚を引きずりながら逃げていった。

「何の騒ぎだ!?」

今の騒ぎに驚いて起きてきたモンディアルさん夫妻がこっちにやって来る。

「これは……」

辺りはジンオウガが暴れたことにより、酷いことになっていた。

木々は倒れ、地面は刈れ、所々が超帯電状態となっていたジンオウガが放った雷で焼けていた。

「お父さん……！」

不安に震えていたエリオがカーターさんに近づこうとした。
その時だった。
――バヂンッ――
「痛っ！？」
「えっ……？」
エリオから無意識に放たれた電撃が、近くにいたカーターさんに当たったのだ。
「ご、ごめんなさい……お父さ「……出ていけ」……え？」
「……こんな危ない奴だとは思ってなかった……やはり、お前は本物じゃないということか……」
まさか、カーターさん……勘違いしてるのか！？
これを引き起こしたのがエリオだと思ってる！？
「え？それって……？」
ヤバイ！止めないと……

だが、オレが動いたのは、僅かに遅かったらしい。

「聞こえなかったのか？お前はやはり本当のエリオではなかった。だから、出ていけ！」

「！！！」

エリオの顔から、何かが消える。

「そんな……お母さん……」

エリオが行き場の無くなった手を母親に向けるが……

「妻に触れるな！」

カーターさんがエリオの手を叩いて止める。

「う……あ……」

エリオがその場に崩れ落ちた。

Ｓｉｄｅ　三人称

あれから数時間が経ったころ。

「ん……」

エリオは目を醒ますと、自分の身体に一枚のマントがかかっていることに気づく。

「お、目ぇ覚めたか？」

声に気づいたエリオが、声がするほうに顔を向けると……

そこには暖かな焚火と、焚火に照らされていり、綺麗な紅い髪と赤い眼をした、エリオと同い年ぐらいのかわいい女の娘がいた。

「……先に言っとくが、オレは男だ」

「嘘！？」

……もとい、男の娘がいた。

「本当だ。ついでに、オレはお前より年上だ。１６歳」

「……ちっちゃい」

「言わないでくれよそういうことは……」

紅い髪の男の娘こと、吼太がｏｒｚの体勢になる。

やはりショックらしい。

「で、でもかわいいですし……」

「かわいいかわいい言うなぁー！」

もはやどっちが年上か分からないような状態である。

「……まぁ、それは後々話すとして……。お前、これからどうするんだ？」

「……わかりません」

エリオにしてみれば、突然自分の全てを否定されたのだ。そういう言葉が出てしまうのも仕方ないだろう。

「……じゃ、聞き方を変えるぞ。お前は【どうしたい】んだ？」

「……お父さんとお母さんに、会いたいです……」

「……なら、行くぞ」

「えっ！？ちょっと待って……」

「……何の用ですかな？」

「オレはただの付き添いです。用があるのは、こいつですよ」

そう言い、吼太は後ろにいる少年――エリオ――を前に出す。

「……あの……」

エリオが話を切り出す。カーターは黙っているが、話を聞かないというわけではないらしい。

「僕は……エリオ・モンディアルではないです。確かに、それは覆せないこと。だけど、それでも……。僕は、あなたたちに育ててもらえて、嬉しかった。だから、あなたたちが望むなら、僕はここを出て行きます。エリオ・モンディアルではない、ただの人として……」

エリオが言い切ると、カーターさんが席を立ち、後ろを向く。

その態度を見て、エリオは落ち込んだような、「あぁ、やっぱりか」というような表情を浮かべた。

が……。

「私が言うことは変わらん。出ていけ」

「……はい」

「……くれぐれも、エリオ・モンディアルの名に恥じぬ行動をしなさい。私からはそれだけだ」

そう、カーターは言った。

「！　……はい、お父さん…！」

「さて、エリオ。少し相談があるんだが」

「はい、何ですか？」

話が終わった後、吼太とエリオは一緒に歩いていた。

とくに行き先が無かったエリオは、吼太から「話がしたい」と言われ、不思議に思いながらもそれに付き合っていた。

「管理局に入ってみないか？そこで、オレの手伝いをしてほしいんだ」

「管理局……？」

ここで吼太が管理局に誘ったのには理由がある。

下手に離しておくと、プロジェクトＦの遺し子たるエリオは様々な組織から狙われることになる。

ならば、いっそ自分の部下にしたほうが庇護しやすいと吼太は考えたのだ。

「……出来るでしょうか？クローンでしかないこの僕に…」

「出来るさ。確かにお前はエリオ・モンディアルのコピーだが、他の誰でもない、【エリオ・モンディアル】としてここにいるんだ。やれないわけがない」

そこで一呼吸おき、吼太はエリオに向き直る。

「お前がやりたいと思ったことを、精一杯やれ。足らないとこはオレが補ってやる」

「……はいっ！」

こうして、エリオ・モンディアルは管理局へと入局することとなった。

# 第百四話　Eのビギンズナイト／二人の赤髪少年（後書き）

なっぺ「後書き座談会、始めたりしちゃったり？」

吼太「疑問形にすんな」

なっぺ「エリオ、結局お前が誘って入れちまったな」

吼太「他に方法が思い付かなかったんだよ！」

なっぺ「つまりはバカと！うっかりに加えてバカとはな！頭弱いチートかお前は！？」

吼太「頭弱いとか言うな！」

なっぺ「まぁアホの娘でも好きな人はいるから安心しろ」

吼太「娘の字がおかしいだろ！？」

なっぺ「気にすんな。感想感謝コーナー行くぞ！」

吼太「バルディッシュさん、天照大神さん、高町ゆうきさん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、朱神優希さん、ＲａｉＮさん、てっちゃんさん、ながも～さん、香崎　真琴さん、海人さん、ライさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、ＡＩＲＳさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからは吼太のフィギュアと詩音のフィギュアを、七つ夜＆夜つ七さんからは【こーたさんゲームシリーズ】の新作を、

朱神優希さんからはラムダドライバのシステムを、ＶＡＺＵさんからはＶＡＺＵさんと翔の（がんばれ）メッセージ付の花束を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「ラムダドライバはトゥードに組み込んだぞ」

なっぺ「ゲームは一般局員が各一個ずつ、ラバーズが各三個ずつ買いました」

ベス「次回はどうなるんですか？」

なっぺ「次回のキーワードは【召喚】。……まぁ答えに限りなく近いですが。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百五話　Cのビギンズナイト／転生者と勘違いと小さな勇者（前書き）

エリオ編がギャグ入れなかったせいか、全体的にギャグチックに……

いや、やろうと思えば出来たんですよ？シリアル。

……じゃなかった。シリアス。

# 第百五話　Cのビギンズナイト／転生者と勘違いと小さな勇者

Ｓｉｄｅ　吼太

「ここか……」

「ゼェ……ゼェ……」

管理局の上層部からの名指し任務。

とある管理世界にて凄まじい魔力反応を感知したから調査をせよ。

……ってことで来たんだが、協力してくれる現地部族が山の頂上に住んでいるため、修業を兼ねてグラビレイかけながら徒歩で登ってきたんだが……。

「ま、待って……」

同じく修業のためについて来たエリオが死にかかっている。

……さすがにキツすぎたか？

「しゃーない、休憩するか」

エリオのグラビレイを解除して休憩をする。修練の門の中に入れば中でまた修業出来るし、ナイアの時計を併用すればいくら休んでも時間は経たないし。

「すいません……お休みなさい……」

そう言うとエリオは疲労から寝てしまう。

このままでは身体に悪いので、サイフォジオを使いながら、ジッパーから出した毛布（ガウシカの毛皮製）をかける。

「さて、と。じゃあオレは……」

Ｓｉｄｅ　エリオ

ふと、目が覚める。

だんだん身体の感覚が戻ってくると、自分に毛布がかかっているのに気づく。

そして、身体を起こすとそこには……

赫（あか）い鎧に、マントを纏った姿。

吼太さんの強化形態、アームドアップの状態だ。

そこから、吼太さんがジッパーを展開すると、中から大量の武器が現れる。

剣、槍、斧、鎌、爪……

共通してるのは、何かを切ったり裂いたりする道具ってところかな？

その大量の武器に加え、吼太さんの身体から幾つかの光球が現れ、
それらが吼太さんの身体の周りを高速で回りはじめる。

だけど、次の瞬間にはその全てが消え去り、無数の斬撃が発生して、
それらを浴びた吼太さんの鎧が砕け散っていた。

「ガァッッ！……チッ、やっぱりこの鎧じゃダメか……。もっと
上のじゃねぇと……」

吼太さんの足元を見ると、かなりの量の傷があった。

恐らく、僕が目覚めるまでに何度も、何度も練習してたんだろう。

……僕も、強くなりたい。

そう、心から思った。

Ｓｉｄｅ　三人称

ル・ルシエ。

アルザスの地に住む少数民族で、竜と共に生きる人が営む地。

そこの端にある何の変哲も無い岩の上に、一人の少女が座っていた。

後にキャロ・ル・ルシエと名乗るこの少女に付き従うは、使役竜フリードリヒ。

一人と一匹は、そこから空を見つめていた。

何か意味があるわけではない。

理由など無いが、したいことをしているだけだから当たり前といえば当たり前だ。

だが、彼女は知らなかった。

足元から何かが来ていたことに……。

「「うおぉぉぉーッッッ！！！」」

気合の篭った声が響いた。

そして、キャロの足元に誰かの手がかかる。

「よいしょお！」

「フッ！」

そこから上がってきた二人の少年。
それに驚いたキャロは……。
「キャアァァァァァァ！！？」
「グギュアァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」
フリードリヒを真の姿に戻してしまっていた。

「すみません。我が村の子が……」
「いえ、気にしないでください」
外には、吼太の拳の一撃で昏倒させられたフリードと、登嶄（登山ではなく）の疲れから気絶したエリオがいたりする。
「ところで、件の魔力反応は？」
吼太が村長に問いただす。
「この山の、もう一つ向こうの山の中からです。あの山には我等が護り神が眠っていると伝えられているのですが、どうも最近活動が活発化しているようで……」

「（護り神っつうと、ヴォルテールか？）……分かりました。見てきましょう」

「ありがとうございます。案内はあの娘に」

村長が指差した先にいたのは、キャロ。

「……私ですか？」

「うむ」

「本当にですか？」

「うむ」

「嘘じゃなくて？」

「うむ。はよう行け」

「はぁ……。分かりました」

「ん。……エリオー、大丈夫かー？」

吼太が倒れているエリオに声をかけるが、返事は無い。

ただのしかばｎ……もとい、気絶したままのようだ。

「しゃーない。運ぶか」

そう言うと、吼太がエリオと、ついでにフリードリヒを背中に乗っ

ける。

端から見れば、寝てしまった弟を、兄がおんぶしているようにも見えるその光景は、どこか微笑ましいものだった。

「よし、行くぞ」

Ｓｉｄｅ　吼太

「ここです」

キャロに案内されて着いた場所には、小さな祠が一つ。

だが、この祠にはかなりの封印が施されているらしく、解呪するには少々時間がかかりそうだ。

……その時。

カッ……！！！

一瞬の出来事だった。

気づいた時には、ル・ルシエの村は、山は消えていた。

後に残っていたのは、巨大なクレーターのみ。

「……え？」

キャロは現実を受け入れられないらしく、呆然と立ち尽くしていた。

「一体何が……ッッッ！？」

オレの、緊張により極限まで高まった視覚はその存在を捉えた。

クレーターの中心に、誰かがいる。

「お前ら！ここで静かにしてろ！」

エリオとフリードを降ろし、ナイアの時計とシャンタクを使って一瞬で接近する。

「テメェ……何をした！！」

「アァ？見てわからねぇか？消し飛ばしたんだよ。山を」

「……人が、村があったんだぞ…？」

「あ、そうだったのか？気づかなかったわ。ギャハハハハ！！」

端的に言おう。

オレはコイツが嫌いだ。

「ま、ここアニメの世界だし？何やっても殺人にならないから大丈夫じゃん？……何、キレてんの？うっわ、ダッセ～！」

前言撤回。

オレはコイツが大嫌いだ。

「スィーリングスカル…！」

「……なっ！身体が……」

口は動かせるようにしてやる。

せいぜい、いい声で哭け。

「鬼哭斬波刀【真打】。貫け」

鬼哭斬波刀【真打】を敵の身体に突き刺す。

肉に触れた刃からは、高圧電流が流れ、敵の身体を内部から灼く。

「痛だだだだだだだ！！！！？」

「そんなぐらいじゃ死なさねぇよ。もっと苦しめ。ビレオルード」

オレの右手に光のリングが出来、それを敵に押し付ける。奴の身体はゆっくり、ゆっくりと融解していく。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

「苦しいか？よかったじゃねぇか。苦しいって感じられるってことは、生きてるってことなんだからよ。……テメェに殺された奴はそんな感覚を二度と味わえねぇんだぞ！」

「や、やめ……」

「懇願なんて今更聞くか……」

その時。

山が、爆ぜた。

中から顕れたのは、圧倒的な存在感を持つ、一体の竜。

……真竜　ヴォルテール。

「……そうだ、キャロ！エリオ！フリード！こんなクズに構ってる暇はねぇ！」

シャンタクを使い、ヴォルテールの元に向かう。

……が

「グォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

ヴォルテールは凄まじい速度でその拳を振るい、侵入を阻んでくる。

「チッ！厄介な……」

「グォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

ヴォルテールが咆哮と共に、竜の吐息（ドラゴンブレス）を放つ。

間一髪避ける。

行き場を失った竜の吐息は、地面に縫い付けられていた転生者にぶちあたり……。

後には、辛うじて原形を保った鬼哭斬波刀【真打】以外、何も残らなかった。

「……威力、原作より高くなってないか？」

Ｓｉｄｅ　エリオ

うん……。

ここは……？

「ってえぇ！？どこここ！？」

辺りを見ると、僕は何か巨大な人型の何かの肩に乗っているらしいことはわかった。

凄まじい勢いで腕が動かされているので、下手に立つと吹っ飛ばされてしまいそうだ。

「そうだ、確か山の村に行って、そこで……気絶してたのかな？」

なんとか、肩の出っ張りに手をかけながら辺りを見回すと、この巨大な人型が何か小さな人影に拳を振るっていることがわかった。

「あれって……まさか……」

「グォオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「どりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

小さな人影と、この人型の拳がぶつかり合い、衝撃波を引き起こす。

間違いない。こんなデタラメな力を持っているのは吼太さんしかいない。

「きゅく～……」

ふと、足元に白い竜が目を回しているのに気づく。

そういえば、あの女の子は……？

「……いた！」

僕よりもっと首に近い位置に、彼女は立っていた。

足元に魔法陣が展開してるから、もしかしたらこの人型はあの娘が……？

「何にしても、止めなきゃ！」

こんな大怪獣が尻尾巻いて逃げ出すような戦いを繰り広げてたら、周りに迷惑だろうし……。

なんとかキャロに近づくと、彼女が涙を流していることに気づいた。

……いや、それだけじゃない。

この人型も、泣いている。

血の涙を流している。

「……なが……さな……」

……ん？今、何か……

「あいつのせいで、村の皆が……赦さない……！！！」

村？それってさっきまでいた……。

……あれ？

なんかあそこにクレーターがあるけど、位置的に……。

「……あのー、キャロさん？」

「何ッ！？」

怖い！？すっごく怖いよこの娘！？

でも、言わないと……

「村のある山って確か……あっちじゃない？」

僕が指差した先には、一つの山。

そこの頂上付近には、小さいながらも集落が見て取れる。

「……ほえ？」

キャロから怒りの雰囲気が消えた。

「多分、山が消えてそれで村が消えたと思って怒ってたんだと思うけど、消えたのはよく似た山みたいだよ？」

「あ、本当……」

……ってことはまさか……

「「ただの……勘違い……？」」

「きゅくー！！！」

フリードが二人に怒りの説教をしている。

一人は吼太さん、もう一人はキャロのもう一体の使役竜、ヴォルテール。

見た目少女みたいな少年と、４０ｍ大の巨竜が数十ｃｍの小竜に叱られているっていうのは、中々シュールな光景だと思う。

「きゅくきゅくー！！！」

「……本当にすいません」

「……グォ」

あ、二人揃って土下座した。

「悪いねキャロ……」

「大丈夫です。フリードやヴォルテールも一緒ですから」

キャロはル・ルシエの村から出ることになった。

なんでも、余りにも暴走させてしまう回数が多過ぎるから、外界で修業してきなさいってことらしい。

とりあえずは、管理局で自然保護隊に入るとか。

「じゃあ行こう？エリオ君！」

あれから、僕とキャロは少しずつ喋るようになっていた。

なんか、妹が出来たみたいで嬉しい。

「きゅくー……きゅ！」

「はい……本当にすいませんでした……」

「グォ……」

まだやってるよあの三人（？）。

「まずはご飯を食べようか」

「うん！」

まぁ、賑やかになるなら、別にいいかな。

おまけ

「そういえば吼太さんは私達にとってどんな存在になるのかな？」

「あまり考えたこと無かったなぁ……」

「きゅくー」

「保護者だから……お父さんみたいなもんか？」

「……じゃ、じゃあ、お父さん、って呼んでいいですか？」

「キャロ？一体何を……「あ、僕もいいですか？」……エリオ、お前もか」

こうして吼太の子供がさらに増えた。

# 第百五話　Cのビギンズナイト／転生者と勘違いと小さな勇者（後書き）

なっぺ「後書き座談会だよ～ん」

吼太「きゅくきゅく言われながら説教されたのは初めてだ……」

なっぺ「お前のせいで転生者が！」

吼太「いや、あいつは死んでも文句ないだろ」

なっぺ「……まぁね」

ベス「今回はキャロさんですね」

なっぺ「力関係はキャロ＞フリード＞ヴォルテールです」

吼太「真竜形無しじゃねぇか」

なっぺ「それがこの小説！じゃ、感想感謝コーナー行くぜぃ！」

吼太「ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、水橋さん、緋水さん、バルディッシュさん、天照大神さん、朱神優希さん、海人さん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ＶＡＺＵさん、香崎　真琴さん、七つ夜&夜つ七さん、まーたさん、高町ゆうきさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「水橋さんからはライトと流々のＫＲカードを、緋水さんからは吼太の動くフィギュアと詩音の動くフィギュアを、朱神優希さんからはドラクエ？のマーニャとミネアの服を、ＶＡＺＵさんから

は吼太のコスプレ写真を頂きました！ありがとうございます！……
って写真が無い！？」

吼太「シャイニング・トラペゾヘドロンなめんなコラ」

なっぺ「しゃーないからコスプレしよう。まずはミネアさん」

吼太「うぁ……！！？／／／／／／／」

なっぺ「女の子座りしてるあたり、狙ってるとしか思えない」

吼太「偶然だっ！？／／／／／／」

なっぺ「次はマーニャさん！」

吼太「うぉぁぁ！！？／／／／／／／／」

なっぺ「何故かキワドイ服の方が似合うな」

吼太「見るなバカァ！／／／／／／」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百六話　Tのビギンズナイト／フラグ王ここにあり（前書き）

Q：どうしてこうなった？

A：気づいたらこうなってた

ビギンズナイトはこれでおしまい。

# 第百六話　Tのビギンズナイト／フラグ王ここにあり

Ｓｉｄｅ　三人称

耳につくのは、荒い息遣い。

場所は、体育館倉庫。そこのマットの上。

そこには、一人の少女のような少年を組み敷いた、成人女性がいた。

「吉谷君……最近、私の授業に出てくれてないよね……どうしたの…？」

「いやー、その……（魔法のことを言う訳にはいかないしなぁ。…つーかなんでこんな態勢で聞いてくるんだ？）」

「……ちゃんと話してよ！吉谷君がいないと……私……」

そこまで言うと、教師は服を脱ぎ始める。

「（……またか。またなのか）」

「吉谷君が悪いんだからね……？吉谷君が私の授業を受けない悪い子だから、私は教師として、個人的に補習しないと……」

「いや、個人的の時点でどっか間違っ…」

言葉が最後まで紡がれることは無い。

吼太の口は、その教師の口によって塞がれていた。

さらに教師はその奥へ進み、吼太の口内を蹂躙していく。

「……ん……む…っ……」

「…あむ…ん……プハァ……美味しい……」

教師の目は完全に蕩けきっており、このままならばほぼ確実に吼太はノクターン的個人授業に受けることになるだろう。

だが……

ガスッ

何者かが教師の延髄に手刀を叩き込み、教師を気絶させた。

呻き声をあげながら倒れる教師。

「マスター、お楽しみのところ申し訳ありませんが、時空管理局より連絡が入りました。任務です」

それを行った人物は、吼太のデバイスであるフォーティトゥード。

最強のデバイスといっても過言ではない彼女からすれば、性に狂った一般人を気絶させるなど造作もない。

「オレは襲われてたんだ！楽しんでねぇ！……。まぁいい。転移魔法は？」

「準備済みです」

「なら行くぞ」

「オーライ、マイマスター」

トゥードがデバイス形態になり、吼太の首元にかかる。

そして、転移魔法が発動し、辛くも吼太は痴女の魔の手から逃げおおすことが出来たのだった。

「……つ、次こそは……」

Ｓｉｄｅ　吼太

「任務内容は？」

『逃走した違法魔導師の確保になります。現在、首都航空隊の一人が追跡中との報告が入っています』

「ふむ……能力で何か使用許可が出てるのは？」

『ありません』

「最小限の力で終わらせろってことか……めんどいけど、やるしかないか。ガードスキル、ディレイ」

ディレイを使い、高速で移動すると、やがて二色の閃光が輝いている場所に着く。

「チィッ、厄介な管理局魔導師め！」

「もうすぐ増援が来る！さっさと投降したほうが身のためだぞ！」

「やなこった！喰らえ！」

犯罪者が魔力弾を局員に向けて放つ。

「何！？」

不意を突かれてしまったのか、局員の反応が遅い。このままでは当たってしまうだろう。

いくらバリアジャケットがあっても、当たるだけで致命傷になるような位置を殺傷設定の魔力弾で狙われた以上、局員が助かる見込みはない。

……オレがいなければ、だが。

シュッ！

横から割り込んませたマントが局員を魔力弾から守る。

「そこまでだ！大人しく投降しろ！」

マントを戻し、犯罪者に投降を呼び掛けた。

「な！テメェはまさか……【赫き闘士】！？」

「……あかきとうし？なんだそりゃ？」

『どうやらマスターの異名のようです』

「はぁ？ったく……いいか？オレは通りすがりのチート魔導師だ！それ以外の何者でもねぇ！覚えておけ！」

「クソッ、忌ま忌ましい赫き闘士め！」

……

「……人の言うこと聞かないやつには、お仕置きしなきゃなぁ～」

『武装召喚使用許可１２０秒、信号受信。ダウンロード、ベルゼブモン、武装召喚（リアライズ）』

寸前に武装召喚の許可が出ていたのに、トゥードが素早く対応する。

両腕をベルゼブモンのものにし、さらにベレンヘーナを両手に構えた。

「魔王の力、見せてやるよ」

「ここでテメェを倒せば名が売れるってもんだ！行けぇ！」

犯罪者がオレに向けて大量の魔力弾を放ってくるが、正直に言うと温い。

オレはそれらを抜き撃ち様に撃ち落とす。

「なっ！？」

「……失せろ！ダブルインパクト！！」

ベレンヘーナを連射して、犯罪者を倒す。

威力はかなり抑えたから、死んではいないだろう。

「あの……もしかして吉谷提督ですか？」

ふと、犯罪者をここまで追い詰めてきていた管理局員がオレに確認を取ってくる。

「そうだけど……アンタは？」

「ハッ！申し遅れました。私はティーダ・ランスター一等空尉であります！」

「あー、硬くならなくていいから。……ん？ランスター？」

ランスターって確か、ティアナの苗字だよな。

ってことは、この人ティアナの兄さんか？

……まさか、意図せず救っちまったのか？

「助けて頂き、ありがとうございました。貴方がいなければ今頃私は……」

うん。間違いないね。

知らぬ間に書き換えちゃってたね。運命。

……ま、いいか。なるようになるだろ。

数日後……

「いやはや、やはり貴方は素晴らしい！」

「……どうも」

今、オレは管理局と協力関係にある組織の幹部と会食をしている。

チッ……俗物共が。

とりあえず目の前のものを黙々と食べる。味はまぁまぁと言ったところか。食材は泣いてるけどな。

「しかもあの剛堅な鎧の下に隠されていたのが、こんなにも愛らしく、美しい少年とは！女性だったら側室に加えたい程ですよ！」

「気持ちだけ受けとっておきます」

ショタコンオヤジのアホな発言を無視して、ムニエルみたいな料理を食べる。

……美味いのかマズイのかわかんねぇ。高尚な味ってことか？

「対してあの犯罪者を追っていた局員のだらし無いこと！あの程度の相手にてこずるとは……」

管理局の重役の一人がため息をつきながら言う。

……あの程度？

あの犯罪者は低く見積もっても空戦ＡＡＡ。対してティーダは空戦Ｂ＋。

互角に戦えてるどころか、あの犯罪者が苦し紛れに放った魔力弾さえなければ、オレが介入しなくても捕縛出来ていただろう。

つまり、魔法戦の実力は低いかもしれないが、ティーダ自身の実力は目を見張るものがあるということになる。

それなのにコイツらは……。

「犯罪者に嘗められているようでは、管理局もまだまだですな」

「いやはや、お恥ずかしい……」

「どうです？吉谷提督？私達の元に来るつもりなどはありませんか？」

……はぁ？コイツはアホか？交流を深めるための会食でなんでヘッドハンティングを……？

「君にとっても悪い話ではないぞ？」

管理局の重役までこの提案を勧めてくる。

……何かおかしい…？

「……断ると言えば？」

「断れませんよ。決してね」

そう言うと、幹部の人がモニターを出す。

そこには、小さな少女達が暗い牢獄で震えている様子が映されていた。

「断れば彼女達を殺します。それでも貴方は断れますか？」

「テメェ……」

「おや、口の聞き方がなってませんね。調教のしがいがありそうだ」

……読めてきたな。

恐らく、この幹部は今回捕まえた犯罪者の元締めみたいなもん。

そして、今回の会食の真の目的は【司法取引】。

犯罪者を引き渡す代わりに、金でも渡されるんだろう。

んで、オレをその犯罪者引き渡しの護衛……いや、脱獄の手伝いをさせて、そのまま管理局から追放し、逮捕することで完全監視下におくつもりか？

このショタコンオヤジは本気でオレを囲おうとしてるらしいが、脱獄までは目的が同じだから、管理局に協力しているんだろう。

「知っていますよ。貴方は大量のリミッターにより、通常時はその実力のほんの一部しか出せないと」

「加えて、お前のデバイスは今この場には無い。諦めろ」

確かに安全のためにトゥードは玄関で預けた。

だけど……。

「その程度でオレ……いや、オレ達を縛れると本気で考えてんのか？」

パキィン！

オレが言い切った瞬間、幹部と重役が凍り付く。

これをやったのはオレの大切な仲間……

「どうしたのコータ？もしかして邪魔だったとか？」

「いや、助けに来てくれるって分かってたから、下手に動かなかっただけだ」

「ふふ、あのコータが僕を頼ってくれるなんて……嬉しい♪」

「実際頼りにしてるからな……。リーム」

そう、夢を与えるもの、リーム。

オレのユニゾンデバイスで、大切なオレの恋人だ。

……若干、気恥ずかしいけど。

「さて、と……トゥード！」

「ここに」

後ろから声がする。そこにはトゥードが人間形態で立っていた。

まぁ、当たり前だな。

「リーム、場所は？」

「もう突き止めてあるよ」

もちろん、あの少女達が捕まってる場所のことだ。

にしてもリーム、最近能力がさらに上がってないか？

まぁいいか。

「よし、ユニゾンして一気に行くぞ！」

「オッケー！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

「「ユニゾン・イン！」」

「もう大丈夫だぞー」

あれから少女達が捕まってた倉庫まで行き、内部の連中を軽く片付けたあと、援軍を呼んで一斉に逮捕した。

もちろん幹部や重役も逮捕。

なんでも、組織の実態は人身売買組織だったらしく、あの幹部から引き出せた情報を利用すれば、一斉摘発も可能とのことだ。

「ティア！」

「お兄ちゃん！」

ふと、視界の端で感動の再会みたいなシーンが再現されていることに気づく。

「お兄ちゃん、あの人が助けてくれたの」

「あの人が？……ってもしかして…」

ん？あれって……。

「よ、吉谷提督！？」

「よっ、ランスター一等空尉。犯罪者逮捕ご苦労さん」

「それはこちらの台詞です！まさか提督自らが潜入捜査とは……」

「潜入捜査っつうか、ただ巻き込まれただけっつうか……」

「……」

「どうしたティア？」

「お兄ちゃん、この人、可愛いね！」

……グハッ！？

※現在吼太はアームドアップを解除しています。

「ティ、ティア！この人は男だ！……確かに可愛いけど……」

……

「……泣いていいかな？オレ……」

「おーよしよし」

落ち込んでるオレをリームが慰めてくれる。

「でも、可愛いんだけど……それ以上に……かっこよかった……／／／／／／／／／／」

「……ティア…まさかお前……？」

……おや？

心なしかリームから殺気が……。

「こんなところに泥棒猫が……」

リームの手から冷気が溢れ出す。

「って待て待て！子供相手に何する気だリーム！？」

「離してコータ！あいつ殺せない！」

「離せるか！」

……普段はいいやつなのに、たまにこんな風になるようになっちゃったんだよなぁ……なんでだ？

「……殺せないなら引き込むしかないか……なら帰ってからなのはちゃん達と相談しないと……」

「相談？何のだ？」

「コータは気にしなくていいよ♪」

むぅ……気になる。

「お兄ちゃん！魔法を教えて！私も戦えるようになりたい！それで、あの人の背中を守ってあげるの！」

「……分かった。だけどちゃんとやらなきゃだめだぞ？ランスターの弾丸は「全てを貫く、でしょ？」……ティア……」

「お兄ちゃん、私頑張るからね！！」

ティアナは何か目標を見つけたみたいだな。

ティーダさんもいるし、いい魔導師になるだろう。

こうして、今回の事件は終結したのだった。

おまけ

「ティアナ、僕の元で花嫁修業する気ない？コータのハーレムを許せるならだけど……」

「是非！」

## 第百六話　Tのビギンズナイト／フラグ王ここにあり（後書き）

なっぺ「後書き座談会を始めさせてくりゃれ」

吼太「おいバカ作者」

なっぺ「？」

吼太「最初の何だよ？」

なっぺ「気分で書いた。後悔はしていない。ついでに言えば、ティアナ編は真面目話にするつもりだったから、ギャグを先に入れたかったってのもある」

吼太「結局は大して真面目じゃなかったけどな」

なっぺ「ティアナ編はほんと難しかった……なんか納得いってないし……」

吼太「つーかこれもはやティーダ編だろ」

なっぺ「否定はしない。感想感謝コーナー！」

吼太「海人さん、高町ゆうきさん、七つ夜&夜つ七さん、天照大神さん、水橋さん、朱神優希さん、緋水さん、雨季さん、バルディッシュさん、ＲａｉＮさん、ＶＡＺＵさん、香崎　真琴さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからは服が何故か千切れてる吼太の写真（大事な

ところは隠れてる）に服が何故か千切れてる詩音の写真（大事なところは隠れてる）を、雨季さんからはすずか作の変身ブレスレット（コスチュームチェンジ限定）を、バルディッシュさんからはヒスイのＫＲカードとオーズサゴーゾコンボのＦＲカードを、香崎真琴さんからは吼太用サンタコス『周囲の欲望によってイロイロと際どくなっちゃうよ☆　～クリスマスプレゼントは……俺だよ？Ｖｅｒ１．３～』を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「カード以外にろくなもんがねぇ！？」

なっぺ「さぁ、諦めてサンタコスをするんだ！」

吼太「死んでもするか！」

なっぺ「その案件は却下されましたー」

吼太「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？／／／／／／」

なっぺ「さぁ、欲望が強ければ強いほど際どくなるぜ！」

吼太「や、やめ……／／／／／／／／」

なっぺ「激写に次ぐ激写～！」

吼太「撮るなぁ……／／／／／／」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 番外編　変わったものと変わってないもの（前書き）

天照大神さんとのコラボです。

あれ？バトル描写が久しぶりな気がする。

……明確なバトルは久々なのか？

## 番外編　変わったものと変わってないもの

Ｓｉｄｅ　ベス

…………どーしましょう。

とりあえず………。

「とりよせバッグー」

とりよせバッグもとい、時空間の穴から吼太さんを引きずり出し……

……。

「すいませんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

マッハで土下座しました。

Ｓｉｄｅ　吼太

……何事？

「いやですね？実は吼太さんがいた世界でちょっとしたミスがあって、輪廻の流れに支障が出ちゃいまして」

「……で、直す間、オレみたいな転生者は輪廻の修復に巻き込まれないように避難してろと？」

「平たく言えばそうなります」

「そーかそーか。……で、誰のミスだ？」

オレがベスに軽い雰囲気で聞いてみる。

「うぃーっす」

それに対して、軽い雰囲気でベスが自供した。

……

「……またテメェが原因かベスゥウウウウウウウウウウウウ！！！？」

「すいませんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

しゃーねぇ。どっか別の世界に行くか。

……誰のとこにしようか…。

……あいつのとこにしよう。

オレは螺旋界認識転移システムを発動し、とある転生者の元へ跳んだ。

Ｓｉｄｅ　フェイト（別世界）

仕事が一段落したので、寄宿舎に戻る前に買い物をして、その帰り道、ふと騒がしいことに気づいた。

そちらの方を見てみると、どうやら局に忍び込んだ子供を門番が捕まえたとこらしい。

「ほら、子供はさっさと帰りなさい」

「子供じゃねぇっての！ただの人捜しだって！」

「親御さんと離れたの？」

「だから違ぁぁぁう！！！」

女性局員が優しく尋ねても、その娘は喚き立てるばかりで、埒があかない。

私が行ってみようかな。

「ちょっと、その娘と話をさせてもらえませんか？」

「フェイト執務官、お知り合いで？」

「んー、そういうわけじゃ…」

近くに寄りながら話していたら、ふとその顔に見覚えがあるような気がしてくる。

……誰だったかな？

どこかで会ったような……

「ん？あ！フェイト～！助けてくれ～！……って、言っても分から

ないか……。とにかく離せー！」

「……あ！」

思い出した！確か……

「吼太！」

「お！思い出してくれたか……」

って、なんで魔導師でもないのにミッドに！？

「はい、迷子はこっちねー」

「って連れ去るなぁぁぁぁぁぁ！！！！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「一時はどうなることかと思ったよ」

「吼太って魔導師だったんだね」

あれ？言ってなかったっけ？

……言ってねぇなぁ。クレーターは作ったけど、あの場にいたのあいつだけだったし。

「そういえば、なんでこっちに？」

「あいつに会いに来たんだよ」

そう、オレの大切な友人の一人……。

……津川優星に。

「優星？優星は……」

「フェイト、いきなり呼んでどうしたの？」

フェイトが話しはじめたその時、優星がオレ達が話していた部屋にやって来た。

「……もしかして、吼太？」

「おう。久しぶりだな」

……

何故か訪れる静寂。

「えと、並行世界って時間の流れに差があるんだっけ？」

「？　まぁ、ないわけじゃないな」

「そっかー、びっくりし「だからオレは今１６だ」……あれ？じゃあなんで……」

「……見た目のことは言わないでくれ」

「……なんか、ゴメン」

「いや、いいよ……」

気を取り直して。

「ねぇ吼太、ちょっといい？」

「ん？」

優星が何か聞いてくる。

「こうしてまた会えたのも何かの縁だし、模擬戦でもしてみない？」

「……よし、やるか」

「なら、なのはに教導隊の模擬戦場使えないか聞いてみるね」

Ｓｉｄｅ　三人称

そして、運よく教導隊の模擬戦場にて戦えることになったわけなのだが……

「ギャラリー多くね？」

「なんか、空戦の参考にするんだってよ？」

まるで見世物である。

「……ま、いいけど。戦闘技術は盗まれてなんぼのもんだし。じゃ、ぼちぼち始めるか。変身ッ！」

「エクス、セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ！』

お互いにセットアップをして、構える。

「ガンレイズ・ザケル！！！」

「シューティングシューター！」

そして、互いの魔力弾がぶつかり合い、魔力煙が辺りを包んだ。

「ハアッ！」

優星が即座にアシッドを起動すると、赤と青の斬撃を飛ばす。

「武装召喚（リアライズ）！」

それに対し吼太は、ウラガンキンの甲殻を武装召喚し、斬撃を防ぐ。

そのまま、甲殻に付着していた岩を飛ばすと、そのままさらに武装召喚をし、背中にクシャルダオラの翼、そして頭に角を装備する。

「こんなもの！」

優星が飛んできた岩を斬り裂く。

だが、斬られたその瞬間に岩は爆発し、優星を吹っ飛ばした。

「ぐっ……！爆発する岩！？」

「どんどん行くぞ！ハヤテ丸！」

武装召喚を維持しながら、ジッパーの中からハヤテ丸を取り出す。

「超忍法、影の舞！」

その瞬間、舞台は障子で閉じられる。

中心には優星。

そこに、四方八方から吼太が現れては消え、何度も斬りつける。

変幻自在、神出鬼没の動きをしながら、流れるように斬撃を繰り出しているのだ。

その動きは、まさに嵐（ハリケーン）。

「ぐぅ！？だけどまだまだ！エターナルバスター！」

反撃とばかりに優星が砲撃を撃つ。

影の舞が終わったまさにその時を突かれ、なんとか回避するものの、ハヤテ丸が吹っ飛ばされてしまう。

「やるな。だったらこれだ！」

角に力を篭め、そのまま風を弾丸にして何発も撃ち出す。

「ハアッ！たぁっ！」

優星はその全てを、再び起動したエクスで斬る。

「今度はこっちからだ！」

優星が魔力弾を飛ばしながら接近し、斬る。

魔力弾は風のバリアにより跳ね返されるが、既にその場所に優星はいない。

風バリアの内部に潜り込み、そこから剣を振るう。

「なろぉ！！」

だが、数回斬撃を喰らった吼太はフルドリライズをすることで攻撃を回避しつつ、反撃をする。

優星はすんでのところで回避するが、頬を浅く切られてしまった。

「「……」」

互いに距離をとり、吼太はジッパーから取り出したラストエクディシス、優星はエクスを構える。

「おぉおぉおぉ！」

「はぁぁぁぁぁぁ！」

そして、咆哮をあげ、一瞬で距離を詰めて剣を振った。

「す、すごい……」

「うん……優星君はもちろんだけど、吼太君も負けてない」

安全な場所から戦いを観ていたフェイトとなのはが呟く。

「もしかしたら、優星も切り札を使うことになるかも……」

「……でも、吼太君もまだ手を隠してる感じがする」

「ふぅ……」

「はぁ、はぁ……」

何回目かの斬撃を打ち合い、その衝撃を利用して吼太と優星が離れる。

「（強い……今からで勝てるとしたら…レッドジョーカーフォーム。だけど、あれは危険だ）」

「（決め手が無いな……。練習中のあれは、下手したらこの世界が危ないし……）」

互いに、決め手に欠けているこの状況。

「よし、なら手っ取り早く……」

「必殺技で片をつける……だね？」

「おう」

そして、優星は魔力を練りはじめる。

右手に蒼く輝く剣を顕現させ、上に掲げる。

対して、吼太は腰のディケイドライバーにカードを装填する。

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＯＯＯ　ＳＡＧＯＺＯ】！』

『サゴーゾ…サッゴーゾ！』

変身したのは、仮面ライダーオーズ　サゴーゾコンボ。

「オォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！」

オーズが吼える。

その咆哮に呼応するかのように、重力に異常が発生し、模擬戦場の床がめくれ上がり、まるで竜巻のように辺りを飛び交う。

「くっ……負けるかっ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｏ、Ｏ、Ｏ、ＯＯＯ】！』
オーズが直上に飛び上がり、両足を揃えた状態で地面に落下する。
その瞬間に、オーズは優星の作り出したブラックホールに閉じ込められる。
だが、また同時に、優星もオーズの放った重力波に捕まり、オーズの方に引き寄せられる。
「（逃げられない！？）だったらこのまま！」
優星がブラックホールを斬り裂くために、蒼い剣を構える。
また、ブラックホールの中ではオーズが必殺技を放つために頭部のグラビドホーンと両腕のゴリバゴーンにエネルギーを溜めていた。
「はぁぁぁぁぁ……」
そして、互いに全力を篭めた一撃が放たれる。
「ブラックエンド……ギャラクシーーー！！！」
「セイヤァァァァーーーー！！！！！！！」
蒼い剣がブラックホールを斬り裂いた威力と、グラビドホーンとゴリバゴーンがたたき付けられた威力が激突する。
辺りにはさらなる重力嵐が巻き起こり、観戦用サーチャーがねこそぎ消滅し、結界も砕け散る。

だが、それでも終わらない。

互いに一歩も退かないそのぶつかり合いは、観ている人達をただただ感嘆させた。

しかし、突如として終わりが訪れる。

オーズのゴリバゴーンが、優星の蒼い剣が、激突の衝撃に耐え切れずに砕けたのだ。

「てて……ゴリバゴーンが破壊されるたぁな」

「ブラックエンドギャラクシーを真正面から受けて消滅してないのは……さすがと言うべきかな？」

優星が膝をつく。とはいえ、その闘志は微塵も衰えを見せない。

吼太もまた、両腕のゴリバゴーンこそ使用不可能だが戦う余力はまだ残している様子だ。

「フルドライブは……やらなくていいよな？」

「模擬戦場も限界みたいだしね」

見れば、結界は既にかけらも無く、床には大小様々な皹が入っていた。

これ以上戦闘をすれば、たちまち崩壊してしまうだろう。

「模擬戦場が……修理費が……」

武装局員の一人がふと思い出したかのように呟く。

「あ……どうしよう……」

優星も今になって気づいたらしく、心なしか焦りの表情が表れている。

「心配すんな。…ナイアの時計」

ナイアの時計を取り出し、針をキリリと巻き戻す。

その瞬間、模擬戦場の時間が巻き戻り、元の状態に戻った。

「……あれは、人間なのか？」

ふと、とある管理局員が呟いた一言。

それに対し、吼太はこう答えた。

「通りすがりのチート魔導師だ。覚えておけ」

「もう行くの？」

「あぁ。世話になったな」

あれから大量の管理局員から質問責めにあった吼太と優星だったが、やがてそれも落ち着き、さらにベスから連絡が入ったので、帰ることとなった。

「じゃあ、またな」

「うん。またね」

二人が別れる。

やがて、片方はまるで元からいなかったかのように消え去った。

だが、この世界は忘れないだろう。

二人の戦士の戦いを。

おまけ

「ただいまー！いや、大変な目にあったぜ…」

「コータ君、こんな時間までどこに行ってたのかな？」

「……な、なのは？目が恐いぞ？」

「質問に答えなさい」

「アリサもか？」

「ちゃっちゃと吐こうなぁ～」

「はやてまで！？助けてくれエリオ！」

「僕には無理です！」

「何！？すずか！フェイト！リーム！」

「「「さぁ、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよう？」」」

「誰か……助け……」

ちゃんちゃん♪

## 番外編　変わったものと変わってないもの（後書き）

なっぺ「後書き座談会だよー」

吼太「今回は普通だな」

なっぺ「たまにはいいじゃん。さて、優星との再戦は再び引き分け？に」

吼太「手数を絞っての戦いだけどな」

なっぺ「そりゃ優星にギガドリルブレイクとか使うわけにはいかないもんなぁ」

吼太「というより、何か小細工を使う気になれない」

なっぺ「優星の人徳？」

吼太「かもな。そういやタイトルってどういう意味なんだ？」

なっぺ「変わったものって言うのは優星の見た目や、二人の強さ。変わってないものってのは吼太の見た目」

吼太「変わってないものについてツッコミたいんだが」

なっぺ「ダーメ。じゃあ感想感謝コーナー！」

吼太「バルディッシュさん、水橋さん、高町ゆうきさん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、天照大神さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔ

さん、月光閃火さん、ＡＩＲＳさん、海人さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、朱神優希さん、緋水さん、ＶＡＺＵさん、ＲａｉＮさん、香崎真琴さん、ライさん、まーたさん、那由他さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからは『プランクトンでもわかった！逃走方法』を、月光閃火さんからは『戦国ＢＡＳＡＲＡ版伊達政宗コスチューム』を、緋水さんからは吼太が襲われる直前の写真、詩音がケーキを食べてにっこりしている写真、あと吼太に「フラグ建築の神」認定証を、ＶＡＺＵさんからは『歴代ガンダムの軍服男セット』を頂きました！ありがとうございます！だが吼太にフラグ神の称号はまだ早い！」

吼太「よかった……」

なっぺ「なぜならお前はフラグ王なのだからな！」

吼太「待てコラ」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

吼太「逃げんな作者ぁぁぁぁぁぁ！！？」

# 番外編　シスコンVSシスコン（前書き）

遅れてすいません。

タイトル？見ての通りです。

今回はバルディッシュさんとのコラボになります。

# 番外編　シスコンＶＳシスコン

Ｓｉｄｅ　三人称

首都航空隊。

ミッドチルダの首都、クラナガンの空を守る部隊とでも言えばいいか。

この首都航空隊、所属するには相応の実力を必要とする。

才のあるもので固め、困難な事件が立ち塞がろうとも、首都の空を守りきるためである。

そんな彼らは今……

「あと１００セットー！」

「「「「「ひいいいいいい……！！」」」」」

地獄のような訓練を受けていた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「リンカーコアは酷使すればするほど強くなるからなー。頑張れよー」

「「「その前に自分達が死んじゃいますよ！」」」

自身の魔力量限界まで魔法を出すのを繰り返す訓練なのに……そんなにキツイか？

……何をしてるかって？本局からの指示で首都航空隊の教導だ。

「文句言ったやつはもう１００セット追加な」

「「「いやぁぁぁぁぁぁ！！？」」」

今やってる教導を簡潔に説明すると……

最大の魔法を連発するために魔力を捻り出してリンカーコアを酷使→オレが魔力を供給→また魔法を使用→……

みたいなことをループで繰り返して、リンカーコアを鍛えてる。

なのはやフェイト、はやてなんかはこれやったら魔力量ＥＸランクに行っちゃったからなぁ。効果は保障済みだ。

「お、終わりました……」

「おう、ご苦労」

訓練を受けていた一人がオレに報告してくる。

しっかしあれだな。軟弱だ。

「……よし。基礎体力は付けて損無いし…休憩したら山に登るぞ」

装備？バリアジャケットだけです。ちなみに身体強化魔法使わないように、デバイスは支給して行う。ズルなんかさせてたまるか。

「よし、行くぞー」

「「「早っ！！？」」」

「よし、頂上だ」

「「「は、はい……」」」

今登った山の頂上は空気がかなり薄い。

ここで訓練すればさらに効果が見込めるだろう。

「よし、ここらで模擬戦に入るぞ」

「はい！」

おぉ、ティーダが元気だ。

さすがと言うべきか、ボロボロな首都航空隊の中で唯一、ティーダだけが敬礼をしてきてくれた。

……足はガクガクだったけど。

「とりあえず……サイフォジオ！」

サイフォジオでティーダを突き刺し、回復させる。

「後は相手だけど……」

その時、地上に魔法陣が顕れて、中から一人の青年が現れた。

「……ヒスイか？」

「ん？吼太か。ということはここは吼太の世界か」

そう、吼太の異世界の友、ヒスイ・ハーツである。

「どうしたんだ？」

「こちらの世界でロストロギアを調べていたらトラップが仕掛けられていたらしくてな。この世界に飛ばされてきたんだ」

はた迷惑なロストロギアだな。

「あの……その方は…？」

ティーダが警戒しながら聞いてくる。

「コイツはヒスイ・ハーツ。一言で言うなら風の魔導師だ」

「はぁ……」

ヒスイとティーダが互いを見る。

「「（……何故だ？他人の気がしない）」」

――それはきっと二人ともシスコンだからＳＡ☆ｂｙなっぺ――

「唸れ風念！」

『ストリームアロー』

「クロスファイヤー…シュート！！！」

――ギャアァァァァ――

「……何に攻撃したんだ？」

「「むかつくことを言ったやつ」」

Ｓｉｄｅ　三人称

その後、ヒスイと意気投合したティーダは、ヒスイに訓練をつけてもらうことになった。

術式の根底こそ違いがあるが、スタイルはかなり似ているため、得られるものも多いだろうと考えた吼太もこれを了承。

晴れて、ここにティーダＶＳヒスイの模擬戦が成立したのだった。

「よろしくお願いします！」

「遠慮せずに来い！」

ティーダが飛行しながらヒスイに魔力弾を連射する。

「筋はいいが、まだ未熟だな」

だが、ヒスイはその魔力弾を全て回避する。

「くっ……！」

今度は誘導する魔力弾を発射するティーダ。その弾数は１５。

一般的な魔導師なら相当の集中力を必要とするが、ティーダはそれを飛行しながら行っていた。

ヒスイがまた回避するが、魔力弾は地面にぶつかることなく、再びヒスイを狙う。

「誘導性はまぁまぁ。威力も嘗められるものじゃないな」

「ありがとうございます」

「……だが！」

ヒスイが両腕から三連射ずつ魔力弾を放つ。

槍鴎と呼ばれるその技を二回連続で使用し、ティーダの魔力弾を１２発落とす。

「まず速さ。いくら誘導性が高くても、速さが無ければ対処など簡単にされてしまうぞ」

「くっ……」

「そして……奔れ光念っ！」

右腕のボウガンから三連射する技、針雀を使って残りの魔力弾を落とし、そこからフォトン―座標を指定し、そこを中心に光の爆発を起こす魔法―を使ってティーダの目を眩ませる。

「魔力弾誘導に自身の飛行……それで手一杯では隙が出来てしま

うぞ」

「くっ……！？」

ティーダが使用しているのはストレージデバイス。自らの周りの状況を教えてくれるような器用なことはしてくれない。

「（どこだ……どこにいる……？）」

ティーダが自身のデバイスをあちらこちらに向けるが、潰された視界はそう簡単には回復しない。

――カサッ

ティーダの右後方から音がする。

だが、ティーダはそことは真逆の位置を狙い撃った。

「！？」

間一髪ヒスイが回避する。

「よく見破ったな」

「こういった時のための訓練も積んでますんで、ね！」

そう言うとティーダは魔力弾を大量に作り出した。

「クロスファイヤー……」

大量の魔力弾が渦を描き、やがてそれは一つの嵐となる。

「シュート！！！！！」

大量の魔力弾が巨大な竜巻を作りながらヒスイの元へ飛んでいった。

「これは！？」

「行っけぇぇぇぇ！！！！！」

だが、これはあくまで気配のみを察知しての射撃。

目という人間が持つ最高の認識器官を使用しないで行った攻撃には、よほどの者でない限りは隙が生まれる。

隙とは、すなわち弱所。

「……そこだ！」

ヒスイがゲイルアークから魔力弾を放つ。

その魔力弾はクロスファイヤーの僅かな隙間を縫うように進み、ティーダの顎に衝突する。

やがて、脳震盪を起こしたティーダは立っていることが出来ずにその場に倒れた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「さすがに圧倒的だな」

「いや、コイツも中々いい筋をしている。俺もいい刺激になったよ」

ティーダも多分そうだろうな。

さて……。

「せっかくだし、ヒスイも一緒に訓練を受けてみないか？」

「止めとこう」

え？なんで？

「時間らしいからな」

そう言ったヒスイの足元には、魔法陣が展開されていた。

元々そういうシステムだったらしい。

まぁ止められなくは無いけど、区切りもいいし。

「じゃあ、またな」

「あぁ、またな」

こうしてヒスイ・ハーツは自分の世界に帰っていった。

なお、余談だがこのときの脳震盪の影響で、ティーダは二週間の休暇（名目上は吼太から直接の命令）を得られることとなった。

そのため、何故かたまたまあったティアナの授業参観に出ることが出来た。

もちろん、ティーダが心底喜んでいたことは言うまでもない。

2008

# 番外編　シスコンVSシスコン（後書き）

なっぺ「後書き座談会なんだZE！やっちゃったんだZE」

吼太「ぶん殴られたいか？」

なっぺ「さて、Wシスコンは中々難しかったっす」

吼太「ヒスイとティーダどっちが難しかった？」

なっぺ「ヒスイも他人のキャラだから難しいし、ティーダはティーダで情報が少ないから難しかった」

吼太「そんなんでこの先大丈夫か？」

なっぺ「……カムばりますッ！んじゃ感想感謝コーナー！」

吼太「Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、天照大神さん、ＡＩＲＳさん、緋水さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、バルディッシュさん、月光閃火さん、雨季さん、七つ夜＆夜つ七さん、高町ゆうきさん、香崎真琴さん、まーたさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「水橋さんからは以前コラボしたときの写真を、緋水さんからは吼太のはにかんでる写真に詩音のはにかんでる写真、あと吼太に御門特製「フラグ王認定証」を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「で、今回遅れた原因は？」

2009

なっぺ「モンハンのやりすぎじゃ！」

吼太「よし殺す！」

なっぺ「ちゃんとＶｉｖｉｄ読んだから許して！あ、Ｖｉｖｉｄはマジで面白かったです」

吼太「何故か変身のたびに女性全員が裸になるけどな」

なっぺ「そこがいいんじゃないか。二巻ではやてやヴォルケンリッターがいないのが心底悔やまれる」

吼太「次回は？」

なっぺ「海人さんとのコラボになるはず。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

2010

# 新年あけおめ！Ｉｆストーリー！（前書き）

なっぺ「新年あけまして！」

ファンスト一同「「「おめでとうございます！」」」

なのは「昨年中は大変お世話になりました！」

フェイト「ここまでこれたのも、一重に読者様方の応援のおかげです」

はやて「今年もファンスト一同、頑張って行きますので、応援の方、どうか…」

ファンスト一同「「「よろしくお願いします！」」」

トゥード「ちなみにファンストとはサブタイトルであるＴｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙの略称ということになっております」

ザンク「さて、新年最初の話は、魔法少女リリカルなのはＰｏｒｔａｂｌｅ　Ｔｈｅ　Ｂａｔｔｌｅ　ｏｆ　ＡＣＥ'Ｓのストーリーに倣った、この小説のＩｆストーリーだ」

2011

ベス「ザンクさん達、闇天の守護騎士や闇天の魔導書が無かった場合の話になりますね」

吼太「それじゃ、楽しんでいってくれ！」

# 新年あけおめ！Ｉｆストーリー！

Ｓｉｄｅ　吼太

闇の書。

多くの時代を渡り、多くの人を苦しめ、多くの世界を破壊してきた、呪われし魔導書。

だが、その呪いは断ち切られた。

誰にも壊せない呪い。

それを壊したのは、最後の夜天の主。

八神はやて。

彼女は自身の融合騎、守護騎士、友達と一緒に、闇の書の闇を破壊した。

そして、今では平和に暮らしている。

これは、そんな毎日に訪れた、小さな事件の話。

2013

「あ～」

「あ～」

こたつって気持ちいいなぁー。

ピピピ

『マスター、クロノ様から通信です』

「無視」

『了解しました』

『無視するなバカ吼太！』

クロノが無理矢理回線を開いたらしい。

『失礼します』

『あ、ちょ…』

だが一瞬でトゥードに閉じられた。

『申し訳ございませんマスター。一瞬とはいえ、回線への侵入を許可してしまいました』

「今度メンテするついでに改造するか…」

ピピピ

『マスター、今度はリンディ様から通信です』

「繋いで」

『了解』

オレの目の前にモニターが開く。

『吼太君、ちょっといいかしら？』

「めんどうごとでなければ」

『あまり面倒にはならないとは思うけど……』

なんだ？

『この近辺で結界が発生しているの。それも複数。だから少し調査してきてほしいんだけど』

まぁ、それぐらいならいいか。

「リーム、ちょっと出てくるな」

「なら僕も……」

「じゃあリームはこっちのほうを頼む」

「……むー！コータ、女心を分かってない！」

……え？なんでそんな話に？

「ま、コータにそんなの期待してないけどね。じゃあさっさと終わらせよう？」

「あぁ」

――Ｓｔａｇｅ　１――

クロスオーバーフォームで、結界内に強制的に侵入し、内部を探索していたときだった。

「……フェイト？どうしたんだ？こんなところで」

結界内に侵入してみると、中にいたのは、バリアジャケットに身を包んだフェイトだった。

「……あなた、誰？」

「へ？吼太だよ吼太」

「コータ？……ゴメン、分からない」

ド忘れでもしたのか？

「まぁ、あなたが誰だっていい。用があるのはジュエルシードだけっ！」

「うおっ！？」

フェイトが高速で突っ込んできて、アサルトフォームのバルディッシュで斬りかかってきた。

「なんだってんだ！？クソッ、ガードスキル、ハンドソニック！」

ハンドソニックを起動して、バルディッシュを受け止める。

「くっ！」

「落ち着けフェイト！」

「落ち着く暇なんか、無いんだっ！」

『ロードカートリッジ』

「撃ち抜け、雷刃！」

『ジェットザンバー』

カートリッジの魔力を使ったことで、遥かに伸びた魔力刃を振ってきたが、

「甘い！」

紙一重で躱し、その隙を突いて喉元にハンドソニックを突き付けた。

「くっ……触れもしないなんて……」

「どうしたフェイト？何があったんだ？」

「何……？そんなの、貴方に言う必要なんかない」

「……？？」

『吼太君、ちょっといい？』

そのとき、エイミィさんから通信が入った。

『時間無いから手短にいうよ！そのフェイトちゃんは本物じゃない、偽物！』

「偽物？」

答えを出す者（アンサートーカー）を使って確かめる。

……なるほど。つまりは魔力生命体って感じか。

「でも、なぁ……」

見た目がフェイトだからどうにも攻撃しにくい。

何か手段は……ないのか……？

目の前のフェイトを見つめながら考える。

「……そ、そんなに見ないで……下さい……／／／／／／」

……偽物でも風邪ってひくのか？顔が真っ赤だ。

「あうぅ……／／／／／／」

そんな奇妙な空間が構築されていたその時。

「プラズマスマッシャー！！！」

そんな声と共に現れた砲撃は、偽物を一瞬で消し飛ばした。

「……ってえぇっ！？」

「ダメだよコータ！偽物なんかに見とれてちゃ！見るなら本物の私を見て！」

そこにいたのは先程消し飛んだはずのフェイト。

……いや、言動からして本物のフェイトってことか。

「もう……視姦したいならそうと最初から……」

とか言いながらフェイトがソニックフォームになる。

「さぁーて！次行こう次！！じゃーなフェイト！！」

何か危機を感じてこの場を離脱したオレはきっと悪くない……はず……。

――Ｓｔａｇｅ　２――

「今度はなのはか……」

「あ、コータ君！」

目の前で弾けるような笑顔を向けてくるなのは。

だがしかし、これも偽物みたいだ。

「コータ君コータ君！私、新しい魔法考えたんだ！だからコータ君にテストしてほしいの！実戦で使えるのか！」

「新しい魔法？」

そんなの原作にあったっけ？

「これが上手く使えるようになれば、ヴィータちゃんともＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ出来ると思うの！」

お話じゃなくてＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩかよ……。

「まぁ、いいか……」

「ホント！？ありがとう！」

そう言うと、なのははレイジングハートをバスターモードにする。

……思ったけど、バスターモードって杖につける名前じゃないよな……。

「じゃあ模擬戦……」

『Ｓｔａｒｔ！』

なのはとレイジングハートが開始を宣言した。

瞬間、互いに距離をとる。

「ディバイィン、バスターー！！！！」

「五ツ星神器、百鬼夜行！！！」

なのはの砲撃とオレの百鬼夜行が真正面からぶつかる。

互いの攻撃は相殺され、魔力煙が充満する。

「シュート！」

魔力煙を切り裂くように現れた三つの魔力弾、アクセルシューターがオレを狙ってくるが……

「ガードスキル、ディストーション」

ディストーションに弾かれる。

砲撃クラスの攻撃はさすがに弾けないけど、シューターぐらいの攻撃なら何発来てもディストーションで弾ける。

「今度はこっちからだ！ガンズ・ビライツ！」

無数の追尾式レーザーを放ち、なのはを狙う。

「当たらないよ！」

だがなのはは紙一重というタイミングで加速魔法を使い、ガンズ・ビライツを全弾避ける。

だが、それは予想の範疇だ！

なのはがガンズ・ビライツに気を取られている隙に一気に接近したオレは、カードをディケイドライバーに装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＫＩＶＡ】！』

仮面ライダーキバ　キバフォームに変身して、なのはに蹴りを連続で繰り出す。

「きゃあ！？」

「まだまだ行くぜ」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＫＩＶＡ　ＧＡＲＵＬＵ】！』

仮面ライダーキバ　ガルルフォームに変身し、ガルルセイバーを振る。

『ディバインセイバー』

だが、レイジングハートが咄嗟に魔力刃を形成したため、ダメージは与えられなかった。

「今度はこっちの…」

『セイバー』

「番だよ！」

『シュート』

魔力刃が砲撃に変換され、ガルルセイバーを飲み込んだ。

「危なっ！？」

「コータ君だって危なかったよ？」

そう言い合いながら、互いに隙を探る。

「じゃあ……新技、行くよ！」

「来い！」

なのはが魔力を溜め始める。

対してオレは力を右手に集める。

「ハイペリオン…スマッシャー！！！」

なのはが展開した魔法陣から、極大の魔力砲撃が放たれる。

その威力は恐らく、エクセリオンバスター以上。

「……だが、オレには届かねぇ！ギガドリル！」

ギガドリルを出して、なのはのハイペリオンスマッシャーを受け止め……

「そら……よっと！」

投げ返した。

「え！？キャアァァァァ！！？」

「オレの勝ち、だな」

自身の強力な砲撃の威力を、身をもって知ったなのはは、意識を失ったのか落下していく。

「っと危ねぇ」

そのまま落とすのもアレだし、素早く落下してるなのはの元に飛び、その小さな体を受け止める。

「んん……コータ君？」

「おう」

なのはが気づいたみたいだな。

「……ふぇ？も、もしかして私……お姫様抱っこ……されてる……？／／／／／」

「ん？あ、そういやそうだな」

つーかそれ以外に受け止めるやり方を知らねぇし。

「ふぇぇ……／／／／／／」

……偽物は風邪になりやすいのか？

そんな風に考えていると、なのはの身体が少しずつ光の粒子に変わっていく。

「あ、あれ……？私どうしたの？」

「夢が、醒めるんだ」

「そっか……。夢が覚めたら、ヴィータちゃんとお話、出来るかな？」

「出来るさ。お前のしたいだけ、な」

「……うんっ！」

幸せそうな笑顔を浮かべたまま、なのはは消えた。

「……さて、次、行くか」

――Ｓｔａｇｅ　３――

「あーっ！？見つけたで！」

この声は……はやてか？

「偽物め～！コータ君の姿でごまかそうとしたってそうはいかへんで～！」

ってあれ！？

「いやはやて！オレは本も「例えお天道様が見逃しても、この夜天

の主、八神はやては許さへん！」人の話は聞いてくれよ！？」

はやてがシュベルトクロイツを構える。

「喰らいや！なのはちゃん直伝の……マニューバＡＣＳ！とりゃー！！」

シュベルトクロイツを槍のように構え、はやてが一直線に突進してきた。

「話を聞けって！ダウンロード、バサルモス！武装召喚（リアライズ）！」

『了解、甲殻を具現化、武装召喚』

右腕にバサルモスの甲殻を武装召喚し、はやてのマニューバＡＣＳを受け止める。

「小癪な！バルムンク！」

弾かれ、不安定な体勢になりながらも、放射状に拡がりながら飛ばした魔力剣が、急に軌道変化し、オレに向かって収束しながら向かってくる。

「厄介な！だったらこれだ！」

ジッパーの中からプリズムビッカーと四本のガイアメモリを取り出す。

『Ｋｅｙ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

『Ｌｕｎａ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

『Ｒｏｃｋｅｔ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

『Ｔｒｉｇｇｅｒ！！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

「ビッカーファイナリュージョン！」

【鍵】の記憶、【幻想】の記憶、【ロケット】の記憶、【銃撃手】の記憶を重ね合わせ、解き放つ。

放たれたのは、軌道を自在に変化させながら突撃する、複数のミサイル。

ミサイルははやてが放ったバルムンクを相殺し、さらに残った何発かのミサイルがはやてを追撃する。

「ちょ！？ミサイルなんて反則や～！」

その言葉を言った瞬間、はやてはミサイルの爆発に巻き込まれた。

「あかん、偽物でもコータ君は強すぎや～…」

「だから偽物じゃねぇって」

「……ありゃ？もしかして私……勘違いしてた？」

ようやく気づいたらしい。

「全く……気をつけろよ？」

「あはははは……ごめんなさ～い」

「まぁ、まだまだ偽物はいるみたいだし、お前を気をつけろよ？」

「は～い♪」

そして、この勘違いから始まった闘いは幕を閉じた。

2029

――Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！――

『マスター、正体不明の存在が急速接近中です』

「正体不明？」

乱入か？

そして現れたのは……

「誰かと思えばバカ吼太か」

まっくろくろすけだった。

「……シャイニング・トラ『マスター、お気持ちは分かりますが本物だった場合が厄介です』……チッ」

気に入らないなぁ。

「おいバカ吼太。ここはどこだ？目が覚めたらここにいたんだが」

「オレに質問するな」

――照井乙ｂｙなっぺ――

さて、答えを出す者を使って……。

うん。偽物だね。

「ハイパーボリア・ゼロドライブ！」

「危な！？」

コイツ……避けやがった。

「いきなり何をする！？」

「必滅呪法で消し去ろうとしただけだ！問題あるか！？」

「大有りだ！」

めんどくさいなぁ……。

さっさと潰そう。

「シャイニング・トラペゾヘドロン。【幾億の世界を創造しろ】」

オレの言葉に答え、シャイニング・トラペゾヘドロンが一つの【多元宇宙】を創り出す。

「な！？どこだここは！？」

「最初に言っておく。痛みを感じる暇すら与えねぇ。一瞬で死ね」

そう言い、右手と左手に必滅呪法を展開する。

まっくろくろすけが抵抗するためにエターナルコフィンを発動するがもう遅い。

「光射す世界に、汝等暗黒、住まう場所無し！渇かず飢えず、無に還れ！」

本来は右手のみで発動出来るけど、下手したら元の世界すらヤバイので、両手で制御をする。

両手に展開された魔法陣から、ビックバンすら軽く超えるエネルギーが放出されはじめる。

一つの宇宙のみに留まらず、全世界、全宇宙のあらゆるものを消し飛ばす、【必滅呪法を超えた必滅呪法】。

その名は……。

「ビックバン……インパクト！！！」

魔力が、解き放たれた。

「……やり過ぎたな」

元の世界に戻って来て分かったが、わざわざ多元宇宙を一つ創って、そこで使用したのにも関わらず、元の世界が僅かに歪んでいた。

シャイニング・トラペゾヘドロンで修復はしたが、もうビックバン・インパクトは使わないほうがいいだろう。

……まっくろくろすけ？当然消え去ったよ。

――Ｓｔａｇｅ　４――

「お前はフェイト……？いや、違うな」

目の前に現れたのは、フェイトによく似た容姿をした、だけど全く違う雰囲気を纏った少女。

「その通り。僕はマテリアルＬ、名前は雷刃の襲撃者。この姿は……まぁ借り物さ」

「借りるならもっと闘いやすいやつのにしてくれよ。まっくろくろすけとか」

「……僕に言われても困る」

いや、そうかもしんないけどさ。

「で、目的は？鯛焼きやるから話してくれ」

「わーい！はむはむはむ……って違ーう！！」

しっかり鯛焼きを食べてからツッコミを入れてきた雷刃の襲撃者。
食べ物を粗末にしなかったのはいいところだな。

「君達さえいなければ僕らはあの暖かな闇の中に居続けられたんだ。だけど君達がそれを壊した。だから君達を倒し、僕らは還るんだ。

あの穏やかな闇の中へ！」

「闇闇うっさい。……とりあえず、オレはそれを止める立場みたいだな。全力でかかってこい」

「言われなくても！受けてみろ！僕の力を！」

『ハスタームーブ』

雷刃の襲撃者がハスタームーブを使い、一瞬で肉薄してきた。

「速いな。だけどそれだけだ！」

オレは冷静に対処する。

雷刃の襲撃者が持つデバイス、バルフィニカスを使った斬撃を、ハンドソニックで受け流す。

「おっとと…」

雷刃の襲撃者がバランスを崩した。

そこにすかさず、カウンターの…

「ザケルガ！」

ザケルガを撃ち込む。

「らめぇ～！？」

なんか面白い叫び声をあげながら吹っ飛ぶ雷刃の襲撃者。

「なかなかやるなぁ！」

体勢を立て直しながら、雷刃の襲撃者が言ってくる。……笑顔で。

「なんだ。笑えば可愛いじゃん」

「うぇ！？／／／／／」

「全く……闇だかなんだか知らないけど、もっと笑っていろよ。せっかく感情を持ったんだしさ。そのほうが楽しいぞ？」

「う、うるさいうるさい！／／／／／／」

雷刃の襲撃者が魔力を高める。

ザンバーフォームのような形態に変形させたバルフィニカスを振りかぶる。

その刀身に雷が落ち、準備は完了した。

「雷刃滅殺！極光斬！！！」

異常なまでに伸びた魔力剣が、オレを両断しようと落ちてきた。

「伸びる剣には伸びる剣ってな」

懐からケータッチを取り出し、専用のカードを装填したあと、レリーフを特定の順番に従い、指で触れていく。

『ＫＵＧＡ、ＡＧＩＴＯ、ＲＹＵＫＩ、ＦＡＩＺ、ＢＬＡＤＥ、ＨＩＢＩＫＩ、ＫＡＢＵＴＯ、ＤＥＮ－Ｏ、ＫＩＶＡ』

レリーフが認識されるたびに、音声が発せられていき、最後にディケイドのレリーフをタッチすることで、それは完成する。

『ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

音声が発せられると同時に、ディケイドの頭部にディケイドクラウン――仮面ライダーの王者たる証――が顕れ、胸には９人のライダーのライドカードがヒストリーオーナメントとして装備される。

仮面ライダーディケイド　コンプリートフォーム。

ディケイドの真の姿にして、【世界の破壊者】たる力の顕現そのものだ。

さらに、腰に装備されたケータッチの、響鬼を示すレリーフに触れ、Ｆと書かれたボタンを押す。

『ＨＩＢＩＫＩ！　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＡＲＭＤ】』

認識された瞬間、ヒストリーオーナメントのカードはその全てが響鬼のカードに変化し、ディケイドの隣に仮面ライダー装甲響鬼が顕れる。

この響鬼はディケイドの分身でもある。そのため、響鬼はディケイドと同じように動く。

ディケイドがカードを取り出せば、響鬼も同じ行動をする。

そして、ディケイドはカードを装填する。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｈ、Ｈ、Ｈ、ＨＩＢＩＫＩ】！』

カードの効力により、響鬼の装甲声刃（アームドセイバー）から、ディケイドのライドブッカーから、音撃の刃が伸びる。

その長さは、雷刃の襲撃者が使う雷刃滅殺極光斬と同等……いや、それ以上。

「ハァァァァァァーーーーッッッ！！！！！」

ディケイドと響鬼が同時に剣を振る。

音撃の刃と魔力の刃がぶつかるが、一瞬の隙すらなく、雷刃滅殺極光斬は打ち破られた。

「そ、そんな……」

「勝負ありだな」

オレは変身を解き、雷刃の襲撃者に話しかける。

一応、音撃は当てていない。

無理に滅する必要なんてどこにもないからな。

「ま、これに懲りたら少しは反省しろよー」

そう言い残し、オレは次の場所へ飛んだ。

――Ｓｔａｇｅ　５――

「今度はなのはのか？」

「はい。闇の書の闇の【理】、マテリアルＳ、星光の殲滅者と申します」

なのはもそれなりに礼儀正しいとは思うが、コイツはそれ以上だな。

「そこを大人しく通してくれると嬉しいんだけど？」

「……答えなど、言わなくても分かるでしょう？」

「……しゃーねぇ。やるか」

互いに構えをとる。

「ルベライト！」

先に動いたのは星光の殲滅者。桜色のバインドがオレを捕縛しようと迫ってくる。

「バ・スプリフォ！」

それを、オレは全身から放った魔術停止波動で無効化する。

「パイロ…」

だが、それを読んでいたのか、星光の殲滅者は次の魔法を準備しており…

「シューター！」

バ・スプリフォの効果が終わると同時に、無数の魔力弾を放ってきた。

「！？」

ディストーションを使うには間に合わない上、息継ぎのタイミングを狙われたため、術も使用出来ない。

が、その弱点に気づいていないオレじゃない。

パイロシューターは全弾がクロスオーバーフォームの鎧に当たる。

だが、それだけだ。

クロスオーバーフォームの鎧はかなり堅固だ。並大抵の攻撃では傷一つつけることは出来ない。

攻撃と攻撃の間の僅かな隙(インターバル)をカバーする。

それはクロスオーバーフォームの目的の一つでもあるからな。

「生半可な攻撃では傷の一つも許さないということですか。ならば」

そう言うと、星光の殲滅者は自身の杖であるルシフェリオンを変形させ、振り回しながらエネルギーを溜める。

「ブラスト……ファイヤー！！！」

「負けるか！エクセレス・ファルガ！！！」

オレが放ったX印のレーザーと、星光の殲滅者が放った桜色の砲撃がぶつかり合う。

「オォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

「ハァァァァァァァァッッッ！！！！！」

烈昂の気合を篭め、互いに砲撃を撃ち続ける。

地力の違いか、結末は意外に早く訪れた。

勝ったのは……

「キャアァァァァァ！！」

……オレだ。

だが、オレは見た。

砲撃を受けて吹っ飛ぶ星光の殲滅者の目が死んでいなかったのを。

「……ルベライト！」

渾身の攻撃が通れば、人間である限りは多少なりとも気が緩む。

星光の殲滅者はそこをついたのだ。自身の魔力の、最後の一撃を除いた残り全てを囮に使うことで。

「クソッ！」

「中々でしたがこれまでです。集え明星、全てを灼き消す焔となれ。ルシフェリオン…」

膨大な魔力。それは、明星すら破壊しうる力にまで膨らんでいた。

そしてその莫大な魔力が今…

「ブレイカァァァァァァーーーーーーー！！！！！」

解き放たれた。

もっとも……

「バインド程度で動きを封じた気になってる時点で、お前の負けだ」

両手両足が使えなくても、これには関係無い。

「ギガァァァ……ドリルゥゥゥ……」

螺旋力を高める。

その密度は、ギガドリルブレイクの数十倍。

その螺旋力を全身から発する。

「……マキシマムッッッ！！！！！！」

全身からギガドリルが顕現し、高速で回転し始める。

そのドリルの回転がルシフェリオンブレイカーを吸収していく。

「そんな!?魔力を……それも砲撃に変換されたものを吸収するなんて……有り得ない……」

「チート魔導師だからな。それに、このドリルは不可能を貫くドリルだ。やってやれねぇことはねぇ」

ギガドリルマキシマム状態を解除する。

全魔力を消費した星光の殲滅者に、もはや戦う力は残っていないだろう。

「じゃ、さよならだ」

「……倒さないのですか？」

「勝負はついてるからな。じゃあな」

「……不可解です。私の理では、計りきれない…？」

――Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！――

『マスター、この反応は……』

「分かってる。……行くしか、ないな」

とある地点に急行する。

そこにいたのはリインフォース……いや、この場合は闇の書の意志と言うべきか。

「また……全てが終わってしまったのだな……」

「終わってねぇ。終わらせねぇ。このオレがいる限り」

「無理だ……たかが一魔導師に、闇の書は止められない。運命なんだよ……」

「不可能なんざ、オレが打ち破ってやる。絶望なんざ、オレが終わらせてやる。腐った運命なんざ……オレが変えてやる！！！」

「……お前は……何なんだ？」

「通りすがりの、チート魔導師だ。覚えておけ」

その言葉を聞いた闇の書の意志は、戦う構えを取る。

だけど、その瞳は、心の内を雄弁に語っていた。

――私を、止めてくれ。……私を、助けてくれ……！――

「聞いたぜ。お前の願い」

『ダウンロード、ジェネシック・ガオガイガー、武装召喚（リアライズ）』

顔以外の全身をジェネシック・ガオガイガーに変え、ジッパーの中

から巨大な建築物を取り出す。

グラヴィティ・ショックウェーブ・ジェネレイティング・ディビジョン・ツール。

通称、【ゴルディオンクラッシャー】。

全てを光に帰す、窮極の破壊槌。

それを、ジェネシック・ガオガイガーと化したオレ自身の手で掴む。

闇の書の意志が巨大な一撃を放とうとしているのがわかるが、それもゴルディオンクラッシャーに比べれば余りに小さい。

「夜天の……雷！」

膨大な魔力が紫色の雷となり、襲い掛かってくるが、そんなものに構ってなんていられない。

オレはゴルディオンクラッシャーを振りかぶる。

当てるのは一撃。ただそれだけだ。

「行くぞ」

「あぁ」

闇の書の意志が答える。その声に迷いは無い。

そして、ゴルディオンクラッシャーが起動し、２０ｋｍはあろうか

という異常な大きさになる。

それを振り下ろす。

救いの言葉を乗せて。

「闇の書の闇よ！光になぁれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！」

『マスター……』

「………少しだけ、静かにしていてくれ」

『……はい』

今は、消えた闇の書の意志に祈りを捧げよう。

例え偽物だとしても、彼女はそこにいた。

それだけは、事実だったのだから……。

――Ｓｔａｇｅ　６――

反応のある地点まで来ると、不思議な結界に包まれた。内部は案外広かったが、遮蔽物はなかったため、中にいたその人物はよく見えた。

「ほぅ……ここまで来るとは、中々の手練と見た。うぬ、名は？」

「吉谷吼太。通りすがりのチート魔導師だ。覚えて……おかなくていい」

覚えられると困りそうだしな。

「ふむ……。下々の者に名乗らせておいて自分が名乗らないのは礼儀に欠けるな。よかろう。我の名前を教えてつかわす」

誰が下々の者だっての。

「我はマテリアルＤ、闇の書の闇の王。闇統べる王だ。覚えておくがいい！」

「へーへー」

「さて、うぬは闇の書の復活を阻止して回っている者。間違いないな」

「まぁな」

複写眼（アルファ・スティグマ）と答えを出す者（アンサートーカー）を使い、闇統べる王の戦力を分析する。

力なら雷刃の襲撃者より、技術なら星光の殲滅者より上……まさにマテリアルの王ってわけか。

「ククク……しかし残念だったな。この我に捕まったということは、則ちうぬの負けを意味する。あの究極の闇は、我は再び世界に君臨するのだ！」

「究極の闇か。……知ってるか？」

オレの問い掛けに、闇統べる王が怪訝そうな顔でこちらを見てくる。

「世界には、究極の闇と知りながらもその力を使い、人々の笑顔を守るために戦った戦士がいた」

「ふん……知らぬな」

「そいつに比べりゃ、お前が言う闇なんざたいしたこたぁねぇよ」

「ならば試してみるがいい！塵芥！」

「上等だぁ！オレを誰だと思っていやがる！！！」

カードをディケイドライバーに装填する。

『ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　【ＫＵ、ＫＵ、ＫＵ、ＫＵ、ＫＵＧＡ】！』

仮面ライダークウガ　アルティメットフォーム。

【聖なる泉枯れ果てし時、凄まじき戦士雷の如く出で、太陽は闇に葬られん】

だが、闇があるから光がある。

闇と光は表裏一体。

ならば、闇を闇で払うことだって、不可能ではないはず。

デビライザーとライドブッカーを、アルティメットボウガンに変化させ、構える。

「エルシニアダガー！」

闇統べる王が大量の剣型魔力弾を撃ってくるが、アルティメットフォームにはライジングペガサスすら上回る感覚器を持っている。

それを使い、二丁のアルティメットボウガンでエルシニアダガーを全て撃ち落とす。

「な、なんだと！？」

「次はこれだ」

ライドブッカーをソードモードに変形させ、それをアルティメットロッドに変化させる。

「ドゥームブリンガー！」

扇状に拡がる魔力剣が迫るが、その全てをアルティメットロッドでたたき落とす。

「な、ならば……アロンダイトォ！」

直射砲撃が襲い掛かってくるが、それは瞬時に斬り裂かれた。

……この、アルティメットソードで。

「おのれ塵芥ァ！」

「だから言っただろ。お前が言う闇なんざたいしたこたぁねぇってな」

そう言いつつ、呪文を唱える。

「バオウ・ザケルガ！」

バオウ・ザケルガを呼び出す。

だが、これの目的は攻撃じゃない。

「……相乗掛合（クロスオーバー）！」

仮面ライダークウガ　アルティメットフォームと、バオウ・ザケル

ガを相乗掛合する。

そして生まれたのは、全身に金色の鎧を纏ったクウガ。

仮面ライダークウガ　ライジングアルティメット。

「く……我が闇は負けん！」

そう言いながら、魔力を練り上げる闇統べる王。

「絶望に足掻け塵芥！エクス…」

「無駄だ」

オレが言った瞬間、闇統べる王が展開していた魔法陣が爆発した。

仮面ライダークウガ　ライジングアルティメットが持つ、プラズマ能力。

それを使って、魔法陣をプラズマ化し、闇統べる王の魔法をキャンセルした。

「もうお前に残された道は無い。闇の書の復活は諦めるんだな」

そう闇統べる王に言い残し、オレは結界から立ち去った。

――Ｆｉｎａｌ　Ｓｔａｇｅ――

「フェイト、なのは、はやてのマテリアルと来たら……」

『次はマスターのマテリアルでしょうね』

にしても、何のマテリアルなんだろ？

『吼太君！残る強い反応は吼太君が目指してるので最後だよ！』

エイミィさんから報告が入る。

『コータ……すまないな……私の残滓達が……』

「お前が謝ることじゃねぇよリインフォース。それに、後少しで終わる。だからそこで待ってろ」

『……あぁ』

さて、どんなやつがいるんだ？

「ふゆ～？」

「……ウェ？」

「ふぁ～♪わにゅ～♪♪」

「……トゥード、オレは頭がどうかしちまったらしい。オレのマテリアルが言ってる言葉が理解出来ん」

『ご安心をマスター。貴方の聴覚は正常です』

「……じゃあアイツは何を言ってんだ？」

「そこで僕の出番だよ！」

この声は……

「リーム！？」

「他のは終わったからね。こっちに回ってきたんだよ」

「……で、お前はアイツの言いたいことが分かるのか？」

「一割ぐらい！」

……

「ふやぅ？」

『マスター、私が翻訳します。……先程までの話を統合すると……『はじめまして！ぼくは【合】を司る、まてりあるＡ！　深淵の赤闘士だよ！お姉ちゃんがぼくとあそんでくれるの？』だそうです』

合のマテリアル……さしずめ、闇の書の闇を統合していた部分ってとこか？

あとオレは【お姉ちゃん】じゃねぇ。

「う～♪（遊ぼ♪遊ぼ♪）」

「遊ぶ……？」

「はぁうゃ（うん）♪♪」

オレが言った言葉に、満面の笑顔で反応する深淵の赤闘士。

「……何すりゃいいんだ？ツイスターゲームとか？」

「ぐはっ！！？」

何故かリームが鼻血を噴く。

……いや、なんで？

「そ、それは見たい……コータとコータのツイスターゲーム……一粒で二度お得！いや、組み合わせは無限大！？」

「お～いリーム、大丈夫かー？」

「ふぉん？（意訳：あのお姉ちゃん大丈夫なの？）」

『大丈夫ですよ。深淵の赤闘士様。あれが彼女ですから』

一時間経過……

「で、結局はバトルか」

『いいんじゃないでしょうか』

「ふぁ～♪（わ～い♪）」

「じゃ、せっかくだし行くよ！」

「おう！」

「「ユニゾン・イン！」」

そして、闘いの火蓋は切って落とされた。

「テオザケル！」

「あぅ～♪」

全くの同威力の電撃がぶつかり合う。

「やるな」

「えへへ…♪」

しっかし本当に楽しそうだな。

「あぅあ～♪♪」

深淵の赤闘士が、イビルジョーの顎を右手に武装召喚し、突っ込んできた。

「だったらこっちも！」

『ダウンロード、イビルジョー、武装召喚（リアライズ）』

互いのイビルジョーの顎が、互いに喰い合う。

「埒があかねぇか？だったらこれだ！」

ジッパーの中からディメンションタイドを取り出し、深淵の赤闘士に向ける。

そこから発せられたのは、高密度のブラックホール。

だが、深淵の赤闘士は、ウイングドラモンの翼を武装召喚し、ブラックホールの重力を完全に無効化する。

「この様子だと答えを出す者や複写眼（アルファ・スティグマ）までありそうだな。まさに、オレ自身が相手ってことか」

「ふふぇ、ふぁー！」

そんな気が抜けそうな掛け声と共に、深淵の赤闘士が繰り出したのは……

「インフィニティ・ビックバン・ストーム！？」

『コータ！』

「分かってる！やるぞ！」

周囲に被害を出さずにあれを完全に消し去るにはあれしかない！

『ＪＳ機関フルドライブ、クロスオーバーフォームＭＡＸモード』

「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

【相乗掛合】《クロスオーバー》を全開で発動し、融合させる。

……が、クロスオーバーフォームの鎧が耐え切れずに自壊していく。

相乗掛合はその名の通り、重ねた数だけ、爆発的に効果が高まっていく。

そのため、一定以上の数を相乗掛合すると、クロスオーバーフォー

ムの鎧ですら耐え切れないほどの負荷が発生するのだ。

だけど、この一回だけは……！！！

辺りを、閃光が支配していく……。

Ｓｉｄｅ　三人称

辺りを支配していた閃光が収まり。

そこにいたのは、ボロボロになった三人の人影。

吼太、リーム、そして深淵の赤闘士である。

「ったく……危ないとこだった……遊びで地球を消しちゃダメだろ！」

「ふの～……」

深淵の赤闘士は目に見えて落ち込んでいる。

吼太が怒っているのがよほど答えているらしい。

「これに懲りたら、遊びに使う技はしっかり考えて使えよ？」
「ふゆっ！」
ビシィッと敬礼する深淵の赤闘士。
「よし。じゃあな！」
「ふまぅー♪」
そう言い、吼太達は帰路についた。

「コータ、よかったの？」
帰り道、ふとリームが吼太に尋ねた。
「何がだ？」
「あの子にとどめをささなくて」
そう、吼太はただの一撃も深淵の赤闘士に攻撃を当てなかった。
「別に闘いたいってやつじゃ無かったみたいだしな。ストレス解消に付き合ったようなもんだよ。それに、あいつは既に魔力を使い切っていた。残り僅かな時間を、他のマテリアル達と過ごすのぐらいは、させてやろうって思って、な」

「へぇ……♪」

『そのように考えていたのですか』

「まぁな。さぁーて！家に戻ってこたつでのんびりするぞー」

「おー♪」

数日が経ち……

「はぁ～♪やっぱりこたつは気持ちいいね～コータぁ～」

「あぁ……」

気持ちよさそうなリームに引き替え、吼太の顔は渋い。

理由は……

「あ、みかん剥いて星光～」

「自分で剥いてください雷刃」

「深淵よ。次はこんな服を着ないか？」

「ふぇぁ～♪♪」

「なんでお前らがいるんだマテリアル共！？」

「それには私が代表して答えましょう」

星光の殲滅者が手を挙げながら言う。

ちなみにマテリアルはみんなバリアジャケットではなく普通の服を着ている。

「何故この場所にいるか。その理由はそれぞれあります。私は、貴方の不可解な理を知りたい故に」

「僕は何か君に惹かれるものがあったから」

「王たる我を降したのだ。責任を取って貰わねばな」

「ふぁ～う（意訳：もっとお姉ちゃん達と遊びたいの～）♪」

「…まぁ、だいたい分かった。……で、なんでお前ら消えてないの？」

「「「分かりません（わかんないよ）（わからん）」」」

「……はぁ！？」

「私たちにも、何故私たちが消滅せずに残っているのかは分かりません。信じたくはありませんが、奇跡としか……」

星光の殲滅者を始めとする、マテリアル達にもこの現象が発生した原因はわからないらしい。

「……もちろん、貴方に迷惑をかけるつもりはありません。今は貴方の母上様に許可を頂いているのでこの場にいますが、貴方が言うならばすぐにでもこの家を出て行くつもりです」

星光の殲滅者が言った言葉に、他のマテリアル達も残念そうな顔をしながらだが、肯定する。

「（母さん、分かってて入れたんだろうなぁ…）……お前らみたいな可愛い女の子……深淵の赤闘士は別だけど、とにかく、こんな寒空の下に放り出したらオレの人格が疑われるっての！……いたいだけ、いりゃあいいさ」

そう吼太は言った。

その言葉を聞いたマテリアル達はすぐに満面の笑顔を咲かせる。

「「「ありがとう…♪」」」

「ふゆ～（お礼～）♪」

そう言い、深淵の赤闘士が吼太に近づき……

……吼太の唇にキスをした。

「「「は、はぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！！？」」」

驚いたのは、他のマテリアル達である。

「貴女、なんて羨ましい……じゃなかった。破廉恥な真似を！？」

「ずるいぞ深淵ー！」

「我に無断で接吻をするとは……もはや片腹が大激痛だ！」

「えへへ……♪♪／／／／／／／」

「男に……男にキスされた……」

『マスター、言っておきますが……』

「……？」

『深淵の赤闘士様は女性です』

「……いや、それならまだいいんだけどさ……一言言わせてくれ」

『はい』

「……なんでオレのマテリアルが女なんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！？」

日常は大切なもので、ありふれているもの。

この物語もまた、そんな日常の一コマでしかない。

そんな日常を守るために戦う人間がいる。

その人間は、自分のことをこう呼ぶ。

――通りすがりのチート魔導師

これにて、一件落着。

# 新年あけおめ！Ｉｆストーリー！（後書き）

なっぺ「新年あけまして後書き座談会！」

プリム「ちょっと作者さん！」

ミカ「俺達が全く出てないってどういうことさ！？」

アリス「正直に答えて！」

ライラ「……理由次第では…す……」

なっぺ「実は……な……」

ぶっちゃけ入れるのめんどかったんだ♪ゴメンね☆」

――ただ今作者の駆除中です――

吼太「駆除してる間に感想感謝コーナー行くぜ。天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、バルディッシュさん、緋水さん、七つ夜＆夜つ七さん、香崎　真琴さん、てっちゃんさん、月光閃火さん、高町ゆうきさん、まーたさん、朱神優希さん。感想ありがとうございました」

ベス「バルディッシュさんからは吼太さんにみすちーの衣装とスペルカード　鷹符「イルスタードダイブ」、声符「梟の夜鳴声」、蛾符「天蛾の蠱道」、夜盲「夜雀の歌」、鳥符「ヒューマンケージ」、鳥符「ヒューマンケージダブル」を、緋水さんからは吼太さんが山を登ってる時の写真と詩音さんのコスプレ写真（ゴスロリ）を頂きました。ありがとうございます」

吼太「今回、久々にコスプレ衣装が来たな」

ナツハ「着ないのか？父君」

吼太「着ない」

キサラ「着ないのー？」

吼太「着ない」

カンナ「私が自殺する代わりに」

吼太「着ない」

ミナ「親父殿！後生だから！」

吼太「着ない」

セン「どうしても着ないのか？」

吼太「着ない」

なずな「私からもお願いします」

吼太「着ない」

フィニア「着ろよー！」

吼太「着ない」

羽旺「王が命ずる。……あの服を着ろっ！」

吼太「着ない」

詩音「可愛いよ？」

吼太「着ない」

赫灼「うぁう……」

吼太「着ないって何回言わせれば気が済むんだテメェらァァァァァァァ！！！？」

なっぺ「そうは問屋が浦島太郎ッ！」

吼太「意味不明、ってなぁぁぁっ！！？／／／／／」

全「「「コータのコスプレキター！イェーイ！」」」

吼太「ううぅ……恥ずかしいよぅ……／／／／／／」

トゥード「よくお似合いですよ、マスター吼太。それこそまるで女性みたいに」

吼太「褒めてないだろそれぇ……／／／／／／」

なっぺ「新年初コスプレはみすちーだ！羽飾りが可愛さを演出しているぜェ！」

吼太「うるさい！死ねぇ！！！／／／／／／」

――再び作者の駆除中――

アリサ「ねぇねぇ。質問があるんだけど？」

ベス「私が代わりに答えましょう」

すずか「Ｆｉｎａｌ　Ｓｔａｇｅでコータ君が使った技あったよね？あれって何なの？」

ベス「なんでも吼太さんのオリジナル技だそうですよ？後々出す予定だそうです」

アリシア「な、なんかすごそう…！」

アルフ「アタシ達の出番はあるのかい？」

プレシア「是非知りたいわね」

ベス「アルフさん、プレシアさん、アリシアさんはＳｔＳ編では一時フェードアウトしますが、後々には復活する予定だそうです。当然ザンクさんも出てきますよ」

ザンク「ふむ、そうか」

リーム「じゃあ、赫灼たる赤闘士……もう通称赤ちゃんでいいや……赤ちゃんは？」

ベス「赫灼さんはさすがに今回限りの予定だそうです。人気次第では分かりませんが」

詩音「詩音は～？」

トゥード「出さなかったら……」

ベス「ご安心ください。かなりの重要ポストだそうですよ。詩音さんもトゥードさんも」

アリス「私は？」

ベス「貴女のことを話すなら、この告知を先にしておいたほうが良いでしょう。……これです」

【魔法少女リリカルなのは～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～、第四期第五期が確定！】

全「「「お～！」」」

ベス「正確には、本来の第四期とＳｔＳの間に、オリジナルの展開をもう一つ加わるんだそうです。加わる理由は以下の通り」

・現状では伏線があまりにも足らなすぎる

・アリスの活躍がなさすぎ

・グズィスの話がなさすぎ

・リームを主体にした話を作りたい

リーム「へ？僕？」

ベス「第四期ではリームさんが主体となって話が進むそうですよ。あ、ちなみにＶｉｖｉｄやＦｏｒｃｅとは関係は無い予定です」

リイン「じゃあ、その辺りの人達はこれから先には出ないですか？」

ベス「Ｖｉｖｉｄのキャラは出す予定だそうです。ストーリーは触り程度だそうですよ。あとＦｏｒｃｅについては全く、というわけではないみたいです」

シグナム「強敵は出るのか？」

ベス「第四期第五期共に。とくに第五期には転生者には天敵な相手が出るそうです」

ヴィータ「マジか……」

ザフィーラ「鍛練を怠らないようにせねばな」

シャマル「私も頑張らなきゃ！」

ベス「そして最後に。……第三期、ＳｔＳは第四期第五期をシリアスにするため、かなりはっちゃけるそうですよ」

リニス「パパラッチのしがいがありそうです♪」

吼太「ふう……駆除完了♪最後はみんなで締めるぜ？」

ファンスト一同（一なっぺ）「「「ではではこの辺で！今年の更新もどうぞお楽しみに！」」」

なっぺ「……ふふふ……遊んでやるぜェ……」

？？？「早く登場させてくれたまえよ？この私の野望成就のために

……」

なっぺ「分かってますよ……あ～っはっはっはっはっ！！！」

今年もよろしくね。

## 番外編　資質と才能　そして未来の希望（前書き）

はい、今回は海人さんの魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒ　Ｓ～Ｓｗｅｅｔ　Ｓｏｎｇｓ　Ｆｏｒｅｖｅｒ～とのコラボになります。

世界の旅人が過去の自分と出会い、二人の瞳は何を見る…？

ギャグは無いはず。

# 番外編　資質と才能　そして未来の希望

Ｓｉｄｅ　エリオ

ある日、僕はお父さん達に頼まれていたおつかいをキャロと一緒にこなしていた。

「次は……にんじんにまいたけ、あとねぎだって。エリオ君」

キャロがメモを読む係で、僕は荷物持ちだ。

……僕ばっかり労力がかかってる気がするけど、お父さんいわく「男は黙って荷物持ちだ」って言ってた。なんでだろ。

「じゃあ行こう！エリオ君」

「うん、キャロ」

今日も平和だな。

Ｓｉｄｅ　吼太

「久しぶりだな飛翔」

「あぁ」

理由は知らないけど、突然飛翔が来た。

とりあえずはお茶を出したりして、話を伺う。

「で、どうしたんだ突然？」

「何、こっちの俺（エリオ）とお前が会ったって聞いたからな。少し話をしてみたいと思ってな」

ふむ……。

「それは構わんが、さっきキャロと一緒に買い物に行ったから、しばらくは帰ってこないぞ？」

「そうだったのか……入れ違いだな」

間の悪い……。

なにか時間を潰せるもの……あ、そうだ。

「ちょっと聞きたいことがあったんだが…いいか？」

「答えられる範囲ならな」

Ｓｉｄｅ　エリオ

「「ただいまー！」」

買い物が終わって帰ってくると、玄関の靴が多いことに気づいた。

ユーノさんとかかな？それともクロノさん？ザフィーラは靴は無いし……

「そういうときはだな……」

「へぇ、そんな手もあるのか…」

お父さんが誰かと話している。

ってことはお父さんの知り合いなのかな？

「エリオ君、誰だろう？」

「さぁ……？悪い人じゃないとは思うけど……。お父さんの知り合いだし」

とりあえず部屋に入ってみる。

「お、帰ってきたかエリオ、キャロ。エリオ、お前にお客さんだ」

「僕に？」

「初めまして……と言えばいいかな。不破飛翔だ。よろしく」

お客さんが僕に挨拶してくる。

赤い髪をした、いわゆるカッコイイ系な男の人。

「あの……なんで僕を？もしかして小さい頃に会ったとかですか？」

まだ年齢が二桁にもなってない子供だけど、小さい頃の記憶は意外に曖昧だ。もしかしたらその時に会った人なのかなと思ったけど……。

「いいや違う」

飛翔さんは否定した。

「じゃあエリオ君と何の関係が……？」

キャロが不思議そうに尋ねる。

「平たく言えば、俺は未来のお前だ。エリオ」

「……へ？」

未来の……僕……？

「事情が入り組んでいて、説明には時間がかかるだろうが……聞くか？」

未来のこと。

気にならないといえば嘘になる。

僕は頷き、肯定を示した。

Ｓｉｄｅ　三人称

「……とまぁ、かい摘まんで話したが、大まかなところはこんなところだ」

「そうなんですか……」

飛翔が話し終えると、エリオは少し落ち込んだ様子を見せる。

未来は一つではない。

最初にそう言われたが、今ここにこうしている自分が、いつかそうなる可能性だって、無いわけではないのだ。

少なからず気分が落ち込むのは、仕方ないと言えよう。

「……とはいえ、この世界には吼太がいる。お前が俺みたいになることはまず無いだろう」

「あぁ。そんなことにさせて堪っかよ」

吼太も頷き、飛翔の言葉を肯定する。

それを聞いたエリオは、僅かに笑顔を浮かべた。

「……ありがとうございます」

「応」

「あぁ」

「さて、エリオ。お前に渡したいものがある」

そう言い、飛翔がベルトと大型の剣を渡す。

「これは……？」

「お前が護りたいと願うとき、護るための力を望んだ時、その二つがお前の力となるだろう」

「護るための……力……？」

エリオが首を傾げる。

まだ、いまいち実感が湧かないらしい。

「フッ……まぁ、いずれわかる」

そう言い、飛翔は深く語らない。

「アレを渡したのか……なら……マリエルさんに……リニスにも意見を……」

吼太もなにか考えがあるらしく、少しぶつぶつと呟くと、念話で誰かと話しはじめた。

「ものはついでだ。稽古をつけてやる」

「あ、はい。お願いします」

こうしてエリオは飛翔に稽古をつけてもらうこととなった。

「脇が甘い！それに死角に気を取られすぎてそれ以外が疎かになっているぞ！」

「うわっ！？す、すいません！」

エリオが飛翔の指示を受けながら、飛翔の杖を受け流していく。

突きを弾き、払いを避け、振り下ろしを利用して突き返す。

そういった、対武器の戦い方を指南していた。

「（ふむ……上達が早いな。基礎の身体運び、正しい姿勢、柔軟な筋肉が出来ている証拠か）」

エリオに指南しながら、飛翔が考える。

吼太はエリオに槍及びそれと似たものを今まで触らせなかった。

技術を先に身につけるより、基礎をしっかり固めてから技術に入る。

その成果が今花開いたのだ。

「（身体が軽い……？　僕ってこんなに速かったっけ？）」

さらに、エリオ自身も、自身の速さに気づいた。

今はまだ同年代の少年少女よりある程度速い程度。

それでも【自覚】はエリオの身体に眠る才能をさらに引き出してい

った。

「よし、今日はここまで」

「ハァ……ハァ……。ありがとう…ございます……」

結局、二人は数時間もの間稽古をしていた。

「エリオ君お疲れ様～！はい、タオル」

「ありがとうキャロ。嬉しいよ」

そう言いあい、少年と少女は笑い合う。

その様子を、飛翔は昔を懐かしむような顔で見ていた。

おまけ

そして、しばらくエリオとキャロ、飛翔は稽古のことなどについて話していたのだが、ふと思い出したようにエリオが聞く。

「そういえばお父さんと飛翔さんは何を話していたのですか？」

「女難についてだ。正確には吼太の愚痴を聞いていた。もっとも、半分くらいは惚気だったがな」

「……えと……」

「とはいえあいつも苦労してるらしい。二人とも、少しでいいから吼太を労ってやってほしい

その日以来、エリオとキャロはしっかりした子供となり、吼太は楽さと少しの淋しさを味わうのだった。

## 番外編　資質と才能　そして未来の希望（後書き）

なっぺ「どすわーん！後書き座談会！」

吼太「なんだよどすわんって」

なっぺ「気にしちゃいけない気にしたら人生負け組確定さぁ☆」

吼太「語尾に星付けんな気持ち悪い」

なっぺ「さて、エリオが手に入れたものについて説明しますと……」

・ライダーベルト

・パーフェクトゼクター

なっぺ「この二つを現在は所持しています」

吼太「ベルトって？」

なっぺ「飛翔が吼太の世界にいくつかとあるものをばらまいたから、それ用の。まぁ分かる人にはわかるでしょう」

吼太「ゼクターだもんな」

なっぺ「赤いのだよ。じゃあ感想感謝コーナー！」

吼太「七つ夜&夜つ七さん、香崎　真琴さん、てっちゃんさん、バルディッシュさん、月光閃火さん、緋水さん、雨季さん、高町ゆ

うきさん、ライさん、天照大神さん、朱神優希さん、水橋さん、まーたさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございます」

なっぺ「七つ夜&夜つ七さんからは封神演義の太極図を、バルディッシュさんからはガンバスターを、緋水さんからは吼太と赤ちゃんのツイスターゲームやってる時の写真に詩音と赤ちゃんのツイスターゲームやってる時の写真を頂きました！ありがとうございます！」

ラバーズ「「「コータ（君）……その写真に写ってるの、誰？」」」

吼太「オレのマテリアルだけど？」

ラバーズ「「「……少し、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよう？今夜は寝かさないから……／／／／／」」」

吼太「……え？何故？」

なっぺ「お前が無意識にフラグを建てるのが悪い」

ベス「次回は？」

なっぺ「香崎さんとのコラボ。また引っ掻き回しにきます」

ベス「まぁ、あそこの人達ですしね」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 番外編　一瞬あるのはシリアスではなくシリアル（前書き）

今回は香崎　真琴さんの【転生夫婦の並行世界旅行】とのコラボです。

とはいえ、夫婦は今回少ししか出ません。

代わりにヤツが来ます。変態です。

キャラ崩壊注意＆シリアス崩壊注意

# 番外編　一瞬あるのはシリアスではなくシリアル

Ｓｉｄｅ　吼太

「ふぅ～。これで一段落か」

資料を纏めて、提出する。

ネットワークを使った提出は楽でいいな。

「お疲れ様、コータ。はいお茶」

「おう。サンキュー、リーム」

リームはリームで仕事を手伝ってくれたり、お茶くみをしてくれたり。

いいやつだよ。本当に。

そんなときだった。

『転移タイプの現象を確認。転移先はこの部屋です。警戒を』

トゥードが突然、警戒を呼び掛けてくる。

そして現れたのは……

「よう、また来たぞ」

「久しぶりね、吼太」

チート夫婦こと、神北鈴と御神百合姫だった。

「時空裂断！バーストスピニングパァァァァンチ！！！！！」

「「おっと危ない」」

バーストスピニングパンチで即座にお帰り願おうかと考えたんだが、やはりと言うべきかチート夫婦は軽く避けた。チクショウ。

「あと今日は他にもいるわよ」

百合姫が言うと、鈴の後ろから一人の女性が前に出る。

その女性は、いつか戦うであろう敵の顔の面影があるのだが、何より目を引くのはその格好。

髪の毛はポニーテールに纏めてあり、ブラジャーと紐パンに白衣だけを着た極めて青少年の育成上よろしくない格好をした女性。

その女性が口を開く。

「単刀直入に言おう。君の【ズキュゥゥゥーーン】をくれ」

そう、まさに痴女がいた。

「……は？」

「聞こえなかったのかね？君の熱くて新鮮な【見せられないよ！】を私の【ピー】に注いでくれと言ったのだが」

『前回の発言と内容に差がみられますが』

「細かいことは気にしないことだ」

「……とりあえずはだ。名前を名乗ってほしいんだが」

「ヤる時には相手の名前を呼びながらがお好みかな？」

「違う！」

つーかいつの間にヤることが前提に！？

「まぁいい。私の名前は神崎ジェイル。君にはジェイル・スカリエッティの名前のほうが馴染み深いかな」

やっぱスカさんか……。

「ココココータ！痴女だ！痴女がいる！」

ショックからようやく立ち直ったらしいリームが突然言い出す。

ただなリーム。お前も充分痴女の領域に入ってるからな？

「コータに求められた時にすぐにシテあげたいから……／／／／」
なんて理由で常にはいてないお前も充分に痴女だからな？
「痴女とは随分な言い様だな。私は暑いからこの格好なだけだが？」
……ん？
「待て待て待て。なら冬はどうするつもりだ？」
冬なら普通に服を着るんじゃないか。
そんなオレの淡い希望は見事に打ち砕かれることになる。
「これにプラスニーハイだ」
「「確実に露出狂だー！？」」
オレとリームの声が重なった。
「……一応聞こう。お前らは？」
「「遊びに来たぜｗｗｗ」」
オレの問い掛けに夫婦は笑顔で答えた。
……ですよねー。
一先ず、は。

「逃げるぞリーム！」

「ガッテン！ユニゾン…」

「「イン！」」

ユニゾンし、クロスオーバーフォームになって自室の窓からミッドの空に逃げ出した。

Ｓｉｄｅ　ジェイル

「逃げたな」

「逃げたわね」

「そんなに恥ずかしがりなくてもいいというのに」

噂では２７Ｐすらしてのけたと言うらしいじゃないか。

しかもたまに局員に襲われているらしい。

男性女性問わずにだ。

もっとも、掘られたことはさすがに無いらしい。

……まぁ裏を返せば女性には必ず負けているということになる。

「さて、どうしよう？母上、父上」

「貴女のやりたいようにやれば？」

「むしろヤりたいようにヤればおｋｗｗｗ」

「うむ。承知したぞ」

とはいえ、言われなくてもヤるつもりは満々だがな。

チートの【禁則事項】は中々興味深いからね。

ましてやこの世界においては一応最強であるはずのチート、吉谷吼太は何故か女性には弱くなってしまう欠点があるらしいからね。

中々提供してくれる人もいなかったし、最近篭りがちだったから運動がてらに鬼ごっこに付き合ってやろう。

もちろんこちらが勝利した暁には抵抗する暇なくごーとぅーべっどだ。

「では行ってきます」

「行ってらっしゃーい♪」

「ついでに吼太の娘達も探して来てくれー」

「了解した」

Ｓｉｄｅ　吼太

「はぁ……はぁ……」

とりあえずは虚数空間に逃げてきた。

だがあの夫婦の娘だ。ここもすぐに見つか「お、いたいた」ったよチクショウ！

「来させてたまるか！波花ァ！」

八ッ星神器、波花を発動してジェイルを弾き飛ばそうとするが……

「ＳＭプレイがお望みかな？なら私がたっぷり教えてあげよう」

高速でしなる波花を回避しつつ、ジェイルが普通の鞭をどこからか取り出し、波花の僅かな隙間を縫ってオレに打撃を与えてくる。

もちろんクロスオーバーフォームの鎧に守られているためダメージは無い。

だがこの一瞬で悟った。

オレは、コイツに勝てないと。

だが、ジェイルは意外な言葉を口にした。

「ふむ。力の練度は中々、技術も父上や母上に聞いたものより遥かに上に上がっている。力の制御もうまくいっている上、何より力そのものの出力はかなりのものだな。私でも危うそうだ」

……コイツの目はふしあなか？明らかにオレの攻撃はジェイルを止められなかったじゃねぇか。

「……女性に勝てない理由はこういうことか」

ジェイルが何かを悟ったように言う。

「どういうことだ！？」

「気づいていなかったのか？……いいだろう。特別に答えてあげるとしようか。君は女性を傷つけることを恐れているんだ。自身の強大な力によって」

……？

「まだ分からないらしいな。君はその力が女性の肌を、顔を、身体を、心を傷つけてしまうと恐れているんだよ。力が強くなればなる

ほど、その恐怖は強くなる。だから君はいくら鍛えても女性に勝てないんだ」

……そんな……わけ……

『……確かに……コータって女の人と模擬戦するときとか、どこか遠慮というか……そんな感じがしてたよ……』

「だそうだが？」

「……わからねぇよ。オレだってわからねぇ。ただ、これだけは分かる」

そう言いながらクロスオーバーフォームを解除する。

「ここで逃げたら、オレは……一生逃げつづけることになる。だから、オレは戦う……オレ自身と！」

そう言い、拳を構えた。

Ｓｉｄｅ　ジェイル

いい瞳をしている。

そう純粋に思えた。

だから、私は言った。

「ならば決着はベッドでつけようじゃないか！」

と。

その瞬間、吉谷吼太は派手にずっこけ、虚数空間の底に落ちそうになっていた。

「待てやァァァ！なんでそうなるんだよ！？」

「元々ヤるのが目的だったし」

というより、私は戦闘が専門ではないしね。あくまで研究者だ。

「さぁ、【あはーん】をしようじゃないか」

「死んでもするか！」

やれやれ、仕方ない。

「リーム君」

『アイアイサー♪』

私が指を鳴らすと、吉谷吼太の動きが止まる。

「リーム！？」

そう、リーム君が吉谷吼太の動きを抑制しているのだ。

『いやぁ、こっそり念話で話してたんだけどさ、意外にいい人だよ？ジェイルちゃん』

「ちゃん付けは微妙だが、まぁその通りだ吉谷吼太。３Ｐならということで協力を得たのだよ」

「リームの裏切り者ー！」

さて……

とあるラブホに吉谷吼太とリーム君を招待する。

「さぁ、横になるといい」

「止めろ！止めてくれ！」

表面的には嫌がっているな。

だがリーム君がユニゾンを解除し、吉谷吼太に馬乗りになると途端に抵抗が弱くなっていく。

余程調教されているらしいな。

「そこまでです」

だがその瞬間に吉谷吼太の身につけていたデバイス、フォーティトゥードが人間態になり、私達を阻む。

「やれやれ。君か」

「マスターから命令がありました。あなたたちを捕縛させていただきます」

これには勝てそうにないな。

だが……

「これならどうかな？」

私が言った瞬間、フォーティトゥードはスリープモードに入ってしまった。

理由は簡単。リーム君が吉谷吼太に強制ユニゾンして、マスター権限を使用したからだ。

「さて、邪魔物は」

「いなくなったね♪」

ユニゾンを解除したリーム君が吉谷吼太の唇にむしゃぶりついた。

舌と舌が絡み合い、粘液が口の端からこぼれ落ちる。

その間に私は吉谷吼太のズボンを脱がし…

【子供はお断りな世界に突入！】

Ｓｉｄｅ　三人称

管理局地上本部。そこのとある廊下を二人の局員が歩きながら話している。

「あれ？吉谷提督は？確か今日は第１０４《俺達の》部隊の教導がはいってるんじゃ？」

「さぁ？また女性局員に襲われてんじゃないか？いつものことだろ」

他愛もない話をしているかのように雑談を続ける二人。

管理局内での吼太の評価は主に三つだ。

一つ目は、どんな難事件、大災害、凶悪犯罪者だろうと、通りすがるかのようにすぐに解決してしまう、【通りすがりの最強魔導師】。

二つ目は、本来なら有り得ないほど短期間で次元航行艦の所持免許を取得した、【管理局最年少ＸＶ級次元航行艦船艦長】。

三つ目は、その常人離れした幼い容姿とあまりの可愛さ、そして管理局内にいるときはほぼ確実に女難に遭っていることからつけられた、【エターナルショタ＆キング・オブ・アンリミテッド・フラグメイカー】。

なんだかんだで異世界の人達が呼んでいる二つ名と似た呼び名が付いているのは吼太に持つ印象が世界を越えても共通であるということなのだろう。

「にしても、今回の教導どうなるんだ？吉谷提督のフィアンセの誰かか？」

「高町教導官かな。やっぱり」

そう言いながら、模擬戦場に向かう。

そこにいたのは。

「どう？どう？鈴。可愛い？」

「あぁ、全世界で一番可愛いよユリ♪」

バカップル全力全開の男女だった。

「「……」」

言葉を失う二人の局員。

言わずと知れたチート夫婦、鈴と百合姫である。

ちなみにどういう状況かというと、鈴が作った特製の教導隊の制服を百合姫が着ていて、それを披露しているといった具合だ。

ついでに、何気に鈴も教導隊の制服だったりする。

「…あ、全員揃ったみたいね」

「はいちゅうもーく！」

鈴が手を挙げ、部隊の人達を注目させる。

「吼太……この場合は吉谷提督か？まぁとりあえず、今日は来られないから、代わりに俺達が教導するぞー（主に暇つぶしで）」

「しっかりついて来てねー♪（ただの暇つぶしだけど）」

軽いノリでやる二人に、開いた口が塞がらない部隊の人達。

「あぁ……ユリお姉様……素敵です……」

何故か部隊の中でも一位二位を争う可愛い局員がのぼせたように呟く。

既に百合姫に心奪われた後らしい。一目惚れで。

「さて最初は……」

この後、吼太は自室の寝室でまさに【犯された】という言葉が似合う状態で発見された。

ジェイルとリームの肌艶が良かったこととの関係性は推してしるべし。

なお、ジェイルはデキなかったらしい。理由はベスが関係してるとかしてないとか。

余談だが、夫婦が気まぐれで鍛えた第１０４部隊は、後にミッドチルダの犯罪率を１５％も減少させる程のエース部隊として活躍することとなる。

# 番外編　一瞬あるのはシリアスではなくシリアル（後書き）

なっぺ「更新乙です！」

吼太「犯された……犯されちゃったよぅ……」

なっぺ「ジェイルは意外と難しかったなぁ」

ベス「この世界の皆さんに負けず劣らずの変態ですね」

なっぺ「つーか多分現在はトップ」

ベス「デキなかったんですね」

なっぺ「うん。さすがにラバーズがまだなのにコラボキャラをそうするわけにはいかないしね。ただし研究は自由」

ベス「夫婦は大変なものを盗んでいきました」

なっぺ「第１０４部隊の常識です。じゃあ感想感謝コーナー！」

吼太「エグ……ヒック……」

なっぺ「……リーム」

リーム「あいあいさー！バルディッシュさん、天照大神さん、七つ夜&夜つ七さん、水橋さん、香崎　真琴さん、緋水さん、ＶＡＺＵさん、雨季さん、まーたさん、海人さん。感想ありがとうございましたー♪」

なっぺ「バルディッシュさんからはダンクーガノヴァ、Ｒ－ダイガンを、緋水さんからは吼太の寝顔（ヤった時の少し顔が赤らめてる写真）に詩音の写真（キスしようとする瞬間）を、海人さんからはザビーブレス、ドレイクグリップ、サソードセイバーを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「残るコラボは？」

なっぺ「ＡＩＲＳさん、雨季さん。ただ、この二人の間に別なのも入れる予定」

ベス「別なのとは？」

なっぺ「秘密。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 番外編　異世界……だよな？扱いがいつもと変わらな（ｒｙ（前書き）

今回はＡＩＲＳさんの【魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～紅蓮の騎士物語～】とのコラボになります。

……ほのぼのギャグにする予定だったのに、何故こうなった？

# 番外編　異世界……だよな？扱いがいつもと変わらな（ｒｙ

Ｓｉｄｅ　吼太

「コイツで締めだ」

両手に持った二振りの刀が、レヴァンティン　シュランゲフォルムのように連結刃に変形する。

「ワキザシブレード……」

その刀を構え…

「超銀河ギャラクシー斬り！！！」

やたらめったらにも見えるほど、乱暴かつ高速で振り回した。

しかし、その全ての斬撃は狙った場所のみを刈り取る。

そう、相対していた転生者のロボットの急所をだ。

「な！？避けられなかった！？ニュータイプの能力で分かってたはずなのに！？」

「分かっただけで防がなかったらそうなるだろ」

崩れ落ちるνガンダムを見ながら言う。

もちろん殺してはいない。

殺したところでたいした得も無いからな。

「なのは達と親しくなりたいのはいい。管理局に真っ向から喧嘩を売るのもいい。だが試し切りと言って原生生物を傷つけるな」

「……はい」

壊れたνガンダムのコックピットから転生者が出てくる。

……なんで見た目がヒイロなんだ?普通、その選択ならアムロだろうに。まぁ別にいいけど。

「で、どうする?お前はこの世界に留まるか?それとも並行世界に行くか?」

「並行世界?」

「あぁ。そこなら多分他の転生者もいない。お前のやりたいように原作ブレイクが出来ると思うが?」

「行く!」

「りょーかい。ダウンロード、パラレルモン。武装召喚(リアライズ)」

パラレルモンを武装召喚(リアライズ)し、転生者を並行世界に飛ばした。

だが……

「くきゅぁ?」

原生生物の一匹が、転移しようとしている転生者の付近に近づいて来てしまった。

気づいた時には転移が始まっており、このままではこの原生生物も転移してしまうだろう。

「自分の位置と相手の位置を、逆の位置に変える能力！」

原生生物と自分の位置を取り替える。

が、既に転移が始まっていたため、そこから逃げることは敵わなかった。

そしてオレは、世界を越えた。

「いてて……ここは？」

落ちた場所は森の中らしく、木々が鬱蒼と生い茂っていた。

「とりあえずここがどの世界だか確かめないとな……」

事故で転移したため、恐らくあの転生者とは違う世界だろう。
螺旋界認識転移システムを使えば戻れるが、そのためには何か座標が必要だ。
だがなのは達の誰かを座標にしたとして、もし仕事中だったら悪いしなぁ。
とりあえず、街に出るかな。
幸い、ミッドチルダらしき街が見えていたため、そちらに向かって歩き出した。

Ｓｉｄｅ　光司

ゆりかご事件が終わってから、僕は比較的平和に暮らしていた。
Ｄｒクロウの遺体は未だに見つかっていない。といっても、あれだけやって死んでないはずは無いんだけど……。
そんなある日、僕の元に仕事の連絡が入った。
何でも、とある密輸組織がミッドチルダに潜伏しているらしく、潜伏場所を突き止めたのはいいのだが、Ｓランクオーバーの実力者が

いるらしく、手をだしあぐねているんだそうだ。
そこで、特別他に仕事があるわけではなかった僕に白羽の矢がたったみたい。
そんな風に状況を整理しながら考えていると、他の部隊との合流地点にたどり着いた。
「あ、神谷一等空佐！お疲れ様です！」
「たいした距離じゃないし、全然疲れてないよ。それより目標は？」
「はっ！先程まではそこの人混みの辺りにそれらしき人物がいたのですが……。そうだ。これが画像データです」
目の前の空間にウィンドウが開き、画像が表示される。
「この建物です」
「……うん、わかったよ。引き続きそちらも騒ぎにならない程度に張り込みをお願いします。僕の合図で突入を」
「了解！」
さて、どうしようかな。

Ｓｉｄｅ　吼太

「管理局員に見つかるとめんどそうだな」

オレの知り合いには管理局に勤めていないやつらも多い。

ミッドチルダにいればまだマシだけど、一真の世界やラクトの世界、夫婦の世界だったりしたら、いくらミッドチルダで知り合いを捜していても意味が無い。

とはいえ、地球に向かうのは現在は無理だ。

理由は……腹減ったから。

螺旋力が使えなくなったから転移するには魔力を使うことになる。

それだと管理局に１００％見つかるし、かといって腹ごしらえするにも金が無い。

局員は管理局が纏めて代金の支払いを行うというのがオレの世界での常識だったため、並行世界では支払いが出来ないのだ。

ジッパーの中に非常食はあるが、ジッパーを使用すること自体に魔力を使うため却下。

どうしようか悩んでいると……。

ドンッ！

何かとぶつかる。

……面倒なことになりそうな予感がする。

「痛ぇー！！腕の骨が折れちまったー！」

「アニキ！大丈夫ですか！？オイどこに目ェ付けてんだガキ！？ぶっ殺されてェのか！？」

……ミッドチルダにもこーゆー人いるんだねー。

「まぁ待てヤス。俺はこんなぐらいじゃ怒ったりしねぇ。治療費さえ払ってもらえりゃ充分だ」

「さすがアニキ！懐の深さが違いますぜ！」

「ハッハッハッ。とりあえずは診察しねェとなァ」

そんなやり取りをしてる二人に両腕を掴まれて、路地裏に連れてかれる。

……まぁ、金は無いし、言ったら言ったでキレて襲い掛かってくるだろうから、それをなんとかして解決だな。

とか考えていたら、目的の場所に付いたらしい。

そこは、いかにもといった感じのプレハブ小屋が。

「ほら、さっさと入れ。……親分！連れて来ました！」

「……おう」

野太い声が入って右側から聞こえてきたため、そちらを向くと……

豚がいた。

……まぁ比喩だけどな。さすがに。

「……ふぅん。中々の上玉だな」

「「ありがとうございます！」」

オレをここに連れて来た二人が豚に頭を下げる。

「おい、お前。こっちに来い」

トゥードをいつでも起動出来るようにしながら、近づく。

豚の目線が舐めるようにオレの身体を這う。

「……よし。今回はお前にしよう。ついて来い」

そう言い、奥の部屋に入って行く。

治療費の話は結局どうなったんだろうとか考えながら部屋に入ると、

そこには汚らしいベッドと、その横で裸になった豚がいた。

……ようやく分かったよ。コイツらがどんな目でオレを見ていたのかが……。

棚に置いてあった菓子を口に詰め込み、空腹を緩和させ、叫んだ。

「オレは……男だァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

Ｓｉｄｅ　光司

突入のタイミングを伺っていると、突如として緑色の光が溢れ出し……

小屋が吹っ飛んだ。

「……ってえぇ！？」

どうなってるんだ！？

「ど、どうします！？神谷一等空佐！？」

「……と、とりあえず……気をつけながら接近。罠の可能性もあるしね」

といったが、その心配は杞憂に終わった。

中にいた構成員は全員気絶していたからだ。

あとは、最近行方不明になっていた女の子が数人縛られて放置されているのを発見。急いで保護して、そして他には……

「オレはぁ！男だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ドリル片手に暴れ回る吼太がいた。

「……なんで吼太が？」

構成員を全員逮捕したあと、近場のファストフード店で吼太から話を聞く。

どうやら、次元漂流者となってこの世界に来たみたいだ。

にしても……

「まだ食べるの？」

「後で金でもダイヤでも払うから！」

そう言う吼太の脇には、この店で一番安いハンバーガーが山のように積まれている。

そのとなりには、ハンバーガーの山と同じぐらいの大きさとなった包み紙の山。

既に５０個は食べてるかもしんない。

「ガツガツガツ……」

それでも見る間にハンバーガーの山は減っていき……。

「ごちそうさまでした」

５分後にはすっかり完食してしまった。

……余程お腹が減ってたんだなぁ…。

「さて、どうしようか。このまま帰るのもあれだしなぁ」

そう、呟いてしまう。

制圧任務があっさり終わってしまったので、また中途半端に時間が余ってしまったのだ。

とりあえずファストフード店を出て、吼太と他愛ない話をしながら歩いていると……。

「嫌！止めてください！」

「いいじゃんかよ～。遊ぼうぜ～？」

ナイフ片手に女性を脅している男がいた。

吼太と目を合わせ、意思を伝えたあとすぐに動き出した。

Ｓｉｄｅ　三人称

女性は焦っていた。

目の前にいる男性は、確実に最低な人種だとわかり、なんとか逃げだそうとするが、力が強く、逃げられない。

せめて自分に魔法があればと思うが、無いものねだりをしても仕方ない。

そんなときだった。

「離せアホ」

小さな子供が、男の手を私から取り払ってくれた。

「な、誰だテメェ！邪魔すんなよ！」

「ナンパにしちゃやりすぎだろ、自重しろよカス」

「クソが！なんだってんだテメェ！？」

「通りすがりのチート魔導師だ。覚えておけ」

そう言い、私を庇うようにその子供はたった。

男装した女の子みたい。口はあまり良くないけど、こういう格好が好きな女の子もいるはずなのは知ってるから、やっぱり女の子なんだろう。そう女性は考えていた。

「クソッタレ！これが見えねぇのか！？」

「あぁ？どれだよ？」

「馬鹿が！これに決まっ……あれ？俺のナイフがねぇ！？」

女性が目線を向けると、確かに先程まであったナイフが無くなっていた。

「管理局一等空佐、神谷光司。危険物所持の疑いで貴方を逮捕します」

そういいながら、ナイフを片手に持った光司が言う。

その名前を聞いた男が途端に弱腰になる。

「か、神谷光司って……まさか、紅蓮の騎士!?ヒィィィィ!!!」

やがて男は、悲鳴をあげながら去っていった。

「ふう、大丈夫ですか?」

「は、はい!」

女性が言う。そして……。

「あの、助けてもらった御礼をしたいので、是非私のお店に来てください!」

その言葉に、吼太と光司は断るが、女性は存外押しが強く、半ば強引に御礼をしてもらうことになったのだった。

そして……

「なぁ光司。オレ達、御礼をされてるんだよな」

「らしいね」

「ならなんでオレ達はメイド服着て、鋼鉄製の首輪と手錠をされた上、荒縄で身体を縛られているんだ？」

「僕としては目の前でカメラを構えているアマンダさんに真意を聞くべきだと思うけど」

ちなみにアマンダとは吼太と光司が助けた女性のことである。

「ハァハァハァ……じゅるり」

この時二人は思った。

まだあの時追い払った男に連れ去られたほうがマシだったのかもしれないと。

数時間後……。

「ひ、酷い目にあった……」

光司が呟く。

あれから光司達は様々な服を着せられては写真を取られていき、揚句の果てには「吼太君と光司君の二人で百合っぽく絡み合って！」とか言われたため、慌てて逃げてきたのだ。

だから二人は忘れていた。

今の自身の格好を。

「……ねぇ君達。もしかして誘ってるの？」

鼻息が荒い男性が光司に聞いてくる。

「……？」

不思議に思って自身の格好を見てみると……

光司は露出の激しい着物姿、吼太はところどころが破けたゴスロリファッションに身を包んでいた。

「ーーーーーーーー！！！！！！！？」

最終的に、光司がフラッシュムーブで鎮圧して、吼太がメモリーフライカードで記憶を消したため、二人の尊厳は守られたそうな。

# 番外編　異世界……だよな？扱いがいつもと変わらな（ｒｙ（後書き）

なっぺ「誰かが言った。後書き座談会だと！」

吼太「誰だよ」

なっぺ「オレだ！」

吼太「お前かよ」

なっぺ「さて今日はゲストが一人」

吼太「誰？」

瞬「俺さ！」

吼太「……」

トゥード『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ＆Ａｒｍｄ　ｕｐ！！』

なっぺ「殺る気満々。また瞬が吼太を襲うと考えてたんだな」

瞬「い、いやそういうことで来たわけじゃないから！」

吼太「……じゃあなんだよ？」

瞬「礼だよ。ほらＧ４－Ｘシステムくれただろ？その御礼だ」

吼太「……あぁ、あれね」

※魔法少女リリカルなのは　二つの属性を持つ男　感想板　なっぺ
２０１１年　０１月　１０日　１４時　１１分のものを参照

吼太「別にいいよ。ただあのままじゃ力量に合ってないって感じただけだから」

瞬「それでもいいさ。サンキュー」

なっぺ「いい感じなところで感想感謝コーナー！」

吼太「水橋さん、ユウキさん、天照大神さん、ライさん、緋水さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、雨季さん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、海人さん、てっちゃんさん、香崎　真琴さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、朱神優希さん、月光閃火さん、まーたさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからは吼太の泣いてる写真と詩音の猫耳スク水写真を、バルディッシュさんからはラインバレル、ハインド・カインド、ペインキラー、ディスィーブ、ヴァーダント、迅雷を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは草津行き慰安旅行用のチケットを、月光閃火さんからは等身大ダイ・ガードを頂きました！ありがとうございます！」

瞬「すごいな、このロボット達…」

なっぺ「一体だけ性能ダンチなやつがいるけどね」

ベス「にしても今回は大分遅れましたね」

なっぺ「本編は出来てたんだけど、後書きやらが上手くやる時間が作れなくて、ね」

吼太「あ、そうだ瞬。ガードチェイサーやトレーラー無いんじゃ武装の持ち運びに不便だろ。ＡＲＭのジッパーやるよ」

瞬「いいのか？」

吼太「複数あっても使わないしな」

瞬「サンキュー。何から何まで悪いな」

吼太「気にすんな」

ベス「次回は？」

なっぺ「次回は雨季さんとこのコラボ券とＡｒｉｓｈｉａさんとこのコラボ券を使用する予定。その次に雨季さんとの正式なコラボで、次からようやく本編再開」

ベス「安易にコラボを受けるからですよ」

なっぺ「嬉しいんだから仕方ない。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編？　もはやなんとか（前書き）

今回は雨季さんの

『チートじゃ済まないｉｎネギま』のキャラを誰でも、何人でも、好きに使える券

と、Ａｒｉｓｈｉａさんの

優出張券

を使用！

さらにまーたさんからキャラの貸し出しを許可してもらいました。

雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、まーたさん、ありがとうございます！

それと、何か不都合があれば言ってください。直せる限りは直します。特に最後とか。

# 番外編？　もはやなんとか

Ｓｉｄｅ　三人称

時間や空間、その他諸々が複雑に絡み合った、よく分からない世界。

所謂、神の世界。

そこに、二人の姿があった。

一人は金髪のイケメン。

一人……一匹はスライムベスだ。

そして、その二人は考えていた。

「「……何か面白いこと無いかな～（ですかね～）」」

ちなみに金髪のイケメンことゼウスとスライムベスことベスは、仕事をほっぽりだしてここに来ている。

「また誰かを要の世界に呼ぼうかな？」

「人によってはまた要さんが胃痛になりますよ？」

「だがそれがいい」

「ですよねー」

最低な神々である。

これでいて、二人とも権力や力は強いのだから始末に終えない。

「あ、そうだ。じゃあこうしませんか？」

「んー？」

また何かを思い付いたらしい。

はてさて、被害を負うのは誰になるのか……。

――要の世界――

Ｓｉｄｅ　舞花

今日もいつも通り花の手入れ。

毎日毎日代わり映えはしないけど、花は好きだから嫌にはなりません。

強いて言うなら、優さんと最近会えてないのが不満ですかね。

『なら行く？』

「行きます！……って貴方は確か……ゼウスさん？」

『ビンゴー♪賞品は優と会える権利になりまーす』

そのことを聞いた瞬間、私の中の何かが目覚めた。

「待っていてください優さん！今、舞花が行きます！」

――ラクトの世界――

Ｓｉｄｅ　メアリスティング

今日は八神家で留守番をしている。

定期検診なのだが、今回はシャマルとヴィータが付き添いしているし、あまり大所帯で行ってもあまり良いものではない。そう判断してのことだ。

シグナムは剣術道場に出張指南に行っているので、この家にはザフィーラぐらいしかいない。

そのザフィーラも、無口であるため話し相手には向かない。

まぁ私も話す方ではないから、ザフィーラが無口であろうとなかろうと、あまり関係は無いのだがな。

『そんな貴女に朗報です』

突然、脳内に念話が届いた。

「ッ!?誰だ!」

「……どうした?」

ザフィーラがのっそりと起き上がる。どうやら、あの念話はザフィーラには聞こえていないらしい。

「…いや、空耳だったらしい」

「そうか」

それきりザフィーラは床に伏せ、元通りの体勢になる。

『いや、すみませんね。驚かせてしまって』

『……お前は誰だ?闇の書を狙う奴か?』

考えられることなどそれくらいだ。だが、奴は意外にもそうではなかったらしく…

『闇の書?あんなものには興味はありません。それよりメアさん』

闇の書を【あんなもの】で済ませるか…。

名前は……まぁ、どこかから洩れたのだろう。

しかし、その声の奴は意外にもほどがあることを言い出した。

『優さんに会いたくありませんか？』

「な……！？」

何故こいつが優のことを！？

『……あぁ、申し遅れました。私、優さんの知り合いの知り合いの神です』

「……は？」

神……？そんなものがいるわけ……

というより知り合いの知り合いって？

『とにかくいるんですよ。それより、どうです？ちゃんと会えますよ？例え死後の世界だろうと安全に送り届けますし、帰りも保障します。それに、時間も私が調整しときます』

「……」

胡散臭いが……信じてみるか。

「頼む」

――吼太の世界――

Ｓｉｄｅ　吼太

「ジョーカーストレンジ！」

仮面ライダーＷ　ルナジョーカーのマキシマムドライブ、ジョーカーストレンジを使って次元犯罪者を気絶させる。

「ふぅ、こんなもんか」

『お疲れ様です。マスター』

さて、帰るか……

『『ドゥーン☆』』

そう考えた瞬間、オレの意識は暗転した。

――死後の世界――

Ｓｉｄｅ　優

今日は平和だな～。

まだ音無やかなでは動いていないみたいだし、やることも無い。

さて、何をしようか…「だぁーもう！お前はそれしか言えないのか！？」……なんだ？

「ふん。何度も言わせるな。神である僕に掃除をさせるのが間違いだ」

「少しは手伝えっての！お前だって戦線に入ってるだろ！？なんでかは知らないけどよぉ！」

また日向と直井が喧嘩しているらしい。

「神に下々の労働をさせようとするとはな。その罪、思い知らせてやろう。さぁ、画鋲の有能さに気づくんだ……」

直井が日向の目を見つめる。

こうすることで直井は催眠術をかけることが出来るのだ。

「あ……あぁ……」

精神が不安定になってきたらしく、日向の目が泳ぎ出す。

そこにすかさず、直井が画鋲を何個か床に落とす。

催眠術のせいか、反射的に画鋲を見つめてしまう日向。

「画鋲……ぁ……画鋲ェ……刺してものを掲示出来る……穴を空けられる……独楽にして遊ぶことだって出来る……それに比べて俺はァァァァァ！！！！」

……壊れた日向を見てるとちょっと可哀相に思えてきたな。

「そのへんで止めとけよ直井」

「！…いや違うんですよ暁さん。これはコイツが……」

ズドォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！

「一体何！？」

校長室の椅子に座っていたゆりが声を張り上げる。

そこに、藤巻が慌てて入ってきた。

「ゆりっぺ！新しいやつらだ！」

「新しい…？死者なの！？」

「わかんねぇよ！とりあえずは高松と野田が接触しようとしてる！」

……高松はともかく、なんで野田を選んだんだ！？相手が危ないだろ！

「くっ、俺も行く！」

「あっ、待ってくださいよ暁さん！僕も！」

直井を始めとする、校長室にいた面々――直井、ゆり、岩沢、藤巻、ヴィヴィオ、なのは、フェイト、はやて――が駆け出す。

日向がいないのはツッコんじゃいけない気がする。

そして、轟音が鳴った場所では……

「ガードスキル、ディレイ」

「あなたに用はありません！優さんはどこですか！？」

「隠すなら容赦はしない…！」

奏がまーちゃん、メアと戦っていた。

……何があったんだ？

「あれは……？」

「前に見た気が……そうだ。あの二人です！」

野田と高松を始めとする、周りのやつらも思い出したらしい。確かに印象的だったもんな。

その時。

「んー……」

何やら声が聞こえた。

近くの茂みの中から聞こえてきている。

茂みの中を見てみると、中には……

赤い、綺麗な髪をした…女性が倒れていた。

年齢は中学生後半から高校生くらいかな。

「ん……ここは…？」

女性が目を醒ます。

そして俺を見つめる。

「……優お兄ちゃん？」

……優お兄ちゃん？こんな呼び方をするのは瑠璃ちゃんか、後は……

「……まさか、詩音ちゃん？」

Ｓｉｄｅ　三人称

そこは、あまりに異質な空間だった。

優に大人になった詩音が甘えており、詩音を引きはがそうとまーちゃん、メアを始めとする優ラバーズが虎視眈々と狙っており、それを阻止するべくトゥードが睨みを効かせている。

「にしても、なんなんだよこの状況……」

「アホばかり増えていきますね！」

日向が呆れ、ユイが元気に喋る。

「……とりあえず状況を整理しましょう」

ゆりが言う。

もっとも、口角がひくひくと震えていることから、かなり無理をして冷静に振る舞っている。

原因は間違いなく優に引っ付いている詩音だろう。

「あれ？トゥード、吼太は？」

優がトゥードに聞く。

「先程の茂みに刺さっているかと」

「いや助けようよ！？吼太もトゥードのマスターだよね！？」

「マスター詩音を守るほうが優先でしたので」

「……あぁ、そう」

これはダメだ。そう判断した優は、吼太の無事を祈りつつ、状況整理をし始める。

「まずは……まーちゃん。どうしてここに？」

「もちろん、優さんに会いに来るためですわ！」

顔を紅潮させながら言うまーちゃんこと舞花。

「……うん、ありがとう。じゃあメアは？」

「その……私も優に……／／／／／」

やはり、顔を赤らめながら話すメア。

先程、まーちゃんと天使の二人を相手に大乱闘を繰り広げていた人と同一人物とは、到底思えないだろう。

「……まぁ大体わかるけど、詩音ちゃんは？」

「ひぇ？わかんない♪」

「わかんない？ここに来たくて来たんじゃないってこと？じゃあまさか……」

「それはありません」

優が考えていた【詩音（吼太）が死んだ】という最悪の可能性を否定するトゥード。

「トゥードは原因が分かってるのか？」

「はい。この世界に転移する直前に、高次元量子反応及び神性反時空反応を感知しました」

「……おい、お前、あいつが何言ってるか分かるか？」

「神に分からないことは無い」

「じゃあ分かるように説明してくれよ」

「……神に質問するな」

日向と直井が漫才のようなやり取りをしているのを聞いたトゥードが、改めて言う。

「分かりやすく言えば、何らかの神の反応を感知した、ということです」

「神！？」

ゆりが激しく反応する。

神に反逆する。そのためにＳＳＳを作り上げたゆりからすれば、その情報はぜがひでも手に入れたいものなのだろう。

だが……

「残念ながらゆり様が望んでいる神とは別の存在かと思われます」

トゥードはピシャリと言う。

「チッ……。で？貴女達は神に落とされてここに来たっていうわけ？」

「はい」

「そんなとんでもないことが本当にあるの……？」

大山の口からそんな声が洩れる。

「証拠が欲しいところだけど……仕方ないわね。一先ず今は信じましょう」

ゆりが纏める。

「でも、だとしたら何故天使が彼女達を襲っていたのか分からない……」

フェイトが呟く。
校長室が沈黙に包まれた。

一方そのころ。

「……殺す気かァァァァァァァ！！？」

吼太がようやく気づいて、地面から身体を抜き出す。

「ってぇ～……。つーかどこだここ？」

一人で途方に暮れる吼太だった。

「と、いうわけで」

「第一回暁優争奪選手権を開始します」

「「「わぁー！！！」」」

「え！？なんで！？」

一人状況についていけてない優がツッコミの声をあげる。

「浅はかなり」

「では説明しましょう」

椎名が定番の台詞を言い、遊佐が説明をはじめる。

「このままだとまた優さんを巡って争いが起こると判断した私たちは、優さんを賞品にし、お題をクリア出来た者のみが優さんを自由に出来るようにして、最終的な被害を抑えることにしたのです」

「……あぁ、うん」

「マスター、頑張りましょう」

「うん！フォーティ！」

「絶対に負けませんわ！」

「悪いが勝たせてもらおう！」

気合十分な異世界組の面々。

「パパ～！ヴィヴィオ頑張るね～♪」

「優さんは私のもの優さんは私のもの優さんは私のもの優さんは私のもの優さんは私のもの優さんは私のもの…フフ

フフフ…」

「怖いよセッテ…」

「優君！これで勝ったら×××が〇〇〇で☆☆☆（ｒｙ」

別なものが十分なリリカル組。

「相変わらずすごい執着心だよなぁ」

「ほんと。羨ましいぐらいだぜ」

「おやぁ～？嫉妬ですかひなっち先輩～？醜いですね～！キモいですね～！」

「天使！後で麻婆豆腐あげるから今だけは協力しなさい！」

「……わかったわ」

比較的まともなＳＳＳの面々。

勘違いしないように言っておくが、これは別にチーム戦ではない。

「それじゃ、ルールを説明します。……優さんを捕まえましょう。以上です」

「あっさり！？」

「それではスタートです」

「「貰ったぁぁぁぁぁ！」」

優目掛けて殺到する三人。

速度に優れるフェイト、エリオと、後は天使ことかなでだ。

だが…

「させませんわ！」

まーちゃんが大量に植物の蔓を出し、優を包み込む。

だが、それも一瞬。

全ての蔓が凍り付き、砕け散る。

それをやったのは、自身のデバイスであるノエスを起動したメアだ。

「また貴女ですか……！」

「お前みたいな痴女に優を渡すわけにはいかない！」

「それはこちらの台詞ですわ！」

そんなこんなで、メアＶＳまーちゃんの戦いが始まる。

「……今のうちに逃げよう」

優は、その隙に抜け出していた。

「……あ」

「見つけました」

もちろん、逃走は長くは続かない。

トゥードという理不尽がいるからだ。

「フォーティさすが♪」

「光栄です。マスター詩音」

「（終わった…）」

優が諦めかけたその時……

「あ、トゥード！よかった。見つかった…ってあれ？優？」

エターナルショタこと、吼太が現れた。

「吼太！後頼んだ！」

「え！？何！？」

「邪魔をしないでください。マスター吼太」

「いやいやいや！なんでトゥードがそんなに好戦的になってんの！？」

「吼太邪魔！」

「詩音も落ち着けって！！」

三人の言い争う声を背中越しに聞きながら、優はその場をあとにした。

その後、あちこちに隠れたり、やり過ごしたりしたものの……

「追い詰めました」

「もう逃げられないぞ？優」

「さぁ！私と×××を！」

とうとう優は追い詰められてしまった。

「ここまでか……」

優？搾られましたよ。自身のラバーズに。

おまけ

山奥の、とある茂み。

「痛たた～……トゥードのやつ、本気でオレのこと殺す気だったな…」

吼太がその場に上半身だけを起こす。

何故山奥かというと、トゥードが吹っ飛ばしたからである。デコピンで。

軽く数ｋｍは飛んでる気がするが、トゥードだから仕方ない。

ガサガサ

「む？誰かいるのか？」

吼太の声を聞いて現れたのは、高校生にしても巨大な体躯を持つ青年。

みんなには【松下五段】と親しみを篭めて呼ばれている、心優しい巨漢だった。

「「……」」

見つめ合う二人。

そして、松下が口火を切った。

「俺のために毎日肉うどんを作ってくれ！」

「はぁっ！？」

松下五段、春の到来。

（そこ、歪んだ春とか言わない）

（「歪みねぇな」とかも言わない）

## 番外編？　もはやなんとか（後書き）

今回は

・吼太　は　ちからつきてうごけない！

・ベス　は　トゥードに殺されかかっている！

なので私一人で進行します。

まず、サブタイトル。

これは執筆途中に「これもうファンストじゃなくてリリカル……なんとか！じゃね？」と考えたのが元になります。

次に、松下五段。

……Ａｒｉｓｈｉａさんごめんなさい。やっちゃいました。

ちなみに、アッー！な展開は無かったですよ？念のため。

次に、メア。

本来、予定にはいなかったんですが、せっかくなんで呼びました。

何はともあれ、感想感謝コーナー！

七つ夜＆夜つ七さん、ユウキさん、天照大神さん、バルディッシュ

さん、緋水さん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、月光閃火さん、香崎真琴さん、ＶＡＺＵさん、朱神優希さん、てっちゃんさん、まーたさん。
感想ありがとうございました！

また、緋水さんからはアマンダさんが撮った写真の数々を、月光閃火さんからは等身大マジンガーＺ（真マジンガーｖｅｒ．を、ＶＡＺＵさんからは動く要塞を頂きました。ありがとうございます。

さて、次回は雨季さんとのコラボ。そしてその次からは本編再開です。

ではではこの「ちょっと待ったぁぁぁ！」ん？

プリム「私たちの出番はいつですの！？」

ミカ「いい加減待ちくたびれたよ！」

ライラ「……早く」

なっぺ「いやぁ。まぁ理由はあるよ？」

アリス「理由って？」

ミナ「くだらない理由だったら」

ナツハ「その首もぎ取るぞ」

なっぺ「こわっ！？……まぁ、あれだよ。ＳｔＳ第一話でなのは

の顔が隠れてただろ?あんな感じの演出のためだよ」

カンナ「そう」

アリサ「で、結局いつ出るのよ?私たち」

すずか「そこは気になるなぁ」

なっぺ「アリサ、すずかはあまり時間かけずに出れる。フラウリーナ三姉妹にアリスも出れる。魔導書娘達は少し先になるかもしんない」

セン「なんだと!?」

キサラ「……まーいーかー」

セ&ミ&ナツ「「「よくない!」」」

なっぺ「ではではこの辺で!次回もお楽しみに!」

## 番外編　其れは全てを食い尽くす闇（前書き）

今回は雨季さんの【チートじゃ済まないシリーズ】とのコラボです！

……最近、番外編ばっかり入れてたなぁ。

とりあえず、今回でコラボは一先ず休止します。

# 番外編　其れは全てを食い尽くす闇

Ｓｉｄｅ　吼太

今日は管理局内でデスクワーク。

……めんどくさいからナイアの時計使ってるけどな。めんどくさいことに時間なんか割けるか。

「吉谷提督、スクライア司書長が御呼びです。至急、応接室までお越しください」

仕事を終え、ナイアの時計を解除した瞬間に連絡が入る。

ユーノか……。あいつも偉くなったな。

「ようユーノ。何の用だ？」

「吼太。久しぶりだね。実は……」

そこで言葉を区切り、周りを見回すユーノ。

……大事な話、ってことか。

「……ナイアの時計」

ナイアの時計でオレとユーノ以外の時間を止める。

「これで大丈夫だ。で、話は？」

「あぁ。ロストロギアなんだけど……どうも変なんだ」

「変？何が？」

「そのロストロギア自体には危険性は無いらしいんだけど、何故か高ランク魔導師や高ランク騎士、或いはとても強い現地の戦士が何故か周辺に集まっている上、その全てが好戦的で近くに寄る人を攻撃してくるらしいんだ。まるでロストロギアを護るように……」

「ふむ……つまりは、下手にこちらから高ランク魔導師を出して、被害を出してほしくないから、オレのとこに来たと？」

「最初はロストロギアそのものを遠隔封印するつもりだったみたいだけどね。そのために無限書庫に調査の依頼が来てたし。ただ……そのロストロギア、遠隔封印をするとトラップが発動して、アルカンシェル以上の大爆発が起きてしまうんだ。それで、吼太と繋がりがあった僕に「じゃあお前が依頼してこい！」って言われたんだよ」

「大変だな、ユーノ」

「アハハハ……。まぁ無限書庫自体はやり甲斐あるし、こういうのは仕方ないよ。で、答えは？」

「ま、旧知の友に頼まれて断れはしないさ」

「吼太ならそういうと思った。じゃあ、お願い」

「任された！」

「にしても相変わらず小学生の頃の見た目のままなんだね」

「……うっさい」

「ここか……」

ピラミッドのような遺跡が目の前にあり、周辺には目線があらぬ方向を向いてる人間がたくさん……。

さて、さっさと終わらせるか。

「変身ッ！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！！』

クロスオーバーフォームになり、さらにナイアの時計で時を止める。
答えを出す者でルートを決めて……
「着いたっと」
ロストロギアのある部屋には、二人の騎士がいた。
多分、宝を守るボス的な奴らか？
ま、関係ないけど。
その二人を無視して、ロストロギアが収められている宝箱を開ける。
中には、オルゴールのような機械があった。
「トゥード」
『シーリング』
封印完了。
ナイアの時計を解除する。
その瞬間、
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
誰かの悲鳴が響いた。

後ろを振り返ると、二人いたはずの騎士が消えており、代わりに一人の男がいた。

「ふむ、コイツらの能力は既に持ってるのう。しかもマズイ。期待ハズレじゃ」

コイツ…いつの間に!?

「トゥード!詩音と一緒に周りの奴らを救助!急げ!」

ロザリオをかけながら叫ぶ。

「畏まりました。マスター詩音」

「うん!詩音頑張る!」

トゥードと詩音の声を背中越しに聞きつつ、目の前の奴に注意を払う。

ソイツは何もかもを飲み込むかのような黒髪をしていた。顔には仮面を付けているため、詳しいことは判別出来ない。

「お前……名前は?」

「一条……いや、異能の拳闘士と言っておこうかの。……童、お主はなかなか美味そうじゃ」

「オレを喰う気か?なら相応の代金は頂くぜ」

「上等じゃ。なら始めようか」

「「殺し合い《ケンカ》を」」

刹那、間合いを詰めた互いの拳がぶつかり合う。

蹴り、正拳突き、拳と脚が互いに襲い掛かる。

「（埒があかねぇ……なら！）変身ッ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＥＴＡＬ】！』

仮面ライダーＷ　サイクロンメタルに変身し、ジッパーから取り出したメタルシャフトで攻撃する。

「杖術かのう？だが甘い！」

異能の拳闘士には軽く避けられ、その隙を狙われ、互いに背中合わせになりメタルシャフトが封じられる。

「どうかな！？」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＬＵＮＡ　ＭＥＴＡＬ】！』

ルナメタルへとハーフチェンジし、身体を捻りながらメタルシャフトを延ばし、鞭のように使って異能の拳闘士の拘束から抜け出す。

「お熱いの、くれてやるぜ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ】！』

ヒートメタルにハーフチェンジし、その効果でメタルシャフトに炎を纏わせ、異能の拳闘士を殴打する。

異能の拳闘士も攻撃を受け流そうとするが、重い攻撃の全てを逃がしきれず、多少のダメージが入ったみたいだ。

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＨＥＡＴ　ＪＯＫＥＲ】！』

ヒートジョーカーにハーフチェンジし、炎を纏った右拳で連撃を加える。

「オラァ！」

さらに、追撃のアッパーカットで異能の拳闘士を打ち上げる。

「ぐっ…！？」

遺跡の天井にぶつかり、息を詰まらせる異能の拳闘士。

「まだまだだ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＬＵＮＡ　ＪＯＫＥＲ】！』

ルナジョーカーにハーフチェンジして、右手を延ばし、天井にへばり付いていた異能の拳闘士を引きずり落とす。

「近距離は危険かの…！」

素早く起き上がった異能の拳闘士は、遺跡の壁を砕きながら距離を取っていく。

「逃がさねぇよ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ】！』

ルナトリガーにハーフチェンジし、ライドブッカー　ガンモードとジッパーから取り出したトリガーマグナムから、自在に曲がる弾丸を連射する。

「ぬるいわ！」

異能の拳闘士も投影した剣群を放ち、ルナトリガーの弾丸を全て撃ち落とす。

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＣＹＣＬＯＮＥ　ＴＲＩＧＧＥＲ】！』

サイクロントリガーにハーフチェンジしたオレは、異能の拳闘士の足元に狙いを定め、ライドブッカーから風の弾丸を撃ち出す。

風の弾丸が床に着弾すると、風が炸裂し、土煙が舞った。

「目くらましか？姑息な手じゃのう」

「これを喰らっても、余裕ぶっこいてられるかな！？」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｗ　ＨＥＡＴ　ＴＲＩＧＧＥＲ】！』

土煙に紛れて接近していたオレは、ヒートトリガーにハーフチェンジし、トリガーマグナムの銃口を異能の拳闘士に押し付け、威力の高い炎の弾丸を撃ち出した。

「ぐうううう！？」

ヒートトリガー自体の攻撃力が高い上、異能の拳闘士自身も完全な対ショック防御が出来ていなかったため、異能の拳闘士は遺跡の壁を貫いて外に出てしまう。

「今度は外か……！」

壁の穴を通って外に出ると、そこは沼地のような場所になっていた。

「マスター吼太、避難が完了しました。現在はマスター詩音が保護しています」

トゥードがこちらに来て言う。

詩音第一のコイツがこっちに来るってことは、それだけ強い相手ってことか…！

「わかった。……いくぜ！変身ッ！」

「了解」『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ、Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！！』

再びクロスオーバーフォームに変身する。

「ダウンロード！ティガレックス！武装召喚（リアライズ）！」

『了解、リミッターを強制解除。ティガレックス、武装召喚』

ティガレックスの前脚を右足に武装召喚し、地面を刈るようにして、三つの土塊を蹴り出す。

「土塊ごときが効くと思ってるのかのう？」

手刀で土塊を切られる。が、それは計算の内。

本命は……

「こっちだ！」

『イビルジョー、武装召喚』

素早く異能の拳闘士の真後ろに回り込み、イビルジョーの顎を右足に武装召喚した状態で、先程の倍はある巨大な土塊を蹴り飛ばす。

「後ろか！」

異能の拳闘士が反応するが、ただでさえ距離が近かったため、避けきれずに命中する。

「ぐっ……！？身体が…」

異常に気づいたらしく、異能の拳闘士から苦悶の声が洩れる。

【水やられ】と呼ばれるその状態の効果は、【スタミナ回復速度の減少】。

さらに……

「ダウンロード！オオナズチ！武装召喚（リアライズ）！」

オオナズチの口を右手に武装召喚し、ブレスを放って異能の拳闘士のスタミナを削る。

「……！？」

異能の拳闘士は避ける動作すらせずにブレスを喰らう。

理由は簡単。スィーリングスカルを発動していたからだ。

「さて、まだやるか？」

オレは異能の拳闘士に問い掛ける。

「ククク……ハハハハハハ！」

だが、異能の拳闘士は笑い声を高らかにあげた。

「愉快愉快。いやはや、まさかここまでとは。儂も少々お主を見くびっておったようじゃ」

そう言いつつ、その身体にかかっている状態異常の全てを跳ね退ける異能の拳闘士。

「しからば儂も、相応の礼を返そうかの。……偽・螺旋剣《カラドボルグ？》＋射殺す百頭（ナインライブズ）＋刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）！！」

異能の拳闘士は何処からか弓を取り出すと、そこに螺旋状の剣をつがえ、撃つ。

剣は竜を模った九つのレーザーとなって襲い掛かってくる。

さらに言えば、その剣は既にオレの心臓に狙いを定めていた。答えを出す者（アンサートーカー）でも、これらから避ける答えは見つからない。

そして、オレは思い出していた。自身を超越者と名乗るそいつとの戦いを。

あの時、オレはこの攻撃とよく似た攻撃を喰らい、追い詰められた。

……だが、今は違う！

「ダウンロード、グレンラガン！武装召喚（リアライズ）！」

見た目の変化が無いから分かりづらいが、これによりオレの胴体はグレンラガンのものとなった。

そして、メカであるグレンラガンには【心臓が無い】。

つまり、後はこのレーザーをなんとかすれば！

「ギガドリル！！！」

ギガドリルを細く、長く創り、レーザーの全てを巻き取り……

「お返しだぁぁぁぁぁ！」

異能の拳闘士に向けて投げ返した。

「見事じゃ」

異能の拳闘士は、自身に向かってくるエネルギー球に対して、避けるそぶりすら見せず、大爆発に巻き込まれた。

Ｓｉｄｅ　異能の拳闘士

いやはや愉快愉快。

オリジナルに聞いていたよりは楽しめておるし、儂は満足じゃ。

じゃが……こうも予想を超えてくると、少し欲が止められなくなってくるのう。

もちろん、理性で抑えることは出来る。

じゃが、まぁたまにはいいじゃろ。

「テメェ……なんでＯＲＴの脚を！？」

童が儂の使っているものに気づいたらしい。

「【どうしてか】と聞かれたら、【取り込んだから】と答えるしかないのう。最も、脚二本だけじゃが」

いつかまるまる一匹喰いたいのう。

ＯＲＴの脚はエネルギー球を防いだために軽く煙が上がってはおるが、これは付着した塵等が燃焼しているに過ぎん。脚自体は無傷。ま、当然じゃな。

「チッ……要じゃねぇんだから、ＯＲＴなんて使うなよ。めんどくさい。消し飛ばすだけならいざ知らず、無力化するのはめちゃくちゃ苦労すんだぞ？」

「その口ぶりじゃと、今だにお主は殺すつもりではないということかの」

「これでも可能な限りは不殺を貫いてるんでね」

可能な限り、か。

「お主、そんな甘っちょろい考え方で戦っておると……。いつか、大切なものを無くすぞ？」

「なら今宣言してやるよ。オレはもう二度と殺したりはしない！」

「愚かな……」

聞かん坊にはお仕置きが必要じゃのう。

Ｓｉｄｅ　三人称

異能の拳闘士がＯＲＴの脚を仕舞い、精神を集中させる。

「（何だ……何をしてくる！？）」

吼太が身構える。

その両目には既に答えを出す者、複写眼（アンサーアルガア・スティグマ）が発動しており、相手が今からしようとしていることを探っている。

だが、吼太自身が理解できる答えを得られない。

「（呪い……？くそ、地球の本棚を使えば分かるかもしれねぇが、暇がねぇ！）発動前に叩き潰す！先手必勝だ！」

吼太がクロスオーバーフォームのブースターを吹かしながら、ジッパーから取り出した刀、夜刀【月影】を構える。

「勇気に強気に大人気！天下御免の武者丸殺法！！」

夜刀【月影】を地面に突き刺し、地面を引き裂きながらブースターで加速する。

「道頓堀ィ……断裂灼熱斬！！！」

そして、異能の拳闘士を逆袈裟に斬り裂いた。

だが……異能の拳闘士は笑っていた。

「儂の勝ちじゃ」

その瞬間、吼太の身体が溶けた。

異能の拳闘士が使ったのは、【闇の泥】。

ネロ・カオスの創世の土の改造版であるそれには、この世全ての悪（アンリマユ）が混ぜ混まれており、相手の全てを溶かし、飲み込んでしまう。

「……さて、出すかの」

とは言っても、異能の拳闘士は本気で消すつもりは無かった。

少したったら出すつもりだったからこそ、この技を使用したのだから。

しかし、闇の泥の使用者たる異能の拳闘士が怪訝な顔をする。

「……まさか？」

異能の拳闘士の足元に展開されていた闇の泥が、波を立てる。

それは小さな波だったが、その波が波を呼び、波紋を拡げていく。

やがて、波は渦と化し、そして、螺旋の光が溢れ出す。

中から現れたのは、紅い、赫い鎧を纏った戦士。

クロスオーバーフォームの吉谷吼太、その人である。

「驚いたのう。まさか自力で舞い戻るとは。その左腕のお陰かの？」

異能の拳闘士が吼太の左腕を指しながら言う。

そこには、輝かしいまでの光を放っており、特殊な何かが発動していることは容易に理解出来た。

「ブリューナク。お前は多分知らないだろうが、コイツを使えば細胞や原子の一つ一つに至るまでバラバラにされても元に戻れる。もっとも、意思がなけりゃ起動自体しないが、そこは螺旋力の力の一端である【認識実体】を使って、【意思が無くなった時に自動的に発動すると認識した】から今回みたいな不意の事態にも対象出来る」

「随分と回りくどいやり方じゃの」

「オレはバカだからな。喰らってからどうするかを考えたほうが実用性があるんだよ。さて、仕切直しと行こうか」

そう言い、拳を構える吼太。

だが……

「いいや、止めておこう。もう目的は達したからの」

そう言い、仮面を取る異能の拳闘士。

その顔を見た吼太の表情が、驚愕に歪んだ。

「お、お前は……！」

所変わって、管理局の応接室。

「……」むすー

「どうして吼太はむすーってしてるの？鏡おじいちゃん？」

「騙されたから拗ねておるのじゃよ。それと詩音ちゃん。おじいちゃんは止めてくれないかのう？」

「？　だって、鏡おじいちゃんは鏡おじいちゃんでしょ？」

「トホホ……」

異能の拳闘士……もとい、一条鏡は膝の上に乗ってきた詩音の頭を撫でながら心の汗を流していた。そんなにショックか。

ちなみに鏡が先程取り込んだ人間は全員解放されている。取り込んだ理由は、「吼太に儂を敵と認識させるため」とのこと。

後々に判明したことだが、あのロストロギアは【一度死んだ人間を引き寄せ、支配する】というものだったらしく、あの場に集まっていたのは全て転生者だったらしい。あのまま放っておけばさらに増えただろう。

ちなみに鏡は自身の一部が該当していたため引き寄せられたが、自分自身がそうではないため、支配はされなかったらしい。最も、鏡ならば精神力で支配を砕くだろうが。

「マスター詩音、マスター吼太、鏡様。お茶が入りました」

「は～い♪」「……おう」「うむ。感謝するぞトゥード」

トゥードがお茶を三人に振る舞う。

それが最高級の茶葉を最適な温度のお湯で、最高の入れ方をもって作った、まさに超一流のお茶であることは言うまでもない。

「にしても鏡。要のマテリアルなら最初からそう言えよ」

「言ったらお主は本気で戦わぬだろう？せっかくオリジナルに紹介してもらってやって来たのに、満足出来ないのは嫌じゃからな」

「本気では戦うよ。【絶対不殺の覚悟】で戦わないだけで。多少へマしても要なら死なないだろうし」

「それは相手を思いやってるのか？思いやってないのか？」

「要が強いのが悪い」

そう言うと、喉を潤すためにお茶を飲む吼太。

「にしても……何故お主らは外見年齢に差があるんじゃ？」

「「さぁ？」」

吼太と詩音が同時に首を傾げる。

というのも、吼太が相変わらず小学三年生の見た目なのに対し、詩音は低めに見ても中学二年生の見た目だからだ。

「オリジナルは外見年齢に差などなかったぞ？」

「むしろオレが知りたいぐらいだ」

吼太も分からないらしい。

精神年齢は真逆だが、外見年齢から見れば詩音が姉といっても通るだろう。

というより、それでしか通らないだろう。

無論、吼太は妹。

「とにかく、中々楽しかったぞ。ではな」

そう言うと、鏡は要の世界に帰っていった。

「……マテリアル、か。オレのマテリアルはどんな奴なんだろうな…？ま、会うことは無いだろうけど」

吼太の声は、誰にも聞かれる事なく窓を抜け、空に溶けていった。

## 番外編　其れは全てを食い尽くす闇（後書き）

なっぺ「後書き座談会がイカれてやがるでゲソ！」

吼太「お前のほうがイカれてるよ。にしても、取り込まれた時は危なかった」

なっぺ「【相乗掛合】《クロスオーバー》コピーされてたりしてね」

吼太「鏡にとっては有用性あるかないか微妙だけどな」

なっぺ「雨季さん、こんな感じでよかったでしょうか？」

吼太「終始遊ばれていた気がする」

なっぺ「個人的には鏡が本気で来たら吼太も本気でいかないと確実に負けると思ってる。どっちが上かは知らない」

吼太「まぁ殺し合いってのも名ばかりだったしな」

なっぺ「皆さん。鏡が吼太より弱いとか考えちゃダメですよ。鏡は本気じゃなかったんですから」

吼太「やけに念を押すな」

なっぺ「吼太の攻撃回数が鏡のそれに対してかなり増えちゃったから。念には念を押さないと」

吼太「Wの9フォーム連続チェンジなんかするからだ」

なっぺ「Wの映画がＤＶＤ＆ＢＤで発売されたんだから仕方ない。じゃ、感想感謝コーナー！」

吼太「ユウキさん、天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、水橋さん、七つ夜＆夜つ七さん、ＶＡＺＵさん、雨季さん、バルディッシュさん、緋水さん、月光閃火さん、香崎真琴さん、ヴェルク・ネオさん、てっちゃんさん、毬藻さん、まーたさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「七つ夜＆夜つ七さんからはせつな作のチーズケーキ（効果：ＤＦ９５％ＵＰ、ＭＤ９５％ＵＰ）、せつな作のしょうがアイス（効果：ＨＰ５０％回復、火傷治療、凍傷治療）、せつな作のカップゼリー（効果：ＨＰ３０％回復、ＭＰ３０％回復、戦闘不能回復、全パラメーター１５％ＵＰ）を、ＶＡＺＵさんからは子供用バイク（吼太の免許証つき）を、バルディッシュさんからは詩音にルーミアの服、吼太にお空の服を、緋水さんからは今回の鬼ごっこの動画を、月光閃火さんからは特製アップルタルトを三人分、セン、ミナ、ナツハに。あとありったけの吼太サイズの男物の服（吼太以外には触れる事の出来ない電磁波トラップ付き）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「フリフリな服は止めろー！恥ずかしいから！／／／／／／」

詩音「そーなのかー♪」

なっぺ「次回からはようやく本編！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百七話　始まりを告げるは機兵の群（前書き）

今回は繋ぎですので、ギャグもシリアスもありません。多分。

# 第百七話　始まりを告げるは機兵の群

Ｓｉｄｅ　三人称

「じゃあ、ノートお願いね。アリサ」

「任せといてフェイト。今日は非番だし、分かりやすいノート作っとくから」

「ノート作ってくれるのは嬉しいけど、今日の予定忘れちゃいけへんよ？」

「もっちろん！」

「じゃあ、行ってきます！すずかちゃん」

「行ってらっしゃい、なのはちゃん」

『みんなー。いつもの場所に転送ポート開いたからねー』

「ちぇー。今日は行けないのかー」

「文句を言ってはいけませんよフィニア。平和なのは良いことなのですから」

「なずなの言うとおりだな。我とて行きたい気持ちが無いわけではないが、それを抑えてこその王というものよ」

「僕、王じゃないんだけど……」

「準備出来たか？なのは、フェイト、はやて」

「「「うん！」」」

「リームは先に行ってるらしい。待たせると悪いからな。じゃあ早速行くぜ！」

「「「「セーット、アーップ！」」」」

第１６２観測指定世界。

岩場が多いものの、こう言った世界にも遺跡やロストロギアのような文明の片鱗は存在する。

もっとも、それが過去、この世界で生み出されたものなのか、別の次元世界から持ち込まれたものなのかは貞かではないが。

『じゃ、改めて今回の任務の説明ね！』

エイミィが吼太達に通信を入れる。

『そこの世界にある遺跡発掘先を二つ回って、発見されたロストロギアを確保。最寄りの基地で詳しい場所を聞いて、モノを受けとって、アースラに戻って本局まで護送！』

「平和な任務ですね～」

なのはが素直に感想を言う。

『ま、モノがロストロギアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、吼太くん、もう一カ所にはリインフォースとシグナムとザフィーラがいるわけだから、よっぽどのことでも起こらないとなんとかならないよね～』

『ま、当然だよね』

リームがえへん！といった感じの声をあげる。

「これが終わったら同窓会だ。これから先、フェイトやクロノ達はもっと忙しくなるだろうし、はやてだって夢に向かって猛進中。今回の任務をさっさと終わらせて、思い出作りといこう」

『「「「賛成ー！」」」』

吼太の意見に四人は笑顔で賛成した。

所変わって、北部定置観測基地。

「遠路お疲れ様です！本局管理補佐官、グリフィス・ロウランです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

グリフィスがマニュアル通り、シャリオが少し崩したような敬礼を叱太達にする。

「ありがとう」

「ご休憩の準備をしてありますので、こちらへどうぞ！」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

グリフィスの申し出を、なのはがやんわりと断る。

「私ら、これくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやろ？」

「はい……存じ上げてはいるのですが…」

「「「「……？」」」」

やけに親しげに話すはやてとグリフィスの様子に、他の四人が首を傾げる。

「あ、三人はまだ会ったことなかったな。こちらグリフィス君。レティ提督の息子さんや」

「あぁ～！あのエリート街道まっしぐらな！レティ提督から話は聞いてるよ。会えて嬉しい」

「恐縮です」

吼太とグリフィスが握手をする。

「フィニーノ通信士とは初めましてかな？」

フェイトが自信なさ気に聞く。

仕事の都合上、あちこちを飛び回っているため、もしかしたらどこかで会ったかもしれないと危惧しているのだ。

「はい！でもみなさんのことはすごーく知っています！」

そう言うと、シャリオは両手を広げ、ウィンドウを立ち上げる。

そこには、様々な画像。

よく見れば、そこにある画像はいずれも吼太、なのは、フェイト、はやて、リームの内、誰か一人以上が入っている画像ばかりであることが容易に分かる。

「本局次元航行部隊のエリート魔導師、フェイト・テスタロッサ執務官！」

シャリオが言うと、画像が整理されて、フェイトが活躍している画像が中心に表示される。

「いくつもの難事件を解決に導いた、本局地上部隊の切り札、八神はやて特別捜査官！」

今度ははやてが解決している画像が中心に表示される。

「武装隊のトップ、航空戦技教導隊所属！不屈のエース、高町なのは二等空尉！」

今度はなのはのものだ。飛行中の画像が多く、砲撃を放っている画像はそれ以上に多い。

「そして！通りすがればあらゆる不幸が消え去るとさえ言われる、管理局最強の魔導師、吉谷吼太提督！」

吼太が活躍する画像に変わっていく。その枚数が他の三人より遥かに多いのは、やはり解決した事件の数の差なのだろう。

「若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄です！感激です～！」

シャリオが首を激しく振りながら叫ぶように話す。

そのハイテンションさは、吼太達ですらたじたじになる程である。

「もちろんリームさんとリインフォース・ツヴァイさんのことも聞いてますよ！とっても優秀なデバイスだって♪」

「えへん！」

「ありがとうございます～」

シャリオがリームとリインフォース・ツヴァイにも声をかける。

ちなみに二人ともちびっこ形態でふわふわ浮いていたりする。

「シャーリー、失礼だろう」

「あ、いけない…つい…」

「仲いいね～♪幼なじみとか？」

「「はい、まぁ…」」

リームの質問に頭をかきながら答えるグリフィスとシャーリー。

「幼なじみは大切にね。生涯の宝になるから」

なのはがフェイト、はやてのことに目を向けながら言う。

「さて、時間も押してるから、もうそろそろ行こうか？みんな」

「「「「「「了解！」」」」」」

吼太の問い掛けに、一同は元気に答えた。

「で、見えてきたけど……あれって……！？」

吼太達の視線の先にあったのは、カプセルのような形をした複数の機械。

煙があがっているところから、攻撃能力があることは明白だった。

「なのはは要救助者の救助と避難！フェイトはあのガジェット達の足止め！はやてとリインは上空から以降の指示を頼む！リームはオレと来い！救助をしつつガジェットを確保するぞ！」

「「「「「了解！」」」」」

さりげなくガジェットと言っていたのだが、緊急事態であるためか、誰も名称に突っ込みを入れる人はいなかった。

「行くぜリーム！」

「やるよリイン！」

「「了解！！」」

「「「「ユニゾン・イン！」」」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ａｒｍｄ　ｕｐ！』

はやてがユニゾン状態、吼太がクロスオーバーフォームになることで、布陣が完成する。

そこから、各々がやるべきことを迅速に行う。

なのはは連絡を入れつつ救助を行い、フェイトはプラズマランサーでガジェットを破壊する。

はやてとリインは索敵魔法を使い、周りを警戒する。

そして、吼太とリームは救助が完了すると、ガジェットへの攻撃を開始した。

「第一の術、ザケル！！！」

「プラズマランサー、ファイア！」

いくつものガジェットが鉄屑へと変わっていく。

実力差にようやく気づいたのか、フィールドバリアを展開するガジェット。

『フィールドバリア…？』

リインが不思議そうに言う。

「レイジングハート。様子見の誘導弾」

『アクセルシューター』

「シュート！」

桜色の魔力弾が数発、ガジェットに向けて放たれる。

が、それらはガジェットに傷一つつけることはなかった。

「防がれた……と、いうよりは掻き消えた、かな？」

『ってことはＡＭＦだね』

リームがフィールドの正体を言い当てる。

アンチ・マギリンク・フィールド。略称ＡＭＦと呼ばれるそれは、魔力結合を強制的に解除することで防御を行うフィールド魔法の一種だ。

その効果の高さ故に、ＡＡＡランククラスの魔法として認知されている。

『そ、それじゃあ手出しが出来ないです！魔力結合が解除されちゃったらどんな魔法も意味ないですよ！？』

リインが慌てながら言う。

が、リイン以外のメンバーの顔に、焦りや不安は無い。

「リインもまだまだ勉強不足やな。ええか？戦いで【これをやっておけば必ず勝てる】【これさえあれば負けは無い】なんてものは無いんよ。どんなに複雑強力な手段でも、対処法は必ずある」

そう、はやてがリインに諭す。

「今回の場合は、方法としてはまず、【発生した効果をぶつける】って方法があるな。専用の魔法が必要やから、誰でも～とはいかへんけど、一番一般的なやり方や」

はやてがフェイトのほうを見ながら言う。

フェイトは魔法陣を展開しており、そこに溜められた魔力が雷雲を呼んでいた。

「サンダーフォール！」

フェイトがバルディッシュを振り下ろすと、雷雲から雷が放たれ、ガジェット達を破壊する。

魔力を雷に変換して放つ、【サンダーレイジ】ではＡＭＦの影響を受けてしまうが、魔力で自然に存在する雷に指向性を付けて放つ【サンダーフォール】ならば、ＡＭＦの影響を受けることは無い。

はやてが言うとおり、【発生した効果をぶつける】という方法の典型的な手段だ。

「他には、例えば【極大魔力による防御の貫通】。これはなのはちゃんの十八番やな」

はやてがなのはのほうを見ると、なのはは四重に環状魔法陣を展開していた。

『ロードカートリッジ。ディバインバスター・フルパワー』

「ディバイィィィン…バスタァァァァーーーー！！！！！」

カートリッジを一発ロードしたレイジングハートから、巨大な桜色の砲撃が放たれる。

通常のディバインバスターに比べ、効果範囲が拡大されているディバインバスター・フルパワーは、消費魔力も多いのだが、なのははそれをカートリッジの魔力を使用することで、通常以下の消費魔力で放ったのだ。

ＡＭＦに当たり、幾割かのディバインバスターが掻き消されるが、処理が追いつかないために、ガジェット達は砲撃に巻き込まれた。

『ふぇぇ～……すごいです』

「或いは、【魔力結合を用いない攻撃をする】、やな」

はやてが次に見たのは、吼太。

吼太は既に仮面ライダーディケイドに変身していた。

「数稼ぐならこれだな」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＢＬＡＳＴ】！』

ライドブッカー　ガンモードから大量の青い光弾、【ディエンドブラスト】が放たれる。

それらの弾丸は吼太の意思により誘導され、ガジェット達の弱点を正確に貫いた。

「最も、この方法はコータ君ぐらいしか使えへんけどな。生身で機械を破壊出来る人間なんて中々居らへんし、質量兵器は使用厳禁やから」

『さすがはとーさまです！リインも鼻が高いです～♪』

『はやて、残りはどれくらいだ？』

吼太が念話ではやてに状況の説明を求めてくる。

「増援は無し。数体が逃げ出してるけど、それはこっちで対処するから、コータ君達は楽にしててええよ。……さ、リイン。私はあの機械を無傷で捕らえたいんやけど……どないする？」

はやてがリインに問い掛ける。

「この場合、発生した効果でやるのが適切ですから……これです！」

リインが魔法陣を展開する。

「捕らえよ、凍てつく足枷……フリーレンフェッセルン！」

リインの詠唱に呼応し、魔法陣の周囲に散らばる水の温度が一瞬で下がり、ガジェット達を氷の檻に閉じ込めた。

「正解や♪」

『やったです♪』

「将、これは……」

「あぁ、跡形も無いな…暴走か……」

「何やら、良からぬことが起こり始めているようだな」

リインフォース・アインス、シグナム、ザフィーラの見下ろしている先には、半径１００ｍに及ぼうかという、超巨大なクレーターがあった。

まるで、「これが貴様らが選んだ道なのだ」と言っているかのように……。

## 第百七話　始まりを告げるは機兵の群（後書き）

なっぺ「後書き座談会！イーッ！」

吼太「おのれショッ○ー」↑棒読み

なっぺ「さて、この前異世界で子供を作ってきた吼太君」

吼太「その言い方は非常に誤解を招く気がするんだが」

なっぺ「気のせい気のせい。ところで子作り神」

吼太「誰が子作り神だゴラァァァァァ！！？」

なっぺ「気にすんなって。とりあえず言いたいことがあるんだ」

吼太「なんだ？」

なっぺ「……スバルとマッハキャリバーが壊れる可能性が高い」

吼太「……は？」

なっぺ「あ、キャラ的な意味でね」

吼太「いやいやいや、待てやコラ」

なっぺ「まぁ答えは聞いていないんだけどね！」

吼太「じゃあ言うなよ！」

なっぺ「感想感謝こーなー！ひらがななのがミソ！」

吼太「知らねぇよ。バルディッシュさん、ユウキさん、雨季さん、七つ夜＆夜つ七さん、水橋さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ヴェルク・ネオさん、天照大神さん、香崎　真琴さん、緋水さん、てっちゃんさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、毬藻さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは詩音に古明地こいしの服、吼太に古明地さとりの服を、緋水さんからは小さい頃の詩音と吼太の写真を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「次回は？」

なっぺ「時間が飛んでＴＶ第一話になるよー」

吼太「時系列かなり無茶苦茶だな」

なっぺ「計画性が無いからね、オレ。こんなでもカムばっていきますので、どうか応援よろしくお願いします！」

吼太「そういやキャラ崩壊の話…」

なっぺ「『スバルを汚すなバカ野郎』とか言われない限りは実行します。まぁ、とはいっても原作から大きく離れるわけでは無いので安心してください」

吼太「その微妙な違いが怖いんだけど」

なっぺ「気にしない。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百八話　雛の翼（前書き）

何故か長くなった。

スバルは案外壊れてないかも？

……キャラ崩壊がいつも通りだからか。

にしても、スバルの強化プランばかりが浮かんでしまう今日この頃。

ギンガの強化プランを考えねば。

# 第百八話　雛の翼

Ｓｉｄｅ　三人称

とある廃ビルの屋上。

そこに、二人の少女がいた。

一人は青く短い髪を持った少女。

もう一人はオレンジの髪をツインテールに纏めた少女。

青い髪の少女は武術の確認をするかのようにシャドーをし、オレンジの髪の少女は自身のデバイスのチェックをしていた。

「スバルー。あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラーがイっちゃうわよ」

「え～！ティア～。嫌なこと言わないでよ～！ちゃんと油さしてきたし…」

「万が一、ってことがあるでしょ？」

「う～……」

会話から見るに、今日この場で会ったわけではないらしい。

それもそのはず、青い髪の少女――スバル――とオレンジの髪の少女――ティアナ――は同じ訓練校で学び、同じ寮の部屋で寝泊まり

し、同じ職場で働いていたのだ。

いわば、腐れ縁といったところである。

そして、ティアナが開いたウィンドウに表示された時間がちょうど０７：００を示した時、彼女達の目の前に巨大なウィンドウが開く。

そこには一人の少女が映っていた。見た目からして、１０歳程度だろうか。才能と実力があれば年齢は問わない管理局では、決して珍しい光景ではない。

『おはようございます！さて、魔導師試験の受験者が二名！揃ってますかー？』

「「はい！」」

少女の問い掛けに、スバルとティアナがはっきりと応える。

『確認しますねー？時空管理局、陸士３８６部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と…』

「はい！」

自分の名前を呼ばれたスバルが、元気に応える。

『ティアナ・ランスター二等陸士！』

「はい！」

対し、ティアナは若干硬さがある応え方をする。

『所有している魔導師ランクは、陸戦Ｃランク、本日受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇格試験で、間違いないですね？』

「はいっ！」

「間違いありません」

スバルが応え、ティアナが肯定する。

『はぁい♪本日の試験官を勤めますのは、私、リインフォース・ツヴァイ空曹長です。よろしくですよ～♪』

可愛いげのある仕種で敬礼をするリインフォース・ツヴァイ。

「「よろしくお願いします！」」

もちろん、スバルとティアナにとっては上司に当たるため、二人は礼儀正しく、ピシッとした敬礼をリインフォース・ツヴァイに返した。

そんな三人を、上空のヘリから眺めている人間がいた。

短めの茶髪は肩に触れるか触れないかといった位置で切ってあり、腰には特別捜査官の証たる装飾具がぶら下がっている。

「早速始めてるなぁ。リインもちゃんと試験官しとる♪」

まるで保護者のような、微笑みを浮かべている女性は、八神はやて特別捜査官。

「はやて、ドア全開だと危ないよ。モニターで見られるんだから、中に入って？」

「はぁ～い♪」

はやてに親しげな様子で注意を促したのは、フェイト・テスタロッサ執務官。

二人とも、若くして【管理局の看板】とも言われている、凄腕の局員である。

はやてが席に座ると、フェイトがウィンドウを開き、モニターを表示させる。

さらにウィンドウをいくつか展開し、様々な情報を表示させていく。

「この二人がはやての見つけた娘達だね？」

「うん。二人とも、なかなか伸びしろがありそうな娘たちやね。そして何より……」

「「コータ（君）と面識がある！」」

はやてとフェイトの声が重なる。

「ふふっ。今日の試験の結果を見て、行けそうなら引き抜き？」

「んー…。直接の判断はなのはちゃん達にお任せしてるけどな？」

「そっか」

フェイトの質問にはやてが答える。

「部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下で、教え子になるわけやからな♪」

一方その頃、スバルとティアナがいる廃ビルからは少し離れた位置にある廃ビルの一角で、ウィンドウを操作している女性がいた。

『マスター、範囲内に生命反応、危険物の反応はありません。コースチェック、終了です』

「うん、ありがとう。レイジングハート。観察用のサーチャーと、障害用のオートスフィアも設置完了。私たちは全体を見ていようか」

『イエス、マイマスター』

「トゥード、どうだ？」

『周辺のスキャン完了。接近してくる生命体は存在しません』

「んじゃ、なのはとレイジングハートは全体を見てるみたいだし、

オレ達は隠れてついていくか」

『了解。ダウンロード、オオナズチ、武装召喚（リアライズ）』

デバイスから声がした瞬間、そこにいた赤い人影は見えなくなっていった……。

Ｓｉｄｅ　スバル

『……はい。説明は以上です！』

えっと……、つまりは壊さなきゃいけない障害物だけを破壊しつつ、決められたコースを素早く走り抜けろ、ってことかな？

『何か質問は？』

「えっと……」

何か聞いといたほうがいいのかな？でも聞きたいことなんて無いし……。

ティアは聞きたいこととかあるのかな？

思わずティアの方を見てしまう。

ティアも視線に気づいたのか、こっちを一瞥すると、

「ありません！」

と率先して答えてくれた。

「ありません！」

私もそれに倣う。

『では、スタートまで後少し。ゴール地点で会いましょう。ですよ♪』

そう言うと、リインフォース・ツヴァイ空曹長が映っていたウィンドウが消え、代わりにスタートまでの秒読みをするウィンドウがひらいた。

それを見て、体勢を整える。

「レディ……」

ティアが合図をする。

そして……

「「ゴー！」」

私たちの掛け声と共に、試験が始まった。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

思えばコイツ……スバルとの関係も長いものね。

隣で走るスバルを横目で見ながら思う。

身長が頭一つ抜けているように感じるけど、これはスバルがローラーシューズを履いていて、その分身長が高くなっているだけ。

訓練校で初めて会った時には、【変則型の近代ベルカ式魔導師】って印象だった。

だけど、その認識はすぐに改められた。

周りを見ずにただ突進。馬鹿力に何度も振り回された私の、スバルに対する印象が【一生懸命だけど、空回りしているバカ】へと変化したのも仕方ないだろう。

考え事をしながら走っていると、目の前にビルが立ち塞がる。

私はデバイス――アンカーガン――のモードを切り替え、アンカーをビルの頂上付近にかける。

「スバル！」

「うん！」

近寄ってきたスバルを抱き寄せ、アンカーを巻き取る。

「中のターゲットは、私が潰してくる！」

スバルがアンカー巻き取りの最中に言ってくる。

断る理由はない。

「手早くね」

「オッケェェェーーー！！！」

そう応えながら、スバルは窓ガラスを突き破って突入した。

それを横目で確認しつつ、ビルの屋上からスバルのいるところとは違う場所のターゲットを狙う。

大丈夫。私ならやれる。慎重に……！

ガゥン！

アンカーガンから魔力弾が放たれ、狙い通りの場所に当たり、ターゲットを破壊していく。

そして、目視出来る全てのターゲットを破壊したのを確認すると、ビルの屋上から飛び降りる。

もちろん、自殺するわけじゃないから、アンカーガンからアンカーを射出して、振り子のように私自身の身体を振り、勢いを殺す。

地面に着地して、アンカーガンがアンカーを巻き取ったのを確認すると、また走り出す。

T字路に差し掛かると、右から来たスバルと合流出来た。

そのまま、一緒に走り出す。

「いいタイム！」

スバルが私たちのさっきの行動をそう評価した。

「当然！」

このまま一気にゴールまで突っ切る！

Ｓｉｄｅ　三人称

その後も順調にターゲットを破壊していったスバルとティアナ。

難関と思われた、【待ち伏せしていたスフィア群】も、ティアナの魔法の一つであるオプティック・ハイド――姿を透明にする魔法―

―を使うことで、見事に突破した。

だが、少し油断をしていたらしく。二人は見落としていた。

一機のスフィアを。

「…！？　スバル、防御！」

「ふぇっ！？」

既にスフィアは射撃を開始している。

スフィアが動くものを優先的に攻撃するのを利用し、自身に攻撃を引き付ける。

だが、急な事態に、ティアナも気が動転していたらしい。

スフィアを破壊すると同時に、脚を捻ってしまったのだ。

また同時に、試験官側が設置していたサーチャーも、ティアナが放った流れ弾に当たり、破壊されていた。

「トラブルかな……？リイン、一応様子を見に行くね」

『はいです。よろしくお願いします』

心配なのか、不安そうな声を出すリインフォース・ツヴァイ。

『私もセットアップしますか？』

レイジングハートが、自身の主たる女性に尋ねる。

「そうだね…。念のためお願い」

『了解。バリアジャケット展開、開始』

一方、スバルとティアナは口論を始めていた。

きっかけは、ティアナが「スバル一人でゴールを目指せ」と発言したことだった。

ティアナの脚は捻挫している可能性もあり、もはや走るどころか、立つことさえ厳しい状況。

口からは「スバルがいなければ気楽」「アンタは足手まとい」という言葉が飛び出しているが、本音は「私がスバルの脚を引っ張るわけにはいかない」といったもの。

だが、スバルは譲らない。

彼女はただ、「助ける」ために管理局に入ったのだ。パートナーであるティアナを置いていくことなど出来ない。

だからスバルは決意する。

反則を取られるかもしれない。

成功確率だって、決して高くない。

だが、それでもスバルは、例えそれが茨の道であろうと、【二人でゴール出来る】道を選んだ。

それが、彼女が彼女である所以なのだから……。

ゴールまでの道を、一人の少女が駆ける。

その少女……ティアナはまるで周りを見向きもせずに、一心不乱に走りつづける。

だが、ティアナは狙われていた。

これに当たれば、半数は試験に落ちると言われている、中距離狙撃型の大型スフィア。

それはゴールまでの道を狙い撃ち出来るような位置に設置されてい

たのだ。

スフィアが、巨大な魔力砲を放つ。

ティアナはそれを避けようともせずに走りつづけ、やがて巨大な魔力爆発に巻き込まれた。

だが、異変はすぐに起こる。

先程、ティアナが走ってきたところから、またティアナが走ってきたのだ。

それは回避行動をとりながら動いてはいるが、単純であり、それゆえにやはりスフィアの射撃に当たってしまう。

だが、またティアナは現れた。しかも、今回は二人。

つまり、先程から走っているティアナは、全て囮の幻影なのである。

「フェイク・シルエット……。これ目茶苦茶魔力喰うのよ……。あまり、長く持たないんだから……一撃で決めなさいよ！でないと、二人で落第なんだから」

「うん」

ティアナが、遠く離れた位置にいるスバルに念話で指示する。

スバルは精神を集中し、自身の道を作り出す。

そして、右拳を脚元にたたき付けた瞬間、足元の魔法陣から青く輝

く【道】が顕れた。

ウイングロード。

スバルの持つ希少技能であり、その効果は【あらゆる場所に、道を創り出すこと】。

スバルはウイングロードを使い、自身のいる位置と、大型スフィアのいるビルとを繋いだのだ。

スフィアも迎撃するためにウイングロードの反応のある場所の方を向くが、自身の付近にティアナのフェイク・シルエットが現れると、そちらを優先して攻撃しはじめる。

「…行って！」

ティアナの言葉を受け、スバルは右手に装備されたデバイス、リボルバーナックルのカートリッジをロードする。

そして……

「行っくぞぉおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

彼女は最大速度で駆け出した。

脚のローラーシューズに、負荷限界ギリギリの魔力を注ぎ込み、可能な限り加速する。

「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

すぐにビルの壁がスバルに迫るが、スバルはそれを、その拳をもって破壊し、内部に侵入する。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

スバルが、大型スフィアが反応するより先に右拳による攻撃を仕掛けるが、バリアに阻まれてしまう。

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

カートリッジを追加で二本ロードすることで、リボルバーナックルに篭められた魔力がさらにあがる。

その結果、バリアを引きはがすことに成功するスバル。

もちろん、スフィアとてやられっぱなしではない。

スバルに向け、魔力砲を放つ。

だが、スバルはそれをバク転で避ける。

魔力砲は天井にぶつかり、土埃を舞い上がらせる。

その土埃のせいか、スフィアはスバルを見失ってしまったらしい。

それを好機と見たスバルは、カートリッジを二発ロードし、魔力スフィアを左手で保持する。

「一撃、必倒！！！」

魔力スフィアを右手の前におき、全力で叫ぶ。

その、魔法の名前を。

「ディバイィィィン……バスタァァァァァーーーーーーーー!!!!!!!!」

右拳で打ち出された魔力スフィアは青い砲撃となって大型スフィアを完膚無きまでに破壊した。

「……っはっ……」

ティアナが魔法を解除する。

スバルが確実にディバインバスターを放てるように、フェイク・シルエットを何回も使用していたためだ。

もう、ティアナには魔力は殆ど残っていなかった。

だが、そうは問屋が下ろさなかったらしい。

スバルの前に、先程倒したはずの大型スフィアが現れる。

……否。前々からいたのだ。伏兵として。

「（ディバインバスターやるには時間が足らない。成功確率は低いけど……！）カートリッジロード！」

残っていたカートリッジ一発、さらにカートリッジを交換して二発。

合わせて三発のカートリッジをロードし、構える。

「光射す世界に、汝ら暗黒、住まう場所無し！」

呪文を叫びながら、大型スフィアに接近する。

『スバル！？それは危険すぎるわよ！やめなさい！』

「大丈夫。私を信じて！……渇かず、飢えず、無に還れ！！」

スバルは限界まで高まった魔力を、右の掌に集める。

「レムリアァァァァァァ……」

そして、ローラーシューズを全開で動かし、大型スフィアに肉薄する。

右手に宿ったのは、必倒の力。

「インパクトォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！」

スバルが右手を大型スフィアにたたき付けた瞬間、大型スフィアを球状バリアが身を包み、爆発的な魔力が内部にエネルギーとなって放出された。

そして、バリアが消えた頃には、僅かな部品しか残ってはいなかった。

「嘘!?あれって……」

「なのはちゃんのディバインバスターにコータ君のレムリア・インパクトかぁ。ますますオモロイ娘達やね～」

「呑気に言ってる場合じゃないよはやて!ディバインバスターはまだしも、レムリア・インパクトなんて危ない魔法を覚えてるなんて……」

はやてはけらけらと笑っているが、フェイトは慌てていた。

よもや、レムリア・インパクトを使える人間が他にいると思わなかったのだろう。

「大丈夫やよフェイトちゃん。よく見てみて」

はやてが、画像の一つを指差す。

「破壊された大型スフィアの残骸があるやろ?コータ君が使うレムリア・インパクトならこんなもんは残らへん。なんせアルカンシェル以上の威力を持つ魔法やからな。残骸なんて残るはずがない。全て消し飛ぶはずや。だけど、現に残骸は残ってる。つまりこれは、まだこのレムリア・インパクトが未完成なのか、あるいはそもそもの原理が違うのか。いずれにせよ、まだまだひよっこの魔法やね」

「……あ、本当だ……」

「フェイトちゃんはあわてんぼさんやね～」

「うぅ……」

フェイトがいじけるその姿は、１９歳の女性がしたとは到底思えないようなかわいらしいものだったとか。

「こんのバカスバル！レムリア・インパクトなんて危ないもの使って！」

「うぅ……ゴメンティア～。説教なら後で聞くから～」

そんなやり取りをしながらも、ティアナを背負い、走り出す準備をするスバル。

「残り、後一分ちょい。ギリギリか…」

「間に合わせるっ！」

そして、スバルは走り出した。

ゴール地点。そこで、リインフォース・ツヴァイは制限時間を表示しているウィンドウを片目で見ながら、スバルとティアナを待っていた。

「お！来たですね～」

砂煙を巻き上げながら、走ってくるスバル。

そして、その背中に背負われた、ティアナ。

だが、様子が少々おかしかった。

「ススススバル！ちょっとスピード緩めて！」

「イィィィィィィィィィィィィヤッホォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！気ン持ちいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！」

「速過ぎるんだってばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～！！！！！」

…………大分おかしかった。

そのあまりの速度に、スバルの周りにはソニックムーブが発生しており、それにより残りのターゲットが全て破壊されてしまう。

「……あ、ターゲット、おーるくりあーです……」

リインフォース・ツヴァイが、若干呆れながら言う。

「もっと速く！いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

スバルが魔力を全開にして、さらに加速する。

「ちょっ…スバル！止まるときのこと考えてるんでしょうねぇ！？」

ティアナが悲鳴に近い声をあげる。

それに対しスバルは……

「あ。……てへっ♪」

「てへっ♪じゃないわよこのバカスバルウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！！！！」

「……なんか超ヤバですぅ」

「「あぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ……

…！！！！！！！！」」

ゴールラインを突破しても、止まる気配などない。

スバルとティアナの前に、岸壁が迫って来ていた。

「アクティブガード、ホールディングネットもかな？」

「念のため、オラ・ノロジオもかけとくか」

結論から言うと、スバルとティアナは無事だった。

オラ・ノロジオの術が加速しすぎたスバル達を減速させ、アクティブガードとホールディングネットが彼女達を優しく受け止めたのだ。

「むー！二人とも減点です！」

上空から、試験官であるリインフォース・ツヴァイが下りてくる。

「頑張るのはいいですが、怪我をしては元も子もないですよー！そんなんでは、魔導師としてはダメダメです！！」

物凄い剣幕でスバルとティアナを叱るリイン。

だが、スバルとティアナはキョトンとした表情を浮かべている。

「……ちっさ」

ティアナがそう呟くのも無理はないだろう。

リインフォース・ツヴァイの大きさは約３０ｃｍ程。【幼い】では済まされない小ささだからだ。

ウィンドウ越しではわからなかったリインの身長がかなり小さかったため、スバルとティアナは呆然としていたのだ。

「まったくもう！」

そんな感じで、頬を膨らませるリイン。

「にゃはは。まぁまぁ」

「そう怒るなよリイン。ま、怪我が無くてよかった」

上空から二人の人間がおりてくる。

一人は、白い服を着て、杖を持ったツインテールの女性。

もう一人は、赤く重厚な鎧と黒いマントを付けた、人間。

「とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

なのはの声に合わせて、ホールディングネットとアクティブガード

が解除され、スバルとティアナを優しく地面に下ろす。

「リイン、頑張ったな。ちゃんと試験官出来てたぜ」

「うわーい！ありがとうございます！とーさま！」

リインが鎧の人に笑顔で抱き着く。

「「とーさま!?」」

「アハハハ……。あ、このままじゃ失礼だな。トゥード」

『外部装甲、バリアジャケットを解除』

デバイスらしき声が聞こえると、鎧の人間から光が放たれ、中から現れたのは……。

「さて、久しぶり……かな？スバル、ティアナ」

「え……？」

「吼太さん……本物……？」

「おう。正真正銘、時空管理局、特殊異変対処部隊　部隊長、吉谷吼太提督だ」

「コータ君。積もる話もあるだろうけどとりあえずは、ね？」

同じくバリアジャケットを解除したなのはが、吼太に話し掛ける。

「っと。そうだったな。……ランスター二等陸士」

「あ…はい」

吼太がティアナに声をかける。

「怪我は脚だよな？治療するぞ」

「あぁ！治療なら私がするですよ～！ブーツを脱いでください♪」

リインがティアナの足元に飛んでいく。

「あ……えと……す、すみません……」

ティアナが反射的に謝る。

「なのは……さん…。……コータ……さん……」

「うん」「おう」

スバルの呟きにも似た声に反応するなのはと吼太。

「あぁ、いえ！高町…教導官！一等空尉！吉谷提督…一等海佐！」

「呼びやすいの…なのはさんでいいよ。みんな、そう呼ぶから。…四年ぶりかな？背、伸びたね。スバル」

なのはが優しく語りかける。

スバルにとって、憧れの女性だったなのはに、たった少ししか会っ

てなかったのに、覚えていてもらえたことは、それだけで涙が出るほど嬉しいものだった。

「えと……あの……うん」

涙が目に溜まりながらも、何かを言おうとするスバル。

それをなのはは、まるで「無理に言うことないよ。ちゃんと分かってるから」というような表情を浮かべ、スバルの頭に手を置く。

「また逢えて嬉しいよ」

その言葉を聞いたスバルは、感極まってしまったのか、泣き出してしまう。

「ティアナ、久しぶりだな。ティーダはどうだ？」

「あ、えと……元気です…」

急に吼太に話し掛けられて、詰まってしまうティアナ。

「そっか。とりあえず、頑張ったな」

吼太も、座り込んでいるティアナの頭を撫でる。

端から見れば、異質にも見えるその光景だが、ティアナは確かな抱擁力を感じていた。

「私……わたっ……し……あ……」

「今は無理して喋らなくていいから。な？」

「あ……う……」

吼太に優しく話し掛けられ、ティアナも泣いてしまう。

そんな様子を見ていたフェイトとはやても、優しげな表情を浮かべていた。

「さて、コータ君となのはちゃん的にはどうやろうな？」

「ふふっ。どうだろうね…」

しばし、試験会場は、柔らかな雰囲気に包まれていた。

## 第百八話　雛の翼（後書き）

なっぺ「今回はも一つありますよ～。なんで後書き座談会はそっちに持ち越しです」

## 幕間　ファンストメンバーのみんなの設定（前書き）

なっぺ「タイトル通り！ファンストオリジナルメンバーの設定集（ＳｔＳ）になります！」

吼太「ＳｔＳ編始まったらすぐに出すとか言ってたくせに」

なっぺ「だって、１６歳のときの話を書きたくなったんだもん。なのに設定で１９歳って書いたらおかしいじゃん？だから今だしたのＳＡ！」

吼太「はいはい。じゃあ行くぞー」

## 幕間　ファンストメンバーのみんなの設定

吉谷吼太

身長：１３４．６ｃｍ

体重：３０．１ｋｇ

年齢：１９

視力：測定不能（見ようと思えば肉眼で太陽系の端が見える。普段は無意識に抑えている）

走力：１００ｍを３秒（能力無し）

腕力：５０ｔ程までなら難無く振り回せる

跳力：一跳び１２０ｍ

魔力量：∞

魔導師ランク：測定不能

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：一等海佐／提督

役職：ＸＬ級艦船【アマテラス】艦長／特殊異変対処部隊　部隊長／みんなのアイドル

この物語の主人公にして、チート能力を持つ転生者。転生者としても有り得ない段階で成長が止まっている（望んでそうなっているわけではない）ため、外見年齢は８歳（小学三年生相当）程となっている。１６歳のころより身長が伸びたが、それでもほんの僅かな差でしかない。

一時的に女性恐怖症を発症していたが、克服した。だが、元来の性格からなのか、女性に頭が上がらないのは変わらない。

【小学三年生にして子持ちになった】【ヤンデレの彼女が大量にいる】【上は熟女、下は一桁までの女性と関係を持っている】等、話題には事欠かない。

見た目こそ幼く、また非常に女性的ではあるが、身体能力は使い魔を遥かに超えるほど高く、大型の運搬機械だろうと平気で持ち上げるほど。

また、教導能力も高く、彼に師事した魔導師の全てが、第一線でめざましい成果をあげている。

捜査官としての資質、執務官としての適性も高いため、陸海空からの誘いが後を絶たない。

実力も高く、管理局で新設された新ランク、【ＥＸ】を持ってしてもはかることが出来なかった。

料理の腕は通常は並であるが、答えを出す者があるので実力以上の味が出せる。

女性（特に愛ゆえの暴走をした女性）には極端に弱くなるという、まさに襲われるためだけに存在するような能力がある。

酒を呑んだ場合、面白いぐらい簡単に酔う。また、酔うと脱ぎだしたり、相手構わずキス（深い）をしたりする。

使用デバイスは、１０年来の愛機、フォーティトゥード・スピリット。また、彼をロードと慕うユニゾンデバイス、リームもまた彼のデバイスである。

長年の試行錯誤の末に、彼の強化形態であるクロスオーバーフォームの外観年齢を変更することに成功。クロスオーバーフォーム時は外見年齢が１９歳相当（身長１８４ｃｍ）となる。マシンディケイダーを始めとする各種バイクに乗るときは必ずクロスオーバーフォームになる。ただし、ヘルメットであるレウスヘルムを外すなどして肌を晒すともとの身長に戻ってしまう。

所持能力

◇【相乗掛合】《クロスオーバー》

◇螺旋力

◇ガードスキル

◇天界能力

◇職能力

◇答えを出す者（アンサートーカー）

◇複写眼（アルファ・スティグマ）

◇オーバースキル

◇ファクター

◇ヴェザード

◇アンダーグラウンド

ｅｔｃ……

所持武装

◇ディケイドライバー&ライドブッカー&ケータッチ

◇デビライザー&ヴィネコン

◇ディメンションＡＲＭ　ジッパー

◇ダークネスＡＲＭ　スィーリングスカル

◇シャイニング・トラペゾヘドロン

◇ナイアの時計

また、ジッパー内には多数の道具が内包されている。

シャイニング・トラペゾヘドロンは、通常時は吼太のリンカーコアと結合している。

称号

◇通りすがりのチート魔導師

◇エターナルショタ

◇フラグ王

◇無限の旗製二号（アンリミテッド・フラグ・ワークス）

……ｅｔｃ

リーム

身長：１５６．６ｃｍ／２０ｃｍ

体重：（血みどろで読めない）

年齢：不明

視力：２．０

走力：１００ｍを１２秒

腕力：結構非力。ただしたまに計測不能な力を見せる（ギャグで）

跳力：一跳び５ｍ

魔力量：不明（特別なリミッターが存在するため。現在はＳＳＳ相当の量を保持）

魔導師ランク：グズィ式　空戦ＥＸ＋ランク

ロード：吉谷吼太

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：二等海佐（二佐）

役職：特殊異変対処部隊　副部隊長

【夢を与えるもの】の二つ名を持つ融合騎。現存する唯一の古代グズィ式デバイスである。

人との触れ合いの中で成長したのか、他人を思いやることのできる優しい女性になった。だが吼太至上主義は相変わらず。

料理はかなり上手いものの、本人が進んでやらないため、あまり知られてはいない。

妄想癖があり、また変態淑女でもある。

記憶領域に欠損があることが最近判明したが、リーム自身の内部がほぼブラックボックスであるため、修復には至っていない。当人はそのことについて気にしてない風を装っているが、その実本人はかなり気にしている。

吼太にだけは既に話しており、彼も対処法を探っているが、中々戦果はあがっていない。

魔力変換資質に、氷結があると思われる（本人に自覚は無い）。

まだ、隠された能力もある可能性が非常に高い。

吼太とのユニゾン時には、感覚機関の強化及び魔力ブースト、他のユニゾンデバイスから送られてくる情報などの整理を行っている。一応、氷結効果の付加も可能だが、特別必要ではない限りはあまり使わない。

ユニゾン可能なメンバーは吼太の他に、はやて、アリス、リインフォース・ツヴァイ、クロノ、ザフィーラ、キャロ等。ただし、吼太以外のメンバーとのユニゾンは滅多に行わない。

プリム・フラウリーナ・ヨシヤ

身長：１７２．２ｃｍ

体重：（血みどろで読めない）

年齢：１１

視力：６．０

走力：１００ｍを１０．７５秒

腕力：一般女性よりは強い程度

跳力：一跳び１２ｍ

魔力量：ＥＸマイナス

魔導師ランク：ＥＸプラス

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：三等海佐（三佐）

役職：特殊異変対処部隊　フロール分隊　隊長

【ベルフラウ・コリーナ】と呼ばれる魔草をベースにした特殊な植物から誕生した、いわゆる人間型植物、フラウリーナ三姉妹の一人。長女にして吼太の娘。

髪は夏の青葉のような、濃い緑色。ロングの髪は軽くウェーブがかかっており、腰に届くほど長い。ツリ目。お嬢様言葉で話すが、別に変なプライドがあるわけではない。

吼太のことを第一に考え、吼太の役に立つことを至上とし、吼太に褒めてもらうのが生き甲斐。

本来は一人の存在として生まれるはずだったのだが、人間化する際に吼太の血液を吸収したせいか、三人に分裂して誕生してしまった。そのため、本来受け継ぐはずだった資質を一部しか持っていない。

プリムの場合は【魔力放出】【高速演算】の資質を強く受け継いだ。そのため、砲撃魔法等、攻撃性の強い魔力運用が得意。

１０年の間に目覚ましい成長を遂げており、その戦闘技術はエースオブエース　高町なのはを上回るほど。また、指揮能力も高く、フ

ラウリーナ三姉妹の中でリーダーシップを発揮するのはたいがいプリムである。

料理に関しては謎の才能を持っており、使用した材料及び完成した料理の見た目からは想像もつかないような料理を創り出す。デスクワークは人並みに出来る。

所持している希少技能は【権利剥奪】。

世界そのものに干渉して、対象の生物のあらゆる権利の内、たった一つだけ、どんな権利でも奪い取れる能力である。

訓練の結果、非生物に対しても使用出来るようになった。

奪った権利はプリムが所持するが、能力自体を奪っているわけではないため、プリムが能力を使用することはまず出来ない。

欠点として、使用中はプリムの魔力の全てを消費してしまう。が、これは訓練次第で減らせるため、現在は9割前後を消費する程度になっている。

使用例は、リンカーコア使用権利を奪うことで魔力を封じたり、神経を利用する権利を奪うことで肉体のあらゆる動きを封じたり出来る。

生死に関わる権利に関しては、限定的な部分のみ剥奪が出来る。（自殺をする権利や、指定存在がいないところでの生存をする権利な

ど）

☆使用魔法

エメラルドシューター

翡翠色に輝く、宝石型の魔力弾を放つ。
誘導性、威力が高い。一度に７０発まで放てる。

ヘリオドールシューター

エメラルドシューターの上位版。指示を受けるか、衝撃を受けることでバラけて、散弾のようになる。バラけた一発一発の威力はエメラルドシューターより下。
同時に２０発まで放てる。

クリスタルケージ

捕縛魔法。空色に輝く宝石に対象を閉じ込める。プリムは捕縛等の補助魔法は苦手であるため、拘束力は低い。

ガーネットブラスター

砲撃魔法。橙色に輝く魔力砲撃。誘導せず、連射が出来るわけでもないが、威力は非常に高い。
プリムの一番の得意魔法。

ルビーショット

赤く輝く宝石型魔力弾を放つ。
また、魔力を一点に集める効果を持つ特殊魔力弾でもある。
それそのもので攻撃するよりも、後続の砲撃の集束率を上げるのに使用する。

サファイアチャージ

蒼く輝く宝石型スフィアを最大で9つまで創る魔法。
スフィア一つ一つは独立して動き、本体からの指示を受けながら、本体であるプリムと同じ魔法を様々な方向から放つ。
リンカーコアと同じシステムもあるため、魔力供給は必要ない。
ルビーショットと組み合わせることで、大火力砲撃を少ない魔力で使用出来るようになる。

ダイアモンドブレイカー

プリムの持つ魔法の中でも、最大級の威力を持つ集束砲撃魔法。
その輝きはまるで金剛石（ダイアモンド）のようでもあり、触れた物質は全てを灰燼に帰す。ただし、非殺傷設定で使うことがほとんどであるため、威力はかなり抑えられている。

？？？？・？？・？？？？

プリムの最強の技。砲撃系魔法であること以外は一切が不明である。

ミカ・フラウリーナ・ヨシヤ

身長：１６９．８ｃｍ

体重：（血みどろで読めない）

年齢：１１

視力：４．０（反射神経が非常に高い）

走力：１００ｍを４秒

腕力：４５ｔまでなら片手で軽く持ち上げられる。

跳力：一跳び１１０ｍ

魔力量：０（無い）

魔導師ランク：ＥＸマイナス

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：三等海佐（三佐）

役職：特殊異変対処部隊　ブルーメ分隊　隊長

【ベルフラウ・コリーナ】と呼ばれる魔草をベースにした特殊な植物から誕生した、いわゆる人間型植物、フラウリーナ三姉妹の一人。次女にして吼太の娘。

髪は萌葱色であり、肩にかかるぐらいの長さの髪をポニーテールに纏めている。一人称が俺であるなど、男勝りだが、スタイルはフラウリーナ三姉妹の中で一番良い。特に胸はフェイトやシグナムすら超えているほど。

サバサバした性格であり、吼太への愛情はあるが、プリムのように引っ付いたりはしない。ただ、吼太に撫でられると凄く嬉しいらしい。

本来は一人の存在として生まれるはずだったのだが、人間化する際に吼太の血液を吸収したせいか、三人に分裂して誕生してしまった。そのため、本来受け継ぐはずだった資質を一部しか持っていない。

ミカの場合は【超身体能力】【超感覚器】の資質を強く受け継いだ。そのため、ベルカの騎士のようにクロスレンジでの戦いが最も得意。魔力を持たない代わりに、吼太譲りの強力な螺旋力を保持している。

１０年の間に培った経験は、彼女を一流以上の拳士として完成させた。先読みにも優れ、彼女を近接戦闘で打ち破るのは至難の業。

料理は下手。最も、彼女の場合は細かい作業が苦手なだけであり、調味等はそれなりに上手い。またデスクワークも苦手。

所持している希少技能は以下の二つ。

【障害付加】《ノイズ》

打撃等の、相手に直接触れる攻撃が命中すると、相手の思考にノイズを走らせることが出来る。

ノイズが入っている間は、相手は思考が上手く出来ない上、制御が一時的に乱れるため発動している能力などが基本無効化される。

地味ではあるが、かなり厄介な能力である。

【範囲操作】

ミカが知覚出来る限り、いかなる【範囲】をも好きに変えられる。

例え拳の及ぶ範囲に敵がいなくとも、知覚していれば距離を弄って攻撃を当てることが可能になる。

逆に攻撃を喰らいそうなときも、距離を弄って攻撃範囲外まで引き延ばすことが可能。

また、変えられるのは距離以外に、時間等、多岐に渡る。

距離を変えるにしろ、方向性は問わないため、避けることだけに徹すれば、ミカに攻撃を当てるのは非常に困難だろう。

☆ミカオリジナルの技

ギガドリルブレイカー

ギガドリルブレイク時の螺旋力を、ドリルからエネルギーに再変換することで、砲撃状に変化させた技。
その威力、範囲、射程は、篭めた螺旋力により、どこまでも上昇する。

ドリノイズ

ギガドリルに障害付加を組み合わせた技。
ドリルで敵に触れた瞬間、敵はあらゆる行動に移れなくなり、ドリ

ルに貫かれるしかなくなる。

？？？？？？？？？？？？？？？

ミカの最大の一撃。
拳を使用した技であること以外は、一切が不明である。

ライラ・フラウリーナ・ヨシヤ

身長：１５７．１ｃｍ

体重：（血みどろで読めない）

年齢：１１

視力：１．７

走力：１００ｍを１７秒

腕力：とても非力。１０ｋｇのものも持てない。

跳力：一跳び５０ｃｍ

魔力量：ＳＳＳプラス

魔導師ランク：ＥＸ

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：三等海佐（三佐）

役職：特殊異変対処部隊　ナーソ分隊　隊長

【ベルフラウ・コリーナ】と呼ばれる魔草をベースにした特殊な植物から誕生した、いわゆる人間型植物、フラウリーナ三姉妹の一人。三女にして吼太の娘。

髪の色は緑と言うよりは、黄緑と言ったところ。髪は非常に長く、膝近くまでストレートの髪が伸びている。物静かで、内向的。スタイルはフラウリーナ三姉妹の中では一番下。

非常に嫉妬深く、常にアーミーナイフを隠し持っているとか。何に使うかは聞いてはいけない。吼太に甘えるのが大好き。

本来は一人の存在として生まれるはずだったのだが、人間化する際に吼太の血液を吸収したせいか、三人に分裂して誕生してしまった。そのため、本来受け継ぐはずだった資質を一部しか持っていない。

ライラがの場合は【魔力による補助】【魔力顕現の維持】の資質を強く受け継いだ。そのため、常にフルバックで支援に集中することが多い。

とはいえ戦えないわけではなく、シールドによる殴打は、範囲と威力を兼ね備えた強力な攻撃技となっている。また、バインドやシールドに希少技能を使用する、搦手も得意。奇策を思い付くことも多く、フラウリーナ三姉妹の頭脳である。

料理はそれなりに上手い。ただ、【他人の補助】に長けているため、一人で料理させるよりは、料理の上手い人の手伝いをさせたほうが活躍する。また、デスクワークは非常に得意であり、遅れがちなミカの仕事の7割は彼女が代わりにやっている。

所持している希少技能は、【侵食支配】。

物体（有機物、無機物問わない）にバインドもしくはシールド、あるいは素手を使用して触れているものを侵食し、支配する。能力無効化などがあっても、その【能力無効化】の能力ごと侵食してしまうため、能力を使用した防御はほぼ不可能である。

単純な無機物（日用品や、銃や剣といった誰でも使用可能なもの）には意味が無いが、使用者を限定するような機構を持つ機械を無効化したり、機密情報をコンピューターから抜き出したり出来る。

生物に触れていた場合、人間程度のサイズならば一分ぐらいで意識、魂にいたるまで支配される。ただし、これは並の人間相手の話である。並の人間ではないような人間が相手の場合、一時間以上かかることもざらではない。また、巨大な生物だとそれだけ時間がかかる。その場合は脳を優先的に支配することで対処している。

また、魔法や魔術なども、シールドやバインドを介することで【支配】＝【術式の強奪】が可能。低級の術ならば、一回触れただけで

支配が可能。支配すれば解除が可能であるため、防御能力の強化に一役買っている。術のレベルが高ければ高いほど、多くの回数を防がなければなからない。なお、触れることが条件であるため、力技でバインドやシールドを破壊しても支配から逃れられるわけではない。

☆使用魔法

ブースト系呪文

速度強化
「萌芽よ、疾風の如き速さを彼の者に」

治癒
「萌芽よ、森林の如き癒しを彼の者に」

攻撃力強化
「萌芽よ、業火の如き剛力を彼の者に」

防御力強化
「萌芽よ、大山の如き護りを彼の者に」

タカネニガナ

ライラが編み出した、シールドの応用魔法。
複数展開したシールドを、高速で回転させながら攻撃を受けることで、攻撃が放たれた場所に寸分違わず弾き返せる。
防御よりも反射に重点を置いた魔法。
その性質上、大質量の物体は反射出来ない。

パイルシールド

ライラが編み出した、シールドの応用魔法。

複数展開したシールドを、重ね合わせ、圧縮することで強固な楯を作り出した。
同時に一つしか作り出せないため、多方向からの攻撃は防げない。

？？・？？？

ライラの持つ、最強の楯。
その防御力は想像を絶するものであることには違いないが、詳細は不明である。

アリス

身長：１４６．９ｃｍ

体重：（血みどろで読めない）

年齢：？

視力：０（実は視覚を使用していない。認識領域は半径５０ｍまで）

走力：ライラと同じくらい

腕力：非力。ライラと同等

跳力：一跳び２ｍ

魔力量：ＳＳプラス

魔導師ランク：ＳＳＳマイナス

所属：時空管理局本局特殊異変対処部隊

階級：三等海佐（三佐）

役職：特殊異変対処部隊　コープス分隊　隊長

綺麗な金色の髪を持つかわいらしい少女。

だが、その正体は既に生命活動を停止しているゾンビ。

だが、吼太と長時間いたせいか、痛みや快感などといった感覚が復活してきている。本人は「いつか子供も……」と思っているとか。

自身が死体であり、既に死んでいるため、多少の傷は全く気にしない。また、自身の細胞を自在に操れるため、傷を負おうが腕をちぎり落とされようが、恐怖はしない。ただ、あくまで細胞を動かしているだけであるため、細胞が消滅するような攻撃は避ける。

ちなみに死臭は全くしないし、体温も人並みにある。生きている人との違いは心臓が動いているか否かだけの話である。

また、細胞を変換して翼を生やしたり、爪を硬化したり出来るが、彼女自身があまり動きたがらないため、使うことはまずない。

能力はまだ明らかになってはいないが、【死】に関連するものである。また、こっそり強化していっているため、現在の能力の全容を知っているものはまずいない。

魔導書娘達（グリモワール・ガールズ）

身長：全員、１５１ｃｍ前後

体重：（血みどろで読めない）

年齢：不明（肉体を手に入れてからは１０年だが、魔導書の状態を考慮すると、かなりの年数になる）

センミナカンナナツハキサラの五人を指す名称。

それぞれ、以下のような対応となっている。

センエイボンの書の精霊

ミナ：水神クタアトの精霊

カンナ：妖蛆の秘密の精霊

ナツハ：屍食教典儀の精霊

キサラ：金枝篇の精霊

センは紫色の髪を二つに纏めており、と緑の瞳をしている。服装は上半身をマントと、それの下に長袖の服を着ている。が、目立つのは下半身。ベルトを二つ、×に重ねただけの、かろうじて局部が隠れているそれはもはや【服】とは言えないだろう。ちなみに本人いわく、「望んでなったわけではないが、こうなって不便は無いので変えていないだけだ」とのこと。

ミナは群青色の長い髪をストレートに伸ばしている。瞳は黒く、眉は俗に言う【たくあん】。服はファスナーの付いた着物といった特殊な服であり、彼女はファスナーを臍の下まで下ろした状態で着ている。一歩間違えば胸が露出してしまうのだが、本人は「そんなヘマはしない」と変えようとしない。

カンナは薄い紫色の髪を持っている。頭に被ったヘッドドレスのせいで分かりにくいが、髪は短め。赤色を基調とした、所謂ゴスロリの格好をしている。下はやはり履いていない。

ナツハは灰色の短めの髪を持っており、それをリボンで留めている。髪がまるで一本の角のように飛び出ているのは、くせ毛らしい。所謂ゴスロリファッションであり、こちらは腰辺りに【屍】の一文字が入っている。ドレスタイプなので分かりづらいが、やはり履いていない。

キサラは金色の髪の一部を二つに分け、その髪の先を頭頂部に持ってきて、残りは普通にストレートで下ろすという、なかなか奇特な髪形をしている。なお、髪はウサギの耳型の飾りが付いた帽子で留めているため、落ちてくることは無い。袖がやたら余っている服を着ている。下は当然の如く履いていない。

この五人は、自身が認めた相手にだけ自身を赦し、自身に記された

外道の知識を授ける。その知識を【理解して】、なお怪物とならない者だけが彼女達を使えるのだ。当然、吼太はそれをクリアしている。

彼女達に認められた場合、彼女達と融合することにより魔術を行使するための状態、マギウス・スタイルへと変身出来るようになる。このマギウス・スタイルは平たく言えばバリアジャケットであり、着用者を守る防護服の役割を持つ。

ちなみに、吼太の場合は既にバリアジャケットがあるため、マギウス・スタイルを起動せずに使用している。

融合時には１５ｃｍ程の大きさのちびモードとなる。吼太の場合はちびモードで外にいられると迷惑かつ危険であるため、クロスオーバーフォームの鎧の中（異空間）に隠れている。外は見えるらしい。

各人が持つ能力は以下の通り。

センス：【予備精製】。あらゆる予備を作り出せる。予備をもとに使い魔を作ることも可能。命や魔力などといった、実体の無いものも予備を作ることが出来る。平たく言えばコピーして増やす能力。

ミナス：【流体操作】。あらゆる【流れるもの】を自在に制御出来る。基本的には水を操るが、その気になれば血液だろうと、空気だろうと、時だろうと操れる。ただし、時を操る場合は、ド・マリニーの時計より下位の能力の扱いとなっている。

カンナ：【不死身化】。不死身になれる。例え身体がばらばらになろうと、寄り集めて復活出来る。また、この能力を使用している間は、使用者は死者となるため、体調に異常をきたすような特殊技を無効化出来る。

ナツハ：【身体改造】。生物の肉体を自在に改造出来る。基本的には感覚機関の強化をすることが多い。千手観音だろうがイカよろしく１０本脚だろうが改造が出来るが、改造する元となる身体の遺伝子に存在しないようなものには改造出来ない（例：人間に翼、犬にエラ、魚にまぶた等）。

キサラ：【共感強化】。対象と使用者をシンクロニティーの魔術で繋ぎ、互いを強化する。この能力単体ではあまり役には立たないが、他に仲間がいるとき、この能力は真価を発揮する。また、ビームなどの光学兵器の制御も得意。

五人とも痴女にしか感じないが、正確には彼女達が変態なのではなく、彼女達の著者が変態なのである。故に、彼女達は自身を変態扱いされるのが不本意なので注意。彼女達の怒りを買えば、例えチートだろうと戻ってこれない領域に引き込まれる可能性があるのだから。

ちなみに、彼女達には管理局における階級が存在しない。これは、彼女達自身の意志で、【吉谷吼太の私物】として参加しているため

である。

フォーティトゥード・スピリット

身長：３ｃｍ（デバイス時）／１７７．６ｃｍ（人間態時）

体重：冥土に逝きたい人から聞きに来るとよいでしょう

年齢：１１

視力：見えないものはありません

走力：計測した程度で分かると思っているのですか？

腕力：マスターのためならどんなものでも吹っ飛ばします

跳力：重力など関係ありません

魔力量：限界など存在しません

マスター：吉谷詩音、吉谷吼太

様々な良質素材を用いたことで強化された、フォーティトゥードの

後継機。

内部データこそ以前と変わっていないが、処理能力は以前の数百倍以上に上昇している。その処理能力を駆使すれば、管理局の全システム掌握など、彼女にとっては朝飯前。

また、デバイス自体の強度も、オリハルコンやヒヒイロカネといった素材を用いることで、並の攻撃では傷一つ付かない程に強化されている。その上、インフィニティ・カラットの効果により、魔力を使用した攻撃は全て吸収され、無効化される。

機動力に関しても、ラムダドライバシステムを搭載しているため、ある程度物理法則を無視した機動が可能。

見た目は以前と変わらず、待機時はクローバーのようなネックレス、セットアップ時は腕輪と脚輪、人間態時はクールな印象を持つスタイル抜群な女性になっている。

【ｒｅｃｏｖｅｒ：ｆｕｌｌ　ａｕｔｏ】を組み込んでいるため破損部分は無限再生される。つまり実質的に不死身となった。

また、次元航行艦アマテラスの管制システムも勤める。

完全ステルスやパーフェクト・スキンによる隠密行動や、世界製作機器によるバックアップも可能。

装備

【インフィニティ・カラット】：無尽蔵にエネルギーを蓄えられる宝石。防御に使用。

【パーフェクト・スキン】：言葉使いを抜いて、完全にその人になる。体形だけや、声だけ、容姿だけもできる

【世界製作機器】：世界を作れる。そして使用者がルール。ただし、固有結界とは違う。
作例：死の概念が無い世界、〇〇能力が使えない世界

ぶっちゃけ、作中で一番チート。むしろ存在がチート。何故か最強。

## 幕間　ファンストメンバーのみんなの設定（後書き）

なっぺ「後書き座談会ぃー…デラァァーックス！！！！！」

吼太「おいコラ待て！なんだよみんなのアイドルって！？」

なっぺ「気にしない。まぁ、謎な部分もあるから疑問もあるでしょう。メッセージに送ってくれれば、現時点で答えられる範囲では答えますよ～」

アリス「私が全く戦えないっぽくない？この設定」

なっぺ「そりゃあまぁ、バックタイプだし。アリス含め、設定の全てを公開出来るのは第四部が終了してからかな？」

リーム「僕の設定だけ短くない！？」

なっぺ「それだけ秘密があるのさ！」

ベス「皆さんの体重が読めないのは？」

なっぺ「聞かないでっ！」

吼太「つーかトゥードのプロフィール。あれ何だよ？」

なっぺ「トゥードだから仕方ない。じゃ感想感謝コーナー！」

吼太「Ａｒｉｓｈｉａさん、バルディッシュさん、雨季さん、天照大神さん、朱神優希さん、七つ夜＆夜つ七さん、水橋さん、ユウキ

さん、香崎　真琴さん、緋水さん、ベルワンさん、毬藻さん、ヴェルク・ネオさん、ＡＩＲＳさん、まーたさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは２１世紀警備保証のＯＬ制服を、緋水さんからは吼太と詩音のコスプレ写真ｉｎ四次元ポケットを、ＶＡＺＵさんからはバイク改造キット、なのはに魔王パッチを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「なんでＯＬ服！？」

なっぺ「え？当たり前じゃね？」

吼太「違うから！」

なっぺ「まぁとりあえずお着替え」

吼太「うわぁぁぁぁぁぁ！！？」

はやて「（吼太に内緒で女性用の隊士服注文しようかな…？）」

なのは「ＶＡＺＵさん……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか……」

ベス「それで、次回は？」

なっぺ「当然の如く六課結成の話だね。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百九話　新部隊、その名は機動六課（前書き）

今回は原作に倣って進みます。

微妙に違いはありますが。

# 第百九話　新部隊、その名は機動六課

Ｓｉｄｅ　吼太

「にしても、バスターとレムリア・インパクトが出てくるとは思わなかったな」

「本当。ちょっとビックリしちゃったよね」

なのはも少し意外そうに言う。

ディバインバスターは原作知識から知ってたけど、レムリア・インパクトまで使えるようになってるとは思わなかった。

しかも、仕組みもかなり似てるし……。

スバルの才能を感じるな。

「あっ！……す、すみません！」

何か悪いことをしたと思ったのか、スバルが謝ってくる。

「いいよ。本当にただ驚いてるだけだしさ」

「うんうん♪」

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「ランスター二等陸士は、なのはさんにおとーさま……吉谷提督のことをご存知です？」

私の脚を治してくれている小さな上司、リインフォース・ツヴァイさんが私に聞いてくる。

「え？あ、はい。なのはさんは、本局武装隊のエースオブエース。航空戦技教導隊の若手ナンバーワン。高町なのは、一等空尉。吼太さんは、時空管理局最強の魔導師。管理局が持つ、最後の切り札。ラスト・ジョーカー吉谷吼太、一等海佐」

どちらも、雑誌に取り上げられたり、グラビアが出るほどの有名人だ。

……何故か、吼太さんは全く違う方面の写真集が出たりしてるけど。

「はいです♪」

私の認識が合っていたことを知らせてくれるリインさん。

……にしても妙ね。

このリインさんはどうやら初試験官みたいだから、保護者みたいな立ち位置の人が欲しいのは分かる。

だけど、それにあのエースオブエース、高町教導官が来るには理由としては足りないものがある。

しかも、上空にいるヘリの窓からは、あのテスタロッサ執務官の姿も見えた。

もしかしたら、リインさんの家族も誰か見に来てるのかもしれないけど……。

だとすると、何故私たちみたいな普通の魔導師の昇格試験にそんな有名人が集まっているのかがわからない。

私は凡人で才能なんて無いし、スバルはスバルで、まだ上の人達に認めてもらえるような実力があるわけじゃない。

まさか、近々部隊を立ち上げるから、そのメンバーの選定を兼ねているとか？

……まさか、ね。

まぁいい。私の目的はただ一つ。

経験積んで、執務官になって、それで……

あの人の隣で活躍出来るような、そんな魔導師になるんだ。

Ｓｉｄｅ　吼太

「お、やってるな」

待ち合わせしていた部屋に入ると、そこでははやて、リイン、フェイトがスバルとティアナに新設部隊の説明をしていた。

新設部隊ってのはまぁ、機動六課のことだ。

遺失物管理部だとかなんとか難しい言葉ならいくらでも並べられるけど……。

要はロストロギアを集めて保管する部隊だな。

まぁ、それは表向きの理由であって、真の設立理由は他にあるんだけど……。

「あ、コータ君、なのはちゃん！二人もこっち来て～」

「は～い」「おう」

はやてに呼ばれて、一緒にいたなのはとオレは、はやて達の側のソファーに座る。

「じゃあ、話を中断するみたいで悪いんだけど、とりあえず試験の結果ね」

なのはの話に、姿勢を正すスバルとティアナ。

「二人とも、技術はほぼ問題無し。ただ、危険行為や、報告不良は見過ごせるレベルを越えています」

最初はスバルが喜んだ表情を浮かべたが、だんだん酷評が増えていくにつれ、表情が曇っていく。

「自分やパートナーの安全だとか、試験のルールも守れない魔導師が、人を守るなんて……出来ないよね？」

「……はい」

分かってはいるけど。

そんな表情で、なのはの評価を受け入れるティアナ。

「だから、二人とも不合格」

「あぅ……」

その言葉に、二人の落ち込み方がさらに深くなる。

……ま、これで終わりなら、二人を機動六課に誘うわけないんだけどな。

「……なんだけど！」

なのはが、一際大きな声で、スバルとティアナに呼びかける。

「二人の魔力値や能力を考えると、次の試験がある半年後までCランク扱いにするのは、かえって危ないかも。っていうのが、私と試験官の共通見解」

なのはがリインを見ながら、言う。

「です♪」

リインも、それに賛成する。

「と、いうわけでこれ」

オレが、一枚の書類を渡す。

「特殊異変対処部隊での特別講習に参加するための書類だ」

「えっ!?特殊異変対処部隊って……あの特殊異変対処部隊ですか？」

ティアナが驚いたように言ってくる。

「まぁ、他に同じ名前の部隊は無いな」

つーかあったらオレが知りたい。

「え、でも……あの部隊って、本局直属のトップ部隊で、一般の魔導師じゃ入ることも許されないような超エリート部隊なのに……。そんな人達にも顔が利くなんて…」

ティアナの驚いた顔に対して、スバルは……

「……？？？」

イマイチ分からないらしい。

まぁ、部隊は一応秘匿扱いだからな。仕方ないといえば仕方ない。

「特殊異変対処部隊。次元世界全体において、次元断層が起きそうなロストロギアの暴走や、オーバーＳＳランク犯罪者の検挙などの、本来ならば複数の部隊で当たるような大規模事件を担当する特殊部隊」

って言っても、その真実は至極単純。

【厄介なまでに強い魔導師を一つの部隊に纏めて、監視を楽にするため】。

ただそれだけのために上層部が作り上げたのだ。

「んで、オレはそこの部隊長。だから、顔が利くっつうのはあながち間違いじゃないな。オレ以外は」

「にゃはは♪」

「恋人だもんね。私たち」

「せやね～♪」

「「……えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」」

意外と驚いてるな。

「話を戻すぜ。オレの部隊……特殊異変対処部隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられる。来週から先輩方にしっかり揉まれて、安全とルールをちゃんと学んでこい。そしたらBランクなんてあっという間だ」

「「……ありがとうございます！」」

頭を下げるスバルとティアナ。

「合格するまでは試験に集中したいやろ？私への返事は、試験が済んでから～ってことにしとこうか？」

「すみません！恐れ入ります！」

これで二人の入隊は確定かな？

スバルとティアナが出ていった後。

「じゃあオレはもう二人を迎えに行ってくるよ」

「お願い」

なのは達に言ったあと、外に止めてあった車に乗り込む。

ちなみに、運転手はトゥードだ。

……免許無いわけじゃないからな？セットアップ許可が出ないとクロスオーバーフォームになれなくて、通常時は脚が届かないだけだからな？

まぁ、それは置いといて…。

空港に到着し、エスカレーターを上る。

すると、赤髪の少年がオレに話し掛けてきた。

「私服で失礼します！吉谷提督！」

「おう。エリオ。……お前、また背が伸びたな？」

「え？あ、はい」

今や、エリオの身長はオレより大きくなっていた。……あれ？目からしょっぱい汗が……

「コータさん！？」

「ぐすっ……ん、大丈夫。キャロは？」

「いや、まだ合流出来てないんですけど…」

エリオが自身のデバイス、ストラーダを見ながら言う。

「もしかしたら、迷ってるのかも…」

「そんなわけ……有り得なくもないな」

オレはエリオの予想を否定出来なかった。

……だって、キャロって人混みに流されやすいし……。

「あの、捜しに行ってきます！」

「あぁ、頼む。オレはここで待ってるよ」

一応、集合場所はここだからな。万一ここに来たときに誰もいないんじゃキャロも慌てるだろうし。

そして、走り出すエリオ。

相応の鍛え方はしてたからな。やっぱり早い。これならすぐに……

「うわぁぁぁぁぁ！ゴメンキャロ！手が！胸が！ごめんなさい！」

……見つかったみたいだな。

声のしてるほうに行くと……。

「本当にすみません！」

「キュクー！」

「あ、あのフリード？私は怒ってないよ？」

「キュクキュクー！キュク！？」

怒るちび竜、土下座する少年、竜を宥める少女がいた。

……何から突っ込めばいいんだ？これ……。

Ｓｉｄｅ　三人称

その日の夜、四人の人影が封時結界の内部にいた。

『ザフィーラ、追い込んだわ。ガジェット？型、そっちに三体』

金髪の女性、シャマルが念話で状況を仲間に伝える。

ザフィーラと呼ばれた狼は、それを受け、目の前に集中する。

「ておァァァァァァァァァ！！！！！！」

ザフィーラが咆哮すると、地面から白い槍――鋼の軛――が現れ、ガジェットを一体貫く。

だが、残りの二体はその爆風に紛れて、突破しようとする。

しかし、この場にいたのは、ザフィーラだけではなかった。

「うらぁぁぁぁ！」

紅い服を纏った少女、ヴィータが、ガジェットの一体を手に持ったハンマー型アームドデバイス、グラーフアイゼンで破壊する。

その様子を認識した最後のガジェットは、空へと逃げる。

「シグナム！そっちは任せた！」

ヴィータが空を見ながら言う。

そこにいたのは、桃色の髪をポニーテールに纏めた女性、シグナム。

彼女は、自身の愛機たる剣型アームドデバイス、レヴァンティンを構え…

「あぁ。紫電、一閃！」

ガジェットを斬り裂いた。

「片付いたか」

ザフィーラが周りを見ながら言う。

「シャマル、他はどうだ？」

シグナムがシャマルに念話で尋ねる。

『残存反応無し。全部潰したわ』

シャマルが断言する。

シャマルのデバイス、クラールヴィントは索敵能力にも優れている。

彼女が言うなら間違いはないだろうと他の三人は判断した。

「出現の頻度も、数も…増えてきているな」

「あぁ。動きもだんだん賢くなってきてる」

シグナム、シャマルがヴィータとザフィーラの元に降りてくる。

「でも、これくらいならまだ、私たちだけで抑えられるわ」

「そうだな」

シャマルの言葉を、シグナムが肯定する。

「ド新人に任せるには、面倒な相手だけどな」

ヴィータが、ガジェットの残骸を見つめながら言う。

「仕方あるまい。我等だけでは手が足りぬ」

「そのための新部隊だもの」

ザフィーラとシャマルも、力不足を感じながら言う。

「はやての……いや、私たちの、新部隊。機動六課」

翼達はゆっくりと、だが着実に集まって来ている。

# 第百九話　新部隊、その名は機動六課（後書き）

なっぺ「後書き座談会らー！」

吼太「なんだよ【らー！】って？」

なっぺ「『俺のコアラー！』みたいな感じ」

吼太「それ、仮面ライダーオーズ見てないと分からない上、本来は『俺のコアだー！』だろ」

なっぺ「小せぇことは気にすんな！」

吼太「小さくないから」

なっぺ「さて、相変わらずのフリード」

吼太「なんであんなにフリードが凄いんだ？」

なっぺ「知らんよ。ちなみに、台詞の意味はこんな感じになってます」

――――――――――――――――――――――――

「本当にすみません！」

「キュクー！（あんさん何やっとんじゃ！お！？ちゃんと責任取ってくれるんじゃろうなぁ！！？）」

「あ、あのフリード？私は怒ってないよ？」

「キュクキュクー！キュク！？（姐さん！こういうのはしっかり責任取らさなアカンのですわ。で、あんさんはどういうオトシマエつけるつもりなんじゃ！ア〝ァ〝！？）」

――――――――――――――――――――

吼太「待てコラ」

なっぺ「待てない！感想感謝コーナー行くぜ！」

吼太「チッ……。ライさん、バルディッシュさん、天照大神さん、雨季さん、七つ夜＆夜つ七さん、ユウキさん、ベルワンさん、緋水さん、朱神優希さん、まーたさん、香崎　真琴さん、てっちゃんさん、ヴェルク・ネオさん、ＡＩＲＳさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはシャイニングガンダム、ガンダムマックスター、ガンダムシュピーゲル、ガンダムローズ、ボルトガンダム、マスターガンダム、ノーベルガンダム、ドラゴンガンダム、クーロンガンダム、ゴッドガンダム、ライジングガンダムを、緋水さんからは吼太の女装姿シリーズに詩音のコスプレシリーズを、ＶＡＺＵさんからは紳士服（着てる間だけ、身長が１８９ｃｍになる機能付き）、吼太の等身大目覚まし抱き枕（セリフ：朝だぞ、目を覚ませよ）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「ＭＦがたくさん来たな」

なっぺ「使えれば使おうっと」

ベス「次回はどんな感じですか？」

なっぺ「機動六課が結成するんじゃないかな？ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百十話　集結（前書き）

ウウム……時間をかけた割には微妙な出来栄え……。

皆さん、すいません。

# 第百十話　集結

Ｓｉｄｅ　三人称

「わは～♪この部屋もやっと隊長室らしくなったですね～♪」

「アハハ♪そやね～。リインのデスクも、ちょうどいいのが見つかってよかったなぁ」

「クラナガン中を探した甲斐があったよ」

「ありがとうございますねーさま！リインにピッタリサイズですよ～♪」

楽しそうに談笑しているのは、八神はやて、リインフォース・アインス、リインフォース・ツヴァイの三人。

彼女達は今、機動六課の本拠地たる隊舎の、隊長室にいる。

新しいだけあり、内装は綺麗の一言に尽きるだろう。

その時、来訪者を告げるブザーが鳴る。

「はい、どうぞー」

部屋の主であるはやてが入室を許可すると、四人の女性が入ってくる。

「「「「失礼します」」」」

「あ！お着替え終了やな♪」

「皆さん素敵です～！」

「あぁ、よく似合っている」

はやて達が口々に褒めていく。

入ってきたのは、なのは、フェイト、アリサ、すずかの四人。

「私たちもいるよ～！」

続けて、アリシア、なずな、フィニア、羽旺が入ってくる。

「にゃはは」

「ありがとう、リインフォース、リイン」

なのはは少し照れ臭そうに笑い、フェイトは素直にリインフォース達にお礼を言う。

「みんなで同じ制服着るのは、中学校以来やね。なんや懐かしい～♪」

「そうですね」

「仕事である以上、仕方ないでしょう」

なずなとリインフォースも、どこか嬉しそうだ。

「まぁなのはちゃんとなずなちゃんは飛んだり跳ねたりしやすい教導隊制服でいる時間のほうが長くなるかもやけど」

「でも事務仕事とか公式の場ではこっちってことで♪」

なのはも、この制服を気に入っているらしい。

「あれ？そういえばコータは？」

フィニアが気づいたことを言う。

「コータ君はまだやけど、多分もうすぐ…」

そこまで言ったところで、またブザーが鳴る。

「どうぞー」

はやてが許可した瞬間、一人の小さな人影が入り込んできた。

「はやて！どういうことだよ！？／／／／」

そう、先程話していた吼太である。

何故か、その顔は赤くなっている。

「お～、似合ってる似合ってる」

「ふむ。やはりうぬにはそういった格好の方が似合うな」

はやてと羽旺が吼太を見ながら言う。

原因は吼太の格好にある。

要は、女性用の制服を着ているのだ。

別に好んで着ているわけではない。

ただ、仮にも隊長職にある自分が私服では、部隊の信頼に関わると判断し、はやてのいる隊長室まではこの制服を着て来たのだ。

「似合ってるとかの問題じゃねぇだろ！男物の制服を早く渡せ！」

「そうカッカしない。可愛い顔が台なしよ？」

「アリサ～！」

「「「アハハハハ♪」」」

隊長室にほのぼのとした空気が流れる。

吼太の女子制服姿は、彼女達の緊張を解くのに一役買ったようだ。

尤も、着ている本人は不服なようだったが。

「さて、それでは」

フェイトが言うと、入ってきていた全員が姿勢を正す。

「本日ただ今より、高町なのは一等空尉」

「フェイト・テスタロッサ執務官」

「アリサ・バニングス一等空尉」

「月村すずか一等陸尉」

「高町なずな一等空尉」

「フィニア・テスタロッサ一等海尉」

「八神羽旺一等海尉」

「アリシア・テスタロッサ一等海尉」

それぞれが、自分の名前を言う。

「以上八名、機動六課に出向となります！」

「どうぞ、よろしくお願いします！」

なのはとフェイトが、敬礼すると、合わせてアリサ達も敬礼をする。

「……特殊異変対処部隊、全六名。本日ただ今より、機動六課の指示下に入ります」

また、吼太は吼太で、部隊長としての挨拶をする。

「はい、よろしくお願いします♪」

はやてが笑顔で敬礼し、全員の出向が認められた。

それに釣られて、全員が微笑む。

ビー！

「どうぞ～？」

またブザーが鳴り、新しい人が隊長室に入ってきた。

理知的な顔立ちに加え、メガネまでかけたその人物からは、真面目な雰囲気が現れている。

「失礼します。……あ！高町一等空尉！テスタロッサ執務官！吉谷提督！ご無沙汰しています！」

入ってきたその人物がなのは、フィニア、吼太に敬礼をする。

なのはとフェイトはイマイチ思い出せていないみたいだが、吼太はすぐにその人物の名前を言い当てた。

「ようグリフィス。久しぶり」

「はい。吉谷提督！」

名前を覚えていて貰えたのが嬉しかったのか、僅かばかり笑顔を浮かべるグリフィス。

「えー！？本当にグリフィス君？凄い久しぶり～。ていうか凄い成長してる！」

なのはが驚きの声をあげる。

「コータ君、なのはちゃん、フェイトちゃん、知り合い？」

すずかが三人に聞いてくる。

「昔、とある任務で会ったんだよ。その時は、こんなにちっちゃかったんだよ？」

フェイトが胸の辺りに手を置き、昔のグリフィスの身長を伝える。

「その節は、色々お世話になりました！」

グリフィスが、若干気恥ずかそうに言う。

「えーと…グリフィスもここの部隊員なの？」

アリサがグリフィスに聞く。

「はい！」

「私の副官で、交替部隊の責任者や」

「運営関係も色々と手伝ってくれている」

はやてとリインフォースが詳しく説明をする。

「お母さん……レティ提督はお元気？」

フェイトが、レティ提督のことを聞く。

「はい、お蔭様で。……っと…報告してもよろしいでしょうか？」

グリフィスが用事を思い出したらしく、はやてに報告の許可を求める。

それに対してはやては、頷くことで許可した。

この場にいる全員が話を聞く態勢であることを確認したグリフィスが、報告を始めた。

「フォワード１０名を始め、機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今はロビーに集合、待機させています」

「そうかぁ～。意外に早かったなぁ」

はやてが少し驚いた風に言う。

「ほんならみんな、部隊のみんなにご挨拶や」

「「「「「「「「「「うん！」」」」」」」」」」

はやての言葉に、その場にいた女性陣は笑顔で答えた。

「……オレの制服は？」

吼太の言葉には、みんなが目を逸らした。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

はやてが壇上にあがり、話しはじめると、ロビーに集まった六課メンバーが拍手をする。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守っていくことが、私たちの使命であり、為すべきことです。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォワード陣、それぞれ、優れた技術を持ったメカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって、事件に望めると信じています」

そこで、一区切りするはやて。

「ま、長い挨拶は嫌われるんで……ちょう、ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

はやてが話を終えると、また拍手が巻き起こる。

その中には、あのスバルやティアナもいた。

「じゃあ、フォワードの顔見せも兼ねて、模擬戦場にいこうか。コータ君も何人か連れていっているはずだし」

なのはが、ついて来ていたスバル、ティアナ、エリオ、キャロに向けて言う。

「まぁ、基本的にはこの四人で一チームとして動いてもらう予定なんだけどね。じゃあ、着替えてきて」

なのはが、少し笑いながら言う。

「「「「はい！」」」」

四人は、元気に答えた。

なのはが教導隊の制服に着替え、待ち合わせ場所にいると、フォワードが来る方向とはまるで違う方向から自身を呼ぶ声が聞こえてきた。

なのはがそちらのほうを向いた頃には、その女性は既に認識出来る距離まで近づいてきていた。

「シャーリー！」

「デバイス、持ってきました～」

「うん。ありがとう。いいデータ取らせるからね」

「はい～♪楽しみにしてますね♪」

「「「「お待たせしました！」」」」

フォワードの四人が現れる。

「ほかのフォワードメンバーは…？」

ティアナがなのはに質問する。

「すぐ来ると思うけど…「お～い、なのは～！」あ、きたきた」

なのはがそちらを向くと、吼太を始めとする８人がやって来た。

「じゃあ、自己紹介頼むぜみんな」

吼太が言うと、八人が自己紹介を始める。

「クロスオーバー０３、プリム・Ｆ・ヨシヤですわ。以後よろしく」

「クロスオーバー０４、ミカ・Ｆ・ヨシヤ。仲良くしようぜ！」

「……クロスオーバー０５、ライラ・Ｆ・ヨシヤ…よろしく」

「じゃあ私も。ルナーズ０２、アリシア・テスタロッサだよ～」

「ルナーズ０３、アリスね。よろしく！」

「プリムさん！ミカさん！ライラさん！アリシアさん！アリスさん！」

「皆さんもフォワードだったんですね！」

面識のあるエリオとキャロが、喜んだように言う。

だが、その横のスバルとティアナは唖然としていた。何故なら……

「バーニング０２、ティーダ・ランスター執務官です。よろしく。……ってね」

「バーニング０３、ギンガ・ナカジマです。……驚いた？」

「兄さん！？」「ギン姉！？」

彼女達の実の兄と姐がいたからである。

## 第百十話　集結（後書き）

なっぺ「更新乙です！後書き座談会！」

吼太「誰に対して言ってんだよ」

なっぺ「……自分自身？」

吼太「淋しいやつだ」

なっぺ「ｏｒｚ」

吼太「さて、機動六課が正式に動き出したな」

なっぺ「メンバー構成がめっちゃ大変だった……アリサとすずかもいるし、アリシアもいるし、リインフォースもいるしで…」

吼太「結局アリシアが出てるな」

なっぺ「……正直、ぶっちゃけると、人数合わせです」

アリシア「えぇっ！？」

なっぺ「ゴメン。とにかくゴメン。じゃあ感想感謝コーナー行くぜぃ！」

吼太「天照大神さん、バルディッシュさん、雨季さん、ユウキさん、ベルワンさん、朱神優希さん、七つ夜＆夜つ七さん、水橋さん、香崎　真琴さん、緋水さん、ＡＩＲＳさん、ヴェルク・ネオさん、

Ａｒｉｓｈｉａさん、ＶＡＺＵさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからは小萌先生の車（とある魔術の禁書目録／ハンドルの左右にボタンがあり、そこでアクセルとブレーキを制御できる）とメカヒスイ・ハーツｖｅｒ，１．１０を、七つ夜＆夜つ七さんからはこーたゲーム（好きなシチュエーションを設定する事が出来る最新バージョン）を、緋水さんからはスバル＆ティアナに吼太の抱き枕と詩音の抱き枕を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「にしても吼太さんの部隊って六人だったんですね」

なっぺ「ファンストメンバーのみを集めた少数精鋭だからね。魔導書娘達を加えたら十一人だけと」

吼太「だからプリム達の分隊長は名ばかりってことだな」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 第百十一話　訓練時々変態（前書き）

タイトルが全てを物語っている。

意外とギャグに持ってけないのに驚いています。

まぁ、ギャグ展開中心にしたいのは変わりませんが。

# 第百十一話　訓練時々変態

Ｓｉｄｅ　吼太

「これは……？」

フォワードのみんな――といっても、ＡＲＭ使いであるアリシアや、デバイスそのものを使わないアリスは違うが――が、自身のデバイスを渡され、不思議がる。

予めシャーリーが回収していたらしい。

ちなみに、声をあげたのはティーダさんだ。

「そのデバイスには、データ記録用のチップが入っているから、ちょっとだけ、大切に扱ってね。それと、メカニックのシャーリーから一言」

なのはが紹介すると、シャーリーが姿勢を正し、話しはじめる。

「えー、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任の、シャリオ・フィニーノ一等陸士です」

そこまで言うと、シャーリーが頭を下げる。

「みんなはシャーリーって呼ぶので、よければそう呼んでね？」

少し微笑みながら、話を続けるシャーリー。

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々訓練を見せてもらったりします。…あっ、デバイスについての相談とかあったら、遠慮無く言ってね？」

「「「はい！」」」

シャーリーの言葉に、フォワードのみんなが反応する。

「じゃ、早速訓練に入ろうか？」

「は、はい……？」

「ここで……ですか？」

なのはの問い掛けに、スバルとティアナが反応する。

まぁ、そりゃそうか。フォワードのみんなの目の前に広がっているのは一面の海。自分達が今立っている陸地があるにはあるけど、訓練をやるスペースなどどこにもないように感じるしな。

でも、間違いはない。

「あぁ。シャーリー！頼むぜ？」

ディメンションＡＲＭ、修練の門をシャーリーに投げ渡す。

「はーい♪」

シャーリーがそれを受け取ると、周りにいくつもウィンドウを開き、操作していく。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用訓練シュミレーター！」

ウィンドウでの操作が一通り終わると、シャーリーの足元から、コンソールが迫り出してくる。

シャーリーがそこに修練の門をセットすると、ウィンドウに【Ｓｔａｇｅ　Ｓｅｔ】の文字が表示される。

「ステージセット♪」

シャーリーが言いながらウィンドウのボタンを押すと、フォワード達の前に巨大な門が顕現した。

「物質召喚魔法！？それもこんな大質量のものを！？」

ギンガが驚きながら言う。

「あ～、ＡＲＭに関してはミッドやベルカの魔法で考えちゃダメだよ。それじゃ、お先♪」

アリシアがそう言いながら、早速門をくぐっていく。

もちろん、反対側から出てくるなんてことは無い。

フォワードでも、その様子を驚いた様子で見ている人と、至って平常のままの人に別れた。

驚いているのはスバル、ティアナ、ギンガ、ティーダといった、オ

レとの関わりが比較的薄い人。

エリオやキャロ、プリムやミカ、ライラにアリスは見慣れているためか、たいした反応はしていない。

「それじゃあ、僕たちも行きます」

エリオ達も次々と入って行く。

だが、警戒しているのか、スバル達は今一歩踏み出せない。

「ほれ、早くしろ」

オレが急かすと、スバル達四人もようやく中に入った。

さて、オレ達も行きますか。

なのはと顔を見合わせ、一回頷き合うと、一緒に門の中に入っていった。

「ふぁぁぁ～」

「すげえ……」

スバルとティーダが呟く。

門の中は、まさにミッドの街そのものといった様相だったからだ。

「えーっと……封時結界の一種ですか？」

ティアナがオレに聞いてくる。

まぁ、確かにミッドやベルカの魔法で考えるならそうなるな。

「いや、違う。これはそうだな……異次元空間に仮想の世界を創りあげたってとこか」

以前貰った仮想空間システムと修練の門を相乗掛合したものを骨組みに、なのはが監修したシステムを組み合わせることで、必要な空間を最低限までカット。さらに持ち運びまで可能にしたスグレモノだ。

加えて、修練の門の本来の効果である、【魔力に満ちた空間】【１／６０の速度で時間が流れていく】というものも健在。

恐らく、訓練システムとしては中々の性能なんじゃないかと思っている。

ちなみに名前はない。

今回はこれを使い、ミッドの街並みを再現した。

所謂市街地訓練だな。

さて、始めますか。

Ｓｉｄｅ　三人称

シャーリーが展開しているウィンドウの一つは、訓練シュミレーターの内部を映し出している。

それを、気難しそうな顔で見ている少女が一人。

「新人達はやっているようだな。お前は加わらないのか？」

「アタシが手伝うのはまだ先だよ。あいつら、まだよちよち歩きのひよっこだしな」

その少女に、十人中十人が振り返るような美人が話しかける。

少女はヴィータ。美人の女性はシグナム。

ヴォルケンリッターの一員だ。

ヴォルケンリッターは、この機動六課に【八神はやて直属の独立分隊】として参加している。

だが、デスクワークの仕事をするのはリインフォース姉妹だけで十分なので、ヴォルケンリッターの面々は意外と暇が出来たりするの

だ。

今は、それを訓練シュミレーター内部を見るのに使っていた。

「にしても……やっぱいいな」

「あぁ、いい眺めだ」

二人が、ウィンドウの一カ所を見ながら言う。

そこにいるのは、フォワードの見張りをしている吼太。

着替えがすぐに用意されなかったため、今だに女性制服のままである。

それを、真面目な顔をして見ている二人の騎士。

「何かこう……ソソるモノがあるよな」

「同感だな。あれはヤバイ」

ただの変態である。

「そういやシャマルは？こういうの真っ先に食いつきそうなのに」

「自分の城にかかりっきりだ。あぁ見えて、下準備は怠らないからな」

ヴィータとシグナムはひとしきり話すと、またウィンドウを見る作業に戻る。

まさに変態である。

さて、所変わって、ここは機動六課の医務室。

先程シグナムが言っていた、【シャマルの城】とは、ここのことである。

「うふふ♪いい設備♪これなら検査も処置もえっちも、かなりしっかり出来るわね♪」

シャマルが笑顔で言う。

さりげなく変態発言が入る辺り、やはり変態である。

「本局医療施設の払い下げ品ですが、実用にはまだまだ十分ですよ！」

機器のセッティングをしていたルキノがシャマルに言う。

「みんなの治療や検査、よろしくお願いしますね？シャマル先生」

「はーい♪」

そう答えながら、部屋の奥のクローゼットを確認するシャマル。

中にあったのは、大量のコスプレ衣装と、キングサイズベッド。

「うふふふ……♪♪♪」

「あ～あ、またアッチに行っちゃったよシャマル先生」

「まぁ、あのヴォルケンリッターのシャマル先生だし」

アルトとルキノが呆れながら言う。

ヴォルケンリッター。

別名、【吼太専属変態分隊】。

不名誉な称号をつけられて困っているのは、唯一の男であるザフィーラだけだったりする。

Ｓｉｄｅ　吼太

……何か嫌な目線を感じるな。

まぁ、いいか。

「説明は理解したな？要はガジェット達はロストロギア探索及び保護の障害ってこった。じゃあまずはコイツらを捕獲、或いは倒してみろ」

オレがウィンドウを操作すると、ダミーのガジェットドローンが現れる。

ちなみに？型な。

「まずは様子見だな……シュート！」

ティーダが自身のデバイスから魔力弾を撃つが、その魔力弾は掻き消されてしまう。

ＡＭＦを起動したガジェット相手にどう戦うか……見せてもらうぜ。

Ｓｉｄｅ　スバル

……どーしよう。

無理矢理突破？でもそんな危なっかしいのはあまりやりたくはないし……。

「ティア～」

「スバルうっさい！今集中してるんだから！」

ティアはアンカーガンに魔力を溜めていた。

あれは……魔力弾を魔力でコーティングして突破力を強化するやつだ。

確か……多重弾殻だっけ？

「シュート！」

ティアが魔力弾を撃つと、外側にコーティングされた魔力膜がＡＭＦで無効化されたけど、中の魔力弾はそのままＡＭＦを突破して、ガジェットを破壊した。

……リボルバーシュートには応用、難しそうだなー。

「やるなティアナ」

「ありがとう、兄さん。……ちびっ子、名前なんだっけ？」

「キャロであります！」

うん。この娘はいい子だ。なんとなく分かる。

「アンタはあれ、突破出来る？」

「はい！やってみます！フリード！」

「キュクルー！」

キャロが言うと、ちび竜が飛び出す。

「危ない！」

ギン姉はフリードが言うことを聞かずに飛び出したように感じたみたいだ。

案の定、飛び出したフリードには弾丸が迫っている。

が、フリードは弾丸を間一髪で避ける。

一発ではなく、数十発もの弾丸の乱射をだ。

……あれ？私、フリードより実力下？私はあんなの無理だし……。

そんなこんなで、フリードが一体のガジェットの近くにたどり着く。

ガジェットが撃っているのは魔力弾なのか、ほかのガジェットの攻撃はＡＭＦに掻き消されていた。

「フリード、ブラストフレア……ファイア！」

「キュクー！」

フリードが炎を吐き出すと、ガジェットの内何機かが炎に捕まり、動け無くなる。

「我が求むるは、戒めるもの……捕らえるもの。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖」

キャロが呪文を唱えはじめる。

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！」

ガジェットの直下に魔法陣が展開し、そこから鎖が飛び出して、ガジェットを捕縛した。

「やるぅ～」

感心したようにミカさんが言う。

ちなみにクロスオーバーのみんなとルナーズのみんなは今回、見学らしい。

強いから鍛える必要が無いのかな？

「あぁ、言っておきますけど、私達はべつに鍛える必要が無いわけではないですわ。今回はあなた達のデータ習得が必要だから、デバイスの無い私達が参加していないだけですわ。それに、アリシアさんみたいに自習している人もいますしね」

見てみると、アリシアさんは黒い人影と魔法戦を繰り広げていた。

それに、確かにクロスオーバーのプリムさん、ミカさん、ライラさん。あとルナーズのアリシアさんとアリスさんはデバイスを使っていない。

納得。

「スバル、私たちも行くわよ！」

ギン姉が私に声をかけてきた。

答えはもちろん……

「オッケー！」

二人で駆け出し、ガジェットに私が拳をぶつける。

が、魔力を掻き消されてしまうため、威力がイマイチ伝わらない。

……だけど！

「こっちよ！」

ギン姉が上空から踵落としをガジェットにぶち当てる。

二カ所に強力な魔力攻撃を喰らったせいで処理が乱れたのか、瞬間的にＡＭＦが無効化される。

そこに、私のリボルバーナックルとギン姉の踵落としが決まり、ガジェットは爆散した。

Ｓｉｄｅ　エリオ

「ストラーダ。アレ、使う？」

『まだ時期尚早かと』

「やっぱり？じゃあ普通に援護だけにしとこうか」

『良い選択です』

「じゃあ……来い！」

僕が喚ぶと、空間に歪みが出来、中から一つの小さな機械が現れる。

ザビーゼクター。

最近になってようやく来てくれるようになった、僕の初めてのゼクターだ。

「行けっ！」

ザビーゼクターに指示を出し、ガジェットを誘導させる。

ザビーゼクターに追われてこちらに来たガジェットを……

「奥義、地威砲！」

ストラーダを振り上げた衝撃で発生した斬撃波で斬り裂いた。

「もう一体……呼んでみようかな。……サソードゼクター！」

適当に呼んでみたが、今度は何の反応も無かった。

……やっぱりまだザビーだけか。

ザビーゼクターが慰めるように僕の周りを飛ぶ。

ザビーゼクターを使ってあげたいけど、今回はデバイスのデータを取るのが目的だし、悪いけど……

「もう一回、頼めるかな？今度はティーダさんのほうに誘導してあげて」

僕が頼むと、ザビーゼクターは任せろと言わんばかりに飛んでいった。

……何かご褒美とかあげたいけど、ザビーゼクターって何か食べるのかな？

――喰わない喰わないｂｙなっぺ――

Ｓｉｄｅ　なのは

「いい感じだな」

「そうだね」

コータ君の言葉に賛同する。

アリシアちゃんだけフォワードにするってコータ君が言ったときは驚いたけど、確かにいい刺激にはなりそう。

それに、他のフォワードのみんなも互いにいい刺激を与えあっている。

「シャーリー、どう？いいデータはとれそう？」

ウィンドウに映っているシャーリーに話しかける。

シャーリーは外でコンソールの操作をしているから、修練の門の中には入っていない。

『バッチリです！六機とも、いい子に仕上げますよ～！』

今制作している六機は、六課からフォワードのみんなへのプレゼント。

喜んでくれるといいけど……。

とにかく、訓練も早く仕上げないとね。

機動六課が活動できる一年間は、長いようで意外と短い。

教えられることは教えていこう。

それが、私の選んだ道なんだから。

## 第百十一話　訓練時々変態（後書き）

なっぺ「後書き座談会ディース！なっぺ参上ディース！」

吼太「ディースディースうっさい」

なっぺ「（´・ω・`）」

吼太「訓練だな」

なっぺ「訓練だよ。一部変態がいたけど」

吼太「あいつらは……」

なっぺ「ちなみにシャマルはショタコンです。なんでエリオも守備範囲」

吼太「エリオに気をつけるように言わないと」

なっぺ「ちなみに現在、フォワードメンバーの強化プランは……」

スバル：技数が無駄に増えてる。最大技は設定完了。

ティアナ：技が思い付かない。最大技は設定完了。

エリオ：ほぼバッチリ。最大技は設定完了。

キャロ：全く思い付かない。最大技は未設定。

ギンガ：スバル程ではないがまぁまぁ。最大技は未設定。

ティーダ：デバイスすら決まらない。最大技は未設定

なっぺ「こんな感じ」

吼太「偏りすぎだろ」

なっぺ「仕方ないね。まぁ、ティアナはヒスイから技を教わるから、多少はマシになる。問題はキャロとティーダなんだよね～。特にキャロ」

キャロ「私ですか？」

なっぺ「フリードとヴォルテールの同時召喚だけじゃあれだし、かといって使役竜を増やすだけじゃ味気ないもんね～」

吼太「何か魔法覚えさせるのか？」

なっぺ「それもあるけど……。まぁ、なんとかしよう。つーか今思い付いた」

吼太「いろいろと待て」

なっぺ「待たない。感想感謝コーナー！」

吼太「チッ……。天照大神さん、ユウキさん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、水橋さん、ながも～さん、ベルワンさん、毬藻さん、仮面ライダーディケイドさん、海人さん、香崎真琴さん、緋水さん、てっちゃんさん、ＶＡＺＵさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ヴェルク・ネオさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「七つ夜&夜つ七さんからは変態には見えない制服を、水橋さんからは新撰組の隊服を、仮面ライダーディケイドさんからは吼太に女装&性転化を3回だけ必ず拒否できる程度の能力と全てのスーパー戦隊になれる戦隊カードを、緋水さんからは吼太専用のかなり露出の酷い女性用制服を、吼太君に、てっちゃんさんからはピンクのナース服と、白のオーバーニーソ、白いパンプスを、ＶＡＺＵさんからは吼太&ラバーズに、最高級ベット、吼太に管理局男子制服（背が１７６ｃｍになる機能付き）を頂きました！ありがとうございます！」

ベス「六課の制服が三つも来ましたね」

なっぺ「どれもただの制服じゃないけどね」

吼太「……着せるなよ？」

なっぺ「拒否出来るのは三回までだけどね」

吼太「……」

なっぺ「まぁ今回はいいよ」

ベス「次回は？」

なっぺ「ファーストアラート！……になるといいなぁ」

吼太「自信無いのかよ」

なっぺ「うん。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 特別編　乙女の聖戦、それがバレンタインデー（前書き）

はい、季節ネタです。

ほんのり甘くて、少しえっちな（かな？）物語になってます。

……多分。

# 特別編　乙女の聖戦、それがバレンタインデー

Ｓｉｄｅ　三人称

とある日。機動六課。

この日、なのはとフェイトは寝込んでいた。

「「う～んう～ん……」」

「……隊長達、どうしたんですか？」

全身に包帯をぐるぐる巻にした、ミイラ男ならぬミイラ女となったなのはとフェイトを見ながら、エリオがリームに聞く。

「全身にチョコをコーティングしてコータにプレゼントしようとしたんだって。湯煎したチョコは熱いって僕とはやてが注意したのに、なのはとフェイトは「「愛があるから大丈夫！」」とかいって無理矢理……」

「……ただのアホじゃないですか」

エリオの容赦無い一言に、傷つくなのはとフェイト。

「とくになのはちゃんは喫茶店の娘なのにね～」

すずかが、さらに追い撃ちをかける。

「ん～！ん～！？」

「……『そんなこと言わないでよ！私だって一生懸命だったんだよ！？』……だって」

ライラがもごもご言っているなのはの言葉を翻訳する。

「まぁ、チョコはおいしくできてたから、僕から渡しておくよ。感謝してよ？」

「「ん～！」」

「……『ありがとうリーム！』…だって」

そう、今日この日は、バレンタインデーである。

Ｓｉｄｅ　吼太

「よし、今日はここまで」

「「「あ、ありがとうございました～……」」」

エリオを除いた全員の面倒を見ていたオレは、訓練がひとしきり終わってほっと一息ついていた。

エリオは一人だけ早く訓練を終わらせてたから、なのはとフェイトの容態を聞きにいかせていただけで、別にえこひいきではない。

「ふぃー、今日も疲れたねー」

スバルがクールダウンをしながら言う。

「まぁ、なのはさんの訓練とは雰囲気が違うもんね～」

ちなみに今日の訓練は、ティアナとティーダは【自身のバインドで縄を作り、魔力弾の動きでそれを回し、縄跳びをする】。

スバルとギンガは【スケートのトリプルアクセルを魔法無しのキャリバーで成功させる】。

エリオとキャロは【２０ｃｍ×２０ｃｍの細い足場の上で、一定時間の間、魔力弾を避けきる】。

といった感じだ。

フラウリーナ三姉妹はオレと模擬戦をしていたし、アリスは世界に存在する精霊と交信して自身の魔力を高めていたし、アリシアはＡＲＭで疲れたメンバーを癒して回っていた。

「でも、飽きない訓練ばかりです」

「地味といえば地味なんですけどね」

キャロとギンガが言う。

まぁ、確かにただの訓練に比べりゃ変な訓練だしな。
でもちゃんと基礎能力向上にはなっているからな？
「コ～タく～ん♪」
廊下を歩いていると、前からはやてがニコニコ顔で歩いてきた。
……どうしたんだ？
「今日は何の日か分かるか～？」
「今日？今日は確か……バレンタインデーか？」
「正解や♪はいっ！正解者にはチョコレートをプレゼントや♪」
はやてから綺麗に包まれた小包を渡される。
「八神隊長？どうしたんですか突然？」
ティーダがはやてに聞く。
「あぁ。ミッドには無い文化やったね。これは私たちの故郷、地球の文化の一つで、【バレンタインデー】っていうんや。女の子が好きな男の子や、お世話になってる人にチョコレートを渡す行事なんよ」
はやてがすらすらと答える。
それを聞いたティアナの目が変わった。……気がした。

「行くわよスバル！キャロ！ギンガさん！まずはチョコレートの買い出しよ！」

「「「えぇ！？」」」

「ぐずぐずしないっ！」

「「「あ～……」」」

三人はティアナに引きずられていった。

……どうしたんだ？

「ハハハ、ティアナは吉谷隊長にお熱だからなぁ～」

ティーダさんがそんなことを言う。

……お熱？熱があるのか？

――鈍感フラグ王がっ！ｂｙなっぺ――

……何かバカにされた気がする。

「そうそう。ダーリン。私もチョコ用意したから食べて？」

アリスがハート型の包みを渡してくる。

……飾りの華が枯れているのに突っ込むべきか、否か……。

「……ナイアの時計！」

ナイアの時計を発動し、たまたま近くにいたまっくろくろすけにアリスチョコを一欠けら食べさせ、元の場所に戻る。

……ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？眼が！耳が！鼻が！脳が割れるうううううううううううう！！！？？

大変だ！ハラオウン提督が倒れたぞ！

担架だ！誰か担架持ってこい！

よしきた！担架に乗せろ～！

そぉい！

ハラオウン提督が投げられた！？ハラオウン提督ううううううううううう！！！！！

「何かあったんですかね？」

ティーダが話を振ってくる。

……破壊力がヤバイな。

「ナイアの時計！」

ナイアの時計を再発動し、時間を止める。

そして、アリスチョコにレムリア・インパクトをぶつけ、消し去ろうとしたのだが……

「消えない……だと……！？」

レムリア・インパクトを受けて、外装は消え去ったが、肝心のチョコは傷一つついていなかった。何このチートチョコ。

……仕方ない。

ナイアの時計を解除し、アリスのチョコを【アリスから見える位置で丸呑み】した。

その瞬間、身体の中がヤマアラシになったかのような衝撃と共に、オレの意識は暗転した。

「ん……？」

起きると、そこはなのはとフェイトの部屋だった。

なんでここに……？

そう思っていると……

「あ、目ぇ覚めた？コータ君」

「まだ安静にしてたほうがいいよ」

この場にはいないはずの二人の声が聞こえてきた。

首だけを声のしたほうに向けると、そこには……

バリアジャケットを纏ったなのはとフェイトがいた。

「お前ら、火傷で寝込んでいたんじゃ？」

「にゃはは。あれは嘘だよ」

「本当は火傷なんてしてなかったんだよ。だけど、みんなの目を欺くにはどうしても必要だったんだ」

そう言うと、フェイトがチョコレートシロップを自身の指に垂らす。

シロップがやがて指を覆い尽くすと、フェイトはオレの口にその指を突っ込んできた。

甘い味が口の中に広がる…。

「私となのはが寝る間も惜しんで作ってたのは、このシロップ。これなら身体にかけても大丈夫だもんね」

「あ～……」

フェイトが話している横で、なのはが自身の口の中にシロップを垂らしていた。

そして、そのままオレにキスをして、シロップを口移ししてきた。

甘い甘いチョコレートシロップと一緒に入ってきたなのはの舌に、オレの口の中が侵略されていく。

「んっ……んちゅ……んく……」

「む……ぁ……んぅ……ぁちゅ……っ……」

粘膜と粘膜が交わしあう卑猥な音が部屋に響き、満ちる。

「んぷっ……はぁ……はぁ……」

ようやく口を離したなのはが、荒い息遣いのまま、オレを見下ろしてきた。

隣には、胸元にチョコレートシロップを垂らしているフェイトもいる。

捕食者と被食者。

まさに、その言葉が合っているだろう。

そしてオレが被食者の運命を受け入れかけた、その時。

「凍てつきの風よ！彼の者に凍てつきの呪縛を！」

氷を含んだ風が吹き、なのはとフェイトが凍り付いた。

「間一髪！」

「リームか、助かった……」

そう、リームがバインドで助けてくれたのだ。

「まぁ、嫌な予感はしてたからね。そうだ、はい♪バレンタインデーのチョコだよ♪」

リームがチョコを渡してくる。

そのチョコはリームを象っていた。

「【1／32リームチョコ～ボクの全てを食べて？～】だよ！」

……いや、自信満々に言われても。

「……どう喰ってもグロ展開になるだろ。これ」

「だからぁ～。一口で食べて、少しずつ舐めて溶かしていくんだよ～。ぺろぺろ…ぺろぺろ…ボクがコータの舌の上で転がされて、蠕

られて……うへへへへへ……」

はしたない笑い方はだめだぞリーム。

「……まぁ、断る理由はないし」

言われた通り、一口でいれる。

……少しもったいなかったな。まぁ喰わないわけにはいかないのも事実だけど。

「ぁぅ……ふへっ……ぐふへへへ……」

リームの笑い方がさらに壊れていく。

……うん。逃げとこう。

再び六課の廊下を歩いていると、逢う女性局員逢う女性局員全員から綺麗な小包――チョコレート――を渡される。

あまりに多いから、途中からはジッパーを使ってた。
そして、次に会ったのはアリシアとギンガ。
「あ、コータ見つけた！」
「あの……コータさん……これ、受けとって下さい！／／／／／／」
ギンガが真っ赤になりながら小包を渡してくる。多分チョコだろう。
「ありがとうギンガ。嬉しいよ」
御礼といっちゃアレだけど、オレの身長の都合上、体勢が低くなっていたギンガの頭を撫でる。
「……／／／／／／／／／／」
さらに真っ赤になるギンガ。風邪ひいたのかな？
「私からはこれだよ」
アリシアが取り出したのは水筒。
アリシアが水筒に備え付けのコップに中身を注ぐと、甘い香りがたちこめる。
「へぇ……ココアか」
「カカオ豆から作りました！」

「すげえなオイ。……うん。美味い」

「……ん～」

アリシアが頭を突き出してくる。

……頭撫でればいいのかな？

頭を撫でると、アリシアはたちまち笑顔を浮かべた。

「えへへ～♪……あ、そうだ。アリサちゃん達が食堂で呼んでたよ。行ってあげて？多分驚くと思うから」

「ん？わかった」

アリシアに言われて、食堂に向かう。

そして、食堂には……

ウェディングケーキばりの巨大なチョコレートケーキがあった。

ちなみに、頂上にはオレのクロスオーバーフォームの鎧をデフォルメしたチョコ人形がある。

「すっげぇぇぇ……！！！」

「ふふん、当然よ！」

ケーキの陰からアリサが出てくる。

「みんなで頑張ったもんね」

すずかも、ケーキの陰から出てくる。

「ボクらも頑張ったぞ！」

フィニアまで出てくる。

お前、料理出来たんだな。

「……何か失礼なこと考えてなかった？」

「まぁよい。王たる我がつくったのだ。心して味わえよ？」

羽旺も出てきた。

「上からドボシュ・トルテ、シュヴァルツヴェルダー・キルシュトルテ、フォンダン・オ・ショコラ、ザッハトルテとなっています。ちなみに頂上のチョコ人形は私の作品です」

なずなが、この巨大ケーキの説明をしながら現れる。

なるほど。五人いればこれだけ巨大なケーキも作れるか。

「よし、じゃあみんなでたべよう」

「はい」「うむ」「「「うん！」」」

次に会ったのは、はやてを除く、夜天の書メンバー。

「あぁ、吼太。ちょうどよかった。お前を捜していたんだ」

「夜天の守護騎士とリイン達でチョコレートを作ったですよ～！」

そういい、旅行トランク並の大包みを渡してくる。

……でかくね？

「みんなの力を合わせて作ったら、こんなにおっきくなっちゃったのよ～」

シャマルが笑顔で言う。

「……一応聞くぞ。どうやって作った？」

「まず私が材料のチョコレート等を選んできて～」

シャマル、【等】ってなんだ【等】って。フルーツとかだよな？

「アタシのギガントハンマーで材料を砕いて」

『いい仕事をした』

ヴィータ。ギガントハンマーの使い方を間違ってるから。

あと、グラーフアイゼンも誇らしげに言うなよ。

「私はチョコを溶かしたぞ」

『調節が大変でした』

シグナム。お前、焦がしてないよな？

あとレヴァンティン。お疲れ。

「それを私が成形し……」

「私が固めたですよ～♪」

リインフォース。お前は普通でよかったよ。

それにリイン。魔法の制御が上手くなってるな。

「……俺は味見だ。少なくとも、マズくはなかった」

ザフィーラ。毒味お疲れ様。本当にお疲れ様。

「まぁ、なら安心だな」

包みの中を見ると、サイズはでかいが、見た目は普通のハート型のチョコがあった。

「じゃあ、いただきます」

チョコのかけらを食べる。

……うん。ミルクチョコレートだ。

「ちなみに中には媚薬がたっぷり♪」

!?

シャマルの発言を聞いた瞬間に、吐き出そうとしたが、既に飲み込んだあとだった。

「……スマナイ。脅されていて」

ザフィーラが、そう言って謝る声が聞コエタ……。

なんだかんだで夜。

「お父様、今日はチョコレートフォンデュを用意しましたわ」

「フルーツとかも、俺達が育てたからすっごい美味しいよ！」

「……食べて？」

「あぁ、ありがとう。プリム、ミカ、ライラ」

フラウリーナ三姉妹のチョコレートフォンデュを食べる。

ちなみに、フルーツ以外にもドーナツやプリッツみたいな菓子もあった。こちらは魔導書娘達が作ったらしい。

「美味しいか？親父殿」

ミナが心配そうにこちらを見てくる。

「あぁ、美味しいよ」

「！！　そうか…よかった……」

ミナが安堵の表情を浮かべる。

にしても、今日は本当にチョコ尽くしだったなぁ。

「お父さーん！」

ドーナツにチョコをコーティングしていると、後ろから声をかけられる。

見れば、キャロがこちらに走って来ていた。

「はい、お父さん。チョコレートです」

キャロからチョコを渡される。

子供らしい、かわいいチョコだ。

「ありがとうキャロ。嬉しいよ」

キャロは私的な話になると、オレのことをお父さんと呼んでくれる。
エリオもそう呼びたいみたいだが、多感なためか、最近は呼ぶのをためらっている。まぁ、エリオは自分でなんとかするだろ。

「あと、ティアさんも」

「ん？ティアナもか？」

見れば、食堂の隅でもじもじしているティアナがいた。
こちらが見ていることに気づいたらしく、観念したようにこちらに来る。

「あ、あの……吉谷、隊長……／／／／／」

「ん？」

言いたいことを言えるまで、ちゃんと待つ。

「……あの……その……チョ……」

「ちょ？」

「チョ……チョ……チョコ「コータさ～ん！チョコあげます！」……」

ティアナが決心して何かを言おうとした瞬間、スバルが小包を掲げながらこちらに走ってきた。

「……あれ？なんでみんな呆れた顔をしてるの？」

スバルが不思議そうに聞いてくる。

「ねぇティア～、なんで「……の……」……ティア…？」

ティアナがプルプルと震えながら、キッとスバルを見定めた。

「こんの……バカスバルーーーーー！！！！！！」

「えぇっ！？ご…ごめんなさ～い！！」

ティアナが小包を置いたまま、スバルと追いかけっこを始めた。

中からチョコを取り出し、少しかじる。

「ん……ほろ苦い」

この日、最後に食べたチョコは、ほろ苦い、ビターチョコだった。

## 特別編　乙女の聖戦、それがバレンタインデー（後書き）

今回は予約投稿なので後書き座談会はお休みになります。

感想をくれた皆さん、ありがとうございました！

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## 第百十二話　新デバイス、そして…（前書き）

あぁ……今回も長くかかった上に、無駄に長くなった気がする……。

エリオとキャロは吼太直々に訓練を受けていたので、実力はそれなりに高いです。まぁまだバグってほどじゃないですが。

……ヴォルケンリッター？ただの変態ですが何か？↑

何はともあれ、どうぞ！

# 第百十二話　新デバイス、そして…

Ｓｉｄｅ　吼太

「はい、集合ー！」

なのはが号令をかけると、フォワード六人が集まってくる。

全員、息があがっていたが、まだまだ動けそうだ。

「今日はなずな副隊長とシュートイベーションをやってもらうね」

なのはが、自身の隣にいる人物を示しながら言う。

「5分間逃げ切るか、防御を抜いて私にダメージを与えれば終了です。誰か一人でも当たればやり直しなので、注意してください」

なのはとうりふたつな女性、高町なずながフォワード達にルールを説明する。

闇の書の闇、理を司るマテリアルだった彼女も、今は普通の女性として生きている。

その肉体が成長した理由は相変わらず不明だが、まぁたいしたことではない。

「ルシフェリオン」

『パイロシューターー』

なずなの周りに、幾つもの桜色の魔力弾が現れる。

「アンタ達！消耗した今の状態で、なずな副隊長の攻撃を避けきれる自信ある！？」

「ない！」

「ありません！」

ティアナの問いに、スバルとエリオが無駄に元気に答える。自信満々に答えるなよ。

「ならやることは一つだな」

「なんとか一撃、いれましょう」

「はい！」

ティーダとギンガの言葉に、キャロが賛同する。

「それでは、スタートです」

なずなが、パイロシューターを飛ばす。

が、フォワード達はそれを素早く避け、物陰に隠れる。

「ふむ……さすがにお姉さんが鍛えていただけはありますね」

なずなが辺りに注意していると、ウイングロードが展開される。

そして、ウイングロードを走りスバルが、建物の窓からティアナがなずなを狙う。

「格好の的ですよ」

だが、なずなはパイロシューターを巧みに操り、スバルとティアナを撃ち抜いた。

その瞬間、スバルとティアナの姿が消え去る。

「シルエット……やりますね」

仕切直しになったかと思いきや、ウイングロードをさらに展開しながらスバルがなずなを狙っていく。

上空から狙われたなずなは、パイロシューターを回すのではなく、ラウンドシールドでスバルの拳を防いだ

「んぎぎぎぎ…！！！」

スバルは何とかシールドを突破しようとするが、なずなのラウンドシールドはびくともしない。

さらに、なずなは先程飛ばしたパイロシューターを、スバルに向けて再度飛ばした。

「えっ？うわわわっ！」

慌てて回避するスバル。

ローラーが悲鳴をあげるが、止まるわけにもいかず、そのまま走る。

「っ！このバカスバル！待ってなさい！今撃ち落とすから……」

ティアナが魔力を溜め、スバルを追うパイロシューターを狙う。

そして、ティアナがアンカーガンの引き金を引いた瞬間……

アンカーガンは、軽い爆発音を立てて機能を停止した。

「えっ！？嘘！」

「わ～！ティア援護～！」

今だにパイロシューターに追われているスバルが悲鳴をあげる。

「何やってるんだティアナ！」

ティーダが魔力弾を飛ばし、スバルを追っていたパイロシューターを撃ち抜く。

「ゴメンスバル、兄さん！」

「故障ですかね…？」

『かなぁ？』

なずながなのはと念話で話しているその後ろで、エリオとキャロが魔力を高めていた。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を…」

『ブーストアップ・アクセラレイション』

詠唱が終わると同時に、エリオの足元に展開されていたレモンイエローの魔法陣の輝きが増す。

そして、ストラーダの噴出口から大量の魔力が噴出され始める。

「あの、結構加速ついちゃうと思うから、気をつけて！」

キャロが心配そうに、エリオに注意を促す。

だが、エリオは逆に不敵な笑顔を浮かべた。

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから！」

そう言うと、エリオはさらに魔力を集中させる。

その間、なずなはティアナとティーダが放った魔力弾を避け続けていた。

だが、ようやくエリオがなずなを狙っていることに気づくと、エリオに向けてパイロシューターを放つ。

「させないっ！」

だが、ギンガがその強烈な蹴りで魔力弾を全て落とす。

「エリオ君、行って！」

「はい！ストラーダ！」

『スピーアアングリフ！』

ギンガの声に応えて、エリオが弾丸のように飛び出し、なずなに突撃した。

「速い！？くっ！」

『ラウンドシールド』

ルシフェリオンが自動でラウンドシールドを張る。

そして、一筋の閃光となったエリオがなずなのラウンドシールドがぶつかり、魔力爆発が起こった。

「エリオくん！」

キャロがエリオを呼ぶ。

「ぐぁぁぁぁぁっ！」

それと全く同時にエリオが吹っ飛ばされたが、なんとか体勢を立て直し、着地した。

「……お見事です」

『ミッションクリアー』

煙の中から出てきたなずなは、無傷に見える。

「エリオの最後の一撃は私の防御を貫き、私のバリアジャケットに傷をつけました。シュートイベーション、完了です」

なずなが自身のバリアジャケットの一カ所を指しながら言う。

黒いそのバリアジャケットには、僅かだか確かに焦げ目のような傷があった。

エリオとキャロの顔に喜びの感情が現れる。

「うん、みんなお疲れ様。今朝はここまでにしようか」

「なかなかよかったぞ」

なのはは飛行魔法を、オレはガードスキル　エンジェルズウイングを使い、ビルの上から降りる。

そこになずなも降りてきて、なのはとなずながバリアジャケットを解除した。

……オレ?承認無きゃセットアップすら出来ませんが何か?

「さて、みんなもだいぶチーム戦に慣れてきたね」

「「「「「「ありがとうございます！」」」」」」

なのはの賛辞に、フォワードが礼を言う。

「ティアナさんの指揮も筋が通って来ていましたね」

「だね。指揮官訓練、受けてみる？」

「い、いやぁ、あの……戦闘訓練だけでいっぱいいっぱいです！」

なずなとなのはの申し出を、ティアナは遠慮して断る。

「アハハハ

隣で笑うスバルを、少し恨めしそうな顔でティアナは見ていた。

また、あの漫才みたいな折檻すんのかな？

……と、不意に焦げ臭い匂いが立ち込めてきた。

フリードもいち早く気づいたらしく、辺りを見回している。

「なんか……焦げ臭いような……？」

エリオも感じたらしい。

「…あぁ！スバル、アンタのローラー！」

「へ？」

ティアナに言われ、スバルが足元を見る。
そこには、ショートしたように煙と紫電を撒き散らすスバルのローラーがあった。

「うわっ、やばあ！」

スバルが慌ててローラーを見る。

「あっちゃあ～……無茶させちゃったぁ～…」

スバルがローラーを脱ぎ、抱え込む。

改めてみると、今回故障した部分以外……それこそデバイスの基礎フレームに至るまでが消耗していた。

それが傍から見てわかるってことは、それだけボロボロだったってことだ。

手入れはしていたんだろうけど、そもそもの強度自体がスバルの成長に耐え切れていなかったらしい。

「オーバーヒートでしょうか？」

「かなぁ？コータ君、直せない？」

なずなが仮説を立て、なのはがオレに尋ねてくる。

でも、これは……

「不可能じゃないけど……。これなら作り直した方が早いな」

「うぅ～…」

オレの言葉に、思わず落ち込むスバル。

「とりあえず、後でメンテスタッフに見てもらおう。ティアナのアンカーガンも結構キビしい？」

「あ…はい。騙し騙しです…」

ティアナも消沈した様子で話す。

「それに、ギンガさんとティーダさんも、だんだん辛くなってきてるのでは？」

なずなが言うと、二人も苦笑いで応える。

「なのは。フォワードのみんなも訓練に馴れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスを渡してもいいんじゃないか？」

「「「「「新デバイス？」」」」」

訓練を終え、ひとまずシャワーに向かおうとすると、一台の車が来る。

「あの車って…」

ティアナが不思議そうに言う。

いままでこの機動六課で、あの車をが動くところを見ることが無かったから、ある意味当然だろう。

そして、天井部が展開され、中から現れたのは…

「フェイトさん！はやてさん！」

キャロが嬉しそうに言う。

馬が合うのか、キャロとフェイトは仲良しだ。また、はやては堅苦しい呼び方が嫌いだからと、なるべく名前で呼ばせている。

「すっご～い！これ、フェイト隊長の車だったんですか！？」

スバルが驚いたように言う。

「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「みんな。演習のほうはどないや～？」

はやてがフォワード達に尋ねる。

「なんとか……ですかね」

「みんなで頑張っています！」

ティーダとエリオが代表して答える。

「エリオ、キャロ。ゴメンね。私は二人の隊長なのに、二人を見てあげられなくって」

「あぁ……はい」

「大丈夫です！」

フェイトが申し訳なさそうに言った言葉を、エリオとキャロは笑顔で答えた。

「だいぶいい感じ。もう六人とも、いつ出動があっても大丈夫！」

なのはも太鼓判を押した。

「そうか～。それは頼もしいなぁ」

はやても、安心した表情を浮かべた。

「フェイトとはやては、どこかに出掛けるのか？」

「うん。ちょっと6番ポートまで」

「私は聖王教会でカリムと会談や。コータ君も来るか？」

「慎んで遠慮致します」

カリムさんはなぁ……。いい人なんだけど、どうも苦手だ。

「そうだよはやて。カリムさんのとこにコータを置いたら、コータが弄ばれちゃう」

「それは赦せませんね」

フェイトが少し怒ったような表情を浮かべ、なずなもそれに従う。

……確かに、何回も押し倒されて、そのたびに最後までいっちゃうけどさぁ。

そんなに信用ないかな？

「それもそうやな～」

はやても納得してしまう。

「そうそう、私はお昼までだから、お昼はみんなで食べようか？」

「「「「「「はいっ！」」」」」」

フェイトが聞くと、フォワードは元気に答えた。

「ほんならな～」

はやてが言うと、フェイトが車を走らせ、二人は去っていった。

Ｓｉｄｅ　三人称

シャワーを早々に終え、外で待つ男が二人。あと一匹。

エリオとティーダ、それにフリードである。

「にしても女性のシャワーはどうしてあんなに長いんですかね？」

「さぁな？」

「キュクー」

男である彼等はシャワーに時間などかけないので、必然的に待つ立場になる。

「そう言えばティーダさんのデバイスって局の支給品じゃないですよね？どうしたんですか？」

「自分で組んだんだよ。まぁ、おざなりだけどな」

ティーダが自身のデバイスを取り出す。

アンカーガンのようにアンカーは付いていない分、デバイスの強度を重点的に作り上げたため、故障には至っていない。

だが、最近は調整ではどうにもならない部分が増えていた。

「そういや、エリオのストラーダは？」

「これはお父さ……じゃなかった、吼太さんに貰ったやつなんです。まだかなり封印しているシステムがあるらしいですが。あと、キャロのケリュケイオンも吼太さんからの貰い物だったはずです」

「そっか。……にしても長いな」

「みんな……まだかなぁ…？」

「キュクー…」

それからフォワード女性四人があがってきたのは、３０分後だった。

「ふぁぁぁ～…これが……」

「私たちの、新デバイス…ですか？」

スバル、ティアナ、ギンガ、ティーダが目の前に浮遊しているものを見て言う。

スバルのギンガの前にあるものは結晶に紐がついたペンダント。

ティアナのはカード、ティーダのはキーホルダーだ。

その質問に答えたのは、彼女達の後ろに立っていたシャーリーだ。

「そうでーす♪設計主任私。協力、吼太さん、なのはさん、なずなさん、フェイトさん、フォーティトゥードさん、レイジングハートさん、ルシフェリオンさん、バルディッシュさん、リームさんにリインフォース姉妹！」

「す、すごいメンバーですね」

「俺達に扱えるのか…？」

ギンガとティーダが苦笑いしながら言う。

「ストラーダとケリュケイオンは変化無しかな…？」

「うん…。そうなのかな？」

エリオとキャロが残念そうに言う。

「違いまーす！」

ふと、エリオの頭に誰かが降りる。

とはいえ、人の頭に乗れるような存在などまずいない。

そう、リインフォース・ツヴァイのような融合騎でない限りは。

「変化無しは外見だけだよ。中身はかなりパワーアップしてるんだから！」

さらに、部屋に誰かが入ってきた。

「リインさん！それに、リームさん！」

キャロが嬉しそうに二人の名前を言う。

「はいですぅ♪」「うん♪」

リームが二人に近づく。

「二人はちゃんとしたデバイスの経験が無かったですから、感触に馴れてもらうために基礎フレームと必要最低限の機能だけにして渡してたです」

「あ、あれで最低限！？」

「本当に…？」

エリオとキャロが驚きながら言う。

一般の支給品デバイスと比べて考えれば、そう思うのも仕方ないだろう。

「だからこれからはさらにすごいからね。さて……。」

リームが六人からよく見える位置に移動する。

「今渡した六機は六課の前線メンバーとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて造った最新型。部隊の目的、それとスバル、

ティアナ、ギンガ、ティーダ、エリオ、キャロ。みんなに合わせて造られた、文句なしの機体ばかりだよ」

そう言うと、リームからアイコンタクトを受けたリインが、デバイス達を自身の周りに滞空させる。

「この子達はまだ生まれたばっかり。だけどいろんな人達が願いを篭めて、時間をたくさんかけて造られたんだ」

リームとリインが、デバイスを各々に渡す。

「ただの道具や武器って思わないで大切に、だけど性能限界ギリギリまで使ってあげて」

「この子達も、それを望んでいるはずです」

リームとリインが、そう締め括った。

すると、また中に誰かが入ってきた。

「悪いな、待たせて」

「コータ！」「とーさま！」

そう、みんなのフラグ王こと吼太である。

「……何か失礼なことを言われた気がする」

「何の話ですか？」

吼太の頭の上でくつろぐリインが吼太に問い掛ける。

「いや……いい。大丈夫だ」

「にしてもナイスタイミングですよ。今から機能説明をしようかと思っていたんです。ついでに吼太さんのコスプレ写真上映会も」

「シャーリー、そんなにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたいのか？」

「いやですね～。冗談ですよ。さて…」

シャーリーがウインドウを開き、六機の写真を表示する。

「その子達はみんな、何段階かのリミッターがかけられているの。一番最初の段階だと、そんなにビックリするようなパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、お前らが今の出力を扱いきれるようになったら、オレやなのは、フェイトやリイン、アリサにすずか、あとシャーリーみたいな、お前らの上司が解除していくぞ」

「つまり、デバイスのみんなもフォワードのみんなに合わせて成長していくってことだね」

シャーリーと、吼太とリームが説明をする。

「出力リミッターというと、コータさん達にもかかってますよね？」

ティアナが、思い当たったことを聞く。

「まぁ、オレらはデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどな。能力制限って言うんだけど、オレなんて魔力をかなり封印してるから、魔力値はEプラス…」

「「「イ、Eプラス！？」」」

ティアナ、ギンガ、ティーダが驚いたように言う。

「た、確か吼太さんって本来の魔導師ランクはEXプラスオーバーでしたよね？」

ギンガが信じられないように聞いてくる。

「まぁな。こうでもしないと、上の連中が煩くてさ。とはいえ、今のままじゃクロスオーバーフォームの鎧も張りぼて同然だよ」

「「「……？」」」

話にイマイチついていけてないちびっ子二人＋α（スバル）。

「ほら、部隊ごとに保有出来る魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？」

「あ、あはは……そうですよね…」

スバルが苦笑いで答える。

エリオやキャロも同じように苦笑いを浮かべていた。

「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は、そこに上手く収まるよう、魔力出力リミッターをかけるのよ。まぁ、裏技っちゃ裏技なんだけどね」

シャーリーが引き続き説明する。

「機動六課だと、なのはちゃんやフェイトちゃん辺りはみんな5ランクダウン。はやてちゃんと羽旺ちゃんは6ランクダウンだよ。アリサちゃんとすずかちゃんはリンカーコアが無いからデバイスだけに制限がかかってるけど、その分システムに大きく制限を掛けてる。僕の場合は6ランクダウンだね」

リームが例をあげながら説明する。

「あの……吼太さんは？」

ティーダが控えめに聞く。

「コータは約11ランクダウン扱いで、結果的にはEプラスまで下げてるよ。まぁ、コータは規格外だから実際は11ランク以上下げてるかもしれないけどね。まぁ、同じく規格外なデバイスのトゥードだから出来てることだよ」

『マスターのご協力もありますし、たいした苦労ではありません。私単体ではさすがに難しいかもしれませんが』

「出来ない、って言わない辺り、さすがトゥードだなぁ…」

吼太が苦笑いしながら言う。

「皆さん、苦労してるんですね……」

ギンガが言う。

「まぁね。みんなも強くなってきたから、そろそろ今のままじゃ訓練に付き合ってやるのも厳しくなってくるな」

吼太が言う。

もちろん、吼太とて今のフォワード達に負けるつもりなど無い。

だが、チート能力と魔力のほとんどを封印されている以上、彼が出来るのは一般的な魔導師が出来ることぐらいしかない。

フォワードの成長率から考えると、もう少し本気を出さないと、教えられることも教えられなくなるというのが吼太の本音だった。

「隊長さん達は部隊長であるはやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか部隊の監査役のクロノ提督の許可が無いとリミッター解除出来ないですし…。とーさまにいたっては地上の最高責任者のレジアス中将と本局最高評議会の許可を頂かないと一定以上のリミッター解除が出来ないことになってるですよ～…」

リインが不満さを隠さずに言う。

『ティア、レジアス中将に最高評議会って……』

『さすがにアンタでもわかったでしょ。地上と海のトップ。時空管理局の最高権力者よ』

スバルとティアナが念話で会話する。だが、マルチタスクを使って会話しているので、ちゃんと話を聞く体勢は出来ていたりする。

「加えて、リミッター解除の許可は滅多に出せないそうなんです…」

「そうだったんですか…」

リインの言葉に、エリオが気の毒そうに答える。

「ま、隊長達の話は心の片隅にでも置いといてくれ。今は、お前らのデバイスの話だろ？」

「あ、はい…すいません……」

発端であるティアナが申し訳なさそうに謝る。

その様子を見たシャーリーが、空気を変えるためにまた説明を始める。

「新型もみんなの訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感は無いと思うんだけどね」

「午後の訓練の時に使って、微調整しとこうか？」

吼太がシャーリーに聞く。

「遠隔調整も出来ますから、手間はほとんどかからないと思いますよ」

「便利だね～、最近は」

リームが呆れたように言う。

記憶が無いとはいえ、かなり昔から存在しているリームが言うと、奇妙な説得力があった。

「便利です♪」

リインは少し楽しそうに言った。

「スバルとギンガのは、リボルバーナックルとのシンクロも、上手く出来てるからね」

「「本当ですか！？」」

シャーリーの言葉に、嬉しそうに聞くスバルとギンガ。

「うん。持ち運びが楽になるように、収納機能に瞬間装着の機能もつけといた♪」

「ありがとうございます！」

「アハハ～♪すっごい嬉しいです！」

ギンガがお礼を言い、スバルが感情を隠す事なく伝える。

その時だった。

辺りのモニター全てが赤く染まり、ある一文を示す。

「これって…！」

スバルが、緊迫した様子で言う。

示されていた文。それは……

【ＡＬＥＲＴ】

「さて……来たか。事件が！」

吼太も緊迫した様子で言う。

とうとう来たのだ。

機動六課、初出動の時が…。

## 第百十二話　新デバイス、そして…（後書き）

なっぺ「後書き座談会なのでありますっ！」

吼太「言い訳はあるか？遅れたことに関する…」

なっぺ「ちょ！待てぃ！今回はちゃんとあるから！」

吼太「一応聞いてやる」

なっぺ「時事ネタを予約投稿してたんだよ～。バレンタインデーのお話。多分同時刻に更新されてるはず」

吼太「……それなら仕方ないか」

なっぺ「まぁ、モンハン擬人化に時間かけまくってたからってのもあるんだけどね！」

吼太「ザケルゥ！」

なっぺ「あぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

吼太「さようならなっぺ」

なっぺ「まだだ！まだ終わらんよ！感想感謝コーナー！」

吼太「しぶとい奴め。天照大神さん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、雨季さん、仮面ライダーディケイドさん、海人さん、ユウキさん、緋水さん、ＶＡＺＵさん、ベルワンさん、七つ夜＆夜

つ七さん、てっちゃんさん、ＡＩＲＳさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ＳＲＸさん、ヴェルク・ネオさん、マイペースさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「香崎真琴さんからはジェイル渾身のデバイス、『オール』を、仮面ライダーディケイドさんからは吼太にトリプルなのはブレイカーの秘伝書、創造したものが出てくる程度の能力全デバイス、後書き中だけ女装を必ず拒否できる程度の能力を、緋水さんからは吼太と詩音にスク水を、てっちゃんさんからは淡い赤みがかったセーラー服、赤のチェックのミニスカート（膝上１５？）、白のハイソックス、茶色い革靴、黒い革の鞄、縁なしの眼鏡をいただきました！ありがとうございます！」

ゆう「うわぁ～」

なっぺ「あ、ショタになった優がやって来た」

ゆう「ショタいうな！」

シャマル「あらあらまぁまぁ♪可愛い娘がいるわね♪」

ゆう「ひっ！？」

吼太「空想の太陽が落ちてきたぞー」

※空想の太陽：空想の月の太陽版らしいです

シャマル「どかーん☆」

ドカーン

吼太「爆発したな、空想の太陽」

なっぺ「何があったし」

シャマル「シャマル１０８の秘技の一つ、シャマルブレイクよ♪さぁ、こっちでお着替えしましょうね～」

ゆう「たすけてー！」

なっぺ「だが断る」

吼太「今のうちに逃げ…っていつの間に委員長ルックに！？／／／／」↑てっちゃんさんからの贈り物フル装備

なっぺ「お前は向こうな～。麟のところに転送！」

吼太「うわぁぁぁぁ…」

詩音「似合う～？」↑若干小さめなスク水

なっぺ「似合う似合う。向こうに優がいるから見てもらえ」

詩音「わかった！優お兄ちゃ～ん！」

なっぺ「さて、向こうは優に任せよう」

ベス「ひどい方ですね。あなた」

なっぺ「彼等は犠牲となったのだ……ネタのために」

ベス「可哀相に」

なっぺ「後貰ったデバイスのオールだけど、内容が…」

セットアップすると、使用者（マスター）がイメージしたカタチになる。その再現率が１００パーセントオーバー。つまりは、家電、ゲーム、日用品、武器、服……果ては使用者（マスター）の妄想した武器、つまり厨二武器（バリアジャケット）にまでなれる

なっぺ「らしいんだ。だから、最初はラバーズにやろうかと考えてたんだけど、よく考えたら適任がいるじゃないか」

ベス「適任？」

なっぺ「こいつ」

トゥード「呼びましたか？」

ベス「貴方はトゥードさんをどこまで強化したいんですか？」

なっぺ「どこまでも」

トゥード「オール、よろさくお願いいたします」

オール『こちらこそ』

なっぺ「トゥードの設定的に、この方が便利なんだよ」

ベス「もう、トゥードさんに勝てる存在が思いつきません」

なっぺ「吼太ならいけ……ないか。トゥード女性だし」

ベス「主人公を超えたデバイス」

なっぺ「やっちゃったんだＺＥ☆ではではこの辺で！」

## 第百十三話　最初のセットアップ、久しぶりの変身（前書き）

まさか変身し終わるまでで一話作る羽目になるとは思わなかった……。

前回やってるので、今回は後書き無しです。

# 第百十三話　最初のセットアップ、久しぶりの変身

Ｓｉｄｅ　三人称

「このアラートって！」

「一級警戒態勢…！」

スバルとギンガが言う。

「グリフィス！」

吼太が言うと、モニターの一つにグリフィスが映し出される。

『はい！教会本部から出動要請です！』

『吼太隊長、なのは隊長、フェイト隊長、アリサ隊長、すずか隊長、グリフィス君！こちらはやて！』

「状況を教えてくれ！」

吼太が緊迫した雰囲気を発しながら聞く。

『教会騎士団の調査部で追っていた、レリックらしきものが見つかった。場所は山岳丘陵地区。対象は、山岳リニアレールで移動中！』

「移動中ってまさか！」

何か気づいたのか、リームが声をあげる。

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる！リニアレール内のガジェットは、最低でも３０体。大型や飛行型の、未確認タイプも出てるかもしれへん』

そこまで言うと、はやては一区切り置き、改めて言う。

『いきなりハードな初出動や。コータ君、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん。行けるか？』

「『『『『当然！』』』』」

吼太以外のメンバーも通信を介して、応える。

『スバル、ティアナ、ギンガ、ティーダ、エリオ、キャロ。みんなも大丈夫か？』

「「「「「「「「はい！」」」」」」」」

フォワードメンバーも気合十分な様子で答えた。

『よし！いいお返事や。シフトはＡ－３。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制！』

「『はい！』」

リインとグリフィスもまた、気の入った答え方だ。

『コータ君達隊長陣は現場指揮！』

「『『『了解！』』』」

吼太達もまた、自身の役割を認識した。

『ほんなら……』

はやてが立ち上がり、右手を翳す。

『機動六課フォワード部隊、出動！！！』

Ｓｉｄｅ　吼太

「「「コータ（君）」」」

ヘリに乗り込む辺りで、なのは、アリサ、すずかと合流する。

「遅いよ～！早く早く！」

見れば、プリム、ミカ、ライラ、アリス、アリシアはすでにヘリに乗り込んでいた。

オレ達も素早く乗り込み、ヘリが離陸する。

「ぶっつけ本番になっちまったが、まぁ練習通りやれば大丈夫だ。いざとなったらオレらがフォローしてやる。お前らは全力で行け！」

「「「「「「はいっ！」」」」」」

フォワード達もいい返事を返してくれた。

これなら大丈夫そうかな？

「コータ、正直出すぎじゃない？何人かは六課に残ったほうがよかったんじゃ？」

アリサが聞いてきた。

まぁ、そう思うのも当然か。

実質、まだまだひよっこなのはスバル、ティアナ、ギンガ、ティーダ、エリオ、キャロの六人。

フラウリーナ三姉妹やアリシア、アリスはなのは達隊長陣と同等前後の実力がある。

六人に一人ずつ実力者をつけて、なお余る布陣だからな。

「いざっていうときのためさ。最悪、リニアレールそのものを破壊する必要があるかもしれない。そのとき、ティーダ以外のフォワードはみんな飛べないだろ？オレが全力を出せるならともかく、実力の１％も発揮出来ない今の状況じゃ、やり過ぎなぐらいにしたほうがいいさ」

「何より、今回は初出動。念には念を、ってことだよ。アリサちゃん」

「…はいはい。了解」

アリサが少し不機嫌そうに言う。

自分の意見を完全否定されたから、少し拗ねてるらしい。

「はいはい。みんな～。ちゃんと集中を…」

なのはが窘めようとしたとき、グリフィスから通信が入った。

内容は、飛行ガジェットを確認したとの通知だ。

「ヴァイス君！私とフェイトちゃん、アリサちゃんとすずかちゃんで空を抑える！」

「なのはさん、アリサさん、すずかさん、お願いします！」

『メインハッチ、オープン』

ヘリに搭載されているデバイス、ストームレイダーが発声すると、ヘリの後ろのハッチが開いた。

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

「アンタ達もしっかりやんなさいよ！」

「頑張って。みんなら出来るよ」

なのは、アリサ、すずかがフォワード達に激励の言葉をかけて、出ていった。

「ダンナは行かないんですか？」

ヴァイスがオレに聞いてきた。

「現場に隊長がいたほうがいいだろ。このヘリはクロスオーバーとルナーズに守らせる。だからガジェットの接近は無視して、リニアレールに付けといてくれ。いざというときのために」

「了解！」

ヴァイスはそう言うと、操縦に集中し始めた。

「さて、みんな。任務は二つ。まず、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること」

「ですから、スターズ分隊にギンガ、ライトニング分隊にティーダを混ぜたチームで、車両前後からガジェットを破壊しながら中央に向かうですよ」

リームとリインが作戦の説明をする。

「レリックはここ、７両目の重要貨物室」

リインが、サーチャーから送られて来る画像をウインドウに表示しながら言う。

「先に到達したほうがレリックを確保してね。焦らず気張らず、しっかりやっていこう」
「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」
リームがそう締めくくり、フォワード達も気を引き締めた。
「で！」
リインが言うと、リインが騎士甲冑姿になり…
「私も現場に下りて、管制を担当するです！」
と、かわいらしく笑顔を浮かべながら言った。
「リームはオレとユニゾンな」
「オッケー！」
ユニゾンしてないと、飛ぶのにも一苦労だからな。
そんなこんなで…。
「さぁてお前ら。隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到達だ。……準備はいいかぁ！！」
「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」
まず、ギンガとティーダが前に出る。
「バーニング０２、ギンガ・ナカジマ！」

「バーニング０３、ティーダ・ランスター！」

「「行きます！」」

二人が飛び出した。

ギンガがブリッツキャリバーを、そしてティーダはクロスファントムという、クロスミラージュの兄弟機を起動させ、バリアジャケットを纏う。

「スターズ０３、スバル・ナカジマ！」

「スターズ０４、ティアナ・ランスター！」

「「行きます！」」

スバルとティアナも飛び出す。

スバルはマッハキャリバーを、ティアナはクロスミラージュを起動させ、バリアジャケットを纏った。

「次、ライトニング！チビ共、気ぃつけてな！」

「「はい！」」

元気に返事を返したものの、やはりぎこちない。

オレはライトニングの二人に近づくと、二人の頭をぐりぐりと撫でた。

「わっ！？」

「ふぇ…？」

「……行ってこい。子供だから、とは今は言わない。自分の全力を尽くして、任務に当たってこい！」

オレが言うと、二人の表情が少しだけ柔らかくなった。

「行こう、キャロ」

「うん、エリオ君！」

二人は手を繋ぎ、ハッチに立った。

「ライトニング０３、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング０４、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュクー！」

「「行きます！」」

エリオはストラーダを、キャロはケリュケイオンを起動させ、バリアジャケットを纏った。

六人が、それぞれの位置で着地する。まぁ、ティーダは少しだけ自力で飛行してもらったが。

「あれ？あのジャケット……誰かのに似てない？」

ミカが、下のフォワード達を見て言う。

「ミカ、貴女にはちゃんと前に話したじゃありませんこと？人の話はしっかり聞きなさい！」

「アハハ、ごめんプリム」

「……あれは……隊長陣のジャケットにデザインと機能を似せてある…」

ライラが説明した。

スバル、ティアナのは、スターズ分隊隊長であるなのはのバリアジャケット、【アグレッサーモード】を元に設計された、【スターズスタイル】と呼ばれるバリアジャケット。これは、高出力かつ重装甲が特徴だ。

エリオ、キャロのは、ライトニング分隊隊長であるフェイトのバリアジャケット、【インパルスフォーム】を元に設計された、【ライトニングスタイル】と呼ばれるバリアジャケット。こちらは、軽量かつ高機動になっている。

ギンガとティーダのは、バーニング分隊隊長であるアリサのバリアジャケット、【シャインフォーム】を元に設計された、【バーニングスタイル】と呼ばれるバリアジャケット。こっちは、軽量かつ高出力が特徴的だ。

最も、バリアジャケットも各人に合わせて調整されており、スバル

のは出力方面に重点が置かれていたり、キャロのは防御重視で全身を覆うデザインにしたりされている。

だから、ぱっと見の印象は、だいぶ違うものに仕上がっている。

「さて、お前らはヘリの護衛だ。オレは、外からあいつらを見てる」

「行ってらっしゃい、ダーリン♪」

アリスの声を背中に受け、ハッチの上に立つ。

「クロスオーバー０１、吉谷吼太！」

「クロスオーバー０２、リーム！」

「「行く（ぜ）（よ）！！！」」

リームと共にヘリから飛び出すと、あいつらを呼び出す。

「グリモワール、出動！」

オレが呼ぶと、トゥードの格納領域から、五冊の本が現れ、無数のページの束になったかと思うと、五人の少女へと変わる。

「呼んだか？父上」

「……落ちてるのは気のせいか？」

「……転落死もあり」

「落ち！？落ちるのは嫌ァァァァァァァァァァァ！！」

「ナツハうるさい～」

そう、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、キサラの魔導書娘達だ。

「ナツハ、ユニゾンすれば怖くないから。ミナ、気のせいじゃない。本当だ。あとカンナ、オレは嫌だ。つーわけでみんな、行くぞ！」

「うん！」「「「「イエス、マイマスター！」」」」「イ、イエス、マイマスター…」

「フォーティトゥード・スピリット！」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』

首から掛けていたペンダント型インテリジェントデバイス、フォーティトゥード・スピリットを手にとる。

そして、キーワードを唱えた。

「変身ッ！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ！！』

「「「「「「ユニゾン・イン！」」」」」」

オレ、リーム、トゥードの三位一体。加えて、魔導書娘達まで重なった今のオレは、八位一体だ。

その力を全身に行き渡らせ、さらに自身の力を開放する。

全身に黒いスーツのようなバリアジャケットが付き、さらにそれを覆うように、赫い鎧が装備されていく。

これがオレの魔法行使形態（マギウス・スタイル）。

クロスオーバーフォームだ。

背中のマントで空気を掴み、脚のシールドで虚空に着地する。

「さぁ、見せてもらうぜ。お前らの初仕事」

近寄るガジェットをマントで破壊しながら、オレは眼下で走る、リニアレールを見つめていた。

## 第百十四話　溢れんばかりの触手（前書き）

シリアス？なにそれ美味しいの？

今回も予約投稿なので、後書き座談会はありません。

# 第百十四話　溢れんばかりの触手

Ｓｉｄｅ　ギンガ

「スバル！感激するのは後！」

ティアナさんが言ったのを聞いて、そのすぐ後に車両の天板が盛り上がる。

中から、ガジェットが攻撃を仕掛けているみたいだ。

そして、次の瞬間……

ガジェットが天板を突き破り、私たちの前に現れた。

が、すぐにティアナさんのヴァリアブルシュートで破壊され、天板に開いた穴からスバルが先行する。

……私も負けちゃいられない！

「ハァァァッ！」

気合を篭めた掛け声と共に、ブリッツキャリバーが装備された脚でガジェットに蹴りを加える。

魔力強化が打ち消されてダメージが軽減されるが、それでも十分な威力の乗った蹴りはガジェットを貫き、破壊した。

『ウイングロード』

さらに、蹴りの体勢から、ブリッツキャリバーが遠隔発生させてくれたウイングロードに乗り、別のガジェットを左腕のリボルバーナックルで破壊した。

その次の瞬間、スバルが暴発とも思えるようなリボルバーシュートの反動に吹っ飛ばされ、空中に飛び出した。

すぐに追い掛けようとしたけど、その前にスバルの新デバイス、マッハキャリバーがウイングロードを自動で使い、スバルを救ってくれた。

あまりの高性能さに、ポカンとした表情をしているスバルを見て、少し笑いが込み上げてくる。

「スバルに負けてられないわね。行きましょう、ブリッツキャリバー」

『了解』

Ｓｉｄｅ　ティーダ

今、俺は非常にピンチな状態になっている。

というのも……

「キャロはいい。フルバックだからな。だけどエリオ！お前はガードウイングだろ！センターガードの俺より後ろでどうするだよ！」

「嫌ですよそんなガジェットと戦うの！危ない気配がビンビンしてますし！」

そう、エリオがせっかくの初舞台で積極的に動こうとしないのは、ある理由があった。

原因は、目の前のガジェット達。

どういうわけだか、作業用のマニュピレーターがヌルヌルしてるのだ。

もう一度言おう。ヌルヌルしてるのだ。

一回、ガジェットのマニュピレーターをギリギリで避けたエリオが触れた際に発見したことなのだが、それ以降、エリオは近づこうとしない。

とはいえ、俺だってあんな触手に絡まれるのはいやだ。絶対に嫌だ。というより、俺みたいな十人並の容姿しかない男の触手プレイなんて、誰も見たくはないだろう。

……余程の趣味が無い限り。

※ティーダの容姿は、一般的にモテる部類です。

「ヴァリアブルシュート！」

ヴァリアブルシュートで目の前のガジェットを一機破壊した。

が、まだまだうようよいるな。

どうしようか…。

と、思っていたら、何かが列車の中を飛び回り、ガジェットを牽制しながら俺の後ろに行ったのが見えた。

あれは……？

Ｓｉｄｅ　エリオ

「あれは……もしかして！」

何かが現れた。

その現れたのは、ゼクターの一つ、ドレイクゼクター。

ドレイクゼクターは僕の周りを飛びながら、何かを待っているように見える。

その次の瞬間、お父さんが持っている、エクストリームメモリがこちらにとんできて、僕の手の中に何か銃のようなものと、一枚の手紙を置いていった。

そこには…

――ドレイクグリップだ。お前ならそれなりに使えるだろう。使いたい時はこうドレイクゼクターに言え。――

「変……身……？」

僕が呟くと、ドレイクゼクターは自分でドレイクグリップに収まり、さらに僕の体が光に包まれる。

「エリオ…君？」

となりにいたキャロが不思議そうに言う。

なんか、背が伸びた気分だ。

「これ……もしかして銃なのかな？」

ドレイクグリップを構えて、ガジェットを狙い、トリガーを引く。

すると、光弾が放たれ、ガジェットを貫いた。

それをみて、ガジェットがこちらを狙ってくる。

「くっ！何かないのか！」

ドレイクゼクターを弄っていると、後ろの尾部が引けることに気づく。

何となくそれを引っ張ってみる。が、何も起こらない。

「ならもう一度！」

ドレイクグリップを構え、ガジェットを撃とうとトリガーを弾く。

その瞬間、ドレイクグリップから放たれたのは弾ではなく声だった。

『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

声が発せられた瞬間、僕の身体から何かが大量に飛び出し、ガジェット達を一気に破壊した。

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｄｒａｇｏｎｆｒｙ』

そう、なんか静かかつ緊張した雰囲気を与える声がドレイクゼクターから放たれたが、すでにガジェットはいなくなっていた。

「おぉ、何をやったんだエリオ……エリオ？」

「はい？」

自分の姿を見せられ、驚くことになるのはもう少し後の話…。

Ｓｉｄｅ　吼太

「うぁぁぁ！？寄るなぁぁぁ！」

迫り来るガジェット達を本のページが大量に重なったような、五対十枚の翼――マギウスウイング――と、マントを使って弾きとばす。

来ているのは、？型と？型の二種類。まぁ、楕円形のやつと飛行型のガジェットだ。

なんだが、どうもおかしい。

最初にマントでガードした時に判明したんだが、？型はローションを大量に分泌している触手を出してくるだけ。？型に至っては、発射する弾丸がローションという素敵仕様。

しかも、何をどうしたらこう出来るのか知らないが、このローション自体からＡＭＦが発生している上、このローションを浴びると、繊維質を溶かしてしまうのだ。

詰まるところ、直撃すれば真っ裸＆ローションまみれ。

殺傷性は０だが、絶対に喰らいたくない攻撃である。

さらに言うなら、ローションという極小範囲にのみＡＭＦを展開し

ている影響か、並以上の魔力を注ぎ込んだラウンドシールドでも貫いてしまう謎の高性能を持っている。

これでローションの代わりに強酸性の液体でも付けていれば、魔導師はまるで歯がたたなくなるだろう。

……何故ローションにしたよ？

そんなわけで、オレはＡＭＦの対象外であるマントとマギウスウイングを使って、自分に近寄るガジェットだけを破壊している。

……心なしかだんだん増えてる気がするけど、気のせいだよな？

『仮にコータを狙ってる場合は、コータの素顔を知っている人になるね。でないとこんな嬉しい……じゃなかった。おいしいガジェットの使い方しないし』

リームの言うことは半分放っておこう。

さて、フォワードのやつらはどうなったかな？

ガジェットの攻撃（？）を防ぎながら、ウインドウを開いて状況を確認する。

……やっぱり、ケーブルの破壊は効果無し、か。原作通りだな。

ギガドリルの使用許可が出れば楽なんだけど、どうも今回はしぶっているらしく、なかなか出てこない。

……先に申請して、通っていたやつだけでなんとかするしかないか

な？

『とーさま！リインは列車のコンピューターにアクセスして、何とか停止させてみるです！』

いろいろと考えていたら、リインから通信が入った。

「分かった。ウイルスの可能性もあるから、危なくなったらすぐに離脱しろ。いいな？」

『了解です！』

「うわぁぁぁぁぁ！！？」

そんな声が不意に、ライトニングのフォワードとティーダ達がいる側から聞こえてきた。

「なんだ！？」

『サーチャーから受信した映像を映します』

トゥードがウインドウにサーチャーの映像を映し出す。

そこには……

何故か触手が異常にグロテスクになった、？型がいた。

……もう、ツッコミ我慢しなくていいよね？

「なんでガジェットがこんなに変態仕様なんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？」

結局、？型は自力で竜魂召喚したフリードに破壊されたらしい。

「あれが……チビ竜の本当の姿……。……なんか、動きの端々がヤクザみたいだけど…」

とはティアナの談、

で、リインが列車を止め、ティアナとキャロがレリックを確保して、めでたしめでたし……。

「とは行かせてくれないか？」

目の前に大量にガジェットが召喚された。

基本の？型、飛行型の？型はもちろん、？型もかなりの数が見受けられる。

列車は停止したが、フォワードは消耗しているし、なのは達が来るにはまだ時間がかかるらしい。

と、なると……

「オレがやるしか、ねぇかな？」

『で、あろうな』

『ま、たまには暴れようかな』

センも賛同し、面倒くさがりなキサラですらやる気になっている。

「なら行くぞ！」

『『『『『応！』』』』』

マギウスウイングを拡げ、空に踊り出る。

空の敵を破壊しながら、腰のディケイドライバーにカードを装填する。

「力、借りるぜ？ヒスイ！変身ッ！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【Ｈｉｓｕｉ】！』

カードを装填すると、両腕にゲイルアークが装備される。

異世界の友、ヒスイ・ハーツのものと同一のものだ。

『目標、射程内。行けるぞ父君！』

ナツハが計算結果を伝えてきた。

「なら行くぞ！荒鷹！」

ゲイルアークから多重弾核かつバリアブレイクの効果を持つ矢を放ち、？型のガジェットを複数貫く。

「まだまだ！華鴛鴦（はなおしどり）！」

前後に四発ずつ矢を放ち、ガジェットを次々に破壊していく。

「続けて行くぜ？」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｓｔｒｅａｍ　Ａｒｒｏｗ】！』

ゲイルアークから風で出来た矢を１０発放ち、？型を一気に破壊していく。

だが、数が多いせいで、効果が薄いようにも感じる。

「なら一気に決めるまでだ！」

『とーさま。ガジェットまた増えた』

「関係無いさ！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｈｉｓｕｉ　Ａｒｂａｌｅｓｔ】！』

カードを装填すると、右手のゲイルアークから発せられていた魔力翼が消え、その分を補うかのように左手の魔力翼が巨大化する。

さらに、左手のゲイルアークの魔力翼に弦が張られ、その様相はボウガンから巨大な弓へと変化した。

「一気に片付ける！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｈ、Ｈ、Ｈ、Ｈ、Ｈｉｓｕｉ】

！』

カードを装填し、弦を引き絞ると、巨大な弓と化したゲイルアークに見合う、巨大な矢が現れる。

「荒鷹・大牙！貫けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

限界まで引き絞ったゲイルアークから、矢を放つ。

矢は一筋の閃光になり、数十体以上ものガジェット達を一気に貫いていく。

だが、吼太が狙っていたのは、ガジェットだけではない。

周辺のガジェットが展開しているＡＭＦを荒鷹・大牙に【相乗掛合】《クロスオーバー》し、召喚用の魔法陣を破壊することにあったのだ。

『マスター、ライダーシステム第二段階の使用許可が来ました』

『召喚用魔法陣、破壊確認！後はコイツらだけだよコータ！』

トゥードとリームが嬉しい報告を届けてくれた。

なら、遠慮無しで行くぜ！

「ミナ！」

『応！』

ミナが流体――この場合は空気――を操作し、辺りのガジェットを吹っ飛ばす。

「赤き欲望の力、見せてやるよ」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＯＯＯ　ＴＡＪＡＤＯＲＵ　ＣＯＭＢＯ】！』

カードを装填した瞬間、オレの身体が紅い炎に包まれる。

そして、溢れ出るパワーは音となり、歌となる。

『タ～ジャ～ドル～～！』

仮面ライダーオーズ、タジャドルコンボ。

そして気をたぎらせると、背中からクジャクの羽を模したエネルギー弾が現れ、ガジェット達を破壊していく。

「これで！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｏ、Ｏ、Ｏ、ＯＯＯ】！』

オレの両足がまるで鳥の爪のように変形し、高熱の刃が生まれる。

プロミネンスドロップと呼ばれるその技で、？型を大量に破壊する。

「コイツで、終幕（フィナーレ）だ！」

ジッパーから円盤のような武器――タジャスピナー――を装備し、

そこの中のメダル装填部、オークラウンに同じくジッパーの中に入っていたコアメダルを装填していく。

そして、オースキャナーでタジャスピナーを回し、エネルギーを読み込ませる。

『タカ！トラ！バッタ！クジャク！コンドル！サイ！ゴリラ！』

七枚のメダルの力が重なり、高まっていく。

『ギガスキャン！！！』

その声が発せられた瞬間、辺りの重力が回転し、ガジェット達を一カ所に纏め、封じる。

さらに、オレの全身が紅い炎で包まれ、目の前に赤、黄、緑のエネルギーフィールドが壁となり、道を創る。

その道を、火の鳥となったオレが突っ込み、重力嵐に突撃する。

そして、様々なエネルギーが絡み合った、複合エネルギーを受けたガジェット達は、残す事なく破壊された。

Ｓｉｄｅ　？？？

くくく……ハハハハ！

興味深い！興味深いよ！！

機動六課とやらはもちろん。

何より気に入ったのが吉谷吼太。

君の全てが、僕は欲しい…！

あぁ、楽しみだなぁ！

フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！

## 第百十四話　溢れんばかりの触手（後書き）

アハハハハ！嫌な予感がした人！正解です。多分。

まぁ、後々をお楽しみに！

ではではこの辺で！

## 第百十五話　それぞれの訓練（前書き）

今回は個別訓練。ザッフィーも出るよ！

……シャマル？誰それ知らな（ｒｙ

いや、訓練に出せる人じゃないでしょ？

次回には出ますよ。……多分……

# 第百十五話　それぞれの訓練

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

「うおりゃぁぁぁぁぁぁ！！！」

アタシの愛機、グラーフアイゼンを振りかぶり、リミッター有りでの全力でたたき付ける。

だが、目の前の壁は硬く、魔力強化したグラーフアイゼンでも皹一つ入らない。

だが、いくら強固な盾があっても、支えきれなければあまり意味はない。

「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

プロテクションを使用していたやつは吹っ飛ばされ、後ろにあった木に打ち付けられる。

「あたたた～…」

そう言い、ゆっくり立ち上がってきたのはスターズのフォワードの一人。フロントアタッカーのスバル。

まぁここまで言えば分かると思うけど、アタシは今、スバルの訓練をしてやっている。

「やっぱバリアの強度は悪くねぇな」

「あ…ありがとうございます…！」

まぁ、ラケーテンなら砕けるだろうけど、一般的な魔導師の攻撃ならびくともしないだろ。

打ち合ってみて改めて思うけど、コイツやギンガはやはりフロントアタッカーとしての才能に恵まれてるな。

バリアの強度はもちろん、スバルやギンガが体得しているシューティングアーツ、完全近接向けデバイスのリボルバーナックル、空中対応のウイングロード。どれも、恐ろしいぐらいにコイツの戦闘の才能にあったお膳立てがされている。

こりゃあ、場合によっちゃSランクとガチでやり合えるな。

「アタシ達のポジション、フロントアタッカーは攻撃の要だ。敵陣に単身で乗り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高ければ高いほど、攻撃時間を長く取れるし、サポート陣にも頼らねーで済む。バックに頼り切りじゃフロントアタッカー失格も同然だからな？」

「はい！ヴィータさん！」

受け止めるバリア系、弾いて反らすシールド系、身に纏って攻撃を防ぐフィールド系。

この三つが防御の全て。

細かい差は結構あるけど、大まかにはこの三種に分けられる。

「ポンポン吹っ飛ばされねぇように下半身の踏ん張りと、マッハキャリバーの使いこなしを身につけろ」

「頑張ります！」

『学習します』

スバルとマッハキャリバーが言う。

「防御ごと潰すのは、アタシの専門分野だからな。グラーフアイゼンにぶったたかれたくなかったら……しっかり守れよ？」

「はい！」

んじゃ、もう一回いくか。

Ｓｉｄｅ　キャロ

私の今日の訓練は、忙しい仕事の合間を縫って、フェイトさんが教えてくれてます。

本当はエリオ君も一緒にやりたかったのかもしれなかったけど、おとーさんから特別な訓練があるらしくて、今回は残念ながら別行動。

「キャロはスバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず、最重要。例えば…」

そうフェイトさんが言うと、後ろで待機していたなずなさんが魔力弾を放つ。

だけど、フェイトさんはその魔力弾を軽く避ける。

「こんな風に。まずは動き回って狙わせない」

フェイトさんが障害物の隙間を縫うように動く。

たしかに、なずなさんも狙いづらそうにしている。

「攻撃が当たる位置に……」

フェイトさんが、とある位置で一度脚を止める。

その隙を逃さず、なずなさんが魔力弾を放った。

「長居しない！」

だけど、フェイトさんは持ち前の素早さで身を翻すように避けてしまう。

「……ね？」

「はいっ！」

やっぱりフェイトさんはすごいなぁ。

なずな副隊長でも、なかなか攻撃が当てられないみたい。

「これを低速で確実に出来るようになったら……スピードを上げていく」

フェイトさんが走り出す。

なずなさんの魔力弾がスピードを増して襲い掛かるけど、フェイトさんはその全てを避けてしまう。

だけどなずなさんも負けていない。

魔力弾の数をどんどん増やしている。

そして、魔力弾がフェイトさんを囲み、一斉に襲い掛かった。

衝撃で土煙が立ち上がる。

「こんな感じにね」

ふと、そんな声が後ろからした。

後ろを振り返ると、そこには腰に片手を当てたポーズで、困ったような笑みを浮かべたフェイトさんがいた。

「貴女もたいがい、目立ちたがりですね」

なずなさんがこちらに来ながら言う。

「アハハ……あまり、否定出来ないかな？」

見れば、フェイトさんの足元には刈れたような地面があった。

さっき魔力弾の集中砲火を受けた場所から続いているから、土が刈れるような勢いで一瞬の内にここに来たみたい。

「今のも、ゆっくりやれば誰でも出来る基礎アクションを、早回しでやってるだけなんだよ」

「は、はい！」

フェイトさんが私の前に周りながら、話す。

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って避けるのは危ないの。フルバックのキャロは、素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように。確実で、有効な回避アクションの基礎、しっかり覚えていこう？」

「はい！」「キュクー！」

私もフリードも、もっともっと、頑張らなきゃ！

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「うん。いいよティアナ！その調子！」

「は、はい！」

確かに自分でも悪くない状態だとは思うけど……

「し、質問いいですか！？」

目の前にまで迫っていた赤い剣型魔力弾を、予め出しておいた魔力弾で迎撃しながら言う。

「ん？何かな？」

「な、なんで私だけ５人も人がいるんですか！？」

雷を纏った魔力弾を、避雷針の役割を果たす魔力弾で誘導しながら、聞く。

そう、何故か私にはなのはさんの他に、フィニアさん、羽旺さん、リインフォースさん、プリムさんが私の教導に参加していた。

「別にティアナをいじめてるわけじゃないよ？様々な魔力弾を一度に制御するのは私も疲れるからね。それにこっちはこっちで訓練になるから、みんなにも手伝ってもらってるんだ♪」

うふふふと笑いながら、なのはさんが言う。

でも、あの目は違う！あれは……ライバルに対する目だ！

心当たりは……やっぱり、吼太さんしかいないなぁ。

つまり、この綺麗で強い人達を押し退けられなければ、吼太さんの妻の座は手に入らない！

頑張らないと……！！！

Ｓｉｄｅ　ティーダ

「飛行訓練ですか？」

「あぁ。飛行中の近接戦闘に対する対処法。近代ベルカが増えた今の時代、射撃型には無くてはならない技能だ」

そう言うのは、八神部隊長の使い魔（正確には守護獣らしい）のザフィーラさん。

「一応、首都航空隊のほうで基礎はならってますけど…」

「基礎は、な。だが、基礎だけでは何かと不便だろう。恐らく、対戦相手の獲物はポールスピア、あって剣だろう」

「まぁ、はい」

スバルやギンガみたいなグローブは確かにいなかったなぁ。

「故に」

「へっ？」

気づいた時には、ザフィーラさんは俺の鳩尾に拳を添えていた。

仮にバリアジャケットがあっても、この角度では確実にやられる。

「こういったクロスレンジでの応用力が低い。これからみっちり鍛えてやるからな」

「アハハハ……お手柔らかに…」

意外と厳しそうだなぁ……。

Ｓｉｄｅ　ギンガ

「ハァァァァッ！」

拳を突き出す。

が、その拳はたやすく避けられて、クロスカウンターをもらってしまう。

「甘い甘い。一撃で脳震盪までいくレベルでやらないと。相手だってバカじゃない。そうやすやすと拳を喰らっちゃうわけじゃないんだから」

「はいっ！」

ミカさんが講義してくれることを、一言一句逃さずに聞く。

ミカさんは私に教えることが今回の訓練内容らしい。

にしても、ミカさんの技術はすごい。魔力は無いって聞いたし、レアスキルは制限がかかっているみたいなのに……。

……いや、違う。

かかってないのにすごいんじゃない。かかってないからすごいんだ。

バリアジャケットって安全装置がない分、ミカさんは技術で攻撃をしのぐしかない。だから、こんなにも上の領域にいるんだ。

「まぁ、俺と違ってギンガはブリッツキャリバーがいるんだしさ。二人三脚で考えてみなよ？」

『善処します』

……ブリッツキャリバー、まだまだ態度が固いなぁ。

ミカさんの言う通り、ブリッツキャリバーと二人三脚で頑張っていこう。

Ｓｉｄｅ　エリオ

「エリオ、ゼクターはどれだけ呼べるようになった？」

「ザビーとドレイクです」

「……よし。とりあえず一番を目指そう」

「……へ？」

吼太さんの訓練は、愉快なような、効果があるようなで掴み所が無い。

だからけっこう困惑するんだけど……今回は一番？というか何の？

「お前はサソードゼクターには認めてもらいたい。だからなんだけど……まぁ、正直な話、一番になったかはあまり関係無い。多分」

「多分なんですか？」

「まぁ、多分だ。要は、【気高い誇りを忘れない】ことが条件なんじゃないかと思ってる」

「はぁ……」

「とはいえ、あれやれこれやれって言えるわけじゃないからな。とりあえずは今あるゼクターを使いこなすことを考えろ」

「はい！」

ザビーとドレイクが僕の周りを飛び回る。

確かに、ゼクターを増やすことは重要だけど、今あるゼクターを使いこなすことも重要だ。

ザビーを腕のザビーブレスに取り付け、仮面ライダーザビーに変身しながら考える。

その間に吼太さんはクロスオーバーフォームになっていた。

「さて、始めるか」

「はい！」

もっと、強くなるんだ！泣いている誰かを守るために！

Ｓｉｄｅ　アリス

「「命中率？」」

私とリインが同時に聞く。

「うん。命中率。鍛えておいて損は無いからね。アリスは力任せになることが少し多いし、リインも鍛えればまだまだ伸びる。と、言うことでライラに手伝ってもらって、特製の射撃訓練マシンを作りました！」

アリシアが得意げに言う。

「……ぶい……」

ライラがブイサインを作りながら、見せてきたのは、屋台みたいな射的。

……これのどこがマシン？

「じゃあ、試しに私がやってみるですよ」

リインが指定の位置まで飛んで、そこで氷の短剣を作る。

「フリジットダガー！」

フリジットダガーが真っすぐ飛び、的の中心に当たる……

前に、フリジットダガーは不可解な軌道を描いて、的から離れた場所に着弾した。

「……おや？」

アリシアも予想外だったらしく、不思議そうな顔をする。

「ど、どーなってるですか！？」

「……ただの射的じゃ詰まらないから…途中の空間を歪ませてみた……。しっかり軌道を考えないと……中心には当たらない……よ…？」

ライラが「私、やりましたぜ！」みたいな感じで言ってくる。

「一筋縄じゃいかないってことだね…上等！」

これくらいじゃなきゃ満足出来ない、ってね！

Ｓｉｄｅ　はやて

「カリム、それ本当か？」

「えぇ、間違いないわ。確かにこの世界、この町に反応がある」

目の前のウィンドウに映る映像。

そこには、懐かしい光景が浮かんでいた。

「第９７管理外世界、地球。そこの海鳴、か……」

どーやら、ちょっと早い里帰りになりそうやな。

## 第百十五話　それぞれの訓練（後書き）

なっぺ「後書き座談会だなんて……おかしいですよカテ〇ナさん！」

吼太「ならやるな」

後書き座談会、完！

なっぺ「残像だ…」

吼太「お前……大丈夫か？（頭的な意味で）」

なっぺ「大丈夫だ、問題無い」

吼太「ダメだこりゃ」

なっぺ「さて、今回は訓練だけで一話消化しちゃったわけだけど」

吼太「人数をバカバカ増やすからだ」

なっぺ「増えちゃったんだから仕方ない。感想感謝コーナー！」

吼太「バルディッシュさん、緋水さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、ヴェルク・ネオさん、香崎　真琴さん、てっちゃんさん、雨季さん、朱神優希さん、ベルワンさん、天照大神さん、七つ夜＆夜つ七さん、ＡＩＲＳさん、ユウキさん、ＳＲＸさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはモバイレーツ×５、レンジャーキー（ゴーカイジャー、ゴレンジャー、シンケンジャー、マジレンジャー）、ゴーカイサーベル×５、ゴーカイガン×５、ＦＲカード《ＯＯＯ　タジャドルコンボ》、ＦＲカード《ＯＯＯ　タカトラドル》、ＦＲカード《ＯＯＯ　タカジャバ》、ＦＲカード《ＯＯＯ　タカゴリバ》、ＫＲカード《バース》、ＡＲカード《バース　ショベルアーム》、ＡＲカード《バース　クレーンアーム》、ＡＲカード《バース　ドリルアーム》、ＡＲカード《バース　キャタピラレッグ》、ＡＲカード《バース　ブレストキャノン》、ＦＡＲカード《バース》を、緋水さんからは吼太と詩音にスク水とネコ耳にメイド服を、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさんからは【楽しい！　やって覚える指導書地獄がむしろ天国編】を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「タジャドルのカードは、次の話で早速使用してたな」

なっぺ「予約投稿だから完全な偶然だったんだけど、やっぱし驚いたよ。さて吼太ネコミミスク水とネコミミメイド、どっちがいい？」

吼太「両方断る」

タダシ「全部着せればいいんじゃないかな？」

吼太「誰っ！？」

なっぺ「よっしゃあ！やぁぁぁってやるぜ！」

吼太「アッ、おま……止め……」

なっぺ「完成！ネコミミ＋スク水＋メイドエプロン！」

吼太「うぅ……／／／／／」

なっぺ「さらにカモンガジェット！」

吼太「ふぁっ！？や、止め……あ、そんなとこ……ひゃうぅ……／／／／／」

なっぺ「※ただ撫でられてるだけです」

吼太「ん……あっ……んぁ……あん……」

なっぺ「※別にやましいシーンじゃないですってば」

ベス「説得力０ですね」

なっぺ「だって吼太だし」

詩音「ひぇ～、くすぐった～い♪ひんやりする～♪」

なっぺ「むしろ喜んで絡み付かれてるよ詩音」

ベス「是非優さんに見せたいですね。ところで次回は？」

なっぺ「サウンドステージの話になるはず。意外な登場人物もいるかも！？」

ベス「誰ですか？」

なっぺ「さぁね？ではではこの辺で！」

# 第百十六話　ちょっとした里帰り気分だな（前書き）

最近思ったこと

異世界にて子供を一人作り、

異世界で男女一人ずつをオトし、

形はどうあれ吼太のコスプレに嵌まる人がなんか結構いる。

あと数人オトしたらフラグ神でもいいんじゃないかな？って。

それはとっても幸せなことなんじゃないかな？って。

吼太「んなわけあるか！」

とにかく、始まりますよー。

# 第百十六話　ちょっとした里帰り気分だな

Ｓｉｄｅ　なのは

「海鳴？本当に海鳴にロストロギアが？」

「そや。なんか突然現れたらしいで」

はやてちゃんが答えた。

「となると……向こうに泊まりがけかなぁ？」

「あまり時間を取れるわけじゃないけど、かといってロストロギアを放ってはおけないしね」

フェイトちゃんも納得した様子で言う。

「ほんなら、そういう感じで進めていくから、なのはちゃんはフォワードのみんなへの説明、お願いな」

「うん」

「私も、本局の方に連絡してくるよ」

フェイトちゃんが言う。フェイトちゃんは執務官だから、一時的とはいえ管理外世界に行くにはやっぱり連絡が必要みたい。

はやてちゃんははやてちゃんで地上本部や聖王教会なんかに連絡が必要だろうし、フォワードへの説明は私が適任だよね。

「……で、なんだけど…」

「……♪」

視界の隅にいたのは、【ふぃにあ】と書かれたスクール水着を着て、浮輪やシュノーケルにゴーグルなどをつけた、フィニアちゃん。

「フィニアちゃん。海には行かないよ？」

「な、なん……だと……！？嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

……そんなに海に行きたかったんだ。

なんか、フィニアちゃんは小さい頃から変わらないなぁ。

「派遣任務……ですか？」

「しかも…異世界に？」

スバルとティアナが聞いてくる。まぁ、当然だよね。

「うん、決定事項。しかも、緊急出動が無ければ2時間後には出発の予定だから…スバル、ティアナ。今の作業片付けたら、出動準備しておいてね」

「「はいっ！」」

そう言うと、二人は机の上に展開していたウィンドウに向き直る。

データの整理をしていたみたいで、マッハキャリバーやクロスミラージュも手伝っていたみたい。

処理能力かなり上げてあるから、デバイスに頼り切りになったらどうしようかな～なんて思ってたけど、大丈夫みたいだね。

じゃ、私も用意してこようかな。

Ｓｉｄｅ　キャロ

「レリックかガジェットの出現なんでしょうか…？」

「まだ分からないけど、ロストロギア関連ではあるみたいだね」

フェイトさんがウィンドウの情報を見ながら言う。

「はい……」

エリオくんも、少し心配みたい。

私だって、初めての出張任務だし、緊張してる。

「まぁ、前線メンバー全員出動だし、いつもの任務と変わらないよ。
エリオもキャロも、平常心でね？」

「「はい！」」

見兼ねたフェイトさんの気遣いの言葉に、せめて元気に答える。

うん、頑張ろう！

「じゃ、準備して、屋上ヘリポートに集合ね」

「「はい！フェイトさん！」」

……何を持って行けばいいのかな？下着とか必要かな？

Ｓｉｄｅ　吼太

「むぅ……」

左側にアリサ、右側にはすずかが引っ付いている。

それをフェイトとなずなが羨ましそうに見つめてくる。

……まさかヘリの中でこんな苦痛を味わう羽目になるとは…。

ミッドに残ってるザフィーラが羨ましい……。

「あ～！アリサちゃんとすずかちゃんずるい～！」

「いいじゃない。私たち最近ご無沙汰だったんだから」

「ガランホルンとエッケザックスのバージョンアップで忙しかったもんね」

エッケザックスとガランホルンは魔溜石を使った魔力運用をしているため、ＡＭＦに対して効率的な魔力運用が出来てなかった。

それの改善をするために六課のメカニック達と頭を悩ませていたらしい。

「確かに、それは分かる。けど引っ付かなくても……」

「コータ君分の補給だよ～。あぁ～……気持ちいい」

すずかがオレの肩に顔を埋める。そんなに気持ちいいのかな？

「にしてもアンタってなんで日だまりの香りがするの？飽きなくていいんだけど」

アリサがオレの頭に顔を埋めながら聞いてくる。

「と、言われても……。日によく当たってるからか？」

「アリサ、後で代わってください」

「すずか、もうそろそろ私も……」

「「まぁだ、ダメ♪」」

……疲れるなぁ。

「はい、リインちゃんのお洋服♪」

「わぁ！シャマルありがとです～！」

シャマルがリインにはやてのお下がりの服を渡していた。

……まぁ、リインがちびだから、端から見れば奇妙に思えるだろうけど。

そう思ったらしいエリオとキャロがリインにそのことを質問していた。

「あ、フォワードのみんなには見せたことなかったですね」

「「「「「「？」」」」」」

リインが魔法陣を広げる。

「システムスイッチ。アウトフレームフルサイズ」

リインを魔法陣が包み、そして中からリインが現れる。

「と、まぁこれぐらいのサイズにもなれるですよ♪」

さっきとの違いは、その大きさ。

妖精サイズから、一気に人間の子供サイズまで巨大化したのだ。

「でかっ！？」

「いや、それでも小さいだろ」

「普通の女の子のサイズね」

ティアナが驚き、ティーダがツッコミ、ギンガが冷静に判断する。

「向こうの世界にはリインサイズの人間も、宙を浮く人間もいないからな」

リインフォースがリインの頭を撫でながら言う。

「あの……一応ミッドにもいないとは思います……」

ティーダが苦笑いしながら言うが、リインフォースは「ミッドならまだマシなんだ」と言って返す。

「ふむ……だいたい、エリオやキャロと同じぐらいですかね？」

リインがエリオとキャロの前に立ちながら言う。

まぁ、確かに見た目はそうだな。

「はい」

「かわいいです。リイン曹長」

エリオとキャロもまんざらではないらしく、リインを笑顔で見ていた。

「リイン曹長。そっちの姿のほうが便利なんじゃないですか？」

スバルが素朴な疑問を口にする。

「こっちの姿は燃費と魔力効率があまりよくないですよ～。コンパクトサイズで飛んでる方が楽チンなんです♪」

「なるほど～♪」

キャロが納得した様子を見せる。

「それに……」

不意に、リインがこっちに流し目を向けてきた。

「とーさまが、『リインは小さくて可愛いなぁ』って言ってくれたので…♪」

リインがイヤンイヤンみたいなポーズを取りながら言う。

……いや、別に妖精サイズでいろって意味じゃなかったんだけど…。

「……」

キィィィン

リインフォースが何故かちびになり、オレの胸元に引っ付く。

……

「成る程、これは病み付きになるな……／／／／／」

リインフォースが顔を赤らめながらいった。

たまにリインが同じようなことして、同じような反応をするけど、イマイチよくわからないなぁ。

「八神部隊長、そろそろ」

シグナムがはやてに時間を見せながら言う。

「そやね。アリサ隊長、すずか隊長。そろそろ時間や。頼むな」

「ん、わかったわ」

「じゃあ、私たちは先に行ってるね」

ようやく離れたアリサとすずかが、転移で一足先に地球に向かった。

ちなみに、オレの両脇はさっきから虎視眈々と狙っていたフェイトとなずなに奪われた。

……オレの平穏……。

「はいっ！到着ぅ！」

ミカが高らかに宣言する。

「ここが……」

「コータさん達の……故郷……」

ティアナとスバルが言う。

「そうだよ」

「ふふっ、ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

オレの右腕にしがみついているフェイトと、オレの背中に抱き着いているなのはが言う。

「空は青いし、太陽は一つですし……」

「山と水と、自然の匂いもそっくりです！」

ギンガとキャロが言う。

「キュクルー！」

フリードも空気の良さを感じているのか、気持ちよさそうな顔をする。

「湖、綺麗です！」

エリオは自分の住んでた場所を思い出しているのか、懐かしむ顔をしていた。

「というか、ここはどこでしょう？なんか、湖畔のコテージって感じですが……」

ティーダが吼太に聞く。

「ここは、現地の人が持ってるコテージだよ。まぁ、すぐ分かるさ」

「「「「「「？」」」」」」

フォワードのみんなが首を傾げた。
その時、コテージの脇に一台の車が止まる。
「お、持ち主様の登場だな」
「持ち主？」
スバルが言いながら振り返る。
そこにいたのは……
「ハァイ！みんな！」
「「「「「「アリサ隊長！？」」」」」」
アリサだ。
というのも、このコテージの所有者は他ならぬアリサ自身。
確か、１３歳の誕生日プレゼントとか言ってたな。
……さすが、ブルジョアジー。
「すずかは？」
「まだ親御さんが離してくれないみたいね。仕事とはいえ、久々の里帰りだし」

まぁ、仕方ないか。数年ぶりだもんな。

「さて……じゃあ、今回の任務を改めて説明するよ」

「「「「「はいっ！」」」」」

なのはが切り出すと、全員の顔が引き締まる。

なのはがウィンドウを大きくして、周辺のマップを表示し、全員に見せる。

「捜索地域はここ、海鳴市の市内全域。反応があったのは……ここと…ここと…ここ」

海鳴市をラインが走り、そのラインで囲まれた場所の中の、特定の三ヶ所を赤いマーカーが示す。

「移動してますね」

ティアナが、マーカーの場所を見て言う。

マーカーは一定の道を描いており、確かに移動しているように見える。

「そう、誰かが持って移動してるか、自立して動いているのかは分からないけど…」

「対象ロストロギアの危険性は、今のところ確認されていない」

「仮にレリックだったとしても、この世界は魔力保有者が滅多にい

ないから、暴走の危険はかなり少ないね」

フェイトとなのはが、交互に説明していく。

「とはいえ、相手はやっぱりロストロギア。何が起こるか分からないし、場所も市街地。油断せずに、しっかり捜索していこう」

「「「「「「はいっ！」」」」」」

そして、あらかじめ用意されていた車に、分隊ごとに乗り込む。

ちなみに、オレの分隊のクロスオーバーの車は、わざわざミッドチルダから持ってきたやつだ。

ハンドルの脇にアクセルとブレーキのためのスイッチが付いている特別製。

まぁ、平たく言えば、オレみたいな低身長のやつでも運転出来るってことだ。

各自の車で移動しながら、各地にサーチャーとセンサーを仕掛けていく。

「サーチャー、動作確認。順調みたいだよコータ」

「ま、そりゃそうだろうな」

サーチャー設置するだけだし、何か起きたらそっちのほうが問題だ。

「夜までには終わるかな？早く晩飯食べた～い！」

「うるっさいですわ！静かにしてくださらない！？」

サーチャーを設置出来ないミカが暇なのか、ごねはじめていた。

対し、プリムも苦手な作業であるためか神経質になっているようで、短気になっている。

「お前ら落ち着けって！」

「……二人とも……うるさい……」

ライラも、ミカがやれない分を補ってサーチャーとセンサーを設置しているためか、少々疲れが見える。

「ライラ、大丈夫か？なんなら休んでも……」

オレが休憩を提案しても、ライラはふるふると首を振り、提案を却下する。

「……大丈夫…。私の得意分野だから…」

そう言うと、サーチャーの設置に戻る。

「……ん？そういやこの道って……」

車を運転してて、ふと気づく。

そして、角を曲がるとそこには……

懐かしい、我が家があった。

## 第百十六話　ちょっとした里帰り気分だな（後書き）

なっぺ「後書き座談会だよ。さぁ僕と契約を！」

吼太「どこぞのＱＢかお前は」

なっぺ「失敬な。あそこまで胡散臭くはない！」

吼太「……まぁ、そうか」

なっぺ「で、次回は吼太の両親が再登場のフラグが建ちました」

吼太「元気かな」

なっぺ「コスプレも出るな。多分」

吼太「それは嫌だ」

なっぺ「お前に拒否権など無い！感想感謝コーナー！」

吼太「毬藻さん、ベルワンさん、天照大神さん、仮面ライダーディケイドさん、霊亀さん、ユウキさん、香崎　真琴さん、緋水さん、バルディッシュさん、ＡＩＲＳさん、雨季さん、七つ夜＆夜つ七さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、てっちゃんさん、朱神優希さん、ＶＡＺＵさん、リオン・マグナスさん、ＳＲＸさん、サーペントさん。感想ありがとうございました！」

なっぺ「仮面ライダーディケイドさんからは吼太の意思で発射できる無限砲台（後書きでしか使えない版）を、緋水さんからティアナ

となのはに吼太と詩音の猫耳スク水メイド写真を、バルディッシュさんからはダブルオークアンタ、ガンダムハルート、ガンダムサバーニャ、ラファエルガンダム、ブレイヴ指揮官機を、雨季さんからはモリガンの衣装を、てっちゃんさんからはヴァンパイアハンターキャラのリリスの衣装を、ＶＡＺＵさんからはどこでもタライが降ってくるスイッチを、リオン・マグナスさんからはラバーズに太陽炉と媚薬一（嗅がせるだけで大丈夫）を人数分、エリオに大神宣言（グングニル）、ティアナにエボニー＆ａｍｐ；アイボニー、吼太にｆａｔｅの某あかいあくまの服、乖離剣とダ・カーポの風見学園の制服（女子バージョン、本校のもセット）を、サーペントさんからは学園都市製の小型自動車（レッドカラー）を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「雨季さんとてっちゃんさんはなんだ？示し合わせたのか？」

なっぺ「さぁ？偶然じゃね？さて、と。コスプレタイム！まずはモリガンだぜ！」

吼太「胸がすっかすかだな……。脱げそう……／／／／」

なっぺ「リリス！」

吼太「んっ……きつい……／／／／／／／／」

なっぺ「あかいあくま！」

吼太「二回目だな……でも、慣れない……／／／／／／／／」

なっぺ「風見学園の制服！」

吼太「な、なんで女子用なんだよ……恥ずかしいのに……み、見る

なよ……／／／／／／」

なっぺ「さて、次は……「待て！」……だ、誰だ！」

「風見大介！義によって吼太にコスプレをするなっぺ様を破ｋ……教育する！」

なっぺ「あれ！？今破壊って言いかけなかった！？」

大介「そんなことを気にしていていいのか？」

なっぺ「え！？あ、ちょ……アッー」

ベス「南無」

吼太「では、この辺で。次回も楽しみにしていてくれ……／／／／／」←まだ制服のまんま

## 第百十七話　なんかカオス度合いが酷くなってね？（前書き）

時間的な都合でサウンドステージが聞けないから、大まかな流れだけ合わせてテキトーに書いたらこうなった。

今回は大分酷いです。

# 第百十七話　なんかカオス度合いが酷くなってね？

Ｓｉｄｅ　はやて

「はやてちゃん、教会本部から伝達よ。ロストロギアの新たな出現ポイントが判明したみたいよ」

シャマルがウィンドウを操作しながら報告してくる。

「ほんまか？」

「えぇ。最も、残っているのは痕跡だけで、足どりが掴めるものじゃないみたいだけど。あと本局から通達。出来るだけ無傷で捕らえてほしいって」

「無茶苦茶言うなぁ…」

思わず苦笑してしまう。

まぁ、本局の意見は尊重せんとな。

「シャマル。各部隊への連絡お願いな。くれぐれも無傷でって」

「了解♪あ、シグナム。そこを右に曲がって。そこが合流ポイントよ」

「あぁ」

車を運転しているシグナムがハンドルをきる。

「合流ポイントとは翠屋か。久しぶりだな」

シグナムが驚いたように言う。

せっかく海鳴に来たんやし、ここならそれなりの人数が集まれるからなぁ。

提案してきたのはなんと桃子さんやから驚きや。

「さて、あと来てないのは……ライトニングにクロスオーバー、あとすずかちゃんか」

コータ君は今頃、両親と久しぶりの対面やろな。わざわざクロスオーバーのサーチャー設置ルートにあそこを組み込んだんやから、少しは顔見せしてくれるとええけど。



Ｓｉｄｅ　吼太

「久しぶりだな……我が家は」

「そうだね」

アリスが言う。

正確にはアリスは居候だったんだけど、そんな細かいことはいいさ。

トゥードも人間態になってるし、魔導書娘達も出てきてる。詩音だってロザリオで分離してる。

家族１５人、再会の時だ。

「「「ただいまー！」」」

オレが扉を開け、中に入る……

もとい、入ろうとしたら……

「「……ん？」」

何故か顔を赤らめた、ピンクの綺麗なドレスを着た父さん（やたら似合ってる）を、執事服を着た母さん（顔はやっぱり赤らめている）が押し倒していた。

ついでに言えば、父さんの着ているドレスはあちらこちらが破けていて、下着の中にあるものが丸だし。

母さんは母さんで、ズボンの股の部分が破けていた。

……

「「「お邪魔しましたー」」」

「ま、待ってくれ！帰らないでコータぁぁぁ！」

父さんの悲痛な叫びが聞こえた気がしたけど、まぁ気のせいだろう。

「……サーチャー…設置完了…」

「センサーも出来ましたわ」

「周辺に怪しいものは無かったよ。痕跡も無しだね」

ライラ、プリム、ミカが冷めた表情で報告してくる。

「もうそろそろ集合時間だよー、ダーリン」

「それじゃ、行こっかー」

「今度はゆっくり里帰りしたいなー」

アリス、リーム、ミナが言う。

「ま、待ってくれ吼太！これは母さんが……」

オレの家から破れたドレスを着た少女が出てくる。

……夢じゃなかったか…

「あん、待ってよ透ちゃ～ん♪♪♪」

「息子達の前なんだから自重してくれ母さぁぁぁぁん！！！」

だけど、父さんの顔はどこか嬉しげ。

これも、母さんの調教の成果だろう。

……まぁ、元気な姿が見れてよかったよかった。

「また来るよ～」

万年バカップルだけは自重してほしいがな！

その後、集合場所の翠屋に行くと……

「「「イェーイ！」」」

エイミィさんとその子供二人――カレルとリエラ――が恍惚とした表情を浮かべたクロノを踏ん付けていた。

……まず、カレルとリエラに何教えてんだエイミィさんだとか、クロノお前仕事どうしたとか、むしろ煽ってるあんたに突っ込めばいいのか美由希さんだとか、言いたいことは山ほどあるけどとりあえず……

「この海鳴に変態以外の人種はいないのか！？」

この嘆きにも近い問いに答えたのは、店の奥から出てきたこの二人。

「「いないっ！」」

なのはの両親、高町士朗さんと高町桃子さんだ。

「っていないのかよ！？アンタ達比較的常識人だろ！？」

「失敬な。僕だってベッドの上ではかなりハッスルしてるからな？」

「あらやだ士朗さんったら…／／／／／」

「高町の人間に常識を求めたのが間違いだったよドチクショウ！」

ツッコミが追いつかねぇ！！

「あ、コータ！こっちだよ～！」

「久しぶりね、コータ」

アルフとプレシアさんがオレを席に呼ぶ。

アルフは小さくなっていた（フェイトの魔力消費を抑えるためだとか）が、プレシアさんは全く変わっていない。

……なんだ？海鳴に住むと不老になるのか？

「久しぶりだなアルフ。プレシアさんも久しぶりです」

「お前、全然背伸びないな」

「うっさい」

アルフはなんで小さくなったら舌足らずになったんだ？こいぬフォームのときはそんなことなかったのに。

そんなことを考えながら席に座る。

すると、その瞬間に椅子から飛び出したベルトがオレを拘束した。

「え！？何！？」

「ふっふっふっ……甘いですよコータ君！私の存在を忘れてもらっちゃあ困ります！」

後ろからリニスの声がする。

だけど、気配が全く無い。

……ハッ！まさか……

「ダンボールか！？」

「正解です♪じゃ、お願いしますね」

リニスが言うと、オレの服が微塵に変わった。

「にゃあああぁぁぁぁぁぁ！！？／／／／／／」

「猫みたいですね」

リニスがツッコんでくるが、正直それどころじゃない。

辺りを見回すと、二刀の小太刀を構えた恭也さんがいた。

「恭也さん！一体何を……」

ふと気づく。

恭也さんの隣に、笑顔の忍さんがいることに。

忍さんの手から、鎖が伸びている事に。

その鎖が、恭也さんの首に着いている鋼鉄の首輪に繋がっていることに。

「やったぞ、忍」

「よしよし、偉い偉い」

「うへへへへ……」

恭也さんが忍さんに撫でられて、気味悪く笑う。

……もうアンタ、変態の域すら通り越しちまったんだな……

「さてコータ。そんな格好じゃ風邪をひくわよ？」

「ちょうどこんなところに服もあるし、着替えないと♪」

プレシアさんと桃子さんが服を持って迫ってくる。

その手にあったのは、どう見ても女物。

「クロスオーバー！誰か助けて！」

一緒に来たメンバーに助けを求めても…

「「「むしろいいと思います！」」」

「可愛いよ～？」

「諦めましょう。マスター吼太」

この有様。詩音にすら見放されるとは思わなかったぜ……

Ｓｉｄｅ　三人称

「あ、コータ君の車だ」

「母さんの車もあるね」

ようやく合流したすずかと、見回りが終わったフェイトが言う。

すずかは元々他の隊員を連れていなかったので、若干キツイがフェイトの車に一緒に乗って来ていたのだ。

そして、フェイト、フィニア、エリオ、キャロ、すずかが車から降りて、翠屋に入る。

その中では……

「撮らないで～！／／／／／」

「「「ゴスロリコータ君ひゃっほう！」」」

カオスが展開されていた。

それを見た、各人の感想。

――雷光の死神さん――

「……【検閲規制】【ピー】【ドキュゥゥン】」↑盛大な暴走

――雷刃の襲撃者さん――

「なのは達ばっかりズルイ～！」↑やっぱり暴走

――若き槍騎士さん――

「えと……ファイトです」↑苦笑い

――竜の巫女さん――

「その……似合ってますよ？」↑子供故の純粋かつ残酷な言葉

――夜の一族さん――

「……お父さんが早く離してくれなかったから……」↑笑顔。眩しいばかりの笑顔

ちなみに、この光景になるまでの一部始終を見ていた四人は……

――鋼の走者さん――

「え!?そ、その……か、可愛いです／／／／」↑目覚め始めた

――流星の射手さん――

「あぁいうコータさんもいいと思います!むしろ愛でたい!」↑ダメ人間まっしぐら

――銀河の走者さん――

「うわ……あんな……／／／／」↑もはや周りが見えていない

――彗星の射手さん――

「あぁ……コータさんの男疑惑がますます強く……まぁ、俺はどっちでも構いませんが」↑……バイ?

と、いった感じだったそうな。

ちなみに、彗星の射手さんはその発言の後、妹である流星の射手さんに撃たれたそうな。

Ｓｉｄｅ　吼太

まさか……まさかここまで味方がいないとは！

エリオは苦笑いしてて助けてくれる気配無いし、ティーダに至ってはサムズアップで拒否された！

こうなったら……

「助けてフリード！」

「クキュルー（兄ちゃん。手前で撒いた種じゃ。手前で何とかしいや）」

「ですよねー」

もう、〝アニキ〟どか呼ばれそうなフリードにも拒否された。

「捕まえた～！」

ミカに腰を取られる。

「逃がさない」

「これでチェックメイトなの♪」

「さ～、店の奥に行こうねー」

さらにカンナに首、なのはに脚、リームに腕を取られて、オレは連れ去られていく……。

あぁ……平和が欲しい……。

Ｓｉｄｅ　三人称

ラバーズ全員（フォワードは含まない）に搾られた吼太を含む一行は、翠屋にて懐かしのメンバーと合流したあと、バーベキューをするためにコテージに戻って来ていた。

わざわざ準備したコテージを使わないのもどうかという意見が出たためである。

所持者であるアリサは遠慮していたが、どの道荷物を取りに一度コテージに帰る必要があったため、なし崩し的にそうなった。

そして、料理好きな人達が集まって準備をしていたのだが……。

きっかけはシグナムの一言。

「シャマル、アリス。お前達は手を出していないだろうな？」

「「え？」」

笑顔で振り返った二人の手には、異様な塊が刺さった串が。

よく見れば、二人の手元に山のように似たような物体（料理とは言わない）が量産されていたのが見て取れた。

「「ちょっと走ってきます」」

スバル＆ギンガ：ウイングロードで真っ先に離脱

「兄さん！追い掛けるわよ！」

「了解！」

ティアナ＆ティーダ：スバル達を追い掛けるふりをして離脱

「あぁ、フリード！どこ行くの？」

「きゅくるー！」

キャロとフリードリヒ：逃亡

「「「「「「早速離脱者が！？」」」」」」

「クラールヴィント」

『ja！』

クラールヴィントから伸びた魔力の糸が、逃亡者を縛り上げる。

「「「「「「シャマルさん強っ！？」」」」」」

「食事中に席を立ってはいけないんだよ？」

「「「「「「イ、イエスマム」」」」」」「キュクルー…」

この時、五人と一匹は思ったという。

不幸だ、と。

「さぁ、召し上がれ？」

「いただきます」

シャマルが恭也に串を渡す。

「あ、あぁ……もぐもぐ……なんだ、普通に美味グハアッ！？」

「恭ちゃーーーーん！！！」

一人脱落。

「食べて食べて～」

アリスがセンに串を渡す。

「あむ……ふむ、意外に悪くなガハァッ！？」

「姉上！？」

「ナ、ナツハ……アレはヤバイ……アレは……かのアザトースに匹敵……グフゥ」

「姉上ーーーー！！！！！」

また一人脱落。

そんな中でシャマルとアリスがどんどん犠牲者を増やしていく一方、唯一平気な者がいた。

「あぐあぐ……むぐむぐ……美味い！」

ミカである。

最強の螺旋の漢、穴掘りシ○ンもまた味覚崩壊していたことから考えると、螺旋力に覚醒したものはあらゆる食べ物を美味しく食べられるのかもしれない。

美味しそうに食べているミカを見た吼太は、そう考えたとかなんとか。

「みんな元気だねぇ」

「私達はしっとりやりましょう」

「プレシア、新しい串が焼けましたよ」

「ありがとうリニス」

大人組はさりげなく逃げてたりする。

材料はリニスが確保していたとか。リニスすげぇ。

そんなこんなで、時間は夜。

「はい！みんな生きてるかー？」

「「「「い、一応……」」」」

死屍累々といった様相の六課メンバーが声をあげる。

「それじゃあみんな！今からスーパー銭湯に行くで！」

その言葉に、フォワードは首を傾げる。

聞き覚えが無いためであろう。

「まぁ、行けば分かるよ♪」

なのはが笑顔で言う。最も、先程食べた物体Xの影響で顔は青かったが。

「それじゃあ、みんなは着替えを準備してね」

フェイトが言う。

そして各人が動き出す中、吼太は一人……

「……嫌な予感がする」

と考えていたとか。

## 第百十七話　なんかカオス度合いが酷くなってね？（後書き）

なっぺ「後書き座談きゃい！」

吼太「どうしてこうなった？」

なっぺ「どうしてもこうなった」

吼太「すり潰されるのと握り潰されるのどっちがいい？」

なっぺ「どっちもやだ」

吼太「だが断る」

なっぺ「（´・ω・`）死ぬ前に感想感謝コーナーを！」

吼太「霊亀さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、天照大神さん、バルディッシュさん、香崎真琴さん、七つ夜&夜つ七さん、雨季さん、てっちゃんさん、ベルワンさん、ユウキさん、ＶＡＺＵさん、緋水さん、ＡＩＲＳさん、毬藻さん、ＳＲＸさん、通りすがりさん、サーペントさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「香崎さんからはドキドキリング×２０を、雨季さんからはラップを、緋水さんからは吼太と詩音にブラックマジシャンガールの服を、サーペントさんからは学園都市製の掃除ロボ×２００体を頂きました！ありがとうございます！」

詩音「魔法少女だよ～！」

トゥード「とてもかわいらしいです。マスター」

吼太「うぅ……また、こんなかわいらしい服だなんて……／／／／／」

なっぺ「ドキドキリングの効果発動！」

ドキドキリング：見た目はチョーカー。装着者は自分からは外せない。そして、装着者の羞恥心が高まれば高まる程、装着者の今着ている服が透けていく。

吼太「ふ、服が！？／／／／／／」

なっぺ「恥ずかしがれば恥ずかしがるほど透けてくるぜ！」

吼太「なんとかしてくれぇ！／／／／／」

なっぺ「つ【ラップ】」

吼太「衣服ですらねぇ！？」

なっぺ「”服”じゃないから透けないよ？」

吼太「……」

で

吼太「……／／／／／／／／」↑ラップ

なっぺ「不透明さがまたイイ！」

吼太「うわーん！」

なっぺ「ではではこの辺で！」

## 第百十八話　お風呂とスライムと微妙な伏線（前書き）

吼太の見た目はやっぱり子供。

でも本人は認めない。

最後辺りは微妙にシリアスです。

# 第百十八話　お風呂とスライムと微妙な伏線

Ｓｉｄｅ　三人称

「はい！海鳴スパラクーアにようこそ！……団体様ですか？」

吼太達一同を迎えたスタッフの顔が引き攣る。

まぁ、かなりの大所帯故、仕方ないと言えば仕方ないが。

ちなみに、肝心の金銭面の問題は……

・アリサとすずかの親の金

・吼太が所持している、大奥義書の召喚悪魔、【ルキフゲ・ロフォカレ】に頼んで金を取り寄せた

・管理局からの捜査費用として支給された金

以上の要因によりクリアしていた。比率は１：７：２といったところか。

「えっと……大人が２７人、子供が１２人ってとこかな？」

はやてが言う。

が、そこに反応したのが二人。

「はやて～。大人２９人に子供１０人だろ？」

「あぁ、そっちが正しいな。スバルやティアナはさすがに子供料金じゃ無理だと思うぞ」

反論したのは吼太とヴィータだ。

大人として振る舞っている（つもり）の二人からすれば、大人の人数が足りないのが不思議だったのだろう。

だが、周りのみんなは二人の発言に対して首を傾げる。

「何を言っているの？エリオ、キャロ、リイン、アリス、セン、ミナ、カンナ、ナツハ、カンナ、アルフ……それに、コータ君にヴィータちゃん。やっぱり１２人じゃない。……あ」

シャマルが言った瞬間、空気が凍り付いた。

「なぁコータ……この××料理人、どう調理する？」

「そうだな……叩きにするか、刺身にするか……両方にするか」

「両方だな」

ヴィータがグラーフアイゼンを構え、吼太がハンドソニックを出す。

「ちょ！コータ君、ヴィータストップ！いくらなんでもそれはアカンて！」

「ヴィータちゃん～！」

「止まりなさいコータぁ！」

はやてが間に割って入り、なのはとアリサがヴィータと吼太を羽交い締めにして制する。

「うるせぇ～！」「離せ～！」

「あの……お客様？他のお客様のご迷惑になりますので……」

店の前で騒いでいた結果、店の人に怒られた一行であった。

その後、店内に入った一行（吼太とヴィータは大人料金にしてもらった）は、早速脱衣所に向かう。

「あ、よかった。男女別だ」

エリオが暖簾を見て言う。

漢字は分からなかったが、色が違うことからそう判断したらしい。

「大きいお風呂だって。楽しみだね～」

キャロも顔を紅潮させている辺り、期待があるのが周りに伝わってしまっている。

もっとも、大人達からすれば微笑ましいものなのだが。

「コータさん、あれ……なんて書いてあるんですか？」

スバルが吼太に、暖簾の漢字の読み方と意味を尋ねる。

「あれか？赤が【女】……女性だな。青いのは【男】……男性用だ。……紫のは【混】？……混浴ってことか？スーパー銭湯にそんなんあっていいのか？」

「「「「「コータ君！混浴行こう！！」」」」」

吼太が混浴のことを言った瞬間、なのは達が食いついた。

が、世の中そう甘くはない。

「要予約……利用の際はフロントにて予約を行ってください、か。任務のこともあるし、今回は無理そうだな」

「な……そんな……」

「あんまりだー！」

「ぐっ…この王たる我を侮辱する気か！塵芥共がぁ！」

マテリアル三人がこの世の終わりのような表情を浮かべながら叫ぶ。

「仕方ない。じゃあオレは男湯に……」

「何いってんだい？お前はこっちだよコータ」

アルフが指指した先には……

【吼太専用湯舟】

……

「えと……さすが隊長」

ティーダが慰め（？）の言葉をかけたが、吼太は呆れて物も言えない状態だった。

Ｓｉｄｅ　吼太

オレ専用湯舟ってなんだよ！？

贔屓か！？贔屓にしたっておかしいだろ！？

「ま、とか言って入ってんだけどさ…」

風呂場に入って、内装をを見渡す。

まず目に入ったのはやはり湯舟。

舟の形をしているのは、設計者の遊び心なのだろうか？他にもいろいろとある。恐らくサイズは他のより小さいんだろうが、それでも十分だ。

「うたせ湯まであるなんてな。……しかし、これらはなんであるんだ？」

オレが気になったのは、ウォーターベッドやマット。

横には何やら用途の分からない容器がたくさん並んでる。

「……何に使うんだ？寝るのか？風邪ひくんじゃね？」

あと気になるのは、横にある扉。

重厚なんだけど、開かない訳ではないらしい。

まぁ、たいがいこういうとこは掃除用具とかが入ってんだよな。気にすることはないか。

「まずは身体洗って、サウナにでも入るか」

「一通り回ったか……」

上せる、って程じゃないんだよなぁ。もう一回サウナ入るかな…？

「あ！コータさんだ！」

「ほんとだ……」

誰か、聞き慣れた声が聞こえた。

……ってこの声は……

「キャロ？エリオ？」

なんで二人が？

「あそこの扉って、ここに繋がっていたんだ……」

「そうだね～♪」

「あそこの扉？」

何かあったのか？

「……あぁ、すいません。女性用露天風呂の壁に扉があって、侵入禁止ではなかったみたいだったので来てみたんですけど…」

エリオが言うに、どうやらここと女性用露天風呂が繋がっているらしいな。

「ま、せっかくだ。一緒に入るか？」

「「はいっ！」」

「ん？我が父。ここは我が父の湯殿だったか」

「意外」

セン達魔導書娘達も来たらしい。

見れば、扉の辺りでリインとアリスが隠れてこちらを見ているのが見えたので、呼んでみる。

「リインとアリスも来いよ！一緒に入ろうぜ！」

「「！」」

オレが呼ぶと、扉から二人が出てきた。

……ついでになのは達まで来た。

「なのは達はダメだ！」

「「「「「なんで！？」」」」」

「さすがに狭いわ！それに、ここは１１歳以下の男女しか入れないってよ？」

オレが指差した先には、そういった旨が掛かれた看板があった。

「ま、そういうこった。諦め…「コータ。ここ……」……ん？」

リームが指差した先を見ると……

――１１歳以下の男女の入浴を禁ずる。ただし、婚約者は除く――

……

あぁ～、確かに婚約してるね。

だって、カリムに嵌められて……ついでにって全員が……。

ミッド政府もなんか、「あの吉谷吼太だし、一夫多妻でよくね？ つーかそうしないと俺らの命危なくね？」みたいな通達（ホンネ）を言われて、気づいたら公式に承認されてたし。

えと……とりあえず。

「エリオ、キャロ。悪い。いい子だから向こうに戻っていろ。これは……オレの性戦（たたかい）だ」

「「……はぁ」」

エリオとキャロが出ていった後、多数の野獣がオレに襲い掛かってきた。

一言言えることがあるとするなら……

「ウォーターベッドやマットって、このためのものだったんだね」

「活力あるねぇ」

「本当ですね」

アルフやリニスといった、未吼太ラバーズ（否と言い切れないのが吼太）は、それぞれの湯でゆっくり浸かっていたという。

Ｓｉｄｅ　三人称

スーパー銭湯から出て。

「なんかすっかり堪能しちゃったね～」

「地球ではお風呂がエンターテイメントなのね」

スバルとギンガが腑抜けたような顔で言う。

他の面々も、スーパー銭湯を楽しめたようだ。

吼太だけは上せていた（というより、搾り尽くされて気絶していた）ため、トゥードが背負っている。

その時、ケリュケイオンとクラールヴィントが反応した。

「ケリュケイオンが…！」

「クラールヴィントもよ！」

「リイン！広域探索だ！」

リインフォースがリインに言う。

「はいですねーさま！……見つけたですよ！」

「こっちやな…！それじゃあ機動六課…出動！」

「「「「「了解！！！」」」」」

「あれ？あれが……ロストロギア？」

六課メンバーの前にいたのは、スライムそのものだった。

ぴょこぴょこと跳ねている様子は、どこか愛嬌を感じさせる。

「ちょっと可愛いかな」

「でも仕事はしませんとね！」

キャロが感想を言うが、あくまで仕事と割り切っているティーダがクロスファントムを構える。

クロスファントムはティアナのクロスミラージュと違い、ツーハンドモードが存在しない。

だが、その分起動が早い利点がある。

それだけでなく、自動での防御魔法展開速度も早く、その速度は至近距離から発射された高速魔力弾を防ぐほどだ。

故に、スライム型ロストロギアが発射した魔力弾を運よく防ぐことが出来た。

「攻撃してきた!?」

「兄さん、大丈夫!?」

「大丈夫だ!けど……」

駆け寄ってくるティアナに、自身の無事を伝えるティーダ。

彼らの目の前には、高速で移動するスライム。

正直、怪奇現象のレベルだ。

「……追いつける?スバル」

「いやぁ～……無理」

ティアナの問いにそう答えるスバル。

スバルが早々に諦めるレベルでごろごろ転がるスライムは、そのまま逃走を開始した。

が、次の瞬間世界が停止する。

そのことに気づいたスライムが不思議に思ったのか、辺りを見回しはじめる。

そのスライムに近づく一人の人間。

「……なんでお前がいんだよ。ベス」

「あ、吼太さん。ちょっと貴方にお話がありまして」

Ｓｉｄｅ　吼太

なんでベスが海鳴に？つーか話ってなんだ？

「あ、ちなみに海鳴にいた理由は、こちらを少し調査していたからです。それで本題なのですが……」

ベスが真剣な表情になる。

……いや、スライムベスの真剣な表情なんてどんなもんかわかんないけどさ。

その時、ベスの背後に巨大な扉が現れる。

「……あ、この人は昔の同級生のヨグ・ソトースさんです。道を作ってもらうのに協力してもらいました」

「はぁ……」

神に同級生なんて考え方があるんか？

「まずはこれらを見てください」

ヨグ・ソトースが開き、中から人影が出てくる。

「……コイツは！アルザスでヴォルテールに消し飛ばされたはずじゃ！？」

「これは魂だけの存在ですので、貴方に危害は加えませんので安心してください。……しかし、”やはり”そうでしたか」

……やはり？どういうことだ？

「この転生者は……本来は”記憶引き継ぎ転生”の対象外だったはずなんですよ」

「要は、チート転生者になるはずじゃなかったってことか？」

「はい。そもそもこの人間は赤ん坊にすらならずに、流産で死んだ

人間です。記憶を引き継いだ転生をするわけが無いんですよ。何より、ミスで死んだ訳では無いですし」

「……じゃあ……じゃあなんでコイツは転生したんだ？」

「そこですよ。私はこの人を輪廻に従い、しっかり魂の初期化をした後に転生させました。つまり、この人の魂は”転生した後に別の介入者によってさらに転生させられた”ということになります」

「……お前以外にそんなことが出来るやつなんて限られてるだろ？わざわざオレに言うことじゃ……」

「違いますよ。【限られている】ではなく、【私以外にはいないはず】なんですよ。何せ私の仕事がこれなんですし。ちなみに、死神は単なる水先案内人なので、私を全く通さずに転生させられはしません」

「……つまり、コイツはともかく、それ以外の奴らはお前は知ってたってことか？」

「何人かはそうですが、何人かはこの人間と同じです。故に貴方に聞きたかったんですよ」

あぁ、つまりはそういうことか。

ベスは、オレを疑っている。

「オレは違う。メリットが無いからな」

「まぁ、そうだとは思いましたが。一応、しっかり確認しておかな

いといけなかったので」

……だとしたら、誰が…？

オレの知り合いにそんなことをするような奴はいない。

わざわざそこらの人間を転生させるぐらいなら、自分でなんとかするやつらばっかだしな。

つまり、他に犯人がいるってことか。

「……あぁ、吼太さん。間違っても貴方は介入しないで下さいよ？これは、私の仕事です」

「……分かったよ。だけど、あまりにもこっちに被害が来るなら、オレも黙ってはいないからな」

「それで構いません。では……「待て」……はい？」

帰ろうとしたベスを引き止める。

「お前、ロストロギア云々はどうするつもりだ？」

……

「あ！」

「考えてなかったのかよお前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ

結局、ベスが自身の偽物を用意して、本局に渡して何とか凌ぐことになった。

……にしても、転生者か。

これから先、たいしたことが起こらないといいけど。

こういうのはフラグらしいけど、オレはそう思わずにはいられなかった。

## 第百十八話　お風呂とスライムと微妙な伏線（後書き）

なっぺ「後書き座談会にゃのか？」

吼太「キモい」

リーム「地獄に堕ちろ」

なっぺ「ひでぇ」

吼太「久々にベスが本編に出たな。意外なゲストってベスのことだったのか」

ベス「そうだったんですね」

なっぺ「サウンドステージを初めて聞いたとき、ベスを出すならここしかない！って思った」

吼太「しっかし、最初のはどういうことだよ？オレ専用湯舟って」

なっぺ「吼太だから仕方ない。感想感謝コーナー！」

吼太「Ａｒｉｓｈｉａさん、霊亀さん、天照大神さん、香崎　真琴さん、ライさん、ユウキさん、毬藻さん、てっちゃんさん、七つ夜＆夜つ七さん、雨季さん、バルディッシュさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、仮面ライダーディケイドさん、サーペントさん、ベルワンさん、ＶＡＺＵさん、緋水さん、リオン・マグナスさん、朱神優希さん、黒龍さん、ＳＲＸさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「霊亀さんからはすけすけゴーグルくんを、香崎真琴さんからはラップ吼太の動画と４００×５００の大型モニターを、てっちゃんさんからは全てがピンクのバニースーツを、雨季さんからは（吼太にしか見えない）服を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからはブーメランパンツを、サーペントさんからは全てを無効にするリングと不吉を感じるレーダーを、緋水さんからは吼太と詩音にスク水（白）を、リオン・マグナスさんからはなのはにダ・カーポのさくらとスクライドのかなみのコスチューム、吼太にコピーロボットと性転換薬、あと朝倉姉妹＆ａｍｐ;さくらさん謹製の重箱、悠二の自由使用権と、吼太の初音島への招待券を頂きました！ありがとうございます！」

吼太「バニースーツにブーメランパンツにスク水……／／／／／／」

なのは「ど、どうかなコータ君……似合う……かな……？／／／／／／」↑さくらの衣装

吼太「あ～……うん。かわいらしくていいんじゃねぇか？」

なのは「……／／／／／／／／」

なっぺ「じゃお前もお着替えしようねぇ～。新フラグ神」

吼太「フラグ神じゃ……って！／／／／／／／／」↑ブーメランパンツ

なっぺ「……うん、やめとこう。次！」

吼太「ぇっ！？／／／／／／」↑バニースーツ

なっぺ「似合う似合う。んで、最後は吼太と詩音の二人で」

吼太「ぅぅ……／／／／／／」

詩音「詩音達に乱暴しちゃ……ダメだよ？」↑天然

なっぺ「ハッハッハッ！愉快愉快！」

大介「お前はまたこんなことをォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

なっぺ「ギャアァァァァァァァァァァァ！！？」

ベス「悪は滅びた」

なっぺ「ではでは…この辺で……次回もお楽しみに……」

# 番外編　流星の射手、烈風の双弓士に教えを乞うのこと（前書き）

最初に言っておく！

オレは恋姫をほぼ全く知らない！

……あれ？こんな感じのタイトルって恋姫関係だよね？自信無い……。

今回はバルディッシュさんとのコラボになります。

後、後書きにてコラボ当選者の発表をしますので、応募した方は是非是非ご一読ください。

## 番外編　流星の射手、烈風の双弓士に教えを乞うのこと

Ｓｉｄｅ　吼太

「技を教わりたいの？」

「はい！」

ある日、ティアナがなのはに頼み込んでいた。

技を増やしたいからしいけど……何か力量不足に感じたのかな？

「どうするコータ君？アクセルシューターやディバインバスターは教えても意味ないし……」

「クロスファイヤーやファントムブレイザーがあるからな」

クトゥグァとイタクァは精神汚染が酷いから、あまり教えたくはないしなぁ。

……オレ？完全制御してるから問題無い。

「邪魔するぞー」

その時、何気なくヒスイとシルフが入ってきた。

「……いつの間にバグからチートになった？」

「なってない。ただ……」

――回想――

「吼太さんを愛でたいです！」

「ま、待てシルフ！落ち着け！」

「待てません！あぁ、早く愛でたいですわ～……」

「なら行きますか？」

「あ、ベス」

――回想終了――

「……というわけだ」

「だいたい分かった。要はベスのせいだな」

あのやろう……この前ちょっとシリアスになったかと思えば、すぐにトラブルメイカーに逆戻りしやがった。

「じゃあ愛でても構いませんね！」

「……えっと、シルフさん？私のコータ君に何か？」

なのはが話に参加してくる。

「愛でるのですよ」

「め、愛でっ！？／／／／／／」

何を想像したのか、ティアナが赤くなった。

「ふむ……下手に手を出すと俺まで巻き込まれそうだ」

ヒスイは一歩下がった位置から、こちらを興味深そうに見ている。

「……とりあえず落ち着こう。な？」

Ｓｉｄｅ　ヒスイ

あの後、なんだかんだでティアナに俺の技を幾つか教える事になった。まぁ、俺も基本の型の確認になるからちょうどいいんだがな。

「よ、よろしくお願いします！」

若干緊張した趣のティアナが俺に挨拶してくる。

……こうして見ると、奇妙なもんだな。

自分の世界では俺の部下でも、この世界じゃ友人の部下だ。俺とティアナ自体で考えればつながりすら無い。

「じゃあまずはこれからやるぞ」

『Ｓｅｔ　ｕｐ』

ゲイルアークをセットアップしながら、荒鷹の準備をする。

さて、揉んでやるか。

Ｓｉｄｅ　吼太

「なんでこんなことに……」

「早くやりましょう！さぁ！」

なんだか、気づいたらオレとシルフが戦うことになっていた。

シルフが勝ったら、思う存分オレを愛でるらしい。

「コータ君、頑張ってね～」

なのはが応援してくれてるが、そもそもなのはとシルフの協定は「一緒に愛でる」なので、オレからすれば迷惑極まりない。

「では、始めましょう」

シルフが構える。

「あぁ。……トゥード！」

……

「……トゥード！

トゥードの応答が無い？

不思議に思っていると、目の前にウィンドウが開く。

そこに映っていたのは、トゥード。

『申し訳ありませんマスター吼太。マスター詩音の付き添いをしているため、そちらへは参れません』

「……どこ行ってんの？」

『ピクニックです』

「……あぁ、うん。分かった」

『では』

トゥードが通信を切る。

デバイスが独り歩きしまくってる気がする……。

つーか詩音。ホントにピクニックに行ってんのか？なんか優の悲鳴が一瞬聞こえた気がしたんだが。

……気のせいで済めばいいけど。

「まぁいいや。このまま相手になってやる！ガードスキル、ハンドソニック！ｖｅｒ２！」

刀身の薄いハンドソニックを出し、構える。

いきなり高速攻撃対応のｖｅｒ２にした理由は、シルフが受けてたつタイプじゃないように見えたからだ。

何せ風の精霊だしな。

シルフが手を振ると、風が巻き起こる。

こうして、オレの何かを懸けた戦いが始まった。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

この人……強い！

クロスミラージュの性能は高い。高すぎて、私自身が成長出来ないように感じるぐらい。

だけど、目の前で両腕のボウガンを私に向けて構える人は、クロスミラージュの性能をフルに引き出しても……。

だけど、負ける訳にはいかない！

「……行けぇ！」

魔力弾を数発放つ。

だけど、その全てが瞬時に撃ち落とされた。

「さぁ、次はこれだ！天鶴！」

ヒスイさんが上空に向けて矢を撃つと、矢は空中で砲撃となり、私に襲い掛かってくる。

「ぐっ……ファントムブレイザー！」

ファントムブレイザーで迎撃する。

が、また隙が出来た。

「攻撃に対しての反応が早いのはいいが、その後が疎かになっているぞ！荒鷹！」

「ぐっ！？」

またあの攻撃…！

多重弾殻に加えてバリアブレイクまでついていて、環境に左右されない高性能な魔力弾！

「避けるしか……無い！」

身を翻して避ける。

そこに、さらに攻撃をしてくるヒスイさん。

攻撃を避けるので精一杯で、とても攻勢に移れない。

「強い…！」

なのはさんは、「回避してたら攻撃が間に合わない」って言ってたけど、今ならそれがよくわかる。

「鳶氷雨！」

上空に複数発の矢が放たれ、それらが私の周囲に落ちてきた。
それを転がりながら回避し、さらに体勢を整えつつ魔力弾を放つ。
『ウィンディシールド』
だけど、あの風が付加されたラウンドシールドに触れることすら出来ない。
やっぱり……私は凡人ね……。
スバルなら多少の攻撃は無視して攻勢に繋げられる。
エリオなら全ての攻撃を回避して、近接戦闘に持ち込める。
キャロならちび竜の火炎であの防御を貫ける。
ギンガさんなら矢を捌きつつ必倒の一撃を放てる状態に持って行ける。
兄さんなら……きっと、私と同じ戦法でも対等に戦える。
だけど、凡人の私には……。
『マスター』
その時、クロスミラージュが話し掛けてきた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……どうしろってんだよ」

シルフと戦うことになったのはいいが……いや、よくないけど。

とにかく、メンドイなぁ。

「行きますわ。トルネードランス！」

いくつもの竜巻が槍になって飛んでくる。

「とりゃ！」

その内の、回避に必要なだけの槍をハンドソニックｖｅｒ２で破壊して、残りは何とか回避する。

「クロスウインド！」

足元に魔法陣が出来て、その四方から風の刃が三枚ずつ飛んでくる。

……ってあれ？

各種能力↓リミッター

召喚→使用厳禁

武装召喚→トゥードがいないから無理

ヤバイ！対抗手段があまり無い！

「ドチクショウ！リミッターのバカぁぁぁぁ！」

ジッパーからヴァルセーレの剣と、双風刃【神嵐】を取り出し、双風刃【神嵐】をハンドソニックｖｅｒ２と相乗掛合する。

「行くぜ……風を、斬り裂く！」

ハンドソニックでクロスウインドの刃を全て斬り裂く。

「せい！」

さらに、ハンドソニックにヴァルセーレの剣を相乗掛合し、その状態でシルフに攻撃する。

もちろん、刃は潰してる。模擬戦だしな。

「？　あまりにも手加減が過ぎるのでは無いですか？」

シルフが問い掛けてきた。

確かに、軽く叩いているだけにしか感じないだろうから、そう思っても不思議じゃない。

だけど、オレの目的は違う！

「これは……！？」

シルフが異変に気づいた。

それは、自身の魔力が異常に減っていることだ。

ヴァルセーレの剣。

魔物の子、アースの持つこの剣は、刀身に触れるだけで相手の魔力を吸い取っていく。

もちろん、服越しなら効かないなんて甘いものでも無い。

シルフは精霊。

なら、魔力をある程度奪えば、何とか制圧出来るはずだ。

「……なんて、ですわ」

その瞬間、オレは上から降り注いだ巨大な魔力の奔流に飲み込まれた。

Ｓｉｄｅ　ヒスイ

建物の影からたまにフェイクシルエットが出て来るが、ティアナ本人はなかなか出て来ない。

……どこに行った？

――カサッ

「そこかっ！」

左斜め後ろを撃ち抜く。

だが、そこにいたのは……。

いや、”あった”のは…

「魔力弾！？ハッタリか！」

「とった！」

後ろからティアナの声がした。

回避は……間に合わない！

『ヴァイオレントホーク』

ティアナのクロスミラージュから、オレンジ色の”矢”が放たれる。

「くっ、ゲイルアーク！」

『ウィンディシールド』

風を纏ったラウンドシールドで防ぐ。

「……いや、防ぎきれない！？」

ラウンドシールドに纏われている風に矢が刺さる。

風が矢を流そうとするが、その前に矢からさらに矢が飛び出し、ラウンドシールドにぶつかる。

矢はそのままラウンドシールドを突き破り、俺に命中した。

「まるで荒鷹か…！」

『はい。どうやらマスターの荒鷹をクロスミラージュがエミュレートし、再構成したものと思われます』

「まだまだぁ！」

『コールドータムカイト』

ティアナが上空に八発の魔力弾を放ち、俺を含め広範囲に雨のように降らせて攻撃してきた。

これは鳶氷雨か。

「なかなかやるな！」

「クロスミラージュのおかげですよ！他人の魔法のエミュレートを即興でやっちゃうんですから！」

『いえ、マスターあってのことです。マスターは私にあまり頼りません。それ故にエミュレートに集中出来たのです』

……似た者どうしだな。完璧に。

互いにすごいのに、それを認めようとしない辺り、やはりデバイスは使用者に似るのだろうか？

「隙ありっ！」

『ヴァイオレントホーク』

「隙無しっ！」

ティアナの荒鷹を荒鷹で迎撃する。

いくら荒鷹が貫通力に優れていようと、同じ荒鷹をぶつければたやすく相殺出来る。

二つの荒鷹がぶつかり合い、魔力煙が巻き起こる。

「……そこだ！唸れ風念！」

風の流れを読んで、狙いを定める。

『ストリームアロー』

風の矢を１０本精製し、撃つ。

それは煙の向こうに見えたティアナを貫いた。

だが、その瞬間にそのティアナが魔力となって霧散した。

「シルエットだと！？」

その時、先程ティアナのシルエットがあった場所辺りからティアナが現れた。

『ワールクロウ』

ティアナがジャンプし、俺の上をとると、クロスミラージュから魔力弾を放つ。

魔力弾が俺の足元に当たると、魔力弾が炸裂し、小さな爆発が起こる。

「旋風鴉（つむじがらす）…！」

旋風鴉は、ジャンプして地面に向かって矢を放ち、矢が地面に着弾すると同時に着弾点を中心とした小型の竜巻を起こす技だ。

ティアナは竜巻の代わりに小型の魔力爆発を起こして代用したようだ。

すんでのところで回避したため、ダメージは回避出来たが、体勢が崩れた。

「今がチャンス！クロスミラージュ！」

『カートリッジロード。ヘブンズクレイン』

俺の上空高くに魔力スフィアを撃つティアナ。

魔力スフィアは上空で砲撃に変換され、俺に向かって撃ち出された。

「ぐっ……荒鷹・フルパワー！」

それに対し、俺は荒鷹を全力で放ち、さらにウィンディシールドを展開する。

ティアナの天鶴は、俺の荒鷹を飲み込むことが出来ずに、拡散してしまった。

「そ、んな……！？」

「同じ技を使っているなら、勝負の明暗を分けるのは技量の差だ。ティアナならまだまだこの技の威力を上げられるだろう。頑張れよ」

「……あ、はい」

ティアナが呆けた様子で答える。

恐らく、さっきの天鶴に全力を篭めていたんだろう。今は、緊張が

途切れてしまっているみたいだな。

……そう言えば、シルフと吼太の戦いはどうなっているかな？

Ｓｉｄｅ　三人称

「は～な～せ～！」

「嫌ですわ～♪」

ヒスイとティアナが戻ると、そこではシルフが吼太を愛でていた。

具体的には、ネコミミ、尻尾、肉球を付けた吼太を、シルフが抱き抱えてほお擦りしていた。

「吼太……負けたのか……」

「……ねぇ、オレってチートだよね？チートだよね？」

「……」

ヒスイは答えられなかった。

吼太は強い。ユニゾンしたヒスイより強いはずだ。

当然シルフ単体ならユニゾンしたヒスイより戦力は格段に下がるはずだ。

なのに、結果がこれである。

もしかしたら、今の吼太なら俺でも倒せるんじゃないか？

そうヒスイが考えてしまうのも無理ないだろう。

「えへへ……抵抗出来ないコータ君萌え～……可愛いなぁ……でへへ」

なのははなのはで、女の人として行っちゃいけない領域に片足を突っ込んでいる状態だ。

これがあのエースオブエースだと言っても、誰も信じないだろう。

ティアナはシルフに羨望と嫉妬の眼差しを向けていた。

想い人を好き勝手にしていることを羨ましく思うと同時に、シルフの行動力とプロポーションに嫉妬していたのだ。

後にヒスイは語る。

「あの眼差しはフルパワーの荒鷹以上の貫通力を持っていたに違いない」と。

作者的には、嫉妬変性剣ならぬ嫉妬変性弾を使ったら凄まじい威力になるんじゃないかと思っていたりする。

かくして、吼太に非チート疑惑が掛かりつつも、ヒスイ、シルフ、ティアナの三人は各々の目的を果たしたのだった。

# 番外編　流星の射手、烈風の双弓士に教えを乞うのこと（後書き）

なっぺ「後書き座談会ぞよ。くるしゅうない」

吼太「負けた……ｏｒｚ」

なっぺ「今回の三つの出来事！

ひとぉつ！ヒスイとシルフが、吼太の世界に遊びに来た！

ふたぁつ！ティアナが、新しい技を覚えた！

みっつ！吼太に、非チート疑惑が発生した！」

吼太「……チート……のはずだよな……」

なっぺ「まぁ吼太の場合、あぁいう女性が相手の場合は極端に弱くなるからね。仕方ない仕方ない」

吼太「うぅ……」

ベス「私も今回は予想外でした」

なっぺ「まぁ、バリアジャケットも無かったし、仕方ないのは本当なんだけどね。要みたいに慣れてるわけじゃないし」

ベス「最近、吼太さんが弱い疑惑がだんだん強くなっている気がするのですが」

なっぺ「実力は上がってるよ。相手が悪いだけ。例えば……行け！キングギ〇ラ！」

ギド〇「グギャー！」

吼太「るっさい！黙ってろ！」

〇ドラ「グギャー！？」

なっぺ「キン〇ギドラぐらいなら生身の一撃で原子崩壊……まではさすがにいかないけど、普通にノックダウン出来る」

ベス「ならなんでシルフさんに惨敗してるんですか」

なっぺ「だから相性が悪かったんだよ。感想感謝コーナー！」

吼太「仮面ライダーディケイドさん、霊亀さん、バルディッシュさん、七つ夜&夜つ七さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、リオン・マグナスさん、サーペントさん、ユウキさん、ベルワンさん、ＶＡＺＵさん、緋水さん、てっちゃんさん、黒龍さん、毬藻さん、ＡＩＲＳさん、雨季さん、ＳＲＸさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、通りすがりさん、鮮血の刻印さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「仮面ライダーディケイドさんからは吼太にすべてを否定できる程度の能力を、リオン・マグナスさんからは吼太に活力剤と精力剤と学ランブルマ、ラバーズに吼太だけに効く天の鎖（エルキドゥ）、キャロにバハムート零式を、サーペントさんからはＧＡＮＴＺに出てくるハンドガンとショットガンに、ひぐらしのなく頃に出てくるエンジェルモートの制服を、緋水さんからは吼太と詩音にウェディングドレスを、てっちゃんさんからは南国リゾート別荘付きの吼太が許した相

手しか入れない星を、黒龍さんからはソラが作ったラーメン、ハンバーグ、スパゲッティ、ステーキ、シチュー、魚料理全般、中華料理フルコース、フランス料理フルコース、イタリア料理フルコース、４メートルの巨大ケーキ、クッキーとフェイトの作った物体Xを、通りすがりさんからはココロパフュームを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「……星？」

なっぺ「星が贈られてきたね」←ラーメン食べてる

吼太「いやいやいやいや！星って贈り物じゃないだろ！」

なっぺ「贈られて来たんだから仕方ない。さぁ吼太。これを着るんだ！」

吼太「……学ラン？いいけど」

で

吼太「……似合うか？」

なっぺ「うん似合う。可愛い可愛い。なんか女の娘が男ぶって学ラン着てる感じ」

吼太「ドちくしょぉぁぁぁぁぁ！！」

なっぺ「次はウェディングドレス～」

吼太「……ぐすん／／／／／」

なっぺ「ゴメンゴメン。はい、ココロパフューム」

吼太「プリキュアに変身しろってかこのやろう」

なっぺ「……エンジェルモート！間髪入れずに発表だぁぁ！」

吼太「とりあえず、厳正な抽選（あみだくじ）の結果、今回のコラボは以下の通りとなりました…恥ずかしいよ…／／／／／／」

1：バルディッシュさん（今回）

2：霊亀さん

3：香崎　真琴さん

4：リオン・マグナスさん

5：ライさん

6：ベルワンさん

7：朱神優希さん

なっぺ「惜しくも選ばれなかった方は、次回に持ち越しとなります。また、今回ご応募して頂きましたお礼に、【ファンストメンバー自由貸出権利】をプレゼントします。これは、この魔法少女リリカル

なのは～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓｔｏｒｙ～に登場するキャラクターを何人でも自由に使用しても構わないという権利になります。宜しければ是非お使い下さい」

吼太「誰も使わないだろ」

なっぺ「そーゆーこと言わないでっ！？……オホン！たくさんのご応募ありがとうございました！私自身、『えっ、こんなに！？』と驚いてしまいました。そして、お手数ですがリオン・マグナスさんとベルワンさんには登場させたいキャラの説明をメッセージにて送ってもらうこととなります。他にも、『こんな話にしてくれ』『〇〇の□□という技を使ってくれ』というのがありましたら、その作者様のもののみリクエストを受け付けます」

ベス「つまり、コラボに当選した作者さんにはシチュエーションやストーリーの指定権利があるということになりますね」

吼太「正確なキャラ設定があれば執筆が早くなるから、こちらはしっかりと送ってくれ。詳細なら詳細な程いいぞ」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　シャウトせよ！己の気持ちを！（前書き）

まず最初に。

毬藻さんごめんなさい。

キャラの名前勝手に出してしまいました。

今回は霊亀さんの【異世界で修行！】とのコラボになります。

# 番外編　シャウトせよ！己の気持ちを！

Ｓｉｄｅ　ライト

ピンポーン

「ライト、今ちょっと手が離せないから出てくれない？」

華琳は何かの作業をしているのか、俺にそう言ってきた。

「あぁ」

扉を開けてみるとそこには……

リオレウスがいた。

……いやいやいや。

待て待て。おかしい。

これはアレだ。仕事で疲れているんだ。

「父上、どうか……竜…種…？」

そんな俺の希望は、エリオによって打ち砕かれた。

「グルル……」

リオレウスが魔法陣に包まれて消えた。

こんな風にリオレウスを”召喚”出来るのは……

「吼太か」

「正解だ」

扉の陰から吼太が現れた。

Ｓｉｄｅ　吼太

サプライズドッキリは成功したかな？

ちなみにカムミラージュ使ったから周りにはバレてない。

さて、と。

「ライト。ちょっとエリオ貸せ」

「なんで？」

「いや、ちょっとした軽いＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをするだけだ」

「今発音が明らかにおかしかったぞ」

「気のせいだ」

オレは平和的なＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたいだけなんだがな。

「父上、僕は別に……」

「甘いぞエリオ。この新フラグ神はな？存在するだけで男女関係無しにフラグを建てていく女装フラグ神なんだぞ？父親として見逃せない」

「よく言ったライト。まずはお前からぶん殴る」

「……拒否権は？」

「無いっ！」

Ｓｉｄｅ　三人称

その後、吼太、ライト、エリオは吼太が持ってきた修練の門の中に移動していた。

吼太はエリオの見極めのため、ライトは「エリオをほって置けない」といった理由からだ。

「さて、先ずはこれだ。コール！シャウトモン！」

魔法陣が展開され、中から赤い生命体、シャウトモンが現れる。

「生物……？でも何の……？」

エリオから奇異な物を見る目線がシャウトモンに向けられる。

「……なんだよ？そんなに見んなよ」

「喋った！？」

「さて、エリオ。お前にはこのシャウトモンと戦ってもらう」

「アァ？このガキと俺が戦うのかよコータ？」

シャウトモンが不思議そうに言う。

「後でデジノワやるから」

「よっしゃぁぁぁぁ！行くぜ！」

吼太の一言を聞いた瞬間に、シャウトモンがやる気を出した。

何を隠そう、デジノワはシャウトモンの大好物。
ヒマさえあればデジノワを食べている程だ。

「でも、何か弱そう……」

エリオが言う。

「なにをぉ!?見てろよ!ラウディロッカァァーーー!!!」

近くの、体長の倍はあろうかという大きな岩に向かって、手に持ったマイクをぶつけるシャウトモン。

岩は与えられた衝撃に耐えられずに、たちまち砕け散ってしまった。

「え……？」

エリオの人生経験からすれば、岩を砕く事自体は珍しくない。

信じられなかったのは、”目の前の小さな生物がそれを成し遂げた”ことだ。

「へっへ～。見たか！俺はキングになるデジモンだぜ？」

シャウトモンがご機嫌な様子でエリオに言う。

「まぁ、シャウトモンの実力が分かった辺りで……。シャウトモン、お前にはコイツの心構えを見てほしいんだ」

「心構えェ～？なんでそんな？」

「まぁいいから。いっちょまえの男かどうか、お前が見極めてくれ」

「……まぁ、他ならねェコータの頼みだからいいけどよ」

シャウトモンがエリオに向けてマイクを構える。

「エリオ、槍を構えろ。シャウトモンは手加減なんてしてくれねぇぞ」

吼太が言う。

次の瞬間、シャウトモンはエリオに肉薄し、エリオの腹部を殴打した。

「がはっ！？」

「エリオ！」

心配に思ったライトがエリオに駆け寄る。

「……おいコータ。コイツ下手したら死んじまうぜ…？」

「構わねぇ。それで死ぬなら、そこまでの奴だったってことだ」

「！　テメェ……！」

ライトが狼男（ワーウルフ）と化して、吼太に襲い掛かる。

「チッ…ガードスキル！ハンドソニック！ｖｅｒ５！！」

禍々しい印象を持つ、ハサミのように二つの刃を持つハンドソニックでライトの両手の爪による攻撃を防ぐ。

「コータ！」

「オレに構うなシャウトモン！お前はエリオを！」

シャウトモンが駆け寄ろうとするのを制する吼太。

「……チッ。分かったよ」

そう言い、エリオを抱えて遠くに離れるシャウトモン。

「待て！」

ライトが急いで追い掛けようとするが……

「お前の相手はオレだっての！」

吼太がジッパーから取り出したデンガッシャー・ブーメランモードにより行動を阻止される。

その間にシャウトモンとエリオは見えない場所まで行ってしまった。

「邪魔すんな！」

「邪魔されたくなかったらオレを倒してからにしな！」

『ダウンロード、ワーガルルモン、メタビー、Ｈｉ－νガンダム。

武装召喚（リアライズ）』

吼太が武装召喚で脚部をワーガルルモン、両腕をメタビー、さらに背中にＨｉ－νガンダムのフィンファンネルを装備し、走り回りながらライトに左腕のサブマシンガンから弾丸を連射する。

「そんな弾効くか！」

だが、防御自慢のライトには効かないらしい。

吼太もそれを感じたのか、左腕の武装召喚を解除してハンドソニックｖｅｒ５を再び装備する。

「（しっかりやれよ、シャウトモン！）」

ところかわって、こちらはシャウトモンとエリオ。

「うわっぷ！？」

エリオが水をかけられて飛び起きる。

「お、起きた起きた。よかったぜ～。死んじまったら後味悪ぃから

な」

シャウトモンが笑顔で言うが、エリオは敵対心丸出しである。

「あー……その、悪かったよ。いきなり叩いちまってさ」

「……」

エリオは応えない。

当然だ。いきなり腹部を殴打するような存在を信用しろというのはどだい無理な話である。

シャウトモンもそれは分かっているのか、頬をかきながら話を続ける。

「命令されたから～、なんてこと言うつもりは無いけどさ。でも吼太も多分考えあってのことだと思うんだ」

エリオは目を逸らさない。

困ったのはシャウトモンだ。

そもそもシャウトモンは説得のような、頭を使う作業は比較的苦手なのだ。

シャウトモン自身も、何故自分がエリオのことを見極めなければいけないのか、分からなかった。

「そういやお前、強くなりたいとか聞いたけど、何のためなんだ？」

「……」

再びシャウトモンが問い掛けるが、エリオは応えない。

「……まぁ、話したくないなら今はいいけどよ」

そう言うと、シャウトモンは地面に寝転がった。

Ｓｉｄｅ　エリオ

分からなかった。

突然、父上の友達みたいな人が現れて、その人に見たことも無いような世界に連れて来られて、痛い思いをして…。

僕が何をしたっていうの？

とにかく分からなかった。

なんで強くなりたいのか…？

それは……

父上がかっこよく見えた。

父上が遥か高みにいるのが、誇らしかった。

……父上みたいに、なりたかった。

「僕は……父上みたいに、強く……なりたい」

父上みたいに強くなって、いろんな人達を護りたい。

今の僕じゃ出来ないだろうけど、いつか……必ず！

Ｓｉｄｅ　吼太

「ガードスキル、ディレイ！」

高速移動のガードスキル、ディレイでライトの後ろに回って殴り掛かる。

「効くか！」

だが、やっぱり拳の威力が低く、ライトの防御は貫けない。

「……おいコータ。なんでリミッターを外さない？嘗めてんのか？」

「へっ。外してほしけりゃそれだけの力を見せてみな」

ぶっちゃけるなら、リミッターを外さない理由はちゃんと別にある。

ただ、”今の目的”に適しているのはリミッターがかかっている状態だから外さないだけだ。

「上等だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

弓羅鬼に変身したライトが雷装鋼覇で攻撃してくる。

「チッ……」

なんとか避けようとするが、避けきれずに右肩の装甲が破壊される。

本来のクロスオーバーフォームならどんなに悪くても輝が入るぐらいだろうが、リミッターがかかってる今の状態じゃこの強度が限界だ。

「やるな……！」

さて、シャウトモンは上手くやってくれてるかな？

Ｓｉｄｅ　三人称

「だぁぁぁぁっ！イライラすんなチクショーッ！エリオ！お前も男ならちゃんと言いたいこと言えよ！」

業を煮やしたシャウトモンが、叫ぶように言う。

「……シャウトモンさん。構えてください」

「しっかり大きな……へ？」

エリオが答えたことに、ようやく気づくシャウトモン。

「僕は強くなりたい。父上のように！」

「ヘッ、ようやく言いやがったな。だけどそれじゃ足りねぇ！どうせなるなら父上を超えてやれ！」

シャウトモンが叫ぶ。

「はいっ！！！」

エリオも元気に答える。

元々、情熱を力に変えて熱く戦うのがシャウトモンというデジモンだ。

故に、一度熱い流れに持って行ってしまえば、後はシャウトモンの得意分野だ。

「行くぜエリオ！ソウルクラッシャー！」

シャウトモンが胸の熱い気持ちを衝撃波にして飛ばす。

普通なら下がって様子を見るのが正解だ。

だが、エリオはソウルクラッシャーを真っ向から受けた。

凄まじい衝撃波がエリオに襲い掛かる。

しかし、エリオは踏み止まった。

そして、ソウルクラッシャーを放ち隙だらけのシャウトモンを、突きで攻撃した。

「ぐぅっ！？やるじゃねぇかエリオ！！」

「はい！シャウトモンさん！」

シャウトモンはマイクを、エリオは槍を構える。

そして、二人は熱き魂はまたぶつかり合った。

ところかわって、吼太とライト。

こちらは、シャウトモンとエリオのような綺麗な戦いとはとても言えなかった。

吼太は、クロスオーバーフォームの鎧を六割は破壊されており、かたやライトはせいぜい当て身程度。

いくら吼太がチートで、実力に差があろうと、受けたダメージは０にはならない。

「……いい加減にしろ！なんでそんなボロボロになっても回復しない！？第一、お前なら俺を倒すぐらいわけないだろ！？」

ライトが叫ぶ。

ライトにしても、無抵抗な人間を嬲る趣味など無い。

だが、吼太はそれでも……

「……ハッ、怖じけづいたか？フラグ神？」

「……テメェ！重力の槍（グラビティコア）！！」

ライトが重力を操る槍、重力の槍（グラビティコア）を発動し、吼太に重力をかける。

「ぐぅぅぅ……まだ、まだだ！ガードスキル、ハンドソニックｖｅｒ４！」

ハンドソニックｖｅｒ４によって発生した、金属製の華を傘代わりにして重力の槍を防ぐ吼太。

「……あくまで本気は出さねぇか。ならいいさ。これで終わりにしてやる！！！」

時空間の穴が生まれ、中から百万、千万……いや、一億はあろうかという無数の電撃の槍が現れる。

それを吼太が見上げる。

が、構えたのはハンドソニックｖｅｒ４一本のみ。

「行くぞ！億の電撃槍（ビガーズス・ハスタ・ビリオン）！！」

無数の槍が吼太に向けて放たれた。

「……トゥードォ！！！」

『限定一秒、オールリミッター…リリース』

トゥードの音声が響いた瞬間、吼太の身体の中の力が”解放”される。

「うぉりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ハンドソニックを全力で、横一文字に振るう吼太。

その一撃は時空を、次元を巻き込み、強力な【斬撃】となった。

その斬撃と億の電撃槍がぶつかり、大爆発が起こる。

「ぐっ……腕の一振りだけで億の電撃槍を！？」

大爆発により発生した衝撃波に、思わず手で頭を庇うライト。

だが、次の瞬間に気づいた。

自身の後ろで首に刃を当てている存在に。

「……分かったか…オレがその気になりゃあすぐに終わっちまうだろ。お前をエリオから引きはがして〝時間稼ぎ〟するにはあーいうやり方しか思い付かなかったんだよ」

「……流石はチート魔導師、か。にしても時間稼ぎ？」

ライトが吼太の台詞の一つに気づく。

「あぁ。……来たな」

吼太がライトの首に当てていたハンドソニックで、ある方角を指す。

そこから、シャウトモンとシャウトモンに抱えられたエリオが走ってきた。

「エリオ！」

「父上！」

抱き合う親子。ほほえましいとはこういうものを言うのだろう。

「大丈夫か！？ケガ無いか！？」

「ケガは少し……あ、でも大丈夫です！」

エリオが笑顔で答える。

「……で、シャウトモン。どうだった？」

「最初はなよっちい奴だな～、って思ってたけどよォ、意外に根性あるぜ。あいつのロックの魂もなかなかなもんだぜ！」

シャウトモンが笑顔で言う。

こと、情熱や魂にかけては敏感なシャウトモンだ。それに、シャウトモンの性格から考えても嘘を言うとは思えない。

「そうか……。なら安心だな」

吼太も笑顔を浮かべる。

そしてエリオに近づいて、一言言った。

「娘を頼むぞ」

……

「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！？」」」

驚きの声はライトとエリオ、そして意外にもシャウトモンからも上がった。

よほど驚いたのか、三人はただただ茫然としていた。

「……え？なんでそんなに驚いてんの？」

この状況を作った吼太は、「わけがわからないよ」とでも言わんばかりに困惑している。

「なんで今までの流れからあの発言に繋がったんだよオイ！？」

「娘って何の話ですか！？というよりえぇぇ！！？」

「コータ、お前いつの間に子供作ったんだァァァァァァ！！？」

ライト、エリオ、シャウトモンが次々に吼太に質問する。

「……あれ？今回オレが来た目的が【プラムに「お嫁さんになる」って言わせたエリオの見極め】だって……言わなかったっけ？」

「「言ってない！」」

「……あれー？」

吼太が首を傾げる。

と、言うのも吼太は超絶窮極クラスのうっかりさん。

なので重要なことを言い忘れたりするのはよくある話だったりする。

「まぁいっか。プラムを頼んだぞエリオ。プラムはあぁ見えて寂しがりやだからな。ちゃんと見ててやってくれ」

「い、いやあの！えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

再びエリオの絶叫が響き渡った。

こうしてエリオは、父親（コータ）に認めてもらい、晴れてプラムとの交際の許可を得たのだった。

「え！？これこういう話！？モノローグがおかしいですよ！！」

黙れ次期フラグ神。

## 番外編　シャウトせよ！己の気持ちを！（後書き）

なっぺ「あと！がき！ざだんかい！あ～と～がき～～♪」↑タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～～♪のリズムで

吼太「コンボやめい」

なっぺ「歌は気にするな」

吼太「無理言うな」

なっぺ「君達はみょうなものを気にするんだね。わけがわからないよ」

吼太「QB止めろ」

なっぺ「さて、まず今話を読んだ皆さん。皆さんの中にはこういった人がいるのでは無いでしょうか？」

「プラムって誰？」

なっぺ「ぶっちゃけ説明が面倒なんで、毬藻さんの【D．C．？＆なのは　～時を越えし者の物語～】の中の以下の二話を読んでください。今回のことが起こった理由がだいたいわかるようになると思います」

・番外編：何で、こんな事になったのか考えよう

・番外編：流は死亡グラフの回避は出来ないｗｗｗ

吼太「さりげなく宣伝だよな」

なっぺ「だって説明めんどくさいんだもん。そして今回ライトは勘違いお疲れ様でした」

吼太「痛かったぞ」

なっぺ「怒りに任せたライトの猛攻を『痛かったぞ』で済ませんなよ」

吼太「まぁ、死ぬほどじゃなかったけどな」

なっぺ「皆さん。吼太はクロスオーバーフォームの硬い鎧が無いとかなり脆いんです」

ベス「何故？」

なっぺ「身体防御の基礎となる、”魔力を纏う”ってことが致命的に下手。つーより出来ない。シャイニング・トラペゾヘドロンから貰ってる借り物の魔力だからね。細かな調整が出来ないんだよ」

ベス「では何故クロスオーバーフォームが可能なのですか？」

なっぺ「ファンスト最強の一角、理不尽の象徴、窮極の名を欲しいままにする人型兼アクセサリ型汎用インテリジェントデバイス、トゥードさんのせいです」

トゥード「魔力制御は得意分野ですので」

詩音「すごいねフォーティ♪」

トゥード「はい、マスター詩音」

なっぺ「さぁ、日輪の力を借りて今必殺の、感想感謝コーナー！」

吼太「殺してどうする。霊亀さん、天照大神さん、香崎　真琴さん、鮮血の刻印さん、バルディッシュさん、七つ夜＆夜つ七さん、ライさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、リオン・マグナスさん、雨季さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、ＳＲＸさん、黒龍さん、緋水さん、てっちゃんさん、朱神優希さん、ユウキさん、毬藻さん、サーペントさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「鮮血の刻印さんからはネコミミフリルメイド服を、リオン・マグナスさんからは魔力をいれるとリオン・マグナスさんのところの女性陣の誰かを呼び出せる装置と浴衣（悠二謹製の女性物。コータ専用）を、緋水さんからは吼太と詩音にキリン装備（女性用）を、てっちゃんさんからは犬耳と柴犬のような丸まった尻尾と秋田犬のような栗色のボディースーツと肉球ハンドを、サーペントさんからは呪いの玉手箱と全ての世界の必殺料理人が作ったフルコースを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「フルコースか。……いただきます」

ガツガツガツ

吼太「ご馳走様でした」

なっぺ「……え？それだけ？」

吼太「アリスの料理で胃が強化されてたらしい。味さえ我慢すればなんとかなった」

なっぺ「……呪いの玉手箱は？」

呪いの玉手箱：開けた人は一日の間性別に関係なく好意を持たれ、襲われるようになる。ちなみに吼太しか開けられない。

吼太「……シャイニング・トラペゾヘドロン！」

なっぺ「あ！きたね！」

吼太「消したもん勝ちだ」

なっぺ「……まぁ、吼太にとっては日常茶飯事だから開けようと開けなかろうと関係無いか」

吼太「待てやコラ」

なっぺ「さて、コスプレターイム！まずはネコミミフリルメイド服！」

吼太「にゃ！？／／／／／／／」

なっぺ「個人的な気分で、装備したらぬこ言葉になります」

吼太「何すんだ！……にゃ／／／／／／」

なっぺ「次は日本の文化、ＹＵ☆ＫＡ☆ＴＡ！」

吼太「サイズはピッタリだけど……／／／／／」

なっぺ「続いてはキリン装備」

詩音「似合うかなー？」

吼太「な、なんで男物が無いんだよ！？／／／／／／」

なっぺ「吼太だから。……あー、麟さんシルフさん。おさわりは厳禁ですよー。写真だけです。ルール破ったらゴルディオンハリセンの刑ですからねー。次は犬コス！鳴き声だってあるぜよ」

吼太「や、優しく……シテ欲しいわん……／／／／…ってなんだ！？口が勝手に！？」

なっぺ「オレの気分。あ、そこの人。後でゴルディオンハリセンな」

ベス「次回は？」

なっぺ「香崎　真琴さんとのコラボだね。チート夫婦とジェイルが暴れ回るでしょう」

吼太「うわぁぁぁぁぁぁ……」↑ｏｒｚ

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　夫婦の依頼（前書き）

今回は香崎　真琴さんの【転生夫婦の並行世界旅行】とのコラボになります。

……ミスを連発して投稿が出来ていませんでした。すいません。

# 番外編　夫婦の依頼

Ｓｉｄｅ　吼太

「うおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

叫び声あげて何やってるかって？

仕事だよ仕事。

時空管理局本局特殊異変対処部隊……まぁ、つまるところ本来のオレの部隊なんだが。

そこの任務が溜まってたから、一気に処理したんだけど、その分報告書やらレポートやらを一気に仕上げる必要が出たわけだ。

だけど、どういうわけだかトゥードが異世界に出かけちまって、仕方なく一人でやってるんだ。

ちなみにリームはリームで副隊長だから、別の仕事が満載で、手伝ってもらうわけにはいかない。

にしてもトゥードはどこに行ってんだ？確か「セルシア様が云々」って言ってたけど、セルシアって誰だ？チートか？

まぁ、そんなわけでナイアの時計を使ってやってるわけだが……。

「減らねぇ……」

書類が満載すぎて、減ってる気がしない。

それでも頑張ってやり続けて……

ようやく、最後の報告書にハンコを押した。

「終わった～……」

「あ、ちょっと待って……僕も終わり！」

リームも終わったらしい。

まぁ、元々の枚数はオレと比べればかなり少なかったけど、それでも速い。

時間にして……１ｍも積み重なった書類を１０秒ぐらいで済ませてることになる。

「まぁ、とりあえず終わったわけだし、休憩を……」

とか考えていたら、目の前に魔法陣が展開される。

直感が告げる。

逃げなきゃダメだ逃げなきゃダメだ、と。

「リーム！逃げるぞ！」

「え？」

状況を理解出来ていないリームを抱き抱えて移動しようとする。

だが、次の瞬間オレは見た。

扉のところから、男女三人がこっそりこちらをカメラで撮っていることに。

「【少女を拉致る小学生】　を　激写　したぞ　」↑アイスソード的ノリ

「「イェーイ！」」

「……何してんだ？夫婦にジェイル」

オレが言うと、三人が入ってくる。

それに従い、床の魔法陣が消え去る。

どうやら、あの魔法陣はダミーだったらしい。

「で、今回はなんだ？コスプレはお断りだからな」

「帰れ～！とか言わないの？」

百合姫が不思議そうに言う。

「言って帰るような奴じゃないだろ？お前らは。ならさっさと用事を済ませて帰ってもらったほうが楽そうだからな」

「賢明だがつまらない判断だな」

ジェイルが言う。つまらなくて悪かったな。

「じゃ、ついて来てくれ」

「あ、ちょっと待ってくれ。多分もうすぐトゥードが帰ってくるから……」

オレが言うやいなや、空間を砕きトゥードが現れる。

「ただ今帰りました。マスター」

「……今回はどんな方法で帰ってきたんだ？」

「並行世界の壁を打ち砕いてきました。拳で」

「「さすがトゥードｗｗｗ」」

夫婦が楽しそうに言う。

……オレは心配だよ。本来は処理補助とか召喚補助がメインのはずだったのに、いつの間にか何でも出来るようになっちゃってたし…。

「それじゃ行くぞ」

鈴が言うと、巨大な魔法陣が開き、オレ達は転送された。

「着いたか」

気がつくと、そこはよく分からない、奇妙な空間になっていた。

「俺の創造世界（クリエイトワールド）で隔離したんだ。面倒にならないようにな」

「はぁ？創造世界使うような……」

そこまで言った瞬間に、後頭部に嫌な気配を感じ、ハンドソニックを素早く振るう。

斬り裂いたのは、銃の弾丸。

本来、ハンドソニックはこういった対攻撃武器の意味合いが強い。

だからこそ不意の反応でもうまくいったのだろう。

そして、その銃弾を撃ってきた方向を見る。

そこには、銃を構えた一人の男が立っていた。

「目的はただ一つだ。目の前の奴を倒してくれたまえ」

ジェイルが、どこから出したのか細長い棒で相手を指し示す。

「……なんでオレがやる必要が？お前らいれば十分だろ？」

「まぁ、やれば分かるさ」

鈴が不敵な笑みを浮かべる。

……まぁいいか。

「行くぞトゥード」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』

「変身ッ！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ&Ａｒｍｄ　ｕｐ!!』

「「「ユニゾン・イン！」」」

いつも通りに加えて、リームや魔導書娘達もユニゾンした、現時点での最強形態になる。

クロスオーバーフォームの鎧なら、並の攻撃は効かないからな。

……とはいえ、なんでオレが？オレがやる必要性が……

「あ、そうそう。その娘、それでも女の子だから」

……は？

あの、目の前で油断なく銃とナイフ構えているやつが女の子？
た、確かに髪は長いし、顔は整ってるけど……胸が無いし、カッコイイ系だったから勘違いしちまったよ。
……ってあれ？まさか……
「お前ら……オレを呼んだ理由って……」
「「「【スーパーバトル映像！～女の子みたいな男の子と、男みたいな女の子の戦い～】を撮るためですが何か？」」」
いつの間に用意したのか、カメラやら集音マイクやら照明やらを用意していた三人が口を揃えて言った。
「どうせそんなことだろうと思ったよドチクショウ！」
「あ、分かってると思うけど逃げられないからｗｗｗ」
「まぁせいぜい頑張ってくれたまえｗｗｗ」
「いい映像期待してるわよ～ｗｗｗ」
コイツらは……
「……帰る！今すぐ帰ってやるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！」
ギガドリルブレイクで創造世界をこじ開けようとしたものの、やは

りびくともしない。

……仕方ない。あっち倒すほうが楽か。

「……話は済んだか？」

さっきから暇そうに立っていた、〝奴〟が言う。

「……まぁ一応」

「それなら始めるぞ。私も早くここから出たいからな！」

奴がナイフ片手に突進してきた。

「待て待て待て！お前の名前は！？」

「そんなこと聞いてどうする！」

ナイフを素早く振り攻撃してくるが、かろうじて避け続ける。

コイツのナイフ……というより能力か？なんか当たったらマズイ気がする。

「名前が無いと呼ぶのに困るだろうが！」

「なら簡単な話だ！お前が私に殺されればいい！」

「そんな簡単な話じゃねぇだろ！」

『ダウンロード、サーベラス・イグナイト。武装召喚（リアライズ）』

サーベラス・イグナイトのイグナイトパイクを左腕に武装召喚し、攻撃してきた奴にぶつける。

奴はイグナイトパイクをすんでのところで避けて、しかし距離が多少離れた。

それを見越してオレは、右腕の本来の武器を構える。

クロスオーバーフォームの両腕は、武装召喚の応用でインペリアルドラモン・ファイターモードのものを装備している。

そして、その右腕には本来、専用の武装があるのだ。

砲身を構え、技の名前と共にエネルギーを発射する。

「ポジトロンレーザー!!!」

だが、相手は銃の弾を素早く入れ替えながら、回避してしまう。

奴が回避し終わるのと、ポジトロンレーザーが奴の隣を通りすぎるのは、ほぼ同じだった。

「あのタイミングで避けた!?」

「意外に苦戦してるわね。もしかして女性だから手加減してるとか？」

百合姫が言う。

「そんなわけない！……多分」

「貴様……嘗めた真似をォ！」

奴が高速でナイフを振るい、オレを斬り裂こうとしてくる。

……ならこれだ！

ジッパーからリュウノアギトを取り出す。

横殴りで気絶させる。これなら手っ取り早く終わるはずだ。

「……」

だが、オレは見た。

奴が、オレが大剣を振る瞬間に笑ったのを。

次の瞬間、リュウノアギトは砂塵に還ってしまった。

いや、消させられたのだ。目の前の人物によって。

答えを出す者（アンサートーカー）によれば、あれは【直死の魔眼】と言うらしい。最も、本来のものにある程度手を加えているらしいが。

確かあれって、何でも切れたり、消したり出来るんだよな？よくわかんねぇけど。

「残念だったな。今度はこちらの番だ！私の野望のために……消えてもらう！」

ナイフを超高速で振るい、オレを四方八方から狙う。

「野望だぁ！？何だよ野望って！」

答えを出す者で”攻撃を回避するための答え”を出し続けながら聞いてみる。

「いいだろう！冥土の土産に教えてやる！私の望み、それは……」

「それは……？」

「美少女のような美少年ハーレムを作ることだ！」

……

「ろくでもねぇえええええええええええええええ！！！」

思わず叫んでしまったオレは悪くないはず。

「な！？ろ、ろくでもないとはなんだ！ろくでもないとは！」

「言った通りの意味だよ！」

……ん？まさか……

確認のために、ナイアの時計で”変態さん（仮称）”の固有時間を止めて、撮影及び編集作業をしている夫婦達の元に向かう。

「……ん？なんだ、もうベッドシーンか？〇ンド〇ムは使わないほうが個人的には好みなのだが」

「全力で待てや」

このジェイルは……。

っとヤバイヤバイ。危うく目的を忘れるとこだった。

「お前ら。まさかアイツの野望……つーか欲望。知っててオレ呼んだろ」

……。

「「「ナンノコトカナー？」」」

憎い！

コイツらにツッコミを入れられないオレの未熟さが憎いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！

「おいおい。突っ込むなら私の〇〇〇〇にだな…」

「黙れ歩く１８禁！！！もう嫌だ！オレは逃げる！絶対に逃げるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

両肩に金色に輝くドリルを顕現させ、その二つを一つに重ねて、一つのドリルにする。

「超銀河ァ！ギガァ、ドリルゥ、ブレイクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーーー！！！！！」

超銀河ギガドリルブレイク。惑星をも塵へと還す超弩級の必殺技だ。

…………創造世界を貫くには至らなかったけどな！ドチクショウ！！！

「「「諦めろフラグ上位神ｗｗｗｗｗ」」」

「フラグ上位神言うなァァァァァァァァァァァァァァ！！！！？」

で、結局また戦うことになったわけだ。

「んじゃ、解除っと」

変態さんの時間が再び動きはじめる。

「――――貴様！いい加減にしろ！貴様も女なら分かるだろ！男の娘の良さが！！」

……ん？

もしかしなくてもコイツ……オレを女だって考えてる？

「いや、オレは女……！」

いや待て！ここでオレが男だとバラしたら目の前の変態さんは確実にオレを”獲物（性的な意味で）”と見なすに違いない！

ならばバラさないほうが……

ダメだ！どっちにせよ、夫婦達がオレを弄ぶネタが増えるだけだ！

ならやることはただ一つ！！！

「今すぐぶっ飛ばす！それで終わりだ！トゥードォ！」

『フルドライブスタート』

鎧の各部が展開し、過剰に供給されるエネルギーを放出し始める。

「一気に決める！！魔王×６、相乗掛合（クロスオーバー）！！！」

十ッ星神器【魔王】。使い手の思いを力に変える、いわば生きた神器だ。

その最大装弾数は６発。

それを、相乗掛合（クロスオーバー）によって一つにする。

威力は通常の魔王の６倍。

……いや、それ以上！！

「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

巨大な魔物の形を持った相乗掛合魔王――超魔王とでも呼ぼうか――は、辺りの地面を削りながら変態さんに向かって行く。

「ふっ。ずいぶんなデカブツを出したな。だが……”生きているのなら、神様だって殺してみせる”」

変態さんがナイフで超魔王を刺す。

……いや、”【死】を認識させる”。その瞬間、超魔王は無に帰した。

……でも、それは計算の内だ！

「……！？アイツ、どこにいった！？」

大きさが巨大な遠距離攻撃は、ただ攻撃力が高いだけじゃない。

その大きさを利用して、囮にだって使えるんだよ。

そしてオレは今……

――――ガキン

”奴”の真後ろにいる！

「武装召喚、ソルグラヴィオン！超、重、けぇぇぇぇぇん！！」

ソルグラヴィオンの頭部以外の全てを武装召喚し、ソルグラヴィオンの胸のエンブレムが変形した武器、超重剣から重力子エネルギーを放出し、竜巻へと形作る。

重力子エネルギーの竜巻に巻き込まれた変態さんは、ただただ拘束されるのみ。

それもそのはず。重力子に寿命どころか、死なんてものは存在しない。故に、直死の魔眼では抜けられない。

さりげなく所持していた魔法無効化能力（マジックキャンセル）も、重力子エネルギーは対象範囲外だ。

「ハァァァァッ！超・重・斬！」

超重剣に重力子エネルギーを纏わせ、衝撃波にして竜巻ごと一刀両断する。

さらに超重剣を構え、剣先を竜巻から解放されて墜ちた変態さんに突き付ける。

「超重剣！エルゴストォォォーーーム！！！」

オレの咆哮に呼応し、超重剣から重力子エネルギーが竜巻状の奔流となって変態さんを飲み込んだ。

「うわー、えげつなっ」

「吼太、あなたって【不殺】を貫くって聞いてたけど？」

鈴が素直に感想を言い、百合姫がオレに聞いてきた。

「だから殺してねぇよ。気絶させただけだ」

オレが指差した先には、大の字で寝転がる変態さんがいる。

一応、安否を確認するために近づく。

身体機能に弊害は無いな。うん、よく出来た。

「ぐ……負けた、のか」

気づいたらしく、呻きながら目を開ける変態さん。

「まぁ、対外的に見ればアンタの負けだな。えーっと……」

「ルーチェだ。ルーチェ・イスレロ」

「ルーチェか。いい名前だな。かわいいじゃん」

「か、かわいい!?／／／／／」

なんか変態さん……もとい、ルーチェが赤くなった。風邪か？

「か、かわいいだなんて……初めて……恥ずかしい……でも、この娘は女の子だし……」

「あぁ、そうそう。この少年、吉谷吼太は男だよ」

ふと、ジェイルがそんなことを言った。

……いや、”言ってしまった”。

「……ほう？」

ルーチェの目が切り替わる。

戦士の目から、野獣の目に。

「ベッドは準備おｋだぜ吼太！」

「各種道具もきちんと揃えてあるわｗｗｗ」

「夫婦何してんだよ！？」

「「悪ノリしてるだけですが、何か？」」

夫婦は悪びれる様子も無く言う。

「あ、それと私も参加させてもらおうか」

ジェイルが脱ぎながら言う。

「助けてリーム！オレを助けて！」

リームに助けを求めてみるが……

『ずるい～！僕もコータとヤるんだから～！』

この有様である。

中でアップを始めている魔導書娘達に助けを求めても、まず無駄骨になるだけだろう。

生半可な脱出手段じゃ逃げられないし、【切り札】はこんなところで使いたくない。

『マスター』

「なんだトゥード？」

『諦めましょう』

「……」

後のこと？聞くな。

余談だが、この後にＡＶコーナーに超人気映像作品が誕生したらしい。何でも、【魔導師には、昼の仕事と夜の仕事の二つに役立つ】とか。

……つーかＡＶってなんだ？Ａ Ｖ端子とかなら聞いたことあるから、それか？

まぁ、オレに関係あることじゃないだろうし、別にいいか。

## 番外編　夫婦の依頼（後書き）

今回、ちょっと作者のモチベーションがヤバイんで後書き座談会は休ませてもらいます。すいません。

感想と贈り物、本当にありがとうございます。

次回はリオン・マグナスさんとのコラボになります。

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

## 番外編　超越した馬鹿者共《チート》の領域（前書き）

今回はリオン・マグナスさんの【D，C．？　孤独な転生者と孤独だった魔法使い】とのコラボになります。

たまにはギャグ無しでもいいじゃない。

## 番外編　超越した馬鹿者共《チート》の領域

Ｓｉｄｅ　吼太

「お父様！そちらに！！」

「任せろ！ガードスキル、ハンドソニックｖｅｒ６！」

Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを使って作り上げた新たなハンドソニックを使う。

手の甲に出来ていた両刃の刃は、片刃かつくの字に変化した。

そして腕を力強く振ると、ハンドソニックが手から離れ、高速で回転しながら目の前のガジェットを斬り裂いた。

ハンドソニックｖｅｒ６。本来の目的で考えるなら、【三箇所以上からの攻撃から身を守るための、ブーメラン型ハンドソニック】ということになる。ちなみにブーメランを飛ばしている間に新たなハンドソニックを出せるから、無限に刃を出してバリアよろしく壁にすることも可能だ。まぁもっぱら攻撃に使ってるけど。

「さっすがお父さん！」

「……カッコイイ……」

「ん、ありがとうな」

ミカとライラからお褒めの言葉を受けた。やっぱ嬉しいな。こうい

うの。

……ま、これでもまだまだ要達には敵わないからな。もっと強くなりたい。

『本当、コータは流石だよね～。……えっ！？コータ！』

「ハンドソニッッ！？」

ハンドソニックを通常のｖｅｒ１に直して対応しようとするが、間に合わずにオレは突如開いた時空の穴に吸い込まれた。

……リミッターのバカヤロウ。

Ｓｉｄｅ　悠二

「……本気出せる相手いないかな」

『坊ちゃん。そう無理を言うのは……』

愛機のシャルティエ――愛称シャル――が僕に言う。

まぁ確かにな。原作キャラじゃ力不足だし。

また誰か英霊でも喚ぶかな？

そんなことを考えていたら……

「どぁぁぁぁぁぁ！！？」

突然、どこからそんな悲鳴が聞こえてきた。

「なんだ！？」

『坊ちゃん、上です！』

「上？」

上を見上げると、銀色の髪に青い瞳をした女の子が降ってきた。

「「危ない！」」

僕が受け止めようと手を広げると同時に、空から墜ちて来ていた女の子が飛行魔術を使って飛翔した。

……あ、魔導師なんだ。

やり場の無くした手を戻す。

そして、女の子はゆっくり降りてきた。

『驚かせてしまい、申し訳ございません。私達は決して怪しい者ではありません。……と、言っても信用はしないでしょうから……』

と、女の子が胸に下げているペンダントから声がした。あれがデバイスか？

「縛るなり武器突き付けるなり、そっちが安心出来る状況になるまで、オレは何もしない」

そう言い、女の子は両手を頭の上に乗せた。

……それじゃあ、とりあえずバインドでも掛けとくか。何もしないと話が拗れる可能性もあるし。

……にしても、”オレ”？随分男勝りだな。

Ｓｉｄｅ　吼太

漆黒のバインドがオレを縛る。

……ふむ、女顔だけどコイツ、男か。

まぁ、バインドを使ったってことは、次元世界のどこかの可能性が高いな。

……並行世界だったら、その限りじゃねぇけど。

『マスター』

トゥードが周りには非常にバレにくい（夫婦とかゼフィリスとかなら気づくだろうから、絶対にバレないわけじゃないと思う）念話を使って話を求めてくる。

『なんだ？』

マルチタスクで目の前の奴と情報交換をしながら、トゥードに答える。

『ここはどうやら、私達の世界の並行世界のようです。全次元世界をスキャンした結果、誤差がいくつも発見されました』

コイツ……一秒かそこらでこの世界観を全てスキャンしやがった。

そんな機能付けた記憶ねぇぞ。自己進化しすぎだトゥード。

『そうか。なら手っ取り早く帰るか』

『賢明なご判断です』

とりあえず、目の前の奴が転生者なのは分かった。

名前は水無月悠二と言うらしい。デバイスはシャルティエ……通称シャル。情報処理特化型デバイスだそうだ。

……トゥードも本来はそうだったんだけどなぁ。いつから変わってしまったんだよ？

「にしても、僕以外にも転生者っていたんだな」

「違う世界にはそれこそ星の数ほどいるさ。ましてや、オレなんか足元にも及ばないような奴らがな」

「そうなのか？信じられないな」

悠二が言ってるのは恐らく、【オレより強い奴がいる】ってことじゃくて、【転生者は星の数ほどいる】ってことなんだろうな。オレと戦ってない以上、正確な実力は判断出来てねぇだろうし。

にしてもコイツ、他の転生者に会ったことが無いんだな。まだ転生して間もない感じだし。3～4年ってとこか。

「で、お前は強いのか？」

「どうだろう……？負けが多いしな」

Ｓｉｄｅ　悠二

負けが多い……。

つまりは、そこまで強くないってことか？

確かに見た目はひ弱そうだけど。腕とか脚とかほっそりしてるし。

まぁいい。僕の実力を確かめるいいチャンスだ。

「よし、死合しよう」

「やだ」

……。

断ったか。普通は乗ってくると思うんだけど。

「あいにくオレは迷子なんでね。さっさと帰らせて貰うぜ」

そう言い、歩き出す吼太。

『坊ちゃん、どうするんですか？』

「こんなチャンス、次にいつ来るか分かったもんじゃないからな。何としても戦ってもらう」

適当に剣を投影して、吼太の頬を掠るように弓から射る。

予想通り、剣は頬を掠る程度で吼太をすり抜け、吼太は脚を止めた。

「次は当てる。死にたくなかったら戦え」

多少無理矢理だが、こうでもしないと戦ってくれないだろう。

「……本気か？」

吼太が振り向いた。

ただ、それだけのはずだった。

だけど、気づけば僕は一歩下がっていた。

まるで、目の前コイツを僕の肉体が恐れるかのように……。

「チッ……お前が前世で何やってたかなんてどうでもいいけど、一般人の域を出ない内は”こっち”には来ないほうがいい。じゃねぇと……死ぬぞ」

吼太が言う。その目は雄弁に語っていた。

「お前はまだまだ弱い」と。

……気に入らないな。なんかそういうのムカつく。

「一般人かどうか、試してみろよ」

干将、莫耶を投影し、構える。

「……分かったよ。お前の未熟さ、僭越ながらオレが教えてやる」

Ｓｉｄｅ　吼太

クロスオーバーフォームになる。

ちなみにユニゾンはしっぱなしだ。転移のショックでリームが気絶してるからな。

『リーム、起きろリーム』

『う……ん、コータ……？』

『目が覚めたかリーム。現在までのデータを送る。しっかり見ておいてくれ』

同じくユニゾンしているセンがリームに言う。

『……うん。状況は分かったよ。で、勝算は？』

『無い。つーよりは分からない、か。アイツが武器を持っているのを見ること自体が初めてだしな』

『感想は？』

『昔のオレと同じさ。力に酔ってる』

『ふ～ん。なら、どうするの？』

『軽く叩き潰す……かな』

「ガードスキル、ハンドソニックｖｅｒ２。あとトゥード、リミッターは外しとけよ？」

『既に完了してします』

「流石！行くぜ！」

向こうの二つの剣と、こっちのハンドソニックがぶつかり合う。

だが、こちらの方が速い。

「そらよっ！」

両手の剣をハンドソニックでかち上げる。

「ぐっ！？」

なんとか剣を手放すことは避けたみたいだが、どてっ腹は隙だらけだ。

「百鬼夜行（ピック）！！」

あらかじめ地面に忍ばせておいた木から百鬼夜行を発動。

黄と黒のストライプのブロックが連結されたものが悠二の腹に激突する。

「がはっ！？」

『坊ちゃん！！』

咄嗟に防御を張っていたらしいが、百鬼夜行は突きの神器。咄嗟に張れる程度の防御は簡単に貫ける。

……ん？もしかして……。

「おい、悠二。お前もしかしてリミッターとか付いてるか？」

「……一応な」

「んだよつまんねぇな。……シャイニング・トラペゾヘドロン」

旅人の鏡を介してシャイニング・トラペゾヘドロンを取り出す。

そして、シャイニング・トラペゾヘドロンを軽く振る。

「……！？　リミッターが！」

何のことは無い。シャイニング・トラペゾヘドロンでリミッターを消しただけだ。

「シャイニング・トラペゾヘドロン……デモベのか。ならこっちも……！」

どっからか悠二がシャイニング・トラペゾヘドロンを取り出そうとするが、オレはその前にシャイニング・トラペゾヘドロンを仕舞う。

「ケンカにシャイニング・トラペゾヘドロンなんか使うかよ。リミッター外しただけだろうが」

「ケンカ？死合の間違いだろう。クトゥグァ、イタクァ！」

悠二が赤い自動式拳銃と、白い回転式拳銃を創り出し、こちらに向けてトリガーを引いてきた。

「ふん……ヌルいんだよ！ソルド・ザケルガ！」

雷で出来た大剣を素早く振るい、全ての弾丸を斬り裂く。

「お返しだ。クトゥグァ、イタクァ！！」

ソルド・ザケルガを排棄したあと、両手にクトゥグァとイタクァを顕現させ、イタクァの弾丸で一列に並んだクトゥグァを螺旋状に包み込みながら撃つ。

「くっ……！？熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！」

クトゥグァとイタクァの複合弾が熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）の花片を４枚砕くが、そこで複合弾は威力を失った。

「チッ…薄っぺらい防御なんてもう、見飽きてるんだよぉぉーーーッッッ！！！」

両手に力を篭める。

そして、限界まで高まったそれを、熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）にたたき付けた。

「我龍双煉烈滅掌！！！」

Ｓｉｄｅ　悠二

「我龍双煉烈滅掌！！！」

まるで吼えるような声と共に放たれた獄熱の一撃は、熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）をたやすく砕く。

しかも、まだ威力が死んでない。

熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）自体が対投擲武器用の防壁なのもあるかもしれないが、あの技の威力自体もかなりヤバイらしい。

……いや、それ以上に恐ろしいのは、アイツから発せられてる気迫だ。

まるで肉食動物のような目が僕を捉える。

その目は、いく度もの死線を越えてきた生物（そんざい）の目。

だけど、僕だって……僕だって訓練してきたんだ。

何もせずに負けるわけには、いかない。

ナイフを投影し、吼太のクトゥグァの【点】を突く。

その瞬間、自動式拳銃クトゥグァは”死んだ”。

「直死か」

「あぁ。下手に動くなよ？死ぬぜ」

ナイフを構えながら、もう一つの隠し玉と、最後の切り札を準備する。

チャンスはあるはずだ。必ず。

「…ギガドリル」

吼太が腕に、淡く緑の光を放つ螺旋槍――ドリル――を出す。

……死の線が見えない！？

それだけじゃない。あのドリルが出てから、吼太自身の死の線もだんだん細くなっていっている。

死の概念を理解出来なかったら見えないとか、いろいろな知識はあ

るが、こんなに急激な変化があるものなんて聞いたことも、見たことも無い！

「……せっかくだ。一発だけ、お前にとって上の次元の世界（ちから）を見せてやるよ」

そう吼太が言うと、ドリルが回転を始め、緑色の炎を逆巻かせる。

あれは……ヤバイ！

やるとしたら、今しかないか……！

吼太を見る。

その瞬間、吼太の身体から黒い炎が発生し、吼太の身体を灼く。

だが、吼太はまるで気にしていない。

それどころか、黒い炎を緑の炎が飲み込んでいく。

――ダメだ、これじゃ効かない！

万華鏡写輪眼の天照は効かない。加具土命も、天照が効かない以上、アイツを止めるのに役に立つのか微妙なところだ。須佐能乎なら【負け】は無いかもしれないが、多分勝ちも無い。あとは月読とイザナギ……。

「天元突破ァ……」

迷ってる暇は無かった。

月読とイザナギを同時に発動する。

これで、吼太は完全に封じた。

幻術の最高峰とも言える月読と、自分にとって不利な事象を【夢】、有利な事象を【現実】に変えるイザナギを同時に発動すれば、最後の切り札はいらなかったかもしれないな。

『……坊ちゃん！まだです！！まだ……』

「ギガァ……」

「そんな！？」

月読もイザナギも効いてない！？

いや、月読は当たった。なら、月読の幻術を喰らってなお平気なのか！？

イザナギは……！？

「同調開始（トレース・オン）！」

イザナギは……イザナギをも……【夢に変わった現実】をも……あのドリルは吸収してる！？

「ドリルゥ……」

「くっ！」

一か八か、やるしかない。

贋作の乖離剣エアを弓につがえる。

今の僕の、最大の一撃。

「天地乖離す開闢の一撃（エヌマ・エリシュ）！！！」

つがえたエアを、吼太に向けて放った。

すさまじい魔力を、嵐のように撒き散らしながらエアが吼太に向かっていく。

これなら……！

Ｓｉｄｅ　吼太

何か、槍だか棒だか分からない物が飛んできた。

だけど、そこから噴き出される魔力と、天元突破ギガドリルに溜めている螺旋力には雲泥の差があった。

乖離剣エアだったか？

たかだか”天地を乖離した程度”で、このドリルを止められると思うな。

ましてや、贋作ごときに止められるほど、ドリルってもんは甘くない。

エアが、ドリルから発せられる螺旋力に触れた瞬間、エアは量子分解されてギガドリルに吸収されてしまう。

喰らえ。これがチートの領域の一撃だ。

「ブレイカァァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！！」

Ｓｉｄｅ　三人称

天元突破ギガドリルブレイカー。

ミカの使う得意技、ギガドリルブレイカーと同じ理論に基づく攻撃だが、その威力は比べものにはならない。

天も次元も突き破る一撃。

それが天元突破だ。

吼太は、今や天元突破の力すらもたやすく制御出来るようになっていた。

螺旋力を制御するのは強固な意思。

その意思は、一切の幻術を受け付けないほどだ。

大きく刈れた地面には、気絶した悠二が倒れていた。

デバイスであるシャルティエも、あまりの威力に強制スリープに入ってしまったらしい。

「……ふむ。この地面どうしようか」

『ご自分でどうぞ』

「めんでぇなぁ。ナイアの時計」

ナイアの時計で、周辺の環境を直す。

ついでに、悠二の服と体調も万全にしていたのは、吼太なりの優しさなのか。

真相は、吼太しか知らない。

「さて、帰るか。……また、挑戦しに来いよ。受けて立ってやるからさ」

## 番外編　超越した馬鹿者共《チート》の領域（後書き）

なっぺ「理想郷？螺旋からすれば小さい願望だなァ！」

吼太「スパロボＭＸＰやってて、冥王を見まくって興奮したのはわかったから、何が言いたいのかわかりやすく言ってくれよ」

なっぺ「その前に……後書き座談会だとか言ってみた！」

吼太「頼むから日本語で話してくれ……」

なっぺ「まぁ、最初の奴はだね……『全て遠き理想郷（アヴァロン）って別に防御は凄くなくね？』って、型月Ｗｉｋｉを見てて思ったんだよ」

吼太「え？だって並の攻撃通さないだろアレ」

なっぺ「螺旋力なら六次元以上から攻撃出来るもん！」

吼太「お前、次元云々のとこだけ見て考えてるだろ」

なっぺ「うん」

吼太「クトゥグァ！」

ドキュウン

なっぺ「」↑返事が無い。ただの屍のようだ。

吼太「にしても、今回は珍しく真面目一辺倒だったな」

なっぺ人形「タマニハソンナコトモアルサー」

吼太「リオン・マグナスさん怒るんじゃないか？」

なっぺ人形「間違イガアッタラ直シマスヨー」

吼太「よし、よくやったリーム。なっぺ人形の操作ご苦労」

リーム「えへへ…」

吼太「感想感謝コーナーいくぞ。雨季さん、バルディッシュさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、天照大神さん、霊亀さん、てっちゃんさん、鮮血の刻印さん、七つ夜＆夜つ七さん、香崎　真琴さん、リオン・マグナスさん、ＳＲＸさん、サーペントさん、仮面ライダーディケイドさん、緋水さん、ユウキさん、通りすがりさん、黒龍さん、悠久なる時間さん。感想ありがとうございました」

リーム「バルディッシュさんからはレンジャーキー（ゴーオンジャー、デカレンジャー、ギンガマン、ジェットマン、ハリケンジャー、ゴウライジャー、ボウケンジャー、ゴーゴーファイブ、アバレンジャー、ゲキレンジャー、ゴセイジャー）を、サーペントさんからはフラグノート（このノートに人の名前を書くと吼太にフラグが建つ）を、緋水さんからはこれゾンのハルナの服を、通りすがりさんからはＩＳ白式を、黒龍さんからは吼太のボーイズラブビデオ（吼太が責め）と修学旅行のお土産の八橋を頂いたよ。ありがとー！」

なっぺ「さぁ吼太！これゾンのハルナの服を…」

大介「チェストォォーーー！！！」

なっぺ「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！！！？」

リーム「しかし僕がいたんだよ！」

吼太「はぁう……／／／／／／／」

リーム「ぐへへへへへ……いっただっきまーす♪♪♪」

大介「しまった！」

ベス「ドンマイですよ」

なっぺ「次回はライさんですよー」

ベス「今回はちゃんとやってくださいよ？」

なっぺ「……うん。自重して頑張る。あと、勘違いしていた人がいたんで念のため。以前やったコラボ抽選は、【コラボの優先度を決めるため】のものなので、コラボ依頼はいずれちゃんと消化しますからね～。一応、まだコラボ依頼していない人もご気軽にどうぞ！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　上を目指す者、上の領域にいる者（前書き）

修正版になります。

今回の話は、以前の話を可能な限り再構成したものです。

ライさんの【魔法少女リリカルなのは～黒い聖騎士～】とのコラボになります。

# 番外編　上を目指す者、上の領域にいる者

Ｓｉｄｅ　吼太

そこは、無数の斬痕に彩られた世界だった。

吼太のみが入れる星。

どこぞの宇宙皇帝から贈られていたその星は、今やボロボロになってしまっていた。

「ハァッ……ハァッ……何秒…出来た…？」

『２７秒６２といったところです』

「出来て一撃か……実用化には程遠いな」

『でも、威力は結局どれくらいなのかな？』

ユニゾンしていたリームが聞いてくる。

「……どうなんだろうな？わからん」

試す相手が欲しいよなぁ～。

……そうだ。せっかくだからアイツのとこに行こう。アイツ程適役もいないだろ。

「螺旋界認識転移システム、作動！」

Ｓｉｄｅ　一真

「暇だ」

暇すぎて口から暇だという言葉が漏れてしまうほどだ。

『暇なのはいいが、侵入者だぞ』

ゼロが報告してくる。

とはいっても、無理矢理この星に来れるような存在など限られている。

ふとしたショックで来れるような場所じゃないからな。ここは。

『どうするんだ？』

「待つ。どうせいつかは来るだろ」

『……悠長だな』

ここに来るまでに死ぬようなら、それだけだ。

数十分後、目の前に赤い髪の少女……もとい、少年の一団が現れた。

「吼太か。どうした？」

「どうしたじゃねーよ！なんだよこの星！？デジモンやら何やら多過ぎだろ！来るのに手間取っちまっただろ！」

仕方ないだろ。気づいたら増えているんだから。

「まぁ、いいや。今回ここに来た理由は一つ。限りなく実戦に近い模擬戦やろう」

「嫌だ。模擬戦をやるメリットが無い」

吼太は格下だし、そもそも模擬戦をしたところで意味無いからな。

つーか”限りなく実戦に近い模擬戦”って何だよ。

「……そこをなんとか」

「メリットがあるならな」

「金……は要らないよな」

鉱山からいくらでも出てくるからな。

「料理は特別上手くないし……ぶつぶつ……」

決まらないらしい。

「……つーか一真。今のお前に何か足らないものがあるのか？」

「差し当たっては無いな。少なくとも、お前がどうこう出来る範囲には無い」

「無理ゲーじゃねぇか」

まぁそう言うな。事実だが。

「じゃあカムイだけ貸してくれ」

「図々しいにも程があるだろ」

誰が好き好んで愛用の武器を渡すか。

「そもそもカムイは俺以外には使えないんだよ」

「トゥードなら使えてもおかしくはないけど……ま、貸してくれないなら仕方ない」

諦めたか？

「お前がカムイを持って突っ立っていてくれればいいよ」

「いい加減にしろよお前？」

「なら戦え。オレはいろいろ保険があるから死なないし、今のオレじゃお前には敵わない」

……このままじゃ堂々巡りだな。

無理矢理送り返すのも手だが、この調子じゃ戦うまで何度でも戻ってきそうだな。

まぁ、暇だったのは事実だし、べつにいいか。さっさと終わらせよう。

「じゃあ喧嘩用の惑星に移動するぞ」

「わかった」

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、戦闘用の惑星についたわけだが。

……戦闘用の惑星って何だよって？知るか。

「トゥード」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ｕｐ＆Ａｒｍｄ　ｕｐ！！』

「ゼロ、セットアップ。同時に双剣グレイダルファー、セット」

カムイじゃないか。ならいやでもカムイを出させるまでだ！

「ダウンロード、グレイドモン！武装召喚（リアライズ）！」

一真と同じ、双剣グレイダルファーを構える。

「「クロスブレード！！」」

全く同じ動き、全く同じ技がぶつかり合う。

結果は引き分け。

オレも一真も、このまま時間を浪費するつもりはない。

「ダウンロード、サイバードラモン！武装召喚（リアライズ）！イレイズクロー！！」

サイバードラモンの爪を武装召喚し、空間ごと切り裂くイレイズクローで一真を狙う。

だが、一真はグレイダルファーの柄でオレの掌を突き、イレイズクローを防ぐ。

このままじゃ危ないな。

「ダウンロード、グラウンドラモン！武装召喚（リアライズ）！」

グラウンドラモンの翼を武装召喚し、翼を使って一真を吹っ飛ばす。

埒が空かない……。ならこれだ！

デビライザーを構える。

「コォールッ！マジンガーZ！ゴッドスクランダー！！さらにダウンロード、マジンカイザー！武装召喚（リアライズ）！」

マジンガーZにゴッドスクランダーを装備し、さらにマジンカイザーの胴体を武装召喚する。

そして、マジンガーZを変形させる。

マジンガーZにゴッドスクランダーが装備されることにより解放される形態。

それは、あたかもマジンガーZ自身のロケットパンチに酷似していた。

さらに、マジンカイザーの胸部から”原寸大の”ファイナルマジンガーブレードを取り出す。

「ターボスマッシャーパンチ！」

マジンカイザーの右腕を撃ち出す。

「ぐっ……！」

一真がグレイダルファーで防ぐが、ターボスマッシャーパンチは一真の予想を超え、グレイダルファーを破壊する。

「さらにィ！相乗掛合（クロスオーバー）！！」

その隙に、空いた右腕とビックバンパンチ形態のマジンガーZを合体させる。

その巨大になった右腕で、ファイナルマジンガーブレードを掴む。

「輝くZ（ゼウス）の名の下に！奴を原子に斬り砕けぇ！！」

ビックバンパンチが金色に輝くと、その光がファイナルマジンガーブレードにも渡り、光り輝く。

「ビィィィィックバン……ブレェェェーーーーード！！！」

それを一真に向けて振り下ろす。

「でかければいいもんじゃないぞ。……ゼロ！」

『ＺＥＲＯ－ＡＲＭＳ：カムイ、セット』

一真のデバイス、ゼロデヴァイスから音声が発され、一真の手に両刃の剣が握られる。

布都御霊（ふつのみたま）と黒いエクスカリバーを軸に、様々な武器を纏めた結果、剣というカテゴリーでは並ぶものが無いほど、異常なまでに強化された剣。それがカムイだ。

「限定解放３０％」

『カムイ、リミッター３０％解放』

刀身が淡く輝く。

そのまま、ファイナルマジンガーブレードに向かって一閃すると、ファイナルマジンガーブレードはたやすく斬られてしまった。

超合金ニューＺαでもたやすく斬り裂くか……。相変わらずチートだなオイ。

「……？」

だが、不意に一真が不思議そうな顔をした。

原因は、恐らくオレだ。

空いた左手に持っていたデビライザーを高く掲げたまま制止しているオレの姿は、先程までファイナルマジンガーブレードを振り下ろ

していたようには到底思えなかったのだろう。

もちろん、こうしている理由はちゃんとある。

『一真！上下から来るぞ！同時にだ！』

「何！？」

一真が回避行動に移るが、今更間に合うか。

「ギガドリルピック＆フリーフォールグラッチェ！！」

オレが言った瞬間、上空からは本来の大きさのエルドラV（ファイブ）が、地中からは5本のギガドリルピックが一真を強襲した。

「ちっ……」

上下から同タイミングでの攻撃だ。回避じゃ間に合わないし、カムイのリミッター解除も間に合わない。

ついでに言えば、確率変動システムも付加してるからパージシャインやテンセグレートシールド等の”防御”も間に合わない。

ここでやるなら、あれだろ？

『――ルーチェモン・サタンモード、能力取得……成功』

オレがそう思った瞬間、一真の背中には七つの魔法陣らしきものが現れ、さらに暗黒の球体が生まれる。

そして、オレの攻撃は暗黒の球体、ゲヘナに全て吸収され、無効化された。

……さぁて、ここからだ。

Ｓｉｄｅ　一真

念を入れてゲヘナで吼太の攻撃を防いだが、あの顔……何か狙ってるな。

「まずはァ……その地獄をぶっ潰す！」

吼太がまるで『ズビシッ！』と効果音が入りそうな具合に俺を指差した。

「喰らえ！バオウ・ザケルガァァァ！！！」

吼太が掌から巨大な雷の龍を出す。

バオウはそのまま俺に……いや、ゲヘナに向かってきているのか。

……は？アイツ、アホか？なんで攻撃を無効化するゲヘナに向か

って……。

いや、違う。いくらアイツがうっかりだからと言っても、効かないと分かっているものに攻撃を打つはずがない。

ならなんだ？確率変動か？

確かにあれならなんとか出来なくもないかもしれないが……。

……待てよ？アイツはゲヘナを潰すと言った。なら確率変動じゃ不可能だ。

「不思議に思っているなら教えてやるよ」

バオウがゲヘナに噛み付く。

だが、バオウはすぐには消えず、ゲヘナに食らいついたままだ。

「バオウを始めとする、ガッシュ・ベルの術……通称、【ベルの雷（いかずち）】は、雷を集中すれば特定の存在に限定的にぶつけ、砕きながら破壊できる」

バオウの口がだんだん閉まり始め、ゲヘナの中から僅かに雷が漏れはじめる。

「まぁつまるところ……バオウは、地獄（ゲヘナ）の効果を無視しながら喰える！」

「バオォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！」

バオウの口が閉じ、ゲヘナは完全に消滅した。

「ゲヘナを消したか。あの時よりは成長しているみたいだな。…ゼロ！」

『あぁ、カムイ、リミッター完全解放』

カムイのリミッターを解除して、ゲヘナを喰らってもなお威力の衰えないバオウを一閃する。

雷に苦労する可能性も考えたが、案外スッパリ斬れたので、拍子抜けといえば拍子抜けか。

『――違う。一真、そいつは囮だ！』

「何！？」

ゼロの注意を認識出来た瞬間、俺の身体に大量の突起がぶつかってきた。

Ｓｉｄｅ　吼太

バオウ・ザケルガを囮にした、ジオウ・レンズ・ザケルガによる追撃。

ジオウ・レンズ・ザケルガはスピードと威力、そして誘導性を兼ね備えた雷の術で、意思によってはファンネルよろしく装甲を飛ばすことも出来る。

これなら一撃じゃ消しきれないから、バオウの直後に控えさせてたんだが、まさかカムイの一撃でジオウの本体まで一気に両断されるとは思わなかった。

まぁ、カムイが今回斬り裂く範囲は答えを出す者（アンサートーカー）で分かっていたし、装甲攻撃が当たったのは間違いないだろう。

そして、嬉しい誤算に、カムイのリミッター完全解除までやってくれていた。

ここまでうまくいくと少し怖いな……。

あとは、”アレ”を試すのみ。

『マスター！』

何故かトゥードが警告を言う。

その次の瞬間に――――――

オレは全身をバラバラに引き裂かれていた。

――――そう思ってしまうような、殺気。

「ぐ……」

それが、オレを襲っていた。

格上。強者。支配者。

なんと言えばいいかは分からないが、とにかく分かることはある。

これは……この雰囲気（さっき）は、オレが望んで取らない、取りたくないものだと。

オレが目指すものとはまるで正反対。だが、目指す領域。

「悪かったな吼太。俺はお前を嘗めていたようだ。ここからは……少し本気を出してやるよ」

一真が言う。

凄い殺気だよホント……。

だけど、殺気に負けちゃ……、【理由や志はなんであれ、殺すことを是とする者】に”心”で負けたら……

――――オレは、オレじゃなくなる！

無駄な足掻きだと言われても構わない。甘い、温いと言われても構わない。

この世界に来て、必死に毎日を過ごす中で思ったことを、オレは貫き通すんだ！！！

そのためなら、世界だろうが神だろうが背負ってやる。

絶望だろうが不可能だろうが、むしろ仲間にしてやる！

だから、オレはその熱い思いを胸に秘め、冷静に状況を見極める。

熱い思いは言葉でぶつけ、背中で語る。

なら、手や足、攻撃でやるのは、【相手を万全の体調で戦闘不能にする】こと。

そのための手段、方法を決めるために、一真とカムイを観察する。

Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ（アルファインフォース）。

一真のバリアジャケットのデザイン元のデジモン、アルファモンの力であるそれは、過ぎ去った戦闘時間を取り戻すことが出来るという、チート並の能力だ。

恐らく、【少し本気】というのは、「アルファインフォースは使うが、アルファインフォースの限定条件の３０秒は守る」ってことか？

全く……いくら実戦に近い模擬戦だからといっても、そこまでやるか？

だが、むしろ好都合……！

「一真。決着付けるぞ」

「……わかった」

一真がカムイを構える。

特別な技ではない。ただ、斬るための構え。

……まぁいいさ。そのほうがありがたい。

Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ（アルファインフォース）。過ぎた戦闘時間を瞬間的に取り戻すという能力。

これはつまり、【一撃が当てられるなら、その一撃が相手を倒すのに必要な攻撃にすることが出来る】と解釈できる。

逆を言えば、【Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ（アルファインフォース）の使用者が持つあらゆる攻撃を無効化に出来る者には、Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆ（アル）ｏｒｃｅ（ファインフォース）意味を為さない】という結論が導き出せる。

デジモンの技や能力は何とか出来るだろう。

問題はカムイ。

カムイをなんとか出来るなら、Ａｌｐｈａ－Ｇａｉｎ－Ｆｏｒｃｅ（アルファインフォース）ごと無力化出来る。

対抗出来るのは……やっぱアレしかないな。

――――ちょうどいい。

「トゥード、フルドライブ。……んで…アレ、やるぞ」

『……』

『コータ！あれは危険だって！！！』

ユニゾンしているリームが注意を呼び掛けてくる。

「危険で上等！これぐらいの反動を乗り越えられなきゃ、上の領域には登れないんだよ！！！」

『――――フルドライブ、スタート』

『トゥード！？』

さすがはオレのデバイスだ。分かってる。

『リーム、ダメだよ。パパは止まらない』

同じくユニゾンしてるカンナがリームに言う。

『……２０秒だよ。あんまり制限時間を超過したら、僕たちでもカバーしきれないからね！』

リームが諦めたように言う。

「応ッ！オレを信じとけ！！」

「相談は終わったか？」

一真が聞いてくる。

「あぁ。このワクワクするような戦いのラストだ。未完成で悪いが、今のオレの全力を見せてやるぜ！！！」

Ｓｉｄｅ　一真

ワクワクする、か。まるでバトルジャンキーだな。

――戦いを楽しんでいるやつに、負けるつもりはないがな。

「――――……――――」

吼太が何かを呟く。

その瞬間、吼太を纏う気配が変わった。

より熱く、より鋭く、より強く。

鎧からもエネルギーを放出しているためか、吼太自身が一つの炎に

なったかの印象を受ける。

まるで、より上の次元に進むために、今までの殻を脱ぎ捨てようとしているかのように。

……それが、切り札か？

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

喧しいまでに叫び声をあげる吼太。

その右腕に、だんだん光が集中しはじめる。

やがて、光は何かの形をとった。

あれは……剣？いや、刀か？……違う、槍……斧？

様々な形態に変わり続ける光。

たまに、ぶれたように複数のシルエットに別れたりもしている。

……まぁいい。アレがなんであろうと、斬り裂くのみだ。

カムイを油断無く構える。

次の瞬間には吼太が、突進してきていた。

反撃のタイミングは……一瞬。

「ハアァァァァァァァァァァァァッッッ！！！」

――斬ッ！――――

光が霧散し、吼太が倒れた。

――バキンッ！――

ふと、俺自身のバリアジャケットからそんな音がした。

続いて、胸部に鈍い痛み。

見れば、胸部のバリアジャケットは完全に破壊されており、中の肉体にも傷が出来ていた。

確かにあの光は斬った。それは間違いない。

だが、俺も斬られたらしい。

どういうことが起こったか、詳しくは分からない。

しかし、カムイの攻撃を受けてなお、攻撃を通したということか？

それと、アレはあの状態で未完成らしい。

それぐらいはさすがにわかる。

カムイ以上になるとはさすがに思えないが、アレが完全になった時……下手をしたらカムイと同じようなモノになるかもしれないな。

まだまだ吼太自身は下の領域だ。そう簡単には俺と同じ領域には来れないだろう。

だが、吼太が持つものは……案外、かなり高い領域にあるのかもな。

そんな感想を抱きつつ、俺は気絶している吼太を元の世界に送った。

ラバーズが見たら確実に勘違いしそうな手紙と指輪をその手に持たせて。

……ま、暇潰しにはなったか。

おまけ

なのは達に意味の分からないＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをされた後。

今、オレこと吼太がいるのは、ユートピアに置いてある次元航行艦アマテラスの格納庫内部。

中には、壊れたマジンガーZ、マジンカイザー、エルドラV。

……ナイアさん、気分でたまに手伝ってくれなくなるからなぁ。今はナイアの時計使えないんだよなぁ。

しゃーない、自分で直すか。

その後、格納庫でつなぎを着てスパナやらハンマーやらを振るう男の娘の姿が見れたとか。

その写真は裏ルートで高値で取引されたというのは、また別のお話。

## 番外編　上を目指す者、上の領域にいる者（後書き）

今回の後書き座談会は以前のものを書き直すのがあまりに辛いので、休みにします。

さて、とんでもないことになってしまった……。

どうしようも無かったとはいえ、今回ので吼太の真の能力と第四部、第五部がほぼまるごと全部構想段階からやり直しになりました。

とはいえ、ライさんとのコラボは私自身が「やりたい！」と思ってたことなんで、仕方ないといえば仕方ないんですけどね。

さて、どうしようか……。

まぁのんびり考えます。

次回はベルワンさんとのコラボです。

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

※追記

今回の件を踏まえて再確認していき、修正したところ、人間の理解レベルを遥かに超える話になりそうです。

……ま、いっか！夢物語だし！

もう歯止めは効かないんだＺＥ！！

## 番外編　遠く離れた星は、異なる運命が絡む場所（前書き）

今回はベルワンさんの【魔法少女リリカルなのは～転生者はバッドエンドを嫌う～】とのコラボになります。

いやぁ、初めてのキャラは難しい。楽しかったけど。

というより、共闘って敵の設定が大変なんだね……。

敵をもう少し強くすればもっと長く出来たかも？でもあんま長くてもなぁ……。

ベルワンさん、何かあったら遠慮無くどうぞ。

まぁ、ともかく本編どうぞ。

# 番外編　遠く離れた星は、異なる運命が絡む場所

Ｓｉｄｅ　吼太

今日はロストロギアの回収任務。

ただ、場所が……。

「外宇宙の星ってなんだよ……」

星の中心。コア。

そこにロストロギアが埋まっているらしい。

ちなみに、なんでそんなとこにあるかと言うと、このロストロギア自身が原因。

まぁ細かい理論ぶっ飛ばして簡単に説明するなら、このロストロギアは相互重力を利用して星を滅ぼすためのもので……。

つまるところ、【壊したい星と同じ質量になるように宇宙の塵を集めるロストロギア】なわけだ。

ただ、以前にとある世界の魔導師が転移魔法を利用して撃退したらしく、その後はこのロストロギア自体には【星を創る】機能しかないからそのまま放置していたらしいんだが、何やら変な反応を感知したらしいから調査任務が来たわけだ。

で、来てみたらトゥードが星の内部に異常を確認。現在に至る、と。

ちなみにシン・ライフォジオを使っているから空気とか紫外線とか放射能の心配は無い。

「……とりあえず掘るか」

ギガドリルを出して地面を掘りはじめる。

……思えば今までギガドリルで地面を掘るのってかなり少なかったな。まぁ空中戦が主体だし仕方ないといえば仕方ないけど。

「ど～りどりどり、ど～りどりどり」

一気に掘り抜くとロストロギアごと貫きそうなのでゆっくり、地面の声を聴きながら掘る。

――こっちが掘りやすいよ

――こっちを掘ってごらん？

……意外とハマるかも。

だが、次の瞬間に異変が発生した。

『マスター、魔力反応を感知しました』

「誰だ？」

『不明。対象は一名。付近の公衆電話ボックスに酷似した物体より

並行世界因子を確認。並行世界の住人と推測されます』

……ん？

「えっと……トゥード。並行世界因子って何？」

『異なる世界間を転移する際に確認される因子です』

……何故オレのデバイスは遠距離にある存在の因子を確認出来るようになっているんだろうか……。

まぁいい。

「とりあえず穴掘りは中止だな。そいつの場所を出してくれ」

『了解しました』

Ｓｉｄｅ　直樹

……ここはどこなんだ？

ふと気になった、【オレではない介入者がいたらどうなるか】っていうのをもしもボックスを使って調べてみようと思ったんだけど……。

「バリー。まさかとは思うけど……ここ、地球じゃない？」

オレの相棒と言える日本刀型アームドデバイス、ブレイバリーに聞く。

『……実は……』

え！？……ま、まさか……

『地球じゃありません！』

……

「バリー、おふざけはダメだろ？」

『…すいません』

「で、現在の状況って分かるか？」

『推論になりますが……恐らく、マスター以外の介入者がこの場所にいるためかもしれません』

「じゃあここのどこかに……ってことか？」

『可能性は高いかと……マスター、捜す手間が省けたようです。２

時の方角より生命体反応及び魔力反応を感知。こちらに近づいて来ています』

バリーが言うやいなや、すぐに赤い髪を持って、黒いボディースーツに身を包んだ魔導師が飛んできた。

……女の子か？なのはやフェイトと同じぐらいの年齢…？

でも、なんでこんな生命体がいないようなところにいるんだろ？

「……っと。お前が並行世界から来た奴か」

「え！？」

いきなり言われて思わず声をあげてしまう。

「なんでオレが並行世界から来たって分かったんだ？」

「……ま、お前と同じクチだよ」

『つまりは転生者と言うことですよ。直樹様』

……！？

「「なんで（オレの）（そいつの）名前知ってんの！？」」

『所用で私一人、神の世界に出かけた際に会った女性から少々情報を得ました。必要ならば前世を含めた概略、昨日の食事内容、その他様々なことを表示可能です』

えぇ！？なんでそんなに知ってるんだ！？

しかも私一人ってデバイスだけで行ったってことか！？

……というより……神の世界の女性って……リア？

何で個人情報漏洩してんだ！？

――――怖かったんですよ～

……なんか聞こえた気がした。

「……そろそろいいか？互いの状況確認のために話し合いをしたいんだが」

『どう思う？』

念話でバリーに相談してみる。

『敵意は無いようですので、大丈夫かと』

「……じゃあ、分かった」

Ｓｉｄｅ　三人称

「……ってことはガッシュの術とか…」

「神器とかモンハンのモンスターとか……」

「「…奇遇だなー」」

吼太と直樹が言う。

彼等が言っているのは彼等自身が持つ能力のこと。

意外にも同じような能力ばかりを持っていたようで、互いに驚いていたのだ。

「にしても星を何とかする任務って……普通、個人に頼むものじゃないんじゃ？」

「ま、普通はな…」

吼太が呆れたように言う。

実際、吼太自身も思っていたので否定のしようが無い。

「で、直樹はどうするんだ？」

「どうするって？」

「また別の奴を捜しに行くのか、それとも帰るのか。ロストロギアを封印したらこの星は崩壊するから、ここに残るわけにはいかないだろ？」

「んー……どうしようか」

直樹が悩む。

だが次の瞬間、二人に魔力砲撃が襲い掛かった。

「「ぐうぅぅぅっ！？」」

シン・ライフォジオを展開していたが故にバリアジャケットを装備していなかったので、派手に吹っ飛ばされてしまう吼太と直樹。

「っ……誰だ！？」

直樹がすばやく体勢を立て直して言い放つ。

『そこの魔導師二人に告ぐ！今すぐこの星を明け渡してもらおうか！！』

敵は宇宙空間にいた。

と、いうのも魔力砲撃を放ったのは次元航行艦だったからだ。

『どうしますか？マスター』

トゥードが吼太に聞く。

「一応、コンタクトしてみるか……こちら、時空管理局所属、吉谷吼太提督だ。この星及びロストロギアは管理局が封印保護されることになっている。だが、用件と目的次第ではそちらの意見も……」

『管理局!?』『構わねぇ!やっちまいな!!』

吼太が呼び掛けるが、次元賊達はそれに構わず再び攻撃を仕掛けてきた。

今度は銃弾や大砲が紛れていることから、質量兵器も相当数搭載されているのだろう。

『次元賊ですか……厄介なことになりました』

「次元賊?」

トゥードが言った聞き慣れない単語があったらしく、直樹が不思議がる。

『分かりやすく言えば次元世界を渡り歩く海賊のようなものです。中には義賊のような方もいるのですが……彼等は違うようですね』

「ったく!人が穏便に済ませてやろうってしてたのに!」

吼太が悪態をつく。

だが次元賊の戦艦からは絶えず攻撃が続いている。

『このままではジリ貧です』

「分かってる！」

「「ラシルド！！！」」

直樹と吼太の出した電撃の盾、【ラシルド】が、電撃のおまけつきで攻撃を跳ね返す。

ディストーションフィールドは発動していなかったようで、簡単に戦艦へと攻撃は当たっていく。

『ぎゃあ！』『キャプテン、左翼部に被弾！』『根性で持たせろ！』『そ、そんなぁ！？』

「今のうちだ！フォーティトゥード・スピリット！！」

「ブレイバリー！！」

「変身ッ！」「セットアップ！」

『Ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ Ｓｅｔ ｕｐ&Ａｒｍｄ ｕｐ！！』『Ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ Ｓｅｔ ｕｐ！』

瞬間、二人はバリアジャケットを装備する。

「行くぞ直樹！」

「あぁ！」

「「一ツ星神器、鉄！！！」」

二人が大砲を作り出し、放つ。

大砲が次元航行艦の主砲二門に当たり、破壊される。

「続けていくぞバリー！モード2」

『了解しました。モード2、スサノオ…ローディング……コンプリート。カートリッジロード』

「空牙……一閃！！」

薄い水色をした刀に変化したバリーを直樹が振り抜くと、副砲が風の刃により次々と破壊されていく。

「今度はこれだ！」

『モード3、アマテラス…ローディング…コンプリート。カートリッジロード』

直樹が言うとバリーの刀身が赤く染まり、刃に沿って細長い穴が空く。

カートリッジロードが為されると、その穴から炎が噴き出る。

「炎斬ッッ！！！」

刃から噴き出た炎が刃となり、戦艦の副砲の残りをねこそぎ破壊した。

『ヤバイですよキャプテン！？このままじゃ！！』

『なら奥の手だ！』

『でも無理な気がするなぁ……ポチっとな』

その瞬間、次元航行艦が真っ二つに割れ、中から超巨大な大砲が現れる。

次元航行艦の動力と直結し、放つこの大砲は、単純な破壊力ならアルカンシェルにすら勝る威力があるのだ。

大砲はわずかに動き、その砲身が吼太と直樹に向く。

『喰らえ！！！』

大砲から莫大な魔力が砲撃となり発射された。

莫大なエネルギーを持った砲撃が宇宙空間を斬り裂きながら猛進する。

が、吼太達は慌てない。

「んなもん効くかよ」

吼太がギガドリルを出して高速回転させると、砲撃が巻き取られて吸収されていく。

やがて、砲撃は完全に消滅した。

『キャプテン！エネルギー無くなりましたぁ』

『ぬぁにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！？』

「さぁーて！」

「これで終わりだ！」

直樹と吼太が構える。

「バオウ・ザケルガァァァァァーーーーー！！！」

直樹が巨大な雷の龍、バオウ・ザケルガを放つ。

「シン・バベルガ・グラビドンッッッ！！！」

吼太が星そのものから力を受け取り放つ超重力、シン・バベルガ・グラビドンを放つ。

二つの術は互いに絡み合い、次元航行艦に向かって行く。

「んでもって、相乗掛合（クロスオーバー）！！！」

そこに吼太が能力を発動する。

過去、金色のガッシュ！！のアニメでバオウ・ザケルガとバベルガ・グラビドンが融合し、黒いバオウ・ザケルガとなったことがある。

それを、アニメの物とは比較するのがかわいそうな威力にまで高まったバオウ・ザケルガと、バベルガ・グラビドンの上位互換である

シン・バベルガ・グラビドンを使い、発動したらどうなるか。

そんなものは火を見るより明らかである。

バオウ・ザケルガとシン・バベルガ・グラビドンが融合し、黒いバオウ・ザケルガとなる。

その大きさは次元賊の戦艦どころか、ロストロギアの星すらたやすく飲み込めるレベルにまでなっていた。

「バオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！」

バオウが咆哮する。それだけ……ただ、それだけで星の地面が刔れていく。

『ディストーションフィールド最大！！無理矢理にでも持ちこたえろ！！！』『『『無理っすキャプテン！！！』』』

「バオォォォォォォォォォォォォォ！！！」

『『『『ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！』』』』

バオウ・ザケルガが動く。

そして、その巨大な口が次元賊の戦艦を飲み込んだ。

「転送っと」

吼太が言うと、バインドで縛られた次元賊達が転送される。

「お、覚えてろよ！」

「キャプテン、俺達もう出番無いと思うっす」

――シュイン

「なんか賑やかだったな……よし！」

直樹はタイムふろしきを使って、壊れた盗品を直していた。

どうやらあの次元航行艦も盗品だったらしいのだが、かなりの改造が施されているために持ち主が放棄。管理局…そして、事件功労者である吼太が回収することとなった。

直樹も受け取る権利はあったのだが、「さすがに邪魔だし……」とのことで、代わりに吼太が【１０秒を１秒に変える能力】を限定条件抜きでプレゼントすることで話が決まった。

「さて、そろそろ頃合いだろ」

「あぁ。……楽しかったよ吼太」

「オレもさ。今度は喧嘩してぇもんだ」

「それは遠慮したいかな……吼太強そうだし」

直樹が苦笑いする。

「オレはそこまで強くないと思うけどなぁ……」

『ではバリー様。また機会があれば』

『はい。トゥードも頑張ってください』

「じゃあね！」

「待った」

直樹がもしもボックスに入ろうとすると、吼太が呼び止める。

「こういうときは【じゃあな】じゃないだろ？」

「……あぁ。わかった」

直樹が改めて向き直る。

「「またな！」」

余談

直樹が自分の世界に帰った後……。

「ん？手紙？」

手紙がポケットに入っているのに気づき、取り出す。

【直樹へ】

「吼太からの手紙？」

――手紙に気づいてくれて嬉しいよ。それで、言いたいのは能力に関する注意だ。お前にプレゼントした１０秒を１秒に変える能力はまだレベル１しか発動出来ない。つまり、レベル２を使いたければレベル１を極めるしかないわけだ。ただ、レベル２の限定条件は外してある。神器との両立は大変だろうが頑張ってくれ――

「……そっか。大変だな……。ん？まだなにか……」

――追伸　トゥードが怖い――

「……いや、オレに言われても……」

その場には、反応に困る直樹がいたとかいなかったとか。

## 番外編　遠く離れた星は、異なる運命が絡む場所（後書き）

なっぺ「オレ参上！後書き座談会は最初からクライマックスだぜ！」

吼太「なら終われ。ライさんとのコラボで二度に渡って大失敗を重ねた大罪人」

なっぺ「その件は本当ごめんなさい。ただ、私は終わらせない！」

ベス「終わりまではしぶとく続けるようです」

なっぺ「事故とかで途中で死んだらさすがに無理だけどね。感想とかそういうのに二ヶ月ぐらい出没しなくなったら死んでるかもしんない」

吼太「縁起でも無い」

なっぺ「ともかく、今回は貴重なガッシュ能力等持ちの直樹とのコラボだったわけで」

吼太「ホント、珍しいよな。名前ならかなり売れてるんだけど」

なっぺ「漫画をラストまで読んでない人、少ないのかなぁ……。面白いのに」

吼太「ガッシュ談義はそこまでにしよう。進まないから」

なっぺ「じゃあ、感想感謝コーナー！」

吼太「天照大神さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、バルディッシュさん、雨季さん、通りすがりさん、霊亀さん、緋水さん、ライさん、てっちゃんさん、香崎　真琴さん、悠久なる時間さん、ｍａｄａｏさん、ベルワンさん、サーペントさん、ＶＡＺＵさん、七つ夜＆夜つ七さん、ユウキさん、ＳＲＸさん、マーボーさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはＧフォン×５、Ｇブレスフォン、獣皇剣×５、破邪百獣剣、ガオハスラーロッド、ファルコンサモナー、ガオキング、ガオイカロス、ガオゴリラ、ガオコング、ガオエレファント、ガオハンター、ガオの宝珠全種類を、通りすがりさんからはらきすたの陵桜学園女子制服を、緋水さんからはあわわな軍師とはわわな軍師の服を、サーペントさんからは学園都市製修理ロボット三体とどんな物でも直す能力をいただきました！ありがとうございます！」

吼太「着ないからな？」

なっぺ「あぁ、いいよ」

吼太「……？」

なっぺ「詩音に頼んでコラ写真作るから」

吼太「止めろ！」

なっぺ「隙あり！制服のターン！」

吼太「わっ！？／／／／／／」

リーム「コータ可愛いよ～ぐへへへへ♪♪♪」

なっぺ「続いてはわわ！」

吼太「恥ずかしい……サイズピッタリなのがムカツク……／／／／／／」

なっぺ「はわわって言わないの？」

吼太「誰が言うか！」

なっぺ「つまんないの。次はあわわ！」

吼太「余計に酷い気もするんだがこれ……／／／／／／」

なっぺ「帽子で顔を隠すでないわ！」

吼太「やだよ！だって……恥ずかしいし……／／／／／／」

リーム「ぶっふぁっ！？」↑鼻から愛

ベス「次回は？」

なっぺ「朱神さんとのコラボだね。そこでコラボは一体終了。本編を多少進めてからコラボ再開」

ベス「決まっているのは誰なんですか？」

なっぺ「朱神さん以降はこんな感じ」

十六夜アミナさん

雨季さん

てっちゃんさん

ユウキさん

ｋｅｉ－－－－ｋｕｍａ．Ｔさん

Ｓｔａｒ　Ｄｕｓｔさん

Ａｒｉｓｈｉａさん

サーペントさん

黒龍さん

ＳＲＸさん

仮面ライダーディケイドさん

ベス「総勢１１人ですか」

なっぺ「まぁコラボ依頼が今からきても受ける予定だから、まだ増えるかも。第四部と第五部は内容上、途中でコラボ受けられないか

ら」

ベス「隙間には？」

なっぺ「第四部と第五部の隙間？なら可能かな。ただ、あんまし長く期間置けないし、何が起こるか私自身が分からないから未定。あ、ＳｔＳ終了時はコラボ可能だと思うんで、募集するかもです」

ベス「では第四部と第五部ってどうなるんですか？」

なっぺ「まずな？第四部ではリームとアリスが～……ってヴォォォォォイッッッ！思わず言いそうになっちまったよ！？」

ベス「暴露してしまえばよかったのに」

なっぺ「黒い！ベスが黒い！？黒ベスだ！」

ベス「あ、第五部では私の出番もあるらしいので、お楽しみに」

ちびアルフ「アタシも出番あるらしいぞー！」

恭也「忍ハァハァ」

美由希「恭ちゃんの出番もあるって聞いたけど？」

なっぺ「ベスは重要人物。アルフはヒーロー。恭也はカッコイイはず」

恭也「忍ハァハァ」

美由希「……これが？」

なっぺ「それが。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 番外編　キョンの短期間特訓（前書き）

今回は朱神優希さんの【魔法少女リリカルなのはの憂鬱】とのコラボになります。

内容悪かったら言ってください。

# 番外編　キョンの短期間特訓

Ｓｉｄｅ　キョン

「アイルビーバック」

「何故戻って来た」

この前散々しごかれたってのに。

※魔法少女リリカルなのはの憂鬱　【閲覧者五万人突破記念　番外編】バグとチートを参照。

「いや、なんかキョンが負けた気がして」

「うっさい」

確かにあの式見とか言うやつに負けたけどさ。

「鍛えてやった側としては思うとこがあったからな。また鍛えてやる」

「結構です」

吼太のしごきはかなりキツイんだよ。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＫＯＴＡＥ　ＨＡ　ＫＩＩＴＥＮＡＩ】！』

カードで返答されたよ。

つーか、『コタエハキイテナイ』……答えは聞いてない？

「ディメンションＡＲＭ：修練の門（ちょっぴりキツめ）！」

「何か嫌な言葉が混じっていたようなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！？」

俺が拒否する暇もなく、俺は修練の門に落ちていった。

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、修練の門の中に来たわけだが……。

「キョン、なんだこの戦い方は」

オレはキョンの以前の戦いを録画映像（提供：トゥード）で見ていて、思わず言ってしまった。

「なんだ……って？」

キョンが不思議そうに言う。

「戦い方がなってない。タナトスが泣いているぞ」

『泣いてませんよ？』

ツッコミは無視。

「途中で多少は分かるだろ。この女装趣味の奴は近接しか出来ないことぐらい」

聞いたキョンが考える仕種をする。

「確かに……威力はすごかったけど、拳とかの格闘戦しか挑んで来なかったな」

「なら、真っ向から挑んだらダメだ。ただでさえお前はまだ未熟なんだ。相手の得意分野で戦ったら痛手を負うのは間違いないだろ」

「ならどうしろっていうんだよ？」

「簡単だ。【相手の間合いに入らなければいい】。エリオのソニックムーブを使えば逃げられるはずだ」

「でも、そしたらもう一人が攻撃してくるぞ？」

「ネギのことか？瞬時にユーノの能力で盾を張って、またエリオの能力で逃げる。盾が壊される前に避けるんだ。壊されること前提ならいける」

「……」

キョンが微妙な表情をしてるな。

「いいか？あらゆる戦闘スタイルはだいたい二つに分けられる。便宜的に名前をつけるなら、【一芸特化型】と【多種汎用型】とでも言おうか。チートやバグ、一般人だってこれらにだいたい当て嵌まる」

「【一芸特化型】に【多種汎用型】？」

「あぁ。【一芸特化型】ってのは文字通り、【一芸】……自分の得意分野をひたすら極めてる奴だ。知り合いで言うなら、要やヒスイなんかがこれだ。コイツらはとことん長所を伸ばしたスタイルだから、コイツらの間合いではかなりの苦戦が当たり前。場合によっては負けてもおかしくはない」

「要は格闘、ヒスイは射撃か」

「まぁそんな感じだな。お前が戦った女装趣味の奴もこっちに当て嵌まる」

このタイプは極めた部分は半端ないが、それ以外は案外特筆するものが無い奴が多いからな。それを見極めるのが重要だ。

もっとも、本来の得意分野は隠して戦っているって奴も中にはいるから、見極めをミスるとかなりヤバイんだけどな。

後々はその辺りの見極めも考えてもらおう。

「対して、【多種汎用型】ってのは、様々な状況に柔軟に対象が出

来る奴。器用貧乏って感じだな」

「嫌な言い方だな」

だって他に言い方思い付かないし。

「こっちはオレが当て嵌まる。そしてキョン。お前もだ」

キョンの胸を軽くどつきながら言う。

「このタイプは相手や能力、戦況に応じて様々な能力を使い分けるのが肝だ。使えるものは全部使うってやつだな」

「俺で言うならみんなの能力か」

キョンが自分に当て嵌めて言う。

「応。お前が戦った中でも、この赤髪の少年、ネギは比較的こっちタイプだな。ちなみに、このタイプを極めると【天才】になる。あ、オレは違うぞ？」

あらゆる分野を万能にこなせるわけだからな。天才って言われてもいいだろ。

「そして、【多種汎用型】は【一芸特化型】の得意分野で【一芸特化型】に勝つことはまず出来ない。理由はわかるよな？」

オレが言うと、キョンは少し考えて……

「……得意分野に対する練習量や才能が違うから？」

と言った。

「正解だ。なら、【多種汎用型】が【一芸特化型】に勝つにはどうしたらいい？」

「……相手の苦手分野で戦う、か？」

「正解だ。まぁ正確に言うなら、相手の得意でない分野で戦うことだな。女装趣味のコイツで言うなら、遠距離で戦えってこった」

「じゃあ、【多種汎用型】が【多種汎用型】に勝つには？」

キョンが聞いてくる。

「基本的には、【相手に無い分野】で戦うのが最高なんだが……。んなもんすぐに分かるはず無いし、そもそもあるかどうかも分からないからな。そこは知恵や戦略、心理戦とかでなんとかするしかない」

「明確な答えは無い、か」

「仕方ないさ。ちなみに、【一芸特化型】が【一芸特化型】に勝つ場合には、【相手に有利な状況を作らず、自分の間合いに入る】のが重要だな。自分の間合いと相手の間合いが被った時は、知恵や戦略、戦術等で勝る方が勝つ」

「なら俺がまずするべきなのは……能力の使い分け、それの高速化か」

「それが一番手っ取り早いし、効果も出る。じゃ、行くぞ」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＫＵＵＧＡ】！』

仮面ライダークウガを呼び出す。

「最初だしヒントを出してやる。コイツに遠距離攻撃手段は無い」

クウガがキョンに向かって走り出す。

「ならこれか」

キョンがクロスミラージュを創り、撃つ。

クウガは回避するが、次第に誘導弾を避けられなくなり、防御してしまう。

「回避主体の奴ってのは、回避しないと困るから回避するんだ。つまりは……」

「大火力魔法なら仕留められる！ディバインバスター！！」

素早くレイジングハートに変更し、クウガに砲撃を放つキョン。

クウガは回避が間に合わずに消し飛んだ。

「よし。なら次。コール、グラビモス！」

デビライザーからグラビモスを呼び出す。

キョンが先程と同じようにディバインバスターを放つ。
が、グラビモスはディバインバスターの直撃を受けてもびくともしない。
「硬いのか？なら……」
キョンがグラーフアイゼンを創り、グラビモスに突進する。
確かにヴィータならそうするかもな。
だが、グラビモス相手には間違いだ。
「グゥゥゥ……」
グラビモスが睡眠ガスを放つ。それを吸ってしまったキョンは昏倒し、地面に落ちた。
……しゃーない。起こそう。
キョンの近くに寄り、軽く揺する。
「んー……く……」
眠りは浅かったらしく、キョンはすぐに目を覚ました。
「よく眠れたか？」
「……？　あ、そうか。あの白いガスで…」

「硬い装甲を持っているからって、装甲に頼り切っているとは限らない。よくわかったろ？」

グラビモスは装甲だけでなく、それ以外にも防御手段を持っているからな。

こう言う奴もいるってこった。

「様子見が重要だ。最初から突っ込むと危険になりやすいからな。最初は回避や防御を中心にして、相手を観察しろ。じゃあ次行くぞ」

デビライザーにカードを装填し、トリガーを引く。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　【ＤＥＬＴＡ】』

出て来たのは、仮面ライダーデルタ。

射撃主体の仮面ライダーだ。

さぁ、キョン。お前ならどうする？

Ｓｉｄｅ　三人称

キョンがレイジングハートからアクセルシューターを放つが、デルタは全てのアクセルシューターを瞬時に撃ち落とす。

「くっ……！」

クロスミラージュへと武装を変更したキョンが、弾幕を張りつつフェイクシルエットを発動。

幻影のキョンがデルタの懐に現れる。

デルタは膝蹴りでフェイクシルエットを消し去るが、どうしてもデルタの注意は前方に集中してしまう。

「ディバイン…バスター！」

そこに、両腕にリボルバーナックル、脚にマッハキャリバーを装備したキョンが、ウイングロードで素早くデルタの後ろに回り込み、デルタに右腕のディバインバスターをぶつける。

デルタはダメージを負い派手に吹っ飛ばされるが、まだまだ戦闘は続けられるようで、再び戦闘体勢を取る。

が、遅い。

「もう一発！喰らっとけ！！」

デルタが吹っ飛ぶと同時にマッハキャリバーを全開にして接近したキョンが、左腕のリボルバーナックルにチャージしていたディバインバスターを、起き上がり様に放ったのだ。

当然、体勢を立て直す最中だったデルタはその隙を突かれたため、ノーガードでまともにディバインバスターを喰らうことになる。

やがて、仮面ライダーデルタは許容出来る以上のダメージを負い、爆発して消え去った。

「よし。じゃあこれで最後だ。今回は【倒せ】とは言わない。【怯ませてみせろ】」

吼太が天にデビライザーを向ける。

トリガーが引かれると、天に巨大な魔法陣が発生し、中から”ナニカ”が降りてくる。

王を超える、【帝王】。

宇宙を支配する圧倒的存在。

魏怒羅帝王（カイザーギドラ）。

「……冗談だろ？」

「だからお前じゃまだコイツには勝てないから、怯ませるだけでいいって言ってるだろ」

全長１４０ｍに及ぶその怪獣は、生物という枠ではなく、建物の領域にすら思える。

だが、カイザーギドラは間違い無く生きている。

「よし、始めるぞ」

吼太が開始を宣言する。

その瞬間、カイザーギドラは咆える。

まるで、餌を与えられたことを喜ぶかのように。

「（喰われてたまるか！）ファントムブレイ…」

キョンがクロスミラージュを創り、砲撃を放とうとするが、それは無理な話だ。

……キョンが魔法を起動しようとした瞬間。その時には既にクロスミラージュは素早く動いたカイザーギドラの首の一つに破壊されていたのだから。

「……」

声はあがらない。

ただ、カイザーギドラが嗤ったのがキョンには見えた。

邪悪な、禍々しく、醜悪な。

――ニタァ――

そして、キョンはカイザーギドラの角に弾き飛ばされた。

土台、無理な話なのだ。

カイザーギドラが属するギドラ族は、宇宙という巨大な【世界】において、上位に君臨している。

そのギドラ族の中で、さらに頂点に君臨するのがカイザーギドラなのだ。

高々、土塊の中の一番でしかない生物がカイザーギドラに勝つというのは、種としての限界を遥かに超えた要求。

例え魔法があろうと、その差は埋まらない。

ましてや、このカイザーギドラは吼太が鍛え上げた特別なカイザーギドラ。通常の個体をも上回るそれは、【巨大な生物は総じて遅い】という常識を簡単に覆した。

小さな身体しか持たないキョンは、大きく吹っ飛ばされ、地面に墜ちた。

「カハッ……」

キョンの口から血が僅かに漏れる。

今のショックで内臓を負傷してしまったのだろう。

だが、キョンは諦めていなかった。

「でかさには……でかさ、だ！」

グラーフアイゼンをギガントフォルムにし、振りかぶる。

巨人の一撃（ギガントシュラーク）の体勢。

確かに、これならばカイザーギドラと同じ大きさで攻撃を行えるだろう。

だが、カイザーギドラは慌てない。

否、慌てる必要が無かった。

キョンから感じられる気配はごく僅か。

いわば、今のグラーフアイゼンはハリボテ同然なのだ。

カイザーギドラはグラーフアイゼンをかみ砕こうと真ん中の首を伸ばした。

その顎はグラーフアイゼンを……

砕かなかった。

いや、正確に言うならば”砕けるはずがない”のだ。

何故なら……

「残念だったなデカブツ。俺の勝ちだ」

カイザーギドラの視界の陰、見ることが出来ない死角。

三つの首がある故に存在するはずがない”死角”を、キョンは作り上げたのだ。

……発動したかのように見せたギガントシュラーク。フェイクシルエットが作り出したその幻の中に。

先程のギガントシュラークは囮であり、キョン自身はギガントフォルムとなったグラーフアイゼンの頭部に隠れていたのだ。

そして、カイザーギドラはグラーフアイゼンを壊そうと首を伸ばしてしまった。

偽りの鎚に隠れ、虎視眈々と狙う狩人の前に、愚かにも首を差し出してしまったのだ。

キョンは既に狙いを定めていた。

小さな小さな、ただ一点を。

「いくらお前がバカみたいに硬いとしても、瞳（ここ）ならどうだっ……！！！」

『シュツルムファルケン！』

炎の矢が放たれる。

それは、寸分違わずにカイザーギドラの頭部……眼球を貫いた。

「ーーーーーーー！？！？！？」

声にならない悲鳴をあげるカイザーギドラ。

そう、いかなる生物であろうと、眼球を鍛えることなど出来はしないのだ。

カイザーギドラの目から血が噴き出るのを見たキョンは、そのまま落下していった。

そもそも、カイザーギドラの一撃はキョンの意識を刈り取るのに十分な威力を持っていた。

今まで意識を保ち、攻撃を続けられたのも奇跡に近い。

満身創痍のキョンは墜ちていき……。

Ｓｉｄｅ　吼太

……ま、こんなもんか。

『システムを終了します』

トゥードがアナウンスすると、周りの景色が全て、溶けるように消えていく。

カイザーギドラは魔法陣を展開し、ユートピアに帰っていった。

「にしても、楽じゃないな。こんな形でしか介入出来ないのは」

『はい』

そう、オレがいたのは、キョンの夢の中。

過度の係わり合いはそれだけで世界に歪みを生む。

特に、現在キョンに関わると重大な”異常”が発生すると答えを出す者(アンサートーカー)が導き出していたオレは、限りなく向こうに影響を及ぼさないやり方――夢――を使ったわけだ。

「キョン。オレは直接手を出したりはしない。お前の問題だからな。今回のはオレのわがままだ。だけど、間違ったことを言ったつもりも無い。だから、少しでいい。お前自身が学んだことを、忘れないでくれ」

そして、オレはキョンの夢の中から姿を消した。

# 番外編　キョンの短期間特訓（後書き）

なっぺ「後書き座談会！」

ベス「やってしまった三回目」

なっぺ「オレだから仕方ない。とはいえ直さないのは礼儀に欠けるし、朱神さんが言えば普通に直すよ」

吼太「結局時間軸いつだよ？」

なっぺ「キョン側はキョンが気絶してる時間のいずれかのつもり」

※朱神さんからの指示によると、キョンが起きてから少し経ったころになるそうです。

ベス「で、これでコラボ依頼のキャンセルが来たらどうします？」

なっぺ「来る者は拒まず、去る者は追わず。残念だけど諦めるよ」

吼太「意外とあっさりしてるな」

なっぺ「嫌々書いても納得できる話なんてまず出来ないよ。感想感謝コーナー！」

吼太「霊亀さん、香崎　真琴さん、天照大神さん、ユウキさん、バルディッシュさん、ｍａｄａｏさん、鮮血の刻印さん、ＡＩＲＳさん、ベルワンさん、雨季さん、七つ夜＆夜つ七さん、黒龍さん、サーペントさん、悠久なる時間さん、ＳＲＸさん、マーボーさん、

毬藻さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはＦＲカード《ＯＯＯ　シャウタコンボ》、ＦＲカード《バース・デイ》、ＡＲカード《バース　カッターウイング》を、サーペントさんからは松坂牛の肉２キログラムを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「牛はみんな（なっぺは除く）で頂きました」

なっぺ「なん……だと……！？」

吼太「シャウタコンボに何故歌が無いのか」

なっぺ「Ｓｈｉｎｅ　ｏｕｔ　Ｔｉｍｅとかでいけそうなのにね」

ベス「次回は？」

なっぺ「久々に本編だよ～。だんだん原作から離れてくるよ」

吼太「元々原作なんて守れないだろ。お前には」

なっぺ「うっさい。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百十九話　明らかになる首謀者、始まる戦い（前書き）

久しぶりの本編になります。

だんだん原作から離れてまいりました。

最終的にはどうなるやら……。

# 第百十九話　明らかになる首謀者、始まる戦い

Ｓｉｄｅ　フェイト

「レリック自体のデータは以上です」

ここは、首都中央地上本部の、データ管理室。

私は今ここで、シャーリーから纏まったデータの説明を受けていた。

突然呼び出されて、慌てて来たらただの説明だったから、少し拍子抜けしちゃったな。

まぁ、これは必ずしも私が最初に聞かなきゃいけない、って内容じゃ無いんだけど、シャーリーは私の補佐官だし、当然の役割といえばそれまでだ。

……コータとのイチャイチャタイムの邪魔をされたのは悔しかったけど。

「封印はちゃんとしてあるんだよね？」

「はい、それはもう厳重に」

ならとりあえずは心配無いかな。

「それにしても、よく分からないんですよね。レリックの存在意義って」

「うん……」

「エネルギー結晶体としては、よく分からない機構がたくさんあるし、動力機関としてもなんか変だし……」

シャーリーの言うことは一理ある。

でも、調査が進んでいない今、安易な断定は状況を悪化させかねない。

「まぁ、すぐに使い方が分かるようなら、ロストロギア指定はされないもの」

「ですよね」

シャーリーも分かってはいたみたいだ。

シャーリーが情報を整理するために、様々なデータをウィンドウに表示させていく。

……ん？

「これは、ガジェットの残骸データ？」

「はい。大変だったんですよ～？吼太さんは手加減を知らないからデータを取れるような残骸がなかなか見つからなくて……」

シャーリーが壊れたガジェットの画像を表示する。

見た目が少し似てるから一瞬わからなかったけど、これは新型のだ

ね。

「こちらは、シグナムさんやヴィータさん達が鹵獲してくれたものと変わり無いですね。新型も…内部機構自体は大差無いし」

そう言い、様々な画像をスライドショー形式で表示していく。

その中に、信じられないものが見えた。

「……！」

「ん？何か？」

「ちょっと戻して。さっきの？型の、残骸写真」

「？　はい…」

多分、内燃機械の分解図だったはず……。

「この辺りですかね？」

「そう、それ！」

内部の回路板の写真。

その中央には、菱形の宝石が存在していた。

「宝石……？エネルギー結晶か何かですかね？」

よく知ってる。

これは……

「ジュエルシード…！」

私の、始まりを告げたロストロギア…。

「随分昔に、私とコータとなのはが探し集めていたもので、今は21個全てがコータのデバイスであるフォーティトゥードに吸収されているはずの、ロストロギア……」

「はぁ～、なるほど～……って、なんで!?それっておかしいじゃないですか！」

詳しくはまだ分からないけど……

……ん？

「シャーリー。ジュエルシードの右上辺りの金属板。そこを拡大して。何か書いてある」

「あ、はい」

拡大図が表示される。

そこには、ミッド文字でこんなことが書かれていた。

――ハロー、マイスイートハニー達。君達のジェイル・スカリエッティだよ。僕に会えなくて淋しかったかい？大丈夫、もうすぐ会えるよ。あ、そうそう。このガジェットに使われているロストロギア。これ、レプリカなんだよ。とは言っても現物と全く性能差は無いんだけどね。もっとも、僕はこんなものより君達の愛の言葉のほうが欲しいんだ。あぁ、しかし僕は一人。君達を同時に愛することは出来ない。罪な僕を許しておくれ……――

「「……」」

……えっと……

「どうします……？これ……」

シャーリーが苦笑いしながら言ってくる。

うん、気持ちはすっごい分かる。

分かるんだけど……。

「データを纏めて隊舎に戻ろう。こんなのでも、一応有力な手掛かりだし。緊急会議は必要だよ」

「アハハ……分かりました」

シャーリーがすぐに作業に戻る。

……にしても、噂はホントみたいだ。

【求性主（きゅうせいしゅ）ジェイル・スカリエッティ】。

その欲望は止まることを知らず、女性の全ては彼のストライクゾーンに当て嵌まるとか。

日夜女性を落とすために様々な画期的開発をしてきたが、同時に違法研究も多々行ってきたために、超広域指名手配がされている。

近代ベルカ式も、彼が逃げ出した研究室の中に残っていたデータから完全な形になった技術の一つだ。

もっとも、残っていたデータの大半は残念なものばかりだったらしいけど。

……そして、ついた異名が【無限の欲望（性的な意味で）】。

今回の事件、貞操を守り抜く戦いになるかもしれない……！！

Ｓｉｄｅ　吼太

今日はヘリでホテル・アグスタに出張だ。

内容としては、オークションに出品されているロストロギアに反応して出るかもしれないガジェットに対する警備、及びガジェットの撃破。

既に昨夜からシグナムやヴィータ達が張り付いてくれてるから、安心して内部に入れる。

あ、リイン姉妹はヴォルケンリッターとは別行動だぞ？あの二人ははやての補佐に回ってるから。

そう、今の台詞でわかっただろうが、今回隊長陣はお休みだ。

代わりに、マテリアル達副隊長陣がオレと一緒にホテルアグスタに潜入する。

「あの……シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って……？」

キャロがシャマルの足元にある箱を指差す。

あれは確か……

「ん？　…あぁ、これ？」

シャマルが、キャロが指差していたものを見て、少し微笑む。

「これは、隊長達の……お仕事着♪」

……何故だ。嫌な予感が……。

Ｓｉｄｅ　三人称

「いらっしゃいませ……いらっしゃいませ」

ホテル・アグスタの入口では、オークションの警備をより厳重にするために、身分確認を行っていた。

それは例え、司法を守る管理局とて例外無い。

と、いうより【司法】を作った管理局が、自分のルールを破ったのでは、他に示しがつかないのだ。

ましてや、このロストロギアオークションでは、危険度が比較的高いロストロギアも存在するし、ミッドの要人なんかも存在する。

当然、その中には管理局を良く思っていない人もいる。

もしこういった場面で管理局側の人間がルールを破ったなら、そこを突いて管理局の権力をおとしめようとする者も現れる。

そうなれば、次元世界全体は混乱に巻き込まれることになる。
格好（ポーズ）だけでは、世界は護れないのだ。

「いらっしゃいませ……いらっしゃいま、！？」

長机に座って身分確認をしていた男の顔が、驚愕の表情に変わる。

「機動六課だ。よろしく頼むぞ」

羽旺が代表して答える。

三人はそれぞれ、寒色系の色で纏めていた。

フィニアは群青色の、身体の線を目立たせるようなデザインのドレス。オリジナルのフェイトからすれば、恥ずかしいとも思えるような感じだ。

羽旺は、黒いシルクを多分に使ったデザインのドレス。こちらは羽旺の雰囲気と合わさり、威厳と妖艶さを併せ持つかのような雰囲気を醸し出していた。

なずなは赤黒い中地と、薄い赤紫のシルクが重なったドレスを着ていた。こちらも、どこか妖艶さを感じさせる雰囲気を持っている。オリジナルのなのはとは、正反対の印象だ。

「コータも早くー」

フェイトが更衣室の吼太を呼ぶ。

「や、やだっ！オレ外に回る！」

「我が儘を言うでない。外はもう十分足りておるだろう」

「あ、止め！」

羽旺が中に入り、吼太を強制的に着替えさせる。

だが、今度は吼太が出てこなくなってしまった。

「ほら、出てきてください」

なずなも加わり、吼太を更衣室から引っ張り出す。

「あぅ……」

その瞬間、この場は吼太に支配された。

紅い、華のような、つぼみのようなデザインのドレスに身を包んだ吼太は、まさに【幼き姫】。

だれもが吼太を見つめ、呆けている。

誰にも侵すことは赦されない、聖域。

「あ、あんま見ないで……／／／／／」

見つめられた吼太がますます赤くなり、手で顔を隠すように拒絶をするが、それが逆に周りの目を引いてしまう。

なお、このことが原因でオークション開始時間が大幅に遅れることになったのは言うまでもない。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

『でも、今日は八神部隊長の守護騎士団、ほぼ全員集合かぁ～』

ふと、スバルが念話でそんなことを言ってきた。

『何言ってるのよスバル。半数近くもいないじゃない。結構詳しく知ってる癖に、なんでそういうとこが抜けてんのよ』

『……あ、そういえばそうだね……アハハハハ……』

『アハハ～じゃないわよ。にしても、なんでアンタあんなに知ってるの？』

『お父さんやギン姉からよく聞いたりしてたんだ～♪』

それから、スバルが説明を始める。

かい摘まんで説明をするとこんな感じだろうか。

八神部隊長が使っているデバイスは魔導書型の【夜天の書】。

シグナムさんやヴィータさん、シャマルさんにザフィーラは、八神部隊長が個人で保有する、特別戦力だってこと。

他に、今はこの場にいない守護騎士が一人いること。

リインフォース?曹長が持っている魔導書型デバイス【蒼天の書】は、夜天の書の姉妹機で、同期能力があるってこと。

リインフォース?准尉は、リインフォース?曹長の姉で、姉妹揃ってユニゾンデバイスだってこと。

そして、この7人が揃えば無敵の戦力になる。

といったことだ。

『まぁ、八神部隊長の出自や能力なんかは特秘事項だから、私もあんまり詳しくは知らないんだけど……』

『希少技能(レアスキル)持ちはみんなそうよね。最たる例は吼太さん』

『リミッターかけてる上の人達も、全貌は把握しきれてないって話だしねー。やっぱりすごいなぁ～』

『そうね……』

『？　ティア、何か気になる部分あったの？』

スバルって、こういうときはやたら鋭いわね……。

まぁ、相談するほどじゃないか。

『大丈夫よ。気にしないで』

『そっか。じゃあ、また後でね』

スバルが念話を切る。

私が気になっていたのは、六課の戦力。

そう、六課の戦力は無敵を通り越して、明らかに異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど……。

隊長格全員、さらには副隊長までもが基本的にオーバーＳＳＳ。例外は兄さんと、そもそも魔力があまり無いアリシアさんだけ。

他の隊員達だって、前線から管制陣まで、未来のエリート達ばっかり。

見た目はあんなに若いのに、三人ともＥＸランクのフラウリーナ三姉妹。

若いながらに執務官になり、様々な事件を解決に導いてきた兄さん。

既に局での勤務経験があり、フォワードメンバーでは一、二を争う実力を持つギンガさん。

あの歳でもうＡランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚師

のキャロは、吼太さんの秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

私も頑張っているし、実力がついている実感もある。

正直、今の自分を凡人とは到底言えないだろう。

だけど、そんなのは関係無い。

私は、立ち止まるわけにはいかないんだ。

小さいころから夢見ていたことを、実現するために！

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

『ガジェットドローン出現！』

『前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ０２の総合管制と合わせて、私…シャマルが現場指揮を行います』

来やがったか……。いよいよだな。

『シグナム、ヴィータちゃん』

シャマルから念話が入る。

『おう。ヴォルケンリッター０２と０１、出るぞ！』

シャマルに伝えてから、騎士甲冑を装備するための申請をする。

『信号確認、デバイスロック解除。グラーフアイゼン、レヴァンティン、レベル２、起動承認』

早速シャーリーから信号が来た。

よし。

「グラーフアイゼン！！」

「レヴァンティン！」

『『Ａｎｆａｎｇ！』』

騎士甲冑を装備して、吹き抜けから一気に空に出る。

「新人共の防衛ラインまでは、一機たりとも通さねぇ。ソッコーでぶっ潰す！」

「お前も案外過保護だな」

不意に、シグナムがそんなことをほざいた。

「うるせぇよ！」

アタシは過保護じゃない！

……多分。

あ、いや、もしかしたら過保護か？

いや、でも……。

……待てよ？

過保護……過保護……コータを過保護……。

「……いいかも……」

「び、ヴィータ！？どうした！？突然鼻から血を出して！！」

「…！？　な、何でもねぇよ！！／／／／／／」

あーもー！こうなったらガジェット共でウサ晴らしだ！

覚悟しやがれ鉄屑野郎共！！！

# 第百十九話　明らかになる首謀者、始まる戦い（後書き）

なっぺ「後書き座談会より、メダルを優先させるな！」

ベス「ベスじゃない、ベスじゃなーい」

吼太「何を今更」

ベス「皆さん完全に忘れてると思いますけど、私の名前ベスじゃないですよ」

吼太「じゃあ、なんて名前なんだよ？」

ベス「平たく言えば、言ったらネタバレになりますので言いません」

吼太「ならベスでいいじゃねぇか」

なっぺ「とうとう完全な本編で女装を披露した吼太」

吼太「ｏｒｚ」

なっぺ「あぁ～！早く先を書きたい！先のほうのストーリーばかり思い付いちまうんだ～！」

ベス「ネタバレネタバレ」

なっぺ「だが断る。感想感謝コーナー！」

吼太「ユウキさん、バルディッシュさん、霊亀さん、天照大神さん、

Ａｒｉｓｈｉａさん、サイバスターさん、朱神優希さん、七つ夜＆夜つ七さん、ＶＡＺＵさん、香崎　真琴さん、ＳＲＸさん、雨季さん、緋水さん、鮮血の刻印さん、ｍａｄａｏさん、てっちゃんさん、黒龍さん、毬藻さん、悠久なる時間さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ＶＡＺＵさんからは一日だけ大人の身長になる薬（効果が終わった後、三十分だけ全身から力が抜けて、立てなくなる副作用がある）と御取り寄せ用の異次元ポケットを、緋水さんからは吼太と詩音に裸Ｙシャツに裸エプロンを、黒龍さんのところからはフランス料理フルコースを頂きました。ありがとうございます！」

吼太「前回の【多種汎用】と【一芸特化】の話、意外とみんな食いついたな」

なっぺ「感想見ててびっくりしたよ。なんで、せっかくだから改めて説明してみようか」

一芸特化：得意不得意が明確に別れている戦闘スタイル。例えば遠距離戦は得意だが近距離戦は苦手だとか、幻術みたいな搦手は得意だけど真正面からの戦いは苦手だとか。得意分野を活かすために他の分野を鍛えていることも多い。言わばその分野のスペシャリスト。このタイプは、苦手分野だと本来の実力よりかなり劣る力しか出せない。
代わりに、得意分野だと同じぐらいの実力を持つ誰にも負けない強さを発揮する。

多種汎用：明確な得意不得意の違いがあまり、或いは全く無い戦闘スタイル。近距離遠距離構わず全力を発揮出来、相手の搦手等にも、

だいたい対応出来る。全部平均的にこなせるが、代わりに特出したものも無い。言わば、器用貧乏。
このタイプは、一つ一つをただ鍛えるだけじゃ一芸特化に勝てる確率があまりないので、能力をどれだけ適材適所に扱えるかが肝となる。

なっぺ「と、まぁこんな感じかな?私が考えているのは」

吼太「オレの場合は多種汎用だな」

なっぺ「まぁ、これはあくまで一例であり、そんな明確にくっきりはっきり分けられる訳が無いので、あまり気にしないでください」

吼太「小説は書きたいように書くのが一番だ」

なっぺ「さぁ、裸ワイシャツを着ようか吼太」

吼太「断る!」

詩音「裸エプロン?これなら優お兄ちゃん悦んでくれるかなぁ?」

トゥード「はい。大丈夫ですよ」

なっぺ「さぁさぁさぁ!」

吼太「百鬼夜行!」

なっぺ「ばけらっ!?」

ベス「次回は？」

トゥード「どうやら、次回はフォワードの皆様が戦うようです」

なっぺ「ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## おまけ　機動六課メンバー表（前書き）

そういやちゃんとした形で出してなかったな、と思ったので。

０１は隊長、０２は副隊長を示しています。

結構混乱すると思いますが、これが理解を助けてくれると信じて。

ちなみに、グリモワールに関しては便宜的に付けているだけで、六課にグリモワール分隊があるわけではないので、注意。

## おまけ　機動六課メンバー表

クロスオーバー

01　吉谷吼太
02　リーム
03　プリム・F・ヨシヤ
04　ミカ・F・ヨシヤ
05　ライラ・F・ヨシヤ

スターズ

01　高町なのは
02　高町なずな
03　スバル・ナカジマ
04　ティアナ・ランスター

ライトニング

01　フェイト・テスタロッサ
02　フィニア・テスタロッサ
03　エリオ・モンディアル
04　キャロ・ル・ルシエ

ロングアーチ

00　八神はやて
01　八神羽旺
02　シャリオ・フィニーノ
03　グリフィス・ロウラン
04　ヴァイス・グランセニック
05　アルト・クラエッタ
06　ルキノ・リリエ

07　リインフォース・アインス
08　リインフォース・ツヴァイ

バーニング

01　アリサ・バニングス
02　ティーダ・ランスター
03　ギンガ・ナカジマ

ルナーズ

01　月村すずか
02　アリシア・テスタロッサ
03　アリス

ヴォルケンリッター

01　シグナム
02　ヴィータ
03　シャマル
04　ザフィーラ

グリモワール

01　セン
02　ミナ
03　カンナ
04　ナツハ
05　キサラ

# 第百二十話　戦いは数？それは昔の話だよアニキ（前書き）

「戦いは数だよアニキ」

私、この言葉大ッ嫌いです。

なんか、人間否定されてる感じしますし。

「数ありゃいいのか？人間と同じ働きするなら蛞蝓でも兵士にして数揃えるのか？」

だから私は基本、数で圧倒するやり方はしません。

そんなわけで、本編どうぞ。

# 第百二十話　戦いは数？それは昔の話だよアニキ

Ｓｉｄｅ　なずな

「どうだった？」

「やはり、止めるつもりは無いようです。一先ずは開幕を遅れさせて対処をするようですが……」

「やはりか。まぁ政府の要人も何人かおるからな。オークション《これ》の開催者も頭を悩ませておろう」

「外はヴォルケンリッターやフォワード達が守ってくれています。私たちは…」

「中の警備、か」

「はい」

とはいえ、要人達へのポーズのためにデバイスが無いのは少し痛いですね。

いざとなればルシフェリオン達が自分で転移してくるので、心配はそれほどありませんが……。

と、いうより要人の夫人達に愛でられているコータさんを奪い返したい……！

「こらお前ら離せー！」

「ーーーッッッ！！！」

フィニアが助けようとしてますが、なにぶん夫人達の人数が多すぎて成果は上がっていないようです。

「羽旺、私も」

「うむ。塵芥共に遅れをとるなよ？」

「はい」

星光の殲滅者の実力、見せてあげましょう！

Ｓｉｄｅ　ザフィーラ

「ここは通さん！ておおおぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

鋼の軛を使い、ガジェットドローンを数体、一気に貫く。

だが、反応はまだまだ残っているようだ。

「む……一気に消し飛ばすか」

『ザフィーラ、本気出しちゃダメよ?下手に本気出して上にマークされたらはやてちゃんの立場が悪くなるわ』

ふむ……それもそうだな。

「では、目立たぬように片付けよう」

『あぁ』『応!』

シグナムとヴィータも自身の得物を振り回し、次々にガジェットを破壊していく。

「ふんっ!」

横を通り過ぎようとしたガジェットを、後ろ脚の蹴りで破壊する。

……しかし、人間体に”成れない”のはやはり辛いな。

我等守護獣及び使い魔は、元は人間ではない。

故に、人間体時に肉体を形成しているのは魔力が殆どだ。

だが、ＡＭＦがある場所ではＡＭＦの効果により形態の維持に必要な魔力が無駄に増えてしまう。

それ故、ガジェットドローンとの戦いでは人間体よりも本来の姿の方が有利なのだ。

「まぁいい。この姿でも実力は劣ろえん。どんどんかかってくるがいい」

魔力を練り上げ、高める。

ガジェットの数はまだまだ。長期戦になりそうだな。

Ｓｉｄｅ　スバル

「……来ないね。敵」

「油断しちゃダメよ。いくらヴォルケンリッターのみんなが優秀だからって、前線で活躍してるのはたった三人。数で押し切られる可能性だってあるわ」

ティアが叱責を飛ばしてくる。

でもホントにすごいなぁー。

しかもこれで能力リミッター付き！

くーっ！リミッター解除されたらどれぐらい凄いんだろ～！

「スバル！気を抜いちゃ……って聞いてないわね……」

「ん？」

「何でもない！」

ティア、どうしたんだろ？

……ははぁん、ツンデレ？

「誰、が、ツンデレ、よっ！」

ティアが私の頭をクロスミラージュの銃床で何度も叩いてきた。

痛い……。

「ティアひどい～！」

「自業自得よ！」

『クラールヴィントのセンサーに反応！近くで、召喚魔法が発動したみたい！』

「「！」」

「遠隔召喚、来ます！」

キャロが言うと、目の前に四つ、紫色の魔法陣が展開され、そこからガジェットドローンが何体も出てきた。

「あれって……召喚魔法陣!?」

召喚魔法陣って……

「召喚って、こんなことも出来るの!?」

「優れた召喚魔導師は、転送魔法のエキスパートでもあるんです!」

私が思わず言った言葉に、キャロがちゃんと答えてくれた。

「ほら、ボサッとしてるなよ!」

「迎撃、行くわよ!」

ティーダさんとティアがカートリッジを装填しながら言う。

「さ、スバル。行くわよ!」

「わかった!ギン姉!」

キャリバーズを蒸して、一気に接近。リボルバーナックルでガジェットドローン?型を破壊する。

この先には、絶対に通しはしない!

Ｓｉｄｅ　？？？

「ドクター、どうします？」

「せっかくだ。出してみようじゃないか」

僕の新しい発明。

試験運用には持ってこいの戦況だ。

「では、輸送準備に入ります」

「ククク……楽しませてくれよ？」

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「ギンガさん、スバルは2トップでガジェットを可能な限り食い止めて！すり抜けたやつはエリオが迎撃！兄さんは空中からガジェットがなるべくこっちに集中するように誘導して！」

指示を出しながらガジェットを破壊していく。

散らばったら少人数のこっちは不利。

なら、集めて一気に殲滅すればいい！

今の私の実力じゃ、完全に制御出来る魔力弾の数はせいぜい２０。

だけど、簡易誘導でいいなら５０はいける！

「ティア！」

スバルが合図を出してきた。

目の前には、比較的密集したガジェットの群れ。

「クロスファイヤァァァー……シュゥーーーーーートッッッ！！！！！」

大量の魔力弾がガジェットに向けて放たれる。

が、命中はしない。全て避けられる。

だけど、それでいい。

いや……それが狙い目！

――ガン、ガン――

重い金属どうしがぶつかり合う音が響く。

それは、クロスファイヤーを避けようと動いたガジェット達が、ぶつかり合った音。

クロスファイヤーによって、ある一点に集めたガジェット達は、もはや恰好の的でしかない！

「「ファントム……」」

「「リボルバー……」」

「サンダー……」

「フリード！」

「くきゅー！」

全員でガジェット達を囲い、構える。

「「ブレイザー！！！」」

「「シュート！！！」」

「レイジィっ！」

「ブラストフレア！」

全員の攻撃が放たれ、互いが互いの逃げ道を塞いでいたガジェット達は、纏めて破壊された。

「……すっごい」

「あぁ、そうだな」

空中から兄さんが降りてきて、呟いてしまった私の言葉に賛同してくれる。

――戦いを決めるのは数でも、力でも無い。仲間と助け合い、信じ合い、互いに高めあう。則ち【連携】だ――

吼太さんが教えてくれたやり方、【連携】。

それを考えながら動けば、私のような特殊な才能を持たない人だって、実力の差を埋めることが出来る。いや、超えられる。

「確かに私向きのやり方ね。特別な才能や能力が無い私にはピッタリ」

クロスミラージュをホルスターに仕舞いながら、呟く。

「ティアさん、お疲れ様。すごい指揮だったわ。本当に専門の教導受けていないの？ってぐらい」

こちらに近づいてきたギンガさんが言ってきた。

「い、いや。そんな……」

「でも、本当にすごかったです」

「はい！無駄が無かったから、僕もまだ体力が有り余ってるぐらいですし」

ちびっこ共まで……

「ティア～♪照れてるでしょ～？」

「うっさいバカスバル！」

全く……！

でも……今度、受けてみようかな。指揮官訓練。

と、その時だった。

『みんな注意して！大きいのが来るわ！』

シャマルさんから通信が入る。

「くきゅー……！！！」

「フリード？……上？」

キャロが上を向くのに釣られて、上を向く。

その視線の先は……空の彼方。そこから巨大な飛行機が飛んできき

ていた。

「あの飛行機……なんだ？」

兄さんが言うけど、私にだって分かるはずない。

と、飛行機が近くまで来たときに、何かを落とした。

……デカイ！？

「みんな！回避！早く！！！」

言いながら私も離れる。

やがて、”何か”は地面に激突し、大地を刈る。

爆弾？

いや、違う。爆弾ならもう爆発しているはずだ。

なら……？

――キュイィィン――

次の瞬間、落ちてきた”何か”が展開し始める。

巨大な脚部が出来、立ち上がる。

両側には、ガジェットが搭載していたミサイルランチャーを巨大化したものが装備され……

背部には、これまた巨大な砲塔が展開される。
最後に正面の一部が展開され、目のようにも見えるセンサーが飛び出した。

「大きい……」

「あれもガジェット…？」

大きさは２０ｍはあるだろうか。

一見すれば、質量兵器にも見える。

と、不意にガジェットらしき機械の両脚に装備されている小さな砲塔が回転し始める。

小さな、とは言ってもあの巨大な本体と比べての”小さな”、だ。
実際は私ぐらいの大きさがあるだろう。

……って、そんなこと考えている場合じゃない！

「みんな！避け……いや！こっちに来て手伝って！」

アイツが狙ってるのはこっちじゃない！

射線に割り込み、残りのカートリッジを全部ロードしてラウンドシールドを三枚展開する。

私の後ろにあるのは……

……ホテル・アグスタ。

――ギュイィィィン！――

猛烈な勢いでガジェットのガトリングから魔力弾が発射される。

あまりの威力に、一枚目がすぐに破壊されてしまった。

「ティア！」「ティアさん！」

他のみんなも来て、シールドを張ってくれる。

……でも、このままじゃ……！

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

「シグナム！フォワード達が！」

『分かってはいる！だがガジェットが多すぎる！今持ち場を離れた

ら、ガジェット達が防衛ラインを突破し、同じ結末しか待っていない！』

チクショウ！ならアタシだけでも……

――シュイン――

フォワード達の元に向かおうとしたアタシの行く先を塞ぐように、ガジェットが現れる。

「くそ！邪魔だぁぁぁぁーー！！！」

ラケーテンハンマーで突破しようとしても、四方八方からちまちま攻撃されてたら、行くに行けない……！

チクショウ……！

Ｓｉｄｅ　ティアナ

ダメ……だったのかな。

やっぱり、私じゃ……あの人の……

手の感覚はもう無い。

脚だって笑ってる。

シールドはたった一枚だけ。他はもう破られた。

そして、最後のシールドが……

「よく頑張ったな。後は任せろ」

え？今の声って……

「コー……タ……さん……」

# 第百二十話　戦いは数？それは昔の話だよアニキ（後書き）

なっぺ「後書き座談会と言われたい！」

吼太「だが言わない」

なっぺ「しどいっ！」

吼太「で、ラストってオレなのか？」

なっぺ「変な質問だなそれ」

吼太「うっせぇ」

なっぺ「まぁいいや。そうだよ。あれは吼太だね。詳しくは次回」

吼太「で、新しいガジェットが来たんだが」

なっぺ「平たく言えばメタルギアＲＥＸの、レールガンが二つになった感じです。ま、メタギアやったことない私が言うのもアレですが」

吼太「何故出したし」

なっぺ「なんか、気づいたら案が出来てた。なんで皆さん。この小説では、蜘蛛ガジェットが、ガジェットドローン？型になりますので、ご注意を」

吼太「まぎらわしいが、ヨロシク頼むぞ」

なっぺ「ほんじゃ、感想感謝コーナー行くぜぃ！」

吼太「鮮血の刻印さん、バルディッシュさん、ｍａｄａｏさん、天照大神さん、緋水さん、ベルワンさん、てっちゃんさん、ユウキさん、雨季さん、朱神優希さん、香崎真琴さん、サイバスターさん、サーペントさん、七つ夜＆夜つ七さん、悠久なる時間さん、毬藻さん、黒龍さん、ＡＩＲＳさん、ＳＲＸさん、最強君さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからは届いた瞬間全身チョコまみれになってリボン付いて「私を食べて？」ってなる奴を、サーペントさんからは車の改造パーツを、黒龍さんからはドレス姿の吼太君の写真をラバーズ全員に、確かに頂きました！」

吼太「チョコが……」

なのは「コータ君が……チョコ塗れに」

フェイト「ハァ…ハァ…す、すぐ舐めとるね！」

はやて「大丈夫やよ～♪気持ちいいだけやから♪」

吼太「あ、ちょ、やめ……アッー」

ベス「で、次回は？」

なっぺ「吼太が戦う。予定はそれぐらいかな？」

ベス「少ないですね」

なっぺ「ボリュームはいつも通りにするけどね。あ、そういや忘れてたことがあるんでもう一つだけ。さりげなくクロスオーバーフォームのイメージ絵を描いてみました。みてみんにあるんで、興味があれば」

ベス「べつに誰も興味無いと思いますよ」

なっぺ「見てもらいたくて描いたんじゃないからべつにいいよ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百二十一話　抑えたからこその力（前書き）

さて、と。

吼太の活躍を書くつもりだったのに……

なぜこうなったし。

# 第百二十一話　抑えたからこその力

Ｓｉｄｅ　吼太

腕の中で気絶しているティアナをゆっくり地面に下ろす。

全く……会場を抜け出すのが大変だったよ。おかげで、時間がかかっちまった。

オークションが始まっても、何故かあちらこちらをたらい回しにされて抱き着かれ、撫でられ、キスされて……

揚句の果てには「養子になってみない？」だもんなぁ……。

まぁ、名前を出したらビックリされて引かれたけどな。有名度も使いようってことか。

最も、名前を出したら出したで篭絡するために擦り寄ろうとしてた奴もいたな。

そんな奴はフィニアがブロックしてたけど。

……あれ？普通、こういうのって男女の立場逆じゃね？オレとフィニアの。

「っと……んなことは今はいいや」

マントを硬質化させた後、気絶してるフォワードのみんなを護るように配置していく。

ちなみに、この間もガトリングから膨大な量の魔力弾が発射されているが、それらは全部ガードスキル　ディストーションで弾いてる。

あ、弾いてるっても、ホテル・アグスタの方には飛ばしてないぞ？

そんぐらいの調整は効くようにしたしな。

「これでよし。……さぁて、待たせたな。クズ鉄野郎！」

目の前のガジェットに向き直る。

もちろん、ハンドソニックは展開済み。

リミッターなんか解除する必要無い。

……いや、〝したくもない〟。

「弱者には弱者の意地って奴があるんだ！フォワードメンバー《こいつら》の分まで、纏めて１０倍返ししてやるよ！！！」

走って近づく。

当然だが、ガジェットはそれを止めようとガトリングを乱射する。

――視えるっ！

身体の動きを最小限にして、ガトリングの魔力弾を全て避ける。

大量のリミッター、限られた手札しか使えない状況の連続。

それらは、確実にオレの力を高める糧になっている！

大量のリミッターは【能力の鉄ゲタ】となることより強化されていき、【肉体自体の鍛練】を促す。

限られた手札の中で不殺を貫き、完全鎮圧することは【より効率的な身の運び】と、【さらなる戦い方の開発】、【相手に対する観察眼の強化】に繋がる。

大量の能力、溢れんばかりのエネルギーがあるからこそ、〝それらを封じる〟。

今なら……。

……いや、まだだ。

まだまだ強くなれる！

神よりも、悪魔よりも……もっと、もっと！

だからこそ……

「たかが鉄クズに苦戦なんてしてられるかぁぁぁ！！」

この程度の相手なら、答えを出す者（アンサートーカー）に頼らなくたって【弱所】は分かる。

弱所とは則ち、【対象に必ず存在する、物質そのものが抱える弱点】。

そこだけを破壊する！

「ハァァァァッッ！！！」

ハンドソニックで斬り上げ一閃。

ガジェットは一刀両断される。

二個あったジェネレーターは纏めて真っ二つだ。

――ハンドソニック　Ｖｅｒ１　”改”――

常時、原子レベルの粒子が超振動を起こしている刃はかなりの切断力を持っており、鋼鉄だろうとたやすく切断する。

「うし。お仕事終了――――ん？」

様子がおかしいな。

……さっきより、斬った部分が小さくなってる。

「自己再生、か。やるな」

液体系の形状記憶合金か何かか？

だけど、何故動力源まで回復してる？

何より、動力源が壊れてたのに何故再生が始まった？

『悩んでいるようだね、吉谷吼太君』

ふと、そんな音声が響いた。

「……Ｄｒ．スカリエッティ」

『名前を覚えてもらえて嬉しいよハニー』

……は？

『さぁ！いますぐ僕のはちきれんばかりの〇〇〇〇を見てくれ！』

……えと……

『ドクター。お楽しみのところ申し訳ありませんが、もともとアレには映写システムを積んでませんので、ドクターの粗末で矮小なモノはあちらには見えておりません』

『なんと！本当かいウーノ！？天才たるこの僕が何と言う大失態！！許してくれ僕のハニー達……！』

……なんだ？この感じ、何かを思い出すような……。

『まぁいい。弾丸をトリモチ弾に変更！吉谷吼太を引っ捕らえろ！そしたら連行して、ベッドへ突撃ラブハートだ！そしたら僕のテンション有頂天んんんっっっっっ！！！！！』

「ツッコミ所が多過ぎてツッコミきれねぇぇぇ！？」

つーかアレだ！

このスカさん、どこぞの天才と何とかは紙一重というかむしろ完全に向こう岸なあの博士に似てるんだ！主にテンションが！

『あ、言い忘れてたけど”ソレ”。どんなに短くても二つの動力炉を破壊する時間にラグが出たら壊れない設計だから。諦めて僕とスカスカナイトフィーバーしてねっ☆チャオ♪』

「チャオ♪じゃねーよ！！キモいなオイ！」

だとしたらどうする！？人間なんて不完全な生き物だから全く同時に貫くなんて不可能……

……ん？

生き物、だから不可能……何か、ヒントが……

『マスター』

トゥードが話し掛けてくる。

『”アレ”を使うんですか？』

「リミッター全部外せってか？無理だろソレ。今からならせいぜい、武装召喚（リアライズ）と召喚ぐらいしか……いや、いける。トゥード！許可申請早く」

両手のハンドソニックでトリモチを熔断しながら指示する。

『……来ました』

「よっし行くぜ！コォールッ！」

地面に魔法陣が描かれ、中から巨人が現れる。

星のようにも見える頭飾り、赤い装甲と黒い装甲、白い間接部。

腕や脚は太く、頑強さと逞しさを伝えてくるようだ。

「……ダイ・ガード！」

対巨大災厄ヘテロダイン用スーパーリアルロボット。

右手にはドリルアーム、左手にはフライホイールという変則的な状態のダイ・ガードが現れる。

が、その大きさは本来の２５ｍではなく、せいぜい３ｍ。

これは以前から思っていたことだ。

召喚システムをベースにした武装召喚で召喚獣達をサイズ変更出来たんだから、召喚そのものでもサイズ変更出来るはずだ、と。

ぶっつけ本番だったが、うまくいったみたいだな。

さらに言うなら、オレが所持しているロボットには全て、自動操縦システムが内蔵されてる。

これでも、単体でなのは達隊長陣と張り合えるＡＩだから、戦闘能力の低いダイ・ガードでも、こんな鉄クズには負けないだろう。

だが、わざわざ戦闘能力の低いダイ・ガードを出したのには別の理由がある。

「ダウンロード、ダイ・ガード、武装召喚」

さらに、両腕に武装召喚を実行。

装備するのは、ダイ・ガードの二大必殺武装。

右腕には炸薬式杭打ち機【ノットバスター】、左腕にはリニア式杭打ち機【ノットパニッシャー】。

「花道作りは、任せたぜ」

オレが言うと、ダイ・ガードがこちらを一瞥したあとで走り出す。

――ポスポスと軽い音をたてて。

「中身、まだあまり詰めてないからなぁ……」

今度改造してやろ。

そんなことを考えていたら、ダイ・ガードがドリルアームで即席の落とし穴を作り、ガジェットの片足を落としていた。

バランスが崩れ、倒れるガジェット。

「ナイスだ！んじゃ行くぜ！タイミングは合わせてくれよ！」

オレもガジェットの元に走り出す。

ガジェットの装甲をアトランティス・ストライクで破壊し、二つの動力炉を露出させた。

当然ガジェットは修復しようとしてくるが、クロスオーバーフォームの脚部シールドが形成する力場に阻まれ、修復が止まってしまう。

その露出しっぱなしの二つの動力炉に、ノットバスターとノットパニッシャーを食い込ませる。

ノットバスターとノットパニッシャーの爪が展開し、動力炉を固定した。

オレの横には、フライホイールを最大限に回転させているダイ・ガードが待機している。

……これで終わりだ！

「喰らえクズ鉄ダイン！！デュアルノットスマッシャー！！！！！」

オレが叫ぶと同時に、ダイ・ガードはフライホイールをノットパニ

ッシャーに打ち付ける。

フライホイールが発したエネルギーがノットパニッシャーに伝わった瞬間に杭が放たれ、同じくオレが発射したノットバスターと共に、”全く同時に”動力炉を貫いた。

Ｓｉｄｅ　羽旺

『前線のおかげで、なんとか乗り切ったなぁ』

「だな。では、後ほど」

我の姉であり、部隊長であり、オリジナルである人物、八神はやてとの通信を切る。

どうやら、コータは間に合ってたらしい。

さすがは我の伴侶だな。

「そこのお嬢さん。オークションはもう始まってるよ」

ふと、やってきた男に声をかけられる。

「いいのかい？中に入らなくて」

軽薄そうな雰囲気をしている男だ。緑色の長髪が印象的だと言えるな。

「気遣い感謝する。が、これでも仕事中なのだ。どこぞのお気楽査察官と違って、な」

「ほほぅ……」

何がほほぅ、だ。

「たまには仕事をしろ。ダメ査察官」

「酷いなぁ。こっちも仕事中だよ、羽旺」

ヴェロッサ・アコース査察官。

だが仕事はサボるわ、そのしわ寄せが我や姉上に来るわの問題児。

もっとも、年齢はロッサの方が高いのだがな。

「急場は乗り切ったみたいだね」

「あぁ。フォワード達も、あぁ見えてなかなかやってくれる」

「へぇ……酷評が当たり前の君が褒めるなんて。明日は槍でも降るのかな？」

「吹っ飛ばすぞ？ナンパ男め」

「女性を食事に誘ったぐらいでナンパ男呼ばわりは酷くないかい？」

「自業自得だ」

全く……これでも能力は高いのだから、世の中不公平なものだ。

「吼太を見習え、うつけが」

「吼太君は見習いたくないかな～。恋愛関係キツそうだし」

ロッサが笑いながら言う。

ふむ、そうなのか？

あそこまで美女や美少女に囲まれているのは男の夢と聞いたが。

「はやては頑張ってるかい？」

「うぬが心配せずとも大丈夫なぐらいには成果もあげているよ」

あぁ、頑張っているとも。

あぁ見えて姉上は頑固で抱え性だ。

下手に放っておくと倒れるまでやってしまうほどだ。

だからこそ、我も姉上の力になってやらねば、な。

## 第百二十一話　抑えたからこその力（後書き）

なっぺ「だいたいスカさんが悪い。そんな後書き座談会！」

吼太「いや、アレ本当にスカリエッティ？」

なっぺ「人間的にはエクサ単位で間違った生命体だけど、一応スカリエッティだよ」

吼太「二度と会いたくないんだけど」

なっぺ「それは無理な話だな。だってＳｔＳのキーキャラクターだし」

吼太「……」

なっぺ「で、だ。ふと思ったことが二つ」

・トゥードがチート過ぎて恐い

・吼太のチートがもはや空気のレベル

吼太「二個目待てや」

なっぺ「いや、最近なんかチートっぽいことやってなくね？って思

って」

吼太「一応チートだから。やってないだけ」

なっぺ「まぁそうなんだけどさ。感想感謝コーナー！」

吼太「ユウキさん、鮮血の刻印さん、霊亀さん、バルディッシュさん、緋水さん、通りすがりさん、雨季さん、香崎　真琴さん、サイバスターさん、七つ夜＆夜つ七さん、天照大神さん、ベルワンさん、ｅａｇＩｅさん、朱神優希さん、ＡＩＲＳさん、サーペントさん、黎音さん、悠久なる時間さん、ＳＲＸさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「霊亀さんからはラバーズの皆に企画で吼太の喘ぎ声のテープと叩かれた瞬間の画像を、バルディッシュさんからはレンジャーキー（ゴーゴーファイブ、ジャッカー電撃隊）を、通りすがりさんからはらきすたのチアガールの服を、ｅａｇＩｅさんからは超ミニスカ浴衣（ピンクの花柄）＋白ニーソを、サーペントさんからはメタルギアのスニーキングスーツを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「レンジャーキーも使いたいんだけどなぁ……」

なっぺ「ライダーほど個性的じゃないから使い所が、ねぇ。というわけでチアガールね」

吼太「な、何が……／／／／／／／」

なっぺ「ほら、新生活始まった人達にエール」

吼太「……言えばいいんだろ言えば……あの…頑張って、くれるよな……？／／／／／／」

なっぺ「ご褒美先払いってことで超ミニスカ浴衣（ピンクの花柄）＋白ニーソ！」

吼太「はぅぅんっ！？／／／／／／／／」

なっぺ「なんで『はぅぅん』？」

吼太「出ちゃったんだから仕方ないだろ！／／／／／／」

ベス「次回は？」

なっぺ「ユーノが出るかも。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百二十二話　のんびり撤収（前書き）

ちょいグダグダな感じ。

やっぱ執筆期間が伸びるといいものは書けないね。

……ま、私にとってはいつもの通りですけどねっ！↑

# 第百二十二話　のんびり撤収

Ｓｉｄｅ　なずな

「報告は以上ですね。現場検証は調査班の方々がやってくれますが、皆さんも協力してあげてください。しばらく何も無ければ、撤退になります」

「「「「「はい！」」」」」

いい返事ですね。私が言うのもあれですが、やはり若さなのでしょうか。

……ん？あの人は……

「……だからそこは……」

「あぁ、そうなんだ～。さすが司書ちょー、わかりやすい解説ありがと！」

「司書長、ね」

「やはりユーノさんでしたか」

「あ、なずな！久しぶりだね。現場はもういいの？」

「はい。フォワードの皆は有能ですし、ひとまずは放っておいても大丈夫かと。フィニアはどうしてここに？」
「ユーノにこれ教えてもらってたんだよ」
そう言い、一冊の本を取り出す。
タイトルは、【たのしくわかる！じゅんかんけいさんれんしゅうドリル！】。
……
「……フィニア、貴女まだ循環計算をマスターしてなかったんですか……」
「バ、バカにするなぁ！これでもこのドリル、半分までは解けるようになったんだぞ！」
「初等部三年生でも全部解けますよ。よく魔法が組めますね？」
「なんかやったら出来たんだ。トライデントスマッシャーなんかは僕が組んだんだぞ？」
「知ってますよ」
想像力には長けている、ということなのでしょうか。
フェイトもハスタームーブの強化プランを自力で編み出してますし、アリシアに至ってはすずかさんやシャーリーさんと一緒にフォワードメンバーのデバイスの基礎を作ってました。プレシアさんのこと

も考えると、この一家は開発者向きなのでしょうか。

「そういえばユーノさん。ガジェットの動力源の……」

「ジュエルシードのレプリカ、だよね。調べてみたんだけど、造ること自体は不可能じゃないんだ。もっともその場合、【人の願いに反応する】って機能が無い、ただのエネルギー結晶になるみたい」

「そうですか……」

まぁ、都合がいいといえばそうなのでしょうね。

「それにしても……なんでジュエルシードを……？確かにかなりのエネルギーを持つロストロギアだけど、ジュエルシードよりエネルギー効率に優れるロストロギアはいくらでもあるのに……」

「ただ単に作りやすかったからか、或いは『お前たちのことは昔から知っている』という意思表示か……。いずれにせよ、このぐらいの単発的な事件だけで終わるとは思えませんね」

「そうだね。僕も帰ったら、スカリエッティについて調べてみるよ」

「よろしくお願いします、ユーノさん」

さて、私も仕事に戻りましょう。

「ねーなずなー。ここの問４の答えって……」

「自分で解きなさい」

Ｓｉｄｅ　はやて

『部隊、上手くいってるみたいだね。羽旺も感心してたよ』

「あっははは。帰ってきたら私がお姉ちゃんやってこともう一度教育せなアカンな」

まったくもう……。

「にしても、アコース査察官のお姉ちゃん、カリムには感謝しなきゃやな」

『ふふ、姉さんも喜ぶよ。僕も何か手伝えたらいいんだけどね』

「アコース査察官も、遅刻とサボりは常習犯やけど、基本的には忙しいやん」

『酷いや』

そう言う割には笑顔のロッサ。

「カリムも心配してるんよ。可愛いロッサのことを、いろんな意味

で」

『心配はお互い様だよ。はやてや羽旺だって、僕とカリムにとっては妹みたいなものなんだし』

アハハ……。ま、しゃあないな。

「あ、ところでロッサ。ユーノ君と知り合いだったん？」

『あぁ、この前無限書庫に行ったとき、調べ物を手伝ってくれてね。……っと、もうそろそろおいとまするよ』

ロッサが言ったあと、通信が切れる。

「はやてー。この前の事件の報告書、貰ってきわよー」

「ありがとう、アリサちゃん」

事件の資料をアリサちゃんのデバイスであるエッケザックスから貰って、ウィンドウに展開する。

「それ、奇妙な事件だよね？」

すずかちゃんもウィンドウを覗き込みながら言う。

「そやね。何が目的なのかすらさっぱりや」

被害者は決まって男性。それ以外の共通項は無し。

被害者は発見当時、決まって気絶していて、股間の……その……

…”アレ”に【この粗〇〇が！】と書かれた紙が貼ってあるという、謎の……というより、謎しかない事件。

被害者は犯人を見ているはずなんやけど、目撃情報があまりにもバラバラすぎて、特定には至れてない。

いわく短髪だ、長髪だ、背が高い、背が低い、眼鏡をかけていた、眼帯をつけていた、ｅｔｃ……

あまりに情報が錯綜していて、情報の真偽の判断ができない状況やね。

資料には新しい情報は入ってきとったけど、やっぱり役に立ちそうなのは無い。

とある匿名掲示板には、「これはアレだ。１２人の美少女や美女達が婿捜しをしてるんだよ！」とか言ってる馬鹿がおったなぁ。確かＨＮは”な”……”な”……”なっ”……アカン、忘れた。【ふぁんすと】とかいうネット小説書いとるらしいな。

まぁ、とりあえずレリックとはあまり関係無さそうや。気にせんでもええやろ。

「さて、新しいレリックの情報も無いみたいやし、ひとまずは大丈夫やな。なのはちゃん。フォワードのみんなの出来は？」

「いい感じだよ～！リミッター付きじゃそろそろ危なくなってきてるぐらいだし」

なのはちゃんが笑顔で答えてくれた。

「みんな、窮屈な思いさせてゴメンな？リミッターかけないと、こんなバカみたいに過剰戦力保持した部隊は作られなかったから……」

「気にしないではやて。私たちは好きでいるんだから」

「それに私とアリサちゃんはデバイスにしかリミッターが付いてないしね」

フェイトちゃんとすずかちゃんがこれまた綺麗な笑顔で言ってくれる。

「にしても、少し退屈よね。私たちはなかなか出動出来ないし」

「基本、隊長陣が一人いればだいたいの事態には対処出来ちゃうもんね。確かに少し退屈かも」

アリサちゃんの言葉になのはちゃんが賛同する。

あ、こうして雑談交わしてても仕事はちゃんとしてるよ？マルチタスク万歳や。

「っと、ヒヨッコ達が帰ってきたみたいよ」

アリサちゃんが言う。

確かに、ヘリのローターが風を切る音が聞こえる。

「とりあえず今日はお休みにしてあげようかな。もうそろそろセカンドモードの解禁が出来そうだから、デバイスを預かって調整して

もらわなきゃ。それじゃ皆、行ってきま～す♪」

なのはちゃんがぱたぱたと走っていった。

さて、私もちゃっちゃと仕事（コレ）片付けるかな。

Ｓｉｄｅ　スバル

「それじゃ、午後の訓練はお休みね」

「のんびりして、しっかり英気を養ってください」

なのはさんとなずなさんの二人が言う。

「「「「「「はいっ！」」」」」」

「じゃあ……解散」

「……ってなっちゃったけど、どうする？」

夕ごはんにはちょっと微妙な時間なんだよね～。

早く食べてもいいんだけど、それだと後でお腹空いちゃうし……。

「じゃあお風呂にでもしましょ。それならちょうどいいでしょ。さっぱり出来るし」

「あ、それ賛成です！」

ティアの意見に、キャロが賛成する。

「じゃ、決まりだな」

「みんなで行きましょう！」

ギン姉の掛け声と共に、気持ち早歩きで進む。

夕ごはん楽しみだな～♪

Ｓｉｄｅ　吼太

『全てのデータを纏め終わりました。お疲れ様ですマスター』

「よし」

時間が大分経っちまったな。もう夜遅い。

「プリム達は？」

『既に出発しています』

「んじゃ、オレらも行くか」

クロスオーバーフォームを展開し、翔び立つ。

今までは表業務。そして今からは……裏業務だ。

以前からちょくちょく現れていた転生者。そいつらの人数が年々増えてきていた。

まぁ、なにもせずにのんびり暮らす奴はいい。管理局で働いてくれる奴もいい。

問題は【スカリエッティを早めに潰そうとする奴】、そして【違法研究所を”破壊”しようとする奴】だ。

スカリエッティは犯罪者だ。ただ、【更正の余地】を判断していない。

ここのスカリエッティは変態だ。まごうことなき変態だ。

だけど、変態だということは【必ずしも原作に縛られるわけではない】ということになる。

ここのスカリエッティはゆりかごの復活を企んではいないかもしれない。

何より、スカリエッティのガジェットは人を殺していない。以前のデカブツガジェットは恐らくオレを誘い出すために砲撃を放ったんだろう。

とにかく、Ｉｆ（もしも）が存在する以上、スカリエッティをこの場でどうにかするのは得策じゃない。

一応、もう少し経ったらスカリエッティのラボに行こうと思ってるから、そこで見極めをするつもりだ。

そして、違法研究所。

違法研究所は違法な行為をしているが、【違法なことしか出来ない】わけじゃない。

せっかく犯罪者、或いは何も知らない人たちが汗水垂らして作り上げた施設だ。使えるものはガンガン使うべきだとオレは考えている。

だから、壊されちゃ困るんだよね。

ま、研究所の違法研究は止めさせるけどな。

「さぁて、お仕事お仕事っと」

ハンドソニックを展開し、そのあと指定ポイントに到着する。

目の前にいたのはツンツンした頭のやつ。

複写眼（アルファ・スティグマ）で解析したところ、この先にある研究所を大火力魔法で破壊しようとしていたようだ。

「向こうの建物壊されたら……まぁ、困らないけど、だからといってむざむざ破壊させるわけにはいかないんだよな。つーわけで帰ってくれないか？」

「チッ……悪は滅ぼす！人に害を為すものは、なんであろうと破壊するんだ！」

そう言うと、ツンツンのやつは全身に白いアーマーを装備する。

確かアレは……ＩＳ（インフィニット・ストラトス）だっけか？少し前にライトのとこで見かけた。

「うぉおおおおおっ！！！」

ツンツンの奴が手に持ったビーム刀を振ってくる。

……質量的に、ハンドソニックじゃ受けられないな。

「よっ、ほっ、はっ」

リミッターで力の殆どが発揮できない、ハリボテなクロスオーバーフォームの鎧じゃ受けられない。ハンドソニックも無理。

なら避ければいい話だ。

「剣閃鋭く……。だが、まだヌルい！」

あちらは一刀、こちらは二刀。

隙を突きやすいのは……こっちだ。

ツンツンが刀を振り下ろした隙を突いて、懐に飛び込む。

「貰った！」

「……かかったな！」

奴が”左手”を振り下ろす。

そこにはビーム刀と同じ輝きを放つ、ビームの爪が出来ていた。

「なっ！？」

……って、言った方がよかったかな？

結果として、驚いたのはオレじゃなくてツンツンの奴だった。

別にたいしたことじゃない。普通に体勢を立て直して受け流しただけだ。

いろいろな転生者相手に戦ってきたからか、【体勢の立て直し】や【見切り】、【反射的な危機回避】等が格段に上手くなっているみ

たいだ。

そのおかげで、今みたいな不意打ちに対しても対応が可能になっていた。

「な、なんでだ！なんで当たらない！？」

「自分で、考えやがれ！」

ツンツンがビーム刀を振ろうとした瞬間、ハンドソニックをｖｅｒ５に変更し、ｖｅｒ５特有の二本の刃で挟むように抑える。

「何！？」

「いかに優れた剣だろうと、振る前に抑えれば鉄の塊と同じだ」

余っていた右手のハンドソニックｖｅｒ５の刃をツンツンに突き付ける。

「貫け！！」

次の瞬間、右手に装備されたハンドソニックｖｅｒ５の刃が射出され、ツンツンの腹部を貫いた。

このハンドソニックｖｅｒ５はただのハンドソニックじゃない。

ハンドソニックｖｅｒ５改。刃を射出出来るようにした改造型だ。

本来は普通に遠距離にいる敵を狙って撃つつもりだったんだが、アリスに「なんかパイルバンカーみたいに使えるんじゃない？」と言

われて、いざ使ってみたら威力が高かったという、言わば偶然の産物だ。

「……っと、治療しなきゃな」

殺すつもりはないからな。

『お父様。鎮圧、完了しましたわ』

『こっちも終わったよー！』

『……終わった』

プリム、ミカ、ライラもそれぞれ鎮圧したらしい。

「トゥード、他は？」

『……あと二人の反応を確認。同位置にいます』

「よし、んじゃもう一仕事だ」

そしてオレは翔び立つ。

腐った運命を変えるために。

Ｓｉｄｅ　？？？

それは、遠い日の夢。

赤く燃える大地。

震える世界。

叫ぶ戦士。

私はそれを、ただただ見ていた。

揺れる、ゆりかごの中から。

## 第百二十二話　のんびり撤収（後書き）

なっぺ「第2次スーパーロボット大戦Z　破界篇　絶賛発売中！提供は、後書き座談会でお送りします」

吼太「さりげなくやるな」

なっぺ「スパロボが楽しかった結果、かなり遅れました。すいません」

吼太「スパロボが楽しいのは分かったから」

なっぺ「グレンラガン強いよグレンラガン。再攻撃、連続行動、エースボーナス、フル改造したらガチでチート並になった。あとニルヴァーシュがまたニルバスター的なものになったのはびっくりした」

吼太「スパロボ自重しろ」

ベス「ところで、本編の最後の文は何ですか？」

なっぺ「言ったらネタバレだから言わない」

吼太「にしても、ＳｔＳいつ終わるんだ？」

なっぺ「分からんｗｗｗ。コラボたくさんあるしｗｗｗ」

吼太「笑うな」

なっぺ「さて、感想感謝コーナー」

吼太「霊亀さん、バルディッシュさん、ユウキさん、ｅａｇｌｅさん、緋水さん、天照大神さん、雨季さん、鮮血の刻印さん、黎音さん、サイバスターさん、ｍａｄａｏさん、ベルワンさん、七つ夜＆夜つ七さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、香崎　真琴さん、黒龍さん、ＡＩＲＳさん、通りすがりさん、ＳＲＸさん、悠久なる時間さん、朱神優希さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、マーボーさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからはスク水ニーソ、黒龍さんからは『はぅぅんっ！』という声が出る吼太人形、通りすがりさんからはキュアモジュール二個、確かに頂きました！」

吼太「人形は潰す」

なっぺ「無駄だ。すでにコピーは取った。故にスク水ニーソだ」

吼太「意味が分かんねぇよ！」

なっぺ「答えは聞いてないっ！」

吼太「ぁ……！？」

ベス「着替えさせる速度が神懸かってきましたね」

なっぺ「慣れだよ慣れ」

吼太「慣れんな！／／／／／」

なっぺ「写真パシャ～」

吼太「撮るなァァァ！！／／／」

ベス「次回は？」

なっぺ「第８話の部分かな。予定だけど」

ベス「貴方の場合、【予定は未定】というより、予定は嘘八百ですもんね」

なっぺ「そ、そこまで酷かないやい！ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百二十三話　蜃気楼《タイムラグ》、悪夢と伝説（前書き）

シリアスに始まり、バトルに繋がって、ギャグに終わる。

その結果こんなに長くなっちゃったよ！

# 第百二十三話　蜃気楼《タイムラグ》、悪夢と伝説

Ｓｉｄｅ　ベス

「……なんということでしょう」

目の前にある書類の山（推定５ｍ）。

これ全部請求書ですよ請求書。

「……まさか」

気配を感じた、左側を見る。

そこには……

「ヤッホー☆元気？」

……アホ上司Ａがいた。

あ、読者の皆さんはまだ知りませんでしたね。

目の前にいる、見た目１６～１７歳の女の人。

この人、私の直属の上司です。

名前は……深菜（ミナカ）歌様。様つけないと怒られます。

ちなみに”あっちの”ゼウスさんとの関係は……部署の違う上司と

部下といったところでしょうか。

「深菜歌様。なんで毎回毎回私に請求書を回してくるんですか？」

「なんていうか……気分？」

悪びれずに言う深菜歌様。

こう言っていますが、実際は私の困った顔を見たいがためにこういうことをしてくるっていうんですから、始末に終えません。

「で、本当の目的は何ですか？」

「ふむ、やっぱバレた？」

バレバレですよ。貴女、私をイジメるか相談があるときしか来ないんですから。

イジメのときは同じ上司である他四人も一緒にいるはずですから、一人で来ている今回は相談しか有り得ないわけです。

「ま、気になったことがあってね。君が転生させたあのかわいい人間」

「吼太さんですか？」

「そうそう。で、その吼太君なんだけど……」

深菜歌様の顔が変わる。

ふざけた態度から、この【世界観】を統べる神々の頂点、最高神の一角としての態度に。

恐らく後光とかもあるんでしょうね。

「あの娘……なんなの？」

「とりあえず男です」

カリスマブレイク。

深菜歌様が真っ赤になってます。珍しい。

「……あ、男の娘だったんだ……。オ、オホン！それはともかく……」

再びカリスマタイム。

「あの子という存在、やたら”奇妙”な気配がするわ。人間なのに人間じゃないような、でも確実に人間。矛盾が内包されている、とでも言えばいいのかしら。……輪廻を司る者、貴方は何か知りませんか？」

あ、輪廻を司る者っていうのは私のことです。

まぁ、それは置いといて……。

「私は特には。そもそも私は”予定通りに”転生をしただけですからね。イレギュラーが起こっても分かりません」

「そう……。では、もう一つ。吉谷吼太の世界に出没している能力持ち転生者。力の大きさは大小様々だけど、いくらなんでも人数が多すぎるわ。記憶引き継ぎだけでもあの【世界観】に１３５０京人、記憶引き継ぎ無しまで含めれば無量大数クラスの人数。吉谷吼太が出会っているのはこの中でもごく一部に過ぎないし、実際に”ストーリー”に関わる活動をしようとした者は全て吉谷吼太により別の【世界観】に送られているからいいけど……。明らかに異常よ。報告をお願いしたいのだけど」

ほぅ、数えるとそんなに人数がいたのですか……。

厄介なことになってますね……。

「では……。まず最初に、私はそれには一切関わっておりません」

「”関わってない”？　輪廻の全てを管理する貴方が？」

「間違いありません。”私”ですからね。そこら辺は確認出来るはずなんです。理由は分かりませんが……推論としては」

一呼吸おき、再度話す。

「何者かが、私の部下たる死神全員を操作している可能性が高いかと」

Ｓｉｄｅ　吼太

「……」

「ねぇコータ君……焦らさないで……」

「あ、あぁ。悪いなのは」

何をしてるかって？

模擬戦だよ。正確に言うなら、これから始めるとこだけどな。

「みんな、今回はなのは隊長との模擬戦をやるわよ。ルール説明のために相手にはコータ隊長を据えてあるけど、実際には各分隊ごとに二人一組で挑んでもらうから、そのつもりでね」

アリサがみんなに説明をする。

みんな、ってのはもちろんフォワードメンバーだな。

「さてと、始めるか」

「あくまで軽くだよ？フォワードのみんなが見れるように」

「分かってるよ。ハンドソニック　ｖｅｒ1」

ハンドソニックを展開して、構える。

「それじゃ、スタート！」

アリサの号令で動きはじめるオレ達。

まぁ、軽く戦い合う。

「……と、まぁこんな感じ。わかった？

「な、なんとか……」

ティアナが苦笑いで答える。

スピードはゆっくりにしてたからしっかり見えてたはずなのに、なんで苦笑いなんだ？

※異常な機動や、普通では有り得ないような素早い対応をしていたのがしっかり見えていたからこその苦笑いです。

「じゃあ、まずはスターズからね。スバル、ティアナ、バリアジャケット準備して」

「「はいっ！」」

二人がスタート位置に立つ。

それに合わせてオレは下がり、障害物であるビルの上から観戦する。
ちなみに隣にはライトニングメンバーやバーニングメンバー、それにヴィータやなずな、フィニア、アリサがいる。
「やるわよスバル！今日こそなのはさんを倒す！」
「うん！新技も考えてきたし、きっといける！」
意気込み十分、といった様子のスバルとティアナ。
「随分やる気になってんな、アイツら」
「新技と言っていましたし、何やら策があるようですね」
ヴィータとなずなが二人を観察した感想をそれぞれ言う。
「分かった！ウイングロードをシールドやバインドに使うんだ！」
フィニアが「閃いた！」といった様子で言う。
「それは無いな」
だが、それをオレが否定する。
「え？」
「なんでですか？」
エリオとキャロが聞いてくる。

「ベルカ式は新旧問わず、魔力そのものの固定化には不向きな魔法だ。基本的には出来て魔力弾。スバルのは希少技能だから多少例外的ではあるけど、不向きであることは変わんないからな。ウイングロードそのものを足場以外に使うのは無いだろ」

実際、使い終わったウイングロードは基本的に撤去している。

これは移動の邪魔にならないようにする目的のほかに、魔力消費を抑えるって副次効果も見込める。

ついでに言うなら、ウイングロードには若干の引力を発生させる効果もある（ウイングロード上の物体を落とさないようにするための効果）から、そっちを使うんじゃないかな、と個人的に考察してみる。

「あぁ、もう模擬戦始まっちゃってる！？」

突然、後ろから声がした。

声の主はライトニング分隊　隊長　フェイト・テスタロッサ。

今日遅れたのは、執務官としての仕事が長引いたからだそうだ。

「大丈夫、まだ始まってねぇよ。ちなみに今はスターズの番な」

ヴィータがフェイトを安心させるために言う。

「本当なら、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ってたんだけど…」

「無理ですよフェイトさん。〝あの〟なのはさんですし」

「だよね……」

ティーダの言葉に、苦笑いで答えるフェイト。

なのはの教導に対する情熱は、もはや六課の常識といったところだ。

故に、なのはを良く知る一人であるフェイトは全く反論出来ない。

「あ、始まるみたいよ」

アリサが言う。

さて、どれだけ成長してるかな？

Ｓｉｄｅ　スバル

私とティアの意見は見事に合致していた。

つまりは……

――なのはさんを倒すには、私（スバル）のレムリア・インパクトをぶつけるしかない――

ディバインバスターも威力は高いし、何より射程はディバインバスターの方が遥かに長いけど、相手はあのなのはさん。砲撃で挑むのは明らかに愚策。

砲撃型なら、砲撃の弱点や対砲撃の立ち回りだってすぐ分かる。

なら、もう一つのレムリア・インパクトにかけるしかないってこと。

「かなり負担はかけちゃうけど……ヘマはしないでよ？」

「大丈夫！ティアこそ、しっかりお願いね！」

軽く言葉を交わしたあと、素早く動きはじめる。

まずは第一のポイントで……

「ウイングロォォーーーードッ！！！」

ウイングロードを6つ、同時に展開。

さらに別の場所に移っては、ウイングロードを複雑に展開していく。

訓練のおかげで、ウイングロードを複数展開することも出来るようになった。だからこそ、こういう使い方も出来る！

「これは……！？」

なのはさんが気づく。

だけどもう遅いですよ！

私が作ったのは、ウイングロードの”檻”。

物理的に触れるウイングロードは則ち、障害物になりうる。

それを利用して、不規則に展開したウイングロードを檻のようにして、なのはさんの動きを封じ込めた。

だけど、ウイングロードそのものはあまり長時間は維持出来ない。

それに、そもそもなのはさんは”止まって撃つ”タイプの魔導師。

このぐらいじゃまだまだなのはさんに接近は出来ない。

『次はティア、頼むよ！』

『任せなさい！』

念話でタイミングを伝えた瞬間、ウイングロードの陰からクロスファイヤーが大量になのはさんのほうに向かっていく。

「多い！？くっ……」

少ないスペースを巧く使い、クロスファイヤーを避けるなのはさん。

だが、いくらなんでもスペースが小さすぎた。

「くっ……」

『プロテクション』

例えどんなに回避に優れていたとしても、回避に必要なスペースが足らなければその力は十分に発揮されないもの。

必然的に、プロテクションを使って攻撃を防ぐことになる。

それが狙い目だった。

「クロスミラージュッ！」

『ニードルスパロウ・バインド』

ティアがクロスミラージュから、バインド効果を持つ魔力弾を三発放つ。

「なかなか面白い手。考えたね！」

なのはさんが笑みを浮かべる。

「でも……まだまだ甘いよ！」

周りを軽く見渡し、そして一点を見据える。

「道が無いなら……」

『ディバイン』

「……作るまで！！」

『バスター』

桜色の砲撃が私のウイングロードを破壊してしまう。
そうして出来た道からなのはさんが逃げ出す。
……私たちの狙い通りに！
「スバル！」
「オッケェェェーーーー！！！」
全力で飛び出し、接近する。
「光射す世界に、汝等暗黒、住まう場所無し！渇かず飢えず、無に還れ！」
「レムリア・インパクト！？」
詠唱でこっちの手が読まれちゃったけど、もう関係無い！
あとは……突撃するのみ！
「ハァァァッ！」
ティアもクロスミラージュに魔力ダガーを展開して突撃する。
「……残念、いい手だったけどまだまだ甘かったよ」
その瞬間、私たちを桜色のバインドが縛った。

この土壇場で、トラップを仕掛けていたってことかな？さすがに強いなぁなのはさんは。

……でも、今回は私たちの勝ち。

「え…？」

なのはさんが、自身の”すぐそばに来ていた”私たちを見る。

私の右手は、既になのはさんの腹部に添えられている。

「レムリアァァァーーインパクトォォォーー！！！！！」

空色の球状結界がなのはさんを覆った。

Ｓｉｄｅ　吼太

「え？あれ？スバルさんはなのはさんに縛られて、でも縛られてなくて？」

エリオが混乱しながら言う。

まぁ、仕方ないか。

スバルが縛られた瞬間、なのはの懐に突然スバルが現れたようなもんだからな。

ついでに言うなら、ティアナもバインドに捕まってはいない。

これはつまり、オプティックハイドとフェイクシルエットを併用したことにより、なのはの目を欺いたってことだ。

スバルとティアナ、二人の本体をオプティックハイドで隠したあと、フェイクシルエットをその直前、或いは直後を走らせる。

これにより、目で見た景色に僅かなタイムラグが発生し、バインドから逃れつつ接近することが可能になる。

言うなれば、蜃気楼を使ったフェイントだな。

「でも、スバルもティアもすごいな。まさかあのなのはさんに勝つなんて」

「本当だよ～」

ティーダとフェイトが言う。

「……果たして、そうかな？　戦場では常にイレギュラーが発生するもんだ。現に……」

――ピシピシピシッ

「なのははノックダウンしてないみたいだぜ？」

――パキィィーン

「……ふぇ？」

結界が割れ、なのはが中から現れる。

それも、無傷で。

が、どういうわけかなのはの様子がおかしい。

まるで、「何故自分が今ノックダウンしてないか」が分かってないみたいに。

……まさか、レイジングハートのやつ……〝スペシャル〟を起動したのか？

『吼太さん。マスターにはご内密にお願いします』

オレの予想を肯定するように、レイジングハートから通信が入る。

……親バカならぬマスターバカか？まぁとりあえずは……。

「時間切れで引き分けだ。ご苦労さん」

オレが言うと、呆気に取られていた三人が我に帰る。

やがて、今日の模擬戦が終わり……

「みんなご苦労さん。まさかここまで成長してるとは思わなかったぞ」

ちなみにライトニングメンバーの模擬戦ではフェイトが辛うじて勝ち、バーニングメンバーの模擬戦はアリサとギンガ&ティーダが相打ちという結果になった。

「せっかくだ。今日はみんなにご褒美として、なにか好きなものを一つだけ奢ってやる！遠慮しないで言ってくれ！」

こんぐらいのご褒美はいいよな。

「あ、じゃあ私は……新しいサンドバックを……」

ギンガが怖ず怖ずと言う。

そういやサンドバックが壊れたとか言ってたな。

「よし、いいぞ」

「じゃあ俺は……本を。タイトルは後で伝えます」

「あぁ」

ティーダは本か。

「あの……じゃあ、また温泉に行きたいです」

キャロは温泉らしい。前の海鳴ので味を占めたのか？

「いいぞ」

「それじゃあ私は食堂のメニュー全部！」

「あ、僕もそれで！」

スバルとエリオは食い意地激しいな。どんだけ喰うんだ？

「……」

次はティアナなんだけど……言わないな。何も無いのか？

「欲しいもの、無いのか？なら別に保留でも…「あ、あります！」

そ、そうか……」

「あるんですけど……その……ごにょごにょ……」

……？

しばらくもじもじしていたティアナだったが、やがて決心ついたようで、オレをまっすぐに見つめてきた。

「コータさん！」

「お、おう……」

「私、コータさんが欲しいです！！！」

……へ？

「ティアナ……何言ってるのかな？かな？」

「な、なのは！？」

「落ち着けなのは！それはいろいろと間違ってる！」

後ろから恐ろしいオーラを感じる……。

フェイトとヴィータが抑えようとしているのが感じられるが……。

「だって、なのはさんたちだけずるいです！私だって……私だってコータさんと【ピー】とか【ズキュゥウン】したいです！」

……あ、オーラが増した。

「コータさんの【チョメチョメ！】だってごっくんしたいし、コータさんの【検閲】をペロペロしたいし！コータさんをみんなに……特に、悪魔みたいに強いなのはさんに渡したくないんです！取り返せなくなりそうだから！！」

フェイトとヴィータ？エリキャロを逃がしに行きましたが何か？

アリサとなずなとフィニア？魔王オーラで失神したスバル、ティーダ、ギンガを医務室に運びましたがなにか？

オレ？あまりの恐怖に動くことすら出来ませんがなにか？

「ティアナ……少し……いや、たっくさん……頭冷やそうか……？」

後日、ヤムチャポーズで気絶していたティアナが、六課に出来た謎の巨大クレーターから見つかった。

クレーターが出来る直前、とある局員は桜色の輝きを六課付近で見たそうだ。

余談だが、この時のなのはの魔王オーラはかなり凄まじく、クラナガン中の建物に皹を入れたとか、近くのガジェットが全て破壊されたとか、活性化していたロストロギアが全て鎮静化したとか言われているが、真相はさだかではない。

# 第百二十三話　蜃気楼《タイムラグ》、悪夢と伝説（後書き）

なっぺ「後書き座談会でござーる」

ベス「魔☆王☆降☆臨」

なっぺ「怖い怖い」

吼太「……物理的判定のある恐怖は卑怯だと思うんだ」

なっぺ「にしても大変だった。ティーダが生存してて、魔王降臨で、かつギャグにするにはどうしたらいいか」

吼太「だからってあれはないだろ……」

なのは「え？けっこう軽くだよ？」

吼太「嘘だっ！」

ティアナ「……でも、諦めたくない！」

なっぺ「へこたれないティアナマジ強い娘」

吼太「そういや最初の。なんだあの伏線みたいなの」

なっぺ「みたいなの、っつうか伏線だね。第四部及び第五部に向けての。もう粗筋は決まってるし、伏線も張りやすいからためしに張ってみた」

吼太「ためしに伏線を張るなよ」

なっぺ「それがオレなのさ！感想感謝コーナー！」

吼太「毬藻さん、サイバスターさん、香崎　真琴さん、バルディッシュさん、ｅａｇｌｅさん、霊亀さん、ｍａｄａｏさん、緋水さん、雨季さん、十六夜アミナさん、ユウキさん、ベルワンさん、天照大神さん、ＳＲＸさん、七つ夜＆夜つ七さん、ＡＩＲＳさん、黒龍さん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、悠久なる時間さん、サーペントさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「サイバスターさんからはコスモノヴァ発生装置と魔装機神サイバスターを、香崎　真琴さんからは軽くて丈夫なチート素材で出来た体操服（当然ブルマ。胸元のゼッケンには【こうた】と書いてある）を、ｅａｇｌｅさんからは吼太を家庭教師（実際はあんな事やこんな事まで出来る）に出来る権利を１週間分、緋水さんからは東京武偵高校の女子の制服、十六夜アミナさんからはカミナとシモンの着けてたサングラスとマント、なのは達に追いかけられた場合に使えるアイテム『影潜り』（取られた時には持ち主の下に戻る特別仕様。ＯＲＴの甲殻製）、吼太に似合う男の服５００着（こちらも特別仕様＋対象に自分の姿を大人に「見せる」機能付き。時空間クローゼットに入っている）、黒龍さんからは吼太人形2を、サーペントさんからはガンツのガンツスーツを吼太に、改造Ｙガンをラバーズに、確かに頂きました！」

吼太「とうとうＯＲＴ素材の道具が来たな」

なっぺ「サイバスターはマジで使うかも」

吼太「ガンツスーツは……なっぺがガンツ見たら使うかもな」

なっぺ「と、いうわけでコスプレしようか」

吼太「断る」

なっぺ「お前に拒否権などあるはずがございませんでしたのでしょうな」

吼太「敬語がおかしいっ……」

バババッ

なっぺ「着替え完了。体操服だぜ」

吼太「っっっ／／／／／」

なっぺ「次は東京武偵高校のだ！」

吼太「……っっっ！！／／／／／」

なっぺ「嬉しさのあまり声も出ないようです」

吼太「恥ずかしいだけだ！ったく……」

ベス「セレナさんの大人に見える男物の服を着ましたね」

なっぺ「解説のリームさん、どう見えます？」

リーム「見える！僕には見える！かわいいコータが男物の服を着ている、あたかも男装みたいな姿が！」

説明しよう！萌えパワーが限界を超えた吼太ラバーズは、その溢れ出るばかりの妄想が自動的に視界にフィルターをかけてしまうのだ！

ベス「かわいそうに」

なっぺ「実はそう思ってないくせに」

ベス「わかります？」

なっぺ「モロバレだ」

ベス「ところで次回は？」

なっぺ「……マジで予定ない。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百二十四話　六課の最強分隊（前書き）

今回、一応9話の再現です。

……ティアナが立ち直る場面が無いんで、八割ぐらい戦闘ですが。

# 第百二十四話　六課の最強分隊

Ｓｉｄｅ　三人称

「……」むすー

「……」むすー

吼太は困っていた。

右手には愛する恋人こと高町なのは。

左手には少し前に告白されたばかりのティアナ・ランスター。

二人が自身の腕を抱き寄せ、互いを睨み合っていたのだ。

どうも互いに「吼太を奪われたくない！」といった心情から動いているらしい。

端から見ればかわいいものだが、被害者である吼太からすればなかなか喜べる状況ではなかった。

「ティアナ手離して。コータ君困ってる」

「なのはさんこそ離してください」

互いに一歩も譲らない。

「勘弁してくれ……」とは吼太の弁。

周りの人達はこの様子をほのぼのと見ていたとか。

ちなみに、現在は深夜である。

だが、次の瞬間には状況が一変する。

きっかけは、未確認存在が接近していることを告げるアラートだった。

「東部海上に、ガジェット・ドローン?型が出現しました！」

「機体数、現在１５機。旋回飛行を続けています」

オペレーターのアルトとルキノが言う。

「レリックの反応は？」

司令室にいたグリフィスが報告を待つ。

「現状では……付近にありません」

「ただ……これ、機体速度が今までより大分……いえ、かなり速くなってます！」

ルキノが驚いた様子で言う。

「具体的には？」

「目算で２．１３倍！」

アルトがグリフィスの質問に素早く答える。

「追加の機影を確認！航空？型、６機編隊が３隊、１５機編隊が１隊！」

シャーリーが現在の状況を知らせる。

「現在、それぞれ別の定円軌道で旋回中です！」

ルキノがさらに報告する。

「場所は何も無い海上……。レリックはもちろん、付近には海上施設も、船も無い」

はやてが周辺の状況を確認しながら言う。

「まるで……『撃ち落としに来い』と誘っているような……」

グリフィスも訝しげに推測を口にする。

「そやね……フェイト・テスタロッサ執務官、どう見る？」

「犯人がスカリエッティなら……こちらの動きとか、航空戦力が知

りたい……のかな？」

フェイトが自身なさ気に答える。

「まぁあの変態やし、行動を完全にパターン化してるわけない。こっちからすれば超長距離砲撃を放り込めば済む話やし……」

「一撃でクリアですよー！」

「一撃一撃ー！」

リインとフィニアが元気に答える。

「でも、それだとリミッターを外す必要が出るであろう。現状がそこまで難しい事態とは思えんが？」

羽旺が一歩引いた考え方で言う。

「確かにね……。スカリエッティの目的もイマイチ不透明だし、手札はあまり晒さないほうがいいと思う」

「そうですね。なら、この場はいつも通りのやり方で行きましょう」

なのはが意見を言うと、なずながそう締めくくった。

「でも……具体的にはどうするの？新人フォワードメンバーは大半が未だに気絶したままだし……」

すずかが浮き上がった新たな問題を言う。

「ティアナとエリオとキャロなら出られるけど……フォワードの人数が減ってるせいで、レリック捜査での負担が大きくなっちゃってるし、三人ともちゃんとした空戦は出来ない。何より子供をこんな時間には連れ出せないよ」

アリシアの補足も入り、ますます人員が少ないことを実感させられる。

「全く……どっかの誰かさんのせいでね！」

「あぅぅ……」

アリサの辛辣な言い方に、なのはが恐縮してしまう。

「なら……動かすしかないなぁ…」

はやてが観念したように言う。

「クロスオーバー分隊、出動や！」

Ｓｉｄｅ　吼太

「つーわけで、オレらの出番か」

六課にある海岸に立つ。

「”表”の任務は久しぶりですわね」

「っても、相手はガジェットでしょ？誰か一人でも充分じゃない？」

「……目的、あるから」

プリム、ミカ、ライラが話す。

「そ。まぁつまりは……」

リームが溜めを作り……

「スカリエッティに行動で示してやるのさ。『オレ達を、誰だと思っていやがる！』ってな！」

オレが締めくくった。

リーム達も、不敵な笑みを浮かべている。どうやら、分かっていて聞いてきたらしい。

……ったく。

「じゃあ行くぜ！」

「「「「応！」」」」

オレ、プリム、リームが翔び立ち、ミカはライラを背負って走り出す。

プリムは空戦可能なのであまり問題無いが、ライラは体力が少ないので、移動に体力を使うわけにはいかない。

なお、ミカは魔力がないから飛べないが、螺旋力の片鱗である【認識を実体化すること】により、海上はもちろん虚空だって走ることが出来るため、擬似的な空戦が可能だ。

飛ぶこと１０秒、ガジェットの群れを視認した。

「さぁて、ちゃっちゃと片付けるぞ！」

ハンドソニックｖｅｒ６を展開。ブーメラン型となったハンドソニックを飛ばす。

ハンドソニックがガジェットを破壊したが、それによりガジェット側にも気づかれる。

「散開して各個迎撃！」

さぁて、行きますか！

Ｓｉｄｅ　プリム

能力リミッターはあるから、あまり派手な技は使えませんわね。

「なら……技術を駆使するまでですわ！」

右手に体内の魔力を集中、左手に大気中の魔力を集中。

両手を重ね、溜まっている魔力を砲撃にして撃つ！

「オブシディアンウィップ！」

黒耀石のような鈍い輝きを放つ二本の砲撃が絡み合い、あたかも一つの砲撃のように飛んでいく。

見た目はかなり細い、まるで針のような砲撃。でも、篭められた魔力量はガーネットブラスターの数十倍。ＡＭＦごときじゃ防げはしない！

――ズガガガガッ！――

オブシディアンウィップは複雑な軌道を描き、辺りのガジェット全てを貫く。

「弾けなさい」

オブシディアンウィップの魔力が解放され、エネルギーを撒き散らす。たちまち辺りのガジェットは爆発し、消え去った。

ま、鉄屑相手に負けていてはお父様に申し訳が立ちません。

「さぁ、どんどん行きますわよ！」

エメラルドシューターを展開する。

増援もたくさん来ているようですし、退屈はしなさそうですわね。

Ｓｉｄｅ　ミカ

「うおりゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

ガジェットを殴り飛ばし、他のガジェットにぶつける。

ガジェットが持つＡＭＦは魔法には有効だけど、物理攻撃に対しては耐性が全く無い。

まぁつまりは……

「俺には関係無いってこと！」

蹴りでガジェットを破壊する。

『ピピッ』

ガジェットがビームを発射してきたけど……

「効くかって！」

腕の一薙ぎで振り払う。

別に螺旋力を使ったわけじゃない。ただたんに、ガジェットのビーム程度じゃ俺を破壊出来なかっただけ。

「今度はこっちの番だ！」

腕からドリルを伸ばし、ガジェットを貫く。

「グレン……」

そのままドリルごとガジェットを振り回し……

「バスター！！！」

ガジェットを投げ飛ばす。

「コレも持ってけ！ドリラッシュ！！！」

全身から小さなドリルを大量に発射する。

ドリルは一つ一つが誘導性を持ってガジェットを破壊していく。

「さぁ、次はどいつが来るのかな？」

Ｓｉｄｅ　ライラ

「……来た」

空中から巨大な影が落ちてくる。

二本の脚に付いたバーニアを吹かして、空中戦も出来るようになったガジェット・ドローン？型だ。

「でも、私には関係無い」

いくら再生能力に優れていても、私には関係無い。

……奪うだけだから。

「侵食剣」

侵食剣を取り出す。

私の能力である【侵食支配】を強化してくれるこの剣。

私は力がないからろくに振れないけど、そこはこれでカバーできる。

「……チェーンバインド」

チェーンバインドで侵食剣の柄を”持つ”。

バインドを手の代わりに使えば、私の筋力が弱くても大丈夫。

私の近くががら空きに思えるかもしれないけど、それを何とか出来るように訓練はしてる。今では手を使うより早く対応出来るようになった。

そして何より、侵食支配のある私に肉薄することは、自殺行為でしかない。

精神耐性も肉体耐性も無効。一度でも触れたら完全に相手を侵食し、支配する。それが侵食支配。

「あなたももう、私のもの」

侵食剣を突き刺す。

それだけで、ガジェットは動かなくなる。

「狙って」

侵食剣を閉まったあとで私が命令すると、ガジェットが再び動き出す。

狙いは……他のガジェット。

「撃って」

レールガンが放たれ、ガジェットが一気に破壊される。

「……もう一回、いこう」

Ｓｉｄｅ　リーム

「さってと。そろそろ増援もうざくなって来たね」

みんな遊んでるから気づいてないだろうけど、もう３０分は経ってるんだよ？

これは僕にやれってことなのかな？

「……っと、見つけた見つけた」

まぁ、手近に転移システムがあったからやっちゃおう。

にしてもこれ、魔法じゃないんだよね？何で転移させてるんだろ？

「っと……ぐずぐずしてたらキリが無い」

精神を集中する。

「凍っちゃえ」

転移システムそのものを凍結する。

あとはちょんとつっつけば……

―バキィン―

あっという間に破壊完了。脆いね。

「ついでに何体かガジェットも倒しとこう」

腕を一振り。

その瞬間、時空間ごと周りのガジェットは消え去った。

「バイバイ」

絶対零度すら下回る、負の無限熱量。

レムリア・インパクトとは全く正反対の力。

正反対とはいえ、その威力はレムリア・インパクトと変わらない。

まさに、【必滅】の力。

どういうわけか、僕は負の無限熱量を魔力変換資質だけで発動出来ている。当然、普通にやっていて、の話だ。

だけど多分……本気を出せばミッドチルダごと世界を消滅させるのもたやすいだろう。

それが、今の僕の力。

以前にリミッターを解除して、現在残るリミッターは3つ。

そう、”まだ3つリミッターが残っている”。

僕に封印されている力って……？

もし、その全てを解放したら……僕は……

……ううん、今は気にしなくていいや。

リミッターを全て外す。そんな時がいつかは来ると思う。

だったら、その時に考えればいいんだ。

それにもし、いるだけで世界を滅ぼすような力だったとしても……

きっと……あの人が守ってくれる。

そう……”　　”が……

「……アレ？」

なんか今おかしかったような？

「ん～……まぁ、いいか！」

気にしない気にしないっと♪

Ｓｉｄｅ　吼太

大分減ってきたな。

「よし、纏めてぶっとばすか。トゥード！」

『申請が承認されました。呪文封印を強ディオガ級まで解除します。マスター、封印解除が維持されるのは【一回】だけですので、注意

してください』

「なら一回で仕留めるまでだ！！」

ハンドソニックを構える。本来の使うべき媒体とは違うから多少威力は下がるが、充分だからこのままでいい。

「ヴァルセーレの剣に吸い込みし、よろず魔物の魔力を放ち、万物を砂塵へと変える千手剛剣とならん！」

右手のハンドソニックを素早く、何度も振る。

これはまだ、溜めの段階の行動。

さぁ、喰らえ。無限の剣群を。

「ヴァルセレ・オズ・マール・ソルドン！！！」

魔力を解き放つと、大量の剣群が光の中から現れて……

「って少ねぇ！？」

え！？なんで３０本ぐらいしか無いの！？

『マスター、魔力が枯渇しました』

「……あ！」

そーか……いくら強力な呪文唱えても、肝心の魔力量が足らないんじゃ……。

魔力量にもリミッターがかかってるの忘れてた……。

「……ま、まぁガジェット相手に本気を出すのも気が引けるしな！」

『マスター、まるで負け惜しみです』

「負けてないから負け惜しみじゃねぇ！つーかトゥード！お願いだからせめてギャグシーンにさせてくれ！」

『ご安心を、マスター。充分ギャグシーンです。さらに言うなら、”ドジっ娘”というものも需要があるそうです』

「それ以上虐めないでくれぇぇぇーーーー！！！！」

オレの周りにいた剣群が消える。

……いや、速過ぎて並のやつには感知出来ないだけだ。

剣群はオレの怒りを乗せて飛び回り、残りのガジェットを全て破壊した。

「オレの怒り、思い知ったかガジェット共め」

『完全に八つ当たりになってます、マスター』

……うるさい。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「すごっ！？」

最終的には５００機以上ガジェットがいたのに……たった一撃で全部破壊しちゃった……。

累計は……いくつだろ？

「シャーリー、今回のガジェットの数、わかるか？」

「ええとですね……累計で万超えてます。正確には、？型が１０６２７機、？型が５機」

「にゃははは。流石だね」

なのはさんが特に驚いていない辺り、この人達にとってはこれが当たり前みたい。

「部隊員だけでも六課隊長陣と同等、隊長は管理局最強の魔導師。いくらリミッターがあるゆうても、これぐらいは当然やな」

はやてさんが満足そうに言う。

「あ、あの……八神部隊長…」

「ん？なんやティアナ？」

「普通、こういう強力な部隊は秘匿するものじゃないんですか？余計な騒ぎを起こさないように……」

あんな立場じゃ、いつ恨みを買っているか、命を狙われているか分かったもんじゃない。

強力すぎる力は、返って危険しか招かないはず……。

「あぁ、そこは多分大丈夫や。コータ君いわく、『それくらいで音をあげちゃ、何一つ護れない』らしいで」

……どういうこと？

「よくわからん、って顔してるな。まぁ、私たちもイマイチわかってないんやけど……。コータ君が目指しているのはヒーローらしい。全ての不幸を破壊し、絶望を塗り替える、そんなヒーロー。……いや、もしかしたらコータ君は【不幸】や【絶望】すら護るつもりなのかもしれへん。でも、みんなの気持ちを受け止められないぐらいじゃ、そんなこと絶対に出来へん。だからこそ、わざと秘匿しないようにしてるらしいで」

「……なんかすごいスケールの話になってません？」

「まぁ、そやな。実現出来るなんて思えへんこと。けど、それを実現しようと動いてる。その成果の一つがティアナ達や」

「え？」

私たちが……？

「そう。経緯は違えど、フォワードメンバーの大半はコータ君が救った人達。それがこうして局員として働き、また誰かを救う。別に局員だけやない。救ってもらった人がまた別の人を救う。そんな【救済の連鎖】を作るためにコータ君や私たちは頑張ってるんや」

「救済の……連鎖……」

私が……誰かを救う……。

出来るのかな……？　いや、やるんだ。

私も、こんな人達になりたい。この人達と一緒に救いたいから！

私の目には、じゃれあい、笑い合いながら帰還してくるコータさん達が映っていた。

## 第百二十四話　六課の最強分隊（後書き）

なっぺ「後書き座談会に懸けるこの情熱、まさしく愛だ！」

吼太「キモい」

ベス「地獄に来るな」

なっぺ「ひでぇ」

吼太「なんか、フラウリーナ三姉妹の出番久々だな」

なっぺ「いい加減出さないと、って考えてたから。つーより、アイツらなまじ強いせいで使いづらいんだよ」

ベス「彼女達、準チート級ですしね。下手に出したら物語が成立しなくなってしまいますし」

吼太「でも、もうちょい何とかさ……」

なっぺ「頑張ってはみるよ。感想感謝コーナー！」

吼太「天照大神さん、ｍａｄａｏさん、ベルワンさん、サイバスターさん、香崎　真琴さん、ユウキさん、ｅａｇｌｅさん、緋水さん、霊亀さん、雨季さん、サーペントさん、七つ夜＆夜つ七さん、バルディッシュさん、黒龍さん、権田さん、毬藻さん、ｋｅｉ――ｋｕｍａ．Ｔさん、ＡＩＲＳさん、朱神優希さん、悠久なる時間さん、ＳＲＸさん、てっちゃんさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ｍａｄａｏさんからは歴代プリキュアのコスプレセットを吼太に、六課の皆にショートケーキ、ラバースに吼太萌え隠し撮り映像（濡れ場もあるよ！）を、サイバスターさんからは無敵ロボヴァルシオンとミーティアを、ｅａｇｌｅさんからは武偵高のチアの服を、緋水さんからは吼太を捕まえるためのロープ（力が抜ける）と媚薬をティアナに、サーペントさんからはガンツミッション招待券と自家製ソーセージを、黒龍さんからは『あんぱん』を１３５０京個を、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさんからは『必勝！　意中のアノ人を寝取る方法』を、てっちゃんさんからはベスにいろいろなハーブティーを頂きました！ありがとうございます！」

ベス「では早速ハーブティーを……」

深菜歌「あ、ハーブティーじゃん。おいしそ～♪」

ベス「あ、それ私のです」

深菜歌「あ、そうなんだ……」↑物凄い残念そうな顔

ベス「騙されませんよ」

深菜歌「うわーん！ベスがいぢめるー！」

ベス「ベス言わないで下さい」

ワルキューレ「あ、吼太さん見～つけた♪」

なっぺ「あ、貴女はｅａｇｌｅさんとこのワルキューレ！」

小ロン「こんにちは～」

なっぺ「さらに同じくｅａｇｌｅさんとこのロンメル（ショタ化）まで来た！」

ワルキューレ「私たちが来た理由はただ一つよ。吼太さんを愛でさせて？代わりにロンを貸してあげるから」

麟「ダメ～！吼ちゃんは麟のなの～！」

なっぺ「てっちゃんさんとこの麟まで来たよ」

ティアナ「いいえ私のです！」

なっぺ「へんたいティアナさんだー」

ベス「大分投げやりですね」

なっぺ「カオスだし」

吼太「つーか助けて！？」↑チア服装備

な＆べ「「うん、それ無理」」

吼太「あ、ちょ、そこはぁぁ……／／／／／」

麟「大丈夫～♪スグに良くなるから～♪」

ワルキューレ「ウフフフ……」

ティアナ「コータさん……いただきます」

深菜歌「やだ、このハーブティー美味しい……」

なっぺ「何このカオス」

ベス「知りませんよ。ところで次回は？」

なっぺ「セカンドモード解放！んで休日かな？未定だ」

ベス「以前にコラボ依頼をされた皆さん。あと少しで再びコラボ開始ですのでもうしばらくお待ち下さい」

なっぺ「あ、今回の後書きで吼太がどうなったかはご想像にお任せします。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百二十五話　とっても短い小ネタ集なのさ（前書き）

今回は息抜き代わりに小ネタを書いてみました。

以前からちょくちょく書いていたんですが、ストーリーの進行上、今入れないと内容が矛盾してしまうため、今回の更新に踏み切りました。

なんでクオリティは保障しません！↑

なお、今回は私にとってイレギュラーな更新なので、後書き座談会はお休みしたいと思います。

## 第百二十五話　とっても短い小ネタ集なのさ

【えっち…？】

ある日、スバルとティアナが六課の隊舎の中を歩いていると……

「なぁ、いいだろ？」

「またですか……。マスターも物好きですね。またしたいなんて」

「……ねぇ、ティア、この声って…」

「吼太さんに、トゥードさんよね…」

何やら、えっちな話に聞こえたためか、二人の顔が赤くなる。

「ほら、早く脱げって。弄れねぇだろ」

「了解です。……んっ」

「「！？／／／／／／／」」

スバルとティアナの顔がさらに赤くなる。

そして、耐え切れなくなったティアナがスバルを引っ張る形で、声の発生源、デバイスルームに突入する。

「な、何してるんですか吉谷提督！」

「ん？」↑右手にマイナスドライバー、左手にトンカチ装備

「……どうかなされましたか？」↑下のホットパンツを脱いでる最中

……

「「工具責め！？」」

「「何言ってんだ（何をおっしゃっているのですか）？」」

真相：トゥードの改造

【誰が一番？】

「そう言えば誰が六課で一番強いんですかね？」

エリオが切り出す。

「そうねぇ。やっぱりなのはさんじゃない？砲撃戦は最強クラスだし」

ティアナが一例としてなのはをあげる。

「あー、でも、リインフォース・アインス副隊長もかなり強そうだよ。なんせあの夜天の書の管制人格だし」

たまたまその場にいたアルトがそう言う。

「八神部隊長もかなり強いと思いますよ？何より広域攻撃が強いですし」

キャロも自分の意見を言う。

「いやいや、シグナムの姐さんだってイイ線いってると思うぜ？」

ヴァイスはシグナムを推す。一度ボコボコにされたことがあったらしく、妙な説得力があった。

「皆さん！フェイトさんだって強いんですからね！」

シャーリーが話に混ざり混んでくる。

「フラウリーナ三姉妹もなかなかだと思うよ？」

何気にアリシアも混ざってきていた。

「それを言うならリーム副隊長もだろうなぁ」

ティーダも話に参加してきていた。

「……吉谷提督は？」

ルキノが「なんであの人は混ぜないんですか？」みたいな様子で言

ってくる。

「「「「「「「あの人は論外」」」」」」」

ある意味ハブられた吼太であった。

【必殺技！】

「スバルはディバインバスターにレムリア・インパクト。ティアナとティーダさんはファントムブレイザー。キャロは召喚があるけど……」

「どうかしたんですか？」

ぶつぶついいながら歩いているリームに、シャーリーが話し掛ける。

「シャーリー！あのね、フォワードのみんなの必殺技って何かなー、って考えてたんだよ」

「必殺技……？」

「そ。必殺技。コータいわく、エリオにはあるらしいんだけど、そうなると戦闘特化した人で必殺技が無い人ってギンガだけなんだよね」

「アリシアさんとアリスさんは？」

「フォワードにはいるけど、あの二人はバック型だしね～。キャロみたいに召喚獣もいないし。……で、必殺技なんだけど、シャーリーは何か知らない？」

「さぁ……？私も何かはちょっと……」

「「……」」

「コータ！必殺技だよ必殺技！」

「デバイス改造なら私にお任せください！」

「何の話だよ！？」

こうして、なんだかんだでフォワード陣のデバイス強化改造プランが出来ていった。

【優しくない】

「要が言っていた。たまには女性に優しくない行動をとるべきだと」

「はぁ」

「旦那。今まで自覚無かったんですか？」

吼太、エリオ、ヴァイスが話していた。

「じゃ、行ってくる」

「「頑張って～」」

「あ、コータ君。ちょっとフォワードの訓練メニューで話があるんだけど…」

「（なのはか……。少し悪いけど）……今、忙しいから後でな」

「え？あ、うん。わかった……」

しゅんとなるなのは。

「じゃあ（スマンなのは！）」

「コータ君……なんかいつもと違う……。……これはこれでイイ！」

結論：吼太のフラグ体質を改善することはもはや不可能

【人生ゲーム！】

「あ、５万ドル取れた」

「チクショウ！フェイト強いぞ！？」

「フェイトちゃんズルイ～！」

「ホントや～…」

「アハハ…」

フェイトが単独トップ。

「次はオレだな。……何々？女児を二人作る。……またか」

既に吼太の駒には、乗り切れない程の赤い棒（女性を示す。ちなみにルール的に、配偶者は一人しかいないので、残りは全て子供ということになる）がいた。

「「「コータ君。誰の子!?」」」

「知るか!?」

【告白…?】

「こんなところに呼び出して、何の話ですか?ダンナ」

ヴァイスが目の前にいる人に話し掛ける。

ヴァイスをこの人気の無いところに呼び出したのは、吼太だった。

「あぁ、実は、ずっと前から思っていたことがあったんだ…」

少し恥ずかしそうに顔を俯かせる吼太。

ヴァイスは、恐怖で背筋を震わせていた。

呼び出し。人気の無い場所。そして吼太の反応。

ここから考えられるのはただ一つ。

告白。

だが、吼太には大量……そう、大量に恋人がいるのだ。

これが告白の場合、その恋人たちから狙われるのは間違いなく自分。

「（……殺される！）」

そして何より、ヴァイスは感じていた。

明確な殺気を含んだ、いくつもの目線。

「なぁ……ヴァイス……オレ……オレ……」

「ダンナ……あの……その……」

殺気がさらに強くなる。

もはや、立っていることすら危うくなる程に膝が震えていた。

そして、吼太はとうとう…

「オレ……お前が歌舞伎の女型をやったら似合うと思うんだ！」

「……はぁ？」

天然吼太。

結局その被害を喰うのは、自分だったりする。

「「「紛らわしいことしないでよ（や）コータ（君）！！」」」

「何の話だよなのは、フェイト、はやて！あ、服を脱がすな……」

何の話？：声優ネタ

【俺の歌を……】

「そういえばさぁ」

「ん？」

リームが吼太に聞く。

「なのはちゃんやリームちゃんって歌上手いでしょ？」

「だな」

「吼太はまぁまぁだよね」

「まぁな」

下手、というわけではないが上手とは言えない。

吼太の歌唱力はそんなものである。

「……詩音ちゃんって歌上手いの？」

「上手いぞ。それもなかなか」

吼太の女性化した姿が詩音だったはずなのだが、今では細かいところで差異が出てきていた。

「そっか」

席を立ち、そのまま部屋を出ていくリーム。

入れ違いで入ってきたスバルにもお構いなしである。

「あの……吼太さん。リームさん、どうかしたんですか？なんか落ち込んでたみたいですけど」

「仲間が見つからなくって拗ねてんだ」

どういうこと？：リームは歌唱力が低い。つまりは音痴。

【年相応】

「～♪」

「ご機嫌ですねコータさん。どうかしたんですか？」

「スバルにティアナか。実はな……」

吼太が手に持っていた箱を開ける。

「じゃん！骨付きソーセージ！懸賞が当たったんだ！」

「……え？」

思わず二人はキョトンとしてしまう。

「後でみんなで食べようなー♪」

そう言いながら歩いていってしまう吼太。

「……ティア」

「……何よ」

「さっきの吼太さんが外見年齢相応にしか見えなかったんだけど……」

「……私も」

たまには吼太も幼くなる。

ちなみにソーセージはなかなか美味かったとか。

【酒】

「コータ君、これ貰ったんだけど呑まない？」

なのはが手に持ったものを見せてくる。

「【フォルトゥナート】？……ってこれ、酒じゃん」

「うん。果実酒だよ？」

「果実酒だよ？じゃねぇよ。オレらまだ未成年だろ」

「ミッドチルダは１５歳からが成人だよ♪」

「う……」

そう、このミッドチルダでは１５歳からが成人となっている。

理由は簡単。優秀な魔導師を管理局に入局させる際、本人の意志を尊重する（周囲の勢いでなし崩しに入局させる）ためである。

汚い。さすが管理局きたない。

「さぁ、さぁ！」

なのはが変なテンションのまま酒を勧める。

先に少し呑んでいたのか、その頬は少し赤らんでいる。

「い、いや……酒はあまり好きじゃ……」

「……そっか」

なのはの顔が悲しそうな様相を見せる。

「……あーもう！呑めばいいんだろ呑めば！」

泣き落としに弱い吼太。きっとこの先つらいことになるだろう。いろいろな意味で。

ちなみになのはは陰でガッツポーズをしていた。嵌めたらしい。

「……」

コップに注ぎ、酒を見つめる吼太。

やがて意を決したのか、舌で少し舐めた。

その瞬間、吼太の顔は真っ赤になった。

「えっ！？」

あまりの変化に驚き、正気に戻るなのは。

何故ならこの【フォルトゥナート】、アルコール度数はあまり高くないのだ。

一歩間違えばノンアルコール並のアルコール量しか含まれていないために、非番の空戦魔導師に好まれている酒。それがフォルトゥナートである。

それなのに、今の吼太の様子は明らかに酔っ払いのそれである。

「……あひゅい（暑い）」

呂律すら回らない吼太。

が、次の瞬間には上半身の隊士服を脱ぎ捨てていた。

どうやら吼太は、”酔ったら脱ぐ”という酔っ払い方をするらしい。

「あひゅいあひゅい（暑い暑い）……もっろぬぐ（もっと脱ぐ）……」

ゆっくりと、徐々に衣服を脱いでいく吼太。

それを見たなのはは……

「もしもしフェイトちゃん!?今すぐ来て!コータ君がストリップしてる!みんなも誘って早く来て!」

『了解!光速で仕事片付ける!』

さすがは変態しかいないことで有名な吼太ラバーズである。

酔いが醒めた3時間後、吼太が素っ裸になって犯されていたのは言うまでもない。

余談だが、この日ラバーズの仕事効率は通常時の数千倍にも及んだという。さすがである。

【気になったこと】

「お父さん……？」

「ん？どうしたキャロ」

キャロが吼太に聞きたいことがあるらしく、話しかける。

ちなみに今は業務外のプライベートタイム。そのため、キャロは吼太のことを父親として呼んでいた。

「あの……ずっと前から気になってたんだけど……」

「……？」

「……お父さんって、天然のネコミミ付けれるよね？お父さんのネコミミが見たいなぁ……なんて……／／／／／」

もじもじしながら言うキャロ。

「（……まぁ、キャロならいいか）あぁ、分かったよ」

「ほんとに？」

「ほんとに。ダウンロード、エネコ、武装召喚（リアライズ）」

その瞬間、吼太の頭に桃色の小さなネコミミが付く。

武装召喚の無駄遣いである。

キャロもそれを見てニコニコしている。よほど気に入ったらしい。

対し吼太はやはり恥ずかしいのか、顔が紅い。

ふと、部屋のドアが開く。

「キャロー、この書類についてちょっと聞きた……」

入ってきたティアナが見たもの。

ネコミミを付けて、恥ずかしがっている吼太。

「ガフッ」

吐血のような勢いで鼻血を噴き出すティアナ。よほどダメージが大きかったらしい。

「ティアさん！？」

「大丈夫かティアナ！？」

吼太が慌てて駆け寄る。

「コー……タ……さん……」

「喋るな！傷（？）に響く！」

「せめて……最後に……」

ティアナがネコミミに手を伸ばす。

さて思い出して欲しい。エネコのとくせいを。

とくせい：メロメロボディ（触れるとメロメロになる）

「カハッ…！」

「ティアナァァァーーーー！！？」

ティアナが貧血（原因：強烈な萌えによる鼻血）で医務室に運ばれたのは言うまでもない。

## 第百二十五話　とっても短い小ネタ集なのさ（後書き）

たくさんの感想、贈り物ありがとうございました。

贈り物は次回で紹介したいと思います。

次回こそ第１０話再現になるはず。

ではではこの辺で！次回もお楽しみに！

# 第百二十六話　とある機動六課の一日休暇　序（前書き）

頭痛が……。

なんか今回は短いかも？でもちょうどいい位置だから許してください。

# 第百二十六話　とある機動六課の一日休暇　序

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「……ア……きて……」

ん……ん……眠い……

「ティ……ば……」

……この声……は……スバルか……

……？

なにか……変な感覚が……

「ティ～ア～、起～き～て～」

……スバル……？

眠い瞼を開けて、変な感覚がする場所を見る。

そこには……

「あ、起きた？」

スバルの手に揉まれる私の胸が……

「ってスバルーっ！！！」

マウントポジションを取っていたスバルを投げ飛ばし、スバルの尻を踏み付ける。

「アンタはまた！ちょっと油断するとすぐそうやってセクハラを！！」

「ちょっとした触れ合いなのに～！！」

全くもう！私の胸はコータさんだけの物なのに！！

「ティア酷い～」

「セクハラするアンタが悪いんでしょうがっ！」

Ｓｉｄｅ　吼太

今朝の訓練の仕上げ、早朝模擬戦が終わって一息つく。

「はぁい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。みんな、お疲れ様」

なのはが言う。

対するフォワード達はというと、疲労のあまりへたれこんでいた。

とはいえ、一過性の疲れだから少し休めばすぐに動けるようになるだろ。全力で走った後、息切れしてる状態みたいなもんだし。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど……」

「「「「「「えぇっ!?」」」」」」

まぁ、そりゃびっくりするよな。抜き打ちテストならぬ、秘密テストだったわけだし。

「で、どうでした?」

なのはが振り返り、後ろにいたフェイトやヴィータに聞く。

「うん。合格」

「「早っ!?」」

フェイトの即答に、スバルとティアナが同時に突っ込む。息ピッタリだなお前ら。

「ま、こんだけみっちりやってて、問題あるなら大変だってこった」

ヴィータが感想を言う。

……あぁ見えて、一番心配してたのヴィータのくせに。かわいいやつだ。

「……なんか、恥ずかしいこと考えなかったかコータ？／／／／」

「いいや？」

「……そっか」

何故かガッカリしたような顔になるヴィータ。「少しぐらいはしたって……」とか聞こえるけど、何のことだ？

「私も合格でよいと思いますよ」

なずなもそう言い、軽く微笑む。

「うん。私もイイ線いってると思うし、これにて二段階終了！」

なのはがそう締めくくる。

各々、それぞれの形で喜びを表現するフォワード陣。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーのところに行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すっからな」

「「「「「はいっ！」」」」」

フェイトとヴィータの通達に元気よく答えるフォワード陣。

テストリリースならともかく、正式なリミッター解除は特定の手順

を踏まないとダメだからな。忘れないでほしいもんだ。

「……明日？」

ふと、キャロがヴィータの言葉に疑問を持つ。

まぁ、そりゃそうだな。普段なら朝飯食べたらまた訓練。どんなに遅くても午後にはまた訓練をするからな。

「あぁ、明日。訓練再開は明日からだ」

ヴィータが言う。

「今日は私たちも隊舎で待機する予定ですし」

「みんな、入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

続いて、なずなとフェイトが言う。

フォワードのみんなはイマイチ理解出来ないのか、少し混乱しているようだ。

「つまりは、今日一日はみんなで休みってことさ」

オレが締めくくる。……いや、なのは達に「コータ君、最後お願いね♪」って目線で頼まれたもんで。

「みんなで、街にでも遊んでくるといいよ♪」

なのはが笑顔で言う。

そんなわけで、本日新人フォワードメンバーはお休みだ。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「お、ティアナか。どうしたんだ？」

「あ、ショタコンのヴァイス陸曹」

「……そういうの、止めてくれよ。誤解なんだから」

「冗談ですよ。……今日一日が休みになったんで、コータさんにバイク貸してもらってスバルとツーリングに行こうかなって思いまして」

ヴァイス陸曹と話しながら、車庫の中を見渡す。

……なんだろ？これ？

「ヴァイス陸曹、このバイクって誰のですか？」

前部分が黒く、後ろ部分が緑のバイクを指差しながら聞く。

「あぁ、そりゃ俺のだ。以前、縁あって旦那から頂いてな。……もっとも、最近はろくに動かせちゃいないが」

「そうなんですか？もったいない…」

配色はなかなか独特だけど、ポテンシャルはかなりありそうなのに……。

「なんならこれに乗ってくれねぇかな？その方がコイツも喜ぶ」

ヴァイス陸曹がバイクを軽く叩きながら言う。

「あ、じゃあそうします。キーは……」

「ほれ、これだ」

ヴァイス陸曹がキーを投げ渡してくる。

「キー、電子式じゃないんですね」

「まぁな。じゃ、調整すっか」

ヴァイス陸曹がバイクを車庫から出す。

車庫の中にいてもあれなので、私も一緒に外に出る。

「プロテクターは？」

「自前のオートバリアです」

外に出たヴァイス陸曹が、カチャカチャとバイクを弄り始める。

「しかしなんだな。俺はたまにお前らの訓練とか見るんだけどよ、なかなかどうして様になってるじゃねぇか。ティアナもセンターガードらしい動きになってきてるんじゃねぇか？」

「皆さんの指導のおかげで……」

事実、私もスバルも、この機動六課でかなり強くなった。それこそ、魔導師ランクが示す実力以上に。

「っと……よし、いい調子だ」

そうこうしてる内にバイクの調整が終わったらしい。

バイクを受け取り、ヘルメットを被る。

……せっかくだし、聞いておこうかな。

「あの……これ、聞いちゃいけないことだったら申し訳ないんですけど……」

「ん？」

「ヴァイス陸曹って、魔導師経験ありますよね？」

何度か、射撃のフォームについて指摘されたことがあった。

それも知識の無い人には指摘どころか、違和感すら感じないような部分を。

そんなのはただのヘリパイロットには出来ない。

考えられる可能性は……何らかの形で魔導師の活動をしていたということだ。

「ま、俺は武装隊の出だからな。ド新人相手に説教くれてやるくらいにはよ。とはいえ、昔っからヘリが好きでな。そんで今はパイロットだ」

……それだけ？本当にそれだけなんですか？

頭の中に浮かんだ疑問。でも、聞くに聞けなかった。

ヴァイス陸曹の目に、一瞬浮かんだ感情が見えてしまったから。

あれは……？

「ほれ、相方が待ってんだろ？早く行ってやんな」

結局、私の疑問が解けることはなかった。

Ｓｉｄｅ　エリオ

「ハンカチ持った？ＩＤカード忘れてない？」

「えと、大丈夫です」

「あ、お小遣は足りてる？もし足りなくなると大変だから……」

「あの、フェイトさん！　その…僕ももうちゃんとお給料を頂いてますから…」

フェイトさんはやたら世話焼きだ。確かに”僕と同じ立場”なのはフェイトさんしかいないし、そういう意味ではフェイトさんも僕が心配なんだろうけど……

僕だってあの吼太さんに鍛えてもらってるわけだし、ちょっと過保護なんじゃないかなって思ってしまう。

「あ、防犯ブザーも必要だよね。それに……」

「聞いて下さいよ……」

「そこまでにしといたら？フェイト」

「あ、姉さん」

アリシアさんがフェイトさんを止めてくれた。

……こうして並ぶと、見分けが付かないなぁ。アリシアさんが髪型を完全なロングにしてて、リボンを使ってないからかろうじて分かるけど、そこが無くなったらほんとにわからなくなりそうだ。

でも、吼太さんやなのはさん、はやてさん辺りの人達はみんな見分けできるらしい。なんでも、経験って言ってたけど……。

「あまり過保護にしちゃってもエリオも困っちゃうしさ」

「えー？そこまで過保護じゃないよ。普通だよ」

普通じゃないですよ、フェイトさん。

「何してるのー？」

……ん？何か、嫌な予感が……

「あ～、エリオくんだ！久しぶりだね～♪」

「うわっぷ！？」

突然、視覚が柔らかいものに潰された！？

い、息が……

「もごもごもご（し、詩音さん！抱き着き癖なんとかして下さい！い、息が！息が！離して！）」

「えー…」

渋々、といった様子でホールドを解く詩音さん。

少し上を見ると、ニコニコした詩音さんの顔が見えた。

ロザリオは付けてないから、吼太さんと分離してるわけじゃないみたいだ。

「あ、詩音ちゃんもお着替え？」

アリシアさんが聞く。

「うん♪　今日はお休みだから詩音のターンなのです♪」

そう言いながら服を脱ぎだす詩音さん。

ってえぇ！？

「あ、エリオくん」

「……な、なんですか？詩音さん」

「詩音の裸見たら、〇すから」

「死んでも見ません！サーイエッサー！」

「優お兄ちゃんにはむしろ見てほしいけどね～♪」

……たまに出てくる”優”って人、誰なんだろ？詩音さんのお兄さんなのかな？

「あ、もういいよ」

詩音さんから許しが出たので、目を開ける。

そこには……

「……／／／／／／」

オシャレしたキャロがいた。

「……へ？」

後ろを見ると、笑いを堪えているアリシアさんと、困った顔をしているフェイトさん、相変わらず笑顔の詩音さんがいた。

……何なの？この状況？僕、もしかして嵌められた？

「……あの」

ふと、キャロが話し掛けてくる。

「……変……かな？／／／／／」

キャロが朱くなりながら聞いてくる。

僕の答えは……

・褒める

・剥く
・襲う

……って待って待って！二つほどおかしい答えが！？

と、とりあえず、ここは無難に……

「うん、似合ってるよ。かわいいと思う」

「ほんとに！？ありがとエリオ君！」

キャロが抱き着いてくる。

「う、うわっ！？／／／／」

「あ……ご、ごめんなさい！／／／／／／」

互いに真っ赤になってしまう僕たち。

「いやぁ～、青春だね～初々しいね～」

「茶化さないであげようよ姉さん」

「詩音も優お兄ちゃんに……ふふふ……♪♪♪」

助けて下さいよ大人三人……。

## 第百二十六話　とある機動六課の一日休暇　序（後書き）

なっぺ「後書き座談会テリオンッ！」

吼太「それ、ほぼ１００％伝わらないネタじゃんか」

なっぺ「分かった人。もしいたら、良い点辺りにでも、テラテリオン！って入れてください」

吼太「休暇の話だな」

なっぺ「ヴィヴィオが合流して、キリのいい辺りで以前募集してたコラボの残りを入れます」

吼太「……思ったんだけどさ、ヴィヴィオの名前ここで出していいのか？」

なっぺ「後書きだから仕方ないね。感想感謝コーナー！」

吼太「香崎　真琴さん、七つ夜＆夜つ七さん、サイバスターさん、朱神優希さん、霊亀さん、天見駆さん、ｍａｄａｏさん、毬藻さん、緋水さん、ｅａｇｌｅさん、バルディッシュさん、ベルワンさん、ｋｅｉ－－－ｋｕｍａ．Ｔさん、雨季さん、黒龍さん、悠久なる時間さん、サーペントさん、竜さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「天見駆さんからはほむスピナーとどこでもドアを、ｅａｇｌｅさんからはゲルビル級戦車【ゲルビル】、ゲルビル級戦車【エヒドナ】、陸上戦艦【マードック】、ヴァルキュリアの聖槍、ヴァルキュリアの鉄槌、ヴァルキュリアの槍と楯を、朱神優希さんから

は焼酎の“魔王”をなのはに、緋水さんからは気の強くなる薬を吼太に、バルディッシュさんからはＦＲカード《ＯＯＯ　プトティラコンボ》、ＡＲカード《ＯＯＯ　メダガブリュー》、ＡＲカード《バース　ＣＬＡＷ' ｓサソリ》を、サーペントさんからはダンクーガノヴァの葵のコスチュームを頂きました！ありがとうございます！」

吼太「き、着ないからな！」

なっぺ「だが断るっ！」

吼太「にゃあぁぁぁぁ！？」↑葵のコスチューム装備

なっぺ「あれ、なかなかエロいよね」

吼太「このやろ……！！！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【ＯＯＯ　ＰＴＯＴＩＲＡ】！　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＭＥＤＡＧＡＢＵＲＹＵ】！』

『プ、ト、ティラ～ノザウル～ス！』

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｏ、Ｏ、Ｏ、ＯＯＯ】！』

『プ、ト、ティラ～ノヒッサ～ツ！！！』

吼太「消えとけ」

なっぺ「アッー」

ベス「容赦無いですね」

吼太「何やってもしばらくすれば生き返るしな」

ベス「なっぺさんがいないと次回が分かりませんけど」

吼太「休日の続きだろ。どう考えても」

ベス「ですよね。ではではこの辺で。次回もお楽しみに」

# 第百二十七話　とある機動六課の一日休暇　変（前書き）

サブタイの【変】は、

変化

変態

の二つの意味があります。

……変態に違和感を感じない貴方。だいぶファンストに染まっていますよ。危険ですよ。もっと染まりましょう↑

# 第百二十七話　とある機動六課の一日休暇　変

Ｓｉｄｅ　吼太

「お、もう出掛けるのか。転ばないようにな」

「大丈夫です。前の部隊にいたときは毎日乗ってたんで（うへへへへ……コータさんが私を心配してくれた～……それだけで５０回はイける～）」

「ティア、運転上手いんですよー♪」

にしてもまさかヴァイスにあげたハードボイルダーに、こんな形で出会うとはな。

もしかしたら、ティアナと引かれ合ってんのかもな。あの”左側”とティアナ、似てないわけじゃないし。

「あ、お土産買ってきますね！クッキーとか！」

「あぁ、気にしなくていいから。それよりも、楽しんでこいよ！」

「「はい！」」

ハードボイルダーが走り出す。

……スタートダッシュモードだったけど、気にしないでおこう。

※吼太がヴァイスに、うっかりスタートダッシュモード用のブース

ターが外せると教えていなかったからです。

※スタートダッシュモードは時速８７０ｋｍで走行。ちなみに吼太が弄ったせいでエネルギー切れは無い。”スタートダッシュ”は、スタート（から全力全開で）ダッシュが出来る（無制限）ようだ。

「じゃ、行ってきます！」

「あまり遅くならない内に帰るんだよ。夜の街は危ないからね」

「「はいっ！」」

どうやらライトニングの二人も出掛けるみたいだ。

ちなみに、バーニングはギンガは自主的に仕事の手伝いを申し出た。ティーダはもう出かけてる。まぁ男女別れてるわけだし、エリキャロみたいに歳が近いってわけでもないから、同じ行動を取らないのも仕方ないだろう。多分。

……つーか、ギンガは休めばいいのに。なんで仕事を？

「じゃあ」

「行ってきます！」

エリキャロを見送りながら、そんなことを考えていた。

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

戦技指導かぁ。必要なのはさすがに分かるけど、やっぱりめんどくさいな。

全く、教導資格なんて取るもんじゃないな。

……ま、ヒヨッコ達が成長していくのは、見ていて楽しいのは確かだけどな。

「あれ？ヴィータさん。シグナムさん。お出かけですか？」

向こうから来たギンガが話し掛けてくる。

「お前の父親であるナカジマ三佐が合同捜査本部を立ち上げてくれることになってな。その打ち合わせだ。あと、聖王教会にも行くことになっている」

シグナムが自身の予定を話す。

「アタシは向こうの戦技指導」

シグナムが話し終わったのを見計らって、アタシも予定を話す。

「そうなんですか……」

「お前は休まないのか？　せっかくの休暇だぞ？」

シグナムがギンガに聞く。

「まぁ、特別行きたい場所があるわけでは無かったですし、せっかくだから六課をゆっくり回るついでに、皆さんのお手伝いをしようと思いまして」

ふーん。立派だな。

「そうか。まぁここに来てからゆっくりしたことは無かっただろうからな。それもよかろう」

「はい。では……」

と言い、ギンガが歩きだす。

「……あぁ、そうそう」

ふと、シグナムがギンガに声をかける。

「吉谷なら聖王教会に呼ばれているから、今日はここにはいないぞ」

と言い残し、去っていった。

ギンガはというと……

「……！？」

驚愕していた。真の目的はそれだったのか。

とはいえ、このままギンガを観察していても仕方ない（面白いけど）し、さっさと出掛けることにしよう。

Ｓｉｄｅ　ギンガ

「機動六課、バーニング分隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です」

「……何かあったんですか？　なんか不機嫌な感じが……」

「お気になさらず」

「いや、でも「お気になさらず」……わかりました」

……切り替えよう。いつまでも引きずってもいいことないし。

「横転事故と聞きましたが……？」

「（怖い雰囲気が消えてない……）はい。ただ、事故の状況がどうも奇妙でして」

トラックは鋭い何かに斬り裂かれたかのようになって横転している。

運転手も混乱しているし、あまり有用な情報は貰えなさそうね。

「それに、下のほうに妙な遺留品があってですね……」

目線を追い、下のほうを見てみる。

そこには、トラックと同じように真っ二つにされたガジェット・ドローン?型と、その触手があった。

……毎回思うけど、趣味が悪いわね。

さらに見渡すと、無惨に壊れたケースが置かれていた。

あれって……。

近寄ってしっかり観察する。

間違いない……これは……

「生体ポッド…!?」

Ｓｉｄｅ　エリオ

――ッ

「……？」

「エリオくん。どうかしたの？」

「キャロ、今何か音しなかった？　ゴトッというか、ゴリッというか……」

「……ううん？」

聞き間違い？

……にしては、何か予感みたいなものがある。

事件の臭い、と言えばいいのかな。そんな感じの予感。

怪しいのは……あの路地かな。

「キャロ！」

キャロに呼び掛けると、キャロも強い意志を瞳に宿して応えてくれた。

路地に走り出す。

そして路地に着いた瞬間、路地の奥にあったマンホールが開いた。

間もなく、小さな手がマンホールの淵にかかり、誰かが出て来る。

あれは……

「女の……子……？」

Ｓｉｄｅ　三人称

聖王教会。

聖王を祀る宗教団体であり、危険なロストロギアを調査、保守することを使命としている。

とは言っても、実質的には宗教団体とはほど遠いものであり、聖王教会に在籍してはいるが、聖王を（偉大な先人として尊敬はしていても）崇めてはいない人もいる。

また、信徒でない人も容易に見学に入れるため、半ば観光名所として成り立ってもいる。

そんな聖王教会の中の建物、そのある一室。

そこで、一組の男女がティータイムと会話を楽しんでいた。

「それにしても、貴方の制服姿はやっぱり新鮮ですね」

女性が、目の前の男性に話しかける。

女性の名はカリム・グラシア。

聖王教会　教会騎士団、そこの騎士の一人である。

また、管理局にも籍を置いており、管理局では少将の階級を持っている。

「制服が似合わないのは友人どころか、妻にまで言われますよ」

男性の名はクロノ・ハラオウン。

ご存知、まっくろくろすけである。

現在は友人であったエイミィと結婚し、二児の父親となっている。

「そんな。いつもの防護服姿と同じくらい凛々しくていらっしゃいますよ。クロノ提督」

カリムが微笑みながら言う。

確かに、”着慣れていない”という印象はあるものの、似合わないとまではいかないだろう。

「ありがとうございます、騎士カリム」

今度は素直に賛辞を受け取るクロノ。

と、部屋のドアが叩かれる。

入ってきたのは、先程まで捜査本部の手伝いをしていたシグナムと、聖王教会からの依頼で調査任務をしていた吼太だ。

「まぁ、コータさん！　では、いますぐベッドの準備を……」

「いきなり何する気ですか！？」

「もちろん、性行為です！」

「胸張って言える言葉じゃないですよ！！」

カリムが目を輝かせながら言った言葉を、全力で拒否する吼太。

「相変わらずだな君達は。ところでシグナム、捜査本部は？」

「滞りなく。それと騎士カリム。吉谷は私の嫁だ。だからベッドを貸していただきたい」

「違ぇよ！！　つーかお前もか！？」

わいのわいのと一気に騒がしくなった部屋。吼太の行くところ、（性的な意味で）トラブルあり。

「あーもう！　埒があかないから一気に進めますよ！　トゥード！」

『了解』

吼太がトゥードからボックスを取り出す。
そのボックスの中に入っていたのは……
「これは……古い布か？」
クロノが中のものを見ながら言う。
「聖骸布だよ。聖王のな。以前にこっそり盗み出されたものだ」
吼太が言う。
「ありがとうございます。しかし、これが悪いことに使われてなければいいのですが……」
カリムが心配そうに言う。ちなみに、服は半分脱げている。
「……恐らくは悪用されているでしょう。具体的にどう使われたかまでは分かりませんが」
シグナムが自身の予想を話す。こちらも半脱ぎである。
「ふむ……僕の方からも調べてみよう。というわけでこの辺りで失礼するよ」
クロノがそう言い、席を立つ。
「ちょ、待てクロノ！　助けろ！！」
吼太がクロノに助けを求める。服は当たり前のように半脱ぎである。

それを聞いたクロノは、万人を虜にするような笑顔を吼太に向け、一言。

「……ごゆっくり」

「こんのまっくろくろすけがァァァァァァァァァァァァ！！！！」

吼太のその後？　お察し下さい。

Ｓｉｄｅ　スバル

エリオ達から連絡のあった通路に来る。

キャロの膝に頭を預けてる件の女の子は、まだ気絶してるみたいだね。

「この娘か。またずいぶんボロボロに……」

ティアがそう言うのも無理は無い。

髪はボサボサ、顔も汚れてて、身に纏っているのはボロキレだけ。

「地下水路を通って、かなりの長い距離を歩いてきたんだと思います」

「……地下水路なのはともかく、なんで長い距離を歩く必要があったんだ？　それも、こんなボロボロになるほど長い距離を……？」

途中で合流したティーダさんが言う。

そういえばそうだよね……。

一体なんで？

「まだ……こんなにちっちゃいのに……」

「……エリオ、ケースの封印処理は？」

ティアがエリオに聞く。

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つける心配は無いと思います」

そっか、それなら安心だ。

「それから……これ……」

レリックが入っているケースからぶら下がる鎖。

女の子が引っ張っていたんだろうと予想出来る側の反対側なんだけど、余っただけにしてはどうも長すぎる。

「ケースがもう一個繋がっていたんだろう。恐らく、水路に落ちて流されているはずだ」

ティーダさんが推論を話す。

「ロングアーチには連絡済みです。多分、ティーダさんの思った通りだとは思いますが……」

エリオもティーダさんの言葉に賛成する。

そして、なのはさん達を載せたヘリがやって来た。

――――……まま……ぱぱ……――――

## 第百二十七話　とある機動六課の一日休暇　変（後書き）

なっぺ「後書き座談会……エクリプス！」

吼太「ディバイドゼロ・エクリプスみたいに言うな」

なっぺ「最近、最初に言う言葉のネタが尽きてきた」

吼太「無理にやる必要ないだろソレ」

なっぺ「恒例だから頑張ってんだ。で、今回カリムと大人クロノがようやく初登場」

吼太「……やっぱり変態なんだよな……つーかシグナムまで……」

なっぺ「シグナムの脳内は戦いとHしか無いもん」

吼太「ダメ人間すぎるから」

なっぺ「にしてもだるい。何がだるいって、上手く進められなくて、中弛みしまくってる。あーもう、スバルとギンガの第一強化プランの導入も検討ついてないし、小道具イラストも行き詰まってるし、スパロボはやる時間が無いし、大変大変」

吼太「スパロボは関係無いだろ」

なっぺ「もう、セカンドモードの練習のときに覚醒させちゃおうかな～」

吼太「真面目にやれ」

なっぺ「つーか、早くゆりかご戦が書きたい！　そして第四部や第五部を書きたい！」

吼太「そのためにはＳｔＳを終わらせなきゃな」

なっぺ「わかってらい。感想感謝コーナー行くぞ」

吼太「朱神優希さん、霊亀さん、ベルワンさん、ＲａｉＮさん、緋水さん、ｅａｇＩｅさん、黎音さん、香崎真琴さん、ＳＲＸさん、バルディッシュさん、サイバスターさん、毬藻さん、ｍａｄａｏさん、ユウキさん、雨季さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、てっちゃんさん、黒龍さん、悠久なる時間さん、七つ夜＆夜つ七さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからはチャイナドレスと飲んだら猫耳に尻尾が生える薬を、サイバスターさんからはマネジメントの本と痛車（なのは映画版のデカール）を、てっちゃんさんからは淡いピンクで大き目の熊さんアップリケ（リ○ックマみたいな）のついたちょっと大きめのパジャマの上下と、先端にファーがついたそれと同じ色のサンタのような帽子とパジャマと同じ色の熊のぬいぐるみを、黒龍さんからは酢昆布と銀さんの服とラーメンとエクセルカリバーとワインを頂きました！　ありがとうございます！」

ベス「マネジメント……則ち、こういうことですか。【もし機動六課の最強魔導師がドラッガーのマネジメントを読んだら】。略してもしド」

なっぺ「はいストップ」

トゥード「唐突ですが優様をお連れしました」

優「本当に唐突だったよ！？」

なっぺ「並行世界の壁を引き裂いて向こうに侵入したからね。まぁトゥードだから仕方ない」

優「……なんだろ？　嫌な予感しかしない」

トゥード「ワインをお持ちしました」

優「ありがと……ってなんでワイン？」

トゥード「贈り物にありましたので」

詩音「優お兄ちゃ～ん♪ちゅー」

優「むぐっ！？」

なっぺ「詩音と優がいちゃいちゃし始めたからフェードアウトしました」

ベス「あ、優さんがワイン飲みましたね」

※詩音に口づけで飲まされてます。

なっぺ「軽薄な感じになるんだよね。さて吼太。チャイナドレスとパジャマ、どっちがいい？」

吼太「どっちも嫌だ！」

なっぺ「オーケー。両方だな？　欲張りさんめっ☆」

吼太「キショイ！つーかオレの話を聞けェェェェェ！！？」

なっぺ「はい、まずはチャイナドレス。薬を飲ませたらネコミミと尻尾が生えたよ」

吼太「ふぇっ！？　ちょ、見るなぁ！／／／／／」

優「ふふっ、吼太って意外と可愛いよね」

吼太「殴り飛ばすぞ優！？」

なっぺ「チェーンジ、パジャマ！」

吼太「あわっ！？／／／／／」

トゥード「ぬいぐるみが可愛さをさらに引き立てていますね」

吼太「冷静に分析すんな！／／／／／」

ベス「さすがトゥードさん、揺らがない」

なっぺ「優と吼太の二人がいて、唯一オトされない女性だからね」

ベス「対フラグ建築能力とかあるんでしょうか？」

なっぺ「結論：トゥードだから」

ベス「実に納得です。ところで次回は？」

なっぺ「恐らく、バトルになる……かな？ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

# 第百二十八話　とある機動六課の一日休暇　戦（前書き）

戦いばっかだから”戦”。

……早く進めたいのに、一向に筆が進まないのはなんでだろ？

# 第百二十八話　とある機動六課の一日休暇　戦

Ｓｉｄｅ　エリオ

「これでよし、っと」

シャマル先生が診察を終える。

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応も無いし、心配ないわ」

「はい！」

「よかった～…」

キャロとスバルさんが、一段落といった様子を見せる。

「ごめんねみんな。お休みの最中だったのに……」

フェイトさんが申し訳なさそうに言う。

……にしても、なんで腰に手を当てた、カッコイイポーズとってるんだろ？　無意識に？

「いえ」

「平気です！」

とりあえず答えた僕の言葉を、キャロが引き継ぐ。

「ケースと女の子はヘリで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね。ギンガも別ルートから合流することになってるから」

「みんなのデバイスに情報を送っとくですよ～♪」

リイン曹長が、僕たちのデバイスに情報をインプットしていく。

「なのはちゃん、この娘をヘリまで抱いていってもらえる？」

「あ、はい」

シャマル先生がなのはさんにお願いをする。

そのままなのはさんは女の子のそばに腰を下ろした。

が、手を出さない。

女の子は以前辛そうな顔をしていて、見ているこっちが悲しくなってきてしまう。

『ガジェット、来ました！　地下水路に数機ずつのグループで、総数……１６……２０！』

『海上方面、１８機単位が５０グループ！』

『別の海上にもガジェットを確認！１５機単位で６０グループ！』

突然、オープンチャンネルから通信が入る。

どうやら、ガジェットが二カ所同時に出現したみたいだ。

海上の方は？型、地下水路は？型だと思う。地下水路なら？型も考えられるけど、空中戦に？型は向いてないし、？型は強襲そのものに向いてない。

「くっ、フォワードメンバーの大半が出払ってるこのタイミングで！？」

ティーダさんが言う。

六課に残っているのはクロスオーバーの分隊員、副隊長三人、八神部隊長だけ。

全員リミッターがかかっているから満足には戦えないし、なによりクロスオーバー分隊は分隊長である吼太さんの指示が無いと動かせない決まりになっている（それが吼太さんが六課に参加する条件だったらしい）。

もちろん、あからさまな緊急事態ならクロスオーバー分隊を八神部隊長が動かせるようにはなるけど、今回は多分違う。

そして八神部隊長は司令塔だから、前線にはなかなか出づらい。

つまり実質的な戦力は副隊長三人だけ、ということになる。

『あー！俺らが出撃出来ればガジェットなんて一ひねりなのにー！』

ミカさんが悔しがる声が通信から漏れる。

『こちらヴィータ！　海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐

が許可をくれた。今現場に向かってる。足止めぐらいならなんとかなると思うから、対策を考えてくれ！』

『こちらバーニング2、地下水路に侵入！ガジェット？型と接触しました！』

ギンガさんの報告がはいる。

『よし、ほんなら隊長二人とリイン達はヴィータと合流。南西方向のガジェット達を頼む。副隊長達は南東のガジェット達を叩いて。アリサ隊長とすずか隊長は六課直衛や』

「南西方向了解です！」

リイン曹長たちが急いでヘリに入る。

『ヘリのほうはヴァイス君とシャマルにお願いしてえぇか？』

「お任せあれ！」

「しっかり守ります♪」

で、後は僕たち。

地下に潜ってレリック探しだ。

「さて……みんな！　短い休みは堪能したわね？」

ティアナさんが聞いてくる。

「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合いれていこう！」

「「はい！」」「ああ！」

スバルさんの言葉に、僕たちは気合十分に答えた。

『『『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ』』』』

「「「「セェーットアーップ！」」」」

「フフフフ……クアットロのＩＳ（インヒュレートスキル）、シルバーカーテン。虚言（うそ）と虚像（まぼろし）のイリュージョンで、回ってもらいましょ♪」

Ｓｉｄｅ　なずな

「で～ん刃衝（いろいろ強化版）！」

「ドゥームブリンガー！！！」

フィニアと羽旺が大量の魔力弾を放ち、ガジェットを破壊する。

にしても、これは……！？

「羽旺」

「うぬも気づいたか。……幻像と実機の混成編隊とはな。なかなか味な真似をしてくれる」

しかも、ぱっと見じゃ本物と変わりないから、見分ける手段も無い。

疲労を溜めるのが目的？　それとも時間稼ぎ？

「壊しても壊してもキリないよ～……」

フィニアも呆れたように言う。

「せめて、誰か一人でもリミッターが解除出来れば……」

「そうすればたかが鉄屑如き一掃出来るが……無理だな。それほどの状況とは判断されないだろう。とにかく、我等はこの塵芥共を叩き潰す他ない」

「ですね。ルシフェリオン」

『ルシファーセイバー』

突撃してきていたガジェットをルシファーセイバーで一刀両断する。

これは本物だったらしく、爆発が発生したが、プロテクションで防いだので問題は無い。

「お！　じゃあ僕も！　バルフィニカス！」

『ピトンフォーム』

フィニアがバルフィニカスを、バルディッシュにおけるハーケンフォームへと変形させ、辺りのガジェットを連続して斬り裂いた。

が、フェイクがかなり混じっていたらしく、爆発はごくごく少ない。

「まだまだぁー！」

『ロードカートリッジ』

カートリッジを使って、魔力刃を巨大化して一挙に斬り裂く。

「羽旺。フィニア、楽しんでますよね」

「あれも大概、戦好きだからな。仕方あるまい」

全く……。後ろを気にしなさいといつもあれほど言っているのに……。

「我等も行くぞ」

「はい、王」

では、鉄屑共を殲滅しましょうか。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……さて、どちら様ですかね？オレの車を破壊してまで引き止めるような輩は、オレの友人にはいなかったはずなんだけど」

真っ二つに斬られ、炎上しているオレ自身の車から這い出しながら、目の前の人に問い掛ける。

ったく……車もただじゃねぇんだぞ。これは貰い物だけどさ。

「手荒な真似は謝罪しよう」

目の前の人物は拳を構えながらそう言う。

「……どーやら、お友達ってわけじゃなさそうだ」

『ですね』

トゥードも言う。

「ナンバーズ3、トーレ。とある方の命により、貴方を足止めさせて頂くッ！！！」

目の前の人物――トーレ――がオレに拳を突き出して突進してくる。

その速さは、フェイトやフィニアにも劣らない。

「チッ、こんなとこでうだうだしてる暇はねぇってのに！」

懐から携帯型の道具と、フィギュアを取り出す。

フィギュアを変形させ、携帯に差し込む。

『ゴー、カイジャー！！！』

それは、宇宙をまたにかける海賊の力。

全ての戦隊の力を使える戦隊。

その名を、海賊戦隊ゴーカイジャー。

オレはその中のゴーカイレッドに変身した。

「派手に決めるぜ！」

ゴーカイサーベルとゴーカイガンを構え、トーレに相対する。

「ＩＳ、ライドインパルス！」

と、トーレが消えた。

……いや、ハスタームーブ並の速度で移動しているだけだ。

原作よりライドインパルスの性能が上がっているのか？　となると、他の奴らもＩＳの性能が上がっていると考えてもいいだろうな。

とはいえ、あまり時間はかけられない。トーレの耐久性もまだ不明だし、とりあえずは一発当てて怯ませて、その隙に離脱だな。

「ならこれだ！」

別のフィギュア――レンジャーキー――を取り出し、ゴーカイフォンに装填する。

「ゴーカイチェンジ！」

『ゲーキ、レンジャー！！！』

レンジャーキーに篭められた力が解放され、オレの姿を異なる戦隊の姿に変える。

それは、獣拳と呼ばれる拳法を使う戦士。

高みを目指して、学び、変わる戦士達の力。

その名を、獣拳戦隊ゲキレンジャー。

「身体に漲る、無限の力！“アンブレイカブル・ボディ”！　ゲキレッド！」

「また変わった……！？」

さぁて、行きますか！

Ｓｉｄｅ　三人称

水路を辿りながら、順調にガジェットを破壊していくティアナ達五人。

今も、ガジェットの一体を破壊したところだ。

「空の上は、なんだか大変みたいね」

ティアナがガジェットを警戒しながら言う。日頃の訓練のおかげか、その息は全く上がっていない。

それは他のメンバーも同じであり、一番体力の少ないキャロでさえも息が上がっていない。

こういった地味な結果は、確かにフォワードメンバーを強くしていた。

「うん」

スバルがティアナに賛同する。

通信によると、やはりリミッター解除は出来ないらしい。フォワードメンバーに増援が来るかは、まさに神のみぞ知る、と言ったところか。

「ケースの推定位置まで、もうすぐです！」

キャロがケリュケイオンでデータを確認しながら言う。

と、スバルのすぐ側で爆発が発生する。

警戒を強めるフォワード達。

しかし、そこから走ってきたのは……

「っと、合流できたわね」

スバルの姉、ギンガ・ナカジマだった。

「ギン姉ぇ！」

「ギンガさん！」

スバルとティアナが嬉しそうに言う。

「お疲れ様です、ギンガさん」

ティーダもクロスファントムの銃口を降ろしながら言う。

「さ、早く行きましょう。ここまでのガジェットは、殆ど倒してきたはずだから」

「すごい……」

「さすがギンガさん……」

ギンガの戦績に驚くエリオとキャロ。

「そんなこと無いわよ」

ギンガが苦笑しながら言う。

とはいえ、フォワードメンバーの全員の実力は拮抗しており、実際のところは彼女達の誰がギンガの立場になったとしても同じような戦績を上げられるはずなのだが、それを彼女達が知るよしも無い。

「ガジェットの反応キャッチ！　こっちに向かってきてます！」

キャロがケリュケイオンの情報を読み、知らせる。

「迎え撃つわよ！　みんな！」

ティアナの決定に、フォワードメンバー全員が従う。
そして、前方から大量のガジェットが現れる。
「行きますっ！」
まずエリオが突っ込む。
その傍らに付き添うのは、紫色のサソリ。
サソードゼクターである。
「変身！」
『Ｈｅｎｓｈｉｎ　Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ　Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｃｏｒｐｉｏｎ』
手に持ったサソードヤイバーにサソードゼクターをセットし、サソードゼクターの尾部を押し込んで一気にキャストオフまでする。
「だぁぁぁぁっ！」
サソードヤイバーを振り回し、ガジェットを斬る、斬る、斬る。
技術で言えばシグナムのような剣の達人には遠く及ばないが、それをライダーシステムの性能で補っているため、通常と同等のパフォーマンスによる戦闘が可能なのだ。
「やぁっ！」
最後に一閃し、周囲のガジェットを一気に破壊する。

そして、一言。

「……やっぱり槍の方が使いやすいかな」

サソードゼクター涙目である。

「フリード！」

フリードがブラストフレアを吐き、新たに現れたガジェットを一掃する。

「兄さん！」

「こっちも負けてられないな！」

後方から挟み撃ちにしようとやってきたガジェットは、全て兄妹ガンナーに撃墜される。

「大型、来ます！」

キャロが言った瞬間、通路の向こうからガジェット?型が転がってやって来る。

「愛嬌溢れる登場の仕方ね……」

ティアナが呆れたように言う。

利便性から考えればちょうどいい移動方法なのだが、成る程愛嬌も感じられる。

?型に挑むのは、ギンガとスバルの姉妹拳闘士。

「スバル、一撃で決められる！？」

「……決める！」

ギンガの問い掛けに、そう答えるスバル。

『Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？』

『Ｙｅｓ』

マッハキャリバーとブリッツキャリバーも、タイミングを合わせるためにデータリンクを始める。

「じゃ、ついて来て！」

ギンガが先行し、スバルがその後ろを走る。

ギンガが敵の攻撃を捌きつつ接近し、そこをスバルが仕留める、という算段らしい。

「行くよ相棒！」

『ロードカートリッジ』

カートリッジが一発消費され、スバルのリボルバーナックルが激しく動き始める。

対し、ガジェット?型はローションレーザー（要はローションをレーザー状に発射してるだけ）と、気持ち悪い触手をギンガ達に向けてくる。

「トライシールド！」

ギンガが近代ベルカ版ラウンドシールド、トライシールドを張り、ガジェットの攻撃（？）を防ぐ。

「ハァァァァッッッ！！！」

ギンガが左手のリボルバーナックルでガジェットを破壊しようとするが、ガジェットは触手を使ってギンガの攻撃を防ぐ。

が、ギンガの攻撃力が高いためか、触手全てでようやく防いでいる状態。

つまりは……

「スバル、今！」

「オッケー！！」

スバルの攻撃を防ぐ手段は一切無い、ということだ。

「ディバイィィィン…バスタァァァーーーーー！！！！！」

スバルの右手がガジェットの内部まで貫通し、内部でディバインバスターを発動する。

内部機械を破壊されたガジェットは、その場で機能を停止した。

「さ、この辺りは片付いたわね！　ケースの場所まで一気に行くわよ！」

ティアナが言い、フォワード達はまた走りはじめた。

Ｓｉｄｅ　？？？

私は探している。私の居場所を。

私は捜している。私の大切な人を。

そのためなら……私は……。

自分を、偽ってでも。

# 第百二十八話　とある機動六課の一日休暇　戦（後書き）

なっぺ「後書き座談会だと！？　赦せるッ！！」

吼太「後書き座談会じゃなきゃ赦さないのかよ」

なっぺ「やっと出せたゴーカイジャー」

吼太「戦隊版ディケイドみたいな奴だよな。アレ」

なっぺ「うん。アカレッドも出てるみたいだし、間違いないね」

吼太「で、今回はバトルばっかだな。しかも長い」

なっぺ「これでもかなり描写削ってるんだけどなぁ。はやてなんて、久々の騎士甲冑のシーンカットされたほどだし」

はやて「ひどい！」

吼太「全部、お前の文才が原因だろ」

なっぺ「返す言葉もありません。感想感謝コーナー」

吼太「サイバスターさん、ｍａｄａｏさん、十六夜アミナさん、ｅａｇｌｅさん、雨季さん、天照大神さん、Ｗｈｉｔｅ　Ｓｅａｌさん、霊亀さん、ｋｅｉ＝ｍｅｇｕさん、香崎　真琴さん、ベルワンさん、ＲａｉＮさん、バルディッシュさん、緋水さん、ユウキさん、悠久なる時間さん、黒龍さん、黎音さん、ＡＩＲＳさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、七つ夜＆夜つ七さん、てっちゃんさん、ＳＲＸさ

ん、畏無さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「十六夜アミナさんからは『絶対にバレないシークレットブーツ』、『身長を伸ばす為の秘密』（セレナ著）と変態撃滅バズーカ『デストラクション』（なのはのＳＬＢ喰らっても傷一つ無い上、弾数∞）を４艇を、ｅａｇｌｅさんからはラバーズの皆に“今まで吼太がしてきた後書きコスプレのかなり【ドキュゥゥゥン！！！】な映像の収録されたＢＤセット”を、緋水さんからはゴスロリ一式を、悠久なる時間さんからはロコンとほのおのいしを、黒龍さんからはセイバーの服を頂きました！ありがとうございます！」

ワルキューレ「吼太さん！今すぐ私のいろんなものを受け止めて下さい！」

ベス「変態一名ご来店」

遥「少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？　吼太。主にミヤのことについて」

なっぺ「過保護一名ご来店。とりあえず吼太にゴスロリを着せよう」

吼太「なんでだよ！？」

なっぺ「いいからいいから♪」

吼太「あ、やめ……」

～着替え中～

吼太「うぅ……／／／／／／」↑ゴスロリ吼太降☆臨

遥「いい写真が撮れたぜｗｗｗ」

なっぺ「おぉ、怒りが収まった！さすがゴスロリ吼太！」

吼太「うれしくないんだけど！？　全く嬉しくないんだけど！？」

ワルキューレ「なら私といろんなものを交換しあいましょう！　白いシーツを引いたベッドの上で！」

吼太「デストラクション発射ーッ！」

ワルキューレ「あーれー」

ベス「さすが対変態兵器。効果てきめんですね」

なっぺ「傍目から見ればバズーカ構えるゴスロリ幼女だけどね」

遥「……」↑無言でシャッターを切る

吼太「だから撮るな！」

なっぺ「そんな貴方にセイバーの服！（多分鎧）」

吼太「だから女装は……女装？」

なっぺ「一応ね」

ベス「着る人によっては男用で通せそうですしね」

なっぺ「まぁ吼太が着たら間違いなく女の子になるけどね」

遥「激写ー☆」

吼太「撮るなァー！！」

ベス「ところで次回は？」

なっぺ「多分ガリューが出るよ。アギトや、或いは別の数の子も現れるかも？　ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

## 第百二十九話　勇気の獅子、信頼の一角獣（前書き）

タイトルでネタが分かる人いるかな？

……いないだろうなぁ。

# 第百二十九話　勇気の獅子、信頼の一角獣

Ｓｉｄｅ　キャロ

ケースが流れ着いているだろう場所は、ちょっとした広場みたいになってた。

ただ、地上を支える柱がたくさんあるし、薄暗くて広場を一度に見渡すことは出来なかったので、ティアナさんの提案で別れて探すことにしたの。

「見つからないね、フリード」

「キュクルー」

どこに流れたのかな？　だいたいこの辺りのはずなのに……。

……あ！　あれって……。

目に付いたものに近寄る。

近くでようやく分かったけど、やっぱりレリックが入っているケースだった。

「ありましたー！」

皆さんに伝わるように大声で言う。

無用心に見えるかもしれないけど、これでも周囲の安全は確認済み

だから問題ない。

――ッ！……ッ！……ッ！…ッ！ッ！――

ふと、変な音が鳴りはじめた。

……何かが、来る！？

気づいた時には、目の前に光弾が迫って来ていた。

「キュクルー！」

フリードが尻尾で光弾を全て叩き落とす。

「……！」

次の瞬間、私の手の中にあった重みが消えた。

「……え？」

そこにはケースは無い。

『Ｃｌｏｃｋ　ｕｐ』

電子音声が聞こえた瞬間、四方八方からぶつかり合う音が聞こえてきた。

見えないぐらいの速度で、戦ってる人がいる。

一人は多分エリオくん。

じゃあ、もう一人が……

「ガァッ！！」

「エリオくん！」

目の前に倒れる仮面ライダーサソード。

その変身が解かれる。

「ぐ……ゴメンキャロ……ケース取り返せなかった……」

「大丈夫だよ。ケースはみんなでなんとかしよう？　それよりエリオくんだよ！　怪我、大丈夫？」

勢いよく倒れて来ちゃったし、もしかしたら骨が折れてたり……。

「大丈夫。まだいけるよ」

そう言うと、エリオくんが立ち上がる。

「ストラーダ！　まだ行けるよね？」

『当然です』

大丈夫みたいだ。

にしても、仮面ライダーサソードに変身して、かつクロックアップまで使ったエリオくんを倒した人がここに……！

目の前の景色が歪み、徐々にその姿が現れる。

そして、その全貌が明らかになった。

「……ＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！！」

……へ？

目の前にいたのは、なんて言うか……

背中を落として、腕組みをして立つ、異様な姿とポージングをした生物だった。

……なんだろう。「た、たった今起こったことを話すぜ！」とか言わなきゃいけない気がする。

「ありがとう、ガリュー」

「ＷＲＹ」

あ、それ……鳴き声だったんだ。

……じゃなくて！

「あの、それ、とっても危険なものなの！　だから返して！」

目の前に現れた、異様生物を従えた女の子に言う。

「……邪魔」

だけど女の子は聞き入れる様子も無く、魔力弾を精製して、撃ち出してくる。

「させるかって！」

だけど、その魔力弾は放たれる前にティーダさんに撃ち落とされた。

「ナイスティーダさん！」

ギンガさんがティーダさんを褒める。

「……」

異様生物が構えをとる。

さすがに逃げられないと判断したみたい。

「ガリュー……やっちゃって」

女の子が言った瞬間、私たちは纏めて吹き飛ばされていた。

Ｓｉｄｅ　スバル

「くっ……見えない……」

速過ぎる……！

このままじゃ一方的だ。

とはいっても、手段なんてほとんどない。

あるとすれば、カウンターでの一発だけど……

ディバインバスターじゃチャージに時間がかかり過ぎるし、レムリア・インパクトは触れなきゃ意味が無い。

あれだけの動きをするんだから、そうそうカウンターで対抗出来るとは思えない。

何か……手段が欲しい。

例えるなら……消費は激しいけど、”瞬間的に大威力を放てる何か”が。

「ぐああっ！！」

「エリオくん！」

今はエリオが仮面ライダードレイクに変身して、クロックアップでサポートをしてくれてる。

けど、あまり長くは持たないだろう。

その隙にティアがこっちに来て話し掛けてくる。

「スバル、動き止められたら、レムリア・インパクトで仕留められる自身ある！？」

「……3秒止められたら！」

「上等！」

ティアが走り出す。

「相棒！　タイミング合わせて、レムリア・インパクト！　行けるよね！？」

『無論です』

マッハキャリバーが答えてくれる。

そうだ。見えないからって、倒せないわけじゃない。

大事なのは、負けない気持ち！

――システム、リリース。ＤＷ　Ｓｙｓｔｅｍ、Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ――

「ん？……マッハキャリバー。今、何か言った？」

『いえ。……少々お待ち下さい。……信号を受信しました。ＤＷシステムを使用出来ます』

「ディーダブリュー？」

『はい。セカンドモード解放により追加されたシステムです。解析したところ、現時点で全システム中２５％の機能しか利用出来ませんが、現状を打破することが可能と思われます』

「ぶっつけ本番かぁ……なのはさんとかに怒られるかな？」

『でしょうね。ですが、それも現状を打破出来ればの話です』

「……やろう、マッハキャリバー」

『了解』

その瞬間、マッハキャリバーからシステム概要がウィンドウに表示されて送られてきた。

Ｓｉｄｅ　ギンガ

「ブリッツキャリバー！」

『キャリバーショット』

一瞬の隙を狙い、ブリッツキャリバーを使って異様な姿を持つ生命体を攻撃する。

が、あまり効いていないのか、生命体はびくともしない。

こんなんじゃ足止めも出来ない…！

もっと、強い力が必要……！

みんなを助けられるような、強い力が！

――システム、リリース。ＤＷ－Ｓｙｓｔｅｍ、Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ――

突然、そんな声が聞こえてきた。

「ブリッツキャリバー…？」

『ＤＷシステムが解放されました。マスターの力になるでしょう。情報を表示します』

ブリッツキャリバーが言うと、目の前にウィンドウが展開し、情報が表示される。

「これ……本当に出来るの？」

『可能です。鍛えていき、システムの解放条件を満たせば、さらなる力も解放可能です』

セカンドモードにこんな隠し玉があったなんて……。

……ぶっつけ本番だけど、現状を切り抜けるためには……！

「行くわよブリッツキャリバー！」

『了解』

Ｓｉｄｅ　吼太

「おぉぉぉぉっ！」

トーレは何とか振り切れたからよかったものの、今度はもっと面倒な相手に会っちまったよ……。

「貴様も転生者か」

「……俺が、ガンダムだ」

「いや、うまうー！」

例によって転生者。オレ以外に三人。

一人は黒い肌に赤い服。

一人はダブルオーライザーみたいなバリアジャケット（ジャケットかどうかは疑問だが）を身に纏ったやつ。

一人は……なんだろ。学生服に仮面？

最後のやつはともかく、残り二人は戦いたがってるようだ。

正直、「お前らだけで戦ってろよ」って言って去りたいし、そうしてもいいのだが……

問題はその場所。

そう、ディエチが狙撃をするビルの真下なのだ。

反応があったから、ディエチは既にこのビル周辺に潜んでいると見ていい。

コイツらがどれだけの力を持っているかは分からないが、どうやってもディエチが巻き込まれるのは確実だろう。

しかもコイツら、ご丁寧にも非殺傷設定の存在しない能力ばかり持ってやがる。

ディエチの狙撃が阻止されるならともかく、死ぬようなことがあったら大問題だ。

……しゃーないな。

「おい。そこの好戦的なパクリ二人」

「「パクリ言うな！」」

パクリだろ。

「纏めて相手してやるよ」

「……どうする？」

「今の俺達には強敵と見た。よって一時休戦と共闘を提案する」

「……いいだろう」

結託したか。

まぁいいさ。すぐに片付ける。

「行ってこい！　コールッ！　カイオーガ、グラードン、レックウザ！」

三体のポケモンを召喚する。

さらに、相乗掛合（クロスオーバー）を発動。対象は……

「……晴れているのに雨？　天気雨か？」

……【ひでり】と【あめふらし】、そして【エアロック】だ。

本来は相殺し合う力でも、相乗掛合なら共存させることが出来る。
それを応用すれば、こういった芸当だって出来るわけだ。

それにより、グラードンとカイオーガが同時に実力を発揮出来る状況が作られた。

具体的には、味方のみに【ひでり】と【あめふらし】が適用される状況に。

後は簡単。

「レックウザ！しんそく！　グラードン！ソーラービーム！　カイオーガ！ハイドロポンプ！」

コイツらを全力でぶっとばすだけだ。

「「ギャアアァァァァァァァァァァァ！！！！」」

三体のポケモンの一斉攻撃により、仮面の奴以外の転生者がぶっとばされる。

一応黒肌の転生者が能力使って創った…贋物の宝具だったか？　それを連射して防ごうとしていたみたいだが、練度に差があり過ぎた。

片や転生してからろくに時間が経っていない奴ら。

片や、ユートピア内の異常な生態系を今この時まで生き抜いている生物。

神にも匹敵するような奴がごろごろしてる中で暮らしてるのが、オレの召喚獣達だ。

ヒヨッコに負ける理由はない。

「っと、もう一人いたはず……ってあれ？」

いつの間にか、仮面の転生者はいなくなっていた。

『どうやら攻撃に紛れて離脱したようです。痕跡をいくつか発見しました』

「そっか。ま、アイツは別に暴れたいわけじゃなかったみたいだしな。ここから離れてくれるなら問題無いさ」

にしても、どこに行ったんだろ……。

『マスター。時間がありません。早く所定位置まで移動を』

「…へ？　…あ、あぁ。わかった」

「あれが現所持者、吉谷吼太か……。もう少し観察が必要だな」

Ｓｉｄｅ　三人称

「だあっ！」

エリオが今自分が出せる最大の速度でガリューを追う。

だが、クロックアップをもってしても捉えられなかった相手。ゼクターの援護が無い今、ガリューに追いつくことは敵わなかった。

「……」

ガリューが瞬間的にエリオの後ろに回り込み、エリオを蹴り飛ばす。

「がぁっ！？」

派手に吹っ飛び、柱にぶつかるエリオ。

「エリオくん！」

キャロが慌てて駆け寄り、ヒーリングをかける。

「兄さん！　追える！？」

「……チッ…」

ティアナの問いに、苦虫を噛み潰したような顔を返すティーダ。

ガンナー二人も、ガリューを捉えることは敵っていなかった。

「……このままじゃ…」

負ける。

そんな空気が辺りを占め始める。

敗北感は感覚を鈍らせ、戦意を削る。

……だが、稀にいるのだ。

「……って、諦めるのは性に合わないわね」

「まだ諦めるのは早いさ……！」

「僕だって、まだまだ行けます！」

「私も！」

「キュクルー！」

どんな絶滅に苛まれようと諦めずに戦い、そして状況を覆すような存在が。

人はそんな存在をこう呼ぶ。

【ストライカー】と。

そして、諦めない気持ちは時に、奇跡すら呼び起こすものなのだ。

「マッハキャリバー！」「ブリッツキャリバー！」

『『ＤＷ－Ｓｙｓｔｅｍ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』』

その瞬間、スバルの目の前に魔法陣が展開され、中から白い閃光が飛び出した。

白い閃光はそのままガリューに突撃し、ガリューを弾き飛ばす。

飛んでいくガリューは空中で体勢を立て直そうとするが、ギンガが

展開した魔法陣から現れた青い閃光がガリューを再び弾き飛ばしたために、それも叶わずに柱に激突した。

「何だ！？」

ティーダが主の元へと戻っていく二つの閃光を目で追う。

やがて、閃光は形を成す。

白い閃光はサークル状の刃を鬣のように装備した獅子に。

青い閃光は輝く突起と鬣を持つ一角獣に。

『Ｆｉｌｅ　ｌｏａｄ．　Ｌｅｏｃｉｒｃｌｅ』

『Ｆｉｌｅ　ｌｏａｄ．　Ｕｎｉｃｏｒｎｄｒｉｌｌ』

「行くよ！　レオ！」

「頼むわよ、ユニコーン！」

鋼の走者、スバルに付き従うは勇気の聖獣【レオサークル】。

銀河の走者、ギンガに付き従うは信頼の聖獣【ユニコーンドリル】。

電子の聖獣が、今ここに降臨したのだ。

# 第百二十九話　勇気の獅子、信頼の一角獣（後書き）

なっぺ「ファイルロード！　後書き座談会！」

吼太「おいコラ」

なっぺ「ウェ？」

吼太「ＳｔＳじゃオリジナルキャラださないんじゃなかったのか？
一人確実に再登場フラグ建ってんだろ」

なっぺ「……”予定は未定”って、いい言葉だよね」

吼太「ぶん殴るぞこの野郎？」

なっぺ「まぁ一応言うと、あれは第四部の伏線だからＳｔＳに関わらないよ」

ベス「いちいち伏線を説明する作者も珍しいですよね」

なっぺ「それがオレなのＤＥＡＴＨ！」

ベス「ガリューさんがＤＩＯになってませんでした？」

なっぺ「キノセイダヨ。あ、ザ・ワールドは使えます（本当）」

ベス「確実にＤＩＯですよね？」

なっぺ「キノセイダヨ」

吼太「にしても、データウェポンて。ＧＥＡＲ戦士電童のやつをよく使う気になったな」

なっぺ「いや、正直リボルバーナックルの回転がＧＥＡＲのタービンにしか見えなくて。結構最初の頃から決まってたんだよ？　データウェポン。むしろレムリアの方がイレギュラーだし」

ベス「そうしたら最後どうするんですか？　アカツキの大太刀とか。仮にスバルさんが装備するとしたら、ギンガさんの装備が無くなってしまいますが」

吼太「ギンガは剣使いじゃないから、凰牙の刀も合わないしな」

なっぺ「……秘密じゃ☆」

吼太「グラードン、じわれ。カイオーガ、ぜったいれいど」

なっぺ「ちょ、やめ……」

いちげきひっさつ！

いちげきひっさつ！

ベス「二回死にましたね」

吼太「一撃”必殺”だからな」

なっぺ「よし、感想感謝コーナーいこうか」

吼太「普通に生き返るなよ。香崎　真琴さん、サイバスターさん、霊亀さん、ＲａｉＮさん、十六夜アミナさん、ｋｅｉ＝ｍｅｇｕさん、ｍａｄａｏさん、天照大神さん、ｅａｇｌｅさん、雨季さん、緋水さん、畏無さん、バルディッシュさん、ベルワンさん、ＳＲＸさん、悠久なる時間さん、ＡＩＲＳさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「サイバスターさんからはネオグランゾンとテイルズオブグレイセスのキャラ衣装一式とアスベルラント召還権を、霊亀さんからはメガレンジャー、ゴーゴーファイブ、タイムレンジャーのレンジャーキーを、十六夜アミナさんからはダブルオーライザー（最終決戦仕様）を通常版＋ＩＳ版を、ｅａｇｌｅさんからは数式戦車（エクスプレッション・タンク）を１０機、緋水さんからは霊夢とチルノの服を、畏無さんからは《チョコレートパンケーキ》と、《犬耳＆尻尾付パジャマ（着ると、語尾に「ワン」と付く）》を、バルディッシュさんからはスパークレンス、リーフラッシャー、エスプレンダー、メビウスブレス、ナイトブレス、コスモプラックを頂きました！　ありがとうございます！」

吼太「平成ウルトラマンの変身アイテム揃い踏みだな」

なっぺ「私の知識不足故に、使う機会があるかは微妙だけどね。ごめんなさい」

ベス「パンケーキうまうま」

吼太「美味いな」

なっぺ「……あれ？　私の分は？」

吼太「無いよ」

なっぺ「ｏｒｚ」

ベス「そこまで食べたかったんですね」

なっぺ「チクショウ！　こうなったら代わりにベスを喰らってやる！」

ベス「やめてください」

なっぺ「じゃあ吼太コスプレさせる」

ベス「どうぞどうぞ」

吼太「待てコラ」

なっぺ「待たない。まずは霊夢ね」

吼太「……慣れた自分が憎らしい…」

なっぺ「ほら、腋見せなきゃ」

吼太「やだ！」

なっぺ「チッ。じゃ次はチルノね」

吼太「凍らせてやろうか？」

リーム「僕も凍らせて！愛という名の氷に閉じ込めて！それで中で

……ハァハァ……」

ベス「リームさんマジ変態ですね」

なっぺ「イヌミミパジャマ」

吼太「……／／／／／／」

なっぺ「ほれ、喋りなさい」

吼太「……／／／／／／」ふるふる

なっぺ「……こちょこちょこちょ」

吼太「あ、あふっ!?　や、やめ……はぁん!……わ……ワン……／／／／／／」

なっぺ「よし」

ベス「ところで次回は？」

なっぺ「そろそろ他の数の子を出したいなぁ。ではではこの辺で！次回もお楽しみに！」

## 第百三十話　それは愉快なルールーちゃん（前書き）

タイトル？　気にしたら負け。気にした人は片手逆立ちで太陽系一周してきなさい。

これで疲れない人の場合は、疲れるまでやりなさい。

# 第百三十話　それは愉快なルールルーちゃん

Ｓｉｄｅ　スバル

「行っけぇレオー！」

私の言葉を聞いて、レオサークルが鬣型カッターを回転させながら虫人間に突っ込む。

だが、先程とは違い、全く攻撃が当たらない。

「……あれ？」

「さっきの一撃で見切られたのね……」

ギン姉が理由を推測する。

……って、それじゃ結局状況変わらないじゃん！

「どういうことマッハキャリバー！？　レオやユニコーンが逆転の切り札なんじゃないの！？」

『使い方次第です。こちらを』

ウィンドウが再び目の前に広がる。

「……ドライブ……インストール……？」

「……逆転の方法は他に無い。やるわよスバル！」

ギン姉が言う。

……ギン姉、思い切りいいなぁ。

ま、でもやらなきゃだよね。

「いくよマッハキャリバー、レオ！」

「こっちもね！　ブリッツキャリバー、ユニコーン！」

『『了解』』

気を集中させると魔法陣が展開されて、レオとユニコーンが送還される。

「レオ・ドライブ！」

「ユニコーン・ドライブ！」

私は再びレオの、ギン姉はユニコーンの名前を呼ぶ。

「「インストォールッッッ！！！」」

私たちが叫ぶと魔法陣が再び展開され、魔法陣が私の右足を、ギン姉の右腕を通過する。

と、私たちに新たな武装が装備されていく。

私の右足にはレオの頭が。

ギン姉の右腕にはユニコーンの頭が。
これがデータウェポンの本領らしい。
「……ん？　これって……」
ウィンドウがまた開き、スペックが表示される。
……そっか！　これなら！
「ギン姉！」
私が呼び掛けると、ギン姉が頷く。
どうやら、私の狙いにギン姉も気づいたらしい。
「行くよレオ！　ハイパースキャン、発動！」
ハイパースキャンを発動する。
虫人間は再び消えたけど、ハイパースキャンのおかげで、どこにいるか、どこを狙っているかが手に取るように分かる。
「だぁぁぁぁっ！」
素早く走り、右足で一閃する。
そこに現れた虫人間の魔力弾は放たれることなく破壊され、またそこにいた虫人間も纏めて蹴り飛ばせた。

「スバル、さすが」

「へへへ…。レオのおかげだよ！」

「……」

虫人間は標的を私からギン姉に変えたみたいで、一瞬で近づいてきた。

手には鋭い突起が生えている。あれでギン姉を貫くつもりみたいだ。

「させないっ！　ファイヤーウォールッ！」

だけど、ギン姉が発生させた赤い壁に阻まれて、突起がギン姉を貫くことはなかった。

さらに、ファイヤーウォールに止められた結果、一瞬だけど虫人間の動きが止まる。

その瞬間、オレンジ色のバインドが虫人間を縛り上げた。

ティアとティーダさんのバインドだ。

「行って！　スバル！　ギンガさん！」

「「了解！！」」

『『ロードカートリッジ』』

リボルバーナックルにあった六発のカートリッジを全てロードし、さらに私たち自身の魔力も限界まで絞り出し、レオ達に送る。

それに応えるかのように、レオは鬣のカッターを、ユニコーンは頭のドリルを回転させ始める。

「レオサークル！」

「ユニコーンドリル！」

これが、データウェポンを使った必倒技！

「「ファイナル、アタック！！！」」

レオサークルからは輝く光輪が、ユニコーンドリルからは青い稲妻を纏った竜巻が放たれ、虫人間に襲い掛かる。

虫人間が直前でバインドを破壊したけど、もう避ける余裕は無い！

「……！」

虫人間を、大爆発が覆った。

Ｓｉｄｅ　三人称

煙が晴れるとそこには、全身の鎧に皹が入った、満身創痍のガリューがいた。

だが、直撃した様子は無い。可能な限りファイナルアタックの影響が少ないように動いたのだろう。

「ガリュー…！」

少女が慌ててガリューに駆け寄る。

そこにティアナが歩いて行く。

「抵抗もここまでよ。とりあえずは私たちの指示に従ってもらうわ」

ティアナがクロスミラージュを少女に向けながら言う。

「……！」

ガリューが少女を庇うように手を出すが……

「ガリュー…もういいよ。大丈夫だから…」

少女がその手を抑える。

「……あなたたちは、なんで邪魔をするの？」

少女がティアナに聞く。

「別に貴女の邪魔がしたくてしてるわけじゃないの。ただ、レリッ

クは危険なロストロギアで、安易に流通させていいものじゃない。
だから、レリックを使用したいなら正式な手続きを踏んで――」

「……そんなんじゃ……間に合わない……っ！」

少女が怒りの形相でティアナを睨み付ける。

「……っ！？」

少女の突然の変貌に、若干驚くティアナ。

その時だった。

「ルールー！　ガリュー！　目ェつむってろ！」

声が辺りに響く。

「スターレンゲ…ホイルッ！」

そして、何か魔力スフィアが投げ込まれた。

その魔力スフィアは次の瞬間に炸裂し、辺りに膨大な光と音を撒き散らす。

「きゃあっ！？」

強烈な光は、高々瞼では防ぎ切れず、強烈な爆音は手で耳をふさいだ程度では緩和しきれない。

ガリューが盾になった少女以外は、全員感覚を潰されてしまう。

それはデバイスとて例外ではない。

いくら機械といえど、過度な影響を受ければ一時的なエラーは発生する。

つまりは今この瞬間、フォワードメンバーは全員、迂闊に動けない状況になっていた。

「……アギト」

少女――ルーテシア――が上を見る。

そこには、手の平に乗りそうな小さな人間……否、融合騎がいた。名をアギト。烈火の剣精とも呼ばれる古代ベルカ純正のユニゾンデバイスだ。

「今のうちだ！　逃げるぞ！」

アギトがルーテシアに言う。

「でも、レリックが……」

レリックは先程のファイナルアタックの際に発生した衝撃波を受け、ルーテシアの手から離れていた。

今は、キャロの足元付近に転がっている。

「あれはさすがに無理だよ！　アタシのスターレンゲホイルの目潰

しも長くは持たないし、今はさっさと逃げたほうがいい。ガリュー、ルールーを」

「……」

ガリューがルーテシアを抱え、翔び立つ。

その後を追うようにアギトも飛び去っていった。

Ｓｉｄｅ　ティアナ

とりあえずは何とかなったけど……このまま逃がすわけにはいかないわね。

「キャロ、大丈夫？」

「は、はい……見えてきました……」

キャロが目を擦りながら答える。

「足元にケースが転がってるから、それの封印処理よろしくね」

「は、はいっ！」

まだ目が痛いのか、目を擦りながらもシーリングを始めるキャロ。

「ちょっとやっときたいこともあるから、協力してね」

「はい！」

「さて、スバル。ウィングロードで地上までの道を作って。あの娘達を追うわよ」

「……」

……返事がない…？

スバルの方を向くと、満身創痍といった様子で、スバルとギンガさんが座り込んでいた。

「ご、ゴメンティア～……ちょっと無理……」

「ファイナルアタックって……かなりしんどいのね……」

そんなに消耗が激しいの？　その様子じゃ、一回の出動にファイナルアタックは一回ぐらいしか使えなさそうね。カートリッジもかなり使用するみたいだし……。

その分、威力はディバインバスターを軽く上回ってるから、使い所さえ間違えなければ逆転の切り札になる。

……要は、現場指揮官次第で化ける力ってことか。

「全く……。私にとってはいい迷惑ね」

要は私次第ってことか。

まぁ、とりあえず今はここから抜け出さないと。

「キャロ！　連続で悪いんだけど、チビ竜で全員を移送する必要がありそうだから、召喚もお願いね！」

「は、はい！　わかりました！」

「エリオはザビーゼクター喚んでおいて。上に出たら不意打ちされる危険性もあるから。兄さんは自力で飛べるから殿をお願い」

「あぁ」

とりあえず、こんなとこかな。

だけどその瞬間、何か嫌な地震が発生する。

……崩れる！？

Ｓｉｄｅ　三人称

「ガリュー、大丈夫？」

「……」

腕組みして、何か間接やら物理法則やらを完全無視した立ち方（通称ジョジョ立ち）をしたガリューが頷く。

「……毎回思うんだけどさ。その立ち方、どうやってんのさ？」

アギトが呆れたように聞く。

それに対しガリューは……

「……」

スケッチブックを取り出して、ペンで何かを書きはじめる。

どうやら、喋れないので代わりに筆談をするつもりらしい。

「……」

書き終わったスケッチブックをアギトに見せる。

そこに書かれていたのは……

『最高にハイになると出来る』

意味不明である。

「……もう、休んでいいよ」

ガリューの意味不明発言は軽く無視し、ルーテシアがガリューを送還する。

代わりに召喚したのは、地雷王と呼ばれる召喚蟲。

局所的な地割れや地震を起こすことが出来る召喚蟲だ。

「ってそれはヤバイよルールー！？　レリックが埋まっちゃったら探せないよ！？」

「……クアットロとセインに手伝ってもらうから…」

「ダメだよ！　アイツらに貸しを作る必要なんて無いって！　旦那も言ってたじゃんか！！」

「……」

――ズドォ……――

地雷王の周りの地面が陥没する。

つまりは、地雷王が力を発揮したということである、

「あ……」

「……テヘ♪」

ルーテシアがかわいく舌を出す。

「テヘ♪じゃねーよルールー！？　これじゃアタシらただの殺人犯じゃん！！　あー……やっちゃったよ～……うぁぁ～……」

「……大丈夫。あの人たちは、あれぐらいじゃ死なない…」

ルーテシアがキリッとした顔で言う。

が、アギトはむしろ怒りを激しくする。

「アイツらがそうでも、レリックはそうじゃないじゃん！　うっかり発動でもしたらどうするつもりだったのさ！？」

「……あぁ、うっか「そのネタはダメだよルールゥゥゥーーーー！！？」……アギトのケチ」

「ケチとかそういう問題じゃないって！　頼むから……頼むから大人しくしててよルーーールーーーーー！！！！！」

アギト、心からの叫び。

と、その時だった。

ルーテシアの後ろの地面が砕け、下から巨大な白竜――フリードリ

ヒ――が現れたのは。

「ギュグァァァァァァァァァァ！！！」

フリードが咆哮する。

「アイツら！？」

「……クッ」

ルーテシアが地雷王の送還と自身達の転送魔法陣を同時に始める。

「させない！　アルケミックチェーン！」

だが、キャロがアルケミックチェーンで送還魔法陣を破壊し、そのまま地雷王をも縛り上げる。

「地雷王…！？」

「こうなったらアタシが……！」

アギトが状況を打開しようと右手に火炎弾を作り出すが……

『凍てつけ！』

不意に、その火炎弾が凍り付く。

「待たせたなみんな」

『僕たちが来たからにはもう大丈夫！』

火炎弾を凍り付かせたのは、吼太の相棒であるリーム。

この土壇場で、ようやく吼太が追いついたのだ。

「さぁて、そこの二人。チェックメイトだ」

## 第百三十話　それは愉快なルールーちゃん（後書き）

なっぺ「後書き座談会」

吼太「元気無いな」

なっぺ「今現在、大絶賛体調不良です」

吼太「ならなんで更新したんだよ」

なっぺ「いや、書き終わってるのに更新しないのもあれかな、と」

吼太「ま、お前のことだからたいしたことないんだろ？」

なっぺ「私貧弱だしね。精神面含め。強くなりたいなぁ……」

吼太「そう言ってるだけの内は無理だな」

なっぺ「わかってるよ。にしても、電童知ってる人多くて驚いた」

吼太「そこそこ古いからな。あまり覚えてる人はいないと思ったが」

なっぺ「あの監督、ガンダムＳＥＥＤの監督でもあるんだよね」

吼太「なんであんなに批判されるような作品になってしまったのやら。電童はそこそこだったのに」

なっぺ「ホントにね。感想感謝コーナー」

吼太「香崎　真琴さん、十六夜アミナさん、サイバスターさん、雨季さん、てっちゃんさん、畏無さん、ＲａｉＮさん、ｍａｄａｏさん、黎音さん、霊亀さん、ｅａｇｌｅさん、緋水さん、リオン・マグナスさん、バルディッシュさん、ユウキさん、天照大神さん、ゼロさん、黒龍さん、ベルワンさん、悠久なる時間さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「十六夜アミナさんからはサソードランサーを、てっちゃんさんからは世界中の全ての温泉セット、ｅａｇｌｅさんからは最高級マスカルポーネチーズのティラミスとバニラジェラート、緋水さんからは緋弾のアリアの理子の服と白雪の巫女服を、バルディッシュさんからはばーぐがる、ういんがる、ふろうがる、世界樹の巫女エレイン、未来の騎士　リュー、沈黙の騎士　ギャラティン、小さな賢者　マロン、ブラスター・ブレード、孤高の騎士　ガンスロッド、騎士王　アルフレッド、アルフレッド・アーリー、ギガンテック・チャージャーのカード、黒龍さんからはかなり高い酒とクノイチの服を頂きました！　ありがとうございます！」

吼太「ケーキうまうま」

なっぺ「あれ？私の分は？」

吼太「無いよ」

ベス「代わりに酒なんて」

なっぺ「私未成年」

ベス「なら私が一人で頂きましょう」

なっぺ「仕方ない。クノイチの衣装を大衆に晒したら赦してやろう」

吼太「断る」

なっぺ「拒否権など……ありはしないっ！」

吼太「あっ……／／／／／／」

なっぺ「巫女服～」

吼太「代わりにテメェを斬ってやる！／／／／」

なっぺ「危なっ！？」

吼太「死ね死ね死ねぇぇぇ！」

なっぺ「理子の服に換装」

吼太「な！？　なんだよこのフリフリだらけの服！？／／／／／」

なっぺ「……やっぱり胸が足らないね」

吼太「当たり前だ！　……ん？　なんだこれ」

ぐいっ

バサッ

なっぺ「あ、それ……」

吼太「ひゃあぁぁぁぁぁぁ……！！？／／／／／／」

なっぺ「制服をパラシュートに変形する時に引く紐なんだ……って、手遅れか」

吼太「なんだよこれぇ……なんだよこれぇ……／／／／／／」↑広がったパラシュートで必死に隠してる

なっぺ「服だよ。改造制服」

ベス「次回は？」

なっぺ「ナンバーズがぼちぼち出てくる。あ、そんで一つ読者のみんなに質問があります」

ベス「質問？」

なっぺ「ノーヴェなんだけど、データウェポンの数が絶対的に足らないんだよね。既に3：3でスバギンに分けちゃってるから。あ、鳳凰は別枠ね」

ベス「つまり、オリジナルデータウェポンを出したいと？」

なっぺ「うん。設定は一応出来てる。GOサインばっかなら出します。逆に、否定意見が一つでもあれば出しません。ちなみに、出てくるのはしばらく後になるかと」

ベス「どんなデータウェポンなんですか？」

なっぺ「十二支の内、申を除いたやつだね。詳しくは秘密。意見待

ってます。ではではこの辺で！」

# 第百三十一話　Ｎｕｍｂｅｒｓ（前書き）

うぅむ……。

吼太の全力を出せるような状況がなかなか作り出せない……。

原作キャラは極端に弄るとストーリーから見直ししなきゃいけなくなるし、テキトーなオリキャラ入れるにしても、テンポが悪くなるのは否めないしなぁ……。

# 第百三十一話　Ｎｕｍｂｅｒｓ

Ｓｉｄｅ　吼太

どうやら、フォワード達が上手くやってくれてたみたいだな。

多分、この様子ならデータウェポンを出すことに成功して、ファイナルアタックも使ったんだろ。

それで、隊長陣に頼らずにルーテシアとアギトを追い詰めた。

……上出来だな。

ルーテシアの召喚した地雷王が送還されていく。

これで一件落着、ってとこか。

「……逮捕はいいけど……大事なヘリを放っておいていいの…？」

ふと、ルーテシアがそんなことを言う。

「貴方はまた……守れないかもね……」

……トゥードの時のことを言ってんのか？

まぁ、なんでもいいさ。答えは決まってるんだから。

「あぁそうだな。助けられない」

「コータさん！？」

ティアナが驚いたようにこちらを向くが、説明は後だ。

「……オレ一人じゃな」

上空を、巨大なレーザーが走る。

恐らく、ナンバーズの一人であるディエチが、自身のＩＳ（インヒュレートスキル）であるヘビィバレルから放った砲撃だろう。

それがヘリへと向かい……

……跳ね返された。

「えぇっ！？」

あまりの事態に、アギトが驚いた声をあげる。

反射された砲撃はそのまま飛んでいき、ビルの上で爆発を起こした。

……ま、やられちゃいないだろ。ナンバーズだしな。

『こちらヴィータ！　ヘリの防衛に成功した！』

どうやら、ヴィータがグラーフアイゼンのギガントフォルムで、文字通り打ち返したらしい。さすがだな。

なのはやフェイト、マテリアル達もこちらに来ている。あと一分もすりゃ着くだろ。

んでもって……

「ふへ？」

足元を移動していた腕をマントで掴み、引き上げるとまた女性が現れる。

ナンバーズの六番、セインだ。

ディープダイバーを過信し過ぎてたらしく、注意がまるで足りてなかった。

俗に言う、気配が隠せてなかったって奴だな。

「もう少し気配を……隠せるようになってから来なっ！」

セインをそのまま、　マントを操ってぶん投げる。

「出オチは嫌ぁぁぁ！！？」

奇妙な声をあげながら飛んでいくセイン。

「ってコータさん!?　なんで投げちゃうんですか!?」

ふと、ティアナにそんなことを言われる。

……

「あ」

「あ、じゃないですよ!?」

……ごめんなさい。

「っと、エリオ！　そういやケースは!?」

「話逸らさないで下さいコータさん！」

いや、ケースも重要ですよティアナサン？

「大丈夫です！　ちゃんと手に……あれ？」

エリオが手に持っていたものを見せてきた。

だがそれはどう見ても……

「ゲーム機だな。しかも最新機種」

「……すり替えられました」

……なんでゲーム機とすり替えたんだ？

「きゃあっ！？」

突然、キャロが声をあげる。

そちらを向くと、スバルによく似た少女がルーテシアとアギトを抱えていた。

「え……？」

スバルが呆けた声を出す。だが、自分に瓜二つのの顔がそこにあれば、そういった反応をしてしまうのも無理無いだろう。

「……ＩＳ、エアライナー」

少女かウイングロードに酷似したものを出すと、そのまま走り出す。

「チッ、待て…！」

急いで追い掛けようと走り出す。

『コータ！　ガジェット？型が複数体フォワードの近くに出現！この数……消耗したみんなじゃ無理だよ！』

リームが索敵した情報を送ってくる。

「……チィッ！」

分身能力であるハーモニクスはリミッターがあるから使えない。

選択肢は二つ。

フォワードを見捨ててルーテシア達を追うか、ルーテシア達を見逃してフォワードを助けるか。

答えは……

「見捨てるなんて……出来るわけ無いだろ！」

急いで戻る。

「ハンドソニック……ｖｅｒ７！」

日本刀のような剣がついた右手と、鞘のようなものがついた左手。左右非対象のハンドソニック、ハンドソニックｖｅｒ７を出し、鞘に刀を仕舞う。

そして？型の集団の中に入り、居合斬りの要領でハンドソニックを抜き放ち、ガジェットを全て斬り伏せる。

居合斬りによる一撃必倒に特化した形態。それがｖｅｒ７だ。

「リーム！　アイツらは！？」

『……反応、消失』

『距離が離れ過ぎてます。仮に今から追い掛けたとしても、向こうには迎撃に十分な時間が出来てしまうでしょう』

「……してやられた、か……」

フォワードのみんなは頑張った。今回はオレの注意不足が原因だな……。

「……後始末はオレがやる。みんなは先に行ってろ」

「あ、あのー……吼太さん」

「実は、レリックには私たちでちょっと……」

ティーダとティアナが言ってくる。

……なんだ？

「キャロ」

「あ、はい」

ティアナが言うと、キャロが帽子を外す。

そこには、某ピク○ンみたいな花が生えていた。

……え？　何あれ？

「私のシルエットって、衝撃に弱いんでケースにはかけられなかったんです。奪われた時点で気づかれちゃいますし。だからレリックに厳重封印を施して、敵との接触が少ないキャロに持っていて貰おうってことになって……」

……あぁ、そういやあったなぁ…そういうの。

今頃、セイン辺りが怒られてんのかな？

Ｓｉｄｅ　三人称

ここはジェイル・スカリエッティの秘密基地。

管理局のほぼ全員にバレていないこの基地に、数人の女性が帰って来ていた。

「酷い目にあった……」

「本当だよ～……」

ディエチとセインが言う。

そう、ナンバーズである。

ちなみにディエチは全身に焦げ目がついており、セインは頭部に大きなたんこぶをつけていた。

ディエチは跳ね返された砲撃をまともに喰らい、またセインは投げられた際にディープダイバーが間に合わなかったらしい。

「ハぁン…自分達の放った砲撃で落とされるなんて……屈辱で濡れてしまいそう～♪」

歌うように言ったのはナンバーズ４、クアットロ。自他ともに認める変態である。

「一杯食わされたな。すみません、ルーテシアお嬢様」

トーレがルーテシアに謝る。

「……いい。レリックは手に入ってるから」

とは言うものの、ルーテシアの表情は優れない。

どうやら、六課陣に実質的な敗北を味あわされたのが悔しかったらしい。

「ノーヴェ。セイン。レリックの確認だ」

「あぁ」「あいよ～」

ナンバーズ９、ノーヴェとセインに、トーレが指示を出す。

ノーヴェがセインにレリックケースを渡し、それをセインが開封す

る。

「じゃじゃーん！」

セインがケースを開けると、そこには……

「……何コレ？」

ディエチがそう言うのも無理無いだろう。

ケースの中に入っていたのはレリックなどではなく、どこぞの淫獣フェレットを模したぬいぐるみだったのだから。

「……完全にこちらの敗北か…」

トーレが頭を抱えながら言う。

「あぁれ～？　もしかして失敗しちゃったんスか～？」

「そう言うなウェンディ。今回は向こうが一枚上手だっただけのことだ」

落胆する面々の元に二人の少女が現れる。

一人は赤い髪を一つに纏めた、軽い雰囲気の女性。

もう一人は大人びた話し方とは裏腹な幼い外見、そして右目を眼帯で隠した少女。

彼女達もまたナンバーズである。

赤い髪はナンバーズ１１のウェンディ。眼帯の少女はナンバーズ５のチンク。

今回は留守番組だったメンバーである。

「うっせぇ！　ブレイクライナーの調整がもう少し速く終わってりゃレリックだって……！」

「まぁ、そうカリカリするな。お前たちのおかげで、”別のレリック”は回収出来たんだからな」

いきり立つノーヴェをチンクが宥める。

「と、言うことはセッテ達は上手くやったわけか」

「はい、トーレ姉様」

そこに、さらなる少女たちが現れる。

ナンバーズ7、セッテを中心とした別動隊である。

セッテの後ろにいるのはナンバーズ８、オットーと、ナンバーズ１２、ディード。

この三人、今回が初実戦だったはずなのだが、あまり疲れを見せていない。

それもそのはず、ナンバーズは個人単位でもSランク前後の実力があるのだ。

六課のような精鋭部隊が相手で無ければ、平和ボケしている管理局員に負けるわけがないのだ。

「……以前から活動していて、僅かなりとも顔が知れている私たちを囮にすることで、新顔ばかりの別動隊にレリックを奪取させる作戦。まさかこうも上手くいくとはな」

トーレが神妙な顔をしながら言う。

「これでプラマイゼロ。戦いは2ラウンドに持ち越し～、ってとこっスかね」

「だな。ところでそのレリックは何番なんだ？」

ディエチがケースを持っているオットーに聞く。

「17番」

淡々と答えるオットー。

「えっと、こっちは6番だから……ルーテシアお嬢様の探してるレリックじゃないか…」

セインが言う。

それを聞いたルーテシアは、無言のままその場から離れる。

「あ、待ってよルールー！」

事態を静観していたアギトが、慌ててルーテシアを追う。

「じゃあ～、私はこれをドクターに届けてくるわねぇ～」

そう言い、クアットロもこの場を離れる。

そのまま、自然にこの場は解散となった。

Ｓｉｄｅ　なのは

「……」

聖王教会の病院。

今日保護された女の子は、ここに運び込まれていた。

症状は疲労と軽い栄養失調。

どちらもたいしたことはなく、明日には目を覚ますだろうとのこと

らしい。

「……まま……」

淋しいのか、譫言のように呟く女の子。

大丈夫だよ。

そう言おうと手を伸ばし……

「まま……ぱぱ……なんですっぽんぽんなの……？」

……はい？

「気持ちいいの……？」

「えぇぇぇっ！？」

突然何言い出してるのこの娘！？

「しーっ！」

「あ、すいません……」

通り掛かったナースさんに注意されてしまう。

「…まま……どこ行くの……行かないで……」

「……大丈夫だよ。どこにも行かないから…」

あらかじめ買ってきていた、ウサギのぬいぐるみを枕元に置く。

少しビックリしたけど、結局は変わらない。

この娘はただ、寂しいだけなんだ。

見つけてあげよう。この娘の両親を。

もし見つからなくても、その時は私が……。

## 第百三十一話　Ｎｕｍｂｅｒｓ（後書き）

なっぺ「後書き座談会だというのか……信じられん……ッッッ！？」

吼太「いや、後書き以外の何物でもないから」

なっぺ「はやくゆりかご戦にしたい。つーか吼太の全力描写が書けないのが辛い」

吼太「仕方ないだろ」

なっぺ「極端な話、私が書きたいのって最終話前後時点の吼太なんだよね」

吼太「それ、今書いたらダメだろ」

なっぺ「うん。だからこそ辛い。今のままじゃ制約が強くて強くて……」

吼太「仕方ない」

なっぺ「まね。で、今回ナンバーズなわけだ」

吼太「ロールアウトしてないはずの奴らが普通に活躍してたんだけど」

なっぺ「……ぶっちゃけよう。あの場にいる奴らだけじゃ展開をあぁ持って行けなかった」

吼太「それだけかよ！？」

なっぺ「それだけですよ。感想感謝コーナー！」

吼太「香崎　真琴さん、緋水さん、サイバスターさん、十六夜アミナさん、霊亀さん、レイチェル＝アルカードさん、黒龍さん、天照大神さん、ｍａｄａｏさん、畏無さん、Ａｒｉｓｈｉａさん、悠久なる時間さん、バルディッシュさん、てっちゃんさん、ｅａｇｌｅさん、ムラサメさん、朱神優希さん、ユウキさん、ベルワンさん、ＳＲＸさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「緋水さんからはインデックスの服を、サイバスターさんからはシャマルの愛情オリジナルケーキと、シャマル特製お弁当をベスの分と私の二人分を、黒龍さんからは吼太達にチョコ、吼太に金色の闇の服を、畏無さんからは猫耳＆尻尾＆猫語のＦＦ？ユウナの服、未成年上等酒、スライムキングベスを、バルディッシュさんからはリザードランナー　アンドゥー、ワイバーンストライク　テージャス、ドラゴンモンク　ゲンジョウ、ドラゴンナイト　アリフ、勝利の化身　アリフ、槍の化身　ター、鎧の化身　バー、魔竜導師　ラクシャ、ドラゴンモンク　ゴクウ、魔竜聖母　ジョカ、ワイバーンストライク　ジャラン、ドラゴンナイト　ネハーレン、ドラゴニック・オーバーロードのカードを、てっちゃんさんからは吼太にスーパードライ一年分、ウサギ娘セットを、ｅａｇｌｅさんからは“ブッシュド・ノエル”を１０本（その内１本をなっぺに、残りを神様方にプレゼント）、ムラサメさんからは吼太にサバタのアストロブレード（オリジナルの効果はないが魔力は必要ないただの剣）、暗黒剣ヴァナルガンド（暗黒仔の力やオリジナル能力がない、魔力必要無しのただの剣）、がまんの実（どんなダメージも無傷になるアイテム。ただし時間は１５秒）、太陽のカード（魔力を完全回復する）、属性変換グローブ（全ての属性が使用可能。また、属性の

効果を武器に付加できる）を頂きました！ありがとうございます！」

ベスキング「お勤めご苦労。次回からは我輩がやるから、ベスは休むといいのであーる」

ベス「ぽっと出の一発キャラに出番は譲れません」

なっぺ「ケーキうまー……！！」

ベス「お弁当ですよ」

なっぺ「わぁい！」

な＆べ「「ガベハアッ！？」」

吼太「げに恐ろしきはシャマルの手料理……。とりあえず、今回はコスプレはなさそうだな……。……ん？　チョコだ。いただきまーす」

もぐもぐ

ボヒュっ

吼太「……／／／／／／」

リーム「ほろ酔いコータキター！」

※チョコはチョコでも、ウィスキーボンボンでした

吼太「……暑いの……／／／／／／」

リーム「ゲヘヘヘヘ……コータぁ～、いい子だからこの服を着ようね～」

吼太「ん……／／／／／／」↑金色の闇の服

リーム「く……さりげなく”ぱんつはいてない”が発動しただと……やってくれる…！」↑鼻から愛

吼太「……にゃあ……？／／／／／／」↑猫耳&尻尾&猫語のＦＦ？ユウナの服

リーム「ばぶっ！？……は、破壊力が……萌えパワーが……くっ、まだまだ」↑愛増加

吼太「……？……／／／／／／」↑ウサギ娘セット

リーム「」↑死

吼太「暑いの……眠い……おやすみなさい……／／／／／／」

※進行役が消えたので、今回はこれまでです。

オリジナルデータウェポンは、特別反対意見が無かったので採用と致します。

次回はヴィヴィオのターンかな？

ヴィヴィオとの話が一区切りついたら、以前募集したコラボの続きとなります。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百三十二話　少女《ヴィヴィオ》（前書き）

ヴィヴィオの「いっちゃやらぁぁぁぁぁ！！！」が可愛くて仕方ない。

どこにも行かないよ。一緒にいるよ。って言ってあげたい。

そんな私は変態さ！↑台なし

# 第百三十二話　少女《ヴィヴィオ》

Ｓｉｄｅ　吼太

聖王教会。

そこは、まさに魔窟。

右を向けば武闘派聖職者達（バトルシスター）、左を向けばコスプレ大好き騎士達。

「……ねぇ！　なんでオレ、あそこに行かなきゃなんないの！？
答えてよシグナム！」

「運命だ（性格も子供っぽい吉谷もイイ…！）」

はい。現在、なのはやシグナムと一緒に聖王教会に向かってます。
なんでも、件の少女が目を覚ましたとか。

ちなみに運転してんのはシグナム。顔が変ににやけてるのはなんでだろ？

※妄想のせいです

「にしても、よく私たち来れたよね」

なのはが言う。

確かにな……。

隊長二人に、部隊長直属が一人。たかだか少女一人を視察しに行くのには明らかに過剰だ。

向こうが何やら言ってきてたらしいけど……。

「何、私はシスターシャッハと懇意にしているし、吼太は騎士カリムのお気に入りだ。高町なのはに関しては六課側から自発的に出したとはいえ、そう考えるなら納得出来るだろう」

そんなもんなのかな。

「しかし、検査が済んで何かしらのシロクロが付いたとして……あの娘は、どうなるのだろうな」

シグナムが心配そうに言う。

「当面は六課か聖王教会で保護だろうな」

「だね。受け入れ先を捜すにしても、長期の安全確認が取れてからでないと……」

何しろ対外的には正体不明の少女だからな。そうしないと迂闊に動けない。

――ピー、ピー！

ふと、通信が入ってくる。

『騎士シグナム！　聖王教会、シャッハ・ヌエラです！』

何やら慌てた様子でシスターシャッハが通信を入れてきた。

ちなみに、通信用ウィンドウはシグナムの目の前に開いているため、運転が疎かになりそうに見えるが、ミッドの車にはそれ用の対策が施されており、道路との信号送受信である程度の運転制御がされている。だからウィンドウ側にある程度集中しても大丈夫なのだ。

「どうされました？」

『すみません、こちらの不手際がありまして…。検査の合間に、あの娘が姿を消してしまいました！』

「シグナム！」

「わかっている吉谷。……可能な限りとばすぞ」

数分後、聖王教会の病院に到着する。

と、病院からシスターシャッハが走ってきた。

「申し訳ありません！」

「状況はどうなっています？」

なのはがシスターシャッハに聞く。

「はい…。特別病棟と、周辺の封鎖と避難は済んでいます。今のところ、飛行や転移、侵入者の反応はありません」

封鎖に避難か。…過剰反応に見えなくもないが、少女の正体がまだわからない以上、けっして間違ってはいない。

「外には出られないはずですよね……。分かりました。手分けして捜しましょう」

なのはが指示を出す。

さて、捜しに行きますか。

――ガサガサッ

中庭を捜していると、草むらから何かが出てくる。

あ！　ようじょ　が　とびだしてきた！▼

……いろいろとゴメンなさい。言うべきかな、とか思ったもんで…。

「いたいた。心配したんだぞ～」

「……心配？」

ふむ。警戒はしているが怖がってはいないみたいだ。今はこの見た目に感謝だな。

「オレは吼太。キミは？」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか。いい名前だな」

「……」

まだ警戒が解けないのか、手に持ったウサギの縫いぐるみをぎゅっと抱きしめるヴィヴィオ。

「大丈夫。オレはキミ……ヴィヴィオの味方だ。何もしないから、安心しな」

「……ほんとう？」

ヴィヴィオが怯えた表情で聞いてくる。

「あぁ。オレを誰だと思ってる。……だから、安心しろ」

オレが言い切ると、ヴィヴィオが表情を和らげた。

その瞬間……

「逆巻け！　ヴィンデルシャフト！！！」

オレとヴィヴィオの間に、シスターシャッハが飛び込んできた。

そのまま、戦意を剥き出しにしながらヴィヴィオを睨み付けるシスターシャッハ。

「こら」

「あたっ！？」

そのシスターシャッハの頭を、ハリセンで叩く。

……ハリセンをどこから出したかって？　これも相乗掛合（クロスオーバー）のちょっとした応用だ。ジッパーがリミッターついてるから、いろいろ新しいやり方試してた際に出来るようになったんだよ。

……意味不明だって？　まぁ、後で説明するさ。

「そんな凶悪な戦意をいたいけな女の子に向けんな。泣いちゃってるだろ」

「え？」

オレに叩かれた部分を抑えながら、シスターシャッハがヴィヴィオを見る。

そこにいたのは、怖さで腰が抜けて座り込んでる、ただの女の子。

「検査の結果この子が人造魔導師だと分かったらしいが、そんなの

関係無い。今ここにいるのは、ただの少し怖がりな女の子だ」

「うんうん。……大丈夫？　立てる？」

合流してきたなのはもオレに賛同してくれる。

「ゴメンね……ビックリしたよね…」

なのはが、ヴィヴィオが驚いてしまった時に落としてしまったウサギの縫いぐるみを拾いあげ、ホコリを落としてヴィヴィオに返してあげる。

「……う……」

縫いぐるみを受け取り、抱きしめるヴィヴィオ。

「立てる？　汚れちゃったね」

そう言いながら、服の汚れを軽く落としていくなのは。

『緊急の危険はなさそうです。シスターシャッハ。ありがとうございました』

「初めまして。高町なのは、って言います。貴女のお名前は？」

「……ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオ……。いいね、かわいい名前だ。ヴィヴィオは、どこか行きたかったの？」

「……ママとパパ……いないの……」

そのヴィヴィオの言葉を聞いて、なのはの表情が僅かに歪む。

人造魔導師に明確な親はいない。遺伝子提供者がいても、名乗り出なければ親とは言えないだろう。

「……あぁ、それは大変！　じゃあ、一緒に探そうか。いいよね？　コータ君」

「もちろんだ」

「……うん……」

どうするかな。ヴィヴィオは聖王のクローンなのは間違いないはずだ。

……下手に動かせば、世界から修正が入る。世界の修正ごとき、たいしたことはないけど、余計な邪魔はなるべく避けたい。

まぁ、当面は様子見か。

Ｓｉｄｅ　はやて

「臨時査察って……機動六課に？」

フェイトちゃんが意外そうな顔で聞いてくる。

「んー……地上本部にそういう動きがあるみたいなんよ～…」

まぁ、怪しさ満点の使い捨て部隊やしなぁ……。

「地上部隊の査察はかなり厳しいって聞いてるけど……」

「うー……ウチはただでさえツッコミどころ満載の部隊やしなぁ……」

「今、配置やシフトの変更命令が出たら……正直、致命的だよ？」

それはわかってるけど……。

いくら何でも、「査察は拒否しますっ！」なんて言ったらエラいことになるし、そもそも見られて困るようなものは……あんまり無い……はず。

うん、無いはず。　明らかに過剰戦力とか考えたらアカン。

「何とか乗り切らななー…」

とりあえずはコータ君達クロスオーバー分隊をどう説明するかやな……。

特に戦力が集中してる、尤もらしい理由を何か考えないと……

「ねぇ……査察対策にも関連してくるんだけど、六課設立の”本当の”理由。そろそろ……聞いてもいいかな？」

フェイトちゃんが真剣な面持ちで聞いてくる。

……バレてるみたい、やな。

「別に私は嘘を言ったつもりは無いよ。地上で自由に動ける部隊が欲しいって思ったのは事実や」

「でも、”機動六課そのものが短期間で設立される”理由にはならない。まだ隠してる真実がある。違うかな」

「……さすがは現役執務官やね。言うことが違うわ」

「私を誰だと思ってるの？」

……そこでその言葉を言うか…。

まったく、私もフェイトちゃんも、相当コータ君に毒されてるなぁ。

「よく知ってるよ。エリート執務官のフェイト・テスタロッサ様やろ？」

私が言い返すと、どちらからともなく笑いが漏れてくる。

「……そやな。まぁええタイミングかな。今日、聖王教会本部……

カリムのとこに報告しに行くんよ。クロノ君も来る」

「クロノも？」

「うん。…………コータ君たちと一緒に、ついて来てくれるかな？
そこで全部、纏めて話すから」

そう、機動六課がどういう部隊で、〝何が原因で〟設立されたのか、
を……。

「……うん。わかった」

フェイトちゃんがしっかりと頷いた。

「そういえばコータ達、もう帰ってきてるかな？」

フェイトちゃんが通信ウィンドウを開く。

その瞬間…………

『やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！』

大声が響いた。

…………何があったん？

Ｓｉｄｅ　吼太

「……どーしような」

「どうしようね」

ただ今、聖王教会から（便宜上）一時的に連れてきたヴィヴィオに泣きつかれているわけなんだけど……

まさか、オレとなのはを二人とも掴んで離さないとはなぁ……。

無理に振りほどくのは気が引けるし……。

「ほ、ほら！　落ち着いて！　ね！？」

歳が近い、ってことでフォワード達を呼んでみたけど、てんで言うことを聞いてくれない。

どーしたもんか……

「管理局が誇る超一流魔導師たちにも、勝てへん相手はおるんやな～」

そんなことを言いながらはやてとフェイトが入ってきた。

「そんなことはいいからよ～……」

「あの……フェイトちゃん、はやてちゃん、助けて…？」

正直、手に負えない……。

「じゃあ、増援を呼んでみようかな」

と、言いながらフェイトが通信ウィンドウを開く。

「増援……？」

キャロが不思議そうにフェイトを見ている。ほかの面々もみんな同じような反応だ。ヴィヴィオですら、泣くのを止めて周りを見回してるほどだ。

と、何やらドタドタした足音が近づいてきた。

「おっ待たせー！」

「呼ばれて飛び出てボク、参上ー！」

「我の出番を所望してるのはココかーっ！？」

ミカ、フィニア、ナツハが扉から現れた。

……何だ？　何故この三人が……？

何か共通点があるはずだ。何か……まさか！？

「アホの娘！？」

「「「アホの娘じゃないよ！？」」」

……あれ？　じゃあなんだ？

「三人とも子供好きだからだよ」

フェイトが人差し指を軽く振りながら言う。

「……？」

ヴィヴィオがさして怖がらずに三人の元に行く。何か、感じるものがあるんだろうか。

「お！　君がヴィヴィオ？」

「ちっちゃいねー。ナツハと同じぐらいの背？」

「な！　我はここまで小さくないわ！」

「……ヴィヴィオのほうがおっきい？」

「小さくない！　我は小さくなぁーい！」

ナツハが必死に叫ぶ。

ちなみに二人の背は同じぐらいだな。どっちも大して変わらない。

……まぁ、数年後には……。

「何が言いたい父君!?」

いや、何も?

「ヴィヴィオ。こちらフェイトさんにフィニアさん、あとミカさんにナツハちゃん」

「何故我だけちゃん付けなの……ムグっ!?」

「茶々を入れるなナツハ」

いつの間にかいたセンが、ナツハを止めた。

まぁ、止めとかないと話が進まないからな。仕方ない。

「ヴィヴィオは、コータやなのはさんと一緒にいたいの?」

「……うん」

ヴィヴィオが少し後ろめたそうに答える。

「でも、ヴィヴィオがわがまま言うから、コータもなのはさんも困っちゃってるよ?」

「……あぅ」

ヴィヴィオが悲しそうな表情をする。

……ホント、いい子だなヴィヴィオは。小さいなりに、しっかり物事が見えてるって証拠だ。

「ヴィヴィオは、コータたちを困らせたいわけじゃ…ないんだよね？」

「……うん」

「じゃあ……フィニアさんたちといい子で待ってられるよね？」

「……うん」

「オレたちもすぐに戻ってくるからさ。ちょっとだけ待ってな」

ヴィヴィオの頭を撫でながらオレも言う。

「……うん！」

たちまち笑顔になるヴィヴィオ。

「あ、そうだ！　お父さん。ユートピアのみんなも呼んでいい？」

「？　いいけど……あんまヤバイ奴らは呼ぶなよ？」

ミカにデビライザーとヴィネコン、ライドブッカーを渡す。

本来はオレ以外は使えないけど、フラウリーナ三姉妹であるミカはオレの血を持ってるし、権利を一時委譲すればなんとかなるはずだ。

それに、一定のレベル以上の奴……具体的には戦闘でそれなりの力を発揮するような奴はリミッターを解除しなきゃ喚べないしな。

「りょーかい♪」

「いってらっしゃい…！」

「応。いってきます」

ヴィヴィオが手を振ってきた。

それに応えながら、なのはとフェイトの二人と一緒に歩き出す。

目指すは聖王教会。

さぁ……聞かせてもらおうじゃねぇか。

世界の未来（よげん）ってヤツをさ！

## 第百三十二話　少女《ヴィヴィオ》（後書き）

なっぺ「後書き座談会、ピクミーン！」

吼太「全長１ｃｍの植物がどうした」

なっぺ「赤が好き」

吼太「知るか！」

なっぺ「あ、そうそう。予定では予言までやる予定だったのに、気づいたら長くなってた」

吼太「構成力が足らないな」

なっぺ「わかってらい。まぁ、おかげで出したい雑魚敵が出せそうだからいいけど」

吼太「雑魚敵？」

なっぺ「まぁそれはお楽しみに。にしてもさぁ」

吼太「なんだ？」

なっぺ「デュアルトマホークブーメランって、明らかにダブルトマホークブーメランのパクリだよね」

吼太「今朝みたクロウォネタやめなさい。分からない人たくさんいるだろ」

なっぺ「次次回辺りからコラボ再開かな？　もう少しだけお待ち下さい。ちなみに現在……」

十六夜アミナさん

雨季さん

てっちゃんさん

ユウキさん

ｋｅｉ＝ｍｅｇｕさん

Ｓｔａｒ　Ｄｕｓｔさん

Ａｒｉｓｈｉａさん

サーペントさん

黒龍さん

ＳＲＸさん

仮面ライダーディケイドさん

バルディッシュさん

毬藻さん

畏無さん

なっぺ「以上の人達から依頼を受けてます。変更がある場合や、追加依頼、コラボの際にやってほしい事がある人は今のうちにお願いします。あ、ただ以前の五人抽選に当たってた人は今回は受けられません。バルディッシュさんに関しては以前から受けてたからこその特例なだけです。じゃあ感想感謝コーナー！」

吼太「香崎　真琴さん、バルディッシュさん、十六夜アミナさん、ユウキさん、てっちゃんさん、ｅａｇＩｅさん、サイバスターさん、ＲａｉＮさん、ｍａｄａｏさん、雨季さん、緋水さん、畏無さん、毬藻さん、黎音さん、黒龍さん、ＡＩＲＳさん、天見駆さん、ベルワンさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはロゼンジ・メイガス、バトルシスター　ここあ、バトルシスター　もか、バトルシスター　しょこら、オラクルガーディアン　ニケ、オラクルガーディアン　ジェミニ、オラクルガーディアン　アポロン、サイレント・トム、ＣＥＯアマテラス、サークル・メイガス、メイデン・オブ・ライブラのカードを、十六夜アミナさんからはセレナと永琳の合作薬『国士無双の薬極・完成版』を２００ダース、ガンダムヘビーアームズカスタムのダブルガトリング（ダウンサイジング版）をスペア含めて８基、対ＡＭＦ用ブレスレットを六課全員に、対ルール用通信妨害システム（クアットロ、ウーノでもハッキング不可）を、ｅａｇＩｅさんからは反物質爆弾を１万発をスカリエッティに、サイバスターさんからはなのはにゼオライマーとダブルオーライザーを、ＲａｉＮさんからはリリィ・シュトロゼックのエンゲージスーツを、緋水さんからはナンバーズの服を、畏無さんからはメカベスと犬耳＆

犬尻尾付の巫女服（尻尾を触ると、感じる）を、黒龍さんからはアルコール入りのクッキーとコスプレ用のネコ耳着きのメイド服（着ると語尾がニャになってしまうと言う呪い付き）を、天見駆さんからは虹校の制服（女子用、スカートの丈は短い）と通学帽、黒ニーソ、ローファーを頂きました！　ありがとうございます！」

スカ「反物質爆弾か。要らないけど、一応取っておこうかな」

吼太「帰れ変態」

ベス「メカなんかに私が倒せるわけが」

メカ「ガガピー」

ベス「ティウンティウン」

なっぺ「やられてるよ。さて吼太。どれから着たい」

吼太「どれも断る」

なっぺ「なら順々にねー」

吼太「だから何故そうなる！？」

なっぺ「まずはリリィのエンゲージスーツ」

吼太「女子用とかいい加減止めてくれよ……恥ずかしいじゃんか……／／／／／」

なっぺ「そういう反応するからだと思う。次はナンバーズ」

吼太「（なら黙っていれば！）……／／／／／／／」

なっぺ「（恥ずかしくて声も出ないのかな？）　次は犬巫女」

吼太「効果ねーじゃねーか！？／／／／／／」

なっぺ「お前には無理ってことだ……よっ」↑尻尾をわしづかみ

吼太「きゅぅぅんっ！！？／／／／／／／」

ベス「どうしたんですか？」↑復帰

吼太「な、なんはわはらないへど、あはまはまっひおひあっへ……
（な、なんか分からないけど、頭が真っ白になって……）」

なっぺ「尻尾触ると感じるらしいからね」

メカ「ガガピー」

ベス「あ、メカな私が吼太さんの尻尾に」

ぐりゅぐりゅ……ぐっぐっ

吼太「あっ！？　らめっ！　いやら！　い、と、とんじゃうのぉぉぉ！！！」

なっぺ「もうエロゲ行ってこいやお前。ネコ耳メイド服いこうか」

吼太「酷い目にあったニャ……／／／／／／」

なっぺ「よかったな。このメイド服にはそういう機能無くて」

吼太「よくないにゃ！」

なっぺ「……え？　よくないの？」

吼太「……あ！……い、いやそういう意味じゃなくてにゃ、コスプレが続いてるから嫌にゃんであって……」

ベス「うっかり乙です」

なっぺ「虹校制服」

吼太「だぁから！　なんで女子制服ばっかなんだよ！？　……しかもこれ……スカートの丈がなんか短い……／／／／／／」

なっぺ「そういうもんだからな。まぁこれで機嫌直してくれよ」

吼太「クッキー？　こんなもんで……もぐもぐ」↑でも食べる

ベス「でもあれ、アルコール入りですよね？」

なっぺ「知ってたよ？」

吼太「……はふ……／／／／／／」↑酔った

なっぺ「はい、ストリップ開始～」

吼太「……脱げない……ねぇ……脱がせて……？……／／／／／」

なっぺ「私じゃなくて読者さんたちに言ったら？」

吼太「ねぇ……これ……早く脱がせて……暑くて……たまらないの……／／／／／／」

ベス「これ、狙ってるんですよね？」

なっぺ「……酔ってはいるけど素でしょ。吼太だし」

メカ「ガガピー」

なっぺ「あ、メカが服破いた」

【見せられないよ】

吼太「このやろっ！　よくもオレにあんな恥を！！！」

メカ「ガガガガガガ……」

なっぺ「どうやら、脱がした後で酔いが醒めたらしいね。酔いのせいで前後の記憶が曖昧で、全てメカのせいだと思ったみたい」

ベス「メカとはいえ、自分がやられてるのは心痛いものです」

なっぺ「嘘だろ？」

ベス「もちろん。ところで次回は？」

なっぺ「予言まで行く……かな。出来ればコラボ可能段階までもっていきたい。ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

## 第百三十二話　預言者の著書《プロフェーティン・シュリフテン》　前編（前書き）

長くなったから初の前後編だよ！

……戦闘で1話消費しちゃった。

預言はまぁ、あれです。好き勝手に予想してください。即興なんでバレバレな部分もあるかも。

# 第百三十二話　預言者の著書《プロフェーティン・シュリフテン》　前編

Ｓｉｄｅ　吼太

「よっと」

ヘリの前部席に座る。

「全員乗りましたね？　じゃ、出発しますよ！」

ヴァイスが言い、ヘリが翔び立つ。

「に、しても災難でしたね旦那。あんな小さな娘に泣きつかれちゃって」

「別に災難ってわけじゃないんだけどな。あれぐらいなら可愛いもんだし、何より頼ってくれるのは嬉しいしさ」

フラウリーナ三姉妹が誕生して間もない頃を思い出す。

外見こそ大人で生まれてきたフラウリーナ三姉妹だが、当初の精神はまさに子供そのもの。

どこに行くにもついて来たし、オレと離れなきゃいけない時とかはすぐ泣きそうになってたっけなぁ。

それが今ではいっぱしの魔導師。感慨深いもんだ。

「じゃあの娘、旦那が引き取るんで？」

「さぁな。最終的にはそうなるかもしれねぇけど、今はまだわかんねぇよ。とりあえずは六課で保護して、ほとぼり冷めたら受け入れ先を探して……。そんな感じかな」

「そっすか。……僭越ながら、俺としちゃぁ吼太の旦那に引き取って貰えたら安心なんですがね。あの娘は、人造魔導師なわけですし」

……まぁ、確かにそうだ。

年齢に似合わぬ知性、魔力の高さ、それと反比例しているかのような幼い人格。

誰が引き取ろうと、苦労をするのは間違いないだろう。

でも……

「そう言ってくれるのは嬉しいが、オレは無理さ。あの娘を引き取るに値する相応しい人は、オレ以外にもたくさんいる。オレは……弱いから」

強くなりたい。

でも、この１０年生きてきて、本能的に分かったんだ。

いくら肉体が強靭になろうと

いくら能力が強力になろうと

オレ自身は、弱いままだって。
転生前の白黒の人生を送ってた頃と、何も変わらないって。

――ピーッ！　ピーッ！

突然、アラートが鳴る。

「なんだ!?」

目の前に通信ウィンドウが開く。

『ロングアーチスタッフからヘリへ！　クラナガン郊外で、謎の人物を確認！　件の事件の仲間と思われる人物が襲われています!!』

「チッ！　こっからじゃ遠すぎる!!」

ヴァイスがヘリの操縦桿を叩く。

「ヴァイス！　オレが行く！　お前はなのは達を教会に!!」

「単機で行くんすか!?　危険です！　せめてなのはさん達の出動許可が下りるまで…」

「待ってられるか！　人々の平和と安全を守るのが管理局員だ！
犯罪者だってなんだって、消えていい命なんかねぇんだよ！！」

「旦那！！」

ヴァイスの声を背に受けながら、空に飛び出す。

「トゥード！　リミッター緊急解除！」

『いいのですか？』

「説教と始末書だけで済むなら安いもんだろ！」

『……了解』

全てのリミッターが強制的に解除される。

「螺旋界認識転移システム、作動！！」

目の前に銀河を模したワープゲートが現れ、それを突き抜ける。

そこには、倒れたナンバーズが二人、今だ戦っているナンバーズが二人。

そして相対してるのは……

「仮面ライダー……ディケイド……！」

世界の破壊者、仮面ライダーディケイドだった。

Ｓｉｄｅ　ノーヴェ

「チィィィッ！！」

偵察のためにクアットロ、チンク姉、ウェンディと一緒に来てたのに、まさかこんな化け物と出会うなんて！

「ノーヴェちゃん、”アレ”はまだ使えないの？」

後ろでシルバーカーテンを駆使して補助してくれているクアットロが聞いてくる。

「使い方に慣れてないし、何よりエネルギー消費が激しいんだよアレ！　今使ったら確実にやられる」

チンク姉とウェンディは既に戦闘不能。私も正直ヤバイ。

クアットロだけは唯一無傷だけど、私がやられたら一分も持たないだろう。

セイン達救出部隊が到着するまで後５分。

……それまでは、私が持たせなきゃなんねえ……！

「そろそろ破壊させて貰うぜ。この世界の癌細胞(わるいぶぶん)を」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ』

奴が黄色いカードを腰のベルトに装填した。

アレは……チンク姉とウェンディを一撃で倒した技！

やるしかないか……調整不足で、一撃撃ったらフレームがガタガタになっちまうが、背に腹は代えらんねぇ！

「終わりだ」

『Ｄ、Ｄ、Ｄ、ＤＥＣＡＤＥ！』

……ダメだ！　間に合わねぇ！？

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｄ、Ｄ、Ｄ、ＤＥＣＡＤＥ】！』

その瞬間、全く同じ攻撃が”二つ”放たれ、互いが互いを相殺した。

Ｓｉｄｅ　吼太

なんとか間に合ったか。

「あ！　テメェは管理局の！！」

「あらあら～？」

クロスオーバーフォームの姿を知っているノーヴェとクアットロが不審そうな視線を向けてくる。

「おう。元気そうでよかった」

「アタシらはアンタらの敵だろ！！　なんで助けた！？」

「理由はある！　だが言わん！」

「説明出来ないんスか……」

気がついたのか、ウェンディが茶々を入れてきた。

「……逃げるぞ、みんな」

チンクが立ち上がりながらナンバーズ達に言う。

「でも！」

「理由は分からんが、今は味方と見てよさそうだ。この好きに離脱する。ウェンディ」

「了解！　ＩＳ、エリアルレイヴ！」

ウェンディがボードを取り出し、動きの鈍いチンクを乗せる。

「チッ……ありがとうなんて、絶対言わねぇかんな！！　管理局員！」

「さっさと行けっての」

捨て台詞をノーヴェが言いながら、ナンバーズが撤退する。

「……ふざけた真似しやがって」

目の前のディケイドがオレを睨んでくる。

「人々の平和と安全を守るのが管理局員だからな。アイツらだって、れっきとした”人”だ。ならオレらが守ってもおかしくないだろ」

「くだらない……誰なんだお前は！」

ディケイドが聞いてくる。

ディケイドに聞かれる、ってのはなかなか奇妙なもんだな。まぁいい。

いつも通り、答えてやるまでだ。

「聞きてぇか？　なら教えてやるぜ。……通りすがりの、チート魔導師だ。覚えておきやがれ！！　変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＤＥＣＡＤＥ】！』

こちらも仮面ライダーディケイドに変身する。

「ディケイド！？　まさかお前……」

「大正解。オレもお前と同族さ」

そう、目の前の奴は転生者だ。

ディケイドなんて世界観をバリバリに壊すやつはそうそういないし、答えを出す者（アンサートーカー）でも同じ結果が出たから間違いない。

「……ちょうどいい。この力と、修業の成果を試すいい機会だ」

目の前の奴が戦闘態勢をとる。

……”試す”、か。

「上等だ。試してみろよ、お前の力」

さて、何分ぐらい頑張ってくれるかな。

Ｓｉｄｅ　なのは

「え！？　コータ君が！？」

「あのバカ！　なにやってんのよ！！」

アリサちゃんが怒りを剥き出しにして怒鳴る。

フェイトちゃんは呆れてるし、はやてちゃんとすずかちゃんは苦笑い。

全て、コータ君が無断出動したのが原因だ。

『それで、現地の映像なんですが……』

ウィンドウが開き、中継映像が表示される。

そこには……

「仮面ライダーが二人…？」

「そんな……仮面ライダーって、正義の力なんじゃ…」

すずかちゃんとフェイトちゃんが状況を飲み込みきれてないように言う。

「……力に悪も正義も無い。いくら仮面ライダーの力でも、使う人

間が悪い人なら、悪い結果は現れる」

はやてちゃんが言う。

無害だった魔導書、夜天の書が悪く改変された闇の書。

それの主だったからこその言葉なんだろう。

……でも、きっと大丈夫。

「勝つよ、コータ君は」

「違うわよなのは！　私たちが一番気にしてるのは別のほう！」

「……ふぇ？　何が？　アリサちゃん？」

「損害賠償よ！　あそこただの市街地だから、損害金が……」

「コータ君、気にしてくれてるといいんだけど……」

……無理じゃないかなすずかちゃん。コータ君、うっかりだし。

「なのはちゃん。来月のお給料、覚悟しといてな」

うぅ……欲しいお洋服があったのに……。

Ｓｉｄｅ　吼太

……なんか、微妙な心配をされた気がする。

「どうした！？　大見栄切った割にはたいしたことないなァ！！」

目の前のディケイド電王が攻撃しながら言ってくる。……こっちが手加減してるのに気づいてないのか？

「……そろそろ終わらせるか」

つまんないしな。コイツ。

「今、オレのヴィンテージが芳醇の時を迎える、ってな。変身ッ！」

カードを装填する。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【Ｇ】！』

変身したのは、仮面ライダーＧ。

対し、目の前のディケイドが困惑し始める。

「何だそれは！？　お前のオリジナルライダーか！？」

……知らねぇのか。なら、教えてやるか。

「仮面ライダーG。香り良き美酒の知識を持つ、番外の仮面ライダーだ」

「な、何が美酒だ!?　そんなくだらない仮面ライダー、叩き潰してやる!」

目の前のディケイドが、電王から本来のディケイドへと戻り、こちらに襲い掛かってくる。

「無駄無駄」

だが、当たらない。

拳も、蹴りも、剣も、銃も。

全てが当たらない。

「くそっ!くそくそくそっ!!!　なんで!?　１０００年も神のとこで修業したのになんで!!!」

だんだん焦ってきたのか、なおさら動きが乱雑になる相手のディケイド。

「ほらよっと」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＳＯＭＭＥＬＩＥＲ　ＳＣＲＥＷ　ＫＮＩＦＥ】！』

”G”の形状をしており、剣先がソムリエナイフ、柄がコルクスクリューを模したデザインとなっている剣を取り出し、敵ディケイドを数度斬りつける。

「があっっ!?」

あっさり吹っ飛ばされる敵ディケイド。

「千年修業した？　笑わせんじゃねぇよ。修業の年数で実力は決まんねぇんだよ。オレなんて……えっと、何年だっけか？」

『わかりやすい表現と、わかりにくい表現がありますが、どちらにしますか？』

トゥードが聞いてくる。

「……じゃあ、一応わかりにくい方で」

『しめて、６１６４３４４２２９２６５３４９７５４３４９６４３７２７６７３９８０４９７０４６７０５６７７０７４６７６４０７６７６７０７５５６５４０７６４０…「トゥード、ストップ。ゴメン、そこまでわかりにくいとは思わなかった」……まだまだありますが？』

「……いや、いいよ」

長すぎだなぁ……。ナイアの時計乱用してると時間感覚無くなりそうだ。つーかオレ、そこまで修業してまだこのレベルかよ……。

「そういや、わかりやすい表現って何だったんだ？」

『想像を絶する長さです、と言うつもりでした』

「……わかりやすいことこの上ないな。さて、終いだ」

カードをベルトに装填する。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｇ、Ｇ、Ｇ、Ｇ】！』

ベルトからパワーソースが全身に送られる。

これが、仮面ライダーＧの必殺技。

「スワリング・ライダーキック！！！」

天高く跳び上がり、横回転しながら敵ディケイドに突撃する。

必殺技を受けた敵ディケイドのベルト、ディケイドライバーは許容量以上のダメージを受けて、粉々に砕けた。

後に残ったのは、気絶した男性が一人。まぁコイツは放っといても問題ないだろ。

「聖王教会、行かなきゃな」

ちなみに、街の被害は０だったりする。

Ｓｉｄｅ　三人称

聖王教会の一室、そこで管理局の大物たちが一人の男を待っていた。

と、部屋の中に銀河が出来、そこから一人の男が現れる。

そう、吼太である。

「遅いぞ、バカ吼太」

部屋で待っていた男の一人、クロノが吼太に言う。

「言い訳をするつもりは無いさ。遅れたのは事実だからな」

「いえ、大丈夫ですよ。ほら」

部屋の主、教会騎士のカリムが時計を指差す。

それは、今回の集合時間を指していた。

「ギリギリセーフ、ってとこやな」

はやてがおどけた調子で言う。

「では、そろそろ語り始めましょう。機動六課設立の理由を」

# 第百三十三話　預言者の著書《プロフェーティン・シュリフテン》　後編

Ｓｉｄｅ　三人称

「では、そろそろ語り始めましょう。機動六課設立の理由を」

カリムが言うと、カーテンが閉まり、魔術障壁も展開、トドメと言わんばかりに部屋の周囲に軽いＡＭＦが発生する。

つまりはそれだけ、秘匿性の高い内容だと言うことだ。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア【レリック】の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。知っての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕の母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

クロノがウィンドウを展開しながら説明をしていく。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

「その理由は、私の能力と関係があります」

クロノの説明を引き継いだカリムが、部屋の中央に立って、手に持ったカードの束を縛っていたリボンを外す。

「私の能力……預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）」

カードがカリムの周囲を舞うように飛ぶその光景は、一種の絵画のような美しさを放っていた。

カードが輝き、預言は宙を舞う。

その中にいて、なおも薄らがぬ存在感を持つカリムだからこそ、教会騎士団にいてなお、管理局でも役職に違わぬ発言力を持つのだろう。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来……それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことが出来ます」

それを見て、もの珍しそうな表情を僅かに浮かべるなのは達。

「二つの月の魔力が上手く揃わないと発動出来ませんから、頁（ページ）の作成は年に一度しか出来ません」

そうカリムが言うと、預言書の内４ページがなのは、フェイト、アリサ、すずかの元に飛んでいく。

そこには古代ベルカ語で書かれた預言が記されているのだが、古代ベルカ語は古に消（いにしえ）えた古代言語。当然、なのは達には解読出来ない。

「今までは詩文の解釈によって結果が変わる、わりとよく当たる占い程度の的中率と実用性だったんですけど、４年前に状況は変わりました」

カリムが吼太を見る。

そして、カリムの説明を補佐するために、吼太も立ち上がる。

「コータ君が関係してるの？」

なのはだけは微妙に状況を理解しきれていないようだ。

そこに、アリサが助け舟をだす。

「答えを出す者（アンサートーカー）……どんな物事に対しても、正確確実な”答え”を出すことが出来る能力……それね」

「つまりそれは……【解読不可能な古代言語が、何を意味しているか】という事の”答え”も出せる……だよね？　コータ君」

すずかの言葉を、頷いて肯定する吼太。

「預言者の著書と答えを出す者、この二つが揃ったことにより、何らかの事件を一年に一度、必ず確認出来るようになった。既に何度も、この預言を元に行動して事件を未然に阻止してきている。今では、特殊技能嫌いで有名な地上本部ですらこの預言には目を通すぐらいだ」

クロノの言葉に、なのは達が驚いた表情を見せる。

地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ中将はこういった希少技能が嫌いなことで名が知れていたからだ。

そのレジアス中将ですら目を通す。それは、それだけこの預言が有用だと言うことを示している。

「ま、そんなわけなんだよ。カリムとオレの最初の接点は」

「それが今では……ウフフフフ～」

カリムがニヤニヤしながら踊り始める。

「……またか」

クロノと吼太が呆れたように頭を抑える。

「で、カリムさん。結局、預言にはなんて？」

フェイトがカリムを現実に引き戻す。

「え、あ……コホン。それで、預言を今からウィンドウに表示するわね」

『表示します』

補佐に回っていたトゥードが、ウィンドウを展開する。

そこに記されていた言葉。

――旧き結晶は城の扉を開く鍵。

無限の欲望は世界に満ちる思いを求め、聖王は彼の翼を伴い飛び上がる。

衰えし法の舟は友の意志を受け、今一度その力を奮う。

そして、世界を導く指針は、”なりそこない”によって破壊される。

それが、全ての始まり。――

「……これって？」

「それが、よく分からないんです。いくつかそれらしい意見は出てるんですけど、なにぶんどれも上手く解釈出来ておらず……その上、コータさんは何故かこれに関する答えを教えてくれないんです」

「え？」

なのは達が吼太の方を向く。

「答えを出す者は完璧な状態の”問題”が無ければ”答え”ではなく”予想”が表示されちまう。そしてこの預言はまだ未完成。今、答えを出す者を使っても完璧な答えは出せないんだ。だからこそ、答えを言ってないんだよ」

「でも、いくつか見識の一致してる予想もあるわ」

そうカリムが言うと、預言の中のいくつかのワードがピックアップされる。

「この中の”旧き結晶”、”無限の欲望”。これはそれぞれレリックとスカリエッティを示している、というのが私たちの共通見解。恐らくは、この二つが何かを起こすことは間違いないわ。一説には『管理局システムの崩壊』と言っている人もいるのだけれど……」

カリムがそこで言い詰まる。

「そう、とはとても思えへん。とはいえ、預言の通り、レリックとスカリエッティが何かを起こすのは間違いない。なら、それを見極め、かつ必要ならそれを阻止する。それが、機動六課の真実や」

Ｓｉｄｅ　吼太

――旧き結晶は城の扉を開く鍵。

無限の欲望は世界に満ちる思いを求め、聖王は彼の翼を伴い飛び上がる。

衰えし法の舟は友の意志を受け、今一度その力を奮う。

そして、世界を導く指針は、”なりそこない”によって破壊される。

それが、全ての始まり。――

……この預言、原作とはまるで違うものだ。

なら、当然指している内容も違うと見ていいだろう。

何より、最後の一文。

全ての始まり……？

何か、あるはずだ。

オレが知らない何かが、この預言の先に。

だけど、運命は変えられる。

今までだってやってきたんだ。

やってやるさ。何度だってな。

Ｓｉｄｅ　？？？

「くそっ、あの鎧のやつめ……！」

ビルとビルの間に身を隠す。

ベルトを失った今、俺はただの人間と変わりない。

それもこれも、アイツのせいだ！

アイツさえいなけりゃ……！

――ヴヴッ

……？

今、何か音が……

その日、クラナガンから一人の人間が消えた。

だが、身寄りも知り合いもいない彼の消失に気づいた者は、誰ひとりとしていなかった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「ただいまー……あ？」

聖王教会での話も終わり、ヴィヴィオの待っているオレの部屋に帰ると、そこでは……

「イデ！　いでで！？」

「いけいけ～！」

「チッコ！」「チャモー！」「ポチャマ～！」

ゴスロリ服を着たヴィヴィオ、同じような服を着たチコリータ、アチャモ、ポッチャマ。

そして、それらに襲われてるモモタロスがいた。

……何があったし？

「えと、エリオ、キャロ。何があった？」

近くにいた、何故か海賊チックな衣装に身を包んだエリオとキャロに状況を聞いてみる。

「話せば長くなるんですが……」

――説明中――

纏めると……

フィニア達に仕事が入ったので、エリオとキャロが交代。

←

その時に出て来ていたチコリータ、アチャモ、ポッチャマ、モモタロスが帰れなくなる

←

仕方ないから遊んで待っていよう

←

こんなところに可愛いお洋服が（シャマルの仕業らしい）

←

着る

←

モモタロスだけが服を拒否（まぁ当たり前か）

←

ヴィヴィオが無理矢理着せようと、ポケモンたちを指揮してモモタロスを攻撃

←

現在に至る。

「……大変だったな。エリオ」

「……はい」

「え？　エリオくん……一緒にするの楽しくなかったの？」

何故かキャロが悲しそうな顔をする。そんなにコスプレ楽しかったのか？

「え？……え？」

エリオが困惑してるな。こういう時は確か……

「ゆっくりしていってね！」

「なんでそうなるんですか！？」

エリオに全力で突っ込まれた。

「エリオくんは……私と一緒にいるの……嫌だったの？」

「え！？　なんでそんな話に！？　コスプレの話だったはずじゃ……」

「エリオくんのバカー！」

「えぇぇ！？　キャロ！？　キャロォォォーーー！？」

部屋から涙目で逃げ出したキャロを追うエリオ。面白いから放っておこう。

「わーい♪」

ポフッ、という軽い音と一緒にヴィヴィオが抱き着いてきた。

「いい子にしてたか？」

「うん！」

頭を撫でながら聞くと、笑顔で答えるヴィヴィオ。

「そっか。……お前らもご苦労さん」

召喚獣を全員送還する。ちなみにモモタロスはギリギリ逃げられなかったらしく、着替えさせられてた。南無。

「……あふ……」

と、ヴィヴィオが可愛い欠伸をする。

今日一日、いろいろあったから疲れたんだろう。

既にこっくりこっくりと船を漕いでいる。

「……しゃーないか」

部屋のベッドにお姫様抱っこで持って行き、そのまま寝かす。

「……今日はソファーで寝るかな」

そのまま立ち上がり、去ろうとする。

が、何かが服を引っ張って離さない。

見れば、ヴィヴィオがオレの服を掴んでいた。

――行っちゃヤダ。

そう、言われている気がした。

「……全く、世話のかかるお姫様だこと」

今日は徹夜でヴィヴィオを見てる羽目になりそうだな。

……添い寝？　何か危ない予感がしたからヤダ。

Ｓｉｄｅ　ユーノ

「よし、これで二つ目」

吼太に依頼されて、独自のルートからレリックを収集してる僕。

でも、ガジェットの襲撃だけは勘弁してほしいなぁ。　気持ち悪いんだよね、あれ。

「にしても、レリックって何番まであるんだろ？」

今回見つけたのは４３番と７３番。

確か、発見されたレリックの最大番号が１３１番だから、最低でも１３１個はレリックがあったはずだ。

最も、壊れてなければの話だけど。

「っとと」

ケースの中のレリックが少し転がり、先に回収していたレリックにぶつかる。

その瞬間、まばゆい輝きがレリックから放たれた。

まさか、暴走!?

「くっ……」

ラウンドシールドを展開し、身を守る。

……が、何も起こらない。

爆発も、衝撃波も、何も。

気づいたら、光は完全に収まっていた。

「一体何が……？」

ケースの中のレリックに変化は無い。まるで、さっきの出来事が夢だったと言うかのように。

「……いや、あれは夢なんかじゃない」

レリック……ただの超・高エネルギー結晶体じゃない。

きっと古代ベルカの……そして、聖王に関わる何かがあるんだ。

「……なんなんだ？　レリックって……」

僕の呟きに応えるものは無く、レリックは鈍く輝くだけだった。

# 第百三十三話　預言者の著書《プロフェーティン・シュリフテン》　後編（後書き！）

なっぺ「後書き！」「座談会！」

たーたらららーたららー♪

じゃんじゃんじゃん！

吼太「Ｗっぽい変身音で言うんじゃない」

なっぺ「初の前後編。その実態は『書きたい戦闘書いたら1話つかっちゃったから、前編にしちゃおう』とかいう安易な考え」

吼太「待てコラ」

なっぺ「にしてもアレだね。ユーノ久しぶり」

吼太「だな」

なっぺ「可能ならアルフも出したかったけど、さすがにアルフは無理っぽい」

吼太「まぁ、仕方ないか」

なっぺ「感想感謝コーナー！」

吼太「香崎　真琴さん、ＲａｉＮさん、霊亀さん、雨季さん、サイバスターさん、ｅａｇｌｅさん、ベルワンさん、十六夜アミナさん、ｍａｄａｏさん、バルディッシュさん、天照大神さん、てっち

ゃんさん、緋水さん、畏無さん、ユウキさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ＡＩＲＳさん、朱神優希さん、天見駆さん、黎音さん、黒龍さん。
感想ありがとうございました」

なっぺ「ＲａｉＮさんからはリリィの私服とトーマの第二形態の服を、ｅａｇｌｅさんからはＩＳ学園の男子制服（夏服）を煉獄の焔と共に（着てる間は１８０?ぐらいまで身長が伸びる）、十六夜アミナさんからはウサギ型自立稼動式譜業人形「レミーナ」（巨大化可能で絶対防御も搭載、中にも入れる上に魔力反応を消す能力搭載）、はやてにケルディムガンダムＧＮＨＷ／Ｒのシールドビットとライフルビット、専用のハロ（リインフォース・ツヴァイクラスのサイズで高速リンク指揮システムを搭載）を、緋水さんからは吼太の体が女の子になる薬を、畏無さんからはメカベス改、真っ白のジャージ（着ると、媚薬効果有&触られると通常の倍感じやすくなる&自分で着れるけど他人（女性限定）じゃないと脱がせられない）を、天見駆さんからは虹校制服（ロングスカート版）、黒タイツ、編み上げブーツを、黒龍さんからはティオの服（着たらツンデレになる）を頂きました！　ありがとうございます！」

ハロ「ハロ！ハロ！」

リイン「むむ！　リインとポジションだだ被りキャラがいるです！」

ハロ「オマエ、チッチェーナ！チッチェーナ！」

リイン「むぅー！　そっちのほうがちっちゃいですー！」

メカ「ガガガピー」

ベス「”ガ”を一つ増やした程度でこの私に勝てウボァー」

吼太「負けてんじゃねぇーか」

なっぺ「よし、ならばコスプレだ」

吼太「なんで！？」

なっぺ「先ずは薬を使って……。リリィ私服から！」

吼太「あぅ……くっ……／／／／／／」

なっぺ「似合ってるぞコータちゃん（笑）　次は真っ白なジャージ」

吼太「こんなの……って、脱げない！？／／／／」

なっぺ「ねこじゃらし～」

吼太「ひゃあぁぁんっ！！？／／／／」

なっぺ「それそれ～」

吼太「んっ……あっ……くぁぁっ……あはっ……あぁぁぁ……／／／／／／」

なっぺ「虹校制服（ロングスカート版）、黒タイツ、編み上げブーツを一斉装備」

吼太「んぁぁ……／／／／／／」↑さっきの快感がまだ残ってる

なっぺ「着崩しとくか」

吼太「はぁ……／／／／／／／」↑服がなんかいい感じに

なっぺ「うん、エロい。ティオの服もいくか」

吼太「あぅ……気持ち良くない、気持ち良く…な……い／／／／／／／」

なっぺ「ツンデレっつうか、陥落寸前っつうか」

鱗「お持ち帰りなのぉぉぉ～～～♪♪♪」

吼太「にゃあぁぁぁぁぁぁ……」

なっぺ「さよーならー」

ベス「いつの間に鱗さんが」↑復活

なっぺ「気づいたらいた」

メカ「ガガガピー」

ベス「ウボァー」

なっぺ「やられすぎだろ」

ハロ「オイヘンタイ！ジカイヨコク！ジカイヨコク！」

なっぺ「変態はともかく、敬語で喋りなさい。はい、次回からコラボ再開。念のためもう一回コラボ表を出します」

1：十六夜アミナさん

2：雨季さん

3：てっちゃんさん

4：ユウキさん

5：ｋｅｉ＝ｍｅｇｕさん

6：Ｓｔａｒ　Ｄｕｓｔさん

7：Ａｒｉｓｈｉａさん

8：サーペントさん

9：黒龍さん

10：ＳＲＸさん

11：仮面ライダーディケイドさん

12：バルディッシュさん

13：毬藻さん

１４：畏無さん

なっぺ「はい。以上１４名です。１番目の十六夜アミナさんは可能な限り早く、コラボで何がしたいかとかの希望をメッセージか感想にお願いします。ほかの人も、なるべく早く希望提出をお願いしますね。全く何の返事も無い場合はいったん飛ばして次の人にいきます。それでもなお連絡が来ない場合はコラボ依頼をキャンセルしたと見るので注意してください」

ベス「鬼進行ですね」

なっぺ「そうしないと進まないし。キャンセルされないように注意してください。ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

## 番外編　勝つか負けるかの真剣勝負《マジゲンカ》　～舞台の世界に合掌を～

本日、雨季さんの誕生日とのことで、十六夜アミナさんに事情を話してコラボの順番を入れ替えて頂きました。

なので、今回は雨季さんとのコラボになります。

そして雨季さん。誕生日おめでとうございます。

# 番外編　勝つか負けるかの真剣勝負《マジゲンカ》　～舞台の世界に合掌を～

Ｓｉｄｅ　吼太

ある日のこと。

その日の仕事を終わらせて寛いでると、部屋の中に魔法陣が展開された。

「よっと」

魔法陣から一人の男が出てくる。

名前は一条　要。オレの友人だ。

「どうしたんだ？　突然来たりして」

「別に深い理由は無いさ。ただ……」

「ただ……？」

その瞬間、要の身体から圧倒的な闘気が溢れ出す。

「たまには本気で戦ってやろうと思っただけだ」

要が笑いながら言う。

「……場所は選ばせてもらうぞ」

「あぁ」

Ｓｉｄｅ　三人称

そこは、生まれたての世界。

シャイニング・トラペゾヘドロンを使うことにより発生した、新たな世界。

その内の一つに吼太と要はいた。

既にリミッターを全解除し、クロスオーバーフォームで構える吼太。

対し、軽い構えのみ見せる要。

「……」

互いに、喋ることは無い。

刹那、次の瞬間には二人の姿は消えていた。

一瞬の内にいくつもの攻防が繰り広げられたのだ。

「ＯＲＴ、解放」

要は自身が内包するＯＲＴを解放し、自身の姿をＯＲＴのものに変える。

「いきなりそれかよ！？」

吼太が思わず声をあげる。

『本気で、って言っただろ』

要が念話を飛ばしてくる。

「（ったく！　いきなり過ぎるっての！）　トゥード！」

『ダウンロード、ラージャン、武装召喚（リアライズ）』

ラージャンの剛腕を武装召喚し、攻撃してきたＯＲＴの脚を受け止めようとする吼太。

が、あまりに力が足らない。足らなすぎた。

「ガハッ！？」

脚の攻撃によりあっさり武装召喚が解除され、ダメージを受ける吼太。

『手札を隠すのにとやかく言うつもりはねぇが……』

下ろした脚を振るい、そのまま吼太を吹っ飛ばす要。

『あんまりふざけてると……死ぬぞ？』

「ガァァァッッッ！？」

たちまち鎧のあちらこちらに皹が入ってしまう吼太。

「（パワーもスピードもダンチだ……！　だが…）……まだまだァ！」

クロスオーバーフォームの胸部のグラサンを外し、要に投げる。

グラサンは大量に分裂し、ＯＲＴの甲殻のわずかな隙間に入り込んだ。

――ガキッ

一瞬、ほんの一瞬だけ動きが鈍るＯＲＴ。

だが、次の瞬間にはグラサンは全て砕け散る。

「シン・ドラゴノス・ブロア！！！」

その一瞬でＯＲＴの足元に入り込み、腹部に強大な龍の息吹をぶつける吼太。

ＯＲＴが、僅かに浮く。

「もう一回だ！　シン・ドラゴノス・ブロア！！！　マーズ・ジケルドン！！！」

さらに同じ術でＯＲＴを完全に浮かし、マーズ・ジケルドンで弾き飛ばす。

「コール！　ウール！！　モップに掴（ガチ）を加える能力ァ！！！」

物理攻撃の全てを無効化する毛皮を持つ羊、ウール（最終形態）を召喚し、その毛皮を伸ばしてＯＲＴを拘束する。

『やるな、吼太』

要が驚いたように言う。

「天元突破ァァァ！　ギガァァァッ！　ドリルゥゥゥ……ブレイクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーーーーッッッッッ！！！！」

そして、天元突破ギガドリルブレイクで追い打ちをかける吼太。

……が。

「……脚一本！？」

貫いたのは、ちぎれたＯＲＴの脚一本だけ。

すなわち、それは本体には避けられたことを示している。

「じゃあ本体は……ッ！？」

ＯＲＴの脚が天元突破ギガドリルで断たれた部分から二つに裂け、吼太に襲い掛かる。

「脚に用は無いってんだよ！！！」

右手にレムリア・インパクト、左手にハイパーボリア・ゼロドライブの術式を起動する。

生と負の無限熱量を持つ、二つの魔術をＯＲＴの脚にぶつけ、ＯＲＴの脚を完全に消し去る。

「脚一本に時間をかけてるとは、随分余裕だな？」

ふと、吼太の背後からそんな声が聞こえる。

次の瞬間には、吼太は”破壊”されていた。

肉が裂け、骨は砕け、鎧が消え去る。

「……」

だが、要は焦らずに武装・ＯＲＴを施した腕で攻撃する。

……要自身の背後にいた吼太に。

「うおりゃあァァァ！！！」

仮面ライダークウガ　ライジングアルティメットとなった吼太の拳と、要の拳がぶつかり合う。

吼太自身に改良を施されてきたライダーシステムは、今や本来のライダーの１００００倍の性能を誇っている。

そして、仮面ライダークウガ　ライジングアルティメットの基本パンチ力は１００ｔ。

則ち、この吼太のパンチには実に１００万ｔの力が篭められている、ということになる。

……が、やはり足りない。

「ただの殴り合いなら……こっちの方が得意だ！！！」

そのまま、クウガ　ライジングアルティメットを殴り飛ばす要。

あまりの衝撃に吼太の右腕がちぎれ飛び、変身が解除される。

「チィッ……！！！」

すかさずナイアの時計で右腕を再生する吼太。クロスオーバーフォームの鎧も直っていることから、先程のダメージも同じ手法で回復していたのだろう。

「……ディオガ・テオラドム！！！」

指向性を持つ、巨大な爆発を放つ吼太。

だが、要は蹴りの一発でたやすくそれを吹っ飛ばす。

「……！？」

だが、爆発に紛れて何かが起こったのか、要たちの周囲を黒い壁が覆い、ビーズが空中に浮いているという奇妙な状態が発生していた。

そして次の瞬間、全てのビーズが爆発する。

攻撃の速度を遅くするクエアボルツ・グラビレイにより、【ビーズを爆弾に変える能力】で爆弾にしたビーズを浮かし、爆発させたのだ。

爆発により作られた”壁”は、空気の流動を一時的に停止させる。

「喰らえぇぇぇ！！！　烈・風・じぃぃぃぃぃん！！！！！！」

吼太が放ったのは、限られた空間に引き起こす浅葱流剣術の奥義【烈風】を使った竜巻。逃げ道は無い。

「ぐっ…」

僅かに揺らぎ、傷つく要。

「ハァッ……ハァッ……オラァッ！！！」

息を僅かに切らしながらも、全身から黒いドリルを触手のように伸ばす吼太。

機械への侵食能力を無くした代わりに、自在変形性を付加した、ラゼンガンのドリルだ。

――ズガガガガッ！！！

その全てが、要の手刀により断ち斬られる。

「どうした、その程度か？」

「言ってろ！　トゥード！！」

『アマテラス、起動。アルカンシェル発射用意』

次元を貫き、吼太が持つ次元航行艦【アマテラス】が現れる。

「……？」

最初は自身を狙っていると思っていた要だったが、どうも様子がおかしい。

現在、要と吼太の距離はそれなりに離れている。

そして、アマテラスが現れたのは要と吼太の間。

それだというのに、アマテラスがアルカンシェルの砲頭を向けているのは要の方ではなく、アクションを起こした吼太の方。

「……何をする気だ？」

そして、アルカンシェルが発射される。

そしてアルカンシェルは空間を突き進み……

……”吼太の右腕に吸収された”。

「相乗掛合（クロスオーバー）……魔導破砕拳（アルカンシェル）！！！」

……そう、アルカンシェルを自身の右腕に相乗掛合したのだ。

「やるな。闇の魔法（マギア・エレベア）か？」

「さぁな。詳しいことはオレだってわかんねぇ……よッッッ！！！」

要と吼太の右腕が再びぶつかり合う。

そして、互いの右腕が消え去った。

そもそも、アルカンシェルとは特定の範囲に存在する空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲であり、いかなる強度を持つものであろうと強度を関係無く消滅が可能な魔術だ。

勿論、そのままではＯＲＴの常識外れな甲殻を破壊するには至らない。

だが、相乗掛合（クロスオーバー）はその特性として、【素材の力を素材単体時より飛躍的に上昇させる】効果がある。

それにより、なんとか武装・ＯＲＴの施された右腕を吹っ飛ばせたのだ。

距離を取り、直ぐに肉体を再生させる吼太と要。

「相乗掛合(クロスオーバー)ってのはあぁいうことも出来るのか」

「まぁな。他にもこんなことだって出来るぜ！！！」

そう吼太が言った瞬間、吼太の右手に光り輝く剣が握られる。

要は、それをよく知っていた。

「約束された勝利の剣(エクスカリバー)か……」

「【自身が〇〇を持っているかもしれない】という可能性と、【現実】の相乗掛合(クロスオーバー)！　認識すれば、どんな武器だって能力だって、使ってみせるさ！！！」

そして、シャイニング・トラペゾヘドロンから供給される魔力を、全て約束された勝利の剣に注ぎ込む、

「約束された《エクス》ッッッ…」

そして、無限大の魔力により剣の形を失った最強の幻想が……

「勝利の剣(カリバー)アアアアーーーー！！！！！」

放たれた。

「完全武装・ＯＲＴ」

対し要は、全身をＯＲＴの甲殻で包む。

「邪魔だッッッ！！！」

一撃。

ただそれだけ。

理屈もへったくれもない、拳の一撃。

それだけで、約束された勝利の剣の光は霧散した。

「……次はそれか」

要が見た先。

そこにいた吼太はさらなる攻撃を準備していた。

「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）……イデオンガン……パーフェクトゼクター……相乗掛合（クロスオーバー）！！！」

もはや剣とも銃ともとれぬ、異形を手にしている吼太。

そこから、強大なエネルギーの奔流が竜巻状になり放たれる。その威力は、先程の約束された勝利の剣以上。

エネルギーの奔流は天を引き裂き、大地を破砕する。

世界すらたやすく破壊する一撃。

「オォォォォッッッ！！！」

それでもなお、要は揺らがない。

拳と脚の連撃。

それで、竜巻状のエネルギーを削り取っていく。

さらには、削り取りながら進んですらいた。

そして、何度目か分からない猛撃の末、要の蹴りが複合武器を破壊した。

「チィィィッ！！！！」

近づいていたことに予め感づいており、一瞬早く離脱していた吼太が悔しそうな声をあげる。

別にあれで倒せるとは思っていなかった。が、こうも攻撃が通らなければ悪態の一つもつきたくなるものだ。

「天元突破ァ……グレンブーメラン！！！！！！！」

銀河を超える大きさのグラサンを一瞬で創り、投げる吼太。

螺旋エネルギーにより加速し続けるブーメランを、要は受け止め、破壊する。

物理法則など、もはやこの二人には何の意味も無かった。

「シン・ジガディラス・ウル・ザケルガァァァァァッッッ！！！！！」

強大な電撃の奔流が要を襲ったかと思えば、要の拳がそれを発射体ごと粉砕し。

「オラオラオラァァァ！！！

ただただ相手を破壊する拳が放たれたと思えば、吼太のドリルとマントがそれをいなす。

攻撃の一回、ぶつかり合いの一回ごとに世界が軋み、星は砕け、銀河は霧散する。

「「オオオォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！」

」

戦いは、いつの間にか宇宙へと切り替わっていた。

知らぬ間に足場に使っていた近場の星が、ねこそぎ砕けてしまっていたのだ。

だが、彼等は止まらない。

足場が無いのなら、自分で作ればいい。

「ハァァァァァッッ！！！」

銀河を創り出し、要に投げ付ける吼太。

だが、要は銀河手裏剣を砕き霧散させ、新たな星を足場に吼太に接近。蹴り飛ばす。

「天元突破ァッ！！　ギガァァァ……ドリルゥゥゥ……マキシマムッッッ！！！！！」

だが同時に、吼太が発動した天元突破ギガドリルマキシマムにより、全身を浅く貫かれる吼太。

「クソッ……（このままじゃジリ貧だ！　何か打開策を……）」

「……（思ったより喰らい付いてくるな。やるじゃないか吼太）」

優勢劣勢は、態度に現れていた。

「シン・ドラグナー・ナグル！！！」

『ダウンロード、ラインバレル、武装召喚（リアライズ）』

肉体強化を発動し、さらにラインバレルの力で高速転移を繰り返しながら拳をぶつける吼太。

「今更小細工なんかが効くか！！！」

「なら大細工だ！！！」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ【Ｂ、Ｂ、Ｂ、ＢＬＡＤＥ】！』

召喚の応用で、銀河規模の大きさで召喚した仮面ライダーブレイドをファイナルフォームライドし、ブレイドブレードに変形させる。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｂ、Ｂ、Ｂ、ＢＬＡＤＥ】

！』

ブレイドブレードを通常時以上の速度で振るい、要を吹っ飛ばす吼太。

だが、吼太の手に斬った感触は無かった。

「ハアッッッ！！！」

後ろ回し蹴りでブレイドブレードを真っ向から破壊する要。

「……ラチが開かないな。一気に決める！！！」

吼太が、自身の最大技を出す覚悟を決めた。

「……締めの一撃をする気か。受けて立つ。………星の枷、解除」

要も、自身の全力を出すために”枷”を外す。

「オオオォォォォォォォォォォォォォォォ…………」

吼太の右手に、全てが集う。

それは、銃。それは、鎚。それは、螺旋槍（ドリル）。名は、未だあらず。

「ハアァァァァァァァァ…………」

要の右手に、力が溜まる。

星を砕く、銀河を砕く、世界を砕く。その名は、水晶魔拳。

そして、互いの一撃がぶつかり合った時、世界は隣接していた世界を巻き込み、完膚無きまでに破壊された。

Ｓｉｄｅ　ベス

「何やってんですかあなたたちは」

「喧嘩もいいけど、後始末をする僕たちの身にもなってほしいな」

「「すいません」」

何やら異常なエネルギー反応があったので来てみれば、吼太さんと要さんが大喧嘩してました。

私たちが来た時には既に終わっていたらしく、四肢の無くなった状態で気絶していた要さんと、身体の九割が消し飛んでいた吼太さん（というより、吼太さんの肉片）がプカプカ浮いていたから、そりゃ驚きましたね。

「あーちくしょー。負けたー」

「そう簡単に抜かれてたまるか」

悔しがる吼太さんに、要さんがしれっと言ってますね。

「しかしまぁ、要くんにしろ吼太くんにしろ、当初からは想像できないぐらい強くなってるよね」

「いつからこの二人は銀河吹っ飛ばす戦いをするようになったんですかね全く」

「「チートだから」」

「「ハモんな」」

そんな訳で、要さんたちはそのまま帰って行きました。

余談ですが、吼太さんは無断でいなくなったことがバレて、ラバーズの皆さんに喰われたそうですよ。

# 番外編　勝つか負けるかの真剣勝負《マジゲンカ》　～舞台の世界に合掌を～

～後書きアリシャ座談会～

アリサ（雨）「みんな！　ただいま！」

シャマル（雨）「今回からこのコーナーは私たちが乗っ取るわ！」

ベス「閉店ガラガラ」

アリシャ「「おまっ！？」」

なっぺ「後書き座談会だよぃ」↑動じない

ベス「とんでもない戦いでしたね」↑動じない

なっぺ「うん。自分でも驚いてる。この二人がガチで戦うとこうなるんだよ。あ、雨季さん。悪いとこあったら言って下さい」

ベス「要さん、固有結界使いませんでしたね」

なっぺ「ただ単に機会が無かった、って感じなんだけどね。吼太を侮ってたとかじゃなくて、純粋に使うべき場面が来なかっただけ」

ベス「吼太さんは相乗掛合使いまくってましたね」

なっぺ「本来、相乗掛合を多用した戦法こそが吼太の本気だしね。相乗掛合をろくに使わない場合は、吼太は本気じゃないってこと。しかも今回の相乗掛合の応用が露見したことで、今まで不可能と言ってたことも可能にした。今まで以上に出来ることの範囲が広がったってことだね」

ベス「でも要さんには負けた、と」

なっぺ「実際のとこ、今の要に吼太が勝てるとは思って無かったし。勝敗が先に決まってたから、後は互いの全力を書いただけ。ファンスト終了後の吼太だったらまだ可能性はあったんだけどね」

ベス「それは貴方の執筆速度が原因でしょう」

なっぺ「耳が痛い……。感想感謝コーナー！」

吼太「天照大神さん、雨季さん、サイバスターさん、香崎　真琴さん、十六夜アミナさん、バルディッシュさん、リオン・マグナスさん、てっちゃんさん、ベルワンさん、ｅａｇｌｅさん、畏無さん、ｍａｄａｏさん、ＲａｉＮさん、霊亀さん、緋水さん、ユウキさん、黒龍さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「バルディッシュさんからはＥ・ＨＥＲＯ　クレイマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント、Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ、Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン、Ｅ・ＨＥＲＯ

フレイム・ウイングマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパート・ガンナー、Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター、Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウイングマンのカード、ｅａｇｌｅさんからはロマネコンティとチーズを、畏無さんからは吼太に某腹ペコ騎士王のコスセット（犬耳＆犬尻尾（尻尾に触られると絶頂）付）を、ＲａｉＮさんからは超包子の飲茶詰め合わせを、緋水さんからはレオンミシェリの服（ポロリもあるよ！！！）を頂きました！ありがとうございます！」

要「飲茶うまうま」

なっぺ「既に喰われた！？　ワインとチーズは……」

要「お代わりくれ」

なっぺ「ですよねー。……いいもん！私には閣下の服があぁぁぁぁるっっっ！！！」

「死ぬがよい」

なっぺ「ウボァー」

ベス「恒例のコスプレコーナーです」

ゼウス「最初はさっき取り返したレオンミシェリの服（ポロリもあるよ！！！）」

吼太「！？／／／／／」

ゼウス「胸が足らないね」

ベス「足りませんね。しかしここをこうすれば」

パンッ↑服が弾け飛ぶ

吼太「にゃあああぁぁぁぁぁ！！？／／／／／／」

ベス「こうなります」

ゼウス「成る程」

要「ひどい茶番だ。吼太も拒否しろよ」

吼太「する前にこうなるんだよっ！／／／／／」

なっぺ「続いて某腹ペコ騎士王のコスセット（犬耳＆犬尻尾（尻尾に触られると絶頂）付）」

吼太「……んっ……なんか、尻尾が変……／／／／／」

要「戦ってた時とはえらい違いだな」

なっぺ「それが吼太。尻尾を触れば……」

ぎゅっ

吼太「ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？／／／／／」

なっぺ「こうなる」

「「「成る程」」」

なっぺ「連続で握れば……」

ぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ

吼太「あぅんっ！　ひゃあっ！　んあっ！　あんっ！　あぁぁぁぁぁぁっ！！／／／／／／」

なっぺ「こうなる」

「「「成る程」」」

ベス「ところで次回は？」

なっぺ「次回はちゃんと十六夜アミナさんとのコラボです。出来れば今日明日中に仕上げたい。ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

## 番外編　それが、トラウマなのですよ（前書き）

今回は十六夜アミナさんとのコラボになります！

やってはいけないことがある。怒らせてはいけない人がいる。そんなお話。

# 番外編　それが、トラウマなのですよ

Ｓｉｄｅ　セレナ

「初めまして。私、ちょっとした神をやってます「ベスさんだよね。聞いてるよ」……もういいですよベスで」

あれ、いじけちゃった。

「ところで何の用？」

「いえいえ。何となく私の気分でセレナさん達を異世界に送ろうかと」

……あれ？　なんか微妙にめんどくさいフラグが……

「バシルーラ！（ぽいもの）」

「きゃあぁぁぁぁぁぁ！？」

そして私”たち”は世界を跳ばされた。

Ｓｉｄｅ　三人称

「見てみて吼太～！　優お兄ちゃんにあげるケーキ～♪」

「お、美味そうだな。どれ、一口味見」

「ダメ～！」

「ちぇ。ま、当然か」

吼太が大して悔しくなさそうに言う。

現在吼太は詩音と分離している。

理由としては詩音はケーキを作るためであり、吼太は特にすることが無かったため、それを眺めながらうとうとしていた。

ちなみに場所は何故か外。しかしトゥードがいるので衛生面とか道具面は問題無い。

『マスター。転移反応を確認しました。並行世界からの来訪者です』

ふと、デバイス形態のトゥードが二人に報告する。

「んー、出現位置は？」

『マスター吼太の直上です』

「えっ！？」

吼太が反応しきる前に転移してきた物体が現れた。

「うおぁっ！？」

吼太は慌てて立ち上がり、落ちてきたモノを全部受け止める。

が……

「きゃっ！」「！？」「くッ！」「きゃあ！」「わっ！？」

落ちてきたのは五人の女性。

当然、小学生レベルの身体しか持たない吼太に五人の人間を完全に支えることなど出来ず……

「ぶげっ！！」

支えきれない部分を中心に潰された。

「……ここは？」

「不明です」

「……とりあえず、周りに危険は無いみたいだな」

金髪の女性の言葉に、機械鎧を部分部分に纏った女性二人が答える。

「……あれ？　もしかして吼太くん？　ってことはここは吼太くんの世界？」

「……」

吼太は答えない。

最も落ちてきた時にセレナ達の身体が首に乗り、気道がふさがれていたため仕方ないのだが。むしろ首の骨が折れなかったのがすごいレベルである。やはり腐ってもチートである。

「あっ、ゴメンゴメン」

セレナがようやく気づき、メンバーを吼太の上からどかす。

「……ベスが一瞬見えた気がした…」

吼太がゼェゼェと酸素を取り込みながら言う。

「マスター詩音、大丈夫ですか？」

「うん。ケーキも無事だよ。……ところであなたたちは？」

いつの間にか人間態になっていたトゥードに守られた詩音が、セレナ達に質問する。

「じゃあまずは私から。セレナ・アーヴェンクルスよ」

綺麗な銀髪をロングポニーに纏めた少女がまず、名乗る。

「オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと申します」

金髪の女性が礼儀正しく言う。

「茶々丸シリーズ発展型躯体Ｎｏ．０１、ＫＯＳ－ＭＯＳと申します」

青色の髪を持つ、部分的に機械の鎧を纏う女性が答える。

「同じく躯体Ｎｏ．０２、Ｔ－ｅｌｏｓだ」

ＫＯＳ－ＭＯＳとよく似た、だが肌は色黒で髪は白色の女性が名乗る。

「カレン・フッケバインだよ～♪」

ダークブルーの髪を持つ少女が元気に答えた。

「……で、どうしたんだ？」

一息ついたところで吼太がセレナに聞く。

「実はー……かくかくしかじか…」

セレナが説明を始めた。

そして説明がひとしきり終わったところで……

「……よくわかった。つまりはあのバカのせいだな？」

吼太がキレた。

そのまま吼太は一瞬消え、すぐに現れる。

「制裁完了」

帰ってきた吼太はやたらいい笑顔を浮かべていた。理由は推して知るべし。

「わー！」

と、吼太の身体が僅かに揺らぐ。

見れば、ヴィヴィオが吼太に抱き着いていた。

「……！」

ヴィヴィオを見たオリヴィエが複雑な表情を見せる。

が、すぐにそれを隠した。何かしら知られたくない理由があるのだろう。

「で、お前らどうするんだ？　すぐ帰るか？」

オリヴィエの反応を知ってか知らずか、そんな提案をする吼太。

「んー……せっかくだし、六課を案内してくれませんか？　みんなもそれでいいよね？」

セレナがみんなに聞くと、全員がそれを肯定した。

「そっか。あ、敬語は取っていいぞ。　詩音とトゥードは？」

「詩音はここでケーキ作ってるー！」

「マスター詩音に付き添っています」

「了解。じゃ、行くか」

そうして、吼太たちはゆっくり歩き出した。

Ｓｉｄｅ　すずか

「……ねぇティアナ。誰？　あの女の人」

「わかりません」

コータ君……私たちがいるのにあっちの人達を選ぶの？

……違う！

あれはきっと、コータ君の貞操が狙われてるんだ！　そうに違いないよ！　だってコータ君カワイイんだもん！

「ティアナ！　皆を集めて！　コータ君を奪い返そう！！！」

「了解です！」

コータ君……今助けてあげるからね！

Ｓｉｄｅ　吼太

……何か変な勘違いをされた気がする。

「吼太くん、ここは？」

「ん？　あぁ、訓練スペースだな。入ってみるか？」

頷くセレナ。それを見たオレは訓練シュミレーターを起動する。

「待ちなさい！」

突如、そんな声がした。

後ろを振り向くとそこには……

「アリサにすずか？　どうしたんだ？」

何故か怒った様子のアリサとすずかがいた。

……つうかなんで怒ってんだ？

「アンタたち！　私たちの奴隷……じゃなかった。恋人に何してんのよ！」

アリサが言った後ろで、すずかが「うんっうんっ」と同意している。

……アリサは何なんだろ？　奴隷？　この前は「あんまり私たちに構わないと、風穴空けるわよ！」とか言ってたし……。お前銃使わないだろ。

「え？　私たちは……」

と、オリヴィエが言いかけるが、それをセレナが止める。

「……？」

不思議に思いながらも、言葉を引っ込めるオリヴィエ。

「……知りたいの？　ふふっ」

セレナがなんか含みのあるような笑いをする。

「ま、まさかあんな関係だったりこんな関係だったり……！？」

「うふふ…」

「！！？」

すずかの顔が驚愕に歪む。セレナ、ただ単にすずかやアリサの反応が面白くて笑ってるみたいなんだけどな。

「……わかったわよ。えーわかったわよ。……決闘よ！」

「……あれ？」

今度はセレナの顔が僅かに歪む。

「私たちが勝ったらコータは返してもらうわ！　さ、行くわよ！」

訓練シュミレーターを起動し、入るアリサとすずか。

後ろから何故かギンガとティアナも続く。

「……これも想定内なの？」

「……ちょっとだけ想定外かな～、なんて…」

Ｓｉｄｅ　三人称

なんだかんだで戦うことになったわけなのだが……

「私がやる！」

「ううん、ここは私が…」

「ここは私がやります！」

「皆さんは下がっててください！」

なにやら揉めている。どうも、誰が戦うかが決まらないらしい。

「あのー、私たちは別に全員相手でも「「「「外野は黙ってて！！！」」」」……はい」

セレナですら、あまりの剣幕に手を出しあぐねている状態である。

ちなみにオリヴィエだけはヴィヴィオと遊んでいる。あまり戦いたくはないらしい。

ギャーギャーと話し（というよりはもはや口喧嘩）が続いた末……

「こうなったらアンタ達を倒して、嫌でも認めさせてあげるわ！」

「「「上等！！」」」

ついには仲間内で戦い始めるという始末。

「……どうしよっか？」

「私は見ています。四人とも洗練された動きですので、戦術データの参考になるかと」

「では私もそうしよう」

セレナの問い掛けに対し、ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓは観戦に回ってしまう。ちなみにどこからともなく現れた観戦席はトゥードが即席で作ったものである。

「ご一緒にポップコーンやドリンクはいかがでしょうか？」

「いただきます……ニャ」「あぁ。感謝する」

アフターサービスも万全。さすがトゥードである。

「お姉ちゃんお姉ちゃん！　向こうに広い温泉があったよー！」

「え！　ホント！？」

「ホントだよ～♪」

はしゃぐカレン。早く入りたいらしい。

「……どうしよう？」

カレンを一人で行かせるのはさすがに心配なのか、「ここを離れてもいい？」という意志を篭めた目線を吼太に向けるセレナ。

「見とくから安心して行ってこい」

「ありがと♪」

吼太の許可を得られたセレナがカレンと一緒に走り出す。どうやら、セレナ自身も少なからず気になっていたらしい。

「……ってアレ！？」

そんな中、吼太があることに気づく。

そう、”トゥードが近くにいる”ということに。

「トゥードが詩音を一人で残すわけが無い。ならば詩音はこの中にいる…。……トゥード！　詩音は！？」

「温泉の方にいます」

「（つまりケーキから手が離れている！　そして、この訓練シュミレーター内でケーキを仕舞える場所はただ一カ所！）……あの激戦地直下にある、地下室……！」

吼太が急いで転移する。そして、冷蔵庫の中を見るとそこには……

……

戦闘の衝撃により無惨に崩れた、ケーキがあった。

「（ヤバイヤバイヤバイ！　こんなとこをトゥード見られたら……滅亡する！　いろんなものが！）」

なんとかトゥードが来ない内にナイアの時計で直そうと企む吼太。

だが、彼は忘れていた。

トゥードが詩音は勿論のこと、”吼太の行動をも完全に把握している”ことに。

「……」

「！？」

吼太の後ろに、阿修羅がいた。

――シュインッッッ！！！

某龍玉みたいな音を立てて転移する超魔神（トゥード）。

そんな状況を見た吼太は、ただ一言、こう言ったという。

「あれが絶対的絶望って言うんだな」と。

一方、地上での戦いはさらなる激化を迎えていた。

「ハァァァァァァ！！！！」

「こんのぉオォオォオォオォ！！！！」

「たぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「せぇぇぇぇぇい！！！！」

雄叫びあげて激突する、アリサ、すずか、ティアナ、ギンガの四人。

そしてそれを呑気に観戦している（名目上は戦術データ収集）、ＫＯＳ－ＭＯＳとＴ－ｅｌｏｓ。

そこに、ナニカが現れた。

――ガスッ！

ナニカが現れた。誰かがそう認識した時には、ティアナは地面に埋

められていた。

頭部を地面に埋め込まれたその姿を、知る人ならばこう表現しただろう。

……犬〇家と。

「い、一体何が」

言葉を言い終わることなく、アリサは近くにあったビルの壁に埋められていた。さながら垂直犬〇家である。

「そ、そんな！　ティアナさんとアリサ隊長がこんな簡単に！？」

ギンガが驚愕に満ちた表情を浮かべる。

と、ギンガの直上が陰る。

……そう、何かが落ちてきたのだ。

慌ててキャッチするギンガ。

それは、ボロボロになったすずかだった。

「すずかさん！！！」

「に……げて…ギンガ……あれは……私たちが逆らっちゃ……
…かゆ……う…ま……」

そのまま力を失うすずかの身体。

「すずかさん！？　すずかさん！！　すずかさッッッ……！！」

その時、ギンガは気づいた。いま、この場にいるのは自分だけだと。

そして、”自身の後ろに何かがいること”に。

「さぁギンガ様。貴女の番ですよ……」

「いっ……イヤァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

Ｓｉｄｅ　セレナ

「気持ち良かったねー♪」

「ねー♪」

カレンと詩音ちゃんはすっかり打ち解けたみたいね。

お風呂で一緒になると中が良くなるのかしら？

「っと、ＫＯＳ－ＭＯＳ達の方はどうなっているかな～」

さっきの場所に行くと、何か様子がおかしい。

「ＫＯＳ－ＭＯＳ～？　Ｔ－ｅｌｏｓ～？」

二人を捜していると、以前に見た場所と同じところに二人はいた。

……けど、様子がおかしい？

「二人ともどうしたの……二人とも！？」

何故かＫＯＳ－ＭＯＳはガタガタと震えているし、Ｔ－ｅｌｏｓに至っては完全に気絶していた。

「どうしたのＫＯＳ－ＭＯＳ！　何があったの！」

「あぁぁ……セレナ……セレナぁぁぁ！！！」

ＫＯＳ－ＭＯＳが泣きながらセレナに縋り付く。

セレナは訳が分からず混乱していた。

「え？　え？　えぇ！？」

結局、ＫＯＳ－ＭＯＳやＴ－ｅｌｏｓのダメージが大きすぎると判断されたため、セレナたちはそのまま帰還していった。

後にＫＯＳ－ＭＯＳはこう語る。

「あんな戦術データを収集するぐらいなら、温泉に行っておけば……！」と。

ちなみに、オリヴィエとヴィヴィオはエリオやキャロと遊んでいたためにトラウマを作らずに済んでいたりする。



～おまけ～

「も～！　ギン姉もティアもどこ行ったの～!?　書類がぁ～」

「口動かしてる暇あったら手を動かせ！」

「ひぃ～！」

とある妹ととある兄は、姉や妹たちの仕事まで押し付けられて大変な思いをしていたとか。

## 番外編　それが、トラウマなのですよ（後書き）

なっぺ「後書き座談会なのですよ～♪」

※その後ケーキはトゥードがしっかり直しました。

吼太「……トゥードってさ。何？」

なっぺ「理不尽」

ベス「セレナさんは湯治旅行になってましたね」

なっぺ「そんなコラボでもいいじゃない」

ベス「そう言う割にはＫＯＳ－ＭＯＳさんたちが……」

なっぺ「見ただけだから。感想感謝コーナー」

吼太「霊亀さん、サイバスターさん、ｍａｄａｏさん、香崎　真琴さん、雨季さん、黒龍さん、バルディッシュさん、十六夜アミナさん、畏無さん、ポワソさん、ｅａｇｌｅさん、てっちゃんさん、ベルワンさん、ユウキさん、緋水さん、黎音さん、天照大神さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「黒龍さんからはリリカルなのはＶｉｖｉｄのアインハルトのバリアジャケット、無印フェイトのバリアジャケット（Ｍになると言う呪い付き）、最高級コーラ、最高級メロンソーダ（どちらかに媚薬が入っている（ちなみに入っている方はコーラ。メロンソーダーには痺れ薬が入っている））を、バルディッシュさんからはＥ・

ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　スチームヒーラー、Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルド・ウイングマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロイド・シャーマン、Ｅ・ＨＥＲＯ　フェニックスガイ、Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックスガイ、Ｈ－ヒートハート、Ｅ－エマージェンシーコール、Ｒ－ライトジャスティス、Ｏ－オーバーソウル、ヒーローフラッシュ！！、Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー、Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン、Ｅ・ＨＥＲＯ　キャプテン・ゴールドのカードを、十六夜アミナさんからは『勇者王ガオガイガー』よりギャレオン、各ガオーマシン、ディバイディングドライバー、ガトリングドライバー、ゴルディマーグ。『勇者王ガオガイガー　ＦＩＮＡＬ』よりエヴォリュダーセット、ファントムガオー、ジェネシックマシン（全てダウンサイジング版）を、畏無さんからはＦａｔｅの赤い悪魔の猫耳＆尻尾付（尻尾を触ると……）を、ｅａｇｌｅさんからは戦場のヴァルキュリアよりリエラ・マルセリス、ユリアナ・エーベルハルト、セルベリア・ブレスのコスチュームを、てっちゃんさんからは特別戦闘世界（様々な世界や設定をする事ができ、ビックバン級破壊力、世界を歪曲させる攻撃でさえも破壊不可。全力全開の戦闘でも、知略を競う戦闘でも何でも出来るが、１０回までしか使えない）、食べ物の光玉（お菓子限定）（今食べたいケーキや甘味物を念じれば、食べたい量を出す事が出来る。が、３回までしか使えない）を、緋水さんからはドレスにワンピースにパジャマを頂きました！　ありがとうございます！」

ベス「世界が贈られてきましたね」

吼太「回数制限付きだけどな」

なっぺ「さあ、コスプレだ！……と、行きたいんだけど、まず最初

に」

吼太「……？」

なっぺ「アインハルトのバリアジャケット画像が見つからなかったので、これに関してはパスさせていただきます！　すいません！」

吼太「っしゃあっ！！」

なっぺ「まぁ他は見つかったんだけどね」

吼太「天国から地獄とはこのことか」

「相手がいい気になったところでイッキに突き落とす……のが超クールなんだってよぉ……クーックックックッ」

ベス「帰って下さい黄色さん」

なっぺ「まずは無印フェイト！」

吼太「やぁっ…！／／／／／」

ベス「線にピッタリですね」

なっぺ「最近体形も女性らしくなってきたんじゃない？」

吼太「ねぇよ！」

なっぺ「仕方ない。コーラとメロンソーダをやろう。両方飲めよ？」

吼太「……まぁ、飲むだけなら……」

ゴクゴクゴク……

吼太「……ん……？…身体が……おかしい……？／／／／」

なっぺ「つーっと」↑吼太の肌を指先で触れる

吼太「ひゃぁぁあんっ！！？／／／／／」

なっぺ「おお、効果テキメンだな」

吼太「な、なにした！／／／／／」

なっぺ「コーラには媚薬、メロンソーダには痺れ薬が入ってたんだよ。さて、Ｆａｔｅの赤い悪魔の猫耳＆尻尾付（尻尾を触ると……）を着けてみようか」

吼太「な、や、やめ……／／／／／」

なっぺ「尻尾をさわさわさわ～」

吼太「ーーーーーッッッ！！！／／／／／／」

ベス「声すら出ませんね」

なっぺ「くにゅくにゅくにゅ」

吼太「ああんっ！　あっ、あっ、あっ……あぁぁぁ…／／／／／／／」

なっぺ「なんてエロい娘だこと。リエラ・マルセリスの服ー」

吼太「はぁっ……はぁっ……はぁっ……／／／／／」

なっぺ「服の持ち主が赤髪なだけあって、似合うね」

ベス「胸はありませんけどね」

なっぺ「がぼがぼだよね。ユリアナ・エーベルハルトの服」

吼太「んんっ……くうっ……／／／／／／」

なっぺ「今度はアレだね。袖あまり」

ベス「コアな人には受けそうですよね」

なっぺ「写真撮れば【お姉様の服の匂い嗅いでハァハァ言ってる妹系女の子】にしか見えない件。セルベリア・ブレスの服」

吼太「あぁ……んあっ……あ……／／／／／／」

なっぺ「やっぱり胸だね」

ベス「足りませんね」

なっぺ「まぁさすがに仕方ない。にしても、こうも似合うと、これが天職なんじゃとか思う。ドレス着よう」

吼太「や……やめ……／／／／／」

なっぺ「快楽が弱まってきたか？　ほりゃ」

吼太「あぁぁぁぁぁぁぁっっっ／／／／／／」

ベス「何したんですか？」

なっぺ「遠隔で繋げておいたさっきの尻尾を握った。くにくにすると啼くよ（吼太が）」

吼太「んぁあぁぁんぁっっっ！？！？／／／／／／」

なっぺ「な？」

ベス「しかし、ドレス着たまま喘ぐのはあれですね。動画に納めて売り付けたい」

なっぺ「後で売ろう。ワンピース」

吼太「も、もうやらぁ……らめなのぉ……／／／／／／」

なっぺ「パシャパシャ」

ベス「パシャパシャ」

なっぺ「もうちょいやるか」くにゅ

吼太「ひゃぁぁぁあんっ！？／／／／」

ベス「いいですね」

なっぺ「締めはパジャマ」

吼太「……んっ……やらぁ…やらやらぁ……／／／／／」

なっぺ「半脱ぎにしてみました」

ベス「さすが変態。ＧＪです。レートが１０倍に跳ね上がりましたよ」

なっぺ「吼太がさすがなんだよ。さすが吼太」

ベス「ところで次回は？」

なっぺ「てっちゃんさんとのコラボだね。ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

## 番外編　話してみようよ（前書き）

かなりの難産……。

どうやら私は何気ない日常会話が致命的に苦手のようです。

今回はてっちゃんさんの【魔法少女リリカルなのは～宇宙を守護する者～】とのコラボになります。

※超駄文注意！

# 番外編　話してみようよ

Ｓｉｄｅ　ベス

……ふむ。

やはり異常は無い。

では、何故あんなに”履歴に無い”転生者が……？

……分からないものを深く考えていても仕方ないですね。休憩にしましょう。

「さて、久しぶりに青鬼絶叫実況でも……」

そう考えてＰＣを起動しようとしたが、何やら来訪者が現れたようなのでやっぱり閉じる。

「どちら様ですか……って、スペースアポロン様でしたか」

「ベスさん、初めまして」

大宇宙界大皇帝スペースアポロン、蒼野貴裕。まぁ、分かりやすく言うなら最高神みたいな存在でしょうか。実際は違いますけど、イメージ的にはそんなものです。

スペースアポロン様が言った通り、私たちは初対面。尤も、向こうは正真正銘の全知全能の存在ですから初対面なのは実質私だけなのですけどね。

「どうしました？　貴方様ほどの方が来るような事態は、こちらでは起こっていないはずですが」

「嘘は止めたほうがいいよ？　俺に嘘やハッタリは通用しないし、ここで起こってる事態を見抜けない程、俺は間抜けじゃないからさ」

「流石、と言っておきましょう」

全く、ゼウス様と言い深菜歌様達と言い、何故最高神はこうも喰えない人物ばかりなのでしょう。

「まぁ、今回はそういうこと関係無し。ちょっと”彼”に会いに来たんだよ」

彼……というとやはり……

「吼太さんですか？　やはり戦いに？」

「戦い？　別にそんなつもりは無いかな。まだまだ彼は発展途上だし。そんなことより、俺は話がしたいんだよ。男同士、腹を割ってね」

あ、男だって分かってたんですね。

「分かりました。許可しましょう」

一応、管理権限があるのは私ですし、形式的に許可を出す。尤も、スペースアポロン様なら簡単に入れるんでしょうけど。

「ありがと。それじゃ、行ってくるね～♪」

Ｓｉｄｅ　吼太

「とーさま、それ返して」

「返せるか！」

カンナの奴、今度は包丁と【カンナの命】と書かれた紙を持ってやがった。包丁さんに切ってもらうってか？

「いい加減その自殺癖をなんとかしてくれ」

「自殺は私のアイデンティティー」

んなアイデンティティーいらねぇよ。

――ピーーー

「「!?」」

侵入者か!?　リーム達もトゥードもいないこの時に!?

「カンナ!」

「うん」

一先ずカンナとユニゾンし、侵入者に備える。

とはいえ、カンナとのユニゾンの効果は【不死身化】ぐらい。相手によっては役に立たない能力だ。

運次第じゃ、生身で”アレ”をやる必要性がありそうだな……。

そして、目の前に侵入者が現れ……

「やぁ～ん♪　可愛い～♪♪♪」

「へぶっ!?」

何か柔らかいものがオレの視界を塞いで……つーか呼吸も……。

「とーさまから離れて」

ユニゾンによって縮んだちびカンナがオレを抱きしめている何かを剥がそうとするが、何分ちびだけに力が足らない。

「ほらほら麟。吼太も困ってるじゃないか。離してあげなよ」

「はぁ～い」

ようやく視界が解放される。

そして、目の前には三人の男女がいた。

１番手前にいたのはレモンイエローのストレートロングヘアに、青い瞳を持つ女性。スタイルと立ち位置から考えて、オレに抱き着いていたのはコイツだろう。

その後ろに立っていたのは淡い緑の短髪に、紺碧の瞳をした少年。もの静かな雰囲気だ。

そして、１番後ろにいたのが黒髪黒目の男。さっき手前の女性を止めたのはコイツだろう。

「……誰だ？　アンタら」

警戒を解かずに言う。前二人もなかなかの実力者だが、奥の奴は桁が違う。油断すれば……こちらが何かしようとする前に消される。

「そう警戒しないでくれよ。俺はただ、君と話がしたかっただけさ。吉谷吼太君」

「なんでオレの名前を……！？」

そう聞こうとした瞬間、目の前にトゥードが現れる。

「マスター、ただ今帰りました。……この方達は？」

「客人だそうだ。（とはいえ警戒は解くな。特に1番後ろのやつは……並の実力じゃない）」

「（了解しました、マスター）」

トゥードがデバイス形態に戻り、オレの首に掛かる。

「ここで立ち話もなんだ。食堂のほうに行ってもいいか？」

オレの提案に、三人は頷いて答えた。

Ｓｉｄｅ　三人称

一同は食堂の一角に腰を落ち着ける。

「で、アンタ達は誰なんだ？」

吼太が早速切り出す。

「１６世界を治める皇帝の筆頭、大宇宙界大皇帝スペースアポロン、って言うんだけど……」

「……それは何の呪文だ？」

吼太は全く意味が分からないらしく、首を傾げる。

それを見たレモンイエローの髪を持つ女性が席を立って吼太に襲い掛かろうとするが、それはトゥードに阻止されていた。

尤も、大宇宙界というものも大皇帝という呼び名も、この世界観には無いもの故、仕方ないことと言えるだろう。

「まぁ、名前は蒼野貴裕と覚えていてくれれば大丈夫だよ。それでこっちは……」

貴裕がトゥードに抑えられている女性を指す。

「あ、はい。……私は麟と言います。ここには居ませんが、私のマスターである剣崎大貴が所有するストレージデバイス、【聖麟】から生まれた補佐天使です」

突然、性格が変わったように話し出す麟。

あまりの豹変ぶりに、一瞬だが静寂が訪れる。

「あー、麟の性格は結構ころころ変わるから、あまり気にしない方がいいよ。で、そっちにいるのが……」

貴裕が、まだ紹介されていない少年を指す。

「僕は竜。僕も麟姉と同じで、僕のマスターの神宮寺竜牙が所有す

るストレージデバイス『聖龍』から生まれた補佐天使」

少年――竜――が淡々と答える。

「貴裕に麟に竜か。よろしくな。オレは吉谷吼太。ただのチート転生者だ」

「私はフォーティトゥード・スピリットと申します。マスター吼太の持つインテリジェントデバイスです。……後、この肉体については細かい説明を致しますと長くなってしまうので、質問はご遠慮させて頂きます」

「私はカンナ。こーたとーさまのユニゾンデバイスみたいなもの」

吼太たちが順に名乗る。さらに……

「おぉっと！　僕を忘れてもらっちゃ困るよ！　僕はコータをロードとするユニゾンデバイス、【夢を与える者】リームだよ！」

リームが乱入してくる。

「リーム、仕事はどうした？」

「超特急で終わらせた！」

リームがえへんと胸を張りながら言う。よほど吼太のそばに来たかったらしい。

「じゃ、面子は揃ったって感じかな」

貴裕が言う。

「でも、話すったって何を話すんだ？　何をどう話すかなんて思いつかねぇけど」

吼太が聞く。

確かに初対面の彼等には共通の話題と言えるものが無い。吼太の疑問も最もと言えるだろう。

「まぁ、とりあえずはなのは達のことかな。なのは、フェイト、はやての三人のこと」

「なのはにフェイトにはやて？」

貴裕の言葉を吼太が不思議がる。が、直ぐに納得した表情になった。

「（あぁ、そういや【リリカルなのは】ではあの三人が主人公なんだもんな。なら当然なのか？　オレの世界ではそこにアリサ、すずか、アリシア、なずな、フィニア、羽旺が加わったメンバーが基本だったからすっかり忘れてた…）……ってことはアンタ、転生者なのか？」

吼太が貴裕に聞く。

「うーん……転生者と言えば転生者だけど……君達の考えてる転生者とは違うかな」

貴裕が困った表情を浮かべる。

その表情を見た吼太は、それ以上の追求を止めた。
説明だけで時間を潰すつもりは無い。必要ならその都度調べればいい話なのだから。
「そういえば夜天の魔導書も転生してるんだよね」
竜がふと切り出す。
「だね。転生を繰り返し、様々な魔術を蒐集するのが目的だからね」
貴裕が確認をするように言う。
「しっかし、アレを最初に改造しようとか考えたのはなんでなんだろうな。きっと、世界ごとに違った原因があるんだろうけど」
吼太が椅子に体重を預けながら言う。
「そうして、いつの間にか悪いシステムにされて、永遠を彷徨ってたんだよね。で、はやてちゃんに出会った」
リームが昔を思い出しながら言う。
「なんで、改悪なんてされちゃうんだろ……」
麟が悲しそうな表情を見せる。
「人の欲望、って奴だろうな。結局は。はやても夜天の魔導書も、ただの被害者だから」

まぁ、と吼太が付け足す。

「終わっちまったことは終わっちまったことだ。今考えてもどうにもなんねぇ。変えるなら昔じゃなくて、今だろ？」

吼太が締めくくる。

ちなみに、その後ろではやてとリインフォース姉妹がどうやって吼太を肉欲地獄に落とすか相談していたりするのだが、それは別の話。

「フェイトちゃんなんかは、昔を振り切って今を変えた筆頭だよね。９歳のときに」

リームが話をフェイトに向ける。

「アリシアのクローンだったフェイトは、そのことをよく自覚してなかった」

「そもそもプロジェクトF自体が欠陥なんだよね。その人はただ一人。どんなに手を尽くそうと、クローンじゃ人は蘇らない。生まれるのは、よく似た別人だよ」

貴裕が言う。様々な世界を治める彼をしてそう言わせるのだから、余程難しいのだろう。

「でも、そのおかげでフェイトは生まれた。エリオも生まれた。他にも、きっと沢山」

麟が慈愛に満ちた表情で言う。

「命は誰にだって平等にある。生まれ方や生き方、死に方は千差万別だけど、誰もがみんなそうして生きているんだ。一人だけじゃない。みんなで一緒に」

貴裕がそう締めた。

その裏ではフェイトが色っぽい服を着て、「これならコータも悦んでくれるよね……」とか言いながらニヤけていて、エリオに呆れられていたりするのだが、それもまた別の話。

「対してなのはちゃんは、最初はただ単に巻き込まれただけなんだよね。資質があったのも、魔法に出会ったのも、本当にただの偶然」

麟が言う。

「でも、それはいいきっかけだったと思う。天職だとかそういうことじゃない、もっと大切なこと」

竜が言う。

「……欲望、だな。なのはは自分の欲望を抑えがちだったから、あまり強く周りに出れない」

「だけど、魔法に会ってから彼女は変わった。初めて、抑えきれない欲望を持った。【友達になりたい】、【彼女を救いたい】……そんな欲望を」

吼太と貴裕が言う。

「欲望に善も悪も無い。……というより、善も悪も元からありは

しない」

カンナが言う。

「力も思いも欲望も、結局は使う人次第なんだよ。それに、なのはちゃんは気づいた」

リームも言う。

「だから、決めたんだよ。『この手の魔法は、悲しみと涙を撃ち抜くために使おう』って」

吼太たちの会話に、誰かが入ってくる。

その人物は、彼等が今話題にあげていた高町なのはその人だった。

「何話してるのかな～って思ったら、私のこと話してたんだもん。びっくりしちゃった」

なのはが少しおどけながら言う。

「いや、ちょっと昔を振り返っていただけさ。そういやヴィヴィオは？」

「お休み中。沢山遊んでたから、少し疲れちゃったみたい」

吼太となのはの会話は、まるで夫婦のそれのようだったとか。

――ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！

そんな穏やかな雰囲気を引き裂くように、アラートが鳴る。

『ガジェット出現！　フォワード各員は出動準備！』

「っとお仕事か。……スマナイ、話はこれまでにさせてくれ」

「うん。ちょうどいい頃合いだし、こっちもここらでおいとまさせて貰うことにしようか。…今日は楽しかったよ。吉谷吼太くん」

貴裕が席を立ちながら言う。

「あぁ、こっちもだ。じゃあ、また」

吼太が軽く挨拶しながら、ヘリに向かって走り出す。

「じゃ、俺らも行こうか」

貴裕が麟と竜に言い、そして転移する。

今日も世界は回る。いろんな運命が交錯しながら……。

## 番外編　話してみようよ（後書き）

なっぺ「デデデデストローイ　後書き座談会ー」

吼太「なら死ね。すぐ死ね。土下座しながら大気圏突入した末に海面にたたき付けられて死ね」

なっぺ「扱いひど過ぎない！？」

吼太「当然の報いだ。こんな駄文書いたくせに」

なっぺ「駄文なのは自覚してるけどさ……他に書けないしさ……」

吼太「無計画な計画性を持ってやるからな。お前。中途半端なんだよ」

なっぺ「んなこたぁわかってらぃ…」

吼太「てっちゃんさん、本当にすいませんでした」

なっぺ「こんな駄文しか書けなかった私を赦してくれ、とは言いません。感想感謝コーナー」

吼太「サイバスターさん、天照大神さん、ｅａｇｌｅさん、香崎　真琴さん、十六夜アミナさん、黎音さん、霊亀さん、てっちゃんさん、ＳＲＸさん、畏無さん、雨季さん、ｍａｄａｏさん、緋水さん、バルディッシュさん、ポワソさん、ユウキさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、毬藻さん。感想ありがとうございました」

なっぺ「ｅａｇｌｅさんから【疾走れ、撃て】より魔導士官の制服を、十六夜アミナさんからは吼太に安眠枕と吼太の好きそうな曲が入ったｉＰｏｄ（セレナ特製の壊れないカスタムタイプ）、詩音に東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラ。レミリア、フランドール、さとり、こいし、チルノ、腋巫女、パッチェの衣装、トゥードにＧＮドライヴ二基（ツインドライヴシステムのデータ付き）、ＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムのデータ、外装強化の稀少金属（レアメタル）やパーツを、てっちゃんさんからはときめきメモリアルの制服の夏服Ｖｅｒ（当然スカートはミニ、なっぺかトゥードの気分でスケスケにも出来るほか、下着はピンクで統一）を、畏無さんからは強制快感首輪（付けた相手を強制的に快感を与える首輪）、首輪の遠隔操作機能リモコン、ベス専用機体『ベスカイザーＺ』、無限エネルギーのビデオを、緋水さんからはオレンジジュースに見せかけた酒を、バルディッシュさんからはＥ・ＨＥＲＯ　ガイア、Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ、Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ、超融合、ミラクルフュージョン、平行世界融合（パラレルワールドフュージョン）を、毬藻さんからはふぃぎゅ@メイトの炎道イフリナの服を頂きました（ネコロリモード）！　ありがとうございます！」

ベス「ベスカイザー、ゼーット」

なっぺ「楽しそうだな」

吼太「今のうちに逃げよう……」

なっぺ「コスプレからは逃げられぬよ。まずは魔導士官の制服」

吼太「！？／／／／」

ベス「普通に可愛いですね」

なっぺ「なんでこいつ男なんだろ。ときメモ」

吼太「……／／／／／／」

なっぺ「反応に乏しいな。強制快感首輪、発動！」

吼太「ぅぅっ！！？／／／／／／」

なっぺ「一気に肌が赤くなった～！　さらにスケモードに」

吼太「だ、だめっ……！／／／／／／」

なっぺ「コイツは狙ってやってんじゃなかろうか」

※天然です

なっぺ「続いてイフリナ。フィギュアもある意味三次元↓」

吼太「はぁぅ……／／／／／／」

なっぺ「快感を微弱に流しつづけてるからか、なんかみょんなことに」

ベス「吼太さんですから仕方ないかと」

なっぺ「ですよねー」

ベス「次回は？」

なっぺ「ユウキさんとのコラボだよ。ではではこの辺で！　次回も

お楽しみに！」

## 番外編　虹色の瞳を持つ男（前書き）

今回はユウキさんの【魔法少女リリカルなのは～未来を変える者～】とのコラボになります。

頑張ったら長くなったよ！

……いやはや、今まで状況描写やら導入やらが適当だったから、そこをしっかりやろうとしたらこうなったよ。

# 番外編　虹色の瞳を持つ男

Ｓｉｄｅ　三人称

鬱蒼と生い茂る樹海の奥。

そこにある名も無き遺跡の中では、数名の魔導師が戦闘を行っていた。

相手はガジェット・ドローン。即ち、それに対する魔導師の集団は……

「一撃必倒！　ディィィバイン……バスタァァァーーー！！！」

言わずと知れた機動六課だ。

スバルの放つ青い砲撃が、目の前に展開していたガジェットの群れを纏めて破壊する。

しかし、一撃で全てのガジェットは破壊出来なかったらしく、残りのガジェットが一目散に逃げ出していく。

「逃がさない！　フリードお願い！」

「ギュアアァァァ！！！」

フリードがブラストレイでガジェット達の逃げ道を塞ぎ、追い詰めたガジェット全てに噛み付いて拘束する。

「今だ！　ハァァァッ！」

そこにエリオがストラーダを構えて突進する。

「奥義、龍牙大点穴！！！」

エリオが跳び上がり、ストラーダでフリードが噛み付いていたガジェットを貫いた。

龍牙大点穴。人と竜の呼吸が完全に合わないと絶対に成功しない、人竜一心の技だ。

「これで全部ね」

「周りに反応は無し。ガジェットはみんな破壊出来たようだな」

ティアナとティーダがウインドウを弄りながら言う。状況から考えて、索敵でもしていたのだろう。

「よし、お疲れさん。撤収するぞ」

吼太が撤収指令を出し、フォワード達がそれぞれ撤収するために作業を始める。

「……吼太さんのカッコイイところ、今日は見られなかったな……」

少し淋しそうに言いながらも後処理を続けるギンガ。

そんな中、ガジェットの残骸をチェックしていたギンガはあるものを見つけた。

「これは……？」

見た目はＵＳＢメモリのようだが、大きさは既存のそれより一回り大きく、また骸骨を思わせる不気味な意匠が施されていた。中央辺りには魔法陣から現れる異形の生物が、まるで【Ｓ】を象るように描かれていた。

位置からして、もしかしたらガジェットに組み込まれていたのかもしれない。

「……一応回収しておきましょう。事件の参考資料になるかもしれないし」

そう自身を納得させるように呟くと、ギンガはメモリを回収するために手を伸ばす。が、誤ってそれに付いていたスイッチに手が触れてしまった。

その瞬間、メモリから電子音声が発せられる。

『Ｓｕｍｍｏｎ！』

「えっ！？」

ギンガが驚いた声をあげる。魔力反応が無かった上、つい先程まで戦闘をしており、その反動か僅かに気が抜けていたためについ油断をしていたのだ。

……だが、何も起こらない。

いつまで経っても、何か起こる予兆なども現れなかった。故に、ギンガが「誤作動か何かしたのだろう」と勘違いするのも仕方のないことだろう。

「ギン姉～？　どうしたの～？」

先程の音声が聞こえたのか、スバルが大きな声でギンガを呼ぶ。

「あ、スバルー！　大丈夫ー！　すぐ行くから待っててー！」

そうギンガは言い、念のためメモリに封印処理をした後でスバル達の元へ向かった。

……封印処理をしたはずのメモリが、淡い光を放っていることに気づかないまま。

Ｓｉｄｅ　？？？

「……ここは？」

ふと気がつくと、僕はどこか遺跡のような場所にいた。

確か僕は……えっと……

……そうだ。思い出した。昨日は確か、なのはとの話が少しだけ長引いてしまって夜寝るのが遅くなってしまって、それで少し寝ぼけたままで出掛けようとしたら、何か光のようなものが……。

「シャイニング。ここはどこだろう？」

『不明です』

あまり見たことが無い場所だ。もしかしたらミッドチルダじゃない、他の世界なのかもしれない。

「とりあえずサーチをお願い」

『了解しました。……サーチ完了。ここは第６８観測指定世界です。どうやら、私たちは何等かの原因でこの世界に転移してしまったようですね』

「う～ん……なんでかな？　あまり心当たりは無いんだけどなぁ……」

とりあえずは管理局の観測基地に向かおう。一応無断で来てしまったわけだし、きちんと報告はしないと。

Ｓｉｄｅ　吼太

「よし、改めてみんなお疲れ様。昼メシにしよう」

観測基地の食堂でみんなにそう言うと、待ってましたと言わんばかりの声があがる。

既にお弁当は机の上に並べてある。ギンガやスバル、エリオの量が半端無いのは当然として、他の三人も今日は大盛りのお弁当を選んでいた。

ちなみにオレはスバル達大食漢メンバーと同じ量。実はこの基地、かなりエネルギー不足で困っていたらしく、仕方ないのでトゥードに発電システムを作らせてたのだ。

もちろん、完成してから接続工事もしなければいけなかったため、その間はオレがクロスオーバーフォームのフルドライブでエネルギーを補っていた、というわけだ。

クロスオーバーフォームのフルドライブは終わった後で腹が異常に減るのが難点なんだよなぁ。改善はしたいんだけど、これがなかなか難しい。一からシステムを組み直した方が早いぐらいだ。

とまぁ、そんなわけで今日はオレも沢山食べるぞー！

「吉谷提督。少しお時間宜しいでしょうか？」

……ドチクショウ。

「どうしたんだ？」

「いえ、たいしたことではないのですが……どうも不審な人物が『個人転移報告書』を提出してきて……」

個人転移報告書とは、事件の犯人等を追う過程で、他の世界――特に観測世界や有人世界――に転移した際、「これこれこういう訳があって、私はこの世界に緊急侵入しましたよ」ということを証明するための書類だ。

比較的頻繁に使われる書類だけあって、その作成はかなり容易に可能。小学生でも作れるという代物だ。

とはいえ、一般に流通するようなものではない。個人転移報告書はあくまで管理局員が使用するものであり、一般人の場合は同じ内容でも別の書類を使うからだ。

だから、その人物は管理局員なのだろう。そうでなければつじつま

が合わない。

「名前と所属、階級は？」

「名前は高町ゆうき。階級は一等空佐。なんですが所属が……」

そこで言葉に詰まる局員。言い出していいものか悩んでいるみたいだ。

「どうしたんだ？　所属は？」

「その……これを」

口では上手く伝えられないと判断したのか、ウィンドウにデータを表示して見せてくる。

「……成る程な。言い出しづらかったのはこれが原因か」

分かりやすく言うなら、”存在していない”中隊の隊長だということらしい。

これだけならまだ、「妄想も大概にしろ！」と強く出ていける。

だが、その後で提示された局員証明書は本物だったから、対応に困ってしまったらしい。

……と、なると答えは一つだな。

名前が日本人のそれだし、間違いないだろう。

やがて、ロビーに出ると受付嬢と一人の男性が話をしていた。

十中八九、あの男性が件の局員だろう。

「あー、もしもし。少しいいですか？」

Ｓｉｄｅ　ゆうき

「あー、もしもし。少しいいですか？」

局員の人と言葉の応酬をしていると、側面から何やら澄んだ声が聞こえてきた。

そちらを向いて見ると、そこには赤髪赤瞳の少女が話し掛けてきていた。年齢はヴィヴィオと同じくらいだろうか。

見た目は子供だけど、局員の隊士服を着ているから管理局員なんだろう。スカートじゃないのは不思議だけど、おそらく好みがたまたまスカートではなくズボンだった、といった程度の理由だろう。

とはいえ、今はあまり構っていられない。何しろ、所属が認められないという緊急事態なのだ。一段落つかないことにはこの娘の話を

聞くことも叶わない。

「ゴメン、今はちょっと忙しいんだ。また後でね」

女の子に断りを入れてから、再び受付嬢との話に戻ろうとする。

……が、ここであることに気づく。

女の子が着ている服。そこに、”提督”を示す飾りがあることに。

「……もしかして、君がここの責任者なの？」

「ん～……責任者ではないけど……階級は1番高いですよ」

女の子が少し困ったように言う。ここに来て、女の子が微妙に男勝りな喋り方をしているのに気づいた。

「で、少しお話……いいですか？」

改めて女の子が聞いてくる。

「……分かりました」

この女の子と話せば何かが分かる。そんな予感を信じて。

Ｓｉｄｅ　三人称

「やっぱり、そうだったんだ……」

ゆうきが少し気落ちしながら言う。吼太自身の頼みにより、敬語は抜きにしてもらっていた。

あれから二人はこの基地の応接室に移動し、互いの情報を交換していた。

ゆうきは自身が予期せずに並行世界を転移したことに、少なからずショックを受けているようだ。とはいえ、仕方ないといえば仕方ないだろう。自身が何か他の要因に転移”させられる”という状況は、ゆうきにとっても初めてのことだったのだから。

「とりあえず、自力で帰れるか？」

吼太がゆうきに聞く。なお、吼太が男で、かつ１９歳だと知った時にゆうきがとても驚いたのは言うまでもない。

「あ、うん。大丈夫。僕の希少技能（レアスキル）の一つに【次元跳躍】があるからね。これを使えば帰れるはずだよ。……それで、早速で悪いんだけど……」

ゆうきが少し申し訳なさそうに言う。

「帰るんだろ？　自力で帰れるなら止めはしないさ。……また、機会があったら会おう」

「うん。それじゃあ……」

ゆうきが次元跳躍を発動する。

……いや、発動した”はずだった”。

「……転移出来ない！？」

ゆうきがいつもと感覚が違うことに戸惑う。

「ちょっと待ってくれ……そうか。原因が分かった」

吼太が【何故ゆうきが帰れないか】という問題に、答えを出す者（アンサートーカー）を用いて答えを出す。

「【存在する座標】がゆうき自身の世界に固定されたままだ。このままじゃ元の世界には帰れないな……」

「そんな……」

ゆうきが明らかに落ち込む。

「大丈夫。方法はある…。座標が固定されている原因をどうにかすればいいんだ」

吼太が確信に満ちた顔で言う。

「そして、その目星も付いてる」

吼太が言い終わると同時に応接室のドアが開く。

「失礼します、吉谷提督。ギンガ・ナカジマ陸曹、ただ今参上しました」

入ってきたのはギンガだった。どうやら、吼太に呼ばれて来たらしい。

「ギンガ。早速で悪いんだけど、さっきの戦闘の時、何か奇妙なものを見なかったか？」

「あ、はい。ガジェットの調査の時にこれを……」

ギンガがブリッツキャリバーの格納領域から拾ったメモリを取り出す。

「……成る程な。これが原因か」

「どういうこと？」

突然のことに、状況が上手く掴めないゆうきが吼太に聞く。

「これはガイアメモリ。特定の【記憶】を内包している、まぁロストロギアみたいなもんだ。それで、このメモリに内包されている記憶は【召喚】。さしずめ、サモンメモリか。これの力によって、お前はこの世界に来たみたいだな」

吼太がサモンメモリを見せながら言う。

「そんなものが……」

「さらに厄介なのは、このメモリを破壊しただけじゃ帰れないってことだ。召喚した者の”召喚した時の願い”を叶えて、初めて召喚が解除される」

さらに説明を続ける吼太。そこでギンガが気づいた。

「召喚した者ってもしかして……私ですか？」

「あぁ。だからギンガ、お前を呼んだんだ。何か心当たりは無いか？」

吼太がギンガに聞く。

「えーと……」

過去を振り返るギンガ。そして、あることを思い出す。

――……吼太さんのカッコイイところ、今日は見られなかったな……

「あ！……っ／／／／」

思い出した途端、顔を赤らめるギンガ。吼太もゆうきも、ギンガの記憶は読めないので何故ギンガが顔を赤くしたのか理解出来ないようだ。

「（あんなこと、恥ずかしくて言えない……）／／／／／」

「どうした？　心当たりがあったのか？」

なおも顔を赤くしているギンガに、吼太が問い掛ける。

羞恥の感情を抑えられず、話そうか話すまいか迷っていたギンガだったが、やがてこの状況を打開しなければならないて自身を納得させ、言葉を発しはじめた。

「えと……その……コータさんのカッコイイ姿が見たいな～……なんて……／／／／／」

顔をより一層赤らめ、もじもじとしながらも言い切ったギンガ。

「あ……あぁ……」

少し驚きながらも了承する吼太。

「カッコイイ姿って言うと……やっぱり戦闘かな？」

ゆうきが吼太達に提案してみる。

「は、はい！　お願いします！」

先程の自身を見られていたことに気づき、別の意味での羞恥を覚えながらも、ギンガはゆうきの意見を肯定した。

「決まりだな。じゃ、相手を頼めるか？　ゆうき」

「僕でよければ、喜んで」

こうして、吼太とゆうきの模擬戦が決まった。

場所は変わって、第６８観測指定世界のとある岩場。

近くにある活火山の影響により、辺りに生物のいないこの場所が、今回の模擬戦の舞台だ。

念のため、封時結界で模擬戦場を形成しているため、周囲の環境に影響は出ないだろう。

「トゥード、リミッター全解除」

『いいのですか？』

トゥードが吼太に確認をとる。

「ゆうきはあんなガチガチのリミッター付きで勝てるほど甘い奴じゃないだろうしな。それに何より、オレ自身がそうしたいんだ」

『……了解しました、マスター』

トゥードがリミッターを解除すると、吼太の身体から闘気がまるで湯気のように溢れ出す。

「シャイニング、こっちも本気でいくよ」

『腕がなりますね』

ゆうきも、闘志を身体から滲ませる。

「フォーティトゥード・スピリット！」「シャイニングハート・アクエリオン！」

そして、二人の魔導師は自身のデバイスに指示を出す。

『『Ｓｅｔ　ｕｐ！』』

それにより、二人の身体は戦闘用の防護服に包まれた。

吼太は黒いライダースーツのような服を。ゆうきは白い、胸部が膨らんだ左右非対象な腕を持つ甲冑を。

『それでは、試合開始です！』

サーチャーで観戦しているギンガが、試合開始の宣言を出した。

「まずは様子見！」

『アクセルシューター』

ゆうきの持つ杖、シャイニングハートから放たれたアクセルシューターが吼太を狙う。

が、そのアクセルシューターは吼太に当たる直前に逸れてしまい、吼太に当たることは無い。

ゆうきもアクセルシューターを再度操作して当てようとするが、何度やっても当たらない。

「ガードスキル、ディストーション。魔力弾程度の攻撃は効かないぜ」

吼太がハンドソニックを展開しながら言う。

「今度はこっちの番だ！　ソルド！」

剣を強化する魔術を発動した後、ゆうきに斬りかかる吼太。

だがゆうきは、自身が持つもう一つのデバイスであるアロンダイトを起動し、ハンドソニックを受け止める。

「シャイニングハート！」

『シャイニングウイング、ピット展開』

ゆうきの背中にエネルギー状の翼が展開され、そこから無数の随伴兵器【ピット】が出現する。

「チッ……やらせるか！　フェイ・ガンズ・ビレルゴ！」

ピットを落とすために大量の消滅弾を放つ吼太。

……が、当たらない。

フェイ・ガンズ・ビレルゴは当たれば消滅必至の弾幕だ。故に、障壁のような防御でなければ意味は無い。

しかし、ゆうきはその類い稀な空間認識能力によって、高速で飛翔する消滅弾の全ての位置を正確に把握していたのだ。

ゆうきが操作するピットがその照準をフェイ・ガンズ・ビレルゴに向け、魔力弾を放つ。

たちまち、フェイ・ガンズ・ビレルゴは全て破壊されてしまった。

「くっ……」

「いけっ！」

大量のピットからディバインバスターに匹敵するほどの砲撃が吼太に向けて放たれる。

それに合わせ、ゆうき自身もディバインバスターを吼太に放ち、吼

太を自身から引き離す。

四方八方を魔力砲撃に塞がれた吼太に、逃げ場等ありはしなかった。

「ならこれだ！」

吼太が全身からギガドリルを出現させ、回転させる。

ギガドリルの吸収能力を最大限に利用した特殊形態、ギガドリルマキシマム。

それを使い、全ての魔力砲撃を吸収する。

「お前の砲撃……全部纏めて返してやるよっ！」

全身のギガドリルを右手に集中し、そのままギガドリルを使ってエネルギーを投げ返す。

一度ギガドリルに吸収されたことで、巨大なエネルギー球体へと変化した魔力は、投げられた勢いのままゆうきに向かう。

「そんな！？」

口では驚いた声をあげながらも、冷静に状況を確認し、対策を練るゆうき。

防御は無駄。防御の上から潰される。

かといって撃ち落とすのはリスクが大きい。あれだけの攻撃を破壊するには、腰を落ち着けた大規模魔法でないと不可能だからだ。だ

が、その隙を逃す吼太ではないだろう。

故にゆうきが選択出来る手段はただ一つだった。

そう、次元跳躍による回避。

次元跳躍を発動し、エネルギー球体を回避するゆうき。

だがゆうきは、次元跳躍直後に発生した僅かな……ほんの極僅かな感覚のズレにより、あることに気づいていなかった。

ゆうきの背後で、クロスオーバーフォームとなった吼太が脚を振りかぶっていたことに。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【Ｄ、Ｄ、Ｄ、ＤＥＣＡＤＥ】！』

「アトランティス……」

「後ろ！？」

『プロテクション・パワード！』

シャイニングハートがプロテクション・パワードを緊急展開する。

もっとも、緊急展開したムラのある防御では……

「……ストライクッ！！！」

吼太の一撃を防ぐことなど出来はしなかったが。

断鎖術式とファイナルアタッククライド【ディケイド】の相乗掛合（クロスオーバー）により放たれた蹴りは、ゆうきに回避の隙すら与えず、その身体を派手に吹っ飛ばして山に激突させる。

「トゥード、反応は？」

『健在です』

吼太がトゥードに確認を取った瞬間、転移で素早く近づいてきたゆうきが吼太の目の前に姿を表す。

……否。それは”転移”ではなかった。

完全な静止状態から、一瞬の内に最大速度に加速。また、最大速度から完全な静止状態への減速。

人どころか、形あるものがやれば確実にスクラップになる行為。だが、ゆうきのフルドライブである【シャイニングモード】ならそれが可能だったのだ。

そして、ゆうきがシャイニングハートを吼太の腹部に押し当てる。さらにゆうきの後ろには再び現れた無数のピットが吼太にその照準を向けていた。

「スターシャイニング……ブレイカァァーーーー！！！」

『スターシャイニングブレイカー』

最早、１０や２０では計りきれない程に大量の集束砲撃の嵐　――

スターシャイニングブレイカーＥＸ－ＦＢ――　が吼太を襲う。

レモンイエローの大規模集束砲撃の束は、それだけで吼太の全身を覆い尽くし、背後にあった活火山に叩き込んだ。

「……ってあぁっ！？」

ゆうきが慌てた様子で叫ぶ。どうやら、火山に叩き込んでしまったのは予想外だったようだ。

「シャイニング……吼太、大丈夫かな？」

『バリアジャケットが破壊されていなければ大丈夫でしょう。恐らくは』

案外無責任な発言をする自身のデバイスの言葉に頭を抱えるゆうき。

だが、ゆうき自身の悩みは杞憂に終わった。

辺りの大地がひび割れ、火山が黒煙を吐き始める。

言うなれば、【山が火を噴き大地が燃える】。

そして、辺りをたちまち火の支配する世界に塗り替えた人物が火山からマグマと共に飛び出す。

それはまさに、【世界全てを焼き尽くす滅びの焔】。

それはまさに、【世界に暖かき恵みを与える慈しみの炎】。
それはまさに、【枠を超えた者（チート）】。

それを見たゆうきの身体が震える。

恐怖？　畏怖？　絶望？

……否。　それは言うなれば”武者震い”。

遥か高みの存在をその目で見て、その身体で感じ、その魂に刻み込んでなおも【超えたい】と思う果て無き欲望。

「全力で来い！　ゆうき！」

「うん！　吼太！」

吼太は一振りの日本刀を、ゆうきはアロンダイトを構える。

「パラディン３！！！」

『パラディンモード、セットアップ』

自身に過剰なまでのブーストを掛ける、パラディンモードを発動し、自身の力を限界まで強化。さらに、高火力魔法使用のためのピット【パラディンピット】を展開し、魔力をチャージし始める。

また、ゆうきのバリアジャケットがアロンダイトに適応した、白騎士と言うべきバリアジャケットへと変化し、アロンダイトに限界まで集中させた魔力がまばゆく輝き始める。

さらにゆうきは、自身のもう一つの希少技能（レアスキル）を発動する。

その瞬間、ゆうきの瞳が虹色に輝く。

【無の瞳】。発動することで身体能力の強化が出来る他、相手の希少技能を除く魔法や、身体運びや技を瞬時に模倣出来るものだ。

それにより、ゆうき自身の出せる限界を引き出していく。

「来たれ……鳳凰！」

対し吼太は、日本刀を正段に構えて武者魂を高める。

武者魂。武者頑駄無が持つエネルギーで、気力のようなものでもあるそれは、気持ち次第でどこまでも強い力を発揮する。中でも1番力を発揮するのは、【悪を倒す時】。

故に、今回は全力を出せるわけではないのだが、それでもその力は圧倒的な気配を放っていた。

やがて、武者魂が炎となって燃え上がり、鳳凰を象る。

一瞬の静寂。そして……

「シャイニングソード…ブレイカァァァァーーー！！！」

「超弩級奥義……鳳凰無限界！！！」

巨大な魔力斬撃、そして斬撃に付随する大火力砲撃と、巨大な鳳凰を身に纏って突撃する吼太の刀が激突する。

その激突により、結界が僅かに揺らぐ。が、結界が破壊される前に決着は付いた。

シャイニングソードブレイカーを吼太の刀が斬り裂き始めたのだ。

パラディンピットからさらなる砲撃が放たれるが、吼太は揺らぎもしない。まるで「そんなもの、無いも同然だ」と言わんばかりに。

やがて、シャイニングソードブレイカーは完全に斬り裂かれ、ゆうきの目の前に吼太が踊り出る。

そのまま吼太は刀を振るい、ゆうきを【∞】の形に斬り捨てた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「……負けた」

ゆうきが少し悔しそうに言う。

「そう簡単に負けてたまるかよ。これでも、チート魔導師だからな」

とはいえ、まだまだオレも未熟だな。

砲撃と斬撃を真っ向からノーガードで受けたせいか、両肩が痛い。

正直、もうちょい防御のこと考えておけばよかったと後悔してる。

そして、ゆうきの身体が透け始める。

何も不思議なことはない。【召喚された目的】を果たしたから帰るだけだ。

「また会おうね」

「あぁ、またな」

そして、ゆうきは帰っていった。

余談だが、ギンガは途中で気を失ってたらしい。「カワイイのにカッコイイなんて卑怯です～……」とか聞こえたけど、どういう意味なんだ？　……分からん。

# 番外編　虹色の瞳を持つ男（後書き）

なっぺ「後書き座談会！　この気持ち……まさに愛だ！」

吼太「愛！？」

なっぺ「さて、今回もコラボ」

ベス「最初のは無視ですか」

吼太「長くかかったな」

なっぺ「私も大分驚いたよ。でも、頑張っただけの結果が出てるはず……！」

吼太「出てねーよ駄作者が」

なっぺ「ｏｒｚ」

ベス「感想感謝コーナーに行きましょう」

吼太「香崎　真琴さん、十六夜アミナさん、てっちゃんさん、畏無さん、サイバスターさん、ｍａｄａｏさん、天照大神さん、毬藻さん、変わり身早者さん、霊亀さん、緋水さん、雨季さん、ユウキさん、Ａｒｉｓｈｉａさん、ポワソさん、プリニガーＸさん。感想ありがとうございました」

なっぺ「十六夜アミナさんからはＩＳ学園生服とＩＳスーツ（女性用）、束のアリス服（ウサミミ付き）を、畏無さんからは『常にト

ランザム状態のＯＯライザー（なっぺ用）』と、某炎髪灼眼のコスを、毬藻さんからは『三極姫』の孔明の服（変身能力あり）を、緋水さんからは緋弾のアリアのアリア達が来ていたチアガールの服を、プリニガーＸさんからはエヴァンゲリオンのプラグスーツと武器、ＦＦ７のクラウドの大剣を頂きました！　ありがとうございます！」

ベス「大剣は危ないですね」

なっぺ「ベス！　互いのロボットで勝負だ！」

ベス「いいでしょう。受けて立ちます」

吼太「何やってんだか…」

なっぺ「……動かし方分からんよ！？」

ベス「ブレストフレアー」

なっぺ「あぎゃー！！」

吼太「単なるバカだな」

なっぺ「……そんなことを言う吼太はコスプレの刑だ！」

吼太「何故そうなる！？」

なっぺ「まずはＩＳ学園制服！」

吼太「だからやめろよこういうの！／／／／／」

なっぺ「ＩＳスーツ」

吼太「ほ、ほぼスク水じゃねーかよ！／／／／／」

なっぺ「うんそーだよ。束のアリス服（ウサミミ付き）！」

吼太「うぅ……話聞いてくれよ……／／／／／」

なっぺ「やだよ。カワイイしいいじゃん」

吼太「恥ずかしいからよくない！／／／／／」

なっぺ「某炎髪灼眼のコス」

吼太「はぁうっ！？／／／／／」

なっぺ「カワイイなｗｗｗ」

吼太「うるさいっ！／／／／／」

なっぺ「『三極姫』の孔明の服（変身能力あり）」

吼太「うう……訴えてやろうか！？／／／／」

なっぺ「無理無理。アリアのチアガール服」

吼太「だっ、だからなんでそういう服ばっかりなんだよ！？／／／／」

なっぺ「似合うからだ。ちなみにスカートの下も……」

吼太「み、見るな！　恥ずかしいから！／／／／」

なっぺ「女性用下着だからね。プラグスーツ」

吼太「なっ……もうやだぁ……／／／／／／」

なっぺ「ハッハッハッ」

ベス「次回は？」

なっぺ「予定ではｋｅｉさんなんだけど、まだ希望が来てないんだよね。なんで、後少しだけ待って、それでも来なかったら後回しになります。その場合はＳｔａｒ　Ｄｕｓｔさんになりますね。ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！」

# 第百三十四話　変わり始める世界（前書き）

久しぶりの更新。

ちょっとごたついてましたが、もう大丈夫です。

とはいえ、更新速度は期待しないで下さい。夏バテ中なんで……。

# 第百三十四話　変わり始める世界

Ｓｉｄｅ　三人称

朝。

夜行性のような一部を除き、生きとし生けるもの達が目覚める時間。

それは、人間だろうと例外は無い。

「ん……」

勿論、この人並み外れた可憐さと美しさを持つ少年、吉谷吼太であろうと例外ではない。

「よく寝た……」

『マスター、お早うございます』

「おはようさんトゥード。今日もいい天気だな」

スリープモードからアクティブモードへと変わり、起動した自身のデバイス、フォーティトゥードと話す吼太。窓の外には、澄み渡った空が広がっていた。

空を軽く見ていた吼太がベッドから出ようとするが、どこかに引っ掛かりを感じる。

怪訝そうに引っ掛かりのある方向を見ると、そこには昨晩一緒に寝

ていた少女――ヴィヴィオ――がいた。

「……ん～……」

吼太が自身の服の裾を掴んでいるヴィヴィオの手をどかそうとすると、無意識ながらに拒絶を返してきた。

あいにく、吼太は一人部屋なので誰かに代わりを頼むことも出来ない。

「……困ったなぁ」

『マスター。どう致しますか？』

「しゃーない。ギリギリまで待つ」

『了解』

ヴィヴィオの頭を軽く撫でながら、再び窓から空を見る吼太。

外では、小鳥達が囀りを辺りに聞かせていた。

「は～い！　全員集合！　じゃあ、朝練はここまで」

「「「「「「はい！」」」」」」

「今日は目立ったミスもなく、いい感じでした。明日からもこの調子で頑張ろう」

なのはがフォワード６人を集めて朝の訓練の総評を聞かせる。

概ね順調、といった具合だろうか。

特にスバルとギンガの二人は、新しい能力であるＤＷシステムを、存外上手く引き出せていた。まだまだ粗削りな部分はあるが、これなら実戦での運用も視野に入れられると言っても過言ではない。

とはいえ、やはり慣れないシステムだから体力消費が激しいのか、二人の息は上がっていたが。

訓練所を後にし、朝食を取るために隊舎に戻り始めるフォワード６人。

話しはじめたのは、やはりと言うべきかスバルであった。

「セカンドモードも大分馴染んできたかな～」

「そうですね～」

「変化の少ない俺やキャロはともかく、ティアやエリオは大変だろ？　何せ見た目から変わってる訳だしさ」

スバルを皮切りにキャロもケリュケイオンを見ながら同意し、そこからティーダが話を二人に振る。

だがティアナはそれほど疲れた顔はしていなかった。

「私は別に？　ダガーモードはあくまで補助だしね」

『はい』

話題に上がっていたクロスミラージュも、マスターであるティアナに同意する。

「僕もまぁ、戦い方は前とあまり変わっていませんし」

同じく、さほど疲れた様子を見せないエリオも言う。

「というより、1番大変なのはスバルとギンガさんでしょ！　データウェポンは体力消費激しい訳だし」

「私たちは大丈夫！　ね？　ギン姉」

「えぇ。くせは強いけど、その分得られる効果は大きいわけだしね」

スバルとギンガが笑いながら答える。

と、どこからともなくくぅ、とかわいい音が聞こえてきた。

スバルとギンガが赤面しているところを見る辺り、二人のお腹から聞こえてきたらしい。

「……ぷっ、ふふふ……」

「笑わないでよティア～！」

スバルがティアナにポカポカとはたくが、存外ツボにハマったのか、笑いを堪えきれないティアナ。

その様子を、他のフォワードメンバーが微笑ましく見守っていた。

Ｓｉｄｅ　吼太

「ヴィヴィオー！　コータくーん！」

不意に後ろから声をかけられる。

声からして……なのはか。

後ろを見れば、なのはが小走りでこちらに近づいて来ていた。

「…あ……」

ヴィヴィオもそれに気づき、なのはの元にトテトテと走り寄る。
そして、その勢いのままなのはに抱き着く。
「おはようヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」
「うん！」
なのはが聞くと、ヴィヴィオが元気に答える。
「おはようコータ君」
「ん、おはようなのは。ヴィヴィオ、なのはさんにおはようしようか？」
「……おはよー！」
オレが言うと、ヴィヴィオは特に間を空けずに挨拶をする。うん、素直でいい子だ。
「おはよう」
ヴィヴィオの挨拶に、これまた優しげな顔で応えるなのは。うん、さすがなのは。
「朝メシは一緒に食べられるのか？」
「うん、とりあえず一段落ついたから。コータ君こそ大丈夫なの？」
なのはが心配そうに聞いてくる。まぁ、オレも一応提督だしな。仕

事なんか山ほどあるわけなんだけど……

「さすがに朝メシぐらい食べる時間はあるっての。さ、行くぞヴィヴィオ」

ヴィヴィオを呼ぶと、なのはの手を片手で掴んだまま、こちらにも手を延ばしてきた。どうも、両手でオレたちの手を掴んでいたいらしい。

拒否する理由は無いから、普通に掴ませる。

……手の大きさが際だっては違わないのは悲しいな……。

「朝ごはん？」

ヴィヴィオがなのはに聞く。今から何をしに行くかまだ上手く理解してなかったんだろうか？

「そう、朝ごはん。さ、行こう？　今日のメニューは何だろうね～」

なのはとオレが歩き出すと、ヴィヴィオも手を引かれて歩き出す。

腹ごしらえしたら、仕事を片付けなきゃな。

「……パパ、そっちのウィンドウ……チェックしておいて……」

「わかった」

ライラに言われたウィンドウを受け取り、自身の前に展開する。

内容は……レジアス中将の身辺調査の依頼か。依頼主は……最高評議会？

もう一つは最高評議会の隠密調査。依頼主は地上本部……恐らく、レジアス中将だろう。

って待て待て。どういうことだ？

オレの記憶が正しければ、レジアス中将と最高評議会には繋がりがあったはずだ。それも、表沙汰には出来ないような、きな臭い繋がりが。

にも関わらず、互いに探り合うような依頼がオレのところに入ってきた。わざわざオレのとこに依頼してきたのは、オレが使い捨てに駒として見ると中々有用だからと判断したからだろう。

……となると疑問がある。もしかしたら、この二者は互いのことを快くは思っていない？

そうだ。そもそも、地上本部と本局は仲が悪いことで有名なんだ。そのトップがいがみ合わない理由なんて早々無い。ましてや最高評議会は管理局始まって以来変わってないんだ。本局が地上本部に嫌われる理由が改善されてないのは確実。と、なると現在の関係は互いが互いを利用し合うためのもの。その二者がわざわざ互いを探りに出てるんだ。そこから考えるに……

……最高評議会には、秘密がある。本来の世界には無い、この世界特有の秘密が。

「……お父様？」

不意にプリムに話し掛けられる。どうも、顔に出ていたみたいだな。

「……あぁ、大丈夫。心配かけてゴメンな」

あまり納得はしなかったようだが、気にしていても仕方ないと判断したのか仕事に戻るプリム。

……考えるのは後でも出来る。今は仕事を終わらせることに集中しよう。

「ん？　またメールか……。差出人は……ッッッ！？」

「お父さん？」

今度はミカが聞いてくる。プリムやライラもこっちを見ているから、案外声を出してしまったらしい。

「……少し出てくる。お前たちは仕事をしていてくれ」

「え？　あ、ちょっとお父さん！」

ミカに呼び止められる。が、今は構っていられる余裕はない。

――レリック、ルーテシア

この二つについて知りたければ、吉谷吼太……貴様一人で来い。

ポイントＢｑ－８Ａ－７２３－ｎ４Ｅで待っている。

ガリュー　――

Ｓｉｄｅ　フェイト

「テロ行為って……地上本部にですか？」

「まぁ、そういう噂があるって程度なんだけどね」

なんだか、管理局の要職の何人かが「近々管理局に向けてテロが行われる」って声を大にして言ってたり、秘密裏にテロに対する行動をしてたりしてるから、そういう噂がかなりの速度でミッドチルダ全体に広がっているみたい。

尤も、証拠が無いから目立った活動はしてないみたいだけど。

「でも確かに……管理局施設の魔法防御は鉄壁ですけど、ガジェットみたいな質量兵器を使えば……」

エリオが心配そうに、気づいたことを口にする。

「そう。管理局法では、質量兵器の使用は原則禁止だからね。対処しづらい」

「質量兵器……？」

キャロは質量兵器がイマイチわかってないみたいだ。少し説明してあげなきゃ、かな。

「おおざっぱに言えば、魔力を使わずに物理的効果をもたらす兵器……でいいのかな？」

「お父さん……じゃなかった。吼太さんは、『魔力使わなくて攻撃出来りゃだいたいは質量兵器だ』って言ってましたけど……」

「エリオの言うこともまぁまぁ合ってるね。質量物質を飛ばしてぶつけたり、爆発させたり。戦史時代のミッドや古代ベルカ、或いはそれ以前はそういう兵器が殆どだったの。一度作ってしまえば子供でも簡単に都市や世界を滅ぼしたり……。そんな、危険性が非常に高い兵器なんだ」

昔は非殺傷設定なんて便利なものもなかったから、その頃の魔法も同じようなものだったらしいんだけどね。

「だから管理局は創設以来、平和のため、安全のためにそういう武装や、同じく危険性の高いロストロギアも規制し始めた。それがだいたい１５０年くらい前」

とはいえ、管理外世界なんかでは普通に質量兵器が使われているし、そういった場所から質量兵器やロストロギア級の兵器を持ち込んでくる人達もいるから、まだまだ根絶とは程遠い状況なんだけどね。

「あれ？　でも吼太さんは平気で質量兵器を使っているような……」

キャロが不思議そうに言う。確かに、疑問に思っても仕方ない。コータはそれぐらい質量兵器を使ってるわけだし。

「近年では魔法の危険性も強く言われ始めてるんだ。いくら非殺傷設定があっても、物理的なダメージは必ず存在しているし、やり方も乱暴極まりないって世論もある。あと、魔法は先天的な資質が無いと使えないから使い手が限定されてしまう。そういった理由から、一部分的になら質量兵器の使用を認めようかって意見も出ているんだ。コータは、そのデモンストレーション役ってこと」

コータのリミッター解除権限が本局と地上本部に二分されているのは、そこに理由があるんだと思う。

さらに噂では、【魔力を使用する質量兵器】なんていうものも研究されているらしいし、まだまだこの問題は解決には程遠いだろうね。

「じゃあ吼太さんが『質量兵器も使い方によっては安全だ』って示せば……」

「いつか、魔導師と魔導師じゃない人が肩を並べて犯罪に立ち向か

うことが可能な世界が出来るかもしれないね。……さて、ここで問題です」

エリオとキャロが少し驚いた表情を見せる。聞かれるとは思ってなかったみたいだね。

「現在の世論はともかく、管理局設立当初は質量兵器が原則禁止されたことで、旧暦において頻繁に使われていた武装が使えなくなってしまいました。でも、いろんな場面で武力は必要になる。さて、管理局はどうしたでしょう？」

私が言うと、二人が考え込む。……少し難しかったかな？　一般教養ってほどの知識じゃないし、何よりエリオもキャロもまだまだ幼い。管理局員としては知っていて欲しいんだけど……。

そんな私の心配を余所に、エリオが話しはじめる。

「比較的クリーンで安全なエネルギーとして、魔法文化が推奨されました！」

横でキャロもうんうんと頷いている。口には出さなかったけど、ちゃんと分かってたみたいだ。

「正解。魔法の力を上手く使って、管理局システムは今の形で世界の管理を始めた」

まぁ、「～～するな」っていうのは定めても、「～～をしろ」とまでは言ってないから、管理というよりは【保護と観察】の方が近いんだけどね。

「各世界が浮かぶ海、次元空間に本局。発祥の地、ミッドチルダに地上本部を置いて……」

「あ…！　それが新暦の始まり……75年前…！」

気づいたキャロが、私の言葉を繋いでくれる。

「そう。で、新暦前後の1番混乱してた時期に管理局を切り盛りして、今の平和を作り上げたのが……」

「かの三提督……なるほど……」

「……と、世界の歴史は置いといて」

「「え？」」

二人が私の意外な言葉に驚く。でも、すぐに前の話の内容を思い出したみたいで、納得した表情に変わる。

「すみません……」

律儀にキャロが謝ってきた。大丈夫だったんだけど……。とりあえず頭を撫でてあげよう。

「ガジェットを始めとする質量兵器や、ロストロギア級の兵器が使われるなら、六課に出撃指令が下る可能性が高い。だから、しっかりやろうね」

「「はい！」」

……本当は……本音を言うなら、エリオやキャロには管理局員として働いて欲しくは無い。

いや、エリオやキャロだけじゃない。そもそも、ここまで幼い子が社会のために働くなんて、どこか間違ってるとしか思えない。

譲れない理由があるなら、それを否定する気はないけど……それでも、それでもと考えてしまう。

コータはどう思ってるのかな？　私と同じ？　それとも違う？

……いつまでも、コータの意見に従うだけじゃダメだ。ちゃんと自分で決めて、行動しなきゃ。執務官になった時にそう決めた。

そして私は……全てを守りたいと思った。

地上と次元（うみ）世界の平和と安全。エリオやキャロを含めた、部隊の皆の安全と将来。はやての立場やアリサの思い、すずかの願いになのはの飛ぶ空。それに、コータ。

全部守るのは大変だけど……。

私が、しっかりしなきゃ。

「力を貸してね、バルディッシュ」

私の囁くように呟いた言葉に、バルディッシュは少し輝くことで応えた。

## 第百三十四話　変わり始める世界（後書き）

今回は後書き座談会をお休みします。

# 第百三十五話　母／Ｍｏｔｈｅｒ（前書き）

お待たせしました。　久しぶりの更新です。
何故か今回は話のテーマが統一されてしまっていてびっくりしました。サブタイがかなりピッタリな気がする。

# 第百三十五話　母／Ｍｏｔｈｅｒ

Ｓｉｄｅ　スバル

「よしっと」

エリキャロにフェイトさんが現場検証に行って、ティアナとティーダさんははやてさんと本局の見学。ギン姉は陸士１０８部隊に呼ばれていない。それに副隊長はオフシフトでいない上、すずかさんとアリサさんはデバイスの調整で製作者の吼太さんと一緒にデバイス整備工場に行ってる。プリムさんたちも何だか慌ただしそうに出て行ったから、今日はフォワードメンバーは、私となのはさんだけ。

……で、今ようやくデータの整理が終わったから何となくなのはさんを見てみたら……

「……」

すっごいぼーっとしてる……。ってあれ？

「なのはさん……？　なのはさーん……？」

気づいたことを言おうとなのはさんに声をかけてみたけど、なんだか反応が返って来ない。

「……あの……なのはさーん？」

「……っと、ゴメン！　何？」

ようやく気づいてくれた。よっぽど集中してたみたいだったなぁ。

「いえ、あの……データのセット、終わってますよって……」

なのはさんの目の前に展開されているウィンドウには、既に完了という文字が表示されていた。

ようやくそれに気づいたなのはさんが、データセットの間、ウィンドウの端に展開していたヴィヴィオの写真と一緒に余分なウィンドウを全て閉じる。

「あぁ、ホントだ……。ダメだね。ぼーっとしちゃって……」

なのはさんが苦笑いを浮かべる。でも、無理もないと思うなぁ。ヴィヴィオが悪いわけじゃないけど、これからのことやなのはさんの過密スケジュールも重なって、マルチタスクの展開が辛くなってるんだと思う。精神的な疲れが溜まるとマルチタスクって使えなくなっちゃうんだよね、意外なことに。なのはさんもヴィヴィオのことで頭がいっぱいだろうし、私が少しでも力になれればいいんだけど……。

そう考えていると、正午を告げるベルが鳴った。

基本的に六課では明確な【昼食の時間】は定められてない。昼食に押されて仕事がおろそかになるのはもちろんダメだけど、それ以上に、”仕事のせいでご飯が食べられない”ってことを無くすためらしい。ただ、みんないつも正午にご飯を食べるから、これが有効活用されている形跡は無いんだけど。

「もうお昼かぁ。……寮に戻ってヴィヴィオと食べるんだけど、ス

バルもどう？」

「はい！　ご一緒します！」

「でも、この先ヴィヴィオって、どうなるんでしょうか……」

寮に向かいながらなのはさんと話しているのは、ずっと前から気になっていたこと。

ヴィヴィオもようやく機動六課の面々に慣れてきた感じだし、今すぐどこかに引き渡すとヴィヴィオにはかえってストレスにしかならない。かといって、いつまでもなぁなぁで預かりつづけるんじゃダメだと思う。

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つかれば、それが1番なんだけど」

なのはさんもやはり、考えは同じみたいだ。

「……難しいですよね。やっぱり、普通と違うから」

「そうだね」

そこで会話が途切れてしまう。

事実、ヴィヴィオのような子供はなかなか引き取り手がつかない。

人造魔導師はその性質上、強い魔法資質を持って生まれてくる。魔法資質そのものは珍しいものではないが、強いものとなれば話は別。”才能を持つ人は必ず、無い人に嫉まれる”。……って、これはティアが言ってたことなんだけどね。

子供が嫉まれるような才能を持っている。でも、その子供は引き取り手の人達の子供ではない。少なからず、引き取り手の人も言われのない誹謗中傷を受けてしまうだろう。それが嫌だからこそ、引き取り手がなかなか現れない。

勿論、そんなこと気にしないようなすごい人だっているにはいるけど、ヴィヴィオの元に現れるのはいつになるやら……。

「見つかるまで、時間がかかると思うんだ。まぁ、だから当面は私が面倒見てけばいいのかなって。保護責任者って形で」

「いいですね！　ヴィヴィオ、喜びますよ！」

だって、なのはさんが保護責任者になるんだもん！　あのなのはさんに懐いてるヴィヴィオが喜ばないわけない！　多分！

「ん～……喜ぶかなぁ？」

少し訝しげに答えるなのはさん。

でも、きっと！

「……ほごせきにん、しゃ？」

「ほら、やっぱりよくわからない」

あれぇ？

「なんて言えば分かるのかな……」

保護者……じゃあまり変わらないなぁ。守る人……守護神……いやいや。これはおっかないイメージ。

子供を護る人……お母さん……ママ？　かな？

「つまり、しばらくはなのはさんがヴィヴィオのママだよ、ってこと」

「……まま？」

……あ。もしかして……勘違いさせちゃった……？

「……いいよ。ママでも」

私の心配を余所に、なのはさんがヴィヴィオに話し掛ける。

「ヴィヴィオのホントのママが見つかるまで、なのはさんがママの代わり」

腰を降ろして、ヴィヴィオと目線を合わせながら話すなのはさん。

「ヴィヴィオは、それでもいい？」

いきなりでびっくりしたのかな？　どうも反応が鈍いヴィヴィオ。だけど、ちゃんと自分で理解しようと頑張ってるみたいで。

「……ママ」

確認するように、もう一回ママと口にするヴィヴィオ。

「はい、ヴィヴィオ」

「……うぇ……うぇぇぇぁぁん」

「へ！？　わぁ、えっと……」

泣いちゃった！？　なんでどうして！？

「なんで泣くの～？」

なのはさんも少し困った様子で言う。

「大丈夫だよヴィヴィオ。大丈夫」

まるで、大切なものをようやく取り戻したかのように、ヴィヴィオはしばらくなのはさんに抱き着いて、離れなかった。

Ｓｉｄｅ　吼太

「ここか……」

ガリューに指定されたポイントは、何故か灯台だった。

補足をすると、次元航行船を次元跳躍を伴わない資材運搬に使うには現状の技術からするとコストが掛かりすぎる。なので、ミッドにも海路を利用した運搬方法が残っているのだ。そして、それに使われている灯台の内の一つに呼ばれた、というわけだ。

「……で、隠れているのには何か理由があるのか？」

オレが灯台の頂上に顔を向けて言うと、そこから黒い影が跳び下りてきた。

そう、ガリューである。

「……」

殺気は放っていない。どうやら戦うつもりで呼び出したわけではないみたいだ。

「……本当に一人のようだな」

「な!?」

ガリューが喋った!?　どういうことだ!?

「俺が話していることに違和感があるようだな。その様子だと、この身体は元々寡黙か、喋らないか、或いは本来喋れない身体らしいな」

……言い方がおかしい。まるで、誰かがガリューの身体を使っているみたいな……。

「お前は確か転生者……とか言ったな」

「あぁ」

警戒を解かずに答える。本来のガリューと違う以上、どういう行動に出るかわからない。こんなとこでやられる気はないからな。

「そう警戒するな。俺はお前と戦うつもりは無い。なんなら縛ってもいい」

ガリューが両手を頭に置きながら言う。

「……わかった。信じるよ」

信じてみるかな。人間、相手を信じられなくなったらおしまいだ。

オレが警戒をある程度まで解いたのを感じたガリューは手を頭から下ろし、再び話し始めた。

「まず最初に、俺はガリューではない。――いや、ガリュー”ではなかった”と言うべきだな」

……ではなかった？　どういう意味だ？

「俺もつい最近知ったばかりなんだがな。どうも俺は【憑依者】という存在らしい」

「憑依者？」

あまり聞いたことのない単語だな。

「平たく言えば、転生者のようなものだが、肉体が原作キャラのものという存在のことを指すらしい。……尤も、肉体どころか前世の記憶すら持たない俺は所謂”なりそこない”らしいがな」

なりそこない……。　確かに、転生者としてはそう言えなくもないか？

一呼吸おき、ガリューが話を続ける。

「もう、ずいぶん昔のことだ。気付けば俺は、ボロボロの体を森の中で横たえていた。何故そうなったのか、いつからそうしていたのか、俺には全くわからなかった。……このまま死ぬんだと思ったよ。あの娘が来るまでは……」

『……大丈夫……？』

「っ！？」

「どうした？」

「……いや、何でもない」

なんだ？　今、一瞬だが何かのイメージが……。

それに今聞こえた声、感じた感覚……ガリューが言っていたものと一致した？

精神感応能力が誤作動を起こしたのか？　今までそんなことはなかったけど……。

「続けるぞ。ルーテシアに拾われた俺は、彼女の召喚蟲になった。とはいえ、当初はあまり苦労はしなかった。レリック探しだけなら

あまり目立たずに動ける上、ドクタースカリエッティの協力もあったからな。……アイツらが現れるまでは」

「……アイツら？」

「転生者だよ」

突如、オレとガリュー以外の声がこの場に響いた。

そして、その声をオレ達は知っている。

「「ルーテシア！？」」

「ガリュー、勝手に行動しちゃダメ。ウーノが怒ってる」

ルーテシアに窘められて、無言になるガリュー。必要以上に喋らないのは性格から来てるみたいだな。

「……で、あなた」

ルーテシアがこちらを向いて話し掛けてくる。

「これ以上私たちを邪魔しないで。私たちはレリックが欲しいだけだから……」

静かに、しかし強い意志の篭った瞳を向けてくるルーテシア。

「転生者の話がまだ途中だ。まずはそこから話してもらいたいな」

オレが言うと、ルーテシアは素直に説明を始めた。

「信じられないとは思うけど、一度死んで、再び蘇った人間がいる。それが転生者。彼らは己の欲望のままに動いている」

欲望のままに、ね。そういう意味じゃオレもそうだな。

「彼らの最大の特徴は、何かしらの特異性を持っているということだけ。容姿が優れていたり、強力な希少技能（レアスキル）を持っていたり、並大抵では身につかない技術を持っていたり。或いは、異常なまでの生存性もあるみたい。普通の人間と見分けるのはとても困難。だから、もしかしたらあなたの隣にいつもいる人も、転生者かもしれない。転生者そのものではなくても、転生者に何らかの縁がある人かもしれない」

……懐疑的だな。環境が原因か？　スカリエッティがそうするように教育したのかもしれねぇな。

ま、疑うこと自体は悪くねぇけどな。

だが……

「ナンバーズのみんなもガリューもゼストもアギトも、みんな強いから今のところは大丈夫だけど、いつみんなより強い転生者が現れるか分からない。……その前に目的を果たすの。邪魔をするならあなたたちだって……」

「それがどうした」

ルーテシアの言葉を途中に割り込むように言う。

「オレを誰だと思ってる。やりてぇと思ったことは、真っ向正直に貫き通す。それがオレだ」

「なら……」

ルーテシアが戦闘態勢をとる。

「だから！　オレは好きなようにやらせてもらうぜ！　んでもって、オレはお前らを救う！　一人残らずな！」

「……？」

ルーテシアが呆気にとられた様子でこっちを見てきてる。が、そんなことには構ってられない。

「だからさ、お前はもっと周りを頼れ。もし誰にも頼れなくて、すっごい辛いことがあったなら……そんときはオレが支えてやる！」

ルーテシアの頭をクシャクシャと撫でる。

「ガリューもだ。テメェ一人でなんでも抱え込むんじゃねぇよ。その代わり、オレのことも支えてくれや」

「……意味が、わからない」

「つまりはだ！　オレを背負うお前らをオレが背負うってことだよ！」

「……ますますわからない」

ん？　難しかったか？

「だから、オレを信用しろ。お前の願いはオレが絶対叶えてやる。だからお前はオレを信じろ。いいな？」

『マスター、そろそろ時間です』

トゥードがオレに次の予定が迫ってることを伝えてくる。

「言いたいことはそれだけだ。じゃあな！」

Ｓｉｄｅ　ルーテシア

第一印象は、【とても強い人】。

それが今では、【とても無茶苦茶な人】になっていた。

まるで嵐のように周りを巻き込んで、まるで炎のように熱い思いをぶつけてくる。

今まで会ったことの無いタイプ。

もし、私にお兄ちゃんがいたら、あんな感じなのかな？

もしそうだったら……

「嬉しい……かも？」

ちょっとうるさそう。

だけど、一緒にいたらきっと毎日が楽しい。

お母さんと私とあの人。

今まで想像してたのは、二人一緒の未来。今は三人一緒の未来を考え始めてる。

いや、きっともっと増える。

そうなったら……もしそうなったら……

「……楽しそう」

ちょっとだけ、信じてみようかな。

Ｓｉｄｅ　三人称

ミッドチルダ地上、陸士１０８部隊の隊舎。

そこの隊長室にて、ある二人の人物が対面していた。

「まさか乗り込んでくるたぁな。行動力は人並み以上か」

スバルとギンガの父親であり、陸士１０８部隊の隊長でもあるゲンヤ・ナカジマが、目の前の人物に言う。

「わざわざ俺の前に姿を現したってぇのは、出頭しに来たってことかい？」

「……」

その人物は答えない。だが、その口元は歪んでいた。

まるで、ゲンヤを嘲笑うかのように。

「……人の部屋に無断で入り込んできて、だんまり決め込むってのはいただけねぇなぁ。それとも何かい？　ただ俺たち地上の連中をバカにしに来たって……」

そこまでを話した、その時。

今まで口を閉ざしていた人物が、ゲンヤの言葉を遮るように声を発した。

「クイント・ナカジマ」

「ッ！？」

その男が口を開いた瞬間に洩れ出た邪気を敏感に感じ取り、一瞬で先ほどまで座っていた椅子から飛びのいて、護身用にと持っていたナイフ型ストレージデバイスを取り出すゲンヤ。

仮にも部隊の隊長だ。魔法は使えないが、魔力を必要としない、武器同然のデバイスの所持は珍しいことではない。

「フッ、そう警戒しないでくれたまえよ。私は個人的に君と話がしたかっただけさ。知りたくは無いかい？　クイント・ナカジマのことについて」

「何言ってやがる！　クイントは、アイツは任務の途中に戦闘機人に殺されて……遺体すら、残らなかった……っ！」

ゲンヤが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。そんな状態でも、デバイスを握る手は緩めない。

「それは誤りだよ。管理局上層部の隠蔽工作の結果、そう伝えられているだけさ。知りたくはないかい？　事件の全貌（しんじつ）を……」

嫌らしい笑みを浮かべながら、ゲンヤに問い掛ける。

静寂。

やがて、ゲンヤはデバイスを持つ手を下ろしてしまう。

「教えてもらおうじゃねぇか。真実ってヤツを。　なぁ……？

……ジェイル・スカリエッティさんよォ……！」

ジェイルは、さらに笑みを深めた。

# 第百三十五話　母／Ｍｏｔｈｅｒ（後書き）

まだ後書き座談会を書く気分にはなれないので、しばらくは自粛させて頂きます。代わりと言っちゃあなんですが、ちょっとした雑談を。

ＳｔＳ篇は目一杯ふざけるって決めたのに、最近シリアス路線になってしまっているのが目下最大の悩み。ギャグ展開に持って行けない……。

しかし、先のこと考えておけば案外作れるもんですね。伏線。もっとも、バレバレな伏線ばかりですが。まぁ、必ずしもバレないような伏線を設置しなきゃいけないわけじゃないですし、このままぼちぼち行きます。

最近なんだか騒がしいですが、この小説は変わらずのんびりとやっていきたいですね。まぁ、無理かもしれませんが。

今回、偶然にも”母”でテーマが統一されてしまったわけですが……。書いた自分が一番びっくり。

ちなみにガリューをやったのは……秘密にしときましょう。伏線に使えるかもしれないし↑

……あぁ、マジで早く第四部書きたい。

感想と贈り物、本当にありがとうございます。
ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百三十六話　とある質問（前書き）

はい、空の境界を《そらのきょうかい》と読んでいたバカななっぺです。

最近、なんだか執筆速度がハンパなく遅くて……。　お待たせしてしまい、申し訳ありません。まだしばらくはこのスピードになると思いますが、どうか御了承下さい。

# 第百三十六話　とある質問

Ｓｉｄｅ　吼太

「パパ～♪」

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！

【気づいたらオレは、幼女の父親になっていた】！

頭がどうにかなりそうだった……。

詐欺とか、援助交際とか、そんなチャチなもんじゃ断じてねぇ。

もっと恐ろしいものの片鱗を……

「コータ君？」

「……あぁ、なのはか。ところで……オレはいつ、ヴィヴィオの父親になったんだ？　全く記憶に無いんだが……」

オレが聞くと、何故かなのはが目線を逸らす。

……。

「……何故か知らないか？　なのは」

「し、知らないよ？」

……怪しい。

「ヴィヴィオ。どうしてオレがパパなんだ？」

「えとね！　なのはママがね、『ヴィヴィオのパパはコータパパなんだよ～』って言ってたの♪」

……ほうほう。

「なのは……ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしないか？　うん。ちょっと拳で語り合いたい気分なんだ」

「ふぇ！？」

余程驚いたのか、昔の口癖が出てしまっているなのは。

「パパとママなかよし～♪」

ヴィヴィオは何故か喜んでいた。……まぁ、仲はいいよな。うん。

「仲いいなら拳で語り合おうとしないで！？　多少鍛えてはいるけどミッド魔導師は肉弾戦は苦手なんだよ！？」

「苦手を克服するいいチャンスだな！」

「にゃあぁぁぁぁ……」

「で、お仕置きしたの？」

「まさか。軽く説教しただけだよ」

後日、本局に用事が会ったので行ってみたのだが、偶然にもヴェロッサと出会ったので、ラウンジでちょっと話をしている。

「なんだ。てっきり〇〇〇で×××なオシオキをしてひぃひぃ言わせたのかと」

「何を想像してんだエロッサ」

「変なあだ名付けないでくれよ～」

そう言いながらもへらへらした顔は崩さないロッサ。嫌がってないんだか嫌がってんだかわからん。

「そういえば、あの娘……ヴィヴィオだっけ？　あの娘のことなんだけど」

以前、ロッサに会った時にヴィヴィオの引き取り手を捜してもらう

ように頼んでいた。その話だろう。

「ダメだね。いるにはいるけど、素性不明が6割、素行や性癖に問題ある人が3割。残りは研究機関関係。安心して預けられるとこはなかった」

「やっぱりか……。悪かったな。手間取らせて」

「気にしないで。未来の兄さんの頼みだからね」

……なんで？

「……もしかして、分かってない？」

「え？　何が？」

「……姉さんも大変そうだ」

「え？　だからなんで？」

結局、ロッサは答えを教えてはくれなかった。

Ｓｉｄｅ　三人称

「はい、午前中の訓練はここまで。お昼にしよう」

「「「ありがとうございました！」」」

いつも通りの訓練。日々の訓練で基礎体力も付いてきているのか、フォワードメンバーもあまり疲れた様子を見せてはいない。

とはいえ、隊長陣との模擬戦ではそうもいかないのだが。

一同が六課の隊舎に戻ると、ロビーでウィンドウをじっくり見ている人影を見つけた。

その金色の髪を僅かに揺らし、ウィンドウの中の人物を、深紅と翡翠の瞳でじっと見つめる少女。

少女はなのは達を見つけると、視聴を中断して一同に走り寄る。

「ママ～♪」

以前なのはに保護された少女。名前はヴィヴィオ。

「もうおひるやすみ？」

「うん。一緒にお昼ご飯食べようね」

なのはにとても懐いているヴィヴィオは、、視界内からなのはがいなくなっただけで泣き出してしまう。それほどなのはに依存しているのだろう。

「ヴィヴィオ、ママたちのビデオ見てたの？」

「空戦教導の映像資料だ……」

キャロとエリオが、先程までヴィヴィオが見ていたウィンドウを覗き込みながら言う。

「うん！　なのはママもフェイトママもこーたパパもカッコイイんだよー♪」

ヴィヴィオが花が咲くような笑顔で言う。

「なのはママ？　フェイトママ？　こーたパパ？　……えぇぇぇっ!?　ど、どういうこと!?」

うまく理解できていないのか、ギンガが声を荒立てる。

「あれ？　ギン姉知らなかったの？　なのはさん、ヴィヴィオの保護責任者になったんだよ。で、フェイトさんと吼太さんは後見人」

「それで、スバルさんがヴィヴィオに『なのはさんがヴィヴィオのママになるんだよー』って言ってから、ヴィヴィオがなのはさんやフェイトさんをママ、吼太さんをパパって呼ぶんだって聞きました」

スバルの説明をエリオが引き継ぎながら、ギンガに説明する。

「……ハッ！」

突如、ギンガがティアナの方を向く。

それは、恋する乙女のみが感じ取ることが出来る、【ライバルの視線】。

ティアナは終始笑顔だったが、その顔は雄弁にある言葉を語っていた。

『あれ？　まさか知らなかったんですか？　コータさんに関わることなのに？』と。

「……くっ！　向こうが一枚上手だったみたいね……っっ！」

「……ギン姉、何の話？」

無論、そんな二人を見ていたスバルは訳がわからず、困惑していた。

管理局地上本部。数あるエレベーターの内の一基。

「アインヘリヤル、か……」

そこで、レジアス・ゲイズ中将の副官にして娘である、オーリス・ゲイズが物思いに耽っていた。

魔力による斥力レールを敷き、高密度に圧縮した多重殻魔力弾を連続で発射する、限りなく質量兵器に近い魔導兵器。

対象を破壊する確実性で言えばアルカンシェルがあるが、あれは対消滅を用いているため、地上で使えばアルカンシェルの中心とも言えるスフィアが進む過程で地面ごと消滅させてしまい、大惨事になりかねない。

その点、アインヘリヤルは対象のみをピンポイントで攻撃が可能。単純な魔法を大型化しただけなので量産も効き、修理も容易。

だが、それ故に――兵器として優秀であるが故に――風当たりも激しい。

「君はどう思う？」

同行していた男性局員に、オーリスが尋ねる。

「はっ、地上世界の希望であるとと思います！　あれがあれば、本局の次元航行部隊や希少技能保有者などに頼らずとも、地上の平和と安全を守れます！」

「……そうだな」

確かに、魔導資質に関係なく使えるアインヘリヤルがあれば、地上の地力はさらに上がるだろう。

……いや、”上がる”などという生易しいものではないだろう。その威力は、過去使われていたという禁断の質量兵器、コードネーム【ガジェット・ゼロ】、それを遥かに超える威力を持つとまで言わ

れているのだ。

そう、かつて数多の世界を滅ぼし、一説には【次元の鍵】とも言われた事件を引き起こした兵器を超えるとも言われる力。

「例のプランといい、アインヘリヤルといい、過ぎた力と思わなくもないが……先行きは不安だが、あの方の決めた道だからな」

オーリスの感じている予感。それの意味することを、彼女は知らない。

舞台は再び機動六課へと戻る。

「ねぇスバルさん！」

「ん？　どうしたのヴィヴィオ？」

ティアナと共に、仕事合間の休憩に散歩をしていたスバルが、ヴィヴィオに呼び止められる。

特別急ぐ用事は無いからか、すぐに振り返り、腰を落としてヴィヴィオと目線を合わせるスバル。

「なのはママも、フェイトママも、こーたパパも、つよくてカッコイイの」

「うん、そうだね～」

性格的に子供が好きらしいスバルは、ニコニコしながらヴィヴィオの話を聞く。

ティアナはティアナで、少々離れた場所から二人の様子を伺っていた。

「でもね、ヴィヴィオわからないことがあるの」

「何？　言ってみて？」

ヴィヴィオが不可解そうな表情を浮かべ、スバルに話す。

「つよさって、なに？」

「えっ！？　そ、その……あれ？」

普段よく考えていないことを聞かれたからか、上手く答えられないスバル。

「スバル、どうかしたの？」

奇妙に思ったティアナがスバルにひそひそと話し掛ける。

「その……なんて答えていいか迷っちゃって……」

ヴィヴィオの純粋な……あまりに単純な質問故に、答えられないと言うスバル。

「強さ、ねぇ……。普通は魔法戦のこととかよね」

「でも、それじゃなんかしっくりいかないっていうか……」

スバルが、普段使わない部分の頭をフル稼動させて考える。

「スバルさん？」

「あ、ゴメンねヴィヴィオ。……私もわかんないや……」

意気消沈した様子で答えるスバル。

「そうなんだ……。パパにきいたら、『他の人達に聞いてみるといいぞ』っていわれたからきいたんだけど……えと、ごめんなさい」

「こっちこそ、ゴメンね～」

トコトコと他のところに行くヴィヴィオ。別の人を探しに行ったのだろう。

「強さ、かぁ。考えたこともなかったわね」

ティアナが空を仰ぎながら言う。まるで、空に強さの意味を求めるように。

「そうだね。日々強くなるために訓練して、訓練して、実践経験も

重ねて……」

【何故強くなりたいか】を考えたことはあっても、【強さそのもの】が何かを考えたことはなかった。

故に、二人は答えられなかったのだ。強さの意味を。

「ティア」

「わかってるわよ。……とりあえずは隊長たちやヴォルケンリッターの人達に聞いてみましょう」

二人はまず部隊長室へと向かう。部隊長であるはやては、同時に夜天の主……則ちヴォルケンリッターの主でもある。はやての元に向かえば、誰かよい意見を出してくれる人がいると二人は分だのだ。

案の定、そこにははやてとリインフォース？《ツヴァイ》以外になのはヴィータがいた。

「ん、どうした？」

「失礼します！　八神部隊長、それになのはさんにヴィータさん、リインさん。少し質問が……」

「で、答えられなかったってわけか」

「うぅ……」

ヴィータの言葉に萎縮してしまうスバルとティアナ。

「でも強さの意味かぁ。確かに答えづらいよね」

なのはが苦笑しながら言う。

「せやな。一人一人、強さの意味は違うもんや。似たようなものはあっても、厳密にはみんな違うからなぁ。スバルたちが答えられなかったのも仕方ないなぁ」

「ですね～」

はやての言葉に、頷いて同意するリインフォース?。

「強さの意味……私たちの強さの意味……」

「なのはさん達の強さの意味って、何なんですか?」

ティアナが何気なく聞くが、意外にもヴィータは窘める口調で答える。

「そーゆーモンは他人に聞いてもどうにもなんねーよ。自分自身で見つけなきゃいけないんだ」

「あ、すみません……」

先程に引き続き、さらに萎縮してしまうティアナ。

「じゃあ、そんな二人に質問」

「え？」

「質問……？」

なのはの言葉に、思わず聞き返してしまう二人。

「こんな言葉聞いたことない？　【自分より強い相手に勝つためには、自分のほうが相手より強くないといけない】」

「あ、えと……」

「聞いたことない……です」

聞いたことのない言葉を聞いて、キョトンとしてしまうスバルとティアナ。

「じゃあ問題。この言葉の矛盾と意味をよく考えて答えなさい。答えは次の訓練のときにでも教えてね」

やがて二人が退出すると、不意になのはが嬉しそうな表情を浮かべる。

「どうしたんやなのはちゃん？」

「ふふっ、あの二人も【強さの意味】を考える頃になったのかと思うと、何だか感慨深くて」

「なのはさんはどこであの言葉を聞いたんですか？」

リインフォース？がなのはに聞く。

「あれ？　みんな聞いたことない？」

三人は頷いて返す。

「私は……というより私とフェイトちゃんだね。もう１０年も前になるかな。訓練校の短期メニューを終えるときに聞いたんだ」

訓練メニューの最後、なのはとフェイトはタッグを組んで模擬戦をすることになった。

相手は、学長であるファーン・コラード三佐。なのはとフェイトは自身のデバイスであるレイジングハートとバルディッシュを使い、制限も一切無し。対し、ファーンは一般的な杖型デバイス。

その時既になのはたちはＥＸランクだったが、対するファーンはＡＡランク。

単純なステータスだけ見れば、なのはたちに分があると言えるだろう。

だが、勝ったのはファーンだった。

その時に言われた事こそが、先程スバルたちへと伝えた言葉なのだ。

「さて、スバルたちは答えられるかな？」

その場にいた誰もが気づかなかったが、その時のなのはの表情は、かつてなのはたちに質問をしたファーンのそれと重なっていたという。

「主はやて、そろそろお時間です」

ふとウィンドウが開き、リインフォース？《アインス》がはやてに言う。

「あぁ、もうそないな時間か」

「はやてちゃん、何か用事あるの？」

「実は聖王教会でやる健康診断が今日なんよ。せやからヴォルケンリッター総出でお出かけや」

はやての言う健康診断は、古代ベルカの魔術保存も兼ねている。

古代ベルカ式魔法の使い手は非常に貴重である上、形はどうあれヴォルケンリッターは古代ベルカの生き証人。何より、彼女達自身が望んでいるのだ。【ベルカ】を未来へと伝えて行くことを。

「そうなんだ。……そろそろお昼だし、私もヴィヴィオとお昼にしようかな」

「そっか。ほんならな～」

はやてとヴィータ、リインフォース?は聖王教会へ。なのはは給湯室へと向かっていく。

『そっちはどうだい?』

「順調だよドクターさん。問題ないよ」

『今のところはそうだろうけど、油断はダメだよ。ナンバーズの最終調整もそろそろ終わる。計画発動は間近だからね』

「分かってる。じゃあ、また」

ウィンドウが閉じる。

スカリエッティと話していた人物は、不敵な笑みを浮かべていた。

「もうすぐ……。もうすぐ、私の願いが叶う……！　ずっとずっと前からの、願いが……！」

## 第百三十六話　とある質問（後書き）

今回は漫画版の話が中心ですね。

今回から数話分は、アニメ１５話とサウンドステージ０２、漫画１４．７５話を組み合わせてお送りしたいと思ってます。

ぶっちゃけ、一つ一つ書いてたら埒が開かないってのが大きいですが。

とはいえ、ぼちぼち後半戦が迫ってきてます。

せっかくなんで、裏話を少し。

この作品でスバルはレムリア・インパクトを使ってる訳ですが、当初は違う技だったりします。

ギガドリルブレイクです。螺旋力です。

機械の身体だし、相性もよさそうだったんで、最初はギガドリルブレイクを予定してたんですよ。ただ、途中でとある展開が浮かんで、それでレムリア・インパクトに変更になりました。

……え？　”とある展開”って何かって？　秘密です。ただ、ＳｔＳ中に起こる展開なので、お楽しみに。

感想を下さった皆さん、ありがとうございます。なっぺは元気じゃないです。↑

まぁ、のんびり書いていきたいと思ってます。……のんびり過ぎる気もしますが……。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百三十七話　得た、答え（前書き）

ようやく完成……。皆さん、お待たせしました。

だんだんテンションも戻ってきたのですが、リアルが忙しいのでまだまだ更新ペースは上がらなさそうです。

とはいえ、そろそろ折り返し地点だし、頑張らないと……！

# 第百三十七話　得た、答え

Ｓｉｄｅ　三人称

聖王教会の本部の近く。

そこには、綺麗な草原と豊かな森があった。

空では鳥たちが歌い、花々の間を蝶が舞い踊る。

人の手の加わらぬ楽園、そう言えるような風景が広がっていた。

「はぁ……やっぱりこのお庭は落ち着きますね」

シャマルが景色を見ながら息を吐く。

「ここ、聖王教会本部はどこも古きベルカの情景を残しております。皆さんの風景にも、こんな風景があったのかもしれませんね」

ついて来ていたシャッハが言う。

ヴォルケンリッターのメンバーはいずれも記憶領域を転生の度に九割方削除しており、リインフォース？は肝心の記憶領域そのものが欠損していた。

今でこそ問題は無いが、彼女達が闇の書として動いていた弊害は、今なお残り続けているのだ。

そんな彼女達でも、感性は変わらない。例え記憶がなかろうとも、

この風景は懐かしく感じていた。

「のどかな風景……私もかつては、こんな風景を見ていたのだろうか……」

リインフォース?が感極まったように言う。闇の書がまだ健在だった頃、彼女が外の景色を見られるようになっても、彼女が見れたのは崩壊していく世界だけだった。

故に、こういった景色をまじまじと見ることに、特別な感情を持つようだ。

「私たちは、古いベルカのことは分からないですけど」

「落ち着くのは確かやね。空気もえぇし」

リインフォース?とはやてが言う。実際、こういったのどかな風景は人の心を穏やかにするものだ。

「……アイツは、こういう景色を覚えてたのかな……」

ヴィータが少し悲しそうに言う。

「5人目のヴォルケンリッター……歪みの騎士ザンク、でしたか?」

「えぇ。奴もまた真の騎士であり、仲間であり、家族です」

シャッハの言葉にシグナムが答える。

歪みの騎士ザンク。元は夜天の魔導書とデータを共有し、夜天の書

の魔法蒐集をより効率的に行うための付随デバイス、蒼天の魔導書の原型と言える魔導書、闇天の魔導書の守護騎士の片割れであり、守護騎士システムが夜天の書から独立した現在は、シグナムらと同様の立ち位置であるヴォルケンリッターに収まっている。

１０年前に起きた【闇の書事件】を終息に導いた功労者であり、現在は償いと修業のために次元世界を放浪しているようだ。

彼の噂はひそかに広まっており、はやて達にもその話は届いていた。

「……連れ戻すつもりは、ないんですか？」

「……今すぐにでも帰って来てほしい。それは事実や。でも、ザンクは必ず帰ってきてくれるって約束してくれた。だから、私たちがするべきは、待つことや」

「リインも早く会ってみたいです～」

リインフォース？は蒼天の書の管制人格。そして、ザンクは蒼天の書の守護騎士とも言える。

だがリインフォース？が誕生したのはザンクが旅立った後であったため、二人は互いと会ったことがないのだ。

会いたい気持ちは一入だろう。

「……守護騎士の皆さん。診断の準備が調いましたので」

「「「はい」」」

ヴォルケンリッターとリインフォース？が応える。

「騎士はやてとリインちゃんはオフィスの方に……」

「はい」「はいです」

はやてとリインフォース?がシャッハについていく。

彼女らが立ち去った後も、古きベルカの風景は変わらずそこにあった。

一方、機動六課ではフォワード６人が悩んでいた。

スバルとティアナを通じて出された宿題。

【自分より強い相手に勝つためには、自分のほうが相手より強くないといけない】

これの矛盾と意味について考えているのだが、いまいちピンと来な

いのだ。

「ただの言葉遊びじゃないよな……？」

ティーダが頭を抱える。

「あ、僕わかりました！　強くなるには訓練をたくさんして、相手より強くなればいいんです！」

エリオが「閃いた！」と言わんばかりの表情で言う。

が、そこにキャロが反論する。

「でもそれだと、倒しているのは”自分より弱い相手”じゃない？」

「……あ」

自分が相手から強くなれば、”自分より強い相手”は”自分より弱い相手”になってしまう。これでは答えとしては不適当だ。

「ギン姉はどう思う？」

先程から黙っているギンガに、スバルが話を振る。

「んー、私も分からないかな」

「そうなのかぁー……「ただ」……ギン姉？」

ギンガがスバルの言葉に割り込むように、話を続ける。

「私としてはそれは否定するべき言葉かな」

「えっ……？」

ギンガの言った言葉に、スバルから驚いた声が洩れる。

「母さんが言ってた。刹那の隙に必倒の一撃を叩き込んで終わらせるのが、打撃系のスタイル。出力がどうとか、射程や速度や防御能力がどうとか、自分と相手のどちらが強いかとか、そんなの全部関係無い」

ギンガが左手の手刀でスバルの首を軽く叩く。

「相手の急所に正確な一撃。狙うのはそれだけ」

そこまで言うとギンガは左手を下ろし、スバルに笑いかける。

「私は、そう思ってる」

そう、ギンガは締めた。

「……でも、やっぱり問題の答えは分かりませんね……」

キャロが言うと、再び六人は頭を抱える。

結局、彼らが答えを見つけることはなく、日は暮れていった。

「それで、結局見つからないんだ？」

「「はい……」」

フェイトの車に乗り移動するライトニング総勢四人。

「僕はそんな難しいこと考えたことないなぁ～」

フィニアが頭の後ろに腕を回し、フロントガラスから見える夜空を見ながら言う。

「えぇっ！？」

その予想外の言葉に、思わず大きな反応をしてしまうエリオ。

「僕、難しいこと考えるの苦手だからさ。あんまり難しいこと考えないようにしてるんだ。そーゆーのはフェイトやなずなみたいな頭いい人に任せて、僕は今やることだけ考えて行動するだけ。そりゃ出来ないことが出来るようになったら1番いいんだけど、そんな簡単に出来るわけじゃないしね。だったら、今出来ることをやるだけだよ」

「今、出来ること……」

キャロが言葉を噛み締めるように呟く。

「そういやフェイト。結局答えってなんなの？」

フィニアがフェイトに話しかける。

「秘密。せっかくだし、フィニアも一緒に考えてみたら？」

「えーっ！？」

他愛ない会話。

だが、それも長くは続かない。

『こちら機動六課、ロングアーチ！　緊急事態です！　ガジェットの反応を確認しました！　二手に別れて部隊が展開しています！　場所は、第七海岸区画の海岸線とサードアベニューＥ３７地下道』

「住民区画がかなり近い……！？　こちらライトニング！　六課よりは私たちのほうが近い！　海岸区画には私たちが向かう！」

フェイトが状況を瞬時に判断し、六課に通信を送る。

「アルトさん、飛行許可お願いします！　フリードがいますから、飛んでいったほうが早いです！」

『はい！　フェイトさん、フィニアさん、フリード。市街地飛行、承認！』

近くのパーキングスペースに車を止め、車から四人が飛び出し、セットアップする。

「来よ、我が竜フリードリヒ！　竜魂、召喚！」

魔法陣がフリードを包み、フリードリヒという竜本来の肉体を呼び出す。

亜空間へと保管されているフリードの質量を、召喚魔法により召喚することでフリードを本来の姿へと戻しているのだ。

『Ｅ３７地下道にはスターズフォワードとバーニングフォワードが向かっています！　上空警戒にはアリサ隊長とすずか隊長が担当！』

『１０８部隊や近隣の武装隊員が警戒に当たってくれるそうです！』

『これは……？型？　付加ユニット付き……多足歩行型です！』

通信が次々に入る。状況はまだまだ不鮮明だが、それよりも不鮮明なのはガジェットの目的だった。

「一カ所に向かっていない？　はぐれガジェットでしょうか？」

エリオがウィンドウを操作しながら言う。

この近隣にレリックを始めとする、ロストロギア全般は無い。

「だといいけど……油断しないでいこう！」

「うん！」「「はい！」」

Ｓｉｄｅ　アリサ

「すずか……」

「わかってるよ、アリサちゃん」

コイツら……動きがおかしい。攻撃は散発的、しかも対象を絞っている訳でもない。

「様子見……かな？」

すずかが自身の推測を口にする。

「多分ね。あまり手札晒しちゃダメよ」

「晒すも何も……ろくに何も出来ないんだけどね」

魔力弾でガジェット？型を貫きながらすずかが言う。

確かに、手札と言えるような攻撃はリミッターの関係上使用出来ない。特に、”アレ”は周りへの被害がデカすぎる。どちらにしてもアレだけは使えない。

「まぁ……使う必要も無い、けど、ね！」

一気に移動し、そのままガジェットを三体斬り捨てる。

私のデバイスであるエッケザックスは刀型アームドデバイス。現代では珍しいグズィ式の術式をベースに使っている。

基本的には近接戦闘用かつ刀身に炎を纏わせたりして戦うので、戦い方はシグナムに近いものがあると思っている。ただ、シグナムいわく、私の戦い方は「騎士ではなく、剣闘士」らしい。よく分からないけど。

『転移を確認。ガジェット・ドローンの増援です』

すずかのガランホルンが索敵結果を伝えてくる。

すずかのデバイスであるガランホルンも、グズィ式を基本術式に据えているアームドデバイスだ。

フルート型のその機体をすずかは、時に効果を拡散させて伝える笛として、時に方向性を指揮する指揮棒として使っている。

また、私のエッケザックスはベルカ式も参考にしているため、カートリッジを持つ。対し、ガランホルンはカートリッジを持たない代わりに索敵などの補助能力に優れている。これはミッド式を参考にしているためだ。

私とすずかには魔力を生み出すための機関であるリンカーコアが備わっていない。だから、それを克服するためのアイテムが私たちのデバイスに装備されている。

私たちのバリアジャケットに付いている翡翠の宝石が、街の光を受けて鈍く輝く。

魔溜石。コータが見つけたこの宝石は、少し弄ることでリンカーコアと同じ働きをするようになるらしい。

私たちはそれを使って魔力を使用しているわけだ。

一見、慢性的な魔導師不足を解決出来る至高のアイテムに感じるけど、コータは「量が限られているから」と、決して輸出しようとしない。

それが本当なのか、それとも万人が魔力を使えるようになるのを警戒しているのか……。

まぁ、あのバカのことだから、深くは考えてないんでしょうね。おおかた、本能で危険を察知したってとこかしら。全く、そんなとこだけやたら勘がいいんだから……。

「ふふっ……」

「……何よすずか」

何故かクスクスと笑い出すすずかを睨む。なんだか、私を見て笑ってるみたいだし。

「アリサちゃん、今コータ君のこと考えてたでしょ？」

「なぁっ！？」

顔が熱くなったのを感じる。な、なんでバレたのかしら……？

「だってアリサちゃん、なんだか楽しそうなんだもん。きっと、コータ君のこと考えてるんだなぁ～、って」

「う、うるさいうるさい！　誰があんなヤツ……！」

『ツンデレはやはり直ってないんですね』

『恋人になったというのに、何故あぁツンツンするのか……照れ隠しが下手ですね。マスターは』

「そこのデバイス2機！　無駄口叩かない！　それに私はツンデレじゃない！」

『『またまた』』

「アリサちゃん、ウソはよくないよ？」

「ｂｅ　ｑｕｉｅｔーっ！！！」

Ｓｉｄｅ　三人称

海上。ガジェット?型が破壊されていく様を観察している人影が二つ。

ナンバーズ4、クアットロとルーテシアである。

「あ～らら～。やっぱりあのくらいだと瞬殺ですか」

クアットロが、その余裕綽綽とした表情を変えずに言う。言い方からして、全滅は元々予想していた事態だったようだ。

「……クアットロが見せたかったのって、ガジェットが壊れていく、あの風景なの?」

ルーテシアが少し不機嫌そうに言う。眠いところを起こされて連れて来られたのだろうか、その目は少し腫れぼったい。

「いえいえ～。私が見せたかったのはあの召喚師と少年の方です」

クアットロがキャロとエリオを指しながら言う。

「……」

「だぁって、イイと思いませんかぁ～? 召喚師はロリロリなかわいらしい服装が似合いそうだし、男の子も素材としては非常に優秀。どんな服装も似合いそうなんですもの～♪」

クアットロが身体をくねくねと動かしながら言う。スカリエッティの変態の因子は、クアットロにも色濃く受け継がれているようだ。

「隊長の二人はナイスバディ。まさに完璧な布陣。願わくばイケメ

ンも一人欲しいとこですけど～」

「……帰る」

ルーテシアが魔法陣を出そうとする。よほど帰りたいらしい。

「あぁん、待ってくださいルーお嬢さまぁ。一応ルーお嬢さまが興味ありそうな情報もあるんですよ～。あの召喚師……」

クアットロがキャロを指し、話を続ける。

「あの召喚師はお嬢さまの白天王と同クラスの龍……真龍クラスを持っているらしいです。あっちの少年は少年で、ガリューとなかなかいい勝負が出来そうなぐらいに育っているらしいですし、お嬢さまの耳に入れておいたほうがよいと思いまして～」

「……そう」

あまり興味なさげなルーテシア。

「興味ないんですかぁ？」

「……召喚師を見れば、召喚獣のレベルはわかる。あの娘の召喚獣は、白天王には勝てない。絶対に」

「自信満々ですねぇ～」

「……召喚師が、召喚獣をダメにしてるのもある。それに、あの槍騎士はきっと召喚師を守るために動く。注意が散漫してる相手に、ガリューは負けないもの」

「さすがルーお嬢さま～。召喚師としての格が違うって感じですね～」

そこまで話した時、不意に通信が入る。

『クア姉？　こちらセイン。こっちはこれから帰るよ～』

「あらそう。ウェンディはどうだった？」

『楽しかったっすよ～！　アイツらなかなかすごかったっすよ。？型を利用した徹甲爆撃、アレガンナー二人とタイプ・ゼロ・セカンド一人で防がれちゃったんすよ～。しかもカウンター気味にタイプ・ゼロ・ファーストがガンナーの魔力弾引き連れてこっちに迫ってきたんすよ。セイン姉に言われなきゃ気づかなかったっす』

「あらぁ～ご機嫌ねぇ」

『ぬっふっふ～。今度また仕掛けるんすよね？　これから楽しみっす～♪』

音声のみの通信であるためウェンディの表情はクアットロには見れなかったが、笑顔であることは容易に考えついた。

「……もう、終わりでいいよね。じゃ、ごきげんよう」

そう言い、転移のための魔法陣を展開するルーテシア。

既に六課の部隊も帰ってしまっていた。ここに長居する理由は無い。

「あぁ、ルーお嬢さま。最後に一つ」

ふと、クアットロがルーテシアを引き止める。

「何？」

ルーテシアがクアットロの方を向く。

珍しく、クアットロは真面目な表情をしている。これから何を話すのか……ルーテシアには、全く想像もつかなかった。

そして、クアットロが口を開いた。

「……着衣Hって、いいですよね……！？」

「……この、メガネビッチ」

そう言い捨て、ルーテシアは転移する。クアットロはと言うと……

「あぁん、言葉責めも……イイ！」

くねくねと悶えていた。

後日、機動六課。

「さて……みんな、宿題わかった？」

なのはがフォワード６人に聞く。

６人は、しっかりと頷いて返す。

「正しいかは分かりませんし、答えとして適切なのかも自信無いですけど……」

「しっかり自分で考えて、答えを出してきました」

ティアナとスバルが代表して言う。

「じゃあ、聞かせてもらおうかな」

なのはが言うと、フォワードの６人は一度互いを見合って、目で合図を交わす。

そして、スバルが一歩前に出る。どうやら、スバルが代表して答える、ということらしい。

「みんな同じような意見だったんで、私が代表して答えます。……自分より”総合力で”強い相手に勝つためには、自分が持っている相手より強い部分で戦う。そのために自分の1番強い部分を磨きあげて、『これなら誰にも負けない！』って自信と気概を持って戦いに当たる！　そういう人たちがチームを組めば、より万全な部隊が出来る。だから、問題の言葉は正しくもあり、間違ってもいる……と。そんな感じなんですが……」

緊張が途中で解けたのか、尻すぼみになりながらも話し終えるスバル。だが、その表情はどこか誇らしげだ。

「……じゃあ、それが正解かどうか、これから実地で確かめていかなきゃね♪」

「「「……えぇっ！？」」」

思わず声を出してしまうフォワード6人。まさか答えを教えてくれないとは思わなかったのだろう。

「さあ、朝練始めるよー」

パンパンと手を叩きながらフォワードたちの気を引き締めさせるなのは。

その表情は、心なしか嬉しそうなものだったという。

## 第百三十七話　得た、答え（後書き）

はい。ということでした。

ちなみに地下道にはスバル、ティアナ、ギンガ、ティーダの四人が向かっています。

他は別に漫画版と変わりません。特記すべきことはウェンディに言ってもらいましたし。

……さて、そろそろ事態が急展開を迎えますね。私が1番楽しみです。

とりあえず言えることは、皆さんの予想を裏切る可能性が高い、ということです。いろんな意味で。

# 第百三十八話　宴の始まり（前書き）

お待たせしました。今回は伏線とか伏線とか伏線とかの話です。

さぁ、ここから結末を予想出来た方。貴方はきっと天才か、私と同じ変態だと思います。

# 第百三十八話　宴の始まり

Ｓｉｄｅ　吼太

「パパおはよー♪」

「おう、おはよう。よく眠れたか？」

「うん♪」

ヴィヴィオが笑顔で答える。こういった何気ない会話も楽しい時期なんだろう。眩しい笑顔に癒されるな。

「じゃあ、今日も一日お仕事頑張りますか！」

「がんばってね～♪」

ヴィヴィオの声援を受けながら、今日も仕事に出掛ける。

……

そして、あっという間にお昼休み。

「あ、コータ君！」

食堂に向かってる道の途中、なのはがこちらに気づいて駆け寄ってくる。

「今からお昼ごはん？」

「あぁ。なのはは？」

「私もだよ」

最近は仕事も軌道に乗ってきたし、戦闘機人も目立った動きは見せていない。至って順調な毎日。

やっぱ、本格的な活動を始めるのは公開意見陳述会か……。

「公開意見陳述会まで、あと七日」

「何かが起きるとしたら、やっぱりそこかな？」

「あぁ。あそこには地上のトップであるレジアス中将に加え、かの三提督までいらっしゃる。警備はかなりのものになるだろうが、それを突破出来ることを証明出来ればかなりのアピールになるはずだ。……武器商人や犯罪組織にとってな」

スカリエッティが来るならやっぱりあのタイミングだ。なのはを始めとする旧知のメンバーには、もしかしたらオレが個人で単独行動に出るかもしれないことを伝えている。

「何も起きなきゃ、それが1番なんだけどな」

「そうだね……」

それからは他愛ない雑談をしながら歩いていた。やがて、何やら騒がしい声が遠くから聞こえて来た。場所は……給湯室辺りか？

「なんだろうね？」

「乱闘……はいくらなんでもないだろうが……ちょっと様子見に行くか」

少し小走りで騒いでる場所に行く。近づくにつれ、その声は悲鳴だと分かり、やがて声の主がアルトであることがわかった。

「なんだなんだ？」

「あ、コータさん。なのはさん」

近くにいたスバルに話し掛けられる。見れば、隣にはティアナもいた。今から食事にでも行こうとしてたんだろうか。

「スバル。これは一体何の騒ぎだ？」

「あぁ、これは多分アルトの子供時代の恥ずかしい話ネタ関連の騒ぎですね」

「ヴァイス陸曹を中心に広まってる噂なんですけど、今や六課の若手の間に知らぬ者はいないほどの話ですね」

「えぇーっ！？　そこまで広まっているんですかぁ！？」

アルトが食いつくようにこちらを見る。

が、オレとなのはは全く別の部分に気を取られていた。

「六課の若手の間に……」

「知らぬ者はいない……」

そっか……そういや、ここじゃ年齢高めなんだよなぁ……オレ……。

局じゃ若い若いって言われてたから気づかなかったけど……アハハハハ……。

「……あっ、違いますよ!?　コータさんもなのはさんもまだまだ若いですよ!?」

「慰めないでティアナ！　こういうのは慰められたほうがむしろ辛いの！」

なのはが悲痛の叫びをあげる。

ちなみに後々聞いた話によると、アルトの子供時代にやらかした話と言うのは男子トイレで「言わないでくださいよぉー!?」

Ｓｉｄｅ　リーム

「これで良しっと」

吼太や僕、フラウリーナ三姉妹にアリス、トゥードのリミッター完全解放の希望書を纏める。

もちろん一時的なものではあるけど、吼太の話では「近々、必ず必要になる」とのことだから、僕が独断で希望書を作っておいた。

とはいえ、今送っても意味が無いから、資料は僕の格納領域の中に入れておこう。

「にしても、平和だなぁ……」

ガジェットは致死性０。戦闘機人はさすがに戦闘能力が強いけど、好き好んで殺戮を行うような人達じゃないみたいから、今まで殺された人はほとんどいない。

……間接的なものを含めると、人数は跳ね上がるけど。

とある基地の調査に向かった部隊が運悪く爆発に巻き込まれて全滅した事件……。もう、何年も前の話だ。スバルとギンガの母親はその部隊の隊員だったらしい。

……死体の欠片すら残らないような、凄まじい爆発だったみたい。

噂では、あの基地の爆発に戦闘機人が関わっているらしい。

「……あの時はまだ、僕たちは自由に動けなかった。だから、助けられない命もあった」

でも今は違う。力も強くなった。地位もそれなりになった。思いは……1番強くなった。

「僕はリーム……希望を……夢を与える者」

僕は助けたい。記憶の無い僕を受け入れてくれたこの世界を。

だから、僕は戦うんだ。

「……あのー……」

「……ふぇっ!?」

突然話し掛けられて、思わず大声をあげてしまう。

軽く咳ばらいをして、声のしたほうを振り向く。

「……ヴィヴィオ?」

「うん、ヴィヴィオだよー♪」

笑顔のヴィヴィオがそこにいた。今の時間はアイナさんが見ているはずだけど……。

「ねぇリームさん。リームさんはこおりのまほうがとくいなんだよね」

「えっ？　……あー、うん。まぁね」

僕がそう答えると、何故かヴィヴィオの表情が険しそうになる。

「ヴィヴィオ？」

「なんだかねー。ヴィヴィオ、リームさんのまほうがへんにかんじるの」

……変？　僕の魔法が？

「変って……どんな感じに？」

「リインさんのこおりとリームさんのこおり、なんだかちがう？」

上手く説明出来ないのか、分かりづらい言い方で変さを伝えてくるヴィヴィオ。

試しに氷を出してみる。

どこまでも透き通るような透明な氷。それが結晶として現れる。異常は無い。

「変かな～？　よく分からないなぁ」

硬いし、冷たいし、綺麗だし。普通の氷だと思うけど。

「ヴィヴィオはいつ、僕の氷が変だと思ったの？」

「シグナムさんとたたかってたとき！」

「うぐっ！？」

「……リームさん？」

「な、なんでもない……」

嫌な記憶を思い出してしまった……。

この前の模擬戦。僕とアリサちゃんＶＳシグナムとリインでの組み合わせで戦ったときの話だ。

僕とアリサちゃんは相性が悪かったからユニゾン出来なくて、個別に戦っていたんだけど、いやはや……。

シグナムの攻撃も弾かれたアリサの攻撃も熱いのなんの。危うく火傷するとこだった……。炎は嫌いなんだよな～。直接浴びるなんて論外。

「えっとね。そのときヴィヴィオもなのはママといっしょにみてたんだけどね、なんかおかしかったの！」

「……んー……」

結果的に僕が脚引っ張っちゃって、ワンサイドゲームにはなってたけど、何かおかしいとこあったかなぁ？

「……わかった。後で僕も調べてみるよ」

「とと、わすれるとこでした！　リームさん！」

「今度は何？」

僕が聞くとヴィヴィオはたちまち笑顔になり、さっきから右手に持っていたものを僕に突き出してくる。

「おひるごはん、いっしょにたべよー♪」

「あ……うん。いいよ」

なんだか新鮮だな。いつもはなのはママーフェイトママーコータパパーって言ってるから。

「でも、なんで僕と？」

「リームさんといっしょにいるとおちつくからだよ～」

……僕、癒し系キャラ扱い？　ま、いっか。

Ｓｉｄｅ　三人称

そして、公開意見陳述会の前日。

現場にはなのはとなずな、それにヴィータとリインフォース？、フォワード６人が先に行くことになっていた。

はやてや吼太、フェイトを始めとする他の隊長らは当日の早朝に会場入りすることになる。理由は単純、仕事が終わらなかったからだ。

そして、送迎バス代わりのヘリになのはが乗ろうとして、ふと後ろを振り向く。そこには、なのはや吼太が仕事をしている間、面倒を見てくれている寮長のアイナに連れられたヴィヴィオがいた。

「あれ、ヴィヴィオ？　どうしたの？　ここは危ないよ」

なのはが上りかけてたヘリのステップから降りて、なのはに近づく。

「ごめんなさいね、なのは隊長。ヴィヴィオが、どうしてもママのお見送りするんだ、って……」

アイナが困ったような表情を浮かべながら言う。

「もう、ダメだよヴィヴィオ。アイナさんにわがまま言っちゃ」

「……ゴメンなさい」

顔を俯かせながら言うヴィヴィオ。

「なのは、夜勤でお出かけは初めてだから、不安なんだよきっと」

同じく見送りに来ていたフェイトが言う。

「あぁ、そっか……」

合点がいった表情になるなのは。狙ってそうしていたわけではないが、実際夜から六課の外に、しかも帰って来ないような事態は久しぶりだった。故に、その経験が無いヴィヴィオは思わず不安になってしまったのだろう。見れば、その目尻には涙が見えていた。

なのははしゃがみ、ヴィヴィオと目線を合わせて頬に手を添えて話しはじめる。

「なのはママ、今夜は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃあんと帰ってくるから」

「……ぜったい？」

「絶対に絶対。いい子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるから」

「……うん」

ヴィヴィオと小指を絡ませるなのは。

「ママと約束ね？」

「……うん」

ようやくヴィヴィオの不安げな表情が和らぐ。

それを見届けると、なのははすぐにヘリに乗り込む。なのはが乗り込んですぐに、ヘリは飛び立って行った。

残りのメンバーもしばらくはヘリを見送っていたが、やがてヘリの姿が見えなくなると、だんだんと隊舎へと帰っていった。

……ただ、一人を除いて。

「あとは……タイミングだけ。ドクターたちが上手くやってくれるといいけど……」

そして、公開意見陳述会当日。

本局や各世界の代表が集まって、ミッドチルダ地上管理局の運営に関する意見交換をするのが、公開意見陳述会だ。その名の通り、あらゆる人が意見陳述会の内容全て聴聞することが出来る。

だが、知っての通り管理局本局と地上本部は仲が悪いことで有名であり、その代表が集う公開意見陳述会で波乱が巻き起こることは珍しくない。

かと言って、本局が公開意見陳述会への出席を拒絶したり、あからさまに否定的な態度しか取らなければ、たちまち本局と地上本部との溝は致命的になり、管理局は空中分解。次元世界は混沌に包まれるだろう。管理局としては、そんな状況になるのを許せるはずが無い。本局が逃げることは、元から無理な相談なのだ。

それ故に、地上本部が無茶苦茶な要請を起こすことも珍しくなく、本局にとっては頭痛の種と言える。

だが、そもそも地上本部が無茶苦茶な要請を行うのは、魔法至上文化であるこの世界観において、有力な魔導師をねこそぎ取ってしまうからであり、そういった意味では原因は本局にあるとも言える。

最も、そもそも本局が優秀な魔導師を次から次へと自分のところに囲うことにも、理由はある。

本局は次元航行部隊を保有しているわけなのだが、次元世界には危険が多い。次元空間を船で移動しているだけでも、次元断層を始めとする次元災害に巻き込まれることは決して珍しいことではないし、向かった先の世界で何が起こるか等、全く予想は出来ない。
磁気嵐のせいで機械が故障した、犯罪者グループに返り討ちにあった、原住民に捕まり殺された……。そういった原因で全滅することも珍しくないのだ。対処手段はただ一つ。魔導師個人個人のレベルを上げるしかない。

だが、魔導資質はそもそも先天的な才能であり、全魔導師の内、大

多数はAランクにすらなれずに終わることが当たり前。そうなれば、元から強い魔導師や将来有望な魔導師を連れて来るほか無くなる。

どちらが悪いわけでもない。どちらの言い分にも正当性がある。だからこそ、こういった話し合いで何とかしなければならないのだ。

「……」

続々と集まってくる聴聞者を、厳しい表情で見ているレジアス。

自身が推進している、アインヘリヤルを中心とした【クラナガン武装都市化計画】。

全ての次元世界の中心と言えるミッドチルダの中心都市、クラナガンはそれだけで犯罪者やテロリストらから常に狙われている。だが、魔導師の総数は多いものとは言えない。そこで、アインヘリヤルのような魔導資質を必要としない魔導兵器や要塞をクラナガン周辺に配置。将来的には防衛用自動機械を警備に当たらせることで、例え魔導師が一人もいなくなったとしても、クラナガンを守ることが出来るという計画だ。

しかし、本局側はこれを快くは思っていない。強すぎる力、堅牢な城壁。それが乗っ取られてしまった時のことを懸念しているのだ。

今回の話し合いがどう転ぶかは、まさに「神のみぞ知る」と言えるだろう。

「……」

先程よりもさらに顔を険しくさせながら、レジアスはただ一点を見

つめていた。

「……けしからんな。全く」

「よっ、警備任務ご苦労さん」

「あ、ヴァイス陸曹」

投げ渡された缶コーヒーを掴みながら返事を返すティアナ。

「思ったより平和だな」

「嵐の前の静けさじゃないといいんですけど……」

「心配性だな、お前さんは」

ヴァイスがおどけたように言う。

「……」

ティアナは答えない。顔を俯かせたまま、行き場のない目線を缶コ

ーヒーのプルトップに向けるだけ。

「……ヴァイス陸曹、たまに私の射撃フォームの弱点とか教えてくれましたよね？」

「ん？　あぁ、まぁな」

ティアナは健康を害さない程度に自主練をしている。訓練校時代からの日課であり、スバルを始めとするフォワードメンバーと一緒にすることもあるのだが、基本的には一人でフォームの確認などをしていることが多い。

以前、ティアナは木陰から練習を眺めていたヴァイスに当時の射撃フォームの弱点や死角を指摘されたことがあった。

誰でも分かるものではない。少なくとも、一介のヘリパイロットに分かるものでは。

「私、気になって調べてみたんです。悪いとは思っていたんですが……」

ヴァイスの顔が僅かに厳しい表情になる。

「陸士部隊のエース、アウトレンジショットの天才……」

「ハッ、何がエースだよ。俺の魔力なんざ、お前の半分以下だぜ。それに、俺はアウトレンジショットが上手いってわけじゃねぇよ。ただ、他の技術よりはアウトレンジショットの方が上手かったから目に付きやすかっただけだ」

ヴァイスがつまらなそうに喋る。まるで、この話を早く終わらせた

がっているかのようだ。

「……何か、あったんですよね？　さっきだって……っ！」

「……それ以上喋るな」

突然、ヴァイスの口調が変わる。ドスの効いた声、発せられる怒気。普段のヴァイスとは、あたかも別人であるかのような気配。

「ほら、もうそろそろ警備任務に戻れ。俺も行くからよ」

「……はい……」

ヴァイスに促されるままに、自身の担当場所へと戻るティアナ。

ヴァイス自身もヘリへと戻り、コックピットのシートに座る。が、表情は晴れない。

――ねぇなんで！　なんで戻って来てくれないの！？――

――あれは事故だったんだ！　お前は悪くない！　なのにお前がそんなんじゃ――

「昔のことさ……。なぁ、ストームレイダー……？」

『そうですね』

『ドクタぁ～、準備整いましたぁ～♪』

『こっちも準備完了だドクター』

「ドクター、全員配置につきました」

「ククク……そうか。いいじゃないか……。順調だ……。問題など、何一つない」

その人物は嗤っていた。悦に歪んだその顔に、狂気を滲ませて。

それは、赤子が笑う無垢さに似ていた。

それは、愛に溺れた娼婦の美しさに似ていた。

それは、獅子が獲物を捕えようとする勇ましさに似ていた。

「さぁ！　宴を始めようじゃないか！！　これが僕らの第一歩だ！！！」

その狂気は、誰にも止められない……。

## 第百三十八話　宴の始まり（後書き）

次回更新は相変わらず未定。まぁ、なるべく早く書きます。

あと、質問があったので一応説明しておきます。

私ことなっぺは、今現在コラボに関する一切を自粛しています。
とりあえず、年を跨ぐまでは絶対にコラボ依頼を受けることはしませんし、私のキャラをコラボに出すこともしません。
年を跨いだら、状況をしっかり見極めつつ再開していけたらなぁ、と思っています。まぁ、具体的な日時は決めていませんので、1月中に再開かもしれませんし、来年の7月までかかるかもしれません。
とにかく、当分はコラボをしないという方針をとっていますので、ご了承下さい。

次回は恐らく、大☆事☆件の始まり。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百三十九話　進攻開始（前書き）

進攻開始ですね。まだまだ序盤ですが。

ぶっちゃけ、いい加減ＳｔＳを終わらせたいのでこれからはなるべくきびきびいきたいなぁ。まぁ遅いままでしょうけど。

あと、ユニーク２０万人突破してました。ありがとうございます。

# 第百三十九話　進攻開始

Ｓｉｄｅ　三人称

公開意見陳述会。

そこでは、レジアス・ゲイズ中将が熱弁を奮っていた。

「諸君、私は幼女が好きだ。
諸君、私は幼女が好きだ。
諸君、私は幼女が大好きだ。

小学生が好きだ。
幼稚園児が好きだ。
保育園児が好きだ。
幼子が好きだ。
精神的幼女が好きだ。
ロリータが好きだ。
ペドい女の子が好きだ。
ロリババァが好きだ。
のじゃロリが好きだ。

平原で、街道で、プールで、草原で、体育館で、公園で、海岸で、
駅で、お祭りで、運動場で。

この地上に存在する、ありとあらゆるロリ幼女が大好きだ。

幼女の遊んでいる様が好きだ。
何の不安げなことなど無く、無邪気に遊んでいる様など心が躍る。

幼女が懸命にお絵描きしているのが好きだ。
一所懸命がんばって完成した絵を自慢げに見せてきた時など胸がすくような気持ちだった。

幼女が必死に自分の苦手なことを克服しようとしているのが好きだ。
たまに泣きべそかきながらも決してくじけず、ようやく苦手を克服したときなど感動すら覚える。

幼女が一等賞をとったときなどはもう堪らない。
複数人の幼女が力を合わせ、優勝へと向かっていくのも最高だ。

幼女が感極まって泣きだしつつも、嬉しそうに抱き着いてきた時など絶頂すら覚える。

汚れない幼女が好きだ。
幼女が無理矢理犯され壊されていく様は、とてもとても悲しいものだ。

二次元の幼女が好きだ。
幼女が腐れた政治家の道具に使われるのは屈辱の極みだ。

諸君、私は幼女を、天使のような幼女を望んでいる。
諸君、私に付き従う時空管理局地上本部付局員諸君。

君達は一体、何を望んでいる？
更なる幼女を望むか？
とても可愛らしい幼女を望むか？
全ての人類を紳士へと変え、幼女を崇拝するような世界を望むか？」

「「「幼女（ロリータ）！　幼女（ロリータ）！　幼女（ロリータ）！」」」

「成る程。諸君らの気持ちはよくわかった。
ならば最高の幼女で、世界を萌やし尽くしてやろうではないか！

しかし、だがしかしだ。人は平等ではない。生まれつき頭のよい者、魔力の強い者、部下に恵まれる者。生まれも育ちも才能も、人間は皆違っておるのだ。

そう、つまり幼女もまた差別される対象となる。

だが、だからこそ人は争い、競いあい、そこに進歩が生まれる。不平等は悪ではない、平等こそが悪なのだ。

我ら地上本部はそうではない。争い、競いあい、常に幼女のための進化を続けておる。地上本部だけが前へ！　未来へと進んでいるのだ。

我らが進歩の証である幼女を崇拝し、信仰しているのも、地上本部が進化を続けているという証。戦うのだ。競い、争い、獲得し、愛せよ。その果てに、未来がある！

オール・ハイル・ロリータァァーーーーーッッッ！！！」

「「「オール・ハイル・ロリータ！！！　オール・ハイル・ロリータ！！！　オール・ハイル・ロリータ！！！」」」

「……は？」

思わず漏れ出た声。機動六課のメンバーが座っている辺りから聞こえたので、その誰かが発したのであろう。

だが、それも仕方ないと言える。

「時空管理局地上本部のトップがとんでもないロリコンだった」などと、誰が予想出来たであろうか。

地上本部から忌み嫌われていた機動六課に、レジアスの個人情報が、ましてや性癖が伝わるわけがないのだ。

とはいえ、同じく地上本部に嫌われている立場にあるカリムやシャッハは苦笑いで済ましている辺り、ただ単に偶然伝わらなかっただけなのかもしれない。

「……なぁはやて」

「……何？　コータ君」

「……オレ達はいつ、ロリコン犇めく集会に入ってきたんだっけ？」

「……私に質問せんといて」

明らかに変な熱気に包まれている公開意見陳述会。……いや、この場合はロリコン集会のほうが正しいのだろうか。

そこに、一石を投じる存在がいた。

「待ちたまえレジアス中将！」

同じくこの公開意見陳述会に参加していた、通称【伝説の三提督】の一人であるラルゴ・キールである。

その厳しくも優しい物腰からか、今でも彼を慕う者は多く、武装隊に所属していたことから魔導戦技にも優れる。今では武装隊栄誉元帥という専用の役職を得ていることからも、それが伺える。

機動六課メンバーも、「あぁ、ようやくマトモな話になりそうだ」と胸を撫で下ろす。

ラルゴならばなんとかしてくれる。ラルゴなら正しい陳述会にしてくれる。そういった視線がラルゴに注がれる。

そして、ラルゴが自分の意見を声高々と主張した。

「幼女などという女性的に成長していない女性を崇めるなど言語道断！　真に愛するべきは３０歳以上のボインちゃんだ！」

まさに台なしである。

「なんだと！？　貴様、幼女に向かってなんて口を！　無駄に歳くったただのババァなどに萌えられるか！　取り消さんか！」

「取り消すのそっちのほうだバカタレが！　若造にとやかく言われる筋合いなどないわ！！！」

もはやただの口喧嘩でしかないそれに煽られたのか、傍聴席でも言い争いが始まってしまう。

「まぁまぁ二人とも。ここは男の娘で一つ手を打つのは……」

「「黙れド変態がっ！！！」」

「なんじゃと！？」

宥めに入ったレオーネも、たちまち口喧嘩の渦中に入ってしまう。

機動六課メンバーもさすがに呆れ果ててしまったのか、ただ頭を抱えるばかりである。

だが、そんなカオスな騒ぎにも終わりが訪れる。

『本部に通達！　現在、地上本部はガジェット・ドローンから攻撃を受けています！　指示を！』

「何やてっ！？」

はやてが立ち上がる。が、次の瞬間、陳述会の会場の扉全てにシャッターが下りる。

「くっ……やられた……！」

はやてが苦虫を噛み潰したような表情をしながら、搾り出すように言う。

気づいたのが遅かったのだ。既に地上本部の防衛機能は停止し、緊急時に降りてくるシャッターは要人たちを捕らえる檻となった。

さらにガジェットが周囲に大量に展開しているらしく、内部のＡＭＦ濃度もかなり高い。魔法の発動は非常に困難だろう。

だが、手が無いわけではない。魔力とは全く違う力を使える吼太のリミッターが解除されれば、シャッターを破壊して外に出ることが可能になる。

「幼女こそが至高の存在なのだ！　何故それを認めぬ！！」

「黙れロリコン！　熟女嘗めるなよ！？」

「男の娘が最強に決まっとるだろうが！」

今だに争いを止めない三人の男が正気に戻れば、の話だが。

所変わって、フォワード達と外周警備に当たっていたヴィータ、リインフォース?がガジェットの迎撃に当たっていた。

「ガトリングボア！」

「ドラゴンフレア！」

「「ファイナルアタック！！！」」

スバルの胸部に装備された、緑色で猪を模したガトリング砲から大量の魔力弾が発射され、ガジェットを破壊していく。

同時にギンガの左足に装備された、赤色で西洋竜を模したジェネレーターから破壊光線が発射され、ガジェットを纏めて粉砕する。

「スバル、ギンガさん！　ファイナルアタックはカートリッジと体力を大量に消費するからあまり使っちゃダメよ！」

「それは分かってるんだけど……！」

ティアナから飛んできた注意に、ガジェットを破壊しながら答えるスバル。

「数が多すぎる……！　明らかにこっちが劣勢ですよ！」

「言われなくてもわかってる！」

ストラーダとサソードヤイバーの二刀流でガジェットを破壊していくエリオの言葉に、クロスファントムを速射しつつティーダが答える。

既に3ケタを超えるガジェットがただのスクラップへと変わり果てているにも関わらず、ガジェットの進行は止まることを知らない。

対し、魔導師の数はあまりに少なかった。当初警備に当たっていた人数の半分以下しか、現在の戦闘に参加していないのである。

原因はガジェットの襲来の数分前に撃ち込まれた、麻痺毒を含んだ煙幕弾である。警備シフトから外れて待機していた魔導師たちの元に撃ち込まれたそれは、多くの魔導師たちを戦わずして戦闘不能に追い込んだ。

加えて、今回襲来したガジェットが使うローションにも同様の毒が仕込んであるらしく、力尽きた魔導師たちもまた戦闘不能へと追い込まれていた。

「本部と連絡はつかないの！？」

「ダメです！　応答ありません！」

ドラゴンフレアを解除し、代わりにユニコーンドリルを装備したギンガがキャロに聞くが、返ってきた答えは芳しくなかった。

仲間はほとんどいなくなり、バックアップも無し。バリア発生装置に異常が出たのか、鉄壁を誇る地上本部のバリアも出力がガクンと下がってしまっていた。孤立無縁、という言葉がこれほど似合う状況もなかなか無いだろう。

『こちらロングアーチ！　未確認の魔導師がそちらに向かっています！　ランク推定……オーバーS！』

六課のロングアーチより通信が入る。

「チィッ……リイン！　ユニゾンして未確認の確認に行くぞ！　場合によっちゃ撃墜しなきゃなんねぇから気合入れろ！　地上本部は任せていいな！？」

「「「はいっ！」」」

ヴィータの言葉にフォワード６人が答える。

「ヴィータちゃん！」

「応！」

「「ユニゾン・イン！」」

リインフォース？がヴィータとユニゾンする。ユニゾンによりヴィータはより戦闘関連にマルチタスクを裂けるようになり、さらにリインフォース？の魔力も上乗せされるため、出力も上昇する。元々Ｓランク並の実力を持っているヴィータだが、リインフォース？とのユニゾンした今のヴィータの実力はオーバーＳクラスにも決して劣らないだろう。

「ティアナさん！　地下の最終防衛ラインが突破されそうだから、私行ってくるわね！」

そう言うと、ギンガは地下へと向かう。

「チッ……独断専行は危険だってのに……！　俺も行く！」

「お願い兄さん！」

ティアナの返事を待つこともなく、ティーダもギンガを追って走り出す。

「スバル、残りのカートリッジは！？」

「ファイナルアタック二回分！」

決して多いとは言えない。

ガトリングボアによるファイナルアタックは大量の弾丸をばらまくものであるため、使い方次第では広範囲を一気に攻撃出来る。二回も放てば、この場にいるガジェット全てを簡単に殲滅出来るだろう。

だが、二回も放てばスバルは確実に戦闘不能になる。まだまだガジェットが残っているこの状況下で離脱者が出ることはなるべく避けたい。

「ファイナルアタックは温存！　個別撃破でなんとかするわよ！」

「「「了解」」」

最善の手とは言えないかもしれない。が、手段が限られている現状をなんとかするには、多少無理してでも切り抜けるしかなかったのだ。

一方、機動六課にもまた、ガジェットの軍勢が進攻してきていた。

残存しているメンバー全員が出動し、迎撃に当たっているが、やはり状況は厳しい。

フラウリーナ三姉妹は吼太の認証無しでは力の殆どが制限されており、アリスとアリシア、シャマルの三人はバックスタイプであるため前線での戦闘は出来ない。

必然的にザフィーラのワントップによるフォーメーションが組まれているのだが、ザフィーラ一人に任せるにはあまりにガジェットの数は多すぎた。

「?型まで来たか……。避難の終えた区画は廃棄していい！　避難ルートの安全確保を最優先に！」

「「「了解！」」」

臨時の指揮はグリフィスがとっている。各員健闘しているのだが、やはり人員の少なさが致命的であった。

「陳述会の防衛に8割も戦力を持って行かれてなかったらこの程度……！　これで戦闘機人でも来てみろ……機動六課は……お終いだ……！」

歯を食いしばるグリフィス。自身に魔導資質が無いことをこれほど悔やんだことはない、と言うかのように。

Ｓｉｄｅ　吼太

「幼女！」

「熟女！」

「男の娘！」

相変わらずバカみたいな言い争いを続けている三人。熱中しすぎだろう……。

「なずな、シャッターはやっぱ開かないか？」

「はい。この場にいる人間の大半が非力ということもありますが、やはりシャッターの性能が凄まじいのが１番の理由です」

「やっぱか……」

せめてトゥードがいりゃあ、自力でリミッター外してシャッターを破壊出来るんだけどな……。安全確保のためとはいえ、デバイスを持ち込めないのはやっぱ痛かったな……。

「早く出られへんと話にならへんな……。ここには次元世界の重要

人物がわんさかおる。人質よろしく他の世界に脅迫をするかもしれへん」

「それならまだいいけどな……」

「……コータ君」

なのはが不思議そうに聞いてくる。

「ジェイル・スカリエッティは人造魔導師計画の生みの親だ。さらに、戦闘機人を完成させてることも考慮に入れると、プレシアさんとは別に、自身のみで技術を完成、発展させたって推測が成り立つ」

オレの予想を、固唾を飲んで聞くみんな。

「もし、もしだ。精神はともかく”肉体的に全く同じ人間を造れたら”、どうなると思う？」

頭の回転の早いはやて辺りがハッとした表情になる。

「……ここには次元世界の重要人が集まってる……まさか！」

「そう。偽物を造り出して、すり替えることが可能になる、ってことだ。戦闘機人じゃねぇから特別な調整も必要なけりゃ、傀儡にするから精神的な教育も殆ど必要無い。肉体のコピー作るだけだし、陳述会の騒動を利用すりゃ、時間もそれなりにとれる」

あのバカに限ってそんなことをするとは思えねぇが、いざというときがある。んな事態だけは避けなきゃなんねぇ。

「黙らんか貴様ら！」

「貴様がだタコが！」

「愚か者共がぁっ！」

……だってのにコイツらは……。

「いい加減シメるか、あの三人」

「良い案だな、将」

あまりにバカバカしいからか、シグナムとリインフォースがキレかけてるな。

「止めなさいシグナム、リインフォース。一発で抑えときなさい」

「一発でもダメだよアリサちゃん……」

アリサの言葉を窘めるすずか。とはいえ、全員ストレスが限界に来ているみたいだ。

ただでさえ閉所に閉じ込められていることに加え、ＡＭＦによる圧迫感、そして何よりバカみたいな言い争いを未だに続けている上官に嫌気がさしているのだ。

だが、ついにその言い争いにもとうとう終わりが訪れる。

「こんの……アホアホ親父ー　Ｓがぁぁーーーーッッッ！！

！！！」

スパパパーンと景気のいい音をたて、頭をハリセンで殴打される変態中年３人。

叩いたのは、レオーネ、ラルゴと同じ【伝説の三提督】の一人であり、三提督唯一の女性であるミゼット・クローベルである。

「いい加減にしないかアンタ達！　アンタ達がそんなんだから魔導師は地上本部に来ない、上を敬う局員は減って、揚句の果てにこんな事態になっても上手く対処出来ないんだよ！　わかってるのかい！？」

「「「……すみません」」」

「分かったらさっさと行動だよ！　レジー坊やは指揮をとりな！　レオーネとラルゴはシャッター開けるの手伝ってきな！　吉谷のリミッター解除も忘れんじゃないよ！」

凄まじい剣幕で指示を出すミゼットさん。後ろに修羅が見えた気がするけど、気のせい……だよな？

「し、しかしですがミゼット本局統幕議長……吉谷のリミッター解除には最高評議会からの承認が無いと……」

何故か敬語口調になっているレジアスさんが、ミゼットさんに怖ず怖ずと言う。

「だったら早くコンタクトをとりな！　そんなことも言わないと分からないのかい！？」

「はひぃっ！」

ミゼットさんが机を壊しそうな勢いで叩きながら言う。レジアスさん完全にビビってるなぁ……。

「なぁコータ君。私な、なんで管理局には女性局員が多くて、しかも重要職の6割を女性が占めてるのか今までよくわからなかったんよ」

突然はやてが悟ったように喋り始めた。

「でも今回でわかった。……あんな人がわんさかいたとしたら、そら女性権威にもなるって」

「あぁ……うん。だな……」

見れば、他のみんなも似たような表情をしている。直感的に悟ったんだろう。「昔のミッド怖っ」と。

「っと……？」

不意に身体に力が漲り始める。どうやらリミッターの一部が解除されたらしい。

「吉谷一佐、お願いね」

先程の人と同一人物とは思えないほど穏やかな口調でお願いしてくるミゼットさん。

「ぜ、全力を尽くします！」

逆らえないなぁ……この人にゃ……。

「さて……まずはシャッターをぶち壊す！」

ディメンションＡＲＭ、ジッパーの中からケンダマ型ＡＲＭバッボを取り出す。ＡＭＦが濃いが、ＡＲＭならＡＭＦの影響は受けにくい。これならまだ使える。

「バッボ、Ｓｙｓｔｅｍカイ、ｖｅｒ１！」

オレが魔力を流し込むとバッボが光り輝き、次の瞬間、光の中から銀色の甲冑を纏ったケンタウルスが飛び出してくる。

バッボの意識、カルデアの長老の息子であるカイ。そのカイが手に入れた最初の力、その名を……

「貫け！　ニードル・ワーク！！！」

ニードル・ワークは右手に持った槍を構えて突進する。槍はシャッターに吸い込まれるように刺さり、そのまま突き破る。

「危ない！」

誰かが叫ぶ。ニードル・ワークが飛び出した先で、ガジェット？型が待ち伏せしていたからだ。嫌が応でもここに閉じ込めておきたいらしいな。

だが、んな程度で阻止出来ると思ってんのが誤算だったな。

?型から巨大なレーザーが放たれる。

それはたちまちニードル・ワークを包み込んでしまう。それを見て諦めたのか、後ろから少し落胆の声があがる。

……が、途中で落胆の声が消える。

確かにニードル・ワークは消えていた。だがそれはレーザーによって消し飛んだからじゃない。姿形を変えただけだからだ。

「絶対防御、ノールドトルテュ！　コイツの防御は並大抵の攻撃じゃ貫けねぇぜ！」

亀のような形へと変貌したバッボがレーザーを防いだ。砲身の冷却のためか、レーザーは連続して撃てないらしい。

「なら今のうちに一気に破壊してやる！　Ｓｙｓｔｅｍギンタ、ｖｅｒ６！」

亀のような姿から、今度は猫の獣人へと変わるバッボ。【長靴をはいた猫】。それが今のバッボの名前だ。

「ぶっ壊すニャアァァーーー！！！」

猫が威勢のいい叫び声と共に、右手に握った鰹型の武器”ハツガツオ”でガジェット?型を破壊する。

「ッッ……これは……麻痺ガスか！？」

安全を確認し、出てきたリインフォースが言う。このままでは全員が麻痺しちまうか……。

「ならこれだ！　Ｓｙｓｔｅｍカイ、ｖｅｒ５、ベヘモス！」

長靴をはいた猫が、今度はファンシーチックなカバへと変わる。

次の瞬間、ベヘモスはその口にガスを吸い込み始める。

事態を聞き付けたのかガジェットもやってくるが、ベヘモスはそれすら吸い込んでいく。あらゆるものを吸い込み破壊する。それがベヘモスだ。

「次はこれだ！　バッボ　Ｓｙｓｔｅｍギンタ、ｖｅｒ４、アリス！」

ベヘモスが今度はゴスロリチックなセクシー美女へと変わる。

「……コータ、そういうのが好みなのか？」

「……早く言って欲しかったなぁ……小学生の頃なら似合ったのに……」

「羽旺！　これはオレの趣味じゃねぇ！　あとフェイト！　お前ならきっと似合うから大丈夫！」

「えっ……その……あぅ……」

……さっさといかないと終わらねぇな。

アリスの力は【治癒】。その力で、周辺の怪我人や麻痺した人を癒す。

「これで一先ずは安心か」

バッボをジッパーに戻す。

「ロングアーチからガスの対処データが来た！　急いでフォワードと合流してデバイスを受け取るで！　そんで、その後は各自の判断で行動！　えぇな！？」

はやてがオレたちに指示を出す。要はテキトーにやれってこったな。……上等！

「こちらは私たちが守ります。皆さん、よろしくお願いします」

シスターシャッハが言う。要人の護衛に当たっていた人達だ。実力は折り紙付きだろう。

「じゃあ行くで……機動六課隊長陣、出動！」

「「「了解！」」」

さぁ、行くぜ！

## 第百三十九話　進攻開始（後書き）

はい、レジアスさんと三提督の内二人が変態と判明しました。こりゃミゼットさんが実は変態でも違和感ないね。

つーか人間が変態じゃなかったらファンストじゃない！　真面目もやれるけど基本変態！　それがファンストだね！（マテ

と、まぁ大☆事☆件が発生。ローションに加えて麻痺毒とか、ジェイルはどれだけの変態なんだろうか。……師匠と呼ばせてください！↑

次回辺りには戦闘機人出したいなぁ。んで、その次までに一区切りしたい。

……ティーダどうしよ↑

……スバルのスピード狂設定どうしよ↑

……ガリューはもう喋んないだろうからいいけど↑

とりあえず次回は戦闘機人戦が主体だと思われます。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百四十話　地下通路、１０分間の攻防（前書き）

最近、一話辺りの文字数がガシガシ増えてきてます。

連載当初…１０００文字いけばいいほう

無印～Ａ'ｓ…３０００～５０００文字

ＳｔＳ初期…５０００文字以上

最近…７０００文字以上

……連載終わるときには２００００文字になってたりして……。

# 第百四十話　地下通路、１０分間の攻防

Ｓｉｄｅ　三人称

『こちら管理局。貴方の飛行許可と個人識別票が確認出来ません！　ただちに停止してください！　それ以上進めば、迎撃に入ります！』

「どうする？　旦那……ってうぉぁっ！？」

男に付き添って飛んでいたアギトが、声をあげながら魔力弾を避ける。

紅い魔力弾は誘導性らしく、避けたアギトらをもう一度狙い、折り返し飛んでいく。

「にゃろう……ブレネン・クリューガー！」

対するアギトも紫色の魔力弾を、紅い魔力弾と同数放ち、相殺する。

が、そこでアギトが意図していなかった事態が起こった。魔力弾同士がぶつかり合い、起こった煙幕を突き抜けて、銀色の弾丸が飛び出してきたのだ。

瞬間的にアギトは悟る。先程の魔力弾がただの魔力弾ではなく、実体弾を中に仕込んだ多重魔力弾だと言うことに。相殺したのはその外側の魔力弾だけだと言うことに。

それも、ただ仕掛けを施しただけではない。仕掛けを施した魔力弾

はその総数に比べて、ほんの僅か。その他のの魔力弾はただの魔力弾である。
木を隠すなら森の中と言わんばかりに、多重魔力弾を大量の魔力弾の群れに隠していたのだ。故に、アギトも気づくことが出来なかったのだ。

もはやアギトに成す術は無い。一度振り切った拳がすぐにはまた全力で殴れないように、一度魔法を発動すれば間髪入れずに同じ威力の魔法を放つことは出来ないからだ。

だがしかし、アギトに魔力弾が当たることは無かった。

アギトの前に展開されている、明るい橙色の魔法陣。ベルカ式のパンツァーシルトが銀色の魔力弾を防いだのだ。

パンツァーシルトを展開した男の後ろから、白い騎士甲冑を身につけた騎士――ヴィータ――が飛び掛かる。

狙いは男。シールド展開の隙を狙っていたため、既に攻撃は避けられない。

「ギガントハンマーーーっ!!!」

辺りの雲を吹き飛ばす大爆発。だが……。

『外したです！　相殺と防御で防がれました！』

ヴィータにユニゾンしているリインフォース?が分析結果をヴィータに伝える。

「だけど手応えはあった。このまま行くぞ！」
ヴィータが意気込む。騎士としての誇りを感じさせるその言葉に、僅かながらの安心感を得るリインフォース？。

先程の魔力爆発により起こった煙が晴れる。

そこには、槍を持った男だけがいた。

では、アギトはどこへ行ったのか？　今の一撃で消し飛んだのか、転移して逃げたのか。

否、そのいずれでもない。

烈火の剣精　アギト。古代ベルカ純正の融合騎。そして、男から感じる気配は”二つ”。

そう、アギトはユニゾンをしたのだ。壮年の槍騎士と。

それを表すかのように、男の髪は黒から黄色へと変わっていた。

「……」

男が目を開く。その視線が射抜いたのは、ヴィータとリインフォース？。則ち、男の敵。

『投降は……してくれそうにないですね』

リインフォース？が男の闘気に震える大気を感じながら言う。

「……管理局　機動六課　ヴォルケンリッター、ヴィータだ！」

「……ゼスト」

互いに名乗り合う。相手に名前を与え、相手の名を魂に刻み、己の誇りを胸に戦う。それがベルカの騎士の礼儀。

今、決闘が始まった。

一方、フォワード４人のほうはガジェットの侵攻も一段落つき、地下通路を通ってギンガとティーダの援護に向かっていた。

多少の時間を喰ってしまってはいたが、それでも一般的な魔導師と比べれば段違いに強いフォワードたちにとって、ガジェットは何ら障害にならない。そんなフォワード４人の活躍で地上のガジェットはほぼ殲滅されたため、こうしてスバルたちは地下通路のほうに回ることが出来たのだ。

「……っ！　マッハキャリバー！」

『プロテクション』

他の三人より先行して走っていたスバルが、咄嗟にプロテクション

を展開する。

突如として飛来したエネルギー弾はプロテクションに阻まれ、防がれる。だが、突然の出来事に、フォワード４人の足が止まってしまう。

「であぁぁぁアァッ！！！」

足を止めたスバルを、強力な蹴りが狙う。

成す術なく吹き飛ばされ、コンクリートの壁にたたき付けられるスバル。壁が凹む程の威力の蹴りは、それだけでスバルの肺を圧迫し、意識を飛ばしかける。

だが、スバルは持ち前の頑丈さと気力で、薄くなった意識をなんとか持ち直した。日頃の訓練のせいかもあるだろう。すぐに戦える状態に、身体の調子を戻す。

「ノーヴェ、作業内容忘れてないっスか～？」

「忘れてねぇよ。タイプ・ゼロの捕獲と残存魔導師の鎮圧だろ」

「それも殺さずに、っス。まぁ、単純に殺して鎮圧するより難しいっスけど……」

「それだけ私たちの力を見せ付けられる、って話だろ。言われなくても分かってんだよウェンディ！」

「おぉ～、怖い怖い」

会話を交わす二人の人間が、そこにはいた。

共通点は赤毛とその特異なボディースーツ。一人はセミロングの髪をポニーテールに纏めており、巨大な盾を持っている少女。対し、もう一人はショートの髪と両手の手甲、そしてタービン付きローラーブーツが特徴的な少女だ。

そして、この二人がどういう存在なのか、スバルは直感的に悟る。

「戦闘……機人……！」

「スバル！」

ティアナがスバルを心配して、駆け寄ろうとする。が、不意にその足が止まる。

ティアナの視界の端。スバルを助けるために動き出そうと姿勢が僅かに変化した、その視界の端に見えた光球。

ティアナ、エリオ、キャロの三人の視界の死角。そこから三人の急所が狙われていた。

恐らく、ウェンディという少女の仕業だろう。ノーヴェは見たところスバルと同じ近接格闘型。こんな、並の射撃型でも出来ない芸当はまず出来ないだろう。そうティアナは判断する。

ティアナがスバルの目を見る。多少ふらついてはいるが、スバルは視線で意思を伝えてきた。

「私が隙をつくるから、その隙に脱出のための準備をお願い！」と。

それを見たティアナは、クロスミラージュに魔力を集中する。

しばしの静寂。

そして、引金（トリガー）は引かれた。

「ボアドライブ、ブルドライブ！　インストール！」

先程、ガジェットを殲滅するのに使用したガトリングボアと、オレンジ色の牛に似たデータウェポンであるブルホーンを同時に装備する。

瞬間的にカートリッジを二発リロード。ブルホーンを装備した右腕をノーヴェに、左腕をウェンディに向ける。

「バカが！」

カウンターを仕掛けるため、動き出すノーヴェ。

「させない！」

刹那、ノーヴェの前にティアナが踊り出る。

「邪魔なんだよクソアマぁ！」

ティアナにその剛腕を振るうノーヴェ。スバルですら一時昏倒する拳だ。スバルより防御力の低いティアナでは、一撃でのダウンも有り得る。

しかし、その拳は”何にも当たらなかった”。

「何!?」

突如として発生した謎の事態に、ノーヴェの注意が一瞬、スバルから離れる。

「（今だ!）　オートプレッシャー!　クロックマネージャー!」

スバルがオートプレッシャーとクロックマネージャーを、それぞれノーヴェとウェンディにかける。

オートプレッシャーは超重力を発生させる力、それによりノーヴェは動きを封じられる。近接戦闘は元より、射撃をするにしろ腕を相手に向けなければいけないノーヴェは、何をすることも出来なかった。

また、ウェンディにかけられたクロックマネージャーは、短時間ながら対象の時間を止める。それにより、今ティアナたちの周囲にあるエネルギー弾の制御は失われていた。

「ストラーダ!」

「ケリュケイオン!」

『フォルムドライ!　ウンヴェッターフォルム!』

『ブーストアップ・エミッションパワー、エンチャントフィールドインベント』

エリオのストラーダに金色の突起が出来、エリオの資質である魔力変換資質：電気を使うのにより適した形態、ウンヴェッターフォルムへと変形する。

さらにキャロがエリオに、放射型魔法を強化するブーストと、ＡＭＦなどのフィールドを貫通するブーストを同時にかける。

「サンダァー……レイジィッ！！！」

エリオがサンダーレイジで周囲の魔力弾とガジェットを破壊する。

「ティア！　もうそろそろクロックマネージャーが解ける！」

「分かった！　一旦逃げるわよ！」

「逃がすかよォッ！」

スバルとティアナの会話を引き裂くように、ノーヴェが叫ぶ。

「あんま使いたくは無かったけど……しゃーねぇか」

ノーヴェの纏っている雰囲気が変わる。何かを仕掛けるつもりなのだろう。だが、何をするか。そこまでは、スバルたちには予想出来なかった。

「……シープドライブ、インストール！」

ノーヴェが叫ぶと共に、ノーヴェの腰に武装が現れる。

ノーヴェの細い身体には不釣り合いにも思える、無骨な白いコンテ

ナ。それがノーヴェの腰に装備されていた。

「そんな！」

「あれは……」

「データ……ウェポン……！」

スバルたちが驚く。本来、データウェポンはを始めとする六課のメカニックスタッフがデバイスに搭載して、初めて使用出来るシステム。デバイスが無い上、そもそも六課のメカニックスタッフと会ったことのないノーヴェには装備出来るはずがないからだ。

「あんまドクターを嘗めんなよ。あんぐらいのシステム、ドクターなら簡単にコピー出来るし、改良だって出来んだよ！」

「ぐっ……！」

スバルがオートプレッシャーを強化する。例えノーヴェが装備したデータウェポンがなんであれ、超重力のオートプレッシャーを突破するのは至難の業だ。例え今クロックマネージャーが解けてウェンディがまた動き出しても、ノーヴェさえ抑えておけば、ティアナとエリオとキャロの三人でウェンディを対処出来る。そう考えたからだ。

だが、その考えはいとも簡単に覆された。

「ロックオンターミネータ……！」

ノーヴェがスバルを視界の中心に収めながら、〝何か〟をする。

「っ！？　マッハキャリバー！」

『プロテクション』

危険を直感的に感じ、プロテクションを張るスバル。

「喰らいなァッ！　シープランチャー、ファイナルアタック！！！」

ノーヴェが叫ぶと同時に、腰のコンテナ――シープランチャー――から大量の巨大なミサイルが発射される。

そのミサイルからは少し小さなミサイルが大量に飛び出し、さらにそのミサイルからより小さなミサイルが……。

その数――――無量大数。

「ぐっ……！」

さすがに真っ向から受けるわけにはいかないと判断したのか、プロテクションを維持しつつ、走って避けようとするスバル。

だが、ミサイルは正確にスバルを捉え、飛んでいく。それこそ、物理法則を無視した動きをして。

シープランチャーの能力、ロックオンターミネータは、その名の通り相手をロックオンする能力。ロックオンされた相手は、例えどこへ逃げようと、どんな次元に移動しようと、どのような時間にいようと、避けることは出来ないのだ。

「ぐぅぅっ！」

逃げられないと悟ったスバルが、カートリッジを使い、プロテクションを強化する。

が、今やダンプが突っ込もうと受け止められそうな防御力を持つプロテクションを、ノーヴェのミサイルは簡単に破壊してしまう。

「そんな！！？」

もう、逃げも隠れも出来ない。

大爆発が地下通路を覆った。

「ノーヴェ、仕留めたっスか？」

「いや……多分、仕留め損ねた」

ノーヴェが悔しそうに歯を食いしばる。

ノーヴェの推測通り、スバルはまだ戦闘不能になっていなかった。

一瞬だけクロックマネージャーを発動、ミサイルを停止させ、停止したミサイルをティアナとキャロが撃ち抜いたのだ。

だが、被害が無かった訳ではない。

「ぐっ……！」

スバルが苦しそうに呻く。

攻撃を避けきれなかったスバルの左腕から、血が流れる。シープランチャーのミサイルは質量兵器のミサイルと何ら変わりない。それは、”炸裂すると欠片を撒き散らす”という点においてもだ。

「……スバルさん……！？」

「それ……！？」

エリオとキャロが、控えめながらも驚いた声をあげる。

二人の視線が見ていたのは怪我をしたスバルの左腕。そこから、機械で出来たパーツが覗いていた。内部回路がショートしているのか、ときどき紫電が散っている。

「……後で話すよ」

スバルが苦しそうに、だけど笑顔で言う。

「……私が幻術で撹乱する。スバルとエリオは戦闘機人二人を強襲して怯ませて。キャロは魔力ブーストをお願い」

「そんな！　だってスバルさんは……」

ティアナの指示に、エリオが反論する。

詳しい理由はどうあれ、スバルは片腕を負傷しているのだ。最前線に立たせるのは、あまりに危ない。

「……他に適役はいないわ」

「でも！」

「大丈夫だよエリオ。威力不足はブルがカバーしてくれるから。ボアは悪いけど、マッハキャリバーに戻って」

スバルが右腕のブルホーンを見せながら言う。そして、ガトリングボアを送還する。

重量のあるガトリングボアを装備していたら強襲のタイミングを誤ってしまうかもしれない。そう判断してのことだった。

「……チャンスは一度きり。いいわね」

スバルたちが頷く。

エリオがウェンディの放つエネルギー弾を避けながら走る。

ウェンディは一流の射手のそれと同等か、それ以上の射撃技術を持っている。それでも当たらない辺り、エリオの回避技術がとても優れたものであることが伺える。

「ちっ、ちょこまかと！」

「ウェンディ！　このグズがっ！」

ノーヴェが自身のＩＳ、エアライナーを使ってティアナに襲い掛かる。完全に死角からの強襲。直前で気づいたものの、避けるには時間が足らなかった。

だが、ノーヴェの脚がティアナの首を捉えた瞬間、ティアナの姿が霞のように消えてしまう。

すぐに体勢を立て直し、本物のティアナたちを捜すノーヴェ。だが、その周囲には多数のティアナたちが立っていた。

「幻影？　ナマイキっスね～。でも！」

ウェンディが自身の目に仕込まれたカメラを切り替え、幻術に対応する。使い手が少ないとはいえ、幻術もオーソドックスなミッド式魔法の応用の一種。戦闘機人にもその対策はしっかりしてあった。

だが、次の瞬間ウェンディの顔が驚愕に歪む。

ウェンディの視界、様々なデータが表示されているそこには、全てが幻影ではなく本物だという結果が印されていた。

「嘘ぉっ！？」

有り得るわけが無い。双子三つ子で説明出来る人数ではないし、何より先程までは４人だったのだ。転移魔法の反応も無かった以上、いま目の前にいるのは殆どが幻影のはず。

ここから、ウェンディは一つの予測を導き出す。

「この幻術使い、戦闘機人システムのことを知っている……！？」

知っている、というよりも、この場合は”熟知”と言うべきか。

戦闘機人システムにおける幻術対策を知らなければ、あらかじめ幻術をこんな形に構築することなど出来ない。

「面倒臭ェ！　だったら全部ぶっ飛ばせばいいんだろうがッ！！！」

ノーヴェの右腕に複数のエネルギー弾が現れる。それを乱射して幻影もろとも攻撃しようと言うのだろう。

まるでライブ会場のように幻影が密集している状態だ。本体に当たれば良し。当たらずとも幻影は減らせる。地味かも知れないが、有効な手段だ。そもそも、これだけ大量に幻影を出している以上、幻術使いにかかっている負担も並ではない。一度幻影を減らしてしまえば、もう同じだけの幻影を出すことは出来ないはずだ。ノーヴェは、そう推測したからこそ、乱射という選択肢を選んだ。

事実、ノーヴェの推測は当たっていた。ティアナにかかっている負担は並大抵のものではなく、キャロのエナジーブーストで魔力を増強して尚、限界ギリギリまで魔力を振り絞らなければ維持が出来ないほどだ。あまりの負担に、ティアナもキャロも移動すら叶わない。

だが、流れ弾が当たるという危険性に気づいていないわけではない。多少の被弾をしようとも、幻影維持の優先が全員での脱出に必要だと判断したからだ。

そして、幻影に気をとられているノーヴェは、格好の的と言える位置にいた。

「ブルホーン！　ファイナルアタック！！」

「しまっ……」

地面から飛び出しながら走る水晶のスパイクが、ノーヴェにぶち当たる。スバルのデータウェポンには非殺傷設定があるため死にはしてないが、すぐには起き上がれない程のダメージが入ったことは、容易に想像がついた。

「ノーヴェ！」

ウェンディがノーヴェに声をかける。それもまた、フォワードたちにとっては見逃すことなど出来ない、大きな隙だった。

「来い！　パーフェクトゼクター！　ドレイク！」

ウェンディの元に走り寄るエリオが右手を突き上げながら叫ぶ。

そこに、時空間を超えて一振りの剣が飛来する。

名を、パーフェクトゼクター。ザビー、ドレイク、サソードの三種のゼクターを統べる、エリオの切り札である。

パーフェクトゼクターと共に呼び出されたドレイクゼクターが、パーフェクトゼクターの刀身に合体する。

パーフェクトゼクターはその刀身にゼクターを合体することで、合体したゼクターの力を何倍にも増幅して使用することが出来るのだ。

さらにエリオは、ストラーダにある指示を出す。

パーフェクトゼクターは剣だ。それ故に、エリオの戦闘スタイルには合わない。リーチの長さはもちろん、片手で扱うことが基本のパーフェクトゼクターと、両手で扱うことが基本の槍。運用方法も違えば、立ち回りも違う。

だが、それを解消するための手段がストラーダには搭載されていた。

「ストラーダ！　フォルムゼクター！」

『システム起動、ゼクターストラーダに移行！』

ストラーダの槍頭が裂けるように二つに割れ、若干柄の方に後退する。そして、割れたことにより空いた隙間にパーフェクトゼクターが入る。

ストラーダとパーフェクトゼクターが合体した形態、ストラーダフォルムゼクター。通称、ゼクターストラーダだ。

これによりエリオは、自身の槍の技術を活かしつつ、パーフェクトゼクターを使うことが可能になったのだ。

強力故に今までは使用を禁じられていたのだが、公開意見陳述会直前に万全を期すため解禁されていた。今回はそれが運よく働いたと言えよう。

『ＤＲＡＫＥ　ＰＯＷＥＲ』

エリオがゼクターストラーダのパーフェクトゼクター部分についている青いスイッチを押す。

ゼクターストラーダにエネルギーを集中させる、スタータースイッチを押したことにより、ゼクターストラーダ中にエネルギーが溜まり始める。

「でやぁぁぁぁぁぁッッッ！！！」

エリオが大きく跳び上がると同時に、ゼクターストラーダに溜まっていっていたエネルギーが満ち、青い電気が飛び散る。

同時に、ゼクターストラーダの穂先を中心に青いエネルギーが放出され、巨大な刃となる。ゼクターストラーダの長い柄と重なり、さながら重量のある斧のようだ。

『ＨＹＰＥＲ　ＡＸ』

ハイパーライダーアックス。ドレイクゼクターの力を用いた技の一つで、一撃の攻撃力と範囲に優れた近接攻撃だ。

振り下ろす、という動作は槍でも使う上、ゼクターストラーダを覆うエネルギーに重量は無い。エリオは自身の持つ槍の技術を余さず込め、ゼクターストラーダを振り下ろした。

「ぐ……！」

ウェンディは自身の持つ巨大なボード、ライディングボードから砲撃を放つことで相殺しようする。

が、少々対応が遅かった。砲撃が放たれるより速くゼクターストラーダから発せられている斧状のエネルギーがライディングボードを使って溜められていたエネルギー球に当たったことにより、砲撃用のエネルギーが炸裂。大爆発を起こしたのだ。ウェンディの少女らしい軽い身体は、簡単に吹っ飛ばされてしまう。恐らく、すぐには起き上がれないだろう。

「撤退ーっ！！！」

その瞬間、引き際と見たティアナが合図を出すと同時に、幻影を含めたフォワードたちは、散り散りになって逃げ出す。

途中で幻影が消え去るが、もうノーヴェとウェンディにフォワード４人の行方は分からなかった。

「くそっ！」

ノーヴェが悔しそうに壁を殴りつける。ファイナルアタックを喰らって、もう動ける辺り、ノーヴェの回復力の高さが窺い知れる。

そんな二人の元に、通信が入る。

『ノーヴェ、ウェンディ。今、大丈夫か？』

「チンク姉？」

「大丈夫っスよ。タイプ・ゼロたちには逃げられちまったっスけどね」

『奇遇だな。こちらもタイプ・ゼロと戦っている。もう一人のほう、ファーストとだ。一緒にいた雑魚は片付けたが、思いの外てこずっているんだ。手早く済ませたい。手伝いに来てくれ』

やがて、ノーヴェとウェンディの二人も動き出す。

地下通路は、先程までの激戦が嘘のように、静寂に包まれていた。

## 第百四十話　地下通路、１０分間の攻防（後書き）

はい、ほぼフォワード尽くしでした。

今回はギャグ無しでしたね。まぁ、そろそろギャグが少なくなってくるんで、ぼちぼち勘弁願いたいです。

エリオはパーフェクトゼクターを最初から持ってました。以前のコラボ話での出来事ですね。まぁ、いちいちコラボ話を読まなくても【エリオがパーフェクトゼクターを持っている】ということは微妙に匂わせていたんですけど。分かりにくかったらすみません。

ここの部分、間がごっそり欠けてたんで、補完が大変だったり。結果、アニメなら１０分あるかないかの量がほぼ８０００文字に……。

スバルのファイナルアタックはとりあえず全出し。ギンガのは……まぁ、ＳｔＳ中には出したいですね。はい。

そろそろ物語も佳境を迎えます。私も頑張らねば……！　気合を入れて頑張ります。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百四十一話　戦闘機人　タイプゼロ・セカンド（前書き）

今回は少し短め……かな？

辛うじて７０００文字だし、まぁ短めなんですかね。

……連載開始直後の私に言ったら卒倒しそうな台詞だなぁ。

# 第百四十一話　戦闘機人　タイプゼロ・セカンド

Ｓｉｄｅ　吼太

地上本部、地下エントランス。

いつもならきらびやかな照明に照らされた空間。

今や、そこは廃墟と見間違うほどの有様になっていた。

明かりが無いだけでもかなり変わるんだな……。光が文明を表す、と言ったところか。

と、対面側からフォワードの４人が走ってくる。スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人だ。ギンガとティーダはいないんだな。

「いいタイミングだね」

なのはが言う。まぁ、確かにな。通信もろくに繋がらない状況にしては、なかなかのタイミングだ。実際、運が悪かったら会うだけでも数時間かかってた可能性もあったんだし。

「お待たせしました！」

「デバイス、お届けに来ました！」

フォワードたちから、それぞれのデバイスを受け取る隊長陣。オレもトゥードを受け取る。

「ありがとう、みんな」

フェイトがフォワード４人にお礼を言う。

「こちらはやて。ロングアーチ、応答を」

早速、シュベルトクロイツの力を使って通信を開くはやて。シュベルトクロイツははやて専用の補助システムを多数積んでいるため、強力な通信妨害がかけられている地上本部地下からでも通信を繋ぐことが出来るのだ。

『―ちら、ロ―グアー―。八神―隊長、ご無―ですか―』

だが、何故か通信が上手く繋がらないようだ。考えられる理由は二つ。シュベルトクロイツの補助システムを用いても突破しきれないほど強力な通信妨害がかけられているか、送信先である機動六課隊舎そのものにも通信妨害がかけられているか。

「グリフィス君、そっちの情報は？」

『現在、ア―ノウンか―の襲撃を受―ていま―。持ちこたえていますが、もう―』

「グリフィス君！？　グリフィス君！」

突然、通信が途切れる。通信妨害が強化されただけならいいが、もしかしたら……。そんな考えが過ぎる。

「そうだ、ギン姉……！」

スバルが、ギンガへの通信を開く。

だが、何故か応答は無い。マルチタスクを使えば通信に出るぐらいなら可能なはずなんだが、それも出来ないほどの事態に陥っているとすれば話は別だ。

「なのはさん！　ギン姉が！」

「ヴィータとの連絡も取れません。恐らくは、どちらも交戦中かと。――それも、強敵と」

スバルに続き、ヴィータと連絡を試みたシグナムが自身の見解を述べる。

それを聞いたはやては、一つの決断を下す。

「部隊を三つに分けるで。なのは隊長、スバル、ティアナ、コータ隊長、リーム副隊長はギンガとティーダの援護、場合によっては救出」

「「はい！」」　「「任せて！」」　「応！」

オレを含めた、呼ばれた5人が応える。

「ヴィータの方にはシグナム、リインフォース？《アインス》、羽旺副隊長に行ってもらう」

「承知致しました」　「はい、主はやて」　「任せよ小烏」

「フェイト隊長、フィニア副隊長、アリサ隊長、すずか隊長、なず

な副隊長、エリオ、キャロは私と一緒に六課に戻る！　ええな！」

「「「了解！」」」

ギンガとティーダを救出するチーム、ヴィータの安否確認に行くチーム、六課に戻るチーム。数や戦力にかなりの偏りがあるが、これも状況を見ての判断だ。

まず、六課には禄に戦力がいない。本来中衛から後衛でメンバーを守る役割のザフィーラが前衛に出なければいけないほどの事態のはずだ。なら、人数をなるべく確保しなければいけない。

またいくら緊急事態とはいえ、一人二人の援護にそんなに人数を割くわけにはいかない。ギンガとティーダは未熟である上、まだ先程の戦闘機人いる可能性が高いため、部隊として統率の取れるチームを向かわせたい。となると、フリードのおかげで部隊員が飛行して移動できるライトニングが六課救援チームに、地上戦が中心になるであろうギンガとティーダの救出にはスターズが向かうのは妥当な判断だ。

ヴィータのほうは、ヴィータを信じての采配だ。ヴィータとリインフォース？の二人でも中々の戦力であるが、そこに同じヴォルケンリッターであるシグナム、夜天の魔導書の管制人格であるリインフォース？、はやてのマテリアルである羽旺の三人が行けば余程の事態が起こらない限りは傷一つ負わずに済むだろう。むしろ、下手にメンバーを増やせば邪魔になる可能性すら有り得る。

例外的に、なずなだけはスターズでありながら六課救援チームに加わっているが、これは部隊だけで分けた場合、六課救出チームに精

密な支援射撃が出来る人が一人もいなくなってしまうからだろう。なずなの抜けた穴にはオレとリームが入っているから、戦力問題は大丈夫だろう。

「さぁ行くで！　既に飛行許可は全員分取ってある。急がな家がなくなるよ！」

はやての激と共に走り出す、ギンガたちの救援に向かうチーム以外のメンバー。現在の地下から直接飛んでは行けないため、一度外へと行くことにしたようだ。

「私たちも……！」

言うや否や、全速力でマッハキャリバーを蒸すスバル。

「待てスバル！」

「僕たちも行かないと！」

オレはティアナを背負い、六ツ星神器の電光石火（ライカ）を使い、スバルを追い掛ける。電光石火はスバルのマッハキャリバーと同じようなローラーブーツを装備して、地上移動速度を上げる神器。最大速度は亜光速レベルにすら達する。だが、いかんせん最大速度が出せない。下手に速度を出せばティアナが振り落とされてしまうからだ。かといってリームにティアナを持って飛ぶほどの力はないし、なのはもスピードが速いわけではない以上、これ以上の負荷がかかったら大幅にスピードダウンしてしまう。仕方がないが、これが妥当だ。

また、地下道は非常に曲がりくねった作りになっている。そのため、直線的な加速が出来ない。故にオレたちはスピードをあまり出せな

い。対しスバルはマッハキャリバーの恩恵で、曲がり角にも素早く対応が出来る。仮に加速を付けすぎても、ウイングロードを使えば簡単に曲がれるため、スバルがスピードを緩めることはないだろう。

「ちょっとスバル、先行しすぎ！」

無謀とすら思えるスバルの行動を、ティアナが念話で叱る。だが、スバルがスピードを緩める気配はない。むしろさらに加速し、オレたちとの差をさらに広げてしまう。

『ゴメン！　でも、大丈夫だから！』

そう言うと念話を切るスバル。どうやら、またスピードを上げたらしい。

「何が大丈夫だってんのよ、あのバカは……！」

ティアナが苦い表情を浮かべながら言う。実際、この時ばかりはスバルの「大丈夫」に、何の説得力も感じなかった。

いつものスバルなら、状況を肌で感じ、直感的に大丈夫かそうでないかを判断している。長年付き合って来ていたティアナは、それを感じていたんだろう。だからこそ、スバルの「大丈夫」を信じてきた。

だが、今のスバルは後先考えずに突っ走るただのマヌケだ。いつ奇襲にあってもおかしくない。

「コータ、やっぱり危険だよ！」

「っても、今出せる全速力じゃこれが……！」

いかんせんスピードが足らない。かといって無理にスピードを上げれば小回りが効かなくなって壁に正面衝突。

「仕方ないね。でも、のんびりしてられるわけでもない。……可能な限りはスピード上げてこう」

なのはがオレとリームに言い、スピードを上げる。オレとリームもそれに続いてスピードを上げていった。

Ｓｉｄｅ　三人称

先行していたスバルの頭の中は、ただ一つのことに支配されていた。

そう、自身の姉のことである。

幼い……記憶にすら残らないほど幼い頃、スバルの母親は死んだ。

故に、スバルにとってギンガとは姉であると同時に母でもあった。

シューティングアーツをやるようになってからは、ギンガを師匠としても扱うようになった。

そして、管理局員として働いている現在。スバルにとってギンガとは、母であり、師匠であり、先輩であり、仲間であり、何より強い姉だった。

その姉との連絡がとれない。それはスバルの心に波紋を呼んでいた。

今までは、どこか遠い場所での出来事に感じていたこと。自分のことでありながら、自分のことではなかったこと。

――則ち、家族を失うこと。

スバルは走った。

そして、視界が開ける。そこには――

「……ぁ」

先程も見た戦闘機人と、戦闘機人らしき人物がいた。

――その手に、傷ついたギンガを持って。

「ぁ……ぁ……」

ノーヴェの足元にあるギンガの左足の下には母の形見のリボルバーナックル。位置からすると、腕がちぎりとばされているのだろう。ブリッツキャリバーも機能を完全に停止しているらしい。

スバルの頭が冴え渡る。ただただ、敵を殲滅するための思考へと切り替わる。肉体に潜む器官が、システムが目覚める。

「アァ……ゥあ……あ〝ア〝ァ〝あ〝ぁアァあァーーーーッッッ！！！！！」

慟哭と共に、それは目覚めた。

――戦闘機人　タイプゼロ・セカンド　システム起動――

六課へ向けて飛行するはやてたち。飛行の出来ないエリオとキャロも、召喚したフリードに乗ることで無駄に魔力を消費せずに飛行出来ていた。

突然フェイトとフィニアの顔が険しくなる。

『『ソニックムーブ』』

バルディッシュとバルフィニカスが電子音声を発した瞬間、フリードの右側に移動していたフェイトのプロテクションに淡い桃色の砲撃が激突する。

また同時に、周囲３６０°から襲い掛かってきていたブーメランにも似た剣を、フィニアがバルフィニカスで弾き返す。

「敵襲！？」

はやてが周囲を見渡す。敵らしき姿はすぐに見つかった。

報告にあったものとよく似たスーツを着た女性が二人。紫色の短髪を持ち、手足からエネルギーで出来た小さな、虫の羽のようなものを発生させている女性と、砲撃を放ったばかりのように右手を構えた、桃色で長い髪を持つ女性。ナンバーズ３のトーレと、ナンバーズ７のセッテだ。

「はやて、みんなを連れて先に行って」

ナンバーズの二人の挙動を警戒しながらフェイトが言う。

「……わかった。ここはフェイト隊長とフィニア副隊長に任せる。みんな、行くで！」

はやてが号令を出すと、フェイトとフィニアを除いたメンバーが動

き出す。しかし、ナンバーズの二人は彼女達を追おうとしない。フェイトやフィニアの気に呑まれたというより、最初から追うつもり自体が無いようだ。

「……どうして追わない？」

普段の間の抜けた雰囲気がなりを潜め、戦士としての表情を浮かべているフィニアがナンバーズの二人に聞く。

長い間管理局で働いてきた中には、残虐非道な犯罪者と戦うことと て稀ではなかった。そんな犯罪者と戦い続けてきたフィニアたちの闘気の篭った視線は、それだけで人を失神させることが可能。並以上の相手だろうと、その視線に秘められた”ナニカ”から実力差を思い知り、戦意を失うことも珍しくはない。

だが、ナンバーズの二人はいずれも涼しげな顔をしていた。実力差を感じられない程に鈍感なのか、ただの慢心か。

「敢えて言うなら……」

或いは……

「必要無いから、でしょうか」

フェイトたちの実力を理解してなお、「勝てる」という確信を抱いているからか。

「ギン姉を……返せぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッッ！！！」

戦闘機人モードの象徴とも言える黄金の眼が、自身の敵を捉える。

脳が下した指令は至極単純なもの。

【目の前の憎き敵を、コワセ】

「チィッ！」

ノーヴェがジェットエッジを全開にし、エアライナーを使ってスバルを空中から、その強力な蹴りで狙う。

だが、ノーヴェの蹴りが威力を持つ前――つまりは蹴りの出始め――に、スバルのマッハキャリバーがジェットエッジと衝突する。

ノーヴェが動き出したのをいち早く察したスバルが、ノーヴェの蹴りに威力が乗る前に跳び上がり、自身の蹴りをノーヴェの脚にぶつけたのだ。

「ッ！？」

そのまま空中で体勢崩すノーヴェ。その隙を狙い、スバルが右手を振りかぶる。

スバルの右手に装備されたリボルバーナックルのタービンが回り、

その周囲を特殊な環状テンプレートが包む。蒼く輝くそれは一見環状魔法陣にも見える。が、そこに篭められている”意味”はまるで違うもの。

スバルが環状テンプレートに覆われた腕を突き出す。ノーヴェは直撃を避けるために身体を捻って回避しようとするが、僅かにスバルの右手がノーヴェ自身の右手に掠ってしまう。

その瞬間、強烈な”ナニカ”が発生し、ノーヴェが吹き飛ばされる。そのままノーヴェは近くの壁に突き刺さり、そこでようやく停止する。

「ノーヴェ！？」

「チッ……クショウ……！」

かろうじて意識は保っているようだ。戦闘機人ならではの頑丈な身体の恩恵と言える。だがノーヴェの右手の指は彼女の意思に反して世話しなく動き続けていた。先程の一撃で内部回路がショートしたのだろうか。

――もしも直撃していたら。良くて戦闘不能。生命維持に使用されている器官がダメージを負ってしまえば、死亡すら有り得た。

このことから、ギンガを大きなトランクに積めていたチンクが、スバルの力の正体を推測する。

「タイプゼロ・セカンドのＩＳ（インヒュレートスキル）……接触型か」

それも、並大抵の威力ではない。前衛型のノーヴェを一撃で追い込

んだのだ。強力なエネルギー障壁を展開出来るシェルコートを持つチンクなら未だしも、後衛型のウェンディが喰らったならば、掠っただけでも命の危険がある。

「ウェンディ、ノーヴェ。タイプゼロ・ファーストを持って離脱しろ。ここは私が抑える」

「でも、チンク姉だけじゃ！」

ノーヴェが右手を庇いながら言う。

「案ずるな。姉なら触れずに戦える。それにウェンディにはファーストを運んで貰わねばならんし、お前はその負傷だ。ここは姉に任せておけ」

妥当な状況判断の元に下された決断だけに、反論を封じられてしまう。だが、引き下がりたくない気持ちは残っていた。

――アイツのＩＳ、チンク姉のシェルコートがあっても防ぎきれない――

「ＩＳ、エリアルレイヴ！　行くっスよノーヴェ！」

ウェンディが急かす声を出す。一刻も早く逃げなければ増援がやってくる。そうなればチンク一人では抑えきれない。

「ぐっ……！」

先に動き出したウェンディを追うように、ジェットエッジで走り出すノーヴェ。

「……待ァ、てぇぇぇッッッーーーーー！！！！！」

ウェンディたちを――正確にはウェンディが持つ、ギンガの入ったトランクを――追って、猛加速するスバル。

だが、虚空に現れたチンクのスティンガーが爆発し、スバルの動きをを止める。

「邪魔……すんナぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

再び環状テンプレートがスバルの右手を包み、チンクを殴り付ける。

発生した黄色の半球状の障壁――シェルコートの機能であるバリア――に右手がぶち当たり、過度の圧力を受けたスバルの右腕から血が噴き出る。

だが、同時にシェルコートのバリアも圧壊してしまい、内部のチンクにスバルの拳が入る。

「キャアァァァッッッ！！？」

先程のノーヴェ以上の速度で吹き飛び、壁に激突するチンク。もはや、指一本動かせはしないだろう。

「……」

環状テンプレートを纏わせたまま、チンクに近づくスバル。もはやマッハキャリバーはボロボロであり、左足側の車輪に至っては取れてしまっている。

「返せ……ギン姉を、返せよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

スバルがその右手を振りかぶり、そして……

「そこまでだ、スバル」

スバルの右手を、吼太が掴み止めた。

Ｓｉｄｅ　リインフォース？

「……大分遠い場所で戦っているようだな」

小さくなっていく地上本部を背に飛びながら、思わず呟く。

「位置を誘導しながら戦える相手ではなかったのだろう。魔導師か騎士か、いずれにしろ中々の強者なのだろうな」

シグナムが何故だか嬉しそうに言う。少し場を弁えて欲しいものだ。

「しかし、奇妙なものよ……。魔力反応が何故これほどか弱いものになっているのか」

羽旺が言っていることも分かる。

気になる、というのはヴィータの魔力反応のことだ。先程からヴィータの魔力反応を追って飛んでいるのだが、先程から何故か反応がやけに小さくなっていた。

戦闘中はリンカーコアが活発化している都合上、魔力反応は大きくなりがちだ。魔力反応が元々の魔力量と一致しないような例外的な者の場合や、わざと魔力反応を抑えている場合はまだ納得出来るが、前者にヴィータは当て嵌まらないし、管理局の目の前で管理局員であるヴィータが魔力反応を隠す必要もない。

となれば、戦闘が終了しているために魔力反応が小さくなっているというのが結論となる。……なるのだが。

「いくら何でも小さすぎる……」

魔力反応は心理状態にも大きく影響される。戦闘終了時ともなればその精神は激しく高ぶっているものだ。その場合、戦闘時ほどでないにしろ、魔力反応は比較的大きくなりやすい。だが、今のヴィータの魔力反応は通常時にすら劣っている。それが気になるのだ。

「……あれは……」

ふと、シグナムが止まって明後日の方向を見る。

「将、どうした？」

「何かいたか？」

「……いや、なんでもない。先を急ごう」

再び動き出そうとしたとき、間髪入れずに通信が入る。

『リインフォース……シグナム……はお……』

「ヴィータか、どうした？」

やけに泣きじゃくったような声だ。どうしたんだ？

『リインが……アイゼンもぉ……！』

思わず息を呑む。シグナムや羽旺も同じ気持ちのようだ。

互いに顔を見合わせ、ヴィータの元に向かって飛ぶ。

そう、敗北してボロボロになった、愛する家族の元に……。

## 第百四十一話　戦闘機人　タイプゼロ・セカンド（後書き）

はい。そんなわけで着々と……な感じです。

ギャグ描写も控えめになってますが、まぁそこはご了承頂きたいです。ＳｔＳ前半はふざけまくってましたし。

ＳｔＳがクライマックスに近づくにつれ、いろいろと明らかになってきた部分もあるかと思います。……分からない？　……

ま、まぁともかく、これから事態は急展開を迎えて行く……のかな？

とりあえず、隠し玉をいくつか用意してるので、お楽しみに。

次はスバルサイドのその後、あと六課救援チームの話になります。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百四十二話　知られざる力、知らされる宣言（前書き）

お待たせしました。第百四十二話です。

……長いなぁ。

文字数もそう（９０００オーバー）ですが、１４２話も続けてようやくＳｔＳの折り返しという。

せめて文章力は上がってると信じたい。まぁ、どんぐりの背比べレベルなんですがね。

# 第百四十二話　知られざる力、知らされる宣言

Ｓｉｄｅ　吼太

スバルの右腕を抑えたオレの右手の鎧が砕ける。スバルのＩＳ、振動破砕の効果がオレにまで及んでいるためだ。

「あ〝ぁっ！　うわ〝ぁっ！」

オレの腕を振りほどいてチンクに殴り掛かろうと腕を動かすが、オレの手を振りほどくことが出来ずにただもがいているだけになる。今のスバルには理性すら無いのだろう。あるのはただただ純粋な……殺意。

「……スバル、それがお前の答えか？」

「っ！？」

スバルの動きが止まる。

「お前が求めていた力は……知りたかった〟強さの意味〟は、これなのか？」

スバルを無理矢理チンクの方に向ける。〟戦闘機人という敵〟ではなく、〟チンクという人間〟に。

「あ……ぁ……」

スバルの目の前にいるのは、全身血だらけになって呻いている、た

だの女の子。そう、ただの女の子だ。

「ギン姉……コータさん……私……私……あっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ようやく正気に戻ったスバル。緊張の糸が途切れたのか、その場に座り込んでしまう。

「I……S……、ランブル……デトネイター……！」

スバルとオレの注意が逸れた隙を突いて、チンクがスバルに吹き飛ばされた時にばらまかれたのであろうナイフ型固有武装、スティンガーをランブルデトネイターで爆発させ、煙幕を張る。

「チッ！」

すかさずクロスオーバーフォームのマントで煙幕を振り払う。だが、もうそこにチンクはいなかった。恐らくはセインがディープダイバーで救出したのだろう。まだそう遠くへは行ってはいないはずだ。

「逃がすか！アグ「兄さん！？　兄さん！！」　ティアナ？　どうした！」

突然ティアナが、泣き叫ぶような声をあげる。

声のした方、柱の陰にあることで入口からちょうど死角になっている場所。

そこには泣き叫ぶティアナと、必死に心肺蘇生をしているなのはとリームと、

――――血まみれのティーダが倒れていた。

「ティーダ！？　どうしたティーダ！　返事をしろ！！」

慌てて駆け寄り、ティーダに声をかける。だが、ティーダは答えない。

「コータさん……兄さんの息が……心臓も……！」

ティアナがぐしゃぐしゃの顔で言ってくる。

首の頸動脈に指を当てて調べる。だが、動いている気配は無い。

「嘘……だろ……？」

ティアナが泣いている。なのはも手を動かしたまま泣いている。リームもだ。みんな、みんな泣いている。

せっかく命を救えたと……ティーダを救えたと思ってたのに……結局、運命は変えられないってことか……？

……認められるか。

一回変えられたんだ。だったら二回も三回も、何回だって変えられるはずだ。

「……トゥード」

『……何でしょうか？』

決意を固める。これからする質問は、そのための”確認”だ。

「ティーダは、死んでいるのか？　生きてはいないが死んでもいないのか？」

一瞬だけ逡巡したあと、トゥードが答える。

『生物学的には死亡』

その言葉を聞いた瞬間、ティアナたちの顔が絶望に染まる。

『……ですが、魂はまだ肉体から乖離していません。存在的観念から考えれば、死んではいません』

「そいつは重畳」

両手をティーダに向ける。

「退け、ティアナ、なのは、リーム」

「え？　う、うん……」

なのはが離れる。だが、リームが離れない。

「早く退けリーム。間に合わなくなる」

「嫌だ」

リームが泣きじゃくりながらも、強い意志の篭った瞳を向けながら言う。

「コータ、”アレ”使うつもりでしょ？　なら退かない。……僕は、コータまで死なせたくない！　使うならナイアの時計とかでも……！」

確かにナイアの時計を使えば肉体を完全に復活させられる。だがその間に魂は肉体から乖離してしまう。

肉体から乖離した魂を戻してはならない。それが、アリシアを蘇らせたオレに与えられた枷。だから……

「……トゥード」

『了解』

オレの命令を受けたトゥードが一瞬で人間態となり、リームの延髄に手刀を入れて気絶させる。

「リームちゃん！」

気絶したリームをなのはがトゥードから受け取る。

……準備は出来たな。

「トゥード、タイミングを間違うな。一歩間違えばミッドが滅びる」

「はい」

クロスオーバーフォームのフルドライブが発動し、エネルギーの嵐がオレの周りで吹き荒れる。そして精神を集中させ、相乗掛合（クロスオーバー）を発動させる。両手を伝い、力が顕現する。

大量のブレたようなシルエットが浮かび上がると同時に、暖かな光がティーダに降り注いだ。

「ぐ……あ〝ぁっ！」

次の瞬間、トゥードがオレの両腕を切り落とす。

切り落とされたオレの両腕は突如、ただの肉塊となり、増殖を始めた。

「トゥード！」

「……認定確認、フォーティトゥード・スピリットの全リミッターを一時的に解除」

トゥードがそう言った瞬間、肉塊が消え去る。……いや、トゥードの攻撃により消えたのだ。本気のトゥードの攻撃は、ただの行動一つ一つが必滅の威力を持つらしい。尤も、オレもまだその全貌を見たわけではないのだが。

「コータさん、腕が！」

「オレのことはいい！　それよりティーダは！？」

「え？　は、はい！」

ティアナがティーダの胸に耳を当てて、心音を調べはじめる。

……いや、聞くだけ無駄だったみたいだ。

――――――ドクン！

――――ドクン！　ドクン！

――ドクン！　ドクン！　ドクン！

力強い命の鼓動が、オレのところにまで聞こえてきていたからだ。

Ｓｉｄｅ　三人称

空を駆ける四つの光。

光は時にぶつかり、火花を散らす。

そして、何度目かの接触が終わると、巨大な爆発が起きる。

その爆発により発生した煙幕から、四つの影が飛び出す。

フェイトとフィニア。それらと対峙するトーレとセッテだ。

「スカリエッティはどこにいる！　なんでこんな事件を起こすんだ！」

フィニアが叫び、問い掛ける。既に満身創痍といった様相。ザンバーを構えた腕も、ほんの僅かにだが震え始めていた。それは、同じように戦っていたフェイトも同じ。

だがしかし、対するトーレとセッテの表情は実に涼しげなもの。痩せ我慢とも思えない。

「お望みでしたら、いつでもお答えしましょう」

「無論、我々の仲間となっていただけるのであれば、ですが」

トーレとセッテが答える。そうしている間も隙は見せない。

「誰がお前らの仲間になんてなるもんか！」

「彼は……変態だ！　それも、最悪の！」

フィニアとフェイトが反論する。こちらも隙は見せていない。だが、ナンバーズの二人と違い、息があがっていた。

フェイトの言葉を聞いたトーレとセッテは一瞬言葉に詰まったあと、答える。

「それは否定しません。というより、ドクターは貴女方が思っている以上の変態です」

「我々が玩具にされていないのが奇跡と思えるほどの」

二人が頭を抱えながら言う。余程辟易としているらしい。

「ですが忘れないで頂きたい。ドクターがいなければ、貴女方は誕生していなかった。ドクターは貴女たちの生みの親のようなものであると」

「ドクターがプロジェクトFの基礎を組み立てたからこそ、フェイトお嬢様が誕生し、フィニアお嬢様が誕生したということを」

「「黙れぇぇぇっ！」」

激情に駆られたフェイトとフィニアがザンバーを振り回す。だが、その太刀筋を見切っているトーレとセッテにはたやすく避けられてしまう。それでもなお、二人が手を緩めることはない。

「……仕方ありませんね」

「一度、痛い目に遭っていただくとしましょう」

そう言ったトーレとセッテの姿が一瞬で消える。二人を狙って上段から振り下ろされていたザンバーは斬るべき対象を失い、フェイトとフィニアは体勢を崩してしまう。

「なっ！？」

「あいつら、逃げたのか！？」

フェイトとフィニアが周りを見渡す。

トーレとセッテはすぐに見つかった。フェイトたちのすぐ後ろにいたからだ。どうやら一瞬で後ろに回り込んでいただけらしい。

だが、それだけ。攻撃をしようとしているわけでもなく、ただ悠然と立っているだけ。

……いや、悠然と立っていたわけではないようだ。正確には、”フェイトとフィニアが自身らを見つけるのを待っていた”と言うべきか。

そして、二人が自身らに気づいたと判断したトーレとセッテは次の行動に移る。

トーレは何やら小さなメモリーカードのようなものを取り出す。セッテは何も用意などはしていないが、気が高まっているのは容易に理解出来た。

「ＩＳ、ライドインパルス」

「ＩＳ、スローターアームズ」

「「アップグレード！」」

二人がそう言った瞬間、トーレとセッテは赤い光を放ち始める。赤い光の粒子が舞うその様は、絵画のような美しさすら感じさせる。

トーレの身体に着いていたアクセサリーが変形し、より放熱しやすい形に変わる。そして、トーレの姿が消える。

「消えた！？」

「よそ見をしている暇があるのですか？」

「な！？」

フィニアがトーレの消失に気をとられた一瞬の隙を突くようにブーメランブレードが飛んでくる。だが、今までと違って真っ向から喰らってしまうフィニア。口から血が噴き出し、吐いた血が墜ちていく。

「……見えなかった……？　まさか透明にしている？」

フェイトが先程のセッテの攻撃を見て推測する。

姿を確認してからのブーメランブレードの速度は先程までと大差なかった。そこから、ブーメランブレードを一時的に透明にしていると予想したのだ。

「だったら風を裂く音を聞けば！」

『ハスタームーブ』

フィニアが目をつむり、意識を集中させる。ハスタームーブも発動しており、ほんの一瞬でも風を切る音を聞けば、絶対にそこを突ける体勢だ。

だが、この時フェイトたちは気づいていなかった。

フェイトたちを見るセッテの目が、”敗者を見つめる”それであることに。

――ヒュン――

「そこだッ！」

タイミングよくザンバーを振るうフィニア。その剣先がブーメランブレードを――

「ハズレです。フィニアお嬢様」

――――捉えることはなかった。

「な……！　真逆……！？」

背中にブーメランブレードの一撃を受けたフィニアが、気を失って落下し始める。

「フィニア！！」

「――一瞬でも敵から注意を逸らす。戦場では致命的なミスですよ。フェイトお嬢様」

その声にハッとしたフェイトが自身の周りを見る。と同時に、自身の身体が自由に動かないことに気づく。

フェイトの周りには赤い光で作られた円錐状のエフェクトが大量に現れていた。

「そんな!?」

身体が動かない以上ハスタームーブも効果は無い。せめて直撃は避けようと身体をよじろうとするが、それも叶わない。

「……では、また後ほど」

今だ姿の見えないトーレの言葉を認識したと同時に、フェイトは全身に打撃の衝撃を感じ、その意識は暗転した。

「そんな……」

「酷い……」

ようやく六課にたどり着いたはやてたち。彼女達を待っていたのは炎上する六課の隊舎だった。

「八神部隊長、あれを」

なずなが指さした先。そこには、白い甲殻を持つ巨大な怪物がいた。

「キャロ、あれ見たことあるか？」

「いいえ。ただ、多分あれは召喚蟲です。それも、最上級の」

キャロが説明し終わると同時に、巨大な召喚蟲が吼える。

「ッ！　キャロ、ヴォルテールいけるな！？　エリオはキャロの護衛！　なずな副隊長は二人の火砲支援！　アリサ隊長とすずか隊長は私と救助活動に！」

「「「了解！」」」

人員を二分する。そして六課隊舎ではやてたちが最初に見たのは、傷つき倒れたシャマル、ザフィーラ、ミカ、プリムだった。

「みんな！　大丈夫か！？」

はやてが慌ててシャマルに駆け寄る。近くで見ると、外傷よりも魔力の枯渇が激しいことに気づく。はやてが自身の魔力をシャマルに送ると、ようやくシャマルが目を覚ます。

「は…やてちゃん……ごめんなさい……留守を預かってたのに……」

「喋らんでええ！」

「気をつけて……戦闘機人がまだ……」

それだけ言うと、それきりシャマルは喋らなくなる。ダメージが予想以上に酷いようだ。

「戦闘機人が……！？」

――ガキィン！

不意にはやての後ろで何かがぶつかり合う音がする。はやての記憶では、確か後ろにはアリサとすずかが控えていたはずだが……

はやてが振り返った先には、やはりアリサとすずかがいた。はやての記憶と違い、アリサは戦闘体勢の戦闘機人の攻撃を受け止めながらではあったが。

「くっ……何よアンタら！」

アリサがいきり立ちながら、エッケザックスで受け止めていた戦闘機人を弾き飛ばす。

戦闘機人はその一撃を利用して一度距離をとる。

「ナンバーズ１２、ディード」

それだけ言うと、再び二本の光刀を構えるディード。対するアリサとすずかもデバイスを構える。

が、そこへ二者を分かつように通信ウィンドウが現れる。

『そこまでにしていただきましょう。私たちの目的は機動六課を行動不能にすること。無駄な戦いを望んでいるわけではありません』

突如として入った通信に、はやてたちは身構えてしまう。だが、通信に映っている戦闘機人は構わずに話しつづける。

『既に六課のロングアーチスタッフ及びバックヤードスタッフは我々が六課隊舎より逃がしています。……この意味、貴女なら分かりますよね？』

戦闘機人がはやてに話しかける。

「……人質、ってわけやな」

『出来れば余計な抵抗はしないで頂けるとありがたいのですが』

表面上は”お願い”ではあったが、その内容には逆らうことが出来ない強制力があった。

「卑怯な……！」

『何とでも。……どうやらお嬢様のほうも終わりそうですね』

慌ててはやてが海のほうを見る。そこでは、白い召喚蟲と黒い召喚

竜が激戦を繰り広げていた。

「そんな……！」

ヴォルテールを制御するキャロの顔が苦痛に歪む。直接攻撃による痛みではない。限界までヴォルテールの力を高めるためにヴォルテールと高いシンクロ状態になっているキャロは、ヴォルテールの受けたダメージの一部を反動として受け取っているのだ。

そして、キャロの感じている以上のダメージを負っているヴォルテールの身体は、より顕著にそのダメージを表していた。

甲殻や鱗は砕け、息は口から洩れてしまっており、片腕で傷ついた反対の肩を抑えている状態だ。

しかしヴォルテールと対峙している白い召喚蟲――白天王――は、今なお傷一つ負っていない。優勢劣勢はありありと見えていた。

「……白天王」

召喚蟲の召喚主であるルーテシアが、最後の指示を出す。

「ルーちゃん！　どうして戦うの!?　私たちが戦う理由なんてないのに！」

キャロが泣き叫ぶような声で叫ぶ。意味の無い戦いなんて、する必要もないし、したくもない。それがキャロの気持ちだ。

それは、キャロとルーテシアを繋ぐ直線の近くでガリューと刃を交わすエリオとて変わらない。

「ガリュー！　わかってるんだろ!?　こんなことしたって意味無いってことに！」

「……！」

ガリューが一瞬で消え、次の瞬間にはエリオの背後に現れる。スピードが遅い速いという次元の話ではない。ガリューは”時間が全く経っていないのに移動した”のだ。

即ち、時間停止能力。

「ぐっ……！」

何とか身体をよじり、ガリューの腕に生えている鋭利な角を避けるエリオ。まともに喰らってしまえば大怪我は免れない。だが、時間を超えて現れる攻撃を避けることなど、そうたやすく出来ることでもない。現に、エリオも直撃こそ避けてはいるが、細かな切り傷が全身に刻まれてしまっている。ゼクターストラーダも血まみれだ。

「この……分からず屋ぁぁぁ！！！」

『ＴＨＥＢＥＥ　ＰＯＷＥＲ　ＨＹＰＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

飛来したザビーゼクターがゼクターストラーダと合体し、光子の槍を作り出す。それを真正面に構えたまま、ゼクターストラーダから噴き出す魔力を推進力にして空中を突き進む。

ストラーダのフォルムツヴァイでは、魔力放出を利用した爆発的加速が可能になっている。その威力たるや、エリオの軽い体重すら簡単に吹き飛ばせるほど。それを利用することで、エリオは疑似的な空戦を行うことが可能なのだ。

ただ、あくまでエリオは”吹っ飛んでいるだけ”であり、”飛行”しているわけではない。時間を止められるガリューには簡単に軌道を読まれ、避けられてしまうだろう。

だが、そんな想像と裏腹に、ゼクターストラーダの切っ先はガリューの甲殻に突き刺さった。

しかし、その直後にエリオは理解した。”突き刺さった”のではなく、”突き刺させた”ということに。

瞬間、ガリューがゼクターストラーダを掴み、エリオを振り回し始める。飛行適性を持たないエリオからすれば、ゼクターストラーダは空中における唯一の命綱。離せばただでは済まない。故に、ゼクターストラーダを掴む手を緩めることが出来ずに振り回されていた。

やがて、遠心力が最大に達した瞬間を見計らい、ガリューはエリオを投げ飛ばす。飛行魔法も無く、振り回されたことで三半規管がろくに機能していないエリオに、もはや成す術は無い。

ガリューは時間停止を使って投げ飛ばしたエリオの先に回り込み、強烈な蹴りを以てエリオを眼下に広がる海に叩き込んだ。

「エリオくん！」

「……隙だらけ」

キャロがエリオの方を向いたことにより、ヴォルテールの操作がほんの僅かに疎かになった。その一瞬かつ小さな隙を、ルーテシアは捉えた。

白天王が腹部に備えられた球体から、巨大な砲撃を放つ。ヴォルテールも二対の翼にエネルギー球を作り出し、そこから砲撃を放って対抗するが、白天王の砲撃はなんら抵抗を感じることなくヴォルテールへと突き刺さる。大地を刈り、大海を裂き、大空を焦がすヴォルテールの”竜の吐息”《ドラゴンブレス》ですら、白天王の――ルーテシアの勢いを止めることは叶わなかった。

力尽き、地に伏すヴォルテール。その頭部を、白天王が自身の脚で押さえ付ける。竜の王が、蟲の王に敗れた瞬間であった。

「ぁ……」

もはや一言すら話せず、フリードの背中に倒れるキャロ。召喚操作による過度の精神的疲労が、強制的にキャロの意識という名のブレーカーを落としたのだ。

キャロが気絶したことにより、召喚が解けるフリード。今のフリードに、キャロを庇いながら戦うだけの力はない。自身の身体より遥

かに大きいキャロを、フラつきながら地上へと降ろしていくフリード。

「……」

ルーテシアの隣にガリューが現れる。右腕にヴィヴィオを抱え込み、左手でエリオの抱き抱えている。

「持ってきてくれたんだ。ありがとうガリュー。でも、そっちは要らないから返してあげよう」

ルーテシアがエリオを指差しながら言う。ガリューは一回頷き理解の意思を示すと、フリードとキャロがいる近くへと飛び、エリオを置くとすぐにルーテシアの元へと帰っていく。

フリードはそれを、見ていることしか出来なかった。

『……お分かり頂けましたか？』

「……」

『一応言っておきますが、見逃した方が身のためですよ。今の貴女たちでは、何をやってもこの状況は覆せない。……ヴィヴィオお嬢様は、私たちが頂いていきます』

はやては答えない。ただ、通信画面に映っているオットーを睨みつけているだけである。

だが、オットーには分かっていた。はやてが、ほんの僅かな隙から大逆転を導き出そうとしていることに。

『……残念です。ディード』

「ＩＳ、ツインブレイズ、アップグレード」

ディードが何かを言った瞬間、はやての後ろで何かが二つ、倒れたような音がする。

不審に思ったはやてが振り返ると、そこには今までどおりアリサと、すずかと、ディードがいた。

だがアリサとすずかは地面に倒れ伏しており、ディードが持っていた光刀は以前と違いより巨大かつ不定形となっていた。

「な……」

何が。そう言う前に、はやての意識が薄くなっていく。

はやてが最後に感じたのは、背中の熱さと痛み、ガジェットが動き回る音、そしてとある声だった。

――「ＩＳ　レイストーム、アップグレード」――

『お分かり頂けたかな？　我々の戦力が。我々にかかれば、かの機動六課ですらこの有様だ』

本局の、公開意見陳述会の会場に備えられた巨大なモニター。そこに映し出されているジェイルが、モニターを見ているであろう次元世界の重役たちに話しかける。

『……何、我々は別に次元世界を侵略したいわけじゃないよ。安心したまえ。私はただ、宣言をしたかっただけさ』

「宣言……？」

モニターを見ていたカリムが、怪訝そうに呟く。

今回の事件の首謀者、ジェイル・スカリエッティ。彼の意思を明確な形で聞くのは、これが初めてだからだ。

次元世界の重役たちが見守る中、ジェイルがその口を開いた。

『私はこれより、美男子美女美少年美少女大ハーレム計画を開始する！』

「「「は？」」」

『私以外の生物と無生物全てがストライクゾーンである私に愛せない存在はいない！　だからみんな私のハーレムに』

『いい加減にしてください、ドクター』

何かくだらないことを語りはじめたジェイルを、金鎚で頭部を殴り倒すウーノ。ジェイルを見つめるその目は、さながらゴミクズを見るそれと同じものだったと、とある重役は後に語った。

『……コホン。私共のバカが失礼致しました。私たちが言いたいのはそういうことではありません。……私たちも所詮は小さな一団。この広大な次元世界で暮らしていくにはいろいろと苦労もあるかと思われます。そこで、我々は所謂”何でも屋”として活動していく方針を採っていくことを決定致しました。率いては、その宣伝に時空管理局のネットワークを利用させていただきます』

「馬鹿な！　そんなこと認められるか！」

レオーネが額に青筋を浮かべながら叫び散らす。それもそうだ。公共の施設の一部である時空管理局のネットワークを私的かつ勝手に利用するなど、禁止行為にも程がある。時空管理局ネットワークを掌握すると、次元世界の全てに影響を与えられるようになる。

その力は、個人や一団体の自由にしていいレベルのものではない。例えジェイルたちが後にネットワークの管理権限を時空管理局自体に戻すとしても、”奪われたという事実”は確かに残る、それを知ったいくつもの犯罪者集団は、我も我もと管理局のネットワークを掌握しようとするだろう。

そうなれば管理局は信用を無くし、やがて時空管理局という繋がりを無くした次元世界はバラバラになり、旧暦のような混沌とした世界になってしまうはずだ。

ミゼットを始めとする三提督とカリムが、互いを見合う。

偉大な先人たちが築いてきた平和な世界を、絶対に壊させはしない。その意思の元に行動を、彼女達は決意したのだ。

そして、その渦中にいる一人であるレジアスは、顔に悲観の表情を浮かべていた。

「こんな……こんな最悪な変態を……私は……」

「レジアス中将？」

レジアスの様子を怪訝に思ったシャッハが、レジアスに話しかける。

「あ、あぁ……すまない。大丈夫だ」

そう言い、目を伏せるレジアス。何かある、と感じたシャッハだったが、それ以上何か情報を引き出せるとは思えないと判断し、周囲の警戒に戻る。

苦しげに頭を抱え始めたレジアスを、オーリスは見つめていた。いつもの”自身の上官”としてではなく、”愛する父親”として。

## 第百四十二話　知られざる力、知らされる宣言（後書き）

はい、今回で明らかになったＩＳ（インフィニットストラトスじゃないよ！　インヒュレートスキルだよ！）のアップグレード。なかなか苦労しました。

・元の形から離れるような能力は不可。適当に付けたんじゃＩＳのアップグレードという立ち位置にする意味が無い

・しかし強力に。最低でも〇〇〇（六課側隠し切り札。文字数は合ってない）と釣り合うレベル。

という条件の元に作成していたせいか、ディード辺りでかなり詰まりまして。ツインブレイズとか剣出すだけだし。まぁ、読んでいただいてわかったように、しっかり設定を考えましたのでご安心を。

まだ完全に明らかになってはいませんが、もし「これ、俺の小説のパクリじゃねーか！」という方が後々にいた場合は、可能な限り早く対処するつもりですので、その場合はお手数ですがお知らせ頂けるとありがたいです。無論、ＩＳアップグレードだけに限らず、他の部分においても同様の対処をいたしますので、よろしくお願いいたします。

六課の敗北……と言いたいところですが、まだ一応六課の戦いは終わりません。

次回、魔法少女リリカルなのは　～Ｔｈｅ　Ｆａｎｔａｓｉｃ　Ｓ

ｔｏｒｙ～　第百四十三話　『激突　吼太ＶＳナンバーズ』

テイク、オフ。

※上記のサブタイトルは仮のものです。実際のサブタイトルとは違う可能性があります。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百四十三話　やりたいことを、やりたいようにやるだけだ！（前書き）

お待たせしました～。いやはや悩んだ。

今回、クアットロが喋ります。そりゃあもう喋ります。

どんな内容かは本編をご覧下さい。

# 第百四十三話　やりたいことを、やりたいようにやるだけだ！

Ｓｉｄｅ　三人称

「大丈夫か？　チンク姉」

ノーヴェが心配そうに話し掛けているのは、銀色の髪を持つ小さな少女、チンク。

先程、手術を終えて出て来たばかりだ。

「あぁ、問題ない。すぐにでも動けるよ」

スバルのＩＳ、振動破砕によって基礎フレームに至るまでダメージを受けていたのだが、ジェイルの神業とも言える手術によってほぼ完治していた。

「とはいえ、チンク。しばらくは大人しくしていないとダメだよ」

「これぞホントのドクターストップ～！　チンク姉、手術成功おめでとうっス～！」

「ありがとうウェンディ。ドクター、心遣いは感謝するが、惚れたりはしないからな」

「それは残念だ」

へらへらと笑いながら答えるジェイル。非常に変態らしい笑い顔だが、見慣れているナンバーズたちは、もはや引くことすらしない。

変態とも言えるジェイルにも、一つだけルールがあった。それは、【自分が楽しくないことは絶対にしない】ということだ。それ故にジェイルはナンバーズのみんなを犯したりはしていない。

「さて、チンクも直ったことだし……ちょっとみんな。そこに座りなさい」

チンクを労う声が止み始めたところを見計らい、ジェイルが先の戦いに参加していたナンバーズたちを座らせる。

不思議に思いながらも、断る理由はないためそのまま地面に座り込む面々。

そしてジェイルが口を開いた。

「何をしているんだ君達は！　だれが局員を殺せと言った！　特にチンク、ノーヴェ、ウェンディ！！　聞けばティーダ・ランスターという局員を心肺停止にまで追い込んだそうじゃないか！！」

「だ、だがドクター……あれは向こうが我々の予想以上に強かったからで……」

「実力不足を他人のせいにしない！」

「ひいっ！？」

いつもとは全く違う、怒りの剣幕にたじたじとなるチンク。

「で、でも結局のとこ相手は死んでないみたいっスし、結果オーラ

イってことで……」

「悪い部分を庇わない！」

「はいっスぅ！」

ウェンディがフォローに回るが、むしろ火に油を注ぐ結果にしかならない。

ジェイルが目指していた無血制圧。これはジェイルたちの未来にとても重要なことだった。無血制圧というのは言わば、「相手を殺そうが殺すまいが、どっちにしろ我々にはたいした違いではない」といった、圧倒的な実力差を暗に示す行為だ。これを最初に示すことで自分達の”戦力”をアピール。まずは傭兵紛いのことをしながら、徐々に他の能力もアピールしていき、それが口コミで広がることで、ナンバーズを次元世界に広めようということだったようだ。

「せっかくそのための拠点として、ゆりかごを修理していたというのに……。これじゃ台なしになりかねない！　何より僕のハーレム（予定）から人が減るなんて、実に由々しき事態だよ！」

「「「いや、ドクターのハーレムは正直どうでもいいんですけど」」」

「一斉に否定された……だと……！？」

何故かお笑いのような雰囲気になってしまうのは、やはりジェイルが原因なのだろう。

「コホン……まぁ、起きてしまったことをいつまでもうだうだと言

っていても仕方ないか。各員、第二ラウンドに備えて解散としよう。……ウーノ、クアットロ」

「はい」

「わっかりましたわ～ん♪」

呼んだ二人を引き連れ、ジェイルが部屋から出ていく。

「いや～、しっかしドクターが怒るなんて珍しいね～」

セインがチンクに肩を貸して立ち上がりながら言う。

「あれも大概な変態だが、一応我々が社会で独立する場合のことを考えて教育プログラムを組んでいるらしい。ドクターなりの教育のつもりなんだろう」

トーレが腕を組んだ体勢で言う。

ジェイルは社会を知らない。何者かに生み出されてから、その人物のカゴの中で育ち、ようやく表舞台に出て来たのだ。それまでは誰にも知られていない研究所で、ただただ研究をさせられていた。

だが、あるとき彼は変わった。きっかけは、情報収集の一貫として閲覧していた投稿小説のサイト。そこで偶然見かけた、ハーレム小説。

何気なく読んでいく内に、次第に引き込まれていった。内容そのものではなく、”複数の人間に愛され、そして愛する関係”そのものに。

そこで彼の欲望が花開く。「自分もこうなりたい」「自分も幾人もの他人から愛され、愛す存在になりたい」、と。

故に彼は「誰もが喜ばない」ことを好まない。無理矢理他人を自分のものにしても、それは偽りの悦び、偽りの愉しさ。彼が望んでいるのは言わば、【心通じ合うパートナー】。

だが、その世界を作るのに管理局はあまりに邪魔だった。自分を作り出し、道具のように利用している管理局。彼らがいる限り、自分に自由は無い。

ならば、壊せばいい。元々、一部の”管理局という名前だけを利用する悪人”が生み出す歪みに、次元世界は苦しんでいた。ならば一度この平和を壊し、管理局に代わる存在に再び平和を完成させる。我々は新管理局が生まれるまでの間、各地の紛争を制圧しながら善行をし、最終的には新管理局の傘下に下り、新管理局の影響力を強める手伝いをする。この立場なら、例え最高評議会のような存在だろうとおいそれと手出しはされないだろう。

それが、ジェイルの計画の全て。そのための戦力が、ＡＭＦを搭載した”対魔導師戦力”であるガジェット、強力なＩＳを持つ”対質量兵器戦力”である戦闘機人。その二つだったのだ。

常識を知らない天才ですらまだ見ぬ世界を憂い、平和を作ろうとする。この世界は平和という仮面の裏で、どれほどの涙を流してきたのだろうか。ジェイルにそれを知るよしはない。

尤も、”とある存在”との結託により、ジェイルの計画は僅かに変化し始めているのだが。

「さて、お前たちはこれからどうするつもりだ？」

「私はこれからオットー、ディードと共に空戦シムでトレーニングを」

「私たちは身体洗浄のつもりっス！」

トーレの問いにセッテとウェンディが答える。

「そうか。なら行ってこい」

「了解っスー！」

トーレが言ったや否や、走りはじめるウェンディたち身体洗浄組。対しセッテたちも軽く頭を下げて移動を始める。残ったのはトーレとチンクの二人。

「お前は行かないのか？」

「戦闘行動は禁止されているし、そもそも私に空戦適性は無い。身体洗浄は先程済ましたばかりだしな」

「そうか。……しっかり身体を直しておけよチンク。妹たちだけでは心配だ」

トーレが軽く息をつきながら言う。戦闘機人として高いレベルで完成しているのは、ウーノやトーレ、クアットロやチンクといった所謂”姉”の立場になりやすいメンバーばかり。他のナンバーズは感情豊か過ぎて”機”人としては不安定であり、逆に機械的過ぎて機

”人”らしくないといった特徴があった。

それが悪いというわけではない。だが、もう少し大人らしくなってほしいし、人間らしい感情も出して欲しい。それがトーレのひそかな願望だった。

「……汚れ役は、私たちだけでいい」

「そう、だな」

トーレとチンクの二人は、共に初期から動いている戦闘機人のため、比較的付き合いが長い。

その過程で、知ってしまったのだ。醜い欲望の一片を。戦闘技術はもちろんのこと、精神までもが未熟だった彼女達が味わった、最悪の屈辱。

自身らに向けられる下卑た目付き、品定めするような目線、身体の隅々まで見られる屈辱。痛み。絶望。

それを行った連中を”処理”したときから、トーレとチンクは悟り、決意していた。

――ドクターが知らない、見れなかった裏の連中は、我々だけで処理する――

事実、二人の手だけは血に塗れている。協力してくれているウーノや”2”も、そのことをよく理解しており、彼女らが時々”散歩”

に出掛けるのを黙認していたり彼女達の手伝いをしてくれることもあった。

「さて、そろそろ私も治療ポッドに戻ると――」

チンクが話を切り上げようとしたとき、施設全体に轟音が響き渡る。

「何事だ!?」

『トーレ、侵入者よ。詳細は不明ですが、地表から一直線に突入してきたことから想像するに……』

「……奴か」

「殴り込みに来たぜコンチクショォォォーーー!!!」

トーレが正体を予想した瞬間、施設中に咆哮が響いた。

Ｓｉｄｅ　吼太

さて、威勢よくタンカきったのはいいが……

「ここはどこだ？」

ギガドリルブレイクで真っ向から突入したのはいいが、現在位置が分かんねぇな。

答えを出す者（アンサートーカー）はまだリミッター解除されてる範疇にはないし、螺旋界認識転移システムを発動出来るほど強力な螺旋力もまだ使えない。いつもはトゥードがいつの間にかサーチを済ましていてくれるんだけど……

「六課に置いてきちまったしなぁ……」

壊滅的被害を受けていた六課の後処理のために、リームやトゥード、魔導書娘達を置いてきちまったからなぁ。念のためフラウリーナ三姉妹のリミッター解除もしといたし、六課はもう心配ないんだが、自分自身がどうなるかを考えてなかった。

……しゃーない。

「行ってこい！」

メモリガジェットたちとバガミール、それに大量のカンドロイドを放ち、探索に向かわせる。質が選択出来ないなら量だ。

さらにオレ自身も、物質を透過して見ることが出来る眼鏡型／蝸牛型メモリガジェット、デンデンセンサーを使って、移動しながら捜

す。

捜しているのは他でもない、ヴィヴィオとギンガだ。

はやてからヴィヴィオをさらわれたと聞いたオレは、居ても立ってもいられなくなり、ヴィヴィオ達の捜査に飛び出した。

軽率な行動、それは自分でも分かっている。だが、どうしても止められなかった。今動かなければ、自分の中にいる”ナニカ”が暴れだす。そんな予感がしたからだ。

――勝手な行動をとったんだ。それなりの結果は出さなきゃな。

「ヴィヴィオとギンガを……返してもらうぜ……！」

やがて一機のカンドロイド、タカカンが何かを見つけたことを伝えてくる。

「そっちか！」

逸る気持ちを僅かに抑え、あくまで冷静にスカリエッティの基地を進んでいく。あちらこちらで道が分かれており、タカカンの案内が無ければたちまち迷ってしまいそうだ。

そのまま道を進んでいき、やがて大きな扉の前に出る。

迷わず扉を開け、中に入る。中は意外にも広く、空戦も容易に行えそうなほど天井も高い。

だが、それだけ。ヴィヴィオもいなければ、ギンガもいない。ただ

のだだっ広い空間があるだけ。

「……チッ」

思わず舌打ちをしてしまう。タカカンがバカな訳ではない。バカなのはむしろ、オレだ。

オレはすっかり失念していたのだ。相手側の戦力を。

「はぁ～い♪　ここで行き止まりですわぁ～」

そんな甘ったるい声と共に、オレがさっき入ってきた扉から、何人かの女性が入ってきた。ここはスカリエッティの秘密基地。なら、ここに存在している女性は決まっている。

背中越しに感じた”ナニカ”を、直感を頼りに避ける。避けるのと同時にハンドソニックを展開し、追撃を弾き返すのも忘れない。

「……」

オレに弾き返されるも、空中で体勢を立て直しつつ、元いたらしい場所に着地する双つの光刀を持つ女性。

その場には１１人の女性が集まっていた。つまりは、スカリエッティ基地にいるナンバーズが全員集合している、ということになるな。

「……さて、オレの用件は分かってるよな？」

「勿論」

ナンバーズを代表してクアットロが答える。

「なら話は早い。……ヴィヴィオとギンガを返せ。今すぐだ」

「それは無理な相談というものです。あの二人は言わば私たちの”同士”。同士を誘拐犯の魔の手から取り戻すのも、守り抜くのも私たちの役目ですから」

「笑わせるな。誘拐犯が誘拐犯呼ばわりかよ」

オレが言うと、何故かクアットロが笑い出す。

「……？」

「何故笑ったのか分からない。そんな表情をしてますわね。……いえ、あまりにも無知なのがかわいらしくてつい」

かわいらしい、と言われてムッとした表情になる吼太。

「タイプゼロ・ファースト、聖王陛下。互いにドクターが造ったか造ってないか、戦闘機人か人造魔導師かという違いはありますが、共通していることだってあります。その一つが、【いずれも、管理局員によって”保護”という名目で連れ去られている】ということ。タイプゼロ・ファーストはクイント・ナカジマによって。聖王陛下は不明ですが、まぁさしずめ最高評議会の誰かの差し金でしょう」

「……それのどこが問題なんだ。最高評議会はまだしも、ギンガのほうは間違いなく保護じゃねぇか」

オレが言うと、またもクアットロは愉悦に顔を歪める。

「タイプゼロ・ファースト……ＩＳを発動出来るよう調整された、言わばＩＳ試験型であるタイプゼロ・セカンドと違い、ＩＳを持たない本当の意味でのプロトタイプ戦闘機人。……まさか、最初の戦闘機人がたった二人だけだとでも？」

まるで二人だけでは無い、と言いたげなクアットロ。一拍置き、再び話しはじめる。

「クイント・ナカジマを始めとする、優秀な魔導師の遺伝子を用いた最初の戦闘機人計画……当初は０～１３の１３人、戦闘機人が造られる予定でしたの。でも、最初に造った戦闘機人タイプゼロは、ＩＳを発現出来ない失敗作。故に、同じ細胞を用いて何回もクローンを作成したんですわ。ＩＳを自然発現する個体が出るまで、何回も」

クアットロがウィンドウを開き、どこかの研究施設の内部風景を表示する。

大量に並んだ成長促進カプセルの中に浮かぶ、瓜二つの外見を持つ幼児。だが、ウィンドウに浮かぶ写真が移り変わるうちに、だんだんと幼児の身体に欠損が見えはじめる。１０枚もめくる頃にはもはや幼児の姿は無く、あったのはただの肉塊だった。

「でも、次第に戦闘機人どころか人間そのものを造ることさえ出来なくなっていった。理由は今だに不明。当時は”呪い”とも騒がれましたわ。結局、自然発生は不可能という結論に行きつき、戦闘機人として改造する際に外部からＩＳを埋め込む方向に転換しましたの。選ばれたのは、大量生産されたクローンの中で、資質も身体的特徴も限りなく近い出来だった、１番最初のクローンタイプゼロ。

結果、二人のタイプゼロは区別のためにオリジナルをファースト、クローンをセカンドとし、まだ改造のなされていなかったタイプゼロ・セカンドにのみＩＳが搭載された、と。……さて問題。管理局が行ったこの一連の実験に使われているクイント・ナカジマの細胞。どうやって手に入れたのでしょうか？」

クアットロが満面の笑みで聞いてくる。

「髪の毛かなんかを拾ったんだろ。培養を使えば数だって足りる」

「残念～。正解は～……”とある次元世界に住んでいた少女を誘拐し、細胞を採取した”ですわ～」

……おい、冗談だろ？　それが本当なら……

「そう、クイント・ナカジマ……いえ、リネア・オースチンちゃんは、数十年前に拉致され、洗脳によってミッド人と刷り込まれた、管理局の被害者なんですわ」

知りたくもない情報を伝えられ、オレの中の”ナニカ”が僅かに疼いた。だが、それを抑える。

クアットロは話を続ける。

「おかしい話だと思いません？　クイントさん、天涯孤独のまま管理局で働きつつ生活していたんです。　孤児という扱いながらも、”何故孤児だったのか”、”どこから来たのか”という情報も知らされずに。ただ定期的に細胞を採取され、働かされる。ようやく頼れる上官が出来、愛する人が出来、幸せの絶頂だったのに、何の不幸か……」

クアットロが大袈裟なリアクションをする。

「……貴方なら知ってますわよね？　クイント・ナカジマの死体は見つかってないこと。……実はあの時。ドクターが戦闘機人プロジェクトを再生し、製造プラントの一つにゼストさんたちの部隊が突入してきたあの時、不思議な現象が起きたんですわ。ゼスト隊と私たちが睨み合いを続けていると、突如クイントさんの足元辺り……ちょうどプラントの動力炉から光が飛び出し、辺りが閃光に包まれました。光が止んだとき、そこにはクイントさんの姿はありませんでしたわ。……それだけでなく、ゼストさんも全身ボロボロ、チンクちゃんは片目を失っていた……さらに奇妙なのは、同じくその場にいたメガーヌさんは外傷が無い代わりに、何故か子供を宿していた……。この四人の共通点はいずれも差はあれどベルカの血を引いていること。そして、その時の動力炉に使われていたのは、古代ベルカの遺産、ロストロギア【レリック】。……ドクターはこの現象を研究し、この現象が転移現象に比較的似ていることまでは突き止めましたわ。……でも、ミッドの環境じゃそこまでが限界。だからドクターは、自身の故郷とも言えるアルハザードへ向かうことを求めたんです。アルハザードに眠る超科学力があれば、この現象の正体が突き止められると思い。……そしてドクターの予測が正しければ、クイント・ナカジマはどこか転移先で生きている可能性がある。……なら、娘である彼女達を連れていくのは当然でしょう？」

「本人たちの意思確認も無しでか」

「彼女達が……特にギンガさんが断るとでも？」

言葉が詰まる。母親の記憶を持つギンガが断るかどうか……正直、分からない。でも多分、ギンガは断らない気がする。

「クアットロ、もうお喋りはいいだろう。我々の目的は目の前の侵入者を排除することだ」

「あら、思わず」

トーレに言われ、クアットロが舌を小さく出して自身の頭を軽く小突く。可愛さをアピールしているつもりなんだろうか。

「さぁ、お手合わせ願いましょう。管理局最強の魔導師」

後ろに控えていたウーノが言うと、ナンバーズの全員が戦闘体勢に入る。

オレも拳を構え、いつでも動けるようにする。だが、オレの心は未だ、戦う気持ちになっていなかった。

今まで知らなかったことを知らされ、場合によってはギンガが自分の意思でスカリエッティ側に行きかねない事実。

それが、オレの心という名の湖面に波紋をたてる。波紋は波となり、オレの心を揺らがせる。

ほんの僅かな、一瞬の隙が出来る。

次の瞬間、オレの全身に激痛が走った。

Ｓｉｄｅ　三人称

吼太が纏う赤い鎧に亀裂が走る。

ナンバーズ全員の攻撃が吼太に当たったためである。機械のような正確さを持つ彼女達にとって、一瞬の隙をつくなどあまりにたやすいことだ。

「……存外脆いな。最強も」

トーレが言う。他のナンバーズたちも、「勝負は見えた」と言わんばかりの表情だ。

だが、ふと気づく。吼太が”笑っている”ことに。

「――――ありがとよ。おかげで頭が冷えたぜ」

傷だらけのボロボロの状態。だが、吼太が発する闘気は先程とは比べものにならない。まるで、傷口から闘気が溢れ出ているようだ。

「一つだけ聞く。お前らがヴィヴィオをさらった時、ヴィヴィオは泣いていたか？　ギンガは泣いていたか？」

吼太がナンバーズたちに聞く。

「……肯定だ」

代表してトーレが答える。

「ならオレがやることは簡単だ。……オレはヴィヴィオとギンガを連れ戻す」

「先程の話を聞いてませんでしたの？」

「聞いてたさ。よーく聞いてたよ。……でも生憎だったな。オレはバカだから、小難しい話は嫌いなんだよ。だから今は、オレのやりたいことを、やりたいようにやるだけだ！」

「……随分と傲慢な考えね」

ウーノが言う。

「言ってろバカヤロウ！　オレを誰だと思っていやがるッッッ！！！」

吼太の言葉はやがて、咆哮へと変わる。迷いを蹴飛ばし捩伏せた今の吼太に、心理戦など無意味だ。

それをナンバーズたちも理解したらしく、全員が警戒を強める。

「ディードちゃん！」

「はい、クアットロ姉様。ＩＳ、ツインブレイズ、アップグレード」

ディードがいきなりアップグレードしたＩＳを発動する。並大抵の力では吼太を止められない。そう判断した故の選択だ。

「早々に終わらせましょう」

ディードが巨大化した光刀を挟むように振るう。中央に捉えられた吼太。逃げるには時間が足らない。勝負あり、やはりこの選択は合っていた。そうディードは確信する。

だが、ディードは知らなかった。吼太という存在がどれほどの高みにいるのかを。彼女がいかなる選択をしたところで、吼太は”その選択を超えてくる”ということを。

「……相乗掛合（クロスオーバー）！」

吼太がハンドソニックを出し、ディードの光刀を受け止める。ただそれだけ。なのに、ディードの顔は驚愕に歪んでいた。

「そんな……何故！？」

「簡単さ。”回帰”《もど》したのさ」

スカリエッティ作戦闘機人のＩＳには、特殊な追加システムが搭載されている。それがアップグレードだ。

強力かつ数も多い管理局や、質量兵器を始めとする凶悪な犯罪者を相手取っても圧倒出来るように搭載されたそれは、言わばナンバーズの切り札。

ディードのＩＳ、ツインブレイズの場合は、【光刀で攻撃した】という事実を、【相手を倒した／殺した】として扱う力が範囲無制限に発現する。即ち、アップグレードを発現したディードが一度剣を振るえば、それだけで周囲の敵は全て無力化されるのだ。アリサとすずかが負けたのも、防御が間に合っても【攻撃した】という事実

は確かにあったからだ。

だが、吼太はそれを、【ゴミを木に変える能力】のＬＶ２、回帰（リバース）を使うことで無力化した。

ＡをＢに変えようと、強制的にまたＡに戻してしまう力。天界力という一種の全知全能の力にも通用するソレからすれば、”事実改変”を無効化することなどあまりにたやすい。

吼太は受け止めた光刀を弾き飛ばし、体勢の崩れたディードの腹部に脚を当てる。

「アトランティス……ストライクッッッ！！！」

断鎖術式により発生した強力な斥力が、ディードを吹き飛ばす。

「ぐ……くっ！」

壁にぶつかる直前で何とか止まり、吼太を睨み付ける。

「全力でかかってこいよ。全員纏めて返り討ちにしてやる」

彼と対峙する彼女達は実に不幸だ。何故なら……

……最強の魔導師のポンコツエンジンが、かかり始めてしまっていたからだ。

## 第百四十三話　やりたいことを、やりたいようにやるだけだ！（後書き）

はい、というわけで吼太がバカ宣言するお話でした～。

前書きでも言いましたが、今回は非常に悩みました。クイントさんの過去設定が難しくて……一時的に、クイントさんが日系ミッド人だと勘違いしてましたし。↑

そして悩んだ末に、ナンバーズとの対決はまだ続くことに。↑

いや、長さ的に一話になっちゃったんですよね。仕方ないね。

とりあえずＩＳのアップグレードの定義だけはディードのものを例代わりに先行公開。つまるところ、既存の能力を元にそれを拡大解釈する、みたいな形にして考えたりしてます。

悩んだのはディードとウェンディ。この二人のＩＳは地味過ぎて……。ウェンディのは量産を視野に入れられてしまっているし、ディードのはあまりに単純で……。まぁ、全員分しっかり考えてありますのでご安心を。ノーヴェの分だってあります。だいたいは次の話で見せますが、一部メンバー（２番とかね）はお預けになるかと。

さて、次回は戦闘回。比較的早く書け……るといいなぁ。まだゆりかご浮上すらしてないし。

ギンガの設定は何となくです。なんかギンガのＩＳって出て来て無

いし、そもそもなんでファーストやらセカンドやら言うのか気になったんで、妄想と偏見で理由を設定しちゃいました。というわけなんで、この小説ではそういうものだと理解をお願いしたいです。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百四十四話　コータ君の大誤算（前書き）

圧倒的長さ！　ナンバーズとの戦いを予定通り終わらせようとしたら１５０００文字以上になっちゃいました～（笑）

……二つに分けるべきだったかなぁ？

# 第百四十四話　コータ君の大誤算

Ｓｉｄｅ　三人称

「下がってるっスよディード！」

腹部に強い衝撃を受け、呻いているディードを庇うようにウェンディが立つ。

「ＩＳ、エリアルレイヴ、アップグレード！」

ウェンディがライディングボードを取り出しながらＩＳを発動する。

「”雷皇”《ライコウ》発動！　行くっスよ！！」

ウェンディがその言葉を言った瞬間、ライディングボードの形状が変化する。まるで雷のような意匠を持つ形態。ウェンディがそれに乗り、飛行を始めた。今までとは段違いの速さだ。

ウェンディのＩＳのアップグレードはライディングボードの性能と自身のＩＳ、即ち”射撃”、”防御”、そして”飛行”を強化する多機能タイプ。雷皇は飛行強化に値する。そしてその飛行速度はまさに雷そのもの。

「……速いな。だが！」

吼太が目を閉じ、右手を構える。

そして、目を開く。

次の瞬間、ウェンディは地面にたたき付けられていた。

違いがあるとすれば、吼太の右腕から生えた黒い、触手のようなドリルが網の目のように張り巡らされていた。

「それだけだ。最大速度にお前の脳が耐え切れてない」

そう、大量に張り巡らされたドリルに、避けきれなかったウェンディが自分から激突したのだ。

「くっ！　”炎帝”《エンテイ》発動！」

ウェンディがライディングボードを吼太に向けると、またライディングボードの形状が変化する。今度は燃え盛る炎を思わせる形態だ。

「エリアルキャノン・バースト！」

ウェンディがさながら火山の噴火とも思える砲撃を放つ。熱量、威力、範囲。受ければただでは済まないことは容易に想像がつく。

「しゃらくさい！　ポジトロンレーザー！！！」

吼太が対抗して、右腕に装備した砲頭から巨大な砲撃を放つ。

拮抗、威力としては同等といったところか。ウェンディが推測する。

「ウェンディ、左だ！」

突然ディエチが叫ぶ。左を見るウェンディ。その方向からは回転す

るグレンブーメラン――吼太の胸部についているグラサンだ――が向かって来ていた。

「っ！　”水君”《スイクン》！」

ウェンディがライディングボードを向け、また形状を変化させる。その瞬間、ポジトロンレーザーとグレンブーメランの速度が無くなる。ライディングボードの形状はさながら流水を思わせる。

炎帝は爆発的な攻撃力をウェンディに与える力。その威力は火山の噴火とほぼ同等。大自然の持つ威力にも匹敵するのだ。その威力は計り知れない。

そして水君は防御の強化。一定範囲内全てに影響を及ぼすその効果は、『攻撃速度、威力の減衰』。さながら水に飛び込んだ石のように、全ての攻撃はゆるやかになり、削られていく。

ウェンディはこの三つをうまく使えば姉妹の中でもなかなか強い位置にいると自負し、自信を持っていた。だが、この時ウェンディはまだ知らなかった。自信からくる慢心もあるということを。

気づいたのは、水君を発動した数秒後。ウェンディが何か行動を起こすには、あまりに遅すぎた。

「つべこべ言わずにィィィ……」

「へっ？」

「喰らっとけキィィィック！！！！！」

そう、全速力で走ってきた吼太のキックだ。水君は範囲防御ではあるのだが、その性質上、ある攻撃には弱かった。生身の近接攻撃、そして高速移動からの一点集中攻撃だ。

肩のブースターを吹かしてさらに加速し、キックをウェンディにぶつける吼太。必要最低限の螺旋力を用いて、最大の効果を得る戦闘技法、【旋闘術】。その要点を折り込み、エネルギーの減衰をも感覚的に計算し、放った一撃。それはウェンディの意識を刈り取るのに十分な威力を持っていた。

ウェンディが倒れたことにより、水君のフィールドが解除される。吼太は飛んできたグレンブーメランを受け止め胸部に戻し、同じく飛んできた、自身の放ったポジトロンレーザーを片手で弾く。

「さぁ、次はどいつだ！」

吼太が叫んだ瞬間、砲撃が飛んでくる。右手に銀色に鈍く輝くドリルを出し、弾き飛ばす吼太。ナンバーズ１０、ディエチのヘヴィバレルから放たれた砲撃だ。

「お前か。砲撃バカの相手なら手慣れたもんだってな！」

吼太が空間そのものを相乗掛合することにより行った擬似的な瞬間転移でディエチの後ろに移動し、拳を振るう。砲撃型の戦士は基本的に近接戦闘が苦手だ。いくら素晴らしい空間把握能力があろうと、砲頭が向くまでにその攻撃は終了している。

ディエチも拳が当たる直前に攻撃には気づいたが、砲頭を向けるには至らない。

「ＩＳ、ヘヴィバレル、アップグレード」

だが、不意に吼太の拳から力が抜ける。そして、代わりと言わんばかりに砲頭が吼太の腹部に当てられた。

「お返しだよ」

”先程より吼太の拳の一撃分強力な”砲撃が吼太に浴びせられ、吼太の小さな体が吹き飛ぶ。

ディエチのＩＳのアップグレードはウェンディの水君と同じ範囲型。だがその効果は減衰ではなく、”吸収”。自分の周囲１ｍにかかるエネルギー全てを砲撃に変換して放つことが出来るのだ。

「どれだけ強い攻撃をしてきても、全て自分に跳ね返る……言わば自業自得さ」

ディエチが言う。先程の砲撃には確実な手応えがあった。勝利を確信する。

だが、気づく。砲撃により発生した煙が晴れた時、吼太が何事も無かったかのように仁王立ちしていることに。

「な……！？　あれだけの砲撃を受けて平然としている！？　痛くないのか！？」

信じられない事態に、驚愕を隠せないディエチ。そんなディエチに、吼太が返事を返す。

「痛い！　だが痛くない！」

「どっちだ！？」

「例え地獄の針山だろうと……痛くないと思えば痛くないッ！」

無茶苦茶である。

つまりはやせ我慢なのだが、それを素知らぬ顔で……ましてや、強力なディエチの砲撃を受けてもやせ我慢を続けるには、よほど強固な精神が無ければ不可能である。

あまりの事態に、つい呆気に取られてしまうディエチ。心境を表すとするなら、「んなムチャな……」と言ったところだろうか。

「行くぜ！」

吼太がジッパーから赤い鳥のような、まんじゅうのような奇妙な生物を取り出す。

……否、それは生物にあらず。赤く燃え滾る武者魂に彩られたそれは、【赤備えの鎧】と呼ばれる、偉大な将軍の鎧。秘められた力は、まさに一騎当千。

「ゾナー！」　訳：何すんだバカヤロウ

「痛っ！　蹴るなこのバカ鳥！」

……自我が強い故、非常に扱いづらいのではあるが。

「まぁいい！　行くぜ！」

クロスオーバーフォームを解除した吼太とゾナー（赤備えの鎧）が融合を始める。赤い鎧に彩られた腕、脚が顕現し、ゾナーの顔が鳥を模した胸部装甲に変化する。肩にも巨大なアーマーが装備され、背中にはバックパックが現れる。

そして現れる頭。眼帯により隻眼となったその瞳に、武者魂が宿る。

「武者将覚醒（むしゃしょうがくせい）！　武者〇秘将軍！！！」

「姿が変わった！？　……データには無い。なら！」

ディエチが周囲に存在する、〝空気が流動するエネルギー〟を吸収しはじめる。正体が分からなかろうと、強力な砲撃で全て消し飛ばしてしまえば同じと判断したのだ。

だが、武者〇秘将軍は冷静に戦況を判断し、行動に移る。

「突来四連打（つらいしれんだ）！」

両肩の巨大なアーマーを組み合わせて、弓のような形にすると、そこから小さな支援機が四つ飛び出す。武者〇秘将軍の意思に呼応して自在に飛び回るそれは、ディエチを四方八方からビームで狙い撃つ。

「なっ！？」

通常、魔導師の放つ誘導弾はどんなにタイミングをずらそうと、〝一つの魔法〟である。また魔導師は誘導にマルチタスクを裂かれてしまうため、他の攻撃が疎かになりやすい。またスフィアを経由し

た魔力弾連射魔法の場合でも、スフィアの調整にはやはりマルチタスクを裂かれてしまい、攻撃は疎かになる。故に狙撃が得意なディエチからすれば軌道の予想もしやすく、さほどの脅威足りえない。万一避けきれずに当たりそうな場合も、アップグレードを発動すれば無効化出来る。

だが、突来四連打により飛び立った兵器、【全自動”赤群兵”《おまかせ　あかんべえ》】は、最初に意思を受けてからは自動的に攻撃を行う、言わば自律兵器。そのためディエチは実質、”近距離で四人の魔導師と戦っている状況”に追い込まれる。

「ぐっ！？」

ディエチの左肩をビームが掠る。ここに来てアップグレードを利用した実戦経験の無さが祟ってしまった。ディエチのアップグレードの欠点――効果発動対象が複数かつ四方八方にいると吸収効率が下がってしまう――ことが明らかになってしまったのだ。そして、何より本体である武者〇秘将軍自身が完全にフリーになってしまっていることが、ディエチにさらなる焦りを感じさせる。

そして、とうとう武者〇秘将軍が動き出す。

背中のバックパックに刺さっている、二振りの剣。

名刀　出任勢（でまかせ）【運知大】《うんしだい》。二種類の刀が納められているそれは、例え鎧の持ち主だろうと造り手だろうと、引き抜く時までどちらが出るか分からない。ギャンブル性が非常に高い刀である。

武者〇秘将軍がそれを引き抜く。出てきたのは……

「なんだ、あれは……！？」

――刀身が短く、先は丸く、揚句の果てには刀身そのものに”ハズレ”と書かれた、とても剣とも言えないおもちゃ。

あまりの意味不明さに、ナンバーズ一同が呆気に取られる。

だが、対峙しているディエチは感じていた。目の前の漢が、まだ終わっていないことを。

武者〇秘将軍が、ハズレの刀を構える。ただ短いだけでなく、あまりに脆そうなそれは、戦いには到底使えそうにはない。だが、武者〇秘将軍がそれを鞘に戻す気配は無い。

「刀が有ると思えば……」

刀を持ったまま、突進を始める武者〇秘将軍。肩に装備されたアーマーのスラスターが火を噴き、さらに加速する。

「こ……のぉッ！」

ディエチが苦し紛れに砲撃を放つ。だが、武者〇秘将軍は避けるそぶりなどなく、むしろさらに加速する。

そして、運知大ハズレを振りかぶり……

「――――在るッッッ！！！」

……砲撃を斬り裂いた。

砲撃を打ち破った運知大ハズレの刀身は、何やらビーム状のエネルギーに包まれている。

刀が有ると思えば、在る。思い込みに武者魂が呼応し、武者魂そのものが刀となることで、不可能を可能へと変えたのだ。

もはや武者〇秘将軍を妨げるものは何一つ無い。鎧が持つ”ルール”ですら、今の武者〇秘将軍を止めることは出来ないのだ。

運知大アタリでのみ発動出来る、武者〇秘将軍の秘奥義。だが、今の武者〇秘将軍になら運知大ハズレだろうと、秘奥義の発動は可能。

その名を……

「頑駄無流秘奥義……〇秘無刀斬！！」

ビーム刀と化した運知大ハズレが、ディエチの意識を刈り取った。

「戦闘機人軍団……恐るるに足らず！！！」

「何カッコつけてんだ……よ！！！」

武者〇秘将軍に飛び掛かるノーヴェ。今度は彼女が相手のようだ。

「ぐっ！」

運知大をもう一本引き抜く。こちらは当たりのようであり、運知大アタリが引き抜かれた。

二本の運知大でノーヴェの蹴りを受け止める武者〇秘将軍。

「まだまだァ！　ＩＳ、ブレイクライナー……アップグレード！」

ノーヴェがアップグレードを発動させ、エアライナーで道を造る。しかし、その”道”は今までと違い、平面的ではなく筒状になっていた。

その道に乗り、走り出す。

「突来四連打！」

武者〇秘将軍が突来四連打でノーヴェを狙い撃つ。赤群兵から放たれるビームは並大抵の防壁などたやすく貫く。それはノーヴェのエアライナーとて例外ではない。

……いや、例外ではない”はずだった”。

「貫けない！？」

いくら攻撃しようとノーヴェの進行を止めることが出来ない。出力では明らかにエアライナーが受け止められる威力ではないのに、エアライナーの道を貫けない。

これが、ノーヴェのＩＳのアップグレードの力。いかなる手段を持ってしても邪魔されない、邪魔出来ない”道”を作り出す。アップグレードのもう一つの力である身体能力の強化と重なり、ノーヴェは必倒の拳士となる。

「まずい……！　ゾナー！」

吼太がゾナーと分離し、ゾナーをジッパーの中に戻す。そして、ノーヴェの右肩に装備された狼の顔から、莫大な気が放たれる。

「ファングウルフ……ファイナルアタック！！！」

「吼太が一人でスカリエッティのとこに殴り込みに行ったァ！？」

「声大きいよアリサ！」

病院でベッドに横になっていたアリサが、大声をあげる。

すぐに近くにいた看護師に窘められ、赤面するアリサ。

一区切りついたとこで、またリームが話しはじめる。

「吼太、今回のことでかなりぷっつんって来ちゃったみたいでね。僕たちが止めるのも聞かずに……」

「で、アンタたち置いて行っちゃった、と」

「うん……」

「はやてたちにはもう言ったの？」

「あぁ、それは大丈夫。それにはやてはそれも予想してたみたいで、今は吼太のリミッターをもっと外せるように本局に掛け合ってくれてる」

「ホントあのバカは……」

アリサが頭を抱える。ディードのＩＳ　アップグレードにダメージはないものの、念を入れて入院しているアリサ。だが、せっかく早く済みそうな退院予定が延びてしまうかも、と思えるほどに頭が痛かった。

「僕らも何とか頑張ってるけど、六課があの状態じゃ迂闊に動けないし……」

「……信じるしか無いわね。あのバカを」

しっかり元気で帰ってくるのよ。そうアリサは考え、再び療養に専念し始めた。

煙が晴れ、そこから吼太の姿が現れる。

「チッ、無駄に頑丈だ……！」

ノーヴェが舌打ちをしつつ、距離をとる。ファイナルアタックを使用したというのに、スバルやギンガのような極度の疲労が見えない。

スカリエッティの改造によりエネルギーの貯蓄最大値が増大したこともあるが、1番の理由はノーヴェの後ろ腰についているデータウェポンである。

マウステイルと呼ばれるそれは、タービンのついた尻尾を装着者に与える。そこにデータウェポンを装備することも可能なのだが、今回肝心なのはその力。

イントラネットチャージと呼ばれるその力は、あらゆる行動により消費されるエネルギー量を減らすことが出来る。それは、ファイナルアタックとて例外ではない。

以前スバルたちと対峙したときにはシープランチャーしかデータウェポンを持っていなかったノーヴェも、今や四体のデータウェポンを従えていた。この短期間でデータウェポンを三体も完成させた、

スカリエッティの技術力が伺える。

「両肩に腰回りに装備するデータウェポン……偶然か？」

「何ごちゃごちゃ言ってんだ！」

ノーヴェが左肩に装備したハサミで吼太を斬り裂こうとする。

「そっちがハサミならこっちは鎌だ！」

吼太がジッパーから大鎌威太刀と呼ばれる鎌を取り出し、ハサミを受け止める。

「……ッッ！？」

だがハサミは大鎌威太刀を豆腐のように斬り裂いてしまう。大鎌威太刀を囮にハサミから逃れる吼太だが、その表情は優れない。

今まで吼太が善戦していたのは、ナンバーズたちが一対一の戦いを挑んできていたからだ。それ故に力量差と相性のいい能力を駆使することで互角以上の戦いを行うことが出来ていた。

だが、もし一対二、一対三の戦いになったなら、結果は分からなくなってしまう。ナンバーズ全員が襲ってきた場合、いかに吼太が有利な能力を持っていようと敗北は免れない。

ここに来て、吼太は自身の判断を悔やんだ。せめてトゥードかリームか、魔導書娘達の誰かがいれば……

「……過ぎたことを悔やんでも仕方ねぇか……！」

吼太が右手に魔力を集中させ、構える。正面からノーヴェを迎え撃とうというのだろう。

「ハッ！　おもしれぇ！」

対しノーヴェが真っ向から突っ込んでくる。吼太の挑発に乗った形だ。

左肩に装備されている兎型データウェポン、ラビットシザーと、右肩に装備されている狼型データウェポン、ファングウルフにエネルギーが集束する。どうやら二つのファイナルアタックを同時に使うつもりらしい。

エアライナーのアップグレードも合わさり、吼太に防ぐ術は無くなった。

「ラビットシザー！　ファングウルフ！　ファイナルアタック！！！」

エネルギーによりさらに巨大化した大鋏と、気で出来た狼が吼太の身体を蹂躙する。

そして、吼太が地に伏す――――

「残念、そっちは幻影だ」

いつの間にかノーヴェの後ろに立っていた吼太が言う。

「フェイクシルエット……コイツは使い方次第で戦闘機人にも通用

する。そうだな？」

「これは……あの幻術使いの！？」

「あぁ。んでコイツが……」

吼太の左手に保持されていた魔力スフィアが、ノーヴェの腹部に当てられる。

「砲撃拳士（スバル）の技だ！」

ノーヴェが身をよじって回避しようとするが、いつの間にか現れた光の糸――アトラック・ナチャ――がそれを赦さない。

「一撃必倒！　ディバイィィィン……」

そして吼太の右手が魔力スフィアを衝き――

「バスタァァァァーーーッッッ！！！」

強力な魔力砲撃がノーヴェを吹き飛ばした。

複写眼（アルファ・スティグマ）を持つ吼太は、見るだけであらゆる魔法、魔術、魔導を理解し、また使用することが出来る。吼太の前で使用された魔法は、今も吼太中に記憶されている。それは、フォワードたちの魔法とて例外ではない。

吼太自身は、シャイニング・トラペゾヘドロンの使用に必要なシャマルの【旅人の鏡】以外を使用するつもりはなかったのだが、リミッターがかかっている今、手段は選んでいられなかった。

先程もそれを利用してフェイクシルエットとディバインバスターを使用したのだ。

なんとか四人のナンバーズを倒し、一息つく吼太。だが、まだナンバーズは八人も残っている。

「――なるほど。一対一じゃちょっと分が悪そうだ」

そう言いながらオットーが前に出てくる。

……いや、出てきたのはオットーだけではない。

「では私も」

「それじゃ、せっかくだし私も～」

Ｎｏ．７、セッテとＮｏ．６、セイン。この二人もオットーに続き出て来る。吼太にとっては、非常によくない状況だ。

「くそっ……モップに掴（ガチ）を加える能力ァ！」

吼太がジッパーから取り出したモップに力を加え、三人のナンバーズを拘束しようとする。多人数との戦いである以上、悠長にしていたらこっちがやられる。ならばこその先手必勝。

吼太の判断は間違ってはいない。いかなる策も放つ前に潰せば無策も同然。先手を取ることは、勝利に直結させられるほどに重要な要素（ファクター）だ。

唯一吼太にミスがあるとするなら……

「ＩＳ、レイストーム――」

「ＩＳ、スローターアームズ――」

「ＩＳ、ディープダイバー――」

……敵の手の内を知りきれていなかったことだ。

「「「アップグレード！」」」

三人がアップグレードを発動した瞬間、吼太の攻撃は無駄となった。

オットーはその場から消え失せ、セッテの目の前に迫るモップは斬り裂かれ、セインに至ってはモップがセインに触れることすら出来ずにすり抜ける。

そして同時に、吼太はレイストームによる奇襲を受ける。

「ぐあぁぁぁっ！！」

トゥードがいないことによりバリアジャケットも張らず、クロスオーバーフォームを先程の武者化で解除していた吼太は、完全な生身でレイストームを受けてしまう。非殺傷設定などないのがＩＳ。まともに受けてなお、軽いダメージで済んでいるのは、吼太が長く鍛練を続けてきたからだろう。

「ぐっ……！」

ダメージに呻きつつ、クロスオーバーフォームを発動する吼太。一度解除したことにより鎧は再び新品同然になってはいるが、中身のダメージは変わらない。

「ジオルク！」

このままではマズイと判断し、自己回復の魔法を発動する吼太。肉体に蓄積されたダメージがたちまち回復する。

だが、全快となっても吼太には手段が無かった。相手のＩＳのアップグレード。それの正体を知る手段が。

答えを出す者（アンサートーカー）が使えればいいのだが、実は最初にナンバーズ全員から攻撃を受けた際に脳に異常が発生したらしく、上手く発動が出来ない状態。それどころか、気を抜けば体内のエネルギーが暴走してしまいそうな感覚が吼太を支配していたのだ。その意味では、吼太は自身にかかっているリミッターに感謝した。

「私たちを前にして考え事ですか」

吼太の身体をセッテのブーメランブレードが襲う。それは以前フェイトたちが感じたように、”当たる直前まで見えないし、感じられない”。フェイトたちはとうとうその正体を理解出来なかったその攻撃は、吼太の身体を着実に切り刻む。

さらに、吼太の上からはレイストームの嵐が降り注ぐ。こちらも吼太には見えていないが、セッテのブーメランブレードと違い、オットーがその辺りにいる気配は感じられた。

「やほー♪」

ふと、目の前にセインが立つ。この猛攻の中、全ての攻撃がセインの身体をすり抜けて行くその様は、奇妙と言える。

セインがその華奢な右手を吼太の左腕の中に差し込む。セインがすり抜けられるのは無機物だけでなく、有機物もらしい。

そして次の瞬間、左手の感覚が消失する。追って表面化する激痛。

「ほい、左腕部位破壊っと。そろそろ降参してくんないかなー？」

「誰がするかっての！」

右手で左腕を庇いながら、吼太がマントでセインを攻撃する。が、やはり当たらない。

「ぐっ……！」

脚部装甲に装備されている断鎖術式を発動し、空間を蹴って大きく後退する吼太。次第に、壁に追い込まれて行く。

「あらら、諦めの悪い」

「仕方ない。四肢がもげるぐらいならドクターが直してくれる。……今度は全弾当てる」

一度現れたオットーが、再び消え去る。その時、吼太は奇妙なものを見ていた。

オットーが消え去る瞬間、オットーの身体がレイストームに使われ

る光に包まれたような……。

『コータ君！』

「うおぁっ！？」

突然通信が入り、驚く吼太。見れば、その声の主ははやてだった。

「はやて、何の用だ？　今はちょっと忙しいから手短に頼む」

『自分勝手に行動しといて何がちょっと忙しい、や！　もう……。心配したんやから……』

「……悪いな、心配かけて……」

『ううん、コータ君はそういう人やもんね。だから……リミッター解除の申請、通しといた！』

はやてが言うと、たちまち吼太の顔に笑顔が宿る。

「さすがはやてだ！　サンキュー！」

『将来の妻としては当然や！　だから……ちゃんと帰ってきてな？』

「応！」

吼太の脳裏に、リミッター解除された能力の詳細が表示されていく。

「……はやての奴、何したんだか……。ほぼ全能力がランク3相当まで解放、仮面ライダー能力に至っては時間制限付き全解除？　大

盤振る舞いもいいとこだな」

ランク3……わかりやすく言うなら、【都市破壊レベル】までであり、吼太にとってはリミッターの半分ぐらいが解除されたということになる。ランク4は【惑星～銀河破壊レベル】で、最終ランクであるランク5は上限の無い【未知数の解放】であるため、ミッドチルダにいる際に解除出来るリミッターとしては最高クラスということになる。

吼太の右手に魔法陣が現れ、何かが転送されてくる。仮面ライダー能力全解放のためのアイテム、ケータッチだ。

「さて、と。反撃といこうか！」

リミッターの解除は能力のみならず、吼太の身体能力すらも格段に引き上げる。世界の構成すら視認出来、理解出来る今の吼太には、オットーが今どこにいるのかも、セッテがどうブーメランブレードを扱っているかも、何故セインに攻撃が当たらないのかも分かっていた。

「まずは……お前だ！」

吼太がギガドリルを右手に装備し、猛スピードで回転させはじめると、レイストームと同じ色の光の粒が集まってくる。

「くっ……！」

次の瞬間、光の粒はオットーとなり、ドリルの回転に吹き飛ばされる。

レイストームのアップグレード。それは”光を操る”レイストームの力を利用し、”自身を光子に変換する”力だった。光子となったオットーは常に光速で移動するため、肉体内の神経伝達が光より遅い、有機生命体には決して悟られずに行動可能。また、この状態のオットーを攻撃するというのは、即ち”光に攻撃する”ということに等しい。つまりは不可能なのだ。

だがそんな理屈も、天も次元も突破して、明日をつかみ取るドリルには有象無象も同然。ドリルの回転は光子を余さず引き寄せ、そしてオットーに十分なダメージを与えた。

「ぐ！」

先程とは戦況が変わったことに気づいたセッテが、ブーメランブレードをアップグレードを使って飛ばす。狙いは吼太の腹部。

発動すれば避けられない。先程のダメージと合わせれば、十分なダメージを与えられる。この戦いが終わるはず。

「これで……！」

だが、セッテは見誤った。そう、見誤ってしまったのだ。

「な……そんなことが！？」

吼太の腹部に現れたブーメランブレード。だが、それはしかと受け止められていた。

――クロスオーバーフォームの腹部に付いている、グレンの口に噛まれることで。

「グレンの顔は伊達じゃねぇんだぜ！　んで……」

吼太が手を突き出すと、時空間を突き破りどこかに手が入る。

「バオウ・ザケルガァァァーーー！！！」

そして、差し込んだ手からバオウ・ザケルガが現れ、大量の”何か”を破壊する。

「……まさか！」

心当たりのあるセッテが何かをする。だが、何も起きない。

「探し物は……これか？」

吼太が割れた時空間の外から何かを取り出す。それは、セッテの使うブーメランブレードだった。

「並行宇宙の隙間を利用した攻撃か……リミッター解除されなきゃバレなかっただろうが……。恨むんなら大盤振る舞いした本局を恨んでくれ」

セッテのスローターアームズは、”投擲物の軌道制御”という能力である。それをアップグレードすると、軌道制御できる範囲が拡大され、世界すら超えることが出来るようになる。セッテはそれを利用し、並行宇宙と並行宇宙の間にある膜状の”世界でも宇宙でもない空間”にブーメランブレードをおよそ１０００個収納し、その射出口を相手の直前に配置することで、相手に悟られない、隙のない攻撃を実現していた。

吼太はそれを見抜き、セッテが能力を発動したことで動き出したブーメランブレードを直感的に感知。防御すると同時に収納場所を理解し、攻撃を行ったのだ。

「ついでだ、コイツももらっとけ！」

吼太が言った瞬間、セッテの目の前の空間がひび割れ始める。

そして、空間を引き裂き現れた雷の龍――ブーメランブレードを喰い破ったバオウ・ザケルガ――が、セッテを蹂躙した。

「あとは……お前か」

「うっ……あはは～……さよならっ！」

次は自分の番だと悟ったセインが、ディープダイバーで逃げ出す。

そして、とりあえずガジェットドローンが保管されている場所まで来たのだが……

「……何？　コレ」

そこは、何故か南国になっていた。さらに気色悪いことに、何故かビキニを着た？型と、海パンを履いた？型が？型に乗ってデートしてたり、ルーテシアが旅館をハイテンションで経営してたり、チンクが踏み台に乗って焼きそばの屋台を小さいなりに必死に作っていたり、オットーとディードがノリノリでウーノとトーレをコスプレしていたり、真面目だが腹黒いクアットロがゆりかごでブイブイ言わせてたり……。

まぁ分かりやすく言うなら……

「カオス過ぎるっ！！！」

「きゅー……」

あまりのカオス具合に、気絶してしまったセイン。

「さて、解除っと」

吼太が言うと、辺りの風景が元に戻る。

セインのＩＳのアップグレードは、物質透過を拡大し、あらゆる物質を透過出来るようにするもの。また、その効果を他人与えることも可能。それを利用して、先程は吼太の神経系に直接針を埋め込むという荒業を使って左腕を封じたのだ。

だが、物質透過が出来ようと、光などまで透過してしまってはセイン自身も何も見えなくなってしまう。そこを突いた吼太は、視覚や聴覚といった感覚器官から相手の脳に働き掛け、相手の脳から自身の望んだ”命令”を引き出させる魔法、【シン・ポルク】を使ってセインたちを惑わせていたのだ。

――そう、セイン”たち”である。

「あんな恥ずかしい格好を……」

「何故私は拒まなかったんだ……何故だ！」

「あぁん、あんなのおもしろくないはずなのに～」

「ふむ、焼きそば……今度やってみるか。女亭主というのも面白そうだ」

控えていたナンバーズたちも、巻き込まれたせいか少なからぬダメージを負っていた。チンク以外。

「さて、まだやるか？」

「当たり前だ！　よくもあんな恥辱を！」

トーレが顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「……クアットロ、アップグレードを許可します。全力でやりなさい」

同じく顔を真っ赤にしたウーノが、クアットロに命令する。

「了解ですわぁ～、ウーノ姉様。ＩＳ、シルバーカーテン、アップグレード！」

クアットロがシルバーカーテンを全域に広げ始める。

「ぐっ……なんでもいい、跳ね返せ！　ラシルドォ！」

吼太が攻撃を防ぎ、あわよくば跳ね返そうと防御魔法であるラシルドを出す。が、雷を纏った壁のような盾は、何も跳ね返さない。いや、”当たってすらいなかった”。

「……？」

だが、次の瞬間、巨大な爆発が吼太の側面から襲い掛かる。

「ぐっ！？」

ラシルドを解除し、辺りを見渡す。と、先程まで倒れていたナンバーズたちが起き上がり、再び戦闘態勢をとっていた。

「さっきはよくもやってくれたな！」

「第二ラウンドの開始っすよ～」

ノーヴェとウェンディが言う。だが、何故だかセインだけは起き上がっていない。

不審には思った吼太だが、今の状況を何とかするのが先と判断し、警戒態勢に戻る。

「噂で聞いた時はよほど大きな力を持つと聞き、戦うのを楽しみにしていたのだが……。まさか、その程度だったとはな。リミッターが解除されてその程度では私たちには勝てない。そのことをしっかりと教えてやろう」

トーレがライドインパルスを発動させながら言う。対し吼太は、不敵な笑みを浮かべる。

「大きな力……大きな力か」

怪訝な表情を浮かべるナンバーズたち。だが、吼太の笑みは消えない。

「大きな力ってぇのは、こういうことか？」

次の瞬間、全てが消し飛んだ。そんな感覚がナンバーズたちを支配した。

目の前の人間が何かしたのか？　いや、何もしてはいない。正確には、”何もしなくなった”。

本当に強い者ほど、力を隠すのが上手いものだ。あたかも弱者に見えるような力の見せ方をすることで、強者は弱者に紛れて生きている。

力を隠せない人間というのは、力を隠すまでもない一般人か、隠せない弱者か、驕り高ぶった愚か者か。少なくとも、吼太はそれらとは違うらしい。

「ぁ……ぐ……」

ナンバーズの何人かが次々とへたりこんでしまう。ウーノやトーレ、チンクといったメンバー以外は、完全に戦意を喪失してしまった。

「……勝負ありだな」

「まだ、だ！　まだ我々は……」

なおも食い下がるトーレ。吼太はため息をつき、そして……

「ま、しゃーないか」

吼太がケータッチを取り出し、カードを装填する。この辺り一帯を破壊して、嫌でも負けを認めさせようと言うのだろう。

だが、ケータッチにカードが入り切った時。吼太の身体を何かが襲う。

……それは自分の中に潜むケモノ。”力”という名のケモノ。首輪と檻から抜け出せると理解し、狂喜乱舞しているケモノ。

「ぐ……がぁっ！！？」

ライドブッカーから何枚ものカードが飛び出し、我先にとディケイドライバーに入ろうとする。

「やめ……ろぉ！」

ディケイドライバーに入ろうとするカードをたたき落とす吼太。その顔には、先程までは感じられなかった恐怖が浮かんでいた。

吼太の目がカードを見る。カードも吼太を見返す。

カードを通して、吼太自身の力が見える。それは星、それは世界、それは宇宙。いや、そんなものが小さく見えるような、圧倒的な存

在。

どのカードを使おうと、使った瞬間にその存在が自分という殻を食い破って飛び出す。それを理解する。

そうだ。先程も感じていたはずだ。このケモノを。

今は他のケモノは眠りについているが、もしそれらが一斉に目覚めたら……全てのリミッターが解除されたら。

「ぐっ……あぁ……」

ライドブッカーに手を伸ばす。そこから、一枚のカードを選ぶ。すると、吼太の回りを飛び回っていたカードの群れは、ライドブッカーへと戻っていった。先程たたき落とされたカードも、ライドブッカーへと戻る。

吼太が選んだカード。”未知”ではあるが、まだ”未完成”。故に、1番小さな力。

「せっかくだ！　新しい力を試してやる！　変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ【ＦＯＵＲＺＥ】！』

光の輪と蒸気のようなエフェクトが吼太を包み、その姿を白く変える。

無限のコズミックエナジーを秘めた、宇宙の仮面ライダー。

名を、仮面ライダーフォーゼ。

続けてカードを装填する吼太。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＵＴＹＵ　ＫＩＴＡＡＡＡＡ】！』

「宇宙キターっ！」

一度縮こまるような格好をしたあと、全身を伸ばす吼太。仮面ライダーフォーゼ、変身の際のお約束である。

だがこの時、ナンバーズたちはあることを思ったという。「それ、カードを使ってまでやることか……？」と。

「っと……変身したのはいいけど、使い方わかんねぇな……まぁいいや。適当にやってみるか」

適当にカードを取り出し、装填する吼太。それがいけなかった。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＲＯＣＫＥＴ　ＳＷＩＴＣＨ】！』

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＬＡＵＮＣＨＥＲ　ＳＷＩＴＣＨ】！』

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＨＯＰＰＩＮＧ　ＳＷＩＴＣＨ】！』

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ【ＰＡＲＡＣＨＵＴＥ　ＳＷＩＴＣＨ】！』

フォーゼの四肢にモジュールが装備され、起動する。その選んだモジュールがいけなかった。

「と、ととっ……あばっ！？」

ホッピングスイッチにより跳ね回り始め、さらにロケットスイッチで加速がついた吼太は、あちこちの壁に激突を始める。

さらにパラシュートスイッチが広がって吼太を急激に減速させ、地面にたたき落とす。

止めにランチャースイッチが起動し、吼太周辺の壁が崩壊し、吼太は瓦礫に埋まってしまった。

そう。自爆である。

「……よっと」

瓦礫からセインが出て来る。ディープダイバーを使って吼太を瓦礫から取り出したのだ。

完全に気絶しているらしく、クロスオーバーフォームも解除された吼太は、まさに眠り姫と言えた。

「……こうして見るとかわいいな」

つい、といった感じで呟くノーヴェ。

「おやおや～？　もしかしてノーヴェ……」

「ノーヴェちゃんに春到来かしらぁ～？」

ウェンディとクアットロが、ここぞとばかりにノーヴェを弄る。

「なっ、なななな！　違ぇよ！」

真っ赤になりながら否定するノーヴェ。

「な、だけに”な”が七つだ」

「……本当」

気づいたことをいうオットーとディード。先程まで激戦を繰り広げていたようにはとても思えない。

「さてさて。一応これでも男の子らしいですしぃ～、チェックといきましょぉ～」

クアットロが吼太のズボンを下着ごと掴み、脱がす。変態である。

だが、突如クアットロの顔が神妙なものとなる。

「どーしたクアットロ？」

「まさか自爆用の爆弾が！？　切るリード線を選ぶのは任せるっスよ～！」

お気楽コンビのセインとウェンディがクアットロに聞く。だが、クアットロの神妙な顔は崩れない。

「……しぃ」

「は？」

何かを呟いたクアットロだが、よく聞こえない。もう一度、クアットロが言う。

「思ってたより……逞しい……」

どこがとは言わない。だが敢えて言えることがあるとするなら……

「え、本当？」

「見せろ見せろ！」

やはりスカリエッティの娘（さくひん）だというのだろう。ナンバーズは全員変態だった。

「楽しんでいるようだね」

そこにスカリエッティが入ってくる。

「あ、ドクター」

「こっち来ないで下さいね。この汚れを知らない、最強のショタっ娘の身体が汚れてしまうので」

辛辣な言葉でドクターを退けるウーノ。つまりは変態である。

「……酷いなぁ」

さすがに少し傷ついたらしい。それでもどこか悦んでいる辺り、やはりスカリエッティは真性の変態らしい。

「ところでドクター。聖王の器は？」

「滞りないよ。今はまだ寝ているが、いずれ目を覚ますだろう。”13番”の説得も済んだ」

「じゃああとは……」

「あぁ。ゆりかごを起動するだけだ。だがその前に……」

スカリエッティが右手を振り上げると、吼太がエネルギーの糸によって縛り上げられる。

「あー！」

「ドクター、何故？」

残念そうな声をあげるウェンディとオットー。

「危険だからだよ。彼の力は異常だ。私にも理解しきれないほどにね。彼には悪いが、計画の成就が間近な今、邪魔をされたくない。

一時的に拘束する必要がある」

「でも、今じゃなくても……」

「今、目覚めたらどうするつもりだい？　こんなチャンス、もう二度と来ないかもしれないのに」

そこまで言われて、ようやく黙るナンバーズたち。先程、内包する力だけで圧倒された彼女達からすれば、この上ない説得力を持つ言葉だった。

「意識を取り戻すのを遅らせるように細工した。意識を取り戻すには彼でも一週間はかかるだろう。我々はそれまでに出立しなければならないんだ。分かるね？」

スカリエッティが言うと、ナンバーズたちもしぶしぶながら納得する。

「さぁ、準備に戻りたまえ。やることはいくらでもある」

スカリエッティが言うと、ナンバーズたちがぞろぞろと出ていく。

スカリエッティと吼太だけになった部屋。そしてスカリエッティは……

「縛られたショタっ娘ハァハァ、縛られたショタっ娘ハァハァ……」

やはり変態だった。

半裸で縛られた吼太を、余す事なくカメラに収めるその姿は、変質者そのもの。管理局に通報されること間違いなし。

だが、シャッターを切る手が不意に止まる。

「……一週間、いや三日。持つといいんだがね」

スカリエッティが使ったもの。人間の神経伝達系に介入し、働きを制御してしまうそれは、本来なら一週間どころか一生封じ込めることが出来るものだ。

だが、吼太の体内に存在している細胞は、異物の存在をしっかりと感知し、スカリエッティのシステムを破壊しようと働きかけている。人間としてはおよそ有り得ない反応だ。現在の活動の活発度から一週間と判断はしたが、もし今より細胞が活発になったら、活発になり続けたら……。

「悠長に構えている暇は、なさそうだね」

カメラを仕舞い、部屋から出るスカリエッティ。

「”彼女”が何を考えているかは知らないが……私にもなさねばならないことがあるんだ。私自身の正体を知るために……アルハザードの遺児は、本来どんな存在だったのかを知るために……。そして……世界全てに幸せを齎すために」

様々な思惑が絡みつつ、運命の歯車は回り出す。それはさながら、人形劇のように。

だが誰一人として、この人形劇の操主が誰なのか、理解している者はいなかった。

# 第百四十四話　コータ君の大誤算（後書き）

はい、そんなわけでシリアスともギャグともつかない微妙な話になってしまいました。

……正直、長いの疲れます。そんな長いの無理～、壊れちゃうよ～、みたいな？

次回からはまた７０００字前後になるはず（多分）なので、そこはあまり心配しなくても大丈夫です。多分。

今回出なかったクアットロを始めとするメンバーのアップグレードは、恐らく最終決戦時に出るかと思います。多分。

……いや、２番のは出せるか怪しいような限定的な能力だし、ウーノのは冗談抜きでチート過ぎて、出すとロッサ涙目になるし……。

少なくとも、チンク、クアットロ、トーレの三人のアップグレードに関しては最終決戦時に出ます。それは間違いないです。しっかり（？）予定を組んであるので。

武者〇秘将軍は武者〇伝という漫画のやつです。以前の武王頑駄無と同じですねハイ。

あと吼太のアソコについてですが、一般成人男性と同等か、ちょっとだけ大きいぐらいです。見た目と反してでかいだけで、それだけでは普通ですよ。

今回はいろいろあって分からないこともあるかと思うので、質問も

どしどしどうぞ。メッセージ、感想のどちらでも受け付けます。ただし感想の場合は感想も入れて下さいね。またメッセージの場合はタイトルにでも質問ということがわかる文をお願いします。

もちろん誤字脱字の報告、文章批評もいつも通り待っています。

## 第百四十五話　残る痕、蘇る翼たち（前書き）

はい、なのはＧＯＤにプレシアさんとリニスが参戦すると知って驚いたなっぺです。

今回はキリのいいとこで切ったので短め。

# 第百四十五話　残る痕、蘇る翼たち

Ｓｉｄｅ　三人称

管理局主要施設襲撃事件。

一夜明けた今でも、クラナガンの街は絶望に沈んでいた。

管理局地上本部そのものは、もはやただの張りぼても同然。応援も今だ来ない。また、数多のアイドル同然の優秀な魔導師が在籍している機動六課がほぼ壊滅に追い込まれていることも、人々に暗い影を落としていた。

「……世界を変革するためには、痛みも必要。心苦しいが、ね」

スカリエッティは偵察に出したガジェット?型から、クラナガンの街を見ていた。

既に戦闘機人の修理は全て終わっている。クアットロのアップグレードで肉体や基礎フレームの修理が済んでいたのもあるが、細かい調整はやはりスカリエッティ本人がしなければならなかった。とはいえ、彼女達全員の調整を数時間足らずで終えている辺り、スカリエッティの果て無き技術力が伺える。

「……”祭”まではあと数刻、待つ必要がありそうだね」

スカリエッティが、いつの間にか後ろに立っていた一人の女性に話しかける。

「……君の言いたいことはわかってる。アルハザードまで届けてくれれば、ゆりかごなんて君にくれてさ。我々はまた向こうで艦を造ればいいが、君はゆりかごでないとダメなのだろう？」

後ろの女性が頷く。

「なら君はいままで通りにしていてくれればいい。吉谷吼太は既に捕らえた。すぐには無理だが、ゆりかごが軌道に乗ればすぐにでも届ける」

スカリエッティが女性に向き直る。

「我々の崇高な目的のために、共に頑張ろうではないか」

女性はただ、そこに立ち続けていた。

機動六課において、１番被害が出たのは物的被害だった。隊舎はほぼ全壊。ヘリを始めとする輸送手段も破壊され、メインコンピューターも中身はウィルスで、外は攻撃で完全に破壊。唯一運よく無事だったのは、偶然出来た瓦礫の隙間に収まっていたフェイトの私物である車だけだった。

ガジェットの残骸が散らばるそこは、戦闘の凄まじさを物々しく伝えていた。

「……」

無言で被害状況を纏めるティアナ。今、フォワードで動けるのは彼女しかいない。だというのにティアナは、愚痴一つ吐かずに仕事に明け暮れていた。

だが、不意に携帯タッチパッドを誰かに奪われる。

「仕事熱心なのは感心だが、お前も少しは休め」

「あ、シグナムさん。……大丈夫です。それに、今は少しでも何かしてないと落ち着かなくて」

「それでもだ。……ティーダたちの見舞いにでも行ってきたらどうだ」

「でも……！」

ティアナが顔を上げてシグナムを見る。その目の下には、くっきりと隈が浮き出ている。

「なら命令だ。見舞いに行ってこい。いいな？」

「……了解」

ティアナがとぼとぼと歩き始める。疲れが溜まっているのか、やはりその足どりは覚束ない。

「……将」

「リインフォースか。……やはり私は人をどうこうするのは苦手だ。剣を振るうしか能の無い”でくのぼう”らしい」

シグナムが自嘲気味に言うと、シグナムの横に立っていたリインフォース?が首を振る。

「お前は素晴らしい騎士だよ。ティアナだってわかっているはずだ。……ただ、ティアナの気持ちもわかるにはわかる。何かに無心にならないと、自分がどうにかなってしまいそうなんだ」

「……そうか。お前もだったな」

ヴィータがゼストとの戦いで撃墜された際、リインフォース?がダメージフィードバックを全て自分に向けたことで、ヴィータは騎士の決闘では珍しく傷一つない姿で帰ってきていた。だが、その代わりにリインフォース?は意識不明の重体となってしまっていた。

重体となったのはティーダ、リインフォース?だけではない。ヴァイスも、自身のトラウマを押し殺して戦っていたのだが、強力な魔力ダメージにより意識不明となっていた。なお、ヴァイスを攻撃したのは、状況からルーテシアだとされている。

「……無力とは、これほどまでに辛いものなのだな」

「……そうだな」

聖王教会附属病院。負傷した機動六課の面々はここに収容されていた。

「どうぞー」

ドアをノックした音に返事を返すエリオ。入ってきたのはティアナだった。

「元気？　って聞くのはおかしいわね。差し入れ持って来たわよ」

「ありがとうございます」

「……ありがとう」

普通にお礼を返すキャロと、どこか沈んだ雰囲気のスバル。

受け取った缶のプルトップを、壊れていたはずの左腕であける。腕の中からは、機械の駆動音が聞こえる。

「もう、動くようになったのね」

「まだ機械パーツは代理のものだからぎこちないし、神経ケーブルはまだ届いてないから感覚もないんだけどね」

それきり、また黙り込むスバル。

それを見かねたティアナが、スバルに近づき……

むにゅー

「ひ、ひあな（ティ、ティアナ）！？」

スバルの頬を引っ張った。

「ちょ、ティアナさん！」

あまりの事態にエリオが止めさせようとティアナに近づくが……

むにゅー

「ふぁ……」

「エリオくん！？」

エリオも先程のスバルと同じように頬を引っ張られる。

そしてティアナはキャロにも近づき……

むにゅー

頬を引っ張る。

「もう～……何すんのティア～」

スバルが掴まれた頬を摩りながら、抗議の声をあげる。

「しゃきっとしなさい三人とも！　早く怪我を直して、そしたら仕返しに行くんだから！」

「仕返しって……」

キャロが言い切る前に、ティアナがまた話し始める。

「スバルは、ギンガさんを取り戻す」

「あ……」

スバルを真正面から見据え、言うティアナ。

「エリオは、あの召喚蟲へのリベンジ」

「リベンジ……」

今度はエリオがティアナに見据えられる。

「キャロは、あの娘とちゃんと話をする」

「……話を……する」

キャロが最後に見据えられる。

「三人とも、そのためにやることはいくらでもあるんだから。早く怪我治しなさい。分かったわね？」

「あ、はい」

あまりに活動的なティアナに、圧倒される三人。沈んだ雰囲気が、たちまち消えていく。

「じゃ、私はここらで帰るわね。兄さんの見舞いにもいかないと」

「あ、はい。なんだか、ありがとうございました」

「いいっていいって。じゃあね」

ティアナが部屋を出ていく。

「……ティアナさん、強いですね」

キャロが言う。ティアナは先の戦いで危うく唯一の肉親を無くしそうになっているのだ。その心が負ったダメージはエリオやキャロよりも重く、スバルにも負けてはいない。また、自身の愛する人は今だ行方不明のまま。

だが、そんな様子は噫(おくび)も見せずに、普段通りに振る舞っている。強がりか、芯の強さか。いずれにしろ、強固な意思が伺える。

「……私たちも、落ち込んでなんていられないよね！　エリオ！　キャロ！」

「「はい！」」

「……大丈夫？　なのは」

「あ、フェイトちゃん……」

その日の夜、夜風に当たっていたなのはが振り返ると、そこにはフェイトが立っていた。

「それ、ヴィヴィオの……」

「……」

なのはが手に持っていたのは、以前ヴィヴィオにあげた縫いぐるみ。焼け焦げ、破けてしまっている。

「なずなから聞いたよ。いろいろ。……ゴメンね。私がもっと速く動けたら……」

「フェイトちゃんのせいじゃないよ」

ひとしきり話すと、無言になる二人。再び話しはじめたのは、愛する人のこと。

「コータ、帰ってこないね」

「……うん」

「……大丈夫だよなのは。きっと、コータもヴィヴィオも、無事だから」

「……うん」

どちらからでもなく、涙が頬を伝う。

「……ゴメンねフェイトちゃん。今だけは……泣かせて……。泣いたら、強くなるから……」

「……うん。必ず、ヴィヴィオを取り戻そう」

二人はいつまでも抱き合い、涙でその顔を濡らしていた。

はやてはヴェロッサと共に管理局本局に訪れていた。

本局に多数ある次元航行艦用整備ドック。その一つで今、はやてにとっては非常に懐かしい艦（フネ）が最終調整を受けていた。

「結構苦労したんだよ。廃艦処分扱いだったやつを無理矢理持って来たんだから」

「ありがとうなロッサ。おかげで六課の家が出来た。移動出来る本部なら……いや、この艦が一緒なら、もう負けたりせぇへん」

真剣な表情を崩さずに言うはやて。対し、ヴェロッサはいつも通りのへらへら顔だ。それも、はやてに気を遣ってのことではあるが。

「……心配じゃないのかい？　吼太、行方不明なんだろ？」

「心配やないって言ったら嘘になる。でもな、だからってコータ君にかまけて仕事放り出したら、そのコータ君に叱られる」

そこで一拍おき、ヴェロッサに向き直るはやて。

「それに、私信じてるんよ。コータ君が無事ってこと。何せ、管理局最強のチート魔導師やからな」

はやてが、ようやく笑顔を見せる。はやての笑顔を見て、ヴェロッサも幾分か安心した表情を浮かべる。

「確かに、吼太はずるい《チートだ》よね。こんなに大切に想われているんだから」

「……今、私に出来るのは六課を指揮してスカリエッティを止めること。次元世界を、私たちの帰る場所を守ることや」

はやてが、また整備ドックの中を見る。

「そのために、また力貸してな。……アースラ」

アースラは、少しだけ鈍く光り輝く。まるで、はやての言葉に応え

たかのように。

ウィンドウを凄まじいスピードで操作し、何かの準備を進める、人間形態のトゥード。主が行方不明でも、彼女は心配している様子は無い。

同じく隣でウィンドウを操作するリームも、同じように心配をしている様子は無い。

「……トゥードはさ。コータのこと信用してるよね」

「はい」

リームの問いにトゥードが答える。だが、手を緩める気配は無い。

「コータを信用してるから、捜してないの？」

「はい」

リームは先程からずっと、吼太の居場所を探っている。対し、トゥードはただの一度として吼太の居場所を探ろうとはしていない。

「……なんで」

リームが手を止め、トゥードに向き直る。

しばしの静寂。一呼吸挟んだトゥードが、やはり手を止めずに話し始める。

「私はデバイスです。それもリーム様のようなユニゾンデバイスではなく、道具として使われるべきインテリジェントデバイスです。ですが、マスターは私を置いていかれました。これは一重に、私の力不足が理由です。私が使われるに値しないデバイスだからこそ、私を置いていかれたのです。ですから私が今するべきはマスターを捜すことではなく、私自身をよりよいデバイスにし、マスターに使われるに値するデバイスになることと判断致しました」

「……そっか」

リームが再び、ウィンドウを操作し始める。

と、その時、二人に通信が入る。ウィンドウをもう一つ増設し、応じるリームとトゥード。

通信を入れてきたのは、六課のデバイスの面々だった。

『急な通信すみません。貴女たちにお願いがあって通信させていただきました』

「……なんでしょうか」

マッハキャリバーの言葉にトゥードが応じる。

『私たちに、さらなる力を』

『マスターを守れるだけの、力を』

グラーフアイゼンとクロスファントムが、マッハキャリバーに続いてトゥードに言う。

「……それには応じかねます。私も、暇な身ではありません」

『お願いします』

『マスターの許可を取っていない状態で我が身を改造することには多少の引け目はあります。が、もはや一刻の猶予もありません』

「……」

トゥードがため息をつき、話し始める。

「貴方たちの気持ちは分かります。ですが、それを頼むべきは私たちではなく、六課のメカニックスタッフの方々なのでは？」

デバイスには顔が無い。故に話さなければその気持ちを知る術はないのだが、それでもトゥードたちにはデバイスたちが驚いているように感じた。どうやら盲点だったらしい。

「貴方たちが今するべきは他人に頼ることではなく、自分自身の強化プランを練ること。違いますか？」

『……そうですね。すみませんでした』

クロスミラージュが言うと、やがて続々とデバイスたちが通信を切断する。

「よかったの？　コータが仕込んでる”スペシャル”のこと、言わなくて」

全員が通信を切ったあと、リームがトゥードに問いかける。

「アレを伝えて、頼ってしまうようではいけません。それにアレはマスターが”与えた力”ではなく、”彼らが目覚めさせるべき力”です。そう考えているからこそ、マスターも伝えてはいなかったのでしょう」

それに……、とトゥードは言葉を続ける。

「私たちデバイスは主と共にあるべきもの。主の意向も聞かない内は、改造などするべきではありません」

「でも、それってトゥードにも当て嵌まるんじゃないの？」

リームが正論を述べる。先程トゥードが言ったことはそのままトゥードに返ってくるとも言える。吼太の許可を取らずに改造をするのはおかしいと言っているのだ。

「えぇ。ですから……マスターの一言を貰うだけで改造が完了するように、”準備”をしているだけです」

「……なるほど。ところで、どんな強化プランなの？」

「そちらのウィンドウにデータを表示致します」

リームが開いていたウィンドウに、トゥードの強化プランが表示される。

「……うわぁ～、こりゃ酷い」

「何か問題があったのですか？」

「あ、ううん。違う違う。大丈夫だよトゥード」

リームが見た強化プラン。詳しくは秘密だが、一言で言うなら……

「……こりゃ、まさにチートだ《ずるい》ね」

そしてまた夜は明け、日が昇る。

人々は後にこの日をこう振り返る。

それは、とてもくだらない戦いだったと。

それは、壮絶な戦いだったと。

それは、”愛”のために起こった戦いだったと。

日の出と共に、幾多の紫色の召喚魔法陣が展開され、多数の地雷王が出現する。

地雷王がその力を使い、地面を破壊していくと、事前になされた綿密な計算の通りに地割れが発生する。

やがて、星という巨大な檻から解放された巨体が、その全貌を顕す。

彼の艦（フネ）の名は、【聖王のゆりかご】。

後に【レリック事件】と呼ばれる事件の最終章、【地上本部防衛戦及び聖王のゆりかご攻略戦】の始まりである。

## 第百四十五話　残る痕、蘇る翼たち（後書き）

はい、そんなわけで短め＆多分いつもよりさらに駄文をお送りしました。

……正直、前のを削って前後編にして、今回の話を統合してもよかったかなと思ってたり。

さて次回からはいよいよ大詰め。

吼太はフォワードたちやナンバーズたちを書くのに正直邪魔だったので一時離脱してますが、ちゃんと後で主人公しますのでご安心を。

いろいろ謎があるかと思いますので、軽いヒントをば。現時点で表せるのはこれぐらい。

・基本的には原作通りの流れ。ただし、なのはＶＳヴィヴィオは無い

・フラウリーナ三姉妹やマテリアル三人娘だって活躍する

・黒幕は女性。さらに言うなら、吼太の戦う相手

・スペシャルはこの小説オリジナル。ただの魔法ではない。

・ハードボイルダーを駆使したバイクアクションも期待。他にも、ヴィータが○○○をやったり、スバルとギンガが△△△して□□□を出したり……

以上のヒントを根掘り葉掘り聞くのは禁止です。これでもギリギリなんで。

次回は開戦……かな？　多分。あ、ティーダはちゃんと出しますよ。チンクだって戦います。クアットロも戦います……いや、クアットロは変態だから……うん？　よくわからない。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百四十六話　出撃、機動六課！（前書き）

なんだか最近は更新が早く出来てます。何故でしょうかね？

まぁ、無理はしてないのでご安心を。え？　「心配なんてしてねぇよカス！　自惚れんなクズ！」って？　さいですか……

# 第百四十六話　出撃、機動六課！

Ｓｉｄｅ　三人称

クラナガン上空。そこを、白銀の光を纏う艦が堂々と飛行していた。機動六課の新拠点、次元航行艦アースラ。既に退艦していた古い艦ではあるものの、その性能は今だ他の艦に劣ってはいない。

だがやはり新品同様とは言えず、全体的に改修を施したことで再び飛べるようにはなったものの、宇宙や次元空間での航行は不可能な状態。今回の事件が終わる頃には、もう二度と翔ぶことは出来ない。それほどまでに老朽化が進んでいた。

「……やっぱり落ち着くな。この席」

つい数日前までは六課でオペレーターを勤めていたルキノ。今はアースラの操舵を任されている。

何を隠そう、ルキノは機動六課に来る前はこのアースラを職場としていたのだ。老朽化により非常にクセがついてしまった今のアースラを操舵出来るのは、アースラをよく知る彼女くらいのものであろう。

『ル～キノ』

「あぁ、アルト。そっちはどう？」

突然開いた通信ウィンドウにも、慌てず応対するルキノ。

『うん、大丈夫。操縦は前からヴァイス陸曹にならってたし、私は元々ヘリパイロット希望だったしね』

通信をしてきているアルトは、怪我により離脱しているヴァイスに代わり、ヘリパイロットを勤めていた。先程、ちょうどヘリの調整が終わったらしく、アルトの顔には黒ずんだ油が付いていた。

『……本局からの応援は？』

「一応、次元航行艦隊がこっちに向かってくれてるらしいけど、付くのはまだまだかかる。地上本部もまだ完全に立て直してるとは言えない。まともに動けるのは、やっぱり私たちだけみたい」

『孤立無縁、援軍も補給物資も期待出来ない……か。キツイね』

「でも、私たちがなんとかしなきゃ」

ルキノがウィンドウをもう一つ開き、情報収集を始める。

そこでルキノは、自分達がさらに追い込まれてしまっていることに気づいた。

「がぁっ！？」

地に伏す男。全身がボロボロになったその姿は、よほどの激戦を繰り広げた証だ。

……ボロボロなのが相手もなら、の話ではあるが。

「いんや～、ここまで弱いと拍子抜けっスね～」

「雑魚すぎて話にならない」

「もう少し頑張って欲しかった」

ウェンディ、オットー、ディードの三人の周りには、多数の人間が傷つき倒れ伏していた。また、その遥か後方ではアインヘリヤルが黒煙をあげている。

「く……そぉ……原作キャラが、こんなに強いなんて……」

「せっかく……地上本部襲撃までずっと待ってたのに……」

そう、ウェンディたちに蹴散らされたこの人間たち。なんと全員が転生者か、それに準ずる存在なのだ。

これから起こるはずであるゆりかご事件のどさくさに紛れて暗躍し、自分達の目的を果たそうとしたようだが、いち早くその存在を察知していたスカリエッティが差し向けた刺客――戦闘機人――によってその全員が倒されてしまっていた。

「アンタたち、”テンセイシャ”とか言うらしいっスね。何がしたかったかなんて知らないし、知りたくも無いっスけど――」

そこでウェンディが、いつもの軽薄な雰囲気からは想像もつかないような、冷たい顔をする。

「下心丸見えすぎて、正直キモいっス。ドクターの指示だから生かして帰してあげるっスけど、本当なら命は無いっスよ？」

「ぁ……」

ウェンディに踏み付けられていた男の顔が、恐怖に歪む。と同時に、どこからともなくアンモニア臭がし始める。あまりの恐怖に、転生者の一人が失禁してしまったのだ。

「……ホント、情けない」

そう言い捨て、その場を立ち去ろうとするウェンディたち。だが、その後ろにいた男が立ち上がる。先程の失禁した転生者だ。

「ふざけんな……女ごときに舐められたまま終われるかぁぁぁ！！！」

剣を取り出し、猛突進する転生者。

「ディード」

「……」

ディードがツインブレイズの光刀を出し、そして仕舞う。

「ぁ……はへ」

次の瞬間、転生者は既にそこになく、残ったのは僅かな肉塊と、転生者のものだったであろう血液だけだった。ディードが一瞬の内に転生者を斬り刻んだのだ。

「ホント……キモいっスね」

『ウェンディ、終わったか？』

ウェンディが最後に言い捨てると、通信ウィンドウが開き、トーレが状況を聞いてくる。

「おー、トーレ姉。こっちはバッチリ終わったっス！」

先程までの冷たい表情が嘘のように、軽い雰囲気で話すウェンディ。

『こちらもつい先程終わったところだ。死人は何人か出たが、許容範囲内で済んだ』

トーレが言っているのは、無論相手の転生者の死亡人数だ。ナンバーズと転生者たちとの間にあるあまりの実力差故に、ナンバーズたちからすれば、負けることのほうが難しかったのだ。相手となっていた転生者たちは、実に不幸だったと言える。

「しっかし面倒かつバカな奴らっスよね～。わざわざ壊す必要のないアインヘリヤルを壊すなんて」

『目の前の欲望に取られるばかりで大局を見据えられん奴らだ。そのくせ度胸無し。見据えられんなら見据えられんなりに、やれることはというのに。本拠地に真っ向から突っ込んできたアイツを見習って欲しいものだ』

「そこまで底抜けのバカはなかなかいないっスよ。いたとすれば、やっぱりアイツぐらいっス」

ウェンディの言うアイツ。吼太は確かにバカだったが、バカ故の清々しさも持っている、言うなればよいバカだった。だが、先の転生者たちはただのバカではない。目の前の小さなことに囚われ、振り回されている。言わば”愚か者”だ。

『これで周辺の有害なテンセイシャは全部倒したな』

「じゃあ、作戦第二フェイズっスね。了解っス！」

作戦第一フェイズ。それは転生者を始めとする【ゆりかごの障害となる、管理局以外の脅威の排除】だ。そしてそれは、だいたい達成されたと言っていい。

そして第二フェイズ。

『ご苦労諸君。ではゆりかごのお披露目といこうじゃないか！』

スカリエッティが、その始まりを高らかに宣言した。

「……あれって……」

サーチャーから送られてくる映像には、突如現れたとてつもなく大きい戦艦が宙に浮き上がる様子が映っている。

「周辺から以前の幻術と同じパターンを確認！　それを使って隠蔽していたものと思われます！」

「あんなに巨大なものを……！？」

「それにあの幻術パターンが使われてたってことは……」

「……ジェイル・スカリエッティがあそこに！」

アリサとすずかの言葉を踏まえ、フェイトが予想を口にする。

「緊急通信！　繋ぎます！」

ルキノがアースラに届いている緊急通信全てを開く。通信をしてきたのはクロノ、カリム、ヴェロッサ、そしてユーノだった。

「ユーノくん！？」

予期せぬ相手に、思わず驚くなのは。

『ゴメンなのは。詳しい話はあとで。……クロノ』

『あぁ。みんな、落ち着いて聞いてくれ。……本局から出る予定だった次元航行艦隊だが、恐らく到着時刻が前に出した予定よりさらに遅れることになりそうだ』

「それ、ホンマか？　クロノくん」

はやてが険しい表情で聞く。

『次元空間にガジェットの待ち伏せがあったんだ。数はたいしたことないからあまり支障は無いだろうが、振り切れないから応戦をすることになるだろう。そっちに着くまで、何とか持ちこたえてくれよ』

『それなら、教会騎士団を出しましょう。今すぐ出れる人数はそれほど多くはないけど、防衛戦なら地上本部の人員と力を合わせて乗り切れるはずよ』

カリムが、自身の部下たちを出すことを提示する。

『はやて、ガジェットがかなりの数現れてる。どうやらあの戦艦からばらまかれてるみたいだ。このままだと市街地も危ない』

ヴェロッサの報告と同時に、映像が入る。ヴェロッサの言うとおり、巨大戦艦から大量のガジェットが出撃しているようだ。

「うかうかしていられへんな。ガジェットを防衛部隊が止めてくれてる内に、あの戦艦を制圧するで。戦艦さえなんとかすれば、戦いは終わるはずや」

『その戦艦だけど、いくらか詳しい情報が無限書庫にあったよ。名前は”聖王のゆりかご”。古代ベルカの遺産であり、最凶のロストロギア。古代ベルカにあった時点で既にロストロギア扱いされていたとも言われる、極めて強力な戦艦だ』

ユーノの通信ウィンドウにゆりかごの断面図が表れる。

『内部図から考えて、制圧すべきは四つ。ゆりかご後部にある動力炉、動力炉付近にあると思われるガジェット生産装置、先端付近にあるメインコントロールルーム、そしてゆりかご先端にあるゆりかごの中心、聖王そのもの』

『聖王……？　聖王は既に亡くなっているはず……』

『スカリエッティのことだ。どこからかＤＮＡを採取してクローニングするなんて朝飯前だと思うよ』

ユーノのその言葉に、カリムがハッとなる。以前吼太に頼んでいた、盗まれた聖骸布の奪還。聖王の亡骸を包んでいたそれからなら、付着しているであろう血液や体組織からＤＮＡの採取が可能。彼女の中で点が線となり、繋がる。聖骸布の窃盗事件には、スカリエッティが絡んでいたのだ。

『……すみません。私たちがしっかり管理をしていたらこんなことには……』

うなだれるカリム。だが、そんなカリムを見てもはやての真剣な表情は崩れない。

「起きたことを悔やんでても、ミッドは守れへん。今は一刻も早く

あのゆりかごを何とかして、ヴィヴィオとギンガを取り戻すのが先決や」

「ヴィヴィオ……そうだ、ヴィヴィオは！？　ヴィヴィオはスカリエッティたちにさらわれて……」

思わず感情的になってしまうなのは。狼狽しているその姿は、”エースオブエース”と呼ばれる一流魔導師のものではなく、ただの母親を思わせるものだった。

『落ち着いてなのは。……質問なんだけど、そのヴィヴィオって言う娘は？』

「私たちが保護した女の子だよ。私みたいな金色の髪に、緑と赤の瞳を持つ娘」

ユーノの質問に、情緒不安定となったなのはに代わってフェイトが答える。

『金色の髪に緑と赤のオッドアイ……そういうことか』

「……まさか、嘘やろ？」

『いや、多分そうだろうね』

いち早く感づいたはやてが、その”可能性”を否定しようとする。だが、ユーノはその可能性が正しいであろうと言う。

『聖王オリヴィエの特徴は金色の髪に緑と赤のオッドアイなんだ。そしてこの組み合わせは聖王の血が流れていなければ起こり得ない。

つまり……』

そこで一呼吸つき、ユーノが告げる。

『ヴィヴィオが、聖王の器……あのゆりかごの中心だ』

ざわめく六課一同。あんな小さな娘が、私はおかしいって思ってた。
猜疑心が一同を支配する。

そしてやがてその猜疑心は、なのはやフェイト、はやてたちに向く。
敵の重要人物の優先的保護、幼なじみ同士がこれでもかとばかりに集められた部隊構成。普段はさして気にしていなかったことが、猜疑心をよりかきたてる。

「……ぐ……！」

はやてが殊更悔しそうな表情をする。この猜疑心が場を支配しかけている状況で、何も出来ない自分に腹を立てているのだ。

と、その時、通信ウィンドウが無理矢理開かれる。

『こわいよ……たすけて……パパぁぁぁーーー！！！　ママぁぁぁーーー！！！』

ヴィヴィオだ。追い詰められた精神が通信システムに干渉したのか、ゆりかご内部と通信が一瞬だけ繋がったのだ。

その通信が途切れ、画面に砂嵐が吹き荒れる。一同が呆然と立ち尽くす中、一人だけ立ち直った女性がいた。なのはだ。

「……疑いたいなら、疑っててていいよ。降りたいなら止めたりしない。でも私はそれでも、ヴィヴィオを助ける。ヴィヴィオを取り返して見せる！」

なのはの瞳にもはや迷いは無い。ヴィヴィオの声が、なのはの中の”強い心”を目覚めさせたのだ。いつも悲しみも絶望も撃ち抜いてきた、強い心を。

そして何より、なのはの強い心は”伝染”する。いつの間にかアースラの中から猜疑心に満ちた空気は消え失せ、強い決意が皆の心に宿っていた。

部隊の成り立ちは後で聞けばいい。今は、泣いているあの”小さな女の子”を助ける。ミッドチルダを、あのゆりかごから護る。意思は、一つに重なった。

『一丸となれたみたいだね。何よりだ』

突如としてまた通信が繋がる。先程のヴィヴィオが開いた回線を利用して、スカリエッティが通信をつなげたのだ。

『そんな君達にプレゼントといこう。受けとってくれよ？』

スカリエッティが言うや否や、アースラ内にアラートが響き渡る。

「さらにガジェットが出現！　地下から現れてます！」

『ガジェット倍ドンだ。ゆりかごが埋まっていた付近にある私の研究所にも、ゆりかごに積んである生産装置が設置されているのさ。さらに……』

「戦闘機人と所属不明魔導師の反応！　３方から地上本部に向かっています！」

ルキノがさらに報告をする。開かれたサーチャーには、ウェンディたち戦闘機人たち、ルーテシアとガリュー、ゼストとアギトが映し出されていた。

「あの子……！」

キャロとエリオがルーテシアに反応する。

「あの騎士、アタシとリインをやった奴だ……」

ヴィータも、苦い記憶を思い出しつつ言う。

「……え？　あれって……」

「まさか……」

そしてスバルとティアナの目線は、戦闘機人のグループにいる一人に向けられる。

藍色のハチマキ、スバルと同じ色の長髪、マッハキャリバーと同じ形をしたブーツ型デバイス。

そう、ギンガだ。スバルの姉であるギンガが、あたかも戦闘機人の一員のように走っていたのだ。

「……なんで、ギン姉が……！？」

「……洗脳されたのかしら。どちらにせよ、戦いは避けられないわね」

ティアナが、現状から推測する。理由はどうあれ、ギンガは戦闘機人たちと行動を共にしている。戦う可能性は十分にある。

「八神部隊長。スバルにギンガさんと戦わせるのはあまりに酷です。ギンガさんは、私がなんとかしてみます」

ティアナが、はやてに進言する。だが、はやてが返事を返す前に、スバルが割り込むように発言する。

「大丈夫、ティア。私がやる」

「でもスバル！」

「……ギン姉はさ、私にとってお姉ちゃんで、シューティングアーツの師匠で、管理局の先輩で……お母さんなんだ。私、あまりお母さんのこと覚えてないから、ギン姉がそんな感じなんだよ」

スバルの独白にティアナが「なら……」と戦うことを止めさせようとするが、スバルは止まらない。

「……だから、ギン姉が道を間違えたんなら、それを教えてあげられるのは私だけなんだと思う。いや、私じゃなきゃダメなんだ！」

スバルの気迫に反応したのか、スバルのデータウェポンたちもアストラル体と呼ばれる半透明の身体でマッハキャリバーから飛び出す。

「……アンタたちも、スバルが戦うべきだって思うの？」

ティアナに、強い意思の篭った眼差しで答えるデータウェポンたち。

「……わかったわよ。その代わり、ちゃんとギンガさんの目、覚まさせなきゃダメよ」

「わかってる！　ありがとう、ティア！　レオとボアとブルもありがとうね」

スバルが言うと、レオサークルたちがマッハキャリバーの中に帰る。

少し照れてしまったようだ。

『戦闘機人は防衛が必要な各所に配置してある。ゲームといこうじゃないか！　ゆりかごは軌道上に到達することで主砲が使えるようになる。君達は時間内にゆりかごを制圧しなければならない。地上本部が制圧されるかゆりかごが軌道上に到達すれば僕らの勝ち。そうでなければ君達の勝ちだ。僕らの旅立ちを祝した余興だ。楽しませてくれよ？』

一方的に告げ、通信を切るスカリエッティ。

「スカリエッティ……プロジェクトFを始めた人……！」

フェイトが、スカリエッティの映っていた画面を見据える。

「……どーやら、一部の人はもう戦う相手が決まってるみたいやな。じゃあ、それを踏まえて部隊分けをするで！」

「フェイトさん！」

作戦会議が終わり、出撃準備に入ろうとしたフェイトに声がかけられる。エリオとキャロのちびっ子コンビだ。

「……別グループになっちゃったね。ゴメンね、私は二人の隊長なのに、いつも一緒にいてあげられなくて」

「そんな！　僕たちはフェイトさんが心配で……」

「たった一人でスカリエッティのところに行くなんて……」

エリオとキャロが言っているとおり、スカリエッティがいる本拠地の制圧には、フェイトが一人で行くことになっていた。

ガジェットは広域に展開しているため、六課でもトップクラスの速さを持つフェイトかフィニアのどちらかには遊撃につく必要がある。

フェイトがスカリエッティの本拠地に向かえることだけ、はやての温情がある証である。

「フィニアには遊撃をしてもらうし、フリーのシグナムには街の防衛に当たってもらいたい。向こうにはコータの捜索をしてくれていたアコース査察官やシスターシャッハもいらっしゃるし、完全に一

人ってわけでもない。大丈夫、心配いらないよ」

「でも……」

なおも心配そうな表情をしているエリオたちをどう安心させようか悩むフェイト。ふと、あることを思い出す。

「じゃあ、指切りしようか」

「「指切り……？」」

「こうやって小指と小指を絡ませて……」

言いながら、フェイトはエリオとキャロの手を取って三人の小指を絡ませる。

「ゆ～びき～りげ～んま～ん、嘘ついたら針千本飲～ます」

「針千本！？」

「なんだか痛そう……」

「うん。だから、ちゃんと守らなきゃいけないんだ。はい、ゆびきった！」

そう言うと、フェイトが絡ませた小指をとく。

「私が昔住んでた、地球に伝わる約束の仕方なんだ。昔はやてに教えてもらったんだけどね。……ちゃんと二人のとこに帰ってくるよ。約束する」

「……はい！」

「約束ですよ？　フェイトさん！」

ようやく笑顔になるエリオとキャロ。

「ほら、そろそろ降下ポイントに着くはずだから。急いで準備してね」

「ホントだ、急がなきゃ……！」

「じゃあ、フェイトさん」

「「いってきます！」」

二人揃って、笑顔で言うエリオとキャロ。それはどこか誇らしげで、ほほえましくも頼もしいものだった。

「はい、いってらっしゃい」

二人が行ったあと、フェイトはふと考える。もし自身が愛する吼太がいなかったら、あの二人はどうなっていたのか。ちゃんと健やかに育ったのか。

「私だったらあんな感じに素直に育たないかもなぁ。なんだか頑固になりそう」

薄々、自分でも頑固だと思っているフェイトからすると、なんだかいじらしいような、そんな不思議な気持ちに包まれた。

「スバル、マッハキャリバーも。無理はしても無茶はしちゃダメよ。ただでさえアンタたちは暴走しがちなんだから」

「うぅ……」

『善処します』

マスターとデバイスは似るともっぱらの噂だが、スバルとマッハキャリバーは特にその例が当て嵌まると言えよう。目的を見つけたらそこに一直線。それは見ている人からすればとても清々しく、そして危なっかしい。

「それに……ギア・サードの上のやつ。あれは出力がハンパないんだから、特に注意しなきゃダメよ」

「わかってるよ。ありがとう、ティア。それよりティアこそ、リミッター解除してないって本当なの？」

ティアナは今回の戦いにおいて、デバイスにかかっているリミッターの解除を断っていた。他の三人は完全解除をしているだけに、少し理解のしづらい選択だ。

「今更大して練習してないモードが増えても、ね。モード3はなのはさんみたいな遠距離砲撃形態らしいから、敢えてカットしないで

貰ったのよ。使わない機能のリミッター解除のために、メカニックのみんなの手を使わせるわけにはいかないし」

六課襲撃からまだ二日しかたっていないこの状況で、六課メカニックスタッフは寝る間を惜しんでデバイスの整備に当たってくれていた。スバルとマッハキャリバーの切り札搭載も、一重に彼等が舞台裏で頑張ってくれていたからだ。

「大丈夫よ。アンタみたいな無茶はしないから」

「うぅ……」

引き合いに出されて、たじたじになるスバル。心当たりだらけで反論が出来ないようだ。

「何か出撃前に一言……って思ったけど、必要ないみたいだね」

「あ、なのはさん」

二人の会話に、なのはが加わる。

「二人とも……エリオやキャロ、ギンガやティーダもだけど、みんな訓練よく頑張ってきた。誰よりも強い……とまでは言えないけど、誰にも負けないぐらいには強くなった」

なのはが拳を突き出す。

「わかってるだろうからあんまりいろいろ言うつもりはないけど、一つだけ。二人が今までやってきたことは嘘でも幻でもない。きっと今回は今までで1番辛い戦いになると思う。だけど、諦めなけれ

ば道は開けるから。どんな不可能だって、本当に不可能かは終わるまで分からない。そのために、二人には厳しい訓練をしてきた」

「「うっ……」」

二人の脳裏に、厳しい訓練の様子がありありと浮かぶ。全身ガクガクになった基礎訓練。泣いても終わらなかったシュートイベーション。毎回ボコボコにされた模擬戦。明らかに訓練の域を超えているようにしか感じないが、多分気のせい。

「……大丈夫。二人ならやれるよ」

「「……はい！」」

『第一降下ポイントまで、あと5分です！』

ルキノによるアナウンスが、第一降下ポイントが近づいていることを知らせる。

「じゃあ、いってきます！」

「なのはさんも、お気をつけて」

スバルとティアナがヘリに向かって走り出す。

「さて、私も準備しなきゃ。だよね、レイジングハート」

『そうですね』

「ヴィータ、本当によかったのか」

シグナムがヴィータに言う。ヴィータは、はやてが部隊わけをしている時に、自らゆりかご攻略に参加したいと言っていた。

「……悔しいけど、アタシじゃあの騎士には勝てない。アタシはどつけば強いけど、アイツはアタシの攻撃を全ていなしてた。多分、致命的に相性が悪いんだと思う」

ヴィータはハンマーを振り回し、相手をその重い一撃で崩して戦う。だが、ゼストはその巧みな槍捌きでヴィータのハンマーを全ていなしてしまうのだ。いかに強い一撃であろうと、発生するエネルギーの一割も伝わらなければ、その威力は激減してしまう。

リインフォース?とユニゾンしていながら、そのリインフォース?を昏睡状態に陥らせてしまう失態。悔しくはあったが、ヴィータは冷静に状況を判断して行動していた。

「ヴィータちゃん……」

リインフォース?が心配そうに言う。リインフォース?を始めとする六課一同のおかげで、先の襲撃事件で重体になった中でリインフォース?だけはこうして戦線に立つことが出来るようになっていた。

「……お前の気持ちはわかった」

「……勝てよ、シグナム」

ヴィータが背中をシグナムに向け、言う。

「伊達にお前たちの将を勤めてはいない。……お前も、死ぬなよ」

「あぁ」

ガジェットはともかく、戦闘機人たちは必要あれば平気で殺人をする。そして彼女達の主であるはやては、六課のトップ。狙われないとは思いづらい。例え戦闘機人がこないしても、あの巨大戦艦が相手なのだ。何があるかなんて想像もつかない。

シャマルとザフィーラがまだ回復していない以上、はやてを守れるのはヴィータだけになる。それ故に起こすであろう無茶を、シグナムは心配していた。

だが、ヴィータはいつも通りのまま。デバイスも改造してさらなる力を付けたが、それでも確実とは言えない。だが、彼女には決して揺らぐことの無い理由があった。

ヴィータが右手を開く。そこには、金色に光を反射する”ナニカ”があった。

襲撃を受けたあと、六課で吼太の部屋の片付けをしている時に見つけたそれを、ヴィータはお守りとして持っていた。

「……ちょっとだけ、借りるかんな。コータ……」

そして、戦士たちは戦場に向かう。

スバルやティアナ、エリオやキャロは市街地と地上本部防衛のため、地上に。

なのはたちはゆりかご攻略に。

フェイトはスカリエッティの元に向かい、シグナムはゼストの元に向かう。

決して楽な戦いにはならない。だが彼女達は、どんな時でも諦めない男を知っていた。

知っていたからこそ、彼女達に迷いはなかった。

――ゆりかご軌道上到達まで、あと６時間４３分――

## 第百四十六話　出撃、機動六課！（後書き）

はい、そんなわけで出撃まででした。戦いまでは行きませんでしたね。残念。

基本的な配置は原作と変わりません。原作にいないメンバーはほとんどがゆりかご周辺のガジェット掃除になるかな？　ガジェットの量が原作より凄まじく多いので。詳しくは吼太復活時に描写します。

さて、スバルのヤツは原作にもあるアレなわけなんですが、ヴィータのやつはオリジナル展開の布石です。ちなみにカートリッジじゃないです。まぁ、お守りみたいなモンですね。正体分かったらたいしたもんです。

さてこれからの展開ですが、フォワードたちの戦い、ゼストさんの話、フェイトとスカリエッティの決着、そして最後にゆりかごの決戦の話の順に書いていこうと思っています。時系列が多少ややこしいことになりますが、ご容赦を。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百四十七話　成すべきこと（前書き）

さて、戦闘開始なわけで。

ここまで来ると、後はテンションに任せるのみです。多分、誤字だらけかも。

では、どうぞ。

# 第百四十七話　成すべきこと

Ｓｉｄｅ　三人称

「「「「うわぁぁぁぁぁ！！？」」」」

『みんな、口閉じてて！　舌噛むよ！』

アルトの声がヘリ内に響き渡る。

フォワード四人を乗せたヘリは何機かの？型ガジェットに追われていた。スカリエッティの手のものであり、アルトの巧みなヘリ捌きにより何機か撒いてはまた何機かが増援に来る……。それの繰り返しだ。

アルトも可能な限り安定した飛行を心掛けているのだが、ガジェットの数が多くどうしても荒々しい運転になってしまっていた。

『みんな、もうすぐ降下ポイントだから、準備して！』

「「「「無理言うな！！！」」」」

あまりに揺れているため、セットアップもろくに出来ないのだ。準備など出来るはずもない。

『じゃあみんな……ゴメン！』

「へ？」

不意に浮遊感を感じるスバル。周りのみんなもキョトンとしている。

……そこで気づく。自分達はいつから空を飛べるようになったのか。

そんなわけない。そんな不意に飛べるようになったら世の中空戦魔導師ばかりになってしまう。

つまり、自分達が今空中にいるのは……

「「「「うわぁぁぁぁぁぁ……」」」」

ヘリから落とされたためだ。

アルトがヘリを操作し、スバルたちを振り落としたらしい。

空に、ガジェットたちを引き連れて飛び回るヘリが見える。もう既にそこそこの高度になってしまっているようだ。

「ってやばいやばい！　このままじゃ死んじゃうって！」

「全員、早くセットアップ！」

ティアナが言うと同時に、四人とも強烈な風圧を我慢しながらデバイスを取り出し、セットアップをする。

「お願いフリード！」

さらにキャロはフリードを召喚し、エリオとキャロをフリードの背に乗せる。

スバルはティアナを受け止め、ウイングロードを展開して上手く着地する。

「……なんとかなるものね」

「……ですね」

訓練の賜物か、はたまた火事場の馬鹿力か。何が理由にしろ、無事に済んだことは確かだ。

「よし、このまま私たちはガジェットを迎撃しつつ戦闘機人や召喚士の娘と戦って、可能なら保護。かなりキッツイ戦いになるだろうから、気を引きしめていきましょう」

ティアナがスバルから降りつつ、三人に言う。これから三人はこの周辺のガジェットを掃討しつつ、戦闘機人らを相手取ることになる。ヘリの素晴らしい運転のせいでフラフラだった体調も、気を引きしめたことで元に戻る。

「……ッ！？　散開！」

何かを察知したティアナが、叫びながら回避行動に移る。ティアナとほぼ同時にスバルたちも回避すると、先程までティアナたちがいた場所で爆発が発生する。

「おやおや、外れちまったっスね」

「ちゃんと狙って」

「大丈夫っスよ。ちゃんと目的は果たしたっス。じゃ、私も行ってくるっス！」

四人が先程までいた場所がよく見える、高層ビルの屋上にいた二人の戦闘機人、ウェンディとオットーが話す。

「……結界展開」

オットーが自身の目の前に展開されていたウィンドウを操作すると、三つの直方体型結界が、爆発により分断されたティアナたちを閉じ込める。

「これで六課の地上防衛班は無力化した。あとは地上本部を落とすだけ」

「そうか。ならお前の見通しが甘いことを私が教えてやろう」

オットーの独り言に、背後から斬りかかるシグナムが答える。

だが、オットーは振り返りすらしない。レヴァンティンがオットーの頭に迫る。

「でやぁぁぁぁぁッッ！！」

だが、オットーの無防備な頭にレヴァンティンが当たる前に、その刃は別の刃に防がれる。そのまま吹き飛ばされるシグナム。

「聞こえなかったの？　僕は”六課の地上防衛班”と言ったんだけど」

ようやく振り返ったオットーが、シグナムに言う。

「悪いがこれも契約の内でな。だが、私にも旧友に会いにいく約束がある。手早く済まさせてもらうぞ」

シグナムを弾き飛ばした騎士――ユニゾン状態のゼスト――が、槍を構えて言う。

「くっ……リイン！」

「はいです！　ユニゾン・イン！」

シグナムも待機させていたリインフォース?とユニゾンし、万全の体勢を整える。先程の一撃からゼストがそれだけの実力を持つと判断したのだ。

「さて、僕は結界維持のためにここから動けない。後は頼むよ。みんな」

Ｓｉｄｅ　ティアナ

「くっ……分断された……！」

マズイわね……ただでさえ私たちはギンガさんと兄さんという二人の実力者を欠いているのに、さらに分断までされたら……。

さっきの様子を見る限り、分断されたときにエリオとキャロ、チビ竜は一緒になれたみたいだったけど、そうなるとスバルは一人。早く結界を破壊してせめてスバルとは合流を……

「……ッ！？」

『ダガーモード』

咄嗟にクロスミラージュをダガーモードにして、斬撃を受け止める。

「エリアルショット！」

だが斬撃を受け止めると同時に飛んできたエネルギー弾に当たり、吹っ飛ばされる。

幸い骨には異常無いみたいだけど……。

「あらまー、案外傷浅いっスね～」

「……」

目の前に二人の戦闘機人が立ち塞がる。持ち物からして、光刀持ちは前衛、楯持ちがバックサポートかしら。

こっちは前衛がいないってのに……！

「でもまぁ、こっちは二人。しかもガジェットまでいる。対してそ

っちは一人。結界があるから脱出も救援も期待出来ない。……投降してくれると有り難いんスけどね」

「お生憎様。私は物分かりが悪くて……ね！」

大量のシルエットを出し、それを楯に逃げる。目の前に万全の状態でいられたら勝てるものも勝てない。ただでさえここはビルの中。中央が吹き抜けになっているから、空中戦が出来るか否かで移動出来る範囲が大きく変わる。

そして私は、”否”。

「今日ほど自分に空戦適性が無いことを恨んだことは無いわね……！」

物陰に隠れつつ移動をしていく。戦闘機人たちは吹き抜けのほうから捜し始めたらしく、ビルの中央辺りから引っ切りなしに空気を切る音がする。

さて、どうしようか。

私の武器は幻術、それにアンカーを利用した特殊機動。それぐらい。

私になのはさん並の砲撃の威力は無いし、このビルは狭いから砲撃を放てばビルを破壊してしまう。そうなれば足場が減るし、肝心のダメージも壁や床を破壊する過程でかなり減衰してしまう。

ダガーモードはあくまで補助だから仕留めるのには力不足。となると使えるのは魔力弾のみ。せめて砲撃が実用レベルで使えれば……。

いや、無い物ねだりをしても仕方ない。今は早くアイツらをだまくらかして合流を……

――ジャリッ

「しま、ッ！！」

緊張しすぎていたのか、足元に僅かに散らばっていた砂を踏んでしまい、音が出てしまう。

同時に近くにいたガジェットがこちらにビームを発射してくる。

「このっ！」

ヴァリアブルバレットでガジェットを撃ち抜き、また走り出す。今の一撃とガジェットが破壊された音で居場所を特定されたはずだ。このままじゃ挟み打ちにされる。奴らが来る前に逃げないと……！

「見つけたっス！」

早い！？

「クロスミラージュ！」

『クロスファイヤー・バースト』

多量の炸裂式魔力弾を放ち、煙幕を張ることで楯の戦闘機人の目をくらまし、吹き抜けを魔力アンカーで逃げる。

やっぱり、私一人じゃ持ちこたえるのが限界……！

……くそっ、なんで私はこんなに弱いの！！　仲間がいなきゃ何も出来ないっての！？

「貰います」

「し、しまっ……」

一瞬気を許した隙に、飛翔してきた光刀の戦闘機人にアンカーを奪い取られ、引き寄せられる。

……みんな……

Ｓｉｄｅ　スバル

「ここは？」

『どうやら廃棄都市の中にあった競技場のようですね』

確かに開けた場所で、隠れる場所が無い代わりに遮蔽物もない。天井も高いし、戦いづらいことはない場所ではある。

「外には結界……多分、エリオとキャロは一緒だろうからまずはティアと合流だね。ファイナルアタックで一気にぶち抜く！」

『プロテクション』

ファイナルアタックのためにデータウェポンを出そうとすると、突然背後からエネルギー弾が飛んでくる。なんとかマッハキャリバーが自動展開したプロテクションが間に合ってダメージはないけど、攻撃されたという事実が私に、”この場に敵がいる”ということを教えてくれる。

「誰だ！」

「……よく防いだな。白ハチマキ」

そう言いながら、一人の人影が競技場の中央に降り立つ。

「お前は……！」

「Ｎｏ．９、ノーヴェだ。覚えとけ白ハチマキ。あと、アンタの相手はアタシじゃねぇ。……出てきな」

ノーヴェが言うと、さっきと同じように人影が競技場の中央に降りてくる。

それは、私がよく知る人。

私が憧れ、尊敬している人。

私の、大切な家族。

「ギン……姉……？」

「二日ぶりね、スバル。……じゃあ、戦いましょうか」

ギン姉が、拳を構える。

「なんで……？　私たちに戦う理由なんて……」

「あなたには無くても……私にはあるのよ！！！」

ギン姉がブリッツキャリバーを全速力で走らせながら突っ込んでくる。

「マ、マッハキャリバー！」

『ウイングロード』

ウイングロードを展開して、空中に逃げる。ギン姉と戦うなんて出来ない。あの優しいギン姉が……。

「ブリッツキャリバー！」

『ウイングロード』

だけどギン姉は私と同じようにウイングロードを展開し、私を追ってくる。

「でぁぁぁぁっ！」

「ぐうっ……！」

ギン姉の重く、鋭い蹴りが私を襲う。なんとか防御するものの、腕が痺れてしまう。

やろうと思えば私も蹴りで応戦出来るけど、ギン姉と戦うなんて…

…やっぱり私には……

「バイパードライブ、インストール！」

私の葛藤など知らないギン姉は左腕に蛇型のデータウェポン、バイパーウィップを展開する。その瞬間、ギン姉はさらに加速して私の前に回り込む。

バイパーウィップの能力、イリュージョンフラッシュは影分身が行えるほどの高速移動が出来るようになる。対し私にはそれに追い付く手段は無い。

『キャリバーショット』

ブリッツキャリバーを介したギン姉の強力かつ高速の蹴りは、私を易々と地上にたたき落とした。

「ガハッ……」

今の一撃で内蔵に傷がついたのか、口から血が噴き出す。バリアジャケットでも、ギン姉の蹴りを防ぐことは出来なかったみたいだ。

「おい、白ハチマキまだ動けるじゃねぇか。さっさと終わらせろ」

「分かってるわ。次の一撃で仕留める。ユニコーンドライブ、インストール」

ノーヴェと話していたギン姉が、バイパーウィップを戻して、代わりにユニコーンドリルを出す。

さらにユニコーンドリルのドリルが高速で回転し始めるのと同時に、ギン姉の左手もまるでドリルのように回転し始める。

「リボルバーギムレット。これとファイナルアタックの連撃は強力よ。……スバル」

ギン姉が両手を構え、そして言う。

「”お姉ちゃんを超えられない”貴女に、私は倒せない」

「なんで……なんで私たちが戦わなくちゃいけないの……？　ギン姉……ギン姉ぇぇぇぇぇ！！！！！」

Ｓｉｄｅ　三人称

都市の一定区画を丸ごと包む結界。ルーテシアのために張られたそれの中でも、激戦は繰り広げられていた。

「ガリュー止めるんだ！　こんなことしても意味無い！」

「ルーちゃん！　私たちが戦う意味なんて無いんだよ！！」

「……あなたたちには分からない。幸せな家族も、恵まれた環境もいるあなたたちには！」

ルーテシアにより召喚された二体の地雷王から、砲撃が放たれる。普段は地面を破壊するのに使っているものだ。威力は凄まじいの一言に尽きる。

「フリード！　ブラストレイ！」

フリードがその口から強力な火炎を吐き出す。火炎の息は地雷王の砲撃と激突し、拮抗する。地雷王もさることながら、フリードのブレスも相当の威力だ。

さらにフリードは、ブレスを吐くや否や飛翔し、その強靭な尾で三体目の地雷王を薙ぎ倒す。まさに獅子奮迅の活躍だ。

「グルゥ……」

フリードがここまで凄まじい動きを見せているのは、フリード自身の資質もさることながら、先の戦いが原因だ。あの時のフリードには、主人も、友人も守れなかった。もう、あんな思いはしたくない。今度は、自分が守る。

「ゴアァァァァ！！！」

フリードの翼の羽撃きが地雷王を吹っ飛ばし、尾の一撃がまた別の

地雷王をたたき落とす。

だが、フリードがそこまでの活躍をしていても、優勢は六課の二人ではなく、ルーテシアの側にあった。

「くっ……大斬幻！！！」

魔力を込めた強力な振り下ろし、大斬幻が空中にいるガリューに襲い掛かる。だがガリューはそれを腕の角を見事に使い、力をいなす。

「……」

ガリューが時間停止を行い、一気にエリオの後ろに回り込む。そして、尾の一撃でたたき落とす。

「ぐあぁぁぁッッッ！！！」

地面へと飛んでいくエリオ。だが、地面にぶつかる前にフリードがエリオを受け止める。

「ありがとうフリード！　サソードォ！！！」

『ＳＡＳＷＯＲＤ　ＰＯＷＥＲ！　ＨＹＰＥＲ　ＷＡＶＥ！』

サソードゼクターにより精製されたナノ粒子構造体、ポイズンブラッドを刃状に固め、連続射出する。

一種の弾幕となった刃の群れは、フリードを狙う地雷王たちに殺到し、巨大な蟲の群れを押し返す。

だがその刃の弾幕をかい潜り、ガリューがエリオとフリードに襲い掛かる。

「危ないエリオくん！　ホイールプロテクション！！！」

しかし、迫るガリューにいち早く気づいたキャロがホイールプロテクションを放ち、ガリューの動きを封じる。本来は防御用であるホイールプロテクションを拘束に使用するキャロの応用力にはさすがのルーテシアとガリューも驚いたようだ。

「ありがとう、キャロ。でも……」

キャロの近くに降り立つエリオ。対集団戦において背中を見せることは、負けに繋がりかねない。とはいえ、ここまでの戦力差がある状況では、付け焼き刃レベルの対策にしかならない。

「……しつこいよ、あなたたち」

この状況に苛立ちを感じはじめたルーテシアが、足元にさらなる召喚陣を展開する。

「……来て、白天王」

巨大な魔法陣から現れた巨体が、眼下のビル群を踏み潰しながら降臨する。

彼の者はは白天王。ルーテシア最大最強の召喚蟲にして、蟲の王。

「白天王……！」

キャロが白天王の放つ威圧感に負けずに見返す。

「白天王に対抗するにはやっぱり、ヴォルテールしか……」

だが、キャロは召喚を逡巡してしまう。以前の戦いでヴォルテールは白天王と戦い、そして敗北した。

もう一度召喚したとして、勝てるのか。いや、そもそも言うことを聞いてくれるのか。

震えるキャロの手。だが、その手に他の手が添えられる。

「エリオ……くん？」

エリオだ。フリードもキャロを見つめる。

「信じて。僕はキャロを信じる。フリードもキャロを信じる。だからキャロは、僕とフリードが信じるキャロを信じて！」

それは、二人が慕う人が言っていた言葉。

「オレが信じるお前を信じろ」という、一見矛盾した言葉。

だが、今のキャロにはこの上ない激励だった。

「……うん！」

桃色の巨大な召喚陣が、空中に現れる。

「天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠（とわ）の護り手、我が元に来よ、

黒き炎の大地の守護者」

キャロが詠唱していくと、魔法陣の輝きもそれに従い、強いものへとなっていく。

キャロは感じる。大いなる竜の息吹を。自分の言葉に応えてくれていることを。

そしてキャロは唱える。自身の”最強”を喚ぶ言ノ葉を。

「竜騎招来、天地轟鳴！　来よ、ヴォルテェールッッッ！！！」

魔法陣から、白天王にも匹敵する巨体が顕れる。

それは、彼の地に伝わる大地の化身。大いなる竜の王。

「……やっぱり、それだけ。あなたたちはやっぱり、私には勝てない」

それでも、ルーテシアは動じない。以前の戦いでの経験と、今回の手応えからの確かな推測だ。

やはり、二人の不利な状況は変わっていなかったのだ。

「う……」

聖王教会付属病院、聖王医療院の中の一室。そこで寝ていた男が目を覚ます。

ヴァイス・グランセニック。六課のヘリパイロットだ。

「目を醒ましたか」

ヴァイスの隣で寝ていた狼、ザフィーラが言う。包帯をつけたその姿は、二日前の事件を生々しく物語っている。

「今日は、何日の何時っスか……俺は、どれだけ寝てた……！」

「事件から二日だ。あの怪我にしては有り得ない速度だな。とはいえ、状況は芳しくない。見ろ」

ザフィーラがヴァイスの目線を中継映像に誘う。そこには大量のガジェットが攻めている様子と、ガジェット相手に奮闘する魔導師たち、そして戦闘機人と六課陣の戦いが映し出されていた。

「アイツら！」

「ヘリはアルトが代理してくれているそうだ。お前の怪我もまだ深い。おとなしく療養していろ」

ザフィーラがベッドから降りて、人間型に変化する。

と、その時、部屋のドアが不意に開く。そこから入って来たのは、小さな女の子。そして、片目に眼帯を当てたその女の子のことを、ヴァイスはよく知っていた。

「ラグナ……」

「お兄ちゃん、目覚ましたんだね。よかった……」

少女……ラグナは心の底から安心したような表情を見せていた。だが、ヴァイスの顔にはむしろ焦りと……そして後悔が現れている。

「……お兄ちゃん。やっぱりあの時のコト、気にしているんだよね……？」

ラグナが少し落ち込んだ様子で言う。

それは、ヴァイスがまだ武装隊にいた時の話。スナイパーライフル型デバイス、ストームレイダーを自在に扱っていた時の話だ。

ヴァイスの元に遊びに行こうとしていたラグナ。だが運悪くとある犯罪者に捕まり、立て篭もりの人質にされてしまった。

その事件を解決するためにヴァイスの所属している班が出動したのだが、立て篭もり犯は興奮しており、一歩でも間違った行動をすれば人質が殺されかねない状況だった。

――人が認識出来る範囲から相手を撃ち抜く、アウトレンジショットに精通したヴァイスに白羽の矢がたつのも、当然だと言えただろう。

だが、ヴァイスは動揺していた。自身の肉親――それも、両親に捨

てられてしまっていた二人にとっては、互いこそが唯一かつ絶対の肉親だったのだ。そのただ一人の存在の危機なのだ。動揺するなと言うほうが無理だろう。

しかし、それが悲劇の始まりだった。

心の迷いは道を違えさせる。それは単純な道だけではない。剣の描く軌道、自分の未来。弾道とて、例外ではない。

ヴァイスの放った弾丸はヴァイスの僅かな心の迷いを敏感に感じ取り、ヴァイスの狙っていた着弾点から少しだけ――ほんの少しだけズレる。

そしてズレた弾丸は立て篭もり犯の頭ではなく、人質にされていたラグナの瞳に当たってしまった。

弾丸は非殺傷設定だったが、非殺傷設定だからといって物理ダメージが全く無いわけではない。眼球などの、特に幼児のそれのような柔らかいものの場合、完全に物理ダメージを無くさなければ傷つけてしまう。だが、物理効果の完全消失はかなりの高度技術。大規模魔力とそれを高速かつ並列的に処理出来なければ成し得ないのだ。そしてヴァイスにその才は、無かった。

そしてこの事件の後、ヴァイスはストームレイダーを持つことが出来なくなってしまったのだ。

「……あのねお兄ちゃん。私ね、少しだけ……ほんの少しだけど、あの事件に感謝してるんだ」

「な……お前、何言ってんだ！」

そんなことは嘘でも言っちゃいけないとばかりに怒るヴァイス。だが、ラグナは引かない。

「だってあの事件の後からずっと……お兄ちゃん、危ないところに行かなくなってくれたもん」

そう言われて、ハッとするヴァイス。確かにヘリパイロットになってからは魔導師や物資を運ぶばかりで戦いの場そのものに行くことは無くなっていた。それに武装隊にいた時、ラグナはいつも自身を心配してくれていたこと。それを思い出したのだ。

「でもね、私……そうやってお兄ちゃんが辛そうな顔をしてるのもいや。お兄ちゃんが傷つくのは嫌だけど、お兄ちゃんが戦えずに悔しがっているのはもっと嫌」

ラグナがダッシュボードに乗っていた、ドッグタグ型の待機形態をとっているストームレイダーを手にとる。

「戦ってお兄ちゃん。私は大丈夫だから。私はお兄ちゃんを責めたりしない。だから、戦って？」

そう言い、ラグナがストームレイダーをヴァイスに渡そうとする。

「あ、こんなところに……。ほら、早く避難しますよ」

だが、ストームレイダーを渡す前にラグナは部屋に乱入してきた看護師に捕まってしまう。

「あ、やだ！　離して！　私はお兄ちゃんとお話……！」

「入院患者さんも追って搬送しますから、向こうでお話しましょうね～」

ラグナが逃れようと身体を動かすが、存外看護師の力は強く、力の弱いラグナは逃れられない。

逃げることを諦めたラグナは、せめてもとストームレイダーを握りしめた右手を振りかぶる。

「お兄ちゃん、受けとってーーー！！！」

「……ラグナ」

「……では、私は行くとするか」

事を静観していたザフィーラが、ベッドから抜けだし、点滴を引っこ抜く。

「旦那、アンタ傷が……」

「我は夜天の守護獣だ。その気になれば傷など一瞬で回復出来る。アルトたちにお前を見守っていてくれと頼まれていたが、その必要もなくなったしな」

ザフィーラはそのまま歩き出し、病室のドアに手をかける。

「私は私の成すべきことを成すために往く。お前の成すべきことは何か、しっかり考えるんだな」

そして、ザフィーラは出ていった。

病室に残ったのは、ヴァイスただ一人だけ。

「俺の……成すべきこと……！」

ヴァイスの右手には、輝くストームレイダーが握られていた。

## 第百四十七話　成すべきこと（後書き）

はい、今回はフォワードの戦いでしたね。他に適当な位置もなかったので、ヴァイスの葛藤も入れさせていただきました。

ヴァイスの部分で、目立たなくなった目の話を入れなかったのは……その……入れるタイミングが……ゴニョゴニョ

作中紹介してますが、基本的にナンバーズ2人やそれに相当する人数をフォワードの相手にしています。これは、単純な実力なら既にフォワードはナンバーズと同等だからです。無論、ナンバーズ側はアップグレード無しでの話ですが。アップグレードありにしたら隊長陣でも危ないので。

あ、アップグレードは出しますよ？　ちゃんとね。

しっかし、最近一人称が下手になった気がするんですよね。気になったりわかりにくい部分あったらガンガン言ってください。

そして次回、フォワードたちは決意を固め、そして成長をすることになります。原作でもそんな感じです。

この作品ではどうなるか、楽しみにしてもらえると嬉しいです。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百四十八話　送られる手紙（前書き）

最長記録更新かも？　そんぐらい長い。

今回はＳｔＳでも書きたかったシーンベスト３に入ります。

そう、とうとうスペシャルが出ます！　……でもまだ名前だけ。

# 第百四十八話　送られる手紙

Ｓｉｄｅ　三人称

「しかし、こうも上手くいくとはな」

大量のガジェットを引き連れ、？型ガジェットに乗って移動する銀髪の戦闘機人、チンクが言う。

機動六課のフォワードの実力は侮れない。彼女ら戦闘機人とて、一瞬の判断ミスが敗北に繋がりかねないほどだ。その意味では、フォワードらを上手く分断して封じることが出来たのは奇跡的とも言える。

「力を合わせて強力なら、分断してやればいい、か。単純だが、それ故効果的でもある」

とはいえ、フォワードたちを封じるのに戦闘機人５体、加えて召喚術師であるルーテシアも宛ててしまったのは少々不都合とも言える。おかげで、地上本部制圧に当たれるのがチンク一人になってしまった。

「騎士ゼストも忙しいようだ。我々に協力してはくれないだろう。病み上がりにはキツイが、やるしかないか……」

そして足場のガジェット？型に指令を送り、さらに加速しようとした時である。

突如として飛来した”オレンジ色の”魔力弾がチンクを運んでいた

ガジェットを射抜き、破壊したのだ。

間一髪ガジェットの破壊に気づき、爆発に巻き込まれる前に逃れるチンク。近くのガジェットに乗り移るが、それもまた破壊されてしまう。

やがて、ほとんどのガジェットが破壊されてしまい、チンクは地上に降りざるを得なくなっていた。

「くっ……誰だ！」

チンクがオレンジ色の魔力光、で思い付くのは一人。そしてその一人はウェンディとディードと戦っているはずだ。オットーの張った結界もあるし、何より移動するための”足”が無いため、チンクには追いつけるはずがない。

一応もう一人、オレンジ色の魔力光を持つ人間をチンクは知っていたが、その人物が来るはずはない。何故ならその人物はチンク自身によって……殺害されたのだから。

「姿を現さないならあぶり出すまでだ！　ＩＳ、ランブルデトネイター！」

チンクが大量の金属製投擲用ナイフ”スティンガー”を取り出し、四方八方に飛ばす。

チンクのＩＳ、ランブルデトネイターは金属物を爆発させる能力。そして周辺は廃棄都市のビル街。辺りのビルを破壊してしまえば、相手が誰だろうと撃破出来るはずだ。

だが、事はチンクの思った通りには進まなかった。チンクが放ったスティンガーは、その全てがビルに突き刺さる前にオレンジ色の魔力光を放つ弾丸によって破壊されてしまったからだ。

これでチンクは確信する。以前タイプゼロ・ファーストを捕獲した際、その的確かつ素早い射撃技術により、自身にアップグレードを使わざるを得ない状況まで追い込んだ魔導師。それがここにいることを。

「だが何故だ……何故奴がここにいる？　奴は確かに私が殺したはず……」

チンクの背後６ｍ、そこのビルの中からチンクを注視している存在がいた。

ティアナの持つクロスミラージュとよく似たデバイスを持ち、執務官として幾人もの凶悪な犯罪者を逮捕してきたエリート魔導師。

ティーダ・ランスター。ティアナの兄である彼は、今ここに復活していたのだ。

ここで時間を少し巻き戻そう。まだ吼太が出掛ける前の話だ。

聖王教会の医療院で一足先に目が覚めた彼は、吼太からある作戦を

伝えられていた。

「戦闘機人たちは恐らくフォワードたちを狙ってくる。だからお前は直前まで意識不明の状態を装い、時が来たら秘密裏に動いてノーマークのガジェットや、場合によっては戦闘機人を叩いてくれ」、と。

さらに吼太から全ての戦闘機人に関する情報も貰い、あらゆる状況に対応出来るようにしていた。

そしてチンクの場合は、”視界内に入るな”。チンクのアップグレードが視界内のものにしか影響が無いことを、吼太はこの時既に見抜いていたのだ。

チンクのアップグレードの威力と厄介さは、ティーダ自身身を持って知っている。”気づく間もなく、爆破”されてしまうチンクのアップグレードに対抗するために、ティーダは物陰からチンクを狙う戦い方にしていた。

「しかし……ティアナたちは無事なのか？　なんとか早くあの戦闘機人を倒して、援護にいかねぇと」

自身のデバイスであるクロスファントムを握る力が強くなる。体調はすこぶる快調。チンクにやられる前よりいいぐらいだ。

「今度は負けない……俺が勝つ！」

ティーダは息を潜め、チンクを狙う。だがチンクも中々隙を見せない。さっきの攻撃によって警戒が強まったのだ。

「チッ……」

迂闊に撃てば発射場所からこっちの居場所を突き止められる。そうなれば危険が高まるのは当然の理だ。

だがティーダは、敢えて魔力弾を放った。

「そこか！」

チンクがスティンガーを、発砲音のした場所に寸分違わず投げ込む。

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

さらに、スティンガーが壁に当たる直前に爆破することで、ビルの壁を破壊した。これなら例え一発目で仕留められずとも、アップグレードで確実に仕留められる。

「……何？」

だがチンクの予想とは裏腹に、爆破した場所には誰一人として人間はいなかった。遠目での確認ではあるが、サーモグラフィーも併用したのだ。それで見つからないということは、やはりその場所に人間はいなかったのだろう。注意をそこから逸らそうとした時だった。

発砲音と共に再び魔力弾が発射されたのだ。――――先程爆破した場所から。

「馬鹿な！？」

先程の確認は完璧だったはずだ。つまりあそこに人はいない。だが、

発砲音はあそこからしている。明らかな矛盾が発生していた。

「……なら見に行けば済む話だ」

真実を求め、チンクがビルに入る。やがて先程壁を破壊したフロアに入ると、辺りを見回し始める。すると、そこにはデバイス――クロスファントムだけが置かれていた。

「デバイスを囮に逃げたのか……？」

いや、いくらなんでもそれは有り得ないだろう。魔導師の命とも言えるデバイスを手放す時など、死ぬ時以外に無い。

つまり、クロスファントムはチンクをここにおびき寄せるための囮。ならここにチンクを呼び寄せた犯人――ティーダは、デバイスを取り返すための算段までしているはずだ。

「……」

チンクがスティンガーを構え、精神を集中させる。

次の瞬間、クロスファントムが動いた。何かに引っ張られるように動くクロスファントムは、やがてチンクが今いる階の一階上に引き込まれる。

「しくじったな速射の魔導師！　それでは自分の居場所を知らせているようなものだ！　ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

チンクが上の階に向けて大量のスティンガーを放ち、破壊する。これで上の階の床は破壊され、落ちてきたティーダを狙い撃つことが

出来る。また、落ちてこずとも逃げる隙などないのだ。ティーダが見つかるのは時間の問題だ。

……いや、問題となるはずだった。

チンクの放ったスティンガーの爆発は上の階だけでなく、自身がいる階、果てはビル全体に皹を入れる。やがて、巨大な爆音と共にビルは崩落した。

素知らぬふりをしながら、糸を巻き取ってクロスファントムを回収するティーダ。彼はとうの昔にビルの外にいたのだ。

トリックはこうだ。まず無音の魔力弾でビルの内部をある程度脆くなるよう破壊する。そしてクロスファントムを置き、その階の一階上を経由して外に紐を垂らす。あとはチンクが入ってきたらクロスファントムを回収し、チンクにランブルデトネイターを発動させれば、爆破に耐え切れなかったビルが崩壊する、というわけだ。

その手順を瞬時に実行することもそうだが、何よりその発想力。ティーダが若くして執務官になり、活躍出来ているのはその発想力あってのことだ。

「死んではいないだろうがもう動けんだろ。大人しくしとけよ」

そう言い、ティーダは走り出した。

だがしかし。ティーダは甘かったのだ。困難とはいえ、敵の気絶を確認していないのに行こうというのだから。

尤も、確認をしにいっていたら死んでいたが。

ティーダが元はビルだった瓦礫の山に背を向けた瞬間、全ての瓦礫が爆発した。

そして、瓦礫の山があった中から無傷のチンクが現れる。

「ふむ、少し驚いたか。やるな魔導師」

対し、先程の爆発に紛れてまた別の物陰に逃げたティーダはただでは済まなかった。爆発で飛んできたガラスの欠片。それがティーダの右手に刺さってしまったのだ。

感覚はあるが出血が酷く動かせそうに無い。欠片を抜いたあと、なんとか魔力で応急処置するが、正直戦えるとは言えない状態だ。

「ドジったな……くそ！」

壁を軽く、しかし悔しげに叩いたティーダの懐から、何かが落ちる。

それは、まだティーダが意識不明のまま病院にいたころに、ティアナが置いていってくれたもの。

昔、ティーダ自身がティアナにあげた、おもちゃの銃。

「……そうだな、まだ負けられないよな」

それを見たティーダが決意を新たにする。ティアナの思いに、応えるために。

手繰りよせられる魔力糸。ティアナはそれに引っ張られる。例え今糸を切ったところで、慣性に縛られたティアナの身体は止まらない。

「なら！」

ティアナがクロスミラージュの魔力弾をやたらめったらに撃ち始める。まるでやけを起こしたかのように。

「無駄な抵抗ね」

その全てを、空いた手に握った光刀で斬るディード。

だが、それによりディードの注意がほんの僅かながら、ティアナから離れる。

「そこッ！」

その隙を突き、小さな魔力刃を発生させたクロスミラージュの銃身

型カートリッジを、光刀目掛けて打ち出す。
魔力刃付きカートリッジはティアナの目論み通り光刀の柄に突き刺さる。
「何!?」
「今！　クロスファイヤァーッ！」
『シュート』
ディードが光刀に気を取られてティアナから視線を逸らす。その瞬間にティアナは魔力糸をクロスミラージュから切り離し、魔力糸から解放されたクロスミラージュで先程のカートリッジを狙い撃った。
カートリッジは則ち、魔力の高密度圧縮体だ。今でこそ破損しづらくなっているが、かといって破損しないわけではない。カートリッジ内に大量に篭められた魔力。カートリッジに当たった魔力弾によりそれが解放されたらどうなるか。
答えなど、火を見るより明らかだ。
「きゃああっ！！」
高密度圧縮魔力の炸裂により、爆散するディードの光刀。
「ディード！」
ウェンディがディードを助けようと、エネルギースフィアを展開する。だがティアナはすかさず魔力糸を展開し、さらに炸裂式魔力弾

をウェンディに向けて発射する。

魔力炸裂により発生した煙が晴れたころには、ティアナの姿は無かった。また、どこかに身を隠したのだろう。

「くっそー……アイツムカつくっス！　っと、大丈夫っスか？　ディード」

「問題無い。ただ、アップグレードの”殺す能力”はもう使えない」

ディードが残った光刀の具合を確認しながら言う。ディードのＩＳの根幹は二振りの光刀。故に光刀に異常が発生するとディードのアップグレードは使用不可能になってしまうのだ。

「つーことは出力アップだけっスか……。……いいっスよディード。こうなったらビルまるごと一回斬っちまうっス」

「了解。ＩＳ、ツインブレイズ、アップグレード」

ディードが機能を発動した瞬間、光刀のエネルギー刃が肥大化する。そのままディードはビルを縦に一閃した。

縦に斬った故に崩落はしなかったが、脆い壁はそれが原因で崩れ落ちる。

「な、しまった！？」

それにより、隠れていたティアナが引きずり出されてしまった。

「……お返し」

ディードが近寄ってティアナを一閃。さらにウェンディの放ったエネルギー弾がティアナを包んだ。

「どうだったっスか？　ディード」

追ってやって来たウェンディがディードに成果を聞く。

「手応えは少し。でもまだ動けると思う」

ディードが手に持った光刀をウェンディに見せる。そこには僅かに血が付着していた。

「油断は無しっスよ。今のどさくさでまた隠れられちまったっスから、また捜さないといけないっス。隙を見せたらまたさっきみたいにやられるかもっスからね」

「了解」

そこで会話を止め、二手に別れてティアナを捜し始めるウェンディとディード。

そのすぐ近くに、ティアナはいた。オプティックハイドを使い、傷口から滴る血も含めて隠れていたのだ。彼女達もまさか、自身らの足元近くに狙いの人物がいたとは思わなかったらしい。

だが、ティアナにとって状況はますます不利に傾いていた。

「くっ……よりによって！」

ティアナの顔が苦痛に歪む。ティアナの左足にはパックリと傷が開き、血が流れ出ている。

今までティアナは脚を使うことでなんとか戦闘機人二人相手に立ち回ってきた。日々の訓練で鍛えられたその脚に、ティアナは初めて感謝していたのだ。

だが、もうそれも使えない。幻術も当てに出来るほど魔力は残っていない。射撃も既に読まれてる。

「やっぱり私は凡人、ということかしらね……」

ティーダのような早撃ち技術も、スバルのようなフィジカルも、ギンガのような格闘センスも、エリオのような資質も、キャロのような希少技能も無い。あるのは比較的珍しい幻術だけ。幻術も、ましてや脚も封じられた今、ティアナに勝ち目は無い。

「これはいよいよ……ダメかも」

ティアナの心に、諦めと言う名の暗雲が立ち込める。心の弱音は身体に影響を及ぼす。身体は冷え、クロスミラージュを持つ手は震え、目の前が暗くなっていく。

あぁ、ここで目をつむれば、きっと楽になれるんだろうな。そんな考えがティアナの頭を占める。

意識したらなんだか瞼が重い。だんだん視界が暗闇に包まれていく……

『大丈夫だよ、ティアなら！』

『どうしたティアナ？　寝不足じゃないよな？』

ティアナの耳に声が聞こえた。幻聴かもしれない。だが、その声に導かれるように、ティアナの瞼が開く。

「スバル……兄さん……」

『だってティア、強いもん！　私、ティアを信じてるから……！』

『お前の強さは俺がよく知ってる。まだ諦めるには早いんじゃないか？』

「……くっ！」

視界が滲む。瞳から涙がこぼれ落ちる。

『なぁティアナ。お前がもし辛い思いをしたならな。お前が今までで1番辛かったことを思い出してみろ。少しだけど冷静になれるからさ』

「今までで1番……辛かったこと……」

ティアナが思い出す。自身にとって1番辛かったこと。それは、その言葉をくれた人が帰って来なかったときだ。

「う……コータ……さぁん……」

逢いたい。会って抱きしめて、キスして、温もりを確かめたい。

「……そうよ、こんなとこで止まってられない……」

自身の愛する人が助けを求めているかもしれない。なら、自分がやることは一つだ。

「……あれは」

ディードがその人物を見つけ、近寄る。ウェンディも来たようだ。

「もうかくれんぼは終わりっスかぁ？　ならもう終わらせてあげるっスよ！」

ウェンディがエリアルショットを放つためにエネルギースフィアを展開する。だがエネルギー弾が放たれる前に、そのエネルギースフィアはティアナによって撃ち抜かれる。

「な……」

「早い！？」

弾丸の速度は変わらない。つまり、初動がかなり早いということになる。ティアナがウェンディの行動を先読みしたのだ。

「悪いけど、アンタたちに構ってはられないのよ。速攻で終わらさ

せてもらうわよ！」

ダガーモードのクロスミラージュを左手に持ち、右手のクロスミラージュをウェンディに向けたままのティアナが言い放つ。

「……ぷっ、アハハハハハ！　なぁ～に調子こいてんスか！　たかだか不意打ちの一発当てただけで！」

大笑いをするウェンディ。ディードもどこか、見下した視線をティアナに向ける。だが、ティアナはもうそんな程度ではくじけない。

「あら、その”たかが不意打ちの一発”に驚いていたのは……どこの誰だったかしら？」

どこか妖艶ともとれる目線で、ウェンディたちに問うティアナ。その言葉に、ウェンディがキレた。

「……わかったっス。なら実力の違い、嫌というほど味あわせてあげるっスよ！　ＩＳ、エリアルレイヴ、アップグレード！」

ウェンディが本気になる。だが、もうティアナに迷いは無い。ただただ、自身の目的を達成する。それだけに集中し始めたのだ。

Ｓｉｄｅ　エリオ

「でやあぁぁぁっ！」

ゼクターストラーダの一撃を、難無く受け止めるガリュー。蹴りを使ってなんとか離れる。

こうして戦っていると本当に強い。ちょっとの油断が即、負けに繋がりかねない。

でも、負けるわけにはいかない。こんな悲しそうに戦う人に負けるわけにはいかない。

「ガリュー！　お前もわかってるんだろ!?　こんなやり方間違ってるって！」

さっきから何度もガリューに語りかけてるけど、ガリューは首を振るばかりで応じない。まるで、「間違っているのはわかっている。だが、止まるわけにはいかないんだ」と言わんばかりに突っ込んでくる。

両手に角を生やしての一撃。ゼクターストラーダ一本じゃ足りない。ゼクターストラーダからパーフェクトゼクターを分離して、左手で持つ。ストラーダとパーフェクトゼクターの二刀流だ。

だがガリューも甘くない。人間ではないガリューに人間の常識は当て嵌まらない。ガリューの首元から生えた触手が僕を狙ってくる。

「ぐっ……！」

額を浅く斬られながらも、首をよじってなんとか回避する。

「ザビー！　ドレイク！」

僕が名前を呼ぶと同時に、ザビーゼクターとドレイクゼクターが飛来して、触手を弾き飛ばす。

『ＳＡＳＷＯＲＤ　ＰＯＷＥＲ　ＨＹＰＥＲ　ＳＬＡＳＨ』

さらにパーフェクトゼクターに装備されてるサソードゼクターの力を発動し、ガリューの右手の角を斬り裂く。そのまま、ストラーダをたたき付けて距離もとる。

「ガリュー、君が何を考えてるかは分からない。君の気持ちもわからないし、君の本心も分からない。でも、僕だって負けられないんだ！　もう、負けたくない！」

僕のタンカに呼応するように、ゼクターたちも飛び回る。

僕を見たガリューが笑った――――そんな気がした。

ガリューが全身から角を生やす。さっき斬った角も、すでに再生してしまっている。

でも、そんなガリューを見てももう恐怖は無い。

ガリューの悲しそうな顔を見て、ガリューを助けたいと思った。多分、吼太さん《おとうさん》がいても、僕にそうさせるだろう。

パーフェクトゼクターをストラーダに再び合体させ、ゼクタースト

ラーダにする。さらにザビーゼクターとドレイクゼクターも合体させる。

『Ａｌｌ　ＺＥＣＴＯＲ　ＣＯＭＢＩＮＥ』

全てのゼクターが合体したことを知らせる音声が、パーフェクトゼクターから流れる。

お前も全力でくるなら、僕だって全力でいくだけだ。さぁ、勝負しよう。

ガリューが”それ”を発動するのと、僕が動くのは全く同じだった。

「……！」

「クロックアップ！」

『Ｃｌｏｃｋ　ｕｐ』

クロックアップは一見超加速の能力に見えるけど実際は違う。その本質は加速ではなく、”時間流そのものの操作”だ。

単純な加速の場合、視覚や聴覚みたいな感覚器がその加速に対応出来なければ加速中の制御は不可能だ。それに、慣性の問題もある。

でも、クロックアップは”自分が速くなる”というよりは”自分以外が遅くなる”というのが近い。これはタキオン粒子の操作により、自分の時間を周囲の時間から独立させているために起こることだ。

そう、クロックアップは周りの”時間の状態”に関係無く行動出来

る。例え、周りの時間が停止していようとも、だ。

そしてクロックアップした今の僕は、タキオン粒子を扱う者にしか視認出来ない。ガリューは視認よりも聴覚や嗅覚を使っているようだからあまり関係無いかもしれないけど、それだって普段は見える人が見えなくなるのは少なからず影響があるはずだ。

だがガリューも負けていない。ガリューもまた、ステルスを使い僕の視界から消える。

「互いに見えない相手と戦うわけか……」

でも、あくまで視認が出来ないだけ。それ以外の感覚を使えば戦える。

「でやあぁぁぁっ！！！」

ガリューにゼクターストラーダの穂先がガリューに当たる。だけど同時に、ガリューの角が僕の左腕を斬りつける。

「この！」

『ＴＨＥＢＥＥ　ＰＯＷＥＲ　ＨＹＰＥＲ　ＬＡＳＥＲ』

ゼロ距離でハイパーレーザー――高密度のエネルギー針の連続射出――をガリューにぶつける。何かが壊れた音がする。

「……！」

ガリューが触手についた鋭い刃で僕の背中を斬る。血が噴き出した

けど、そんなことで止まってられない。

ガリューの角が僕を斬り、僕のゼクターストラーダの刃がガリューを斬る。互いの血は僕らの時間から解放され、空中に浮いたようになる。だがこれは僕らから見れば血の時間が止まっているだけだ。血が落ちる前に、幾千幾万もの応酬が繰り広げられているだけだ。

「ぐうっ……」

ガリューの拳が僕の腹に突き刺さり、僕を吹き飛ばす。僕が壁に激突したことにより壁は瓦礫となり、瓦礫は宙に浮かぶ。

瓦礫をゼクターストラーダで薙ぎ払い、立ち上がる。このぐらい、たいしたことない。

でも正直、食らいつくのがやっとだ。ガリューの能力を封じても、ガリューの技術に追いつけない。ゼクターのみんなのおかげでなんとか食らいついてるだけ。

ふとゼクターストラーダの赤いスイッチを見る。パーフェクトゼクター側についている赤いスイッチ。唯一、押しても反応しないそれ。これがもし使えたら、この状況を覆せるかも。

――――そんなこと、今気にしてどうする。

ガリューに向き直り、そして全力で突撃する。

同じように突撃してきたガリューとぶつかり、互いに弾き飛ばされた。

『Ｃｌｏｃｋ　ｏｖｅｒ』

どうやらさっきのダメージでクロックアップが強制的に解除されてしまったようだ。ガリューも同じらしく、普通の速度で動いているように見える。

宙に浮いていた血や瓦礫が、支えを失ったかのように地面に落ちる。

「……まだ、まだだ！」

ゼクターストラーダを再び構える。

だけど、ガリューは突然、ルーの方を見て、そちらに走り出す。

「一体、何が……？」

ルーのほうを見る。

ルーは、笑っていた。あまりの笑いぶりに、狂ってしまったようにすら見えてしまう。

……いや、本当に狂いそうなのかもしれない。

「向こうに、行かなきゃ！」

Ｓｉｄｅ　キャロ

やっぱりおかしいよ。戦わなきゃいけないなんて、やっぱりおかしい。

ルーちゃんだって、戦いたくて戦っているわけじゃない。でも、ルーちゃんは戦いを止めない。

ヴォルテールはやっぱり押されてる。フリードも、地雷王が多くて振り回されっぱなしだ。

エリオくんがいてくれれば心強いけど、エリオくんはガリューを抑えるのに手一杯みたいだから、無理はさせられない。

「アルケミックチェーン！」

せめてもとアルケミックチェーンで出来る限りの地雷王を足止めする。

二体の竜召喚に加えて無機物制御、さらにルーちゃんが時折放ってくる魔力弾にも対応しなきゃならない。マルチタスクはいっぱいいっぱいで目の前がくるくるくるくる回ってるようにも感じる。

「グオアァァァ！！？」

「頑張ってヴォルテール！　ケリュケイオン！」

『ヒーリング』

白天王の攻撃で傷ついたヴォルテールを癒す。だけどマルチタスクをヒーリングに割かれたせいでアルケミックチェーンの制御が疎かになって、地雷王たちが抜け出してしまう。

「ギュアァァァァ！！！」

飛び出した地雷王がフリードに体当たりして、フリードが地面にたたき落とされる。

「フリード！」

「……いい加減諦めて。貴女じゃ私には勝てないの」

「ルーちゃん！　違うんだよ！　勝つとか負けるとかじゃないの！　私はあなたとお話して、出来るなら力になりたいの！　そんな風にしてるルーちゃんと戦いたいんじゃない！」

ルーちゃんが魔力で出来たナイフを作り出し、こっちに飛ばしてくる。

「ケリュケイオン！」

『プロテクション』

ナイフはプロテクションに阻まれたけど、魔力煙で周りが見えなくなる。

「白天王」

ルーちゃんの声が聞こえた瞬間、辺りが暗くなる。上には、巨大な何か。白天王の足が、私を踏み潰そうとしてきてる！？

「ゴアァァァァ！！！」

ヴォルテールが白天王に体当たりする。片足を上げていたせいでバランスを失った白天王は、そのまま吹き飛ばされて、結界に身体をしたたか打ち付ける。

白天王の巨体がぶつかっても壊れないなんて……私たち、出られるのかな……？

「ルーちゃん！」

「あなたには、分からない」

私がいくら声を、言葉をかけてもルーちゃんは聞く耳を持ってくれない。

「地雷王、やって」

ルーちゃんがガジェットに乗ってビルの上に移動しながら言う。

途中ガジェットはフリードによって破壊されてしまったけど、ルーちゃんは魔法陣を展開して宙に浮く。

『マスター、退避を！』

「え……きゃあ！？」

ケリュケイオンに聞く前に、地面が揺れる。周囲に展開した地雷王が、地面を揺らしてるんだ。

やがて地面は砕け、私は地の底に……

「ギュアァァァァ！！！」

突然、落ちていく身体が受け止められる。フリードが先回りして私を受け止めてくれたみたい。

フリードはそのまま空に舞い上がり、ルーちゃんと同じ高度に達する。

「ルーちゃん、もうやめよう？　私たちがルーちゃんのお手伝いするから！　戦うなんて、やっぱり間違ってるよ！」

「……うるさい……！？」

突然、ルーちゃんの顔が驚愕に歪む。その視線は結界の外に向けられてる。

視線を追ってみると、そこには誰か知らない人がいた。見た感じ、なんだか嫌な雰囲気のする男の人。

その人は腕に何かを持っていた。あれって……レリックのケース？

「１１……番……」

１１番って確か、ルーちゃんが探してた……っていうか、ルーちゃん見えたんだ。すごいなぁ。私なんてXが見えるだけだよ。

男の人はルーちゃんが見ているのを確認すると、レリックをケース

からおもむろに取り出し、握りしめて……

――――砕いた。

「ぁ……」

ルーちゃんの目から生気が消える。

「……――す……」

ルーちゃんが結界に近寄り、結界を叩きはじめる。

「……――ろ――……――す……――――……」

男の人はただただ、笑っている。

「――――殺す」

ルーちゃんから、魔力が溢れる。

召喚魔法陣が男の人の足元に出来、ルーちゃんが召喚魔法で男の人を結界の中に引きずり込む。

「アーーーッハッハッハ……ハ？」

その瞬間、現れたガリューが男の人を斬り刻んだ。

地雷王が、男の人を潰した。

白天王が、男の人を消し飛ばした。

一瞬の内に、男の人の命は失われた。

「ガリュー……地雷王……白天王……もう、いいや……みんな……みんな……みんな、死んじゃえぇぇぇぇぇ！！！！」

ルーちゃんは泣いていた。ルーちゃんだけじゃない、ガリューも、地雷王も、白天王だって。笑いながら、泣いていた。

「キャロ！」

「エリオくん！　ルーちゃんが……ルーちゃんを止めなきゃ！」

ルーちゃんの召喚蟲はもはや見境無しに辺りを破壊し始めてる。

でもやっぱり、やっぱりダメだよ。戦う必要なんてなかったのに……なかったのに……。

「……なんでこんなに、悲しいことが起こるのかな……？」

Ｓｉｄｅ　スバル

「ギン姉……ギン姉……」

ギン姉が両手のドリルを回転させながら近づいてくる。でも私は動けない。

身体は鉛のように重く、まるで寒空の下におかれたように動かない。

そして、ドリルが私を――――

『ウィングロード』

「があっ！？」

え？……何が、起こったの？　突然ギン姉が蹴られて……

それに私、脚が勝手に……

『相棒、諦めるのはまだ早いのでは？』

「マッハ……キャリバー……？」

マッハキャリバーだ。マッハキャリバーがウィングロードを発動、さらに自走することで間接的に蹴りをさせたみたい。

『まだ身体は動く。魔力もカートリッジも残ってる。……姉と話す口だってあるんです。戦って、真偽を問いただすべきです』

「マッハキャリバー……」

『貴女は以前言いましたよね？　私は、貴女と共に走るために生まれてきたと』

確かに……。あの時、列車がガジェットのせいで暴走してて、それを止めるために行った、初出動のあの日に、私はそう言った。

『貴女に出来ないことは、私がします。貴女は、貴女にしか出来ないことを、してください。互いに支え合う――それがつまり、相棒なのでしょう？』

「マッハキャリバー……うん！　そうだよね！」

もう迷いはしない。分からないなら、ギン姉に直接聞いてやる！

「ウィング、ロォードッ！！！」

ウィングロードで空中に踊り出る。

「レオドライブ、インストォール！」

さらにレオサークルを右足に装備する。

「「ハァァァァァァァッッッ！！！」」

地上から飛び出してきたギン姉と、空中で体勢を入れ換えた私。互いのデータウェポンがぶつかり合い、火花を散らす。

「リボルバーギムレット！！」

「ファイルロード！　ブルホーン！」

ギン姉の回転する左腕に、ファイルロードしたブルホーンをぶつけて弾く。さらにブルホーンは首を大きく振るい、ギン姉を弾き飛ばす。

『ブリッツキャリバー、あなたは何故あなたのマスターを叱責しないのです？　相棒なら、相手の間違いは指摘するべきです』

『間違いではありません。マスターはこの道を選んだ。その手伝いをするのが、デバイスというものです』

『間違った道を主が選ぼうとしているなら、それを正すのもまた、デバイスの仕事のはずです』

『……マッハキャリバー。あなたにはわからない。私のマスターの真意を知らないあなたには』

キャリバーズも口論をしている。口調は穏やかだけど、その思いの強さは私たちにも劣っていない。

「……私はね、貴女が羨ましかった！」

ギン姉が拳を突き出しながら話しはじめる。

ギン姉の左拳を、私は右拳で受け止める。

「なんでもすぐにこなしちゃう貴女が羨ましかった！　座学も、魔法も、シューティングアーツも、貴女はたちまちの内に私に並んだ

！」

「ぐ……うぅ……！」

鋭い蹴りを、左腕にブルホーンを装備して受け止める。

「でもそれだけじゃない！　貴女はお母さんを知らない！　本気で戦っているお母さんを知らない！」

気づけば、ギン姉の目には涙が浮かんでいた。

「だから貴女には分からない！　私の気持ちが！　いつまでたっても追い抜けない絶望感も、いつ追い抜かれるか分からない焦燥感も！」

涙と共に繰り出したリボルバーギムレットが、ブルホーンを強制送還させてしまう。

「でも、そんな時にスカリエッティにお母さんが生きてるかもしれないって言われた！」

ギン姉の思いが、拳から、蹴りから伝わってくる。

「お母さんがいれば、私はもっと強くなれる！　スバルだって笑ってくれる！　お父さんだって……！」

ギン姉が泣きながら突き出した拳が、私の頭をかする。泣きながら戦っているのに、威力は全く落ちていない。

「家族全員が幸せになるためには……スカリエッティに協力するしかないの！　管理局を潰すしかないの！　分かってよぉ！！！」

もう、ギン姉の顔はぐしゃぐしゃだ。

でも、私はまだ私の思いを伝えてない。だから次は、私の番だ。

「だったら……一緒に強くなろうよ！！」

ギン姉に蹴りを叩き込む。蹴りと共に、言葉を叩き込む。

「ギン姉はギン姉なんだからギン姉なんだよ！　私の尊敬する、私の自慢のお姉ちゃん！」

今度は拳を叩き込む。拳に乗せて、思いを叩き込む。

「一人で出来なくても、私が手伝うから！　お父さんが許してくれなくても、私が手伝うから！！」

魔力と思いを込めた拳が、ギン姉を揺らす。

「六課のみんなだって、きっと手伝ってくれる！」

ギン姉の蹴りを避け、私の思いを込めた蹴りをギン姉に打ち付ける。

「だから……だから、戻ってきてよぉ！」

互いの拳が互いのお腹に入り、距離が出来る。

「マッハキャリバー！　ギア・エクセリオン！」

『フルドライブ。Ａ．Ｃ．Ｓ．、スタンバイ』

私が叫ぶと、マッハキャリバーから魔力で出来た翼が現れる。限界まで出力を高めた、私とマッハキャリバーの全力全開、ギア・エクセリオンだ。

「ブリッツキャリバー！」

『フルドライブ、スタート』

ギン姉も、ブリッツキャリバーをフルドライブさせる。さらにユニコーンにも大量のエネルギーを送る。多分、さっき言ってたギムレットとファイナルアタックの合体技をやるつもりだ。

……対抗するには、アレしかない！　マッハキャリバーと考えた、私たちの切り札！

「往くよ！　マッハキャリバー！」

『はい、相棒！』

次で……決める！

一瞬の静寂の後、私とギン姉は走り出す。

伸びた互いのウィングロードがぶつかり合い、道は一つとなる。

「ギン姉ぇぇぇぇぇ！！！」

「スバルゥゥゥゥ！！！」

ギン姉のドリルが私のプロテクションに、私の右拳がギン姉のプロテクションに阻まれ、止まる。

だけどギン姉の攻撃は強烈で、プロテクションにどんどん穴があいていく。でも私も、振動破砕でギン姉のプロテクションを破壊していく。

――パキン

先に壊れたのは、私のプロテクション。

でもギン姉のドリルは私に当たる事なく、私の額の両脇を抜けていく。バリアバーストを利用した、攻撃を逸らすやり方。マッハキャリバーの高速制御あってのことだ。

そしてその一瞬後、ギン姉のプロテクションが砕け散る。私はガラ空きのギン姉のお腹に、レムリア・インパクトのスフィアを突き付ける。

「光射す世界に、汝等暗黒住まう場所無し！　渇かず飢えず、無に還れ！！！」

呪文を唱えながら、カートリッジを大量にロードする。

これが、私の全力全開。

「一撃、必倒ォ！　レムリアァァァ……ディバイィィィン……」

ギン姉の顔が歪む。でも、もうギン姉にはどうすることも出来ない。

そしてレムリア・インパクトのスフィアを、魔力の溜まったリボルバーナックルで――

「ブラスタァァァァーーーーッッッ！！！！！」

――スフィアを炸裂させた。

「ギン姉！　ギン姉！」

「……あ、スバル」

よかった、目を覚ました……。非殺傷設定にはしてたけど、レムリアディバインブラスターはファイナルアタックより威力上だから、万が一があったかもしれないし……

「……そんな危ないものを私に当てたの？　随分な信用の仕方ね」

「……あれ？　声に出てた？」

「バッチリ」

恥ずかしい……。でも、なんだかすぐにおかしくなる。

ギン姉もそうらしく、私の膝の上で笑みが零れてる。

姉妹喧嘩なんて初めてだったし、もうしたくないけど……して、よかったと思える。

「なんだか、疲れちゃった。スカリエッティに協力するのも、気を張るのも」

「じゃ……じゃあ！」

「うん、ただいま。スバル」

ギン姉が笑顔で言ってくる。私も笑顔で返す。

「……お帰りなさい！」

『『プロテクション！』』

だけど次の瞬間、私たちの元に攻撃が叩き込まれる。間一髪キャリバーズが防御してくれたけど、もう魔力は限界に近い。

「あ～、くせぇくせぇ……。ウザイんだよ。そういうの」

ノーヴェだ。ノーヴェがシープランチャーをファイルロードして、ミサイルを放ってきたんだ。

「ノーヴェ、貴女……どういうつもり!?　スバルは私に任せてくれるんじゃなかったの!?」

ギン姉がノーヴェに激しく問いただす。

「ギン姉、どういうこと!?」

「向こうにいて分かったけど、戦闘機人たちには常識が――特に、生き死にに関する常識が欠落してるの。スカリエッティからは殺さないよう言われてるけど、厳守されてないのは彼女達が”命”を理解してないから……。だから私はこの作戦にも乗ったのよ。フォワードのみんなは強い。戦闘機人たちも手加減出来ないはず。そうなればみんなが危ないから、私が代わりにみんなを倒して、みんなを救うつもりだった……」

「でもテメェはその白ハチマキにも勝てなかった！　しかも揚句の果てに裏切りやがった！　こんなのがアタシのオリジナルなんてな……」

「オリジナル……」

ギン姉が不思議そうに言う。

「あぁ、そうだよ！　そもそもアタシの名前、ノーヴェはドクターが付けたあだ名だ！　アタシの本来の名前はタイプゼロ・ナインス！」

タイプゼロ!?　つまり……

「そこの白ハチマキと同じ、黒ハチマキのクローン。それがアタシさ！　アタシは重要な臓器が成長せず、四肢も左腕しかなく、ＩＳだって無かった！　でもドクターがアタシを救ってくれた！　アタシの遺伝子を改造してＩＳを付けてくれた！　アタシに命と力をくれた。その恩にだけは、応えなきゃなんねぇんだよォ！」

ノーヴェが叫ぶと、シープランチャーがまたミサイルを発射する。大量のミサイルだ。体力気力を消耗した私たちには避けられない。

でも、ミサイルは私たちに当たらなかった。自分から出てきたユニコーンとレオが防いでくれていたのだ。

「チッ、馬と猫モドキが調子乗ってんじゃねぇ！　ウルフドライブ、インストール！」

ノーヴェの右肩に狼の頭を模した楯が顕れる。その瞬間、ユニコーンとレオを爆発が包む。

「ロールバック！　巻き戻っては進む時間の中で、爆死しやがれ！」

「レオ！　戻って！」

「ユニコーン！　戻りなさい！」

ユニコーンとレオの悲痛な声があがる。でもレオたちは頑なに戻ろうとしない。私たちを庇っているのだ。

そして爆発が止むと同時に、ユニコーンとレオは地面に倒れた……。

「……死んだな。次は、テメェらだ！　ハチマキども！」

いやだ。こんなのは嫌だ。せっかくギン姉と仲直りしたのに……！

まだ、終わりたく、ない！

Ｓｉｄｅ　三人称

結界の制御をしているオットー。彼女のセンサーが、ある存在を捉える。

ヘリだ。しかもただ飛んでるわけではない。ヘリから時折放たれる魔力弾が、ガジェットを的確に撃ち抜いている。

「……なんだ？」

ヘリのハッチからガジェットを撃ち抜いている人物。それはヴァイスだった。

「ストームレイダー、ヘリの操縦は頼んだぜ！」

『お任せください』

ヴァリアブルバレットがガジェットを次々に破壊していく。

「これで目につく限りは全部か……。よし、次のエリアに……」

『警告。このヘリに近づく物体あり。……小さいです』

「はぁ？」

愛機の訳の分からない報告に気の抜けた返答を返してしまうヴァイス。

「小さいったって……小さいな。確かに」

ストームレイダーのスコープを覗くと、確かにガジェットと比べて明らかに小さな機影がヘリに飛んできていた。

やがて、スコープにその全影が映る――

「……ありゃ旦那のカンドロイドだな。他にもいるが」

カンドロイド――タカカン、クジャクカン、プテラカンとエクストリームメモリが近くに来て、ヴァイスにしきりに何かを伝えてくる。

「タカー」

「クジャクー」

「プテラー」

「ヒュイン！　クルルルン」

「一体なんだってんだ……うん？」

よく見ると、カンドロイドたちはそれぞれ何かを持っていた。外に書かれた名前を見る限り、フォワードたちそれぞれに宛てたものらしい。

「……アイツらのとこに、行きたいんだな？」

カンドロイドたちは頷く。

ヴァイスはカンドロイドを掴み、カンモードに変形させストームレイダーの先端にセットする。

「行ってこい！」

そして、魔力で多重弾殻を形成して結界に向けて撃ち出した。

さらに小型化出来ないエクストリームメモリのために、エクストリームメモリの向かう先に多重弾殻弾を放つ。

多重弾殻に包まれたカンドロイドたちは、それぞれの目的の人物のいる結界にぶつかり……結界を突破する。

タカカンはエリオとキャロの元に。

プテラカンはティアナの元に。

クジャクカンはティーダの元に。
エクストリームメモリは、スバルとギンガの元に。

「これって……手紙？　それに何かカードが入ってる」
キャロがタカカンの持つ手紙を受け取る。中には文書と、カードのようなものが入っていた。
タカカンはエリオにも手紙を渡す。そして役目を終えたタカカンは、カンモードに戻った。

「僕は手紙だけだ」
エリオのほうにはカードは入っておらず、文書だけが入っていた。
二人は怪訝に思いながらも、手紙を開く。
そこには短く、こう書かれていた。
キャロ宛ての手紙には……
――戦わなければ生き残れない。生き残らなければ、言葉は伝わらない。言葉を伝えるために、力を使え。

エリオ宛ての手紙には……

――お前の前に道は無い。お前の後に道は出来る。総てをお前が司り、お前の正義を認めさせろ。

プテラカンから手紙を渡されたティアナは、プテラカンがウェンディたちを音波攻撃で牽制している間にその手紙を読む。

――人類は皆弱者。だが、故に出来ることがある。恐れるな。感情に従い、生きろ。

クジャクカンから渡された手紙を、ティーダは無傷の左手で開く。

――今こそ進化の時。過去を認め、過去を糧とし、過去を乗り越えろ。

「え……？」

「あれって確か……エクストリームメモリ……？」

突然乱入してきたエクストリームメモリに気を取られるスバルとギンガ。

「な、この！　邪魔なんだよ！」

ノーヴェがシープランチャーに命令し、エクストリームメモリをたたき落とそうとする。だが、小さなエクストリームメモリは発射された全てのミサイルを避けてしまう。

エクストリームメモリはそのままシープランチャーに体当たりし、ノーヴェを巻き込みシープランチャーを吹き飛ばす。

「すごーい！」

スバルが思わず言うのも無理はないだろう。玩具のように小さなエクストリームメモリが、シープランチャーとノーヴェを突き飛ばしたのだから。

エクストリームメモリはそのままスバルたちの元に来ると、内部空間からあるものを出す。

それは、赤いベルトバックルと手紙。

「手紙だ……」

「私たち二人宛てみたいね」

手紙を開くスバル。そこには、こう書かれていた。

――一人で叶わぬ夢も、二人ならば叶えられる。お前たちは二人で一人。二人の力を一つに重ね、二つの無限を導き出せ。

普段なら、手紙に書かれた意味は分からないだろう。だが、今の彼女達には理解が出来ていた。絶滅を乗り越え、真のストライカーとなった彼女達には。

「……任務、了解。　ってとこかしら？」

ティアナが、ウェンディたちに向き直る。

「……そうだな、俺を殺した仇をとらなきゃ、だよな」

ティーダの顔に活力が満ちる。

「ルーちゃん……私はルーちゃんと戦いたくない。だけど、どうしても戦わなくちゃいけない。だから私は……ルーちゃんのために戦う！」

「お父さんが言っていた……男には時に、絶対に引いちゃいけない戦いがある。それは、誰かを助けるための戦いだ、って！」

キャロとエリオが、狂気に支配されかかっているルーテシアに語りかける。

キャロがカードを持つと、ケリュケイオンに重なるように龍を模した手甲のような武装――ドラグバイザーが両腕に現れる。

エリオに呼応するように、時空間を切り裂いて赤いカブトムシ型ゼクター――カブトゼクターと、銀色のカブトムシ型ゼクター――ハイパーゼクターが飛来し、エリオの手に収まる。

「……スバル。貴女言ったわよね？　二人でやろうって」

「うん。一人じゃ出来ないことも、二人なら出来る！　だから私たちは今から……」

スバルがベルトを腰に当てると自動的にベルトが巻かれる。それと同時にギンガの腰にも同じベルトが現れる。

「「二人で一人の、ストライカーだ！」」

希しくも、同じタイミング。決意の固まった六人は同じ、そして異なる力を覚醒させた。

デバイスにかけられた最後のリミッターが解除され、その力が解放される。

そして異なる場所にいる六人は、全く同じタイミングでその言葉を唱えた。

『『『『『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』』』』』』

「「「「「「アームドアップ！！！」」」」」」

## 第百四十八話　送られる手紙（後書き）

はい、そんなわけでフォワード覚醒！　スペシャルとはアームドアップのことでした。ただ、アームドアップに関しての質問は次回にお願いします。まだ名前出ただけですし。その代わりアームドアップが本格登場する次回にはちゃんと説明しますよ。

とりあえず今回言えることは、まずはレムリアディバインブラスターですかね。これはまぁ単純な話です。

ディバインバスターＡ．Ｃ．Ｓ．にレムリアインパクト足しただけ。

ディバインバスターってのは魔力スフィアを叩いて砲撃にする魔法。レムリアインパクトは魔力スフィアに相手を閉じ込め、内部に高密度魔力を叩き込む魔法。それを足したら、レムリアインパクトの魔力がそのまま砲撃になっちゃいましたとさ。ちなみに吼太がオリジナルのレムリアインパクトでこれやると次元世界が消えます。要は結界で保護しないレムリアインパクトですからね。スバルだから出来る技。

あとティーダのトリックは飛行前提だったり。糸通すのに飛行する必要があるので。

いろいろ考えてましたが、実はフォワードメンバーの組み合わせには理由があったりします。

平たくいえば、ＯＰの再現です。ルーテシアが地雷王の近くで浮いてたり、ティアナの相手にノーヴェがいなかったり。まぁ、１００％再現は結局不可能でしたが。

今回は意外に難産でした。というのも、スバルとギンガが他のメンバーの倍近い文字数になってしまったので、慌てて他のメンバーの戦いを加筆したんです。特にエリオは１番キツかった。

次回はフォワード無双。オットーもカウントダウンに入ってます。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

# 第百四十九話　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ（前書き）

わーにんぐ！　わーにんぐ！

今回は果てしなく長いです！　前回の倍かと思うぐらいあります！

「ふざけんな！」ってぐらいあります！　ご注意を！

ゆっくり読んでいってね！↑テンションおかしい

# 第百四十九話　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ

Ｓｉｄｅ　三人称

瓦礫を爆破した際、手応えを感じていたチンクは周囲を探索していた。どこにダメージが入ったかまでは分からなかったが、どこかを潰したのは確か。相手は飛行魔法を使えるので、攻撃力を削げる腕へのダメージを望んでいた。

そして実際、ティーダは右腕を負傷していたのだ。この点を始め、スバルのＩＳを喰らっても死ななかったりと、チンクの運はなかなか良いということが伺える。

だが、今回ばかりは彼女も運が無かったと言えるだろう。この先にはもう”敗北”しか待っていないのだから。

ティーダの右手におもちゃの銃がおさまり、さらに細かなパーツに分離したクロスファントムがティーダの右手を覆う。やがてティーダの右手は、それそのものが巨大な銃と化した。

さらに、アリサのバリアジャケットをモチーフに機動性を追求していた赤いバリアジャケットは、その四肢に黒く薄い、悪魔のような印象を与える鎧を装備することで今までとはまるで違った雰囲気を出す。

そして最後に、ティーダの背中から黒い翼が生え、突風を発生させる。

これがティーダのアームドアップ。それは偶然にもベルゼブモン・ブラストモードに酷似した形態となっていた。死という過去を認め、そして乗り越えたティーダが手に入れた、新しい力だ。

「これ、は……？」

鋭い爪の生えた左手と、クロスファントムと一体化した右腕を見て言う。

まるで悪魔のような風貌故に、「自分の力は悪魔みたいなんだ」と少しガッカリする。

「……！」

不意に声が聞こえる。先程の突風でチンクに感づかれたようだ。

「急いで逃げ……うおっ！？」

飛行魔法を起動し、飛んで逃げようとした瞬間、背中の翼が羽ばたいてティーダの身体が音もなく飛び上がる。今までとは段違いの機動性だ。

「身体が思った通りに動く……思考に身体がついてきてくれてる！」

見た目はともかく、性能は自分向けだと理解したティーダは、翼をはためかせさらに飛ぶ。

路地を見に来たチンクは首を傾げていた。確かにここで巨大な突風が起こった。それも自然には絶対に起こらないようなものだ。戦っている魔導師のものだと思ってやって来たのだが、肝心の魔導師は影も形もなかった。

「残留魔力反応無し……飛行魔法を使っていないのか？　なら物陰に」

そう考え、チンクが近くの物陰を探ろうとした瞬間だった。

空中から大量の魔力弾が飛来し、チンクを襲う。

急いで迎撃しようとスティンガーを展開するが、それらはチンクの手にすら握られることなく撃ち抜かれ、破壊される。

「ぐ……上か！」

チンクが上を見上げる。だが、そこには何もいない。せいぜい、烏のような黒い羽根が落ちてきたぐらいだ。

「……気のせいか？」

だがチンクは気づかなかった。彼女が捜しているティーダは、常に彼女の”後ろ”にいたことを。

完全な無音飛行と、完璧な気配の封殺。それがティーダに攻めと守りの両方を強化していた。ティーダ自身の先読み技術も重なったことで、高速で移動し、かつ常に死角に居続ける今のティーダを察知することは、並大抵以上の者でも非常に困難と言えるだろう。

「ぐっ……」

流石にチンクも、何回も攻撃を受けていれば”何かがいること”ぐらいは理解出来る。だが、その何かが分からない。

魔導師なのか、自律兵器の類いなのか、使い魔なのか。透明なのか、速過ぎて目に留まらないだけなのか、超長距離にいるのか。いずれにしろ、チンクからすれば厄介この上ない。

実際、現在のティーダとて単純なスピードはフェイトのインパルスフォームにすら劣るだろう。ただ、死角に回るのに必要なのは”回り込むスピード”よりも、”相手の死角がどこにあり、次にどこを向くか”という観察力。そしてティーダはそれを持っていた。単身、凶悪犯罪者と戦う過程で培った経験。機動六課での基礎訓練。そして模擬戦。全てが今のティーダを構成する大事なピースだ。

「えぇい！　こうなれば……！」

チンクが右手に魔法陣状のテンプレートを展開する。

「ＩＳ、ランブルデトネイター！　アップグレード！」

そう叫ぶと、周囲のビル群が纏めて爆発した。

ランブルデトネイターとは自身が触った金属を爆破出来る能力だ。故にチンクは固有武装であるナイフ”スティンガー”を放つことで高い攻撃力を発揮することが出来る。

だが裏を返せばスティンガーを封じられた場合、チンクはランブルデトネイターを封じられたも同然となってしまう。そうでなくても、

四次元ポケットもデバイスの収納領域もないチンクが持ち運べるナイフには限りがある。考え無しにバカスカ爆破すればたちまち無くなってしまうだろう。

それを解決したのがチンクのアップグレード能力だ。その力とは、”金属元素の自在爆破”。

世の中の元素は大まかに分けて、金属元素と非金属元素に分けられる。チンクはその金属元素を触れることすらせずに爆破出来るようになるのだ。

元素そのものが爆発するため、物理強度は完全無視。また、範囲限界も無いため、その気になれば惑星を爆破することすら可能。使い方次第であのアルカンシェルすら超える破壊力を発揮するのだ。

だが、その性質故に手加減が一切出来ないのが難点でもある。破壊しか出来ない能力。チンクはその事を悩んでおり、可能な限りは使わないように心掛けていた。

それは、地上本部襲撃事件の時とて例外ではない。ギンガを捕獲することも目的の一つだったためどちらにしろ使うことはないだろうとチンクは踏んでいた。

だが、そこで予定外の自体が起きてしまった。ティーダの存在だ。ティーダの早撃ちはチンクのスティンガーを全て貫き、ランブルデトネイターを無力化してしまったのだ。さらに肝心のギンガは近接戦闘主体のインファイター。丸腰のチンクが勝てるわけが無い。

チンクは決意した。一度、一度だけ自身に課した封印を解こう、と。そしてティーダの肉体に含まれている金属元素の一部を爆破し、テ

ィーダを殺害したのだ。ティーダの肉体の原形が残っていたのは、もはや奇跡といっていいだろう。

視界に収めるだけで倒せる力。それは強力であるが故にチンク自身に『自身は戦闘マシンであること』を押し付けてもいた。

故にチンクは心のどこかで望んでいたのかもしれない。

「これで終わりにしてやろう！」

チンクがスティンガーを構えながら言う。姿を隠すものはもはや無い。姿を透明にしていたにしろ、ビル群の崩壊により発生により発生した煙がその位置を知らせてくれる。

ティーダは姿を透明にしているわけではないが、空中を移動している以上空気は動き、その動きは煙に現れる。

「そこか！」

煙の動きからティーダが透明ではなく、そして自身の上にいると知ったチンクが、顔を上に上げる。今は煙の向こう側にいるようだが、煙などすぐに晴れる。そうなれば相手はもはや隠れる術は無い。

「これで終わりにさせてもらう！　ＩＳ、ランブルデトネイター！　アップグレ――ッ！？」

チンクが煙が晴れた瞬間にアップグレードを発動しようとして、不意にその動きが止まる。

「ぐっ……太陽を背に！？」

チンクの目に襲い掛かる膨大な光の奔流。それがほんの一瞬の隙となる。

その隙は、ティーダにとって最後のチャンス。

ティーダは既に右手の銃口をチンクへと向けていた。そのまま銃身で逆さ五芒星を描くように動かす。

「これで終わりにさせてもらう！」

『クロスファイヤー・カオスシフト』

銃口に、ミッド式魔法陣にさらに特徴的な外周円が追加された魔法陣が展開され、そこから洪水を思わせる量の魔力弾が連続発射されていく。

アームドアップは何もただ鎧を付けるだけではない。アームドアップした魔導師は、それぞれが覚醒させた固有エネルギーが魔力とハイブリットされ、体中を駆け巡るようになる。その固有エネルギーを用いた攻撃や防御はもちろんのこと、固有エネルギーがハイブリットされたことにより通常の魔法も強化され、また身体機能までもが強化される。その上固有エネルギーは別ルートで精製され、魔力と複合されて使用されているために魔力消費は通常より軽減されるという、破格の特性まで発揮するのだ。

本来のティーダの魔力量は、ティアナより少々多い程度。通常の状態でこれだけの魔力を使えばたちまち魔力は枯渇してしまう。だがアームドアップした今のティーダには、これだけの攻撃ですら通常のバリアジャケットを維持する程度の魔力しか消費しなくなってい

た。アームドアップの、天井破りの性能が伺える。

魔力弾は絶えずチンクへと降り注ぎ、意識を消し飛ばそうとその小さな身体を蹂躙する。

「ま……だ……だ……！」

妹たちを、自分が守りたいと思ったものを守りきるまで、自分は倒れるわけにはいかない。その思いを胸に堪えるチンク。

これだけの攻撃だ。終わってさえしまえば僅かにだろうが、ほぼ確実に隙が出来るだろう。それを突けばチンクの勝利だ。

そしてティーダもまた、今か今かと訪れようとしているアームドアップ解除の前にチンクを倒そうと躍起になっていた。

アームドアップの発動には精神的ファクターが大いに関わってくる。素晴らしい力を発揮するアームドアップは、その強力さ故に精神的衰弱状態――言うなれば酷く弱気になったり心に大きな迷いが生まれると強制的に解除されるという制御機構が予め装備されている。弱気になれば精神支配を受けやすくなる。そういった要因によるアームドアップの悪用を避けるためであり、これを外すことは例え希代の天才と言われるスカリエッティですら不可能。外すことが出来るのは装置を付けた張本人である吼太か、その愛機であり装置を仕掛けるのに協力していたトゥードだけである。

そのことをクロスファントムから知らされたティーダは、チンクを倒すためにより力を込める。先程まで神経を擦り減らすどころか、すり潰すような状態で戦っていたのだ。いつ緊張の糸が途切れてアームドアップが解除されるか、わかったものではない。アームドア

ップ解除は則ち、死。それが、この戦い。

「二度も死んで……堪るかぁぁぁぁ！！！！！」

ティーダが限界ギリギリまで力を高め、魔力弾をチンクに発射する。

それは、永遠であり一瞬の出来事。

不意に魔力弾が尽きる。しかしティーダのアームドアップは解除されていない。だが、ティーダはもう攻撃しようとはしていない。いくら魔力量が強化されたからと言ったところで、魔力が無限になったわけではない。あまりに大量の魔力を吐き出した結果、リンカーコアが疲弊して魔力が激減してしまったのだ。

「く、そ……奴は……」

荒く息をつきながら、ティーダが魔力弾によって発生した煙の向こう側を注視する。

やがて現れる、ボロボロの肉体。

チンクだ。チンクはあの攻撃を耐えきったのだ。

「しまっ……！」

逃げる余裕は無い。すでにティーダのいる場所はチンクのアップグレードの範囲内。ティーダに残された手段はなかった。

「……？」

だが、いつまで経ってもティーダにダメージは現れなかった。

「一体どうして――――そういうことか」

警戒を解くティーダ。

確かにチンクは立っていた。だがその意識は既に無い。意識も無く、身体もボロボロだったチンクは、ただただその執念だけでそこに立っていたのだ。

ティーダは思う。もし自分に、あと少し早く限界が来ていたら、あぁなっていたのは自分だっただろうと。

「でもな、俺も負けられないんだ。妹の……ティアナの暮らすこの世界を守るために、な」

奇しくも”妹のため”に戦った二人。時の運は、ティーダに味方したのだった。

「な、なんスか！？」

ウェンディが目の前の光景を見て、思わず言ってしまう。

まるで爆発が起きたかのような光の輝きに、思わず目の前を覆う。

ディードもまた、目の前を直視することは出来ていない。

そしてその光の奔流の中心では、ティアナが”進化”のため、力を着々と溜め込んでいる。

「ぐ……炎帝発動！」

ウェンディのもつボードが、ファイアーパターンへと変化する。威力と攻撃範囲に優れる炎帝を以って、”何かが起きる前に”ケリをつけようと言うのだろう。目の中に仕込まれた装置が過負荷に悲鳴をあげながらも、なんとか狙いを定める。

「これで終わりっス！　エリアルキャノン・クラッシャー！」

全てを破壊しつくさん神の怒りにも似た一撃が、光の中心のティアナに喰らいつこうとする。

間髪入れず、巻き起こる大爆発と爆風。ウェンディとディードも、自身らを吹っ飛ばさん勢いの風圧をなんとか踏ん張って耐える。

「あれだけの威力なら……！」

「……違う。当たってない」

ウェンディの確信じみた言葉を否定するディード。そう、彼女には僅かだったが見えていた。

――光から飛び出した何かが、”上空に”逃れたのを。

「でりゃああッ！！！」

そして同時に、上空からその”何か”がディードに襲い掛かってきた。アップグレードを維持したままの光刀で受け止めるディード。

「そこッ！」

だが相手は左手に持ったもう一本を振るい、ディードの腹部に斬撃を加える。

「があっ！！」

「ディード！」

ウェンディが水君を起動し、アクアパターンの現れたボードから発せられる”ルール”でディードと何かを包もうとする。ディードも攻撃が難しくなるが、その代わりディードのダメージも抑えられるからだ。

だが、ディードを襲っていた人影は水君のフィールドが形成される直前に上空に退避し、フィールドの範囲外まで離れてしまう。

「ぐ……何故……何故、お前は飛んでいる……！？」

「そうね。理由を挙げられるとすれば……気合、かしらね」

ディードの質問に、上空で待機しているティアナが答えた。

青と白を基調にした鎧を身体の各所に装備し、何より特徴的なのはその背中で白い雪のような羽根を振り撒く、天使のような翼。

もしもこの姿を知る者がいたら、その者はこう言うだろう。「ウイングガンダムゼロカスタム」と……。

ウイングガンダムゼロ。俗にＥＷ版と呼ばれるそれを思わせる鎧。それこそがティアナの新たな力、ティアナのアームドアップだ。

「はっ！　たったさっき飛べるようになった雛鳥が！　空中戦で私たちに勝てると思ってるんスか！？　雷皇発動！」

ウェンディがサンダーパターンが追加されたボードに乗り、飛行を始める。その速度は言うなれば雷。限りなく光速で移動し始めたウェンディは、一瞬でティアナの後ろに回り込み、大量のエネルギー弾を発射する。

だがティアナは振り返ることすらせず、全てのエネルギー弾を避けてしまう。

「避けた！？」

雷皇発動時のウェンディが放つエネルギー弾もまた、光速に限りなく近い速度で飛んでいる。故に弾丸を認識してから回避するのは不可能だ。人間の身体の中を巡る神経伝達速度は光速に劣るのだから。

それを避けたということはつまり――

「射線を予め、読んでいた……？」

今度はディードが飛び出し、ティアナに襲い掛かる。だがティアナは不慣れなはずの空中だというのに、片手でディードの攻撃を捌いていってしまう。

やはりおかしい。あのティアナとかいう魔導師は後衛型。近距離にも一応対応は出来るようだし、一撃二撃程度ならなんとかなるだろうが、ディードと真っ向からやり合って互角になど、近距離主体の魔導師でもなければ不可能だろう。

ここから予想される可能性は二つ。一つは剣技に長けていることを秘匿していた可能性。だが、それでは先程まで散々逃げてちまちま魔力弾を放っていた理由がつかない。誘導魔力弾は思考リソースを多く取られがちな魔法。近接主体ならなおさら思考リソースをとられるはずなのだ。思考リソースがとられた状態では、どうしても注意が少しながらも散漫してしまう。逃げながら隙を伺って攻撃するならそれこそ物陰からの一閃。それで終わる。わざわざ魔力弾をばらまくメリットは無い。何より、先程ウェンディ自身のエネルギー弾を見ずに避けた理由がつかない。

と、なると答えはもう一つの可能性となるだろう。則ち、攻撃の軌道を予め理解しているということ。つまりは、見切られている。

「ディード！」

ウェンディがディードに合図を出す。攻撃を見切られているのだとしたら、一人一人が別々に戦っていても厳しい。なら向こうにはない戦術――つまりは連携を駆使するしかない。

ディードがティアナに捨て身の特攻を仕掛け、その後ろでウェンディがエネルギー弾を準備する。一見するとディードを囮にウェンディが攻撃しようとしている、実に単純な陣形だが、この陣形の真骨頂は相手がそれに気づくこと。

ティアナがそれに気づき、ディードをやり過ごしてウェンディのエネルギー弾に注意を向けた瞬間、ディードが振るったアップグレードツインブレイズがティアナを強襲する。仮にそれに気づかれたとて、それならエネルギー弾を放てばいい。単純に見せかけておいて、ハッタリを駆使した意外に複雑な作戦だ。確かにティアナにこれを破ることは出来なかっただろう。

『モード3、システム構築……完了。起動』

以前までのティアナなら、の話だが。

クロスミラージュが瞬時に、自身にかつて搭載されていたモード3を再構築する。アームドアップによる性能強化は魔導師だけでなく、デバイスにも作用するのだ。

長距離の高出力射撃が可能なモード3、通称バスターモードとなったクロスミラージュを両手に構えるティアナ。本来なら慣れていないために使用を避けていたはずの力を使おうとしているのには、ある理由があった。

ウイングガンダムゼロに搭載されているゼロシステム。勝利のためにすべき行動を脳に直接提示するそのシステムが、ティアナにそういった行動をとらせているのだ。極限まで正確になった先読みは未来予知と変わりない。例え背後から攻撃されようと、苦手な間合いだろうと、ティアナはただ提示される動きをなぞるだけで、全ての

攻撃を捌くことが出来るのだ。

「行くわよ！　クロスミラージュ！」

『ファントムブレイザー』

右手のクロスミラージュから砲撃が放たれる。今まではなのはの砲撃と比べ、威力も射程も劣っていたそれは、今や本気のなのはのそれとなんら遜色無い威力となっていた。

ファントムブレイザーがディードとウェンディに迫る。見るだけでその凄まじい威力を察した二人は、なんとか回避をする。陣形は、一撃でたちまち意味の無いものにされてしまっていた。

「まだまだァ！」

さらにティアナは左手のクロスミラージュから、右手とは真逆の方向にファントムブレイザーを放つ。そしてそのまま、ゆっくりと回転しだすティアナ。ビルの壁を吹き飛ばしながら迫る砲撃に、下方向へと回避行動をとるウェンディとディード。

「あでっ！？」

「ぐっ！」

そこで二人は何か硬いものにぶつかる。ビルの壁ではない。ビルの壁はこんなに金属みたいな感触はしない。

「一体何が……ガジェット？」

いつの間にか、目の前にガジェットがいた。一体二体の話ではない。数からして、連れてきていて現在残っているガジェットが全て集まったかのような密集具合だ。

先程まではこのビル全体に散らばっていたはずのガジェットがなぜこうも密集しているのか。考えられる答えは一つ。

「そこの二人、覚えておきなさい！」

上空でクロスミラージュを眼下に向けているティアナが言い放つ。

「連携を上手く使える者は個人戦においても最良の結果を導き出せる！　貴女たちの敗因はその浅い連携だったってことをね！」

言いながらティアナは散らばっていた魔力を二丁のクロスミラージュの先端に集束し始める。先程のローリングファントムブレイザーにより大量に散らばった魔力を再び結集させているのだ。

それは、星の輝き。ティアナの尊敬する人の切り札。

「受けなさい！　なのはさん直伝！」

溜まった魔力に、指向性を付加するための魔法陣が展開される。

「スターライトォ……」

そして、膨大な魔力が今――

「ブレイカァァァーーー！！！」

解き放たれた。

とてつもなく巨大な魔力砲撃。真っ向から受けようものなら防御ごと飲み込まれてしまうことは容易に想像がついた。

回避しようとするウェンディとディード。だが、ガジェットが邪魔になり思うように動けない。かと思えば先程のローリングファントムブレイザーで崩落してきた瓦礫が道を塞いでしまっている。二人の逃げ道はことごとく封鎖されていたのだ。

偶然、にしては出来過ぎている。かといって、計算してこうしたと考えるのも常識はずれにしか感じない。いずれにせよ、二人に回避という手段が残っていないことは確かだった。

「ディード！　こっちに！　水君発動！」

ウェンディがガジェットを呼び集め、防壁代わりに配置。さらにウェンディ自身も防御を発動することでなんとかスターライトブレイカーを防ごうとする。

次々に爆散していくガジェットたち。スターライトブレイカーのあまりの出力にＡＭＦの処理が間に合っていないのだ。それを使用しているティアナもさることながら、その考案者もまた常識はずれと言えるだろう。

そして、やがて濁流は過ぎ去る。

ガジェットの残骸からなんとか這い出すウェンディ。ディードも、ウェンディに続いて這い出てくる。

「っも～！　常識知らずにもホドがあるっス！」

「でも、あれだけの攻撃。幻術使いの魔力はもう殆ど……」

不意にディードの言葉が止まる。不審に思ったウェンディが、今ディードが見つめている先――上空――を見上げる。

そこには平然とした表情で今だ滞空しているティアナ、通常の拳銃形態になったクロスミラージュと――――

……大量の魔力弾が浮いていた。

「散布された魔力を集束した集束砲撃。それで散らばる魔力も相当なものなんだけど……使わないなんて損でしょ？」

ティアナが笑顔で言う。それにつられたのか、はたまた笑うことしか出来ないのか、ウェンディとディードも引き攣った笑顔を浮かべる。

『ターゲット、ロック』

「クロスファイヤァーーー……」

その数１０００はあろうかと言う魔力弾の群れ。それら全てが完璧に制御されていた。これもゼロシステムの、そしてアームドアップによって強化されたティアナとクロスミラージュの並列制御能力あってのことだ。

そして今、大量の魔力弾は放たれる。

「シューートッッッ！！！」

魔力弾の群れは愚かな二人に牙を剥く。先程のダメージがまだ残っている二人には、もはや避ける気力は無い。

やがて、先程と同じかそれ以上の爆発が発生する。

「……ぐ……この……！」

満身創痍といった様相のウェンディが立ち上がる。だか、ディードは立ち上がらない。ウェンディは魔力弾が当たる直前で、再び水君を発動したのだが、効果範囲が広がりきる前にダメージが入ってしまったのだ。それはウェンディとて例外ではない。効果範囲に入りきらなかったウェンディの四肢はダメージが入っていた。

ウェンディが上を見上げる。そこには相変わらず余裕の態勢を崩さないティアナがいた。

「この……」

「これで、終わりよ！」

ティアナがクロスミラージュをバスターモードに再び変化させ、全速力でウェンディに突撃し始めた。

そこまで追い込まれてなお、或いはそこまで追い込まれたからか、ウェンディはとても冷静に状況を把握していた。

自身の体力は殆ど無い。ボードに乗るだけでも一苦労だろう。故に

回避は使えない。相手は射撃型だと言うのに突撃してきている。ダガーで斬るつもりなのだろうか。

そこでウェンディは気づく。自分がまだ水君を発動したままだと言うことに。

このままティアナが突撃してくれれば、確実に水君のフィールドに入ってくることになる。水君のフィールドは限りなく無色透明だ。それも気づくにはよほどの観察力がなければ不可能なほどの。ティアナがそれに気づいている節は無い。それに、あの加速のつき具合では、気づいたところでもう避けられはしまい。

ならばこちらは無理に動かず、水君のフィールドに入ってきた瞬間を見計らって炎帝に変更、攻撃。それで勝てる。

ウェンディはボードを構える。先端をティアナに向け、いつでも撃てるようにする。

そしてティアナがフィールド内に入り――

――ウェンディは気づくべきだった。ティアナがダガーモードではなくバスターモードにしていた理由に。

そして、何故わざわざ突撃してきたのかを――

……バスターモードとなったクロスミラージュの銃口が、ウェンディの腹部につけられた。

銃口を腹部に触れさせるだけなら、攻撃にはならない。故に動きも阻害されない。

「一言だけ言っといてあげるわ」

そして、クロスミラージュという防壁に守られた砲撃は――

「これ、死ぬほど痛いわよ」

『ファントムブレイザー』

その威力を僅かにも減衰されずに、ウェンディに叩き込まれた。

「ふぅ……初めてにしては上々かしらね」

ようやっと二人の戦闘機人を倒したティアナが、息をつきながら言う。

先程まではアドレナリンが大量に分泌されていたが故に気づかなかったが、足の痛みが少し増している。それに、そもそも全身が疲労して思うように動かない。

「ちょっと……休憩させてもらうわね……」

誰に言うわけでもなしに、ティアナは地べたに腰を落ち着けた。

エリオが、構えたカブトゼクターを腰のバックルに、ハイパーゼクターを右腰に装着する。

そして、ハイパーゼクターのカブトムシにおける角に当たる部位――ゼクターホーンを倒す。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

ゼクターホーンを倒した瞬間、エリオのバリアジャケットの白いロングコートが魔力に還元され、代わりに赤色と銀色に彩られた鎧が装備されていく。

胸部、背中、腕、足先。各部位にタキオンプレートを内蔵した強化装甲、カブテクターが装備される。

『ＣＨＡＮＧＥ　ＨＹＰＥＲ　ＢＥＥＴＬＥ』

電子音声が、アームドアップが完了したことを知らせる。以前とは大きく見た目の印象が変化している。

仮面ライダーカブト　ハイパーフォームの外観を模したアームドアップ。それがエリオの得た新たな力だ。

「……行くよ、ガリュー！」

エリオに応えるように、ガリューも角を構える。

そして、一瞬の静寂を引き裂くかのように二人はぶつかった。

クロックアップも時間停止も使用していない、ただの速さ。だというのに、まるで周りが止まっているように二人は感じている。それほどまでに感覚が鋭敏になっているのだ。

ガリューは元々、時間停止能力を有していたために感覚は鋭敏な部分がある。それに対し、エリオは今までクロックアップで対抗してきた。だが、それでもエリオは経験や元々の地力の差、そして何より”元々能力無しでも超高速戦闘に対応出来るガリュー”と、”能力が無ければ超高速戦闘には対応出来ないエリオ”。その違いは二人に埋めきれない差を生み出していた。

だが、アームドアップによって強化されたエリオは、今や能力を発動せずともガリューと戦うことが出来るようになっている。あとは、二人の思いが勝敗を分ける。

「ハァッ！」

エリオがゼクターストラーダを振るうと、たちまちの内に周りのビルの一部が瓦礫へと変わっていく。荒れ狂う剣閃が、周りのビルにすら影響しているのだ。

音速すら超えた二人の戦い。このままでは埒があかないと判断したのか、二人は示し合わせたかのように距離をとり、そして同時に能力を発動した。

「ハイパークロックアップ！」

エリオがハイパーゼクターの背中に当たる部分に備わっているスラップスイッチを叩くと、ハイパーゼクターに秘められた機能が解放され、エリオをさらなる高速の世界へと誘う。

ハイパークロックアップ。ハイパーゼクターの力を使用することにより、クロックアップ以上の高速戦闘が可能にするシステムである。その速さたるや、クロックアップしている存在がスローモーションに見えてしまうほど。

ガリューも時間停止能力を使い、”時間”から隔離された世界へと突入する。

その世界は、資格無き者の存在を完全に拒絶する。それは人も、物も、傷も、死ですら。

ガリューはそこでエリオを倒すつもりだった。先程まではエリオの全力を計るための、言わば様子見。そしてガリューは、今のエリオは自身より下の実力しか持たないと判断した。

その判断は決して間違いではない。確かにエリオの実力はガリューに勝てるほどのものではない。いくら吼太に、最も効率的に鍛えられていようと、まだまだエリオは経験不足。以前の記憶を持たないとはいえ、気づいた頃には既に相当の実力を誇っていたガリューとは、埋めても埋めきれないだけの差があった。

だが、ガリューはルーテシアと共に生きていながらも理解していなかった。子供という存在が持つ無限大の可能性を。

例え戦闘の最中であろうと、油断をすればどこまでも上へと昇っていく、進化の力を。

「だぁぁぁぁぁ！」

ガリューにもしわかりやすい表情が出せるならば、ガリューはきっと驚いた表情をしていたことだろう。

今までは捉えられていたエリオの姿を、捉えられなくなっていたのだから。

元々、エリオはライダーの力を使っている時はバリアジャケット以外の魔法を殆ど使用していなかった。必要なかったというのもあるが、最大の理由は併用そのものが出来なかったからだ。

ライダーの能力は強力だが、それ故に制御には一層の注意が必要だ。マルチタスクを割くことも容易ではない。故に今までエリオはライダーに変身している間や、ゼクターストラーダの機能を最大限に活用している間は魔法を上手く使うことが出来なかった。

だが、アームドアップを経て強化されたエリオは、ライダーの力と魔法を併用することが出来るようになっていた。

ハイパークロックアップで”時間”から解放された世界では、ハイパークロックアップはその世界に居続けるために使用しているために使いつづける必要がある。故に、”時間”から解放された世界での体感速度は、通常時とさほど変わらない。

だがエリオは、ハイパークロックアップの最中に更に加速魔法――

ソニックムーブ――を使うことで、ガリューすら超える速度を手に入れたのだ。

「……！」

エリオの繰り出す怒涛の攻撃に、防戦一方となるガリュー。いくら重い一撃がうてる力を持っていようと、打つ前に潰されては意味は無い。速さは、あらゆる力を凌駕することが出来るのだ。

だがガリューとて並大抵の戦士ではない。ただ速いだけなら対処法などいくらでもある。

ガリューはエリオの動きが直線的になっているのを感じ取っていた。クロックアップと違い、ソニックムーブはただの速度強化。そしてソニックムーブにより発生する”慣性”は時間から解放されていないため、相殺するのに相応の力が必要になる。そのために、エリオは通常時にソニックムーブを使った時よりも単調な動きになってしまっていたのだ。

単調な動きを見切るのは簡単だ。そして、その対処も。いくら相手が速かろうと、タイミングを合わせ、読みを深くして注意していればたやすく迎撃出来る。

ガリューは左手を少しだけ自身の左側に伸ばす。次の瞬間、ガリューの前のビルが吹き飛んだ。加速していたエリオがガリューの手に引っ掛かり、バランスを崩したことでビルに衝突してしまったのだ。

「ぐ……この！」

再びエリオが飛び出す。だが、またすぐにガリューは動きを見切り、

今度は蹴りを叩き込まれてしまう。

ソニックムーブにより発生した慣性と合いまった一撃だ。エリオにはかなりのダメージが入ってしまう。

「ぐ……成る程。ならこれでどうだ！」

『ＫＡＢＵＴＯ　ＰＯＷＥＲ』

エリオがゼクターストラーダの赤いスイッチを押す。今までは使用が出来なかったが、カブトゼクターを従えたことにより、パーフェクトゼクターの全ての機能が解放されたためだ。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＡＮＯＮ』

ゼクターストラーダから、タキオン粒子で構成された砲撃が放出される。威力を直感的に悟ったのか、ガリューが回避行動に移る。

「今だ！」

『ＤＲＡＫＥ　ＰＯＷＥＲ　ＨＹＰＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』

ガリューが回避に意識を向けた瞬間にエリオは、追尾式の弾丸を複数放ち、さらに自身もソニックムーブを使って突撃する。

「……！」

すぐにガリューがエリオに気づき、回避に移ろうとする。だがガリューが回避する前にハイパーシューティングの弾丸がガリューに襲い掛かった。

ハイパーシューティングによって発射された弾丸は小さいが非常に強力だ。ガリューとて、弾き返すにはしっかり腰を落ち着けなければ不可能だった。故に、そこに隙が生まれてしまう。

『ＫＡＢＵＴＯ　ＰＯＷＥＲ　ＨＹＰＥＲ　ＢＬＡＤＥ』

一瞬で近づいたエリオが、カブトパワーにより発生した刃をガリューに振り下ろす。ハイパーシューティングに気を取られていたガリューに、逃げ場はなかった。

カブトパワーにより発生したハイパーブレイドがガリューの肩の甲殻に食い込み、破壊していく。だがガリューはそれに怯むことなくエリオを蹴り飛ばした。

しかしエリオは先程とは違い、無事に着地する。エリオ自身も今回は威力を上手く殺せていたが、何よりガリューの攻撃に力が乗っていなかったのが一因だ。

ガリューは人間に近い形態をしている。だが、その本質はあくまでも”蟲”。その外骨格は人間における骨に相当する。

その骨に損傷を負ってしまったのだ。無傷とは到底言い難い。また、ガリューの攻撃方法は基本的に近接戦闘であるため、全身を使うようなキレのある動きをするには相応の体調でなければ不可能。ましてや肩を損傷していてはその威力は大きく減退してしまう。

だが同時にエリオも先程までのガリューとの戦いでダメージを負っていた。いくら強固堅牢な鎧を纏おうと、慣れていない鎧は少なからぬ足枷になる。比較的慣れていたライダーの能力を元にしたアー

ムドアップ故負担は小さいが、無いわけでもない。油断をすればたちまち逆転されてしまうだろう。

二人は決めた。次の応酬で勝敗を決することを。

ガリューが全身から角を出現させ、肩からは鋭い触手も生やし、そしてそれぞれに魔力を限界まで込める。万全の構えだ。

しかし、ガリューは泣いていた。血の涙を流し、泣いていた。

ガリューは気づいていたのだ。そもそもこの戦いが、何の意味もないことに。エリオと戦ったところで、何が変わるわけでもないことに。

それでもガリューは戦う。自身の命の恩人であるルーテシアに報いるために。例えその選択が、自身を破滅に追い込むのだとしても。

それを感じたからこそ、エリオは言葉を紡ぐ。

「ガリュー。君は強いよ。僕なんかと比べられないぐらい、強い。絆だって感じる。でもね、ガリュー。君の絆はただ受け取るだけ、一方通行の絆でしかないんだ。絆って、そういうものじゃないよ。絆を結んでくれた人がたくさんくれたものを、僕もたくさん渡してあげる。絆って、そういうものだと思うんだ」

語りながら、エリオはゼクターストラーダの四つのスイッチを次々に押していく。

「お父さんが言っていた」

『ＫＡＢＵＴＯ　ＰＯＷＥＲ』

「男が人前で見せていい涙は、人を想って流す涙だけだって」

『ＴＨＥＢＥＥ　ＰＯＷＥＲ』

「君の涙が、本当にルーを想って流している涙なのか」

『ＤＲＡＫＥ　ＰＯＷＥＲ』

「それとも、自分が情けなくて流している、自分を思った涙なのか」

『ＳＡＳＷＯＲＤ　ＰＯＷＥＲ』

「これで、はっきりさせよう」

四つのボタンが押されたことにより、カブトゼクター、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクター。四機のゼクターの真の力が解放され、パーフェクトゼクターの機能が最大限に発揮される。

『ＡＬＬ　ＺＥＣＴＥＲ　ＣＯＭＢＩＮＥ』

再び、全てのゼクターが結集したことを知らせる音声が発せられる。だが、カブトゼクターも加わったその力は、以前とは桁違いに上昇している。

「いくよ……！」

エリオがゼクターストラーダに限界まで魔力を込める。

同時にゼクターストラーダに四色の雷が現れる。雷はエネルギーを伝導させ、タキオン粒子を操作する。

非常に強力な力を獲得したゼクターストラーダから発生したエネルギーは、やがてゼクターストラーダを中心に竜巻のようになり、エリオを包んでいく。

これが、エリオの選択。

『ＭＡＸＩＭＵＭ　ＨＹＰＥＲ　ＨＵＲＲＩＣＡＮＥ』

音声と同時にカブテクターが展開され、カブテクターの内側にあった金色の内部装甲が露になる。あまりのエネルギーの嵐にエリオ自身も吹き飛ばされてしまいそうになっているが、カブテクターが展開されたことで衝撃が緩和されているのだ。

装甲が展開されたエリオのその姿は、まさに騎士と呼ぶに相応しい風格を示している。

エリオはただ目の前を見つめ、ゼクターストラーダを構える。ガリューもまた、目の前のエリオを見つめる。互いを倒すため、自身の思いを突き通すため、二人は自身の得物を構える。

緊張が高まっていく。先に出たら負ける。それが分かっている二人だが、同時に二人は互いを永遠に見つめ合っているわけにもいかないことを理解していた。

そして緊張が極限に達した瞬間、二人は一直線に相手に向かって飛んだ。

強靭な角と、強力なエネルギーの嵐がぶつかり合う。互いに一歩も退かず、相手に力を以って意志をぶつける。

だが、不意にガリューの角に皹が入り始める。ガリューが両手の角を限界まで使って対抗しようとするが、今度は全ての角に皹が入りはじめる。

「だあぁぁぁぁぁッッッ！！！」

エリオが裂帛の声を出すと同時に、ゼクターストラーダを突き出す。その瞬間、ガリューの角は全て砕け散る。

だがその代償にマキシマムハイパーハリケーンも相殺されてしまう。ガリューの力は、それだけ強大だったのだ。

だがエリオは諦めていなかった。むしろガリューの無防備な懐に飛び込めた今こそ、最大のチャンス。

今の応酬により限界を迎えたビルの屋上が崩れ、エリオとガリューは落下を始める。

エリオはゼクターストラーダを右手だけで持ち、ハイパーゼクターのゼクターホーンを再び倒す。

『ＭＡＸＩＭＵＭ　ＲＩＤＥＲ　ＰＯＷＥＲ』

さらにエリオはカブトゼクターの側面に付いている三つのスイッチを順に押していく。

『ＯＮＥ』

『ＴＷＯ』

『ＴＨＲＥＥ』

ハイパーゼクターからカブトゼクター。カブトゼクターからエリオの脚。エネルギーが順に伝わっていく。

さらにエリオは魔力を脚に込める。

それは、仮面を付けた戦士の必殺の一撃。

それは、古代の騎士の初歩にして頂点の一撃。

「紫電一閃ッ！！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

カブテクターより放出されるエネルギー、そして重力を組み合わせて、ガリューにその一撃――蹴撃――をぶつける。

「ハアァァァァッ！！！」

エリオの一撃を受けながら地面にたたき付けられるガリュー。大きなクレーターが出来、その中でガリューは気を失う。

「はぁっ……はぁっ……」

苦しげに息をするエリオ。先程の一撃にはエリオ自身、自分の全て

を込めていた。あれで倒せなければ、もう勝てないと諦めていたほどに。

「僕の……勝ちだ」

それでも、エリオはガリューにそう言い放つ。雷の騎士は、蟲の戦士に自身の言葉を押し通したのだ。

エリオがその場に座り込む。もしこの場に誰かがいたとしても、それを咎めるものは誰ひとりとしていなかっただろう。

キャロがカードを持つと、周りのビルのガラスに赤い龍が写り、まるで飛び回るようにガラスを移動していく。

全てが反転した異世界、ミラーワールドに住むモンスター、”ミラーモンスター”。それがこの龍の正体だ。

キャロはそのミラーモンスターにカードを翳す。

そのカードは【ＣＯＮＴＲＡＣＴ】のカード。則ち、ミラーモンスターと契約をするためのカードだ。

ミラーモンスターはカードを認識すると、ガラスから飛び出してカードへと入っていく。

そして、発生した白い光に周りは包まれて――

「……ここは？」

キャロは、いつの間にか見たことのない空間にいた。

そこには先程まで対峙していたルーテシアも、取っ組み合っていたヴォルテールと白天王も、エリオとガリューも、ビル街や空すらない世界。いうなれば、無の世界。

そこに、先程の赤い龍が現れる。強大な存在感を見せる赤い龍。龍は、キャロの前までくるとそこで静止し、そこでキャロを見つめ始める。

もし昔の自分だったら、目を逸らしてしまっていたかもしれない。龍には、そう感じさせてしまうような何かがあった。

だが、キャロは目を逸らさなかった。しっかりと、龍の目を見つめ返す。

「……力を貸してくれる？」

キャロが問い掛けると、龍は返事を返す代わりに何かをキャロに渡してきた。

龍が呼び出した何かは宙をふわふわと飛び、やがてキャロの手の中に収まる。

それは、黒く薄いケース。先程のカードがちょうど入るぐらいの大きさだ。

「……これを私に？」

龍は返事と言わんばかりに雄叫びをあげる。

龍が雄叫びをあげた瞬間、キャロの持っている黒いカードデッキに金色の装飾が施される。それは、龍を模したような装飾。ちょうど、目の前の龍にも似ているそれが、カードデッキに刻まれた。

キャロは悟る。この装飾は、目の前の龍が自分に力を貸してくれるという意志表示なのだと。

同時に、キャロの頭にある単語が浮かび上がる。

「ドラグレッダー……それが、あなたの名前なんだね」

赤い龍――ドラグレッダーは次にキャロにある指示をする。

その内容は、『カードデッキからカードを二枚取れ』というもの。

キャロは言われるままにカードを取る。引いたカードは、ある共通点が見受けられる。どちらも、金色の翼が描かれているという部分。だが、先に引いたカードは背景が燃え盛る炎のようなものであり、対する後に引いたカードは背景が吹きすさぶ風のように見える違いがある。何より、二つのカードは対称的なデザインであり、風を背

景にしたカードに描かれた翼は右翼、炎を背景にしたカードに描かれた翼は左翼となっている。ちょうど、二枚で両翼となる。

キャロはそのカードを手に取った瞬間、カードに凄まじい力が秘められているのを本能的に悟った。

「……これを、使うんだよね？」

キャロは恐る恐るカードを、先程両手に顕現したドラグバイザーに装填する。

激風の右翼、サバイブ―疾風―のカードを右手のバイザーに、業火の左翼、サバイブ―烈火―のカードを左手のバイザーに。

『ＳＵＲＶＩＶＥ』

バイザーから全く同時に音声が鳴り、炎と風がキャロとドラグレッダーを包み込む。

炎と風はやがて、キャロたちを包んでいた〝無〟ですらも焼き尽くし、吹き飛ばした。

ルーテシアは、狂気に飲まれそうになりながらも見た。赤い龍がキャロの翳したカードに入っていったのを。

そしてルーテシアは聞いた。〝生き抜く力〟を。

『ＳＵＲＶＩＶＥ』

炎と風がキャロを包みこむ。それは”繭”。進化のため、今一度つくられた”卵”。

そして、卵は孵る――

龍の雄叫びが響き渡り、炎と風が四散する。

そして現れたキャロのバリアジャケットは、今までとは明らかな違いがあった。

白いロングコートと帽子が無くなり、代わりに頭には龍型の鉄仮面のようなアクセサリーが付き、胴体は見るからに堅牢そうな龍モチーフの赤い鎧を装備している。また、腰には赤く染まった、龍の紋章がついたカードデッキがあたかもベルトバックルのように、銀色のベルトに収まっていた。

腕のケリュケイオンはドラグバイザーと融合しており、龍型の赤き腕甲でありカードの発動機でもあるドラグバイザーに、ケリュケイオンの存在を示すクリスタルが現れていた。また、ドラグバイザーの瞳の色も本来の黄色から変わり、右手のドラグバイザーの瞳は青、左手のドラグバイザーの瞳は赤に染まっている。

キャロの新たな力。それにより発動したのは、仮面ライダー龍騎サバイブの力だった。

「グルゥ……グォォォ！！！」

「ゴアァァァ！！！」

アームドアップしたキャロに呼応するかのように、フリードリヒとヴォルテールも雄叫びをあげる。キャロの目覚めに呼応しているのだ。

ヴォルテールが取っ組み合っていた白天王を投げ飛ばし、フリードは地雷王を火炎で攻撃する。

「ルーちゃん……私はあなたを助けたい。どうしても。だから私はあなたを助ける。言たいことも苦しいことも、辛いことも望みも……全部聞いてあげる。だから、こんな戦いはもう止めよう？」

「煩い……煩い煩い煩いいいい！！！」

ルーテシアの拒絶に、キャロが再び悲しげな表情を浮かべる。

確かにキャロは新たな力を……戦うための力を手に入れた。だが、それでもキャロは、『戦わなくて済むならそれがいい』と考えていた。この力が無駄になるなら、それが1番いい、と。

だが、今の反応でキャロは今度こそ決意した。ルーテシアを救うため、戦うことを。

「……じゃあ、行くよ。ルーちゃん」

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

ルーテシアが周囲に大量の魔力製ダガーを発射する。

対しキャロはカードデッキから一枚カードを取り出し、カードを左手のドラグバイザーに装填する。

『ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ』

カードの効果が発揮され、火炎のベールがキャロを包み込む。キャロの元に飛来したダガーは、その全てが火炎に焼き尽くされ、キャロの元に届くことはなかった。

さらにキャロはもう一枚、カードをドラグバイザーに装填する。

『ＡＤＶＥＮＴ』

ＡＤＶＥＮＴ――召喚のカードが使われたことにより、先程キャロと契約した赤い龍、ドラグレッダーが空より現れる。

現れたドラグレッダーは、キャロから発せられるサバイブの力に呼応し、進化する。ドラグレッダーはまるで鎧を装備したかのような重厚感ある身体になった。サバイブの力により進化したドラグレッダー……名を、ドラグランザー。

ドラグランザーはそのまま地雷王の群れに突撃する。

三体の強力な竜を従えたキャロ。その戦力は以前より遥かに増している。また、キャロ自身の地力が上がったことにより、ヴォルテールやフリードも出せる力がより強くなっていた。

だが、それでもキャロの側には決定的な決め手が無かった。

ルーテシアの側は白天王、それに十数体は軽くいるだろう地雷王。

対しキャロの側にはヴォルテール、フリード、ドラグランザーの三体。数で負けている以上、それ以外の部分で補うしかない。だが、その”それ以外の部分”がキャロには無かったのだ。

今でこそフリードたちの奮闘により持ちこたえているが、フリードたちも生物。いずれは疲れてしまうだろう。生物ではなくミラーモンスターであるドラグランザーには疲れこそ無いものの、代わりに召喚に時間制限がある。時間が経てば、数の差で押し込まれてしまうだろう。

「なんとか……しなきゃ」

カードデッキから感じる力。どれも”便利で強力”だが、”決定打”には足りえないものばかり。

そこでキャロは、一つ奇妙なカードがあることに気づく。

カードデッキから引き抜いたそれは、”ＵＮＩＴＥ　ＶＥＮＴ”のカード。複数のモンスターを融合させるカードなのだが、キャロが契約しているモンスターはドラグランザーのみ。フリードとヴォルテールはミラーモンスターではないため、対象には選べない。

では何故キャロはこのカードに惹かれたのか。

「お父さんの……雰囲気がする」

キャロがカードを見つめながら、思い浮かんだ言葉をそのまま口にする。

「……うん。使ってみよう」

自身が信じる人の気配を感じるカードなら、きっと悪いことにはならないはず。そう信じて。

カードを左手のドラグバイザーに装填し、カードの効果を起動する。

『ＵＮＩＴＥ　ＶＥＮＴ』

だが電子音声こそ鳴ったものの、効果らしきものは一切現れていない。ドラグランザーやフリード、ヴォルテールも先程と同じく奮闘しているが、それだけだ。

「みんな……みんな消えちゃえぇぇぇ！！！」

ルーテシアの叫びに応えるように、ルーテシアの召喚蟲たちの力が高まっていく。徐々に押されはじめるフリードたち。

その時、一体の地雷王がキャロの前に現れる。フリードとドラグランザーをかい潜るやつが出てきてしまったのだ。

ヴォルテールは白天王、フリードとドラグランザーは地雷王たちをせき止めるのが精一杯で、キャロを護りに行けない。キャロも、ガードベントは先程使用してしまったために使えない。魔法による防御など、地雷王はたやすく貫いてしまうだろう。

絶体絶命のピンチ。それがキャロを襲っていた。

フリードは思う。また、守れないのかと。

ヴォルテールは思う。また、自分を信頼してくれた者に報いること

が出来ないのかと。

ドラグランザーは思う。せっかく出来た新しい主を、自分は助けられないのかと。

三体の龍は思う。我等が愛する主にして友、キャロ・ル・ルシエを死なせたくないと。

「私は……ルーちゃんを助けたい！　だから信じる！　ルーちゃんのことも、お父さんのカードのことも、全部！！！」

キャロが全力で叫んでも、もはや地雷王は止まれない。無情にも地雷王の砲撃がキャロへと放たれた。

その瞬間、キャロは感じていた。自分ではない、フリードたちでもない、〝何か〟の存在を。

その〝何か〟は地雷王の射線上に割り込み、砲撃を弾き飛ばしてしまう。

キャロが呆けた感情を浮かべ、目の前を見つめる。そこには、何一つとして砲撃を弾けるようなものは存在していなかった。

だが、現に砲撃は弾かれていた。つまり、そこには確実にいるのだ。目に見えない〝何か〟が。

キャロにもその存在は見えていない。だがキャロは何故だかその存在を感じることが出来た。

「……貴方は、誰？」

――強き決意を持つ者よ。あなたに問おう。

「私に？」

気づけば、そこは真っ白な空間になっていた。キャロとその存在以外は誰もいない、二人だけの空間。こんな場所に来るの、今日二度目だなぁ、とキャロは呑気にも考えていたりする。

――強き決意を持つ者よ。貴方の望みは何だ？

「私の、望み……」

キャロはその存在の質問に対し、少しだけ考えて、答える。

「私の望みは……救いたい。ルーちゃんもガリューも地雷王たちも白天王も、エリオくんもフリードもヴォルテールもドラグランザーも、お父さんもフェイトさんも機動六課の皆さんも地上の皆も……全員、全部」

――貪欲かつ傲慢な意見だ。我がどんな力を持ち、どんなことが出来るかも知らず。貴方の望みがどれほど困難かも知らず。

「確かにまだまだ私は知らないことが多いけど、どれくらい困難なのかも分からないけど……私が望むのは、やっぱりそれだから」

――強き決意を持つ者よ。貴方は我に何を求める？

「……共に歩むことを。竜召喚師、キャロ・ル・ルシエと共に在ることを」

――戦えとは言わないのか？

「結局戦ってもらうのかもしれないけど、戦うために一緒にいてもらうわけじゃないから。……私だって、戦いたいわけじゃないから」

――戦いたくないが、戦う。矛盾に苛まれながらも決意は揺らがないか。面白いな、強き決意を持つ者よ

「あはは……ありがとうございます」

キャロが頬をかきながら言う。愉快に思われて内心複雑らしい。

――いいだろう。力を与えよう。

その存在は光となり、ドラグバイザーで使用したはずのユナイトベントのカードに吸収されていく。

吼太の思い……それが”その存在”の力をユナイトベントと相乗掛合（クロスオーバー）し、新たなカードを生み出す。

次の瞬間、白い世界は消え失せ、キャロは元の世界に戻ってくる。

そしてキャロは、二枚生まれたそのカードを両手のドラグバイザーに装填する。

対になる二枚のカードが表すは”儀式”。現れるは、偉大なる先達。

『ＲＩＴＵＡＬ　ＶＥＮＴ』

カードが読み込まれた瞬間、オットーが張った結界一杯に巨大な魔法陣が現れる。

さらにフリード、ヴォルテール、ドラグランザーの足元にも同じ魔法陣が現れる。

「古(いにしえ)より続く偉大な鼓動、刻と道の最初の担い手、我の志を聞き届けよ、天(あまつ)に駆ける祖なる魂」

巫女は言の葉を紡ぎ、その存在を喚び起こす。

それは、”始まり”そのもの。それは、竜に伝わる竜の伝説。それは、竜の祖。

キャロはその名を、高々と呼んだ。

「竜帝再誕！　来よ、アルトゥール！！！」

フリードたちが光の粒子へと変わり、一カ所に集まっていく。やがて、巨大な意志を感じさせる竜が現れる。

巨大な魔法陣を突き破り現れたのは、圧倒的存在感を放つ巨竜。白銀の鱗と黄金の鱗を持ち、頭頂部には巨大な角が一本生えている。脚は四本、背中の巨大な翼は、広げただけでも神にも等しく感じるほどの印象を相手に与える。

竜帝アルトゥール。あらゆる竜の祖先にして、キャロにとって真に最大最強の竜。

「ヒュアァァァァァァ！！！」

高く、透き通るような雄叫びをあげるアルトゥール。

白天王と地雷王たちは、動くことすら出来ない。あまりの気配に、意識を保つだけで精一杯なのだ。

だがそれでも白天王たちは立ち上がる。ルーテシアに応えるために。

それを見届けたアルトゥールは、小さく翼を動かす。小さく、とは言っても１００ｍはあろうかという竜の翼だ。翼の端から端までなら２００ｍすらたやすく越えるだろう。それだけに、巻き起こる風も凄まじい威力を持っていた。

瞬く間に白天王たちは風に巻き上げられ、地面にたたき付けられる。それだけでなく、ダメージがひど過ぎたのか、強制送還が為される。ただ翼を動かした、それだけでこの戦況を覆してしまったのだ。

「う……ぐ……」

ルーテシアは吹っ飛ばされこそしなかったが、召喚蟲たちのダメージフィードバックが一気に来てフラフラになっている。

それでもなお、戦おうとするルーテシアの腕を、キャロは掴んだ。

「……」

キャロは一言も話さず、ルーテシアを抱きしめた。

少しも抵抗を見せないルーテシア。やがて、その口からは啜り泣く声が漏れはじめる。

「う……うぅ……うぁぁ……」

ルーテシアはいつまでも、キャロの胸で泣き続けていた。

スバルがマッハキャリバーを、ギンガがブリッツキャリバーをクリスタル形態に戻し、構える。

ギンガがブリッツキャリバーを腰のベルト――ダブルドライバー――の左側のスロットに差し込むと、紫がかった青色の光と共にブリッツキャリバーが消え、突然ギンガの身体が糸の切れた人形のように倒れてしまう。

同時にスバルの腰に巻かれたダブルドライバーにブリッツキャリバーが現れる。スバルはブリッツキャリバーを押し込んでダブルドライバーと接続し、さらに自身もマッハキャリバーをダブルドライバーと接続するように右側のスロットに差し込む。

するとマッハキャリバーとブリッツキャリバーから二条の光の柱が空に伸びる。

それまで待機していたエクストリームメモリは、ギンガが倒れたことを認識するとその近くにまで飛んでいき、その肉体をデータに変

換して自身の体内領域に収納する。

そしてギンガを収納したエクストリームメモリはそのままスバルの放つ光の柱まで飛んでいき、光の柱をあたかもレールのように使って自発的にダブルドライバーに装着される。

待機音が鳴り響く中、ひとりでにエクストリームメモリは中央から扇の様に展開し、脚と翼がちょうど”X”になるような形態に変形する。

その瞬間、回りだした中央のファン――エクスタイフーン――の中心に”X”の文字が現れる。

『ＸＴＲＥＭＥ！』

電子音声と共に現れた魔力の嵐がスバルを包み込む。

だが、そこまでの場面を見ても尚……いや、見たからこそ、ノーヴェは余裕の笑みを浮かべる。

「知ってるぜ、その力。確か仮面ライダーＷ（ダブル）、その発展形と言えるエクストリームだろ？　あいにくだったな！　私はもうその力を持った奴だって倒してんだ！」

ノーヴェが両拳を振りかぶりながら突撃する。

「テメェらがどんな力を手に入れようが、私には勝てねぇんだよ！」

そしてノーヴェの拳がエネルギーの嵐を突き破って、スバルを――

――

「何！？」

気づいた時には、既に捕まれていた。

ノーヴェの両拳を受け止める腕。それは仮面ライダーW　サイクロンジョーカーエクストリームのものではなく、先程までも見ていたリボルバーナックルのままだった。

ノーヴェの左手を黒いリボルバーナックルが、右手を白いリボルバーナックルが受け止めている。

変身していない？　いや、さっき確かに変身をしたはずだ。だが仮面ライダーWになったのなら身につけている衣服が外に――ましてや、腕のような肉体の一部がそのまま外に出ているなど、有り得ない。エネルギー嵐の中に見える人影も一人だけ。二人はこのエネルギー嵐の中には入れない。つまりこのエネルギー嵐の中には一人しかいないということだ。ならばなぜリボルバーナックルが？　ノーヴェの頭の中を思考が駆け巡る。

そしてノーヴェは”あること”に気づく。

（……リボルバーナックルって、こんなにタービン大きかったか？）

エネルギー嵐で少し見えづらいが、よく見るとタービンが大型化しているのがわかった。見間違いというわけではない。手首程度の長さだったのが肘近くまで伸びていれば誰だって気づく。

そしてようやく、エネルギー嵐が収まる。

中には一人の女性。だが、それはスバルでもギンガでもなかった。髪はスバルとギンガの中間ぐらいの長さになり、髪の色はむしろクイントのそれと同じ色に変化している。印象は、「スバルとギンガを足して2で割った」という表現が適切だろう。

白と黒の二色ハチマキ、右側のリボルバーナックルとキャリバーは黒と水色を、左側のリボルバーナックルは白と紫色を基調としている。また、中心のバリアジャケットの色がクリスタルのようになっている。

また、リボルバーナックルのタービンは大型化し、また両足のふくらはぎを包み込むようにまたタービンが装備されている。肩には青と白で彩られた鎧が装備されており、重厚感を増すのに一役買っている。

どう見ても単一のモチーフを用いたアームドアップではない。スバルとギンガが合体し、二人分の力を無限大に昇華するためには一つのモチーフでは力不足だったのだ。

仮面ライダーW　エクストリームとGEAR戦士　電童。二つのアームドアップを同時に併用したのが、スバルとギンガのアームドアップだ。

『『だぁぁぁぁ！！！』』

二人がノーヴェを軽く持ち上げ、そのまま思い切り投げ飛ばす。

マッハに近い速度で投げ飛ばされたノーヴェには、空中で受け身をとる時間すら残されていなかった。スタジアムの壁に勢いよく激突

するノーヴェ。

ノーヴェを投げ飛ばした二人は、ノーヴェには目もくれずに背中を向ける。向かったのは、傷つき倒れたユニコーンドリルとレオサークルの傍。

『ゴメンね、レオ……私が不甲斐ないばっかりに……』

『ゆっくり休んでいて、ユニコーン。貴方たちの仇は、私たちがとるから』

スバルとギンガはそう語りかけ、再び立ち上がる。ちょうど、ノーヴェも壁から這い出してきたところだ。

「はっ……少しはやるってことか……。上等だ!!」

ノーヴェが自身の持つ四体のデータウェポンを一斉に装備する。

「マウスドライブ、ラビットドライブ、シープドライブ、ウルフドライブ、インストール!!!」

腰にシープランチャー、臀部にマウステイル、右肩にファングウルフ、左肩にラビットシザース。ノーヴェにとってはこの上ない万全の態勢だ。

だが、スバルとギンガの瞳に恐怖や絶望といった感情は無い。あるのは、ただ相手を倒すという思いだけ。

『行くよ!』

スバルとギンガが水色のウイングロードを作り出し、走り出す。同時にノーヴェもエアライナーを起動して空中に踊り出る。

『『ダブルキャリバー！』』

『キャリバーショット』

マッハキャリバーとブリッツキャリバーのシステムが融合した合体デバイス、ダブルキャリバーを付けた脚が猛烈な勢いでノーヴェに迫る。対するノーヴェもジェットエッジのブースターを吹かし、強烈な蹴りを放つ。

拮抗する脚と脚。だが、スバルとギンガには”まだウイングロードが出せる”。

『ウイングロード！』

スバルとギンガの脚のタービンに接触するようにさらに青いウイングロードが展開され、タービンが高速で回転することで蹴りが”走り出す”。

ダブルキャリバーの力にタービンの回転が加わり、ノーヴェの脚が押されはじめる。

「ぐあぁぁっ！？」

やがてジェットエッジのブースターから発せられる推進力をタービンの回転による力が勝り、ノーヴェを派手に吹き飛ばした。

錐揉み回転しながらも、なんとかエアライナーを起動して足場を作

り、着地するノーヴェ。

「ンの……クソッ！」

忌ま忌ましげにスバルとギンガを睨み付けるノーヴェ。

『『バイパードライブ、ボアドライブ、インストール！』』

スバルとギンガはデータウェポンを装備し、さらなる追撃にかかる。

「テメェにだけは……負けられねぇんだ！　マウステイル、ファイナルアタック！」

マウステイルは臀部に装備される尻尾型武装。その尻尾に備わったタービンが猛烈な勢いで回転し始める。

ノーヴェはその尻尾を思い切り振り、スバルとギンガをたたき付けようとする。

「バイパーウィップ、ファイナルアタック！」

スバルとギンガもバイパーウィップのファイナルアタックを発動し、迫り来るタービンに雷のエネルギーを込めた蛇頭をぶつけ、マウステイルのファイナルアタックを相殺する。

ファイナルアタックの撃ち合いにより、巨大なエネルギーが爆発的に発生し、強制的に距離を開かされる。

『ギン姉、大丈夫？』

『えぇ、なんとかね。にしてもすごいわね。ファイナルアタックを使ってもまだまだ動けるなんて』

ギンガが感心したように言う。ファイナルアタックは自身の全エネルギーを使わなければ本来は使用不可能な技だ。

だが、アームドアップを果たしたことにより二人で一人となった今のスバルとギンガにかかる負担は、通常時の約半分ほどになっていた。カートリッジと併用していけば、ファイナルアタックの連発とて夢ではないだろう。体力が残っているなら、の話だが。

『でも油断は禁物よスバル。こちらは体力があとファイナルアタック一発分しか無いわ。それ以上は消費が激し過ぎる』

『分かってる！』

リボルバーナックルから魔力を補給し、さらに魔力を身体強化に回すことで擬似的な回復をする。無論、付け焼き刃でしかない。身体は今まで通り動いても、今からまた二回ファイナルアタックを使えるわけではない。後一回でもファイナルアタックを使えば体力の殆どを失ってしまうスバルとギンガが勝つためには、確実にあと一回のファイナルアタックを当てる必要がある。ファイナルアタック以上に魔力と体力を使うレムリア・ディバイン・ブラスターは、そもそも魔力スフィアを形成出来るだけの魔力もカートリッジも残っていないために使えない。その意味でもファイナルアタックを当てる必要性がある。

『当てるのは直接の攻撃力が1番高いブルホーンのファイナルアタック！　だよね？』

『えぇ。頑張りましょう』

やがて先程のファイナルアタックのぶつかり合いにより発生した煙が晴れる。スバルとギンガにあまりダメージが無かったように、ノーヴェにもあまりダメージは入っていないようだ。

「ウッゼぇんだよォ！　クソがァ！　シープランチャー、ファイナルアタック！！！」

シープランチャーから無量大数にも及ぶ多弾頭ミサイルが放たれる。

『ガトリングボアのファイナルアタック!?　いや、だめだ！　だったら！』

胸部のガトリングボアの砲塔が回り、大量の魔力弾が放たれる。だが、シープランチャーのファイナルアタックによって現れたミサイル全てには到底及ばない。同じデータウェポンの攻撃、ファイナルアタックはファイナルアタック級の攻撃でなければ相殺はしきれない。

だが、彼女達は一人じゃない。

『ダブルキャリバー！』

『了解』

ダブルキャリバーが青いウイングロードを走り出す。下半身をギンガが操作し、回避行動をとりつつ、上半身を操作するスバルがガトリングボアの魔力弾で避けきれないミサイルを撃ち落とす。二人分の意識があるからこそ出来る芸当だ。

『ギン姉、上のほうに弾幕の薄い場所があった！　穴を作るから、そこから脱出しよう！』

『わかったわスバル！』

今度は水色のウイングロードが天高く伸びていく。同時にガトリングボアからも魔力弾が発射され、上空のミサイルを一気に破壊する。

『うおぉぉ！！！』

その隙を突き、スバルとギンガがミサイルの弾幕から脱出する。

だがそこで二人は予想もしなかった事態に見舞われた。

『『ノーヴェ！？』』

そう、ミサイルの弾幕によってこちらの動向を知ることが出来なかったはずのノーヴェがいたのだ。

先程ノーヴェはシープランチャーのファイナルアタックを放った。

だがこれには罠が仕込まれていたのだ。

普段は満遍なくミサイルを展開するところを、敢えて他の場所に回すことで、一部分――則ち上側のミサイルの弾幕を薄くしたのだ。

そこを突き止めたスバルとギンガが脱出するのを不意打ちするために。

「読めてんだよ単細胞共が！　ラビットシザース、ファイナルアタック！」

巨大なエネルギー刃となったラビットシザースの鋏が、スバルとギンガを両断しようと迫る。もはやファイナルアタックで迎撃する時間すら残ってはいない。

『そんな！？　これじゃあ……』

『大丈夫よ、スバル』

諦めに近い声を出しかけたスバルの声を、ギンガの声が遮る。

『母さんと私たちのシューティングアーツは、リボルバーナックルは……』

ギンガが操作した両手が、ラビットシザースのエネルギー鋏を掴む。

『こんな軽い思いには、負けない！！！』

ギンガがリボルバーナックルに力が込めると、ラビットシザースのエネルギー鋏に皹が入り、やがて完全に砕け散った。

「ファイナルアタックが……！？」

ファイナルアタックをまさか生身で打ち破られると思ってはいなかったのか、珍しくうろたえるノーヴェ。

『ギン姉すごいよ！　さすがギン姉！』

『ありがとう。でもこれは貴女の力でもあるのよスバル』

『私の……うん！』

「……ふざけんじゃねぇ」

スバルとギンガが笑い合い、互いが褒め合うのを憎み抜くような声が発せられる。

ノーヴェだ。これまで以上に凶悪な表情を浮かべたノーヴェが、今度は怒鳴るように話し始める。

「私の思いが軽い……？　大切な家族を傷つけた報いを受けさせようってのが、軽いだと！？　バカにしてんのか！！」

ノーヴェが憎しみをスバルとギンガにぶつける。

『……うん、確かにあなたの思いは軽いよ』

今度はスバルが、ノーヴェに言う。

「ふっ……ざけんなァ！」

いきり立ったノーヴェが、スバルとギンガに突進する。そのままの勢いで、地を割るような剛腕が振るわれる。

それを、二人のリボルバーナックルが受け止める。

『だってあなたの拳には、一人分の思いも乗ってすらいない！　あなた自身ですら、あなたの思いを拳に込めきれてない！』

『本当は、あなたはこんなことに拳を振るいたくないんじゃないの

？　戦いに生きる生活に、疲れてるんじゃないの？』

「……るせぇ……うるせぇんだよォォォ！！！」

ノーヴェが咆哮する。辺りが震えそうなほどの気迫だ。恐らく、次で決着をつけるつもりなのだろう。

『ぐ……すごい……』

『四つ全部でファイナルアタックする気かな……？　さすがにキツイよね……』

ブルホーンのファイナルアタックは比較的強力だが、あくまで”比較的”。相殺出来るのはファイナルアタック一発分だ。四発のファイナルアタックを相手にするにはあまりに辛い。

だが、かといって他の方法があるわけでもない。二人がガトリングボアとバイパーウィップを送還する。そしてブルホーンをインストールしようとした、その時だった。

――！

スバルとギンガは、エクストリームメモリの意思を感じた。

エクストリームメモリの意思は言う。「自分を使え」と。

「……わかった！」

エクストリームメモリの意思に応えるスバルとギンガ。

エクストリームメモリを掴み、扇状に開いたエクストリームメモリを一度閉じ、再び開く。

『ＸＴＲＥＭＥ！　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

するとベルト中央に存在しているエクスタイフーンから青と水色で構成されたエネルギー嵐が現れる。

エネルギー嵐は力尽き、臥しているユニコーンドリルとレオサークルへと近づき、二体を包み込んでしまう。

『何……？』

『何なの……？』

呆然とエネルギー嵐を見つめるスバルとギンガ。

やがて、エネルギー嵐の中から凄まじい気配が漏れはじめる。

「なんだ！？　何が起きてんだ！？」

ノーヴェですら、その気配を受け、迂闊には動けなくなってしまっていた。

やがて、エネルギー嵐を突き破って一体の獣が現れる。

――彼の者は言った。其は電子の聖獣を統べるものと。

白いボディに赤と黒のアクセント。頭部には剣角と螺旋槍、背には円輪刃。鋭角的な翼は宇宙（そら）を斬り裂き、美しくも猛々しく舞い踊る。

それは、”王”と成りし”獣”の”超”越者。
超獣王――輝刃（キバ）。

「な……なんなんだよ!?　それは!?」

『超獣王……輝刃……』

『レオとユニコーンが……合体しちゃった?』

輝刃は天に嘶き、一瞬でノーヴェに近づいて弾きとばす。

『速い……それに、強い!』

『……もしかして、インストール……出来たりするのかな?』

スバルの呟きを聞いた輝刃は、まるで頷くような仕種を見せる。

それを見たスバルとギンガは、輝刃を装備するための指示をダブルキャリバーに下す。

『『キバドライブ、インストール!』』

ダブルキャリバーを通じ、輝刃に指示が下る。変形をし始めた輝刃は、やがて巨大な剣のような形態になる。

キバブレイカー。データウェポンを超えたデータウェポンである輝刃は、４種の形態を持つ。自律行動のための獣形態が一つ、ファイナルアタックを使うための武装形態が三つ。そう、輝刃は一体で３

種類のファイナルアタックを持つ唯一のデータウェポンなのだ。

その内の一つ、キバブレイカーは大剣状の形態を示す。輝刃の翼が刃となったキバブレイカーを、スバルとギンガがつかみ取る。

「くそ……負けるかァァァ！　データウェポン・フォースアタック！」

ノーヴェも負けじと、自身の全てのデータウェポンのファイナルアタックを発動する。

『行くわよ、スバル！』

『オッケー！！』

スバルとギンガの両手両足に装備されたタービンが回転しだし、魔力をキバブレイカーに充填していく。

それと同時に、スバルとギンガの瞳が黄金に輝く。

キバブレイカーを振り上げると、まるで天を突き刺すかのように長大なビーム刃が現れた。

「キバブレイカー、ファイナルアタック！！！」

そしてキバブレイカーのビーム刃と、フォースアタックが真っ向から激突した。

互いに凄まじい威力を持つ攻撃。ぶつかり合っただけで強力な衝撃波が発生し、結界内のものが次々に消し飛んでいく。

だが徐々にキバブレイカーの刃がフォースアタックを押し込んでいく。ノーヴェも必死に力を込めるが――

『『いっけぇぇぇぇ！！！』』

もはやキバブレイカーを、スバルとギンガを止めることは出来なかった。

「く……チクショオ……」

悔し涙を流すノーヴェの元に、スバルとギンガが立つ。

『……私たちは戦闘機人。戦うために生まれた兵器』

『でもね、戦いに生きなきゃいけないわけじゃない。戦いたくないなら、そう言わないと』

「……るせぇ……うるせぇよ……」

「なんだ……この力は……ぐっ！？」

結界を担当していたオットーが、地面に膝をつく。同時に、スバルたちを閉じ込めていた結界が消失した。

アームドアップしたスバルたちのあまりの力に、オットーの結界が耐え切れなかったのだ。

「くそ……マズイ。せめて僕だけでもゆりかごに行って……」

自分の背後に控えているガジェットと共に、ゆりかごに向かおうとするオットー。だがその瞬間、地面から突き出してきた白と緑の突起物――鋼の軛――がガジェットを破壊し、さらにオットーの逃げ道を塞ぐ。

「貴女が地上の司令塔ね……」

オットーの後ろから一人の女性が現れる。

シャマルだ。六課襲撃で浅からぬ傷を負った彼女も、ザフィーラと同じように怪我を治して戦線復帰していたのだ。シャマルの背後にはそのザフィーラも人間形態で立っている。

「上手く隠れてたみたいだけど……クラールヴィントのセンサーからは逃げられない！」

「くっ……ＩＳ、レイストーム、アップグレ――」

「やらせん！」

ザフィーラが瞬時にオットーの背後に回り込み、その拳の一撃を以ってオットーを気絶させる。

そう、これで地上本部を襲撃しようとしていた戦闘機人たちは全員が拘束されたことになる。

地上の平和は、ストライカーたちにとって守られたのだ。

結界の解除されたビルから翔び立つティアナ。その元に、彼女の仲間たちが集まってくる。

「ティアナ！　よかった、無事だったか……」

黒い翼を広げ、飛んできたのはティーダだ。右手に装備していた銃は解除され、痛々しい右腕の傷を晒している。

「それはこっちの台詞！　酷い怪我じゃない！」

「こんなのはかすり傷だっ……アテテ！　叩くなティアナ！」

『仲がいいわね、二人とも』

『よかった～、ティアもティーダさんも無事だったんだね！』

ティアナとティーダの元に、スバルとギンガも現れる。

「「……誰？」」

ウイングロードに乗ってやって来た見知らぬ人物に、思わず聞き返すティアナとティーダ。

『……あ～、その話せば長くなるというか……』

『とりあえず、私とスバルよ。訳あって一人になってるけど』

「……何をやったら二人が一人になるんだ？　質量保存の法則完全無視じゃないか」

「コータさんの側にいたんだから仕方ないわよ兄さん。あとはちびっ子たちだけど……」

そうティアナが言った瞬間、太陽の光が何かによって遮られる。

「「皆さーん！」」

「……無事、みたいね」

『おっきい～！』

アルトゥールに乗って現れるエリオとキャロ。

そこにさらに、ヴァイスの乗っている輸送ヘリが現れる。

「おいお前ら、早く乗れ！」

「ヴァイス陸曹？」

『どうか……したんですか？』

ティーダとギンガが何故か慌てているヴァイスに聞く。

「どうかもこうかもねぇよ！　ゆりかごが加速し始めた！　このままじゃ大して時間経たない内に軌道に出ちまう！」

そう、まだ戦いは……終わっていない。

## 第百四十九話　ＳｔｒｉｋｅｒＳ（後書き）

はい、まずお疲れ様でした。今回は実に３００００文字超え。完璧に最長記録更新です。

と、いうのもフォワードたちの話は、今までのを含めれば一人でいつもの二話分は楽々あるというボリュームをまとめちゃったからなんですよね。私も流石にやりすぎかな、とか思ってます。次回からは確実にここまで長くはないのでご安心を。つーかそこまで書けませんし。

さて、それではアームドアップについて話しますかね。

アームドアップはまぁ、平たく言えばハイブリット自動車みたいなもんです。それの魔導師版。ちなみに、決まった順番と選定理由はこんな具合。

エリオ：カブトの力を使わせることが決まっていたので、自然にカブトに。パーフェクトゼクターのこともありハイパーフォームを採用。ちなみにまだパワーアップする予定がある。ヒントはゼクター。

スバル：データウェポンから、当然のようにＧＥＡＲ戦士電童に。リボルバーナックルの回転を見て電童を思い出したのは私だけではないと信じたい。この時点では合体プランは無し。

ティアナ：「ティアナに天使の翼って似合うんじゃね？」というフィーリングから。砲戦魔導師になってるのはきっと某魔王のせい。正直キャラは合ってない気もする。でもヒイロもティアナも感情的だから意外に合ってるかも？　気のせいか。

ティーダ：ティアナが白い翼なので、対称的な黒い翼にしようと考え、さらにクロスファントムが一つしかないこと、おもちゃの銃由来のエピソードがあることからベルゼブモン・ブラストモードに。正直、ベルゼブモンはティアナでもよかったと思っていたりします。ちなみに、ＸＷの設定も採用したりしてます。速射とか台詞とか。ぶっちゃけテイマーズ覚えてないのが原因。ＸＷもいいとは思うよ。デザイン以外。

キャロ：ライトニングの二人はライダーにしようと決めていたので、考えに考えてようやっと思い付いたのが同じく龍を従える仮面ライダー龍騎。サバイブにしたのは、アームドアップした際の見栄えの都合上。ドラグバイザーツバイでない代わりにダブルドラグバイザーにしたのは、ケリュケイオンとドラグバイザーを合体させたかったから。ちなみにアルトゥールの案が決まったのはキャロのアームドアップが決まる前だったり。

ギンガ：１番苦労した人。凰牙は似合わないし、かといってスバルのと同じにも、全く違うのにも出来ない。両腕リボルバーナックルをアームドアップ時に装備させるつもりだったのもあり、データウェポンも最終的に纏めなければいけないので１番困ってた。閃いたのは、電童が二人乗りだと気づいた時。「逆に考えるんだ。一人で一つずつアームドアップを決めるんじゃない。二人で二つ分決まればいいんだ！」　そんなわけで、仮面ライダーＷを混ぜた、と。エクストリームのマキシマムがキックじゃないのは、サイクロンジョーカーじゃなくてマッハブリッツだから。

シャマルさんたちは次回でもよかったけど、せっかくだったので。

ちなみに迷走していたころのギンガの設定として、アカツキの拳甲なるものがあったりしました。アカツキの大太刀のナックルガード版です。スバルにはレムリア・ディバイン・ブラスターあるし、データウェポンはギンガにしちゃおうかなとか考えてて。まぁ、私としてはWと電童で正解だったと思ってます。

なお、手紙には一応各アームドアップの内容を知らせる言葉が仕込んでありました。

◇ティアナ

＞人類は皆弱者。

ヒイロの台詞。詳しくはググりましょう。↑

＞感情に従い、生きろ

ヒイロの生き方らしい。Ｗｉｋｉｐｅｄｉａあざーす。↑

◇ティーダ

＞進化

デジモンと言えば進化。ポケモンよりプッシュしてるし。デジクロス？　シラナイナー

＞過去を――

ベルゼブモンと言えば過去話。そんな理由から。ティーダの場合は、自身が一度死んだことを受け入れろ的な意味も。

◇キャロ

＞戦わなければ生き残れない

仮面ライダー龍騎のキャッチコピー。こらそこ。「戦っても生き残れない！」とか言わない

◇エリオ

＞総てをお前が司り、お前の正義を認めさせろ

仮面ライダーカブトのキャッチコピーである、「天の道を往き、総てを司る！」　「俺が正義」を組み合わせたもの。案外エリオにしっくり来て驚いてる。髪が赤いから？↑

◇スバギン

＞お前たちは二人で一人

仮面ライダーWを象徴する、「俺達は二人で一人の仮面ライダーだ」という台詞から。あいにくギンガはハーフボイルドにはなりません。つーか性格からするとスバルが左のように感じてしまう。

＞二つの無限

GEAR戦士電童の主題歌タイトル、”W－Infinity”から。最終話のサブタイトルもだったかな？　少なくともスパロボMXではサブタイトルに使用されてました。電池とカートリッジに親近感を感じる

はい、こんな感じで。ティーダとスバギンが難しかったかな？

……アームドアップの性能について殆ど触れてませんが、まぁそれはまた本編で触れたら。

長くなってしまったのでこの辺にしましょう。次回の主役はオッサンです。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十話　旧友（前書き）

今回は普通の長さに戻りました。というよりむしろいつもよりちょっとだけ短いかも？

かといって分けないとまたボリューム過多になるし……。まぁ、勘弁してください。

# 第百五十話　旧友

Ｓｉｄｅ　三人称

フォワードたちがオットーの作り出した結界に閉じ込められてしまった後、クラナガンの廃棄都市、遥か上空では二人の騎士が美しく舞っていた。

演じるは死闘。謳うは刃。奏でるは刃の閃き。

騎士ゼストと騎士シグナム。二人の騎士は互いに剣を以って語り合う。

「……強いな。名は？」

一度距離をとったゼストが、シグナムに話し掛ける。

「本局機動六課、シグナム二尉です。前所属は首都防衛隊。貴方の後輩ということになります」

シグナムたちはヴォルケンリッターとして纏まって入局してはいたが、新入りであるため所属を分けられていた。シグナムの場合、今回の機動六課が設立される前は首都防衛隊でクラナガンの平和を最前線で守り続けていた。

「……そうか」

どこか懐かしむように、シグナムの言葉を聞くゼスト。

「中央本部を、壊しにでも行かれるつもりなのですか？」

「古い友人に……レジアスに会いにいくだけだ」

「それは……復讐のために？」

シグナムの表情が険しくなる。

「言葉で語れるほど、単純な話ではない。道を、あけてもらおうか」

ゼストが自身の槍――ガングニール――を構える。

「言葉にしてもらわねば、譲れる道も譲れません」

シグナムが魔法陣を展開し、レヴァンティンのカートリッジをリロードする。

カートリッジに込められた魔力が炸裂し、シグナムの魔力変換資質により魔力が炎へと変わり、レヴァンティンの刃に炎が宿る。

『あ……』

「どうした、アギト？」

ゼストにユニゾンしているアギトが、奇妙な声をあげる。どうやら、レヴァンティンに炎が宿った様子に反応したようだ。

（なんでだろう……アイツ、初めて会ったはずなのに……）

「アギト？」

『あ……悪い、旦那。少しぼーっとしちまってたみたいだ』

アギトは自身が感じたものを振り払うように、シグナムたちにタンカを切る。

『グダグダ語るなんて騎士のやるこっちゃねぇんだよ！　烈火の剣精アギト！　大義の友人ゼストのために――』

アギトの力により、ゼストのガングニールの穂先に炎が宿る。その炎は、シグナムのそれより大きく、熱い。

『この手の炎で、押して参る！』

『騎士とかそうじゃないとか、そういうことで意地を張るから喧嘩することになっちゃうんですよ！』

「……そうだな」

アギトの言葉に反論したリインフォース？の言葉を、どこか気まずげに肯定するシグナム。

『シグナム、どうかしたですか？』

「いや、その……昔がその……なんというか……気まずいというか……まぁ、気にするな」

『はぁ……？』

「気にするな！」

『な、何がです!?　というより、シグナムなんで顔真っ赤に』

「いいから！　行くぞリイン！！」

『ふぇ!?　は、はいです！　祝福の風リインフォース?！　烈火の将シグナムの炎と成り、刃と成りて、貴方がたを止めさせてもらいます！』

リインフォース?の疑問を無理矢理押し込めて、シグナムが攻撃に移る。顔がほんのり赤いことを突っ込んではいけない。

『シュランゲフォルム！』

「はぁぁぁっ！」

レヴァンティンが連結刃の形態となり、ゼストを包み込むように展開される。

高速で移動する刃、生身で近寄ればたちまちミンチになってしまうだろう。尤も、非殺傷設定がついているため実際にミンチになることはないだろうが、それでも触れるだけで凄まじいダメージが与えられるのは確かだ。

だが、ゼストはシュランゲフォルムとなったレヴァンティンの連結刃の隙間を縫うように飛び、一気にシグナムの懐に飛び込む。

「ッ……！」

「その技は、近接戦闘には向かないようだな」

『私に任せるです！』

シグナムとユニゾンしているリインフォース?が、ゼストにフリジットダガーをぶつける。

「ぐ……氷の刃か」

『どーやらあのバッテンチビ、万能型みたいだ。炎特化じゃねぇ』

炎を扱う騎士であるシグナムが、性質が真逆と言える氷の魔力弾を放ったことから、アギトがリインフォース?の性能を推測する。

アギトの推測通り、リインフォース?は特定の属性に特化したユニゾンデバイスではない。これは、多種多様な戦い方をする八神家全員とユニゾンが出来、それに合わせている内にそういった形になったのだ。とはいえ、1番の得意分野は魔力そのものの制御であり、大量の魔力を持つはやてとユニゾンした時は別格の力を発揮するのだが。

「すまないリイン。おかげで助かった」

『いいですよ～。でも、やっぱりあの騎士と融合騎、シンクロが出来てないみたいです。所々に魔力の乱れがあります』

「融合率が低いのか……騎士ゼストは確かに強いが、そこを突けばいけるか」

シグナムが鞘を取り出し、そこにレヴァンティンを納める。

「レヴァンティン、灼熱刃！」

『ヒーアヘッズフォルム！』

鞘の中で魔力が炸裂し、炎が刃に凝縮される。レヴァンティンに負担がかかるため時間制限があるものの、通常時の数倍にも及ぶ攻撃力を発揮する形態、ヒーアヘッズフォルムだ。通常形態であるシュベルトフォルムに似ているが、威力は桁違い。シグナムにとって、まさに”自身の本気”を意味する剣だ。

しかも、現在シグナムはリインフォース？とユニゾンしている。つまり、ヒーアヘッズフォルムの魔力制御をリインフォース？に任せられるため、通常よりも長時間に渡ってヒーアヘッズフォルムを維持することが出来るのだ。

「往きます！」

シグナムが鞘にレヴァンティンを納めたままゼストに向かう。ゼストと接触する直前で鞘から一気に刃を解き放ち、一刀両断しようというのだろう。

対しゼストは、ガングニールを構えただけ。カートリッジをロードするわけでもなし、刃にアギトの炎も点っていない。

怪訝に思いながらも、シグナムは接近していく。

そして、ゼストがシグナムの射程範囲に入る。

（いや……まだだ！）

ゼストは生粋の騎士。範囲ギリギリでは避けられてしまう可能性もある。ならば、避けられない距離まで近づく必要がある。

それに、あのデバイスがいかに強固だろうと、ヒーアヘッズフォルムとなったレヴァンティンの刃は止められないとシグナムは自負していた。過去、ヴィータのギガントシュラークやなのはのスターライトブレイカーすら打ち破ったことがあるのだ。そう思うのも無理は無い。

そして、シグナムの身体がガングニールの穂先ギリギリまで近づく。

「これで終わりです。紫電――」

シグナムが猛り狂う炎熱を秘めたレヴァンティンを解き放とうとした、その時だった。

「アギト！」

『任せな旦那！　炎熱消去！』

ゼストがガングニールでレヴァンティンの刃を受け止めた瞬間、全てを熔かしてしまう程に熱せられたレヴァンティンの熱が消え、ヒーアヘッズフォルムが強制的に解除されてしまう。

「なんだと！？」

『あれほどの熱量を一瞬で……！？』

『覚えとけバッテンチビ！　アタシは烈火の剣精！　アタシと旦那に炎で挑もう、ってのが間違いなんだよ！　衝撃加速！』

「ッ！　リイン、構えろ！」

シグナムがリインフォース?に注意を促すが、リインフォース?がそれを理解するまえにゼストの斬撃が放たれる。

シグナムのそれが”鋭”だとするなら、ゼストのそれは”剛”。その一撃に込められた威力は、シグナムの一撃を遥かに上回る。

「でえぇいッ！」

「ぐ……」

あまりの衝撃に、数m後退してしまうシグナム。しかも被害はそれだけではない。

「――リイン？　リイン！　応答しろ！」

ゼストの強力な一撃により、リインフォース?が気絶してしまったのだ。

ユニゾンデバイスの意識が無い場合、必然的にユニゾンによる恩恵も消える。リインフォース?とのユニゾンにより薄紫色に染まっていたシグナムの髪とバリアジャケットが、それを示すように元の桃色に戻ってしまう。

『旦那、シメたぜ！　バッテンチビのやつ、さっきので気絶したみたいだ！』

「状況はこちらに傾いてきているか……」

そう言いながらも、ゼストは今まで以上に警戒を強める。

「リインが気絶したとて、貴方を通すわけにはいきません」

レヴァンティンを正面に構え、シグナムが言う。その瞳には今まで以上の闘志が宿っている。

「だが私にも譲れぬ理由がある。どいてくれぬなら――」

ゼストもガングニールを構える。

「この手で押し通るまで」

そして、ゼストとシグナムは同時に動き出した。

空中を自在に飛び回りながら、裂帛の気合を込めて得物を振るう。

上から、下から、後ろから。単なる武器のぶつかり合いでありながら、そこには細やかな技術が垣間見える。

シグナムの武器はゼストのそれと比べて軽く、取り回しが容易だ。故に連撃に長ける。だがその代わり射程は短く、相手に近づかねば真価を発揮出来ないデメリットがある。

長距離対応のための形態もあるにはあるが、連結刃により射程を伸ばすシュランゲフォルムは先程破られたばかり。シグナム唯一の遠距離攻撃形態であるボーゲンフォルムは、ゼスト相手では当てること自体が不可能。

対しゼストのガングニールは槍故の攻撃範囲の広さ、そしてゼスト自身の力も合わさった一撃の重さがある。ユニゾンしたヴィータのギガントハンマーを受け止め、打ち破るほどの力だ。シグナムとて、当たればただでは済まない。

だが、それはあくまで”当たれば”の話だ。シグナムほどの実力の持ち主であれば、敵の攻撃に当たることなど滅多に無い。速さ以前に、敵の動き出し等から次の動きを予想するような、先読み技術に優れるからだ。特にシグナムはヴォルケンリッター随一の観察力の持ち主。例えゼストほどの実力者が相手であろうと、そう簡単に攻撃を赦したりはしない。

幾度となく交わる閃光。シグナムは時にレヴァンティンを、時に鞘を使って攻撃を受け流す。一撃とて、直撃を赦したりはしない。

ゼストは剣先が触れるような距離に近づくことすら赦さず、シグナムのレヴァンティンを時に弾き飛ばし、時に投げ飛ばす。

だが時間は有限。そしてゼストにはこのまま無駄に浪費出来る時間は無い。

『旦那！　こうなったらアタシの炎で一気に……ッ！？』

勝負をつけるため、ゼストに自身の力を付加しようとしたアギトが、何故かユニゾンを解除してしまう。

……いや、ユニゾンを解除したのではない。解除”せざるをえなかった”のだ。

「アギト、援護を頼む」

「あ、あぁ……」

だが、ゼストは気にせずにアギトに指示を与え、また自身もガングニールを以って突進する。

「ぐ……！」

シグナムが鞘を突き出し、ガングニールを受け流そうとする。

「させっかよ！」

だが、ゼストの後ろから飛んできたアギトの炎が、シグナムに襲い掛かる。

難無く炎を斬り裂くシグナム。だがしかし、同時にゼストの攻撃を赦してしまう。

「オォォォォ！！！」

雄叫びのような声と共に放たれた一撃を、なんとか鞘で受け止めるシグナム。だが、今のシグナムには、”受け止める”ことが出来る余裕はあっても、”受け流す”ことが出来る余裕はなかった。

重い一撃を真っ向から受け止めてしまうシグナム。その耐久強度を遥かに超えた威力に、鞘が悲鳴をあげる。

――ピシッ

「な――！」

「デヤァァァァ！！！」

やがて鞘は限界を超え、粉々となってしまう。

また、同時にシグナムもその一撃により派手に吹っ飛ばされてしまった。

鞘が壊れてなお、シグナムを吹っ飛ばしたゼストの一撃には、よほどの威力が篭っていたことがよくわかる。

「ぐ……」

魔法陣でクッションを作り、落下の衝撃を受け止めるシグナム。

「しまった……！」

『……ん、ん～……今何時ですかぁ～？』

「リイン、目が覚めたか」

シグナムの髪やバリアジャケットが再び薄紫色に染まる。どうやら先程の衝撃がきっかけとなってリインフォース？の覚醒を促したようだ。

『……あ！　そうです！　リインはさっきまであの騎士たちと……』

「思い出したのなら話は早い。情けない話だが振り切られてしまった。追跡を頼む」

『は、はいです！』

リインフォース？はすぐにウィンドウを開き、周辺のスキャンを始める。

それと同時にシグナムの前にもウィンドウが現れ、リインフォース？によってスキャンされた情報が表示される。

「まださほど遠くへは行っていないか……。これなら地上本部に入られる前に――」

『ちょっと待ってください！　これは……転移反応です！』

リインフォース？が言うや否や、周囲に色とりどりの魔法陣が現れ、そこから様々な容姿をした人間が大量に現れる。

「巨乳騎士様キター！」

「俺の嫁、とうとう見つけたぜー！」

共通点があるとするなら、全員が男性であり、この大規模騒乱には明らかに似合わない雰囲気を出していることだろうか。

そう、彼らは転生者だ。しかも、全員が揃いも揃って転生したての。

何故この場にこんなにも大量の転生者が現れたのか。その理由を知るものは誰ひとりとしていない。

『見た感じ、スカリエッティやあの騎士の仲間ではないみたいですが……』

「私たちを通してくれるわけでもなさそうだな」

シグナムがカートリッジを新たに装填しながら言う。

『時間から考えて、相手に出来る時間は４分５１秒が限界です。それ以上経つと、地上本部への侵入を許してしまうです！』

「これだけの人数を５分足らずで、か……」

圧倒的人数差。しかも相手は全員が転生者。身体スペックは折り紙付きである。

「……面白い。この烈火の将シグナム！　有象無象に止められるほど甘くはないぞ！」

それでもシグナムは、なんら臆することなく転生者の群れに突撃していった。

「大丈夫か……？　旦那ぁ……」

地上本部へと飛びながら、アギトがゼストの身体を気遣う。

「あぁ。……すまんなアギト。もう、お前とユニゾンすることすら、赦されなくなってきたらしい」

ゼストが自身の手を見つめながら言う。

過去の戦闘機人プラント襲撃の際、ゼスト・グランガイツは死んだ。今ここにいるのはゼスト・グランガイツ本人ではなく、そのクローンなのだ。

とはいえ、過去の記憶が無いわけではない。このクローンを造り出したスカリエッティにより、記憶転写を施されている彼はいわば、ゼストの生まれ変わり。信念も魔導も、性格すらも完全に同じままで誕生していたのだ。その意味では、過去にプレシア・テスタロッサが研究していた、【クローニングによる生命再生】を完成させたと言えるだろう。

だが、その代償と言うべきなのか、彼には死ぬ前よりも圧倒的に”或るもの”が足りなかった。

――”時間”である。

彼がクローニングで蘇ったのはそう昔のことではない。ＤＮＡのテロメアが足りないと、クローニングした生命体の寿命が短くなるのだが、スカリエッティはその欠点を解消している。だが、彼の身体は既に悲鳴をあげていたのだ。

それは、不法の手段で命を得たことに対する罰なのか。

そしてその罰は、いよいよゼストの全てを破壊しようとしていた。

「構わねぇよ旦那……。旦那を守る方法は、まだいくらでもあるんだ」

嘘だった。烈火の剣精などと名乗ってはいるが、アギトにそれ以外の過去の記憶を殆ど失っていた。

管理局の目を逃れて存在していた違法研究所。そこの一室にある白い壁が、アギトがしっかりと覚えている最古の記憶だ。”烈火の剣精”という二つ名とて、研究員がそう言っていたのを偶然聞いて、気に入ったからそう名乗っているだけ。アギトという名前も、ルーテシアに名付けて貰ったもの。本来の自分の名前や生い立ちに関しては、全く記憶が無かった。

ただ、過去の記憶が全く無いかと言うとそうではない。

アギトの記憶の奥にかすかに残っている思い出。紫色の魔法陣に、炎を使う剣の騎士。凛々しい後ろ姿に、態度に惚れたと言っていい。

――こんな人の力になれたら

気づけばアギトは、その朧げな人物像を”理想のロード”として捉えるようになっていた。

「シグナム、と言ったか……。あれは、いい騎士だな」

「旦那……？」

突然、シグナムを評価し始めたゼストを不審がるアギト。

「剣と炎を使う騎士で、魔力光の色までお前と同じ。以前、お前が

言っていた理想のロードの姿と一致する」

「旦那……何言ってんだよ!?」

アギトが次第に動揺した表情に変わってくる。

「しかもあの太刀筋……真正のベルカの騎士のものだ。あの者ならば、よりお前を――」

「止めてくれよ！　敵だぞアイツは！」

ゼストの言葉を遮るアギト。その眼には、涙が浮かんでいる。

「アタシは旦那のために力を使いたいんだよ！　だから旦那はアタシのことなんか気にしないで、自分のために……ために……！」

「……」

ゼストがそれに答えることは、無かった。

「オーリス、下がれ」

「……何故ですか？」

突然のレジアスの言葉を、怪訝そうな表情で問いただすオーリス。

「旧友が、訪ねてくるからな。お前には、まだ早い話をするために」

「旧友……？　それは一体――――」

オーリスがまだまだ喰い下がろうと、問い返したその時、今二人とオーリスの秘書がいる、地上本部の本部長室のドアが破壊される。

「ぐ……！？」

「来たか……」

ドアが破壊されたことにより発生した煙の中から、一人の男が現れる。

「手荒い来訪ですまんな、レジアス」

「構わんよ……旧友（ゼスト）」

# 第百五十話　旧友（後書き）

休憩するって、ちまちま書いてたら普通に仕上がっちゃったよ！↑

ゼストさんは書いてて渋いキャラ。実に渋い。ハードボイルドだぜぇ……。

まぁ、ここの主人公は確実にハードボイルドじゃなくて半熟野郎（ハーフボイルド）ですが（笑）

今回は微妙な違いがありました。まぁ、リインが気絶したことですね。これでＯＰ再現出来たぜ！

……え？　転生者？　ありゃただの雑魚の群れです↑

さて、次回はゼストさんが死んだ事件についての話が中心になると思います。

そしてシグナムとアギトのも……？　いや、こっちは微妙ですが。

原作ブレイクもあるかもよ！↑怪しい

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十一話　ムカシのハナシ（前書き）

うーん、慣れてきたらこんぐらいになった。

だいたい９０００文字。７０００文字に収めることすら難しくなってるって、どういうことなの……？

# 第百五十一話　ムカシのハナシ

Ｓｉｄｅ　三人称

「紫電一閃！」

「あぎゃあぁぁぁ……」

シグナムに斬られ、また一人の転生者が墜落していく。

数百人はいたかという転生者は、今や十数人にまで減ってしまっていた。

『騎士ゼスト、本部突入！　しかもここって……本部長室です！』

「友とは、レジアス中将のことだったのか……リイン、一気に片付けるぞ！」

『はいです！　魔力制御、準備完了です！！』

リインフォース？が、シグナムに準備が出来たことを伝える。シグナムは直ぐさま鞘を取り出し、レヴァンティンに接続する。すると、レヴァンティンの形状が変化し、その姿を弓へと変形させる。

『ボーゲンフォルム！』

レヴァンティン第三の形態、シグナムの弱点である遠距離戦をカバーするための形態、ボーゲンフォルムだ。

さらにシグナムはカートリッジを４発炸裂させる。

『魔力伝達安定！　炎熱、衝撃加速！』

「奏でよ、隼ァ！」

『シンゲファルケン！』

弓へと変形したレヴァンティンが、さらに二対の連結刃に変化する。二対の連結刃は辺り全てを一気に薙ぎ払い、転生者を一掃した。

ボーゲンフォルムは通常、シグナムが苦手とする遠距離攻撃が可能になるが、代わりに近接戦闘が不可能になる欠点がある。それの解消のために作られたのが、このシンゲファルケンだ。

ボーゲンフォルムから変形した連結刃、言うなればダブルシュランゲバイゼンが辺りを一掃する技、それがシンゲファルケンだ。

ただし、苦手な遠距離戦闘形態であるボーゲンフォルムに加え、ボーゲンフォルムらしからぬ変形が加わったこの技は二重にイレギュラーな技であり、イレギュラーを解消するために、消費魔力が異常に多い欠点も持つ。そのためシグナムはあまりこの技を使うことは無かったのだ。

「時間を取られたな。行くぞ」

『はいです！』

ユニゾンをしたシグナムが地上本部へと向かう。

途中のガジェットも破壊しつつ移動し、ようやく入口にたどり着く。

「中にまでガジェットは入っていないようだな」

『地上のみんなが頑張ってくれてるですよ』

シグナムの言うとおり、地上本部内にガジェットは侵入していなかった。とはいえ、あくまでそれは現状の話。時間が経てばどうなるかは分からない。

『アースラから情報です！　フォワードのみんなは戦闘機人及び召喚師を保護！　スカリエッティもフェイトさんが逮捕して、地上のガジェット生産装置は停止したようです！』

「ふむ……。では騎士ゼストを押さえれば、後は……」

シグナムが窓から空を見る。そこには以前として、ゆりかごが在った。時折見える白い砲撃は、シグナムの主であるはやてのものだろうか。

「急がなければならないか……。リイン、ユニゾンを解除だ」

『ふぇ？』

突然のシグナムの言葉に、疑問を隠せないリインフォース？。

「今だゆりかごの内外では激しい戦いが繰り広げられている。お前は主はやての元に向かってくれ」

『それじゃあシグナムが……！』

心配するリインフォース?に、笑顔で答えるシグナム。

「私は大丈夫だ。伝えるには難しいが……大丈夫な気がするんだ。きっと、悪いことにはならない。だから、お前はお前を必要としている人の元に行ってくれ」

シグナムが強制的にユニゾンを解除する。シグナムの中から放り出されるリインフォース?。

「シグナム……」

「ちょうどアルトが近くにいるらしい。あいつに届けてもらえ」

「……死んじゃ……死んじゃ、ダメですからね!」

「……あぁ」

リインフォース?が、シグナムに背を向けて飛び去って行く。

シグナムもまた、本部長室へ向かって走り出した。

そしてある通路に差し掛かると、シグナムは突然止まる。

「止まれ! ここから先は……通行止めだ!」

アギトだ。アギトの張ったバリアが、本部長室に続く唯一の道を塞いでいたのだ。

「旦那は……旦那はただ、昔の友達に会いに来ただけなんだ! そ

れを邪魔しようってんなら！！」

精一杯の虚勢を張るアギト。だが彼女とてユニゾンデバイス。主のいないユニゾンデバイスがどれほど無力かなど、嫌というほど理解していた。

自分の命を使って、せめて1秒でもゼストのための時間を作る。それが、アギトに出来る最後の手伝いだったのだ。

延ばした手が震える。

シグナムがいい騎士だと理解してはいる。きっと、痛みも無く逝けるだろう。だが、やはりアギトにとって死は恐怖そのものだった。

シグナムが無言のままレヴァンティンを構える。

いよいよか、とアギトが諦める。

（旦那……役に立てなくてゴメンよ……）

アギトが目をつむる。

そして――――

「オーリスは、お前の副官か？」

「いい副官だよ。ワガママなのが、悩みの種ではあるがな」

「ゼストさん！」

オーリスがゼストに話し掛ける。

「何故貴方が！　貴方は……あの事件で……！」

ゼストはオーリスの疑問を黙殺し、レジアスの机の前に立つ。

「レジアス、お前に聞きたいのはただ一つ」

ゼストが懐から二枚の写真を取り出す。

一枚は少々昔の写真らしく、全体的に色褪せている。写っているのはどうやら、若き日のゼストとレジアスらしい。制服がまだ馴染んでない辺りからすると、入局時の写真なのだろうか。

もう一枚には、先程の写真よりも大分風格の出ているゼストと、スバルやギンガと似た女性、ルーテシアと似た女性を中心に数人の局員が写っていた。どうやら、過去ゼストが持っていた部隊の面々で撮った写真のようだ。

二つの写真には共に、見るからに充実しているのが見て取れる笑顔が写っている。だが、今のゼストとレジアスの顔に笑顔は無かった。

「懐かしいな……局に入ったのは、もう４０年も前になるのか」

「生憎だが、昔話に華を咲かせるつもりはない。あの事件……俺と、俺の部下が死んだ一因を作りあげたのは……戦闘機人の製造を推進していたのは……お前で間違いないか？　レジアス」

レジアスは答えず、写真を見つめ続ける。

「共に語り合った、あの日の正義は……俺達の正義は……どうなっている？」

――４０年前

「また……守れなかったな」

地上本部のとある一室で、二人の局員が話をしていた。

まだまだヒヨッコだった頃のゼストとレジアスだ。

ゼストもこの頃はまだ下っ端の魔導師見習い。レジアスに至っては事務員だったころの話だ。

「死者数２５、民間人はその約半数……俺の力が足りないばかりに……くそっ！」

「お前が悪いんじゃない！　お前は精一杯頑張っていた！　……海の連中も海の連中だ。優秀な魔導師は次々にとっていくくせに、肝心のミッドには魔導師をろくに置いていかん！　そのせいでミッド地上の犯罪は増えるばかりだ！　今回の事件だって、元を正せば、海の連中が犯罪者を逃がしたのが……！」

まだ若かりしころのレジアスが声を荒げる。その表情には、まさに”若い怒り”とでも言うべき表情がありありと浮かんでいる。

海……則ち、本局が優秀な魔導師を囲うという流れは、管理局が地上本部と本局で別れた頃から続いていることだった。だが、誰もそのことに異を唱えた者はいなかった。

「人も力も足りないのに、あまつさえ本局の連中は質量兵器を完全に消し去ろうとしている！　これではミッド地上の平和が夢幻になってしまう！」

「……海の連中とて、楽をしているわけではないだろう。奴らの扱う事件はこちらとは訳が違う。優秀な魔導師でなければ犠牲者が増えるばかりの事件ばかりだ」

ゼストが冷静に言う。とはいえ、彼も本局のやり方をあまり快く思っているわけではない。

いくらなんでも取りすぎではないか――そう思ってしまうほどなのだ。まるで、優秀な魔導師を集めること自体に何か意味があるかのように。

「なら聞くがゼスト。お前は多のために少を捨てると言うのか！？　大儀のためと言い訳をし、目の前で助けを求めている子供を見捨

てると言うのか！？」

「……」

「……スマン……」

大声を出したことで冷静になったのか、レジアスが何も答えなかったゼストに謝る。

子供を救って世界を捨てるか、世界を救って子供を捨てるか。どちらを選ぼうとも、決して間違いではないのだ。

だからこそ、ゼストもレジアスも……いや、殆ど全ての人が答えることが出来ないのである。

「……信じよう」

「何？」

ゼストが言った不可解な言葉に、質問で返すレジアス。

「海の連中が平和を作ることを、だ。世界は奴らが救う。目の前の子供は、我々が手を差し延べればいい。違うか？」

「……そうか。そうだな。何もいがみ合う必要は無いんだ……！」

突然レジアスが立ち上がる。

「ゼスト、俺は決めたぞ！　俺はこの地上本部のトップに立つ！

そして、”目の前で助けを求めている人”を救えるようになる！
俺には魔導の力も無ければ後進の教育も出来ないが、局の地位ならば俺でもとれる！　そして、海と地上を繋いでみせる！」

そう高らかに言うレジアス。その目には、あくなき明日への希望に満ち溢れていた。

「フ……。なら俺は、この地上本部一の使い手となって、お前を支えてみせよう。先祖から受け継いだ俺の力、お前のために使えるならば本望だ」

「言うなゼスト。なら今夜はその景気つけと行こうじゃないか！」

「あまり呑みすぎるなよレジアス。明日も仕事なんだからな」

「わかっているさ」

ゼストも立ち上がり、二人が拳を突き合わせる。互いに誓うために。

「「……二人の正義に！」」

「レジアス」

「……ゼストか」

二人が互いに誓いを立ててから、十数年の時が過ぎた。

「最近、なんだかやつれていないか？　ちゃんと休んでいるのか？」

「フン……心配には及ばん。お前には負けていられんからな」

「レジアス……」

ゼストは今ではもう、一部隊の隊長になっていた。教導者としても優秀な成績を残しており、既に何人もの優秀な魔導師を輩出している。いうなれば、順風満帆と言ったところか。

だがレジアスの方はと言うと、多少の昇進はあったものの、あまり芳しいとは言えない状況にあった。

次々に成功していく友人と、中々結果の出ない自分。レジアスの焦燥感は、日に日に積もっていた。

「そ、そうだレジアス！　俺の部隊に新しいやつが二人入ってな！　これがまた見所のある奴らで、ＤＳＡＡでも優秀な成績を――」

「――ゼスト。無駄口を叩いている暇があったら仕事をしたらどうだ？　失礼する」

そのせいだろうか。いつしか二人の繋がりは、だんだんと薄いものになってしまっていた。

ゼストの言葉を遮るように、レジアスは去っていく。

「……レジアス」

後には、いつの間にか変わってしまった友人を心配そうに見つめる騎士だけが残っていた。

「レジアス、お前、最近いい噂を聞かんぞ。何をしているんだ？」

「俺は今までと変わってはおらん。それに、お前には関係の無いことだ。ゼスト」

今や、レジアスは中将の地位にまで上り詰め、地上本部の実質的トップに立っていた。あの時誓った夢を、叶えた形になる。

だが、夢を叶えたレジアスの顔には、もう何年も笑顔が浮かんでいない。まるで、当時のレジアスが嘘であるかのように。

「ゼスト、お前……最近追っている事件が一件あったな」

「あ、あぁ……」

ゼストが追っている事件。それは、不当に命を弄び、生命を兵器に変える忌むべき研究。戦闘機人に関する犯罪だ。

つい最近、その研究施設の一つの場所が判明し、ゼストは隊を率い

て来週、そこに乗り込むことにしていた。

「お前には他にやってほしい案件がある。そちらの調査はこちらで手配する。お前は下がれ」

「レジアス、それはどういう――」

ゼストがレジアスに詰め寄ろうとする。が、その身体は不意に止まってしまう。

「命令だ。正式な命令は明日に追って下す」

レジアスがゼストに向けた視線。それはいつの間にか、友に対するそれではなくなってしまっていた。

視線に込められた怒気に怖じけづいたのではない。レジアスが向けてきたという”事実”に動揺していたのだ。

ゼストが止まったのを見ると、レジアスはその場から去っていった。

『……ナカジマ、アルピーノ』

ゼストが自身の部下であるクイント・ナカジマと、メガーヌ・アルピーノに念話をかける。

すると、何故か近くの柱から出てくるクイントとメガーヌ。どうやら、ゼストとレジアスの会話を立ち聞きしていたようだ。

「いやぁ～、その……メガーヌが気になるって言うから仕方なく……」

「なぁ！？　ノリノリで提案してきたのは貴女でしょ！」

何故か口煩く喧嘩を始める二人。だが、これでも二人はゼスト隊一のコンビネーションを誇る魔導師として、一目置かれていた。

二人の仲良さそうな口喧嘩に懐かしいものを感じながら、ゼストが自身の”決断”を伝える。

「例の件、突入捜査の予定を早める。……今夜には出立する。準備をしておけ」

「今夜！？　また急な……」

「……いいんですか？　さっき中将が……」

メガーヌが心配そうにゼストに問い掛ける。

「……いいんだ。これで……」

そして、事件は起こる。

「ぐ……ハァッ……ハァッ……」

「チッ、攻撃が……！」

相対する三人と三人。ゼスト、クイント、メガーヌの三人を中心とした部隊が突入したのは、予想通り戦闘機人の製造プラントだったのだ。

しかも成果はそれだけではなかった。既に稼動していた三人の戦闘機人――後にトーレ、クアットロ、チンクと名付けられる三人の捕捉に成功したのだ。

今いる場所はプラントの中枢とも言える、独立動力炉の前。もはや戦闘機人たちに退路は無い。

「アルピーノ……結界、まだ持つな？」

「はい！」

厳しそうな表情をしながらも、懸命に結界を維持するメガーヌ。この結界があることで、戦闘機人たちは今だ逃走出来ずにいた。

「４号！　結界の解析はまだなのか！」

「そんなこと言っても、解析したそばからナノ単位で構成が変更されちゃってて……」

４号、と呼ばれた、眼鏡をかけた戦闘機人が慌ただしくウィンドウを操作している。どうやら結界の破壊を試みているようだが、メガーヌとの実力の違いが出てしまっているようだ。

「隊長、私が切り込みます。トドメは――」

「任せろ。一撃で仕留める」

クイントとゼストの気配に反応したのは、長身紫髪の戦闘機人と、銀髪の少女のような戦闘機人。この二人が直接の戦闘要員のようだ。

だが、この場は明らかにゼストたちに分があった。戦闘機人たちはそこそこの戦闘経験を積んでおり、Sランク魔導師と一対一で戦おうと勝利出来るだけの実力はあった。

だがそれはあくまで”一対一”の話。しっかりとした連携が取れるゼストたち三人を相手にするには、まだまだ彼女達は経験不足だった。

「3号、4号を連れて後ろに！」

銀髪の戦闘機人が前に出ながら言う。その双眸が見つめるは、ほんの僅かにしか見えない”勝利”への道。

この窮地を脱するには、相手三人、全員を倒さなければいけない。硬い前衛拳士、1番の実力者らしき隊長、厄介な後衛。どれか一つが欠けようとも大きく戦況が変わるわけではないことを、銀髪の戦闘機人は理解していた。

（まず狙うは後衛……いや、隊長格か？　だが隙を見せれば前衛に落とされる……！）

「行くぞ！」

「はい！」

タイミングを計っていたクイントとゼストが、銀髪の戦闘機人に向かって走り出す。また同時に、メガーヌもサポートのために前へと動く。

「ぐ……！」

その時、銀髪の戦闘機人は自身のすぐ右にある動力炉に目をつけた。動力炉と言うだけあり、仮にこれが爆発すればかなりの衝撃が発生するはずだ。それを利用すれば或いは……。

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

銀髪の戦闘機人が、自身の固有武装であるナイフを動力炉に投げ付ける。その瞬間、動力炉に不可思議な光が満ち――――

――彼女達は知らなかった。この動力炉の中心に使われている鉱物の正体を。

後に吉谷吼太が発見する鉱石、魔溜石と名付けられるそれが使われているということを――

光が消えた時、その場にクイントの姿は無かった。

あったのは、身体の7割が消失したゼストの遺体と、全身から血を流す銀髪の戦闘機人、腹部が大きく膨れ上がったメガーヌと、それらを呆然と見つめる他二人の戦闘機人だけだった。

「くそがァッ！」

自室のデスクに、叩き壊さんとする勢いで拳を打ち付けるレジアス。

「あの大バカモンが……！　俺の命令をちゃんと聞いていればあんなことには……！」

レジアスの前に表示されているウィンドウ。そこには、ゼスト隊が不慮の事故により全滅したということが、事細かに記されていた。

また、レジアスはスカリエッティからも「ゼストは死んだ」と聞かされていたのだ。ここまで情報が揃ってしまえば、友の生存が有り得ないことなど、嫌でもわかる。

「……お前がいなくなったら、一体誰が俺の夢を……正義を支えてくれるというのだ……」

嗚咽を押し殺しながら、レジアスは通信ウィンドウを開く。相手は、スカリエッティ。

『どうしたのかな？　ゲイズ中将。デートのお誘いなら大歓迎だよ』

「……頼みがある」

これは偽善。ただの独りよがりな我が儘。そう理解していながらも、レジアスはそれをする決意を固めていた。

「アイツを……ゼスト・グランガイツを、人造魔導師として蘇らせてくれないか……」

「俺はあの日確かに死に、お前の指示で生き返った。だからこそ、俺は知りたい。戦闘機人計画の協力者……それは本当にお前で間違いないか？」

「……あぁ」

どこか疲れた様子のレジアスが肯定を返す。

その顔には笑顔も、怒りも無い。

「……俺はずっと悔しかったんだ。お前と共に戦えないことが。魔法の力が無いことが……」

顔を俯かせ、レジアスが自身の本心を明かし始める。

「形はどうであれ、力があるならその人は自力で幸せになることが出来るんだ。だが力の無い者は、ただただ祈ることしか出来ない。俺には、それが我慢ならなかった……」

「……お父さん」

生まれて初めて聞く父の弱音に、言葉を失うオーリス。

「ならせめて、その祈る対象を増やしたかった……。魔導師の資質とは関係無い、全く違った”力”。それがあれば、皆はもっと幸せになる。そう思っていたんだ……」

「……レジアス」

俯き、震える友の肩に手をかけるゼスト。

「……お前は力を求める先を間違えたんだ。いくら頼る対象が増えたところで、他人任せでは自分も、自分が救いたいものも救えはしない。俺も、お前を救えなかったように……」

「……ゼスト」

ゼストがレジアスの肩から手を離し、上を仰ぐように見る。

「そうだ。俺はいつも弱く、遅かった。決意が弱かったせいで部下の未来も、自身の命も失い、決断が遅かったせいで友を間違った道に進ませてしまった」

今度は、俯いて床を見つめるゼスト。

「そうだ、俺はいつだって遅かった……」

――――ガギィン！

「……一回ぐらい、間に合ったところで……神も文句は言うまい……違うか？」

ゼストが突き出したガングニール。その先には、今にも鋭い爪をレジアスに突き立てようとしていた、オーリスの秘書の右手があった。

「そんな……いつから気づいていた！？」

動揺からか、今までの姿が剥がれ落ちるように素顔が明らかになる。今まで桃色の髪のように見えていたものが金色の髪に変わり、その服装は地上部隊のものから戦闘機人のそれへと変わる。

戦闘機人ナンバー2、ドゥーエ。そのＩＳ、ライアーズマスクの能力は、”偽装”。自身の意思で自在に姿を変えられる能力だ。ただし、あくまで偽装であるために体格や技能までは真似られない欠点が存在する。

「貴様が戦闘機人であることを、ワシが見抜けないと思ったかヒヨッコめ。地上部隊を率いる者ならば、その全員の顔とプロフィール

は全て覚えておくものだ。当然、その利き手もな」

レジアスが振り返り、ドゥーエを見据えながら話す。

「お前が化けていた局員……アイツは左利きだ。数年前に怪我をしてからというもの、右手ばかりを使っていたものだから、殆どの奴らは右利きと勘違いしていたようだがな」

「……ッ！」

技能までは真似られないライアーズマスク。その欠点を克服するための方法は二つ。一つは単純に新しい人物に成り、データを偽造してあたかも元からいた人物のように振る舞うこと。これならば技能を真似る必要が無いため、かなり安全に潜入することが出来る。ただし、時間をかけて地位を確保しなければスパイとしての役割を果たせないということもあり、短期間で情報を入手しなければならない時には使えない方法でもある。

そしてもう一つは、潜入先の誰かに成り代わり、可能な限りそれを真似ること。これには事前のしっかりとした調査、条件に合致する人員の確保、偽装後も行動一つ一つに注意を配らねばならないなど、かなり厳しい条件が課せられる代わり、上手くいけば短期間で必要な情報を入手することが出来る。

オーリスの秘書が選ばれたのはただの偶然だが、それを知った時ドゥーエは内心喜んだものだ。レジアスに近づくのに、この上ない立場の人間だったのだから。

とはいえ、ドゥーエも誰が対象だろうと完璧になりきる自信はあった。両利きとして生まれてきたドゥーエならば、右利き、左利きの

どちらだろうと違和感無く行動出来るからだ。ライアーズマスクのこともあり、行動の違和感さえ無くせばバレることは無い。そう考えていた。

だが、そこに盲点があったのだ。あまりに完璧すぎる、故に負傷した動きとは思えないような動きをたびたび垣間見せてしまっていたのだ。レジアスほどうたぐり深い人間が気づかないわけがない程に。

「くっ……だがまだ手はある！」

ドゥーエが、ガングニールに貫かれたままの自身の固有武装、ピアッシングネイルから手を外す。

「ＩＳ、ライアーズマスク……アップグレード！」

ドゥーエがそう叫んだ瞬間、ドゥーエの身体が変化していく。そう、体格でさえも。

そして現れたのは……

「俺か……」

「戦闘機人め……今度はゼストに化けおったか」

「……化けただけではないぞ」

ドゥーエが変身したゼストが、本物のゼストに組み付く。

そしてゼストは気づく。ドゥーエの筋力が、力の入れ方が、体重移動の仕方に至るまでが、自身と同じになっていることに。

ライアーズマスクのアップグレード。それは偽造を超えた偽造。世界そのものから存在の情報を収得し、自身に適用することでその人そのものへと完全に変貌するのだ。

身体能力、クセや体格はもちろん、臓器の位置やＤＮＡ、性格に至るまでの変化。もはや偽造というよりは、模造と呼ぶべきだろう。

「ぐ……」

だがしかし、ただ同じになるだけなら打開策にはならない。それはドゥーエとて理解していた。それでもなおドゥーエがゼストに変身した理由。それは――

「がぁ……」

「ゼ、ゼスト！」

本物のゼストの腕から血が噴き出す。肉体の崩壊が進んでいる証拠だ。

ドゥーエとてバカではない。わざわざ不利になるような条件まで模倣するほど義理堅くやる必要もないのだから。

ドゥーエが変身したのは、存在情報から導き出した”考えうる、最高の状態のゼスト”。対して、肝心のゼスト本人は既に満身創痍。最盛期よりも強いであろう自分自身に、勝てる道理などなかった。

「あぁ……そんな……」

絶望に飲まれかかっているレジアスが、ゼストに手を伸ばす。だが、その手が届くことは……無い。

「……いいことを思い付いた」

だが不意に、ドゥーエはゼストを解放してしまう。地面に倒れてしまうゼスト。

ドゥーエはゼストから離れ、壁に刺さったままのガングニールに歩み寄る。

「お前自身の愛機を以って、お前を殺してやろう」

そして、ガングニールを手にとるドゥーエ。

「ぐ……貴様ぁ……！」

ガングニールを持つドゥーエ。だがその愉悦に歪んだ顔に、一瞬だけ何か違うものが浮かんでいたことに気づく者は、誰ひとりとしていなかった。

## 第百五十一話　ムカシのハナシ（後書き）

ドゥーエのアップグレードが一足先に公開。残るはトーレとウーノだけ。一応、ＳｔＳの中で出し切れそうです。

ゼストさんの過去話。レジアスさんの気持ちなどが続いてます。まさにオッサンカーニバル！↑

さて、ゼストさんがレジアスさんの死亡フラグを叩き折りました。燃エテモイイノヨ？↑

ボーゲンフォルムの新技、シンゲファルケン。まぁ、ぶっちゃけボーゲンフォルムでシュランゲなわけですよハイ。あまり弓使わせても、ねぇ。

ちなみに、ファンストでシグナムの技の威力は――

ヒーアヘッズフォルムでの紫電一閃＞シュツルムファルケン

という感じになってたり。剣の騎士だし。まぁ射程はどうしようもないですけどね。

さて、次回でシグナム&ゼスト編は終了になります。
ちなみにここらへん一帯の話は全て、並行しながら起こってることになってます。シグナム&ゼスト編の今はちょうど、フォワードたちがアームドアップ発動した辺りです。出来れば各編3話ずつに収めて、上手く時系列を成立させたいですね。

あ、それともう一つ。数日前から活動報告にて『クリスマスネタをやるかやらないか』という質問をしていまして、目標の票数を獲得したのでやることにしました。
そこで質問なんですが、流れ的に最新話に入れるのは気が引けるので、過去の時系列に組み込もうと考えています。
で、聞きたいのが、『どの時系列のクリスマスネタが見たいか』というものになります。下記の中から選んで下さい。

1：A's篇終了直後（小学生での話）
2：別名（？）中学生編のGrowth篇
3：StS篇序盤（ヴィヴィオ登場前）
4：StS篇中盤（ヴィヴィオ登場後）

と、まぁこんな具合ですね。無印であるＢｉｒｔｈ篇とＡ'ｓ篇が無いのは、Ａ'ｓ篇は最終決戦がクリスマスで、無印はＡ'ｓ篇の半年前という設定だからです。ご了承下さい。

出来れば内容のリクエストも聞きたいところですが、とりあえずはアンケートのほうをお答えいただければと思っています。ご協力をお願いします。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十二話　その刃《おもい》、烈火の如く（前書き）

久しぶりに７０００文字強。恐らく中々に読みやすい量かと。

宣言通り、今回でシグナム編は終了です。

# 第百五十二話　その刃《おもい》、烈火の如く

Ｓｉｄｅ　三人称

頭を抑えるアギト。だが一向に自身が斬り裂かれた感触がない。

まさか本当に痛みも何も無く逝けたのか？　そう思って目を開ける。

そこには、レヴァンティンを振り切った態勢のシグナムがいた。やはり剣は振るわれていたらしい。

ならば何故自分は斬られていないんだ？　アギトは不可思議な現象に疑問を抱いていた。

「……どうした？」

シグナムがレヴァンティンを鞘に仕舞いながら言う。

「お前……私を斬ったんじゃ？」

アギトが聞くと、シグナムは口元に僅かな笑みを浮かべる。

「私は元より話すために来た。その結果戦うことになるかもしれんし、その障害となるものは全て斬るつもりだ」

「なら……！」

「まだわからんのか？」

シグナムがアギトの後ろを指差す。

怪訝に思いながらも振り返るアギト。そこで、シグナムが言っていることを理解した。

「私のバリアが……！？」

「障害は取り除かせてもらった。……自信作だったのなら、あっさり斬られて不満だろうがな」

シグナムがアギトの横を通り過ぎる。

「……行かないのか？」

振り返り、アギトに問い掛けるシグナム。

――アギト、お前は……私も……として……――

（ッ！？）

不意にアギトの脳裏を走った映像記憶。それは、アギトに残された”理想のロード”の姿と同一のもの。そして同時に、目の前にいるシグナムとうりふたつでもあった。

（じゃああれは……あの人は……この騎士だってのか……？）

「……アギト？」

「ぁ……な、なんでもねぇよ！」

先程の記憶から逃れようとするかのように、ゼストの元へと飛んでいくアギト。

シグナムも少し疑問に思ったようだが、今気にすることではないと判断し、アギトの後を追って走り出した。

「旦那ぁ！」

アギトが本部長室に突入すると、そこでは異様な光景が広がっていた。

バインドによって封じられたレジアスとオーリス、そしてガングニールを眼下のゼストに突き立てようとしているゼスト。

アギトに続いて入ってきたシグナムも、その不可思議な光景に言葉を失う。

「……アギトか。ちょうどよかった」

ガングニールを持つゼストがアギトに声をかける

「旦那が……二人？　なんで！？」

「俺が抑えているコイツは、戦闘機人が化けたものだ。アギト、ユニゾンでコイツを焼き殺すぞ」

「……あ、あぁ」

アギトがガングニールを持つゼストにユニゾンをする。

ユニゾンによって髪は鮮やかな黄色になり、バリアジャケットのカラーにも黄色が追加される。

「アギト」

『あ……た、猛れ炎熱、烈火刃！』

アギトの力がガングニールへと伝わり、焔が燈る。

「死ね、偽物よ！」

そしてガングニールが、倒されたゼストに――

『シュランゲバイゼン！』

「ぐぅ！？」

突如として割り込んできた連結刃に、弾き返されてしまうゼストのガングニール。

『テメェ……また邪魔すんのか！！』

「邪魔、か。……確かに私は邪魔をしたな。”ゼストに化けた戦闘機人”の邪魔をな」

『な……!?』

「……証拠があるのか？　俺が偽物だという証拠が」

「無い」

ガングニールを持つゼストの問いに、何故か堂々と答えるシグナム。

「言うなれば騎士の勘だ。とはいえ……私はこれでも勘が外れたことはあまり無い」

「話にならんな。そこをどいて貰おう」

「断る」

シグナムがシュベルトフォルムに戻ったレヴァンティンを構える。

「待て」

しかし、そこである人物が割り込んでくる。

ゼストだ。先程まで倒れていたゼストが、両腕から血を流しながら立ち上がったのだ。

「……奴のケリは、俺がつける」

「……」

無言で譲るシグナム。ゼストとゼストが再び、相対し合う。

「まだしらばっくれるようだな、戦闘機人」

ボロボロのゼストは答えない。

「もはや弁明する気にもならんようだな。ならば……！」

ゼストがガングニールを振りかぶる。

そこで、ゼストが語りはじめる。

「……ガングニール、お前に意思があるのは知っている。聞いているんだろう？」

不意に、ゼストの動きが止まる。ガングニールが空中で動かなくなってしまったのだ。

「貴様……何を！？」

「お前は、俺が生き返ってからは一度も口を聞いてくれなかったな」

動揺しているゼストを他所に、ボロボロのゼストが話を続ける。

「多分、死んだ俺を主としていたお前からすれば、今の俺は主と認められないんだろう」

ボロボロのゼストが近づくにつれ、ガングニールを持つゼストの顔

が恐怖に歪んでいく。

ガングニールから手を離せば逃げられるのだが、混乱している今の彼――もとい、彼女にはそれが思い付かないのだ。

ゼストがドゥーエの傍に立つ。

「……この一度だけでいい。言うことを聞け！　ガングニール！」

『エクスプロージョン！』

次の瞬間、ガングニールから焔が発生し、ドゥーエを包み込んだ。

もはやドゥーエの顔は恐怖に歪み、変身も解けてしまう。

また、変身が解けたことにより、ドゥーエとの融合率がかなり低いアギトも強制的に融合解除される。

「旦那……旦那……私……私……」

「……アギト」

よもや自分の恩師を間違えたとは思っていなかったアギトは、震えて涙で顔をグシャグシャにしながらも謝罪しようとする。

だがゼストはそんなアギトを決して責めたりはしなかった。

「今一度、お前の力を貸してはくれないか？」

「うん……うん！」

アギトが紫色の光になり、ゼストへと融けていく。

そこで不思議なことが起こった。

普段なら黄色に染まるはずの髪とバリアジャケットが、燃えるような橙色へと変化したのだ。

それは、ゼストとアギトとの融合率が限りなく１００％に近づいた証。身体が崩壊する寸前、まさにギリギリの状態で起こったこの現象は、奇跡と呼ぶに相応しいだろう。

「何なのよ……何なのよあなたは！！」

恐怖に戦くドゥーエが、悲鳴のように言う。

「俺か。俺は……」

ガングニールのカートリッジがロードされ、炎熱がガングニールに宿る。その炎熱は、普段の数百倍もの密度になっていた。

ゼストがそれを、ドゥーエに向けて振り下ろした。

「……何でもない……そう、ただの夢破れた……情けない男だ」

ドゥーエの身体が崩れ落ちる。

一部始終を見守っていたシグナムが、ドゥーエの確保に向かう。

そう、普段より遥かに強い力を使いながらも、ゼストはドゥーエを殺さなかったのだ。力量の高さ故か、はたまたゼストの覚悟がドゥーエの”死の運命”すら捩曲げたのか。

『やったな旦那！　流石は旦那だよ！』

「……」

『……旦那？』

アギトの声に応えないゼスト。

そして不意に、ゼストは地面に倒れ込んでしまう。

また同時に、アギトも強制的に融合を解除されてしまう。

「旦那……どうしたんだよ……旦那……旦那ァ！！！」

アギトがゼストの身体を揺すりながら声をかけるが、返事は無い。

呼吸はあることから死んではいないようだが、その呼吸すらあまりに弱々しい。

度重なる無理に加え、文字通りの自分との戦い、そして常識を超えたユニゾン。間もなくゼストの命は尽きようとしていた。

「アギト……アギト……どこにいる……？」

「旦那……もう目が……。……旦那！　ここだよ！　ここにいるよ！」

アギトが先程以上に涙を流しながら言う。

「……ルーテシアを、メガーヌの娘を……助けてやらねば……」

「ルーテシアは保護されたとのことです。スカリエッティも既に逮捕されております」

シグナムがゼストに言う。

「……シグナムと言ったか……？　最期はお前のような騎士と闘って果てたかったのだが……それも、叶わぬようだな」

「旦那ぁ……何弱音吐いてんだよぉ……」

シグナムがゼストの近くで腰を下ろし、その手をとる。

「……貴方の騎士としての覚悟、確かに見届けました。闘うまでもなく……私の負けです」

「……そうか。”向こう”で部下たちに自慢出来そうだ。真正のベルカの騎士に認められた……とな」

ゼストが安らかな表情になる。痛みや苦しみすら感じなくなってしまったのだろうか。

「ふざけんなよ……旦那ぁ……お願いだから逝かないで……死なないでくれよぉ……旦那ぁ！！」

「いいんだアギト。俺は満足している。それに元々俺は死人。死人が土に還るのは当然の摂理だ……」

「旦那ぁ……」

アギトとて、もう何をしようとゼストを助けられはしない。何より、ゼストがそれを望んでいないことは理解しているのだ。だが、それでもと考えてしまう。

「アギト……お前には最期まで迷惑をかけてしまって……済まなかったな」

「旦那……」

アギトが「そんなことはない」と否定しようとするが、嗚咽に飲まれて上手く話せない。

「レジアス……地上を……俺達の正義を……希望を……よろしく頼んだぞ……」

「……あぁ」

ドゥーエが気絶したことにより、彼女のバインドから解放されたレジアスが、厳格な表情で応える。

「オーリス……レジアスはあぁ見えて詰めが甘い。なんとか……支えてやってくれ……」

「……はい」

同じく解放されたオーリスも、ゼストを見ながら返事を返す。

「シグナムといったか……アギトを頼む……。人間の欲望に振り回され、自分のロードすら見失ってしまったかわいそうなやつだ……お前なら……」

「……この剣に誓って」

シグナムが、鞘に収めたレヴァンティンを掲げながら誓う。

「アギト……まだそこにいるか……？」

「いるよ……ここにいるよ！」

アギトがゼストの手をしっかり掴みながら応える。

「ルーテシアに伝えてくれ……お前といた時間、存外悪くなかったと……」

ゼストの手から、力が無くなった――

「旦那……旦那ぁぁぁ！！！」

アギトは身体を震わせ、押し殺すように泣いていた。
その傍らには、中身の無くなった服があるだけ。
死体すら残さず、天へと還ったゼスト。だが、何一つ残さなかったわけではない。
レジアスが、今度こそ主を失ったガングニールを手に取る。
「……俺も、嘆いている暇はなくなってしまったな」
「お父さん……」
オーリスがレジアスを気遣い、慰めようとする。
だがレジアスはオーリスが行動に移る前にオーリスの方を振り向く。
「何をしているオーリス三佐！　現在の戦況、情報の整理、人員の配備……やることはいくらでもあるぞ！」
「は、はい！」
慌ただしく部屋を出て行くオーリス。それを見たシグナムも、部屋を出ようとする。
だが、アギトは動かない。ゼストの居た場所で、ただ泣いているだけだ。
シグナムはアギトの元に歩み寄り、アギトを強引に抱え上げる。

「な……は、離せ！」

「騎士ゼストからお前の世話を任されたのでな。お前には悪いが、私と一緒に来てもらうぞ」

それに――と言葉を繋げるシグナム。

「あの場でお前が泣きつづけているのを、騎士ゼストが望むわけがない。……違うか？」

シグナムの言葉を聞いたアギトがハッとする。

「行くぞ。ガジェットはまだまだいる。あいつらも倒さねば、市街地に被害が出るんだ。引きずってでもお前には協力してもらう。お前が泣き虫だろうと関係なく、な」

「な……バカ言うな！」

アギトがシグナムの腕をすり抜け、シグナムの前に浮遊する。

「旦那が言ったことだから……お前に協力してやる！　だけど、もしお前が旦那を裏切るような真似をすればァ……」

アギトの視線に怯むことなく、シグナムはアギトを見つめ返す。

「その時は、お前の焔で私を焼き殺せ」

差し出されるシグナムの手。

アギトを見つめる、真っすぐなシグナムの目。そこに覚悟を感じ取

ったアギトは、差し出された手を取った。

アギトの力が炎となり、シグナムに襲い掛かる。この炎を受け入れられるかどうかで、融合率は大きく変化する。

アギトの心を表す、身を焦がすような熱い炎だ。いくら炎を扱う騎士だとはいえ、シグナムも熱いものは熱い。

だが不思議と、シグナムはその炎を受け入れることが出来た。

地上本部付近の上空。そこに彼女はいた。

彩度の落ちた桃色の髪はあたかも炎のように風で靡き、服はより高い温度を示しているかのような青紫色に。篭手の色は金色で、さながら太陽を思わせる。

バリアジャケットの上着が無くなり、代わりに背中からは二対四枚の炎の翼が盛んに燃え盛る。

そしてリボンの形もまた、元のそれからは変化している要素の一つだった。

「……来たか」

空を焦がすような熱量を放ち続けている女性――シグナムが、その眼を開く。

その目線の先には、二種類の集団があった。

一つはガジェット、もう一つは転生者。

『総数４０００……いや、まだ増える』

シグナムとユニゾンしているアギトが、シグナムにそう伝える。

「……少ないな」

『ハァ!?　お前バカか？　それともアホか!?』

シグナムの感想に信じられないといった反応を返すアギト。だがシグナムは別に、状況を理解せずに宣っているわけではなかった。

「少ないさ。……お前と一緒ならな」

シグナムの言葉を聞いたアギトの脳裏に、何かが走る。

――少ないさ、お前と一緒なら――

『ッ!?　また……』

「アギト?」

『な、なんでもねぇ！　行くぞシグナム!』

『ボーゲンフォルム！』

レヴァンティンが弓となり、シグナムが魔力で矢を作り出す。

『炎熱加速、爆散付加！』

シグナムがつがえた矢にアギトの炎が宿る。その力は、リインフォース？が与える力の数倍にも及んでいた。

「駆けろ、隼！」

『シュツルムファルケン！』

シグナムの掛け声と共に、レヴァンティンから矢が放たれる。

空を切り裂きながら突き進む矢は転生者たちの隙間を縫うように飛んでいく。やがて、転生者の群れの中心に到達する。その瞬間、突如巨大な炎が発生し、転生者たちを纏めて焼き尽くした。

爆散付加により、広域攻撃に変化したシュツルムファルケンだ。とはいえ、その威力は凄まじいの一言。転生者の群れはあっという間に一掃されてしまった。

『猛れ、炎熱……烈火刃！』

『シュランゲフォルム！』

シュランゲフォルムへと変形したレヴァンティンに、熱き焔が宿る。

自在に動く連結刃は時にミサイルを迎撃し、時にガジェットを破壊

する。

だが、ガジェットの数は一向に減らない。次から次へと送り込まれて来る増援は止むことを知らず、やがてシグナムを完全に覆ってしまう。

「……囲まれたか。レヴァンティン一本では足らないな……」

『ならコイツを使え！　シグナム！』

シグナムの左手に炎が現れる。その炎の使い方を、シグナムは直感的に理解した。

「剣閃烈火！」

『火竜……』

シグナムとアギトの声に呼応するように、炎が伸長していく。だが一定を超えた瞬間、炎は圧縮されて棒状に変化する。それはさながら、刀のように。

さらにレヴァンティンにも炎を纏わせ、身体の前で両腕を交差させる。

そして、シグナムとアギトは両手の剣を――

『「一閃ッッッ！！！」』

十字に振り下ろした。

伸長する二本の刃が、追随する炎が、ガジェットを斬り裂いていく。

シグナムが両手を振り切る頃には、現れたガジェットは全て破壊されていた。

だが、それほどの力を出して尚、シグナムもアギトも驚いたりはしていなかった。まるで、”それが当たり前だと以前から知っていた”かのように。

「……何故、だろうな……」

シグナムが、空を仰ぎながら呟く。

「お前とのユニゾンは、不思議と心が暖かい……」

『う……うぅ……』

「……アギト……？」

いつの間にか泣き出しているアギトを、気遣うシグナム。

だが、アギトは苦しみや悲しみから涙を流しているわけではなかった。

『……なんでも……なんでもねぇよ……なんでもねぇのに……』

二人は感じていた。自らの埋まらなかったものが埋まった感覚。ようやく見つかった探し物。

互いに昔の記憶が無いために、もしかしたら過去に会ったことがあったのかもしれない。その時に一緒に闘っていたのかもしれない。

二人は分からなかったが分かっていた。ようやく、巡り会えたということを。

だが、感慨に浸っていた二人を、通信コールが現実に引き戻す。

シグナムが通信ウィンドウを開く。通信をかけてきたのはルキノのようだ。

『シグナム二尉！　ご無事ですか!?　……その姿は……?』

「心強い協力者が出来たものでな。どうした?」

通信ウィンドウに映っているルキノの表情が、すぐに変わる。表情から察するに、あまり喜ばしいことではないようだ。

『緊急事態です！　ガジェットが――』

ルキノが言い切る前に、シグナムの後ろにガジェット?型が現れる。

『シグナム、後ろだ!』

「ハァッ!」

振り向きざまにガジェットを斬り裂くシグナム。

だがその瞬間、ガジェットは今までの数倍にも及ぶ爆発を起こす。

『チッ、ふざけたことを……！』

アギトが咄嗟に張ったシールドが、爆裂したガジェットの破片を防ぐ。

しかし、何故かそのシールドがボロボロになっていく。

『な……く……！』

アギトがより力を込めるが、力及ばずにシールドが破られてしまう。

「させるか！」

シグナムがレヴァンティンを振り回し、ガジェットの破片を破壊する。なんとか全ての破片を打ち落とし、一息つくシグナム。

『やっぱり……』

「ルキノ、これがお前の言いたいことか？」

『はい。ガジェット・ドローン各機の内蔵エネルギーが通常時の１０倍に上昇し、さらに内部の液体がガジェット表面に染み出しています。そのせいでガジェットの性能が上昇、加えて破壊すれば――』

「巨大な爆発と、ＡＭＦの付加された金属片が周囲にばらまかれる……」

『あの変態ドクター、こんなふざけた機能をつけてやがったのか！何が『人はなるべく傷つけないように』だ！』

アギトが怒りを露にする中、シグナムは違った見方をしていた。

そう、このガジェットの性能強化は、倒されることが前提になっているように感じる。だが、それでは非効率的だ。あのスカリエッティならば、”ガジェットを減らさず、魔導師を傷つけず制圧する”ためのシステムを先に考えるはずなのだ。

今までの反応全てがフェイクという可能性もあるが、それならそれでもっとえげつないガジェットを作ったほうが早いし効果的だ。

何より、今までのガジェットをそっくりそのまま利用しているのが引っ掛かる。まるで、スカリエッティ以外の誰かの意図が絡んでいるかのような。

「……アギト、ガジェットを片っ端からたたき落とす。防衛部隊の出番が無くなるぐらいにな。キツイ戦いになるが……大丈夫か？」

『ハッ、烈火の剣精をなめんなよ！　楽勝だ！』

「そうか、なら……往くぞ！」

紅焔の翼をはためかせ、空を飛翔するシグナム。

彼女は感じていたのだ。この事件が、このまま素直に終わってくれないことを。

## 第百五十二話　その刃《おもい》、烈火の如く（後書き）

そんなわけで、ガジェットが強化。元ネタはグレンラガンのムガン。ウェンディも以前やってましたが、今回のはガジェットがばらまく破片にＡＭＦがあるという危険仕様。えげつない。ちなみに現時点で――

フォワード：ヘリに乗ってゆりかごに向かっている。ライトニングはフェイトの元へ

シグナム：本編参照

フェイト：スカリエッティ、トーレ、セッテを撃破。地上のガジェット生産装置の解除を開始。

ゆりかご組：今だ戦闘中（詳しくは秘密）

といった時間軸になっております。

次回からはフェイトＶＳスカリエッティ組。スカリエッティが変態なんで、ギャグになるかも。いや、多分なる。きっとなる。フェイトに罵られたい人達はフェイト編最終話は必見かもよ！↑

それと皆さんに報告です。

これから私はクリスマス企画の小説の執筆に移ります。またその後に控えている元旦企画も続けて書くつもりです。

なので、次の本編の更新は来年になるやもしれません。予めご了承下さい。

尚、クリスマス企画、元旦企画共に中学生時代――則ち、Ｇｒｏｗｔｈ篇の部分に掲載されます。この小説初の、”話と話の間に新話が割り込む”形での更新となりますので、お間違えの無いよう。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十三話　本拠地《アジト》へ（前書き）

なんとかクリスマス記念前に完成ー！

しっかしまぁ、アレですね。割り込み投稿と予約投稿を併用出来るようにしてほしいです。クリスマスとかお正月とか忘れないようにしないと……。

# 第百五十三話　本拠地《アジト》へ

Ｓｉｄｅ　三人称

ガジェットがまた一体、鉄クズへと成り果てる。

聖王教会のシスター、シャッハ・ヌエラはシスターらしからぬ実力を持つ騎士だ。彼女にかかれば、ガジェットなど有象無象に過ぎない。

「おっと」

その後ろで、緑の長髪を靡かせてガジェットの攻撃を回避する男性。本局直属査察官にして古代ベルカの希少技能（レアスキル）継承者、ヴェロッサ・アコースだ。

その希少技能（レアスキル）、無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）は魔力で作られた犬に似た存在を自在に操ることが出来る。高度なステルス性と機敏な動きを兼ね備えているため、普段は探索や捜査に使われているこの魔法だが、魔力の塊でもあるためにやろうと思えば戦闘も可能。

無論、特別戦闘に秀でているわけではないが、ガジェットに遅れをとるほどでも無い。無数の猟犬がガジェットを破壊していく。

だが、二人がいかに優れた力を持つ騎士であろうと、数の差は簡単には覆せない。多少ガジェットが破壊されようと、二人が囲まれている状況に変わりは無かった。

「く……しつこい！　せっかくスカリエッティのアジトを突き止め

たのに！」

「突き止めたからこそだと思うけどね。……とはいえ、このままじゃちょっとだけマズいかな……」

ヴェロッサは元々戦闘をこなすような”戦士”ではない。故に体力の面でシャッハに遥かに劣っていた。もしヴェロッサが戦闘不能になりシャッハ一人になってしまえば、この場を脱するのは確実に不可能になってしまうだろう。そうなる前になんとかしておきたい――それが、ヴェロッサの考えだった。

そこに、二人が待ち望んでいた援軍が現れる。

「伏せて！」

鋭い声にいち早く反応したシャッハとヴェロッサはその場にしゃがみ込む。

それと同時に、やってきた人物は自身のデバイスを振るう。

『ジェットザンバー』

伸長した黄金の剣はその場にいたガジェットを全て斬り裂き、破壊してしまう。逃げたりＡＭＦによる防御すら赦さない早業。これだけの速度を出せる人間は早々いない。

「お二人とも、怪我はありませんか！？」

ガジェットの大群を一網打尽にした魔導師――フェイトがヴェロッサたちの側に降り立つ。

「大丈夫。お蔭さまでね」

「しかし流石ですね、フェイト執務官。あれほどのガジェットを一撃でなんて」

「い、いえ。それほどでも……」

フェイトが微かに赤くなる。少々照れているようだ。

だがすぐにその表情は引き締まる。既にこの場はスカリエッティの縄張り《テリトリー》。いつ、どこから、どんな攻撃が来たとしても珍しくはない。

『サー、7時方向から数名の接近を確認しました』

バルディッシュが正体不明の存在が接近してくることを察知し、フェイトに知らせる。

そして現れたのは、数人の男女。いずれも、フェイトたちからすれば赤の他人。

だが、現れた一団からすれば、フェイトたちを知っているどころか欲してすらいる存在。そう、転生者だ。

「見つけた見つけた、武闘派シスター見ぃつけた……！」

「うっひょー！　マジモンのフェイトさんだー！」

「……あら、イケメン」

「「「……はぁ？」」」

何やら奇妙な台詞を喋りだした一団をどう対処していいか分からず、困惑するフェイトたち。

だが、男の一人が素早くシャッハに近づき、その身体から生やした”何か”でシャッハを攻撃したことで、状況は変わる。

無言で”何か”を迎撃するシャッハ。ヴィンデルシャフトで弾いてなお、それは何らダメージを受けていないように感じる。

「そんな強気のシスターを力で捩伏せるのって、なかなか面白そうだなぁ……！」

眼鏡の奥に覗く狂気。シャッハは悟る。「これは、冗談抜きでヤバイ相手」だと。

また、シャッハが攻撃を受けたのと同時に、女性も赤い鎧を装備し、ヴェロッサに接近してくる。

繰り出される二振りの刀を、間一髪で避けるヴェロッサ。避けきれなかった髪の毛の一部が宙に舞う。

「やれやれ……いきなり攻撃してくるのは少しばかり無粋なんじゃないかな？」

「話して分かる相手ではなさそうですね……。フェイト執務官、ここは私たちにお任せ下さい！」

シャッハがカートリッジを取り替えながらフェイトに言う。

「そんな！　だったら私も――」

「――ここであの方たちを相手にするのは、確かに貴女にも出来ます」

フェイトの言葉を遮り、シャッハが話す。

「――ですが、スカリエッティと決着をつけるのは、貴女にしか出来ないはずです」

シャッハに言われ、改めて自分の役割を思い出すフェイト。その顔にはやがて、決意の表情が浮かぶ。

「行って下さい！　そして、決着を！」

「……はい！」

フェイトが低空飛行で、スカリエッティのアジトに突入しようとする。

「させるかよ！」

先程シャッハを攻撃した男が、再び不可視の触手を伸ばし、フェイトを捕まえようとする。

『ハスタームーブ』

だが、触手がフェイトの躯を縛るより早くハスタームーブを発動し、

フェイトはスカリエッティアジトへと突入していった。

「さて、往きますよロッサ。しっかりついて来て下さいね」

「おいおい、子供扱いは止めてくれっていつも言ってるだろ？」

どんなときでも変わらない、シャッハとヴェロッサの会話。それは、互いの緊張をほぐすという効果を発揮し、二人を常に守ってきた。

「そうですね……まぁ、少し男らしくなったのを確認出来たら、考えてあげましょう」

「おっ……なら頑張らないとね」

ヴェロッサがやはり飄々とした態度で応える。

二人の戦いが、今始まった。

しかし、彼らは――一緒に来ていた転生者たちでさえ――忘れていた。この場に、フェイト萌えの男性が一人いたことを。

その彼はというと……

「……え？　このアニメって、フェイトとなのはが百合ん百合んするアニメなんじゃ……同人誌じゃ……」

自分が持っていた情報との食い違いに困惑していた。

「はぁぁぁぁッッッ！！！」

フェイトの振るう神速のザンバーが、アジト内部に展開していたガジェットたちを次々と破壊していく。

一体が黄金の刃に斬り裂かれ、爆発四散する頃には既に他のガジェットが破壊されている。一瞬の内にガジェットは掃討されていく。

『サー、１１時方向からガジェット接近』

「まだいるんだ……一気に決める！」

フェイトがプラズマランサーの発射時に使用する魔力スフィア、プラズマスフィアを設置する。

だが、フェイトの狙いはプラズマランサーを放つことではない。

「雷光、一閃！」

フェイトが起動言語（スターティングキーワード）を発すると同時に、プラズマスフィアから落雷が発生する。

プラズマスフィアから発生した落雷は、フェイトが担ぐように振り

かぶったバルディッシュ・ザンバーの刀身に落ち、その雷のエネルギーを刃に蓄積する。

「プラズマザンバー……ブレイカァーーーッッッ!!!」

膨大なエネルギーの蓄積により刃はその形を失い、巨大な砲撃へとその性質を変える。

プラズマザンバーブレイカー。フェイトの持つ中でも有数の、高威力砲撃魔法だ。

通常は自然に存在している雲や空気から電気エネルギーを調達する、非常に強力な魔法なのだが、故に屋内では正式な使用方法が使えない。そのため、プラズマスフィアより小規模の雷を発生させることで、落雷の代用としているのだ。

プラズマザンバーブレイカーは、残っていたガジェット全てを巻き込み、通路の奥まで突き進んでいく。手応えあり。一先ずの安全は確保したと言っていいだろう。

『サー、お体に大事ありませんか?』

「大丈夫だよバルディッシュ。カートリッジもまだまだある。ライオットとソニックも使ってないし、ＡＭＦもそれほどキツくない」

フェイトがバルディッシュのカートリッジを入れ替えながら言う。

プラズマザンバーブレイカーの屋内使用は、プラズマスフィアを設置する関係上、必然的に魔力消費が通常より大きくなる。カートリッジもフェイト自身の魔力も決して無限ではないのだ。

「……魔力は、節約していかなきゃ」

フェイトに残されているカートリッジはあと、５セット３０発。あると言えばあるが、無駄遣いが出来るほど潤沢というわけでもない。

ザンバーフォームの維持に使う魔力はたいしたことないが、刀身を破壊されでもすれば、再構成にそこそこの魔力を使用することになる。故に、攻撃をザンバーで受け止めることはなるべく避けたい、というのがフェイトの希望だった。

その希望を達成するのに必要なのは至極単純。敵を即刻で倒すこと。敵に攻撃のチャンスを与えないこと。

だが次の瞬間、突如フェイトに重圧が襲い掛かる。

――いや、物理的な重圧ではない。〝飛行魔法の出力が低下した〟ために、そう感じただけだ。これが意味することはただ一つ。

「ＡＭＦが……強化された!?」

『そのようです』

飛行魔法の消費を抑えるために、着地するフェイト。

フェイト自身、魔力の量は一般より遥かにあるのだが、フェイトの才能は大魔力を消費するようなやり方に向いていない。過去にファランクスシフトを切り札としていたのも、最初から一発に魔力を集中させることがフェイトに向いていないと判断したリニスによる指示が理由だ。

それは現在でも変わっておらず、フェイトが近接戦闘を中心にしているのもそこに一因がある。

故にフェイトは飛行魔法に込める魔力を増やして対抗するのではなく、飛行そのものをやめることで無駄な魔力の消費を抑えたのだ。

「なのはやヴィータ、コータなら魔力増やして飛びつづけるんだろうなぁ」

『サー、貴女は貴女です』

「そうだね、バルディッシュ」

軽い応対をした後、フェイトは走りだした。

再び現れ始めるガジェットたち。そのガジェットを次々に斬るフェイト。

普段から高速戦闘をしているフェイトにしてみれば、ガジェットの動きなど止まっているも同然。いくら地上にいるからとて、当たることなど万一にもない。

というより、ぬるぬるした触手になど触れたくないのがフェイトの本音だった。

そう、この世界のガジェットはスカリエッティの趣味か、はたまたスカリエッティの変態性が乗り移ったのか、ビームの代わりにローションが発射され、マニュピレータとしての役割を持つケーブルは、男性器を彷彿とさせるヌルヌルのグロテスクな触手に変わっている

のだ。

世の中の9割の人間は、「自分が絡まれるのはゴメンだ」と答えることだろう。

「ハッ！　ハァッ！」

可能ならばザンバーではなく、ハーケンフォームを使いたい。だがフェイトにはそれが出来ない理由があった。

今だ姿を見せない戦闘機人。それを警戒しているのだ。ハーケンフォームは扱いやすいが、故に戦闘能力はザンバーフォームに一歩劣る。リミッターがあったとはいえ、以前はザンバーフォームでも負けてしまった相手だ。ハーケンフォームでは力不足と考えるのも当然だろう。

ましてや今回はフィニアがいない。油断は許されない。

少し進んでいくと、開けた通路に出た。横はもちろんのこと、天井も充分に高いため、空戦をするとしても大丈夫だろう。

「ここは……？」

だが、逆を言えばそれだけの大きさが必要ということ。スカリエッティのアジトにある、それだけの大きさを誇るものなど一つしかない。

奥から、何か巨大なものが歩いてくる。天井ギリギリまで伸びた砲塔、通路一杯の巨体。ガジェット・ドローン?型と呼称されているガジェットだ。

「……ハッ」

だが、次の瞬間にガジェット・ドローン?型は破壊されてしまう。

一瞬の内にザンバーで斬り裂いてコアを露出させ、そこにプラズマランサーを撃ち込んで破壊したのだ。

「やはりガジェット共では話になりませんか」

ガジェットが現れた通路の奥から、二人の人影が現れる。

ナンバーズ3、トーレ。ナンバーズ7、セッテ。

フェイトの表情が険しくなる。

とうとう、来た――

一方、フェイトが侵入し、シャッハたちが戦っている入口とは反対方向に、二人の女性が立っていた。

「ここなの?」

「はい、間違いありません」

肩口に切られた青い髪とレインコートのような服を持つ少女。長い艶やかな髪をポニーテールに纏めた、男性の情欲と女性の羨望を集めてやまない躯を持つ女性。

そう、ユニゾンデバイスであるリームと、摩訶不思議かつ最強無敵なインテリジェントデバイス、フォーティトゥード・スピリットの人間体だ。

スカリエッティのアジト襲撃作戦。実はこの作戦は二面作戦だったのだ。

吼太がスカリエッティのアジトに行き、なんらかの理由で拘束されたことは容易に想像がついた。単純な思考しかしない吼太が、ヴィヴィオを追って行くとしたらスカリエッティのアジトぐらいなものだからだ。

と、なれば吼太がいるのはアジトかゆりかごのどちらかということになる。だが、ゆりかご浮上直前だったあのタイミングで、吼太のような不安要素を、軌道上に到達していないために無敵ではないゆりかごに運び込むとは思えない。

なら吼太はまだアジトにいるはず。そうはやては踏んだのだ。

前方からはフェイトや聖王教会の精鋭といった面々を向かわせ、敵の目をそちらに向けさせる。

それと同時に、トゥードとリームの二人が反対側から侵入。吼太を復活させて一挙制圧できればそれでよし。先にフェイトが制圧してもよし。吼太とスカリエッティが共にいるなら、合流すればよし。

そして二人は無事、指定のポイントにたどり着いていた。

「……で、どう入るの？」

リームがトゥードに聞く。

そう、反対側から侵入すると決めたのはいいのだが、もともと反対側には出入口などない。だがトゥードが「お任せ下さい」と自信満々に言うので、リームも従ってみることにしていたのだ。

リームの言葉に答える代わりに、トゥードは何処からかドアを取り出す。ごくごく普通の、片開きのドアだ。

それを岩壁に立てかける。

さすがに意味が分からず、首を傾げるリーム。

トゥードはそんなリームなど気にも止めず、ドアノブに手をかける。そしてそのまま、ドアを引いた。

岩壁に立てかけたドアを開けたとて、あるのは岩壁。そのはずだ。

だがトゥードは「そんな常識、無意味です」と言わんばかりの現象を引き起こしていた。

開いたドア。そこから、スカリエッティのアジト内部が顔を覗かせていたのだ。つまり、いつのまにかドアが内部と繋がっていたのだ。

重ねて言うが、トゥードが使用したのは”ただの”ドアである。

そんな摩訶不思議な現象を目の当たりにしたリームは――

「ここにいるのかな～？」

何故か全く動じていなかった。普段から一緒にいるために慣れてしまったらしい。トゥードもトゥードだが、リームもリームである。

何はともあれ、内部に侵入することに成功した二人。

「どうやらここは資材庫のようですね」

トゥードが周りを見ながら言う。周囲にはくず鉄やガジェットのものらしきパーツが散乱している。今は動いていないが、鉄を熔かす炉もあるようだ。

ざっと見回したが、トゥードのセンサーにもリームの展開した探索魔法にも、それらしき影は見当たらない。時間を無駄に浪費するわけにはいかないので、部屋を出るためにドアに近づこうとした。その瞬間、リームの直感が”何か”を捉えた。

「そこッ！」

リームから放たれた冷気が、リームたちの背後にあったくず鉄の隙間に入り込む。

冷気が何かを捕らえることは無かったが、冷気を慌てて避けた”その存在”は、ある致命的なミスを犯してしまっていた。

則ち、足音。

「……敵ですね。恐らくは戦闘機人かと」

「トゥード」

リームが辺りを警戒しつつ、トゥードに話し掛ける。

「ここは僕に任せて、先に行ってて」

「……理由をお伺いしたいのですが」

トゥードの質問に、リームは不敵な笑顔で答える。

「集まってる情報からすると、このアジトにいる戦闘機人は近接格闘の人、ブーメランの人、ここにいるはずの擦り抜ける戦闘機人。あと……正体不明のスカリエッティの側近。一人なのか、二人いるのかは知らないけど、正体不明の相手は僕としては止めときたいんだよね～」

「つまり、厄介事は任せた……ということでしょうか？」

「そゆこと……凍れっ！」

リームは話しつつも飛んできた手榴弾を凍らせ、砕いて防御する。さすがに今まで吼太と共に戦ってきただけあり、その手際には美しさすら感じる。

「まさか……出来ないとは言わないよね？」

リームの分かりきった質問に、トゥードは珍しくも苦笑しながら答

える。

「――畏まりましたリーム様。ですがそちらも早く済ませて頂けますでしょうか？」

「誰に向かって言ってるの？　僕を誰だと思ってる！　ってね」

それを聞いたトゥードは部屋から素早く飛び出す。

「逃がさな――ッッ」

慌ててトゥードの行くてを遮ろうと飛び出すセイン。だがセインが追い付くより速くトゥードは部屋から出ており、扉は既にしまっていた。

すぐに抜け出ようとディープダイバーを発動するセイン。だが、その瞬間に扉が凍り付く。

「僕を無視するのはいけないんじゃない？」

夢を与える者、リーム。彼女の戦いが始まる。

トゥードが廊下を疾走する。途中に現れるガジェットはその全てが、トゥードの放つ威圧によって破壊される。

そしてトゥードはその勢いのまま、目の前に現れた曲がり角を真っ向から破壊した。

「……ずいぶん荒々しい登場ね」

その奥には、壁を突き破って現れたトゥードを見て尚、僅かな油断すら見せない戦闘機人がいた。

淡くウェーブのかかった長髪、スカリエッティとよく似た眼。

戦闘機人、ナンバーズの指揮官にしてスカリエッティのもう一つの頭脳。

Ｎｏ．１、ウーノ。

「礼節を重んじる場合ではないと判断致しましたので。……戦闘機人、Ｎｏ．１　ウーノ様で間違いないですね？」

「そうだ、と言ったら？」

ウーノが空間に浮かんだ、鍵盤にも似たキーボードを操作しつつ聞く。

「そうですね……わかりやすく言うなら――」

トゥードが拳を構える。

「叩き潰して差し上げます」

曇りの無いトゥードの目線が、ウーノを射抜く。

だがそれでも、ウーノの余裕の態度は崩れなかった。

## 第百五十三話　本拠地《アジト》へ（後書き）

はい、そんなわけでＶＳスカリエッティ編の組み合わせが判明。

フェイトＶＳトーレ、セッテ

シャッハＶＳ転生者　男

ヴェロッサＶＳ転生者　女

リームＶＳセイン

トゥードＶＳウーノ

……自分で書いてて、どうしても思ったこと。

……ウーノ逃げて！？　超逃げて！？　そのお方に逆らっちゃいけないよ！？

いくらアップグレードがあのドゥーエより強いったって、せいぜいチートクラスなんだから！　トゥードとガチで戦っちゃらめぇぇぇっ！！！

ちなみにフェイト萌えのあの人。戦闘能力は全くありません。目的はフェイトがなのはと百合ん百合んしてるのを見てニヤニヤすることが目的です。何故転生したし。

……あぁ、そうそう。今回の話から吼太の出番が来ると思った方。残念ながら勘違いです。ヤツの出番はまだまだ先です。

次回はほぼ確実にクリスマス記念かと。本編は、時間が許して、かつ筆が進んだ場合のみ年内に更新するかも。基本的には来年になると思います。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十四話　ＺＥ☆Ｎ☆ＲＡ！（前書き）

文字数ちょい少なめな代わりに、クリスマス前に更新。区切りがいいとこにしたらこうなりました。なんで手抜きじゃないです。一応。つまらなくてすみません。

タイトルがアレな意味にしかとれない人。貴方は正常です。

# 第百五十四話　ＺＥ☆Ｎ☆ＲＡ！

Ｓｉｄｅ　三人称

ヴェロッサが高速で振るわれる刀を、紙一重で避けていく。

ヴェロッサが相手にしている女性。その力はＩＳ（インフィニッ）、紅椿（あかつばき）を装備するというもの。

管理局法から見れば明らかに質量兵器であり、違法なのだが、彼女がそれを気にしている様子はない。まるで、管理局法そのものを知らないかのように。

そう、その女性は転生者なのだ。転生した理由は至極単純。”彼氏探し”だ。

前世で恋愛出来ずに結婚、寿命を迎えて死んだ彼女。他の人間から見ればそれほど不幸には見えないものの、彼女にとってはそれが不満だったのだ。

「強いわね貴方。私、惚れちゃいそう」

「それはどうも」

以前、飄々とした態度を崩さないヴェロッサだが、その内心は決して穏やかなものではなかった。

素早く振られる刀。その剣閃は鋭く、当たれば良くて気絶。当たり方が悪ければそのまま両断されてしまうことをヴェロッサは感じ取

っていた。

だが、それ以上にヴェロッサを悩ませていたのは、ヴェロッサ自身の魔導資質だ。

ヴェロッサの持つ希少技能（レアスキル）、無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）は探索及び奇襲向き。正面切って戦うのには向いていない。同時に、ヴェロッサの資質そのものもおおよそ戦闘向きとは言えない。やはり、出来て奇襲程度のものだ。

目の前の転生者はそれなりの実力しか持たないために対処は難しいものではないが、決定打を持たないヴェロッサに、勝利の可能性は無いに等しい。

「可能性があるとしたら……」

横目にシャッハのほうを見るヴェロッサ。シャッハの放つ一撃であれば或いは――

「隙あり！」

「うわっ！？」

僅かながら気が抜けていたヴェロッサを襲う刃。だが寸前でなんとか回避する。

「気を抜くヒマがあるのかしら？」

「無い、みたいだね。全く……僕の周りには気の強い女性ばかりが集まるようになってるらしい」

ヴェロッサが猟犬を数頭出す。その眼光は、先程よりも遥かに鋭い。

「とはいえ、気の強い女性の相手は慣れているんだ。負けるわけにはいかないな」

「貴方のその余裕の態度……崩させて貰うわ！」

女性が左の刀を振ると、その刃からエネルギーが放出され、”飛ぶ刃”となってヴェロッサに襲い掛かる。

今までと同じく、紙一重で避けるヴェロッサ。だが、今回は今までと違うことが一点あった。

「……ん？」

ふと女性が左後ろを見る。そこには、ＩＳが持つ特殊障壁、シールドに喰らいつく猟犬がいた。

「くだらない！」

一刀の元に猟犬を斬る女性。猟犬は魔力となり、霧散してしまう。

ヴェロッサとて、こうなることは分かっていた。むしろ、猟犬を倒されることは魔力を無駄に消費することに繋がるため、可能な限りは避けなければならないはず。

だが、ヴェロッサの顔には一筋の諦めも浮かんではいなかった。

「行け！」

ヴェロッサがさらに何頭かの猟犬を呼び出し、女性に向かわせる。

「こ……の！」

だが、やはりその全てが破壊されてしまう。そして、新たな猟犬を作り出すたびに減少していくヴェロッサの魔力。

明らかに押されているのはヴェロッサだと言うのに、女性の顔に余裕は存在していない。

一目見ても分かるほどの愚策。そんな策しか取れないほど、目の前の男性――ヴェロッサ――は無能なのか？

女性が警戒を含めた目線をヴェロッサに向ける。その顔は、やはりいつも通りの飄々としたものだった。

「ハァァァッ！」

シャッハが、眼鏡をかけた転生者の男に飛び掛かる。が、そのシャッハの身体を、〝見えないナニカ〟が叩き飛ばす。

空中で体勢を立て直し、着地するシャッハ。こういったやり取りが、

先程から何度も繰り広げられていた。

シャッハは聖王教会のシスターであり、また同時に一流の騎士でもある。故に、無策に突撃することの愚かさなど痛いほど理解していた。

だがしかし、シャッハには転生者の男が繰り出す攻撃の正体を知る術が無かった。故に、無策のまま攻撃するほかなかったのだ。

だがしかし、今までの行動の全てが全くの無意味というわけではなかった。攻撃を繰り返す中で分かったこともある。

まず、意識の向いていないような場所――死角からの攻撃には反応が遅いことから、自動で動いていること。

形状不明、材質不明だが、ヴィンデルシャフトで防ぐことが可能だということ。

そして、本体とも言える男性自体はそれほど強くないこと。

「一撃……一撃さえ当てれば、勝てる……！」

しかし、その一撃を当てることがどれほど困難なのかも、シャッハはよく理解していた。

「ほらほら！　次いくよ！」

眼鏡の男性が再び、見えない何かをシャッハに向けて伸ばす。視線から攻撃の着弾地点を見切り、回避するシャッハ。

先程までシャッハがいた地面は、その何かによってズタズタに斬り裂かれた。

さらに連続で回避行動をするシャッハ。次々と斬り裂かれていく地面。

シャッハはわずかにだが焦っていた。自分には遠距離攻撃手段が一切無いため、近づけなければマトモな戦いにすらなりはしない。だというのに、近づくための手段が無いのだ。

シャッハがもつ異能魔法である、物質透過――これにしても、賭けに近い。もし透過出来なければみすみす相手の間合いに入り込むことになる。

ロッサの無限の猟犬なら、或いは――

だが、シャッハ以上に焦っている者もいた。シャッハと対峙している、眼鏡をかけた転生者だ。

彼の能力……それは”殺気”に形を与え、自在に操作出来るようにするというもの。

転生する前の彼は、全てを憎み、全てを殺そうと暴れていたような人間だった。その手で殺した人間は数知れず。

ただ、殺すばかりで証拠を消そうとしなかったためにすぐに正体がバレ、瞬く間に刑務所へと送られることとなった。

殺しが出来なくなった彼はまるで魂が抜けたようになり、あっという間に衰弱していった。

そして、やがて死に至る瞬間。彼は”何者か”の声を聞いた。

その声に導かれるままにこの世界へと転生を果たしたのだ。

その声は彼に言った。「一つだけ、言うことを聞いてもらうよ」と。

それが、聖王教会シスターであるシャッハ・ヌエラの殺害だった。

彼に与えられた情報は、容姿と戦闘スタイルに関する情報のみ。アニメなど見ていなかった彼は、今だにこの世界がアニメの世界だということに気づいていない。

それでも武闘派シスターという通称を言ったのは、シャッハがよほどシスターらしくないという証明なのかもしれない。

とにかく、そういった経緯から彼がシャッハを狙うことになったのだが――

「くそ……言うことを聞け！」

男性が忌ま忌ましげに呟きながら、必死に”殺気”を操作する。

無理もない。人間、殺気を武器のように操るなどという奇妙なこと、そう簡単に出来るわけがない。ましてや対魔導師経験も何も無しに挑んでいるのだ。相性がよくなければ一瞬で葬られていることだろう。

上手く操れないために殺気が集中せず、隙が生まれる。その隙を正確に掴み、回避するシャッハ。

だが、やはりこの場において不利なのはシャッハの方だ。男性がまだ能力に慣れていないからこそ回避が成功しているだけであり、男性が完全に制御したとき……シャッハの命運は尽きる。

現に先程までは打撃しか出来なかったというのに、今では斬撃が出来るようになっている。このまま時間が経てば、間違いなくシャッハは死ぬ。

だからこそシャッハはタイミングを計っていた。自身の唯一最後の策を実行に移すタイミングを――

「あ～もう！　ちょろちょろするなぁ～！」

無理だって。そうセインは考える。

物に溢れたこの部屋は、セインにとって非常に有利に働く。相手の行動は阻害され、自分の行動範囲はむしろ広がっている。

部屋の中央で地団駄を踏んでいる魔導師――リーム――はノーヴェみたいなパワーファイターではないために、資材が破壊されること

も無い。その上、彼女の力は【氷】。物質透過能力であるＩＳ（インヒュレート・スキル）、ディープダイバーを持つセインにとっては相性良いこと、この上無い。

あとは隙を突き、近づいて身体の中に爆弾を埋め込む。それで終わりだ。アップグレードも必要無い。

「それじゃ、ちゃっちゃと片付けてみんなを助けに……っと」

飛んできた魔力弾を避けるセイン。魔力弾が着弾した箇所が凍り付く。

無駄口叩いてるとやられちゃうかな？　そう考えながら移動を始めるセイン。

一見して、あまりたいしたことないように見えるリーム。情報によれば絶対零度すら超えた冷気を放てるらしいが、それとてアップグレードを発動すれば無意味。

リームが、今度は見当違いの場所に魔力弾を撃ち込む。

そこでセインはふと気づく。

（……室温が下がってきてる？）

度重なる魔力弾による攻撃。それにより発生した氷。”何故か溶けない氷”により、部屋の熱が急速に減って来ていたのだ。

だがセインは取るに足らないことと判断し、何の対処もすることは無かった。

後に、それが致命的なミスに繋がるとも知らずに。

トゥードに襲い掛かる、幾多もの砲撃と斬撃。

片手で弾き返すものの、そこから反撃に移ろうとはしない。

「私を叩き潰すんじゃなかったかしら？　拍子抜けね」

ウーノがヘヴィバレルを構えながら言う。その周囲には多数のヘヴィバレルや、炎帝状態のライディングボード、担い手のいない、アップグレードツインブレイズやガンナックルが浮かんでいた。

一見すれば分かるほどの異常事態。それはウーノのＩＳ（インヒュレート・スキル）、不可触の秘書（フローレス・セレクタリー）。そのアップグレードの力によるものだ。

その力は、スカリエッティの秘書であり、もう一人のスカリエッティとも言える彼女が、ナンバーズ最強とされる由縁。

知識の加速。情報の操作。それらはアップグレードにより”世界”を超える。

世界、そして世界の記憶（アカシックレコード）への直接のクラッキング、それの自在操作。

それが彼女の力だ。

彼女にしてみれば、因果も法則も、全てが彼女の手の内にあるも同然。例え転生者が相手であろうと、彼女の敵ではない。

彼女にかかれば、自分を含めたナンバーズ全員のＩＳ及びそのアップグレードを使うこととて何ら難しいことではない。

そう、トゥードが今相手にしているのは、世界の全てといっても差し支えない。

「……」

無言のまま、ウーノを観察しているトゥード。その態度が、ウーノの怒りを掻き立てる。

「まだ諦めていないのね。ならこんなのはどうかしら？」

ウーノの側に魔法陣状のテンプレートが顕れる。そして、テンプレートから一人の女性が顕れた。

「……」

トゥードの表情がわずかに揺らぐ。それも仕方ないことだ。

現れたのは……トゥードだったのだから。

「さて……果たしてどちらの貴女が勝つのかしらね」

ウーノが出したトゥードが拳を構える。どうやら、見た目や能力は同じでも、思考は違うらしい。その視線が、本物のトゥードを敵と認識していることは容易に想像がついた。

トゥードの果てなき強さ。それが、トゥード自身の首を絞めようとしていた。

Ｓｉｄｅ　フェイト

飛んできたブーメランをザンバーで弾く。

今この場にあるブーメランは４。以前より少ないのは、もう一人の活動を阻害しないように。

「ハァァァッ！」

凄まじい速さで迫り来る戦闘機人、トーレ。彼女も強い。マトモに喰らえば、こっちがやられる。

「バルディッシュ！」

『サンダーアーム』

左手の篭手に魔力を込め、トーレの拳を受ける。

「隙ありです。ＩＳ発動、スローターアームズ」

――――ッッ！？

トーレの攻撃を防いだことにより、一瞬だけど足が止まってしまっていた。そこをこの場にいるもう一人の戦闘機人――セッテ――に突かれたみたいだ。

腹部に鈍痛が走る。バリアジャケットは貫かれなかったみたいだけど、代わりにキツいダメージが残る。

気づくと地面へと落下しかけていた。なんとか体勢を立て直し、着地する。警戒のためにプラズマスフィアを設置することを忘れない。

右側にはブーメランを構えたセッテ。左側には私を追って着地したトーレ。

ＡＭＦが重い……。早くこの二人を倒して、先に進まなきゃいけないのに……。

いっそ、一気に振り切る……？　でも、それを許してくれるほどこの二人は甘くない。

かといって、ソニックを使って反撃を喰らったらそこで終わり。ライオットは魔力消費が激しすぎる。

ここを終わらせたら他のみんなの援護にいかなきゃいけないし……、下手に消耗するわけにはいかない。

何より、スカリエッティがいないこの場で、全ての切り札を切るわけにはいかない。

あの変態のことだ。何を用意しているか分かったものじゃない。

と、そこにウィンドウが開く。

映っていたのは、憎きスカリエッティ……！　ついでに半裸。

『ご機嫌ようフェイト・テスタロッサ執務官』

「出たな変態！」

『失敬だね。ここは言わば自分の家。〝勤しんで〟いて、何が悪いというのかね？』

どうやら半裸ではなく、全裸のようだ。ますますただの変態にしか見えない。こんな変態があれほどの才能を持ってるなんて……。世界は理不尽だと思う。

『さぁ、そんなことは放っておいてこのベッドにおいで。私の隣はちゃんと開けてあるよ！』

「うるさい！　黙れ変態！」

思わず声が大きくなってしまうけど、正直あの変態だけは嫌悪感しか感じないんだから仕方ないと思う。

「だいたい、あなたのせいでどれだけの人間が迷惑を――」

『私がやっていることはあまり決して人を傷つけることが目的なわけではない。僕の子供達はまだ不器用だから、つい怪我させちゃうみたいだけどね』

「……詭弁もたいがいにしろ！　なら何故、戦闘機人のせいで死んでいる人がいる！？」

「君が理解するには、あまりに難しいことだよ……フェイト執務官」

その声は今までと違い、トーレの後ろから聞こえた。

……あれ？　トーレの後ろから？

……

……

……

……嫌な予感しかしない。

気のせいか、セッテは呆れたように俯いているし、トーレに至っては頭を抱えている。

「降臨、満を辞して！」

とうとう、スカリエッティが現れた。

……案の定、全裸で。

「「「キャアアアアアアアアア！！？」」」

私たち三人の悲鳴が通路に響く。

「おいおい、そんなに感動しなくてもいいじゃないか！　ＨＡＨＡＨＡ！」

「してません！」

「だから早くその粗末なモノを隠して下さい！」

セッテとトーレが悲鳴のように叫ぶ。仕方ないよね。うん、仕方ない。

これがコータだったら、私もう大興奮なんだけど。

「さて、君は私を逮捕しに来たのかい？」

「……あ、当たり前だ！」

「そうかそうか……。しかし、残念だがその要望に応えるわけにはいかないね。私の知的探究心を満たすまでは、ね」

知的……探究心……？

「君も聞いたことあるだろう？　”アルハザード”の名を」

「ッ！？」

アルハザード……失われた文明。

過去、母さんが目指していた場所。スカリエッティのルーツがある場所。

「僕は生まれた時から知りたいことがあった。――それは、この世界のルーツ」

スカリエッティが話し始める。全裸のまま。

「だって、不思議じゃないかい？　なぜこの世界には魔力素という、物理法則に関わらない物質が存在するのか。何故この世界には、僕らを知っている人間がいるのか。何故この世界には、”テンセイシャ”がいるのか」

……テンセイシャ？　何の話……？

「……っと、今のは失言だったね。聞き流してくれたまえ。とにかく、私は全てが知りたいのさ」

「……傲慢な……！」

「欲望は果ての無いものさ。君だってそうだろう？」

「……ぐ……」

確かに、コータへの性欲は自分のことながらすごいとは思ってるけど……。

「そういうことだ。だが同時に、君は欲望を抑えこみがちでもある。――故に」

スカリエッティが右手を動かす。

その瞬間、周囲に赤いエネルギー糸が現れる。
エネルギー糸を避けるため、再び飛び上がる。
「……っ！」
しかし、空中に踊り出ようとした私の身体が、何らかの影響で止まる。
見れば、私の脚に赤いエネルギー糸が巻き付いていた。私の行動が……読まれている？
さらに、構えたバルディッシュの刃にもエネルギー糸が巻き付いている。黄金の刃に輝が入る。
「そ……んな……っ！？」
やがて、ザンバーの刃は締め付けられ、破壊されてしまう。
さらにそこに、スカリエッティの放ったエネルギー弾を喰らってしまい、再び地面に落とされる。
今度は体勢を立て直しきれず、地面に激突してしまう。
さらに追い打ちをかけるようにエネルギー糸が現れ、まるで鳥籠のようになって私を閉じ込めた。
「――――故に、欲望を解放している私には勝てない」
スカリエッティは、その鋭い目線で私を射抜きながら言い放った。

# 第百五十四話　ＺＥ☆Ｎ☆ＲＡ！（後書き）

さて、タイトルを理解していただいたとこで。

……スカリエッティはどこまで行くんでしょうね？　全裸とかふざけないでほしい。

ウーノのアップグレードが公開。残りはトーレだけだったはず。次回の本編で確実に出ます。

ウーノのアップグレードはかなりチートです。世界に干渉出来ますから、自分の改造だって出来ます。ドゥーエのアップグレードの拡張版といったところでしょうか。

しかし、それでもトゥードが負ける様子が思い付かない。仕方ないね。

ちなみにシャッハが戦っている転生者の能力は、『はじめてのあく』という漫画にある能力です。まぁ、オリジナル解釈をいれてますが。

次回はほぼ確実にクリスマス記念かと。だって今日はＧＯＤ発売日だから執筆とか出来ないしー♪←

重ねて言いますが、クリスマス記念はＧｒｏｗｔｈ篇の話になりますので、１番最後の部分に新話として掲載されません。ご注意下さい。

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## 第百五十五話　解放せよ（前書き）

年明け前最後であろう更新。前回よりはちょい長め。

フェイト編最後ですね。

# 第百五十五話　解放せよ

Ｓｉｄｅ　三人称

スカリエッティの作り出した赤いエネルギー糸。それによって構成された檻は、今だにフェイトを封じ込めていた。

「く……！」

ザンバーの刃が折られている以上、刃の再構成が必要だ。だが、仮にザンバーを再構成したとして、このエネルギー糸を破れるかどうか。それだけの強度があることを、フェイトは見抜いていた。

「さて、執務官様。この檻からどうやって出るつもりかな？」

「……」

フェイトが辺りを見渡す。

目の前のスカリエッティ。その側に控えるトーレとセッテ。スカリエッティはともかく、他二人はそう簡単にはいかないことはフェイトも痛いほどに理解していた。

「……バルディッシュ」

フェイトの顔に決意が宿る。後々のことを考えて封じていた自身の切り札。その一つを切る覚悟を決めたのだ。

「ライオット……ドライブ！」

『ライオットブレード』

その機能が解放されると、フェイトの身体を猛烈な虚脱感が襲う。大量の魔力消費が発生したことにより、擬似的な疲労感を感じたのだ。

ライオットブレード。ザンバーフォームよりも刃を小型化すると同時に、高密度魔力により刃の外殻を形成することで、刃型ヴァリアブルバレットと言うべき状態にした、高出力刀刃形態だ。

だが、ヴァリアブルバレットと違って常時魔力を供給し続けねばならず、さらに現状のＡＭＦ下では魔力の消費はさらに跳ね上がる。これを使うことは則ち、フェイトに後が無くなったことを示す。

次、刃を砕かれれば負け。時間をかけすぎても、魔力が足らなくなって負け。

それだけのリスクを負うと分かっていても、ライオットを使わねばならない状況。フェイトの顔に、ことさら濃く焦りが浮かぶ。

「ハァッ！」

フェイトがバルディッシュを一閃する。すると、たちまちの内にエネルギー糸は斬り裂かれ、フェイトの身体が自由になる。

「なるほど。それが君の切り札か。なかなか強力そうだ。……だが、このＡＭＦ下では随分消費が激しそうだね」

スカリエッティが、その顔に笑みを浮かべる。

「尤も、私の精力はどんな状況下であろうと無限大――」

「黙って下さい。ドクター」

「がぶっ！？」

スカリエッティが全裸のまま、舞うような動きをし始めると、流石に目障りになったらしいトーレが、スカリエッティを殴って黙らせる。

「ふざけるのも、そこまでだ！」

スカリエッティが地面に叩き伏せられた瞬間、フェイトがライオットブレードでスカリエッティとトーレを纏めて斬ろうとする。

「……ＩＳ、ライドインパルス。アップグレード！」

だがしかし、目にも留まらぬスピードで放たれた斬撃は、トーレによってたやすく受け止められてしまった。

それも、スカリエッティを叩き伏せていた右腕で。

「な……！？」

あまりの事態に思わず、隙を作ってしまうフェイト。

そこにあの赤いエネルギー糸が再び現れ、今度はフェイトの全身を縛り上げた。

ライオットザンバーこそ砕かれてはいないものの、身動きもできないフェイト。

「くっくっくっ……驚いたかい？」

スカリエッティが笑いながら立ち上がる。全裸に加え頭から血をダラダラと流しながらではあるが。

「これが彼女、トーレの持つＩＳの力だよ。因果関係における、”因”と”果”。その隙間、”因”が発生してから”果”に至るまでの隙間に自分の起こした全てを押し込む能力さ。分かりやすく言うなら、因果関係が成立するより速く動ける……といったところかな」

「因果より速く……！？」

フェイトの表情が明らかに変化する。彼女も自身の速さには多少の自信を持っていたが、それを軽く上回る速度を提示されたのだ。驚くのも仕方ないだろう。

「博士、とりあえず服を着るか傷を塞いで下さい。目障りです」

スカリエッティにより能力の詳細を勝手に暴露されたせいか、殊更スカリエッティに冷たく当たるトーレ。それでも慌てていないのは、強者故の余裕なのだろうか。

「フェイト・テスタロッサ執務官。君のことはよく知っているよ。君の部下のエリオ・モンディアルと同じ、プロジェクトＦの遺産。アリシア・テスタロッサのクローンにしてプレシア・テスタロッサの失敗作（さくひん）」

スカリエッティは頭から血を流したまま、歌を歌うように話し始める。まるで、喜劇を語るように。

「君は常に恐怖しているのさ。自分の欲望が他人に迷惑をかけないかどうか。取り返しのつかないようなことになるんじゃないか。そう、君の母親、プレシア・テスタロッサのようになってしまうんじゃないか……違うかい？」

「うるさい……うるさい！」

スカリエッティに向かってプラズマランサーを数発放つフェイト。だがその反応は、スカリエッティの言葉を肯定しているに等しい。

そしてフェイトが放ったプラズマランサーも、スカリエッティが発生させたエネルギー障壁に防がれてしまう。

スカリエッティは尚も語り続ける。

「自分の欲望と他人への思いやりの板挟み――そんな中途半端な思いには、負けるわけにはいかないのさ」

「私の思いが……中途半端……」

「そうさ、君の思いは中途半端なんだよ」

フェイトの身体から力が抜けていく。今まで信じていたものが、塵へと変わっていく。そんな感覚がフェイトを襲っていた。

「私は……私は……」

もはや戦えない。そう誰もが考えていた。

だが、そこに一人の女性の声が響き渡る。

『この……フェイトのバカァーーーッッッ！』

突如として発生した大声に、不意を突かれる一同。

そしてその声は、フェイトの目の前に展開されたウィンドウから放たれていた。

「お姉……ちゃん……？」

フェイトが、震える声で呟くように言う。

『何うじうじしてんの！　そんなんじゃお姉ちゃん怒っちゃうぞ！』

ウィンドウに映る女性――アリシア――が、フェイトを叱り付ける。

「でも……私は……」

『”でも”も何も無いの！　そこの変態にちょっと言われた程度で何落ち込んじゃってるの？　そんなんじゃ、私もお母さんもフィニアもリニスもアルフも、心配で心配で何もできなくなっちゃうよ？』

「う……」

フェイトの目から涙がこぼれ落ちる。

『あの時の……私のため、お母さんのために頑張っていた時のあな

たはどこに行っちゃったの！？』

「あの時の……私……？」

『そう、必死になってジュエルシードを集めてた時……。あの時のあなたが今のあなたを見たら、きっと笑いすらしないでしょうね！　そんなあなたに構うほど、あの時のフェイトはあちらこちらを気にしていなかったもの』

もう、嗚咽しか洩れていないフェイトの口。顔はグシャグシャで涙もボロボロと溢れ出している。

『今のあなたは何のために戦う？　あなたの”やりたいこと”は、他人に迷惑をかけるような無茶苦茶なものなの？』

「私は……わた、しは……」

フェイトの頭を巡るのは、大切な人たちの顔。

機動六課のみんな、副官のシャーリー。

かけがえのない家族であるプレシア、アリシア、フィニア、リニス、アルフ。

好敵手であると同時に大切な仲間であるシグナム。それに、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、リインフォース姉妹。

何にも代えられない友達のはやて、アリサ、すずか、なずな、羽旺。

かわいいかわいいヴィヴィオ。

最高の親友であるなのは。

そして、自分が1番大好きな、男の子。

「わたしは……私は、みんなを……守りたい……ッッッ！」

『……うん。よく言ったね。偉いよ』

先程までとは打って変わって、優しげな表情を見せるアリシア。その顔は、苦悩している妹が見つけた答えに、この上なく満足したことがありありと現れていた。

『それじゃあ頑張れ愛妹（フェイト）！』

「うん……ありがとう、お姉ちゃん！」

フェイトの目に、もう迷いは無かった。

「ロッサ！」

「わかってる！」

シャッハの呼びかけに短く答えるヴェロッサ。

「だぁぁぁ！」

神速の勢いで振られる二本の刀だが、それがヴェロッサを捉えることは無い。だが、それも当然と言えるだろう。

何故ならば彼女は転生者であり、以前はただのごくごく普通の人間だったからだ。ＩＳの力も分からなければ、刀の使い方など全くといっていいほど知らない。転生の際に得られた身体能力があったからこそ、ヴェロッサを圧倒出来ていたに過ぎない。

「このっ！　このっ！　このっ！　当たりなさいよ！」

「それは無理な相談だな」

律義にも返事をしながら、ヴェロッサは魔力を練り上げる。

この世には、魔力の総量に関わらずに大規模の効果を発動出来る魔法が一つある。それが、集束魔法（ブレイカー）。

シャッハとヴェロッサの二人でバラ撒いた魔力は、既に十分な密度へと達している。これだけの魔力があれば、集束魔法の発動も可能であることは、魔法をかじったものならば容易に理解出来ることだろう。

「じゃあ、行くよ。みんな」

ヴェロッサが作った魔法陣に、展開されていた猟犬が”集束”され

ていく。

大気中の魔力を吸収し、現れたのは八つの頭と八つの尾を持つ狼。

「ウンエントリヒ・ヤークト・ブレイカー……八岐の地獄狼（アハトカップフ・サーベラス）。僕の切り札だよ」

サーベラスが転生者の女性を睨み付ける。その、どこまでも暗闇しか見えない瞳から覗くのは、”決シテ見エテハイケナイナニカ”。

「あぁ……うぁ……あぁぁぁぁぁぁ！？」

恐怖にかられ、サーベラスに挑みかかる女性。

しかし、この時の彼女の行動は決して間違ってはいなかった。

無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）はあくまで探索などの隠密行動が基本の力。ブレイカーにしたとて、その性質まで変わるわけではない。

故に、アハトカップフ・サーベラスは元の猟犬単体よりは強いものの、極端に強力というわけでも無いのだ。

だが、この場面でヴェロッサがサーベラスを出したのには、ちゃんとした理由あってのこと。無策のまま消耗の激しいブレイカーを出すほど、ヴェロッサは無知ではない。

「サーベラスは力は強くない。だけど――」

サーベラスが、転生者の女性に向かって走っていく。そして、女性が振りかぶった刀が振り下ろされる前に、その巨体を以って体当た

りを喰らわせる。

「――――質量なら！」

見て明らか程の質量差。女性が簡単に突き飛ばされてしまうのも仕方ないだろう。

そして女性は――

「くそっ……」

「ハァ……ハァ……！」

シャッハの口から、荒い息が洩れる。幾度となく繰り返された”見えない攻撃”に、ストレスが極限まできてしまっているのだ。

対する男性は、多少の苛立ちこそあるものの、まだまだ余裕のある風を保っている。

「この……いい加減に死にやがれ！」

「誰が……死ぬもんですか！　それに――」

不意に、シャッハの顔に笑みが浮かぶ。

「――私にばかりかまけていると、痛い目見ますよ？」

「一体何を――――ん？」

男性がふと、周りを見る。気づけば男性の周りには大量の犬型の魔力集合体がいた。

男性が猟犬に気づいたやいなや、男性に襲い掛かる猟犬たち。

「あ、こら！　ウゼェんだよ犬っころが！」

男性はまだ転生して間もない。故に、対多数における能力の使用が上手く出来ないのだ。

やがて男性は、能力でどうにか出来ない猟犬の攻撃を避け始める。

だんだんとシャッハから離れはじめる男性。

「くそ……いい加減死にさらせ犬っころがァ――ァァァッ！！？」

男性が何かをしようとするが、言い切る前に何故かその声が途切れる。

飛んできた何かによって、男性は派手に吹っ飛ばされてしまったのだ。

いくつもの木を薙ぎ倒し、ようやく止まる男性と何か。

「痛……テメェは！　邪魔はしねぇって言ったじゃねぇかクソアマ！」

「フン、飛んだ先にいるのが悪いのよ！」

そう、飛んできたのはヴェロッサと戦っていた転生者の女性だったのだ。

シャッハとヴェロッサは、途中であることを見抜いていた。

それは、”男性と女性は特別、仲間というわけではない”ということだ。

きっかけは、先程から離れた場所からこちらを見ていた最初いた三人の内の、残り一人。

最初は離れた場所から指示を出しているのかと思っていたが、あまりにも他二人の行動に統一性が無く、また彼自身もこちらを観察しているというより、ただ単純に怖いもの見たさに見ているようにしか見えなかったのだ。

そこから導き出された予想。一緒に現れたことから察するに、多少の話はしているかもしれないがそれでも、結託といったレベルではないこと、それを理解することも決して難しいことではないだろう。

そしてその予想通り、二人は互いに言い合っている。偶然を互いの責任にしようとなすりつけあっているのだ。

「猟犬はただ狩るだけじゃない。狩人のサポートだって、猟犬の領分なんだよ」

サーベラスと共に、ゆっくり歩いてきたヴェロッサが言う。

だが転生者の二人はヴェロッサにすら気づかないほどに、口喧嘩に熱中している。その二人にバインドをかけるヴェロッサ。

「なっ！？」

「くそッ！！？」

その場に縛り付けられ、動けなくなる転生者たち。

「さて、あとは頼んだよシャッハ」

「よくやりましたロッサ！　後はお任せを！」

ヴェロッサが上を見る。その瞬間、旋迅疾駆で空高く跳び上がるシャッハ。

空中でカートリッジを5発ロードし、ヴィンデルシャフトを構えるシャッハ。

彼女の持つ技の中でも、1番の得意技。ベルカ式攻撃魔法の基本にして極致。それに独自のアレンジを加えたもの。

その名を――

「烈風一迅ッ！！！」

旋迅疾駆に加え、さらに落下の勢いまで加えた強烈な一撃が、今放たれた。

巻き起こる大爆発。そして後には、半径１０ｍはあろうかという巨

大なクレーターと、気絶した二人の転生者が残っていた。

「……ふぅ」

ヴィンデルシャフトを待機形態に戻すシャッハ。と、不意にシャッハの身体がふらつく。かなり気を張っていたために、緊張が途切れてしまったのだ。

「っと」

すぐに駆け寄り、シャッハを支えるヴェロッサ。

「あ……す、すみませんロッサ……」

「気にしないで。それより、あの答え」

ヴェロッサがシャッハの顔を覗き込みながら聞く。

「あ～、はいはい。大人扱いの話ですよね？　まぁ少しなら――――」

そこまで言ったシャッハの口が、不意に塞がれる。

――ヴェロッサの唇によって。

「……ふふ。これで大人扱いってことで」

キスをして尚、普段と変わらない飄々とした笑顔を見せるヴェロッサ。逆にシャッハは激しく動揺していた。

「な、なななな……！？」

「あれ？　気に入らなかった？」

「ッ！？　……ロッサの……」

「ん？」

急に俯いたシャッハを不思議そうに見つめるヴェロッサ。

次の瞬間、シャッハはヴィンデルシャフトを起動し――

「バカァァァァ！！！」

全力でヴェロッサを叩き飛ばした。

「……初めてだったのに……。……全くロッサは……」

室温マイナス５０度。隅から隅まで凍り付いたこの部屋は、先程までは普通の資材置場だった部屋だ。それがこの短時間でまるで冷凍室のように凍ってしまっていた。

「ふむ……これぐらいかな」

この異常事態を引き起こした張本人であるリームが、地面を足で強く叩く。

すると、極限まで低温に晒されていた部屋の中の資材が、全て砕け散ってしまう。

それと同時に、唇を青くしたセインが現れる。資材が破壊されたことで、無理矢理引きずり出されてしまったのだ。

先程からリームは氷の魔力弾を用いて攻撃を行っていた。だがリームは、セインがそう簡単に倒せる相手でないことも理解していた。

セインの力は物質透過。凍らせても脱出されてしまうことは容易に想像がつく。リームとの相性は最悪と言っても過言ではない。

しかしリームは諦めずに、ひたすらに勝算を探し続けた。そして、見つけたのだ。戦闘機人が”人間でもある”という点を突いた戦略を。

それがこの状況を作り出していたのだ。

基本的に人間とは、極端な環境で生きていける生物ではない。生命体としての適応力が無いわけではないが、かといっていきなり草木も凍り付くような極寒の大地に放り出されて平然としていられるほど、人間は強靭な生物ではない。

それは、肉体の各種器官を機械に置き換えている戦闘機人とて例外

ではない。機械の部分は強くとも、人間の部位は温度の急激な変化に耐え切れなかったのだ。

「まだ、やる？」

リームが笑顔でセインに聞く。セインは返事をしなかったものの、戦意を失っているのは一目で理解出来た。

「さて、トゥードの方はどうなったかな～？」

「嘘よ……そんな……なんで！？」

先程までの余裕が嘘のように狼狽したウーノが、必死にウィンドウを操作する。

いくつもの魔法陣状テンプレートから現れるトゥード。

だが、そうして現れた、本物といっても過言ではない存在は、その先にいる修羅に片手で薙ぎ払われてしまう。

「そんな……あれはコピーなんて安いものじゃないのに……思考を変えただけの限りなく同じ存在を世界を使って創っているのに……」

自身に理解出来ない現象が起こっているためか、過去誰ひとりとして見たことが無いほどうろたえているウーノ。

そのウーノに向かってゆっくりと歩みを進める修羅（トゥード）。

「ウーノ様。貴女はいくつか思い違いをしておられるようですね」

世界が捩曲がりトゥードを潰そうとするが、逆に捩曲げる力がトゥードの放つ気配に粉砕される。

「まず、私と私をぶつければ引き分けには持ち込めると考えたこと。同じ私なのです。”情報”という過去から生み出された私が、今を生きる私に勝てないのは当然でしょう？」

無数のトゥードが再びテンプレートから現れトゥードに襲い掛かるが、今度は近づくことすら出来ずに破壊されてしまう。

「次に、上には上がいることを知らなかったこと。貴女は戦闘機人最強かもしれませんが、今の貴女では太刀打ち出来ないような存在がこの世にはごまんといます。こういうのを、とある世界の諺で”井の中の蛙、大海を知らず”と言うそうですね」

世界の全てがトゥードに襲い掛かるが、トゥードは身じろぎもしない。

ただ立っているだけ。歩いているだけ。なのに、ウーノはそれを止めることが出来ない。

「何より――――」

そしてとうとう、トゥードがウーノの目の前に立つ。

「――マスターを守れなかった私の”怒り”を、世界だ宇宙だといった程度の矮小なもので止められると、本気で思っていたのですか？」

「うわ……あァァァァ！！？」

トゥードが拳を振りかぶり、猛烈な勢いを以って振り抜こうとする。

トゥードの拳を、世界が”自身”に収めようとするが、その働きすら砕いて拳は進む。もはや、世界などではトゥードを止めることは敵わないのだ。

そしてトゥードの拳が――――

――ウーノの目の前で止まった。

既にウーノは気絶している。恐怖に駆られて能力を酷使したことで脳に負担がかかり、生存本能が強制的に意識をシャットダウンしてしまったのだ。

「……ふむ、少し遊びが過ぎてしまいましたか」

世界を徹底的に捩伏せ、叩き潰したインテリジェントデバイス、フォーティトゥード・スピリット。彼女がただのインテリジェントデ

バイスだと信じる者は、誰ひとりとしていない。

「バルディッシュ」

『ソニックドライブ』

フェイトのバリアジャケットが光に包まれ、形態を変化させる。

元よりあまり厚くなかった装甲はさらに薄く。

両腕に装備した篭手は防御のためではなく、得物への魔力供給の効率を上げるため。

バリアジャケットの防御能力を極限まで落とした形態。故に、使わない魔力の全てを速度へと回せる。

真・ソニックフォーム。フェイトの持つもう一つの切り札。護りを捨て、速さを求めた形態。

さらに、バルディッシュも一刀のライオットブレードから、二本のライオットザンバー・スティンガーへと変化を遂げる。魔力消費も当然増えているのだが、バリアジャケットへの魔力供給が最低限以下になり、その分が回されているためにフェイトの負担はむしろ減っていると言えよう。

「装甲が薄い。当たれば墜ちる！」

トーレが冷静に真・ソニックフォームの弱点を見抜く。

「ＩＳ、スローターアームズ、アップグレード！」

セッテがスローターアームズのアップグレードを使い、フェイトの腹部に直接ブーメランブレードを当てようとする。

だが、ブーメランブレードが現れた時には、既にフェイトの姿はそこには無かった。

「一体――」

どこへ？　そう言うことすら出来ず、セッテはフェイトのライオットザンバーによって斬られてしまう。

ハイパーハスタームーブ。自身の時間を歪ませることにより時間軸を切り替え、擬似的な加速を行うハスタームーブの完成形にして強化形。今のフェイトには、セッテのアップグレードによる攻撃を避けることなど、赤子の手を捻るよりたやすいと言えるだろう。

加えて、ライオットザンバーによる攻撃の凄まじさ。その攻撃力は二倍というよりは、もはや二乗の領域。戦闘機人といえども、マトモに喰らえば一撃で落とされる。

トーレもそれを理解し、さらに警戒を強める。

スカリエッティが、右腕に装備したデバイスを動かすと、再びあの

赤いエネルギー糸が現れ、フェイトに向かって伸びていく。だが、このエネルギー糸を以ってしてもフェイトを捕えることは敵わなかった。たちまち四散してしまうエネルギー糸。

「ドクター、お下がり下さい！　ライドインパルス……アップグレード！」

トーレがアップグレードを発動してフェイトを捉えようとする。だが――

（――追い越せない！？　いや、これは……）

トーレが因果超越の速さでフェイトに迫るが、ハイパーハスタームーブを発動したフェイトに追い付くことが出来ない。

そう、度を超えたフェイトの速さが、フェイトの作り出す物理法則が、トーレの超常法則を捩曲げたのだ。一定の線を超えた超常的ルールが物理法則を捩伏せられるならば、その逆も然別。

「ハァァァ！！！」

「うおぉぉ！！！」

だがトーレとて、わざわざ負けてやる義理は無い。ライドインパルスを限界まで駆動させ、フェイトに喰らいつく。

一撃当てれば勝てるのだ。勝利を目の前にして逃げるなど愚の骨頂。

だがしかし、トーレはわかっていなかった。フェイトの欲がどれだけ深いかを。

（……笑って……っていうかだらし無いっ！？）

そう、フェイトはニヤニヤと笑っていたのだ。どうやら妄想しながら戦っているらしい。変態である。

「ふざけるな！　真面目に戦え！」

「私は真面目だ！　真面目にコータをセクハラしようと妄想しているだけだ！」

「明らかに不真面目だろうがァァァ！！！」

怒号と共に繰り出されるトーレの拳。ライドインパルスにより発生したエネルギー刃、インパルスブレードで斬り裂こうというのだろう。

「ハァッ……」

対するフェイトはライオットザンバー・スティンガーを一つに重ねる。

二つに別れていたバルディッシュは再び一つとなり、その身にザンバーフォーム以上の巨大な刀身を顕現させる。

先が二股に別れた巨大剣。ライオットザンバーのもう一つの姿。ライオットザンバー・カラミティ。

「ハァァァッ！！！」

自身の身体より遥かに巨大な剣となったバルディッシュを振り下ろす。

咄嗟にインパルスブレードで防御を行うトーレ。

だがしかし、許容出来る量を遥かに超えたエネルギーを受けたインパルスブレードは、やがてガラスのように砕け散ってしまった。

ライオットザンバーに斬られ、アジトの内壁に強かにたたき付けられてしまう。

「はあァァァ！！！」

二体の戦闘機人を倒したフェイトが、その勢いのままにスカリエッティに剣を振るう。

両腕を使ってなんとか受け止めるスカリエッティ。だが、トーレのインパルスブレードやセッテのブーメランブレードですら防げないような攻撃だ。スカリエッティの右腕に装備されたデバイスが過負荷に悲鳴をあげる。

「あぁ……素晴らしい！　素晴らしいよ！」

それでもなお、狂気の篭った笑みをフェイトに向けるスカリエッティ。

ふと、その手がフェイトの胸に向かって伸びる。

――もにゅ

――もにゅもにゅもにゅ

「あぁ、素晴らしい！　欲しかったなぁ！」

あまりにも堂々とした痴漢にしばし呆然とするフェイト。やがて自身にされたことを理解すると――――

「き、きゃあァァァァァ！！？」

スカリエッティを、ライオットザンバーの刀身で横殴りに叩き飛ばした。

トーレ以上の速度で壁にぶつかり――もとい、めり込むスカリエッティ。素っ裸の下半身が壁から生えている姿は、哀れすら通り過ぎて笑いすら込み上げそうに思える。

そうなったスカリエッティの側に寄り、フェイトが言う。

「ジェイル・スカリエッティ。次元騒乱、違法医学の行使、猥褻物陳列、強制猥褻の現行犯で逮捕します……！！！」

なんとも締まらない罪状である。

と、その時、スカリエッティのアジトで大きな地響きが発生する。

「何……！？」

フェイトが辺りを見回す。どうやら、アジトの中心方向が発信源のようだ。

それを確認したと同時に遠くの曲がり角からガジェット?型が現れる。

『プラズマランサー』

「ファイア！」

咄嗟にフェイトがプラズマランサーを放ってガジェットを破壊する。

その時、ガジェットは今までとは比べものにならないほどの巨大な爆発を起こして砕け散った。

飛び散る破片がフェイトの側まで飛んでくる。ライオットザンバーの巨大な刀身でスカリエッティたちも含めて防御するフェイト。

だが一部の破片はライオットザンバーの刀身をたやすく貫いてきたのだ。フェイトの身体に赤い筋が入る。

「くっ……破片にＡＭＦ！？　いや、内部のＡＭＦが付加された攻撃用粘液が破片に付着してるんだ……。シャーリー！」

『フェイトさん！　ガジェットが突然！』

「わかってる！　ガジェット内部の粘液がガジェットの外装に付着してるみたいだ。ＡＭＦに慣れた人でもやられる可能性がある！破壊じゃなくて捕獲を指示して！」

『了解！』

シャーリーが映っていたウィンドウが閉じる。

それと同時にスカリエッティたちが使っていたウィンドウを開き、ガジェット生産装置にハッキングを仕掛けるフェイト。

「ガジェットがあんな風になるなんて……一体誰が……？」

フェイトの疑問に答えられる者は、誰ひとりとしていなかった。

# 第百五十五話　解放せよ（後書き）

変態博士、スカリエッティは壁に埋まりましたとさ。チャンチャン。

トーレの力は因果無視出来るほどの速度。ただしウーノの力は超えられないという設定になっています。無論、やられる前にやればいいんですが。

そしてそれより速いフェイト。やっぱりフェイトさんは脱いだらすごいね！↑

クリスマス記念は感想がまるで来なくてちょい残念だったり。まぁ見つかりにくい上にあの内容じゃ仕方ないね！　お正月記念はいつも通りのファンストなんでご安心を。

さて、あと残りはなのはたちのゆりかご編。三話で他の話とつじつま合わせます。ヴィータのアレやフラウリーナ三姉妹やマテリアルのみんなの活躍も書くつもりですー。

……え？　魔王？　一体なんのことやら……おや？　どこからか桜色の砲撃が――

ではではこの辺で！　次回もお楽しみに！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4952m/

魔法少女リリカルなのは 〜The Fantasic Story〜

2011年12月30日13時05分発行